

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集

岩崎台地遺跡群発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連発掘調査

(第1分冊 本文編)

(財)岩手県文化振興事業団

埋蔵文化財センター

岩崎台地遺跡群発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連発掘調査

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成5年度の岩手県教育委員会のまとめでは8,700箇所を越えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存していくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました東北横断自動車道建設事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素をもつ事業の調和のとれた施策が今日的な課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、昭和63年度から平成3年度までの4年間調査を実施しました北上市岩崎台地遺跡群の調査結果をまとめたものであります。遺跡は和賀川の左岸に形成され河岸段丘状をなす夏油扇状地の北端縁辺部に立地し、主体となる平安時代の各種遺構・遺物のほか、縄文時代から中・近世に及ぶ多くの遺構や遺物を発見することが出来ました。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所や北上市教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成7年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 高橋 令則

例 言

1. 本報告書は北上市和賀町（旧和賀郡和賀町）岩崎地内に所在する岩崎台地遺跡群に対する発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は東北横断自動車道秋田線の建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と日本道路公団との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡群には次の遺跡がふくまれており、調査では次の略号を付した。

調査年度	遺跡コード	遺跡略号
昭和63年度	ME 64 - 2360	IS - 88 K
平成元年度	ME 65 - 2020、ME 64 - 2318、ME 64 - 2316、 ME 64 - 2360、ME 64 - 2288、	ISD - 89 K
平成2年度	ME 65 - 2020、ME - 64 - 2318、ME 64 - 2288、	ISD - 90 K
平成3年度	ME 64 - 2288、	ISD - 90 K

4. 調査年次ごとの調査面積は次のとおりである。

昭和63年度	試掘（範囲確認）調査	10,000 m ²
平成元年度	本調査	29,250 m ²
平成2年度	本調査	13,317 m ²
平成3年度	本調査	3,700 m ²
本調査合計面積		46,267 m ²

5. 室内整理期間は平成4年度と同5年度の2ヶ年間である。
6. 野外調査と室内整理の担当者は次のとおりである。

① 野外調査

昭和63年度	中川重紀、遠藤 修
平成元年度	高橋與右衛門、平井 進、中村良一、中川重紀、鈴木貞行、遠藤 修、 川村 均、村上 修、佐々木信一、小原眞一、濱田 宏、相原伸裕、 森下 宏、女鹿文雄、高橋 堅、及川靖世
平成2年度	高橋與右衛門、中川重紀、遠藤 修、佐々木眞一、酒井宗孝、菊地幸裕、 菊池明芳、菅 常久、森下 宏、千葉 悟、
平成3年度	高橋與右衛門、新倉信一郎

② 室内整理

平成4年度 高橋與右衛門

平成5年度 高橋與右衛門

7. 本報告書の執筆者は次のとおりである。

I	調査に至る経過	佐々木嘉直
II	立地と環境	高橋與右衛門、小原眞一
III	野外調査と室内整理の方法及び経過	高橋與右衛門
IV	縄文時代の遺構と遺物	高橋與右衛門
V	弥生時代の遺構と遺物	高橋與右衛門
VI	古墳時代の遺構と遺物	高橋與右衛門
VII	平安時代の遺構と遺物	高橋與右衛門、中川重紀
VIII	中・近世と時期不明の遺構と遺物	高橋與右衛門
IX	まとめ	高橋與右衛門

8 発掘調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管されている。

9 本報告書の編集・レイアウト・校正は高橋與右衛門が担当した。

目 次

序
例言

第1分冊本文目次

〔本 文〕

I. 調査に至る経過	1	VI. 古墳時代の遺構と遺物	105
II. 遺跡の位置と環境	3	1. 古墳	105
1. 遺跡の位置	3	2. 土壌基	115
2. 周囲の環境	3	3. 遺構外の遺物	124
3. 地形面区分	4	1) 土師器	124
4. 基本順序	5	2) 黒曜石	125
5. 和賀川流域の遺跡	7	VII. 平安時代の遺構と遺物	126
III. 野外調査と整理の方法及びその経過	11	1. 竪穴住居跡	126
1. 野外調査	11	2. 竪穴住居跡状遺構	358
1) 調査区の設定	11	3. 竪立柱建物跡	369
2) 遺構名の命名	11	4. 土坑	383
3) 粗掘りと遺構の検出	11	5. 井戸跡	448
4) 遺構精査	12	6. 炭焼窯	450
5) 記録	12	7. 土壌基	454
2. 室内整理	12	8. 壺棺	457
1) 遺構の実測区関係	13	9. 火葬基	460
2) 出土遺物関係	13	10. 溝跡	464
3) 写真関係	14	11. 方形周溝遺構	514
3. 現地調査と整理の経過	14	12. 畑跡	529
1) 現地調査の経過	14	13. 集石遺構	530
2) 室内整理の経過	18	14. 柱穴群	533
IV. 縄文時代の遺構と遺物	20	15. 遺構外出土の遺物	535
1. 住居跡	20	1) 土師器	535
2. 土坑	20	2) 須恵器	536
3. 陥し穴状遺構	30	3) 石製品	537
1) 円筒形型	30	4) 土製品	537
2) 楕円形型	73	5) 鉄製品	537
3) 長方形型	80	VIII. 中世とそれ以降の遺構と遺物	539
4. 遺構外の出土遺物	93	1. 住居跡	539
1) 土器	94	2. 竪立柱建物跡	540
2) 石器	97	3. 土坑	547
V. 弥生時代の遺構と遺物	102	4. 土壌基	550
1. 遺構	102	5. 塚跡	551
1) 土坑	102	6. 焼土	554
2. 遺構外の出土遺物	103	7. 墓壇	558
1) 土器	103	IX. まとめ	561
2) 石器	104		

[表]

第1表	平成3年度までの年度別調査終了面積 ……2	第6表	石器一覧表 ……691
第2表	和賀川流域の遺跡地名表 ……10	第7表	黒曜石一覧表 ……695
第3表	縄文土器観察表 ……563	第8表	鉄製品一覧表 ……707
第4表	弥生土器観察表 ……566	第9表	土製品一覧表 ……713
第5表	土師器・須恵器観察表 ……570	第10表	玉類一覧表 ……715

第2分冊遺構図版目次

(図 版)

第1図	岩手県全図	1	第45図	陥し穴状遺構-31	51
第2図	遺跡の位置図	2	第46図	陥し穴状遺構-32	52
第3図	調査範囲と遺跡の地形	3	第47図	陥し穴状遺構-33	53
第4図	遺跡周辺の地形	5	第48図	陥し穴状遺構-34	54
第5図	地形面区分図	7	第49図	陥し穴状遺構-35	55
第6図	報告書の凡例	9	第50図	陥し穴状遺構-36	56
第7図	基本土層図	10	第51図	陥し穴状遺構-37	57
第8図	周辺の遺跡位置図	11	第52図	陥し穴状遺構-38	58
第9図	試掘調査遺構配置図	13	第53図	(1)DⅢu 10 古墳	59
第10図	グリッド配置図	15	第54図	(2)DⅢp 12 古墳	60
第11図	(1)AⅡu 20 住居跡	17	第55図	(3)DⅢr 12 古墳	61
第12図	土坑-1	18	第56図	(4)DⅢt 13 古墳	62
第13図	土坑-2	19	第57図	(5)DⅢn 15 古墳	63
第14図	土坑-3	20	第58図	(6)DⅢq 17 古墳	64
第15図	土坑-4・陥し穴状遺構-1	21	第59図	(7)DⅢr 17 古墳	65
第16図	陥し穴状遺構-2	22	第60図	墓壇-1	66
第17図	陥し穴状遺構-3	23	第61図	墓壇-2	67
第18図	陥し穴状遺構-4	24	第62図	墓壇-3	68
第19図	陥し穴状遺構-5	25	第63図	(1)EⅠb 25 住居跡	69
第20図	陥し穴状遺構-6	26	第64図	(2)DⅡx 1 住居跡	70
第21図	陥し穴状遺構-7	27	第65図	(3)DⅡx 2 住居跡	71
第22図	陥し穴状遺構-8	28	第66図	(4)EⅡa 3 住居跡-1	72
第23図	陥し穴状遺構-9	29	第67図	(5)EⅡa 3 住居跡-2(1)	73
第24図	陥し穴状遺構-10	30	第68図	(5)EⅡa 3 住居跡-2(2)	74
第25図	陥し穴状遺構-11	31	第69図	(6)DⅡx 6 住居跡(1)	75
第26図	陥し穴状遺構-12	32	第70図	(6)DⅡx 6 住居跡(2)	76
第27図	陥し穴状遺構+13	33	第71図	(7)DⅡy 6 住居跡	77
第28図	陥し穴状遺構-14	34	第72図	(8)DⅡs 7 住居跡-1	78
第29図	陥し穴状遺構-15	35	第73図	(9)DⅡs 7 住居跡-2(1)	79
第30図	陥し穴状遺構-16	36	第74図	(9)DⅡs 7 住居跡-2(2)	80
第31図	陥し穴状遺構-17	37	第75図	00DⅡv 7 住居跡(1)	81
第32図	陥し穴状遺構-18	38	第76図	00DⅡv 7 住居跡(2)	82
第33図	陥し穴状遺構-19	39	第77図	01DⅡt 8 住居跡-1	83
第34図	陥し穴状遺構-20	40	第78図	02DⅡt 8 住居跡-2(1)	84
第35図	陥し穴状遺構-21	41	第79図	02DⅡt 8 住居跡-2(2)	85
第36図	陥し穴状遺構-22	42	第80図	03DⅡr 9 住居跡(1)	86
第37図	陥し穴状遺構-23	43	第81図	03DⅡr 9 住居跡(2)	87
第38図	陥し穴状遺構-24	44	第82図	04DⅡx 9 住居跡(1)	88
第39図	陥し穴状遺構-25	45	第83図	04DⅡx 9 住居跡(2)	89
第40図	陥し穴状遺構-26	46	第84図	05DⅡu 10 住居跡(1)	90
第41図	陥し穴状遺構-27	47	第85図	05DⅡu 10 住居跡(2)	91
第42図	陥し穴状遺構-28	48	第86図	06DⅡs 11 住居跡-1(1)	92
第43図	陥し穴状遺構-29	49	第87図	06DⅡs 11 住居跡-1(2)	93
第44図	陥し穴状遺構-30	50	第88図	07DⅡs 11 住居跡-2	94

第 89 页	08DII t 11 住居跡	
	・08DII u 11 住居跡-2	95
第 90 页	09DII u 11 住居跡-1	96
第 91 页	09DII r 12 住居跡(1)	97
第 92 页	09DII r 12 住居跡(2)	98
第 93 页	09DII t 12 住居跡(1)	99
第 94 页	09DII t 12 住居跡(2)	100
第 95 页	09DII x 12 住居跡(1)	101
第 96 页	09DII x 12 住居跡(2)	102
第 97 页	09DII x 14 住居跡(1)	103
第 98 页	09DII x 14 住居跡(2)	104
第 99 页	09DII x 19 住居跡(1)	105
第 100 页	09DII x 19 住居跡(2)	106
第 101 页	09DII u 23 住居跡(1)	107
第 102 页	09DII u 23 住居跡(2)	108
第 103 页	09DII v 25 住居跡	109
第 104 页	09DIII u 1 住居跡(1)	110
第 105 页	09DIII u 1 住居跡(2)	111
第 106 页	09DIII y 1 住居跡(1)	112
第 107 页	09DIII y 1 住居跡(2)	113
第 108 页	09EIII g 1 住居跡(1)	114
第 109 页	09EIII g 1 住居跡(2)	115
第 110 页	09EIII i 1 住居跡(1)	116
第 111 页	09EIII i 1 住居跡(2)	117
第 112 页	09EIII e 2 住居跡(1)	118
第 113 页	09EIII e 2 住居跡(2)	119
第 114 页	09EIII i 2 住居跡(1)	120
第 115 页	09EIII i 2 住居跡(2)	121
第 116 页	09DIII w 5 住居跡(1)	122
第 117 页	09DIII w 5 住居跡(2)	123
第 118 页	09DIII w 8 住居跡(1)	124
第 119 页	09DIII w 8 住居跡(2)	125
第 120 页	09DIII x 10 住居跡	126
第 121 页	09DIII p 12 住居跡(1)	127
第 122 页	09DIII p 12 住居跡(2)	128
第 123 页	09EIII a 12 住居跡	129
第 124 页	09DIII o 13 住居跡(1)	130
第 125 页	09DIII o 13 住居跡(2)	131
第 126 页	09DIII w 13 住居跡(1)	132
第 127 页	09DIII w 13 住居跡(2)	133
第 128 页	09DIII p 15 住居跡	134
第 129 页	09DIII t 16 住居跡	135
第 130 页	09DIII i 23 住居跡(1)	136
第 131 页	09DIII i 23 住居跡(2)	137
第 132 页	09DIII k 25 住居跡(1)	138
第 133 页	09DIII k 25 住居跡(2)	139
第 134 页	09DIII v 25 住居跡(1)	140
第 135 页	09DIII v 25 住居跡(2)	141
第 136 页	09DIV j 1 住居跡-1	142
第 137 页	09DIV j 1 住居跡-2(1)	143

第 138 页	09DIV j 1 住居跡-2(2)	144
第 139 页	09DIV q 1 住居跡(1)	145
第 140 页	09DIV q 1 住居跡(2)	146
第 141 页	09DIV p 3 住居跡	147
第 142 页	09DIV k 4 住居跡(1)	148
第 143 页	09DIV k 4 住居跡(2)	149
第 144 页	09DIV n 4 住居跡(1)	150
第 145 页	09DIV n 4 住居跡(2)	151
第 146 页	09DIV r 4 住居跡(1)	152
第 147 页	09DIV r 4 住居跡(2)	153
第 148 页	09DIV i 5 住居跡(1)	154
第 149 页	09DIV i 5 住居跡(2)	155
第 150 页	09DIV o 5 住居跡(1)	156
第 151 页	09DIV o 5 住居跡(2)	157
第 152 页	09DIV d 7 住居跡(1)	158
第 153 页	09DIV d 7 住居跡(2)	159
第 154 页	09DIV g 7 住居跡(1)	160
第 155 页	09DIV g 7 住居跡(2)	161
第 156 页	09DIV m 7 住居跡(1)	162
第 157 页	09DIV m 7 住居跡(2)	163
第 158 页	09DIV d 8 住居跡(1)	164
第 159 页	09DIV d 8 住居跡(2)	165
第 160 页	09DIV o 8 住居跡(1)	166
第 161 页	09DIV o 8 住居跡(2)	167
第 162 页	09DIV y 9 住居跡(1)	168
第 163 页	09DIV y 9 住居跡(2)	169
第 164 页	09DIV c 9 住居跡(1)	170
第 165 页	09DIV c 9 住居跡(2)	171
第 166 页	09DIV c 9 住居跡(3)	172
第 167 页	09DIV n 9 住居跡	173
第 168 页	09DIV v 9 住居跡	174
第 169 页	09DIV g 10 住居跡(1)	175
第 170 页	09DIV g 10 住居跡(2)	176
第 171 页	09DIV j 10 住居跡(1)	177
第 172 页	09DIV j 10 住居跡(2)	178
第 173 页	09DIV i 10 住居跡(1)	179
第 174 页	09DIV i 10 住居跡(2)	180
第 175 页	09DIV m 10 住居跡(1)	181
第 176 页	09DIV m 10 住居跡(2)	182
第 177 页	09DIV m 11 住居跡(1)	183
第 178 页	09DIV m 11 住居跡(2)	184
第 179 页	09DIV b 12 住居跡(1)	185
第 180 页	09DIV b 12 住居跡(2)	186
第 181 页	09DIV i 12 住居跡(1)	187
第 182 页	09DIV i 12 住居跡(2)	188
第 183 页	09DIV n 13 住居跡(1)	189
第 184 页	09DIV n 13 住居跡(2)	190
第 185 页	09DIV g 23 住居跡(1)	191
第 186 页	09DIV g 23 住居跡(2)	192
第 187 页	09CV u 21 住居跡(1)	193

第188图	09CVu 21 住居跡(2)	194
第189图	00CVr 25 住居跡(1)	195
第190图	00CVr 25 住居跡(2)	196
第191图	09CVp 4 住居跡(1)	197
第192图	09CVp 4 住居跡(2)	198
第193图	09CVr 6 住居跡(1)	199
第194图	09CVr 6 住居跡(2)	200
第195图	07CVp 7 住居跡(1)	201
第196图	07CVp 7 住居跡(2)	202
第197图	09CVg 21 住居跡	203
第198图	09CVf 22 住居跡	204
第199图	00CVe 24 住居跡(1)	205
第200图	00CVe 24 住居跡(2)	206
第201图	00CVc 25 住居跡(1)	207
第202图	00CVc 25 住居跡(2)	208
第203图	00CVf 2 住居跡	209
第204图	00CVc 3 住居跡(1)	210
第205图	00CVc 3 住居跡(2)	211
第206图	00BVx 7 住居跡	212
第207图	00CVb 7 住居跡(1)	213
第208图	00CVb 7 住居跡(2)	214
第209图	00BVv 8 住居跡(1)	215
第210图	00BVv 8 住居跡(2)	216
第211图	00CVe 8 住居跡	217
第212图	00CVb 9 住居跡(1)	218
第213图	00CVb 9 住居跡(2)	219
第214图	00BVv 12 住居跡(1)	220
第215图	00BVv 12 住居跡(2)	221
第216图	00BVw 14 住居跡	222
第217图	00BVs 16 住居跡	223
第218图	00CVa 17 住居跡	224
第219图	00CVc 18 住居跡(1)	225
第220图	00CVc 18 住居跡(2)	226
第221图	00BVo 19 住居跡(1)	227
第222图	00BVo 19 住居跡(2)	228
第223图	00BVl 10 住居跡(1)	229
第224图	00BVl 10 住居跡(2)	230
第225图	00BVg 13 住居跡(1)	231
第226图	00BVg 13 住居跡(2)	232
第227图	00AX 2 住居跡-1	233
第228图	00AX 2 住居跡-2	234
第229图	00AX 7 住居跡(1)	235
第230图	00AX 7 住居跡(2)	236
第231图	00AX 15 住居跡(1)	237
第232图	00AX 15 住居跡(2)	238
第233图	00AX 18 住居跡	239
第234图	00AX 21 住居跡	240
第235图	00AX 23 住居跡	241
第236图	00AX 24 住居跡	242
第237图	00BX 1 住居跡	243

第238图	00AX 3 住居跡	244
第239图	00BX 3 住居跡	245
第240图	00AX 6 住居跡(1)	246
第241图	00AX 6 住居跡(2)	247
第242图	00AX 6 住居跡	248
第243图	00AX 10 住居跡	249
第244图	00BX 12 住居跡	250
第245图	00BX 12 住居跡	251
第246图	00BX 15 住居跡(1)	252
第247图	00BX 15 住居跡(2)	253
第248图	00BX 18 住居跡	254
第249图	00AX 22 住居跡(1)	255
第250图	00AX 22 住居跡(2)	256
第251图	00BX 22 住居跡	257
第252图	00AX 2 住居跡(1)	258
第253图	00AX 2 住居跡(2)	259
第254图	住居跡状遺構-1	260
第255图	住居跡状遺構-2	261
第256图	住居跡状遺構-3	262
第257图	住居跡状遺構-4	263
第258图	住居跡状遺構-5	264
第259图	住居跡状遺構-6	265
第260图	住居跡状遺構-7	266
第261图	獨立柱建物跡-1	267
第262图	獨立柱建物跡-2	268
第263图	獨立柱建物跡-3	269
第264图	獨立柱建物跡-4	270
第265图	獨立柱建物跡-5	271
第266图	獨立柱建物跡-6	272
第267图	獨立柱建物跡-7	273
第268图	獨立柱建物跡-8	274
第269图	獨立柱建物跡-9	275
第270图	獨立柱建物跡-10	276
第271图	獨立柱建物跡-11	277
第272图	獨立柱建物跡-12	278
第273图	獨立柱建物跡-13	279
第274图	獨立柱建物跡-14	280
第275图	獨立柱建物跡-15	281
第276图	獨立柱建物跡-16	282
第277图	獨立柱建物跡-17	283
第278图	獨立柱建物跡-18	284
第279图	獨立柱建物跡-19	285
第280图	土坑-1	286
第281图	土坑-2	288
第282图	土坑-3	289
第283图	土坑-4	290
第284图	土坑-5	291
第285图	土坑-6	292
第286图	土坑-7	293
第287图	土坑-8	294

第 288 图	土坑-9	295
第 289 图	土坑-10	296
第 290 图	土坑-11	297
第 291 图	土坑-12	298
第 292 图	土坑-13	299
第 293 图	土坑-14	300
第 294 图	土坑-15	301
第 295 图	土坑-16	302
第 296 图	土坑-17	303
第 297 图	土坑-18	304
第 298 图	土坑-19	305
第 299 图	土坑-20	306
第 300 图	土坑-21	307
第 301 图	土坑-22	308
第 302 图	土坑-23	309
第 303 图	土坑-24	310
第 304 图	土坑-25	310
第 305 图	土坑-26	311
第 306 图	土坑-27	312
第 307 图	土坑-28	313
第 308 图	土坑-29	314
第 309 图	土坑-30	315
第 310 图	土坑-31	316
第 311 图	(1) D I w 23 井戸	317
第 312 图	(2) A X u 22 井戸	318
第 313 图	炭窯-1	319
第 314 图	炭窯-2	320
第 315 图	墓墳	321
第 316 图	合むせ口墓棺	322
第 317 图	火葬基-1	323
第 318 图	火葬基-2	324
第 319 图	溝跡断面-1	325
第 320 图	溝跡断面-2	326
第 321 图	溝跡断面-3	327
第 322 图	溝跡断面-4	328
第 323 图	溝跡断面-5	329
第 324 图	溝跡断面-6	330
第 325 图	溝跡断面-7	331
第 326 图	溝跡断面-8	332
第 327 图	溝跡断面-9	333
第 328 图	溝跡断面-10	334
第 329 图	溝跡断面-11	335
第 330 图	溝跡断面-12	336
第 331 图	溝跡断面-13	337
第 332 图	溝跡断面-14	338
第 333 图	(1) D V b 14 周溝遺構 · (2) D V c 15 周溝遺構	339
第 334 图	(3) A X u 24 周溝遺構	340
第 335 图	(4) A X t 25 周溝遺構	341
第 336 图	(5) A X s 1 周溝遺構	342

第 337 图	(6) A X u 1 周溝遺構	343
第 338 图	(7) A X q 2 周溝遺構	344
第 339 图	(8) A X o 3 周溝遺構	345
第 340 图	(9) A X n 3 周溝遺構	346
第 341 图	00 A X s 4 周溝遺構	347
第 342 图	01 A X o 6 周溝遺構	348
第 343 图	02 A X p 5 周溝遺構	349
第 344 图	03 A X n 6 周溝遺構	350
第 345 图	04 A X r 6 周溝遺構	351
第 346 图	05 A X s 6 周溝遺構	352
第 347 图	06 A X n 7 周溝遺構	353
第 348 图	07 A X o 7 周溝遺構	354
第 349 图	08 A X o 7 周溝遺構	355
第 350 图	09 A X s 7 周溝遺構	356
第 351 图	08 A X t 8 周溝遺構	357
第 352 图	00 A X p 9 周溝遺構	358
第 353 图	02 A X s 9 周溝遺構	359
第 354 图	03 A X n 10 周溝遺構	360
第 355 图	04 A X n 10 周溝遺構	361
第 356 图	05 A X p 10 周溝遺構	362
第 357 图	08 A X s 15 周溝遺構	363
第 358 图	07 A X s 20 周溝遺構	364
第 359 图	08 A X t 22 周溝遺構	365
第 360 图	D I v h 16 烟跡	366
第 361 图	(2) A X r 4 集石遺構-1	367
第 362 图	集石遺構	368
第 363 图	(1) D I v 7 住居跡	369
第 364 图	(1) D I r 5 建物跡	370
第 365 图	(2) D I r 8 建物跡	371
第 366 图	(3) D I v m 1 建物跡	372
第 367 图	(4) D I v n 4 建物跡	373
第 368 图	(6) D I v f 6 建物跡	374
第 369 图	(7) D I v u 7 建物跡-1 · (8) D I v n 7 建物跡-2	375
第 370 图	(5) D I v m 5 建物跡 · (9) D I v a 9 建物跡-1	376
第 371 图	00 D I v l 8 建物跡	377
第 372 图	01 D I r 24 柱穴列 · (6) A X s 25 焼土	378
第 373 图	中世土坑	379
第 374 图	(1) D I r o 18 近世墓墳	380
第 375 图	(5) A X y 10 塚	381
第 376 图	(4) A X q 15 塚	382
第 377 图	(3) A X r 17 塚	383
第 378 图	(2) A X r 18 塚	384
第 379 图	(1) A X s 20 塚	385
第 380 图	焼土-1	386
第 381 图	焼土-2	387
第 382 图	焼土-3	388

第3分冊遺物図版目次

(图 版)

第1图 住居跡・土坑・陥し穴状遺構	1	第44图 黒曜石-11	44
第2图 土坑・陥し穴状遺構	2	第45图 黒曜石-12	45
第3图 遺構外出土遺物(土器-1)	3	第46图 黒曜石-11	46
第4图 遺構外出土遺物(土器-2)	4	第47图 黒曜石-14	47
第5图 遺構外出土遺物(土器-3)	5	第48图 黒曜石-15	48
第6图 遺構外出土遺物(石器-1)	6	第49图 黒曜石-16	49
第7图 遺構外出土遺物(石器-2)	7	第50图 黒曜石-17	50
第8图 遺構外出土遺物(石器-3)	8	第51图 黒曜石-18	51
第9图 遺構外出土遺物(石器-4)	9	第52图 黒曜石-19	52
第10图 遺構外出土遺物(石器-5)	10	第53图 黒曜石-20	53
第11图 遺構外出土遺物(石器-6)	11	第54图 黒曜石-21	54
第12图 遺構外出土遺物(石器-7)	12	第55图 黒曜石-22	55
第13图 遺構外出土遺物(石器-8)	13	第56图 黒曜石-23	56
第14图 遺構外出土遺物(石器-9)	14	第57图 (1)E I b 25 住居跡	57
第15图 遺構外出土遺物(石器-10)	15	第58图 (2)D II x 1 住居跡	58
第16图 遺構外出土遺物(石器-11)	16	第59图 (2)D II x 1・(3)D II x 2 住居跡	59
第17图 遺構外出土遺物(石器-12)	17	第60图 (4)E II a 3 住居跡-1	60
第18图 遺構外出土遺物(石器-13)	18	第61图 (5)E II a 3 住居跡-2	61
第19图 遺構外出土遺物(石器-14)	19	第62图 (6)D II x 6 住居跡(1)	62
第20图 遺構外出土遺物(土器-1)	20	第63图 (6)D II x 6 住居跡(2)	63
第21图 遺構外出土遺物(土器-2)	21	第64图 (6)D II x 6 住居跡(3)	64
第22图 遺構外出土遺物(土器-3)	22	第65图 (6)D II x 6 住居跡(4)	65
第23图 古墳(DIV u 10・D III p 12)	23	第66图 (6)D II x 6 住居跡(5)	66
第24图 古墳(D III r 12・D III t 13)	24	第67图 (7)D II y 6 住居跡	67
第25图 古墳(D III n 15)	25	第68图 (8)D II s 7 住居跡-1(1)	68
第26图 古墳(D III r 17)	26	第69图 (8)D II s 7 住居跡-1(2)	69
第27图 古墳(D III r 17)	27	第70图 (8)D II s 7 住居跡-1(3)	70
第28图 古墳(D III r 17)	28	第71图 (9)D II s 7 住居跡-2(1)	71
第29图 古墳(D III q 17)	29	第72图 (9)D II s 7 住居跡-2(2)	72
第30图 墓塚(D III t 11・E III c 14)	30	第73图 (9)D II s 7 住居跡-2(3)	73
第31图 墓塚 (D III o 15・D III t 20・D IV i 8)	31	第74图 (9)D II s 7 住居跡-2(4)	74
第32图 墓塚(D IV o 14)	32	第75图 (9)D II s 7 住居跡-2(5)	75
第33图 遺構外出土遺物(土師器)	33	第76图 (9)D II s 7 住居跡-2(6)	76
第34图 黒曜石-1	34	第77图 00D II v 7 住居跡(1)	77
第35图 黒曜石-2	35	第78图 00D II v 7 住居跡(2)	78
第36图 黒曜石-3	36	第79图 00D II v 7 住居跡(3)	79
第37图 黒曜石-4	37	第80图 01D II t 8 住居跡-1(1)	80
第38图 黒曜石-5	38	第81图 01D II t 8 住居跡-1(2)	81
第39图 黒曜石-6	39	第82图 02D II t 8 住居跡-2(1)	82
第40图 黒曜石-7	40	第83图 02D II t 8 住居跡-2(2)	83
第41图 黒曜石-8	41	第84图 02D II t 8 住居跡-2(3)	84
第42图 黒曜石-9	42	第85图 03D II r 9 住居跡(1)	85
第43图 黒曜石-10	43	第86图 03D II r 9 住居跡(2)	86
		第87图 03D II r 9 住居跡(3)	87

第 88 图	04DIIx9 住居跡(1)	88
第 89 图	04DIIx9 住居跡(2)	89
第 90 图	04DIIx9 住居跡(3)	
	・05DIIu10 住居跡(1)	90
第 91 图	09DIIu10 住居跡(2)	91
第 92 图	09DII s 11 住居跡-1 (1)	92
第 93 图	09DII s 11 住居跡-1 (2)	93
第 94 图	09DII s 11 住居跡-1 (3)	94
第 95 图	09DII s 11 住居跡-1 (4)	95
第 96 图	09DII s 11 住居跡-1 (5)	96
第 97 图	07DII s 11 住居跡-2	
	・08DII t 11 住居跡	97
第 98 图	09DII u 11 住居跡-1 (1)	98
第 99 图	09DII u 11 住居跡-1 (2)	99
第 100 图	09DII u 11 住居跡-2	100
第 101 图	07DII r 12 住居跡(1)	101
第 102 图	07DII r 12 住居跡(2)	102
第 103 图	07DII r 12 住居跡(3)	103
第 104 图	07DII r 12 住居跡(4)	104
第 105 图	07DII r 12 住居跡(5)	105
第 106 图	07DII r 12 住居跡(6)	106
第 107 图	07DII t 12 住居跡(1)	107
第 108 图	07DII t 12 住居跡(2)	108
第 109 图	07DII x 12 住居跡(1)	109
第 110 图	07DII t 12 住居跡	
	・07DII x 12 住居跡(2)	110
第 111 图	04DII x 14 住居跡(1)	111
第 112 图	04DII x 14 住居跡(2)	112
第 113 图	04DII x 14 住居跡(3)	113
第 114 图	04DII x 14 住居跡(4)	114
第 115 图	09DII x 19 住居跡	115
第 116 图	09DII u 23 住居跡	116
第 117 图	09DII u 23 住居跡	
	・07DII v 25 住居跡	117
第 118 图	09DII u 1 住居跡(1)	118
第 119 图	09DII u 1 住居跡(2)	119
第 120 图	09DII u 1 住居跡(3)	120
第 121 图	09DII y 1 住居跡	121
第 122 图	09EII g 1 住居跡(1)	122
第 123 图	09EII g 1 住居跡(2)	123
第 124 图	09EII g 1 住居跡(3)	124
第 125 图	09EII i 1 住居跡(1)	125
第 126 图	09EII i 1 住居跡(2)	126
第 127 图	09EII i 1 住居跡(3)	127
第 128 图	09EII i 1 住居跡(4)	128
第 129 图	09EII e 2 住居跡(1)	129
第 130 图	09EII e 2 住居跡(2)	130
第 131 图	09EII e 2 住居跡(3)	131
第 132 图	09EII e 2 住居跡(4)	132
第 133 图	09EII e 2 住居跡(5)	133

第 134 图	09EII i 2 住居跡(1)	134
第 135 图	09EII i 2 住居跡(2)	135
第 136 图	09EII i 2 住居跡(3)	136
第 137 图	09EII i 2 住居跡(4)	137
第 138 图	04DII w 5 住居跡(1)	138
第 139 图	04DII w 5 住居跡(2)	139
第 140 图	09DII w 8 住居跡(1)	140
第 141 图	09DII w 8 住居跡(2)	141
第 142 图	09DII x 10 住居跡(1)	142
第 143 图	09DII x 10 住居跡(2)	143
第 144 图	09DII x 10 住居跡(3)	144
第 145 图	09DII x 10 住居跡(4)	145
第 146 图	07DII p 12 住居跡(1)	146
第 147 图	07DII p 12 住居跡(2)	147
第 148 图	07DII p 12 住居跡(3)	148
第 149 图	09EII a 12 住居跡(1)	149
第 150 图	09EII a 12 住居跡(2)	150
第 151 图	09DII o 13 住居跡(1)	151
第 152 图	09DII o 13 住居跡(2)	152
第 153 图	09DII o 13 住居跡(3)	153
第 154 图	04DII w 13 住居跡(1)	154
第 155 图	04DII w 13 住居跡(2)	155
第 156 图	04DII w 13 住居跡(3)	156
第 157 图	04DII w 13 住居跡(4)	157
第 158 图	04DII w 13 住居跡(5)	158
第 159 图	04DII w 13 住居跡(6)	
	・07DII p 15 住居跡(1)	159
第 160 图	07DII p 15 住居跡(2)	160
第 161 图	07DII p 15 住居跡(3)	161
第 162 图	07DII p 15 住居跡(4)	162
第 163 图	07DII t 16 住居跡(1)	163
第 164 图	07DII t 16 住居跡(2)	164
第 165 图	07DII t 16 住居跡(3)	165
第 166 图	07DII i 23 住居跡	166
第 167 图	04DII k 25 住居跡(1)	167
第 168 图	04DII k 25 住居跡(2)	168
第 169 图	09DII v 25 住居跡	169
第 170 图	09DII v 1 住居跡-1 (1)	170
第 171 图	09DII v 1 住居跡-1 (2)	171
第 172 图	07DII j 1 住居跡-2 (1)	172
第 173 图	07DII j 1 住居跡-2 (2)	173
第 174 图	09DII q 1 住居跡(1)	174
第 175 图	09DII q 1 住居跡(2)	175
第 176 图	09DII q 1 住居跡(3)	176
第 177 图	09DII p 3 住居跡	177
第 178 图	09DII k 4 住居跡(1)	178
第 179 图	09DII k 4 住居跡(2)	179
第 180 图	09DII k 4 住居跡(3)	180
第 181 图	09DII k 4 住居跡(4)	181
第 182 图	09DII n 4 住居跡(1)	182

第183 區	50 DIV n 4 住居跡(2)	183
第184 區	50 DIV r 4 住居跡(1)	184
第185 區	50 DIV r 4 住居跡(2)	185
第186 區	50 DIV i 5 住居跡 - 50 DIV o 5 住居跡(1)	186
第187 區	50 DIV o 5 住居跡(2)	187
第188 區	50 DIV o 5 住居跡(3)	188
第189 區	50 DIV o 5 住居跡(4)	189
第190 區	50 DIV d 7 住居跡(1)	190
第191 區	50 DIV d 7 住居跡(2)	191
第192 區	50 DIV d 7 住居跡(3)	192
第193 區	50 DIV g 7 住居跡(1)	193
第194 區	50 DIV g 7 住居跡(2) - 50 DIV m 7 住居跡	194
第195 區	50 DIV d 8 住居跡(1)	195
第196 區	50 DIV d 8 住居跡(2)	196
第197 區	50 DIV d 8 住居跡(3)	197
第198 區	50 DIV d 8 住居跡(4)	198
第199 區	50 DIV o 8 住居跡(1)	199
第200 區	50 DIV o 8 住居跡(2)	200
第201 區	50 DIV o 8 住居跡(3)	201
第202 區	50 DIV o 8 住居跡(4)	202
第203 區	50 CIV y 9 住居跡(1)	203
第204 區	50 CIV y 9 住居跡(2)	204
第205 區	50 DIV c 9 住居跡(1)	205
第206 區	50 DIV c 9 住居跡(2)	206
第207 區	50 DIV v 9 住居跡	207
第208 區	50 DIV v 9 住居跡(1)	208
第209 區	50 DIV v 9 住居跡(2) - 50 DIV g 10 住居跡(1)	209
第210 區	50 DIV g 10 住居跡(2)	210
第211 區	50 DIV j 10 住居跡(1)	211
第212 區	50 DIV j 10 住居跡(2)	212
第213 區	50 DIV l 10 住居跡(1)	213
第214 區	50 DIV l 10 住居跡(2) - 50 DIV m 10 住居跡(1)	214
第215 區	50 DIV m 10 住居跡(2)	215
第216 區	50 DIV m 10 住居跡(3)	216
第217 區	50 DIV m 10 住居跡(4)	217
第218 區	50 DIV m 11 住居跡(1)	218
第219 區	50 DIV m 11 住居跡(2)	219
第220 區	50 DIV b 12 住居跡(1)	220
第221 區	50 DIV b 12 住居跡(2)	221
第222 區	50 DIV b 12 住居跡(3)	222
第223 區	50 DIV i 12 住居跡	223
第224 區	50 DIV n 13 住居跡	224
第225 區	50 DIV g 23 住居跡(1)	225
第226 區	50 DIV g 23 住居跡(2)	226
第227 區	50 DIV g 23 住居跡(3)	227
第228 區	03 CV u 21 住居跡	

	- 00 CV r 25 住居跡(1)	228
第229 區	04 CV r 25 住居跡(2)	229
第230 區	09 CV p 4 住居跡(1)	230
第231 區	09 CV p 4 住居跡(2)	231
第232 區	09 CV p 4 住居跡(3)	232
第233 區	09 CV p 4 住居跡(4)	233
第234 區	09 CV r 6 住居跡(1)	234
第235 區	09 CV r 6 住居跡(2)	235
第236 區	09 CV r 6 住居跡(3)	236
第237 區	09 CV r 6 住居跡(4)	237
第238 區	07 CV p 7 住居跡	238
第239 區	09 CV g 21 住居跡	239
第240 區	09 CV f 22 住居跡	240
第241 區	00 CV e 24 住居跡(1)	241
第242 區	00 CV e 24 住居跡(2)	242
第243 區	00 CV c 25 住居跡	243
第244 區	00 CV f 2 住居跡	244
第245 區	03 CV c 3 住居跡(1)	245
第246 區	03 CV c 3 住居跡(2)-04 B VII x 7 住居跡-09 CV b 7 住居跡	246
第247 區	00 B VII v 8 住居跡(1)	247
第248 區	00 B VII v 8 住居跡(2)	248
第249 區	00 CV e 8 住居跡 - 00 CV b 9 住居跡(1)	249
第250 區	00 CV b 9 住居跡(2)	250
第251 區	00 B VII v 12 住居跡(1)	251
第252 區	00 B VII v 12 住居跡(2)	252
第253 區	00 B VII v 12 住居跡(3)	253
第254 區	00 B VII v 14 住居跡	254
第255 區	00 B VII s 16 住居跡 - 00 CV a 17 住	255
第256 區	03 CV c 18 住居跡(1)	256
第257 區	03 CV c 18 住居跡(2)	257
第258 區	03 CV c 18 住居跡(3)	258
第259 區	03 CV c 18 住居跡(4)	259
第260 區	04 B VII o 19 住居跡(1)	260
第261 區	04 B VII o 19 住(2) - 09 B VII l 10 住(1)	261
第262 區	09 B VII l 10 住居跡(2)	262
第263 區	09 B VII l 10 住居跡(3)	263
第264 區	09 B VII g 13 住居跡	264
第265 區	00 A XI x 2 住-1 - 00 A XI x 2 住-2	265
第266 區	00 A XI q 7 住居跡(1)	266
第267 區	00 A XI q 7 住居跡(2)	267
第268 區	00 B XI a 15 住居跡(1)	268
第269 區	00 B XI a 15 住居跡(2)	269
第270 區	00 A XI q 18 住居跡(1)	270
第271 區	00 A XI q 18 住(2)-00 A XI p 21 住	271
第272 區	00 A XI p 23 住居跡(1)	272

第 273 图	(0)A XI p 23 住(2)·(0)B XI b 1 住	273
第 274 图	(0)A XI r 24 住居跡	274
第 275 图	(0)A XI y 3 住居跡	275
第 276 图	(0)B XI b 3 住居跡(1)	276
第 277 图	(0)B XI b 3 住居跡(2)	277
第 278 图	(0)A XI x 6 住居跡(1)	278
第 279 图	(0)A XI x 6 住居跡(2)	279
第 280 图	(0)A XI x 6 住(3)·(0)A XI y 6 住 ·(0)A XI u 10 住·(0)B XI a 12 住	280
第 281 图	(0)B XI b 12 住居跡(1)	281
第 282 图	(0)B XI b 12 住居跡(2)	282
第 283 图	(0)B XI b 12 住居跡(3)	283
第 284 图	(0)B XI b 12 住居跡(4)	284
第 285 图	(0)B XI b 12 住居跡(5)	285
第 286 图	(0)B XI b 12 住居跡(6)	286
第 287 图	(0)B XI b 12 住居跡(7)	287
第 288 图	(0)B XI b 15 住居跡(1)	288
第 289 图	(0)B XI b 15 住居跡(2)	289
第 290 图	(0)B XI b 15 住居跡(3)	290
第 291 图	(0)B XI b 15 住居跡(4)	291
第 292 图	(0)B XI b 15 住居跡(5)	292
第 293 图	(0)B XI b 15 住居跡(6)	293
第 294 图	(0)B XI a 18 住居跡(1)	294
第 295 图	(0)B XI a 18 住居跡(2)	295
第 296 图	(0)B XI a 18 住居跡(3)	296
第 297 图	(0)A XI y 22 住居跡(1)	297
第 298 图	(0)A XI y 22 住居跡(2)	298
第 299 图	(0)A XI y 22 住居跡(3)	299
第 300 图	(0)A XI y 22 住居跡(4)	300
第 301 图	(0)A XI y 22 住居跡(5)	301
第 302 图	(0)A XI y 22 住居跡(6)	302
第 303 图	(0)A XI y 22 住居跡(7)	303
第 304 图	(0)A XI y 22 住居跡(8)	304
第 305 图	(0)B XI e 22 住·(0)A XI x 2 住	305
第 306 图	(3)D III u 23 住状·(4)D III o 25 住状 ·(5)D IV o 2 住状	306
第 307 图	(6)D IV i 7 住状·(7)D IV j 8 住状	307
第 308 图	(8)D IV c 14 住状	308
第 309 图	(8)D IV c 14 住状	309
第 310 图	(8)D IV c 14 住状	310
第 311 图	(9)D IV j 21 住状·(0)B VI t 12 住状 ·(0)A XI x 7 住状	311
第 312 图	建物跡·土坑-1	312
第 313 图	土坑-2	313
第 314 图	土坑-3	314
第 315 图	土坑-4	315
第 316 图	土坑-5	316
第 317 图	土坑-6	317
第 318 图	土坑-7	318
第 319 图	土坑-8	319

第 320 图	土坑-9	320
第 321 图	土坑-10	321
第 322 图	土坑-11	322
第 323 图	土坑-12	323
第 324 图	(1)D I w 23 井戸	324
第 325 图	(1)D I w 23 井戸·(2)A XI u 22 井戸	325
第 326 图	炭室·墓壇	326
第 327 图	(1)D IV q 10 合せ口壘棺	327
第 328 图	(2)B VI r 6 合せ口壘棺	328
第 329 图	(3)B VI t 12 合せ口壘棺	329
第 330 图	(3)B VI t 12 合せ口壘棺	330
第 331 图	(1)D I x 23 溝跡	331
第 332 图	(5)D II r 12 溝跡·(8)E III e 溝跡	332
第 333 图	溝跡	333
第 334 图	(0)D III m 18 溝跡·(0)D III n 18 溝跡· (0)D III p 22 溝跡·(0)D III r 25 溝跡	334
第 335 图	(2)D IV i 2 溝	335
第 336 图	溝跡	336
第 337 图	溝跡	337
第 338 图	方形周溝	338
第 339 图	溝跡·方形周溝·畑跡·柱穴群 ·集石遺構	339
第 340 图	遺構外出土遺物(土師器-1)	340
第 341 图	遺構外出土遺物(土師器-2)	341
第 342 图	遺構外出土遺物(土師器-3)	342
第 343 图	遺構外出土遺物(土師器-4)	343
第 344 图	遺構外出土遺物(須恵器-1)	344
第 345 图	遺構外出土遺物(須恵器-2)	345
第 346 图	遺構外出土遺物(須恵器-3)	346
第 347 图	遺構外出土遺物(土師器-5)	347
第 348 图	遺構外出土遺物(土師器-6)	348
第 349 图	遺構外出土遺物(土師器-7)	349
第 350 图	遺構外出土遺物(土師器-8)	350
第 351 图	遺構外出土遺物(土師器-9)	351
第 352 图	遺構外出土遺物(須恵器-4)	352
第 353 图	遺構外出土遺物(須恵器-5)	353
第 354 图	遺構外出土遺物(須恵器-6)	354
第 355 图	遺構外出土遺物(須恵器-7)	355
第 356 图	遺構外出土遺物(須恵器-8)	356
第 357 图	遺構外出土遺物(須恵器-9)	357
第 358 图	遺構外出土遺物(須恵器-10)	358
第 359 图	遺構外出土遺物(須恵器-11)	359
第 360 图	遺構外出土遺物(須恵器-12)	360
第 361 图	遺構外出土遺物(須恵器-13)	361
第 362 图	遺構外出土遺物(石製品·土製品)	362
第 363 图	遺構外出土遺物(鉄製品)	363
第 364 图	(1)D IV i 7 住居跡·D IV n 10 土坑-1 ·(1)D III o 18 墓壇	364
第 365 图	墓壇·塚	365
第 366 图	遺構外出土遺物(貨幣)	366

第4分冊写真図版目次

〔写真図版〕

写真図版 1	遺跡全景	1	写真図版 20	08D II y 5 陥し穴状遺構-2	20
写真図版 2	調査後全景 I ~ III 区	2	08D II t 6 陥し穴状遺構	20	
写真図版 3	調査後全景 III ~ V 区	3	08D II a 7 陥し穴状遺構	20	
写真図版 4	調査後全景 V ~ VII 区	4	08D II u 9 陥し穴状遺構	20	
写真図版 5	調査後全景 B. VII 区の一部	5	写真図版 21	08D II u 10 陥し穴状遺構	21
写真図版 6	調査後全景 XI. XII 区	6	08D II u 11 陥し穴状遺構	21	
写真図版 7	調査後全景 XIII ~ XIV 区	7	08E II a 11 陥し穴状遺構	21	
写真図版 8		8	08E II b 11 陥し穴状遺構	21	
写真図版 9		9	写真図版 22	08D II r 12 陥し穴状遺構	22
写真図版 10		10	08D II s 12 陥し穴状遺構	22	
写真図版 11	A XII u 20 住居跡	11	08E II a 12 陥し穴状遺構-2	22	
写真図版 12	(1) D I u 25 土坑	12	08D II y 13 陥し穴状遺構	22	
	(2) D I u 25 土坑	12	写真図版 23	08D II x 14 陥し穴状遺構	23
	(3) D II x 2-2 土坑	12	08D II y 14 陥し穴状遺構	23	
	(4) D II s 8 土坑	12	08D II x 15 陥し穴状遺構	23	
写真図版 13	(5) D II t 12 土坑-1	13	08D II w 16 陥し穴状遺構	23	
	(6) D II r 11 土坑	13	08D IV h 9 陥し穴状遺構	23	
	(7) D II q 12 土坑	13	写真図版 24	08D II u 17 陥し穴状遺構	24
	(8) D II r 13 土坑	13	08D II v 17 陥し穴状遺構	24	
写真図版 14	(9) D II t 13 土坑	14	08D II u 18 陥し穴状遺構	24	
	08D II s 14 土坑	14	08D II s 19 陥し穴状遺構	24	
	08D II m 22 土坑	14	写真図版 25	08D II a 20 陥し穴状遺構	25
	08D II n 23 土坑	14	08D II s 25 陥し穴状遺構	25	
写真図版 15	08D II v 25 土坑	15	08D II t 4 陥し穴状遺構	25	
	04D IV j 4 土坑	15	08D II u 6 陥し穴状遺構	25	
	05D IV e 10 土坑-1	15	写真図版 26	08D II t 9 陥し穴状遺構	26
写真図版 16	(1) E I a 24 陥し穴状遺構-1	16	08D II r 10 陥し穴状遺構-2	26	
	(2) E I a 24 陥し穴状遺構-2	16	08D II t 4 陥し穴状遺構	26	
	(3) E I b 25 陥し穴状遺構	16	08D II w 16 陥し穴状遺構	26	
	(4) D II y 1 陥し穴状遺構	16	写真図版 27	08D IV o 4 陥し穴状遺構	27
	(8) D II x 2 陥し穴状遺構	16	08D IV j 6 陥し穴状遺構	27	
写真図版 17	(5) E II a 1 陥し穴状遺構-1	17	08D IV f 7 陥し穴状遺構	27	
	(6) E II a 1 陥し穴状遺構-2	17	08D IV p 7 陥し穴状遺構	27	
	(7) D II u 2 陥し穴状遺構	17	写真図版 28	08D IV o 9 陥し穴状遺構	28
	(9) D II w 3 陥し穴状遺構	17	08D IV d 10 陥し穴状遺構	28	
写真図版 18	08D II x 3 陥し穴状遺構	18	08D IV g 10 陥し穴状遺構	28	
	08D II y 3 陥し穴状遺構-1	18	08D IV o 10 陥し穴状遺構	28	
	08D II y 3 陥し穴状遺構-2	18	写真図版 29	08D IV q 10 陥し穴状遺構	29
	08D II w 4 陥し穴状遺構	18	08D IV b 11 陥し穴状遺構	29	
	08E II a 12 陥し穴状遺構-1	18	08D IV m 11 陥し穴状遺構	29	
写真図版 19	04D II w 4 陥し穴状遺構	19	08D IV p 12 陥し穴状遺構	29	
	08D II v 5 陥し穴状遺構	19	写真図版 30	08D IV 13 陥し穴状遺構	30
	08D II w 5 陥し穴状遺構	19	08D IV l 16 陥し穴状遺構	30	
	08D II y 5 陥し穴状遺構-1	19	08D V x 18 陥し穴状遺構	30	

	63D V x 19 階し穴状遺構	30
写真図版 31	64C V w 19 階し穴状遺構-1	31
	65C V w 19 階し穴状遺構-2	31
	66C V c 20 階し穴状遺構	31
	67C V w 21 階し穴状遺構	31
写真図版 32	68C V c 3 階し穴状遺構	32
	69C V c 7 階し穴状遺構	32
	70C V c 9 階し穴状遺構	32
	71B W y 13 階し穴状遺構	32
写真図版 33	72B W t 12 階し穴状遺構-1	33
	73B W t 12 階し穴状遺構-2	33
	74B W y 15 階し穴状遺構	33
	75B W n 20 階し穴状遺構	33
写真図版 34	76B W o 20 階し穴状遺構	34
	77B W n 21 階し穴状遺構	34
	78B W o 21 階し穴状遺構	34
	79B W o 23 階し穴状遺構	34
写真図版 35	80B W u 23 階し穴状遺構	35
	81B W p 24 階し穴状遺構-1	35
	82B W n 1 階し穴状遺構	35
	83B W p 1 階し穴状遺構	35
写真図版 36	84B W m 2 階し穴状遺構	36
	85B W k 5 階し穴状遺構	36
	86B W m 12 階し穴状遺構	36
	87B W l 16 階し穴状遺構	36
写真図版 37	88A X t 2 階し穴状遺構	37
	89A X q 7 階し穴状遺構	37
	90A X u 20 階し穴状遺構	37
写真図版 38	(1)E II a 7 階し穴状遺構	38
	(2)D II x 11 階し穴状遺構	38
	(3)D II o 12 階し穴状遺構	38
	(4)E III a 17 階し穴状遺構	38
	(5)E III c 18 階し穴状遺構	38
写真図版 39	(6)D IV k 7 階し穴状遺構	39
	(7)C IV n 24 階し穴状遺構	39
	(8)C VII a 1 階し穴状遺構	39
	(9)C VII a 2 階し穴状遺構	39
	00B VII x 6 階し穴状遺構	39
写真図版 40	01C VII i 7 階し穴状遺構	40
	02C VII g 11 階し穴状遺構	40
	03C VII b 16 階し穴状遺構	40
	04B XII a 12 階し穴状遺構	40
写真図版 41	(1)E II a 4 階し穴状遺構	41
	(2)D II x 6 階し穴状遺構	41
	(3)D II s 17 階し穴状遺構	41
写真図版 42	(4)D III u 3 階し穴状遺構	42
	(5)D III u 4 階し穴状遺構	42
	(6)D III v 6 階し穴状遺構	42
写真図版 43	(7)D III u 8 階し穴状遺構	43
	(8)D III s 9 階し穴状遺構-1	43

	(9)D III s 9 階し穴状遺構-2	43
写真図版 44	00D III r 10 階し穴状遺構-1	44
	01D III p 11 階し穴状遺構	44
	02D III r 11 階し穴状遺構	44
写真図版 45	04D III s 14 階し穴状遺構	45
	05C V w 22 階し穴状遺構	45
	06C VI k 25 階し穴状遺構	45
写真図版 46	07C VI l 25 階し穴状遺構	46
	08B VII m 22 階し穴状遺構	46
	09B W p 24 階し穴状遺構-2	46
写真図版 47	08B W n 25 階し穴状遺構	47
	20B W k 2 階し穴状遺構	47
	22B W o 3 階し穴状遺構	47
写真図版 48	23B W p 3 階し穴状遺構	48
	04B W w 3 階し穴状遺構	48
	05B W w 4 階し穴状遺構	48
写真図版 49	06B W s 6 階し穴状遺構	49
	07B W v 6 階し穴状遺構	49
	08B W k 7 階し穴状遺構	49
写真図版 50	09B XII b 11 階し穴状遺構	50
	(1)A XII u 21 土坑	50
写真図版 51	(1)D III u 10 古墳	51
写真図版 52	(2)D III p 12 古墳	52
写真図版 53	(3)D III r 12 古墳	53
写真図版 54	(4)D III t 13 古墳	54
写真図版 55	(5)D III n 15 古墳	55
写真図版 56	(6)D III q 17 古墳	56
写真図版 57	(7)D III r 17 古墳	57
写真図版 58	(1)D II t 19 基壇	58
	(2)D III s 11 基壇	58
	(3)D II t 11 基壇	58
	(6)D III o 15 基壇	58
写真図版 59	(4)E II a 12 基壇	59
	(7)D III t 19 基壇	59
	(8)D III t 20 基壇	59
	(9)D III q 23 基壇	59
写真図版 60	(5)E III c 14 基壇	60
	00D IV q 2 基壇	60
	01D IV m 7 基壇	60
	02D IV l 8 基壇	60
写真図版 61	03D IV o 14 基壇	61
	(1)B W k 17 基壇	61
	(3)A XII y 4 基壇	61
	(4)A XII y 6 基壇	61
写真図版 62	(2)A XI q 7 基壇	62
写真図版 63	(1)E I b 25 住居跡	63
写真図版 64	(2)D II x 1 住居跡	64
写真図版 65	(3)D II x 2 住居跡	65
写真図版 66	(4)E II a 3 住居跡-1	66
写真図版 67	(5)E II a 3 住居跡-2	67

写真图版 68	(6)D II x 6 住居跡	68
写真图版 69	(7)D II y 6 住居跡	69
写真图版 70	(8)D II s 7 住居跡-1	70
写真图版 71	(9)D II a 7 住居跡-2	71
写真图版 72	00D II v 7 住居跡	72
写真图版 73	01D II t 8 住居跡-1	73
写真图版 74	02D II t 8 住居跡-2	74
写真图版 75	03D II r 9 住居跡	75
写真图版 76	04D II x 9 住居跡	76
写真图版 77	05D II u 10 住居跡	77
写真图版 78	06D II s 11 住居跡-1	78
写真图版 79	07D II s 11 住居跡-2	79
	08D II t 11 住居跡	79
写真图版 80	09D II u 11 住居跡-1	80
写真图版 81	09D II u 11 住居跡-2	81
写真图版 82	00D II r 12 住居跡	82
写真图版 83	02D II t 12 住居跡	83
写真图版 84	03D II x 12 住居跡	84
写真图版 85	04D II s 14 住居跡	85
写真图版 86	05D II x 19 住居跡	86
写真图版 87	06D II u 23 住居跡	87
写真图版 88	07D II v 25 住居跡	88
写真图版 89	08D II u 1 住居跡	89
写真图版 90	09D II y 1 住居跡	90
写真图版 91	00E III g 1 住居跡	91
写真图版 92	00E III i 1 住居跡	92
写真图版 93	00E III s 2 住居跡	93
写真图版 94	00E III t 2 住居跡	94
写真图版 95	04D III w 5 住居跡	95
写真图版 96	03D III w 8 住居跡	96
写真图版 97	06D III v 10 住居跡	97
写真图版 98	07D III p 12 住居跡	98
写真图版 99	00E III a 12 住居跡	99
写真图版 100	00D III o 13 住居跡	100
写真图版 101	04D III w 13 住居跡	101
写真图版 102	00D III p 15 住居跡	102
写真图版 103	03D III t 16 住居跡	103
写真图版 104	03D III l 23 住居跡	104
写真图版 105	04D III k 25 住居跡	105
写真图版 106	05D III v 25 住居跡	106
写真图版 107	06D IV j 1 住居跡-1	107
写真图版 108	07D IV j 1 住居跡-2	108
写真图版 109	08D IV q 1 住居跡	109
写真图版 110	09D IV p 3 住居跡	110
写真图版 111	60D IV k 4 住居跡	111
写真图版 112	60D IV n 4 住居跡	112
写真图版 113	60D IV r 4 住居跡	113
写真图版 114	60D IV l 5 住居跡	114
写真图版 115	60D IV o 5 住居跡	115
写真图版 116	60D IV d 7 住居跡	116

写真图版 117	60D IV g 7 住居跡	117
写真图版 118	60D IV m 7 住居跡	118
写真图版 119	60D IV d 8 住居跡	119
写真图版 120	60D IV o 8 住居跡	120
写真图版 121	60C IV y 9 住居跡	121
写真图版 122	60D IV c 9 住居跡	122
写真图版 123	60D IV n 9 住居跡	123
写真图版 124	60D IV v 9 住居跡	124
写真图版 125	60D IV g 10 住居跡	125
写真图版 126	60D IV j 10 住居跡	126
写真图版 127	60D IV i 10 住居跡	127
写真图版 128	60D IV m 10 住居跡	128
写真图版 129	60D IV m 11 住居跡	129
写真图版 130	60D IV b 12 住居跡	130
写真图版 131	00D IV i 12 住居跡	131
写真图版 132	07D IV n 13 住居跡	132
写真图版 133	07D IV g 23 住居跡	133
写真图版 134	03C V u 21 住居跡	134
写真图版 135	04C V r 25 住居跡	135
写真图版 136	05C VI p 4 住居跡	136
写真图版 137	06C VI r 6 住居跡	137
写真图版 138	07C VI p 7 住居跡	138
写真图版 139	08C VI g 21 住居跡	139
写真图版 140	09C VI f 22 住居跡	140
写真图版 141	00C VI e 24 住居跡	141
写真图版 142	00C VI c 25 住居跡	142
写真图版 143	82C VI f 2 住居跡	143
写真图版 144	83C VI c 3 住居跡	144
写真图版 145	84B VI x 7 住居跡	145
写真图版 146	83C VI b 7 住居跡	146
写真图版 147	86C VI v 8 住居跡	147
写真图版 148	87C VI e 8 住居跡	148
写真图版 149	88C VI b 9 住居跡	149
写真图版 150	89B VI v 12 住居跡	150
写真图版 151	90B VI w 14 住居跡	151
写真图版 152	80B VI s 16 住居跡	152
写真图版 153	82C VI a 17 住居跡	153
写真图版 154	83C VI c 18 住居跡	154
写真图版 155	84B VI o 19 住居跡	155
写真图版 156	89B VI l 10 住居跡	156
写真图版 157	86B VI g 13 住居跡	157
写真图版 158	87A XI x 2 住居跡-1	158
写真图版 159	88A XI x 2 住居跡-2	159
写真图版 160	89A XI q 7 住居跡	160
写真图版 161	80B XI a 15 住居跡	161
写真图版 162	00A XI q 18 住居跡	162
写真图版 163	00A XI p 21 住居跡	163
写真图版 164	00A XI p 23 住居跡	164
写真图版 165	00A XI r 24 住居跡	165
写真图版 166	00B XI b 1 住居跡	166

写真图版 167	04A XI y 3 住居跡	167
写真图版 168	04B XII b 3 住居跡	168
写真图版 169	04A XII x 6 住居跡	169
写真图版 170	04A XII y 6 住居跡	170
写真图版 171	04A XII u 10 住居跡	171
写真图版 172	04B XII a 2 住居跡	172
写真图版 173	04B XII b 12 住居跡	173
写真图版 174	04B XII b 15 住居跡	174
写真图版 175	04B XII a 18 住居跡	175
写真图版 176	04A XII y 22 住居跡	176
写真图版 177	04B XII e 22 住居跡	177
写真图版 178	04A XII x 2 住居跡	178
写真图版 179	(1)E I a 23 住居跡状遺構	179
写真图版 180	(2)D III s 8 住居跡状遺構	180
写真图版 181	(4)D III o 25 住居跡状遺構	181
	(5)D IV o 2 住居跡状遺構	181
写真图版 182	(6)D IV i 7 住居跡状遺構	182
	(9)D IV j 21 住居跡状遺構	182
写真图版 183	(7)D IV j 8 住居跡状遺構	183
	(8)D IV c 14 住居跡状遺構	183
写真图版 184	04B VII t 12 住居跡状遺構	184
	04B VII q 18 住居跡状遺構	184
写真图版 185	03A XII x 7 住居跡状遺構	185
	03B XII a 10 住居跡状遺構	185
	(3)D III u 23 住居跡状遺構	185
写真图版 186	(1)E II a 2 建物跡	186
写真图版 187	(2)E II b 5 建物跡	187
	(5)D IV n 11 建物跡	187
写真图版 188	(3)D II t 12 建物跡	188
写真图版 189	(4)D IV b 8 建物跡	189
写真图版 190	(6)C V u 19 建物跡-1	190
写真图版 191	(7)C V u 19 建物跡-2	191
	(8)C V u 20 建物跡	191
写真图版 192	(9)C V x 18 建物跡-1	192
写真图版 193	(9)C V x 18 建物跡-2	193
	08C V x 19 建物跡	193
写真图版 194	04B VII h 9 建物跡	194
写真图版 195	03A XII y 1 建物跡	195
写真图版 196	03A XII x 3 建物跡	196
写真图版 197	04B XII d 15 建物跡	197
写真图版 198	03B XII c 2 建物跡	198
写真图版 199	04B VII f 12 柱穴列	199
写真图版 200	(1)D I y 25 土坑	200
	(2)E II b 1 土坑	200
	(3)D II x 2 土坑-1	200
	(4)E II a 2 土坑	200
写真图版 201	(6)D II y 9 土坑-1	201
	(7)D II y 9 土坑-2	201
	04D II u 11 土坑	201
	03D II r 12 土坑	201

写真图版 202	03D II t 12 土坑-2	202
	D II r 13 土坑-1	202
	D II r 13 土坑-2	202
	D II r 13 土坑-3	202
写真图版 203	04D II x 14 土坑	203
	04D II y 14 土坑-1	203
	04D II y 14 土坑-2	203
	04D II y 14 土坑-3	203
写真图版 204	04D II s 17 土坑-1	204
	04D II s 17 土坑-2	204
	04D II t 17 土坑-1	204
	04D II t 17 土坑-2	204
写真图版 205	04D II t 17 土坑-3	205
	04D II t 19 土坑-1	205
	04D II t 19 土坑-2	205
	04D II t 19 土坑-3	205
写真图版 206	04D II t 11 土坑	206
	04D II u 17 土坑	206
	04E III f 1 土坑-1	206
	04E III f 1 土坑-2	206
	04E III i 4 土坑	206
写真图版 207	(5)D II x 4 土坑	207
	04D III y 10 土坑	207
	04D III q 11 土坑	207
	04D III u 11 土坑	207
写真图版 208	04D III p 12 土坑	208
	04D III u 13 土坑	208
	04D III t 19 土坑	208
	04D III m 24 土坑	208
写真图版 209	04D IV i 1 土坑	209
	04D IV o 1 土坑	209
	04D IV i 2 土坑	209
	04D IV i 2 土坑	209
	04D IV i 5 土坑	209
写真图版 210	04D IV o 2 土坑-1	210
	04D IV o 2 土坑-2	210
	04D IV o 3 土坑	210
	D IV f 6 土坑-2	210
	D IV k 7 土坑	210
写真图版 211	04D IV f 6 土坑-1	211
	04D IV m 7 土坑	211
	04D IV n 7 土坑	211
	04D IV h 8 土坑	211
	04D IV q 9 土坑	211
写真图版 212	04D IV r 8 土坑	212
	04D IV e 9 土坑	212
	04D IV o 9 土坑	212
	04D IV p 9 土坑-1	212
	04D IV p 9 土坑-2	212
写真图版 213	04D IV e 10 土坑-2	213

	00DIVm 10 土坑	213
	01DIVc 11 土坑-1	213
	00DIVc 11 土坑-2	213
写真图版 214	01DIV j 9 土坑	214
	00DIV j 12 土坑	214
	01DIV l 12 土坑	214
	02DIV a 13 土坑	214
写真图版 215	01DIV o 12 土坑	215
	03DIV k 13 土坑	215
	04CV u 18 土坑	215
	09CV t 21 土坑-1	215
	06CV t 21 土坑-2	215
写真图版 216	07CV t 22 土坑-1	216
	08CV t 22 土坑-2	216
	09CV w 22 土坑-1	216
	00CV w 22 土坑-2	216
写真图版 217	01CV w 22 土坑-3	217
	02CV u 23 土坑-1	217
	03CV u 23 土坑-2	217
	04CV u 23 土坑-3	217
	05CV u 23 土坑-4	217
写真图版 218	06CV v 23 土坑	218
	07CV i 18 土坑	218
	08CV i n 25 土坑	218
	09CV j 4 土坑	218
	00BV q 21 土坑-2	218
写真图版 219	06CV h 5 土坑	219
	01BV w 5 土坑	219
	02BV x 7 土坑	219
	03BV x 8 土坑	219
写真图版 220	04CV d 11 土坑	220
	05CV f 11 土坑	220
	06BV p 21 土坑	220
	08BV r 4 土坑	220
写真图版 221	07BV q 21 土坑-1	221
	00BV r 5 土坑	221
	01AX y 12 土坑	221
写真图版 222	02BX d 21 土坑	221
	01AX y 13 土坑-1	222
	00AX y 13 土坑-2	222
	01AX a 16 土坑	222
	01AX y 18 土坑	222
写真图版 223	01AX o 5 土坑	223
	01AX o 7 土坑	223
	01AX r 16 土坑-1 · 2	223
	01AX t 22 土坑	223
	02BX c 2 土坑	223
写真图版 224	01AX y 3 土坑-1	224
	01AX y 3 土坑-2	224
	01AX y 4 土坑	224

	01AX y 5 土坑	224
写真图版 225	01BX a 11 土坑	225
	01AX v 12 土坑	225
	01BX a 13 土坑	225
	01AX v 16 土坑	225
写真图版 226	01BX d 16 土坑	226
	01BX c 18 土坑	226
	(1)DI w 23 井戸	226
	(2)AX u 22 井戸	226
写真图版 227	(1)DI s 8 炭窯	227
	(2)E n d 14 炭窯	227
	(3)BV j 18 炭窯	227
	(4)AX x 8 炭窯	227
写真图版 228	(5)AX x 10 炭窯	228
	(6)AX y 11 炭窯	228
	(7)AX y 12 炭窯	228
	(8)BX b 16 炭窯	228
写真图版 229	(1)DI v 10 壘槽	229
	(2)BV r 6 壘槽	229
	(3)BV t 12 壘槽	229
写真图版 230	(1)AX q 2 火葬墓-1 · 2	230
	(3)AX q 2 火葬墓-3	230
	(4)AX r 2 火葬墓	230
	(5)AX r 4 火葬墓	230
写真图版 231	(6)AX r 8 火葬墓	231
	(7)AX r 16 火葬墓	231
	(8)AX s 16 火葬墓	231
写真图版 232	(1)DI x 23 溝跡	232
	(2)DI w 3 溝跡	232
写真图版 233	(3)DI s 5 溝跡	233
写真图版 234	(4)DI w 9 溝跡	234
写真图版 235	04DI t 14 溝跡	234
	(5)DI r 12 溝跡	235
	(6)DI s 21 溝跡	235
写真图版 236	(7)DI r 2 溝跡	236
	DI s 2 溝跡	236
写真图版 237	(8)DI e 3 溝跡	237
写真图版 238	(9)DI q 9 溝跡	238
写真图版 239	01DI o 10 溝跡	239
写真图版 240	01DI u 10 溝跡	240
	02E b 11 溝跡	240
写真图版 241	03DI o 14 溝跡	241
写真图版 242	05DI s 15 溝跡-1	242
	06DI s 15 溝跡-2	242
写真图版 243	07E n d 16 溝跡	243
	08DI o 17 溝跡	243
写真图版 244	09DI p 17 溝跡	244
	02DI p 22 溝跡	244
写真图版 245	00DI m 18 溝跡	245
	01DI n 18 溝跡	245

写真图版 246	02D III p 22 清跡	246
	02D III l 23 清跡	246
写真图版 247	02D III r 25 清跡	247
	02D IV k 5 清跡	247
写真图版 248	02D IV g 7 清跡	248
	02D IV l 11 清跡	248
写真图版 249	02D IV i 2 清跡	249
	02D IV m 7 清跡	249
	02D IV l 8 清跡-1	249
写真图版 250	02D IV l 8 清跡-2	250
	02D IV o 8 清跡	250
写真图版 251	02D IV q 8 清跡	251
	02D IV n 10 清跡	251
	02D IV p 10 清跡	251
写真图版 252	02D IV m 11 清跡	252
	02D IV l 18 清跡	252
写真图版 253	02D IV m 11 清跡	253
	02D IV l 11 清跡	253
	02D IV p 14 清跡	253
写真图版 254	02D IV q 8 清跡	254
	02D IV n 16 清跡-1	254
	02D IV n 16 清跡-2	254
	02D IV o 16 清跡	254
	02D IV l 16 清跡	254
	02D IV k 18 清跡	254
写真图版 255	02C V x 14 清跡	255
	02C V x 17 清跡	255
	02C V x 18 清跡	255
	02C V t 23 清跡	255
写真图版 256	02C V x 17 清跡	256
	02C VI p 1 清跡	256
写真图版 257	02C VI x 1 清跡	257
	02C VI n 22 清跡	257
写真图版 258	02C VI d 3 清跡	258
	02C VI c 9 清跡	258
写真图版 259	02C VI g 3 清跡	259
写真图版 260	02C VI f 7 清跡	260
	02B VII k 25 清跡	260
写真图版 261	02C VI d 10 清跡	261
	02C VII e 11 清跡	261
写真图版 262	02B VII n 21 清跡	262
	02A XII y 6 清跡	262
写真图版 263	02B VII i 5 清跡	263
	02B VII g 8 清跡	263
写真图版 264	02A X o 25 清跡	264
	02A XI o 4 清跡	264
写真图版 265	02A XII w 25 清跡	265
	02A XII o 4 清跡	265
写真图版 266	02A XII o 6 清跡	266
	02A XII o 9 清跡	266

写真图版 267	02A XII r 18 清跡	267
写真图版 268	02A XII s 6 清跡	268
	02A XII s 8 清跡	268
	02A XII u 15 清跡	268
	02A XII t 18 清跡	268
写真图版 269	02A XII s 8 清跡	269
	02B XII b 11 清跡	269
写真图版 270	02A XII u 15 清跡	270
	02A XII t 18 清跡	270
写真图版 271	02A XII v 22 清跡	271
	02A XII s 20 方形周溝遺構	271
写真图版 272	(1)D V b 14 方形周溝遺構	272
	(2)D V c 15 方形周溝遺構	272
	02A XII t 22 方形周溝遺構	272
写真图版 273	方形周溝遺構	273
写真图版 273	(3)A XI u 24 方形周溝遺構	273
	(4)A XI t 25 方形周溝遺構	273
写真图版 274	(5)A XII s 1 方形周溝遺構	274
	02A XII s 4 方形周溝遺構	274
写真图版 275	(6)A XII u 1 方形周溝遺構	275
	02A XII s 7 方形周溝遺構	275
写真图版 276	(7)A XII q 2 方形周溝遺構	276
	02A XII s 9 方形周溝遺構	276
写真图版 277	(8)A XII o 3 方形周溝遺構	277
	(9)A XII n 3 方形周溝遺構	277
写真图版 278	02A XII o 6 方形周溝遺構	278
	02A XII n 6 方形周溝遺構	278
写真图版 279	02A XII p 5 方形周溝遺構	279
	02A XII o 7 方形周溝遺構	279
写真图版 280	02A XII r 6 方形周溝遺構	280
	02A XII s 6 方形周溝遺構	280
写真图版 281	02A XII n 7 方形周溝遺構	281
	02A XII n 10 方形周溝遺構	281
写真图版 282	02A XII q 7 方形周溝遺構	282
	02A XII q 8 方形周溝遺構	282
写真图版 283	02A XII p 9 方形周溝遺構	283
	02A XII p 10 方形周溝遺構	283
写真图版 284	(1)D IV h 16 烟跡	284
写真图版 285	(1)A XII t 3 集石遺構	285
	(2)A XII r 4 集石遺構-1	285
	(3)A XII r 4 集石遺構-2	285
写真图版 286	(4)A XII s 9 集石遺構	286
	(5)A XII p 10 集石遺構	286
	(1)D III o 18 近世墓塚	286
	(1)D IV n 10 中世土坑	286
写真图版 287	(1)D IV i 7 中世住居跡	287
	(8)D IV n 7 堀立柱建物跡-2	287
写真图版 288	(1)D III r 5 堀立柱建物跡	288
	(2)D III r 8 堀立柱建物跡	288
写真图版 289	(3)D IV m 1 堀立柱建物跡	289

写真図版 290	(4)DIV n 4 獨立柱建物跡……………290	写真図版 329	黒曜石……………329
	(7)DIV n 7 獨立柱建物跡-1……………290	写真図版 330	黒曜石……………330
写真図版 291	(5)DIV m 5 獨立柱建物跡……………291	写真図版 331	黒曜石……………331
	00 DIV l 8 獨立柱建物跡……………291	写真図版 332	黒曜石・耳環・玉環……………332
写真図版 292	(6)DIV f 6 獨立柱建物跡……………292	写真図版 333	住居跡出土……………333
	00 DIV r 24 柱穴列……………292	写真図版 334	住居跡出土……………334
写真図版 293	(1)DIV b 9 ~ e 6 柱穴群……………293	写真図版 335	住居跡出土……………335
	(2)DIV 柱穴群……………293	写真図版 336	住居跡出土……………336
写真図版 294	1号塚~4号塚調査前全景……………294	写真図版 337	住居跡出土……………337
	5号塚調査前全景……………294	写真図版 338	住居跡出土……………338
写真図版 295	1号塚 (A XII s 20 塚)……………295	写真図版 339	住居跡出土……………339
写真図版 296	2号塚 (A XII r 18 塚)……………296	写真図版 340	住居跡出土……………340
写真図版 297	4号塚 (A XII q 12 塚)……………297	写真図版 341	住居跡出土……………341
写真図版 298	5号塚 (A XII y 10 塚)……………298	写真図版 342	住居跡出土……………342
写真図版 299	(2)D II t 23 焼土……………299	写真図版 343	住居跡出土……………343
	(3)D III p 25 焼土……………299	写真図版 344	住居跡出土……………344
	(4)C VI h 20 焼土……………299	写真図版 345	住居跡出土……………345
	(5)B VII t 12 焼土……………299	写真図版 346	住居跡出土……………346
	(8)A XII s 5 焼土……………299	写真図版 347	住居跡出土……………347
	(9)A XII s 8 焼土……………299	写真図版 348	住居跡出土……………348
写真図版 300	(6)A XII s 25 焼土……………300	写真図版 349	住居跡出土……………349
	(7)A XII p 3 焼土……………300	写真図版 350	住居跡出土……………350
写真図版 301	(平安・縄文の土坑)……………301	写真図版 351	住居跡出土……………351
写真図版 302	(縄文土坑・障土穴状遺構)……………302	写真図版 352	住居跡出土……………352
写真図版 303	遺構外出土遺物 (縄文石器)……………303	写真図版 353	住居跡出土……………353
写真図版 304	遺構外出土遺物 (縄文石器)……………304	写真図版 354	住居跡出土……………354
写真図版 305	遺構外出土遺物 (縄文石器)……………305	写真図版 355	住居跡出土……………355
写真図版 306	遺構外出土遺物 (縄文石器)……………306	写真図版 356	住居跡出土……………356
写真図版 307	遺構外出土遺物 (縄文石器)……………307	写真図版 357	住居跡出土……………357
写真図版 308	遺構外出土遺物 (縄文石器)……………308	写真図版 358	住居跡出土……………358
写真図版 309	遺構外出土遺物 (縄文石器)……………309	写真図版 359	住居跡出土……………359
写真図版 310	遺構外出土遺物 (縄文石器)……………310	写真図版 360	住居跡出土……………360
写真図版 311	遺構外出土遺物 (縄文石器)……………311	写真図版 361	住居跡出土……………361
写真図版 312	遺構外出土遺物 (弥生土器)……………312	写真図版 362	住居跡出土……………362
写真図版 313	遺構外出土遺物 (弥生土器)……………313	写真図版 363	住居跡出土……………363
写真図版 314	遺構外出土遺物 (弥生土器)……………314	写真図版 364	住居跡出土……………364
写真図版 315	古墳出土遺物……………315	写真図版 365	住居跡出土……………365
写真図版 316	古墳・墓室出土遺物……………316	写真図版 366	住居跡出土……………366
写真図版 317	墓室・遺構外出土遺物……………317	写真図版 367	住居跡出土……………367
写真図版 318	黒曜石……………318	写真図版 368	住居跡出土……………368
写真図版 319	黒曜石……………319	写真図版 369	住居跡出土……………369
写真図版 320	黒曜石……………320	写真図版 370	住居跡出土……………370
写真図版 321	黒曜石……………321	写真図版 371	住居跡出土……………371
写真図版 322	黒曜石……………322	写真図版 372	住居跡出土……………372
写真図版 323	黒曜石……………323	写真図版 373	住居跡出土……………373
写真図版 324	黒曜石……………324	写真図版 374	住居跡出土……………374
写真図版 325	黒曜石……………325	写真図版 375	住居跡出土……………375
写真図版 326	黒曜石……………326	写真図版 376	住居跡出土……………376
写真図版 327	黒曜石……………327	写真図版 377	住居跡出土……………377
写真図版 328	黒曜石……………328	写真図版 378	住居跡出土……………378

写真图版 379	住居跡出土	379	写真图版 429	住居跡出土	429
写真图版 380	住居跡出土	380	写真图版 430	住居跡出土	430
写真图版 381	住居跡出土	381	写真图版 431	住居跡出土	431
写真图版 382	住居跡出土	382	写真图版 432	住居跡出土	432
写真图版 383	住居跡出土	383	写真图版 433	住居跡出土	433
写真图版 384	住居跡出土	384	写真图版 434	住居跡出土	434
写真图版 385	住居跡出土	385	写真图版 435	住居跡出土	435
写真图版 386	住居跡出土	386	写真图版 436	住居跡出土	436
写真图版 387	住居跡出土	387	写真图版 437	住居跡出土	437
写真图版 388	住居跡出土	388	写真图版 438	住居跡出土	438
写真图版 389	住居跡出土	389	写真图版 439	住居跡出土	439
写真图版 390	住居跡出土	390	写真图版 440	住居跡出土	440
写真图版 391	住居跡出土	391	写真图版 441	住居跡出土A・B	441
写真图版 392	住居跡出土	392	写真图版 442	住居跡出土	442
写真图版 393	住居跡出土	393	写真图版 443	住居跡出土	443
写真图版 394	住居跡出土	394	写真图版 444	住居跡出土	444
写真图版 395	住居跡出土	395	写真图版 445	住居跡出土	445
写真图版 396	住居跡出土	396	写真图版 446	住居跡出土	446
写真图版 397	住居跡出土	397	写真图版 447	住居跡出土	447
写真图版 398	住居跡出土	398	写真图版 448	住居跡出土	448
写真图版 399	住居跡出土	399	写真图版 449	住居跡出土	449
写真图版 400	住居跡出土	400	写真图版 450	住居跡出土	450
写真图版 401	住居跡出土	401	写真图版 451	住居跡出土	451
写真图版 402	住居跡出土	402	写真图版 452	住居跡出土	452
写真图版 403	住居跡出土	403	写真图版 453	住居跡出土	453
写真图版 404	住居跡出土	404	写真图版 454	住居跡出土	454
写真图版 405	住居跡出土	405	写真图版 455	住居跡出土	455
写真图版 406	住居跡出土	406	写真图版 456	住居跡出土	456
写真图版 407	住居跡出土	407	写真图版 457	住居跡出土	457
写真图版 408	住居跡出土	408	写真图版 458	住居跡出土	458
写真图版 409	住居跡出土	409	写真图版 459	住居跡出土	459
写真图版 410	住居跡出土	410	写真图版 460	住居跡出土	460
写真图版 411	住居跡出土	411	写真图版 461	住居跡出土	461
写真图版 412	住居跡出土	412	写真图版 462	住居跡出土	462
写真图版 413	住居跡出土	413	写真图版 463	住居跡出土	463
写真图版 414	住居跡出土	414	写真图版 464	住居跡出土	464
写真图版 415	住居跡出土	415	写真图版 465	住居跡出土	465
写真图版 416	住居跡出土	416	写真图版 466	住居跡出土	466
写真图版 417	住居跡出土	417	写真图版 467	住居跡出土	467
写真图版 418	住居跡出土	418	写真图版 468	住居跡出土	468
写真图版 419	住居跡出土	419	写真图版 469	住居跡出土	469
写真图版 420	住居跡出土	420	写真图版 470	住居跡出土	470
写真图版 421	住居跡出土	421	写真图版 471	住居跡出土	471
写真图版 422	住居跡出土	422	写真图版 472	住居跡出土	472
写真图版 423	住居跡出土	423	写真图版 473	住居跡出土	473
写真图版 424	住居跡出土	424	写真图版 474	住居跡出土	474
写真图版 425	住居跡出土	425	写真图版 475	住居跡出土	475
写真图版 426	住居跡出土	426	写真图版 476	住居跡出土	476
写真图版 427	住居跡出土	427	写真图版 477	住居跡出土	477
写真图版 428	住居跡出土	428	写真图版 478	住居跡出土	478

写真図版 479	住居跡出土	479	写真図版 509	遺構外出土遺物	509
写真図版 480	住居跡出土	480	写真図版 510	遺構外出土遺物	510
写真図版 481	住居跡出土	481	写真図版 511	遺構外出土遺物	511
写真図版 482	住居跡出土	482	写真図版 512	遺構外出土遺物	512
写真図版 483	住居跡出土	483	写真図版 513	遺構外出土遺物	513
写真図版 484	住居跡出土	484	写真図版 514	遺構外出土遺物	514
写真図版 485	住居跡出土	485	写真図版 515	遺構外出土遺物	515
写真図版 486	住居跡状出土	486	写真図版 516	遺構外出土遺物	516
写真図版 487	住居跡状出土	487	写真図版 517	遺構外出土遺物	517
写真図版 488	住居跡状出土	488	写真図版 518	遺構外出土遺物	518
写真図版 489	住居跡状出土	489	写真図版 519	遺構外出土遺物	519
写真図版 490	土坑出土 (平安時代)	490	写真図版 520	遺構外出土遺物	520
写真図版 491	土坑出土 (平安時代)	491	写真図版 521	遺構外出土遺物	521
写真図版 492	土坑出土 (平安時代)	492	写真図版 522	遺構外出土遺物	522
写真図版 493	土坑出土 (平安時代)	493	写真図版 523	土製品	523
写真図版 494	土坑出土 (平安時代)	494	写真図版 524	土製品	524
写真図版 495	土坑出土 (平安時代)	495	写真図版 525	土製品	525
写真図版 496	土坑出土 (平安時代)	496	写真図版 526	石器製品	526
写真図版 497	土坑出土 (平安時代)	497	写真図版 527	石器製品	527
写真図版 498	井戸出土 (平安)	498	写真図版 528	石器製品・墓埴 (平安)	528
写真図版 499	井戸出土 (平安) 炭窯 (平安)	499	写真図版 529	石器製品・その他	529
写真図版 500	墓埴出土 (平安) カメ棺 (平安)	500	写真図版 530	鉄製品	530
写真図版 501	方形周溝濠構出土	501	写真図版 531	鉄製品	531
写真図版 502	溝跡出土 (平安)	502	写真図版 532	鉄製品	532
写真図版 503	溝跡出土 (平安)	503	写真図版 533	鉄製品	533
写真図版 504	溝跡出土 (平安)	504	写真図版 534	鉄製品	534
写真図版 505	溝跡出土 (平安)	505	写真図版 535	鉄製品	535
写真図版 506	溝跡出土 (平安)	506	写真図版 536	鉄製品	536
写真図版 507	柱穴群出土 (平安)	507	写真図版 537	鉄製品	537
	D II : 7 住居跡出土 (中世)	507	写真図版 538	鉄製品	538
	土坑出土 (中世)	507	写真図版 539	鉄製品	539
	墓埴出土 (近世)	507	写真図版 540	鉄製品	540
	塚出土 (近世)	507	写真図版 541	鉄製品・古銭	541
写真図版 508	畑跡出土 (平安)	508	写真図版 542	鉄製品・古銭	542
	遺構外出土遺物	508			

I. 調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は、岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長 107 km の高速自動車専用道路である。このうち、第 9 次・第 10 次施工命令区間は、北上ジャンクションから秋田県境までの総延長 33.9 km である。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和 56 年から分布調査を行っており、昭和 62 年 4 月 13 日付け「仙建北工第 35 号」による依頼を受けて行った分布調査の結果を、同年 5 月 25 日付け「教文第 117 号」によって日本道路公団仙台建設局に回答した。それに合わせて岩手県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との間でその取り扱いについて協議が重ねられ、止むを得ず工事によって消滅する遺跡については、事前の発掘調査を実施することとした。

発掘調査の実施に当たっては、昭和 63 年度以降、岩手県教育委員会が発掘調査事業を日本道路公団仙台建設局に照会して回答を受けた後、日本道路公団仙台建設局・岩手県教育委員会・鮎岩手県文化振興事業団との 3 者協議を経て、同事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとした。事業着手後に調査の変更がある場合もその都度協議しながら進め、岩手県教育委員会文化課の調整を経て事業計画を変更して進めた。

本報告書の岩崎台地遺跡群の発掘調査は、昭和 63 年度の範囲確認のための試掘調査に始まり、昭和 63 年 12 月 7 日及び平成元年 1 月 21 日の 3 者による協議を経て、平成元年・2 年・3 年の 3 年間に本格的な発掘調査を実施することとし、それぞれの年度の 4 月 1 日付けの契約により調査に着手した。しかし、2 年度の途中で工事発注に伴って発掘調査事業の大幅な計画の変更が必要となり、平成 2 年 6 月 27 日付け「教文 257 号」による変更の通知を受け、新たに岩崎台地遺跡群の ME 64 - 2316 と ME 64 - 2288 を追加して調査することとし、調査に着手したが、精査の一部を次年度に繰り越すこととなった。平成 3 年度の調査は平成 3 年 2 月 7 日付け「教文 889 号」による事業に通知を受け、4 月 1 日付け契約により着手したものであり、面的には未調査で残っていた 3,700 m² が対象となった。

第1表 平成3年度までの年度別調査終了面積

遺跡名(所在地)	調査対象面積	元年度調査面積	2年度調査面積	3年度調査面積	備考(計画変更)
柳上 (北上市)	4,930㎡	90㎡	1,440㎡	3,400㎡	3年度継続調査
上鬼柳IV (")	9,190		9,190		
上鬼柳III (")	8,370		8,370		
上鬼柳II (")	300		300		
上鬼柳I (")	8,700		7,400	1,300	3年度継続調査
岩崎台地 (和賀町)	50,500	29,250	17,550	3,700	
岩崎城西 (")	5,550	5,550			
梅ノ木台地I (")	9,000	6,000	3,000		2年度継続調査
梅ノ木台地II (")	3,890			3,890	
兵庫館 (")	3,130	980		2,150	
上反町 (")	4,710		3,090	1,620	3年度継続調査
観音館 (")	8,290		4,300		残りは4年度予定
煤 孫 (")	15,560		11,960	3,600	3年度継続調査
法量野I (")	9,990		(9,990)	9,990	2年度粗掘
中屋敷 (")	6,080			6,080	
林崎館 (")	14,150		14,150		
本 郷 (")	15,490	12,540	2,950		2年度継続調査
石曾根 (")	3,150	2,450	700		2年度継続調査
月 館 (")	3,590	3,590			
八幡館 (")	3,820	3,820			
八幡野II (")	58,070	25,160	20,970	11,940	2・3年度面積変更
田中館 (")	5,980	2,570	3,410		2・3年度面積変更
大渡II (湯田町)				15,000	面積変更・4年度継続
越中畑V (")				2,000	面積変更・4年度継続
		92,000	108,780	64,670	

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (第1・2・3図)

岩崎台地遺跡群は、岩手県の中央部やや南西寄りの現北上市和賀町岩崎地内(旧和賀郡和賀町岩崎地内)に所在し、北緯32度16分33秒、東経141度3分41秒付近に位置し、第10系による座標値は、最西端がX-80,600、Y+18,980、最東端がX-80,500、Y+20,200となり、調査範囲の東端から西端まで約1.3kmの距離がある。このような地理的な関係は第3図に示している。また、北上市役所和賀支所から東南東へ8km、東日本旅客鉄道北上線藤根駅から南東へ3.5kmの距離がある。

2. 周囲の環境 (第2・3図)

北上川の支流和賀川は、奥羽山脈の和賀岳と高下岳の麓からほぼ南北に流れ、沢内盆地を涵養する。和賀郡湯田町川尻で東に流れを変えて深い谷を削り、湯田ダムはこの谷部分に建設されている。その後、北上市和賀町横川目付近で流れが山地を離れて平野部をゆっくり東流した後、北上市の市街地で北上川と合流する。和賀川に合流する大きな支流に、上流から横川、本内川、下前川、左草川、鬼ヶ瀬川、南本内川、北本内川、鈴鴨川、尻平川、夏油川があるものの、もっとも下流に位置する尻平川と夏油川は他の支流と異なり、流路が一度平野部に出てから合流する。そして、山地から流路の出口に当たる北上盆地の西縁部に扇状地を形成する。しかし、本流である和賀川自身は大きな扇状地を形成することなく、反対に両支流の扇端部を浸食する。このような現象は、和賀川が広い流域を持ち大量の砂礫の供給が可能のようにみえることから、扇状地を形成しやすい要素を持っているが、上流にある沢内盆地を流れるうちにこれらの砂礫を落としてしまい下流まで運ばれる土砂が少ないことによるとみられる。夏油川の上流部には焼石岳、牛形山、駒ヶ岳などの火山があって周囲に火山灰や浮石などを噴出して県南部を広く覆い、北上市内の村崎野や相去町に分布し堆積する村崎野浮石層の層厚は最大3mにもなるが、扇状地状を示す地形面は火山灰に顕著に覆われる地点は少ない。

和賀川の南岸と北岸では段丘の発達に差がみられ、南岸には沖積平野と比高20mから30mの急崖によって限られた段丘面が広がるものの、段丘面上には明瞭な崖も見あらず単一の段丘面のようなものであるが、崖に近い場所に幅の狭い段丘面がわずかに見られるのみである。一方、北岸は比高数mの崖で限られる複数の段丘が発達してはいるものの、南岸ほど明瞭な急崖が見られず、和賀川が南に偏って流れたことが多かったことを示している。それらの段丘を浸食してできた河岸段丘上には、流路の変遷の跡が弧状の旧河道として網の目のように分布し、主に水田として利用されている。旧河道に沿って並ぶ自然堤防などの微高地は宅地や畑地として利

用されているが、現在は水田造成や宅地造成といった開発によって改変されている。また、段丘を開削した沢が沖積平野に出てくる所には扇形の崖線の堆積が認められ、宅地などに利用されている。

遺跡は夏油川が形成し段丘化した扇状地扇端の段丘崖に沿うように立地する。標高は95 mから106 mで、下位段丘である沖積面とは20 mから30 m、和賀川の現河床とは30 mから35 mの比高差がある。遺跡の立地する段丘面は、現在水田造成によって見事に区画整理されており、旧微地形を窺い知ることは困難であるが、昭和23年に米軍が撮影した航空写真の判読によると、その当時は地表面に網状に残る旧河道で水田耕作を行っており、自然堤防と見られる微高地に林や民家が見られる。水田造成時の攪乱層を除去した面に起伏があるのはそのため、これは遺跡の立地とも関わると思われる。また、立地で無視できないことに飲料水の水源の問題がある。当遺跡のみならず同地形面に立地する遺跡はすべて北側段丘崖に数多く存在する湧水の周辺部や至近距離に立地しており、むしろこのような場所を意図的に選んで集落を営んだと考えた方が自然であろう。当遺跡群の調査範囲である東西1,450 mの距離に4箇所の湧水があり、その付近に住居跡が密集する傾向を看守できることは、そのことを端的に示すものと理解される。

3. 地形面区分 (第4・5図)

北上川流域における第四系及び地形の研究は、中川他(1963b, 1971, 1981)の業績が大きく、当地域の段丘は上位から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類されている。

最高位の洪積段丘である西根段丘は開削が進み山際では丘陵状、扇頂や扇端部では残丘状を呈している。上部に約10 mの火山灰を載せ、これらの火山灰は上位から一首板火山灰、前沢火山灰、黒沢尻火山灰と命名されている。和賀川流域では、夏油川中流域の扇状地扇頂部の山裾と熊沢沿いの山裾などに観察される。和賀川の北岸では尻平川の右岸山裾に若干みられるのみであり、和賀川流域の段丘としてはもっとも小規模である。

洪積中段段丘に相当する村崎野段丘は、西根段丘に比較すると良く保存されており、周囲を低位の金ヶ崎段丘に取り囲まれる状態で観察される。構成層は飯豊砂礫層と呼ぶ20 mから30 mの砂礫層で上部に黒沢尻火山灰が堆積する。黒沢尻火山灰は上半の黄から赤褐色と下半の黄橙色浮石層(村崎野浮石)から成り、浮石の噴出源として南西に位置する焼石岳(1,548 m)・牛形火山(1,340 m)が考えられ、堆積した時期はグルム氷期前半(4~7万年前)と推定されている。和賀川流域では北上川との合流点に近い和賀川南岸の夏油扇状地中央部から扇端部にかけての地点と、もっと上流の本郷地区に小規模な面がみられる。和賀川の左岸では低位段丘の北に同位面が広く観察される。なお、当段丘の分布については、佐藤(1982)をはじめとする調査によって範囲の拡大することが明らかにされている。一連の東北横断自動車道関連の発

掘調査において、それまで金ヶ崎段丘と分類されてきた北上市の煤孫地区（林崎館跡・煤孫遺跡）からも黒沢尻火山灰が検出され、さらに同市鬼柳地区でも高位部分から同火山灰の堆積が確認されており、これらの地域の高位部分は部分的ではあるが村崎野段丘が残存していることを示すものであろう。

洪積低位段丘である金ヶ崎段丘は、北上川流域ではもっとも広範囲に分布する段丘で、扇状地形を良く示しており、和賀川の南北両岸では特に良く発達した段丘であり広範囲にわたって観察される。佐藤（1982）は和賀川左岸に分布する面を金ヶ崎Ⅱ段丘として細分し、当段丘を2面に細分した。当段丘の特徴は、構成層として礫木礫層と呼ばれる礫層が堆積することと、火山灰が堆積しないことである。

当遺跡の立地する夏油扇状地に限定してもう少し詳しく観察すると、奥羽脊梁山脈の東側斜面を水源とする夏油川は、低山の山麓部から平野部に流れが出た所から扇状地の形成が始まり、西は北上市和賀町煤孫地区から東は同市上鬼柳地区、南は胆沢郡金ヶ崎町北部までを範囲とする広大な面積を擁し、扇端部には既に記した礫層の覆流水が湧水として流れており、遺跡の殆どはこの湧水付近の扇端部に多く立地しているが、当遺跡も例外ではなく東西距離1,300 mの間に4ヶ所の湧水があり、この付近に住居跡が多く分布する状況が観察されている。

参考・引用文献

- 中川久夫他（1963）：「北上川中流沿岸の第四系および地形」北上川流域の第四紀地史（『地質学雑誌』第69巻第811号地質学会）
「北上川流域の段丘群」『地質古生物学研究室邦文報告』第71号別冊 東北大学理学部
「第四系」『北上川流域地質図（二十万分之一）』長谷地質調査研究所
佐藤 二郎（1982）：「I 地形概観 和賀川流域の地形について」『東北縦貫自動車道関係環境文化調査報告書（磐谷地遺跡）』岩手県教育委員会
藤林 実他（1976）：「北上山系開発地域（北上）」『土地分類基本調査』岩手県

4. 基本層序（第6図）

当遺跡は東西1,300 mの距離があり、地目や地形に若干の違いが見られる。特に東西両端部の地目が畑であり、その他の部分は水田であることが基本層序にも影響を及ぼしている。

現在畑である西端のⅠ区からⅢ区の一部と東端部分のⅩⅠ区からⅩⅡ区の地形は、後世に造成を受け地形が大きく変更された状況は見受けられない。したがって、土層にも耕作以外の大きな攪乱を受けた状況はまったく観察されず、いずれの土層も平面堆積を示し、自然状態で堆積しその後攪乱を受けていないことを看取することができる。一方、現在水田であるⅢ区の一部からⅩⅠ区の地形は、開田の際にそれまで起伏のあった地形が削平されて、ほとんど起伏のない平坦な地形に改変され、西端部から東端部に向かって次第に僅かずつ標高が低くなっている。したがって、後者の地点では表土がすべて重機による攪乱と削平を受けており、まったく原地形と原地層は残存していない。しかし、地点による攪乱の有無や程度を考慮しても両地点の間には基本的な地層の堆積は大同小異であり、極端な違いは見られない。

以上のことを考慮して遺跡全体の基本層序を示すと次のようになる。

I層—現在の表土であるが、地点によってその性状に違いが見られ、次の2層に細分される。

a—既述した東西両端部の畑部分に観察される耕作以外の擾乱を受けていない地層であり、色調は黒褐色をなす少量の小礫を混入するシルトである。層厚は約20 cmから30 cmの層厚があり、多くの土師器や須恵器などの遺物が包含される。

b—基本的には先のa層と同様であるが、水田部分の現表土である。この部分の表土は既述したように開田工事の際に大きく一度削平された後、再び表土として盛り土され、現在の表土を形成している。しかし、元となった土は開田時の表土と推定されるものの、色調も地点によって黒色から極暗褐色まで差があり、さらに混入物も多い傾向がある。遺物も若干包含されているが、原位置を保っている物はない。層厚は30 cm前後と差があり、西端部がやや深い傾向が見られる。

II層—山林部分の現表土であるが、畑や水田部分では現表土の起源となった土層であり、層厚も水田部分の0 cmから畑や山林部分の60 cmと、地点によって差がある。水田部分も本来は40 cm以上の層厚があったものと推定されるが、開田工事の際に削平を受けたものと理解され、西端部寄りに部分的に残存している。色調が黒色から黒褐色を示すシルトであり、土師器や須恵器の他、下部に縄文土器などを包含する。ほとんどの遺構は本層から掘り込まれている。

III層—下層のIV層が植生等の影響によって黄褐色から暗褐色や極暗褐色に変色した土であり、いわゆる漸移層に相当する土層である。層厚は地点によって差があるものの、約10 cm位と薄い。縄文時代の土器や石器などと土坑・陥し穴状遺構といった縄文時代に関連する遺構・遺物が検出される。

IV層—火山灰起源と推定される黄色から黄褐色の色調をなす粘土質土であり、西端部と東端部に特に層厚も厚く堆積するのが観察されるが、その他の地点では部分的に確認される土層である。層厚は0 cmから1 mと差があり、すべて無遺物層であるが、遺構はすべて本層を掘り込んで構築される。

V層—黄褐色をなすシルトであるが、III層とは不整合な堆積状況を示し、III層の堆積する地点では本層の堆積が見られない。また、この層は次のVI層の上部を構成する同じ層である可能性が考えられる。層厚は0 cmから50 cmであり、無遺物層である。

VI層—当夏油扇状地の基盤を構成する段丘礫層であり、層厚は確認していない。無遺物層である。

以上が当遺跡で観察される基本的な層序であるが、出土する遺物や検出される遺構との関係

を観察すると次のようになる。

遺物の出土はⅠ層とⅡ層のみであり他の層ではまったく出土しない。出土する遺物の種類や所属時期をみると、近現代の陶磁器から縄文時代前期の縄文土器まで含まれるが、出土する層位を見ると、近現代の陶磁器類はⅠ層に限定されているし、平安時代の土師器や須恵器はⅡ層の上半部、古墳時代の土師器と黒曜石は同層の下半部、弥生土器や縄文土器は最下部から出土した場合が多かったように観察された。

同様に遺構について見ると、近現代の遺構は地表観察でも存在が確認される場合もあったが、多くの遺構は掘削が終了し遺構検出の作業を経て存在が確認される場合が多かった。時代的に見ると、平安時代から古墳時代の遺構はⅡ層の中位から下位で確認される場合が多く、縄文時代の遺構は最下部からⅢ層上面で検出される例が多かったように観察された。

5. 和賀川流域の遺跡（第7図、第2表）

当遺跡の周辺部を主体に和賀川流域の代表的な遺跡の立地を概観すると第8図のようになり、第2表にはその遺跡名と所在地、性格などについて記載した。

和賀川右岸の低位段丘縁、左岸の段丘、自然堤防には多数の遺跡が確認されている。時期としては旧石器、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世に至るまで幅広く長期間にわたる遺跡の存在が知られている。以下では時代別にその立地を概観することとしたい。

旧石器時代の遺跡としては、下成沢遺跡、鳩岡崎遺跡、本郷遺跡の他、愛宕山遺跡の4遺跡が知られている。さらに、和賀川上流域の和賀郡湯田町地区では以前から著名な大台野遺跡の他に、同事業関連として調査された大渡Ⅱ遺跡、峠山牧場Ⅱ遺跡、本内Ⅱ遺跡等で旧石器時代の石器が出土しており、岩手県の旧石器文化を研究する貴重な資料を提供した。最も早く知られた下成沢遺跡は、東北縦貫自動車道建設工事関連の遺跡として昭和47年に調査され、台石・ハンマーストーン・磨製石斧等の石器と剥片が321点出土しており、夏油扇状地に立地する遺跡として注目された。鳩岡崎遺跡も前者同様同じ事業関連で昭和48年から同50年まで調査された遺跡であり、村崎野浮石層の下位から数点の石器が出土している。本郷遺跡は東北横断自動車道関連として調査された遺跡であるが、明確に旧石器時代の石器と断定されていないが、形態や剥離技法などから旧石器時代の遺物とされている。これら前者3遺跡はいずれも洪積中位段丘の村崎野段丘に立地する。一方、昭和63年から平成2年まで調査された愛宕山遺跡は、前3遺跡の立地と異なり、現在の氾濫原と80mの比高がある丘陵地の頂上部に立地している。調査によってナイフ、斧形石器などの成品と剥片など2,000点以上の遺物が出土している。さらに、和賀川上流域の大台野遺跡の例を見ると、縦長のブレードやナイフ、グレーバーなどと多くの剥片が出土し、これらの器種組成や製作技法とC₁₄年代測定法によって、18,000年位前の遺跡とされている。

縄文時代の遺跡は非常に多くの存在が知られている。なかでも和賀川北岸に立地する鳩岡崎遺跡は、東北縦貫自動車道建設関連として昭和48年から同50年に調査されたが、前期末の大型住居跡をはじめ同時期の大型土坑が多く検出されたほか大量の遺物が出土し、大規模な集落遺跡として全国的に著名である。そのほか、北上市が多年にわたって調査を続けている滝ノ沢遺跡は、鳩岡崎遺跡とほぼ同時期の集落遺跡であることが明らかにされており、今後の調査に注目していきたい。さらに、北上川と和賀川の合流点の和賀川左岸に立地する九年橋遺跡は昭和48年から同53年まで長期にわたる発掘調査が実施され、晩期後半の土器と石器が大量に出土したことで全国的に知られている。今度の東北横断自動車道建設関連の発掘調査でも縄文時代の遺跡が数多く発掘調査されている。例えば、平成元年から同3年に調査された柳上遺跡は、中期末を中心とする多くの住居跡と土坑が検出され、大規模な集落遺跡であることが明らかとなったし、西側に隣接する平成2年に調査された鬼柳IV遺跡は、時期の特定はしがたいものの縄文時代と推定される大型土坑が146基検出されているし、平成元年から2年に調査された本郷遺跡は、中期中葉の住居跡22棟と多くの土坑が検出され、大規模な集落遺跡であることが判明した。煤孫遺跡は平成2年と3年に調査調査されたが、その結果前期末から中期にかけての土器や石器の遺物が大量に出土したほか、その時期の住居跡や土坑も多く検出されており、大規模な集落遺跡である。石首根遺跡は平成元年と2年に調査され、後期を主とする16棟の住居跡の他、同時期の土坑が数多く検出されており、縄文時代の集落遺跡であることが判明した。以上の遺跡は上鬼柳IV遺跡を除くとすべて大規模な集落遺跡であるが、その他遺物が出土したものの遺跡や土坑とあわせて穴状遺構だけが検出された遺跡は多くある。

弥生時代に属する遺跡は縄文時代の遺跡ほど多くはない。これまで知られていた著名な遺跡としては蔵屋敷遺跡（かつては念仏車遺跡と言われた）と物見崎遺跡がある。特に、物見崎遺跡では4棟の住居跡が検出されており、北上川流域で住居跡の最初に検出された遺跡である。今回の事業によって発掘調査された遺跡の中では、遺物の出土は殆どの遺跡で出土の報告があるものの、遺構が検出された遺跡は少ない。その中で、3棟の住居跡が検出されている上鬼柳I遺跡は、北上市地区で住居跡の検出された2ヶ所めの遺跡であるし、その他、上鬼柳II遺跡と同重遺跡でも各1棟検出されている。さらに、兵庫館跡からは遠賀川水系の埋設土器を含む壱棺墓群が検出されているし、中屋敷遺跡からも遠賀川水系の土器が出土しており、これまで岩手県北部の馬瀬川沿いに立地する遺跡からの出土は知られていたが、北上川流域に立地する遺跡でも遠賀川水系の土器が分布していることが明らかとなった。また、遠賀川水系土器のように畿内や九州といった地域の土器文化だけでなく、北海道地方の続縄文期の影響を受けたと推定される、器表に帯縄文が施文された土器が、上鬼柳I遺跡から出土しており、このような資料が今後増加する可能性が考えられる。

古墳時代の遺跡は、古墳の存在は多く知られているものの、集落遺跡の調査例は非常に少な

い。集落遺跡の調査例としては、昭和48・49年に東北縦貫自動車道関連で調査された猫谷地遺跡が知られている。時期的にも5世紀と7・8世紀に及ぶなど多くの住居跡が検出され、特に5世紀代の集落としては岩手県唯一の例であり、その他は7世紀から8世紀に相当する集落であるが、例としては多くない。一方、古墳の存在は猫谷地・五条丸・八幡・長沼の支群を擁する江釣子古墳群が全国的に知られている。さらに、当遺跡の発掘調査によっても新たに古墳が検出されており、この地域では今後も新たな古墳が検出される可能性がある。

古代とも言われる奈良・平安時代の遺跡は、既述した猫谷地遺跡のほかは尻引遺跡が知られるのみであるが、平安時代の遺跡は多くの例が知られている。例えば、先の猫谷地遺跡・鳩岡崎遺跡・上鬼柳Ⅲ遺跡・本郷遺跡・藤沢遺跡等と、岩崎台地遺跡群がある。特に、当遺跡群は120棟以上の住居跡や独立柱建物跡、各種の土坑など多くの平安時代に統する遺構と遺物が検出されており、これまでのところ当地域としては当遺跡群が最大規模の遺跡である。今後も大規模な遺跡の発見される場合のあることが推測されるし、さらに当地域は寺院や堂宮といった宗教に関係する遺構の検出例が多いのも特徴であり、当遺跡群から発見された独立柱建物跡もその可能性が考えられる。

中世に統する遺跡は城館遺跡として多く知られている。この地域は、中世には和賀氏の領地であったことから、和賀氏に関連する城館跡が各地に残っており、至近に位置する和賀氏の一族岩崎氏の居館跡岩崎城跡がある。発掘調査された例としては、丸子館跡・鹿島館跡・岩崎城跡・兵庫館跡・根館跡・蟹沢館跡・姪川館跡・飛勢城跡・斎羽場城跡など、多くの例が知られている。

参考・引用文献

- 小野田哲重(1992):『本郷遺跡発掘調査報告書』『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第164集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター
- 番井 宗孝(1992):『石曾根遺跡発掘調査報告書』『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第165集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター
- 川村 均(1993):『兵庫館跡・梅ノ木台地Ⅱ遺跡発掘調査報告書』『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第180集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター
- 東海林雅伸(1994):『煤孫遺跡発掘調査報告書』『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第196集』岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター
- 和賀町教育委員会(1989～1991):『和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅰ～Ⅲ』

第2表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	和賀仙人	散布地	旧石器	仙人	44	代官森Ⅰ	散布地	縄文土器・石器	岩崎新田
2	切留Ⅰ	散布地	縄文土器(中・後期)	仙人	45	代官森Ⅱ	散布地	土坑・石器	岩崎新田
3	人当Ⅰ	散布地	縄文土器(中期)・石器	仙人	46	神楽	散布地	縄文土器・石器	岩崎新田
3	法ヶ松Ⅰ	散布地	縄文土器・石器	岩沢	47	福沢	散布地	縄文土器	岩崎新田
5	水沢館	館跡	中世	岩沢	48	水神	散布地	縄文土器・石器	岩崎新田
6	岩沢Ⅰ	散布地	縄文土器(後・晩期)	岩沢	49	七折館	館跡	中世	岩崎
7	下岩沢Ⅰ	集落跡	土坑、縄文土器、弥生土器	岩沢	50	花會根上	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	岩崎
8	鳥谷森	散布地	縄文土器(晩期)・石器	横川目	51	七折	集落跡	縄文土器、石器、紡錘車	岩崎
9	岩沢館	館跡	縄文土器、陶器	下仙人	52	花會根	散布地	須恵器	岩崎
10	愛宕山	散布地	縄文土器、石器	横川目	53	新田Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	岩崎
11	田代	集落跡	縄文土器(晩期)・石器	山口	54	八天坂	散布地	土師器、須恵器	岩崎
12	福田	散布地	縄文土器(中・後期)・石器	山口	55	久田Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	岩崎
13	馬場館	館跡	中世	山口	56	寺村	散布地	縄文土器、土師器	岩崎
14	福田塚	散布地	縄文土器	山口	57	小寺	散布地	土師器、須恵器	岩崎
15	山口館	館跡	中世	山口	58	小平	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	岩崎
16	八幡館	館跡	縄文土器(晩期)・弥生土器、石器	横川目	59	里小屋	散布地	土師器、須恵器	岩崎
17	館森	散布地	縄文土器(中・後期)・石器	横川目	60	上鬼柳Ⅰ	集落跡	弥生土器、土師器	上鬼柳
18	大嶽	散布地	縄文土器(晩期)・石器	横川目	61	上鬼柳Ⅱ	集落跡	弥生土器、土師器	上鬼柳
19	経川館	館跡	土器、縄文土器(中期)	横川目	62	上鬼柳Ⅲ	集落跡	土師器、須恵器	上鬼柳
20	藤の森古墳群	古墳群	古墳、人骨	横川目	63	上鬼柳Ⅳ	集落跡	土師器、須恵器	上鬼柳
21	田中館	館跡	土師器、石器	山口	64	柳上	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	鬼柳
22	八幡野Ⅰ	散布地	縄文土器	煤孫	65	六軒	散布地	縄文土器(晩期)	鬼柳
23	八幡野Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	山口	66	下成沢Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	成沢
24	八幡館	館跡	縄文土器、中世	山口	67	成沢Ⅱ	集落跡	土師器、須恵器	成沢
25	月館	館跡	縄文土器、土師器、須恵器	煤孫	68	大谷地	集落跡	縄文土器	相去
26	石會根	集落跡	縄文土器、石器、弥生土器、土師器	煤孫	69	高瀬田古墳群	古墳群	土師器、麻手刀	長沼
27	本郷	集落跡	縄文土器(中期)・石器、土師器、須恵器	煤孫	70	長沼古墳群	古墳群	麻手刀、勾玉、切子玉	長沼
28	荒屋沢	散布地	縄文土器	煤孫	71	念仏車	散布地	縄文土器、弥生土器	長沼
29	林崎館	館跡	縄文土器、中世	煤孫	72	蔵屋敷	集落跡	弥生土器、土師器	江釣子
30	中屋敷	散布地	土器、土師器	煤孫	73	福葉Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	藤根
31	法葉野Ⅰ	散布地	石器	煤孫	74	蓮見館	館跡	縄文土器、土師器、須恵器	藤根
32	法葉野Ⅱ	散布地	縄文土器、石器	煤孫	75	長清水Ⅰ	散布地	縄文土器(前期末)・土師器	藤根
33	煤孫	集落跡	縄文土器(中期)・土師器、須恵器	煤孫	76	新平	集落跡	縄文土器、土師器	江釣子
34	観音館	館跡	土器、須恵器	煤孫	77	芦堂	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	江釣子
35	上反町	散布地	縄文土器、弥生土器、石器	煤孫	78	下江釣子	集落跡	土師器	江釣子
36	兵庫館	散布地	縄文土器、割片石器	岩崎	79	五塚古墳群	古墳群	土師器	江釣子
37	梅/木台地Ⅱ	集落跡	弥生土器、土師器	岩崎	80	鎌谷地古墳群	古墳群	麻手刀、勾玉、土師器	江釣子
38	梅/木台地Ⅰ	集落跡	縄文土器	岩崎	81	本宿	散布地	縄文土器、土師器	江釣子
39	岩崎城西	散布地	縄文土器、陶器	岩崎	82	下谷地	散布地	平安	相去
40	岩崎城	館跡	銅鉄鏡、鉄塊、縄文土器	岩崎	83	埴岡崎高台	散布地	縄文土器、土師器	江釣子
41	岩崎台古墳群	集落跡	縄文土器(中期)・石器	岩崎	84	埴岡崎上の台	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	江釣子
42	望野Ⅰ	散布地	縄文土器(中期)・石器	煤孫	85	滝ノ沢	集落跡	土坑、縄文土器(中期)	相去
43	望野Ⅱ	集落跡	縄文土器(前後期)・旧石器	煤孫					

Ⅲ. 野外調査と整理の方法及びその経過

1. 野外調査

1) 調査区の設定 (第9図)

調査範囲が東西方向約1,450 mの距離があることと調査面積が約50,000 m²と広大であり単年度で全面積の調査終了が不可能であることから、最初に調査範囲全体をカバーし、なおいつでも同じ精度で簡単に調査区の設定ができるように公共座標である第X系の座標系を利用して調査区全体に調査区を設定した。実際には、座標系の100 m×100 mを大グリッドとし、東西方向の1,400 mの距離を14等分して西端からローマ数字でI区からX区まで、南北方向の方向と同じに北端からアルファベットでA区からE区まで命名し、AI区やBX区等と呼称した。大ぐりつとはさらに、東西・南北とも4 mごとの25等分し、東西方向は西端から1から25まで、南北方向は北からaからyまで命名して小グリッドとした。したがって、個別のグリッドの名称は大グリッド名と小グリッド名を組み合わせるとA Ia1区やA Xiy1区のように呼称した。

2) 遺構名の命名

検出された遺構の名称は、検出された遺構の種類と検出された遺跡内の位置を示すグリッド名を組み合わせるとA Ia1住居跡やA Xib2土坑等と命名したが、溝については遺構の北西端の位置する位置をもって遺構名とした。その他の遺構の命名も既述した住居跡や土坑の命名法に準じて命名し呼称した。

3) 粗掘りと遺構の検出

(粗掘りの方法)

当遺跡の調査範囲が46,000 m²強と広大な面積であることと、東西方向が1,350 mの距離があることなどから、最初に試掘溝を各所にいれて土層の堆積状況と遺物の包蔵状態・遺構の検出状況などを確認し、その状況によって人手と重機による粗掘りを適宜選択する事としたが、試掘から旧地形や表土が残存している部分は、西からI区からⅢ区の一部、Ⅳ区の一部からⅤ区の区域以外は開田時に表土が大きく削平されており、表土に包蔵される遺物はすべて原位置を保持していないことが判明したことから、殆どの地点が重機で粗掘りを行う結果となった。

(遺構検出)

重機で粗掘りを行った後の遺構検出はすべて人手で行ったが、I区からⅣ区の一部までの西端部とⅣ区の一部からⅤ区までの主に地目が畑であった地点は削平や攪乱が少なかったために、複数回にわたる検出作業を反覆して行った。その他のⅤ区からⅥ区の一部までは開田時に表土の黒色土が大きく削平され、基盤層である褐色火山灰質土や同色の砂質シルトの面までその痕跡を明瞭に残しており、結果的に殆どの遺構はこの面で検出されている。しかし、このよ

うな削平擾乱が、検出された遺構の所属時期を決定することに大きな影響を与える結果ともなった。

4) 遺構精査

検出された遺構はそれぞれの種類によって住居跡は4分法、土坑は2分法による精査を原則とし、埋土の堆積状況を観察するための畦を設定して遺構を掘り上げ、溝や掘立柱建物跡は適宜土層観察用の畦を残して埋土を除去したが、当遺跡で検出された遺構は重複例が少ないため、殆どは既述の方法によって精査を進めた。

実際の発掘は分層発掘を原則とし、埋土上位での出土遺物は層位を確認の上、一括して取り上げた。しかし、完形土器や大型破片・特殊遺物は床面が検出されるまでそのまま残置し、平面図に記入した後収納した場合もある。また、床面直上や床上10 cm以内での出土遺物は平面図に記入し、写真撮影の後収納した。

5) 記録

実測図の作成は、平面図・土層断面図とも20分の1の縮尺を原則としたが、状況や遺構の種類によっては縮尺10分の1で作成するなどその時々状況に合わせて適宜選択した。実際の実測作業は、作業員の中から2名1組で実測班を編成して行き、実測班に対する作業の指示や指導、できあがった実測図の点検は調査員が行った。遺構の一部については平板測量によって40分の1で作成したり、地形図として等高線の入った実測図が必要と判断した遺構の実測は、専門の測量業者に委託して写真測量の方法によって実測図を作成した。いずれの方法による実測図も、測量の基本となる軸線は調査開始時に設定したグリッド軸であるが、これは結果的に公共座標第X系の軸線に合わせて実測図を作成したことになる。実際の実測では、遺構面にグリッド軸に合わせて1 m×1 mで水糸を張る簡易道り方測量法によって行った。作成された土層図に対する注記は調査員が行い、土層名は、基本層序はローマ数字で上位層からI層・II層・III層と命名し、さらに細分する必要がある場合はa・b・cを付しその違いを示した。遺構の埋土はアラビア数字で上位層から1層・2層・3層と命名した。また、土層の色調は新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修）の標準色調との比較によって決定した。

写真撮影は、6 cm×7 cm版1台（白黒）、35 mm版2台（白黒・カラースライド）を1組として使用し、適宜必要に応じて使い分けて撮影した。実際の撮影は埋土土層、遺構全景、遺物出土状況と遺物の個別撮影、カマド関係等の他、必要に応じてその都度撮影し記録とした。

2. 室内整理

現地調査が終了すると、検出された遺構の実測図や出土した遺物、撮影して各種の写真等、調査によって得られた種々の情報は、以下のような手順で整理し、トレースされた各種の実測図と撮影された遺構や遺物の写真は、報告書へ収録するに当たっては次の凡例に従って編集し

た。また、これらの作業は調査員の指示と指導、点検を受けながら室内整理作業員が行った。

1) 遺構の実測図関係 (第6図)

現地調査中に作成された検出された遺構の実測図は、現地調査中に第1次の確認と整理を終了して室内整理に入った。室内に運ばれた現場で作成された実測図は、さらにレベル数値や平面図と断面図の規模、グリッドポイントとセクションポイント、北方向などを点検した後、合成したり第2原因を作成した。

確認・点検された平面図や断面図は、原因から直接か、作成された第2原因を元にして、報告書に掲載する各実測図のトレースを行ったが、現地で作成した実測図をすべて掲載できないので選択してトレースした。

また、遺構配置図は現地で作成した縮尺20分1の平面図を縮尺100分1に縮小して原因図を作成し、さらに縮尺200分1に縮尺してトレース原因図として作成した。実際の作成に当たっては、調査範囲が東西1,300mと細長いことから1枚の配置図としてはあまりにも長くなりすぎて印刷できないため、6枚の切り図として作成した。

報告書に掲載した実測図の縮尺率は、住居跡は平面図・土層図は50分1、カマドは25分1、竪立柱建物跡は50分1か100分1、土坑・井戸・墓塚と陥し穴状遺構40分1、古墳と周溝遺構の全体平・断面図は50分1で主体部が25分1、その他は20分1か25分1としたが、規模の関係で一部不定縮尺もあり各図版ともスケールを付して縮尺を明らかにした。また、遺構の実測図に示されたアルファベットや数字、スクリーントーンは凡例-1のような状況を示している。

2) 出土遺物関係 (第6図)

出土した遺物は現地で水洗して室内整理に入った。室内での最初の作業は、出土した遺構ごとに仕分けした後、各破片ごとに出土地点や層位を記入し、土師器と須恵器は遺構ごとに接合・復元を行った。接合のできなかつた破片の内で報告書に掲載する必要のある個体も選択し、遺構ごとの出土遺物登録台帳を作成した。

接合・復元された土師器や須恵器は実測図が作成され、点検された後引き続きトレースされた。実測図はすべて実大で作成されたが、大型の個体の場合は2分1に縮小してトレースした。実測不能な小破片でも、報告書に掲載する必要があると判断された場合には、拓本を作成するなり、立体的な実測図ではなく平面的な実測図を作成して代用とした。

石器は各個体ごとに観察して器種の認定をした後、器種ごとの登録台帳を作成した。こうして登録された石器は実測図を作成し、さらに実測図は点検された後、ほとんどは実大か2分1縮小でトレースしたが、黒曜石や石鏃などの小型の種類は2倍に拡大したトレース原因図を作成してトレースした。

以上の作業を経て本報告書に掲載された遺物の内訳は、土師器が2,853点、須恵器1,404点、

黒曜石 401 点、石器類 126 点、鉄製品 191 点、ガラス製ビーズ玉 73 点、土製品 35 点の合計 5,103 点であるが、土師器と須恵器には前者 354 点、後者 543 点の拓本図による掲載が含まれている。

本報告書では、土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器の実測図は縮尺 3 分 1 を主に須恵器の大型は 4 分 1 として縄文土器の小破片を 2 分 1 で掲載した。割片石器は 3 分 2 を主に 2 分 1 と 3 分 1 の縮尺である。そのほか羽口が 3 分 1、黒曜石 3 分 2、古貨幣と石帯そしてガラス製ビーズ玉が実大以外は、鉄器・土甕・灰釉陶器・紡錘車・陶器が 2 分 1 の縮尺で掲載したが、各図版ごとにスケールを付して縮尺を明確にした。

また、遺物の実測図に示した数字、スクリーン・トーン等は、凡例-2 のような状況を示した。

3) 写真関係

現地で撮影された検出遺構に関する埋土の土層、遺物の出土状況、完備後全景、各部詳細近接写真など撮影された各種の写真は、フィルムの種類ごとにアルバムに収納した後、カットごとに連番の整理番号を付し、さらに遺構名や撮影の状況を書き込み整理した。それらの作業が終了した後写真整理台帳を作成し、さらに遺構ごとに関係する写真の所在を明らかにした遺構ごとに関係写真所在確認表を作成して、遺構の多さに対処した。報告書の作成にあたっては、これらの現場で撮影した写真の中から選択し、トリミングして掲載した。

遺物の写真は、土器の類は接合・復元された個体以外に拓本を作成した遺物等報告書に収録した遺物はすべて撮影して掲載した。また、墨書や底面等特に注目される部分については近接撮影した。石器や鉄器とその他の遺物についても報告書に何らかの形で収録した遺物はすべて撮影し掲載した。

本報告書では、遺構関係の写真については一部に未撮影の遺構があったものの、撮影されている遺構については全遺構の写真に掲載したが、縮尺は不定である。

遺物の写真については、土器類は縮尺約 3 分 1 (一部の大型は 4 分 1 か 6 分 1)、石器類は約 3 分 2 か 3 分 1、鉄器や土製品は石器類に準じた縮尺で掲載したが、大まかな縮尺であることを明記しておく。

3. 現地調査と整理の経過

1) 現地調査の経過 (第 3・10 図)

当遺跡に対する発掘調査は、昭和 63 年度の試掘調査が最初で、その結果に基づいて平成元年から同 3 年度まで本調査を行ったが、以下に年度を遡ってその経過を記すこととする。

〔昭和 63 年度〕(第 3 図)

昭和 63 年度に実施された調査は、8 月 1 日に開始され同年 9 月 19 日まで継続されたが、遺跡の範囲を確認する事と遺構や遺物の検出や出土する層位を確認するための試掘調査である。

しかし、調査の対象となった範囲は今回本調査が実施された全域ではなく、その時休耕水田であったⅢ区からⅣ区までの区間約10,000㎡を対象としたが、西端部の畑部分そして東端部の畑部分と一部の水田については試掘の範囲とはされていなかった。

実際の調査は、調査範囲が既述のとおり休耕水田であったため、水田区画の畦畔が30m毎に入っており、法切りバケットを装着したパワーシャベルを使用して、畦畔と畦畔の間30mに幅3mのトレンチを3条設定して表土を剥がし、遺構や遺物が存在するのを確認していく方法をとった。

調査は西端部から順次東へ進めていったが、パワーシャベルで表土を除去した後、その部分を人手でクリーニングして遺構や遺物の検出をし、最後に平板測量によって遺構の検出平面図を作成して調査を終了した。検出された遺構の配置関係は第8図に掲載したとおりである。

〔平成元年度〕

昭和63年度の試掘結果に基づいて本調査の開始された最初の年度であるが、当方に示された本調査を必要とする範囲は、前年度の試掘の結果を基にして岩手県教育委員会と委託者の間で協議もたれて既に決定しており、その範囲は第10図に示したとおりである。

調査は委託者の工事計画の関係から、年度始めに範囲が指定された部分の調査を行う形で進めたが、今年度は調査必要総面積46,267㎡の63.2%に相当する29,250㎡が調査対象の範囲である。実際の調査範囲は全体範囲の東端部に近いⅩ区の東端部からⅡ区の中央付近までのほぼ250m区間約7,500㎡と、Ⅱ区の東端部からⅦ区の西端部までの約560m区間の約21,750㎡の2カ所に分散している。

実際の調査は4月11日から4名の調査員によって東側調査区から着手した。最初は雑物除去の作業から開始したが、この範囲は中央やや東寄りを東西に走る農道によって分けられているが、この農道を境にして東側が畑、西側が水田と地目が違い、地形や土層を把握するため最初にトレンチによる試掘を行った結果、攪乱の程度に大きな差があり粗掘の方法を変えることで計画した。それは東側の畑部分は、過去に耕作以外の攪乱を受けた形跡が地表観察や試掘ではまったく認められなかったことから、この部分については保存状態が良好であろうとの推測からすべて人手で粗掘を行うこととした。一方、西側の水田地区は開田工事の際にかつての表土（黒色土）はすべて失われ、さらに地山も大きく削平された後に、工事の際に攪乱を受けた黒色土が耕作土として運び込まれたものと判断されたことから、この地区については重機を導入して粗掘を行うことで基本的な計画を立案した。したがって、実際の粗掘は以上の計画にあわせ、両地区の作業を平行して進めた。粗掘の結果、東の畑部分では4棟の住居跡と24基の方形周溝遺構、溝、陥し穴状遺構などの各種遺構が攪乱を受けない良好な状態で検出された。水田部分は住居跡3棟のほか、溝と土坑が検出されたものの、削平を受けているため住居跡の壁高も低いほか溝も浅い。しかし、現在の表土中にも平安時代の土師器や須恵器の破片が多く混

在しており、かつてはもっと規模の大きい集落遺跡であったことを推定させた。

検出された遺構の精査がほぼ見通しのついた7月6日には現地説明会を開催し、これまでの調査成果を一般に公開した。その後、最終の詰めの作業や残務整理をし、この地区に対するすべての作業を終了したのは、7月28日である。

一方、6月24日からは一部の調査員と作業員が西端部調査地点の調査準備に着手した。この地点は一部が現用水田であるがほとんどは休耕水田であり、前年度の試掘調査範囲を含んでいる。調査範囲が東西約560m、幅30mから100mと細長いことと東に向かって緩やかに傾斜する特徴があり、さらに東端部の水田地区同様開田の際の削平・攪乱が推測される地区でもある。

最初は東端部の調査同様雑物除去から開始したが、引き続き攪乱の程度や表土への遺物の包蔵状態の把握、遺構検出面の把握などを確認するため、トレンチによる試掘を行った。

この地点は既述のとおり水田であり、田面の区画ごとに高さが微妙に違うことからトレンチは区画ごとに設定したが、範囲全体に設定したのではなく、前年度試掘をしなかった範囲に限定して行った。その結果、西端部寄りの方が削平を受けた程度が少なく、部分的ではあるが旧表土（黒色土）を残し、遺構もほとんど攪乱を受けない良好な状態で残存することが判明した。一方、前年度に試掘を行った東寄りがかつての表土はまったく残存しておらず、部分的に地山まで大きく削平されてされており、遺構がまったく存在しない可能性のあることも明らかとなった。また、攪乱を受けているとはいえ、現在の表土には全地点で遺物が多少なりとも包蔵されていることも事実であるが、ほとんどは原位置を保持していないことも明確となった。以上の結果を踏まえて、この地区は面積が広大であること、表土が全面攪乱を受けていることから、粗掘はパワーシャベルを使用して行うことで計画した。

実際の粗掘りは6月27日から開始し、重機で表土を除去した部分を人手でクリーニングして遺構の検出をする、という手順で作業を進め、最初は西端部から着手し、次第に東へ移動した。7月28日に東端部地区の調査が終了と同時に、調査員、作業員とも西端部の調査に合流して作業を進めたが、さらに他事業の関連で同遺跡の調査を行っていたチームも調査員作業員とも合流したことによって調査員6名、作業員数35人と一気に増加したことから、調査員・作業員とも4班に分け、遺構検出と遺構精査を並行して進めていった。また、7月31日からは重機を2台に増車し、作業員も15名に増員して粗掘と遺構検出の効率化をはかり、粗掘と遺構検出は8月18日で終了した。8月7日には他遺跡の調査が終了した調査員4名と作業員20名のチームがさらに合流し、VI区の東端からVII区の西端までの約120m間の精査を担当することになった。さらに、他遺跡の調査終了に伴い、10月3日に1名、10月12日に1名、10月23日に2名の調査員が合流し、総勢16名の調査員と作業員65名の大所帯で調査を進めることになった。

粗掘の終了に伴い、全員が検出遺構の精査に従事する事となったが、既述のとおり調査員・

作業員とも班分けをして作業を進めた。

粗掘と遺構検出が終了してみると、西端部のⅣ区からⅤ区の西端まではほとんど攪乱を受けておらず非常に良好な状態で埋存していることが判明した。逆に東側半分は削平によってかつての表土がまったく残存しないばかりか、大きく削平されている部分が多く、遺構の残存もよくない地点が多い。遺構の分布をみるとⅤ区の中央から東とⅥ区は少なく、Ⅶ区は比較的削平を強く受けているものの、ほぼ一定の間隔で住居跡が分布する特徴がある。

精査は粗掘や遺構検出と並行させながら7月17日に西端部寄りから開始し、次第に東方に移動していったが、随時調査員が増加していったことにより、調査員各自が班分けした作業員とともに地点ごとに担当を分けた。調査当初の日程は10月31日で終了の予定であったが、検出された遺構が非常に多かったことと、調査面積が広大であったこと等により、予定期間で終了することができず調査期間を延長し、結局すべての作業が終了となったのは11月17日である。

〔平成2年度〕

今年度の調査範囲は、元年度の調査範囲の東側に隣接する最東端部と、最西端部の元年度調査範囲に隣接する部分、そしてⅣ区西側の3地点で面積13,317㎡である。実際の調査は4月13日から始まりすべての調査が終了したのは11月28日である。

4月当初は2名の調査員が担当して、最東端部のⅣ区中央からⅤ区の中央までの約200m間の約6,000㎡の調査に着手したが、Ⅳ区に存在した墓地(公葬地)の移転との関わりでその部分の調査を進めることができず、この地点の調査が終了したのは結局10月11日であった。一方、西端部の調査は他遺跡の調査が終了した別の調査班が7月2日から東端部の調査と並行させて開始したが、遺構数の関係から予定期間内に終了できず、調査期間を延長して調査を続行し、約半分の面積の調査を次年度に残し終了したのは11月28日である。さらに、中央部調査区のⅦ区に対する調査は、他遺跡の調査が終了した新たな調査班2名が8月20日から調査を開始し、予定どおり10月23日にすべての調査を終了した。

東端部の調査区は現用畑と山林や墓地であったことにより、耕作以外の攪乱はないと推定されたが、雑物撤去後に20m間隔で2m幅のトレンチを設定して試掘を行い、攪乱の程度や遺構・遺物の検出と堆積土層との関係を把握した。その結果、東寄りの畑部分は耕作以外の攪乱はなく、さらに東側ほど表土が深く遺物の包蔵量が多いことも判明した。西側の山林や墓地部分の表土は、畑部分より浅く遺物の包蔵も少なく木根が多くある。以上の試掘結果からこの地区の粗掘は重機の使用を主体にし、補完的に人手を並行させて行うこととした。西端部の調査区も東端部と同じ状況であるが、雑物撤去の後にトレンチを設定して試掘を行った。その結果、全体的に表土が厚く、層厚が最大1mと東端に寄るほどその傾向が強いことが明らかとなったが、耕作以外の攪乱はなく表土内に多量の遺物を包蔵し、さらに遺構の保存状態も良好であることが判明したものの、表土が厚く粗掘をすべて人手で行うには限界があり、重機の使用と人

手を並行させて作業を進めた。一方、中央部の調査区はすべて休耕水田であり、現在の表土はすべて開田工事の際に攪乱を受けていることから、当初から重機を主体にした粗掘で計画し、遺構検出のみを手で行った。

検出された遺構の精査は、粗掘や遺構検出の作業と並行させたり、遺構検出がすべて終了した後とか、それぞれの地点の調査計画の中で、最良の方法を選択して進めた。

以上の作業を行うに当たって、東端部調査区の墓地移転問題以外は調査に支障となる問題もなく順調に調査が進んだものの、西端部については検出された遺構数が多かったことなどにより、道路センター杭の南側約3,700㎡の調査は平成3年度に繰り越すことになった。

〔平成3年度〕

今年度は当遺跡群に対する発掘調査の最終年度であるが、調査の対象となったのは昨年度の調査で最西端部調査区の道路センター杭の南側約3,700㎡である。今年度の調査区は、昨年度中にはほぼ粗掘が完了していたが、4月当初は一部の粗掘と粗掘の終了していた部分に対する遺構検出の作業を並行させて進め、同時に昨年度の調査で残土の仮置き場としていたことから、重機を使用して残土の移動・処理を併せて行った。精査は西部に位置する住居跡から着手し、それと土坑などのあまり時間のかからない遺構の精査も並行して進め、次第に東に位置する遺構へと移動していった。もっとも最後に着手した遺構は古墳であるが、この精査に予定より若干多くの時間を要し、平面形は写真測量で時間を短縮しながら精査を進めた。

実際の調査は4月15日から開始され8月10日で当遺跡群に対する発掘調査に関わる一切の作業を終了した。

2) 室内整理の経過

平成3年度に野外調査がすべて終了したのに伴い、引き続き平成4年度・同5年度の2年間を報告書の発刊を目的とした室内での整理作業を行うこととしたが、整理期間を2年間とした理由は遺跡の発掘調査面積が約50,000㎡と広いだけでなく、検出され調査した遺構数が600遺構以上と当センターとしてはこれまであまり例のない遺構数であることと、出土遺物数も、報告書に掲載する必要があると判断される物に限定しても5,000点以上であるなど、冬季間と単年度だけ整理では最終報告書の編集は困難との判断によるが、以下にその経過を記すこととする。

〔平成4年度〕

通年整理最初の年度であることから、今後2年間の整理作業全体の進め方について検討し、以下のように進めることとした。

まず最初に、平成4年度の作業としては遺物の整理を主に進めることとし、今年度で遺物に関わる実測・トレース・拓本・図版作成・登録一覧表作成・写真撮影まで、すべての作業を終了させることで計画した。同5年度については遺構関係のトレース・図版作成・キャプション

の書き込みなどの作業と、遺構・遺物の写真図版作成を進めることで計画した。

実際の作業に当たっては、遺物の整理は単年度ごとに実測作業を進めてきたが、出土量が多量のためすべての作業を終了できなかったことから、これまで実施した作業の見直しと進捗状況の把握をし、次いで、最初に遺構毎に出土した遺物の種類と量の点検を行い、さらに報告書に掲載する必要のある遺物の選択を行った。その後、選択した遺物を実測するのか、拓本を作成するのかの判断をし、それぞれの目的に見合う作業によって処理を進めていった。

原稿の執筆は、調査年度によって担当した調査員が異なることや、それに伴って調査を担当した調査区も違うこと等から、原則的には調査区ごとに調査を担当した調査員が、その地区で検出された遺構の執筆をすることとしたが、執筆の進まない遺構については整理担当者が前述した作業を進めながら、並行して執筆することとした。

以上の計画に合わせて作業を進めていったが、遺物の整理に関係する作業は、冬季間にも極力進めていたので、12月にはほぼ終了することができた。引き続き、完成した図版の点検と併せて遺構関係の原因点検とトレース原因（第2原因）の作成をし、トレースの作業に回した。

また、当遺跡からは土師器や須恵器といったいわゆる土器の類のほか、各種の石器、鉄製品や鉛滓、ガラス玉、黒曜石、焼けた動物骨、埋葬された動物骨、漆紙等といった多くの種類が出土しており、それらのなかから石質や材質の鑑定、産地の同定、種類の鑑定など専門の研究者や機関に分析や鑑定を依頼した遺物も多い。

〔平成5年度〕

昨年度末に行っていたトレースの作業をそのまま継続したが、この作業だけで9月までの約6カ月の期間かかって終了した。終了後は引き続き図版の作成とキャプションの書き込みを行った。その後、最終的な点検を経てすべて終了したのは平成6年2月である。

一方、写真図版の作成は年度当初から専属の作業員を1名配置して進めたが、昨年度内にすべて撮影が済んでいた遺物関係の図版作成から作業を開始することとした。ほとんどの写真は縮尺約2分の1で焼き付けをしていたが、余白の切り抜きをした後、出土した遺構毎に登録台帳に記載される遺物番号にあわせて台紙に張り付けた。さらに、オーバーレーでカバーしキャプションの書き込みを行った。遺構の写真は、現場で撮影したフィルムの中から状態のいいフィルムを選択して、不要部分をトリミングした後必要なサイズに引き伸ばして使用した。引き伸ばした写真は必要なサイズにカットして台紙に張り付け、オーバーレーでカバーをしたうえキャプションの書き込みを行った。

以上、報告書の編集に伴う一連の作業について記したが、既述のとおり検出された遺構や出土した遺物が多量であったため、これらの作業が必ずしも順調に進んだのではない。種々の問題点を解決しながら進め、整理・報告書編集にあてた2年間をフルに使ってやっと終了したというのが担当者としての実感である。

IV. 縄文時代の遺構と遺物

1. 住居跡

当遺跡の調査では、縄文時代の住居跡は1棟検出されたのみである。

(1) AXIu 20 住居跡

〔遺構〕(第11図、写真図版11)

調査範囲の最東端に近い AXIu 区に位置し、最東端まで約 130 m の距離がある。この地区は調査時まで墓地や林などの荒蕪地であったことと、表土が薄くさらに黄褐色火山灰の堆積も薄かったことから遺構の残存状況は不良である。西壁で AXIu 20 陥し穴状遺構と重複するが、当住居跡の古いことが確認されている。

長径約 3.3 m、短径約 2.8 m の規模を持ち、平面形は長軸が磁北に対して約 50 度偏する倒卵形に近い楕円形を示す。壁高は数 cm の高さが確認されたのみで全体として残存状態が悪く不規則である。

床面の中央やや東よりに焼土が検出され、炉跡と確認された。焼土は約 25 cm × 20 cm の広がりを持ち、厚さは約 3 cm ほどあり強く長期にわたる加熱を受けたことを示している。炉の形態は地床炉であり特に特別な施設はない。柱穴や壁溝は検出されていない。

埋土は表土に近似した暗褐色土が堆積し、単層である。埋土の状況からみて自然埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第1図、写真図版30)

埋土や床面直上から5点の同一個体と推定される土器片が出土している。いずれも縄文のみを付す粗製土器の体部破片である。104・105とも器表に0段多条による原体を斜方向回転による単節斜行縄文が付されている。胎土は小礫が混在してやや粗く、色調は淡い黄褐色である。縄文以外の文様を持たないことから時期の特定は困難であるが、観察される胎土と縄文の特徴から中期末頃の土器である可能性が考えられる。

〔遺構の時期〕

出土した土器の特徴が中期末の特徴に近似していることから、この住居跡も中期末頃に属すると推定できる。

2. 土坑

当遺跡の発掘調査によって土坑類が総数で307基検出されているが、この中には貯蔵穴状の一般的な土坑だけではなく、陥し穴状遺構や土坑墓、炭窯の他、性格の確定できない土坑など

各種の土坑が含まれている。さらに、遺物が共伴して出土した例が少ないことから、所属時期の確定に難点を残していることから、縄文時代から近現代までを含む可能性が考えられる。

以上の状況から、縄文時代に属する土坑としたのは、形状、埋土の状況、出土遺物と出土の状況などを基にして判断した。

(1) DIu25 土坑

〔遺構〕(第12図、写真図版12)

調査範囲の西端に位置するDI区東端で北西に面する段丘崖沿いに立地し、南に位置するDIw25土坑とは約8.5mの距離がある。他遺構との重複はない。

開口部が径約1.4m×1.1m、底面は径約1.4m×1.3mの規模を持ち、開口部・底面とも円形をなす。深さは約90cmほどあり、断面形は底面から約49cm上位に径約90cmの最小径を持つ鼓形に近いフラスコ形である。

埋土はすべて黒色や褐色系のシルトであるが、混入物の違いによって7層に細分される。1・2層には植物の根が混じり、3層と6・7層には褐色土がブロック状に混入している。また、層によって硬軟の差があるという特徴がある。5層が壁面の崩壊による堆積と推定されることから、自然堆積によって埋没した土坑と考えることができる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

平面形が円形、断面形がフラスコ形という形状は縄文時代土坑の典型的な特徴であるとともに、埋土の堆積状況から縄文時代の土坑と判断したが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

(2) DIw25 土坑

〔遺構〕(第12図、写真図版12)

調査範囲最西端のDI区に位置し、DIIx2土坑-2とは南東に約10mの距離がある。当土坑はかつての作場道の中で検出されたが、当土坑の方が古い。

開口部が径約68cm×65cm、底面が径約78cm×75cmの規模を持つ円形を示す土坑であり、深さは斜面上位の最深部で約65cm、斜面下位の浅い部分で約35cmである。断面形は底面から約40cm上位に最大径を持つ魚籠形に近似したフラスコ形である。

埋土はシルトであるが上位層ほど砂質となる傾向があり、粘性の程度と色調等により11層に細分される。1層から6層までは黒色か黒褐色の粘性のある砂質シルトに地山や黒色土の小ブロックが混入し、7層から下位は色調に差はないものの粘性が強く他の土を殆ど混入しない

特徴がある。各土層の堆積状況が水平堆積であることから自然堆積で埋没した土坑と推定できる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の堆積状況や、断面形を主とする形状の特徴から縄文時代の土坑と判断したが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

(3) DⅡ×2 土坑-2

〔遺構〕(第12図、写真図版12)

調査範囲の西端から東へ約30mのDⅡ区に位置し、DⅡs8土坑とは北東に約30mの距離がある。当土坑はDⅡ×2住居跡の床面中央部と重複するが、床面の精査中に検出されたことから当土坑が古い遺構である。

検出面での開口部径は約95cm×85cm、底面が約径65cm×60cmの規模があり、平面形は開口部・底面とも楕円形である。深さは底面中央部の最深部で約50cmであり断面形は底面の上位約30cmに約65cmの最小径があり、僅かな括れを持つフラスコ形である。

埋土は11層に細分されているが、土性は色調や混入物に若干の違いこそあれすべてシルト質の土であり共通している。色調は黒褐色が主体のほか黒色があり、土性は上層がシルト、下層は粘土質シルトである。混入物は地山の小ブロックや炭化物などである。堆積状況の観察では、1層から3層までの堆積とその下位とは堆積の異なっていることがわかり、下層は自然堆積、上層は人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複関係や形状、埋土の堆積状況から縄文時代の土坑としたが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

(4) DⅡs8 土坑

〔遺構〕(第12図、写真図版12)

調査範囲の西端から65m東方のDⅡ区の西端よりDⅡt12土坑-1の西約15mに位置する。DⅡs8住居跡の南隅部と重複するが、住居跡床面精査中の検出であることから、当土坑の方が古い遺構である。

検出面の開口部径約65cm×60cm、底面径約80cm×75cmの規模があり、平面形は検出面・

底面とも突辺隅丸方形気味の楕円形をなす。深さは上部の住居跡床面から約60cmほどあり、もし住居跡による削平がなければ約90cm位の深さであったと推定できる。断面形は、開口部と底面の差があまりなく、底面付近だけが外方に僅かに張り出すピーカー形である。

埋土は全体が5層に細分されるものの、色調はいずれも黒褐色と差がなく、混入物の違いによって細分されている。1・2・4・5層には地山の黄褐色土が混入し、その多少の量によって細分され、3層には炭化物が混在する。堆積状況を観察すると、4層は壁面の崩落による堆積と考えられることや、その上層の堆積状況などから、自然堆積で埋没した土坑と推定される。

〔遺物〕(第1図、写真図版301)

埋土の最上部から須恵器の破片が3点出土している。器種はいずれも坏であるが、3046と3047は体部から底部を残す破片であるが、3048は高台付坏の高台部の破片である。3点ともロクロ成形され、前2点の底部のロクロからの切り離しは回転糸切り離し無調整である。いずれも平安時代に属し、9世紀末から10世紀頃の製品と推定される。

〔遺構の時期〕

出土した遺物はすべて平安時代の須恵器坏であるが、重複する遺構が平安時代の住居跡であることから考えると、出土した須恵器はこの住居跡に伴う可能性があり、ここでは形状と埋土の状況から縄文時代の土坑と判断したが、時期の特定はできない。

(5) DII t12 土坑-1

〔遺構〕(第13図、写真図版13)

調査範囲西端から73m東のDII区の北西より、DIII r11土坑の西73mに位置する。DII s11住居跡-2とDII t13住居跡と重複するが、前者のカマドが本土坑の上に構築され、さらに後者は当土坑を削平して構築されていることから、当土坑がもっとも古い遺構である。

検出面の開口部径が約1.5m×1.1m、底面の径が約1.2m×1.1mの規模があり、平面形は開口部、底面ともに楕円形をなす。深さは住居跡の床面から約60cm、住居跡の東壁上面から約90cmあり、住居跡の削平がなければ約1m位の深さがあったものと推定される。断面形は底面から40cm上位までが外方に張り出し、その上位はやや外傾するフラスコ形を示す。

埋土の色調はすべて黒褐色であるが、層によって微妙に異なることと混入物に差があり、12層に細分されている。3層から下位の土層はすべて粘性のあるシルトであるが、1・2層には粘性がほとんどない。また、2・3・4・6・10・12の各層には炭化物が混入し、さらに焼土粒も混在する層が多い。7・8・11層には地山の黄褐色土が混入し他の土層と様相を異にしている。土層図の中に観点の入った層が本土坑の上に被っているが、この層は住居跡の貼り床の層であり、さらにこの同等層は5・6・9層に続き住居跡の床面は6層の上面である。このことは本土坑の上に住居跡を構築したものの、踏みしめによって床が沈み込んでしまい、さ

らに2・3・4・5・12で新たに嵩上げをして貼り床されたことを示している。堆積の状況を観察すると土層が水平的な堆積を示す層理であることから、自然堆積で埋没した土坑と言えよう。

(遺物) (第1図、写真図版301)

6層より上位層内からのみ土師器や須恵器の破片が出土している。3049～3051はロクロ使用成形された土師器坏であり、いずれも内面がミガキ後黒色処理され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。3049の内面ミガキは、最初底部から体部の上部に向かう放射上に磨かれた後体部の上位が横方向に磨かれる。3052～3054はロクロ成形された須恵器坏であるが、土師器の坏同様底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。3055はロクロ成形された土師器の小型壺であるが、口縁端部に外方に張り出す鐔状の突帯を巡らせた、いわゆる羽釜といわれる器形である。このような土師器と須恵器の共存を示す様相は10世紀前半頃の組成と言えよう。

(遺構の時期)

出土した遺物はいずれも平安時代に属するが、出土した層位が上位に重複する住居跡の埋土部分と貼り床部分に限定されることから、これらの遺物は本来は住居跡に共存する遺物と判断し、本土坑は形状と埋土の状況から縄文時代の土坑とした。

(6) DⅢr11土坑

(遺構) (第13図、写真図版13)

調査範囲西端部から約136m東のDⅢ区のほぼ中央に位置し、DⅢr12土坑とは約3mの距離がある。DⅢr11陥し穴状遺構とDⅢq9溝跡と重複するが、本土坑が溝跡に掘削され、陥し穴状遺構を掘削しているという新旧関係にある。

開口部が径約1.2m×1.1m、底面の径が約1.4m×1.2mの規模があり、平面形は開口部・底面ともに楕円形をなす。深さは検出面から約65cmほどあり、断面形は底面から約50cm上位に径約1mの最小径をもつフラスコ形である。

埋土は全体が13層に細分されているが、色調で見る限り褐色から黒褐色まで差があるものの黒褐色を主体とし極端な違いはみられない。土性はすべてシルトであるが、全体として粘性があり、一部に地山の小粒子を混入する層がある。土層の堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

(遺物)

遺物の出土はない。

(遺構の時期)

埋土の堆積状況と特徴、形状などから縄文時代の土坑と判断した。

(7) DⅢq 12 土坑

〔遺構〕(第 13 図、写真図版 13)

調査範囲西端部から約 137 m の DⅢ区 のほぼ中央に位置し、DⅢr 13 土坑とは約 5 m の距離がある。他遺構との重複はない。

開口部径が約 1.5 m × 1.3 m、底部の径は約 1.5 m × 1.4 m の規模があり、平面形は開口部・底面ともに楕円形をなす。深さは検出面から約 1.1 m あり、断面形は底面から 80 cm 上位に約 1.1 m の最小径をもつフラスコ形である。

埋土はすべてシルトであるが、色調や混入物の違いによって 17 層に細分される。色調は黒色から明黄褐色まで差があるものの、黒色から黒褐色といった黒色系と褐色から明黄褐色までの褐色系の色調に大別されるが、全体としてみると後者の方が多い。また、下層は粘性をもつ場合が多いのも特徴であり、さらに全体として地山黄褐色土粒の混入が多い。自然埋没と考えられる。

〔遺物〕

遺物は出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の堆積状況や特徴から縄文時代の土坑と判断した。

(8) DⅢr 13 土坑

〔遺構〕(第 13 図、写真図版 13)

調査範囲西端部から約 140 m 東によった DⅢ区 のほぼ中央に位置し、DⅢt 13 土坑とは北へ約 6 m の距離がある。本土坑は DⅢr 12 古墳の主体部と重複しており、土坑の上部が古墳を構築する際に削平を受けている。

検出面の開口部は径約 1.5 m × 1.2 m、底面は径約 1.5 m であり、検出面の平面形は楕円形であるが、底面はほぼ正円に近い円形を示す。検出面からの深さは最深部で約 70 cm ほどであるが、底面の中央部が壁際より約 15 cm 低くなっている。断面形は南北方向は壁がほぼ垂直に近い状況をなすが、東西方向のそれは底面中央から約 40 cm 上位に径約 90 cm の最小径を持つフラスコ形であることから、本来は断面がフラスコ形を示す土坑であるが、南北方向の壁は崩落した可能性がある。

埋土はいずれもシルトであるが、混入物と色調によって 7 層に分けられる。色調は褐色と暗褐色を主とし一部に黒褐色の土層を挟み、ほとんどの土層が粘性をもつ。混入物は地山の褐色や黄褐色の塊や小粒子が主であり、一部に炭化物の混在する例もある。特に、4 層と 7 層は壁が崩落した地山土と思われる。自然埋没と推定される。

〔遺物〕

遺物の出土はない。

〔遺物の時期〕

重複関係と形状、埋土の堆積状況から縄文時代の土坑と判断した。

(9) DⅢt13 土坑

〔遺構〕(第14図、写真図版14)

調査区の西端部から約138mほど東のDⅢ区のほぼ中央部に位置し、DⅢs14土坑とは約5mの距離がある。DⅢt13古墳の周濠部と重複するが、本土坑のほうが古い遺構である。

規模は開口部径が約1.5m×1.2m、底面の径が約1m×95cmであり、平面形は検出面・底面ともに楕円形を示す。深さは検出面から底面中央部まで85cmほどあり、断面形は底面から60cm位上位に径約1.2mの最小径をもち、上部が外方にやや開き、下位が外方に張り出すフラスコ形をなす。

埋土はシルトと砂質シルトの堆積であり、色調には黒褐色を主体に暗褐色と褐色がある。1層以外はいずれも粘性があり、堆山質の褐色土小粒子を混入する層が多い。埋土の堆積状況の観察から、自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第1図、写真図版301)

埋土の下位から小型土器の底部破片が1点(106)出土している。文様はまったく付されていないが、胎土が粗くさらに焼成の状態などが古代の土師器とは異なることから縄文時代の土器と推定されるものの、時期の特定はできない。

〔遺構の時期〕

縄文時代と推定される土器の出土と、遺構の形状や胎土の状態などから縄文時代の土坑と推定されるが、時期の特定はできない。

10 DⅢs14 土坑

〔遺構〕(第14図、写真図版14)

調査範囲の西端から約145m東によったDⅢ区のほぼ中央に位置し、DⅢm22土坑とは北東約42mの距離がある。DⅢq9溝跡と重複するが、本土坑が溝跡に削平を受けており、本遺構の方が古い。

開口部の径が約1.6m×1.35m、底面の径約1.1m×1mの規模があり、平面形は開口部・底面ともに楕円形を示す。深さは検出面から約1mあり、断面形は壁面に多少の起伏はあるものの、総じて開口部が外方に向かって開いており、広義のピーカー形かバケツ形に近い形状である。

埋土は14層に細分されているものの、土性はいずれもシルトと差がなく、色調も黒褐色を示

す層が大半であるなど大差のない土層である。混入物では、礫を含む層を挟在することは特徴的であるが、他に壁面の崩落と推定される地山質の黄褐色土を含む層も観察される。土層や土性などから人為的に何回かに及ぶ埋め戻しで埋没した土坑と推定される。

〔遺物〕

遺物の出土はない。

〔遺構の時期〕

重複関係と形状、埋土の堆積状況から縄文時代の土坑と判断した。

01) DⅢm 22 土坑

〔遺構〕(第 14 図、写真図版 14)

調査範囲西端から約 214 m 東によった DIV 区境から西約 10 m に位置し、DⅢm 29 土坑とは東に約 5 m の距離がある。他の遺構との重複もなく単独で所在する。

当土坑は検出面では浅く広い一見堅穴住居跡状遺構的であるが、西壁沿いに断面フラスコ形の土坑をもつことから取り敢えず土坑として扱うこととした。

検出面の浅く広い部分は、約 2.2 m × 1.95 m、深さ約 15 cm ほどの規模があり、平面形は不整ではあるが長方形的な形状である。壁の立ち上がりを観察すると、西洋皿的に外方に大きく開き、住居跡のそれとは異なる。また、床面も西部壁よりが約 5 cm ほど低くなる 2 段床構造になるものの、面としてはほぼ平坦である。深い土坑部分は開口部径約 90 cm × 70 cm、深さは浅い部分の底面から 80 cm 位あり、平面形は開口部・底面ともに楕円形、断面形は底面付近の両壁が大きく外方に張り出しており、底面の上位約 50 cm に径 60 cm の最小径をもつフラスコ形である。

埋土は、10 層以外は黒褐色か黒色のシルトが堆積し、上位層には炭化物が、下層には地山起源の黄褐色や明黄褐色のシルトや砂質シルトが混入する。堆積状況をみると、浅い部分と深い部分が一体的に堆積し埋没していった様相を示すが、遺物の出土では浅い部分と深い部分が異なる遺構である可能性が強いものの、全体的にみれば自然堆積による様相と言えよう。

〔遺物〕(第 2 図、写真図版 301・302)

4 層と 5 層から集中的に土師器の破片を主体にその他須恵器の破片が 1 点出土している。すべてクロロ不使用成形の製品で器種には坏と甕がある。3056～3060 は坏であるが、前 3 点は口縁部、後 2 点は底部と体部から底部を残す破片である。器表は口縁部がミガキ、底部はナデやミガキで調整される。内面はすべて全面ミガキ調整された後黒色処理される。3060 は口縁部と体部の境の 2ヶ所に明瞭な段を付し、対応する内面にも明瞭な段を持つ。3061～3071 は甕の破片であるが、3 点が口縁部、5 点が体部下位から底部、2 点が体部の破片である。器表の調整は、口縁部がミガキやナデ、体部はナデやハケメ、底部がナデである。推定される器形は、

口縁部は長くなり、体部は比較的膨らみが大きく、底部付近で大きく窄み、底部は外方に突出するベタ高台状となる。

〔遺構の時期〕

出土した土師器は推定される器形と特徴から7世紀前半代に属すると考えられるが、出土した層位が埋土の上層であることと、深い土坑部分の断面形や埋土の状況は縄文時代の特徴を示しており、この土坑は浅い部分と深い部分が重複する別々の遺構である可能性が強いことから、深い土坑部分は縄文時代の遺構と判断したものである。

⑫ DⅢn 23 土坑

〔遺構〕 (第15図、写真図版15)

調査範囲の西端から約220m東によったDIV区との境付近に位置する。他遺構と重複することなく単独で立地し、DⅢv 25土坑とは南に約48mの距離がある。

検出面での開口部径は約1.1m×1.1m、底部の径が約1.5m×1.4mの規模があり、平面形は開口部、底面ともに楕円形を示す。深さはもっとも深い中央部で約75cmほどあり、断面形は検出面の下位約10cmに径約80cmの最小径を持つフラスコ形であるが、壁と底面の接点がかもとも深い底面中央より約20cmほど上位に位置し、底面が緩い円弧状を示す。

埋土はいずれもシルトであるが、色調と混入物によって8層に細分されている。色調は黒色、黒褐色、褐色であるが、黒褐色が示す層がかもとも多い。混入物は5層で確認されているが、混入物の種類としては礫、炭化物、地山質の黄褐色土粒などがあり、多様である。堆積状況の観察によると、各土層がレンズ状に堆積することから、自然堆積で埋没した土坑と言えよう。

〔遺物〕

遺物は出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の堆積状況から縄文時代の土坑とした。

⑬ DⅢv 25 土坑

〔遺構〕 (第15図、写真図版15)

調査範囲西端から約225m東、DIV区との境付近に位置し、DIVj 4土坑は北東に約50mの距離がある。本土坑はDⅢv 25住居跡と重複し床面の下位から検出され、住居跡の床面が貼り床されていたことから、住居跡より古い遺構である。

検出面の開口部は径約85cm×86cm、底面の径約1m×1mの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは重複する住居跡の床面から約50cmあり、断面形は底面の約45cm上位に約75cmの最小径を持つフラスコ形である。底面と壁の接点は丸くなる。

埋土はすべてシルトであるが敷地用と混入物で5層に細分される。色調は黒色と黒褐色をなすが後者が主体をなし、混入物には黄褐色土粒や炭化物、砂礫などがあり、砂粒や礫を混在する例が多い。堆積状況の観察から自然堆積によって埋没した土坑と推定される。

〔遺物〕

遺物の出土はない。

〔遺構の時期〕

重複関係と形状、埋土の堆積状況から縄文時代の土坑と判断したが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

04 DIVj4 土坑

〔遺構〕(第15図、写真図版15)

調査範囲の西端から東へ約236mのDIV区西端に位置し、DIVe10土坑-1は北東に約34mの距離がある。他の遺構と重複することもなく、単独で検出された。

検出面の開口部径約1.15m×1.05m、底面の径が約1.2m×1.15mの規模があり、平面形は開口部・底面とも楕円形を示す。検出面からの深さは最深部で約50cmあり、断面形は底面から約35cm上位に最小径を持つフラスコ形をなす。壁面の底面よりは外方に丸みをもって張り出し、魚籠に近い断面形とも言えよう。

埋土は、全体が8層に細分されているものの、土性はいずれもシルトであり色調と混入物の違いによって細分されている。色調は褐色と暗褐色・黒褐色が交互に堆積する様相を示し、炭化物や礫などが混在する。堆積の様相をみると、2層の下位面を境に堆積の様相を異にしており、人為的に埋め戻された可能性が推定される。

〔遺物〕(第1図、写真図版302)

土師器の破片が2点(3073・3074)出土している。いずれも甕の体部破片であり、器表がケズリ、器裏はナデの痕跡を残している。小破片のため断定できないが平安時代に属すると推定される。

〔遺構の時期〕

出土した遺物は検出面からの出土であり、当土坑に直接伴わない可能性があることから、形状と埋土の特徴から縄文時代の土坑と判断した。

05 DIVe10 土坑-1

〔遺構〕(第15図、写真図版15)

調査範囲西端から約264m東によったDIV区ほぼ中央に位置し、DIVc9住居跡とは南に約3mの距離がある。他遺構との重複もなく、単独で検出された。

検出面での開口部径は約 80 cm × 65 cm、底面の径は約 80 cm × 70 cm の規模があり、平面形は検出面の開口部・底面とも楕円形を示す。検出面から底面まで約 40 cm の深さがあり、全体として小規模な土坑と言えよう。断面形は底面の上位約 30 cm に径 65 cm の最小径を持つラスコ形であるが、底面よりの壁面は外方に丸く張り出す形を示し、魚籠形に近い形状である。

埋土はいずれも粘性のあるシルトであり、色調も黒色と黒褐色である。自然堆積によって埋没した土坑と推定される。

〔遺物〕(第 1 図、写真図版 302)

埋土最上部から土師器坏の破片 1 点 (3075) と須恵器坏 1 点 (3076) の 2 点が出土している。前者は底部下位から底部を残し、ロクロ成形され内面がミガキ後黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切り離しであり、高台が剥落した痕跡を残している。後者は、前者同様体部下位から底部を残し、ロクロ成形され底部が回転糸切り離しされた個体である。このような特徴から 2 点とも平安時代の前期に属するであろう。

〔遺構の時期〕

平安時代前期の土師器と須恵器を出土しているが、出土層位が検出面に近い最上層であることから確実な共伴とするには問題があり、形状と埋土の状況から縄文時代の土坑とした。

3. 陥し穴状遺構

当遺跡の発掘調査では、調査範囲西端の D I 区から東約 280 m の DIV 区中央までと、DVI 区から DV 区区までの約 300 m 間に多くの陥し穴状遺構が検出されている他、DV 区と DXI 区にも若干分布し、全体で 133 基検出されている。これらの遺構は他の遺構と重複したり、単独で検出されたり、分布の仕方は多様である。しかし、検出される他の遺構はその殆どが平安時代などに属する例が多く、陥し穴状遺構の方が重複する遺構より新しい遺構と確認された例はないことから、当報告書では当該遺構をすべて縄文時代に属する遺構として記載している。

陥し穴状遺構と認定した遺構には、主に検出面や底面の平面形から、円筒形型 90 基・溝状形型 14 基・長方形型 29 基の 3 種類あり、本項では底面の平面形によって項を分けている。

1) 円筒形型

本遺跡で検出された陥し穴状遺構のうち、この型がもっとも数多いことは既に記したとおりであるが、分布状況を見ると特にある地点に密集するといった特異的な状況はまったく見られず、陥し穴状遺構が分布する範囲全域に万遍なく散在する。しかし、検出数を見ると調査区西部と中央部に多く分布していることもまた事実である。以下では調査区西端部から個別に既述する。

(1) E I a 24 陥し穴状遺構-1

〔遺構〕(第15図、写真図版16)

調査範囲西端から約17m東でEⅡ区との境付近に位置し、E I a 24 陥し穴状遺構-2とは南東に約2mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面での開口部は径約1.05m×1m、底面が径約70cm×65cmの規模があり、平面形は検出面、底面ともほぼ円形である。検出面からの深さは、もっとも深い中央部で約1.3mほどあり、断面形は上部が外方に開くもののはぼ円筒形に近い形状を示し、底面の副穴はない。

埋土は調査の手違いから土層図を作成しなかったことにより明確でないが、調査時の記録によれば、層によっては砂質であるがすべてシルトが堆積し、色調は上部はほぼ黒褐色であるが下部には壁の崩落に伴うと推定される地山起源の黄褐色土の堆積を挟在する。しかし、層相は単純であり自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、埋土の土性や堆積状況から縄文時代の遺構と考えられるが時期の特定はできない。

(2) E I a 24 陥し穴状遺構-2

〔遺構〕(第16図、写真図版16)

調査範囲の西端から東に約19mよったEⅡ区との境付近に位置し、E I b 25 陥し穴状遺構は東に約4mの距離がある。他遺構と重複することなく単独で検出された。

検出面での開口部は径約1.4m×1.3m、底面径は約1m×90cmほどの規模があり、底面ほぼ中央に径20cmほど、深さ20cm位の副穴がある。平面形は開口部、底面ともに円形である。深さは約1mあり、断面形は壁面のほぼ中に90cmほどの最小径を持つフラスコ型に近い形状であるが、最小径の部分から上位が大きく外方に開き、さらに底面付近の壁が外方に張り出す鼓型に近い形である。

埋土は6層に細分されているが、土性はシルトであるが上層が砂質で下層が粘土質である。色調は上層ほど黒色であり、下層は黒褐色か褐色である。堆積状況の観察から自然堆積による埋没である。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から縄文時代の遺構と考えられるが、遺物の出土がないことから時期の特

定はできない。

(3) E I b 25 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 16 図、写真図版 16)

調査範囲西端部から東へ約 23 m 離れた E II 区との境付近に位置し、D II y 1 陥し穴状遺構とは北北東に約 8 m の距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径約 1.1 m × 1 m、底部径が長径・短径とも約 60 cm、深さは検出面から約 1.1 m の規模である。平面形は開口部・底面とも正円に近い円形を示し、断面形は検出面から約 30 cm 下位から底面までの壁はほぼ垂直になる円筒形であるが、上位は外方に向かって大きく開いている。さらに底面の中央やや南西寄りに径 20 cm × 10 cm、深さ 20 cm の副穴がある。

埋土上層は砂質シルトかシルトであるが、下層は粘土質のシルトである。しかし、色調は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色など多様であり、層によって差が大きい。堆積状況の観察では、人為的な様相はまったく見られず、自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の堆積状況と形状から縄文時代の遺構と考えられるが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

(4) D II y 1 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 16 図、写真図版 16)

調査範囲西端部から約 26 m 東によった D I 区との境付近に位置し、E II y 1 陥し穴状遺構-1 は真南に約 5 m の距離がある。D II x 1 住居跡の他、D I x 23 溝跡と重複するが、当遺構がもっとも古い遺構である。

検出面の開口部径は約 60 cm × 60 cm、底面の径も開口部のそれと同じ約 60 cm × 60 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ正円に近い円形をなす。深さは約 1.1 m ほどあり、断面形は相対する壁がほぼ垂直に近い円筒形を示し、底面の副穴はない。

埋土の上層は重複する溝によって削平されているが、全体が 13 層に細分されている。土性で見ると、上部は砂質シルトで下部は粘土質シルトと粘性に若干差がある。色調で見ると、黒色から黄褐色まで差が見られ、薄層で土色に微妙な違いである。土層の状況を観察すると、自然堆積で埋没した遺構と言えよう。

〔遺物〕(第 1 図、写真図版 302)

住居跡との重複部分で土師器の坏と小型の甕の破片と須恵器大甕の体部破片が出土してい

る。土師器環(3078)は体部下端から底部の一部を残存する破片であり、ロクロ使用成形され底面に回転糸切り離しの痕跡を持ち、内面はナデ後黒色処理される。同小型甕(3077)はロクロ使用成形され、底面に回転糸切り離しの痕跡を持つ。須恵器(3080・3081)はすべて大甕の体部破片であり、外面に並行タタキ目、内面に円形無文や放射状の当て具痕を持つ。これらの遺物はすべて平安時代に属する遺物であり、出土状態からみても当遺構に直接伴う遺物とは考えられない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はあるものの、既述した理由により当遺構は縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

(5) EIIa1 陥し穴状遺構-1

〔遺構〕(第16図、写真図版17)

調査範囲西端から東へ約27mのEII区西端に位置し、EIIa1陥し穴状遺構-1とは南東に約2mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

検出面の開口部径が約1.4m×1.2m、底面径は約65cm×60cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは検出面から約1mあり、断面形は底面付近の壁面下部はほぼ並行する円筒形に近いが、その上部は外方に大きく開き、全体では漏斗状に近似している。底面での副穴はない。

埋土は、最上部に黒色土が厚く堆積しその下位は暗褐色土や黒褐色土の薄い層が交互に堆積する状況を示し、全体が8層に細分される。土性は上部は砂質シルト、中部はシルト、下部は粘土質シルトである。炭化物が混入する場合が多い。自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土と形状から縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

(6) EIIa1 陥し穴状遺構-2

〔遺構〕(第16図、写真図版17)

調査範囲西端から28mほど東によったEII区西端付近に位置し、DIIu2陥し穴状遺構は北に約25mの距離がある。他遺構との重複はない。

規模は検出面の開口部径約1.5m×1.2m、底面径が約75cm×65cmあり、検出面・底面とも楕円形の平面形を示す。深さは最深部で約1m、最浅部が約60cmと差がある。この差は、北側の底面が高くなり、底面全体が大きな傾斜を持つことによる。したがって、断面形は深い南

側の壁面中位から上部の壁が外方に大きく開く漏斗状に近い形である。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、上層は砂質であり、下層は粘土質である他、色調と混入物によって7層に細分される。色調は黒褐色や暗褐色・褐色などを示すが褐色が最も多い。自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

(7) DIIu2 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第17図、写真図版17)

調査範囲西端から31m東によったDI区よりの北向き緩斜面に位置し、DIIx2陥し穴状遺構は南に約14mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面での開口部は径約1.15m×1m、底面は径約90cm×75cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは最深部で約90cmあり、断面形はピーカー形に近い円筒形である。底面の副穴はない。

埋土は全体が6層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、層間に大きな差はない。色調は一部に黄褐色の土層があるものの、その他は黒褐色のみである。1層から4層の堆積状況が不自然ではあるが、全体としてみれば自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況や形状から縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

(8) DIIx2 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第17図、写真図版16)

調査範囲西端から約31m東のDI区よりに位置し、DIIw3陥し穴状遺構は南東に約4mの距離がある。DIIx2住居跡の北東壁と重複するが、当遺構の方が古い。

検出面での開口部径は約1m×85cm、底面の径は約60cm×55cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは検出面から約1.2mあり、断面形は開口部付近が大きく外方に開く他、底面から45cm上位の壁面が径約95cmに大きく決れるように膨らむものの、大略円筒形に近い形状である。

埋土はすべてシルトが堆積し、色調と混入物の違いで9層に細分されている。色調は黒色・

黒褐色・暗褐色・褐色などがある。土層の堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定されるが、時期の特定はできない。

(9) DIIw3 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第17図、写真図版17)

調査範囲西端から約34m東のDII区南西端に位置し、DIIx3陥し穴状遺構は南東に2mの距離がある。他遺構との重複がなく単独で検出されている。

検出面の開口部は径1.2m×1.1m、底面は径約60cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが、底面は正円に近い円形である。深さは約1.3mあり、断面形は開口部付近が外方に大きく開くものの、ほぼ円筒形に近い形状である。底面の副穴はない。

埋土は最上層に黒色土が厚く堆積する他、その下層は黒褐色土や黒色土、暗褐色土などが薄層で交互に堆積する様相を示す。土性は、上層は砂質のシルトであるが、下層ほど粘性が強くなり、最下層は粘土質シルトである。堆積状況の観察では、自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思いますが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

(10) DIIx3 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第17図、写真図版18)

調査範囲の西端から約34m東によったEII区境付近に位置し、DIIy3陥し穴状遺構-1は南に5mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は約1m×90cm、底面の径は80cm×60cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなし、特に底面の東側は大きく外方を抉り込むような形を示す。深さは約1mあり、断面形は開口部付近が外方に開く他、底部も中心が東によるなどやや変形ではあるが、フラスコ形に近い形状である。底面の副穴はない。

埋土は全体が9層に細分されているが、土性はやや粘性のあるシルトであり、全層ほぼ共通する。色調には黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色などがあり、最上層には黒褐色が厚く堆積する

ことから自然堆積によって埋没したと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から縄文時代の遺構と判断されるが、時期の特定はできない。

① DⅡy3 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第18図、写真図版18)

調査範囲西端から東に約34mのEⅡ区の境付近に位置し、EⅡa3陥し穴状遺構とは南に2mの距離がある。重複する遺構はなく、単独で検出された。

検出面の開口部は径約1.2m×1.1m、底面の径が約70cmほどの規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ正円に近い円形をなす。深さは検出面から約1.2mほどあり、断面形は開口部付近の壁が外方に大きく開くものの、ほぼ円筒形に近い形状である。底面中央やや北東よりに径10cm、深さ20cmほどの副穴が検出されている。

埋土は全体が12層に細分されるが、上層は砂質のシルト、中層はシルト、下層は粘土質シルトの堆積である。色調は黒褐色が最も多く、他に黒色・暗褐色・黄褐色などがあり、土層の観察により自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思いますが遺物の出土がないため時期の特定はできない。

② EⅡa3 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第18図、写真図版18)

調査範囲の西端から約32m東によったDⅡ区境に位置し、DⅡv4陥し穴状遺構とは北に約12mの距離があり、重複する遺構はない。

検出面の開口部の径が約1m×90cm、底面の径は約50cm×50cmの規模があり、検出面・底面とも平面形は楕円形である。深さは約1mほどであり、断面形は開口部付近の壁面が外方に大きく開く他、底面から上位40cmの壁面が壁の崩落によって、外方に径約90cm位に大きく抉れる形状を示す。底面の副穴は未検出である。

埋土はすべてシルトであるが、上位は砂質、下位が粘土質と若干差が見られ、全体が色調から8層に細分される。色調は黒褐色を主体に黒色の他、暗褐色や黄褐色がある。堆積状況を観察すると、自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と思う。

03 DIIv4 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第18図、写真図版18)

調査範囲の西端から東へ約35m東のDII区西よりに位置し、DIIv4陥し穴状遺構は南に約2mの距離があり、他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は約1.4m×1.2m、底面は径が約70cm×60cm、平面形は検出面開口部・底面とも楕円形を示す。深さは検出面から約1.3mあり、断面形は開口部付近の壁面が大きく外方に開く漏斗形に近い円筒形である。副穴は未検出である。

埋土は、調査中の不手際によって土層断面図の作成ができなかったものの、全層シルトが堆積し、下層ほど粘性が強くなる傾向が観察された。色調は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色などが観察され、薄層の互層堆積であった。堆積状況の観察では、自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と思うが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

04 DIIw4 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第18図、写真図版19)

調査範囲西端から東に約39mのDII区の南西端に位置し、DIIv5陥し穴状遺構は東に約7mの距離があり、他遺構との重複もなく、単独で検出された。

検出面での開口部径は約1.1m×1m、底面の径は約70cm×70cm位の規模があり、検出面の開口部・底面とも平面形は正円に近い円形をなす。深さは約1.1mあり、断面形は壁面のほぼ中位が80cmまで窄み、その上位と下位が外方に開く鼓形に近い形状である。副穴は検出されていない。

埋土は全体が14層に細分されるものの、土性は砂質か粘性があるかの違いはあるが全層シルトが堆積する。色調は最上層に黒色土が厚く堆積するが、その下位は黒色・暗褐色・褐色・黄褐色などのシルトが薄層の互層で堆積する様相を示し、自然堆積で埋没した状況を示している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思いますが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

09 DIIv5 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第19図、写真図版19)

調査範囲の西端から約44m東のDII区南西端に位置し、DIIw5 陥し穴状遺構は南に約3mの距離がある。他遺構との重複もなく、単独で検出された。

検出面の開口部は径約1.4m×1.4mで、底面が径約1m×1mの規模であり、平面形は検出面・底面とも大略円形に近い形状である。深さは約90cmあり、断面形は壁面の上位が外方に開くものの、その下位はほぼ円筒形に近い。底面の副穴はない。

埋土は黒褐色の砂質シルトの堆積がもっとも多いが、全体が11層に細分され、他の色調には明褐色・褐色などあり、1・2層の堆積が若干不自然ではあるが、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

09 DIIw5 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第19図、写真図版19)

調査範囲の西端から東へ約44mのDII区の南西端に位置し、DIIy5 陥し穴状遺構-1とは南に8mの距離がある。他遺構と重複がなく、単独で検出された。

検出面の開口部径は約1.7m×1.6m、底面の径が約70cm×50cmの規模があり、開口部の平面形は円形に近いが底面の平面形は楕円形である。深さは約1.1mあり、断面形は開口部付近の壁が外方に開くものの概ね円筒形と言えよう。しかし、底面よりの壁面にはやや凹凸があり不規則である。底面に副穴はない。

埋土は殆どの層が砂質のシルトであるが、色調の違いで17層に細分されている。埋土の堆積状況からみて、自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

07 DIIy5 陥し穴状遺構-1

〔遺構〕(第19図、写真図版19)

調査範囲の西端から約44m東のDII区とEII区の境付近に位置し、DIIy5 陥し穴状遺構-2は南西に約4mの距離がある。DIIx6 住居跡の南西隅部と重複するが、当遺構の方が古い遺構である。

規模は、検出面の開口部径が約1.5m×1.3m、底面の径は約90cm×85cmであり、検出面の開口部は平面形が楕円形であるが、底面はほぼ円形である。深さは検出面から約1mであるが、重複する住居跡の床面からは約70cmである。断面形はほぼ円筒形である。底面のほぼ中央には径約10cm、深さ約20cmの副穴が3基検出されている。

埋土は全体が11層に細分されているが、土性は砂質と粘土質の違いがあるものの、すべてシルトの堆積である。色調は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色などがあり、前2色が多い。堆積状況からみて自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構であろうが、時期の特定はできない。

08 DIIy5 陥し穴状遺構-2

〔遺構〕(第19図、写真図版20)

調査範囲の西端から約41m東のDII区南端に位置し、DIIx6 陥し穴状遺構とは北北東に約23mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.9m×1.7m、底面は径約1m×90cmの規模があり、検出面・底面とも平面形は楕円形を示す。深さは約1.15mあり、断面形は埋土5層が掘り過ぎであることから、開口部付近の壁が外方に開く漏斗状に近い形状である。底面の中央やや南よりに径約15cm、深さ約20cmの副穴が1基検出されている。

埋土は全体が11層に細分されているが、土性は砂質と粘土質の差はあるがすべてシルトが堆積する。色調は黒褐色が最も多く、次いで黒色があり、その他暗褐色や黄褐色などがある。堆積状況からみて自然堆積によって埋没した遺構であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため時期の特定はできないが、縄文時代の遺構であろう。

19 DII t6 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第20図、写真図版20)

調査範囲の西端から約47m東のDII区西よりに位置し、DII s7 陥し穴状遺構は北東に約7mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.6m×1.3m、底面の径は約80cm×70cmの規模があり、平面形は開口部・底面とも楕円形をなす。深さは約1.1mあり、断面形は開口部付近の壁面が外方にやや開くもののほぼ円筒形と言えよう。底面の中央やや西よりに径・深さとも約10cmほどの副穴がある。

埋土は全体が7層といずれの層も堆積が厚く、すべてシルトの堆積である。色調は黒褐色が多く、他に暗褐色と黒色がある。堆積状況からみて自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思いますが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

20 DII s7 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第20図、写真図版20)

調査範囲の西端から約52mほど東によったDII区に位置し、DII u9 陥し穴状遺構は南東に約12mの距離がある。重複遺構はなく単独で検出された。

検出面の開口部径は約90cm×90cm、底面の径が約60cm×50cmの規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ円形である。深さは最深部で約1.2mあり、断面形は底面から開口部に向かって次第に広がる傾向はあるものの、ほぼ円筒形である。底面の副穴はない。

埋土は最上層に黒色土が厚く堆積する他、その他の4層はすべて黒褐色であるが、色調に微妙な違いがある。土性はシルトである。堆積状況からみて人為的に埋め戻されている可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思いますが、遺物の出土がないため時期の特定はできない。

20 DIIu9 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第20図、写真図版20)

調査範囲の西端から東に78mのDII区西よりに位置し、DIIu10陥し穴状遺構は東に2mの距離がある。重複遺構はない。

規模は、検出面の開口部が径約1.5m×1.4m、底面は径約1m×90cmであり、平面形は検出面が楕円形であるが底面はほぼ円形に近い形状である。深さは約90cmあり、断面形は壁面のほぼ中位から上部が外方に大きく開く漏斗形に近い形状である。底面の副穴はない。

埋土は全体が7層に細分されるが、土性はすべてシルトと大差はない。色調は黒褐色・暗褐色・黒色があり、最上層の1層は黄褐色である。堆積状況の観察から自然堆積で埋没した遺構と言えよう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定されるが、時期の特定はできない。

21 DIIu10 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第20図、写真図版21)

調査範囲西端から約60m東によったDII区西よりに位置し、DIIu11陥し穴状遺構とは東北に6mの距離がある。DIIu10住居跡の南西隅部と重複するが、当遺構の方が古い遺構である。

検出面の開口部の径は約1.15m×1.1m、底面の径は約70cm×40cmの規模であり平面形は検出面・底面ともに楕円形である。深さは約90cmあり、断面形は壁面が不規則であるが漏斗形に近い形状である。底面の副穴はない。

埋土は最上層に黒褐色土が厚く堆積するが、その下層の堆積が不規則であり、全体が6層に細分される。土性はシルトであり、色調は黒褐色・暗褐色・黄褐色がある。堆積状況から自然堆積による埋没とは考えられず、人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕

遺物の出土はない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構であろう。

22 DIIu11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第21図、写真図版21)

調査範囲の西端から東約 65 m の DII 区中央付近に位置し、EIIa 11 陥し穴状遺構は南に約 21 m の距離がある。DIIu 11 住居跡の北西隅部と重複するが、当遺構の方が古い。

規模は検出面の開口部で約 1 m × 70 cm、底面の径は約 70 cm × 40 cm ほどであり、平面形は検出面・底面ともほぼ正円に近い円形を示す。深さは約 1.1 m あり、断面形は開口部付近の壁面が大きく外方に向く漏斗形に近い形状である。副穴はない。

埋土は上位は砂質、下位は粘土質と差があるものの、すべてシルトが堆積し、全体が 10 層に細分される。色調には黒色・黒褐色・暗褐色の他、黄褐色もある。堆積状況の観察によると、自然堆積による埋没とはいえず、人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定されるが、時期は特定できない。

20 EIIa 11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 21 図、写真図版 21)

調査範囲の西端から東 66 m の EII 区の DII 区よりに位置し、EIIb 11 陥し穴状遺構は南に 1.5 m の距離がある。南壁が EIIb 11 陥し穴状遺構の北壁と接しているが、新旧関係は不明である。

規模は、検出面の開口部径が約 1.5 m × 1.4 m、底面の径が約 90 cm × 80 cm であり、平面形は検出面・底面ともに楕円形である。深さは約 1 m あり、断面形は壁の上位が次第に開くバケツ形に近い形状である。底面のほぼ中央に径約 20 cm × 15 cm、深さ 20 cm の副穴が 1 基検出されている。

埋土は全体が 10 層に細分されているが、上層が砂質シルト、下層が粘土質という違いはあるものの、全層がシルトの堆積である。色調には黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色等があり、前 2 者が多い。土層で堆積状況を観察すると、自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため時期の特定はできないものの、縄文時代の遺構と考えられる。

25 EIIb 11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 21 図、写真図版 21)

調査範囲の西端から約 66 m 東によった EII 区の DII 区よりに位置し、DIIr 12 陥し穴状遺構

は北に 33 m の距離がある。EⅡa 11 陥し穴状遺構の南壁と接するが、新旧関係は定かでない。

検出面の開口部径は約 1.4 m × 1.2 m、底面の径が約 60 cm × 50 cm ほどの規模があり、検出面・底面とも平面形は楕円形である。深さは検出面から約 60 cm ほどあり、断面形は浅く皿形に近い。底面のほぼ中央に径約 25 cm、深さ 30 cm の副穴がある。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、上層が砂質で下層が粘土質という差があり、色調などから 10 層に細分されている。色調は黒色・黒褐色・暗褐色などがある。堆積状況の観察により自然埋没であろうと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思うが、時期の特定はできない。

⑥ DⅡr 12 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 21 図、写真図版 22)

調査範囲の西端から約 71 m 東の DⅡ区ほぼ中央に位置し、DⅡs 12 陥し穴状遺構は南に 5.5 m ほどの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は約 90 cm × 70 cm、底面の径は約 70 cm × 70 cm 位あり、検出面・底面とも平面形は円形に近い楕円形である。深さは約 1.1 m あり、断面形は底面よりの壁面が外方に次第に張り出す円筒形に近い形状である。底面に径約 5 cm、深さ約 25 cm の副穴がある。

埋土は 3 層に細分されているものの、色調はいずれも黒褐色であり微妙な違いである。特に 3 層は底面からほぼ垂直に近い形で検出面に伸びており、他の土層とは堆積の状況が異なっている。この状況は、おそらく逆茂木を設置した痕跡ではないかと推定されることから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

⑦ DⅡs 12 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 22 図、写真図版 22)

調査範囲の西端から約 71 m 東によった DⅡ区ほぼ中央部に位置し、EⅡa 12 陥し穴状遺構とは南に 28 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約 70 cm × 70 cm、底面の径は約 50 cm × 50 cm の規模があり、平面形は検

出面・底面ともにほぼ正円に近い円形である。深さは約1 mあり、断面形は底面より検出面がやや広いもののほぼ円筒形に近い形状である。底面に副穴はない。

埋土は3層に細分されるが、3層は底面から検出面まで続いており、逆茂木の存在を推定させる。土性は3層とも黒褐色のシルトである。一部は人為的な埋め戻しを推定させる堆積状況である。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定できるが、時期の特定はできない。

20 EⅡa 12 陥し穴状遺構-1

〔遺構〕(第22図、写真図版18)

調査範囲の西端から約71 m東のEⅡ区のDⅡ区よりに位置し、EⅡa 12 陥し穴状遺構-2とは北東に1 mの距離がある。重複遺構はない。

検出面の開口部径は約1.2 m×1.2 m、底面約の径は75 cm×65 cmの規模があり、平面形は検出面・底面ともにほぼ円形である。深さは約90 cmほどあり、断面形は開口部が底面より大きく広がるバケツ形に近い形状である。底面の中央やや南西よりに径約15 cm、深さ20 cmの副穴がある。

埋土は全体が14層に細分されているが、土性は砂質と粘土質の差はあるが、すべてシルトの堆積である。色調には黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等があり、黒色と黒褐色が多い。堆積状況の観察では自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定できるが、時期の特定はできない。

21 EⅡa 12 陥し穴状遺構-2

〔遺構〕(第22図、写真図版22)

調査範囲の西端から約72 m東のEⅡ区のDⅡ区よりに位置し、DⅡy 13 陥し穴状遺構とは北東に2 mの距離がある。重複する遺構はない。

規模は、検出面の開口部径が約1.1 m×1.1 m、底面の径は約75 cm×65 cmほどであり、検出面の平面形は円形であるが、底面は楕円形である。深さは検出面から85 cmほどあり、断面形は西壁の上位が外方に大きく開くものの、その下位と東壁はほぼ垂直となる円筒形である。底面

のほぼ中央には径約15 cm×10 cm、深さ約30 cmの副穴がある。

埋土は全体が8層に細分されているが、土性は上層が砂質、下層が粘土質と差があるものの、いずれもシルトの堆積である。色調は黒色・黒褐色・暗褐色等のほか、黄褐色があり、前2者が多い。土層の状況から自然堆積による埋没であろう。

(遺物)

出土していない。

(遺構の時期)

縄文時代の遺構と思うが、時期の特定はできない。

00 DIIy13 陥し穴状遺構

(遺構) (第22図、写真図版22)

調査範囲の西端から約73 mのDII区のEII区よりに位置し、DIIx14 陥し穴状遺構は東に8 mの距離がある。DIIx12 住居跡の南西隅部と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約85 cm×80 cm、底面の径は約65 cm×60 cmの規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ正円に近い円形である。深さは約90 cmほどあり、断面形は、下位の壁面が底面や検出面より大きく外方に抉るように張り出す変則的な形状である。底面のほぼ中央に径約10 cm、深さ約10 cmの副穴がある。

埋土は全体が14層に細分されているが、土性は砂質と粘土質の違いはあるものの、いずれもシルトである。色調は黒色と黒褐色を主体に黄褐色・明黄褐色・暗褐色がある。土層の観察から自然堆積による埋没であろう。

(遺物)

出土していない。

(遺構の時期)

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構であろう。

01) DIIx14 陥し穴状遺構

(遺構) (第23図、写真図版23)

調査範囲の西端から東約79 mのDII区のEII区よりに位置し、DIIy14 陥し穴状遺構は南西に1.5 mの距離がある。DIIx14 住居跡の西壁と重複するが、本遺構の方が古い。

規模は、検出面の開口部径が約1.1 m×1.1 m、底面の径は約85 cm×75 cmほどであり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。重複する住居跡床面からの深さは約55 cmほどあり、残存している部分の断面形は皿形に近い形状である。底面には径約15 cm、深さ20 cmの副穴がある。

埋土は9層に細分されているが、1層は重複する住居跡の貼り床であり、実際の埋土は8層

である。土性はシルトであるが、上層は砂質、下層は粘土質という差がある。色調は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色・褐色などあり、前3者が多い。幾分不自然な堆積状況であるが、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

02 DIIy 14 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第23図、写真図版23)

調査範囲の西端から東に約78mのDII区のEII区よりに位置し、DIIx15陥し穴状遺構は北東に約5mの距離がある。DIIx14土坑群と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約80cm、底面の径が約60cmほどの規模があり、削平によって定かではないが、平面形は検出面・底面とも円形か楕円形と推定される。残存する深さは約40cmほどであり、全体の深さや断面形は不明である。底面に径約20cm、深さ約15cmほどの副穴がある。

埋土は7層に細分され、シルトの薄層が堆積する様相をなす。色調は黒色・黒褐色・暗褐色である。土層の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

03 DIIx 15 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第23図、写真図版23)

調査範囲の西端から東に約81mのDII区のEII区よりに位置し、DIIw 16陥し穴状遺構は北東に約5mの距離がある。DIIx 14住居跡の北壁と重複するが、当遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約1.2m×1.05m、底面の径が約80cm×70cmの規模があり、検出面・底面とも平面形は楕円形である。深さは約70cmほどあり、断面形は開口部が底面より広いバケツ形に近い形状である。底面には径約15cm、深さ約40cmほどの副穴がある。

埋土は10層に細分されるが、土性は一部が砂質と粘土質であるがすべてシルトである。色調は黒褐色が多く、他に暗褐色や褐色・黄褐色である。全体としてレンズ状の堆積状況であることから、自然堆積で埋没した遺構であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

04 DIIw16 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第23図、写真図版23)

調査範囲の西端から東に約85mのDII区のEII区よりに位置し、DIIu17陥し穴状遺構は北東に約5mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は約1.9m×1.7m、底面の径は約1.1m×1.1mの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約1.1mあり、断面形は開口部付近の壁面が外方に向く漏斗状に近い形状である。底面には径約30cm×20cm、深さ約45cmの副穴がある。

埋土は全体が16層に細分されるが、一部に砂質シルトと粘土がある他は、粘土質のシルトである。色調は黒色と褐色を主体に黒褐色と暗褐色・黄褐色がある。レンズ状の堆積であることから自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構であろう。

09 DIIu17 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第24図、写真図版24)

調査範囲の西端から東に約92mのDII区のEII区よりに位置し、DIIv17陥し穴状遺構は南南西に4mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.6m×1.4m、底面の径は約1m×80cmほどの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形を示す。深さは約90cmあり、断面形は壁面の上位が外方に向く漏斗状に近い形状である。底面には径約20cm、深さ約40cmほどの副穴がある。

埋土は全体が12層に細分されているが、土性はすべてシルトの堆積である。色調も各種あり、複雑な堆積状況を示すが、自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思うが、時期の特定はできない。

36 DIIv17 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第25図、写真図版24)

調査範囲の西端から東に約81mのDII区のEII区よりに位置し、DIIu18陥し穴状遺構は北東に約6.5mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は約2.3m×2.0m、底面の径は約1.1m×1.1mの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約1.05mであり、断面形は開口部付近の壁面が大きく外反するほか、上位がやや開くものの、ほぼ円筒形に近い形状である。底面には径約15cmから20cm、深さ約20cmの副穴が2基ある。

埋土は全体が16層に細分されているが、土性はほとんどは粘土質シルトである。1・2層は黒色と黒褐色のシルトが厚く堆積していることや所謂レンズ状の堆積であることから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕(第1図、写真図版302)

検出面付近からクロコ成形土師器の破片が1点(3082)出土している。内面が横方向のミガキ後黒色処理される。

〔遺構の時期〕

出土した遺物は平安時代の土師器であるが、検出面からの出土であることから、遺構の所属時期は縄文時代と推定される。

37 DIIu18 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第24図、写真図版24)

調査範囲の西端から東に約94mのDII区のEII区よりに位置し、DIIu19陥し穴状遺構は北東に6.6mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.3m×1.2m、底面は径が90cm×80cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが、底面は正円に近い円形である。深さは約1mであり、断面形は壁面中位やや上に最小径の括れを持つ鼓形に近い形状である。底面には径約15cmほどで深さ約20cmの副穴がある。

埋土は全体が9層に細分されているが、土性は下層に粘土質の部分があるものの、殆どはシルトの堆積である。色調は、上層に黒色や黒褐色が下層に黒褐色や暗褐色・黄褐色がある。土層の状況から判断して自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

38 DⅡs 19 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 25 図、写真図版 24)

調査範囲の西端から東へ約 97 m の DⅡ区中央やや東よりに位置し、DⅡs 20 陥し穴状遺構とは東に 2 m の距離がある。重複する遺構はない。

規模は、検出面の開口部径が約 2 m × 1.9 m、底面の径が約 1 m の規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが、底面はほぼ正円に近い円形である。底面に径約 20 cm、40 cm の副穴がある。深さは約 1.1 m あり、断面形は開口部が底面より次第に広がるバケツ形に近い形状である。

埋土はすべてシルトであるが、主に色調によって 11 層に細分されている。色調は黒色と黒褐色が主であるが、黄褐色と明黄褐色などもある。土層から堆積状況を観察すると自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

39 DⅡs 20 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 26 図、写真図版 25)

調査範囲の西端から東に約 100 m の DⅡ区の東よりに位置し、DⅡs 25 陥し穴状遺構とは東に約 22 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約 1.5 m × 1.4 m、底面の径が約 80 cm × 70 cm の規模があり、平面形は検出面は楕円形であるが、底面は円形である。深さは約 1 m あり、断面形は壁面の中位に最小径を持つ鼓形に近い形状である。底面のほぼ中央に径約 15 cm、深さ約 20 cm の副穴がある。

埋土は全体が 13 層に細分されているが、土性はいずれもシルトの堆積である。色調は黒褐色と暗褐色が主体であるが、他に黒色や黄褐色も見られる。レンズ状の堆積を示すことから自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

40 DⅡs 25 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 26 図、写真図版 25)

調査範囲の西端から東約 122 m の DⅡ区の DⅢ区との境に位置し、DⅢt 4 陥し穴状遺構は東

に約 15 m の距離がある。DⅢr2 溝跡と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の開口部径は 2 m × 1.6 m、底面の径は約 90 cm × 90 cm の規模があり、平面形は検出面が楕円形、底面はほぼ円形である。深さは約 1.15 m あり、断面形は壁面のほぼ中位に最小径を持つ鼓形である。底面には径約 30 cm、深さ約 35 cm の副穴がある。

埋土はすべてシルトであるが、色調等から 14 層に細分される。色調は黒色が主体をなし、他に黒褐色や明黄褐色・黄褐色などがある。堆積状況の観察によると自然堆積によって埋没した遺構といえよう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

(4) DⅢt4 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 27 図、写真図版 25)

調査範囲の西端から東約 137 m の DⅢ区西端に位置し、DⅢu6 陥し穴状遺構は南東に 9 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約 1.6 m × 1.4 m、底面の径は約 95 cm × 90 cm の規模があり、平面形は検出面は楕円形であるが、底面はほぼ正円に近い円形をなす。深さは約 1.2 m あり、断面形は壁面ほぼ中位が窄まる鼓形に近い形状である。底面のほぼ中央には径 30 cm、深さ約 30 cm の副穴がある。

埋土は全層が 14 層に細分されているが、土性はすべてシルトであり、色調は黒色と黒褐色を主体に褐色と黄褐色・明黄褐色がある。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定できるが、時期の特定はできない。

(4) DⅢu6 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 27 図、写真図版 25)

調査範囲の西端から東約 145 m の DⅢ区西端よりに位置し、DⅢt9 陥し穴状遺構とはほぼ東に 13.5 m の距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は約 1.3 m × 1.3 m、底面の径は約 1 m × 1 m の規模があり、平面形は検出

面・底面ともほぼ正円に近い円形をなす。深さは約1 mあり、断面形は壁面のほぼ中位最小径を持つ括れがあり、鼓形に近い形状といえよう。底面には径10 cm、深さ50 cmの副穴がある。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、全体が8層に細分されている。色調は黒褐色を主に極暗褐色・黄褐色などがある。堆積状況の観察から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

43 DⅢt9 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第28図、写真図版26)

調査範囲の西端から東約158 mのDⅢ区ほぼ中央付近に位置し、DⅢr10 陥し穴状遺構-1は北東に13 mの距離がある。北西壁がDⅢs9 陥し穴状遺構-2と重複するが、当遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約1.5 m×1.35 m、底面の径約90 cm×75 cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが、底面は長方形的な形状である。深さは約90 cmほどあり、断面形は壁面上位が外方に大きく開く漏斗状に近い形である。

埋土は全体が11層に細分されているものの、土性はすべてシルトであり、黒褐色を主とする黒色や暗褐色などの色調によって細分される。上層の堆積は自然堆積と単純に理解するには疑問があり、一部人為的な埋め戻しがある可能性が考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

44 DⅢr10 陥し穴状遺構-1

〔遺構〕(第28図、写真図版27)

調査範囲の西端部から東約163 mのDⅢ区中央付近に位置し、DⅢt14 陥し穴状遺構は南に約15 mの距離がある。DⅢq9 溝跡と重複するが、当遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約1.7 m×1.6 m、底面の径は約85 cm×80 cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが、底面はほぼ正円に近い円形である。深さは約90 cmほどあり、断面形は上部の壁が大きく開口する漏斗形に近い形状である。底面には径約15 cm、深さ約45 cmほどの副穴が検出されている。

埋土は14層に細分されているが、土性はすべてシルトである。色調は、最上層の1・2層は黒色であり、その下層は黒褐色と暗褐色を主体に黄褐色がある。レンズ状の堆積であることから自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定できるが、時期の特定はできない。

49 DⅢt 14 陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第29図、写真図版26)

調査範囲の西端から東約176mのDⅢ区中央付近に位置し、DⅢw 16 陥し穴状遺構は南東に約17mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1m×90cm、底面の径は約70cm×65cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが、底面は円形に近い。深さは約40cmほどあり、断面形は開口部が広がるバケツ形に近い形状である。底面には径約20cm、深さ約25cmほどの副穴が検出されている。

埋土は全体が3層に細分されるが、中央部に1層の黒褐色シルトが大量に堆積し、他の層は少量である。土性はすべてシルトであり、色調も黒褐色と黄褐色である。自然堆積であろうか。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思いますが、時期の特定はできない。

40 DⅢw 16 陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第29図、写真図版26)

調査範囲の西端から東約184mのDⅢ区ほぼ中央付近に位置し、DⅢv 4 陥し穴状遺構とは東に約52mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.3m×1.3m、底面の径が約60cm×60cmの規模があり、平面形は検出面が楕円形であるが、底面はほぼ正円に近い円形である。深さは約1.1mほどあり、断面形はやや深いバケツ形に近い形状である。底面の副穴はない。

埋土は7層に細分されているが、土性は上層はシルト、下層は砂質のシルトの違いがある。色調は黒褐色が多く、他に暗褐色や黒色がある。レンズ状の堆積であることから自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

Ⅶ DIVe4 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第29図、写真図版27)

調査範囲の西端から東約236mのDIV区西端よりに位置し、DIVf7陥し穴状遺構とは北東に約20mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は約75cm×70cm、底面の径は約80cm×65cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約85cmほどあり、断面形は壁面のほぼ中位が窄む鼓形に近い形状である。底面には東壁付近に径約15cm、深さ約25cmの副穴が検出されている。

埋土は全体が4層に細分されているが、土性は一部砂質であるが、シルトと共通する。色調は黒褐色を主に褐色と暗褐色がある。幾分不自然な堆積状況であるが、自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定されるが、時期の特定はできない。

Ⅷ DIVj6 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第29図、写真図版27)

調査範囲の西端から東に約246mのDIV区西端よりに位置し、DIVf7陥し穴状遺構とは北に約20mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.3m×1m、底面は径が約50cm×40cmほどの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約1mであり、断面形は漏斗形に近い形状である。底面の副穴は検出されていない。

埋土は下層が砂質であるが、シルトの堆積であり4層に細分されている。色調は黒色のほか、暗褐色と褐色がある。堆積状況から自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

49 DIVf7 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第30図、写真図版27)

調査範囲の西端から東に約251mのDIV区西部よりに位置し、DIVp7陥し穴状遺構は南に約43mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.5m×1.5m、底面の径は約80cm×65cmの規模があり、検出面・底面とも平面形が楕円形を示す。深さは約1mほどあり、断面形は壁の上部が外方に開口するバケツ形に近似する。底面には径約30cm、深さ約40cmの副穴が検出されている。

埋土はすべてシルトが堆積するものの、全体が9層に細分される。色調はほとんどは黒色か黒褐色であるが他に黄褐色がある。埋土で特徴的なことは、全体に礫の混入が多いことであり、水害の被害を推定させる。レンズ状堆積を示すことから自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

50 DIVp7 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第30図、写真図版27)

調査範囲の西端から東約252mのDIV区西部よりに位置し、DIVh9陥し穴状遺構は北に約35mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.3m×1.2m、底面の径は約65cm×60cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約1.2mあり、断面形はピーカー形である。底面の副穴はない。

埋土はシルトの堆積であるが5層に細分される。色調は黒褐色が多く、他に褐色と黄褐色がある。幾分不自然な堆積状況であるが、自然堆積を示すものであろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

51 DIVh9 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第30図、写真図版23)

調査範囲の西端から東に約256mのDIV区西部よりに位置し、DIVo9陥し穴状遺構は南に約31mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約 1.3 m × 1.3 m、底面の径は 90 cm × 90 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ正円に近い円形である。深さは約 1.35 m あり、断面形は壁面下位がほぼ並行しその上位は外方に広がる漏斗形に近い形状である。底面には径 30 cm × 20 cm、深さ約 35 cm の副穴が検出されている。

埋土は全体が 10 層に細分されているが、土性は一部が砂質であるものの、すべてシルトの堆積である。色調は黒色と黒褐色が主であるが、他に褐色や暗褐色がある。全体がレンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕(第 1 図、写真図版 301)

検出面からロクロ成形の土師器壺の体部破片が 1 点 (3083) 出土している。

〔遺構の時期〕

出土した土師器は特徴から平安時代の遺物であるが、出土した層位から考えて、当遺構に直接共伴する遺物とは断定できないことから、形状や土性などから縄文時代の遺構として理解しておく。

52 DIVo 9 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 30 図、写真図版 28)

調査範囲の西端から東に約 260 m の DIV 区西部よりに位置し、DIVd 10 陥し穴状遺構は南に 43 m の距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は約 1.7 m × 1.3 m、底面の径は約 1.1 m × 1 m の規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 1.1 m あり、断面形はバケツ形に近い形状である。底面には径約 35 cm × 15 cm、深さ約 10 cm の副穴が検出されている。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、全体が 9 層に細分されている。色調は黒色と黒褐色を主体に暗褐色や褐色がある。大凡レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

53 DIVd 10 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 31 図、写真図版 28)

調査範囲の西端から東に約 260 m の DIV 区ほぼ中央部に位置し、DIVg 10 陥し穴状遺構は南に 10 m の距離がある。DIII p 22 溝跡と重複するが、当遺構の方が古い。

検出面の開口部径は90 cm×90 cm、底面の径は約70 cm×65 cmの規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ正円に近い円形である。深さは約80 cmほどであり、断面形は壁面上位で括れるフラスコ形に近い形状である。底面には約径20 cm、深さ40 cmの副穴が検出されている。

埋土は9層に細分されているが、土性はすべてシルトである。色調は黒色と黒褐色が主であるが、他に暗褐色と褐色がある。レンズ状の堆積であり自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

64 DIVg 10 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第31図、写真図版28)

調査範囲の西端から東に約263 mのDIV区ほぼ中央部に位置し、DIVo 10 陥し穴状遺構とは南に約33 mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は1 m×90 cm、底面の径は75 cm×70 cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約40 cmほどあり、断面形は浅いピーカー形である。底面には約径25 cm、深さ20 cmの副穴がある。

埋土はすべてシルトが堆積し、3層に細分されている。色調は黒褐色と暗褐色である。やや不自然な堆積であるが自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

69 DIVo 10 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第31図、写真図版28)

調査範囲の西端から東に約262 mのDIV区中央部よりに位置し、DIVq 10 陥し穴状遺構とは南に10 mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は1.8 m×1.6 m、底面は径が90 cm×90 cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも円形をなす。深さは約1.3 mほどあり、断面形はピーカー形に近い形状を示す。

埋土は全体が8層に細分されているが、土性はすべてシルトである。色調は黒褐色を主体に黒色と暗褐色がある。全体がレンズ状の堆積を示しており、自然堆積で埋没した遺構であろう。

〔遺物〕(第2図、写真図版302)

検出面から須恵器大甕の体部破片が1点(3084)出土している。器表に並行タタキ目を付し、内面は無文の当て具痕がある。平安時代の製品であろう。

〔遺構の時期〕

出土した遺物は平安時代の須恵器大甕であるが、出土した層位は検出面であることから、本遺構に伴う遺物と断定できないことから、遺構の形状と埋土の状況から縄文時代の遺構とは推定できるが、時期の特定はできない。

59 DIVq 10 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第31図、写真図版29)

調査範囲の西端から約261mのDIV区中央部よりに位置し、DIVb 11 陥し穴状遺構は北に約63mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.3m×1.2m、底面が径約70cm×65cmの規模があり、平面形は検出面・底面ともに楕円形である。深さは約80cmほどあり、断面形は開口部が底面より広がるバケツ形である。底面に副穴は検出されていない。

埋土は5層に細分されているが、土性はすべてシルトであり、色調は褐色と暗褐色が多く、黒色と黒褐色は少ない。堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

57 DIVb 11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第32図、写真図版29)

調査範囲の西端から約265mのDIV区の中央部に位置し、DIVm 11 陥し穴状遺構は南に約45mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の開口部径は約1.8m×1.65m、底面の径が約1.1m×1.1mの規模があり、平面形は検出面はやや不整であるが底面はほぼ正円に近い円形をなす。深さは約1.2mほどであり、断面形は開口部付近の壁面が外方に大きく開くほか、底面が平坦ではなく丸みをもって壁と接続しており、特異な形状である。底面には径約30cm、深さ約40cmの副穴が検出されている。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、全体が10層に細分される。色調は黒褐色を主体に黒色と褐色がある。埋土で特徴的なのは、全体的に礫の混入が多く、水害による堆積の可能性を推定させる。既述のように水害による埋没の可能性はあるものの、土層がレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積によって埋没した遺構の可能性も推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

58 DIVm 11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 32 図、写真図版 29)

調査範囲の西端から東に約 267 m の DIV 区の中央部に位置し、DIVp 12 陥し穴状遺構は南に約 13 m の距離がある。DIVm 11 住居跡の北壁と重複するが、当遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約 1.6 m × 1.6 m、底面の径は約 1.2 m × 1.2 m の規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ円形である。深さは約 90 cm ほどあり、断面形は壁面の中位に最小径を持つ鼓形に近い形状である。底面の中央やや西よりには径約 30 cm × 30 cm の副穴が検出されている。

埋土は全体が 10 層に細分されるが、土性はすべてシルトである。色調は黒色と黒褐色の他、暗褐色・黄褐色・褐色などがある。幾分不自然ではあるが、全体としてみればレンズ状の堆積と理解でき、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

59 DIVp 12 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 32 図、写真図版 29)

調査範囲の西端から東に約 267 m の DIV 区中央部に位置し、DIVb 13 陥し穴状遺構は北に 58 m の距離がある。DIVq 8 溝跡と重複するが、当遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約 1.8 m × 1.7 m、底面の径は約 1.4 m × 1.1 m の規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 1.1 m あり、断面形はバケツ形である。底面には径約 50 cm × 35 cm、深さ約 30 cm の規模を持つ副穴が検出されている。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、全体が 10 層に細分されている。色調は黒色と黒褐色が主体をなし、暗褐色と褐色もある。やや不自然な堆積状況ではあるが、全体としてみればレンズ状の堆積を示しており自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

60 DIVb 13 陥し穴状遺構

〔遺構〕（第 32 図、写真図版 30）

調査範囲の西端から約 272 m の DIV 区の中央部に位置し、DIV1 16 陥し穴状遺構は南南東に約 45 m の距離がある。重複遺構はない。

検出面の開口部径は約 1.2 m × 1.2 m、底面の径は約 1 m × 90 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ正円に近い円形である。深さは約 90 cm ほどであり、断面形はバケツ形である。

底面には径約 20 cm × 20 cm、深さ 30 cm の副穴が検出されている。

埋土は黒色や黒褐色のシルトを主体に、褐色のやや粘性を持つシルトが堆積し、全体が 10 層に細分されている。堆積状況の観察から自然堆積による堆積であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定できるが、時期の特定はできない。

61 DIV1 16 陥し穴状遺構

〔遺構〕（第 33 図、写真図版 30）

調査範囲の西端から東に約 282 m の DIV 区中央部に位置し、CVx 18 陥し穴状遺構は東に約 115 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は 90 cm × 90 cm、底面の径約 60 cm × 60 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ円形に近い形状を示す。深さは約 1.2 m あり、断面形はほぼ円筒形である。底面の副穴は検出されていない。

埋土は 6 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色などがあり、各層によって差がある。やや不自然な堆積ではあるが、自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思いますが、時期の特定はできない。

62 CVx18 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第33図、写真図版30)

調査範囲の西端から東に約396mの調査範囲ほぼ中央域のCV区中央部やや東に位置し、DVx19 陥し穴状遺構は北に約3mの距離がある。CVx14 溝跡とCVx18 溝跡に挟まれる形で重複するが、当遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約1.3m×1.2m、底面の径は約80cm×70cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは検出面から約95cmほどあり、断面形はバケツ形に近い形状である。底面の副穴は検出されていない。

埋土はすべてシルトが堆積し、色調などによって11層に細分されている。色調は黒褐色を主体に暗褐色や褐色・明褐色などがある。全体として礫の混入が多いことから、水害による埋没も推定されるが、全体的にみればレンズ状の堆積を示しており、自然堆積によって埋没した遺構であろう。

〔遺物〕(第2図、写真図版302)

検出面から土師器甕の口縁部破片が1点(3085)出土している。

〔遺構の時期〕

出土した土師器甕の破片は平安時代に属するが、検出面からの出土であることから、遺構に直接伴うかは断定できないので、形状と埋土の状況から縄文時代の遺構としておく。

63 CVx19 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第33図、写真図版30)

調査範囲の西端から東に約397m、調査範囲中央域のCV区中央部やや東に位置し、CVw19 陥し穴状遺構-1とは北に2mの距離がある。

検出面の開口部径は約1.3m×1.2m、底面の径は約60cm×50cmの規模があり、検出面の平面形はほぼ円形であるが、底面のそれは楕円形である。深さは約1.4mあり、断面形はバケツ形である。底面の副穴は検出されていない。

埋土は全体が17層に細分されているが、土性は一部に砂質はあるもののシルトの堆積である。色調は、上層は黒褐色と暗褐色が主体で、中位層は明黄褐色、下層は暗褐色や黒褐色・黄褐色等の交互層である。レンズ状の堆積であることから自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

64 CVw 19 陥し穴状遺構-1

〔遺構〕(第33図、写真図版31)

調査範囲の西端から約397m東の調査範囲中央部CV区中央やや東に位置し、CVw 19 陥し穴状遺構-2とは北に約1mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.65m×1.15m、底面の径は約40cm×20cmの規模があり、検出面の平面形は長方形に近い形状であるが、底面は菱形に近い。深さは70cmほどあり、断面形は開口部が広いV形に近い。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、敷地用には黒褐色と暗褐色がある。土層の状況を観察すると、両側に堆積する1層と他の層の堆積状況が全く異なることから、1層は精査中に掘りすぎている可能性がある。土層から堆積状況を観察すると、自然堆積とは考え難い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは推定できるが、時期の特定はできない。

65 CVw 19 陥し穴状遺構-2

〔遺構〕(第34図、写真図版31)

調査範囲西端から東に約396mのCV区中央やや東に位置し、CVc 20 陥し穴状遺構は南に19mの距離がある。CVw 19 陥し穴状遺構-1とCVx 18 陥し穴状遺構に挟まれる形で重複するが、新旧関係は明瞭にできなかった。

検出面の開口部径は約90cm×90cm、底面の径が約50cm×30cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約1.15mあり、断面形はU字形である。底面に副穴は検出されていない。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、色調などによって7層に細分されている。色調は暗褐色・黒褐色のほか、黄褐色や明黄褐色がある。全体としてみると自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構であろうと推定される。

66 CVc 20 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第34図、写真図版31)

調査範囲の西端から約401m東の調査範囲中央部CV区の中央やや東に位置し、CVw 21 陥

し穴状遺構は北に約22mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.6m×1.3m、底面の径が約90cm×80cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約60cmあり、断面形はバケツ形である。底面には径約30cm、深さ約20cmの副穴が検出されている。

埋土は全体が7層に細分されているが、土性はすべてシルトである。色調は黒褐色を主に暗褐色や褐色と黄褐色がある。堆積状況の観察から自然埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と思うが、時期の特定はできない。

67 CVw21 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第34図、写真図版31)

調査範囲の西端から約308m東の調査範囲中央域CV区の東よりに位置し、CVIc3陥し穴状遺構は東に125mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.2m×1.1m、底面の径は85cm×75cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約95cmあり、断面形はピーカー形に近い形状である。底面には径約15cm、深さ30cmの副穴がある。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、色調によって12層に細分されている。色調は黒色や黒褐色のほか、褐色や明黄褐色・暗褐色・暗褐色等がある。レンズ状の堆積であることから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構であろう。

68 CVIc3 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第34図、写真図版32)

調査範囲の西端から東約534mの調査範囲中央域東よりのCVIc区西部に位置し、CVIc7陥し穴状遺構は東に18mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.1m×90cm、底面の径が約90cm×80cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約65cmあり、断面形はピーカー形に近い形状である。底面の副穴はない。

埋土は黒色・黒褐色・褐色のシルトが堆積する。1層には多くの礫が含まれることから、最終的には水害による埋没を推定させるが、それ以前は自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定できるが、時期の特定はできない。

69 CVIc7 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第35図、写真図版32)

調査範囲の西端から約552m東の調査範囲中央部やや東よりのCVIc区の西部に位置し、CVIc9 陥し穴状遺構は東に約7mの距離がある。CVIb7住居跡と重複するが、当遺構の方が古い遺構である。

検出面の開口部径は約80cm×70cm、底面径は約65cm×55cmの規模があり、平面形は楕円形を示す。深さは約20cmほどであり、浅いピーカー形に近い断面形をなす。底面の中央やや北よりに径約20cm×20cm、深さ約50cmの副穴がある。

埋土はすべてシルトであるが、色調は黒褐色を主に褐色と黄褐色がある。堆積状況に幾分不自然な部分が見受けられるものの、ほぼ自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

70 CVIc9 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第35図、写真図版32)

調査範囲の西端から559m東によったCVIc区の西部に位置し、BVIc12 陥し穴状遺構-1は北東に35mの距離がある。CVIc3溝跡と重複するが、本遺構の方が古い遺構である。

規模は開口部の径が約95cm×95cm、底面径は約80cm×70cmほどであり、平面形は楕円形である。深さは約75cm位で、断面形は開口部付近がやや開くもののピーカー形に近い形状である。底面には径約30cm×20cm、深さ約20cmの副穴が検出されている。

埋土は4層に細分されているが、大半は黒色のシルトが堆積し、他は土性がシルトと粘土、色調が黒褐色と黄褐色である。1層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

⑦ BⅦt 12 陥し穴状遺構-1

〔遺構〕(第35図、写真図版33)

調査範囲の西端から東に約573mよった調査範囲ほぼ中央のBⅦ区中央に位置し、BⅦt 12 陥し穴状遺構-1は南西に1.5mの距離がある。BⅦt 12 住居跡状遺構と重複するが、本遺構の方が古い遺構である。

開口部径が約95cm×90cm、底面の径が約90cm×80cmの規模があり、平面形は楕円形である。深さは約90cmほどであり、断面形はピーカー形である。底面には径約15cm×10cmの副穴が検出されている。

埋土は12層が砂質シルトである以外はいずれもシルトが堆積しているが、色調には黒褐色を主体に黒色・黄褐色・明褐色などがある。土層から堆積状況を観察すると、ほぼ自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

⑧ BⅦt 12 陥し穴状遺構-2

〔遺構〕(第35図、写真図版33)

調査範囲の西端から東に約573mよった調査範囲のほぼ中央BⅦ区の中央に位置し、DⅦy 13 陥し穴状遺構とは南に22.5mの距離がある。重複する他の遺構はない。

検出面の開口部径が約1.3m×1.1m、底面の径は約1m×70cmの規模があり、平面形は楕円形である。深さは約90cmほどあり、断面形は深いバケツ形に近い形状である。底面には径約15cm、深さ約30cmの副穴が検出されている。

埋土は全体が13層に細分されているが、土性にはシルトを主体に粘土質と砂質があり、色調は黒褐色・黄褐色・褐色があり、黒褐色が最も多い。レンズ状堆積であることから自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

03 BVly 13 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 36 図、写真図版 32)

調査範囲の西端から約 577 m 東によった調査範囲ほぼ中央の BVly 区中央に位置し、BVly 15 陥し穴状遺構は東に 7 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約 1.15 m × 1 m、底面の径が約 85 cm × 70 cm の規模があり、平面形は楕円形である。深さは約 75 cm ほどあり、断面形はバケツ形である。底面には径約 40 cm × 30 cm、深さ約 20 cm の副穴が検出されている。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、色調や土性によって 7 層に細分される。色調は黒色と黒褐色であるが、後者が主体をなす。堆積状況の観察から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

04 BVly 15 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 36 図、写真図版 33)

調査範囲の西端から約 581 m 東によった調査範囲ほぼ中央の BVly 区中央に位置し、BVly 20 陥し穴状遺構は北東に約 50 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径約 90 cm × 70 cm、底面の径は約 70 cm × 65 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともほぼ円形である。深さは約 60 cm ほどあり、断面形はピーカー形に近い形状である。底面には径約 30 cm、深さ約 40 cm の副穴が検出されている。

埋土はシルトの堆積であるが、色調には黒色のほか、黒褐色と暗褐色があり、黒褐色が多く全体が 5 層に細分されている。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

09 BVIn 20 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 36 図、写真図版 33)

調査範囲の西端から東に 602.5 m よった調査範囲ほぼ中央部 BVly 区東よりに位置し、BVly 20 陥し穴状遺構は南に約 3 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約 1.05 m × 1 m、底面の径は約 75 cm × 70 cm の規模があり、平面形はほ

は円形である。深さは約 1.2 m ほどあり、断面形は円筒形である。底面の副穴は検出されていない。

埋土は全体が 10 層に細分されているが、土性ではシルトを主体に砂質シルトであり、色調は黒褐色を主に黒色があり、10 層に細分されている。どの層もレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

76 BⅦo 20 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 36 図、写真図版 34)

調査範囲の西端から東に約 602 m いった調査範囲ほぼ中央部 BⅦ区東よりに位置し、BⅦn 21 陥し穴状遺構は東に約 4 m の距離がある。BⅦo 19 住居跡と重複しているが、本遺構が古い遺構である。

検出面の開口部径は約 1.05 m × 1 m、底面が径約 85 cm × 80 cm の規模があり、平面形はほぼ円形である。深さは重複する BⅦo 19 住居跡の検出面から約 1.1 m ほどあり、断面形は円筒形である。底面の副穴は検出されていない。

埋土の土性はシルトを主体に砂質シルトに分けられ、色調は黒色と黒褐色の他、褐色と黄褐色があり、全体が 12 層に細分されている。レンズ状堆積であることから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが縄文時代の遺構と推定される。

77 BⅦn 21 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 37 図、写真図版 34)

調査範囲の西端から東に約 607 m いった調査範囲ほぼ中央部 BⅦ区東よりに位置し、BⅦn 21 溝跡と重複しているが、当遺構が古い。

検出面の開口部径は約 90 cm × 80 cm、底面の径は約 70 cm × 65 cm の規模があり、平面形はほぼ正円に近い円形である。深さは約 1.1 m ほどあり、断面形はほぼ円筒形である。底面の副穴は検出されていない。

埋土は、色調が黒褐色を主体に褐色に分けられ、土性はシルトと砂質シルトであるが前者が主体をなし、全体が6層に細分されている。土層から堆積状況を観察すると自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

70 BⅦo 21 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第37図、写真図版34)

調査範囲の西端から約607m東によった調査範囲ほぼ中央部BⅦ区の東端に位置し、BⅦo 2 陥し穴状遺構は東に約9mの距離がある。BⅦn 21 溝跡と重複するが、本遺構が古い遺構である。

検出面の開口部径は約90cm×90cm、底面の径は約70cm×65cmの規模があり、平面形はほぼ正円に近い円形である。深さは約1.1mほどあり、断面形は壁面のほぼ中位が外方に張り出すピヤ樽に近い形状を示す。底面の副穴は検出されていない。

埋土は砂質と粘土質を含むもののいずれもシルトが堆積し、色調には黄褐色と褐色そして黒褐色があるものの後者が最も多く、全体が10層に細分されている。全体がレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

71 BⅦo 23 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第47図、写真図版34)

調査範囲の西端から約615.5m東によった調査範囲ほぼ中央部BⅦ区の東端に位置し、BⅦu 23 陥し穴状遺構とは南に約24mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約70cm×60cm、底面の径は約55cm×50cmの規模があり、平面形はほぼ円形である。深さは約1.2mほどあり、断面形は底面よりが外方に僅かに張り出すもののほぼ円筒形に近い形状である。底面には径15cm×15cm、深さ約35cmの副穴が検出されている。

埋土は全体が8層に細分されているが、土性はシルトを主体に砂質シルトがあり、敷地用は黒色と褐色、暗褐色と黒褐色があり、11層に細分されている。全体がレンズ状の堆積であるこ

とから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

04 BVU 23 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 38 図、写真図版 35)

調査範囲の西端から約 615 m 東によった調査範囲ほぼ中央部 BVU 区の東端に位置し、BVU 2 陥し穴状遺構-1 は、北北東に 23 m の距離がある。CVU 3 溝跡と重複するが、本遺構が古い。

検出面の開口部径は約 1.15 m × 1.05 m、底面径は約 95 cm × 80 cm の規模があり、平面形は楕円形である。深さは約 1.1 m ほどあり、断面形はほぼ円筒形である。底面には径約 25 cm × 20 cm、深さ 20 cm の副穴が検出されている。

埋土は全体が 13 層に細分されているが、土性はシルトが主体のほか、砂質シルトがあり、色調は黒色と黒褐色が主体であるが、他に暗褐色と黄褐色がある。全体がレンズ状堆積を示すことから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

01 BVU 24 陥し穴状遺構-1

〔遺構〕(第 38 図、写真図版 35)

調査範囲の西端から約 619 m 東によった調査範囲の中央部やや東より BVU 区最東端に位置し、BVU 1 陥し穴状遺構とは北東に約 10 m の距離があり、CVU 3 溝跡と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約 1 m × 1 m、底面の径は約 85 cm × 85 cm の規模があり、平面形はほぼ正円に近い円形である。深さは約 1.1 m ほどあり、断面形は開口部付近の壁面の一部が外方に膨らむもののほぼ円筒形である。底面には径約 15 cm × 15 cm、深さ約 35 cm の副穴が検出されている。

埋土は全体が 6 層に細分されているが、土性は一部に砂質のシルトがあるもののシルトが主体をなし、色調は黒色が多いほか、褐色と黒褐色がある。全体がレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積による埋没であろう。

(遺物)

出土していない。

(遺構の時期)

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

② BⅧn1 陥し穴状遺構

(遺構) (第38図、写真図版35)

調査範囲の西端から約626m東によった調査範囲の中央部やや東よりBⅧ区の最西端に位置し、BⅧp1 陥し穴状遺構とは南に6mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1m×1m、底面の径は約75cm×70cmの規模があり、平面形はほぼ正円に近い円形である。深さは約1.35mほどあり、断面形は若干不整形ではあるが、ほぼ円筒形である。底面の副穴は検出されていない。

埋土は一部に砂質シルトがあるものの他はシルトで占められ、色調は黒色と黒褐色を主に暗褐色や褐色があり、全体が9層に細分されている。土層から堆積状況を観察すると、レンズ状堆積であることから自然堆積による埋没であろう。

(遺物)

出土していない。

(遺構の時期)

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

③ BⅧp1 陥し穴状遺構

(遺構) (第39図、写真図版35)

調査範囲の西端から約626m東によった調査範囲の中央部やや東よりBⅧ区の最西端に位置し、BⅧm2 陥し穴状遺構とは北東に約10mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.4m×1.3m、底面の径が1.3m×1.3mの規模があり、平面形はほぼ正円に近い円形を示す。深さは約1.2mほどあり、断面形は開口部付近の壁面が外方へ開く漏斗状に近い形状である。底面には径約15cm×15cm、深さが約30cmほどの副穴が検出されている。

埋土は全体が13層に細分されているが、土性はすべてシルトであり、色調には黒色と黒褐色の他、暗褐色と極暗褐色・褐色等がある。全体がレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積による埋没と言えよう。

(遺物)

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

04 BⅧm 2 陥し穴状遺構

〔遺構〕（第 39 図、写真図版 36）

調査範囲の西端から約 631 m 東によった調査範囲の中央部やや東より BⅧ区の最西端に位置し、BⅧk 5 陥し穴状遺構とは北東に約 14 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約 90 cm × 90 cm、底面の径は約 70 cm × 70 cm の規模があり、平面形はほぼ正円に近い円形である。深さは約 1.05 m ほどであり、断面形は円筒形に近い形状である。底面の副穴は検出されていない。

埋土はすべてシルトであるが、色調には黒色を主体に黒褐色と黄褐色があり、全体が 5 層に細分される。土層の観察から自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

09 BⅧk 5 陥し穴状遺構

〔遺構〕（第 39 図、写真図版 36）

調査範囲の西端から約 640 m 東によった調査範囲の中央部やや東より BⅧ区の西部に位置し、BⅧm 12 陥し穴状遺構は東に 27 m の距離がある。重複遺構はない。

検出面の開口部径は約 1 m × 95 cm、底面の径が約 65 cm × 65 cm の規模があり、平面形は不整形ではあるが、方形に近い形状である。深さは約 1.3 m ほどあり、断面形は円筒形である。底面の副穴は検出されていない。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、色調には黒色・黒褐色の他、暗褐色と褐色があり、全体が 7 層に細分されている。埋土がレンズ状に堆積することから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

86 BVI m 12 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第40図、写真図版36)

調査範囲の西端から約670 m東によった調査範囲の中央部やや東より BVI 区の中央部に位置し、BVI 16 陥し穴状遺構は東に約17.5 mの距離がある。BVI 10 住居跡の北東壁と重複しており、本遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約75 cm × 70 cm、底面の径が約40 cm × 30 cmの規模があり、平面形は方形気味の楕円形である。深さは約1.3 mほどあり、断面形は円筒形である。底面に副穴はない。

埋土は全体が10層に細分されているが、土性はすべてシルトの堆積であり、壁際の9層は掘りすぎ部分である。色調には褐色と暗褐色を主体に黄褐色や明黄褐色がある。全体的にレンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積によって埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

87 BVI 16 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第40図、写真図版36)

調査範囲の西端から約686 m東によった調査範囲の中央部やや東より BVI 区の中央部に位置し、AXIt 2 陥し穴状遺構は東に約244 mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の開口部径は約1.4 m × 1.4 m、底面の径は約90 cm × 70 cmほどの規模があり、平面形は楕円形である。深さは約1 mほどあり、断面形は楕円形に近い形状である。底面の副穴は検出されていない。

埋土は全体が11層に細分されているが、土性はすべてシルトであり、色調には黒色と褐色を主体に暗褐色や黒褐色等がある。全体としてレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

88 AXIt 2 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第40図、写真図版37)

調査範囲の西端から約930 m東によった調査範囲の東端から西に230 mの AXI 区の西端に

位置し、AXIq 7 陥し穴状遺構は北東に約 23.5 m の距離がある。SXI s 1 方形周溝遺構と重複するが、本遺構が古い。

検出面の開口部径は約 1.2 m × 1.1 m、底面の径は約 65 cm × 65 cm ほどの規模があり、平面形は楕円形である。深さは 1 m ほどあり、断面形はピーカー形に近い形状を示す。底面には径約 40 cm × 30 cm、深さが約 35 cm の規模を持つ副穴が検出されている。

埋土はシルトを主体に砂質シルトが堆積し、色調は黒色と褐色や黒褐色などがあり、全体に礫の混入が多い。礫の混入から見て水害による埋没を推定させ、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが時期の特定はできない。

89 AXIq 7 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 40 図、写真図版 37)

調査範囲の西端から約 949 m 東の調査範囲東端から西に約 211 m の AXI 区の西部に位置し、AXIp 5 方形周溝遺構と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の開口部は径約 1.2 m × 1.1 m、底面の径は約 75 cm × 60 cm の規模があり、平面形は楕円形である。深さは約 1.15 m ほどあり、断面形はやや不定であるが、魚籠形である。

底面には径約 30 cm × 20 cm、深さ約 30 cm の規模を持つ副穴が検出されている。

埋土は全体が 10 層に細分されているが、土性は砂質や粘土質の違いはあるがシルトであり、色調は黒色と黒褐色を主体に暗褐色や黄褐色がある。埋土全体がレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

90 AXIu 20 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 41 図、写真図版 37)

調査範囲の西端から約 1,000 m 東によった調査範囲の東端に近い東端から約 135 m の AXI 区東端よりに位置する。AXIu 20 住居跡と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の開口部径は約 1.6 m × 1.4 m、底面の径は約 50 cm × 30 cm ほどの規模があり、平面形は楕円形である。深さは約 1 m ほどあり、断面形は U 字形に近い。底面の副穴は検出されてい

ない。

埋土はシルトの堆積であるが、色調は黒色と褐色であり、2層に細分されている。堆積状況にやや不自然な部分もみられるが、ほぼ自然堆積の埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

2) 溝状形型

溝状形型は調査範囲のほぼ全域で検出されているが、陥し穴状遺構の型としては14基とをもって検出数が少ない。以下では各遺構について個別的に記すこととする。

(1) EⅡa7 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第41図、写真図版38)

調査範囲の西端から約51m東の調査範囲の西端よりEⅡ区西端部に位置し、DⅡx11陥し穴状遺構は北東に約12mの距離がある。遺構の南端が調査範囲外に延びている。

検出面の長軸は全長約2.8mで、底面は3mほどの規模があり、調査範囲外に延びる部分を含めると長軸は3.5m前後の全長と推定される。検出面の幅は約40cmから30cm、底面は10cm前後と若干バラツキがみられ、平面形は溝状である。深さは深い場所で約95cm、浅い場所で約70cmと中央部が深く長軸両端部分は浅くなる傾向がある。底面に副穴はない。断面形は、長軸両端の底面部壁面が大きく抉られ外方に張り出すフラスコ形をなし、短軸は検出面が広く底部よりほど狭くなる楔形に近い形状である。

埋土の土性は上部が砂質のシルトで下部がシルトと若干違いが見られ、色調も黒色・黒褐色・明褐色と差があり、全体が3層に細分されている。各土層がレンズ状の堆積であることから、自然堆積によって埋没した遺構と言えよう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構とは思いが、時期の特定はできない。

(2) DⅡx11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第41図、写真図版38)

調査範囲の西端から東に約64mの調査範囲の西端よりDⅡ区中央部に位置し、DⅢo12 陥

し穴状遺構は東に約104 mの距離がある。DⅡx9住居跡と重複しているが、当遺構の方が古い。

検出面の全長は約3.3 m、底面のそれは約4 m、検出面の幅は約50 cmから30 cm、底面は若干のバラツキはあるものの約15 cmほどの規模があり、平面形は溝状である。深さは約1 mから80 cmほどあり、長軸両端の断面形は底面よりの壁面が大きく外方に張り出すフラスコ形をなし、短軸のそれは壁が検出面は広く底面より狭い楔形に近い形状である。底面に副穴はない。

埋土は全体が3層に細分されているが、土性は上部が砂質シルトで下部がシルトである。色調は黒褐色と暗褐色であるが前者が主である。全体の土層がレンズ状の堆積であることから、自然堆積で埋没した遺構であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

(3) DⅢo12 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第42図、写真図版38)

調査範囲の西端から東に約169 mの調査範囲西端部よりDⅢ区の中央部に位置し、EⅢa17陥し穴状遺構は南東に45 mの距離がある。DⅢp12住居跡と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の全長は約2.8 m、底面は約2.6 mの規模があり、検出面の幅は約40 cmから30 cm、底面は約10 cmから20 cmほどあり、平面形は溝状である。深さは約60 cmほどとほぼ平均しており、底面に副穴はない。断面形は底面より検出面が幅広くなるY字形である。

埋土は全体がシルトの堆積であるが、色調には褐色・暗褐色・黒褐色があり、後者が多い。土層がレンズ状の堆積であることから、自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、埋土や形状から縄文時代の遺構であろう。

(4) EⅢa17 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第42図、写真図版38)

調査範囲の西端から東に約188 mよった調査範囲の西端部よりEⅢ区中央部に位置し、EⅢc18陥し穴状遺構は南東に約10 mの距離がある。他遺構と重複することなく単独で検出された。

検出面の長軸は約2.5 m、底面は約2.1 m、検出面の幅は約90 cmから60 cm、底面の幅は約20

cmから10cmの規模があり、検出面の平面形は長楕円形であるが、底面は溝状である。深さは約80cmとほぼ平均しており、底面はほぼ平坦であり副穴はない。長軸の断面形はほぼピーカー形に近いが、短軸は検出面付近が大きく広がる漏斗状である。

埋土は全体が5層に細分されているが、土性は最下層が砂質であるもののいずれもシルトであり、色調は褐色・暗褐色・黒褐色・明褐色などがあり、多様である。土層の堆積がレンズ状であることから、自然堆積で埋没した遺構と言えよう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土や形状から縄文時代の遺構と推定できるが、時期の特定はできない。

(5) EIIIc18 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第42図、写真図版38)

調査範囲の西端から東に約199mよった調査範囲の西端部EIII区東よりに位置し、DIVk7陥し穴状遺構は東に57mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約3.5m、底面の長軸は約3.8m、検出面の幅は約40cmから30cm、底面の幅は20cmとほぼ平均しており、平面形は検出面・底面ともに溝状である。深さは約50cmとほぼ平均しており、底面が平坦であることを示している。底面の副穴はない。長軸の断面形はピーカー形であるが、短軸は検出面付近の壁が外方に向くY字形に近い形状である。

埋土は全体が4層に細分されているが、土性はすべてシルトである。色調には黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色などがあり違いがみられる。土層の堆積状況はレンズ状の堆積であり、自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

(6) DIVk7 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第42図、写真図版39)

調査範囲の西端から東に約251mの調査範囲西端部よりDIVk7の西部に位置し、CVIn24陥し穴状遺構は東に約268mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約1.5m、底面は約1.6m、検出面の幅は約50cmから30cm、底面の幅は約40cmから20cmの規模があり、平面形は検出面・底面ともに変則的な溝状である。深さは約50cm

から40 cmとほぼ平均していることから、底面はほぼ平坦である。底面の副穴はない。長軸の断面形はピーカー形であるが、短軸は壁面上位が外方に開くY字形に近い。

埋土は全体が6層に細分されているが、土性はいずれもシルトである。色調は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・橙色などと差がある。埋土の堆積状況を観察すると南方向からの流入を示しているが、全体的にみると自然堆積による埋没と言えよう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、縄文時代の遺構と推定される。

(7) CVIn 24 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第43図、写真図版39)

調査範囲の西端から東に約520 m 離れた調査範囲の中央部 CVI区東端部に位置し、CVIa 1 陥し穴状遺構は東に10 mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約2 m、底面は約2.3 m、検出面の幅は約30 cmから20 cm、底面の幅は約20 cmから10 cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも溝状である。深さは約80 cmから70 cmあり、底面はほぼ平坦であり副穴はない。長軸の断面形は壁面が大きく外方に膨らむフラスコ形に近いが、短軸は細長い筒状である。

埋土の土性はすべてシルトの堆積であるが、色調は黒色・黒褐色・黄褐色などに細分され、全体が4層に分けられている。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土や形状から縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

(8) CVIa 1 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第43図、写真図版39)

調査範囲の西端から東に約529 m 離れた調査範囲の中央部 CVI区西端部に位置し、CVIa 2 陥し穴状遺構は東に約3 mの距離がある。重複する遺構はないが、北西端が調査範囲外に延びているため全体的なことは定かでない。

検出面の検出された長軸は約2.5 m、底面の長軸は約2.6 m、検出面の幅は約40 cmから30 cm、底面の幅は約20 cmから10 cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも溝状である。深さは約80 cmから70 cmあり、底面は平坦であるが縁が深く中央部が盛り上がり浅くなっている。

る。底面には副穴はない。断面形は、長軸はフラスコ形に近く短軸は細い筒状と言えよう。

埋土は全体が5層に細分されているが、土性にはシルトの他、粘土質シルトがあり、色調は黒色・黒褐色・褐色・暗褐色に分けられている。埋土の堆積がレンズ状であることから、自然堆積で埋没した遺構と言えよう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、埋土や形状から縄文時代の遺構と推定される。

(9) CVIa 2 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第43図、写真図版39)

調査範囲の西端から東に約532mよった調査範囲の中央部CVIa区の西端部に位置し、BVIx6陥し穴状遺構は東に約18.5mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約3.2m、底面の長軸は約3.2m、検出面の幅は約30cmから20cm、底面の幅は約15cmから10cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも溝状である。深さは約25cmから20cmとほぼ平均しており、底面は平坦であるが中央部がやや盛り上がっている。底面に副穴はない。長軸の断面形はフラスコ形に近いが短軸は楔形に近似した形状を示す。

埋土は全体が4層に細分されているが、土性はシルトの他、粘土質シルトがあり、色調には褐色と黒褐色がある。埋土の堆積状況から自然堆積で埋没した遺構であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土や形状から縄文時代の遺構と推定されるものの、時期の特定はできない。

10 BVIx6 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第43図、写真図版39)

調査範囲の西端から東に約548mよった調査範囲のほぼ中央部BVIx6区の西部に位置し、CVI7陥し穴状遺構は南に約40mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約3.6m、底面は約4.2mの規模があり、平面形は検出面・底面とも溝状である。深さは約1.2mほどあり、底面は縁ほど幾分深くなる傾向がある。底面に副穴はない。長軸の断面形はフラスコ形であるが、短軸の断面形は楔形である。

埋土は全体が4層に細分されているが、土性にはシルトと粘土質シルトがあり、色調には褐色と黒褐色がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、埋土の状況から縄文時代の遺構と推定される。

⑪ CVIi 7 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第44図、写真図版40)

調査範囲の西端から東へ約553mよった調査範囲の中央部CVI区西部に位置し、CVIg 11 陥し穴状遺構は北東に約19mの距離がある。CVIk 6 溝跡と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の長軸は約2.1m、底面の長軸は約2m、幅は検出面が約30cm、底面は約15cmの規模があり、平面形は検出面・底面ともに溝状である。深さは約60cm前後とほぼ平均し、底面は平坦であり副穴はない。長軸の断面形はややフラスコ気味であるが、短軸の断面形はU字形に近い形状である。

埋土は全体が5層に細分されているが、土性はいずれもシルトの堆積である。色調は黒色が多く、他に明黄褐色と暗褐色がある。埋土の堆積状況では、自然埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土や形状から縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

⑫ CVIg 11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第44図、写真図版40)

調査範囲の西端から東に約569mよった調査範囲の中央部CVI区西部に位置し、CVIb 16 陥し穴状遺構は北東に約28mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約2.4m、底面の長軸は約2.7m、幅は検出面は約30cm、底面は約10cmの規模があり、平面形は検出面・底面ともに溝状である。深さは約65cmほどあり、底面の中央部がやや深いもののほぼ平坦である。底面に副穴はない。長軸の断面形は壁面が外方に張り出すフラスコ形であるが、短軸は細く深いU字形である。

埋土はすべてシルトの堆積であるが3層に細分されており、色調には黒色・褐色・黒褐色がある。堆積状況の観察では自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土や形状から縄文時代の遺構と推定されるものの、時期の特定はできない。

03 CVIb 16 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第44図、写真図版40)

調査範囲の西端から東に約588mよった調査範囲のほぼ中央部CVI区の中央部に位置し、BXIa 12 陥し穴状遺構は東に485mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約2.5m、底面の長軸は約3mの規模があり、幅は検出面が約40cm、底面が約10cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも溝状である。深さは約70cmから40cmほどあり、長軸底面の中央部が深くなり縁が浅くなる特徴がある。底面に副穴はない。長軸の断面形は壁が外方に張り出すフラスコ形であるが、短軸は細いU字形に近い。

埋土は全体が6層に細分されるが、土性にはシルトと砂質シルトの他粘土がある。色調は黒色と黒褐色の他、暗褐色と黄褐色がある。埋土の堆積状況から自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、埋土や形状から縄文時代の遺構と推定される。

04 BXIa 12 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第44図、写真図版40)

調査範囲の西端から東に約1,071mよった調査範囲の東端から63mのBXI区の中央部に位置し、AXIa 6 溝跡と重複するが、本遺構の方が古い。

検出された検出面の長軸は約4m、底面の長軸は約3.9m、幅は検出面で約90cm、底面は約30cmの規模であり、遺構の一部が削平を受けていることから、全体規模は定かでない。平面形は検出面・底面ともやや幅の広い溝状である。深さは80cmほどあり、底面はほぼ平坦であり副穴はない。断面形は長軸・短軸ともにピーカー形に近い形状である。

埋土は全体が4層に細分されているが、土性は粘土が主体のほかシルトがあり、色調には黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色とそれぞれによって異なる色調を示す。埋土の堆積がレンズ状堆積であることから、自然埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定はできないが、埋土や形状から縄文時代の遺構と推定される。

3) 長方形型

当遺跡で検出されている陥し穴状遺構には既述のように3型あるが、本型は調査範囲全域から29基検出されており、検出数としては2番目である。

(1) EⅡa4 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第45図、写真図版41)

調査範囲の西端から東に約38mほどのEⅡ区の西端部よりに位置し、DⅡx6 陥し穴状遺構は北東に約11mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約1.1mで、底面は約60cmほど、検出面の短軸は80cmで底面が約20cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形に近いが、底面は隅丸の長方形である。深さは約1.35mほどあり、底面はほぼ平坦であり副穴はない。長軸の断面形は検出面沿いの上部壁が外方に向くピーカー形に近く、短軸は壁の上部が大きく外方に向く漏斗形に近似した形状である。

埋土は全体が4層に細分されているが、最上層は砂質シルトの他はシルトが堆積し、色調は褐色・黒褐色・黄褐色があり、前者が多い。土層の堆積状況から自然埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(2) DⅡx6 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第45図、写真図版41)

調査範囲の西端から東に約46mよった調査範囲の西端部DⅡ区の西端部よりに位置し、DⅡs17 陥し穴状遺構は北東に48mの距離がある。DⅡx6 住居跡と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の長軸は約1mで底面は約60cm、検出面の短軸は約70cm、底面は30cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも長方形であるが、重複部分の形状は若干乱れがある。深さは80cmから35cmほどあり、底面は若干起伏があり副穴はない。長軸の断面形は壁の上部が外方に大きく開くピーカー形であるが、短軸はバケツ形に近い形状である。

埋土は4層に細分されているが、土性には砂質のシルトとシルトがある。色調は黒褐色を主体に黄褐色がある。土層から堆積状況を検討すると、自然堆積とするには幾分不自然であることから、一部は人為的に埋め戻されている可能性が推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(3) DⅡs17 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第45図、写真図版41)

調査範囲の西端から東に約91mの調査範囲西端部のDⅡ区中央部に位置し、DⅢu3陥し穴状遺構は東に約43mの距離がある。DⅡs17土坑-2と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の長軸は約90cmから80cmで短軸は約50cm、底面は長軸が約70cmで短軸が約30cmほどの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形気味の長方形である。深さは検出面から約1.3mほどあり、底面はほぼ平坦である。底面の副穴はない。長軸の断面形はピーカー形で短軸は試験管的である。

埋土の土性は粘土質シルトを主体に砂質のシルトが堆積し、全体が8層に細分されている。色調は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色などがある。土層の堆積状況から自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(4) DⅢu3 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第46図、写真図版42)

調査範囲の西端から東に約134mの調査範囲西端部よりDⅢ区の西部に位置し、DⅢu4陥し穴状遺構は南東に約3.5mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約1mで短軸は約90cm、底面の長軸は約1.5mで短軸は約20cmの規模があり、平面形は検出面は楕円形に近いが底面は楕円形気味の長方形である。深さは約1.3mから1.2mであるが、底面はほぼ平坦であり副穴はない。長軸の断面形は壁の上部が外方に大きく開くバケツ形に近似し、短軸は漏斗形に近い形状である。

埋土は全体が10層に細分されているが、土性は最下層が粘土質シルトである以外はシルトの堆積であり、色調には黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・明黄褐色などがある。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(5) DⅢu4 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第46図、写真図版42)

調査範囲の西端から東に約137mの調査範囲西端部DⅢ区の西端部に位置し、DⅢv6 陥し穴状遺構は東に約11mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約1.8mで短軸は約80cm、底面の長軸は1.35mで短軸は約30cmほどの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが、底面のそれは長方形である。深さは1.3mほどであり、底面は平坦で副穴はない。長軸の断面形は壁の上部が外方に大きく開くバケツ形に近い形状であるが、短軸は漏斗形である。

埋土の土性はすべてシルトであるが、全体が11層に大別され、さらに細分されている。色調には黒色・黒褐色・暗褐色・明褐色・明黄褐色などがある。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(6) DⅢv6 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第46図、写真図版42)

調査範囲の西端から東に148mの調査範囲の西端部DⅢ区の西端部よりに位置し、DⅢu6 陥し穴状遺構は北東に約5mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約1.8mで短軸は約90cm、底面の長軸は約1.6mで短軸は約30cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形的であるが底面はほぼ長方形である。深さは約1mほどあり、底面は平坦で副穴はない。長軸の断面形はピーカー形に近いが、短軸は漏斗形に近似した形状である。

埋土は全体が8層に細分されているが、土性は砂質シルトを主体にシルトが堆積し、色調は黒色・褐色・黒褐色・暗褐色などがある。土層から堆積状況を観察すると、自然堆積による埋没と推定される

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(7) DⅢu8 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第47図、写真図版43)

調査範囲の西端から約153m東によった調査範囲西端部DⅢ区西部に位置し、DⅢs9陥し穴状遺構-1は北東に10mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約1mで、短軸は約1.8m、底面は長軸が約1.7mで短軸が約60cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも長方形である。深さは約50cmほどあり、底面は平坦で副穴はない。長軸の断面形は浅い皿形に近く、短軸は変則的であるがピーカー形をなす。

埋土はすべて砂質シルトの堆積であるが5層に細分され、色調は黒色・褐色・黒褐色・黄褐色がある。堆積状況を観察すると自然堆積とするにはやや不自然ではあるが、自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(8) DⅢs9 陥し穴状遺構-1

〔遺構〕(第47図、写真図版43)

調査範囲の西端から約156m東によった調査範囲西端部DⅢ区西部に位置し、DⅢs9陥し穴状遺構-2は東に約1mの距離がある。DⅢs8住居跡状遺構と重複するが、本遺構の方が古い遺構である。

検出面の長軸は約1.4mで短軸は約80cm、底面の長軸は1mで短軸は30cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形気味の長方形である。深さは約60cmから50cmほどあり底面は平坦である。副穴はない。断面形は長軸・短軸ともピーカー形である。

埋土は4層に細分され土性は粘土・シルト・砂質のシルトである。色調には黒色・黒褐色・黄褐色がある。自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(9) DⅢs9 陥し穴状遺構-2

〔遺構〕(第47図、写真図版43)

調査範囲の西端から約157m東、調査範囲西端部のDⅢ区の西部よりに位置し、DⅢr10陥し穴状遺構-2は北北東に約6mの距離がある。DⅢs8住居跡状遺構と重複するが本遺構が古い。

検出面の長軸は約1.4mで短軸は約80cm、底面の長軸は約1.2mで短軸は約60cmの規模があり、検出面の平面形は一端は長方形であるが一端は楕円形であるが、底面は楕円形的である。深さは約60cmほどあり底面は平坦で副穴はない。断面形は長軸・短軸ともバケツ形である。

埋土は中間に粘土の堆積があるものの他はすべてシルトの堆積であり、全体が9層に細分されている。色調は黒褐色が主体に黒色と黄褐色がある。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(10) DⅢr10 陥し穴状遺構-2

〔遺構〕(第47図、写真図版44)

調査範囲の西端から約160.5m東の調査範囲西端部、DⅢ区の西部に位置し、DⅢp11陥し穴状遺構は北東に約10mの距離がある。DⅢq9溝跡と重複するが、本遺構が古い遺構である。

検出面の長軸は約1.5mで短軸は約80cm、底面の長軸は約1.2mで短軸は約30cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも長方形である。深さは約80cmほどあり底面は平坦である。副穴はない。長軸の断面形はピーカー形であるが短軸は漏斗形に近い形状である。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、色調はすべて黒褐色であるが色調の微妙な違いから4層に細分されている。自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

(11) DⅢp11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第48図、写真図版44)

調査範囲の西端から約165m東の調査範囲西端部、DⅢ区の中央部に位置し、DⅢr11陥し穴状遺構は南に9mの距離がある。DⅢp12住居跡と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の長軸は約 1.3 m で短軸は約 60 cm、底面の長軸は約 1.1 m で短軸は約 30 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともに楕円形的な長方形である。深さは約 70 cm ほどあり、底面は平坦で副穴はない。断面形は長軸・短軸ともバケツ形である。

埋土は全体が 6 層に細分されているものの土性はすべてシルトであり、色調の変化によって細分され、色調は黒褐色を主体に黒色がある。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

02 DⅢr11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 48 図、写真図版 44)

調査範囲の西端から約 166 m 東の調査範囲西端部、DⅢ区の中央部に位置し、DⅢs11 陥し穴状遺構は南に約 5 m の距離がある。DⅢr11 土坑と DⅢr9 溝跡が重複するものの本遺構がもっとも古い遺構である。

検出面の長軸は約 2 m で短軸は約 70 cm、底面の長軸は約 1.3 m で短軸は約 30 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともに長方形である。深さは約 70 cm ほどあり、底面は平坦で副穴はない。断面形は長軸・短軸ともにピーカー形に近い形状である。

埋土はすべてシルトの堆積であるが、微妙な色調変化で 4 層に細分され、色調には黒褐色を主体に暗褐色がある。土層から堆積状況を観察すると、2・3 層の堆積状況に不自然さを感じざるを得ないが、この部分は検出面で確認されていた柱穴状の土坑の埋土であることから、全体としては自然堆積による埋没と言えよう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

03 DⅢs11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 48 図、写真図版 45)

調査範囲の西端から約 167 m 東の調査範囲西端部、DⅢ区の中央部に位置し、DⅢs14 陥し穴状遺構は東に 11 m の距離がある。DⅢn18 溝跡と重複するが、本遺構の方が古い遺構である。

検出面の長軸は約 1.85 m で短軸は約 1.1 m、底面の長軸は約 1.4 m で短軸は約 60 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともに変則的であるが長方形である。深さは約 30 cm と浅く、底面

は平坦で副穴はない。断面形は長軸・短軸とも浅い皿形である。

埋土は全体が4層に細分されているが土性はすべてシルトであり、色調は黒褐色を主体に褐色がある。自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

04 DⅢe 14 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第48図、写真図版45)

調査範囲の西端から約182m東によった調査範囲の西端部、DⅢ区の中央部に位置し、CVw 22 陥し穴状遺構とは東に228mの距離がある。DⅢq 9 溝跡とDⅢo 17 溝跡に重複するが、本遺構が古い遺構である。

検出面の長軸は約1.7mで短軸は約1.1m、底面の長軸は約1.45mで短軸は約50cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形気味の長方形である。深さは70cmから30cmと差があり、北端の底面が深くなっている。副穴はない。断面形は長軸・短軸とも浅いバケツ形に近似する。

埋土は全体が9層に細分されるが、土性はシルトを主体に砂質シルトがある。色調は黒色・黒褐色・褐色・暗褐色・黄褐色など多様である。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕(第2図、写真図版302)

縄文土器の口縁部から体部下位を残存する深鉢1個体(107)と須恵器大甕の体部破片1点(3086)、鉄釘の先端部1点(86)が出土しているものの、縄文土器以外は検出面での出土であることから本遺構に直接共伴するかは定かでない。

縄文土器は体部に0段多条の原体の斜め回転による単節横行縄文の付された深鉢であり、器形や縄文などから縄文後期か晩期の所屬と推定される。須恵器大甕は器表に並行叩き具痕、内面に格子目当て具痕を持つ。鉄釘は断面が方形を示し、先端が尖っている。

〔遺構の時期〕

出土した遺物の内、明確に埋土内から出土したのは縄文土器1点であることから、本遺構は縄文時代後期か晩期に属するものと推定される。

09 CVw 22 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第49図、写真図版45)

調査範囲の西端から約411m東によった調査範囲西部、CV区の東端部に位置し、CVIk 25 陥

し穴状遺構とは東に約112 mの距離がある。CVu 19 掘立柱建物跡-1と重複するが、本遺構の方が古い遺構である。

検出面の長軸は約1.6 mで短軸は約1.3 m、底面の長軸は約1.2 m、短軸は約1 mの規模があり、平面形は検出面・底面ともに楕円形的な長方形である。深さは約90 cmほどあり、底面のほぼ中央には径15 cm、深さ約30 cmの副穴がある。断面形は長軸、短軸ともピーカー形である。

埋土は非常に複雑な堆積状況を示し、土性はすべてシルトであるが全体が15層に細分されている。色調には黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色・明黄褐色などがあり、一様ではない。堆積状況を観察すると複雑な堆積状況を示しており、自然堆積とするには不自然であり人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

09 CVIk 25 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第49図、写真図版45)

調査範囲の西端から約523 m東よった調査範囲の中央部、CVI区の最東端部に位置し、CV 125 陥し穴状遺構は南に約2.5 mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約1.5 mで短軸は約80 cm、底面の長軸は約1.4 mで短軸は約40 cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形的であるが底面は長方形的である。深さは約60 cmほどあり、底面は平坦で副穴はない。長軸の断面形は箱形に近似するが、短軸はバケツ形である。

埋土の土性はすべてシルトであるが色調などから5層に細分されている。色調は黒褐色と黄褐色である。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

07 CVII 25 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第49図、写真図版46)

調査範囲の西端から東に約523 mよった調査範囲中央部、CVI区の東端部に位置し、BVII m 22 陥し穴状遺構は東に約89 mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約1.4 mで短軸は約70 cm、底面の長軸は約1.2 mで短軸は約20 cmの規模が

あり、検出面の平面形は楕円形的であるが底面は長方形である。深さは約70 cmから50 cmと中央部が浅く長軸両端が深くなっており、底面の副穴はない。長軸の断面形は浅いピーカー形であるが、短軸の断面形は底面が丸くなるバケツ形である。

埋土の土性はすべてシルトであるが、色調の微妙な変化によって4層に細分され、色調には黒色・黒褐色・黄褐色がある。堆積状況の観察では自然堆積によって埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

18 BⅦm 22 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第49図、写真図版46)

調査範囲の西端から東に約612 mよった調査範囲中央部、BⅦ区の東端部よりに位置し、BⅦp 24 陥し穴状遺構-2は南に約11.5 mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約1.2 mで短軸は約1 m、底面の長軸は約80 cmで短軸は約50 cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが底面は長方形である。深さは約1.1 mほどあり、断面形は長軸・短軸ともにバケツ形に近似した形状である。底面の副穴はない。

埋土は全体が7層に細分されているが、土性は下層に砂質のシルトが堆積する以外はすべてシルトの堆積である。色調には黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色などがある。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

19 BⅦp 24 陥し穴状遺構-2

〔遺構〕(第50図、写真図版46)

調査範囲の西端から東に約618 mよった調査範囲中央部のBⅦ区の東端部よりに位置し、BⅦn 25 陥し穴状遺構は北東に約7.5 mの距離がある。CⅦg 3 溝跡と重複するが、本遺構の方が古い遺構である。

検出面の長軸は約1.2 mで短軸は約1 mの規模があり、底面の長軸は約80 cm、短軸は約50 cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが、底面は長方形である。深さは約1.7 mほど

あり、断面形は長軸・短軸とも変則的ではあるがピーカー形に近似する。底面の副穴はない。

埋土の土性はすべてシルトであるが、全体が8層に細分され、色調には黒褐色・褐色・暗褐色・黄褐色がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

Q0 BVI_n 25 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第50図、写真図版47)

調査範囲の西端から東に約622mよった調査範囲の中央部、BVI区の最東端部に位置し、BVI_k 2 陥し穴状遺構は北東に約7.5mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約1mで短軸は約80cm、底面の長軸は約60cmで短軸は約30cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形気味の長方形である。深さは約1.2mほどあり、断面形は長軸・短軸ともピーカー形である。底面の副穴はない。

埋土の土性はすべてシルトの堆積であり、色調には黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色がある。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

Q1 BVI_k 2 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第50図、写真図版47)

調査範囲の西端から約630m東の調査範囲中央部でBVI区の西端部に位置し、BVI_o 3 陥し穴状遺構は南に10mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約1.5mで短軸は約1.1m、底面の長軸は70cmで短軸は40cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形的である。深さは約1.5mほどあり、断面形は長軸・短軸ともバケツ形である。底面の副穴はない。

埋土は全体が13層に細分されているが、土性は最下層が砂質以外はすべてシルトの堆積であり、色調は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色などがあり多様である。堆積状況から自然堆積により埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

㉞ BⅧo3 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第50図、写真図版47)

調査区の西端から約635m東の調査範囲中央部、BⅧ区の西端部に位置し、BⅧp3 陥し穴状遺構は南西に約4mの距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約1.1mで短軸は約1m、底面の長軸は約50cmで短軸は約34cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが底面は長方形である。深さは約1.3mほどあり、断面形は長軸・短軸とも漏斗形に近似した形状である。底面の副穴はない。

埋土の土性はすべてシルトであるが、色調などによって7層に細分されている。色調は黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色などがある。堆積状況から自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

㉟ BⅧp3 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第51図、写真図版48)

調査区の西端から約633m東の調査範囲中央部、BⅧ区の西端部よりに位置し、BⅧw3 陥し穴状遺構は南に29mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約1.1mで短軸は約90cm、底面の長軸は50cmで短軸は約30cmの規模があり、検出面の平面形は楕円形であるが底面は長方形である。深さは約1.1mほどあり、断面形は長軸・短軸とも漏斗形に近似している。底面の副穴はない。

埋土は全体が5層に細分されているが、土性はすべてシルトの堆積であり、色調は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色がある。自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

20 BⅦw 3 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 51 図、写真図版 48)

調査範囲の西端から約 635 m 東の調査範囲中央部、BⅦ区の西端部よりに位置し、BⅦw 4 陥し穴状遺構とは東に 3.5 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約 80 cm で短軸は約 50 cm、底面の長軸は約 60 cm で短軸は約 20 cm の規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形的な長方形である。深さは約 1.2 m ほどあり、断面形は、長軸はピーカー形であるが短軸の北東壁が不規則であるもののほぼピーカー形として大過ないであろう。底面の副穴はない。

埋土は中位層が粘土質のシルトであるほかはシルトの堆積であり、全体が 9 層に細分されている。色調には極暗褐色・暗褐色・褐色・黄褐色・明黄褐色など多様であり、これらが交互に堆積する。堆積状況の観察から自然埋没した遺構と理解できよう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

21 BⅦw 4 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 51 図、写真図版 48)

調査範囲の西端から約 639 m 東によった調査範囲中央部、BⅦ区の西部に位置し、BⅦs 6 陥し穴状遺構は東に 17.5 m の距離がある。他遺構との重複はない。

検出面の長軸は約 80 cm で短軸は約 60 cm、底面の長軸は約 40 cm で短軸は約 30 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともに楕円形的な長方形である。深さは約 1 m ほどあり、断面形は変則的であるがピーカー形である。底面の副穴はない。

埋土の土性はすべてシルトの堆積であるが全体が 6 層に細分されている。色調は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・褐色・黄褐色などであり、多様な色調を示す。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

22 BⅦs 6 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 51 図、写真図版 49)

調査範囲の西端から約 648 m 東によった調査範囲中央部、BⅦ区の西部よりに位置し、BⅦv

6 陥し穴状遺構は南に約 13 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約 1.4 m で短軸は約 90 cm、底面の長軸は約 1.3 m で短軸は約 50 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともに楕円形気味の長方形である。深さは約 80 cm ほどあり、底面には長軸のほぼ中軸線上に径約 10 cm・深さ約 40 cm の副穴が 2 基約 50 cm の間隔で検出されている。断面形は長軸・短軸ともピーカー形に近似した形状である。

埋土は全体が 8 層に細分されているが、土性はすべてシルトである。色調は黒色と黒褐色を主体に暗褐色と褐色がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

Q7) BVIv6 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 52 図、写真図版 49)

調査範囲の西端から約 647 m 東によった調査範囲中央部、BVIv 区の西部よりに位置し、BVIk 7 陥し穴状遺構は北に約 44 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約 1 m で短軸は約 80 cm、底面の長軸は約 60 cm で短軸は約 20 cm の規模があり、検出面の平面形は楕円形的であるが底面は長方形である。深さは約 90 cm ほどあり、底面は若干起伏があり深さも差がみられる。断面形は長軸・短軸ともピーカー形である。

埋土はすべてシルトであるが、全体が 5 層に細分され、色調には黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色などがある。堆積状況から自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

Q8) BVIk 7 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第 52 図、写真図版 49)

調査範囲の西端から約 648 m 東によった調査範囲中央部、BVIv 区の西部よりに位置し、BVIk 11 陥し穴状遺構は東に約 420 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約 2.05 m で短軸は約 70 cm、底面の長軸は約 1.2 m で短軸は約 20 cm の規模があり、平面形は検出面・底面とも長方形である。深さは約 60 cm ほどであり、長軸の断面形は浅皿形であるが短軸は V 字形である。

埋土の土性はすべてシルトであるが、全体は5層に細分され、色調には黒色・黒褐色・暗褐色などがある。堆積状況から自然埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期は特定はできないものの、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定できる。

29 BXB 11 陥し穴状遺構

〔遺構〕(第52図、写真図版50)

調査範囲の西端から約1069m東によった調査範囲最東端で東端から65m西のBXX区の中央部に位置する。BXB 11溝跡と重複するが、本遺構の方が古い遺構である。

検出面の長軸は約4mが検出され一部は溝の掘削を受けており、短軸は約1m、底面は長軸の一部が掘削を受けているものの3m、短軸は約50cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも長方形である。深さは約30cmと削平を受けて浅く、断面形は長軸・短軸とも浅皿形である。

埋土は全体が7層に細分されているが、土性はすべてシルトであり色調はすべて黒褐色である。

堆積状況は不自然であることから、人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕(第2図3087～3089、写真図版302)

検出面と埋土の最上部から土師器の破片が3点(3087～3089)出土している。いずれも甕の破片であるが、前者2点は口縁部、後者は体部の破片である。口縁部は内外面がヨコナデ、体部は外面がハケメヤケズリ内面ナデである。このような特徴は前者が広義の奈良時代、後者は平安時代の特徴と一致している。

〔遺構の時期〕

出土している遺物がすべて古代の土師器ではあるが、出土状態が必ずしも時期を特定できる状況ではないので、埋土の堆積状況や形状から縄文時代の遺構と推定される。

4. 遺構外の出土遺物

粗掘り中や遺構検出中に縄文時代に関係する土器や石器が出土しているが、量的には少量である。出土した範囲は西端部よりのDⅡ区・DⅢ区・DⅣ区と東端部よりのX区・XI区・XⅡ区・XⅢ区などであり、開田時の削平によって旧表土が残存していないことにより、調査範囲の中央部からは出土していない。

本項では土器と石器に分け、さらにそれぞれのなかで分類をし、記述することとする。

1) 土器

出土した土器の完形となる個体は2点のみであり、他はすべて破片の出土である。土器の内容を観察すると各種の特徴を具備する破片が混在しており、時期的には前期から晩期までに該当する。

以下ではそれらの特徴によって細分し、その内容を詳述することとする。

(第I群) (第3図10、写真図版309)

早期に属する土器をいれたが、1点(10)のみの出土と少ない。出土地点はDIV区で検出された平安時代のDIV14住居跡の埋土内である。内外面に条痕を付す器厚の薄い特徴を示す土器片であるが、条痕は内外面とも並行する条線であり、何本かを単位とする櫛状の工具を使用して付された可能性が推定される。条痕の付される方向は、外面は斜め方向に引かれて中央で接する部分が盛り上がる山形状をなし、内面はほぼ並行に横方向に付されるのみである。焼成は非常に良く、胎土は砂粒が若干混入するものの緻密な粘土が使用されている。破片は体部の小破片であるため全体的な器形や底部形態とも不明である。

このような特徴から、この土器片は早期中葉の貝殻・沈線文系土器群末期の青森県ムシリ貝塚から出土したムシリI式土器や関東地方の神奈川県野島貝塚から出土した野島式土器に近似した特徴を持っており、時期や土器形式がこれらとほぼ同じと理解できよう。

(第II群) (第3図11～16、写真図版309)

前期初頭に位置づけられると推定される6点(11～16)の土器片を当てた。土器片は調査範囲西部のEⅢ区やDIV区で検出された遺構の埋土や粗掘り中に表土から出土しており、他の地点からの出土はない。これらの土器片はすべて胎土に繊維を混入するいわゆる繊維土器と呼称される前期初頭を特徴付ける共通した特徴を持つ。11の底部付近破片の形態から推定される器形は、底部が丸底ないしは平底となる器形であるが、その他の詳細は不明である。器厚はいずれも比較的厚く砂粒のほか繊維が多量に混入する特徴があり、焼成は比較的良好である。器表の縄文はLR横回転による組紐縄文①②の他、12～15の0段多条のLR横回転による単節斜行縄文がもっとも多く、回転方向を変えて表出した羽条縄文を付す例③も見られる。

このような特徴を持つ土器群は前期初頭に位置づけられている、青森県の早稲田貝塚第VI群土器や函館市の春日町遺跡の春日町式土器に類例を求めることができ、当遺跡出土のこれらの土器片もほぼ前期初頭に位置付けられ、既述した遺跡出土の土器と共通するものと推定される。

〔第Ⅲ群〕（第3図17～21、写真図版309）

前期末の大木式土器系に位置づけられる土器片を当てたが、5点（17～21）の出土と少ない。これらの土器片は1点がDⅢ区の平安時代の住居跡埋土内からの出土の他は、すべてAXⅡ区から粗掘り中に表土からの出土である。本群の特徴は、土器片がすべて口縁部ではあるものの小破片であることから、詳細は必ずしも定かでないが、頸部に横走する隆帯を貼付する例（17・18）と貼付のない例（19～21）があり、さらに直線文や山形文・円文などの並行沈線による沈線文が付されている。内面は良く磨かれ光沢を示す例もある。体部の縄文はLR横回転による単節斜行縄文と結節回転文が付されている。器種や器形は不明であるが、破片の状況から深鉢かキャリパー形の器形と推定される。胎土は比較的粒子の細かい粘土に砂粒を混入した状態をなし、繊維の混入は見られない。焼成は良好であるが、やや脆いところがある。

このような特徴は前期末に位置付けられている大木6式土器の特徴の一部に近似しており、ほぼこの時期に属し、大木6式土器の系譜に入る土器群と理解できよう。

〔第Ⅳ群〕（第3・4図22～35、写真図版309・310）

中期に位置づけられる土器を本群としたが²、器面に施文される文様の特徴によって2種類に細分される。

1類-22～24の土器片が相当する。調査範囲西部のDⅢ区・DIV区のほかAXⅡ区から出土している。特徴は、器表にLR縦か横回転による単節斜行縄文が付された後、円弧を描く半軟竹管による並行沈線の施文と細い隆帯の両側に沈線を付す隆線文と呼ばれる手法による施文（23・24）があることである。胎土は非常に緻密であるが砂粒の混入が見られ、焼成や器面調整は良好である。このような特徴は大木8A式土器の特徴に近似していることから、時期的にも系譜的にも大木8A式土器に相当する土器と考えられる。

2類-25～35の11点が該当する。これらの土器はすべてAXⅡ区からの出土である。この土器の全体的な特徴は、縄文の付された器面が沈線で区画された後、区画範囲の不要な縄文を磨消するいわゆる磨消縄文手法によって施文されることである。体部の縄文はLRやRLの縦か横回転による単節斜行縄文が付されている。器形は不明であるが器種は深鉢と推定される。胎土は緻密な粘土に砂粒を混合して調整され、焼成は良好である。このような特徴は中期末の大木9式や同10式に見られる特徴であることから、ほぼこの時期に位置付けられる土器群であろう。

〔第Ⅴ群〕（第4図36～45、写真図版310）

後期に属すると考えられる土器片を当てたが、施文に異なる様相を示す土器片も含まれており、その特徴によってさらに細分される。

1類-36～40は基本的には磨消縄文による文様が特徴であるが、中期末の同様な磨消縄文による文様と比較すると、中期の場合は磨消する沈線での区画が円形的であつたものが、本類の場合は蛇行する区画とか山形にするなどの違いが見られる。口縁部の造り方も折り返した所謂複合口縁の例⁹⁹もある。体部の縄文は撚り糸文が多い。これらの土器片は調査範囲の西部DⅢ区からDIV区での出土が多い。このような特徴は後期初頭に多く見られることから、本類の土器もほぼ後期初頭に位置付けられるものとして大過ないと推定されるが、土器型式は不明である。

2類-41～45の5点が該当するが、CⅡ区からDⅢ区での出土が多い。特徴は磨消縄文による施文であるが、1類との違いは沈線による区画が幅狭くなり、縄文を付す原体が細く付された縄文も筋が小さいことである。また、口縁部は波状をなす例¹⁰⁰と平縁¹⁰¹があり、前者は富士山的な山形の突起状をなす波状である。体部の縄文は原体LR縦回転による単節斜行縄文である。このような特徴は後期でも末期に良く見られることから、本類の土器もほぼ同時期の土器群とできよう。

〔第VI群〕(第3～5図8・46～69、写真図版309・310)

晩期に属すると考えられる土器を入れたが8以外は破片であり、出土地点は調査範囲の西部Ⅲ区とⅣ区のほか、中央部のⅦ区と東端部のⅩ区などからの出土が多い。出土した土器の文様などの特徴を見ると、さらに細分される。

1類-46～48の3点であるが、46は鉢、それ以外は深鉢と器種が違う可能性はあるものの、文様の雰囲気異なる土器片も含むが、49以降の土器片とはさらに違う要素を持つことから取り敢えず一括した。46は鉢の口縁部破片であるが、細かな縄文を付す頸部を沈線で区画して不要な縄文を磨消した文様を施文する。47と48は深鉢と推定されるが、頸部の文様が前者は無文の器表に横走沈線を付し、後者は頸部を無文とする。端部は前者では指頭押圧による刻みが付され、後者の場合は篋先による縦位の刻みを付している。このような特徴は晩期の大洞C2式に近い特徴であることから、ほぼこの時期に該当するであろう。

2類-49～69の21点が該当する。

〔第Ⅶ群〕(第175図70～94、写真図版310・311)

本群には所謂粗製土器を当てたが、時期は特に特定していない。土器の持っている特徴と雰囲気などから、前期末から後期までの土器を含んでいるものと推定される。

体部の縄文には原体RLやLRの縦回転や横回転による単節斜行縄文(70～79)のほか、同種か2種類の原体を連結させた原体を縦回転させた羽条縄文(77・80～82)や撚り糸文(83～84)などがある。また、80・81には原体の末端処理と推定される結節回転文がある。88～93

は同一個体の破片と推定されるが、体部に施文されているのが刺突文なのか縄文なのか判断としないが、縄文らしい文様が施文されている。

94・95・96は器表に縄文や他の文様をまったく施文しない所謂無文土器である。時期的には後期か晩期と推定されるが特定できない。

〔第Ⅷ群〕(第175図97～103、写真図版311)

底部の破片である。一部は体部下位を若干残す破片もあるが、本群で特に対象としたのは底面に網代痕を付す土器である。出土した土器の全体量が少ないので底部破片も少量である。それと1点であるが、輪高台の付く例も見られる。しかし、底部だけで所属時期を特定することは困難であり、前期末から後期までの土器を含むものと推定される。

2) 石器(第9～19図、写真図版303～308)

当遺跡の発掘調査で出土した黒曜石以外の石器は全体で126点であるが、この中には平安時代の住居跡から出土した砥石などや明らかに縄文時代の石器ではないと判断される物も含まれているが、本項では縄文時代の石器と思われる物と遺構外から出土した平安時代の砥石などについて記述することとする。

当遺跡で検出された縄文時代の遺構は土坑と陥し穴状遺構が主で住居跡が1棟と少ないことから、出土した一般的な器種も縄文時代の遺構ではなく、平安時代の遺構に共存する形で出土した物がほとんどである。以下では器種毎に分類し記述することとする。

石 鏃(第6図1～14) - 14点の出土であるが、6点が平安時代の住居跡埋土内から出土したが、残る8点は粗掘り中や遺構検出中に主に表土内から出土している。

出土した14点を基部の作り方、特に基部の作り出しで分類すると、13・14を除く12点は所謂無基式であるが、この12点はさらに平基2点(1・2)、円基2点(3・4)、凹基9点(5～12)に細分され、凹基の内2点は凹みが僅かで平基に近い器形である。全体的な器形は基本的には三角形であるが、正三角形に近い例や二等辺三角形の例もあり、さらに砲弾形に近い形状もある。

大きさを全長で比較すると、最大は4.5cmで最小が1.6cmでもっとも多いのは2cm台の8点であり、幅は最大2cm、最小1.2cmで殆どが1cm台と大小関係が著しく、重さについても最大が6.05gで最少が0.5gとこの傾向と一致する。基部に基を作り出す有基式は13と14の2点であるが、13が一般的な有基式であり、14はいわゆるアメリカ式石鏃である。石材は奥羽山地系の頁岩系の硬質泥岩が6点ともっとも多く、その他に北上山系古世界の粘板岩やチャート、奥羽山地系の流紋岩・凝灰岩類、産地不詳の黒曜石と玉髄がある。

石 匙(第6図15・16) - 2点の出土であるが、いずれも平安時代やそれ以降の時期の遺構

に併せて出土し、15は横型で16は縦型である。形はどうあれ横型は下縁を、縦型は右側縁に裏面から表面への剥離調整で刃部を作り出し、横型は中央の右側、縦型はやや右側に握みを付す。大きさは横型の幅と縦型の長さがほぼ同様であり、横型の長さと同型の幅は1cmの違いがある。石材は奥羽山系の凝灰質泥岩である。

石 籠（第7・6図17～20）—4点の出土であるが、17と20は平安時代の住居跡の埋土内からの出土であるが、他の2点は粗掘り中に表土からの出土である。17と18～20では趣を若干異にし、17はいわゆる三味線の楕形に近い形状をなし、裏面に一次剥離面を残している。側縁部は表裏両面への剥離調整で刃部を作出されるが、先端の刃部は一次剥離面のみで特に調整剥離はない。他の3点は基本的な平面形は略三角形であるものの周縁部全体が表裏両面への調整剥離で刃部が作り出され17の様相とは若干異なる。石材はいずれも奥羽山系の凝灰岩質や泥岩質が使用されている。

搔 器（第7～9図21～38）—剥片の先端部に刃部を作出した石器を搔器として分類したが、全体で18点の出土である。これらは9点は古墳の周溝部埋土や平安時代の住居跡埋土内などからの出土であるが、他は粗掘りや遺構検出中の出土である。平面的な形状は一定の形が見られず、さらに大小関係も差が著しく一概に平均化することは困難であり、かつては将に不定形石器と呼ばれた由縁である。平面形は縦長なもの、横長なもの、細長いブレード状剥片を使用したもの等各種見られ、平面形や大きさの違いは使用されている剥片の剥ぎ取り方と剥片の選択のされ方によって結果的に違いが出たものであろう。刃部は基本的に先端や下端に作り出されるが、他に右側の側縁部にも刃部を作出するものや逆に左側の側縁部にも作出するもの、さらに上端以外の全面に刃部を作り出す例など様々である。また、刃部を作出する際の剥離が裏面から表面だけに限られる例と両面に剥離される例があるものの、全体としては前者が多い。石材のほとんどは奥羽山地系の凝灰岩系や泥岩系を素材としているが、一部に鉄石英や玉髓が使用されている。

削 器（第9・10図39～48）—削器としたのは剥片の側縁部に刃部を作出したものを当種と分類したが、全部で10点の出土である。1点が溝の埋土内からの出土であるが、他はすべて粗掘りや遺構検出中などに出土した。素材とされた剥片は殆どが縦長のものを使用し、その右側縁部や左側縁部、または両側縁部に裏面から剥離調整によって刃部を作出している。また、一部に表面から裏面に剥離される例もあり、さらに剥離調整にも精粗の個体差が見られる。大きさも個体によって大小差が大きい。これは素材とされた剥片の選択に起因するものであり、大型剥片からは大型が、小型剥片からは小型の製品がつくられている。石材は1点(6)が夏油川流域古生界産の粘板岩であるが、他はすべて奥羽山地系の凝灰岩質や泥岩質の原石を素材としている。

使用痕のある剥片（第10・11図49～57）—本種と分類したのは刃部の作出が特に人為的

な剥離調整によって作出されたとは認定できないが、刃部に使用時に付着したと推定される刃こぼれの観察される剥片を当てたが、全部で9点の出土である。4点は平安時代の住居跡や古墳の主体部からの出土であるが、他は粗掘り中や遺構検出中に表土から出土している。形態は使用された剥片の形に大きく影響を受けていると推定されるが、基本的には削器の形態とほぼ同じ様相を示し、どちらかという縦長の剥片を素材とする例が多い。使用される部位は側縁部が多いものの一部に先端部の例もある。しかし、全体としては小範囲にとどまり、継続して長時間使用された結果とは思えず、一度使用してその後は廃棄された物ではないかと推定される。石材はすべて奥羽山地系の凝灰岩質や泥岩質の原石から採取された剥片を使用されている。

石 核 (第12・13図58～63) - 石核としたのは大型の剥片や自然面を多く残し、いろいろな方向から剥片を採取した状況を残している礫であるが、全体で6点の出土である。平安時代住居跡の埋土内等の遺構内の他、粗掘り中に表土からも出土している。大きさは個体差が大きく必ずしも一律でないが、重さが最大約492g、軽い物で約99.5gと成品からみると特段に重い。石材は1点が夏油川流域古生界産の粘板岩以外は奥羽山地系の凝灰岩系や泥岩系の礫である。

磨製石斧 (第13図64) - 出土地点は記録されていないが粗掘り中に表土から1点出土している。頭部が敲打によって欠損するが、刃部はほぼ破損が無く完形である。平面的には頭部の幅が狭くて刃部が広いものの、必ずしも左右対象ではない。縦断面はほぼ左右対象になる楔形であるが、横断面は突レンズ状である。全体としては定角的な形態と言えるが、やや小型であり石斧というよりは手斧的な使用形態が推定される。石材は奥羽山地系の凝灰岩系である。

石 鎌 (第14図65～67) - 出土地点の記録されていない2点と平安時代の住居跡から出土した1点の合わせて3点が出土している。すべて平面的には偏平な形状をなすが、いずれも頭部の柄の部分の細く仕上げられており、下端の刃部と推定される部分は幅広につくる共通した特徴がある。板状剥離した礫を素材とし周辺部、特に柄の部分は表裏両面への剥離調整と敲打調整によって細くし、刃部も同様な技法によって作り出している。もっとも大型な65は全長が20.5cmあり、最小の67で15.3cmの大きさである。石材は3点とも夏油川付近の古生界産の千枚岩と粘板岩である。

両刃礫器 (第14図68) - 粗掘り中に表土から1点出土しているが、正確な名称と言えるかは不明であるものの、平面がやや細長い礫の一端が表裏両面に敲打により大きく打ち欠かれた状態を残す礫であり、この状況を自然状態ででき上がったとは認められないので、何らかの道具として使用された物と認定し、両刃礫器とした。石材は夏油川流域古生界産の粘板岩である。

片刃礫器 (第14図69) - 本種も前種と同様な理由により片刃礫器と命名したが、土坑の埋土内から1点出土した。偏平で細長い礫の一端が裏面から表面から剥離されており、何らかの道

具として使用された物と推定される。石材は前種と同様である。

敲石(第15図70) - 出土状況の記録はないが1点出土している。断面が偏平で平面形がやや細長い楕の両端に敲打痕と磨減痕を持つものである。使用痕以外に研磨痕や特別な整形痕はまったく持たない。石材は奥羽山地系の鮮新統産の両輝石安山岩である。

凹み石(第15図71~74) - 平安時代の住居跡埋土内や溝内から4点出土している。平面形が円形や楕円形または長楕円形をなし、断面形が偏平な楕の平坦に近い面に使用時にできた凹みと推定される凹みを持つ楕である。一部の周辺部に剝離痕を持つ例もある。石材はすべて奥羽山地系の輝石安山岩、両輝石安山岩、淡緑色砂質凝灰岩や安山岩溶岩がある。

磨石(第16・17図75~84) - 平面形が円形や楕円形をなし、平らな片面や両面または全面に研磨痕を持つ物であり、全体で10点の出土である。これらは平安時代の住居跡8点と土坑2点のすべて遺構内からの出土である。平面形は既述のとおりであるが、大きさは個体差が大きく一概に平均化できないが、重さでみると最大6kgから最小が700gまで見られる。おそらく、大型のものと小型のものは使用された状況に違いのある可能性が推定され、特に75~79は縄文時代の石器として一般的ないわゆる磨石と分類されるものであるが、残る5点は平面的な部分が大きく断面が偏平であることと、重さがあり全体としても大型であることなどから磨石と呼ぶよりは石皿か台石とでも命名すべき石器である可能性が高い。石材はすべて奥羽山地系の両輝石安山岩を主体にデサイト質軽石凝灰岩と輝石安山岩である。

石棒(第18図85~87) - 3点とも平安時代の住居跡と土坑などの遺構内から出土している。85・86は破片であるが、87は完形である。85は表面に敲打による整形痕を明瞭に残しており、形や整形の技法などから石棒の破片と思われる。86は素材が桂化木であるため断定できないが、全体の横断面が円形をなすと推定されることと折断の状況から比較的長さがありそうであることなどから石棒の破片と推定した。87は実測図の上が細く下部に向かって次第に太くなる器形をなし、粗雑ではあるが全面に研磨痕が観察されることから、石棒とした。石材は奥羽山系産の硬質泥岩、奥羽山系産の桂化木、北上山系産の粘板岩などが使用されている。

石製品(第18図88) - 頭部(実測図の上部)を破損し一部に敲打剝離痕を持ち、全体的な平面形は磨製石斧に近似した形状をなす。全面に研磨痕を持ち、横断面が長方形になるように整形されている。両面のほぼ中央に縦方向の沈線が付されているが、文様なのか擦り切り痕なのかは不明である。石材は奥羽山地系の凝灰岩質である。

桂化木(第19図89~91) - 出土地点の記録はないが粗掘り中に表土から3点出土している。特別な加工は見られず自然状態のものであるが、至近距離の河原から採取し、遺跡内に運んだものと推定される。

砥石(第362図120~124) - ここで取り上げた砥石の5点は必ずしも縄文時代の遺物とは言えない面もあるが、粗掘り中に表土から出土した遺物であることから、取り敢えず本項で

説明することとする。120 は自然石をそのまま砥石として使用しているが、他は方形に整形された後砥石とされているらしい。特に 121 は長方形に整形された痕跡を残している。他は使用された結果として方形や長方形になった可能性も考えられる。以上から 121 は最近の市販されている砥石である可能性が高いし、他は古代の平安時代に使用された砥石である可能性が強い。石材はすべて奥羽山地系産の泥岩質や流紋岩・凝灰岩質・ダイサイトなどが使用されている。

V. 弥生時代の遺構と遺物

1. 遺構

遺構として検出されたのは土坑のみであり、住居跡はまったく検出されていない。遺物が調査範囲ほぼ全域から出土している状況から見ると、検出された遺構の数があまりにも少ないのが気かりであるが、後世の農地化や耕作などによる削平や攪乱によって消滅したものであろうか。以下では弥生時代に関する遺構と遺物について記述する。

1) 土坑

調査範囲東端部から1基検出されたのみである。

(1) AXW 21 土坑

〔遺構〕(第52図、写真図版50)

調査範囲の西端から約1,117 m東によった調査範囲東端部のAX区に位置し、調査区東端から約30 mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の径は約95 cm×90 cm、底面の径約65 cm×60 cmの規模があり、平面形は検出面・底面ともに楕円形である。深さは約30 cmほどあり、断面形は皿形に近似している。底面はほぼ平坦であり、副穴などの施設はない。

埋土は上位の一部に暗褐色土層を挟在するが、大半は黒色土の堆積であり、全体が2層に細分されている。土性はいずれもシルトである。堆積状況の観察によると自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第19図、写真図版312)

底面よりの埋土下部から、同一層体と推定される器表に縄文の付された土器片が5点出土している。掲載した2点はいずれも単軸絡条体の回転による単節斜行縄文を疎らに付すという特徴がある。胎土は緻密な粘土に若干の細砂が混在し、焼成は良好である。縄文の付された他の土器との違いは、内面がミガキではなく粗いナデであるという調整技法にある。以上の特徴から弥生時代の土器と推定され、中でも終末期に近い時期の土器の特徴に近似する。

〔遺構の時期〕

出土した土器の様相から弥生時代末期に属する遺構と推定され、周辺部から同時期の土器が出土しており、矛盾するものではない。

2. 遺構外の遺物

遺構外の遺物として土器と石器が出土しているが、土器については縄文や文様、胎土の状況、などからある程度識別が可能であるが、石器については縄文時代のそれと分離するのが困難であるため、ここでは土器についてだけ記述こととする。

1) 土 器

弥生時代の土器は調査範囲のほぼ全域で出土しているが、東西両端部からの出土が主体である。出土状況は、弥生時代の遺構としたのは土坑が1基だけであるとともに、土器が2点の出土だけであるが、粗掘り中に表土から出土したり、縄文時代や平安時代の遺構埋土内からの出土がほとんどである。このように遺構が少ないのに多少の差こそあれ遺物がほぼ全域から出土していることは、かつてはそれなりの集落が存在した可能性を示しているものと考えられる。本遺跡では弥生時代以外の遺構から出土した土器は遺構外出土の土器として記述した。

出土した土器を観察すると、文様や縄文の施文に各種の種類があり様でないことから、2群に大別した。

(第I群) (第20図1～26、写真図版312)

本群には岩手県地方の弥生時代でも前期に相当すると考えられる土器を一括したが、一部については必ずしも時期が明確ではないものの、取り敢えず本群の一部として含めた。

ほぼ完形の個体2点以外と破片から復元実測した個体2点の他はすべて破片である。器種には広口の壺(1～3・5～8)や鉢(9～22)、台付き鉢(22～25)、蓋(4)がある。

壺や広口の壺はすべて口縁部の縄文が磨消された無文であり、頸部の下端は沈線が巡ったり沈線状の段が付いたりする特徴がある。また、上端の口唇付近に沈線が巡ったり、口縁部の内面に口唇と並行させて沈線を巡らせるなどし、さらに口唇部に沈線を付す例もある。器形は一樣ではなく、頸部の窄まり方や肩部の張り方に違いがある。体部の縄文は原体LRの横回転や斜め回転によって施文された単節斜行縄文である。

鉢は全体形が不明なので断定できないので取り敢えず台付き鉢の台部以外は鉢として扱うこととする。文様は口縁部に施文された縄文を磨消し、沈線によるいわゆる変形工字文やその系統に属する文様が付される。口唇部に沈線を付したり、口縁内面の上端に沈線を巡らせたりする。体部の縄文は細い原体を使用したLR横回転による単節斜行縄文である。

台付き鉢は、台部は明確であるが鉢部分の器形は不明であるため、ここでは台部だけを扱うこととする。すべて縄文を施文しない無文の器表に複数の並行する沈線による山形文を付す。

破片のため高台部全体の器形は不明であるが、ハの字形に開くものと推定される。

蓋と考えられる個体が1点出土している。破片からの復元実測であるため、全体的なことは

定かにし難いが直線的に内傾する器形と推定され、底部に相当する所謂蓋部分は平坦になるものと考えている。体部には原体 LR 横回転による単節斜行縄文が全面に付されている。

このような諸特徴は、弥生時代土器の中でも古い段階、いわゆる岩手県地方の前期に相当する特徴に近似していることから、ほぼこの時期に相当する土器群と考えられる。岩手県のこの時期の土器型式として谷起島式土器が充てられているが、特徴が必ずしもすべて一致している訳ではない。やや古い要素や逆にやや新しい要素などを内包しており、単一土器型式として理解できない可能性があるものの、本遺跡では完形土器が殆ど無く破片のみであるなど、出土資料に限界があることからこれらを一括して谷起島式土器に近似した弥生時代前期の土器としておく。

〔第Ⅱ群〕(第 20～22 図 26～125、写真図版 312～314)

弥生時代後・晩期～末期に属すると推定される土器片を充当したが、すべて破片であるため一部を除いて器種・器形とも定かでないが、推定される器種には鉢(28・30・35～41)、広口の壺(42～45・51)があり、その他の多くは深鉢と思われる。

鉢と推定される破片は少ないが、そのほとんどは縄文の付された器面に沈線による文様が施文されている。体部に施文される縄文は原体 LR や RL とその付加条の他、原体 L による単軸絡条体などがある。

広口の壺はすべて口縁部を外反させて無文とする特徴があるものの、無文部の器面調整は非常に粗雑であり、擦痕を明瞭に残している。

その他の破片の多くは深鉢と推定されるが、器面に原体 LR や RL による単節斜行縄文の他、もっとも顕著な特徴は単軸絡条体の回転による単節状や羽条状・付加条状の撚糸文が付されることである。

以上のように器面に付される縄文だけがその特徴を示す土器であるが、完形や器面に縄文以外の文様を付す口縁部破片がないといった資料の制約は致し方ないことである。このような縄文というか撚糸文を多用するのは一般に天王山式くずれや天王山式系と呼ばれる土器群の一部や、岩手県では赤穴式土器と呼称される天王山式土器に後続すると理解されている土器群である。これだけの共通点だけで同一の土器型式であるとするには決定的資料に不足があるものの、おそらくそれほど大きな違いの無い近似した時期の近似した土器群の一部に相当する土器と推定される。

2) 石器

明確に弥生時代の石器と特定できる例は不明であるため・本報告書では石器はすべて縄文時代の遺構外出土の石器の項で一括した。もしかするとその中に弥生時代の石器が含まれている可能性がある。

VI. 古墳時代の遺構と遺物

1. 古墳

調査範囲西端部に近いDⅢ区付近から7基検出されているが、調査以前から周知の古墳ではなかったことから、墳丘などの存在も確認されず、表土を除去したところ突如として姿を表したとしても過言ではない。本項では古墳を個別に取り上げ遺構の状況と出土遺物に付いて記述する。

(1) DⅢu 10 古墳

〔遺構〕(第53図、写真図版51)

調査範囲の西端から約161m東によったDⅢ区やや西よりに位置し、DⅢr 12古墳は北東に約15mの距離がある。DⅢm 18溝跡と重複するが、当古墳のほうが古い遺構である。

全体規模は径約5.3m、周濠の内径は約4.2mあり、平面形は北西部が切れる馬蹄形であるが、主体部との位置関係からすると左右対称とはならない。周濠の幅は85cm～40cmと位置によって広狭の差が大きく、検出面からの深さも40cm～15cmと幅同様不規則であり、底面には不規則な起伏が見られる。

周濠のほぼ中央部に長軸約1.9m、短軸約90cmの規模を持ち、長軸が磁北に対して約82度西に偏し、平面形が隅丸長方形の主体部が位置する。主体部は深さが60cm～50cmほどあり、中央部が幾分深くなっている。底面は中央部が低く周辺部が若干高くなり、壁沿いの底面には幅約15cm～10cm、深さ約10cmの溝が全周している。

周濠部の埋土は黒色や黒褐色、暗褐色のシルトが堆積し、どの位置も堆積状況が同様である。全体的に黄褐色の地山粒子を若干混入する特徴がある。主体部の埋土も基本的には周濠のそれと大差はないが、堆積状況に違いが見られる。それは、壁際に貼り付くように堆積する2層のあり方である。この部分は検出時に輪状に土層の違いとして確認されていた部分であり、精査の結果断面図のような堆積であることが判明したものである。そして、その位置は底面の溝の位置と一致する。おそらく、主体部が木柵によって構築される構造と推定されることから、壁際の2層は木柵の壁体が存在したことを示すものと理解される。周濠部は自然堆積で埋没したものと推定されるが、主体部は人為的に埋め戻したものと考えられる。

〔遺物〕(第23図、写真図版318・541)

主体部埋土内から土師器片2点と刀子1点、周濠部埋土内から黒曜石1点が出土している。

土師器—実測不能な小破片が出土している。2点ともロクロ不使用で製作された壺の体部破片である。器表にハケメのちミガキの調整がみられ、内面はハケメである。

刀子(第196図174) - 主体部の南東部埋土内からの出土である。全長が16.3cmで基部には木質の柄部が付着している。刀身は長さが約9cm、幅が最大2cm、厚さ3mmほどあり、切っ先にむかって次第に先細りとなる。棟は平らで刃先は切っ先が次第に丸みをもって棟に続く。基部の木質は断面が楕円形をなす。刀身と基部の境に明瞭な関が有るのかはX線写真でも不明であった。

黒曜石(第235図1) - 周濠の東部埋土内から剥片が1点出土している。打点付近に自然面を残し、表面に複数の剝離痕があり裏面は平坦な一次剝離面である。大きさは縦3cm、横2.7cm、厚さ5mm、重さ4.6gである。

〔遺構の時期〕

時期を明確に示す遺物の出土はないが、他の古墳から出土した遺物などから推定すると、7世紀代に位置づけられる古墳と考えられる。

(2) DⅢp12古墳

〔遺構〕(第54図、写真図版52)

調査範囲の西端から約172m東によったDⅢ区のほぼ中央で、DⅢr12古墳は11m南に位置する。DⅢp12住居跡・DⅢo14住居跡・DⅢo13溝跡などの遺構と重複するが、いずれの遺構よりも本遺構が古い。

重複による削平や遺構の掘り込みの深さによって南側の周濠部だけの検出であるため正確な規模は不明であるが、検出された周濠の円弧から最大径6.2m前後と推定される。周濠は残存状態が悪くて深い所で10cmくらいと全体的に浅く、幅も1m～50cmと不規則であり、検出された部分は底面部分が残存したものと推定することができる。

検出された周濠から北に約3mの位置に長軸が約2.02m、短軸が約78cmで、長軸が磁北から東に約76度偏した隅丸長方形の主体部が検出されている。深さは約45cmほどあり、底面は平坦で水平に近い。壁沿いの底面には幅25cm～15cm、深さ15cm～10cmの溝が全周しており、木柵構造の主体部で板状の壁材が存在したことを示すものであろう。その他の施設はない。

周濠部の埋土は黒褐色シルトの単層であるが、主体部は6層に細分される。最上層には黒褐色のシルトが厚く堆積し、底面直上の黒褐色シルトとは混入物の違いによって明瞭に分けられたことから実際の底面は1層と3層の境にあった可能性が高い。その他3層の両側に堆積する1層は底面壁際の溝の部分のみに堆積する特徴があり、木柵の壁材の痕跡と理解される。周濠部の埋土は自然堆積と推定できるが、主体部は人為的なものであろう。

〔遺物〕(第23図、写真図版315・318・540)

底面直上や埋土内から土師器と鉄製品・黒曜石・自然石が出土している。その他検出面から須恵器の破片が出土している。

土師器（第23図、3090・3093～3099写真図版315）－3090は周澁の底面から出土した体部下位から底部を残存するロクロ不使用製作の甕である。3099は主体部の西端部壁沿いの底面直上から出土したロクロ不使用で製作され、器高が11.5cmと小型甕の完形である。底部から外傾する体部は、上位に体部最大径を持って頸部で幾分窄み、口縁部は頸部から直接外傾する器形をなし、底部は周辺部が突出し、底面はほぼ平らであるがY字状に割れている。器表の調整は体部がヘラナダやハケメであり、頸部から口縁部はヨコナダである。内面はミガキを主体にナダがみられ、底面はナダである。その他はすべて主体部の埋土内から出土した。ロクロ不使用で製作された甕の口縁部（3093・3097）と体部の小破片である。器面調整はいずれも大同小異である。

須恵器（第23図、3091・3092写真図版315）－2点は遺構検出作業時に周澁からの出土であり、いずれもロクロ使用で製作され、底部が回転糸切りされた坏である。

鉄製品（第199図169）－刀子が1点出土している。茎部の柄の木質部を若干残存するが、残存全長約15cm、最大身幅約1.5cm、最大厚さ4mmの大きさがあり、関は両関である。棟は平らで刀身は切っ先に向かって次第に先細りとなり、切っ先は丸みを持って棟に続く。茎部の関は明瞭な段差ではなく、次第に細くなる様相を示し、茎部の長さは約6cmある。

黒曜石（第34図2・3、写真図版318）－2点とも主体部内から出土している。2は掻器であるが、打点部や側縁部に自然面を残し、表面の左上に裏面からの剝離調整による刃部が作り出されている。大きさが縦3cm、横3.7cm、厚さ7mm、重さ6gである。3は自然面をまったく残さない剥片で、大きさが縦2.8cm、横3.3cm、厚さ8mm、重さ5.9gである。

自然石（第198図119）－主体部の底面直上から出土した大きさが全長5.2cm、幅7.7cm、厚さ2.1cm、重さ85gの割れた自然石の破片である。

〔遺構の時期〕

時期を明確に示す遺物の出土はないが、主体部に副葬された土師器甕は、器形や器面調整などから栗園式の最古段階か住社式の最新段階に位置づけられると推定されることから7世紀前半代の土師器とすれば、当古墳も7世紀前半代の古墳とすることができる。

(3) DⅢr12古墳

〔遺構〕（第55図、写真図版53）

調査範囲の西端から約169m東によったDⅢ区はほぼ中央部に位置し、DⅢt13古墳は南に約11mの距離がある。他遺構との重複では、DⅢq9溝跡とDⅢn18溝跡は本遺構の主体部を掘削し、DⅢr13土坑は主体部に削平を受けている。

最大径が約5.2m、内径約4.0mの規模で、平面形は北部が途切れるC字形の馬蹄形である。周澁は幅が約70cm～50cmと不規則であり、深さも20cm～10cmと、幅同様不規則である。こ

のように周濠の幅、深さとも浅く不規則なのは前遺構と同様であり、耕作による削平を受けているとはいえ、構築時から浅く掘られていたことを示すものであろう。

周濠部の内壁から西に約1.8 mの中心からやや西よりに長軸が約1.9 m、短軸約76 cm、深さ約25 cm～20 cmの規模を持ち、平面形が隅丸の長方形をなす主体部が検出されている。底面は水平に近い平坦をなし、溝等の特別な施設はない。

周濠部の埋土は黒色や暗褐色のシルトが堆積し、全体が6層に細分されている。主体部のそれは、全体が4層に細分されているが、上部ほど黒味が強く下位層ほど褐色が濃くなるという特色がある。特に2層と3層の境界がほぼ水平に近い形で分離されており、もしかするとここに本来の底面があった可能性が考えられる。周濠部は自然堆積で埋没したと推定されるが、主体部は人為的な埋め戻しであろう。

〔遺物〕(第24図、写真図版315)

主体部と周濠部の埋土内から土師器の破片が出土し、その他の種類の出土はない。

土師器(第24図3100～3104、写真図版315) - 主体部から出土した3101はロクロ不使用で製作された壺の口縁部破片である。その他の破片はすべて周濠部からの出土であるが、いずれもロクロ不使用による製品であり、主体部出土の破片と同様である。その中の3100は体部下位から底部を残存するが、底部から体部が大きく外傾し、底部はほぼ直立状のベタ高台状をなす。器面調整は内・外面ともヘラナデされる。

破片のみではあるが、器形や器面調整の特徴から、栗園式の最古期か住社式の最新期に位置づけられると考えられる。

〔遺構の時期〕

所属時期を明確にする資料に乏しいが、出土した土師器の特徴から7世紀前半代に位置づけられる古墳と理解される。

(4) DⅢt13古墳

〔遺構〕(第56図、写真図版54)

調査範囲の西端から約174 m東のDⅢ区区のほぼ中央部に位置し、DⅢn5古墳は北に約28 mの距離がある。DⅢt13土坑は当古墳より古く、DⅢt14溝跡とDⅢp17溝跡は当古墳の周濠を掘削している。

全体規模は長軸約7.2 m、短軸約5.8 mほどであり、平面形は南部が切れるC字形であるが、3箇所角の存在を認めることができることから、広義の馬蹄形であるが全体としては隅丸長方形の一辺が切れる形といえる。周濠部の幅は約1.2 m～30 cmと広狭の差が極端にある不規則であり、深さも40 cm～10 cmと幅同様不規則である。

周濠部の東西軸中央やや東よりに長軸が約2.4 m、短軸が約1 mの規模を持ち、平面形が隅

丸長方形を示す主体部が検出されている。深さは約 20 cm ほどで、底面はほぼ平坦である。底面の壁沿いに幅が約 25 cm ～ 10 cm、深さが約 5 cm ほどの溝が全周しているが、幅・深さともバラツキが大きく不規則である。東側溝の中の南北両端に各 3 箇所合わせて 6 箇所の柱穴状土坑が検出されている。規模はそれぞれであるが、南壁中央部の土坑は径約 15 cm、深さ約 25 cm あり、杭を立てた跡とも推定される。

主体部の埋土は黒色と黒褐色のシルトが混在した土の単層であるが、周濠部は最上層に黒褐色シルトが厚く堆積し、他は褐色や橙色・黒色などのシルトや砂質シルトが堆積するが、層としては薄層である。周濠部は自然堆積による堆積と考えられるが、主体部は人為的な埋戻しであろう。

[遺物] (第 24・51・53・54 図、写真図版 315・538)

周濠部の埋土内から土師器と黒曜石、主体部から鉄製品と鉛製品が出土している。

土師器 (第 24 図 3105) - 周濠部の西部埋土下部から底面にかけて 1 個体の鉢が出土している。底部の一部を欠失するが、残存する部分から推定すると、底部は丸底で底部から外傾する体部は、肩部に最大径をもって頸部で窄み、口縁部が直線的に外傾する器形を示す。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、体部がハケメのちぢいミガキであるが、内面は全体がヘラナアされる。

鉄製品 (第 24 図 138・139、写真図版 538) - 2 点とも主体部の底面からの出土である。138 は全長が約 13.5 cm、幅約 1.5 cm の鐮子であるが、幅約 1 cm、厚さ約 3 mm の平鉄を使用して中央部から折り曲げ、音叉金具やピンセット的な形に仕上げた製品である。139 は刀子であるが、全長約 14 cm で内刀身の長さ約 8 cm、茎の長さ約 6 cm の大きさがある。刀身は棟がほぼ直線的な平棟で刃部は切っ先に向かって次第に先細りとなる。茎部には柄の木質を若干残存しているため、関の存在は不明であり、茎の先端部は細く尖る。

鉛製品 (第 24 図 140、写真図版 538) - 主体部南端底面の柱穴状小土坑内から出土した環状の製品である。約半分を欠失するが、残存部分から推定される大きさは直径 2.2 cm ほどの円形で、太さ約 3 mm の棒を円状に整形している。素材が鉛であることは、蛍光 X 線分析で確認されている。

黒曜石 (第 51・53・54 図 292 ～ 302・345 ～ 347、写真図版 328 ～ 330) - 主体部の埋土内から出土した 302 の 1 点以外の残る 13 点は周濠部の埋土内から出土している。301 と 302 の 2 点は周縁部の一部に裏面からの剝離調整で刃部を作り出した掻器であるが、他は剥片である。掻器としたの内 301 は表面の一部に自然面を残し、302 は自然面をまったく残していない。剥片は大きさ、重さ、素材の選び方など個体差が大きく一概に平均化することはできない。

[遺構の時期]

出土した遺物に絶対年代を直接示す資料はないが、周濠部から出土した土師器の鉢は器形、

調整技法などから栗園式の最古期か住社式の最新期に位置づけられると推定されることから、6世紀末頃か7世紀初頭頃の古墳と推定される。

(5) DⅢn 15 古墳

〔遺構〕(第57図、写真図版55)

調査範囲の西端から約183m東によったDⅢ区のほぼ中央部に位置し、DⅢq 17古墳は南東に約15mの距離がある。他遺構との重複はないものの、北側の約50%が調査範囲外に延びているため未検出・未調査である。

検出された部分の最大径は約6.1mであることから、実際はそれより規模が大であることは事実であるが、実際の規模は不明と言わざるを得ない。全体的な平面形は円形であろうと推定されるが、他の同種遺構と同様に全体形が馬蹄形をなすかは明らかでない。内径も同様に径約4.5m以上となる。周濠部の幅は1m～50cmと幾分バラツキがあつて一律ではないが、他の遺構と比較すると規則的と言えよう。深さは約30cm～25cmほどであり、極端な差は見られない。

南東壁から北西に約1mよった場所に長辺が約2m、短辺が約75cmの平面形が長方形をなし、中軸が磁北より60度西に偏した主体部が検出されている。深さは約40cmほどあり、底面はほぼ水平に近い平坦であり、溝は巡っていないが、南東壁際中央部の底面に径約40cm～25cm、深さ約10cmの規模を持つ柱穴状の小土坑が検出されている。

現地表面からみると基本層序第1層の下位面で本遺構が検出されており、埋土はこの面から観察されている。周濠部の埋土は上部に黒褐色シルトが厚く堆積し、最下部には地山の褐色シルト粒が大量に混じった土が堆積する特徴があり、この特徴は他の遺構とも共通する。主体部の埋土周濠部の埋土と極端な違いは見られず、黒褐色シルトが上層に厚く堆積し底面付近の褐色シルトと2層に大別され、他の遺構と同様である。周濠部は自然堆積、主体部は人的な埋め戻しであろう。

〔遺物〕(第25・34図、写真図版315・318・540)

主体部から土師器・須恵器・刀子・黒曜石が、周濠部からは土師器と黒曜石が出土している。

土師器(第25図3106・3108～3118写真図版315) - 主体部南東端の埋土下部から壁に立て掛ける様な状態で出土した3106は、平底の底部に円球状の体部をなし、頸部が軽く窄んだ後口縁部が僅かに外反する器形を示す一般的に球形の壺と称している広口の壺とも呼べる器種である。器面調整は、体部外面がハケメのち粗いミガキ、内面がミガキである。口縁部は外面がヨコナデ、内面は横方向のミガキである。3108は周濠部の南西部底面から出土した長胴形の一般的な壺である。平底で周囲が外方に突出する底部から外傾する体部は中位に最大径を持ち、頸部で軽く窄んだ後直立し、口縁部が大きく直線的に外傾する。器面の調整は3106と大同

小異である。その他の破片はすべて周澁部の埋土内からの出土であるが、器種は3109～3111が坏の他はすべて甕の体部破片であり、器面調整も大差がない。坏の3109～3111の内、3109は底部が丸底で底部と体部の境に内外面とも強い段を持ち、口縁部が直立気味に僅かに外傾し口唇部に軽い沈線が付す器形をなし、器面調整は底部外面がケズリ、口縁部が内外面ともヨコナダ、底面から体部の内面はミガキであり、内外面とも赤彩される。このような特徴を持つ坏は東北地方には見られず、関東地方の鬼高式土器の特徴に一致する。その他の2点は、底部が丸底、底部と体部の境に内外面とも軽い段か稜を持ち、口縁部は僅かに内湾する器形をなし、器面調整は底面外面がケズリかナダ、口縁部は外面がヨコナダかハケメのちヨコナダ、内面はミガキのち黒色処理である。

須恵器(第25図3107、写真図版315)－主体部の北西部底面に貼り付いて出土した頸部から体部の一部を残存する短頸壺の破片である。ロクロ使用によって製作され、内外面に明瞭なロクロ痕を残す。器面は青灰色をなすが、断面はセピア色である。胎土に砂粒の混入もなく、緻密な粘土が使用されている。

鉄製品(第25図168、写真図版540)－主体部東壁中央部付近の底面直上から1点出土している。残存状態が不良で刀身部の先端と茎部の先端を欠失する。刀身は平棟で切っ先に向かって次第に細網りとなる様相を示す。茎部には柄の木質が若干付着しているため詳細は不明であるが、明瞭な間があるらしい。

黒曜石(第34図4～6・9～12、写真図版318)－主体部から3点(4～6)と周澁部から4点(9～12)の7点出土している。主体部から出土した3点には典型的な拇指状円形甕器1点(4)と甕器1点(5)の2点が刃部を剥離調整した製品であり、他の1点は無調整の剥片である。周澁部出土の4点は拇指状円形甕器1点(10)、甕器1点(9)の他は剥片であるが、12は石核状である。大きさは個体差が大きく一概に平均化できないが、すべて重さが10g以下である。所謂甕器は、裏面に一次剥離面を残し、刃部は裏面から表面への剥離調整で作り出す特徴があり、拇指状の形態は周辺部に全周するように刃部を作出した成品である。

〔遺構の時期〕

時期を直接示す遺物の出土がないため不明と言わざるを得ないが、出土した土師器の特徴からこの土師器は栗罌式の最古期か住社式の最新期に位置づけられるものと考えられることから、この古墳は7世紀の前半期に位置づけられる古墳と推定される。

(6) DⅢq17古墳

〔遺構〕(第58図、写真図版56)

調査範囲の西端から約193m東によったDⅢ区の中央やや東よりに位置し、DⅢr17古墳とは東に約9mの距離がある。他遺構との重複はないが、最近の土取り穴によって周澁部の北東

端が掘削されている。

周濠部の北側約半分は巡っていないが、検出された最大径で約 6.8 m ほどであるが、全体的な規模は計測不能のため定かでない。計測できる部分の最大内径は約 5.24 m ほどであり、周濠の幅は 1.5 m ～ 60 cm、深さも 50 cm ～ 10 cm とともに不規則である。全体的な平面形は周濠が全周していないため不明と言わざるをえないが、検出された部分では馬蹄形と言うよりも三日月形と言えよう。

周濠南部の内側から北に約 1 m の地点に長辺が約 2.22 m、短辺約 87 cm の規模で、平面形が長方形をなす主体部が検出されている。深さは掘り込み面から約 50 cm、検出面から約 30 cm ほどあり、底面に若干の軽い凹凸を持ち、長軸両端の短辺の壁沿い床面に長さ約 45 cm ～ 40 cm、幅約 10 cm、深さ約 10 cm の溝が掘られており、櫛を構築した構造物に関連する痕跡と言えよう。

周濠部の埋土は黒色、黒褐色、暗褐色等のシルトが堆積し、一部はこれらの土がお互いに混じり合っている。主体部の埋土も周濠部の状況とほぼ同様であるが、最上層に暗褐色シルトが厚く堆積する違いがあり、他の古墳とほぼ同じ堆積状況を示している。周濠部は自然堆積による堆積と推定されるが、主体部は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

〔遺物〕(第 26・49・50 図、写真図版 316・327・328・540・541)

主体部から土師器の破片と鉄製品、周濠部から黒曜石が出土している。

土師器(第 26 図 3120 ～ 3142、写真図版 316) — 壺の体部と推定される小破片が出土しているのみであり、詳細は不明である。

鉄製品(第 26 図 170 ～ 173、写真図版 540・541) — 主体部の底面に貼り付く状態で 4 点出土しているが、171 は刀子の刀身部で 173 は同茎部であることから同一個体である可能性が高い。170 は完形の刀子であるが、刀身の長さ 11 cm、身幅約 2 cm、茎の長さ 10 cm 強の全長約 21 cm の大きさがある細長い形をなす。棟が平らな平棟であり、刃部は切っ先にむかつて次第に細くなりさらに切っ先は丸みを持ち、鬨は不明瞭であるが茎は先端に向かって次第に細くなる。171 は既述のとおり全長が約 11.5 cm、身幅約 2.5 cm の大きさがある刀子の刀身部であるが、棟が平らな平棟であり、切っ先は丸みを持つ。173 は前述のとおり柄の木質が付着した刀子の茎部と推定され、171 の刀身部と同一個体である可能性が高い。172 は音叉状の金具的な形状をなすいわゆる鑿子である。全長は片側を欠失するが約 15 cm、幅約 2.5 cm の大きさがあり、幅約 7 mm、厚さ約 3 mm の平鉄を曲げて整形し、頂点部分に径約 1.8 cm の円形をなす部分が付着する。

黒曜石(第 49・50 図 262 ～ 280、写真図版 327・328) — 周濠部の埋土内から原石と剥片が 19 点出土している。成品はまったく含まれない。原石の 4 点は周濠部の南部中央付近からままとまって出土したが、すべて段丘礫層から供給された河川の転石であり、形状には違いがあるものの重さが 81 g ～ 38 g と比較的小型の礫である。その他はすべて剥片であるが、形状・大きさとも千差万別であり、一概に平均化することは困難であるが、剥片の一部に表面を残存する

ものが6点あることも特徴の一つと言えよう。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる遺物の出土がないため断定はできないが、出土遺物の類例や埋土の堆積状況などは、当遺跡で検出された他の古墳と大同小異であることを考えると、他の古墳と同時期か近接した時期に構築された古墳として大過ないと推定されることから、7世紀前半頃に位置づけられる古墳と考えられる。

(7) DⅢr17古墳

〔遺構〕(第59図、写真図版57)

調査範囲の西端から約191m東によったDⅢ区の中央やや東よりに位置する。DⅢq9溝跡とDⅢm19溝跡が重複するが、当古墳の方が古い遺構である。

周濠部の南端を未調査のため全体的な形状や規模が必ずしも明確でないが、周濠部の最大径は約7.6m、内径が約4.8mの規模と推定され、平面形は周濠部西側の南端は不明であるものの、東側の南端は検出していることから南東部が切れるC字形の馬蹄形と推定される。周濠の幅は約1.6m～1mとばらつきが大きく不規則であり、深さも60cm～30cmと深淺の差が大きく幅同様不規則である。

周濠北西部の内側から南東方向に約2.6mの位置に長辺が約2.3m、短辺が約1mの規模で、平面形が隅丸気味の長方形をなす主体部が検出されている。深さは約40cmほどあり、底面は平坦でほぼ水平に近い。壁際の底面に幅約20cm～10cm、深さ約15cm～10cmの溝が全周しており、かつては主体部が木柵であり、竪穴式であったことを示すものであろう。

周濠部の埋土は最上層に黒褐色のシルトが厚く堆積し、その下位には黒褐色のシルトであるが上層より褐色の強いシルトや褐色のシルトが堆積している。主体部の場合は、周濠部の最上層に堆積する黒褐色シルトとほぼ同じ土層の単層であり、変化がない。周濠部は自然堆積で埋没したものと推定されるが、主体部の場合は人為的に埋め戻された状況を示しているものと考えられる。

〔遺物〕(第27～29・50・51・53図、写真図版316・325・328・330・539・540)

主体部と周濠部から土師器と須恵器そして鉄製品や石製品と黒曜石が出土している。

土師器(第27図3143、写真図版316)－主体部から1点の壺、その他は周濠部の埋土内から破片が出土している。主体部出土の壺(3143)は主体部南東端壁際の底面に置かれた状態で副葬され、まったくの無傷完形である。木葉痕の付着する底面から大きく外傾する体部は中位に最大径を持って頸部で僅かに窄み、口縁部は直線的に若干外傾する器形を示す。器面調整は体部外面がタテ方向のハケメのち粗いタテ方向のミガキ、内面はヨコ方向のヘラナデである。口縁部の外面はヨコのハケメのち頸部の段付近のみヨコナデ、内面はヨコナデとヘラナデであ

る。その他の器種に坏と壺があるものの、小破片であるため詳細は不明である。坏に限ってみると、腰部と底部の境に明瞭な段を持ち、内面はいずれもミガキのち黒色処理される。壺は壺とほぼ似た器面調整である。

須恵器(第27図3119、写真図版316)一遺構検出時に西側周濠部の検出面からロクロ使用成形の坏体部破片が出土している。器壁は薄く、やや大振りて深みのある器形である。出土状態や出土層位などから当古墳に直接伴う遺物とは言えない。

鉄製品(第28・29図141～164、写真図版539・540)一主体部と周濠部から出土しているが、ほとんど主体部の底面直上に貼り付いて出土した。主体部から出土した器種と数は短い刀1点、刀子2点、鐮子1点、鉄鐮の鎌身を残すもの12点、鉄鐮の茎部だけを残すもの7点となるが、鎌身と茎部は一体的に接合する可能性も考えられるので、完形として見た場合の鉄鐮の点数は12点より多く19点よりは少ない点数となろう。短い刀(142)は切っ先の一部を欠失するがほぼ完全な形を残している。刀身部は長さが約23.5cm、最大身幅が約2.5cm、棟の厚さが約5mmの大きさがあり、茎部の場合は長さが約10.5cm、最大幅が約2cm、厚さは約5cm～3cmであり、明瞭な両関が観察される。棟は平棟で刃部は切っ先に向かってやや細くなり、切っ先は丸みを持つ。茎部には柄の木質部を若干残存し、関の部分には柄を押さえる幅約2cmの縁金具が装着されているものの、他の刀装具はまったく装着されていないし、茎に目釘穴も観察されない。当報告では「短い刀」として記述したが、当初から鉦や切羽といった刀装具を装着しない大型刀子的なものの可能性が高い。刀子(143・144)は大小2点の出土であるが、143は全長が約16cm、刀身は長さ約9cm・幅約1.3cm、茎部は長さ約6.8cm・幅約7mmほどで、明瞭な両関を持ち茎部に柄の木質を若干付着している。144は非常に使い減りが著しいものの、全長が約11.3cm・最大身幅1.3cmの大きさがある。刀身部は長さ約6.7cmであり、棟は平棟であるが刃部は切っ先に向かって細くなり切っ先は尖っている。茎部は約4.5cmあり、関の部分から細くなり、関の部分に縁金具が付着し、柄の木質も若干残存する。鐮子(141)は全長が約17cmあり、音叉金具的な形を示すピンセット状であり、幅約7mmの平鉄を曲げて整形している。その他はすべて鎌であるが、型が大きく茎が長く筥波の明瞭な長頸式と茎をまったく持たない無頸式に2大別される。無頸式は3点(151・152・154)であるが、全長が約6.5cm前後と大型であることと、3点とも鎌身の中軸上に矢柄の根挟み痕跡を明瞭に残し、外方に大きく開き重ね袂りの逆刺が付着する特徴があり、さらに鎌身の中央に目釘穴があるのも共通する。長頸式は鎌身の形状によって3型に分けられる。Aは逆刺の形に若干違いはあるが鎌身が細長くて基本的に逆刺を付す長頸式の鎌身に近似した149・153・155・157の4点、Bは鎌身が三角形で逆刺を持つ平根型で147・148・159・161の4点、Cとして鎌身が二等辺三角形で逆刺をまったく持たない145の1点になる。Aは155・157を典型としたが、大小関係が見られ小さな逆刺が付き、重ね袂りの例もある。Bはもっとも一般的な形であるが、形態の

変化と大小があり、程度の差はあるがすべて逆刺が付く。Cは鎌身が非常に小さな三角形をなし、逆刺を持たないものである。茎部の状況は、すべて腕披が明瞭で突帯で区切られる例が多い。また、一部では茎と矢柄を接続した糸巻きを明瞭に残す例があり、さらに漆を塗った痕跡がある。周澁部から出土した鉄鎌は164の雁又鎌1点である。茎部を欠失し鎌身部分だけの残存であるが、全長が約9cmほどあり、先端が二股に分かれているが左右対称形とはならない。

石製品(第27図118、写真図版316)一周澁部の埋土内から全面に磨面を持つ砥石が1点出土している。大きさは縦約6.8cm、横約4.8cm、厚さ約2cm、重さ約94.5gであり、下位縁によって断面が凸レンズ状になっている。石質は凝灰岩である。

黒曜石(第50・51・53図281～291・342～344、写真図版328・330)一主体部の埋土内から5点(281～285)と周澁部の埋土内から9点(286～291・342～344)の14点出土しているが、2点(287・291)が礮器であるが他は剃片である。礮器の2点は1点(291)が母指状円形礮器的な形状であるが、他は一部の周辺部に裏面からの刃部調整剝離されたものである。剃片は大多数が一部に自然面を残す共通した特徴があり、これらの剃片が大きな原石から得られたものでないことを示している。剃片の大きさは個体間のバラツキが大きく、一概に平均化することはできない。

(遺構の時期)

時期を直接示す遺物の出土がないので断定できないが、主体部に副葬された土師器の壺の特徴が住社式の特徴に近似することから推定すると、6世紀末か7世紀初め頃の古墳ではないかと考えられる。

2. 土墳墓

当遺跡では古墳時代と平安時代に属する土墳墓が合わせて17基検出されているが、その中の13基が古墳時代に位置づけられると遺構と推定される。古墳時代の土墳墓は調査範囲の西端部よりのD・EⅡ区からDIV区までの180m間に5mから60mの距離をおいて散在する分布状況を示し、古墳の分布範囲とは2基重複する以外は古墳との重複はみられず、古墳は北側に、土墳墓は南に分布するという異なった分布状況を示す。

本項では古墳時代の土墳墓に限定して記述し、平安時代の土墳墓は平安時代の項で記述することとする。

(1) DⅡt19 土墳墓

(遺構)(第60図、写真図版58)

調査範囲の西端から約99m東によったDⅡ区の調査範囲の西端部分に位置し、DⅢs11土墳墓とは東に約67mの距離がある。DⅡt11土坑-1と重複しているが、本遺構の方が古い。

検出面の長軸は約 1.8 m で短軸が約 60 cm、底面の長軸は約 1.4 m そして短軸が約 30 cm の規模があり、平面形は検出面・底面とも長方形を示す。深さは約 30 cm ほどあり、断面形はやや浅いもののバケツ形のいわゆる舟底形である。底面は平坦と言うより長編の壁に向かってやや丸みを持ち、南東端は他より若干低く窪む。底面に他の施設はまったく検出されていない。

埋土の大半は黒褐色のシルトが上位に厚く堆積し、最下部に暗褐色と黄褐色のシルトが薄く堆積する状況を示し、層相から推測して人為的に埋め戻されている可能性を表している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため時期を明確に示し難いが、形状や埋土の状況などから古墳時代の土墳墓と推定される。

(2) DⅢs11 土墳墓

〔遺構〕(第 60 図、写真図版 58)

調査範囲の西端から約 166 m 東によった DⅢ区の調査範囲の西部に位置する。DⅢt11 土墳墓は南に約 5 m の距離がある。DⅢs11 陥し穴状遺構と接しているが、新旧関係は明確にできなかった。

検出面の長軸は約 1.4 m で短軸は約 1 m、底面の長軸は約 1 m そして短軸は約 50 cm の規模があり、平面形は検出面・底面ともやや不整ではあるが長方形である。深さは約 40 cm ほどあり、断面形はバケツ形に近い舟底形を示し、底面はほぼ平坦である。底面にその他の施設は検出されていない。

図版に埋土の堆積状況を示していないが、上位の大半に黄褐色土粒の混入した黒褐色度が厚く堆積し、底面部の下位層に暗褐色土の堆積が見られ、土性はすべてシルトである。人為的に埋め戻された遺構と推定される。

〔遺物〕

遺物は出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため時期の断定はできないが、形状や埋土の状況から古墳時代の土墳墓と推定される。

(3) DⅢt11 土墳墓

〔遺構〕(第 60 図、写真図版 58)

調査範囲の西端から約 165.5 m 東によった DⅢ区の中央部に位置し、EⅢa12 土墳墓とは南

に約 23 m の距離がある。北端部に重複する土坑状の遺構は重複遺構ではなく本遺構の一部である。

検出面の長軸は約 1.9 m で短軸は約 1.2 m、底面の長軸は約 1.7 m、短軸が約 90 cm の規模があり、長辺の一部が外方に張り出すもの全体的にはやや楕円形的な長方形である。深さは約 20 cm ほどあり、断面形は皿形に近似した舟底形である。北端部の底面は他より約 10 cm ほど低くなって浅い土坑状であるが、他はほぼ平坦であり特別な施設は設けられていない。

埋土の上部は黒色、下部の底面より黒褐色のシルトが堆積しており、他の同様な遺構の様相と同様である。人為的に埋め戻されたものと推定される。

〔遺物〕(第 30 図 3144 ~ 3145、写真図版 316)

ロクロ不使用成形によって製作された土師器の坏が 2 点出土している。

土師器-3144 は口縁部下位から体部上位を残す破片であるが、破片の状況から底部は丸底で頸部で窄み、口縁部が外反する器形を示すと推定され、内面はヨコ方向のミガキ後黒色処理、外面は口縁部がヨコナデ、体部がタテ方向のヘラナデ調整される。3145 は丸底の底部破片であるが、内面はタテ方向のミガキ後黒色処理され、外面も丁寧なヨコ方向のミガキ調整である。

小破片のため時期の断定は困難であるが、推定される器形や器面の調整技法などから住社式に近い特徴を具備している。

〔遺構の時期〕

出土した土器の特徴から、6 世紀末から 7 世紀初頭頃に位置づけられるものと推定されることから、古墳時代に位置付けられるものと考えられる。

(4) EⅢa 12 土墳墓

〔遺構〕(第 60 図、写真図版 59)

調査範囲の西端から約 168 m 東によった EⅢ区ほぼ中央部の調査範囲西部に位置し、EⅢc 14 土墳墓は南東に約 12 m の距離がある。EⅢa 12 住居跡と重複しているが、同住居跡の床面の精査中に検出されていることから、本遺構の方が古い遺構である。

検出面の長軸は約 2.1 m で短軸が約 1.3 m、底面の長軸は約 1.7 m で短軸が約 90 cm の規模であり、平面形は楕円形的な長方形である。深さは約 20 cm ほどあり、断面形は浅い皿形を示し、底面は平坦で他の施設はまったくない。

埋土は上位の暗褐色と下位の黒褐色の砂質シルトが大半を占め、下位の 2 層内に褐色砂質シルトのブロックがある。堆積状況は他の同種遺構の様相と同じ状況を示し、人為的に埋め戻されたものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため断定できないが、遺構の形状や埋土の状況から古墳時代の土壌墓と推定される。

(5) EⅢc 14 土壌墓

〔遺構〕(第 61 図、写真図版 60)

調査範囲の西端から約 169 m 東によった EⅢ区の中央部で調査範囲の西部に位置し、DⅢo 15 土壌墓は北に約 54 m の距離がある。重複遺構はなく、単独で検出されている。

検出面の長軸は約 2 m で短軸が約 80 cm、底面の長軸は約 1.8 m として短軸が約 65 cm の規模があり、平面形は検出面・底面とも隅丸の長方形である。深さは約 20 cm ほどあり、断面形は浅い皿形である。底面は平坦であるが、東壁際を除く 3 方向の壁際に上幅 20 cm ~ 10 cm、深さ 10 cm 位の壁溝が走り、壁材が存在した可能性を示している。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、人為的な埋戻しを推定させる。

〔遺物〕(第 30 図 39 ~ 41、写真図版 53)

床面に貼り付いた状態で鉄製品が 3 点出土している。

鉄製品-39 は鞘は残らないが基部の一部に柄の木質部を残存し、全長約 26.3 cm、身幅約 2 cm、棟の厚さ約 5 mm で断面楔形の刀子であり、刀身はほぼ同じ幅で反りはなく、切っ先は丸みを持つ。開は不明であるが、柄は鯉口付近の締め金具で固定され、基部は先細りとなる。40 は簞子であり、全体が 1 本の平鉄を素材として製作され、ピンセットや音叉金具に近似した形状をなす。全長が約 8.5 cm、最大幅約 2 cm、厚さ 7 mm ほどの大きさがある。41 は鎌部分を欠失しているが、鉄鎌の基部と推定される。残存部の全長が約 11.2 cm、幅 5 mm の断面方形を示し、下端は先細りとなる。

〔遺構の時期〕

土器類の出土がないため断定できないが、形状と埋土の状況から古墳時代の土壌墓と推定される。

(6) DⅢo 15 土壌墓

〔遺構〕(第 61 図、写真図版 58)

調査範囲の西端から約 181 m 東によった DⅢ区はほぼ中央部の調査範囲西部に位置し、DⅢt 19 土壌墓は南東に約 27 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約 2.2 m で短軸は約 1.3 m、底面の長軸は約 2 m で短軸は約 1 m の規模があり、平面形は北壁が外方に張り出すやや不整形な楕円形を示す。深さは約 20 cm ほどあり、断面形は浅い皿形であり、底面は平坦で特別な施設はない。

埋土は上部の極暗褐色と下部の黒褐色をなすともにシルトが堆積し、他の同種遺構の様相とほぼ同様であり、人為的な埋め戻しを推定させる。

〔遺物〕(第31・35図、写真図版316～318・321)

埋土内や底面からクロコ不使用で製作された土師器甕の完形1点(3146)と体部中位から底部を残す1点(3147)の他5点の破片と黒曜石が10点出土している。

土師器-3146は底面直上からの出土であるが、体部最大径を中位に持って頸部に軽い段を付して大きく窄み、口縁部は直線的に外傾し、口唇部は角張る。体部の下半は底部に向かって大きく窄まり、底部は外方に大きく突出する器形を示す。器面の調整は、体部外面はタテ方向のハケメで口縁部はヨコナデ、内面はハケメやヘラナデで口縁部だけヨコナデである。底面は方形をなしヘラナデやヘラケズリの調整がある。埋土内から出土した3147のは器形は前者と若干異なり、体部最大径の位置から窄まる体部下半は、底部の突出も僅かである器面の調整は内外面とも前者と同様である。その他の破片はすべて甕の口縁部2点(3149・3151)と体部2点(3150、3151)であるが、小破片であるため器形などの詳細は不明であるものの、器面調整にはハケメの付着に若干差がみられる。器形や調整技法などの特徴から住社式の終末か栗園式の初期に属するものと推定される。

黒曜石-出土した10点の内3点(13・14・15)はいわゆる拇指状円形石器で、径2.3cm～2.2cm、厚さ1.7cm～1.0cmの円形をなし、周辺部の一部または全体をを裏面からの剝離によって円形に整形して刃部を作りだし、表面の一部に表皮を残し裏面は一次剝離面をそのまま残す特徴がある。一次剝片は両極打法によって得られているようである。その他いわゆる一般的な石器が3点(16・17・21)出土しているが、基本的には拇指状円形石器と同様であるが、刃部が周辺部の一部のみ作出されている。大きさも同種とほぼ同じである。残る7点(12・18・19・20・69・70)は刃部の作出されない剝片である。また、1点(2)は石核的である。原石には河川敷の転石と岩脈から採取した岩塊とあるようである。

〔遺構の時期〕

底面から出土した土師器甕の特徴から古墳時代の土墳墓と推定される。

(7) DⅢt19土墳墓

〔遺構〕(第61図、写真図版59)

調査範囲の西端から約197m東によったDⅢ区の中央やや東よりの調査範囲西部に位置し、DⅢt20土墳墓は東に約5mの距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約2mで短軸は約90cm、底面の長軸は約1.8mで単軸が約65cmの規模があり、平面形はやや不整ではあるが隅丸の長方形である。深さは約10cmほどあり、底面はほぼ平坦であるが、壁際の底面には幅が20cm～10cm、深さ15cm～10cmの壁溝が全周しており、何

らかの壁材が存在したことを推定させる。

埋土は上位に黒色シルトが厚く堆積し、壁溝部分には黒褐色シルトが堆積する特徴があり、人為的に埋め戻されたことが推定される。

〔遺物〕

遺物の出土はない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため断定できないが、遺構の形状や埋土の堆積状況などから古墳時代の土墳墓と推定される。

(8) DⅢt 20 土墳墓

〔遺構〕(第 61 図、写真図版 59)

調査範囲の西端から約 200 m 東の DⅢ区東よりの調査範囲の西部に位置し、DⅢq 23 土墳墓は東に約 14 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約 1.6 m で短軸は約 40 cm、底面の長軸は約 90 cm で短軸が約 30 cm ほどの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 10 cm ほどで、断面形は浅い皿形の舟底形である。底面には一部起伏を持つが、総じて平坦な部分が多く、特に人為的な施設はない。

埋土は最上位の黒褐色シルトが大半を占め、その下位に黄褐色と灰黄褐色のシルトが堆積する。人為的な埋め戻しを推定させる堆積状況である。

〔遺物〕(第 31 図、写真図版 317)

埋土内からロクロ不使用で製作された土師器壺の体部破片が 2 点出土している。

土師器-3153 は頸部直下の体部最上位、3154 は体部中位の破片であるが小破片であり器形などの詳細は不明である。両者とも器面の調整がやや粗いもののミガキによる調整がみられる。

時期を断定できる状況ではないが、古墳時代の土師器である可能性が強い。

〔遺構の時期〕

出土した土師器が小破片であるため時期の特定はできないが、古墳時代の土墳墓と推定される。

(9) DⅢq 23 土墳墓

〔遺構〕(第 62 図、写真図版 59)

調査範囲の西端から約 214 m 東によった DⅢ区東部の調査範囲西部に位置し、DⅢq 2 土墳墓とは東に約 16 m の距離がある。重複する遺構はない。

検出面の長軸は約 2.4 m で短軸は約 90 cm、底面の長軸が約 2.3 m で短軸は約 70 cm の規模があり、平面形は検出面・底面とも隅丸の長方形をなす。深さは最大約 20 cm ほどあり、底面の一部に軽い起伏があるもののほぼ平坦である。南端部壁よりの底面中央に最大形約 40 cm の円形、検出面から深さ約 60 cm の断面形が楔状の柱穴状土坑が 1 基検出されている。調査中にはそれぞれが単独の遺構としていたが、埋土の土性などから本遺構に付随するものと理解される。

埋土は全体が 3 層に細分され、中位層の黒褐色シルトが大半を占める。その他は暗褐色シルトが堆積し、柱穴状の土坑には黒褐色と明黄褐色のシルトが堆積する。堆積状況が他の同種遺構の堆積状況と同様であり、人為的に埋め戻されたものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため断定できないが、埋土や遺構の状況から古墳時代の土壌墓と推定される。

00 DIVq2 土壌墓

〔遺構〕(第 62 図、写真図版 60)

調査範囲の西端から約 131 m 東によった DIV 区西端部の調査範囲西部に位置し、DIVm7 土壌墓は北東に約 23 m の距離がある。DIVq1 住居跡と DIIIr25 溝跡が重複しているものの、本遺構がもっとも古い遺構である。特に重複する住居跡の床面を精査中に検出されている。

検出面の長軸は約 2.3 m で短軸が約 90 cm、底面は長軸が約 2.2 m で短軸は 75 cm の規模があり、平面形は北端部の短辺が不規則であるが、概ね隅丸の長方形である。重複する住居跡床面からの深さは約 5 cm であるが、住居跡の検出面からは約 30 cm ほどであり、断面形はピーカー形に近い形状と推定される。底面はほぼ平坦であるものの、西部壁よりほぼ中央の床面に径 20 cm・深さ 20 cm の柱穴状小土坑が 1 基検出されている。

埋土は薄いため判然としませんが、赤褐色・黒色・明黄褐色のシルトがブロック状に堆積しており、人為的に埋め戻された可能性を推定させる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため時期の特定はできないが、遺構の形状や埋土の状況から古墳時代の土壌墓と推定される。

01 DIVm7 土墳墓

〔遺構〕(第61図、写真図版60)

調査範囲の西端から約250m東によったDIV区西部の調査範囲の西部に位置し、DIV18土墳墓とは北に約6mの距離がある。DIVm7溝跡と重複するが、本遺構のほうが古い。

検出面の長軸は約2.9mで短軸が約1.2m、底面の長軸が約2.7mで短軸は約1mの規模があり、平面形は隅丸の長方形である。深さは約20cmほどあり、底面はほぼ平坦で特別な施設は検出されていない。

埋土は最上位の黒褐色シルトが大半を占める他、下位に暗褐色のシルトが堆積し、他の同種遺構の埋土とはほぼ同じ様相を示しており、人為的に埋めもどされたものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので時期の特定は困難であるが、遺構の形状や埋土の状況から古墳時代の土墳墓と推定される。

02 DIV18 土墳墓

〔遺構〕(第62図、写真図版60)

調査範囲の西端から約153m東によったDIV区中央部の調査範囲西部に位置し、DIVo14土墳墓は南東に約28mの距離があり、DIVm7溝跡・DIV18溝跡・DIVm7住居跡・DIV18建物跡などの遺構と重複するが、当遺構がもっとも古い遺構である。

検出面の南部は重複する住居跡によって削平を受けていて全体は定かでないが、検出された長軸は約2.3mで短軸は約1mの規模があり、平面形は北壁部がやや不規則ではあるが概ね長方形である。深さは約30cmほどあるが、底面に不規則な起伏があり埋土1層の下位面がほぼ平坦な面をなすことから、本来の底面は1層の下位面である可能性がある。平面図の底面に柱穴状小土坑が4基示されているが、この遺構は重複する建物跡の柱穴であり、本遺構とは無関係である。

埋土は最上層の暗褐色シルトを含む黒褐色シルトが堆積し、下位の土層は掘り方埋土と推定される黄褐色シルトを混在する黒褐色シルトである。人為的な埋め戻しと推定される。

〔遺物〕(第31図3155～3157、写真図版317)

検出面から埋土最上位で須恵器坏1点、同大甕1点、土師器甕1点の破片が出土している。

土師器-3155はロクロ使用で作られた坏であり、3156は外面にタテ方向のヘラケズリ調整のある土師器甕の体部破片である。

須恵器-3157は内外面に並行タタキ具痕をもつ須恵器大甕の体部破片である。

以上の土師器や須恵器は製作技法にロクロが使用されていることから平安時代の製品とすることができる。

〔遺構の時期〕

出土した遺物がすべて平安時代に属するが、出土した層位が検出面や埋土の最上部であることや、遺構の形状や埋土の堆積状況が古墳時代の土壌墓とした遺構の特徴と近似することから、古墳時代の土壌墓と理解しておく。

03 DIVo 14 土壌墓

〔遺構〕(第 62 図、写真図版 61)

調査範囲の西端から約 279 m 東によった DIV 区中央部の調査範囲西部に位置し、古墳時代の土壌墓としてはもっとも東に位置する遺構である。DIVq 8 溝跡と重複するが、本遺構の方が古い。

検出面の長軸は約 1.9 m で短軸が約 60 cm、底面の長軸が約 1.7 m で短軸は約 50 cm の規模があり、平面形は検出面・底面とも隅丸の長方形である。深さは約 40 cm であるが、床面から約 10 cm 上位の埋土に堅く締まる面があり、本来の床面はこの部分であると推定される。遺物の出土もこの面であり、そのことを証明している。底面に特別な施設は検出されていない。

埋土は上位に黄褐色のシルト粒を混入する黒褐色シルトが厚く堆積し、その下位に黄褐色シルトのブロックが混在する黒褐色シルトが堆積する。両層とも人為的に埋め戻されたものと推定される。

〔遺物〕(第 32 図、写真図版 332)

床面と推定される埋土 2 層の上面から鉄製の耳環 2 点、石製と推定されるやや大振りの玉 2 点、ガラス製のビーズ玉 73 点が出土している。

鉄製品—耳環の 2 点は円の一部分が 5 mm ほど切れる馬蹄形をなし、断面形丸形の細い鉄棒は円形に整形して製作した物で、最大径(外径) 2.7 cm、内径が 1.8 cm から 1.6 cm で、太さは約 5 mm である。蛍光 X 線による分析の結果によると、金や銀のメッキはない。

石製玉類—径約 6 mm ほどの石製と推定される楕円形でほぼ中心に貫通孔を付す玉であり、2 点出土している。全体は正円球とは言えずに大きなゆがみがあり、石質は軟質で凝灰岩質である。

ビーズ玉—径が約 5 mm ~ 3 mm で平面形が円形で断面が偏円形の形をなし、中心部に円形の貫通孔を付すガラス製のビーズ玉である。色調には黄色系が 2 個、青や青緑系が 71 個と後者が圧倒的に多い。

〔遺構の時期〕

遺構の形状と埋土の状況や出土遺物などから、古墳時代の土壌墓と推定される。

3. 遺構外の遺物

当遺跡では古墳時代の集落はまったく発見されていないので、古墳や土墳墓の副葬品以外は遺構に共存して出土した遺物はない。しかし、これらの古墳や土墳墓の周辺部からは、量的には少ないものの該期の土師器と、原石から製品と割片を含む大量の黒曜石が、粗掘りや遺構検出中に出土している。

本項ではこれらの遺構外から出土した遺物を古墳や土墳墓に関連する遺物と判断し、土師器と黒曜石に分けて記述することとする。

1) 土師器 (第33図、写真図版317)

完形や図面上で完形となる個体はまったく含まず、すべて破片であり、総点数で96点の出土である。器種には坏と壺そして埴があるようである。本報告書にはその中の大型破片を主体に27点の実測図を掲載した。以下では器種ごとにその内容を記すこととする。

坏(1~7) - 破片で21点の出土であるが、破片相互で接合した破片がないことから、21個体の出土と言うことになる。破片を部位毎にみると口縁部が少なく体部から底部が多い特徴があり、本報告書には7個体の実測図を掲載した。1~5は口縁部を残す破片であるが、中でも1と2は口縁部から底部の一部までを残存してをり、全体形を推定することができる。口縁部には外反するもの(4)、直線的に外傾するもの(2・3)、外傾したのち端部が内湾するもの(1・5)の3形態あり、底部はいずれも丸底であり、口縁部と底部の境には内外面に明瞭な段がある。推定計測された口縁部径は22cm~17cm、器高約6cm位である。口縁部の器面調整は、外面がヨコナデ(2・3)とヨコ方向のミガキ(1・4~6)の2種類あり、内面はすべてミガキ後黒色処理される。底部の外面は7がミガキ以外はすべてヘラケズリされ、内面はいずれもミガキ後黒色処理である。

壺(8~23・25~28) - 出土したのはすべて小破片であるため、全体的なことは坏同様まったく不明である。以下では各部位毎の特徴を記すことにする。口縁部は頸部から大きく外反する個体が多く、直口の個体は非常に少ない。体部の状況は小破片のため定かでない。底部は高台状に高くなるもの(14・19・21など)とさらに外方に突出するもの(16・18・23)の2種類ある。器面調整は、口縁部の外面はタテ方向のハケメ(10・12)のみか、後ヨコナデ(8・11)もしくはヘラケズリ(9)、内面はヨコ方向のハケメ(9~12)かミガキ(8)であり、体部外面はハケメ・ヘラナデ・ヘラケズリ・ミガキなど、個体差が大きく一律ではない。特徴的なのは27の頸部に付された鋸歯状の沈線文の存在である。このような文様を付す土師器は北海道の北大Ⅲ式との関わりで理解されている種類である。当遺跡ではこの1点のみであるが、所属時期を決定する決め手となる。

2) 黒曜石 (第 34～55 図、写真図版 318～332)

全体で 400 点の出土であるが、その中の 244 点が何らかの遺構に共伴する形で出土しているので、遺構に共伴した 244 点を除外した 156 点について記述することとする。

出土した範囲は調査範囲の西端部から DIV 区中央までの約 200 m にほぼ限定され、この範囲が奇しくも古墳と土壌墓の分布する範囲と一致しており、この出土範囲は共伴した遺構の分布とも一致している。このことがなにを示しているかと言うと、黒曜石が平安時代遺構の共伴する遺物ではなく、古墳や古墳時代の土壌墓に共伴する遺物であることを結果的に表していることと理解する事ができる。

遺構外から出土した黒曜石にはいわゆる原石の礫塊は無くすべて破片であるが、その中に周辺部に裏面からの剝離調整で刃部を作出した罌器や拇指状円形罌器、罌器様調整石器などの他、刃部調整のない剝片が含まれる。

いわゆる一般的な罌器は 20 点であるが、この種の共通する特徴は裏面はすべて一次剝離面をそのまま残し、周辺部の一部に裏面からの剝離で刃部を作出していることである。剝片を採取した原石には河川に関係する小型の転石 (円礫) と岩脈から採取された礫塊 (亜角礫) の 2 種類があり、段丘礫層から採取された風化膜を持つ礫 (円礫) は含まれない。比率的には岩脈から採取された礫塊から採取された剝片がもっとも多く、この傾向は成品も同様である。剝片の採取方法を観察すると両極打法によって採取されたと推定されるものももっとも多い。

拇指状円形罌器は前種の罌器と基本的には同様であるが、剝片の周辺全体に及び裏面からの剝離調整で全体形を円形か略円形に仕上げたもので、3 点のみの出土である。

剝片は 124 点の出土であるが、剝片によって大小関係や形状の個体差が大きく一概に平均化することは困難であるので、計測表と実測図を対比させてほしい。

数としては少ないが石核 (残核?) と推定されるものが 9 点出土している。剝片とした個体と比較すると、やや大きめであることや周辺部に剝片を採取したと推定される剝離痕をもつ物を入れたが、実際は剝片と同じ性格の剝片である可能性もある。

VII. 平安時代の遺構と遺物

平安時代に属する遺構や遺物は、調査範囲の西端から約400m東によったDV区の約100mを除いたほぼ調査範囲全域で発見されている。しかし、遺構の種類ごとにその分布状況を見ると、全域がほぼ平均的な分布を示しているのではない。例えば、住居跡の場合は分布が調査範囲の西部・中央部・東部の3地点に密集して分布する傾向があるし、他の遺構についてもほぼ同様な傾向を示している場合が多い。遺物の出土状況は、遺構に共伴した場合と掘り中に表土から出土する場合の両者があるが、前者は特に問題にならないと思うが、後者の場合は後世の擾乱などによって遺物が移動する可能性があるため原位置が不明ということはあるが、ほぼ全域から出土しているのが現実である。

以下では遺構の種類ごとに遺構と遺構に共伴した遺物の記述をし、最後に遺構に伴わない遺構外から出土した遺物を記述する。

1. 竪穴住居跡

住居跡は調査範囲の西部I区～IV区がもっとも多く密集するように分布するが、II区で住居跡と住居跡の重複が若干あるものの、他の区では重複や接する例がほとんどないのも特徴と言えよう。中央部VI区～VIII区の分布状況を、西部の分布状況と比較すると、当地点の分布が少なく重複がまったくないばかりでなく、住居跡と住居跡がほぼ等間隔で分布するなどの特徴がある。東端のXI区～XIII区の分布状況もほぼ中央部のそれと同じ状況である。

本項では調査範囲の西端に位置する住居跡から順次東に向かって個別の住居跡について記述を進めていくこととする。

(1) EIb25住居跡

〔遺構〕(第63図、写真図版63)

調査範囲の西端から東に約24mのEI区とEII区にまたがって位置し、DIIx1住居跡は北に約10mの距離がある。他遺構との重複はないが、南側が調査範囲外に延びているため、全体的なことは不明である。

検出された規模は、北東壁約1.2m、北西壁約2.2mほどであり、西端部の壁が南に向かって曲がる形跡を確認していることから、北西壁の全長は計測された長さにはほぼ近似した規模と推定され、平面形は主軸方向が磁北に対して約10度西に偏する方形か長方形を示すであろう。壁高は最深部で約45cm位あり、壁は直線的であるほか、水平に対して約100度と僅かに外傾し、場所によってはほぼ垂直に近い状況を示す。床はIV層の黄褐色の火山灰質土で構築され、貼り

床はまったく確認されない。床面は凹凸も見られず平坦でほぼ水平に近く、あまり踏みしめがなかったのか全面がやや軟らかい。また、床面からは柱穴や壁溝、貯蔵穴といった施設はまったく検出されていない。埋土は全体が7層に細分されているが、土性は上層が砂質のシルトであるが下層は一般的なシルトが堆積しており、色調は上層と下層は黒褐色であるが中層は黒色をなす。堆積状況の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

北西壁の西隅から北東に約60cmよった場所にカマドが検出されているが、袖部や燃焼部はまったく残存しておらず、判り書き式の煙道部と煙出口が検出されたことにより存在が確認された。残存する煙道部は北西壁から北西に約1m延びており、その先にほぼ垂直に立ち上がる煙出口がある。煙道部は検出面から約15cm下の地山内に幅約25cm、高さ約20cmの断面がやや扁平な楕円形をなし、底面は煙出口に向かって約10cmほど次第に下がっていく。煙出口は径約30cmの円形をなし、約30cmの深さがある。煙道部の埋土は7層に細分されるが、土性はすべてシルトであり、色調は黒褐色を主体に黒色である。堆積状況を観察すると、これらの埋土が煙出口から流入したことを示しており、自然堆積によって埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第57図、写真図版333)

出土した遺物には土師器と須恵器があり、鉄製品などの出土はない。出土状況は、床面から出土の他、煙出口の埋土内からの出土が多く、埋土内からの出土は少ない。しかし、完形はまったく含まず、すべて破片での出土である。

土師器(第57図、写真図版333)

土師器の器種はすべて甕であるが、完形の個体は含まずいずれも破片の出土である。

甕(2~10) - 出土した破片の観察から長胴形の大型(2~9)と長胴小型(10)の存在が推定される。大型、小型ともロクロ使用成形によって製作されており、器形は体部の上位か中位に体部最大径を持ち、その下位は次第に窄んで底部と続き、上位は頸部で幾分窄んだのち口縁部は大きく外傾し、端部は上方に挽き出される。口縁部を残存する個体は2点(2・10)のみであるが、器形は大同小異である。器面の調整は、内面はロクロ回転を利用したカキメとロクロ目、その他ヘラを使った掻き取り痕であるハケメであるが、外面は体部の上位は並行タキ目の後ロクロ目が入り、最後に篋を利用してケズリが観察されるが、定かではないが大型と小型では若干違いがあるらしい。底部を残す個体は1点(8)だけであるが、底面は篋でナデられている。

須恵器(第57図、写真図版333)

環の体部から底部を残存する破片1点と長頸瓶の肩部破片1点のみの出土である。

環(1) - 体部下位から底部の一部を残存するが、ロクロ使用成形によって製作され、底部が回転糸切り離しの個体である。内外面ともロクロ回転による調整痕以外の調整は観察されない。長頸瓶(11) - 外面に並行タキ目痕を密に残し、ロクロ回転を利用して成形された肩部

だけを残存する個体である。頭部との境に突帯をもたない東北型ではない器形である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から直接年代の提示はできないが、地域の特徴としてはカマドが北東壁や北西壁に敷設される平安時代の住居跡は、平安時代でも早い段階であることから言えば、平安時代の前期頃の遺構と推定可能である。さらに、出土遺物の中の土師器と須恵器の長頸瓶に見られる並行タキ具痕は、平安時代でも9世紀代の特徴と理解されていることと、遺構の推定年代が一致していることから総合的に判断して9世紀後半代の住居跡と推定される。

(2) DⅡ×Ⅰ住居跡

〔遺構〕(第64図・写真図版64)

調査範囲の西端から約25m東によったDⅠ区とDⅡ区にまたがって位置し、DⅡ×Ⅱ住居跡は東に約5mの距離がある。当住居跡はDⅡ×Ⅰ陥し穴状遺構とDⅠ×Ⅱ3溝跡が重複しているが、精査の結果溝跡は住居跡より新しく陥し穴状遺構は住居跡より古い遺構であることか判明している。

東-西が約2.6m、南-北が約3mの規模を持ち、平面形は南-北の方向に長い長方形をなし、主軸方向は磁北に対して約80度東に偏している。壁はほぼ直線的であるが、一部はやや不規則な部分もあり、壁高は検出面から約20cm～10cmで北ほど浅く、水平に対して約95度外傾している。床は第Ⅳ層の黄褐色火山灰層で構築されており、貼り床はまったく観察されない。床面は堅く、踏みしめによる結果と推定される。東壁沿いの床面には南隅と北隅の他カマド左袖左側の3ヶ所に土坑が検出されている。規模等は別表の通りであるが、p1とp2は規模や深さなどから貯蔵穴とするには不適當と考えられるが、p3は貯蔵穴と推定される。その他柱穴と推定される土坑は検出されていない。埋土は全体が6層に細分されているが、土性はシルトを主体に砂質のシルトであり、色調はすべて黒褐色を示し、全体に地山の小ブロックや炭化物粒が少量混入する特徴がある。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは北東壁の南東隅部寄りの床面に設置され、焚き口部・袖部・燃焼部・煙道部が残存している。カマド全体の規模は、幅約1m、奥行き約60cmであり、煙道部は壁外に約50cmである。各部の規模で見ると左袖は幅約40cm・長さ約60cm、右袖は幅約30～25cm・長さ約65cmであり、高さは左右とも約25cmである。袖部は左右とも暗褐色のシルトと黒色シルトの混合土で構築されるが、左側では隙が1個芯として使用されている。燃焼部は幅約50cm、奥行き約60cmの広がりを持ち、火床は床面の高さより若干低く、奥壁に向かって次第に高くなる。焼土は45cm×25cmの範囲に焚き口部から奥壁に向かって不整な楕円形状に広がり、約5cmの厚さがある。支脚は検出されていないが、焼土の広がりを観察すると、奥壁付近の広がりが不整形であることから考えると当時は何らかの支脚が存在した可能性が推定される。煙道部は北東壁

の壁外に約95cm延び、先端に円形の煙出し口がある。煙道は幅が約20cmで、約50cmより先は地中に潜る割り貫き式であり、底面は奥壁から先端に向かって次第に低くなり、奥壁部の高さと比較して約15cm低くなっている。地中部分の煙道は径約17.5cmの不整な楕円形を示す。煙出口は径約35cm×30cmの楕円形をなし、深さは約30cmで煙道部の底面とは約5cmの段差で接続すること、底面が平らであることから地表面から垂直に土坑状に掘られたものと推定される。埋土は13層に細分されるが、土性は砂質のシルトやシルトと大差がないものの、色調は黒色・黒褐色・極暗褐色・極暗赤褐色などに細分され、一様ではない。堆積状況の観察から自然埋没したものであろう。

〔遺物〕(第58・59図、写真図版323・324・538)

出土遺物には土師器と須恵器のほか鉄製品がある。出土状況は、床面からの出土は4点と少なく、他はカマド5点と土坑1点以外は埋土内からの出土である。全体として破片での出土が多い。

土師器

器種として坏と甕があるものの、坏の出土が多い。

坏(12～23) - 12点の出土であるが、すべてロクロ使用成形の製品であり底部が回転糸切り痕無調整の共通した特徴を持つものの、内面が黒色処理される8点と無処理の4点に細分される。前者の8点は口縁部から底部までを残存するのは3点のみであるが、いずれもロクロ使用成形底部糸切り無調整であり、内面は体部がヨコ方向、底部が放射状のミガキが入り全面が黒色処理される。器形は底部から体部が大きく僅かな丸みをもって外傾し、底部の径が7.2cm～5.0cm、口縁部径は16.3cm～14.0cm、器高は5.2cm～4.5cmの大きさがあり、底部径と口縁部径の比率が2.8～1.97と底部径に大小が見られる。体部の器厚は端部までほぼ同じであるが、口唇部は丸くおさまる。後者の4点は口縁部から体部を残存する2点と底部だけを残存する2点になり、全体が判明する個体はない。いずれもロクロ使用成形され、体部の器形は前者同様底部からやや丸みをもって外傾するが、端部は直立気味となり内面に器厚がやや厚くなって内削ぎされ、口唇部は先細りとなる例が多い。前者の胎土は砂粒の混入の少ない緻密な粘土を使用するが、後者は多量の砂粒が混入し全体として粗い粘土を使用している。

甕(28～31・34) - 5点の出土であるが、完形はまったく無くすべて破片である。口縁部から体部を残す28・29の2点はロクロ使用成形され、28の体部下半はタテ方向のヘラケズリがみられる。器形は体部中位に最大径を持ち、頸部で窄んだのち口縁部は大きく外反し、口縁部は縁帯状をなす角形で上端が僅かに挽き出される長胴形の大甕である。底部から体部を残すほかの2点も大同小異の特徴を示すものと推定されるが、30の底面には多量の砂粒が付着しており、いわゆる砂底の甕と言えよう。

須恵器(第58図、写真図版323・324)

全体で7点の出土と少なく、器種も坏・蓋・壺である。色調はすべて灰色を呈し還元炎焼成されたことを示している。

坏(24～27) - 4点であるが、すべて体部のみを残す破片である。いずれもロクロ使用成形され、特に他の器面再調整は無い。器形は土師器のそれと大同小異であるが一部に体部が直線的に外傾する個体や端部が外反する個体も見られる。

蓋(33) - 1点の出土であるが、端部のみを残す小破片である。ロクロ使用成形され再調整はない。器形は定かでないが、皿を逆にしたような中高となっており下部は外方に大きく開き、端部は角形の縁帯状をなし下方に僅かに挽き出される。

壺(35) - 体部の破片1点の出土であり、小破片であるため詳細は不明である。内面の状況ではロクロ成形されたことと器表はタテ方向のヘラケズリされていることは分かるが、他は不明である。

鉄製品(第59図、写真図版538)

床面と埋土内から2点の刀子が出土している。

刀子(124・125) - 床面から出土した1点(124)は刀身の一部と茎部を欠失し、刀身の一部だけを残存する。全長約10.5cm、身幅約1cm、厚さ約1.5mmの大きさがあり、棟は平棟で断面は楔形であり、刃部は切っ先で丸くなる。埋土内出土の125は刀身と一部に木質の付着した茎部のほぼ全体を残存する。全長約12cmの内刀身が約5cmで身幅約1.3cmの大きさがあり、棟は平棟で刃部は次第に先細りとなって切っ先に続く。茎部については木質が付着しているため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

時期を明確にする資料は出土していないので断定できないが、出土した土師器や須恵器は、一般的に9世紀後半代から10世紀初頭頃の特徴とされることから、当住居跡もほぼこの時期に属するものと推定される。

(3) DIIx2住居跡

〔遺構〕(第65図、写真図版65)

調査範囲の西端から約30m東によったDII区に位置し、EIIa3住居跡-1は南に約8mの距離がある。DIIx2陥穴状遺構、DIIx2土坑-1、DIIx2土坑-2、の3遺構と重複するが、前者は当住居跡より古く、中・後者は新しい遺構である。特に中者は本住居跡のカマド部分と重複する。南東-北西が約3.1m、北東-南西が約3.3mの規模を持ち、平面形は主軸方向が磁北に対して約130度東に偏した隅丸に近い方形である。壁高は約30cm～15cmと不規則であるが、これは南東部の床面が北西部のそれより一段低くなっていることに起因する。壁の立ち上がりは水平に対して約97度外傾し、検出面では若干凹凸は見られるもののほぼ直線的と

言えよう。床は第IV層の黄褐色火山灰質土によって構築され、特に貼り床は観察されない。床面は前述の段差はあるものの、段差の面としてはほぼ平坦であり踏みしめによって堅く締まっている。南東壁際の床面と床面中央部やや南東よりに2基の土坑が検出されている。規模は別表のとおりであるが、規模や検出状況などから柱穴や貯蔵穴とは考えられず、住居跡構築時の所産と推定される。埋土は10層に細分されているが、土性はいずれも砂質のシルトであるが、色調は黒褐色・褐色・暗褐色・明黄褐色・黄褐色などに分けられる。全体的にやや粘性があり、炭化物の他、地山粒の混入が多い。堆積状況を観察すると、最上層に1層の黒褐色が厚く堆積する状況から、自然堆積によって埋没したものと推定される。

南東壁の北東隅から約80cm南によった位置にカマドが検出されているが、既述のように他遺構との重複によって残存しておらず、壁外に約1.5m延びる煙道と先端の煙出し口が検出されたことにより存在が確認された。したがって、袖部や燃焼部の詳細は不明である。検出された煙道部の幅は約35cm～30cm、深さが約15cmあり、煙出し口との接続部は一段高くなっている。煙出し口は径40cmほどの略円形をなし、深さは約20cmである。煙道部の埋土は暗褐色の砂質シルトか堆積するのみである。

〔遺物〕(第59図、写真図版334・355・538)

床面や埋土内から土師器と須恵器の他、鉄滓が出土している。

土師器(第59図、写真図版334・335)

床面の他埋土内から環と甕が出土している。破片での出土が多く、完形での出土は少ない。

環(36～42) - 36～38は床面からの出土した完形の個体であるが、他の4点は埋土内からの出土である。すべてロクロ使用成形され、内面のミガキや黒色処理の調整がなく、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であるが、体部下端がヘラケズリ再調整される例もある。器形は底部から体部が僅かに丸みをもって外傾し、口縁部は直線的に開き、口唇部は丸みを持つ。大きさは口縁径が14.7cm～13.5cm、底部径が5.5cm～4.2cmであり、口縁部径と底部径の比率は3.06～2.64と底部径が比較的小きな個体が多いことを表している。胎土は砂粒が多く混入したやや粗い粘土が使用されている。

甕(43・44) - 2点の出土と少ないが、床面と埋土内からの出土である。2点ともロクロ使用成形され、内外面とも再調整がまったくなく、底部は回転糸切り離し無調整である。器形は体部上位か中位に最大径をもって頭部で僅かに窄み、口縁部は大きく外反して口唇部は縁帯状をなし、端部は上方に大きく挽き出され受け口状をなす。両者とも長胴形の小型製品であるが、44は甕ではなく鉢である可能性がある。

須恵器(第59図、写真図版334・335)

埋土内から甕と瓶が出土しているものの、いずれも破片のみであり、完形はない。色調は還元炎焼成によって濃淡の差こそあれ灰色や青灰色をなしている。

壺(45・47) - 2点の出土であるが、いずれも体部の破片であるが、45は大壺であり器表に並行タキ具痕・内面に同心円当て具痕を付す。47はロクロ成形された体部の破片であるが、内外面にロクロ目のみを残し特に再調整は観察されない。

瓶(46) - ロクロ使用成形された頸部の破片が1点出土している。破片のため詳細は不明である。

鉄製品(第59図、写真図版538)

鉄滓が1点出土している。

鉄滓(126) - 床面からの出土である。全長約3cmで重さ約6gの大きさがある。

[遺構の時期]

遺構の時期を直接示す資料の出土が無いので断定できないが、出土した遺物の器種組成や土師器の特徴から推定すると、10世紀中葉頃の特徴と考えられることから、当住居跡は10世紀中葉頃に位置づけられると推定される。

(4) EIIa3住居跡-1

[遺構](第66図、写真図版66)

調査範囲の西端から約34m東によったEII区の西端部に位置し、EIIa3住居跡-2は東に約1mの距離がある。EIIa3住居跡-2・EIIa2建物跡・DIx23溝跡と重複するが、EIIa3住居跡-2は当住居跡が古く、DIx23溝跡とEIIa2建物跡は本遺構より新しい遺構である。特にDIx23溝跡は当遺構を縦断する形で掘削しており、さらに一部の壁が判然としなかったことにより、南東部の壁の一部が不明である。

北東-南西約4.2m、北西-南東約4.5mの規模があり、平面形は突辺の隅丸となり主軸方向が壁北に対して85度偏する長方形である。壁高は約10cmと低く、全体として掘り込みが浅かったことが分かる。壁は水平に対して約95度と軽く外傾する。床は第Ⅲ層の極暗褐色の漸移層とEIIa3住居跡-2の埋土最上層で構築され、貼り床されることもなくそのまま床面としているが、踏みしめがあまり見られず全体として軟らかい。床面は起伏もなくほぼ平坦で水平に近い。壁際の床面に幅約20cm前後、深さが約8cm~5cmの壁溝が全周する。さらに、北西壁に並行して約1.45mの間隔で2基、南東壁に並行して1.2mの間隔でp1~p4までの部合4基の柱穴状土坑が検出されている。規模等については別表に譲るが、位置や規模・数などから考えて当住居跡の柱穴を構成する土坑と推定される。埋土は2層に細分されているが、土性はいずれも砂質のシルトであり、色調には褐色と黒褐色に分けられる。埋土の層が薄いため断定できないが、自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは検出されていないが、北東壁東隅部の床面上から現地性の焼成を受けた焼土が検出されたことにより、カマドかもしくはそれに類する厨房施設が存在した可能性がある。検出さ

れた焼土は長辺が約1 m、高さ約65 cmの略三角形に広がり、厚さが約10 cmと厚いものの、壁沿いにやや大型の河川礫が2個存在した以外は袖部や煙道部がまったく検出されないことは、いわゆる一般的なカマドとは異なるへっついや炉的な構造の施設と言えよう。

〔遺物〕(第60図、写真図版335)

炉的な焼土の付近から土師器と須恵器が出土しているが、量的には土師器が多く、坯を含まない特徴がある。

土師器(第60図、写真図版335)

器種には壺があるのみであり、坯は出土していない。いずれも破片での出土である。

壺(48～51) - 4点の出土であるが、48・49・51の3点は長胴形と推定されるが、50は広口の壺的な球胴形である。48～50の3点はロクロ使用成形の痕跡を残していないことから、紐巻き上げ成形による製品と推定され、体部外面はヘラによるタテ方向の粗いケズリで調整され、内面はヘラを使用したヨコヤナメのナデで、口縁部は内外面ともヨコナデ調整されている。器形は、底部から外傾する体部は中位か上位に体部最大径を持つ長胴形や球胴形をなし、頸部で僅かに窄んだ後口縁部は直線的に短く外反し、口唇部は先細りとなって丸くおさまる。51はロクロ使用成形された小型の製品であるが、器表はロクロ目のみを残し内面はヨコヤナメ方向のヘラナデ調整がある。器形は体部がほぼ直立し頸部から口縁部が大きく外反する。

須恵器(第60図、写真図版335)

2点とも壺の破片である。色調は差はあるが灰色を示す。

壺(52・53) - 52は大壺の頸部直下の小破片である。器表に並行叩き具痕、内面に円形突面無文当て具痕を持つ。小破片であるため全体的なことは不明である。53はロクロ使用成形された体部の破片であり、内外面にロクロ目を残す。

〔遺構の時期〕

検出された遺構の特徴は平安時代でも中期以降の住居跡に見られ、時期を特定できる資料はないものの、出土した土師器の壺にみられる特徴は一般的に10世紀後半以降～11世紀初頭頃の特徴と言われており遺構の推定時期とも矛盾しないことから、10世紀後半～11世紀初頭頃に位置づけられるものと推定される。

(5) EIIa3住居跡-2

〔遺構〕(第67・68図、写真図版67)

調査範囲の西端から約34 m東によったEII区の西端部に位置し、DIIx6住居跡は北東に約13 mの距離がある。EIIa3住居跡-2・EIIa3住居跡-1・EIIa2建物跡・DIx23溝跡と重複するが、EIIa3住居跡-1とは当住居跡が古く、DIx23溝跡とEIIa2建物跡は本遺構より新しい遺構である。特にDIx23溝跡は当遺構を南東から北東にかけて掘削している。

東-西約 3.3 m、南-北約 3.5 m の規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約 85 度偏したやや隅丸の長方形気味を呈する。壁高は約 45 cm ~ 40 cm であり、壁は僅かな凹凸はあるもののほぼ平坦であり床面に対して僅かに外傾する。床は第 IV 層の火山灰質の黄褐色土で構築され、貼り床は見られずそのまま床面としている。床面は一部に軽い起伏があるもののほぼ平坦で水平状態に近い。壁溝は検出されないが、北東隅部付近と南東隅部・南西隅部付近の床面から p1 ~ p3 の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、p1 は DIx23 溝跡の掘削によって一部が破壊されているため断定できないが、位置から推定して貯蔵穴であった可能性のあるものの、他の 2 基は規模や位置から土坑状を示す窪み的な遺構である。埋土の土性は砂質のシルトとシルトに大別されるが、色調は黒色と黒褐色に分けられ、これらから全体が 7 層に細分されている。いずれの層にも炭化物粒や地山粒が混入する他一部の層には灰白色でやや粗粒の十和田 a 降下火山灰が混在する。堆積状況を観察すると、レンズ状の呈開であることから自然堆積で埋没した遺構と考えられる。

東壁の南隅部から北に約 1.4 m の位置にカマドが設置され、袖部、焚き口部、煙道部、煙出し部が検出されている。幅約 1 m、奥行き約 1 m の全体規模があり、煙道部は壁外に約 55 cm の長さがある。左側の袖部は幅約 35 cm・高さ約 5 cm・奥行き約 45 cm、右側の袖部は幅約 45 cm・高さ約 15 cm・奥行き約 65 cm の規模で、奥行きが左と右に若干差が見られる。左側の袖に河川礫を 1 個芯として使用されている以外は、両袖とも暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部の規模は幅が約 35 cm・奥行き約 65 cm であり、周辺部の床面より若干低くなるようである。燃焼部の焼土は焚き口部から燃焼部の中央やや奥寄りまでの約 55 cm × 35 cm の範囲に厚さ約 2 cm ほどでひろがっている。煙道部は地中に掘られる割り貫き式であるが、径約 20 cm の円筒状をなし、カマドの奥壁から煙出し部に向かって次第に低くなるように設けられている。煙出し口は径約 30 cm × 25 cm の楕円形をなし、深さ約 40 cm で、煙道部の底面より約 10 cm 深く掘られていることは、地表面から掘り込まれた結果を示すものであろう。カマド本体の埋土については記録がないので不明であるが、煙道部のそれは、4 層に細分され、暗褐色・黒褐色・黒色・暗赤褐色のシルトを主体に砂質のシルトが堆積している。

〔遺物〕(第 61 図、写真図版 335・336・538・540)

床面からの出土が 2 点、カマド右側貯蔵穴内 2 点以外は埋土内からの出土である。遺物の中には土師器と須恵器のほか鉄製品がある。

土師器 (第 61 図、写真図版 335・336)

器種に坏と甕・鉢がある。

坏 (54 ~ 57) - 4 点の出土であるが、内面黒色処理される個体と処理のない個体の 2 種類に分けられる。前種は 54 ~ 56 の 3 点であるが、口縁部から底部までを残存する個体は 1 点のみであり、他は口縁部や底部のみを残す破片である。いずれもクロロ使用成形され、底部の切り

離しは回転糸切り離し無調整の製品である。外面はロクロ目だけであるが、内面はヘラによるミガキ調整の後黒色処理される。器形は底部から僅かに丸みをもって外傾し、口縁部は直線的に外方に開き口唇部は丸くおさまり、口縁部径と底部径の比率が2.39である。後種は体部下位から底部を残す破片であるが、ロクロ使用成形され底部が回転糸切り離し無調整であり、内外面とも再調整はない。胎土では、前種は緻密な粘土に若干の砂粒が混入しているが、後種は全体として砂粒の混入が多量であり、生地自体が粗く調整される違いがある。

壺(58～62) - 5点の出土であるが、口縁部から底部まで残存する個体はない。いずれもロクロ使用成形され、体部上位に体部最大径を持ち頸部で僅かに窄んだ後口縁部が大きく外反し、口唇部は縁帯状に角張って端部を軽く上方に挽き出して受け口状となる器形を示す。器面調整は、体部上位の器表はロクロ目のみであるが、中位以下は縦や横方向のヘラによるケズリ調整され、内面は横方向のヘラナデ調整がみられる。大きさには個体差があり、58の大型のほか60の小型がある。

鉢(63) - 1点の出土である。ロクロ成形された製品で、内外面にロクロ目を残し、小型の壺的であるが、口縁部径が器高より大となる個体である。したがって、成形や調整は小型の壺と同じである。

須恵器(第61図、写真図版335・336)

すべて壺だけである。

壺(64～67) - 64は長胴形的な壺の体部破片であるが、他は大壺の肩部と肩部位の破片である。前種はロクロ使用成形の可能性があるが、器表は縦のヘラケズリ調整、内面はヘラナデによる調整がある。後種は外面に並行叩き具痕があり、内面は65のみが並行当て具痕を付す。

鉄製品(第61図、写真図版538・540)

埋土内から2点の出土である。

不明鉄器(第61図137・167) - 137は大きさが縦1.9cm×横2.4cm、厚さ約2mmの不整の方形となる製品であるが器種は不明である。167は径2.5cmの円形で、全体が円球を半載したような形状を示し、何らかの部品であることは明らかで、鈴の下半分である可能性もあるが、ここでは器種不明としておく。

(遺構の時期)

時期を明確にする資料は無いが、出土した土師器の特徴は9世紀後半代から10世紀前半代の特徴とされることから、当住居跡もほぼその頃に位置づけられるものと推定される。

(6) DII×6住居跡

(遺構)(第69・70図、写真図版68)

調査範囲の西端から約45m東によったDⅡ区西部に位置し、DⅡy6住居跡は南東に約2mの距離がある。南東部でDⅡy6住居跡、DⅡx6陥し穴状遺構が北西隅部と、DⅡy5陥し穴状遺構-1が南西隅部と重複するが、いずれの遺構より当住居跡が新しい。

南東-北西が約4m、北東-南西が約4.5mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約110度偏した長方形的な形状を示す。壁高は約25cmで水平に対して約98度外傾するが、凹凸が激しくて直線的ではなく、床面土坑の位置が影響しているものと推定される。床は第Ⅳ層で構築され貼り床されずにそのまま床面とされるが、全体として僅かな起伏があるもの踏みしめが強く堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p12までの土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模からp3・p6・p8・p9の4基は当住居跡の柱穴を構成するものと推定される。p5・p12を除いた他の柱穴状の土坑は当住居跡の補助的な柱穴と考えられる。明確に貯蔵穴と判断される土坑はない。埋土は全体が7層に細分されるが、土性はシルトか砂質のシルトに大別され、色調は黒色と黒褐色を主体に褐色や極暗褐色であるが、炭化物粒や地山小粒が全体に混入し、一部の土層に十和田A降下火山灰が混在する。廃絶当初に一部残土の投棄があったものと考えられるが、その後は自然堆積で埋没したものと推定される。

南東壁の北東隅部よりにカマドが設置されており、袖部、燃焼部、煙道部、煙出し部の各部分が良好な状態で残存している。左袖部は南東壁の北東隅部にほぼ近接して構築され、全体規模は焚き口部で約1.1m、奥行き約70cmであり、煙道部は壁外に約1.8m延びている。各部の規模は、左袖部が幅約27cm、奥行き約70cm、高さ約35cmで、右袖部は幅約30cm、奥行き約75cm、高さ約25cmであり、焚き口部がやや開き奥壁部が軽く狭まるように配置・構築され、現状の高さでは焚き口部が低く、奥壁部が高くなっている。袖部は左右とも芯に河川礫を使用し周囲を褐色と暗褐色のシルトで補強して構築しているが、一部は基底部の床面を掘り下げている。燃焼部は幅約45cm、奥行き約40cmの広さがあり、火床面は床面に比較してやや低くなり、焼土は40cm×40cm、厚さ約5cmの範囲で焚き口部付近から支脚の手前に広がっている。焚き口部から奥壁へ約35cmの位置に土師器の坏を伏せた支脚が検出されている。天井部は残存していないが、かつて天井部の構築に使用されたと推定される河川礫が数多く燃焼部の奥部に落ち込む形で検出されている。煙道部は全長が約1.8m、幅約65cm～35cmの規模であり、煙出し部は先端から約50cm手前に径約35cmの円形をなす。煙道部は掘り込み式であるが、奥壁付近は深さが約25cmあり、奥壁より55cm付近から先端部に向かっては壁に河川礫を立て、天井の蓋にも河川礫を使用している。煙出し部の埋土内に多くの河川礫が転落していたが、これらの礫は煙出し部の地上部に煙突状に積み上げられていた礫である可能性がある。

〔遺物〕(第62～66図、写真図版336～340)

埋土内や床面から土師器と須恵器の他、鉄製品、石製品、土製品など多くの遺物が出土して

いる。

土師器（第 62～65 図、写真図版 336～339）

器種としては坏、高台付き坏、甕、鉢がある。出土した 48 点の内床面からの出土は 23 点、カマド関係が 5 点、土坑類 8 点のほかは、埋土内からの出土である。

坏（68～81・85～90）—20 点の出土であるが、口縁部から底部までを残存するのは 6 点のみで、他は口縁部から体部や体部下から底部など一部を残すのみであり、埋土内出土の 8 点以外は何らかの形で遺構に直接共伴して出土している。すべてロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整であるが、内面がミガキ後黒色処理されるものと処理のないものに細分される。前者の器形は底部からやや丸みをもって外傾する体部は、口縁部が直線的に外傾したり端部のみが僅かに内反か内湾したり、口縁部径と底部径の比率は 2.59～2.05 となり 2.35 以上に 4 点入る。外面にはロクロ目以外の調整はないが、内面は体部ヨコ方向、底部は放射状のミガキ調整の後黒色処理される。後者の器形も前者と同様であり、内外面ともロクロ目以外の再調整はない。口縁部径と底部径の比率が 2.28 と前者よりやや底部径が大である。前者の胎土は粒子の細かい緻密な粘土に若干の砂粒が混入し、後者は全体として粗い粘土で多くの砂粒が混入する違いがある。

高台付き坏（82～84）—床面から 3 点の出土である。いずれもロクロ使用成形、底部回転糸切り離し無調整の坏に、高さ 1.4 cm～1 cm のハ状に開く高台が付く。外面にはロクロ目以外の調整はないが、内面はミガキ後黒色処理される。

甕（97～120）—埋土内から出土した 8 点を含め 24 点の出土である。完形は 1 点（107）のみで、他はいずれも口縁部から体部や体部下位から底部を残す破片での出土である。なお、116～120 は鉢である可能性が強いので鉢の項で記載する。すべてロクロ使用成形され、器形は個体差があるもののいずれも体部中位か上位に体部最大径を持ち、頸部から口縁部が大きく外反し、口唇部は角形の縁帯状につくられ端部は上方に挽き出される例が多い。器面調整は、体部外面の上部はロクロ目だけであるが、中部から下部は縦や斜め方向のヘラケズリ調整され、内面はロクロナデのみかヘラナデ調整される。大小関係が見られ、大型のほか中型、小型がある。109 と 115 の底面には多くの砂が付着するいわゆる砂底であるが、他の大型はナデられ、小型と推定される個体は回転糸切り離し無調整の場合が多い。

鉢（96・116～120）—6 点の出土である。完形が 120 の 1 点と少ないので全体的なことは不明であるが、96 は内面が黒色処理されることと、ほかは推定される器形から鉢とした。120 はロクロ不使用成形であるが、ほかはいずれもロクロ使用成形され、器面調整は 96 の内面以外は甕と同様である。120 は紐巻き上げ成形であり、内外面ともナデ調整される。

須恵器（第 63・65・66 図、写真図版 337・339・340）

埋土内と床面から 12 点出土しているが、土師器の出土点数と比較すると少ない。器種には坏

と壺・壺などがある。

埴 (91～95) - 1点は埋土内からの出土であるが、他は床面3点、煙出し口1点の5点の出土である。口縁部から底部を残存する個体は1点のみで、他は破片での出土である。いずれもロクロ成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、特別な再調整はまったく見られない。器形は底部からやや丸味をもって外傾する体部は口縁部で僅かに外反する。口縁部径と底部径の比率は2.28である。

壺 (121・123～127) - 6点の出土であるが、3点は埋土内からの出土である。器形には壺形に近い121と、125～127のいわゆる大壺に細分される。前者はロクロ使用成形で器表の体部下半がヘラでケズリ調整され、内面はロクロ目だけである。器形は底部から体部が大きく外傾して肩部に最大径をもって頸部で大きく窄むらしい。後者は体部か底部の破片であるため詳細は不明である。内・外面に並行叩き具痕を付す。

壺 (122) - 床面から1点出土している。口縁部から頸部の一部を欠失するが、ロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整である。器形は、底部から外傾する体部は球胴形をなし、頸部は直立気味となるらしい。器面調整はロクロ目のみである。

鉄製品 (第60図、写真図版538)

埋土内と床面から7点出土しているが、器種には紡錘車、刀子、小札がある。

紡錘車 (127) - 埋土内から1点の出土である。薄い鉄板状の円盤の中心を貫くように心棒が付く。円盤の大きさは径約4.5cm、厚さ約5mmで、心棒は径約4mm、で約9.5cmの長さがあるものの、両端を欠失している。

刀子 (129・130) - 床面から2点出土しているが、完形ではないため全体的なことは不明である。128は刀身部を欠失し木質部分を付着した茎部である。刀身部は身幅が約1cmほどの平楯となるらしい。130は茎部を欠失し刀身部だけの残存であることから、前者と同個体である可能性がある。身幅は約8mmで切っ先に向かって次第に先細りとなる。

不明鉄器 (129) - 床面から出土した大きさが直径2.8cmほどの半球球状をなす1点で、鈴の下半分である可能性がある。

小札 (131・133) - 床面と埋土内から3点出土しているが、それぞれが若干異なる形であるため、すべて小札であるかは断定できない。131は幅約1.6cm、厚さ約3mmのやや湾曲し両角が角張る鉄板状で、一端の中心部に円孔を持つ。132は一端の両角が面取りされた幅約1.7cm～1.3cm、厚さ約3mmの鉄板状である。133は幅約1.5cm、厚さ約2mmで一端の両角が角張る鉄板状をなす。

土製品 (第66図、写真図版523)

土鍾が2点埋土内から出土している。両端が次第に細くなる土管状で、全長が5.2cmと4.4cm、最大径は2.2cmと2.1cmの大きさである。

石製品 (第 66 図、写真図版 526)

埋土内から砥石が 1 点出土している。上端は自然面、下端に折断面を持ち、側面の全面に使用面がある砥石で、全長が約 7 cm、重さが 216 g である。

〔遺構の時期〕

時期を直接示す資料は得られていないが、出土した遺物の中の土師器や須恵器の特徴は 9 世紀後半から 10 世紀前半頃の特徴とされていることから、当住居跡もほぼその時期に位置づけられるものと推定される。

(7) DIIy6 住居跡

〔遺構〕 (第 71 図、写真図版 69)

調査範囲の西端から約 50 m 東によった DII 区西部に位置し、DII s7 住居跡は北東に約 25 m の距離がある。北西部で DII x6 住居跡と、東部で DII w9 溝跡とそして II y12 溝と重複するが、両遺構とも当住居跡より新しい。

南東—北西約 3.2 m、南西—北東約 3.4 m の規模があり、平面形は磁北に約 18 度西に偏したやや不整ではあるが隅が直角に近い方形をなす。壁高は約 10 cm ほどで水平に対して約 95 度ほど外傾している。壁は若干不規則で起伏があり、直線的ではない。床には貼り床は見られず極暗褐色を示すシルトで第 III 層の漸移層のみで構築され、床面には不規則な起伏がみられ、あまり強い踏みしめはなく全体としてやや軟弱である。壁溝は検出されていないが、北隅部を除いた他の隅部付近の床面に p1~p4 の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、規模や位置などから考えて貯蔵穴である可能性が高い。埋土は掘り込みが浅いこともあつて黒褐色砂質シルトの単層である。自然堆積で埋没したのと考えられる。

カマドは特に検出されていないが、重複する DII w9・y12 溝によって削平された可能性が高い。位置的には北西壁の南東隅部に位置する p4 の北側が推定される。

〔遺物〕 (第 67 図、写真図版 340)

土師器と須恵器が埋土内から 3 点のほか床面から合わせて 9 点出土している。

土師器 (第 67 図、写真図版 340)

出土した 9 点の内土師器は 2 点と少なく、それも器種が壺のみである。

壺 (131・132) —埋土と床面から各 1 点の合わせて 2 点の出土であるが、いずれも体部下半から底部を残存するのみである。131 はロクロ不使用成形され、輪積み痕を明瞭に残し、器面は内外面ともヘラナデで調整される。底部は低いベタ高台状をなし底面はナデられているが、稜痕が付着している。132 は小破片のため詳細は不明であるが、底面にロクロ使用による回転糸切り離し無調整の痕跡を残していることから、ロクロ使用成形された製品である。その他は不明である。

須恵器（第67図、写真図版340）

埋土と床面から坏と甕が出土している。

坏（128・130）-床面から2点と埋土内から1点の3点が出土しているが、完形は1点のみで2点は口縁部から底部までを残存する破片である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整である。器形は底部から軽い丸味をもって外傾する体部は口縁端部で僅かに外反する。器面はロクロ目以外の調整は皆無である。口縁部径が15.0 cm～12.8 cmと大小があり、口縁部径と底部径の比率は2.41～2.0である。

甕（133～136）-4点の出土であるが、133は体部下半から底部を残存するもの他は体部の小破片である。133は壺形の甕と推定されるが、器表に並行叩き具痕とヘラによるケズリの調整痕を残し、134・135もほぼ同様である。136は内外面に並行叩き具痕と当て具痕を付す大甕の体部破片である。

〔遺構の時期〕

遺構から時期の判定はできないが、出土した遺物は9世紀中葉から後葉の特徴を示していることから推定すると、当住居跡もほぼこの時期に位置づけられる。

(8) DⅡs7住居跡-1

〔遺構〕（第72図、写真図版70）

調査範囲の西端から約51 m東によったDⅡ区西部に位置し、DⅡs7住居跡-2は東に約2 mの距離がある。DⅡs7住居跡-2、DⅡs7陥し穴状遺構と重複するが、重複する両遺構はともに当住居跡より古い遺構である。

南西-北東約3 m、北西-南東約3 mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約48度偏したやや台形気味の方形をなす。壁高は約7 cmと非常に掘り込みが浅く、壁は床面に対して軽く外傾し、若干凸凹があるものの、大略直線的である。床は第Ⅲ層と重複するDⅡs7住居跡-2の埋土によって構築され、重複部分は僅かに貼り床が観察されるが、それほど強い踏み締めは見られず全体としてやや軟らかい。床面上で柱穴や土坑・壁溝といった付属施設はまったく検出されていない。埋土は黒褐色シルトの単層であり、焼土粒や地山粒が全体に混入する。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは検出されていないが、北東壁南隅部から約1 m北によった場所の壁際に竈と焼土が検出されていることから、この場所にカマドが構築されていたものと推定される。したがって、カマドに伴う遺構としては燃焼部の焼土のみが検出され、他の袖部や煙道部などは残存していなかったことになる。焼土は45 cm×40 cmの楕円形を示す範囲に広がり、厚さは約10 cmである。焼土上と縁辺に礫が散在しているが、もとはカマドの構築に使用されたものと推定される。

〔遺物〕（第68・70図、写真図版340～342・535）

床面から数多くの土師器と須恵器のほか鉄滓が出土している。

土師器（第68・70図、写真図版340～342）

器種には坏と高台付き付き・壺・壺・埴などがあり、すべて床面から出土している。

坏（137～147）—11点はすべて床面からの出土である。11点の内口縁部から底部までを残存するのは6点のみであり、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片である。すべてロクロ使用成形され底部が回転糸切り離し無調整であり、器面調整は外面がロクロ目のみであるが内面はミガキ後黒色処理とロクロ目以外の調整痕のない2種類ある。前者は体部下半から底部のみを残す破片のため定かでないが、後者の器形は底部からやや丸味をもって外傾する体部が口縁部でやや直立気味になるか、直線的に外傾するか、端部が僅かに外反する3種類あり、前者もほぼ同様であろう。口縁部径が14.4cm～13.2cmの大きさがあり、口縁部径と底部径の比率は2.95～2.18とバラツキがあり底部径の差が大きいかを示している。146の体部には字体は不明であるが墨書がある。前者の胎土は緻密な粘土に少量の砂粒を混入するが後者は多量の砂粒が混入した粗い粘土が使用されている。

高台付き皿（148・149）—床面から2点出土しているが、149は高台が欠落した口縁部から底部までを残す破片である。2点ともロクロ使用成形され底部が回転糸切り離しの後高台を貼り付けているが、器面調整は内外面ともロクロ目のみで再調整はない。口縁部径は17.4cm・15cmで、底部径が約7cm、高台の高さ1.8cmである。

壺（152～170）—床面から19点が出土しているが、完形はまったく出土せず、口縁部から底部までを残す1点を除いてはすべて口縁部から体部や体部から底部を残す破片である。輪積み成形と推定される158と165の2点を除いた他はいずれもロクロ使用成形され、器形は底部から外傾する体部は中位から上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は大きく外反し口唇部は縁帯状に角張り端部は上方に挽き出されて受け口状を示す。器面調整は体部外面は上位から口縁部にかけてはロクロ目だけであるが、その下位はヘラズリ調整される。内面は全面がヘラナデ調整かロクロ目だけである。底面は、大型はナデであるが小型は回転糸切り離し無調整である。大きさには大・中・小の3型があるらしい。ロクロ不使用成形の2点も前者と器形は同様であるが、器表の器面調整がヘラナデされる違いがある。

埴（170・171）—床面から2点出土しているが、完形はなく口縁部から体部と体部下位から底部を残す破片である。いずれもロクロ不使用成形され、底部から体部が直線的に外傾し口縁部は頸部から水平状に外方に開く器形をなし、全体が洗面器状を示す。器面の調整は内外面ともロクロ不使用の壺と同様である。

須恵器（第68・70図、写真図版341・342）

坏と壺のほか瓶が出土しているものの、5点の出土と全体の出土量からみると少ない。

坏（150・151）—2点とも床面からの出土であるが、いずれも口縁部から体部を残す破片で

ある。ロクロ使用成形され再調整はない。全体的な器形は不明であるが土師器の坏と大同小異の器形と考えられる。

壺 (174・175) - 2点の出土であるが、小破片のため全体的なことは不明である。174はロクロ使用成形された壺形の器形と考えられるものである。175は外面に並行叩き具痕を、内面に無文突面の当て具痕を付す大壺の体部破片である。

瓶 (173) - 肩部上位の破片が1点出土している。内外面にロクロ目を明瞭に残し他の再調整はない。

鉄製品 (第70図・写真図版535)

埋土内から鉄滓が1点出土している。

鉄滓 (72) - 外見が錆付いた鉄板状をなす7.5 cm × 4.0 cmの大きさで厚さは最大1 cmである。

〔遺構の時期〕

遺構の状況からは時期の特定はできないが、出土した遺物の特徴から推定すると、坏の殆どが非内面黒色処理であることや埴と高台付き皿の存在など10世紀後半頃の様相と考えられることから、当住居跡もほぼ10世紀後半頃に位置づけられるものといえよう。

(9) DII s 7住居跡-2

〔遺構〕 (第73、74図・写真図版71)

調査範囲の西端から約55 m東によったDII区西部に位置し、DII v 7住居跡とは南に約14 mの距離がある。DII s 7住居跡-1、DII s 7陥し穴伏遺構・DII s 8土坑・DII s 8炭窯と重複するが、重複する遺構の中では当住居跡がもっとも古い遺構である。

南東-北東4.1 m、北東-南西4.0 mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約115度偏した台形的な方形をなす。壁高は約35 cmほどであり、水平に対して約95度外傾し、壁にはやや凸凹があつて不規則である。床は第IV層の黄褐色の火山灰質土で構築され、貼り床されずにそのまま床面とし、一部に小起伏はあるものの平坦でほぼ水平に近く、強い踏みしめによって堅くする。床面からp1~p8の8基の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、北西壁際密集する特徴が見られる。なお、南東壁際と重複する3基の柱穴伏土坑は当住居跡とは無関係である。検出された土坑の性格は定かにし難いが、p8は位置から推定して貯蔵穴と考えられるが、他は明確にできない。規模からは柱穴的であるが、位置からは柱穴とは考えられない。したがって、当住居跡の柱穴は明らかでないことになる。埋土は6層に細分されるが、土性はシルトと砂質シルトに大別され、色調はすべて黒褐色であり、全体に炭化物粒や地山粒・焼土粒などが混入し、さらに最上層に十和田a降下火山灰の混入が認められる。自然堆積で埋没した遺構と考えられる。

南東壁の北東隅部から南西に約1 mの位置にカマドが検出されている。全体は幅約90 cm、奥

行き約 70 cm の規模があり、さらに壁外に延びる幅約 50 cm、長さ約 1 m の煙道部がある。袖部は左側が幅約 30 cm、奥行き約 70 cm、高さ約 30 cm、右側は幅約 25 cm、奥行き約 65 cm、高さ約 25 cm の規模で、左右とも芯に腰を使用し周囲を褐色シルトと黒褐色シルトの混合土で補強し構築している。燃焼部は幅約 55 cm、奥行き約 75 cm の広さがあり、火床は床面より若干低く奥壁で約 5 cm の段差で煙道部に接続する。換土は 50 cm × 50 cm の燃焼部ほぼ全面に広がり、厚さは約 10 cm である。煙道部は約 20 cm ~ 15 cm の深さがあり、底面は煙出し部に向かってやや高くなり、煙出し部の底面とは 25 cm の段差がある。煙出し部は径約 40 cm × 30 cm の楕円形をなし、深さは約 40 cm である。

〔遺物〕(第 71 ~ 76 図、写真図版 342 ~ 345・526)

埋土内や床面から土師器と須恵器のほか、磁石が出土している。

土師器(第 71 ~ 76、写真図版 342 ~ 345)

全体で 46 点の出土であるが、器種として環、甕の 2 種類がある。

環(176 ~ 194) - 19 点の出土であるが、完形は少なく口縁部から底部までを残すのは 5 点のみで、他は口縁部から体部を残すか体部下位から底部を残す破片である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整を主体に回転ヘラ切り離し再調整が 1 点あるが、内面がミガキ後黒色処理されるものとそれがないものに分けられる。前者は 18 点と全体のほとんどを占めるが、器形は底部から幾分丸味をもって外傾する体部は口縁部がやや内湾気味・直線的に外傾・単部がやや外反したりする。器面調整は、外面がロクロ目のみが主であるが 1 点のみ体部下半がヘラナデ再調整される。内面は既述のように体部ヨコ、底部放射状のミガキ後黒色処理される。後者は器形等は前者と同様であるが、内面の器面調整がロクロ目以外まったくない違いがある。前者の大きさは口縁部径が 15.2 cm ~ 13.0 cm、底部径 6.0 cm ~ 5.0 cm であり、口縁部径と底部径の比率は 2.8 ~ 2.16 と差が大きい。後者は口縁部径 14.5 cm、底部径 7.2 cm で比率は 2.01 である。前者の胎土は粒子の細かい緻密な粘土が使用され、後者は全体として砂粒の多い粗い粘土である。

甕(207・233) - 27 点の出土であるが、完形はまったく含まず口縁部から体部や体部から底部を残す破片である。一部に鉢の可能性のある個体があるものの破片であるため甕として記述する。224 の 1 点以外はロクロ使用成形され、体部外面の上部はロクロ目、中～下位はヘラケズリ調整され、内面はロクロ目のみかヘラナデ調整され、器形は底部から外傾する体部は中位～上位に体部最大径をもって頸部でわずかに窄み、口縁部が大きく外反して口唇部は角張る縁帯状をなし、口唇部は上方に軽く挽き出される受け口状となる長胴形が主であるが、211・219・223・225 のように鉢的な器形もある。底部は残存が少ないので定かでないが、底面はナデ調整の他、回転糸切り離し無調整がある。全体的にみると大・中・小の 3 型があるものと考えらる。

須恵器（第71・72・75図、写真図版343・345）

全体で26点の出土であるが、器種には坏・壺・壺が出土している。

坏（195～206）－10点の出土であるが、器形全体がわかるのは2点のみで他は破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、何等の再調整もみられない。底部から僅かに丸味をもって外傾する体部は口縁部が直線的に外傾や幾分外反気味となる器形を示す。大きさは口縁部径が15.0 cm・14.0 cm、底部径は6.0 cm・5.6 cmであり、比率は2.67・2.33である。

壺（234～247）－13点の出土であるが、全体の分かる個体はまったく出土せず、すべて破片であり、その状況から判断して壺形の壺と大壺の2種ある。前者（236・239）はロクロ使用成形され器内外面にロクロ目のみを明瞭に残す破片で、一部は瓶の可能性もある。後者（240・247）は外面に並行叩き具痕、内面に同心円や並行・放射状・円形無文の当て具痕を付す破片である。235はロクロ使用成形と推定される大壺の頸部から口縁部を残す破片である。234はロクロ使用成形された壺形の壺で体部外面にヘラケズリ、内面にヘラケズリやヘラナダの調整がある。

石製品（第76図72・73、写真図版526）

河川礫をそのまま使用した砥石と面取り成形された砥石の2点が出土している。

砥石－2点の出土であるが、1点は平面形が楕円形で断面形が扁平な河川礫をそのまま砥石として使用したもので、平坦面を使用面としている。73は断面形が不整な方形を示す砥石で3面に使用面を持つ。

〔遺構の時期〕

遺構から時期を明確にできないが、出土した土師器や須恵器の特徴から9世紀後半から10世紀前半頃と推定される。

10 DⅡv7住居跡

〔遺構〕（第75・76図、写真図版72）

調査範囲の西端から約54 m東によったDⅡ区の西部に位置し、DⅡt8住居跡－1は谷約10 mの距離がある。DⅡr12溝とDⅡs5溝と重複しているが、当住居跡が古い遺構である。

南東－北西約5.2 m、北東－南西約5.2 mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約110度東に偏したやや隅丸ではあるが正方形に近い。壁高は約35 cmほどで、壁は水平に対して約99度外傾し、一部不規則ではあるが大略直線的である。床は第IV層で構築され貼り床されることなくそのまま床面とされ、踏みしめによって全体が堅い。床面には幅約25 cm～10 cm、深さ約10 cm～5 cmの壁溝が、東側の北半分から北側そして西側の北半分の壁際に巡っている。さらに、床面からp1～p13の13基の土坑が検出されている。それぞれの規模は別表に記載した

が、p11以外はいずれも柱穴状の土坑であるが、位置から考えてp2・p5・p9・p10・p12の7基が当住居跡の柱穴を構成するものと推定される。その他壁際の土坑は支柱穴の可能性があり、p11は規模と位置から考えて貯蔵穴と推定される。埋土は全体が5層に細分されているが、土性はすべて砂質シルトであり、色調が黒褐色と暗褐色に分けられ、炭化物粒や地山粒が混入している。廃絶当初に若干の残土が投棄されたらしい様相を示すが、その後は自然埋没で堆積したものと推定される。

カマドは南東壁の東隅部から西に約1.7mの位置と、北西壁の南隅部から北に1.4mの位置と2箇所で見出されている。前者のカマドは煙道部と煙出し部、燃焼部焼土のみが見出され、袖部は残存していない。後者のカマドは重複する溝の削平によって残存状態が不良であるが、煙道部と煙出し部・袖部の一部が残存し、この状況から前者のカマドが古く後者のカマドに付け替えられたものと考えられる。古い前者のカマドの燃焼部焼土は40cm×40cm、厚さ2cmの範囲がある。煙道部は幅約30cm、長さ約90cm、深さ約27cmあり、先端に径約40cm×40cmの煙出し部がある。ほとんどは陥没しているものの一部は地山の天井が残っていることから、本来は切り貫き式の煙道であったことが判明した。底面は奥壁から煙出し口に向かって次第に低くなる。後者の新しいカマドは左袖は溝によって残存せず、右袖の一部と燃焼部焼土と煙道部・煙出し部が見出されている。右袖は河川礫を芯にしその周囲を褐色のシルトで補強して構築し、幅約25cm、奥行き約50cm、高さ約30cmの規模があり、左側もほぼ同規模であったと推定される。燃焼部の焼土は40cm×30cmのほぼ楕円形状の広がりを持ち、厚さは約3cmほどである。煙道部は掘り込み式で構築され、最広部で約55cm、最狭部が約20cmの幅があり、長さ約1.15m、深さ約40cmの規模がある。煙出し口は約35cm×35cm、深さ約30cmほどである。

(遺物) (第77～79図、写真図版346～348・523・537)

埋土や床面・カマドなどから土師器や須恵器の他、土製品・鉄製品などの遺物が出土している。土師器が少なく須恵器が多い特徴がある。

土師器 (第77・78図、写真図版346・347)

16点の出土で器種には坏と甕がある。

坏 (248～252) - 5点の出土である。完形はなく口縁部から底部まで残存する個体が1点以外は、破片での出土である。すべてロクロ使用成形されるが、底部は回転糸切り離し無調整とヘラケズリ再調整 (250) の2種類あり、器面調整は外面はロクロ目のみであるが内面はミガキ後黒色処理される個体と無処理の個体に分けられるが、前者が4点と主体をなし、後者は少ない。器形は、底部から僅かな丸味をもって外傾し、口縁部は内湾気味が軽く外反している。後者の器形は前者と同様と推定される。大きさは口縁部径が約13.3cm、底部径約6cmで口縁部径と底部径の比率は2.3である。

甕 (269～279) - 11点の出土であるが、完形はまったく含まず、口縁部から体部や体部か

ら底部を残存する破片である。これらはロクロ使用成形された5点(269・272～275)とロクロ不使用成形の3点(271・277・278)の2種類に分けられる。前者は体部上位がロクロ目のみを残し下半はヘラケズリされる個体とロクロ目だけの個体があり、器形は底部から外傾する体部は中・上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は大きく外反し口唇部は角張って線帯状をなし端部は上方に軽く挽き出され受け口状をなす。後者は輪積み成形され、外面はヘラナダやヘラケズリ調整、内面はヘラナダ調整され、口縁部はヨコナダされる例もある。器形は前者とほぼ同様であるが、口縁部が角張ることがなくて受け口状にならない違いが見られる。大きさには大小関係があり、さらに器種の一部は鉢となるらしい。

須恵器(第77～79、写真図版346～348)

坏と壺・壺の器種があるものの、完形は少なく破片での出土が多い。

坏(253～268) - 16点の出土であるが、口縁部から底部までを残すのは3点のみで、他は口縁部から体部か体部下半から底部を残す破片である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整の製品であり、器形は底部からやや丸味をもって外傾する体部は口縁部が直線的に外傾したり端部で外反する。253は体部に「メ」の墨書があり、260の口縁部には重ね焼きによる火傷がある。大きさは口縁部径が15.5cm～13.1cm、底部径6.4cm～5.4cmで両者の比率は2.48～2.33である。

壺(280・282・283・286～291) - 9点の出土である。完形はなくいずれも破片での出土である。ロクロ使用成形は282のみで他は輪積み成形と推定され、280・283は器表がヘラケズリ、内面はヘラナダ調整される。その他は器表に並行叩き具痕、内面に並行や放射状・同心円・円形無文の当て具痕が付される大壺の体部や底部・肩部の破片である。

壺(281・284・285) - 3点の出土である。281は口縁部から体部下位まで残存するが、他は口縁部と底部下位の破片である。281はいわゆる広口の壺であるが、ロクロ使用成形されロクロ目以外の調整痕はなく、底部から丸味をもって外傾する体部は肩部に最大径があり、頸部で大きく窄んだ後口縁部が直線的に外傾する器形を示す。284はロクロ使用成形された体部下半の破片であるが、球胴形と推定される器形をなす。

土製品(第79図、写真図版523)

埋土内から土鍾が出土している。

土鍾(7・8) - 埋土内から2点出土している。長さが3.7cm・3.6cmあり最大径は1.7cm・1.6cmの大きさがあり、形は両端が細くなり長軸に貫通孔を持つ管状である。

鉄製品(第79図、写真図版537)

埋土内とカマド内から刀子と鉄滓が出土している。

刀子(118・120) - 埋土とカマドから各1点の2点出土している。118は基部の木質は残存しないがほぼ完形であり、全長17.6cm、最大身幅1.5cm、刀身部長さ10.7cm、刀身部厚さ3mm

の大きさがあり、棟は平棟で刃部は次第に先細りとなって切っ先に続く。茎は棟の片側であり、先端部に向かって細くなり目釘穴はない。120も基本的には前者と同じ形をなし、刀身部は完存するが、茎部は先端部を一部欠失し若干の木質を付着する。形は、刀身部がさらに細くなり刃は両刃であり、全長15.7cm、刀身部長さ11.8cm、最大身幅1.7cmの大きさと、目釘穴は見られない。

鉄滓(119・121)一埋土とカマドから2点出土している。横断面が鉄板状をなす小塊である。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴は須恵器の出土比率が高いなど9世紀後半代から10世紀初頭頃の特徴とされることから当住居跡もほぼその頃の住居跡と推定される。

01 DⅡt8住居跡-1

[遺構](第77図、写真図版73)

調査範囲の西端から約54m東によったDⅡ区の西部に位置し、DⅡt8住居跡-2は東に約2mの距離がある。東側でDⅡt8住居跡-2と重複するが、当住居跡の方が新しい遺構である。

南東-北西約2.7m、北東-南西約2.7mの規模があり、平面形は主軸方向に対して約47度東に偏した隅丸の方形を示す。壁高は約35cmであり、水平に対して約99度外傾している。壁はやや起伏があって直線ではなく、特に南東部が不規則である。床は第Ⅳ層で構築され貼り床されることがなくそのまま床面として使用され、床面は平坦で水平に近く踏みしめで全体が堅い。壁溝は検出されていないが、カマド左袖の左側でp1の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置と規模から考えて貯蔵穴となるであろう。埋土は4層に細分されるが、土性はシルトのみであり、色調は黒褐色と暗赤褐色に分けられる。2層には地山粒や炭化物粒・焼土粒が混在し、3層には焼土塊と黒褐色土粒が混入している。2層が厚く堆積することから自然埋没したものと推定される。

カマドは北東壁の北隅部から南へ約1.5mに位置し、袖部、燃焼部、煙道部、煙出し部が検出されている。袖部の全体規模は最大幅で約85cm、奥行き約55cmであり、壁外に約1.4m延びる煙道部がある。各部では、左袖は幅約25cm、奥行き約40cm、高さ約15cm、右袖は幅約30cm、奥行き約55cm、高さ約20cmであり、焚き口部に河川礫を据えその周囲を褐色シルトで補強して構築している。燃焼部は約40cm×40cmの範囲があり、燃焼部の焼土は40cm×20cmの楕円形をなす広がりを示し、約3cmの厚さがある。支脚は見られず、焼土は焚き口部の前から奥壁の手前約15cmまで広がる。煙道部は刳り貫き式で構築され、検出面下約20cmに径約15cmの土

管状に掘られ、先端部に30cm×30cmの隅丸方形の煙出し口が約45cmの深さに掘られており、底面は煙道部のそれより約10cm深い。

〔遺物〕(第80・81図、写真図版348～350)

埋土内や床面から土師器と須恵器が出土しているものの、坏以外には完形の出土はない。

土師器(第80・81図、写真図版348・349)

全体で22点の出土であるが、器種には坏、壺と埴がある。

坏(292～305)－埋土や床面から14点出土している。すべてロクロ使用成形、底部は回転糸切り離しを主に一部再調整であるが、内面がミガキ後黒色処理される製品と無処理の製品に分けられる。前者は3点と少なく、さらに完形はなくすべて破片であるが、底部から丸味をもって外傾する体部が口縁部でやや外反する器形を示すが、大きさは不明である。後者は11点の出土と大半を占めるが、器形は前者とほぼ同様である。大きさは口縁部径が14cm台から13cm台で底部径は6cm～4cmであり、比率は3.09～2.36と底部径の小さい個体の多いことが分かる。なお、302の体部には「方」と判読される墨書がある。

壺(308～314)－7点の出土であるが、床面からの出土が主体で埋土内からの出土は少ない。310以外はロクロ使用成形されるが、完形がないので全体的なことは不明であるが、一部に底部が回転糸切り離しされる個体(311・312)があり、壺とした中に鉢が含まれている可能性がある。底部から外傾する体部は中位や上位に最大径をもって頸部でやや窄み、口縁部で外反し口唇部は角張る縁帯状をなし受け口状となる器形を示す。大小があり、大型は器表の体部下半がヘラケズリ調整されるが、小型はロクロ目目だけである。

埴(315)－口縁部から体部を残す破片が1点埋土内から出土している。輪積み成形され、器表の調整は口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリであり、内面はヘラナデされる。器形は外傾する体部が頸部から口縁部が大きく外反する。口縁部径が約42cmと大型である。

須恵器(第80・81図、写真図版349・350)

埋土と床面から8点出土し、器種には坏と壺・壺・瓶がある。

坏(306・307)－埋土内から2点の出土である。いずれも口縁部から体部を残存するが、器形などは土師器坏の後者とほぼ同様と推定される。

壺(316・317・319)－口縁部2点と体部下端の破片1点の3点が出土している。口縁部破片は2点ともロクロ成形され、口唇部は角張る縁帯状の受け口状をなす。体部破片はヘラケズリされる。

壺(318)－埋土内から口縁部破片が1点出土している。ロクロ使用成形された広口の壺と推定される。

瓶(320・321)－体部と肩部の破片が各1点の2点が出土している。いずれもロクロ使用成形され、肩部から下位はヘラケズリ調整される。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した土師器の特徴は10世紀中葉から後半代の様相であることから、当住居跡もほぼその頃に位置づけられると推定される。

02 DⅡt8住居跡-2

〔遺構〕(第78・79図、写真図版74)

調査範囲の西端から約58m東によったDⅡ区の西部に位置し、DⅡr9住居跡は北に約6mの距離がある。DⅡt8住居跡-1と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

南東-北西約5.0m、北東-南西約4.7mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約50度東に偏した長方形気味の方形である。壁高は約50cmあり、水平に対して約20度外傾し、壁は直線状をなす。床は第Ⅳ層の黄褐色火山灰質土で構築され、貼り床されることもなくそのまま床面とされ、全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p7の7基の土坑が検出されているが、p7以外は柱穴状の土坑である。規模は別表に記載したが、p3~p6は位置や規模から考えて当住居跡の主柱穴を構成するものと推定され、さらにp1とp2も何らかの形の補助的な柱穴と考えられる。p7は位置や規模から考えて貯蔵穴と推定される。埋土は6層に細分されているが、土性はいずれもシルトであるものの、色調は黒褐色・暗褐色・黄褐色などに分けられ、全層に地山粒子が混入するとともに一部には十和田a降下火山灰が混在する。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは北西壁の南隅部から北に約1.4mに位置し、袖部のほか燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されたものの、袖部の残存状態は不良である。袖部全体の規模は幅約1m、奥行き約75cmで、壁外に約1m延びる煙道部があり、その先端部には煙出し部が位置する。各部の規模は、左袖が幅約40cm、奥行き約40cm、高さ約17cm、右袖は幅約35cm、奥行き55cm、高さ約25cmであり、左袖の一部に礫が使用されるものの他はすべて暗褐色シルトを積み上げて構築しているが、右袖前の焚き口部に相当する床面に礫の抜き取り痕が検出されていることから、本来は焚き口部に礫を埋設していたものと推定される。燃焼部は幅約40cm、奥行き約85cmの広さがあり、焼土は35cm×30cm、厚さ約5cmの楕円形に広がる。煙道部は幅約20cm、深さ約15cmの掘り込み式で構築され、底面は奥壁とは段差があり、次第に高くなって煙出し部に接続する。煙出し部は径35cm×35cmの円形をなす土坑状を示し、底面は煙道部の底面より約10cmほど低くなっている。

〔遺物〕(第82~84図、写真図版350・351・525・526)

埋土や床面から土師器と須恵器のほか石製品や土製品が全体で43点出土している。

土師器(第82・83図、写真図版350・351)

埋土や床面から全体で21点の出土であるが、器種は坏と壺のほか鉢を含む。

坏 (348～357) 一床面からの出土を主体に 10 点出土しているが、完形はまったく出土しておらず、口縁部から体部や体部から底部を残す破片である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、内面がミガキ後黒色処理されるものと無処理の 2 種類に分けられる。前者は 6 点で、口縁部を残す 1 点のほかは体部から底部を残す破片であるが、器形は底部から丸味をもつて外傾する体部はそのまま口縁部に続く。器表の体部下位をヘラケズリする個体がある。後者も内面の調整以外は器形、器面調整ともに前者とほぼ同様である。胎土は、前者は粒子の細かい緻密な粘土を使用しているが、後者は全体的に粗く砂粒の多く混入した粘土である。

壺 (367～375) - 9 点の出土であり、完形はなくすべて破片での出土である。すべてロクロ使用成形されているが、器表の体部上位にロクロ目を残しその下位はヘラケズリ調整される個体とロクロ目のみの個体があり、前者は大型、後者は中・小型に多い。内面の調整は大型はヘラナデ、中・小型はロクロ目である。器形は、底部から外傾する体部は中位か上位に体部最大径をもって頸部でやや窄み、口縁部が大きく反外して口唇部は角張る縁帯状をなし端部は上方に挽き出され受け口状をなす。

鉢 (375～377) - 3 点の出土である。口縁部から底部まで残すのは 1 点のみで、他は口縁部から体部と体部下位から底部を残存する破片である。いずれもロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整である。器表の調整はロクロ目のみであるが、内面はヘラナデされる。器形は底部から外傾する体部は中位に体部最大径をもって頸部で軽く窄み、口縁部や口唇部の状況は壺と同様である。

須恵器 (第 82～84 図、写真図版 350・351)

床面を主体に 19 点の出土であるが、完形はまったく出土していない。器種には坏と壺がある。

坏 (358～366) - 9 点の出土であるが、すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離しされるものの、完形はなく口縁部から体部か体部から底部を残存する個体のみである。器形や器面調整は土師器坏の後者と大同小異である。

壺 (375～387) - 10 点の出土であるが、口縁部破片 4 点、底部付近の破片 1 点の他はすべて体部の小破片である。口縁部破片はロクロ使用成形され土師器壺の口縁部形態と同様な形をなす。体部の破片には器表がヘラケズリされるものと並行叩き具痕をもつものに細分される。前者はロクロ使用成形された可能性があり、器表にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整痕があり、壺形に近い器形の壺と推定される。後者は器表に並行叩き具痕、内面に放射状、並行、無文の当て具痕が付される大壺である。

石製品 (第 84 図、写真図版 526)

床面から砥石が 2 点出土している。

磁石(96・97) - 奥羽山地系産出の斜長石流紋岩を使用した磁石である。いずれも面取りしない自然石を素材とし、複数面を使用面としている。

土製品(第84図、写真図版525)

床面からふいごの羽口が出土している。

羽口(53) - 粘土で細い土管状に形作り、先端に加熱によるガラススラグが厚く付着する長さ3cmの小破片である。中心部に断面が円形の孔が貫通しているものの、破片であるため孔の径は不明である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した土器や須恵器の特徴は9世紀末から10世紀前半頃の特徴と考えられることから、当住居跡もほぼその頃に位置づけられる物と推定される。

03 DIIr9住居跡

〔遺構〕(第80・81図、写真図版75)

調査範囲の西端から約59m東によったDII区の西部に位置し、DIIx9住居跡は南に約22mの距離がある。他遺構との重複はなく単独で検出された。

東-西約4.1m、東-西約4.1mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約180度東に偏し、隅丸の方形をなす。壁高は約25cmほどあり、水平に対して約105度で外傾する。床は第IV層で構築され貼り床されることなくそのまま床面とされ、踏みしめによって全体が堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p6の6基の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、p1・p3・p5は平面規模はともかくとして深さがやや浅いもの柱穴的であるが、位置も加味して考えるとp1とp5が当住居跡の主柱穴を構成するものと推定される。p4とp6は平面的には貯蔵穴的であるが深さは若干浅い。しかし、位置から推定して貯蔵穴的な土坑と考えられる。埋土は5層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色・黒色・褐色・極暗褐色等に細分されている。一部に炭化物粒や焼土粒を混入するほか、地山粒子の混入も見られる。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは北壁の東隅部から約1mの位置に構築され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出された。袖部全体の規模は幅が約90cm、奥行き1.25mほどあり、壁外に約1.35mのびる煙道部が付属する。左袖は幅約25cm、奥行き55cm、高さ約17cmの規模で、右袖は幅約25cm、奥行き約80cm、高さ約25cmと左右で残存が異なる。袖は褐色と暗褐色のシルトが混合した粘土を積み上げて構築している。燃焼部は幅約1.2m×45cmの広さがあり、焼土は55cm×50cmの範囲に3cmの厚さで広がる。火床は床面よりやや低くなり、支脚は検出されていない。煙道部は検出面下約25cmの地中に掘られた割り貫き式であり、径約25cm×20cmの楕円形

をなす土管状を示し、底面は奥壁から次第に低くなって煙出し部の底面に続く。煙出し部は 40 cm × 40 cm、深さ約 50 cm の円筒形をなす土坑状である。

(遺物) (第 85～87 図、写真図版 351～353・525)

埋土や床面から土師器と須恵器のほか、土製品が合計で 27 点出土している。

土師器 (第 85・86 図、写真図版 351・352)

埋土と床面から 11 点の出土であり、器種には坏と甕がある。坏は完形であるが、甕は完形が 1 点あり、ほかは口縁部から体部を残存する破片を主に体部から底部を残す破片である。

坏 (322・323) - 完形が 2 点出土している。ロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、内面がミガキや黒色処理のない個体のみである。内外面ともロクロ目のみで、再調整はまったく観察されない。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁部が直線的に外傾か端部が軽く外反する器形を示す。大きさは口縁部径が 15 cm と 14.9 cm、底部径が 5.8 cm と 5.7 cm であり、両者の比率は 2.61 と 2.58 である。

甕 (331・339) - 9 点の出土である。ロクロ使用成形される個体が主であるが、1 点 (331) はロクロ不使用成形である。ロクロ使用成形の個体の器形は、底部から外傾する体部は体部の中位か上位に体部最大径をもって頸部で窄む。口縁部は大きく外反して口唇部が角張る縁帯状をなし、端部は上方に挽き出される。器面調整は、外面がロクロ成形の前に並行叩き調整される個体 (337) とヘラケズリ調整される個体 (339) 以外はいずれもロクロ目だけである。内面はロクロ目以外にヘラナデ調整される個体がある。大小関係が見られ、大・中・小の 3 型あるらしいが、333・335 は鉢である可能性がある。ロクロ不使用成形の個体の器形はほぼ前者と同様であるが、頸部に軽い段があることと口唇端部の挽き出しのない違いがある。器面の調整は、外面が体部ハケメ、口縁部ヨコナデで、内面はヘラナデで口縁部ヨコナデされる。

須恵器 (第 85～87 図、写真図版 351～353)

埋土と床面から坏と甕、瓶が 15 点出土している。坏は完形を含むが、他の器種は破片か一部を欠失するため全体が不明な個体が多い。

坏 (324～330) - 7 点の出土であるが、3 点は完形か口縁部から底部を残し他は口縁部から体部か体部下位から底部を残す。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整である。器形は土師器のそれとほぼ同様であり、器面調整は内外面ともロクロ目のみで再調整はまったく観察されない。大きさは口縁部径が 15.2 cm～13.6 cm、底部径は 5.6 cm・5.3 cm であり、両者の比率は 2.7～2.42 である。なお、326・329 の体部には「中」と判読できる墨書がある。

甕 (340・341・344～347) - 6 点の出土であるが、2 点は壺形であるが他は大甕である。壺形は体部下位と底部の破片であるため詳細は定かでないが、内外面ともヘラケズリ調整される。大甕は器表に並行叩き具痕、内面に同心円当て具痕や並行当て具痕が付され、347 の器表に

は1条の沈線が通らされる。

瓶(342・343) - 2点の出土であるが、1点(342)は頸部から口縁部を欠失し他は体部のみを残す破片である。342はロクロ使用成形され底部には断面が角張りハ状に開く高台が付く。器形は底部から大きく外傾する体部は肩部に最大径をもって頸部が大きく窄み、頸部下端に断面カマボコ状の突帯を付す。器面調整は、外面の肩部から上位は並行叩き後ロクロ目、下位は並行叩きやヘラケズリで調整される。内面はロクロ目とヘラナダとカキメである。後者も器形や成形は前者と同様であるが、器面調整が外面はカキメ、内面はロクロ目との違いが見られる。

土製品(第87図、写真図版525)

埋土内から羽口が1点出土している。

羽口(52) - 埋土内から出土している。小破片であるため詳細は不明である。大きさが長さ2.9cmである。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した土師器と須恵器の特徴から推定して9世紀後半代から10世紀初頭頃に位置づけられるものと考えられる。

④ DII×9住居跡

[遺構](第82・83図、写真図版76)

調査範囲の西端から約61m東によったDII区の西部に位置し、DIIu10住居跡は北に約11mの距離がある。DIIx11陥し穴状遺構と重複するが、当住居跡の方が新しい遺構である。

南東-北西約4.3m、南西-北西約4.0mの規模で、平面形は磁北に対して約48度東に偏し、北西壁の両隅部がほぼ直交し他は隅丸となる方形気味である。壁高は約25cmほどあり、水平に対して約105度外傾し、凸凹も少なくほぼ規則的な壁と言えよう。壁溝は検出されていないが、p1~p13の13基の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、p1・p6・p12・p1の4基以外は、平面的には柱穴状であるが、深さが全体として浅い特徴がある。しかし、位置や規模などを検討すると、p6・p2・p10は当住居跡の主柱穴を構成するものと推定され、他の柱穴状土坑も何らかの形で補助的な柱を構成していたものと考えられる。p1とp12は位置と規模から考えて当住居跡に付属する貯蔵穴であろうと推定される。埋土は全体が6層に細分されているが、土性は砂質シルトが主体のシルトであり、色調は黒色・黒褐色・極暗褐色などに分けられるが、前2色が主体である。土層の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは北西壁の南隅部から北に約1mの位置に構築され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で残存している。袖部全体の規模は幅約1m、奥行き約85cmで、壁の外方に約1.5m延びる煙道部が付属する。各部は、左側袖は幅約40cm、奥行き約85cm、高さ約35

cmであり、右側袖は幅約35cm、奥行き約1m、高さ約35cmの規模であり、左右どちらも河川礫を内壁に立て並べその周囲を褐色シルトと黒褐色シルトの混合土で補強して構築している。燃焼部は幅約40cm、奥行き約40cmの広さがあり、奥壁の手前約30cmに河川礫を立てて埋設した支脚がある。焼土は45cm×35cmの範囲で焼き口部から支脚の手前までに広がっている。煙道部は幅約20cmで検出面下最深約7cmの地下に掘られた割り貫き式であり、底面は奥壁の約10cm上から次第に低くなって煙出し部の底面とは約10cmの段差がある。煙出し部は径約25cm、深さ約45cmの円筒状をなす。

〔遺物〕(第88～90図、写真図版353・354・538)

全部で34点の出土であり、種類には土師器、須恵器、石製品、鉄製品を含むものの、土師器と須恵器が主体である。

土師器(第88・89図、写真図版353・354)

床面や埋土内から13点の出土であり、器種には坏と甕がある。

坏(388～393) - 6点の出土であるが、完形か口縁部から底部まで残存する個体は2点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片である。いずれもロクロ使用成形で底部には回転糸切り離し無調整と再調整があり、内面がミガキ後黒色処理されるものと無処理のもの2種類ある。内面黒色処理は5点と主体を占めるが、底部から僅かな丸味をもって外傾する体部は口縁端部が軽く外反する器形をなす。外面の器面調整は体部下半がヘラケズリ調整され、底部もヘラナデ再調整される例がある。内面は底部ヨコ方向、底面放射状のミガキの後黒色処理される。無処理の個体は口縁部から体部を残す破片であるが、器形は前者と同様であり、内外面ともロクロ目以外の再調整はまったくない。大きさは前者は口縁部径14.0cm、底部径7.6cmと6.0cmで比率は2.23と1.8であり、後者は口縁部径14.4cm～13.0cm、底部径4.8cm～6.6cmで比率は2.8～2.06である。前者の胎土は緻密で細かい粘土が使用されるが、後者は粗く砂混じりの粘土である。

甕(406～413) - 7点の出土であるが、410と411は鉢の可能性もある。すべて破片での出土であるが、いずれもロクロ使用成形され、体部上位か中位に体部最大径を持ち、頸部で僅かに窄んだのち口縁部が大きく外反する。口唇部は角張る縁帯状をなし端部は挽き出されて受け口状をなす。器面調整は、体部外面の上位はロクロ目でその下位はヘラケズリ調整される例と、全体がロクロ目のみの個体がある。内面はヘラナデするものとロクロ目だけの個体がある。大きさは大小関係がみられ、大・中・小の3型があるらしい。

須恵器(第88・89図、写真図版353・354)

埋土内からの出土を主体に全部で17点の出土であるが、器種には坏と甕・瓶がある。

坏(394～404) - 12点の出土であるが、完形や口縁部から底部までを残す個体は3点のみであり、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片である。すべてロクロ使用成形され、

底部は回転糸切り難し無調整であり、内外面ともロクロ目のみを残し、他の再調整は見られない。器形は土師器坏と同様である。399の体部には判読できない墨書と底面に「永」と判読される墨書がある。

壺(412・414～416) - 4点の出土である。すべて破片であり、器形には壺形の壺と大甕がある。前者(414)は使用破片であるため詳細は不明であるが、ロクロ使用成形され体部の内外面ともヘラケズリ調整される。後者は体部の外面に並行叩き具痕を付すいわゆる大甕であるが、413以外は体部の破片である。413は体部外面に並行叩き具痕の他に横走沈線を巡らし、内面には上位に青海波文、下位にヘラナデ痕が見られ、肩部に最大径を持ち口縁部は軽く外傾し、端部は角張る縁帯状をなす器形を示す。

鉄製品(第90図、写真図版538)

床面からと埋土内から刀子と不明鉄器のほか、鉄滓等が3点出土している。

刀子(122) - 床面から基部の先端部と刀身部の先端部を欠失した1点が出土している。残存する全長は約10cm、刀身部7.5cm、茎部2.5cm、最大身幅1.2cmの大きさで、棟は平棟で刃部は切っ先に向かって次第に先細りとなる。茎部との境には明瞭な段が付く両関であり、幅7mmである。

不明鉄器(135) - 全長が約3.5cmの鉄製品であるが、器種は定かでない。断面が長方形気味であることから、釘である可能性も考えられる。

鉄滓(123) - 床面から1点の出土である。横断面がやや偏平な全長4.7cmの大きさがある。

石製品(第90図、写真図版526)

床面から砥石が1点出土している。

砥石(98) - 奥羽山系産の細粒凝灰岩を素材とした砥石であり、大きさは最長約10cmである。両面に自然面を残し側縁に使用面を作り出している。おそらく、河川礫を素材としたものであろう。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した遺物の特徴はほぼ9世紀後半期の様相であることから、当住居跡もほぼその頃に位置づけられるであろう。

09 DIIu10 住居跡

〔遺構〕(第84・84図、写真図版77)

調査範囲の西端から約62m東によったDII区西部に位置し、DIIs11住居跡-1は北西に約8mの距離がある。DIIr12溝と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

南西-北東約3.5m、南東-北西約3.8mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約124度偏した長方形気味をなす。壁高は約40cmほどで、水平に対して約107度外傾するが、極

端な凸凹もなくほぼ規則的な壁と言えよう。床は全体の約 65 パーセントを第Ⅳ層の黄褐色火山灰質土を掘り込んだ後その部分を炭化物粒や地山粒の混在する黒褐色土を埋め込んで構築され、その上面に数 cm の黄褐色粘土を貼り床して床面としている。床面は小起伏はあるもののほぼ平坦で水平状態に近く、踏みしめによってほぼ全体が堅い。床面の壁際から幅約 35 cm ～ 25 cm、深さ約 10 cm の壁溝がカマドの設置される南東壁を除いた 3 方向に巡らされている。柱穴と推定される土坑はまったく検出されていないが、南隅部から貯蔵穴と推定される土坑が 1 基検出されており、規模などは別表に記載した。埋土は 11 層に細分されるが、土性は砂質シルトとシルトに分けられるが前者が主体をなし、色調は黒褐色を主体に極暗褐色や暗褐色・黄褐色があり、炭化物粒や焼土粒・地山粒などがほぼ全層に混入する。自然堆積で埋没した遺構と推定される。

カマドは北東壁の北東端に位置する。袖部は内壁の一部に河川礫を埋設し、その周囲を黒褐色や黄褐色のシルトや粘土を混ぜ合わせた土を積み上げて構築され、壁外に延びる煙道部が付属する。袖部全体の規模は幅約 1.1 m、奥行き約 95 cm、高さが約 25 cm の規模があり、各部でみると左側袖部は幅約 35 cm、奥行き約 45 cm、高さ約 25 cm で、右側袖部は 20 cm、奥行き約 7 cm、高さ約 25 cm の規模である。燃焼部は幅約 40 cm、奥行き約 85 cm ほどの広さがあり、焼土は 1 m × 45 cm の燃焼部ほぼ全域に広く分布し、厚さは約 2 cm ほどである。煙道部は先端部まで約 1.5 m であるが、検出面下約 25 cm の地下に径約 20 cm の土管状に掘られた割り貫き式であり、底面は奥壁から次第に低くなり、約 25 cm ほど低くなる。煙出し部は径約 40 cm、深さ約 55 cm の土坑状をなし、煙道部の底面とは約 5 cm の段差で接続する。

〔遺物〕(第 90・91 図、写真図版 355)

埋土内からの出土を主体に床面から土師器 9 点と 16 点の須恵器が出土している。

土師器 (第 90 図、写真図版 355)

埋土内と床面から全部で 16 点の出土であり、器種には坏と甕・埴がある。

坏 (418 ～ 420) 一埋土内の出土を主体に 3 点の出土である。口縁部から底部までを残す個体は 1 点のみで、他の 2 点は口縁部から体部と体部から底部を残存する破片である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整である。外面はロクロ目以外の再調整はないものの、内面はいずれもミガキ後黒色処理される。大きさは口縁部径 12.8 cm、底部径 6 cm で比率は 2.13 である。

甕 (433 ～ 437) 一カマドに関連する遺構の各部から 5 点出土しているが、完形はなく口縁部から体部か体部から底部または底部のみを残す破片である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整である。器面の調整は内外面ともロクロ目のみを残存し、器形は底部から外傾する体部が、上位か頸部に最大径を持ち、口縁部は外反して口唇部は角張って縁帯状をなし、端部は上方に挽き出されて受け口状となる。大きさは比較的小型の個体が多く、一

部は壺ではなく鉢である可能性が高い。

埴 (438) - 床面から1点出土しているが、口縁部から体部を残す破片である。輪積み成形され、器表はハケメやヘラナデ、内面はヘラナデで調整され、口縁部は内外面ともヨコナデである。器形は、底部形態は不明であるが、体部は底部から僅かな丸味をもって大きく外傾し、口縁部は頸部から大きく外反する全体が洗面器形的な器形と推定される。口縁部径が約 26.4 cm である。

須恵器 (第 90・91 図、写真図版 355)

埴土内からの出土を主体に床面から 16 点出土しているが、器種には壺と甕そして瓶がある。埴 (421～431) - 口縁部から底部を残す 1 点以外は口縁部から体部を残す 8 点と底部から底部を残す 3 点の 11 点の出土である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整である。器面の調整は内外面ともロクロ目以外は観察されず、器形は土師器のそれとほぼ同様であるが、口縁端部の外反する例が多いという違いが認められる。

甕 (439～441) - 3 点が埴土内から出土しているが、いずれも小破片であり詳細は不明である。器表に並行叩き具痕を付す破片 (439・440) とヘラケズリの調整される器体の 2 種類ある。

瓶 (442) - ロクロ使用成形され肩部付近を残す破片であるが、瓶ではなく壺形の甕である可能性がある。肩部から上位はロクロ目を残し、下位はヘラケズリ調整される。内面はロクロ目のみである。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期を特定できないが、出土した土師器と須恵器や器種組成などから時期を推定すると、9 世紀末から 10 世紀前半頃に位置づけられるものと考えられる。

10 DⅡs11 住居跡-1

〔遺構〕 (第 86・87 図、写真図版 78)

調査範囲の西端から約 65 m 東によった DⅡ区西部に位置し、DⅡs11 住居跡-2 は東に約 2 m の距離がある。DⅡs11 住居跡-2、DⅡt11 住居跡、DⅡs11 土坑-1、DⅡs11 土坑-2、DⅡt11 土坑-1、DⅡt11 土坑-2、DⅡr12 溝跡と重複するが、本住居跡は住居跡間では新しくほかの遺構は本住居跡より新しい。

南東-北西約 4.7 m、南西-北東 4.0 m の規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約 42 度東に偏した長方形である。壁高は約 20 cm ほどで、水平に対して約 125 度外傾し、僅かな凸凹はあるが東隅部付近以外は規則的である。床は第Ⅳ層と DⅡs11 住居跡-2 の埴土を掘り込んで構築し、重複部分は地山の黄褐色火山灰質土で貼り床して床面とする。床面には小起伏があるとともに重複部分は踏みしめによる不同の沈み込みが観察されるものの、全体的に堅い。

壁溝は検出されていないが、p1～p3の3基の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、柱穴や貯蔵穴とするには規模や位置から考えて不適当と推定され、特にp1・p2は性格不明である。埋土は13層に細分されているが、土性は砂質シルトを主体にシルトと大別され、色調は黒色・黒褐色・暗褐色などに細分されている。全体に炭化物粒や焼土粒の他、地山粒の混入が多く観察される。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは東隅部に設置され、袖部、燃焼部、煙道部、煙出し部が良好な状態で検出された。袖部全体の規模は、幅が約1m、奥行きは約75cmほどあり、壁外に延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅約25cm、奥行き約75cm、高さ約35cmで、右側の袖は幅約40cm、奥行き約80cm、高さ約25cmである。左側の袖部は黄褐色シルトと暗褐色の混合土を積み上げ、右側袖部は河川礫を埋設して芯としてその周囲を黄褐色シルトと暗褐色の混合土で補強して構築されるが、基底部は掘り込まれている。燃焼部は幅約50cm、奥行き約1mであるが、奥壁から約75cm手前に河川礫を埋設した支脚がある。燃焼部の焼土は65cm×50cm、厚さ約3cmほどの範囲で焼き口部の前から支脚の付近まで広がっている。煙道部は奥壁とは段差で接続し、次第に低くなって煙出し部へ続くが、煙道は検出面下約25cmに径約20cmの土管状に掘られた割り貫き式である。煙出し部は径約35cmの円筒状であり、煙道部とは僅かな段差で接続する。

(遺物) (第92～96図、写真図版356～358・523・535・536)

埋土内や床面から土師器や須恵器の他土製品と鉄製品が合わせて59点出土している。

土師器 (第92～96図、写真図版356～358)

床面と埋土内から坏21点と甕15点、鉢2点・埴2点の合計40点出土している。

坏(443～463) - 出土した21点はすべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であるが、内面がミガキ後黒色処理される個体と無処理の個体に分けられる。黒色処理される前種は12点と主体であるが、完形や口縁部から底部を残す破片は5点のみであり、他は口縁部から体部か体部から底部を残存する破片である。体部の外面はロクロ目のみで他の調整痕は観察されず、器形は底部から僅かに丸味をもって外傾する体部は、口縁部が直線的に外傾したり端部で軽く外反する。後種は9点であるが、口縁部から底部までを残すのは5点で他は破片での出土である。内外面ともロクロ目以外の再調整はまったく見られず、器形は前種とほぼ同様である。前種の大きさは口縁部径が15.6cm～13.4cm、底部径6.2cm～5.4cmで、比率は2.6～2.33である。443と453の体部外面には判読不能であるが、墨書がある。

甕(469～483) - 15点の出土であるが、ロクロ使用成形された469～478の11点と輪積み成形された479～483の5点に分けられる。前種はすべて口縁部から体部を残す長道形の破片であり、器形は中位か上位に体部最大径を持ち、口縁部は頸部から大きく外反し、口唇部は角張り端部が挽き出される例が多い。器面の調整は、大型の場合は外面が体部上位はロクロ目、中位から下位はヘラケズリされる例が多く、小型はロクロ調整が多い。後種は完形を1点

(479) 含むが他は口縁部から体部と体部から底部を残す破片であるが、いずれも長胴形の器形である。器面は外面がヘラケズリやヘラナデで、内面はヘラナデ調整され、器形は底部から外傾する体部はほぼ中位に最大径を持つ円形をなし、口縁部は頸部から大きく外反し口唇部は丸くおさまる。

鉢(484・485) - 2点の出土と少ないが、ともにロクロ使用成形され、内面がミガキ後黒色処理されることと口縁部径が15.4 cmと器高の9.8 cmより大きい特徴があり、底部は回転糸切り離し無調整である。

埴(486・487) - 2点と少ないが、486は口縁部から底部付近までを残す破片である。ロクロ使用成形され、底部は残存しないが丸底風と推定され、体部は底部から大きく外傾して頸部に続き、口縁部は頸部から大きく外反し口唇部が角張る線帯状をなし底部は挽き出される受け口状の、全体形が洗面器的な器形をなす。器面は、外面が頸部付近から口縁部はロクロ目のみであるが、体部はヘラケズリ調整され、内面はヘラナデされる。口縁部径が35 cm位と大型である。

須恵器(第93・96図、写真図版357・358)

埋土内と床面から坏5点の他、甕が5点出土している。

坏(464~468) - 5点の出土であるが、すべて埋土内からの出土である。完形はまったく含まず、いずれも口縁部から体部と体部から底部を残す破片であるが、すべてロクロ使用成形され、底部切り離しは不明であるが、体部は内外面ともロクロ目以外の調整痕は見られない。器形は土師器の坏とほぼ同様である。

甕(488~492) - 床面から5点出土しているが、完形はなく口縁部破片と体部から底部を残す破片、体部の小破片などである。前者の口縁部はロクロ目を明瞭に残す大甕であり、頸部から大きく外反し口唇部は下方に挽き出され線帯状をなす。中者もロクロ使用成形と推定され、外面がヘラケズリ、内面はヘラナデで調整される。体部は底部から大きく外反し、全体では壺形に近い形態と推定される。後者は外面に並行叩き具痕、内面に並行や同心円・青海波文などの当て具痕を付す大甕の体部破片である。

土製品(第96図、写真図版523)

土鍾が6点出土している。

土鍾(1~6) - 埋土内から6点出土しているが、全長が6.7 cm~5.3 cm、最大径が2.6 cm~1.9 cmの大きさがあり、中央部に最大径をもって両端に向かって次第に先細りとなり、中心部に貫通孔を持つ土管状の器形を示す。

鉄製品(第96図、写真図版535・536)

床面直上から鉄鎌が3点出土している。

鉄鎌(73~75) - 3点は完形1点、茎部を欠失する1点、鎌身の先端部を欠失する1点に分

けられる。前者はいわゆる平根形の鏝で、全長が17 cm、鏝身の長さ6.5 cm、基部の長さ9.5 cm、身幅3.5 cm、厚さ3 mmの大きさがある。中者は残全長が6 cm、鏝身の長さ4.7 cm、身幅2.5 cm、厚さ2 mmの大きさがある基部が大きく抉られる平根形である。後者は鏝身の先端を欠くが、全長8.5 cm、基部5 cm、身幅1.5 cmの大きさがあり、鏝身が比較的小型の平根形の鏝である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期を特定することはできないが、出土した土師器と須恵器の器種組成や器形などの特徴は9世紀末から10世紀前半代の特徴とされることから、当住居跡はほぼその頃に位置づけられるものと推定される。

07 DⅡs 11住居跡-2

〔遺構〕(第88図、写真図版79)

調査範囲の西端から約65 m東によったDⅡ区の西部に位置し、DⅡt 11住居跡は南に約2 mの距離がある。DⅡs 11住居跡-1、DⅡt 11住居跡、DⅡs 11土坑-1、DⅡs 11土坑-2、DⅡt 12土坑-1、DⅡt 12土坑-2と重複するが、本住居跡は重複する住居跡間ではもっとも古く、他の遺構は本住居跡より新しい。

南東-北西約3.5 m、南西-北東3.5 mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約40度東に偏し、北東壁が外方に張り出す略方形である。壁高は約15 cm位で、水平に対して約125度外傾し、僅かな凸凹はあるが北東壁以外は規則的である。床は第IV層で構築され、貼り床されることもなくそのまま床面としている。床面は起伏もなくほぼ水平に近い平坦であり、全体が踏みしめて堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p5の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1とp2以外は規模や形状は柱穴的であるが、位置は必ずしもそれを示していない。おそらく支柱穴ではなく支柱穴であろうと推定される。p1とp2は位置や規模から貯蔵穴と考えられる。埋土は1層のみであるが、土性は黒褐色土が混入した黄褐色土であり、DⅡs 11住居跡-1を建設した時に当住居跡が埋め戻されている可能性が強いことを示している。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは北東壁の中央やや南隅部よりに設置されているが、残存しているのは煙道部のみであり、他の部分はDⅡs 11住居跡-1を建設した時に削平を受けたりしく煙道部以外は残存していない。煙道部は幅約30 cm、長さ約1.2 mであり、先端部の煙出し部は不明瞭であることから、完全に仕上げられた状態ではなく、構築途中で中止放棄したものではないかと推測される。南隅部のカマドはDⅡs 11住居跡-1のカマドであるが、おそらく、当住居跡と共用している可能性が強い。

〔遺物〕(第97図、写真図版359)

埋土内と床面から土師器と須恵器が出土している。

土師器 (第 97 図、写真図版 359)

埋土内を主体に 6 点の出土であり、器種には坏と高台付き坏そして壺がある。

坏 (493～496) - 4 点の出土であるが、完形は含まず口縁部から体部と体部から底部を残す破片である。いずれもロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であるが、内面がミガキ後黒色処理される前 2 点と無処理の残り 2 点に細分される。前者は小破片のため詳細は不明であるが、外面はロクロ目のみで他の再調整はまったく見られず、底部から外傾する体部は口縁部で大きく外反する器形らしい。後者は内外面ともロクロ目のみを残し、底部が丸味を持ち口縁部が直線的に外傾する器形を示し、体部外面に判読不明であるが墨書がある。

高台付き坏 (497) - ほぼ完形の 1 点が出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整ののち、ハ字状に開く高台を付した器形をなし、内外面ともロクロ目のみで他の調整はない。

壺 (498) - 体部下位から底部を残す破片が 1 点出土している。ロクロ使用成形され、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される大型である。

須恵器 (第 97 図、写真図版 359)

貯蔵穴から大壺の破片が 1 点出土している。

壺 (499) - 器表に並行叩き具痕、内面に同心円当て具痕を付す大壺の体部小破片である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器の特徴は 9 世紀末から 10 世紀前半代の特徴であることから、当住居跡もほぼその頃に属するものと推定される。

08 DII t11 住居跡

〔遺構〕 (第 89 図)

調査範囲の西端から約 65 m 東によった DII 区の西部に位置し、DII u11 住居跡-1 は南東に約 6 m の距離がある。DII s11 住居跡-1、DII t11 住居跡、DII s11 土坑-1、DII s11 土坑-2、DII t12 土坑-1、DII t12 土坑-2・DII r12 溝と重複するが、本住居跡は重複する住居跡間でもっとも古く他の遺構は本住居跡より新しいが、北東部は重複する溝の削平によって残存していないことにより不明である。

残存部分は南東-北西約 4.2 m、南西-北東最大 1.7 m の規模であり、完全であれば一辺が 4.2 m ほどの規模と推定され、平面形はカマドが不明のため主軸方向が定かでないものの磁北に対して 42 度東に偏した方形か長方形と推定される。壁高は約 10 cm ほどで、水平に対して 110 度ほど外傾し、床面とは丸味をもって接続している。壁には凸凹もなくほぼ直線的である。床面は第 IV 層の黄褐色火土灰土の上層に相当する暗褐色漸移層で構築され、貼り床されることなくそのまま床面としており、全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、

p1の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、平面形や位置と規模から柱穴のものであるが、他には検出されておらず断定できない。埋土は2層に細分されているものの色調は黒褐色で土性はシルトであるものの、黄褐色土の混入に差が見られたことから、細分された。埋土の層が薄いため断定出来ないが、自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは重複の削平を受けたらしく検出されていないが、壁外に延びる煙道部や煙出し部も未検出であることから推定すると、北東壁に設置されていた可能性が考えられる。

〔遺物〕(第97図、写真図版359)

埋土と貼り床の下から土師器と須恵器が合わせて7点出土している。

土師器(第97図、写真図版359)

埋土内から1点と貼り床の下から2点の合わせて3点が出土しており、器種には坏と甕そして埴がある。

坏(500)―埋土内から1点出土しているが、口縁部から体部を残す小破片であるため全体的なことは不明である。ロクロ使用成形され、外面はロクロ目のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される個体で、丸味をもって底部から外傾する体部は口縁部がやや内湾気味になる器形を示すらしい。

甕(502)―貼り床の下から出土した底部の破片1点である。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデによる調整が見られるものの、ロクロ使用の有無をはじめ詳細は不明である。

埴(505)―貼り床の下から口縁部から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、体部は底部から大きく外傾し、口縁部は大きく外反して口唇部は角張る縁帯状をなし、上方に挽き出されて受け口状をなす。器面の調整は、外面が口縁部ロクロナデ、体部ヘラケズリ、内面はヘラナデである。

須恵器(第97図、写真図版359)

埋土内と貼り床の下から4点出土しているが、器種には坏と甕がある。

坏(502)―口縁部から体部を残す破片が貼り床の下から1点出土している。ロクロ使用成形され、内外面ともロクロ目以外の調整はない。丸味をもって外傾する体部は口縁端部で軽く外反する器形をなす。

甕(503・504・506)―埋土内と貼り床の下から口縁部破片が2点の他体部の破片が1点出土している。前者はロクロ使用成形され、縁帯状の受け口となる器形である。後者は外面に並行叩き具痕に横方向の沈線、内面にカキメと同心円当て具痕が付される破片である。

〔遺構の時期〕

遺構から時期の特定は困難であり、さらに遺物についても出土量が少ないことと完形がないなどから断定はできないが、10世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

09 DⅡu11住居跡-1

(遺構) (第90図、写真図版80)

調査範囲の西端から約69m東によったDⅡ区の西よりに位置し、DⅡu11住居跡-2は西に約3mの距離がある。DⅡu11住居跡-2と重複するが、当住居跡の方が新しい遺構である。

南東-北西約3.4m、北東-南西約3.3mの規模で、平面形は主軸が磁北に対して約133度東に偏した隅丸の方形である。壁高は約10cmと掘り込みが浅く、水平に対して約115度で外傾する。壁は全体として起伏がみられ、特に東壁は壁際の床面に土坑が多いなどから不規則な部分が多い。床は第四層上部の漸移層である暗褐色土と一部は土坑の埋土によって構築され、地山部分はそのまま、土坑と重複する部分は黄褐色土の薄層で貼り床して床面としているが、床面はやや凸凹があって不規則であるが、全体として踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p11の11基の土坑が検出されている。規模などは別表記載したが、p1とp2以外は柱穴状の比較的小型の土坑であるが、東壁隅部寄りと北西部よりの2ヶ所に密集する状況が観察されるものの、位置や規模から見てp4~p7は当住居跡の主柱穴を構成するものと推定され、他も一部は支柱穴と考えられる。p1・p3は平面的には貯蔵穴的な規模であるが、形状が不整形であったり深さが浅すぎるなど、貯蔵穴と断定するには疑問が残ることも事実であるが、p3は貯蔵穴である可能性が高い。埋土は3層に細分されているが、2・3層は貼り床分と土坑の埋土であることから、住居跡の純粋な埋土は1層のみとなる。1層は黒褐色シルトであり、炭化物粒や焼土粒が混在する。自然堆積で埋没した遺構と考えられる。

カマドは検出されていないが、南東壁のやや北東隅部よりの壁沿いの床面から60cm×55cmの楕円形状に広がる焼土が検出されていることから、位置からみてこの場所にカマドが設置されていた可能性が高い。袖部や煙道部、煙出し部などはまったく検出されていない。

(遺物) (第98・99図、写真図版359~361)

埋土内と床面から土師器と須恵器が合わせて36点出土している。完形は少なく殆どは破片での出土である。

土師器 (第98・99図、写真図版359・360)

床面と埋土内から27点出土しているが、器種には坏と甕があるものの坏が18点と主体を占め、甕は9点のみである。完形か口縁部から底部までを残すのは坏の4点のみである。

坏(507~524) - 18点の出土であるが、床面からの出土が11点、埋土内からは7点の出土であるが、完形か口縁部から底部を残す個体は4点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片である。すべてロクロ使用整形され、底部は回転糸切り離し無調整であるが、内面がミガキ後黒色処理される9点と、無処理の8点に細部される。前者は外面はロクロ目以外の調整はまったくみられず、底部から丸味を持ったり直線的に外傾する体部は口縁端部が直線的に外傾したり僅かに外反する器形を示す。後者は内外面ともロクロ目以外の調整は見られ

ず、器形は前者とほぼ同様である。大きさは、前者が口縁部径 16 cm・底部径 7 cm で比率は 2.28、後者は口縁部径が 16.7 cm～14.1 cm、底部径 6.1 cm～5.0 cm で比率は 2.82～2.32 である。

壺(528～536)－9 点の出土であるが、完形はまったくなく口縁部から体部か体部から底部を残す破片である。すべてロクロ使用成形され、体部上位から口縁部はロクロ調整されその下位はヘラケズリ調整される個体とすべてロクロ調整のみの個体に分けられるが、前者は大型に、後者は中・小型の個体に多い。底部から丸味をもって外傾する体部は中位か上位に体部最大径をもって頸部に続き、口縁部は頸部から大きく外反し口唇部は角張る縁帯状で挽き出され受け口状となる個体と、口縁部が外反して口唇部が丸くおさまる個体がある。内面は大型ではヘラナデ調整であるが、小型はロクロ調整のみである。小型の場合は底部が回転糸切り離し無調整である。

須恵器(第 98・99 図、写真図版 360・361)

埋土内と床面から 9 点の出土であり、器種には坏と壺のほか、壺と瓶がある。すべて破片での出土であり、完形や全体を残す個体はない。

坏(525～527)－貼り床から 2 点と埋土内から 1 点の 3 点の出土であるが、完形はなく口縁部から体部と体部から底部を残す破片である。すべてロクロ使用成形であり、内外面ともロクロ目調整のみであり、底部は回転糸切り離し無調整である。器形は土師器の坏とほぼ同様である。

壺(538・540～542)－外面に並行叩き具痕を付し内面に無文突面当て具痕を持つ大壺と外面ヘラケズリ、内面ヘラナデされる壺形に近い器形と推定される個体に分けられる。

壺(537)－口縁部破片が 1 点出土している。ロクロ使用成形され口唇部が縁帯状をなし、口唇は挽き出しによって受け口状になる器形である。

瓶(539)－肩部から体部を残す破片であるが、壺形の壺である可能性も考えられる。ロクロ使用成形され、肩部付近から上位はロクロ目のみでその下位はヘラケズリされ、内面はロクロ調整の他一部にヘラナデが散見される。

〔遺構の時期〕

遺構の状況から遺構の時期を特定するのは困難であるが、出土した土師器や須恵器の状況からすると、9 世紀末から 10 世紀前半頃の様相と理解されることから住居跡もほぼその頃と推定される。

㊦ DⅡu 11 住居跡－2

〔遺構〕(第 89 図、写真図版 81)

調査範囲の西端から約 66 m 東によった DⅡ区西部に位置し、DⅡr 12 住居跡は北東に約 15 m の距離がある。DⅡu 11 住居跡－1 と DⅡu 10 住居跡の 2 棟と重複するが、いずれよりも

当住居跡の方が古い。

南東—北西約 3.7 m、南西—北東約 3.1 m の規模があり、平面形は磁北に対して約 47 度東に偏した長方形である。壁高は約 5 cm と掘り込みが非常に浅く、水平に対して約 120 度位外傾する。壁は幾分凸凹があり、やや不規則である。床は第 IV 層の黄褐色火山灰質土の上部で構築され、僅かな貼り床をして床面としており、床面には軽い起伏が見られるもののほぼ平坦で水平に近く、全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、p1 から 6 までの 6 基の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、規模や位置関係から p1 と p6 の規模が大きい土坑と径の小さい土坑に細分される。前者の内 p1 は平面形が隅丸の長方形であるが、深さが浅いばかりではなく底面の凸凹が激しく不規則であり、平面的には貯蔵穴的であるが性格を断定できない。後者は位置が東隅部でカマドと推定される焼土の胎であり、底面の状態も平坦であること等から当住居跡の貯蔵穴と推定される。p2～p5 は位置や規模等から当住居跡の柱穴を構成するものと推定される。埋土は黒褐色を示すシルトの単層であり、炭化物の小粒が僅かに混入する。埋土の層があまりにも薄く埋没の状況は不明である。

カマドに関連する袖部と煙道部・煙出し部といった明確な遺構は検出されていないが、北東壁の東隅部よりの床面で 55 cm × 25 cm の楕円形に広がる焼土が検出されており、位置と広がり具合から考えてこの位置にカマドが設置されていたものと推定される。その他は不明である。

〔遺物〕(第 100 図、写真図版 361・536)

床面や貼り床内のほか埋土内から 11 点の出土であり、種類として土師器と須恵器そして鉄器がある。

土師器 (第 100 図、写真図版 361)

6 点が床面や貼り床を主体に埋土内から出土しているが、器種には坏・高台付き坏と耳皿そして甕がある。

坏 (544～546) — 貼り床と埋土内から口縁部から体部を残す 1 点と体部から底部を残存する 2 点の 3 点が出土している。いずれもロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整で、体部は内外面ともにロクロ目以外の再調整のない製品である。底部から僅かな丸味をもって外傾する体部は、口縁端部で軽く外反する器形を示す。

高台付き坏 (543) — 床面から口縁部から底部までを残す 1 点が出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整に高さ 3.5 cm の高台がつけられている。体部の外面はロクロ目以外の再調整は見られないが、内面はミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は、体部中位で軽い括れと段をもって口縁部に続き、口縁部は直線的に外傾する器形をなす。底部の高台は断面が三角形をなし、ハの字状に軽く外方に開く。大きさは口縁部径 15.2 cm、底部径 6.4 cm、器高 5.9 cm である。

耳皿 (547) — 貼り床から口縁部から底部を残す 1 点が出土している。ロクロ使用成形され、

底部が回転糸切り難し無調整の製品で、体部は内外面ともにロクロ目以外の再調整はない。全体としては皿形であるが、口縁部の2方向が突出する波状をなし、突出部が強く内湾する器形を示す。

甕(549) - p1の埋土内から1点出土している。ロクロ使用成形された口縁部のみを残す破片である。内外面ともロクロ目のみを残し、口縁部は頸部から強く外傾し口縁部は角張る縁帯状をなし端部が挽き出されて受け口状をなす。

須恵器(第100図、写真図版361)

床面や土坑内からの出土を主体に4点の出土であり、器種には坏・甕・瓶が含まれる。

坏(548) - 床面から口縁部から体部を残す1点の破片が出土している。ロクロ使用成形され、内外面ともロクロ目以内の再調整はない。器形は土師器の坏と大同小異である。

甕(550・551) - 土坑と埋土内から口縁部の破片が2点出土している。ロクロ使用成形され内外面にロクロ目以外の調整はない。口縁部は頸部から強く外傾し口縁部は角張る縁帯状をなし端部が挽き出されて受け口状をなす。

瓶(552) - 床面から口縁部破片が1点出土している。ロクロ使用成形され内外面にロクロ目以外の調整はない。頸部から口縁部が強く外傾して口縁部は角張る縁帯状をなし端部が挽き出されて受け口状をなす。

鉄製品(第100図、写真図版536)

床面から鋤先が1点出土している。

鋤先(76) - 鋤先の側縁部である。内側がY字状をなし鋤台が装着されていたことを示している。残存する全長は9cm、幅2.5cmの大きさがあり、やや湾曲する形状をなす。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から10世紀代の時期が想定される。

20 DⅡr12住居跡

[遺構](第91・92図、写真図版82)

調査範囲から約73m東によったDⅡ区のほぼ中央部に位置し、DⅡt12住居跡は南に約7mの距離がある。DⅡr12溝と重複する他北側は調査範囲外に延びているため全体は調査不能である。重複による新旧関係は溝の方が新しい遺構である。

南東-北西約4.0m、南西-北東約4.2mの規模を持ち、平面形は主軸方向が字北に対して約149度東に偏した隅丸の長方形気味を示す。壁高は約35cmほどで水平に対して約95度外傾する。壁はやや突辺状ではあるが凸凹も少なく規則的な壁である。床は第Ⅳ層の黄褐色火山灰質土で構築され、土坑の部分以外は貼り床されることなくそのまま床面とされている。床面はや

や小起伏があるものほぼ平坦である。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p15の15基の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、平面的な形や規模からp2・p3・p8・p9以外は柱穴であるが、位置が南東壁より中央部の床面に集中し柱穴としてはいずれも浅いなど柱穴として結論づけるには疑問がある。したがって支柱穴としては不明であるが、いずれかは支柱穴である可能性が考えられる。埋土は全体が8層に細分されているが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色を主体に暗褐色と極暗赤褐色と黒色がある。いずれの層にも焼土粒や炭化物粒そして地山の褐色土粒が混入している。自然堆積で埋没した遺構であろう。

カマドは南東壁の北西隅部よりに設置され、袖部、燃焼部、煙道部、煙出し部などが良好な状態で残存している。袖部の全体規模は幅が約1.5m、奥行き約70cmほどであるが、各部みると左袖部は幅約40cm、奥行き約70cmで、右袖部が幅約30cm、奥行きは65cmの規模であり、左袖部の一部に河川礫を芯にして暗褐色土と黒褐色土の混合したシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約30cmで奥行きが約80cmほどの広さがあり、焼土は焚き口部の手前から燃焼部のほぼ全面に広がり、約4cmの厚さがある。煙道部は奥壁から外方に約1.5mの長さがあり、先端部に煙出し部が付く。幅は約25cm、深さ約35cmほどあり、底面は奥壁とは段差で接続し煙出し部に向かって僅かに高くなり、煙出し部とは段差で続く。煙出し部は径約50cm、深さ約35cmで平面形が楕円形を示す土坑状である。

〔遺物〕(第101～106図、写真図版361～364)

埋土や床面と土坑内から土師器が45点と須恵器が24点の合わせて69点出土している。

土師器(第101～104図、写真図版361～364)

45点の出土であるが、埋土内より床面や土坑など遺構に直接伴っての出土が多い。器種としては坏その他壺・鉢・甕があるものの、個体数は壺がもっとも多く次いで坏となり、その他の器種は少ない。

坏(553～565) - 13点出土しているが、完形や口縁部から底部を残す個体は3点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整であるが、内面がミガキ後黒色処理される7点と無処理の6点に分けられる。前者の外側と後者の内外面はロクロ目以外の再調整は観察されず、底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部で僅かに外反する器形の個体が多く、この傾向は両者とも同様である。前者の大きさは口縁部径14.6cm、底部径5.8cmで、比率は2.51である。後者のそれは口縁部径13.6cm、底部径5.6cmで、比率は2.42である。

壺(577～603) - 27点の出土で、これらは主に遺構に直接伴って出土した例が多い。完形や口縁部から底部までを残す個体は出土しておらず、すべて口縁部から体部、体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形が主体であるが、一部にロクロ使用成形の22点と輪

積み成形された5点(594・596・600・603)に分けられる。前者には大・中・小の3型があるものの、いずれも長胴形をなすようである。体部が底部から外傾し体部最大径を中位か上位にもって頸部に続き、口縁部は大きく外反して端部が角張る縁帯状に仕上げる個体が多く、さらに上方に挽き出される例も多い。器面は内外面ともロクロ調整のみで仕上げられる例が殆どであるが、大型の一部に体部下位や内面をヘラケズリやヘラナデ調整される例も見られる。後者の場合は体部が全面ヘラケズリやヘラナデで調整されるほか、口縁部はヨコナデ調整される特徴があり、前種同様大小関係が見られる。

鉢(604・605) - 2点の出土である。いずれもロクロ使用成形で外面はロクロ調整であるが、604は内面がミガキ後黒色処理され、後者は無処理に分けられる。前者は体部が球形気味に膨らみ窄む頸部から口縁部が外傾し、口唇部は角張る器形である。後者は体部が底部から直線的に大きく外傾して頸部で外反する。口唇部は角張り端部が上方に挽き出される。

壺(606・608) - 2点の出土である。607はロクロ使用成形と推定されるが、他はロクロ不使用成形され、器形は体部に最大径をもって球形に膨らむものの頸部がやや広い口蓋的であり、器面が606・607の2点はヘラナデやヘラケズリ、608はヘラミガキで調整される。大小関係がある。

須恵器(第101・104～106図、写真図版362・364)

24点が埋土内や床面の他、土坑内などから出土している。器種には坏のほか甕と壺がある。

坏(566・576) - 11点が床面と土坑内を主に埋土内から出土しているが、全体が判明するのは3点のみで、ほかは破片による一部のみの出土である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、器面は内外面ともロクロ使用成形以外の再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が僅かに外反か内湾したりする器形を示す。大きさは口縁部径が14.9cm～13.8cm、底部径が6.2cm～5.2cmであり、比率は2.69～2.37である。

甕(613～621) - 12点の出土であるが、壺形に近い個体といわれる大甕がある。前者はロクロ使用成形され、器面上位に明瞭なロクロ目の他、一部の肩部から頸部に並行叩き具痕を残し、下位はヘラケズリで調整される。全体的な器形は不明であるが、底部から外傾する体部は最大径を肩部にもって頸部で大きく窄む器形を示すらしい。後者の大甕は小破片での出土が多いが、口縁部付近を含むその付近はロクロで形成されるらしいが、体部は外面に並行叩き具痕、内面に放射状や円形無文、並行の当て具痕を付す例が多い。底部形態には丸底の例もある。

壺(609) - ロクロ使用成形された完形の1点が出土している。底部から大きく外傾する体部は肩部に最大径をもって頸部で大きく窄む。口縁部は頸部から外反し口唇部は端部を両面に肥厚させて口唇部を平らに面取りする器形を示す。器面は体部上位と内面はロクロ調整であるが、体部外面の下位はヘラケズリ調整である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土遺物の特徴は9世紀末から10世紀初頭頃の特徴とされることから、ほぼこの時期の住居跡と推定される。

⑦ DII t 12 住居跡

(遺構) (第93・94図、写真図版83)

調査範囲の西端から71m東によったDII区ほぼ中央部に位置し、DII x 12住居跡は南に約19mの距離がある。DII s 11住居跡-2、DII t 12土坑-1、DII t 13土坑と重複するが、住居跡と前者の土坑は古く、後者の土坑は新しい遺構である。

東-西は約3.3m、南-北は約3.1mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約180度偏した台形に近い長方形を示す。壁高は約20cmほどで、水平に対して約100度で外傾する。壁には若干の凸凹が観察されるもののほぼ規則的と言えよう。床は第IV層の黄褐色火山灰質土で構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされている。床面はほぼ水平に近い平坦をなし全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1とp2の2基の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、位置や規模、平面的な形からは柱穴状であるが、深さが若干浅く必ずしも柱穴と断定できないが、支柱的な柱穴かも知れない。埋土は全体が12層に細分されているものの土性はいずれもシルトか砂質のシルトで、色調は黒褐色を主体に極暗褐色・極暗赤褐色・黒色などに細分され、炭化物粒や焼土粒・黄褐色地山粒などが、多少の差こそあれ全層に混入している。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは南壁の中央やや東隅部よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。袖部の全体規模は幅が約90cm、奥行きは約75cmであるが、各部分では左側袖部が幅約25cm・奥行き約75cm・高さが約15cmで、右側袖部は幅約20cm・奥行き約60cm・高さが約15cmである。袖部は左側の一部に河川礫を芯にしているが、ほとんどは黒褐色土と黄褐色土を混合させた土を積み上げて構築している。燃焼部は幅約45cm・奥行き約70cmの広さがあり、焼土は焚き口部から65cm×45cmの範囲に厚さ約3cmで広がっている。火床は床面より低くなり、煙道部とは緩やかな傾斜で続く。煙道部は幅約45cm～40cmと先端部が狭くなり、深さは25cm～15cmと奥壁から先端部に向かって次第に高くなり、煙出し部とは段差で接続する。煙出し部は径50cm×50cmの楕円形で深さが約15cmの土坑状をなす。

(遺物) (第107・108・110図、写真図版365・366・525・526)

土師器と須恵器の31点の他、石製品2点と土製品が1点の34点が埋土や床面から出土している。

土師器 (第107・108図、写真図版365・366)

埋土や床面から14点出土しているが、完形はまったく出土せず、いずれも破片での出土である。器種には坏と甕や鉢がある。

坏 (622～627) - 埋土と床面から6点出土しているが、完形はまったく見られず、口縁部から体部か体部から底部を残す破片である。いずれもロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整で、体部外面はすべてロクロ調整だけであるが、内面がミガキ後黒色処理される個体と無処理の個体に分けられる。前・後者とも3点であるが、底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直線的に外傾する器形で、両者とも共通する。

壺 (639～644) - 埋土と床面から6点出土しているが、完形はなくいずれも破片での出土である。641以外の5点はロクロ使用成形され、大型は体部外面の上位はロクロ仕上げ、下位はヘラケズリの他内面はヘラナデ調整されるが、小形は内外面ともロクロ調整以外の再調整はない。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部から口縁部が大きく外反し、口唇部が角張る縷帯状をなし端不が挽き出され受け口状となる器形を示す。輪積み成形の641は、器形自体は前者とほぼ同様であるが口唇部が丸く収まることと受け口状にならない違いがあり、器面の調整は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、体部内面はヘラナデされる違いがある。

鉢 (645・646) - 2点の出土であるが、体部下位から底部の一部を残存する破片であるため、詳細は不明であるが、ともに内面がミガキ後黒色処理されることから鉢とした。ロクロ使用と思うが断定できない。

須恵器 (第107・108図、写真図版365・366)

埋土と床面等から坏と壺そして瓶が合わせて17点出土している。

坏 (628～638) - 埋土と床面から11点出土しているが、全体が判明するのは5点のみで他の6点は口縁部から体部を残存する破片である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、器形は土師器とほぼ同様であるが口縁端が外反や外傾する個体が多い特徴がある。口縁部径が14.8cm～13.9cm、底部径は6.8cm～5cmで比率は2.96～2.17である。

壺 (648～652) - 埋土内から5点出土しているが、いずれも大壺の体部小破片であるため、詳細は不明である。外面には並行叩き具痕、内面には青海波文や並行・円形無文の当て具痕を付す。

瓶 (647) - ロクロ使用成形された肩部の破片が埋土内から1点出土している。内外面ともロクロ調整痕を明瞭に残す。

土製品 (第110図、写真図版525)

土製品として紡錘車が出土している。

紡錘車 (54) - 埋土内から径約5.9cmの円形で厚さ約1.5cmの大きさがあり、全体の約半分を残し中心部に貫通孔を付す紡錘車が1点出土している。表面はミガキ調整され、焼成されている。

石製品 (第108図、写真図版526)

砥石が出土している。

磁石(94・95)一埋土内と床面から各1点の合わせて2点の磁石が出土している。いずれも自然石を素材として使用し、使用面は自然の平坦面を利用しており、94は1面を主に2面に、95は3面に使用面を作出している。石材は斜長石流紋岩と輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器や須恵器の特徴は9世紀後半代であることから考えると、当住居跡もほぼその頃に位置づけられるものと推定される。

79 DⅡx12住居跡

〔遺構〕(第95・96図、写真図版84)

調査範囲の西端から約72m東によったDⅡ区はほぼ中央に位置し、DⅡx14住居跡は東に約9mの距離がある。DⅡw3溝とDⅡy13陥し穴状遺構と重複しているが、前者は当住居跡より新しく後者は古い遺構である。

東-西約3.1m、南-北約3mの規模を持ち、平面形は磁北に対して約170度東に偏したやや隅丸気味の方形をなす。壁高は約30cmほどで、水平に対して約95度外傾している。壁にはやや不規則な凸凹が見られ、この傾向は特に東壁に見られる。床は第IV層の黄褐色火山灰質土で構築され、床下から検出された土坑部分以外はそのまま貼り床しないで床面としており、ほぼ水平状態に近い平坦で踏みしめによって全面が堅い。壁溝は検出されていないが、p1~p9までの土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、西壁の南と北隅部にはやや規模の大きい土坑が位置し、東壁際には比較的小規模の土坑が密集している。p1・p3・p4・p9の4基は規模や平面形的には柱穴的であるが、位置からすると柱穴とする根拠はない。他の規模が大きい土坑は貯蔵穴的であるが、全体として浅い土坑が多いことから、貯蔵穴と断定することはできない。埋土は全体が9層に細分されているが、土性はいずれもシルトか砂質のシルトであり、色調は黒褐色を主体に赤褐色がある。全層に多少の差こそあれ炭化物粒や焼土粒と地山粒が混入している。自然埋没したものと推定される。

カマドは南壁の中央やや東よりの東隅部付近に設置されており、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で検出されている。全体規模は幅が約1.05m、奥行き約60cmでさらに壁外に延びる煙道部が付く。各部の規模は、左側袖部は幅が約30cm、奥行き約60cm、高さが約20cm、右側の袖部は幅約35cm、奥行き約45cm、高さ約20cmであり、両袖部とも芯に河川礫を配置してその周囲を暗褐色と黄褐色のシルトが混合した土を積み上げ補強して構築している。燃焼部は幅が約40cm、奥行き約80cmの広さがあり、焼土は焚き口部から奥へ35cm×25cmの支脚の手前までの範囲に広がるが、厚さは約2cmほどと薄い。支脚は自然の河川礫2個を火床に僅かに埋め込む形で掘えて設置している。煙道部は壁から南へ約1.2m延び、その先端に煙出し部が付く。煙道部は検出面下約15cmの地中に掘られた径約30cmの土管状をなす割

り貫き式であり、底面は裏壁から次第に約 35 cm ほど低くなって煙出し部に続く。煙出し部は径約 30 cm の楕円形をなし深さが約 50 cm の土坑状を示す。

(遺物) (第 109・110 図、写真図版 367・526)

埋土内と床面や土坑内から土師器と須恵器のほか、石製品など合わせて 12 点出土している。

土師器 (第 109 図、写真図版 367)

埋土内や床面から 4 点出土しており、器種には坏と甕がある。

坏 (653) - 床面からほぼ完形の 1 点出土している。ロクロ使用成形され底部は回転糸切り離しヘラナデ再調整であるが、内外面がミガキ調整されるが、外面の底部よりはさらにケズリ調整され、内面は黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直立気味に外傾する器形をなし、大きさは口縁部径が 11.7 cm、底部径が 5.4 cm で、比率は 2.16 である。底部の外面下部に「高」と判読される墨書がある。

甕 (659～661) - 埋土内と床面やカマドから 3 点出土しているが、完形はなく口縁部から体部と体部から底部を残す破片である。いずれもロクロ使用成形され、大型 (659) の体部下位はヘラケズリ成形される他の外面はロクロ成形痕のみを残し、内面はヘラナデ調整される。底部から外傾する体部は中位から上位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は大きく外反して口唇部は角張る縁帯状をなし、端部は上方に挽き出され受け口状をなす。大小関係が見られ、そのすべてが出土している。

須恵器 (第 109 図、写真図版 367)

埋土内を主体に床面と土坑内から 7 点出土しているが、器種には坏と甕がある。

坏 (654～658) - 埋土内と土坑内から 5 点の出土であるが、完形が 2 点の他口縁部から体部の 1 点と体部から底部の 2 点の破片が含まれる。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し再調整 (654) と無調整がある。体部は内外面ともロクロ目のみで 654 のみが下位の底部付近がヘラケズリ調整される。器形は土師器の坏とほぼ同様であり、大きさは口縁部径が 15 cm と 13.8 cm、底部径は 5.8 cm と 5.4 cm で、比率は 2.58 と 2.54 である。657 の体部外面中位に判読不能ではあるが墨書がある。

甕 (662・663) - 埋土内と床面から 2 点の出土であるが、662 の壺形的な器形と推定される体部中位から底部を残す破片と、663 のいわゆる大甕とに分けられる。前者はロクロ使用成形され体部外面下位は並行叩き具痕とヘラケズリ調整されるものその他は内外面ともロクロ目のみを残す。底部から外傾する体部は中位か肩部に最大径を持つ器形を示すらしい。663 は底部が丸底と推定される大甕であるが、外面に並行叩き具痕、内面にも並行当て具痕を付す。

石製品 (第 110 図、写真図版 526)

埋土内から砥石が 1 点出土している。

砥石 (100) - 自然石を素材とした砥石であるが、あまり顕著な使用面を造り出してはいない

い。石材は新第三紀中新統産のアイサイトである。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器のと特徴は9世紀後半代の特徴とされることから、遺構の時期もほぼその頃に位置づけられるものと考えられる。

04 DIIx14 住居跡

〔遺構〕(第97・98図、写真図版85)

調査範囲の西端から約81m東によったDII区のほぼ中央部に位置し、DIIx19住居跡は東に約18mの距離がある。DIIx14陥し穴状遺構、DIIx15陥し穴状遺構、DIIy14土坑-1、DIIy14土坑-2、DIIw3溝等の遺構と重複するが、土坑と溝は当住居跡より新しく陥し穴状遺構は古い遺構である。

東-西約5.5m、南-北約5.5mの比較的規模が大きく、平面形は磁北に対して約155度東に偏したやや歪んだ並行四辺形的な方形を示す。壁高は約50cmほどあり、水平に対して下部はほぼ垂直に近いが上部は約100度で外傾している。壁は僅かな凸凹を持つが、ほぼ規則的な壁と理解できよう。床は第四層の黄褐色火山灰質土で構築されるが、陥し穴状遺構と重複する部分は貼り床されているものの、他の部分は貼り床されことなくそのまま床面とされ、全体が踏みしめによって非常に堅く、床面にはやや起伏が見られさらに南よりが幾分低くなる。壁溝は検出されていないが、p1~p9までの土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、平面形や規模等の状況は柱穴状であり、特に位置からp3~p5・p9は主柱穴を構成する可能性があり、さらにp1・p2とp7・p8はそれぞれが梯子を据えつけた柱穴である可能性が強く、東壁側から南壁側へか、またはその逆に梯子が付け替えられていると推定される。埋土は全体が7層に細分されているものの土性はシルトと砂質のシルトで、色調は黒色を主体に黒褐色と暗褐色に分けられる。いずれの土層にも地山粒や炭化物粒、砂粒などの混入が観察される。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは南壁の東隅部よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などの全体が良好な状態で検出されている。全体規模は幅が約90cm、奥行きは約65cm出、壁外に約1.6m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部が幅約20cm、奥行き約65cmであり、右側袖部は幅約25cm、奥行き約75cmの規模であり、袖部は左右両側とも焼き口部に河川礫を埋設するが、他は暗褐色と黒褐色のシルトを混合した土を積み上げて構築している。燃焼部は幅約55cm、奥行き約75cmの広さがあり、焼土は焼き口部から支脚の手前までの50cm×45cmの不整な楕円形状に約3cmの厚さで広がる。支脚は焼き口部から約40cm奥に縦長の河川礫を埋設している。火床は床面より若干低くなり、煙道部とは段差で接続している。煙道部は幅が約35cmほど、深さ場約35cmであるが、煙出し部より約1mの側壁には河川礫を埋設しさらに天井を河川礫で

蓋をし塞ぐ特徴のある掘り込み式である。底面は奥壁から煙出し部に向かって僅か低くなって煙出し部に続く。煙出し部は傾40cm×40cmの楕円形をなし、深さが約40cmの土坑状である。

〔遺物〕(第111～114図、写真図版368～370・538)

埋土内からの出土を主体に土師器と須恵器のほか、鉄製品など合わせて42点出土している。

土師器(第111～113図、写真図版368・369)

埋土内出土の17点と床面から出土した7点の合わせて24点出土しているが、器種には坏の11点と甕13点がある。

坏(664～674) - 出土した11点はすべて埋土内からの出土である。口縁部から底部を残す個体は1点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土であるが、いずれもロクロ使用成形、底部が回転糸切り離し無調整の製品で、体部外面はすべてロクロ調整のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される5点と無処理の6点に分けられる。底部から外傾する軽丸珠をもって外傾する体部は、口縁部が直立気味となったりやや内湾気味となる器形を示す。大きさは口縁部径が15.2cm、底部径は5.8cmの比率は2.62である。

甕(684～694) - 11点の出土であるが、これらは7点が埋土内からの出土と大半を占めている。完形の個体はなくすべて口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。694は非ロクロ使用成形の可能性があるものの、他はいずれもロクロ使用成形され、外面はロクロ成形痕のみを残す例が多いものの、並行叩き(684)や下半部がヘラケズリ(686・687)で調整される例も見られる。内面はロクロ調整の他一部にヘラナデ調整がみられる。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径を持ち、頸部で僅かに窄んだ後口縁部は大きく外反して端部は角張る縁帯状をなし、口唇部は挽き出されて受け口状をなす。器形には口縁部径からみて大・中・小の3型があるものと推定される。

鉢(695・696) - 床面から完形が2点出土している。いずれもロクロ使用成形され、695の底部の切り離しはナデられていて不明であるが、695は回転糸切り離し無調整である。底部から外傾する体部は中位から直立するか上位に最大径を持ち、頸部から口縁部が外反して口唇部は丸くおさまる。外面の調整は両者ともロクロ調整のみであるが、内面はロクロ調整のみとさらにヘラナデ調整される2種類ある。

須恵器(第111・113・114図、写真図版368～370)

床面から10点と埋土内からの7点の17点出土しているが、器種には坏のほか壺と瓶そして横瓶がある。

坏(675～683) - 床面から7点と埋土内から2点の9点出土している。完形や口縁部から底部を残す個体が6点と多い特徴がある。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整の4点(675～678)と回転糸切り離し無調整の5点(679～683)に分けられる。体部は内外面ともロクロ調整のみで再調整はまったくない。器形は土師器のそれとほぼ同様で

ある。大きさは、口縁部径 17 cm～12.2 cm、底部径 8.2 cm～5.9 cmで、比率は 2.29～1.7 である。

壺 (697・698・701～703) - 埋土内を主体に 5 点の出土である。完形の個体はなくすべて破片での出土であり、特に後者 3 点の大壺は体部の小破片であるため、詳細は不明である。697 は壺形のロクロ成形された壺で、体部から頸部を残す破片で肩部から下位はヘラケズリ調整される。698 は外面に並行叩きとヘラケズリ調整痕を持つ。大壺の体部破片は外面に並行叩き具痕、内面に同心円や円形穴の当て具痕を持つ。

瓶 (700・704) - 埋土内から 2 点出土しているが、700 は肩部上位から口縁部を欠失し 704 は肩部の小破片である。両者ともロクロ成形され、外面に並行叩き具痕とヘラケズリ痕を持ち、内面はロクロ成形痕のみである。前者の器形は低い高台の付く底部から外傾する体部は肩部に最大径をもって頸部が大きく窄む器形を示すらしい。後者もほぼ同様な器形と推定される。

横瓶 (699) - カマド内から 1 点出土しているが、完形ではなく口縁部から肩部付近までを残存する。ロクロ使用成形され、外面は口縁部がロクロナデ、体部はロクロナデ後ヘラケズリ調整で、内面はロクロナデと一部にヘラナデが見られる。

鉄製品 (第 113 図、写真図版 538)

カマドから錐と推定される 1 点が出土している。

錐 (136) - カマド内から錐と推定される断面方形の棒状を示す鉄製品が 1 点出土している。欠損は認められず、完形と推定される。全長が約 8.5 cm、幅約 5 mm、厚さ約 4 mm の大きさがあり、下端から約 4 cm の位置に最大径を持ち、上端と下端に向かって次第に先細りとなり、茎部に僅か柄部と推定される木質が付着し、上端の先端は鈍角に面取りされる。

〔遺構の時期〕

遺構から所属時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から 9 世紀中葉頃の時期に属するものと推定される。

09 DⅡx19 住居跡

〔遺構〕 (第 99・100 図、写真図版 86)

調査範囲の西端から約 101 m 東によった DⅡ区の中央やや東よりに位置し、DⅡu23 住居跡は北東に約 20 m の距離がある。DⅡr2 溝と重複しているが当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約 4 m、南-北約 3.8 m の規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約 164 度東に偏した隅丸気味の台形に近い形状を示す。壁高は最深部で約 30 cm ほどあり、水平に対して約 105 度で外傾する。壁には凸凹が多くあって規則的とは言えない。床は第Ⅳ層の火山灰質黄褐色土で構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされている。床面は平坦で水平に近く、全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面から p1～p7 の 7 基の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、p7 以外は平面形や規模は柱穴的であるもの

の、位置は必ずしも柱穴とするような状況ではない。p7は規模と平面形は貯蔵穴的ではあるが、位置と深さや底面の状況からは貯蔵穴と断定できない。しかし、何らかの用途で掘られたことは事実であろう。埋土は全体が5層に細分されているが、土性はすべてシルトであり、いずれの層の色調も黒褐色という特徴があり、炭化物・焼土・地山粒等の混入有無とその量によって細分されている。土層の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは南壁の東隅部よりに設置され、袖部、焼土部、煙道部、煙出し部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅約90cm、奥行き約60cmあり、さらに壁外に約1.25m延びる煙道部が付く。各部の規模は、左側袖部は幅約30cm、奥行き約65cm、右側袖部が幅約25cm、奥行き約50cmであり、袖部は内壁に河川礫を埋設して芯とし、その外側に黒褐色と黄褐色のシルトが混合された土を積み上げて構築している。焼土部は幅約40cm、奥行き約65cmほどの広さがあり、焼土は焚き口部の手前から50cm×35cmの支脚付近までの範囲に広がり、厚さは約4cmほどである。火床は床面とほぼ同じ高さで、奥壁で軽い段差で煙道部に接続する。煙道部は幅が45cm～22cmと煙出し部にむかって次第に細くなり、深さは約20cmでほぼ水平に近い平坦である。煙出し部は径約40cm×35cmの楕円形で深さが約35cmの土坑状である。

〔遺物〕(第115図、写真図版370・371)

埋土内から6点と床面やカマド・土坑内から5点の11点の出土であるが、この中には土師器が8点と須恵器3点が含まれる。

土師器(第115図、写真図版370・371)

出土した8点は3点が埋土内からで残る5点は床面やカマドと土坑内からの出土であり、器種としては坏5点と甕3点がある。

坏(705～709)－5点の出土であるが、1点以外は床面やカマドと土坑からの出土である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、外面はすべてロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直立気味や軽く外反したりする器形をなす。大きさは口縁部径が15.5cm～14.3cm、底部径は6.4cm～6cmで比率は2.58～2.32である。

甕(711～713)－カマドと埋土内から3点出土しているが、いずれも口縁部から体部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、外面はロクロ成形痕に一部ヘラケズリ調整、内面がヘラナデかロクロ調整される。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は大きく外反して口唇部は角張る縁帯状をなし端部は挽き出されて受け口状をなす器形らしい。また器形には大型と中型がある。

須恵器(第115図、写真図版370・371)

埋土内から坏1点と大甕3点の合わせて3点が出土している。

坏(710)－体部から底部を残す破片が1点埋土内から出土している。ロクロ使用成形さ

れ、底部は回転糸切り難し無調整であり、ロクロ成形痕以外の調整痕は残していない。体部は底部から丸味をもって外傾する器形を示すらしい。

壺(714・715)－外面に並行叩き具痕・内面に同心円と並行当て具痕を付す1点と、外面に並行叩き具痕・内面にナデ痕を残す破片1点と合わせて2点の大壺の体部破片が出土している。小破片のため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器の特徴から9世紀後半から10世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

四 DⅡu23 住居跡

〔遺構〕(第101・102図、写真図版87)

調査範囲の西端から約116m東によったDⅡ区の東端に位置し、DⅡv25住居跡は南東に約13mの距離がある。DⅡr2溝と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

東－西約4.3m、南－北約4mの規模があり、平面形は主軸に対して約5度東に偏した台形気味の長方形である。壁高は約35cmほどで、水平に対して約100度ほど外傾している。床は第Ⅳ層の黄褐色火山灰質土で構築され、貼り床されることもなくそのまま床面としており、全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p5の5基の土坑が検出されている。規模などは別表に記したが、p5以外は規模や平面形などは柱穴的であるが、深さや位置からは柱穴と断定できない。深さが若干浅いものの、p5は規模や位置から貯蔵穴的である可能性が高い。埋土は全体が2層に細分されているが、大半は1層の黒色を示すシルトが堆積し、2層の暗褐色シルトは1層の中にフロック状に混在したり床面に貼り付くように堆積しており、1層には大量の礫が混入する特徴がある。自然堆積で埋没したものと考えられる。

カマドは北壁の中央やや東よりに構築され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。全体規模は、幅約1.1m、奥行き約75cmあり、さらに壁外に1.75m延びる煙道部が付く。左側袖部は幅約40cm、奥行き約70cm、高さ約35cmで、右側袖部は幅約35cm、奥行き約45cm、高さ約15cmの規模があり、左側袖部では河川礫を内壁に芯として埋設し、その周囲に黒褐色シルトを積み上げて構築するが、右側袖部は黒褐色シルトを積み上げただけで構築している。燃焼部は幅約40cm、奥行き約70cmの広さがあり、焼土は焚き口部から燃焼部ほぼ中央の45cm×40cmの範囲に約2cmの厚さで広がっている。火床は床面とほぼ同じ高さであるが、煙道部とは軽い段差で接続する。煙道部は幅約40cm、深さ約25cmの掘り込み式であり、底面は煙出し部に向かって僅かに低くなって煙出し部に続く。煙出し部は径約50cm×50cmで深さ約30cmの土坑状である。

〔遺物〕(第116・117図、写真図版371)

埋土と床面やカマド内から土師器9点と須恵器3点の合わせて12点が出土している。

土師器(第116・117図・写真図版371)

坏4点と壺5点のあわせて9点が、床面やカマド内のほか、埋土内から出している。

坏(716～719)－埋土内から3点と床面から1点の4点が出土しているが、完形は無く口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り難し無調整であるが、内面がミガキ後黒色処理される3点と無処理の1点に分けられる。両種とも外面の再調整は無く、底部から丸味を持って外傾する体部は、口縁端部が軽く外反する器形をなす。

壺(721～725)－床面とカマド内から5点の出土であるが、完形は無く口縁部がから体部を残す3点と、体部から底部を残す2点が含まれる。すべてロクロ使用成形であり、体部外面上位はロクロ成形痕のみを残し下部はヘラケズリ調整され、内面はロクロ目のみかヘラナデ調整である。底部から外傾する体部は、体部中位か上位に最大径をもって頸部で軽く窄み、口縁部は大きく外反して口唇部は角張る縁帯状をなし、端部は挽き出されて受け口状である。推定される口縁部径から器形には大型と中型があるらしい。

須恵器(第116・117図、写真図版371)

すべて埋土内から3点の出土と少なく、器種には坏と壺があるもののいずれも破片での出土である。

坏(720)－1点の出土で、体部から底部を残す破片である。ロクロ使用成形され内外面とも成形痕のみを残し再調整はない。底部から体部は直線的に外傾する。

壺(726・727)－埋土内から大壺の体部と肩部の破片が2点出土している。外面に並行叩き具痕、内面に並行と円形無文の当て具痕を付す。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した土師器の特徴から9世紀末から10世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

7) DⅡv25住居跡

〔遺構〕(第103図、写真図版88)

調査範囲の西端から約124m東によったDⅡ区東端部に位置し、DⅡu1住居跡は北東に約10mの距離があり、重複する遺構もなく単独で検出された。

南東－北西約2.6m、南西－北東約3mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して154度東に偏した隅丸の長方形気味をなす。壁高は約30cmで水平に対して約105度外傾して、ほぼ直線的で規則的な状況を示す。床は第Ⅳ層の隙が若干混じった黄褐色のシルト質の火山灰土で構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされる。床面はカマド前に段差があるものの

その他は水平に近い平坦である。床面から壁溝や土坑はまったく検出されていない。埋土は全体が5層に細分されているが、土性は砂質シルトが主体をなすほかシルトがあり、色調は黒色と黒褐色である。全層に地山粒や炭化物、焼土粒が混入し、粘性のある層が多い。自然堆積によって埋没した遺構であろう。

カマドは南東壁の東隅部よりに設置され、袖部、燃焼部、煙道部、煙出し部の各部が良好な状態で検出されているが、他に北東壁の中央やや南よりの床面に燃焼部の焼土と壁外に煙出し部が検出されたことから、北東壁から南東壁に造り変えられたものと推定される。新カマドの全体規模は、幅約80cm、奥行き約60cmで、さらに壁外に約1m延びる煙道部が付く。各部の規模は、左側袖部は幅約25cm、奥行き約70cm、高さ約15cmほどあり、右側袖部は幅約25cm、奥行き約50cm、高さ約15cmであり、両袖部とも焚き口部に河川礫を埋設するが他の部分はすべて黒褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約30cm、奥行き約75cmの広さがあり、焼土は焚き口部から30cm×25cmで厚さ約3cmの範囲に広がっている。火床は床面と同じ高さであり、煙道部とは段差で接続する。煙道部は幅約27cm、深さ約7cmの掘り込み式で、底面は平坦である。煙出し部は50cm×45cm、深さ約27cmの隅丸長方形気味である。旧カマドは袖部は残存しておらず、燃焼部の焼土は45cm×25cmの不整長方形気味に厚さ約3cmで広がっている。煙道部は検出面下約15cmの地下に長さ約1.1m、径約20cmの円形をなす土管状に掘られた割り貫き式であり、煙出し部とは段差で接続する。煙出し部は径約25cmの円形で、深さ約50cmの土坑状をなすが、底面が不規則で壁の一部が外方に掘られている。

(遺物) (第117図、写真図版372)

床面から土師器が6点出土しており、器種には壺と甕が含まれる。

土師器 (第117図、写真図版372)

壺が4点と甕1点、鉢1点の6点の出土であるが、完形は2点のみで他は破片での出土である。

壺 (728～731) - 4点の出土であるが、完形は2点で他は口縁部から体部を残す破片である。いずれもロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整で730は高台が付されるらしい。外面はすべてロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される3点とミガキはあるものの黒色処理のない1点に分けられる。後者は二次的な火熱によって黒色処理が消去した可能性はあるものの、その痕跡を観察できないのでミガキだけの調整と判断された。730と731の体部外面には逆に書かれた「大」の墨書がある。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が軽く外反する器形をなす。

甕 (732) - 体部中位から底部を残す1点が出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整の個体で、底部から外傾する体部は中位に最大径を持つ器形を示すらしい。もしかすると、小型の甕ではなく鉢である可能性がある。

鉢(733) - 口縁部から体部を残す1点の破片が出土している。輪積り成形され、口縁部がヨコナダ、体部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナダ調整される。底部から僅かな丸味をもって大きく外傾する体部は、肩部に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部が軽く外反する器形をなす。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した土師器の特徴は9世紀末から10世紀前半頃の特徴であることから、住居跡もほぼこの頃に位置づけられるものと推定される。

28 DⅢu1住居跡

〔遺構〕(第104・105図、写真図版89)

調査範囲の西端から約129m東によったDⅢ区の西端に位置し、DⅢy1住居跡は南に約15mの距離があり、重複する遺構もなく単独で検出された。

東-西約3.6m、南-北約4.2mの規模を持ち、平面形は主軸が磁北に対して約180度東に偏したやや隅丸の長方形を示す。壁高は約75cmほどあり、壁は水平に対して約100度ほどで外傾し、若干の凸凹はみられるもののほぼ規則的な壁と言えよう。床は第IV層に相当する黄褐色砂質シルト層で構築され、貼り床されることもなくそのまま床面としており、床面には小起伏はあるものの総じて平坦でほぼ水平状態に近い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p9の9基の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、p1~p7・p11は平面形や規模からは柱穴的であるが、位置と規模から考えるとp1~p3・p6の4基は当住居跡の主柱穴を構成するものと推定される。その他p8は平面形や規模からは貯蔵穴的であるが、深さがやや浅い特徴があり、貯蔵穴と断定できない。p10は位置が東隅部と袖部と推定される窪みの間に位置することや、規模から当住居跡に付属する貯蔵穴と推定される。埋土は全体が10層に細分されているものの、土性はすべてシルトの堆積であり、色調も黒褐色を主体に黒色に細分されている。小礫を混入する層が多く、その他3層には十和田a降下火山灰が混在し、さらに一部に炭化物も混じる。自然堆積で埋没した遺構と考えられる。

カマドは南壁の東隅部よりに設置されているが、残存状態が悪く燃焼部の焼土と煙道部・煙出し部が検出されたのみである。全体規模は不明であるが、焼土の左側に袖部に埋設された礫の抜き取り痕と推定される窪み(p11)が検出されていることから、この場所に左袖部が構築されていたものと推定されるが、右側の袖部は不明である。燃焼部の焼土は60cm×55cmの不整な楕円形状に広がり、厚さは約5cmである。火床は床面より約5cmほど低くなっており、煙道部とは15cmの段差で接続する。煙道部は検出面下約30cmの地中に径約25cmの楕円形状をなす土管状に掘られた刺り貫き式であり、壁外に約1.8mの長さがある。煙出し部は径約50cmの楕円形で、深さ約50cmの土坑状である。

〔遺物〕(第118～120図、写真図版372～374)

埋土内や床面・土坑内などから土師器と須恵器が39点出土しているが、完形や口縁部から底部までを残す個体は7点と少なく、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。

土師器(第118～120図、写真図版372～374)

28点出土しているが、完形や口縁部から底部までを残すのは7点と少ない。器種には坏と高台付き坏の他壺と鉢がある。

坏(734～745・747～749) - 15点が床面や土坑内・床面の他埋土内から出土している。全体が判明するのは6点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整である。いずれも外面はロクロ調整のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される12点と再調整のまったく無い3点に分けられる。底部から丸味を持って外傾する体部は、口縁端部が内湾気味や外反気味の他直線的に外傾する器形をなすが、両者ともほぼ同様な器形である。大きさは口縁部径が15.4cm～14cm、底部径は6.5cm～4.5cmで、比率は2.63～2.33である。

高台付き坏(746) - 埋土内から1点出土しているが、口縁部と高台部を欠失している。ロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整に高台が付されたい。外面はロクロ調整のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される。器形は高台の無い坏と同様である。

壺(756～761・763～766) - 12点の出土であるが、完形はまったく出土せず、口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形で、外面は中・小型はロクロ成形痕、大型の場合は体部中・上位はロクロ成形痕の他、一部に並行叩き具痕があり、下位はヘラケズリ調整される。内面はロクロ成形痕のみの例が多く、他にヘラナデ調整される例がある。器形は定かでないが、底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で軽く窄み、口縁部は大きく外反して口唇部は角張る縁帯状をなし端部は挽き出されて受け口状をなす。また、器形には大・中・小の3型があり、小型は壺では無く鉢である可能性が高い。

鉢(762) - 床面の土坑内から1点出土しているが、完形ではなく口縁部から底部を残す破片である。ロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離しで、体部の内外面はロクロ成形痕だけで、他の調整痕はない。器形は壺のそれとほぼ同様であるが、口縁部径に比較して器高が小さい器形である。

須恵器(第118・120図、写真図版373・374)

土坑内や埋土内から10点出土しているが、完形となる個体はなく、すべて破片での出土である。器種には坏と壺の他壺がある。

坏(750～753) - 土坑内から口縁部から体部を残す破片が4点出土している。いずれもロクロ使用成形され、底部から丸味を持って外傾する体部は口縁端部が外反する器形をなす。底部

の切り離しは不明であり、器面は内外面ともロクロ成形痕だけである。

査(767)一埋土内から口縁部の破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、内外面にロクロ成形痕を残し、再調整痕はない。肩部から頸部が窄まり、口縁部は短く直立する器形をなす小型査である。

甕(768～772)一埋土内から体部や肩部の破片が5点出土しているが、いずれも大甕の破片であるため、詳細は不明である。外面にはいずれも並行叩き具痕を付し、内面は円形無文突面や青海波文、放射状文の当て具痕を付す。なお769の外面には並行沈線的なカキメが全周する。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期を特定することは困難であるが、出土した土師器や須恵器の特徴から、9世紀末から10世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

四 DⅢy1住居跡

〔遺構〕(第106・107図、写真図版90)

調査範囲の西端から約129m東によったDⅢ区の西端部に位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。

東一西約4.5m、南一北約3.7mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約82度東に偏したやや隅丸の長方形気味の形状を示す。壁高は約15cmほどと掘り込みが浅く、壁は水平に対して約105度ほど外傾している。床は第Ⅳ層相当の黄褐色砂質シルトで構築され、貼り床されずにそのまま床面とされる。床面は平坦であるが東に向かって緩やかに傾斜しているものの、全体が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、p1～p4までの4基の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、規模や平面形と位置から考えてp1は貯蔵穴と推定されるし、p2～p4は柱穴を構成する土坑と推測される。埋土は全体が3層に細分されているが、殆どは1層の黒褐色砂質シルトが占めており、残る2層と3層は壁際に堆積する暗褐色と黒褐色の砂質シルトの薄層であり、1層には灰白色粘土粒が混入している。自然堆積による埋没である。

カマドは東壁の北隅部よりに設置され、袖部、燃焼部、煙出し部は良好な状態で検出されたが、煙道部は未検出である。全体規模は、幅約90cm、奥行き約70cmで、さらに壁外の約1.2mの場所に煙出し部が付く。各部の規模は、左側袖部は幅約25cm、奥行き約70cm、高さ約15cmで、右側袖部は幅約17cm、奥行き約60cm、高さ約10cmであり、袖部は左右とも河川礫を芯としてその周囲を黒褐色シルトを積み上げて補強している。さらに、焚き口部は礫が鳥居状に組まれており、天井部の礫は床面に落下していた。燃焼部は幅約50cm、奥行き約80cmほどの広さがあり、焼土は焚き口部付近から支脚前までの45cm×20cmの楕円形状に広がっている。煙道部は既述の様に検出されていないが、構造が浅い掘り込み式であったことにより、後世の削

平によって掘り取られてしまったものと推定される。煙出し部は径約 60 cm × 50 cm、深さ約 30 cm の楕円形の土坑状である。

〔遺物〕(第 121 図、写真図版 375)

埋土内から 3 点と床面や土坑内とカマドから 8 点の合わせて 11 点が出土している。種類には土師器が 10 点と須恵器 1 点を含むが、完形は僅かである。

土師器(第 121 図、写真図版 375)

10 点が主に床面や土坑内とカマドから出土しているが、器種には坏と鉢のほか羽釜がある。

坏(733～777) - 5 点出土しているが、完形の他口縁部から底部を残す個体は 3 点のみで、他は体部から底部を残す破片出の出土である。すべてロクロ使用成形で、底部は回転糸切り離し無調整であり、774 の底部には高台が付される。外面はすべてロクロ調整のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される 2 点(773・774)と無処理の 3 点に分けられる。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁端部が軽く外反する器形をなす。大きさは口縁部径 15.8 cm～13.5 cm、底部径 5.8 cm～5.2 cm で、比率は 2.82～2.32 である。

鉢(778～781) - 4 点の出土であるが、2 点は完形か口縁部から底部を残す破片で、他は口縁部から体部と体部から底部を残す破片である。779 はロクロ不使用成形されるが、残る 3 点はロクロ使用成形される。前者は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部の内外面はヘラナデ調整され、器形は体部上位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は外湾する。後者は底部が回転糸切り離し無調整であり、体部外面の底部付近がヘラケズリ調整されるものもあるが、無調整もある。内面はロクロ調整痕かヘラナデ調整される。底部から丸味をもって外傾する体部は頸部で僅かに窄んで口縁部は外反する。口唇部は角張る縁帯状をなし端部は挽き出されて受け口状をなす。

羽釜(782) - 口縁部から底部を残す小型の 1 点が出土している。ロクロ焼成径で底部は回転糸切り離し無調整である。内外面ともロクロ調整のみであるが、口縁端部から 1.5 cm 下位に全周する断面三角形の突帯を付している。器形は鉢とほぼ同様であるが、口縁部が直立気味となる違いがある。

須恵器(第 121 図、写真図版 375)

埋土内から大甕の体部破片が 1 点出土したのみである。

甕(783) - 外面に並行タタキ具痕、内面に青海波文当て具痕を付す大甕の体部破片である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器の特徴から 9 世紀末から 10 世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

G0 EⅢg) 住居跡

〔遺構〕(第108・109図、写真図版91)

調査範囲の西端から約127m東によったEⅢ区の西端部に位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。

東-西約4.3m、南-北約4.6mの規模を持ち、平面形は主軸方向が磁北に対して約79度東に偏したやや台形気味の方形である。北側の壁高は開田時の削平によって残存しないため不明であるが、その他の場所では最深20cmであり、水平に対してほぼ直立に近い状況をなすが、壁にはやや凸凹があり特に南壁は不規則である。床は第IV層相当の黄褐色シルト質砂層で構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされ、床面には僅かな起伏があるものほぼ全面がよく締まり堅い。南壁の東端部沿いの1.7mと西壁沿い約4mの床面には幅約15cm、深さ約10cmの壁溝が検出されている。床面からp1～p9の9基の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、p3～p9は規模や平面形からは柱穴的であるが、位置がやや不規則であり断定はできないが、p3・p5・p8・p2が当住居跡の主柱穴を構成している可能性が強い。p1は規模や平面形のほか、位置から貯蔵穴と考えられる。埋土は全体が8層に細分されているが、土性はすべてシルトであり、色調は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色に分けられ、黄褐色の地山粒が全体に混入している。埋土の層が薄いため断定できないが、自然埋没したものと推定される。

カマドは東壁中央南よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されているものの、開田時の削平によって良好な状態とは言えない。袖部全体の規模は、幅約94cm、奥行き約80cmであり、さらに壁外に1.25m延びる煙道部が付く。各部の規模は、左側袖部は幅約18cm、奥行き約74cm、高さ約6cmほどで、右側袖部は幅約30cm、奥行き72cm、高さ約5cmであり、左右両袖部とも褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約60cm、奥行き約75cmの広さを持ち、焼土は焚き口部付近から40cm×20cmの広がりを示し、約5cmの厚さがある。火床の基底部は一度約7cmほど掘り込まれた後床面と同位に埋め戻されて構築され、煙道部とは奥壁で段差で接続する。煙道部は幅約23cmで底面は奥壁から煙出し部に向かって約10cmほど低くなって煙出し部と接続するが、掘り込み式なのか削り貫き式なのかは明らかでない。煙出し部は径約40cm×26cm、深さ約19cmの楕円形状の土坑状をなし、底面は煙道部の底面より約7cmほど低く、中心が煙道部の中軸より右に僅かずれている。

〔遺物〕(第122～124図、写真図版375～377・523・532)

埋土内26点、床面10点、カマド内5点、土坑4点の大量45点の土師器と須恵器のほか、土製品8点、鉄製品1点のあわせて55点の遺物が出土している。

土師器(第122・123図、写真図版375・376)

埋土内や遺構の各部から36点出土しているが、器種としては坏と耳皿そして壺があり、坏の出土が多い特徴が見られる。

環(784~814) - 31点の出土であるが、完形や口縁部から底部を残す個体は少なく、殆どは口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部はいずれも回転糸切り離しで785と809はヘラナデされるが他は無調整はある。体部外面は、804と809はミガキがありさらに804は黒色処理されるが、他の外面はロクロ成形痕のみで内面がミガキ後黒色処理される784~809と黒色処理のない810~813の他、さらに内面がミガキも黒色処理のない814に細分される。前者は26点ともっとも出土点数が多く、底部から体部が丸味をもって外傾し、口縁端部は軽く外反する器形をなす。大きさは口縁部径が15.4cm~14.6cm、底部径6cmで比率は2.6~2.45である。中者も基本的には器形など前者と同様であり、本来は前者と同じものが二次的な火熱によって黒色処理が消去した可能性がある。後者は1点と少ないことと体部下位から底部を残す小破片であることから詳細は不明であるが、内面の処理と胎土以外は前者と同様である。胎土は前者と中者は緻密で均一な粘土を使用するが、後者は砂粒の多い粗い粘土を使用している。体部に「内財」と判読される墨書のある個体が小破片も含めて9点ある。

耳皿(816) - 口縁部の一部を欠損するがほぼ全体の判明する1点の出土である。ロクロ使用成形と推定され、底部は回転糸切り離し無調整で、体部の内外全面が丁寧なミガキ調整された後、さらに黒色処理されていたらしく一部にその痕跡を残している。器形は、相対する口縁部を強く内湾させた皿形の体部にハ字状に踏ん張る高台が付されている。

壺(817~820) - 4点の出土であるが、完形はなく口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整の例もある。内外面ともロクロ成形痕のみを残す例(817~819)と体部下位がヘラケズリされる個体(820)があり、底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部が大きく外反して口唇部が角張る縁帯状をなし、端部は挽き出されて受け口状の器形をなす。大きさは中型と小型である。

須恵器(第123図、写真図版376・377)

環1点と壺3点の他、瓶2点・壺3点の合わせて9点の出土であるが、完形はまったくない。

環(815) - ロクロ成形され底部が回転糸切り離し無調整で体部から底部を残す破片が1点出土している。小破片のため詳細は不明である。

壺(821~823) - ロクロ成形された口縁部破片が2点と肩部の破片1点の合わせて3点が出土している。821の外面に僅かな並行叩き具痕の跡とヘラナデ調整されるほかは、ロクロ成形痕以外の調整痕は観察されない。

瓶(824・825) - 内外面ともロクロ成形痕を明瞭に残す肩部の破片2点が出土しているものの、小破片のために詳細は不明である。

壺(826~828) - 体部2点と肩部1点の3点出土しているが、小破片のため詳細は定かでない。

い。外面にはいずれも並行叩き具痕を付すが、内面はカキメ調整痕や円形無文当て具痕と青海波文当て具痕を付している。

土製品（第124図、写真図版523）

土鍾が9点出土している。

土鍾（11～18）－9点はすべて床面からの出土であり、大小はあるもののいずれも完形品である。大きさは全長が6.9cm～4.4cm、太さ2.5cm～1.6cmであり、長軸に貫通孔を穿つとともに、中央部から両端に向かって先細りとなる形状を示す。

鉄製品（第124図、写真図版532）

器種不明の鉄製品が1点、p1の底面から出土している。

器種不明鉄器（35）－断面が長方形をなし全長が3cmの鉄器が出土しているものの、小破片であるため器種は定かでないが、鐙の基部である可能性が考えられる。

〔遺構の時期〕

遺構の残存状態が不良であるほか特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器杯の特徴は9世紀末から10世紀前半代に位置づけられることから、住居跡もほぼこの時期に属するであろう。

01 EIII1住居跡

〔遺構〕（第110・111図、写真図版92）

調査範囲の西端から約129m東によったEIII区の西端部に位置し、EIII2住居跡は北に約15mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出されている。西側の約65%は調査区外に延びているため未調査であることと、開田時に重機による削平を受けているため残存状態は不良である。

東－西は調査範囲外に延びているため計測不能であるが、南－北は約5.5mであり、平面形は主軸が磁北に対して約90度東によった方形か長方形と推定される。壁高は約15cmほどで、壁は水平に対して約140度ほど外傾し、床面とは丸味をもって接続する。壁はやや不規則で小凸凹が見られ、直線ではない。床面は第IV層相当の黄褐色粘土質シルトで構築され、貼り床されずにそのまま床面とするが、床面は開田時の攪乱によってやや起伏があり、全体として不規則ではあるが、攪乱のない部分は踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、p1・p2の2基の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、2基とも平面形が楕円形的ではあるものの不規則で、深さが浅い特徴がある。性格は貯蔵穴的ではあるが既述のように平面形が不規則であることや深さが浅いなどの特徴は貯蔵穴的ではない。しかし、p1はカマドと東壁南隅部に位置しており、貯蔵穴的ではある。埋土は全体が5層に細分されるが、土性はシルトの他砂質シルトと粘土質シルトであり、色調は黒色・黒褐色・褐色であるが、黄褐色の地

山粒や炭化物粒を混入する層が多い。自然堆積で埋没したものと考えられる。

カマドは東壁の南隅部よりに設置されており、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されているものの、開田時の攪乱によって残存状態が悪い。袖部は左側のみが検出され、幅が約40cm、奥行き約70cm、高さ約7.5cmほどであり、基底部を若干掘り込んだ後褐色や暗褐色の粘土質シルトを積み上げて構築しており、残存しない右側もほぼ同じ状況と推定される。燃焼部の規模は定かでないが、焼土は焼き口部前から25cm×5cmの不整形な範囲に広がり、厚さは3cmほどである。火床は床面とほぼ同位で、次第に高くなって奥壁に続くが段差はない。煙道部は検出面から約10cmの地中に掘られた割り抜き式である。長さは1.55m・幅約20cmほどあり、奥壁から次第に深くなって煙出し部に続く。煙出し部は径約33cm×25cmの楕円形状で、深さが約30cmの円筒状である。

〔遺物〕(第125～128図、写真図版377～379)

床面からの出土を主体に48点出土している。種類には土師器と須恵器があるものの、殆どは土師器でしめられ、須恵器は坏・壺や甕の破片である。

土師器(第125～127図、写真図版377・378)

床面から37点が出土している。器種には坏と高台付き坏のほか、壺と鉢がある。

坏(829～856) - 28点がすべて床面から出土しているが、口縁部から底部までを残すのは6点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り難し無調整であり、外面はロクロ成形痕みだけであるが、内面はミガキ後黒色処理されるもの(829～854)と無処理のもの(855～857)に分けられる。前者が主体を占める。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部が小さく外反したり直線的に外傾やや内湾して直立気味となる器形をなし、両者とも同様である。大きさは口縁部径14.8cm～13.7cm、底部径6.4cm～5cmで、比率は2.6～2.18である。856の体部下位には「内」と判読される墨書があり、もしかすると他の住居跡から出土例のある「内財」である可能性がある。

高台付き坏(858) - 床面から体部下位から高台部を残す1点が出土している。ロクロ使用成形され底部が回転糸切り難し無調整の後、高台部を貼り付けている。外面はロクロ成形痕みのみであるが、内面はミガキの後黒色処理されている。体部等の器形については不明である。

壺(859～862) - 床面から口縁部から体部上位を残す4点の破片が出土している。すべてロクロ使用成形され、860～862は内外面ともロクロ成形痕みのみを残すが、859は外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整痕みがある。底部から外傾する体部は上位に最大径を持って頸部で僅かに窄み、口縁部は大きく外反して口唇部は角張る縁帯状をなし端部は挽き出されて受け口状となる。器形としては中型であろうと推定されおそらく長胴形となろう。

鉢(863～865) - 3点が床面から出土しているが、いずれも完形か口縁部から底部を残す。すべてロクロ使用成形ではあるが、3点とも異なった器形をなす。863は底部から大きく外傾

する体部が上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部が外反して口唇部は角張る。器面は外面が上位はロクロ目、中位から下位はヘラケズリ調整され、内面はミガキ後黒色処理される。底部はヘラナデ調整によって切り離しは不明である。864はロクロ使用成形され底部が回転糸切り離し無調整であるが、器形が底部脇の腰部分が丸味を持って張り出し、体部は直線的に外傾する碗形に近い形状である。外面はロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される。865はロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整で、外面はロクロ成形痕のみで外面が磨き後黒色処理される。底部から外傾する体部は下位からほぼ直立気味に立ち上がり、口縁部は軽く外反し口唇部が丸く収まる器形を示す。

須恵器 (第126～128図、写真図版378・379)

床面のほか、埋土内から12点の出土であるが、埋土内からの出土が主体である。器種には坏と瓶の他壺がある。

坏(857) - 床面から体部から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整である。内外面ともロクロ成形痕のみを残す以外は定かでない。

瓶(867) - 床面から体部から頸部下端を残す破片が1点出土している。体部が丸い球胴形であることから、瓶ではなく壺である可能性がある。ロクロ使用成形され全体にロクロ成形痕を残す。

壺(866・868～876) - 10点の出土であるが、床面からの出土は少なく殆どは埋土内からの出土である。すべて体部と底部の破片であるが、破片の形状や器面の調整などから所謂壺と大甕の2種に細分が可能である。前者は6点(868～872・875)であるが、内外面がヘラケズリやヘラナデで調整されるものと、外面に並行叩き具痕・内面がヘラナデやヘラケズリのほか、カキメの調整痕を付したり、円形無文突面の当て具痕を持つ2種類がある。後者は外面が並行叩き具痕、内面には並行当て具痕を付す。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期を特定することは困難であるが、出土した土師器の状況から9世紀末から10世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

② EⅢe2住居跡

(遺構)(第112・113図、写真図版93)

調査範囲西端から約130m東によったEⅢ区西端部に位置し、EⅢi2住居跡は南東に約10mの距離がある。EⅢ1土坑-1・EⅢ1土坑-2・EⅢ1土坑-3と重複するが、いずれも当住居跡より新しい遺構である。開田時に重機による削平を受けていることにより、東壁の一部から南壁の東より部分だけの検出であり、不明の部分が多い。

検出された東壁は長さ約3.8m、同南壁は長さ約2mでのみあるが、本来は一辺が3.8m以上の規模があったことを示すものであろう。平面形は主軸方向が磁北に対して75度東に偏した方形か長方形であったと推定される。検出された壁高は約10cmほどであるが、壁は床面から緩く丸味を持って外傾し、削平の存在を考えるとかつてはもっと高かった可能性がある。床は第V層の段丘礫層を掘り込んで構築しているため、床面は曝と開田時の攪乱によって起伏が激しく凸凹といった表現が事直な感想である。壁溝は検出されていないが、p1～p6の6基の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、p2～p3のいずれかが規模や平面形と位置などから柱穴を構成する一部である可能性がある。p5は当住居跡より新しい土坑である。p6は当住居跡の床面を掘り込んでいることは事実であるが、開田時の新しい攪乱らしい状況とも言え、明確にし難かった。p1はカマドと南東隅部の間に位置すること、規模や形状と出土遺物などから、当住居跡に付属する貯蔵穴と考えられる。埋土は全体が11層に細分されているが、殆どは攪乱を受けており本来の埋土は定かでないが、残存状況から見て本来は炭化物や焼土を含む暗褐色や黒褐色のシルトか砂質シルトと推定される。攪乱が著しく断定できないが、自然堆積したものと推定される。

カマドは東壁の南隅部よりに設置されているが、残存状態が悪く、袖部と燃焼部が検出されたのみである。全体規模は、幅約1.3m、奥行き約1.3mであるが、本来は他に壁外に延びる煙道部が付属するものと推定される。個別の規模では、左側の袖部は幅約52cm～25cm、奥行き約1.2mであり、右側袖部は幅約56cm～30cm、奥行き約1.24mであるが、高さについては現状では約10cmほどであるが、攪乱のため痕跡程度の残存状態の部分もある。燃焼部は幅約80cm、奥行き約1.2mの広さがあり、焼土は燃焼部の焚き口部よりに25cm×10cmの小範囲に観察されるのみであり、長期間にわたる使用とは必ずしも言えない。

〔遺物〕(第129～133図、写真図版380～383・534)

p1内からの出土を主体に土師器と須恵器が83点の他、鉄製品2点を含む85点の遺物が出土している。特に環が全体の80%を占める70点出土と特異な出土である。

土師器(第129～132図、写真図版380～383)

全体の87%を占める74点の出土であるが、その中でも環が70点とその殆どを占め、他に壺がある。

環(877～924・926～946)―土坑内や床面から70点の出土であるが、完形や口縁部から底部を残す個体は14点で、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り難し無調整であり、外面はすべてロクロ成形のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される48点(877～924)と再調整のない21点(926～946)に分けられる。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部が直線的に外傾や軽く外反したり、内湾気味となる器形をなし、両者ともほぼ同様の器形である。11点の体部に「内財」と

判読される墨書がある。大きさは口縁部径が16 cm～13.4 cm、底部径が6.4 cm～5 cmであり、比率は3.45～2.31である。

高台付き杯(925)－土坑内から体部下位から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され底部の切り離しは高台を付す際のナデツケによって不明であるが、高台は切り離し後に付した貼り付け高台であり、菊花状のナデツケ痕がある。大きさは不明である。

壺(947～951)－5点が床面や土坑内から出土しているが、口縁部から体部の1点と体部から底部を残す4点はいずれも破片での出土である。すべてロクロ使用成形されるが、底部の切り離しはナデられ不明である。体部下位の外面はヘラケズリによる再調整され、上位から口縁部はロクロ成形痕だけであり、内面はヘラナデで調整されるほか、再調整のない例もある。

須恵器(第132図、写真図版383)

床面から6点の体部破片が出土している。器種は壺のみである。

壺(952～957)－ロクロ使用成形され、器表がヘラケズリ調整される1点の他は、いずれも外面に並行叩き具痕や擦格子状叩き具痕が付され、前者の内面はヘラナデ調整であるが、後者は円形無文凸面や並行などの当て具痕が観察される。すべて壺ではあるが952はいわゆる一般的な壺で、他は大壺である。

灰釉(第133図、写真図版383)

床面から碗の破片が2点出土している。

碗(958・959)－床面から碗の体部破片が2点出土している。部位は体部下位と推定され、内外面とも上位部分に釉薬が付される。東海地方産の製品と考えられ、型的には黒笹90号窯式に位置づけられるものと推定される。

鉄製品(第133図、写真図版534)

カマド内と埋土内から釘が1点と鉄滓が1点の2点が出土している。

釘(51)－いわゆる折頭釘の頭部付近の破片である。残存する全長は4 cm、幅7 mm、頭の幅1.6 cmの大きさがある。

鉄滓(53)－埋土内から重さ36.9 gで不整形の1点が出土している。

(遺構の時期)

遺構は攪乱が著しいため特徴が定かでないが、出土した土師器杯の特徴から9世紀末から10世紀前半頃に位置づけられるものと推測される。

33 EⅢi2住居跡

(遺構)(第114・115図、写真図版94)

調査範囲の西端から約136 m東によつたEⅢ区西端部に位置し、DⅢw5住居跡は北東に約40 mの距離がある。EⅢi4土坑と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。開田時の剖平

によって残存状態が悪く、重機のキャタピラー痕を明瞭に残している。

南東—北西約 7.7 m、南西—北東約 6.4 m の規模を持ち、平面形は主軸方向が磁北に対して約 121 度東に偏した隅丸の台形的な長方形をなす。壁高は約 15 cm ほどであり、水平に対して約 100 度くらい外傾し、壁は攪乱によって幾分凸凹が見られ不規則である。床は第 IV 層相当の粘土質シルトで構築され、残存状態の良好な部分の観察では貼り床されずにそのまま床面とされたい。床面はほぼ水平に近い平坦な面として構築されたらしく、踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、p1～p14 の 14 基の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、p1・p8・p14 の 3 基は柱穴とするには規模が大きいくと位置の関係から考え難く、他は規模や平面形は柱穴的である。柱穴的ではないとした 3 基の内 p1 は規模と平面形や位置から貯蔵穴として大過ないものと推定されるが、p8 と p14 は平面形がやや不規則であることと位置から貯蔵穴とするには問題がある。柱穴的とした後者は位置や規模と平面形などから p5・p7・p12・p13 の 4 基は当住居跡の柱穴を構成するものと推定され、他も支柱穴である可能性が考えられる。埋土は全体が 5 層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒色・黒褐色・褐色・黄褐色に分けられる。下層には炭化物や暗赤褐色土、赤褐色土等の塊が混入している。攪乱が激しく埋没状況の判断はできない。

カマドは南東壁の北東隅部よりに設置されるらしいが、残存状態が不良のため定かでない。検出されたのは燃焼部の焼土と推定される焼土のみである。焼土は南東壁から北西に約 30 cm の床面に、約 35 cm × 35 cm の不整形な範囲に広がり厚さは約 4 cm である。他の状況はまったく不明である。

〔遺物〕(第 134～137 図、写真図版 383～385・524・533)

埋土内や床面・床面上の土坑内・カマド内から土師器や須恵器など 45 点の他、土製品 1 点と鉄製品 4 点の合わせて 50 点の遺物が出土している。

土師器 (第 134・135 図、写真図版 383・384)

主に床面から 30 点出土しているが、器種には坏と高台付き坏のほか、壺がある。

坏 (960～978) - 19 点の出土であるが、完形や口縁部から底部までを残存するのは僅か 2 点のみで、他は口縁部から体部を残存する個体を主体に体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、内外面ともにロクロ成形のみで再調整はまったく観察されない。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁部が外反や直線的に外傾したりする器形と、体部が直線的に外傾する器形がある。大きさは、口縁部径 13.2 cm と 13.3 cm、底部径 5.4 cm と 5 cm であり、比率は 2.68 と 2.44 である。

高台付き坏 (982～985) - 埋土とカマドから 4 点出土しているが、全体が判明するのは 1 点のみで、他は底部下位から底部の一部を残す破片である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整に高台を貼り付けた付け高台である。坏と同様に内外面ともロクロ成形

痕以外に再調整のない個体の他、内面が磨き後黒色処理の個体もある。器形は高台の有無の違いはあるが、坏のそれと大同小異である。

壺(986～992)―床面とカマドからの他に埋土内から7点出土しているが、口縁部から体部を残す破片を主体に体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形された4点(989～992)とロクロ使用成形の3点(986～988)に分けられる。前者は外面にロクロ成形痕を明瞭に残し、一部は体部外面下位にヘラケズリや内外面にヘラナデによる再調整がある。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は外反して口唇が角張る縁帯状をなし、端部は上方に軽く挽き出される受け口状気味を示す個体と、口唇端部が上方を向いて受け口状となる個体がある。後者は口縁部にヨコナデ、体部の内外面にヘラナデ調整痕を持ち、前者に比較して全体として造りが粗雑である。器形は前者とほぼ同様であるが、口縁部が短い特徴がある。

須恵器(第134・136図、写真図版384・385)

主に埋土内から坏と壺の破片が合わせて15点出土している。

坏(979～981)―3点の出土であるが、口縁部から体部と体部から底部を残す破片である。ロクロ使用成形され底部が回転糸切り離し無調整であり、内外面にロクロ成形痕を残し再調整は観察されない。器形は土師器の坏とほぼ同様である。

壺(993～1004)―主に埋土内から12点出しているが、全体の判明する個体はなく、口縁部2点、体部下位から底部の破片1点、肩部や底部の破片9点が含まれる。993・994の口縁部破片はロクロ使用成形で、頸部から大きく外傾する口縁部は縁帯状の口唇部で受け口状となる。995は体部下位から底部を残すが、外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。他は外面に並行叩き具痕を付すが、内面にはナデや同心円、並行、円形無文凸面などの当て具痕を付し、いわゆる大壺の部類であろうと推定される。

土製品(第137図、写真図版524)

埋土内からふいごの羽口が1点出土している。

羽口(43)―全体の約4分1を残す先端部の破片である。残存する長さは5.5cm、推定される太さ約5.8cm、推定される中心部の送風孔は径約1.6cmの大きさがあり、精錬炉の羽口ではなく鍛冶炉用の羽口と推定される。緻密な粘土を使用して作り、全体に焼成痕があるとともに、先端には熔けたガラス質の付着物がある。

鉄製品(第137図、写真図版533)

床面検出の土坑内から鉄滓が4点出土している。

鉄滓(36a・36b・37・183)―いずれも最大径8cm以下の比較的小型で、36aと36bは碗形滓である。おそらく鍛冶滓であろうと推定される。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した土師器の特徴から10世紀中葉～後半に位置づけられるものと推定される。

G4 DⅢw5住居跡

〔遺構〕(第116・117図、写真図版95)

調査範囲の西端から約163m東によったDⅢ区の西部に位置し、DⅢw8住居跡は東に約8mの距離がある。重複する遺構はなく、単独で検出された。

東-西約4.1m、南-北約4.4mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約168度偏したほぼ正方形に近い隅丸方形を示す。壁高は最深部で約30cmあり、水平に対して傾く110度外傾する。壁には若干の凸凹があるもののほぼ規則的な状況を示し、東壁のp7付近以外は概ね直線的である。床は第Ⅳ層相当の褐色シルト上部の漸移層である暗褐色土と第Ⅴ層の段丘礫層状面で構築されているが、部分的な1cm以下の貼り床で床面としており、礫層の露出部分は凸凹が激しいものの、他の部分はほぼ平坦で踏みしめによって堅い。壁溝の検出はないが、床面からp1～p7の7基の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、p6以外の6基は平面形や規模、位置などから判断して当住居跡の支柱穴を構成するものと推定される。p6は位置が床面のほぼ中央であることに疑問があるものの、規模や形状は貯蔵穴的であることから、貯蔵穴的な機能があった可能性が推定される。埋土は全体が4層に細分されるが、土性は砂質のシルトを主体にシルトに分けられ、色調は黒褐色と黒色のほか暗褐色がある。全体で見ると、1・2層が埋土の大半を占めており、1層には炭化物や礫と十和田a降下火山灰などが混入している。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは南壁の東隅部よりに設置されており、袖部、燃焼部、煙道部、煙出し部などの各部分が良好な状態で検出された。全体の規模は、幅約1m、奥行き約70cmほどあり、さらに壁外に1.1m延びる煙道部が付く。各部の規模は、左側袖部は幅約30cm、奥行き約70cm、高さ約20cmほどで、右側袖部は幅約30cm、奥行き約90cm、高さ約30cmであり、左側袖部は焚き口部付近と奥壁付近、右側袖部の場合は奥壁のみの内壁に河川礫を埋設し、その周囲を暗赤褐色の砂質シルトを積み上げて補強して構築する。火床は全体が若干掘り下げられた後床面とはほぼ同位に埋め戻しており、奥壁には特に段差はない。燃焼部は幅約40cm、奥行き約70cm前後の広さがあり、焼土は焚き口部付近から40cm×40cmの不整形な範囲に広がり、厚さは約10cmほどである。煙道部は幅約30cm、深さ約20cmの掘り込み式であり、底面は煙出し部に向かって次第に高くなって煙出し部とは同位で接続する。煙出し部は特に掘り込むことなく、煙道部の先端がそのまま煙出し部となっている。

〔遺物〕(第138・139図、写真図版386・387)

床面やカマド内そして埋土内から土師器と須恵器が23点出土している。

土師器 (第 138・139 図、写真図版 386・387)

埋土内の他床面やカマド内から 14 点出土しているが、器種には坏と壺のほか鉢と甕が含まれる。

坏 (1005・1006) - 埋土内から 2 点出土しているが、全体が判明するのは 1 点のみで、他は口縁部から体部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整で、内面がミガキ後黒色処理される。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部が軽く内湾して端部が直立気味となる器形を示す。外面はロクロ成形痕のみを残し、1 点には判断不能であるが墨書がある。大きさは口縁部径が 13.4 cm、底部径 5.6 cm で比率は 2.39 である。

壺 (1015～1019・1023～1025) - 8 点が床面や埋土内から出土しているが、完形はまったく出土せず、口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。1024 以外はロクロ使用成形され中・小型は底部が回転糸切り離し無調整か、静止糸切り離し無調整である。体部の外面はロクロ成形後並行叩き具痕 (1016) やヘラケズリ調整痕などの再調整痕がある。内面は大型ではカキメやヘラナデ、小型はロクロ成形痕のみである。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径を持って頸部で窄み、口縁部は外反して角張る縁帯状をなし、単部は挽き出されて受け口状となる。1024 はロクロ不使用成形と判断されるが、底部のみの残存であるため詳細は不明である。

鉢 (1017・1020) - 床面と埋土内から 2 点の出土であるが、前者は口縁部から体部を残す破片での出土であるが、後者は完形である。2 点ともロクロ使用成形され、後者の底部は回転糸切り離し無調整である。前者の器面は内外ともロクロ成形痕以外の再調整痕はないが、後者の体部外面の下部はヘラケズリの再調整され、その他は内外面ともロクロ成形痕のみである。器形は壺とほぼ同様であるが、器高より口縁部径が大きいのが鉢の特徴である。

甕 (1021・1022) - カマドと埋土内から 2 点の出土であるが、前者は口縁部から体部を残し、後者は体部下位から底部を残す破片である。両者ともロクロ不使用成形であり、器表がヘラナデやミガキ、ヘラケズリの再調整され、後者は赤彩される。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はヘラナデ調整される。器形は所謂球胴形をなし、口縁部は外反して口唇部は丸味を持つ。

須恵器 (第 138・139 図、写真図版 386・387)

床面や埋土内から 9 点の出土であり、器種には坏と壺・瓶がある。

坏 (1008・1014) - 床面やカマドなどから 7 点の出土であるが、4 点は全体が判明するが、他は口縁部から体部と体部から底部の一部を残す破片である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整である。体部は内外面ともロクロ成形痕以外の再調整はない。器形は土師器の坏とほぼ同様であるが、一部に体部が直線的に外傾して口縁部が外反する個体がある。大きさは、口縁部径が 14.6 cm～14 cm、底部径は 6.5 cm～6 cm で、比率は 2.8～2.18 である。

また、1点の体部会に判読は不能であるが、墨書がある。

甕 (1026) - 埋土内から底部の破片が1点出土している。ロクロ使用成形かは定かでないが、体部外面がヘラケズリされ、内面はヘラナデ調整される。

瓶 (1027) - 埋土内から頸部の破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、頸部下端の体部との接続部に断面丸形の突帯が付される。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した遺物の特徴から9世紀後半から末期頃に位置づけられるものと推定される。

99 DⅢw 8 住居跡

〔遺構〕 (第118・119図、写真図版96)

調査範囲の西端から約152m東によったDⅢ区の中央部付近に位置し、DⅢx10住居跡は南東に約13mの距離がある。DⅢx7溝跡とDⅢx6溝跡が重複しているが、溝跡の方が新しい遺構である。

東-西約4.6m、南-北約5mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約80度偏した突辺隅丸のやや長方形気味の形状を示す。壁高は約8~7cmと掘り込みが浅く、壁は水平に対して約100度ほどで外傾し床面とは丸味を持って接続する。壁は既述のように直線ではなく突辺状をなすが、全体的に見れば極端な凸凹もなく規則的な壁といえる。床面は第IV層相当の褐色シルトと第V層の段丘礫層上面で構築されることから若干の起伏があるものの、全体としては踏みしめて堅く、総じて平坦と理解できる。壁溝は検出されないが、床面からp1~p14の14基の土坑が検出されている。規模等は別表に記載したが、p1は規模や位置は貯蔵穴であるが形状がやや不規則な難点がある。その他は規模や形状と位置から柱穴的な特徴であり、p2・p6・p13・p10の4基が主柱穴を構成するものと推定され、さらに新旧関係は不明であるがp3とp5はp2とp6の建て替えによる柱穴と推定される。また、p9とp12は出入口に関係する柱穴の可能性があり、p7とp14は壁体の構造に関係する柱穴と考えることができる。埋土は黒色をなすシルトの単層である。自然堆積で埋没したものと推定される。

東壁の中央やや南隅部よりにカマドが設置され、残存状態があまり良好とは言えないが、袖部の一部と燃焼部そして煙道部と煙出し部が検出されている。右側袖部が残存しないため前提規模は定かでないが、残存する左側袖部と燃焼部焼土の関係から全体幅が約1m~90cm前後、奥行き約70cm位の袖部に、壁外に約2m延びる煙道部が付属する。左側の袖部は幅約20cm、奥行き約60cm、高さ約10cmほどで、既述のとおり右側は残存しないが、袖部は焚き口部に河川礫を埋設してその周囲を暗褐色シルトで補強して構築されたらしい。燃焼部の焼土は60cm×50cmの範囲で焚き口部付近から燃焼部の中央部にかけて約2cmの厚さで広がっている。燃

焼部のほぼ中央にはロクロ不使用成形と推定される体部下位から底部を残存する土師器小型鉢を伏せて配置した支脚が検出されている。火床は床面とほぼ同位であり、煙道部は奥壁と段差を持って接続する。煙道部は幅約 50 cm、深さ約 5 cm で、底面は若干の起伏がある。煙出し部は径約 65 cm 位、深さ約 25 cm ほどの土坑状である。

〔遺物〕(第 140・141 図、写真図版 387・388)

床面から土師器 13 点と須恵器 5 点の合わせて 18 点の遺物が出土している。

土師器(第 140・141 図、写真図版 387・388)

13 点の出土であるが、完形は 1 点と少なく、他は破片での出土である。器種には環のほか甕がある。

環(1028～1031) - 4 点と少なく、口縁部から体部と体部下位から底部を残す破片である。いずれもロクロ使用成形され、底部は回転糸切り難し無調整で、内面はミガキ調整され 1031 以外は黒色処理される。外面はロクロ成形痕のみで再調整はない。底部から外傾する体部はほぼ直線的に外傾し口縁端部が軽く外反する器形である。

甕(1034～1035・1037～1042) - 床面から 8 点出しているが、完形の個体は出土せずいずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形された 7 点とロクロ不使用成形の 2 点(1038・1040)に分けられる。前者はロクロ使用成形された後器面が並行引きやヘラケズリによる再調整される大型の所謂長胴形とロクロ成形痕のみで再調整のない小型がある。内面も同様にヘラナデ調整と無調整の両種が見られる。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径を持って頸部で窄み、口縁部は大きく外反して口唇部が角張る縁帯状をなして端部が挽き出されて受け口状となる器形を示す。後者には 1 点の完形の他は破片での出土である。口縁部が内外面ともヨコナデ調整され、体部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ調整され、器形はロクロ使用成形より径の大きい底部から外傾する体部は上位に最大径を持つなど基本的にはロクロ使用成形の個体とほぼ同様であるが、口唇部が縁帯状や受け口状とならない違いがある。

鉢(1036) - 体部上位から口縁部を残す破片 1 点の出土である。ロクロ使用成形され内外面ともロクロ成形痕のみを残し再調整はまったくない。器形的には甕形と大同小異とは思いますが、口縁部径より器高が大きくなる器形と推定される。

須恵器(第 140・141 図、写真図版 388)

床面やカマドから 5 点の出土であるが、器種には環と甕がある。

環(1032・1033) - 2 点出しているが、完形は 1 点のみで、他は口縁部から体部を残す破片である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り難し無調整である。器面調整は内外面ともロクロ成形痕のみを残し、再調整は観察されない。器形は土師器の環とほぼ同様である。

甕(1043～1045) - 3 点の出土であるが、いずれも破片での出土である。1043 はロクロ使用

成形であるが他に付いては定かでないものの、外面に並行叩き具痕を付し、内面はロクロ目、並行当て具痕、ヘラナデ調整等が観察される。破片の形状から推定すると、1043は蓋的な甕、1044・1045は所謂大甕である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器や須恵器の特徴から9世紀後半に位置づけられる遺構と推定される。

99 DⅢx10住居跡

〔遺構〕(第120図、写真図版97)

調査範囲の西端から約164m東によったDⅢ区ほぼ中央に位置し、DⅢp12住居跡は北東に約38mの距離がある。DⅢy10土坑とDⅢy11土坑と重複するが当住居跡の方が古い遺構である。また、当地点は開田時の削平が著しいため遺構の残存状態は良好とはいえない。

東-西約4m、南-北約4mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約90度東に偏したやや歪んだ方形をなす。壁高は最深部で約10cmであり、床面とは丸味を持って接続する。壁には凸凹があって平面形自体が不規則であり、特に南東部にその傾向が強い。床面は第V層の段丘礫層上部の砂質シルトで構築されており、床面には開田時の攪乱などによって起伏が著しいものの、残存状態の良好な部分は平坦で踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p3の3基の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、p1とp2は平面的な規模や平面形は柱穴的であるが、深さが浅いことや位置からは必ずしも柱穴と断定できない。p2は規模や位置は貯蔵穴的であるが、断面形がやや不規則であるなど疑問な点もある。埋土は黒褐色と暗褐色のシルトの2層に細分される。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは東壁のほぼ中央に設置されるが、削平によって残存状態が悪いものの、燃焼部の焼土と煙道部そして煙出し部のみが検出され、袖部は検出されていない。燃焼部の焼土は径35cm×30cmのほぼ円形に約3cmの厚さで広がる。煙道部は幅約20cmで底面が裏壁から煙出し部に向かって次第に下がって煙出し部に続く。煙出し部は平面形が径約40cm×40cmの隅丸方形気味をなし、深さは約12cmほどである。

〔遺物〕(第142~145図、写真図版388~391・523・538)

埋土内と床面からの出土を主体に土師器48点の他須恵器が5点、土製品1点、鉄製品1点の合わせて55点の遺物が出土している。

土師器(第142~144図、写真図版388~390)

全体で48点の出土であり、器種には坏37点と高台付き杯1点、耳皿1点、甕9点が含まれる。

環 (1046～1082) - 48 点はすべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整で、体部の外面はすべてロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される 14 点 (1046～1059) と再調整のまったくされない 23 点 (1060～1082) の 2 種類に細分される。前種は底部から外傾する体部が丸味を持って口縁部は軽く内湾して直立気味や端部が外反する器形をなし、この器形は基本的には後種も同様である。前種の大きさは口縁部径が 14.3 cm～13.8 cm、底部径 7.4 cm～6 cm で比率は 2.38～1.86 であり、後種は口縁部径が 15.8 cm～15.2 cm、底部径 7 cm～5.8 cm で比率は 2.72～2.17 である。1059 と 1082 の体部外面に判読不能な墨書がある。

高台付き環 (1083) - 口縁部から高台部までを残存する破片で 1 点出土している。ロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整の後「ハ」字状に広がる高台部が貼り付けられる。体部の外面はロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキの後黒色処理される。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部が強く外反する器形を示す。大きさは口縁部径 14.8 cm、底部径 8.6 cm、高台の高さ 1.4 cm である。全体的な器形からは高台付き環と言うよりは高台付き碗に近い器形である。

耳皿 (1093) - 床面から底部を欠失した 1 点が出土している。ロクロ使用成形され皿形をなす器形の口縁部を内側に湾曲させた器形である。体部は内外面とも丹念にミガキ調整された後内面は黒色処理される。

壺 (1084～1092) - 9 点の出土であるが、完形はまったく含まず口縁部から体部か底部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、器面は口縁部は内外面ともロクロ成形痕のみであるが、体部は外面は小型はロクロ成形痕のみが多いものの大型はヘラケズリされる例が多く、内面はロクロ成形痕の他ヘラナデ調整が多い。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径を持って頸部に続き、口縁部は大きく外反して口縁部が角張る縁帯状をなし、端部が挽き出されて受け口状の器形が多い。大きさには大・中・小型があり、所謂長胴形の器形と推定される。

須恵器 (第 143・144 図、写真図版 390・391)

壺の体部破片が 5 点出土している。

壺 (1094～1098) - 口縁部 1 点の他は体部や肩部の 4 点の 5 点の出土である。1094 の口縁部はロクロ使用成形であるが、他の 4 点は定かでない。1095～1097 の 3 点は器面に並行叩き具痕か縦格子叩き具痕を付し内面は円形無文凸面の当て具痕を持つ所謂大壺である。1098 は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデやヘラケズリ調整痕を持つ壺である。

土製品 (第 145 図、写真図版 523)

土罐が 1 点出土している。

土罐 (19) - 南東部床面から先端部を欠失した 1 点が出土している。大きさは全長 4.6 cm、最大径 1.9 cm、先端部径 5 mm であり、長軸に径 2.5 mm の貫通孔が穿たれる。

鉄製品 (第 145 図、写真図版 538)

紡錘車が 1 点出土している。

紡錘車 (134) - 心棒の両端を欠失しているが、残存する全長 9.5 cm、心棒の径 5 mm、円盤の径 5 cm の大きさがある。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期を特定できないが、出土した遺物の特徴から 10 世紀前半頃に位置づけられる物と推定される。

⑦ DⅢp 12 住居跡

(遺構) (第 121・122 図、写真図版 98)

調査範囲の西端から約 169 m 東によった DⅢ区 のほぼ中央に位置し、EⅢa 12 住居跡は南に約 43 m の距離がある。DⅢo 11 陥し穴状遺構、DⅢo 12 陥し穴状遺構、DⅢp 12 土坑と重複しているが、前 2 者の陥し穴状遺構は当住居跡より古い遺構であるが、土坑は当遺構より新しい遺構である。

東-西約 5 m、南-北約 5.2 m の規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約 115 度偏したやや歪んだ正方形を示す。壁高は最深部で約 10 cm ほどであり、床面とは丸味を持って接続する。壁は北壁はやや突辺状であるが、他はほぼ直線をなす規則的な壁である。床は第Ⅳ層の黄褐色粘土質シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされ、ほぼ水平に近い平坦をなし踏みしめによって全体が堅い。壁溝は検出されていないが、北東隅部から p1 の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、規模や位置から見て当住居跡に付属する貯蔵穴と推定される。柱穴と考えられる土坑は検出されていない。埋土は黒褐色シルトの単層であり、炭化物粒を混入する。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは東壁の南隅部よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されているが、開田時の削平によって残存状態はあまり良好とは言えない。カマド部は床面全体が一度掘り込まれた掘り込み地業の後暗赤褐色のシルトを積み上げて構築している。全体規模は幅約 1.2 m、奥行き約 60 cm、高さ約 10 cm ほどであり、さらに壁外に約 1.2 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側の袖部は幅約 35 cm、奥行き約 50 cm、高さ約 10 cm で、右側は幅約 30 cm、奥行き約 60 cm、高さ約 10 cm である。燃焼部は幅約 50 cm、奥行き約 60 cm ほどの広さがあり、火床は床面とほぼ同位の面が続くものの、煙道部底面とは段差で接続する。燃焼部の焼土は 55 cm × 55 cm のほぼ円形に焚き口部の手前から約 4 cm の厚さで広がる。煙道部は幅が約 50 cm ほどで、深さは約 10 cm の掘り込み式であり、底面はほぼ水平に近い平坦である。煙出し部は特別な形状は見られず、煙道部と幅、深さ、規模ともに同様であり、煙道部と同様に構築されたものと推定される。

〔遺物〕(第146～148図、写真図版391・392・523・524・526)

床面やカマド・床面の土坑内などの遺構と埋土内から土師器18点と須恵器6点の合わせて24点と、石製品1点、土製品7点の合計34点出土している。

土師器(第146～148図、写真図版391・392)

18点の出土であるが、器種としては坏9点、皿1点、高台付き坏2点、壺5点、壺1点が含まれている。

坏(1099～1101・1103～1108) - 9点の出土であるが、完形は1点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であるが、外面の再調整はないが、内面はミガキ後黒色処理の3点(1099～1101)と外面同様再調整のない6点(1103～1108)とに細分される。底部から丸味を持ったり直線的に外傾する体部は口縁端部が内湾して直立気味となったり、外反する器形を示し、その状況は両種とも同様である。大きさは口縁部径が14.3cm、底部径5.6cmで比率は2.55である。

皿(1102) - 完形が1点出土している。ロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、内外面とも再調整はまったくない。底部から外反気味に外傾する体部は口縁端部で強く外反する器形を示す。大きさは口縁部径13.3cm、底部径5.2cmで比率は2.55である。

高台付き坏(1109・1110) - 2点の出土で1点は完形、別の個体は口縁部から底部までを残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整に「ハ」字状に開く高台が貼り付けによって付され、内外面とも再調整はまったくない。底部から直線的に外傾する体部は口縁端部が外反する器形をなし、坏の1102・1103の器形に高台を付した器形と近似している。大きさは口縁部径が17.6cmと15.3cm、底部径6.4cmと5.3cmであり、高台は高さ2cmと1.4cmである。

壺(1112～1116) - 5点の出土であるが、完形はまったく出土せずすべて口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、外面は体部上位から口縁部がロクロ成形痕のみ、中位から下位がヘラケズリであり、内面は大型が全面ヘラナデ、小型はロクロ成形痕のみである。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径を持って頸部で僅かに窄み、口縁部は大きく外反して端部が角張る縁帯状をなし、端部は挽き出されて受け口状を示す。器形には大型と小型がある。

壺(1117) - 1点の出土であるが、口縁部から肩部上位までを残す破片での出土である。ロクロ不使用成形と推定され、口縁部から頸部は内外面ともヨコナデ、体部はナデで調整される。

須恵器(第146～148図、写真図版391・392)

6点の出土であり、器種には坏・壺・瓶がある。

坏(1111) - 口縁部から体部上位を残す小破片が1点出土している。ロクロ使用成形され内外面とも無調整である。

壺 (1118・1121・1122) - 口縁部から肩部を残す破片1点と体部破片が2点の合わせて3点の出土である。1118は口縁部にロクロ成形痕を残し体部外面は並行叩き具痕、内面に円形無文凸面当て具痕を付す破片である。その他は外面は並行叩き具痕と同様であるが、内面は円形無文凸面とカキメ後並行当て具痕を付す体部破片であり、3点とも大壺と考えられる。

瓶 (1119・1120) - 肩部から体部下位を残す破片が2点出土している。ロクロ使用成形された後外面の肩部から下位がヘラケズリ調整される。内面はロクロ成形痕のみである。

石製品 (第148図、写真図版526)

埋土内から砥石が1点出土している。

砥石 (101) - 斜長石流紋岩を使用したものが1点出土している。断面が方形をなし四面に使用面を持ち、長さが16.1cm、重さが710gの大きさがある。

土製品 (第148図、写真図版523・524)

埋土や床面から7点の土鍾が出土している。

土鍾 (20～26) - 7点の出土であるが、いずれも断面が径2cm～1.6cmの円形をなし両端が細くなり長さが6.1cm～3.1cmの大きさのある中心部に貫通孔を付す管状の土鍾である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した土師器の特徴から9世紀末～10世紀初頭頃に位置づけられるものと推定される。

④ EⅢa 12 住居跡

〔遺構〕 (第123図、写真図版99)

調査範囲の西端から約168m東によったEⅢ区の北端部中央に位置し、DⅢo 13住居跡は北東に約45mの距離がある。EⅢa 12土壌墓と重複するが当住居跡の方が新しい遺構である。

東-西約2.7m、南-北約3mの規模があり、平面形は磁北に対して約93度東に偏した南壁がやや突出する隅丸方形を示す。壁高は最深部で約20cmであるが、位置によって深さに差が見られる。壁は直線とは言えずやや凸凹があり、不規則である。床は第IV層の黄褐色シルトで構築され、床中央部の土壌墓部分は貼り床して床面としている。床面は中央部から壁に向かって次第に高くなり、特に西部よりの壁沿いは僅かな段差が観察されるベット状に近い床となっているが、床面は踏みしめによって全体が堅い。壁溝は検出されていないが東壁の南隅部でp1の土坑が1基検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模などから当住居跡に付属する貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色の砂質シルト2層の堆積であるが、下層には炭化物の混入が多い。自然堆積で埋没したものと考えられる。

カマドは東壁の中央やや南隅部よりに設置され、焚き口部・袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部分が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅約72cm、奥行き約70cm、高さ

約17cmであるが、各部の規模でみると左袖部は幅約24cm、奥行き約74cm、高さ約17cmで、右袖部は幅20cm、奥行き約66cm、高さ約15cmほどである。袖部は左右とも河川礫を並べて立てその周囲を褐色や暗褐色のシルトを積み上げて構築している。焚き口部は河川礫を立てて埋設しその上に長さ約50cmの河川礫を渡して天井としていたらしい。燃焼部は幅約36cm、奥行き約70cmの広さがあり、火床は床面から次第に低くなり煙道部とは奥壁で段差で接続する。焼土は右袖部よりの手前に30cm×18cmの範囲に位置し、層厚は約2cmである。支脚は小型の河川礫を埋設して使用し、燃焼部中央よりやや左袖部沿いに位置する。煙道部は長さ約1m、幅約23cm、深さ約数cmの規模で、現状では掘り込み式である。底面は奥壁部から中央部が僅かに高くなり煙出し部に向かって幾分低くなって煙出し部と接続する。煙出し部は約35cm、深さ約8cmの土坑状である。

〔遺物〕(第149・150図、写真図版392・393)

埋土の他床面やカマドから土師器17点と須恵器6点の合わせて23点が出土している。

土師器(第149・150図、写真図版392・393)

17点の出土であり、器種には坏9点・甕6点・鉢1点・壺1点が含まれる。

坏(1123～1131)－9点の出土であるが、完形は2点と少なく他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され1123は入念にミガキ調整されるがその他の底部は回転糸切り難し無調整である。先の1点は外面も丹念なミガキで調整される以外はロクロ成形痕のみで再調整はないが、内面はミガキ後黒色処理される2点(1123・1124)と無調整の7点(1125～1131)に細分される。底部から直線的や丸珠をもって外傾する体部は口縁部が内湾気味になったり端部が外反したりする器形を示す。大きさは口縁部径が14.4cm～13.6cm、底部径は5.8cm～3.8cmで比率は3.78～2.34である。

甕(1132～1136・1138)－6点の出土であるが、完形はなくすべて口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。これらはロクロ使用成形の3点(1132・1133・1138)とロクロ不使用成形の3点(1134～1136)に分けられる。前者の外面の口縁部から体部上位はロクロ成形痕を明瞭に残し、下位はヘラケズリ調整され、内面はロクロ成形痕の他ヘラナデ調整が観察される。底部から外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は大きく外反して角張る縁帯状をなし、端部は挽き出されて受け口状の器形を示す。器形には大型と小型がある。後者も基本的には前者と同様であるが口縁部は内外面ともヨコナデ調整し、体部は外面がヘラナデかヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。器形は前者と大同小異であるが、口縁部が短く外反し受け口とならない特徴がある。器形としては大型である。

鉢(1137)－1点の出土であるが、口縁部から体部下位を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され内外面ともロクロ成形痕を明瞭に残す。器形は甕と同様である。

壺(1139)－1点の出土であるが、体部下位から底部を残す破片での出土である。ロクロ不

使用成形された痕跡があるものの小破片であるため詳細は不明である。

須恵器 (第150図、写真図版393)

6点の出土と少ないが、器種として甕1点、壺3点、瓶2点がある。

甕 (1145) 一休部の小破片が1点出土している。ロクロ使用成形と推定されるが、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。

壺 (1140～1142) 一口縁部破片1点、頸部から肩部上位1点、肩部から底部1点の3点が出土している。ロクロ使用成形され、外面の口縁部から肩部は並行叩き具痕を付しさらにロクロ成形痕を明瞭に残し、肩部から体部下位はヘラケズリ調整される。内面は口縁部から肩部上位はロクロ成形痕を残し、その下位はヘラナデ調整される。底部から丸味をもって大きく外傾する体部は肩部に体部の最大径を持って頸部で大きく窄み、口縁部は外反して口唇部は角張る。

瓶 (1143・1144) 一口縁部破片1点と肩部破片1点の合わせて2点の出土であるが、ともに小破片であるためロクロ使用成形であること以外の詳細は不明である。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器の特徴から10世紀代に位置づけられるものと推定される。

09 DⅢo13住居跡

(遺構) (第124・125図、写真図版100)

調査範囲の西端から約東によったDⅢ区のほぼ中央に位置し、DⅢw13住居跡は南東にの距離がある。DⅢo14溝跡と重複するが、当住居跡のほうが古い遺構である。

南東-北西約5m、南西-北東約4.2mの規模を持ち、平面形は磁北に対して約122度東に偏した隅丸の長方形気味の形状を示す。壁高は約30cmであり、北東壁と北西壁に若干凸凹があるものの、総じてほぼ直線をなす規則的な壁である。床は第Ⅳ層相当の砂質シルトで構築されるが、一部は第Ⅴ層の段丘礫層の上面が露出しているため、床面にやや凸凹が見られるものの貼り床されることもなくそのまま床面とされ、踏みしめによって全面が堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1からp8の8基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p6とp7は位置や規模・形状から考えて当住居跡に付属する貯蔵穴と推定される。また、p4とp5は位置と規模から支柱穴を構成する可能性があるし、p1～p3は支柱穴を構成するものと考えられる。埋土は全体が9層に細分されているが、土性はシルトか砂質シルトであり、色調は黒褐色を主体に暗褐色や極暗褐色などに細分され、いずれの土層にも明褐色土粒が混在する。自然堆積による埋没と考えられる。

カマドは南東壁の中央やや北隅部よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部分が良好な状態で検出されている。袖部の全体規模は幅約90cm、奥行き約70cm、高さ約18cmほ

どであり、さらに壁外に約90cm延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅約20cm、奥行き約76cm、高さ約12cmほど、右側袖部は幅約20cm、奥行き約70cm、高さ約15cm位であり、袖部は褐色のシルトを積み上げて構築している。燃烧部は幅が約50cm、奥行き約70cmの広さがあり、燃烧部の焼土は焚き口部の手前から約径50cmの楕円形状に層厚約10cmで広がっている。火床は床面より僅かに低くなっており、煙道部とは奥壁で約10cmの段差で接続する。煙道部は幅約40cm、深さが約12cmであり、底面は煙出し部まではほぼ平坦であることから、掘り込み式の煙道部と推定される。煙出し部は煙道部と明瞭に分けられないことから、既述のとおり煙道部と煙出し部が溝状に掘られたものと考えられる。

〔遺物〕(第151～153図、写真図版393～395・524・536)

埋土内や床面、床面土坑から土師器29点と須恵器10点の他、土製品3点、鉄製品4点の合わせて46点の遺物が出土している。

土師器(第151・152図、写真図版393・394)

29点の出土であるが、器種には坏20点、高台付き坏5点、壺4点がある。

坏(1146～1165) - 20点の出土であるが、完形や口縁部から底部までを残す個体は6点のみであり、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、外面はいずれも再調整は観察されないが、内面はミガキ後黒色処理される8点(1146～1153)と無処理の12点(1154～1165)に分けられる。底部から丸味を持つか直線的に外傾する体部は口縁端部が軽く外反したり内湾して直立気味となる器形をなし両種とも同様である。大きさは、口縁部径が16cm～12.5cm、底部径は6.8cm～4.5cmであり、比率は2.88～2.07である。

高台付き坏(1166～1170) - 5点の出土であるが、完形は1点のみであり、他は坏部は完形であるが高台部を欠落した個体や高台部が欠落した体部から底部を残す個体が主である。いずれもロクロ使用成形であり、底部が回転糸切り離し無調整の後高台を貼り付けている。1167は内外面ともミガキ後黒色処理されているが、他の個体は外面は無調整であるが内面はミガキ後黒色処理され、高台の有無を問わなければ普通の坏と同様である。器形についても坏と同じである。

壺(1172～1175) - 4点の出土であるが、いずれも破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、内外面ともロクロ成形痕のみを残し器面の再調整はない。底部から外傾する体部は上位に最大径を持って頸部で軽く窄み、口縁部は外反し口唇部が角張る縁帯状をなし、挽き出されて受け口状を示す器形である。器形には大・小関係が見られる。

須恵器(第152図、写真図版395)

坏1点、壺1点、瓶2点、台付き瓶1点、壺5点の器種を含む合わせて10点の出土である。

坏(1171) - 体部下位から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され底部は

回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面ともロクロ成形痕のみを明瞭に残す。体部は底部から外傾するが、小破片であるため詳細は不明である。

蓋(1177) - 口縁部の小破片が1点出土している。ロクロ使用成形されているが、小破片であるため詳細は不明である。

瓶(1178・1181) - 体部破片と肩部破片がともに1点の合わせて2点の破片が出土している。ロクロ使用成形であり、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整される。器形などの詳細は不明である。

台付き瓶(1176) - 高台の欠落痕を残す壺形の体部下位から底部を残す破片が1点出土しているものの、ロクロ使用成形され外面がヘラケズリ調整される以外は定かでない。

壺(1179・1180・1182～1184) - ロクロ使用成形された2点(1179・1180)と外面に並行叩き具痕、内面に放射状の当て具痕や円形六文凸面の当て具痕等を付す3点(1182～1184)の合わせて5点の体部破片が出土している。

土製品(第153図、写真図版524)

埋土内から土鍾が3点出土している。

土鍾(27～29) - 3点は全長5.2 cm～4 cm、最大径1.9 cm～1.8 cmで中央が太く両端が細くなり長軸の中心部に貫通孔を持つ管状の土鍾である。

鉄製品(第153図、写真図版536)

鉄滓が4点埋土内から出土している。

鉄滓(77・78・83・84) - 不整形で板状をなす鉄滓であり、大小がある。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器の特徴から10世紀前半頃位置づけられるものと推定される。

40 DIIIw 13 住居跡

[遺構](第126・127図、写真図版101)

調査範囲の西端から東に約176 mに位置し、他の遺構と重複することなく単独で検出された。DIIIp 15 住居跡は北北東に約30 mの距離がある。

東-西約5.8 m、南-北約6.5 mの規模があり、平面形は磁北に対して約73度東に偏したやや長方形気味の形状を示す。壁高は約40 cmほどであり、壁はいずれも突辺状をなすがほぼ規則的な壁と言えよう。床面は第IV層相当の黄褐色シルトと第V層の段丘礫層相当の砂層で構築されており、南壁沿いに一部高くなる部分があるものの、他は水平に近い平坦な面をなし踏みしめによって全面が堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p10の10基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p9は規模や位置から当住居跡に伴う貯蔵穴と推定さ

れる。さらにp1～p4は同様の理由から支柱穴を構成するものと考えられるし、p8とp10は出入口に関連する柱穴である可能性が推定される。埋土は全体が4層に細分されているものの、土製は砂質のシルトを主体にシルトと粘土質シルトであり、色調は褐色や黄褐色、鈍い赤褐色などをなし、2層の褐色シルトが厚く堆積する特徴が見られる。

カマドは東壁の中央やや南隅部よりに設置され、袖部、燃焼部、煙道部、煙出し部に各部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅が約1.3m、奥行き約90cm、高さ約30cmであり、各部では左袖部は幅約40cm、奥行き約90cm、高さ約30cmで、右袖部は幅約45cm、奥行き約1m、高さ約30cmの規模であり、内壁に河川礫を立てて埋設した後その周囲を黒褐色シルトを積み上げて構築しており、さらに壁外に約2m延びる煙道部が付属する。燃焼部は幅約45cm、奥行き約75cmの広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部から支脚の手前まで約40cm×40cmの方形状に約10cmの厚さで広がり、奥壁よりには小型の河川礫を埋設した支脚がある。火床は床面より若干低くなるものの面としてはほぼ平坦であり、煙道部とは奥壁で僅かな段差で接続する。煙道部は幅が約30cm、深さは約20cmであり、一部の側壁と天井部の一部に河川礫を配置して構築された掘り込み式である。煙出し部は径約45cmの楕円形状の平面形をなし、深さ約50cmの土坑状である。

〔遺物〕(第154～159図、写真図版395～399・531)

埋土内からを主体に床面からを含めて86点と大量の遺物が出土している。種類としては土師器が60点、須恵器25点、鉄製品1点が含まれている。

土師器(第154～158図、写真図版395～399)

60点の出土であるが、器種としては坏27点、壺26点、鉢4点、壺3点がある。

坏(1186～1211) - 27点の出土であるが、完形や口縁部から底部までを残す個体は7点と少なく、その他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土であり、1186以外はすべて埋土内からの出土である。いずれもロクロ使用成形と推定されるが1199～1201の3点はロクロ不使用成形である可能性がある。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整の個体9点とヘラケズリ再調整によって切り離し技法の不明な個体8点に分けられる。体部の外面にもロクロ成形痕のみの個体と体部全体や一部がヘラケズリやヘラミガキによる再調整される2種類がある。内面の調整に付いてもミガキ後黒色処理される個体とまったく再調整のない個体の2種類に細分され、前種と相対的に特徴を異にしている。底部から直線的や丸味を持って外傾する体部は口縁部が直線的に外傾したり内湾して直立気味となったり端部が軽く外反したりする器形を示し、この傾向はいずれの種も同様であるが、強いて言えば内面が黒色処理される個体は外面や底部が再調整され、口縁部径に比較して底部径が大きい個体が多く、内面無処理の個体では底面の再調整がまったくなく口縁部径に比較して底部径が小さい違いを看取することができる。内面黒色処理される個体の大きさは、口縁部径15.6cm～12cm、底部径7cm～5.4cmであり

比率は2.2～1.85である。内面無処理の個体は口縁部径14.9cm、底部径6.4cm、比率は2.32である。

壺(1223～1226・1228～1241・1243～1249)－埋土内からの出土を主体に26点の出土であるが、完形は1点のみで他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形は1230・1232～1234・1246の5点のみで、他はロクロ不使用成形された個体である。ロクロ使用成形された個体はいずれも体部から底部を残す破片での出土であるため詳細は定かでないが、体部の外面がヘラナデやヘラケズリ、内面がヘラナデ調整されており、底面はナデ調整される例と回転糸切り離し無調整される例がある。器形は体部が底部から外傾する事以外は不明であるが、器形には大小関係がある。ロクロ不使用成形される個体は、完形や底部や口縁部のみを欠失した完形に近い個体を4点含む他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で仕上げられるが、体部外面はハケメ・ヘラナデ・ヘラミガキ、内面はハケメかヘラナデ等で調整される。器形には底部から体部が外傾し中位や上位に最大径を有する所謂長胴形を示す例や、球胴形に近い例があり、さらに大小関係がある。

鉢(1227・1242・1250～1252)－5点の出土であるが、2点は完形であるが、他は口縁部から体部を残す破片での出土であり、さらにこれらはロクロ使用成形された3点(1227・1250・1252)とロクロ不使用成形された2点に分けられる。前者には内面がヘラミガキされ、さらに黒色処理される個体とロクロ成形痕のみを残す個体がある。器形は壺に近いが口縁部径より器高が小さいものとボール状の器形とに分けられる。小型のものが多く。

壺(1253～1255)－3点の出土であるが、完形の出土ははたして口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ不使用成形され、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部の外面がハケメやヘラナデ・ヘラミガキ、内面がヘラナデ調整される。器形は底部から外傾する体部が中位に最大径を持つ球胴形を示し、大型のみの出土である。

須恵器(第153・158・159図、写真図版397・399)

全部で25点の出土であるが、器種には坏11点、壺10点、瓶4点が含まれ、これらの殆どは埋土内から出土している。

坏(1212～1222)－11点の出土であるが、完形の個体はまったく含まず、口縁部から体部を残す2点と体部から底部を残す9点になる。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整が1点の他はいずれも回転笠切り離しである。器形は土師器のそれと大同小異であるが、概して底部径の大きい個体の多い違いが見られる。

壺(1256・1260～1264・1266～1269)－10点の出土であるが、体部下位から底部を残す2点以外は体部の小破片である。1256・1257はロクロ使用成形の可能性のあるものの、他の個体については定かでない。外面に並行叩き具痕を付し、内面に同心円や円形無文凸面・並行

の各当て具痕を付す例が多い。さらに1260と1264のように内外面が無文の例もある。

瓶(1261～1263・1265)－4点の出土であるが、いずれも肩部付近の破片である。いずれもロクロ使用成形され、ロクロ成形痕を明瞭に残し、一部にはヘラケズリの調整痕が観察される。

鉄製品(第159図、写真図版531)

鉄滓が1点出土している。

鉄滓(13)－径3cmほどの楕円形を示す小型のものである。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器や須恵器の特徴から9世紀前半から中葉頃に位置づけられるものと推定される。

(4) DⅢp15住居跡

〔遺構〕(第128図、写真図版102)

調査範囲の西端から約183m東によったDⅢ区のほぼ中央に位置し、DⅢt16住居跡は南東に約18mの距離がある。なお、DⅢo17溝跡とDⅢm18溝跡が当住居跡を掘削していることから、当住居跡のほうが古い遺構である。

東－西約3.6m、南－北約4.2mの規模があり、平面形は磁北に対して約94度偏した隅丸の長方形気味の形状を示す。壁高は約35cmほどであり、壁は水平に対して約103度で外傾し床面とは僅かな丸味で接続している。東壁と南壁の一部に若干不規則に部分が観察されるものの、他はほぼ直線的で規則的な壁と言えよう。床は第Ⅳ層相当の暗褐色シルトで構築されるが、部分的に第Ⅴ層の段丘礫層の上面が露出し凸凹のある部分も見られるものの、全体としては平坦で水平に近い床面であり、貼り床されることなくそのまま床面とされている。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p9の9基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、検出された位置がいずれも東壁から南壁沿いであるが、平面形や規模からは往穴的なp1・p2・p4～p6の土坑と位置と規模からは貯蔵穴的なp3・p7・p9に分けられるが、いずれも浅いという特徴があり、性格を結論づけるにはやや難点がある。埋土は全体が11層に細分されているが、土性はすべてシルトであり、色調は褐色・暗褐色・黒褐色・黒色・黄褐色に細部されている。さらに2・3層には十和田a降下火山灰が混在し、全体として褐色シルトや炭化物・焼土なども混入している。自然堆積で埋没した遺構と推定される。

カマドは東壁の南隅部付近に設置され、袖部・燃焼部が検出されており、煙道部と煙出し部は未検出である。袖部の全体規模は幅が約1m、奥行き約55cm、高さ約25cmほどである。各部の規模では左側袖部が幅約25cm・奥行き約25cm・高さ約25cm位であり、右側袖部は幅約40cm・奥行き約55cm・高さ約30cmほどであり、左右とも一部に河川礫を芯としてその周囲を

暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約40cm・奥行き約60cmの広さがあり、燃焼部焼土は前庭部から焚き口部にかけて径約40cm×35cmの楕円形状に約3cmの厚さで広がっている。煙道部と煙出し部は既述のように検出されていない。

(遺物) (第159～162図、写真図版400～402・527)

埋土内や床面・カマド内・床面土坑などから土師器28点、須恵器16点のほか、石製品が1点の合わせて45点の遺物が出土している。

土師器 (第160・161図、写真図版401)

埋土内からの出土を主体に床面などから28点の出土であり、器種として坏20点・高台付き皿1点・壺7点に分けられる。

坏(1270～1289) - 20点の出土であるが、完形か口縁部から底部までを残す個体を6点を含む他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部が回転糸切り離し無調整で、体部外面はいずれもロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される14点(1270～1283)と無処理の6点(1284～1289)に分けられる。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁端部が外反や直線的に外傾したり内湾して直立気味となる器形を示し、兩種ともほぼ同様な器形をなす。1270の体部外面に判読不能ではあるが墨書が記されている。大きさは口縁部径が15.4cm～13.2cm、底部径6cm～5.4cmであり、比率は2.75～2.43である。

高台付き皿(1294) - カマド内の埋土からほぼ完形の1点が出土している。ロクロ使用成形され底部が回転糸切り離し無調整で後に高台を貼り付けた「付け高台」であり、内外面ともロクロ成形痕以外の再調整痕は観察されない。体部が底部から丸味を持って大きく外傾する器形をなし、坏ではなく所謂皿形に高台を付けた器形である。大きさは口縁部径13.6cm、底部径7cmである。

壺(1296～1302) - 床面からの出土を主体に7点の出土であるが、完形はまったく含まず口縁部から体部を残す個体を種に体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整の1点(1302)の他は定かでない。器面は体部上位は内外面ともロクロ成形痕のみであるが、外面の中位から最下位はヘラケズリ、内面はヘラケズリやヘラナデで調整され、小型の場合はロクロ成形痕のみの場合もある。底部から外傾して体部の中位か上位に最大径を持って頸部で僅かに窄み、口縁部は外反して端部が角張る縁帯状をなし上方に挽き出され受け口状となる器形を示す。さらに器形には大小関係があり、1301・1302は鉢である可能性がある。

須恵器 (第160～162図、写真図版401・402)

16点が埋土内を主体に出土しているが、器種としては坏4点・高台付き坏1点・壺9点・壺2点がある。

坏 (1290～1293) - 4点の出土であるが、関係はまったく無く体部下位から底部を残す小破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、内外面ともロクロ成形痕のみを残す以外は定かでない。1293には墨書があるものの判読不能である。

高台付き坏 (1295) - 高台部だけの出土であり、詳細は不明である。

壺 (1305～1313) - 9点の出土であるが、完形はまったく出土せず、口縁部破片を1点含む他はいずれも肩部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。これらはロクロ使用成形の4点 (1305～1308) とロクロ不使用成形の5点 (1309～1313) に分けられる。前者はロクロ成形後に体部の外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで調整され、口縁部はロクロ成形痕のみを残す。器形は瓶形に近い形状と推定される。後者は外面に並行叩き具痕、内面に並行や同心円・X字状などの当て具痕を付す所謂大壺の体部や底部付近の破片である。

壺 (1303・1304) - 2点の出土であるが、1303は頸部下位から体部中位を残し、1304は口縁部の破片である。いずれもロクロ使用成形され、口縁部から肩部付近までは内外面ともロクロ成形痕のみで、体部下半は外面がヘラケズリ、内面はロクロ成形痕を残す。器形は底部から外傾する体部は肩部に最大径を持って頸部で大きく窄み、口縁部は長くて外反し端部は角張る縁帯状を示し、上方に挽き出されて受け口状となる。全体的な器形は瓶に近似した壺である。

石製品 (第159図、写真図版527)

埋土内から砥石が1点出土している。

砥石 (102) - 新第三系中新統産の斜長石流紋岩を素材とした砥石で、大きさが全長16.1cm、幅6.7cm、厚さ6.2cm、重さ710gであり、一部に自然面を残すがほぼ四面に使用面を持ち、平面形が隅丸長方形で断面偏平な形状をなす。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器の特徴から9世紀末から10世紀初め頃の住居跡と推定する事ができる。

④ DⅢt16住居跡

〔遺構〕 (第129図、写真図版103)

調査範囲の西端から約186m東によったDⅢ区のほぼ中央に位置し、DⅢ123住居跡は南東に約32mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出されている。

東-西4.3約m、南-北約3.9mの規模を持ち、平面形は磁北に対して約65度偏した長方形的な形状である。壁高は約15cmほどであり、水平に対して約95度で外傾し床面とは軽い丸味で接続している。東壁はやや凸凹のある不規則であるが他はほぼ直線的で規則的な壁である。床は第IV層の褐色シルトで構築されるが、一部に第V層の段丘礫層の上面が露出している部分が見られるものの、起伏も見られずほぼ平坦で水平に近く、全体が踏みしめによって堅い。壁

溝は検出されていないが、p1からp7の7基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模などからp1・p2・p4は貯蔵穴的であるが、断定できる状況ではない。他の土坑については前者より小規模であり、柱穴的ではあるが、位置や深さから柱穴とは考えられない。埋土は7層に細部されているが、6・7層は土坑の埋土であることから、住居跡自体の埋土は1層～5層である。土性は砂質シルトや粘土質シルト・粘土があり、色調は黒褐色・黒色・黄褐色・褐色などに分けられる。全体的に黄褐色土粒が混在し、一部には炭化物粒も混入する。土性や土層の堆積状況から見て、人為的に埋め戻されたか残土を投棄されたことにより埋没した可能性がある。

カマドは東壁の中央やや北よりに設置され、袖部と燃焼部、燃焼部の焼土が検出されたが、煙道部と煙出し部は未検出である。袖部全体の規模は幅が約1.1m、奥行き約70cm、高さ約15cmほどであり、本来はさらに壁外に延びる煙道部が付属していた可能性がある。各部の規模は、左側袖部が幅約30cm、奥行き約70cm、高さ約15cmで、右側袖部は幅約20cm、奥行き約15cm、高さ約10cmほどであり、左側では内壁、右側では芯に河川礫が埋設されその周囲に暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約50cm、奥行き約60cmほどの広さがあり、燃焼部の焼土は55cm×50cmの広さに焚き口部から奥壁まで約5cmの厚さで分布している。また、燃焼部のほぼ中央やや右寄りに河川礫が僅かに埋められ支脚とされていた。既述のとおり煙道部と煙出し部は検出されていない。

〔遺物〕(第163～165図、写真図版402～404)

p6埋土内と底面からの出土や床面・カマド・埋土内などから56点の出土であり、種類としては土師器の54点と須恵器の2点がある。

土師器(第163～165図、写真図版402～404)

54点の出土であり、器種として坏41点・高台付き坏4点・蓋2点・壺7点が含まれる。

坏(1314～1321・1327～1354・1356～1360) - 41点の出土であるが、15点は完形か口縁部から底部を残存するが、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、体部の外面はロクロ成形痕のみであるが内面はミガキ後黒色処理の再調整される8点(1314～1321)と内外面ともロクロ成形痕のみで再調整のない32点(1327～1354・1356～1360)に分けられる。器形は兩種とも大きな違いは見られず、底部から直線的や丸味をもって外傾する体部は口縁部が軽く外反したり直線的に外傾したり、やや内湾気味となったりする器形をなす。大きさは口縁部径が14.6cm～12.8cm、底部径が6.8cm～4.5cmで、比率は2.92～1.91である。また、1339の体部には「山」の天地逆と判読される墨書が記されている。

高台付き坏(1322～1325) - 4点の出土であるが、完形はまったく含まず、高台の欠落した体部下位から底部の破片3点と高台部が付着した底部1点がある。いずれもロクロ使用成形さ

れ底部は回転糸切り離し無調整に高台部が貼り付けられた貼り付け高台である。体部の外面はロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される。全体的な器形は定かでないが、所謂環に高台を付した器形となるものと推定される。

蓋(1326・1355) - 2点の出土であるが、身の部分の一部のみを残す破片であるため全体的なことは定かでない。いずれもロクロ使用成形されるが、1326は内外面とも入念なミガキ調整のち内面を黒色処理されるが、1355はロクロ成形痕のみを残し再調整は観察されない違いがある。器形は皿形の天地逆となるものと推定される。

壺(1363～1369) - 7点の出土であるが、完形は出土せず口縁部から体部から体部から底部を残す破片での出土である。1364以外の6点はロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整の例もある。器面は、体部外面の上部はロクロ成形痕のみであるが中位以下はヘラケズリ調整され、内面はヘラナデ調整される例が多いものの、小型の場合は内外面ともロクロ成形痕のみが多い。器形は底部から外反する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は大きく外反して単部が角張る縁帯状をなして上位に挽き出されて受け口状となる。1364はロクロ不使用である以外は前者とほぼ同様であるが、口縁部の造り方に若干違いが見られる。

須恵器(第164図、写真図版404)

床面と埋土内から2点出土しているが、器種は坏のみである。

坏(1361・1362) - 2点の出土であるが、口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整である。内外面ともロクロ成形痕のみで再調整の痕跡は観察されない。器形は土師器のそれと同様と推定される。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器の特徴から10世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

43 DⅢi 23住居跡

〔遺構〕(第130・131図、写真図版104)

調査範囲の西端から約217m東によったDⅢ区の東端部に位置し、DⅢk 25住居跡は東に約7mの距離がある。DⅢi 23溝跡と重複しているが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約5m、南-北約4.8mの規模を持ち、平面形は主軸が磁北に対して約95度東に偏したやや歪んだ方形をなす。壁高は約40cmほどであり、水平に対して約100度ほど外傾しており、床面とは軽い丸味で接続する。壁には僅かな小凸凹が見られるものの、総じて見ればほぼ直線的な規則的な壁と言えよう。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p6の6基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置と平面形などからp1・p3～p5は続住居跡主柱穴を構成するものと推定され、p2についても支柱穴と考えられる。p6は規模が

やや小さいものの位置や平面形から貯蔵穴である可能性がある。埋土は全体が12層に細分されているが、土性はいずれもシルトであり色調には黒褐色・暗褐色・明褐色・明黄褐色などに分けられている。粘性のある土層が多く、さらに炭化物や地山粒などが混入する土層がある。廃絶当初に残土の投棄が観察されるものの、その後は自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは東壁の北隅部付近に設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などの各部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅約1m、奥行き約1m、高さ約20cmであり、さらに壁外に約1.6m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅約20cm、奥行き約90cm、高さ約30cmで、右側袖部は幅約30cm、奥行き70cm、20cmであり、左右いずれも内壁側に河川礫を埋設してその周辺部を暗褐色のシルトを積み上げて補強して構築している。燃焼部は幅約50cm、奥行き約70cmほどの広さがあり、焼土は前底部から約70cm×50cmの範囲に厚さ約5cmで広がっている。火床は前底部付近から床面よりわずかに低くなって奥壁まで続き、煙道部の底面とは段差がない。煙道部は幅約45cm、深さ約20cmほどであり、底面は平坦で水平に近く、掘り込み式の煙道部と言うことになる。煙出し部は煙道部と幅がほぼ同様であることから、煙道部の先端が煙出し部ということになるが、底面が煙道部のそれより僅かに低くなっていることは、煙道部とは別に単独に掘られている可能性がある。

〔遺物〕(第166図、写真図版404・405)

埋土内や床面・カマド内などから14点の出土であるが、種類としては土師器2点と須恵器12点に細分される。

土師器(第166図、写真図版404・405)

カマド内から環が1点と壺が1点の合わせて2点の出土である。

環(1370) - 体部下位から底部の一部を残す破片が1点の出土である。ロクロ使用成形され底部は回転糸切り難し無調整であり、内外面にロクロ成形痕のみを残し再調整はない。その他は小破片のため定かにし難い。

壺(1377) - 口縁部から体部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、口縁部の内外面がヨコナデ、体部は内外面ともヘラナデ調整される。底部から外傾する体部は中位?に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は丸味をもって外反する器形を示すものと推定される。おそらく大型の部類と考えられる。

須恵器(第166図、写真図版405)

埋土内やカマド内などから環が6点と壺4点のほか、瓶2点の12点が出土している。

環(1371~1376) - 6点の出土であるが、完形は3点のみで他は口縁部から体部を残す1点と体部から底部を残す2点の破片が含まれる。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り難し無調整であり、体部から口縁部は内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はない。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部が直線的に外傾したり端部が外反する器形をなし、土師器の

器形とはほぼ同様である。大きさは口縁部径が15.5 cm～14.4 cm、底部径は6.6 cm～6 cmで、比率は2.58～2.18である。

壺(1380～1383) - 4点の出土であるが、すべてロクロ使用成形された体部の小破片であるため、詳細については不明である。外面に並行叩き具痕、内面に同心円や放射状、無文などの当て具痕が付される。

瓶(1378・1379) - 2点の出土であるが、体部と肩部の破片である。いずれもロクロ使用成形され前者はロクロ成形痕のみであるが、後者は外面に並行叩き具痕を付しているが、詳細は定かでない。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した須恵器の特徴から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

44 DⅢk 25 住居跡

〔遺構〕(第132・134図、写真図版105)

調査範囲の西端から約224 cm東によったDⅢ区の最東端に位置し、DⅢv 25住居跡は南に約44 mの距離があり、DⅢp 22溝跡と重複しているが当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約4.2 m、南-北約5.5 mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約95度東に偏した長方形である。壁高は10 cm前後と全体として掘り込みが浅く、壁の状態も直線的ではなく凸凹が多く見られ、不規則な壁と言うことができる。床は第V層の段丘層の上面を掘り込んで構築されるが、全体として堅いものの凸凹が著しい特徴がある。壁溝野検出はないが、p1～p5の5基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や平面形はいずれも柱穴的であるが、位置をも加味して見るとp1～p3は当住居跡の主柱穴を構成するものと推定される。埋土は全体が5層に細分されるが、土性はすべてシルトであり、色調は黒褐色を主体に暗赤褐色に細部され、一部の層に炭化物が、またある層には十和田A降下火山灰が混在する。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは東壁の南隅部付近に設置されているが、重複する溝跡の削平を受けているため、残存状態はよくない。検出されたのは袖部・燃焼部・煙出し部であるが袖部も溝跡に一部が破壊を受けており、全体的なことは不明と言わざるを得ない。左側の袖部は崩れて痕跡を残すのみであるため詳細は不明であるが、右側袖部は幅約40 cm、残存する奥行き約90 cm、高さ約40 cmほどであり、全体の幅は約1.4 m前後と推定される。袖部は内壁に河川礫を配置した後周辺部に黒褐色や褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部の広さは不明であるが、燃焼部の焼土は90 cm×60 cmの広がりを示し、約10 cmの厚さがある。煙道部は溝跡の掘削のほか、未掘乱部分でも検出されないことから、元々浅く掘られた掘り込み式であったのが、開田時の工事に

よって削り取られてしまった可能性がある。煙出し口は径約 50 cm × 40 cm の規模を持つ楕円形で、深さは約 30 cm あり断面形はバケツ形に近い形状をなす。

〔遺物〕(第 167～168 図、写真図版 405・406・524・531・541)

埋土内や床面から土師器 13 点、須恵器 5 点、土製品 4 点、鉄製品 3 点の合わせて 25 点の遺物が出土している。

土師器(第 167 図、写真図版 405・406)

床面からの出土を主体に 18 点の出土であるが、器種には坏 4 点、甕 6 点、鉢 3 点が含まれる。坏(1384～1387) - 4 点の出土であるが、口縁部から底部までを残す個体は 1 点のみで、他は口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整で体部の外面はロクロ成形痕のみを残して再調整はないが、内面はミガキ後黒色処理される 2 点(1384・1385)とまったく再調整の内 2 点(1386・1387)に細分される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が僅かに外反する器形をなし、いずれの器形もほぼ同様である。大きさは口縁部径が 14.6 cm、底部径は 5.5 cm で、比率は 2.65 である。

甕(1389～1394) - 6 点の出土であるが、完形や口縁部から底部までを残す個体はまったく含まず、口縁部から体部を残す破片を主体に体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され口縁部から体部を残す個体は内外面ともロクロ成形痕のみを残すが、体部から底部を残す破片は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデの再調整がある。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部が大きく外反して端部が角張る縁帯状をなしさらに上方に挽き出されて受け口状となる器形が多い。また、器形には大小関係が見られる。

鉢(1395～1397) - 3 点の出土であるが、完形はなく口縁部から体部と体部から底部を残す破片の出土である。すべてロクロ使用成形であるが、内面がミガキ調整される 2 点(1395・1397)と再調整のない 1 点(1396)に分けられることから、前者は内面が黒色処理されていた可能性が高い。体部の外面は口縁部から体部上位ヘラケズリされる個体とロクロ成形痕のみの個体がある。器形は甕と近いが口縁部径が器高より大となる個体である。大小関係が見られる。

須恵器(第 167・168 図、写真図版 405・406)

5 点の出土であり、坏 1 点、甕 2 点、瓶 2 点の器種がある。

坏(1388) - 1 点の出土であるが、完形ではなく口縁部から体部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され、内外面ともロクロ成形痕のみを残す。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部で僅かに外反する器形を示す。

甕(1400・1401) - 2 点の出土であるが、いずれも体部下位の破片である。器表に並行叩き具痕を付し、内面に円形無文凸面の当て具痕を持つ大甕である。

瓶(1398・1399) - 2点の出土であるが、頸部下端から肩部と肩部を残す破片である。ロクロ使用成形され、内外面ともロクロ成形痕を明瞭に残している。

土製品(第168図、写真図版524)

埋土内からふいごの羽口が破片で4点出土している。

羽口(44~47) - 3点の出土であるが、ともに破片である。45がもっとも残存状態が良好で全長10cm、最大径6cmほどであり、先端部の径が約5cmと細くガラス質の鉱滓がベトリと付着しており、強い火熱を受けた結果であることが知られる。ともに中央部に径2cmほどの送風孔が貫通しており、鉄の精錬よりは鍛冶に使用された羽口である可能性が高い。

鉄製品(第168図、写真図版531・541)

埋土内から鉱滓が2点と鉄鏝が1点の合わせて3点が出土している。

鉄鏝(12) - 埋土内から1点出土しているが、両先端部を欠失しているが、残存する全長が約13.6cm、茎の幅約6mmあり、鏝身の幅が約1.4cm、同長さ約1.5cmである。形態的には鏝身の三角形の平根形の長頸式と言うことになる。

鉱滓(177・178) - 埋土内から径8.3cmと6.5cmの碗形をした鉱滓である。形態から鍛冶滓といえよう。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した遺物の特徴から9世紀末から10世紀初頭頃に位置づけられるものと推定される。

(45) DⅢv25住居跡

[遺構](第134・135図、写真図版106)

調査範囲の西端から約223m東によったDⅢ区最東端でDIV区との境界付近に位置し、DIV1住居跡-1とは北に49mの距離がある。DⅢv25土坑と重複するが、当住居跡の方が新しい遺構である。

南東-北東約3.8m、補記-南西約3.8mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約107度東に偏したやや歪んだ方形を示す。壁高は最深部で約36cmほどであり、壁は水平に対して約95度ほどで外傾し、床面とは僅かな丸味をもって接続する。床面は第四層の黄褐色砂質シルトで構築され、壁に近い周辺部には堀形があり堀形付近は全面に貼り床が見られ、全体が水平に近い平坦を示すが、カマドの周辺部は踏みしめによって堅いが他はあまり堅さが見られない。壁溝は検出されていないが、p1~p3の3基の土坑が検出されているが、p3は縄文時代に属するDⅢv25土坑であることから、当住居跡と直接関連する遺構ではない。規模は別表に記載したが、p1・p2とも平面形や規模と北東壁際の東西両隅付近に位置しているなど柱穴的是であるが、浅い特徴があり必ずしも柱穴といえる状況ではない。埋土は全体が14層に細分さ

れているものの土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色を主体に暗褐色や褐色・明黄褐色などに細分され、各層に異なった色調の土粒が混入する特徴がある。南壁沿いの土層に乱れが見られることから、この部分は残土が投棄された可能性があるものの、その他は自然埋没であろう。

カマドは東壁の中央やや東よりに設置され、袖部・燃焼部・煙出し部の各部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は、幅が約1.1m、奥行き約70cm、高さ約15cmほどであるが、各部の規模を見れば、右側袖部は幅約32cm、奥行き約70cm、高さ約15cmで、右側袖部は幅約40cm、奥行き約70cm、高さ約18cmであり、焚き口部に河川礫を埋設する他は褐色や黒褐色・暗褐色などのシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約50cm、奥行き約74cmの広さがあり、火床は床面とほぼ同じ高さであり、奥壁に向かって僅かに高くなり、奥壁とは傾斜する段差で接続する。燃焼部の焼土は殆どかき出されているのか焚き口部付近や中央部では検出されず、奥壁近く右寄りに16cm×8cmの範囲に、層厚2cmで広がっている。煙道部は検出されていないが、壁外に約1.2mの位置に径約32cm×28cm、深さ約12cmの規模を持ち、平面形が楕円形の単独の土坑状である。

〔遺物〕(第169図、写真図版406)

床面やカマド内からの出土を主体に埋土内などから土師器が6点、須恵器が2点の合わせて8点が出土している。

土師器(第169図、写真図版406)

6点の出土であるが、器種として坏が2点のほか、甕が4点含まれる。

坏(1402・1403) - 2点の出土であるが、完形は1点のみで、他は口縁部から体部下位までを残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面ともロクロ成形痕のみを残し再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直立気味となる器形をなす。大きさは口縁部径11cm、底部径4.6cmで、比率は2.39である

甕(1406～1409) - 4点の出土であるが、1点はほぼ完形であるが、他の個体は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ不使用成形され、底部の切り離しはナデによって不明である。口縁部は内外面ともハケメ後ヨコナデ、体部は内外面ともヘラナデやハケメ調整される。器種には所謂長胴形と球胴形があり、前者の器形はやや径の大きい底部からやや丸味を持って外傾する体部は肩部に最大径を持って頸部で窄み、口縁部は外反し、後者は体部が底部から球形に膨らむ器形をなす。

須恵器(第169図、写真図版406)

2点の坏が出土している。

坏(1405・1404) - 全体が判明するのは1点のみで、他は体部から底部を残す破片での出土

である。いずれもロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整である。内外面ともロクロ成形痕のみを残し、再調整はまったく見られない。器形は土師器の坏とほぼ同様である。大きさは口縁部径が13.8cm、底部径は7cmで比率は1.97である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土遺物の特徴から9世紀中葉から後半頃に位置づけられるものと推定される。

〔編 DIVj1住居跡-1〕

〔遺構〕(第136図、写真図版107)

調査範囲の西端から約226m東によったDIV区の最西端でDIII区との境界付近に位置する。北側が調査範囲外に延びるほかDIVi2溝跡と重複しているが、当住居跡の方が古い遺構である。

検出された規模は東-西約2.5m、南-北3.0mであり、平面形は主軸が磁北に対して107度偏した方形か長方形を示すものと推定される。壁高は約56cmほどあり、壁は若干起伏があって直線的とは言い難いが、床面とは軽い丸味を持って接続し内湾気味に外傾する。床は第IV層の黄褐色シルト出構築され、貼り床されることなくそのまま床面とし、起伏もなくほぼ水平に近い平坦で踏みしめによって全体が堅い。壁溝野検出はないが、床面からp1とp2の2基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置・形状から柱穴とは理解し難いことから、貯蔵穴と理解できよう。埋土は全体が7層に細分されるが、土性はすべてシルトであり、色調が黒色と黒褐色を主体に壁際に壁の崩れと考えられる黄褐色が堆積する。全体的に炭化物や黄褐色土粒の混入が観察される。自然堆積によって埋没したものと考えられる。

カマドは南壁の東隅部付近に設置されるが、残存状態が悪く燃焼部の焼土と煙道部・煙出し部が検出されているのみである。袖部は残存していないため規模・構築方法ともに不明であるが、残存する燃焼部の焼土が70cm×60cmのやや長方形気味に広がることから、袖部はこの範囲の外側に構築されていたものと推定される。焼土は約10cmの層厚があり、広がりの中心部には縦長の河川礫を埋設した支脚がある。火床は床面とほぼ同位面が続き、奥壁とは大きな段差で接続する。煙道部は壁外に約1.4mの長さで延び、幅は基部が約60cmと広がっているものの、他は約15cm位と幅狭となっている。深さは検出面から数cmと浅いことから、掘り込み式の煙道部であろう。煙出し部は径約40cm×30cmの打柄径を示し、深さが約10数cmと断面半円状をなす土坑状である。

〔遺物〕(第170・171図、写真図版407)

埋土内からの出土を主体に床面や土坑・カマドから土師器9点と須恵器が11点の合わせて20点が出土している。

土師器 (第 170 図、写真図版 407)

9 点の出土であるが、器種として坏 6 点と甕 3 点が含まれる。

坏 (1410 ~ 1415) - 6 点の出土であるが、全体が判明するのは 2 点のみで他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整され、内外面ともロクロ成形痕のみを残し再調整はまったく観察されない。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁端部が軽く外反したり直線的に外傾する器形を示す。大きさは口縁部径が 14.6 cm と 13.5 cm、底部径は 5.9 cm と 4.8 cm で比率は 2.81 と 2.47 である。

甕 (1419 ~ 1421) - 3 点の出土であるが、完形は 1 点のみで他の 2 点は口縁部から体部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形であり、内外面にロクロ成形痕を残すが一部の体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナダの再調整される例も見られる。底部から外傾する体部は中位や上位に最大径を持って頸部で僅かに窄み、口縁部が大きく外反して端部が角張る縁帯状を示し、さらに上方に挽き出されて受け口状をなす。器形には大小完形が見られる。

須恵器 (第 171 図、写真図版 407)

11 点の出土であり、器種として坏 3 点と甕 8 点が含まれている。

坏 (1416 ~ 1418) - 3 点の出土であるが、完形は含まず口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整である。内外面ともロクロ成形痕を明瞭に残し再調整の痕跡は見られない。器形は土師器坏のそれと同様である。

甕 (1422 ~ 1423) - 8 点の出土であるが、すべて大甕の体部や肩部の破片であるため、全体的なことは不明である。1422・1423 以外は外面に並行叩き具痕か擬格子叩き具痕を付すが、内面には青海波文や放射縄文などの当て具痕の他円形無文凸面の当て具痕もあり、さらにナダによって当て具痕が消去されている個体もある。1422・1423 の 2 点は外面がヘラケズリ、内面がヘラナダの調整痕を付しており、ロクロ使用成形であるかはすべての個体で不明である。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から 9 世紀末から 10 世紀の前半代に位置づけられるものと推定される。

(7) DIVj1 住居跡 - 2

(遺構) (第 137・138 図、写真図版 108)

調査範囲の西端から約 228 m 東によった DIV 区の最西端部で DIII 区との境付近に位置し、DIVq1 住居跡とは南に約 26 m の距離がある。DIIIp22 溝跡と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約 4 m、南-北約 4 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 180 度偏した兩

丸気味の方形を示す。壁溝は最深部で約18cmほどあり、南壁は床面と丸味を持って接続してほぼ直立するが、その他は約95度ほどで外傾する。各壁には僅かな凸凹があるものの全体としてみればほぼ直線的であり規則的な壁と言える。床は第四層の黄褐色シルトで構築されており、貼り床されることなくそのまま床面とされているが、南東側の床が約6cmほど低くなっており、全面が踏みしめによって堅い。床面からは壁溝や柱穴・貯蔵穴といった土坑類などの施設はまったく検出されていない。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色のシルトの3層から成り、全体的に小礫が混入し一部の層には炭化物が混じる。土層から堆積状況を判断すると、自然堆積で埋没した遺構と推定される。

カマドは北壁の北隅部付近に構築されるが、残存状態が悪く燃焼部の焼土と煙道部・煙出し部が検出されたにすぎない。袖部と燃焼部付近がDIIIp 溝跡によって掘削されているため残存していないが、残存していた燃焼部の焼土は34cm×28cmほどの範囲に広がる様相を示すことから、カマド燃焼部の規模もほぼそれに近いものと推定される。煙道部は壁外に約1.4m延び、幅は約38cm、深さは約22cmほどであり、現状では振り込み式の煙道と判断される。煙出し部は径約20cmほど、深さ約36cmほどの円形の土坑状であるが、底面は煙道部のそれとほぼ同位で連続している。

〔遺物〕(第172・173図、写真図版408・409)

埋土内から20点、床面から11点の合わせて31点の出土であり、種類としては土師器10点と須恵器21点が含まれる。

土師器(第172・173図、写真図版408・409)

10点の出土であり、坏5点と壺5点がある。

坏(1430～1434) - 5点の出土であるが、完形は1点のみで他は口縁部から体部か体部から底部を残存する個体である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、外面はすべてロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される1点(1430)以外はロクロ成形痕のみで再調整はない。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部が軽く直立気味となる。大きさは口縁部径が14.1cm、底部径5.2cmで比率は2.71である。

壺(1450～1454) - 5点の出土であるが、口縁部から底部を残す個体は1点のみで他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。これらにはロクロ使用成形の4点(1451～1454)とロクロ不使用成形の1点(1450)に分けられる。前者は口縁部から体部を残す3点と体部下位から底部の一部を残す破片であるが、内外面にロクロ成形痕を明瞭に残すが、一部ではヘラナデによる再調整が見られる。底部から外傾する体部は中位や上位に最大径を持って頸部が窄み、口縁部が大きく外反して端部が角張る帯状をなし、上方に挽き出されて受け口状となる器形が多い。器形には大小があり、中型と小型が出土している。後者のロクロ不詳成形の個体は1点のみであるが、器表の内外面にヘラナデによる調整が見られ、底部

の切り離しはナデによって不明である。底部から外傾する体部は上位に最大径を持って頸部で窄み、口縁部は直線的に外傾する器形をなす。

須恵器 (第172・173図、写真図版408・409)

21点の出土であるが、器種には坏15点、壺4点、瓶1点、壺1点が含まれる。

坏(1435～1449) - 15点の出土であるが、完形や全体が判明するのは4点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残存する破片での出土である。1443は坏の壺である可能性があるし、1444は灰釉の可能性もある。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はない。底部から外傾する体部は丸味を持ったり直線的に口縁部へ続き、口縁部は外反する個体が多く、他に直立気味の個体もある。大きさは、口縁部径が14.6cm～13.1cm、底部径7cm～5cmで比率は2.71～2.07である。

壺(1457～1460) - 4点の出土であるが、いずれも体部の小破片であるため詳細は不明であるが、所謂大壺であろうと推定される。外面に並行叩き具痕、内面に並行や円形無文などの当て具痕が付される。

瓶(1456) - 1点の出土であるが、肩部から頸部下端にかけての小破片であるため、詳細は不明である。内外面にロクロ成形痕を明瞭に残している。

壺(1455) - ロクロ成形された口縁部から体部下位まで残す破片が1点出土している。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の状況から9世紀後半頃に位置づけられるものと推定される。

40 DIVq1住居跡

〔遺構〕(第139・140図、写真図版109)

調査範囲の西端から東に約230mよったDIV区最西端でDⅢ区との境付近に位置し、DIVp3住居跡とは北東に約5mの距離がある。DⅢr25溝跡とDIVq2土墳墓・DIVr3土坑に重複しているが、溝跡は当住居跡より新しく土墳墓と土坑は当住居跡より古い遺構である。

東-西約6m、南-北約6mの規模があり、平面形は主軸が刺へ北に対して約110度偏したほぼ正方形を示す。壁溝は最深部で約27cmほどあり、すべて床面とほぼ直角に近い状態で接続している。南東壁にやや凸凹があるものの他の壁はほぼ直線的な状態を示しており、全体として見れば規則的な壁と言えよう。また、南東壁中央部のカマドよりの壁が外方に張り出しているが、この場所の壁は外方に向かって傾斜するスロープ状を示し、さらに柱穴と推定される土坑p2とp16、p13とp17が相対する形で配置されていることから、この位置に出入口が存在していた可能性が高い。床は第IV層の黄褐色のシルトで構築され、東壁と北壁沿いの一部に貼り床が見られるものの、全体としてみればあまり貼り床がなく平坦で水平に近く、踏みしめに

よって全面が堅い。壁溝の検出はないが、床面上から p1～p17 の 17 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置から考えて p1 は貯蔵穴である可能性が強いし、同じ理由により p9・p3・p2 が当住居跡の支柱穴を構成するものと推定される。その他 p10・p14・p15 も何らかの形で関与した支柱穴であろうと考えられる。埋土は全体が 6 層に細分されるが土性はすべてシルトであり、色調は黒褐色を主体に黒色・褐色・暗褐色などに分けられる。全体として焼土や炭化物・砂礫・円礫などの混入が多く観察される。自然堆積で埋没した遺構と考えられる。

カマドは南東壁の北隅部付近に検出され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の他奥壁部分の天井部などの各部分が良好な状態で検出された。袖部全体は幅約 1.25 m、奥行き約 90 cm、高さ約 30 cm の規模であるが、袖部個々では左側袖部が幅約 26 cm、奥行き約 70 cm、高さ約 33 cm で、右側袖部は幅約 40 cm、奥行き約 72 cm、高さ約 30 cm の規模であり、褐色や黄褐色、黒褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約 60 cm、奥行き約 70 cm の広さがあり、火床は床面より約 9 cm ほど低くなり、奥壁とは斜面状で接続する。燃焼部の焼土は 30 cm×23 cm の範囲に焚き口部付近の中央から層厚約 3 cm で広がる。奥壁の手前約 20 cm の燃焼部床面に河川礫を埋設した支脚が検出されている。煙道部は壁外に約 1.94 m 延びている割り貫き式であり、方向が壁に対して 18 度曲っており、幅約 45 cm、深さ約 10 cm の規模であり、底面は中央部分が浅く奥壁と煙出し部に向って僅かに低くなっている。煙出し部は径約 52 cm×38 cm の楕円形状の平面形をなし、深さが約 45 cm あり、煙道部の底面より約 28 cm 深く単独の土坑状を示す。

〔遺物〕(第 174～176 図、写真図版 409～411・532)

床面や土坑内からの出土を主体に土師器 25 点と須恵器 21 点のほか、鉄製品 3 点と合わせて 49 点が出土している。

土師器(第 174～176 図、写真図版 409～411)

25 点の出土であるが、器種として坏 10 点、甕 14 点、器種不明 1 点が含まれている。

坏(1461～1470) - 10 点の出土であるが、3 点は完形かほぼ完形であるが他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、体部の外面は無調整を主体に一部下端がヘラケズリ再調整される個体を含む。内面はいずれもミガキ後黒色処理されている。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部が直線的に外傾したり直立気味となる器形をなす。大きさは口縁部径 15 cm～14 cm、底部径 5.7 cm～5.2 cm で比率は 2.88～2.22 である。

甕(1489～1502) - 14 点と多く出土しているが、完形の個体はまったく含まず口縁部から体部を残す 6 点と体部から底部を残す 8 点がある。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離し技法は不明であるが、いずれも砂が付着したいわゆる砂底である。器表の調整は大型では体部上位、中型と小型は全面にロクロ成形痕を残し、大型では中位から下位がヘラケズリ調整さ

れる。内面はロクロ成形痕のみの場合とヘラナデ調整される例がある。底部から外傾する体部は中位や上位に最大径を持って頸部で窄み、口縁部は大きく外反して端部が角張る縁帯状となり上方に挽き出されて受け口状を示す器形が多い。

器種不明(1505) - ロクロ使用成形され内面がミガキ後黒色処理された器種不明が1点出土している。残存する器形から脚が付き底面が平らとなる器形のように推定されることから、高皿的な器種であるかも知れない。

須恵器(第174～176図、写真図版410・412)

21点の出土であるが、器種には坏18点、壺2点、瓶1点が含まれている。

坏(1471～1488) - 18点の出土であるが、完形や全体の判明する個体は3点のみで他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形で底部は回転糸切り離しであり、底面が一部ヘラケズリ再調整される個体が1点含むが他は無調整である。体部は内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はない。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部が外反や直立気味となる器形をなす。大きさは口縁部径が15.3cm～13.7cm、底部径が6cm～5.4cmである。

壺(1503・1506) - 2点の出土であるが、1点は外面に並行叩き具痕、内面に同心円当て具痕を付す大壺であるが、他の1点はロクロ使用成形され器表がヘラケズリ調整された底部が平底の壺である。

瓶(1504) - ロクロ使用成形された口縁部の破片が1点出土している。小破片のため全体的なことは不明であるが、内外面ともロクロ成形痕のみを残す。

鉄製品(第176図、写真図版532)

埋土内から器種不明1点、釘1点、鉄滓1点の3点が出土している。

器種不明(28) - 破損品と推定されるが、断面が長方形をなし一端が3裂する器形を示している。全長が約11cmで幅1.1cmであり、3裂する部分が欠損しているものと推定される。

釘(30) - 断面が方形をなし、全長が6cmほどの釘が1点出土している。

鉄滓(29) - 全長が約10cmほどの不整形をし、幅約4cm、厚さ約2.5cmの大きさのある鉄滓が1点出土している。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期を特定することは困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から9世紀後半頃位置づけられるものと推定される。

(4) DIVp3住居跡

(遺構)(第141図、写真図版110)

調査範囲の西端から約236m東によったDIV区の最西端に位置し、DIVk4住居跡は北に約

18 mの距離がある。DⅢr 25 溝跡と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。開田時に重機による削平のため北東側が残存していない。

削平によって全体規模を確認することはできなかったが、検出された部分から一辺が約4.3 mほどの規模と推定され、平面形は主軸が磁北に対して約145度東に偏した方形か楕円形を示すものと推定される。壁は北西壁と南西・南東の各壁の一部が残存しているが、壁高は最深部で約30 cmほどであり、立ち上がりは水平に対してほぼ直立し、床面とはやや丸味を持って接続する。いずれの壁もほぼ直線的であり規則的な壁と言えよう。床は第IV層相当の黄褐色砂質シルトで構築されるが、床面全体に径20 cm～15 cm、深さ約10 cm～5 cmの掘り起こし工具痕があり、実際の床面はその上に暗褐色のシルトを張って構築している。床面は大きな起伏もなく、平坦でほぼ水平に近い。壁溝の検出はないが、床面からp1～p5の5基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1は規模や形状位置などから土坑ではなく不規則な掘り形である可能性が高く、p3とp4は位置や規模・形状から貯蔵穴であろうと推定される。p2とp5は規模や形状からは柱穴的であるが、位置が不規則であり断定できない。支柱穴と推定される土坑は検出されていない。埋土は全体が5層に細分されているが、土性はすべてシルトであり色調は黒褐色・暗褐色・褐色を示し、全体としてあまり締まりのない埋土である。2層は重機による攪乱層であり、1層と3層には炭化物が含まれている。攪乱が著しいので断定はできないが、自然堆積で埋没した遺構であろう。

カマドは南東壁の中央やや東よりに設置されるが、重機による削平によって残存状態は不良であるが、袖部の芯とした礎、燃焼部と燃焼部の焼土、煙出し部が検出されている。袖部の残存状態が不良のため全体的なことは不明であるが、燃焼部焼土と袖部の芯の位置から、袖部全体の規模は幅60 cm以上、奥行き80 cm以上と推定される。袖部各部の規模は不明であるが、芯に河川礫を埋設しその周囲にシルトを積み上げて構築されたものと推定される。燃焼部の焼土は52 cm×30 cmの範囲に層厚が最大6 cmで広がる。煙道部は検出されていないので掘り込み式なのか割り貫き式なのかは不明であるが、壁から約1 m外方に平面形が径25 cm×20 cmの長方形をなし、深さが約11 cmの土坑状を示す煙出し部が検出されている。

〔遺物〕(第177図、写真図版411)

埋土内からの出土を主体に土師器6点と須恵器3点の合わせて9点出土している。

土師器(第177図、写真図版411)

6点の出土であるが、器種には坏6点、壺3点、埴1点が含まれている。

坏(1507・1508) - 2点の出土であるが、完形は含まず口縁部から体部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、外面はロクロ成形痕のみで再調整はないが、内面は1個体が磨き後黒色処理されるが別の個体はロクロ成形痕のみで再調整はない。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部の端部が軽く外反する器形を

示す。

壺(1509～1511) - 3点の出土であるが、1点は体部下端から底部を残し他の2点は口縁部から体部を残す破片での出土である。1点はロクロ使用成形であるが別の2点はロクロ不使用成形されている。前者は内外面にロクロ成形痕を残し、口縁部が大きく外反して端部が角張る縁帯状をなし、上方に挽き出されて受け口状の器形を示す。後者は口縁部が内外面ともヨコナデされ体部はヘラナデ調整され、体部は外傾し外反する口縁部を持つ器形を示し、底部は底面に木葉痕を付す。

埴(1512) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片が1点出土している。底部を欠失しているので全体的な器形は不明であるが、底部から体部が丸味を持って大きく外傾し、口縁部は外反し端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となるボール状の器形を示す。内面と外面の上位はロクロ成形痕やカキメ調整痕、下半部はヘラケズリ調整である。

須恵器(第177図、写真図版411)

壺2点と瓶1点の合わせて3点の出土である。

壺(1514・1515) - 2点の出土であるが、いずれも小破片であるため全体的なことは不明である。1514はロクロ使用成形され外面はヘラケズリ、内面がヘラナデされる体部の破片である。1515は外面に並行叩き具痕、内面に同心円当て具痕を付す大壺の体部破片である。

瓶(1513) - ロクロ使用成形された肩部破片が1点出土している。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土遺物の特徴から10世紀代の遺構と推定される。

50 DIVk 4 住居跡

(遺構)(第142・143図、写真図版111)

調査範囲の西端から約240m東によったDIV区西部に位置し、DIVn 4住居跡は南に8mの距離がある。DIVk 4溝跡と重複しているが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約6.5m、南-北約7mの規模があり、平面形は磁北に対して約5度西に偏したやや隅丸の長方形気味の形状を示す。壁高は最深部で45cmほどであり、壁は水平に対して約100度～90度で外傾し、一部に僅かな凸凹があるもののほぼ直線的で規則的な壁である。床は第IV層相当の黄褐色砂質シルトを主にその下層の段丘礫層の上面で構築され、壁寄り周辺部の一部に貼り床が見られるものの、ほとんどは貼り床されることなくそのまま床面とされ、平坦で水平に近く全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p12の12基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置・形状などはいずれも柱穴

的であり、p5・p8～p10は当住居跡の支柱穴を構成するものと考えられる。その他p7とp11は他の掘立柱建物跡の柱穴であるが、その他の土坑もすべて柱穴的であることから、当住居跡の支柱穴であろうと推定される。貯蔵穴的な土坑はまったく検出されていない。埋土は全体が7層に細分されているが、土性はシルトを主体に砂質シルトであり、色調は黒褐色が主であるが他に黒色と赤褐色に分けられる。すべての層が粘性を持ち、一部の層には炭化物や焼土粒が混入している。自然堆積で埋没した遺構であろう。

カマドは南壁の中央やや東寄りと北壁のほぼ中央の2ヶ所で検出されているが、南壁のカマドでは袖部が検出されているのに対し、北壁の場合は袖部が残存していないなどの現象から北壁のカマドは最初のカマドで、作り替えによって南壁に移されたものと考えられる。古い北壁のカマドは袖部は残存せず、燃焼部の焼土と煙道部・煙出し部が検出された。カマド全体の規模は不明であるが、燃焼部の焼土は60cm×50cmの楕円形状に約2cmの層厚で広がり、火床は床面とほぼ同位であり、煙道部底面との段差はない。煙道部は壁外に約1.6m延びる掘り込み式で、幅が約30cm、深さ約20cmの溝状である。煙出し部は煙道部の幅より僅かに広い径約40cm×30cmの楕円形で深さ約40cmの土坑状であるが、底面は煙道部と同位面が連続している。新しい南壁のカマドは袖部・燃焼部・煙出し部が良好な状態で検出された。袖部の全体規模は幅約1.6m、奥行き約80cm、高さ約30cmである。各部の規模を見ると、左側の袖部は幅約50cm、奥行き約80cm、高さ約30cmであり、右側袖部は幅約50cm、奥行き約1.1m、高さ約35cmであり、袖部は一部に河川礫を芯として埋設した後その周囲を褐色のシルトを主としたシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約60cm、奥行き約1.3mの広さがあり、燃焼部の焼土は50cm×30cmの範囲で焼き口部付近から奥に、約5cmの厚さで楕円形状に広がっている。火床は床面より僅かに低くなり、奥壁は斜面状をなす。煙道部は検出されていないが、壁外の約80cmの位置に径約25cm×25cmの楕円形で深さ約25cmの土坑状である。

〔遺物〕(第178～181図、写真図版411～413・531)

埋土内からの出土が44点と主体ではあるが、土師器35点、須恵器34点、鉄製品4点の合わせて63点の遺物が出土している。

土師器(第178・179図、写真図版411～413)

35点の出土であるが、器種として坏13点、壺19点、壺2点、小型土器1点が含まれている。

坏(1516～1527・1561) - 13点の出土であるが、口縁部から底部までを残存するのは1点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離しと推定されるが、ヘラケズリ再調整される個体が5点と多く無調整の2点を圧倒している。体部の外面についてもミガキやヘラケズリなどの再調整される個体が6点と多く見られる。内面はミガキ後黒色処理される個体が10点と主体ではあるが、1525・1526の2点はロクロ成形痕のみである。器形は底部から直線的や丸味を持って外傾する体

部は口縁部が内湾したり端部が外反したりするが、全体として器形が不揃いで作りも粗雑である。1561はロクロ不使用成形された底部と体部の境に明瞭な段を持ち、内面が磨き後黒色されるいわゆる奈良時代の坏と同じ特徴を持つ。

壺(1539・1557) - 19点の出土であるが、成形にロクロ使用が4点、ロクロ不使用15点とロクロ不使用成形の個体が圧倒的に多い特徴がある。ロクロ使用成形は4点であるが、完形は無く口縁部破片が1点と体部から底部を残す破片が3点の出土であるため全体的なことは不明である。口縁部や体部の内外面にロクロ成形痕を明瞭に残し、底部が回転糸切り離しである。いずれも小型の器形である。ロクロ不使用の個体は15点であるが、前者同様に完形は含まず、口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。口縁部はいずれも内外面ともヨコナデ調整されるが、体部は外面がヘラナデ、ハケメ、ヘラケズリなど各種の再調整がみられ、内面はハケメとヘラナデによる調整である。器形は前者も後者もほぼ同様であるが、底部から外傾した体部が中位か上位に最大径を持って頸部で窄み口縁部が外反するものの、個体差が見られる。

壺(1558・1559) - 2点の出土であるが、口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。1558は口縁部の外面がヨコナデ、内面はミガキで、体部は外面ミガキ、内面がヘラナデで調整される。1559も体部の調整は前者と同様である。体部が球状に膨らむ器形をなす以外は壺と同じである。

小型土器(1560) - ロクロ不使用成形された体部から底部を残す1点が出土している。体部の内外面はナデによる調整が観察されるものの、詳細は不明である。

須恵器(第178・180・181図、写真図版412・413)

34点の出土であるが、器種には坏11点、壺6点、瓶3点、壺3点、転用碗1点が含まれる。

坏(1523～1538) - 11点の出土であるが、完形や全体の判明するのは3点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形で底部は回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも再調整は見られず、器形は土師器坏のそれと大同小異である。大きさは口縁部径が15.3cm～12.6cm、底部径は6.8cm～6.2cmで比率は2.25～2.03である。

壺(1562・1563・1569・1572～1574) - 6点の出土であるが、体部の小破片のみの出土であるため詳細は不明である。1569・1573・1574の3点は外面に並行叩き具痕、内面に青海波文と並行当て具痕や放射状当て具痕を付す大壺である。他は内外面にロクロ成形痕やロクロ回転を利用したカキメ痕を付す壺である。

瓶(1564・1565・1571) - 3点の出土であるが、いずれもロクロ使用成形された体部や肩部の破片であり、全体的なことは不明である。

壺(1566・1568) - 2点の出土であるが、ロクロ使用成形された肩部の破片であるため詳細

は不明であるが、1568 は外面に並行叩き具痕を付し、他はロクロ成形痕のみである。

転用碗 (1567) - ロクロ使用成形された台付き瓶の底部を再利用した碗である。

鉄製品 (第 181 図、写真図版 531)

4 点の出土であり、器種には鎌 1 点、鏝 1 点、器種不明 2 点がある。

鎌 (19) - 1 点の出土であるが、途中で折損するものの残存する全長が約 17 cm、最大幅約 3 cm で基部が右側に付く右利き用の鎌である。

鏝 (22) - 1 点であるが、鏝身と基部の付け根部分から折損するため全体的なことは不明である。鏝身は平面形が三角形に近い平根形であり、茎の横断面は長方形である。大きさは、鏝身の全長は約 4 cm、残存する最大幅約 2.3 cm、茎は幅約 5 mm、厚さ約 2 mm である。

器種不明、(20・21) - 鉄板状の 21 と先端を巻き付けたような形の器種不明の 20 の 2 点の出土である。20 は一部の残存と推定されるが全長約 4.8 cm、21 は長さ約 5.4 cm、幅約 2.2 cm である。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した土師器と須恵器の特徴から 9 世紀中葉頃に位置づけられるものと推定される。

50) DIVn 4 住居跡

[遺構] (第 144・145 図、写真図版 112)

調査範囲の西端から約 239 m 東のよった IV 区西寄りに位置し、DIVr 4 住居跡とは南に約 17 m の距離がある。DIVo 4 掘立柱建物跡と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約 3.8 m、南-北約 4 m の規模を持ち、平面形は主軸が磁北に対して約 90 度東に偏した東側が突辺となるほぼ正方形になる形状をなす。壁高は約 20 cm ほどあり、西・南・北の壁はほぼ直線で規則的な状況を示すが、東壁は突辺となる不規則な状況をなし、床面とは僅かな丸味で接続し軽く外傾する。床は第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、床面には軽い起伏があり全体が踏みしめが弱く軟弱であり、壁沿いが全周するように黒褐色シルト混じりの黄褐色シルトで貼り床がなされている。壁溝は検出されていないが、壁際の床面から p1~p6 の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1 は規模と形状から当住居跡を構築した際の掘り形と推定されるが、他は規模や形状、位置から柱穴的ではあるが、主柱穴とする積極的な状況ではないことから、当住居跡に何らかの形で関係する支柱穴であろうと推定される。埋土は黒褐色を主体に黒色のシルトや砂質のシルトが堆積し、全体が 5 層に細分されているが、1 層をのぞき細砂の混入が目立ち、4 層には炭化物や焼土が混じる。土層の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは東壁の中央からきて隅部よりに構築され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好

な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅が約1 m、奥行き約90 cm、高さは約17 cm～10 cmである。各部の規模では左側の袖部が幅約38 cm、奥行き約70 cm、高さ約15 cmであり、右側袖部は幅約34 cm、奥行き約95 cm、高さ約10 cmで、どちらも暗褐色・黒褐色・褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は焚き口部付近で幅が約50 cm、奥行き約82 cmの広さがあり、火床は床面とほぼ同位の面が続き、奥壁に向かって次第に高くなり、煙道部とは比高5 cmの段差で接続する。燃焼部の火床面には焼土は検出されなかった。煙道部は長さが約1.4 m延びる廻り込み式で、幅約60 cm～30 cm、深さ約13 cm～9 cmであり、底面はほぼ平坦であるが煙出し部に向かって次第に低くなる。壁には凸凹が見られることから、崩落によって生じたものと推定される。煙出し部は46 cm×36 cm、深さ19 cmの土坑状で、煙道部の底面より約4 cm低くなっている。

〔遺物〕(第182・183図、写真図版414・532)

床面からの出土が14点と埋土内出土12点の合わせて26点の土師器と須恵器の他、鉄製品が2点出土している。

土師器(第182・183図、写真図版414)

床面やカマドからの出土を主体に14点の出土であるが、器種としては坏7点、壺4点、鉢2点、埴1点が含まれている。

坏(1575～1581)－7点の出土であるが、口縁部から底部までを残す個体は1点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面はロクロ成形痕のみであるが、内面はいずれもミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直立気味となったり、端部が軽く外反する器形を示す。大きさは口縁部径が12.9 cm、底部径は6.8 cmであり、比率は1.89である。

壺(1589・1591～1593)－4点の出土であるが、関係や全体が観察できる個体はまったく含まず、口縁部から体部か体部から底部を残存する個体である。1589はロクロ不使用成形された個体で、体部の内面に輪轆み痕を明瞭に残す。成形後の器面は内外面ともハケメ調整され、口縁部は内外面ともヨコナデで調整される。底部から丸味をもって外傾する体部は上位最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は大きく外反した後、端部が直立するように持ち上げられ全体が受け口状の口縁部である。その他の個体はロクロ使用成形され、1591は内外面ともロクロ成形痕のみであるが、他は内外面にヘラナデやヘラケズリによる調整がある。体部が底部から外傾する器形と推定されるが、詳細は不明である。

鉢(1594・1595)－2点の出土であるが、1594はほぼ完形であるものの1595は口縁部から体部を残す破片での出土である。2点ともロクロ使用成形され、底部の切り離しはナデにより不明である。体部上部から口縁部の外面はロクロ成形痕のみであるが、中位から下部はヘラケ

ズリで調整される。内面は入念なヘラミガキされた後全面が黒色処理される。底部から外傾する体部は中位に最大径をもって全体が球状に近い器形をなし、頸部で僅かに窄んだ後口縁部が大きく外反し、端部が上方に挽き出されて受け口状になる器形を示す。

堀 (1950) - 口縁部から体部の下位までを残す破片 1 点の出土であるが、ロクロ使用成形され、体部が内外面とも入念なナデで仕上げられている。底部が残存しないので全体的な器形は定かでないが、底部から丸味をもって大きく外傾する体部は頸部に最大径をもち、口縁部が大きく外反して端部が角張り、さらに上方に挽き出されて受け口状となる器形を示す。

須恵器 (第 182・183 図、写真図版 414)

埋土内からの出土を主体に 12 点の出土であるが、器種には坏 7 点、壺 3 点、瓶 2 点がある。

坏 (1582～1588) - 7 点の出土であるが、器形全体の判明するのは 1 個体のみで、他はいずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の内外面はロクロ成形痕を明瞭に残し、再調整はまったく観察されない。底部から直線的や丸味をもって外傾する体部は口縁端部で軽く外反する器形をなす。大きさは口縁部径が 14.2 cm・12.2 cm で底部径が 5.8 cm と 4.6 cm であり、比率は 2.65 と 2.44 である。

壺 (1596・1599・1600) - 3 点の出土であるが、1596 は体部下位から底部を残すが他は体部のみの破片である。前者は器表に並行叩き具痕、内面にナデ痕を付し、底部に高台が付くことから壺である可能性が強い。他の 2 点は外面に並行叩き具痕、内面には円形無文凸面や並行当て具痕が付される大壺の体部片である。

瓶 (1597・1598) - 肩部から頸部下端を残す破片と体部破片の 2 点の出土である。いずれもロクロ使用成形され内外面にロクロ成形痕が観察される。

鉄製品 (第 183 図、写真図版 532)

刀子が 2 点出土している。

刀子 (25・26) - カマド付近の床面直上から出土した完形の 1 点 (25) と埋土内から出土した茎部だけを残す 1 点 (26) の 2 点の出土である。25 は全長が約 18 cm で刀身部が約 13 cm、茎部約 5 cm の大きさがあり、棟は平棟、刀身には軽い反りがあり茎部との境には棟・刃ともに閃が付く両開である。切っ先は次第に丸味をもって棟に続く。26 は茎部のみを残し、全長は約 5 cm である。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から 9 世紀後半代から 10 世紀初め頃の遺構と推定される。

52 DIVr4住居跡

〔遺構〕(第146・147図、写真図版113)

調査範囲の西端から東に約240mよったDIV区西よりに位置し、DIVi5住居跡とは北に約40mの距離がある。他遺構との重複は見られず、単独で検出されている。開田時に重機による削平によって全体として残存状態が悪く、東壁の一部はまったく残存していない。

検出した規模は東-西約5.2m、北-南約4.9mであり、平面形は主軸が磁北に対して約100度で東に偏した長方形的な形状を示す。壁高はもっとも残りのよい西壁で約16cmであり、壁はやや外傾し床とは軽い丸味を持って接続する。床は第IV層相当の黄褐色シルトを主体に構築されるが、一部に第V層の段丘礫層が露出する部分もあり、全体として凸凹が著しくあまり堅さも見られず、荒れた床面と言える。貼り床は確認されていない。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p6の6基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1・P2・p6の3基は北壁の東西隅部沿いに、他は南壁のほぼ中央に位置しており、南壁沿いの2基は位置から見て出入口部に関係する柱穴の可能性が推定されるものの、北壁沿いの土坑は性格を確定できる状態ではない。埋土は全体が6層に細分されるものの、土性はいずれもシルトであり明黄褐色のシルトを混入する層が多い。自然堆積で埋没した遺構と考えられる。

カマドは東壁の南壁隅部よりに構築されているが、重機の削平によって残存状態が不良であるものの、袖部、燃焼部、煙道部の一部、煙出し部が検出されている。袖部全体の幅は約1.5m、奥行き約65cm、高さ約8cm位である。各部の規模では左側袖部は幅が約44cm、奥行き約56cm、高さ約10cmで、右側袖部は幅は約54cm、奥行き約65cm、高さ約15cmの規模で、黒褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約60cm、奥行き約60cmの広さがあり、火床は起伏があるものの床面と同じ高さで続き、奥部は次第に高くなって煙道部とは比高20cmほどの段差がある。燃焼部の焼土は燃焼部のほぼ中央に50cm×40cmの範囲に厚さ約2cmで広がる。煙道部は重機による削平によって煙出し部よりの90cmのみが検出されているが、壁からの長さは約2.15m位と推定される。幅は36cmであり、底面には僅かな起伏があり、深さは最深で約10cmほどである。現状では掘り込み式的であるが、他の状況から本来は刺り貫き式であった可能性がある。煙出し部は50cm×44cmほどの長方形をなし、深さが約19cmの土坑状であり、煙道部の底面とは約10cmの段差がある。また、煙出し部には大量の河川礫が大量に落ち込んでおり、元は煙突状に積み上げられていた可能性が考えられる。

〔遺物〕(第184~185図、写真図版415・527・532)

床面やカマド・土坑内などから10点、埋土内からの出土12点の合わせて22点の土師器と須恵器のほか磁石1点、鉄製品4点の遺物が出土している。

土師器(第184図、写真図版415)

床面から主に出土した坏7点と埋土内から主に出土した壺4点の合わせて11点の出土であ

る。

坏 (1601～1607) - 11点の出土であるが、全体の観察できるのは2点のみで、他は体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部外面の下位がヘラケズリによる再調整される2点(1602・1603)以外は外面はロクロ成形痕のみを残し、内面はミガキ後黒色処理される4点(1601～1604)と再調整のまったくされない3点(1605～1607)に分けられる。器形は、体部が底部から丸味をもって外傾し、口縁端部が直立気味となったり軽く外反する形状を示し、両種ともほぼ同様である。大きさは、口縁部径が15.2 cmと14.1 cm、底部径が5.8 cmと5.7 cmであり、比率は2.64と2.62である。

壺 (1613～1616) - 4点の出土であるが、完形の個体はまったく出土せず、口縁部から体部を残す破片を主体に体部下端から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され口縁部から体部まで内外面にロクロ成形痕のみを残す。全体的なことについては不明であるが、底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は直線的に外反したり(1615)、外反して端部が角張りさらに上方に挽き出されて受け口状となる器形をなす。大きさには大小関係が見られ、出土したのは中・小型の類である。

須恵器 (第184・185図、写真図版415)

埋土内の出土を主体に坏5点、壺4点、壺1点、瓶1点の合わせて11点が出土している。

坏 (1608～1612) - 5点の出土であるが、完形や全体の判明する個体は3点のみで、他は口縁部から体部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整であり、内外面にロクロ成形痕を明瞭に残す。底部から直線的丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直立気味となったり軽く外反する器形をなし、土師器の器形とはほぼ同様である。大きさは、口縁部径が14.8 cm～13.7 cm、底部径が6.9 cm～5.3 cmで、比率は2.66～1.98である。

壺 (1620～1622) - 3点の出土であるが、すべて器表に並行叩き具痕、内面に青海波文や並行・円形無文の当て具痕を付す大壺の体部破片である。

壺 (1617) - 小型の完形品が1点出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整である。内外面にロクロ成形痕のみを残し、再調整はまったく観察されない。比較的径の大きい底部から丸味をもって外傾する体部は、球状に近い器形をなして頸部の下端に僅かな突帯を付し、頸部は長くて軽く外反する様相をなして口縁部は外反する。口縁端部は角張って縁帯状をなす他、上方に挽き出されて受け口状となる。

瓶 (1619) - 内外面にロクロ成形痕を明瞭に残す肩部から頸部下端付近までを残す破片が1点出土している。

石製品 (第185図、写真図版527)

床面から磁石が1点出土している。

磁石(105) - 全長3.6 cm、最大幅2.3 cm、厚さ1.6 cm、重さ14.7 gの大きさを持ち、断面がマゴコ形をなす小型品であり、全面に使用痕を持つ。

鉄製品(第185図、写真図版532)

埋土内や床面から鉄製品が5点出土しているが、その中の1点(182)は鉄滓である。器種には縁金具、環、紡錘車、不明鉄器が各1点ある。

縁金具(32) - 全長5 cm、最大径1.2 cm、最小径8 mmの横断面が略円形になるような状態に、厚さ1.5 mmの鉄板を丸めた状態を示すことから、刀子などの柄に装着された縁金具と推定される。

環(21) - 明確に環と言えるか疑問な点も見られるが、形状が円形であることから取り合えず環として記載することとしたい。円の最大外径は3.2 cm、最小の外径が2.9 cmで、内径は最大が2 cm、最小は1.2 cmの楕円形状を示し、断面が径7 mmの丸形をなす丸棒を曲げて作ったものであり、両端部が密着せず約4 mmほど開いている。

紡錘車(33) - 心棒の両端を欠失しているが、心棒の残存長約12 cm、太さ約6 mmの断面方形の棒状に仕上げしており、円盤は径約5 cmの円形をなし、厚さが約3 mmの鉄板を使用して作った物である。

不明鉄器(34) - 長さが4.2 cm、幅約1.6 cm、厚さ約1.8 cmの大きさがある、断面が略長方形気味をなす鉄製品であるが、器形が不明であるため取り敢えず不明鉄器としたが、鉄滓である可能性もある。

鉄滓(182) - 縦約4.6 cm、幅約7 cm、厚さ約1.6 cmの大きさがあり、両面とも凸凹の激しい板状の鉄滓であり、流動滓である可能性も否定できない。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀中葉代の遺構と推定される。

53 DIVi5住居跡

[遺構](第148・149図、写真図版114)

調査範囲の西端から約245 m東によったDIV区西よりに位置し、DIVo5住居跡とは南に約26 mの距離がある。当住居跡とはDIIIp22溝跡と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約3.4 m、南-北約3.3 mの規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約170度東に偏した隅丸の平行四辺形気味をなす。壁高は約15 cmほどであり、壁は軽く外傾し床面とは軽い丸味を持って接続する。東壁以外の各壁はほぼ凸凹もなく直線で規則的である。床は第IV層

の黄褐色シルトで構築され、起伏も見られずほぼ平坦で水平に近く、全体が踏みしめによって堅い。床面からは壁溝・土坑とも検出されておらず、よって主柱穴や貯蔵穴ともに不明である。埋土は全体が2層に分けられているが、両層とも土性はシルトで色調は黒褐色であるが、炭化物の混入や焼土の混じりなどに違いが見られる。土層の観察から自然堆積で埋没した遺構と推定される。

カマドは南壁の東隅部よりに構築されており、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などの各部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅が約1.25 m、奥行き約75 cm、高さ約15 cmほどである。各部の規模では、左側袖部が幅約40 cm、奥行き約50 cm、高さ約15 cm、右側の袖部は幅が約40 cm、奥行き約75 cm、高さ約15 cmであり、左右両袖部とも芯に河川礫を配置してその周囲を黒褐色や暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約50 cm、奥行き約90 cmほどの広さがあり、焼土は焚き口部から奥壁までの全面に広がっている。火床は床面とほぼ同位であるが、奥壁に向かって僅かに高くなっている。焚き口部には細長い河川礫が横たわっており、焚き口部の天井を構築していた材であった可能性がある。また、燃焼部の中央やや奥壁よりに河川礫を埋設した支脚がある。煙道部は壁外に約2 m延び、幅は約35 cmで最深部が検出面下約20 cmに土管状に掘られた割り貫き式である。底面は奥壁から煙出し部に向かって次第に低くなり、最深部で約40 cmほどある。煙出し部は径約40 cm×40 cmの楕円形状をなし、深さが約35 cmの土坑状である。

〔遺物〕(第186図、写真図版415・416)

埋土内からの出土を主体に土師器8点、須恵器9点の合わせて17点の遺物が出土している。

土師器(第186図、写真図版415・416)

カマドと埋土内からの出土を主体にカマドなどから8点の出土であるが、器種には坏5点、壺2点、鉢1点が含まれる。

坏(1623～1627)－5点の出土であるが、完形や全体を観察できる個体はまったく出土せず、口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、体部の外面はすべてロクロ成形痕のみを残し再調整はまったく観察されないが、1623～1626までの内面はミガキ後黒色処理の再調整があり、1627はロクロ成形痕のみで再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直立気味となる器形を示すらしい。大きさについては破片であるため明確ではない。

壺(1635・1636)－2点の出土であるが、1点は口縁部のみ、他の1点は口縁部から体部を残す破片での出土であるため、詳細に付いては不明な部分が多い。1635はロクロ使用成形された個体であり、体部外面の中位から下部はヘラケズリ調整されるが、上位から口縁部にロクロ成形痕、体部内面にロクロ回転を利用したカキメが明確に残る。底部から外傾した体部は中位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は大きく外反した後端部が角張る縁帯状をなし、上方に

挽き出されて受け口状となる器形を示す。推定される口縁部径からみて中型品と考えられる。1636は内外面にミガキ調整の施された口縁部破片であるが、詳細は不明である。

須恵器（第186図、写真図版416）

埋土内からの出土を主体に9点の出土であるが、全体の判明する個体は1点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。器種には坏7点・甕1点・蓋1点がある。

坏（1628～1634）－7点の出土であるが、そのほとんどが埋土内からの出土であるとともに、全体の判明するのは1点のみである。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面ともロクロ成形痕以外の再調整は観察されない。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が玉縁状に肥厚したりやや外反気味となったり直立気味になるなどの器形を示す。大きさは口縁部径が14.3cm、底部径は6cm、器高5.6cmであり、比率は2.38となる。

蓋（1638）－埋土内から口縁部の小破片が出土している。カエリは見られず端部が下方に大きく屈曲し、ふくみはあまり大きく無いようである。

甕（1639）－外面がヘラケズリ調整された体部の破片が1点出土している。ロクロ使用成形されたものと推定される以外の詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の様相から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

54 DIVo5住居跡

〔遺構〕（第150・151図、写真図版115）

調査範囲の西端から約224m東によったDIV区の西よりに位置し、DIVd7住居跡は北東に約23mの距離がある。DⅢI2溝跡とDIV18溝-2と重複しているが、当住居跡が古い遺構である。

東-西約3.5m～3.2m、南-北約4m～3.5mの規模を持ち、平面形は主軸が磁北に対してほぼ90度東に偏したやや不整ではあるが隅丸の長方形気味の形状を示す。壁高は最深部で約30cmほどであり、水平に対して約100度ほどで外傾し、床面とは丸味を持って接続する。西壁は小凸凹があるのみであるが、南壁と北壁は突出する部分が多く東壁も含めて全体が不規則な壁である。床は第IV層の黄褐色シルトで構築されるが、全体として小起伏があるものの、踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p4の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、貯蔵穴と言うよりも柱穴的であるが、位置なども含めて検討すると主柱穴とするには問題があることから、支柱穴であろうと推定される。埋土は全体が6層に細

分されているが、土性はいずれもシルトであり色調が黒色・黒褐色・暗褐色・暗赤褐色などに分けられ、焼土粒や炭化物粒などを混在する層が多い。自然堆積で埋没した遺構であろう。

カマドは東壁の南隅部よりと北隅部よりの2カ所に検出されているが、検出された状況を見ると、南隅部よりは袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などの各部が良好な状態で検出されたが、北隅部よりのそれは煙道部と煙出し部が検出のみであり、当初は北隅部よりに構築されたのが南隅部よりに移動したものと考えられる。南隅部よりのカマド全体の規模は幅が約90cm、奥行き約70cm、高さ約20cmほどであるが、各部の規模では左側袖部は幅が約30cm、奥行き約85cm、高さ約20cmであり、右側袖部は幅約40cm、奥行き約70cm、高さ約20cmであり、袖部の突き口部に芯として河川礫を配置した後、その周囲を黒褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約40cm、奥行き約70cmほどの広さがあり火床は床面とほぼ同位であるが、奥壁では煙道部の底面と約15cmの段差で接続している。焼土は突き口部付近に30cm×20cmの範囲に2カ所のブロックに分かれて分布している。煙道部は壁外に約90cmの長さに延びる掘り込み式であり、幅は約25cm深さ約5cmほどで、底面はほぼ平坦で水平に近い。煙出し部は径約40cm×40cmの楕円形をなし、深さ約30cmの土坑状である。北隅部寄りのカマドは袖部がまったく残存しておらず、検出された燃焼部の焼土は30cm×10cmの不整な広がりを示す。煙道部は壁外に約2m延びる掘り込み式で、幅約30cm、奥壁から約90cmの位置までは約10cm、その先は約25cmの深さであり、底面は段差があるもののほぼ水平に近い。煙出し部は径約45cm×45cmの楕円形をなし、深さが約20cmの土坑状である。なお、当住居跡には大量の炭化材が中心部に向かうような方向に残っており、当住居跡の部材が焼失によって炭化した状態で残存したものと推定される。

〔遺物〕(第186～189図、写真図版416～418・532)

埋土内と床面やカマドなどから23点の土師器と須恵器の他、鉄製品1点の合わせて24点の遺物が出土している。

土師器(第187・188図、写真図版416・417)

17点の出土であるが、器種には坏7点、高台付き坏1点、壺8点、鉢1点が含まれている。坏(1640～1643・1645～1647) - 7点の出土であるが、全体を残存するのは2点のみで、他は体部下位から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り難しは回転糸切り難し無調整、体部外面の底部よりがヘラケズリ再調整される1点(1643)の他はロクロ成形のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される4点(1640～1643)と再調整のない3点(1645～1647)に分けられる。底部から丸味をもって外傾する体部は端部が軽く外反する器形をなし、前者の大きさは定かでないが後者は口縁部径が13.6cmと13.4cm、底部径は5.4cmと5cm、器高が5.3cmと5.2cmであり、口縁部径と底部径の比率は2.68と2.51である。1645と1646の体部外面には「山万」と判読される墨書が記されている。

高台付き杯(1644) - 完形が1点出土している。坏部はロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離しであり、その後高台を貼り付けた張り付け高台である。体部の外面はロクロ成形のみで他の調整痕はまったく観察されないが、内面はミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は端部で軽く外反する器形をなす。高台部は貼り付けた後ロクロで成形し、「ハ」字状に開き踏ん張る器形を示す。口縁部径が14.8 cm、底部径が8.2 cm、器高8.2 cmの大きさがある。

壺(1651～1658) - 8点の出土であり、その中に3点の完形と口縁部から体部1点と体部から底部を残す4点の破片が含まれ、さらにロクロ不使用成形の4点(1652・1655・1657・1658)とロクロ使用成形されたその他の個体に分けられる。ロクロ不使用成形の個体は体部の内外面をハケメ調整し、口縁部は内外面ともヨコナデである。底面は平らにナダられ、底部から外傾する体部は上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は大きく外反して口縁端部はやや角張り気味をなす器形を示す。器高や口縁部径などから見て大型と言えよう。ロクロ使用成形された個体は体部の外面は、下半がヘラケズリであるが上半はロクロ成形のみかカキメ調整され、内面はヘラナデによる調整が見られ、口縁部はロクロ成形のみである。平らな底部から外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で軽く窄んだ後口縁部が外反し、端部が角張る縁帯状を示しさらに挽き出されて受け口状となる器形を示す。口縁部径や底部径などから大小関係がありそうである。

鉢(1659) - ほぼ完形となる個体1点の出土である。口縁部の形などからロクロ使用成形と推定されるが、体部外面がヘラナデ、内面がヘラナデやハケメで調整され、ベタ高台状の底部から丸味をもって大きく外傾する体部は頸部で僅かに窄み、口縁部は外方にほぼ水平に近い状態まで外外傾して端部が角張り、さらに上方に僅かに挽き出されて受け口状となる大型の器形をなす。

須恵器(第187・189図、写真図版417・418)

埋土内からの出土を主体に6点出土しているが、その中に坏3点、壺1点、壺1点、瓶1点の器種が含まれている。

坏(1648～1650) - 3点の出土であるが、完形は1点のみで他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形であり底部の切り離しは回転糸切り離しで無調整であり、体部の内外面ともロクロ成形のみを残す。器形は土師器坏のそれと同様である。大きさは口縁部径は13.8 cm、底部径が6 cm、器高は4.6 cmであり、口縁部径と底部径の比率は2.3である。

壺(1662) - 外面に並行叩き具痕、内面に並行や放射状の当て具痕を付す大壺の体部破片が1点出土している。

壺(1660) - 口縁部から肩部の上位までを残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形さ

れたと推定され、口縁部は内外面にヨコナア状のロクロ成形痕が残り、体部は外面が並行叩き具痕、内面が円形無文凸面の当て具痕がある。体部の器形は球状に近いものと推定され、頸部が大きく外反して端部は角張る縁帯状をなし、さらに挽き出されて受け口状となる。

瓶(1661) - 肩部上位から体部下位を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され肩部から上位の外面はロクロ成形痕を明瞭に残し、下位はヘラケズリ調整され、内面にロクロ成形痕を残す。

鉄製品(第186図、写真図版532)

刀子が1点出土している。

刀子(27) - 全長13cmで刃部長7.1cm、茎長5.9cmの大きさである。刃部の棟は平棟であるが、切っ先部が両刃状に丸くなり、全体が関部から切っ先に向かって次第に細くなる。関は刃部と棟部につく両関である。茎部は関部から上方に反り茎尻に向かって次第に細くなる。身幅は最大で1.1cm、身の厚さ1.5mm、茎の最大幅1cm、厚さ2mmである。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から9世紀中葉から後半頃に位置づけられるものと推定される。

59 DIVd7住居跡

[遺構](第152・153図、写真図版116)

調査範囲の西端から約247m東によったDIV区の新居よりに位置し、DIVg7住居跡は南に15mの距離がある。重複する遺構はないが、北西部が調査範囲外に延びているため、検出された部分のみを調査している。

検出された規模は東-西約2m、南-北約3.5mであり、平面形は主軸が磁北に対して約5度西偏した隅丸の方角長方形をなすものと推定される。壁高は約30cmほどであるが、現在の地表面から床面までは約85cmほどであり、壁は水平に対して大きく外傾し床面とは丸味を持って接続する。床面は第IV層の黄褐色シルトで構築されるが、起伏が見られ踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、p1~p4の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、貯蔵穴とするには規模が小さいことから、何らかの形で当住居跡に関わりを持つ支柱穴であろうと推定される。埋土は全体が8層に細分されているが、土性はすべてシルトであり色調も黒褐色を主体に黒色・黄褐色に分けられる。なお、1・2層はいわゆる基本層序に相当する土層であり、普通の場合は粗掘りで除去される。自然堆積による埋没であろう。

カマドは北壁の西隅部寄りに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が比較的良好な状態で検出されている。袖部全体は、幅が約1.1m、奥行き約85cm、高さ約30cmほどの規模であるが、各部では左側袖部は幅が約40cm、奥行き約70cm、高さ約20cmで、右側袖部が幅約35

cm、奥行き約 70 cm、高さ約 30 cm の規模であり、袖部は焚き口部の他全体に河川礫を埋設した後、周辺部に黒褐色や黄褐色などの褐色系シルトを混合させたシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約 30 cm、奥行き約 70 cm の広さがあり、燃焼部焼土は焚き口部から 50 cm × 30 cm の範囲に広がっている。火床は周辺部の床面と同位で続くが、煙道部とは奥壁で約 20 cm の段差で接続する。煙道部は壁外に約 1.6 m 延びる掘り込み式で、幅約 25 cm、深さ約 10 cm ほどで、壁の凸凹が著しくさらに底面にも小起伏があるなどやや不規則な煙道部である。煙出し部は径約 70 cm × 60 cm の楕円形をなし、深さが約 15 cm のやや不規則な土坑状を示す。

〔遺物〕(第 190～192 図、写真図版 418・419)

カマドや床面からの出土を主体の他埋土内から土師器 23 点と須恵器 5 点の合わせて 28 点が出土している。

土師器(第 190～192 図、写真図版 418・419)

23 点の出土であるが、環 13 点・壺 8 点・鉢 1 点・埴 1 点の器種が含まれている。

環(1663～1674・1676) - 13 点の出土であるが、完形や全体の判明する個体は 6 点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形で底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部外面はロクロ成形痕のみで再調整はまったく観察されない。内面はミガキ後黒色処理される 6 点(1663～1668)のほか再調整のまったくない 7 点(1669～1674・1676)に細分される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直立気味や端部が軽く外反したり直線的に外傾する器形を示し、この様相は両種とも違いが見られない。

大きさは口縁部径が 15.2 cm～14 cm、器高 6 cm～4 cm、底部径 7 cm～5.2 cm であり、口縁部径と底部径の比率は 2.8～2.07 であるが 2.5 以上の個体が主体を占め、両種間に違いは認められない。

壺(1680～1687) - 8 点の出土であるが、完形はまったく出土せず全体が判明する個体を 1 点(1686)含む他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、体部上位から口縁部の内外面はロクロ成形痕のみを残し、大型では体部中位から下位の外面はヘラケズリされ、内面はヘラナデで調整される。小型の個体は内外面全体がロクロナデのみで調整される例が主体であり、1685 では内面に指頭痕が付着することからロクロ不使用成形である可能性がある。底部から丸味をもって外傾する体部は中位や上位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は直線的に外傾した後端部が角張る縁带状をなし、さらに上方に拖き出されて受け口状となる器形をなす。なお、器形には大小関係があり、大型と中型そして小型の 3 型が出土している。

鉢(1675) - ロクロ成形された土師器環の大型的な器形を示す体部から底部を残す破片が 1 点出土している。器形が大型である以外は環の器形とまったく同様であるが、体部外面の底部

付近がヘラケズリ調整される違いが見られ、内面がロクロ成形痕以外の再調整はまったく観察されない。坏の大型品である可能性があるものの、取り敢えず鉢と分類した。

埴 (1688) - ロクロ使用成形された口縁部から体部上位を残す破片が1点出土している。内外面ともロクロ成形痕のみを残し、底部形態等は不詳であるが体部が底部から大きく外傾する様相を示しており、頸部に軽いが明瞭な段と括れを持った後口縁部が外反する。口縁部の端部は丸味を持つが上方に僅かに挽き出され受け口状的に器形を示すらしい。口縁部径は相当の大型と推定される。

須恵器 (第190・192図、写真図版419)

5点の出土であるが、器種として坏2点・高台付き坏1点・甕2点が含まれる。

坏 (1677・1678) - 2点の出土であるが、全体を残しておらず口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整は観察されず無調整である。器形は土師器のそれと同様である。

高台付き坏 (1679) - カマド内から全体が残存する1点が出土している。ロクロ使用成形され底部が回転糸切り離しされた坏に高台が付された形であり、坏部は内外面とも再調整は観察されないが、底面は高台が貼り付けられる際に指頭によって菊花状に胎土が引っ掻かれており、高台自体はロクロナデで調整される。坏部は、底部から僅かな丸味をもって外傾する体部は、口縁部付近で軽く外湾して端部が小さく外反する器形を示し、高台部はハ字状に開く器形をなす。

甕 (1689・1690) - 埋土内から体部と頸部下位から肩部にかけての破片が2点出土している。1689はロクロ成形され内外面にロクロ成形痕を残す体部破片であるが、小破片のため全体的なことは不明である。1690は外面に格子叩き具痕、内面はナデ調整された大甕の肩部破片である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴は9世紀末から10世紀初頭頃に属する遺物と近似しており、このことから当住居跡は9世紀末から10世紀初頭に位置づけられるものと推定される。

60 DIVg 7住居跡

〔遺構〕 (第154・155図、写真図版117)

調査範囲の西端から約247m東によったDIV区の西よりに位置し、DIVm 7住居跡は南に約23mの距離がある。当住居跡とDIVh 8土坑やDIVg 7溝跡が重複するものの当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約3.4m、南-北約3.5mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約180度東偏し

た隅丸の方形に近い形状をなす。壁高は最深部で約40cmほどであるが、水平に対して約105度で外傾し、床面とは丸味を持って接続する。南壁以外の壁はやや突辺気味ではあるものの、凸凹のないほぼ直線的で規則的な壁であるが、北壁は軽く突辺となる状況を示す。床は第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされ、床面は僅かな起伏が見られるもののほぼ水平に近く踏みしめによって全面が堅い。床面からは壁溝・柱穴や貯蔵穴といった土坑類はまったく検出されていない。埋土は全体が13層に細分されているが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色を主体に褐色や暗褐色・極暗褐色に細分されている。全体として明黄褐色土粒の混入が見られる他、炭化物粒や焼土の混在も観察される。自然埋没した遺構であろう。

カマドは南壁の東隅部よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で検出されている。全体規模は幅約1.3m、奥行き約50cm、高さ約20cmであるが、各部では左側袖部は幅が約50cm、奥行き約50cm、高さ約20cmほどで、右側袖部は幅約25cm、奥行き約60cm、高さ約20cmであり、袖部は一部に河川礫が埋設されて芯とされるものの、左側は地山削り出しであるが、右側は黒褐色や暗褐色などのシルトを積み上げて構築されている。燃焼部は幅が約90cm～40cm、奥行き約90cmほどの広さがあり、燃焼部の焼土は焼き口部の手前から奥壁付近までの全面に約10cmの層厚で広がっている。火床は床面と同位で焼き、煙道部の底面とも同位で接続する。煙道部は壁外に約1.7mほど延びる掘り込み式で、幅が約35cm、深さ約40cmの規模であるが、断面で見ると壁の内傾する部分が多いことから本来は割り貫き式の煙道であった可能性が高い。煙出し部は径が約35cm×35cmの楕円形をなし、深さが約45cmの土坑状であり、煙道部の底面とは約15cmの段差で接続する。

〔遺物〕(第193・194図、写真図版420)

埋土内からの出土を主体にカマドや床面などから土師器12点と須恵器9点の合わせて21点の遺物が出土している。

土師器(第193図、写真図版420)

カマドや床面のほか埋土内から12点の出土であるが、器種として坏1点、壺7点、鉢4点があり、坏が少なく壺類が多い特徴がある。

坏(1691)―埋土内から口縁部の破片が1点出土している。ロクロ使用成形されているが、内外面が丹念なミガキ調整され、内面が黒色処理されている。小破片のため詳細は定かでないが、体部が底部から軽い丸味をもって外傾する器形をなすらしい。

壺(1699～1705)―埋土内やカマドから7点の出土であるが、全体が明らかな個体は1点のみで、他は体部下位から底部を残す破片を主体に口縁部から体部の破片を含んでいる。すべてロクロ使用成形された個体のみで、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部の外面はヘラナデ・ヘラケズリ・ハケメなど、内面はヘラナデやハケメで調整される。器形は体部が丸味をもって

外傾した後頭部で窄み、口縁部が外反する。1699は口縁部から体部を残すが、破片から推定される器形では壺というよりも鉢となる可能性が高い。さらに、底部径から器形に大小関係があるらしい。

鉢(1706～1709) - カマドから4点の出土であるが、ロクロ使用成形された1707と1709そしてロクロ不使用成形された1706と1708の2種類に細分され、1706は器表に輪積み痕を明瞭に残している。1706は全体が判明する破片であるが、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形された2点は底部を欠失するが、体部が底部から丸味を持って大きく外傾して頭部で窄み、口縁部は大きく外反する(1707)か直線的に僅かに外傾する器形を示すらしい。体部の器表は1707は並行タタキの後ヘラケズリ、1709はヘラミガキが僅かに観察される他は前者同様ヘラケズリで調整される。内面は両者ともミガキ調整であるが、1707はさらに黒色処理されている。ロクロ不使用成形の2点は、1点が体部中位から底部のみを残存するため全体的なことは定かでないが、体部の器表がヘラケズリ、同内面がヘラナデ調整され、体部が底部から僅かな丸味を持って大きく外傾する器形をなすらしい。別の個体はほぼ完形に近く、比較的径の大きい底部から丸味をもって外傾した体部は、中位から上位がほぼ直立気味となる器形を示す。体部の内外面ともハケメで調整され、黒色処理などの調整はない。大小関係があるものと推定されるが、破片資料が主体であるため断定はできないものの鉢としては大型の製品と中型の製品が推定される。

須恵器(第193・194図、写真図版420)

埋土内から9点出土しているが、器種として坏6点、高台付き坏1点、壺1点、壺1点が含まれる。

坏(1692～1697) - 6点の出土であるが、完形は含まれずいずれも口縁部から体部や体部から底部までを残存する破片での出土の他、口縁部から底部までを残し全体が判明する個体が2点ある。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも無調整である。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が軽く外反したり直線的に外傾する器形をなすものの、他と比較して器高が低く浅い器形が多い。大きさは口縁部径が15.6cm～13.4cm、底部径6.6cm、器高3.3cmであり、比率は2.03である。

高台付き坏(1698) - 底部から高台の部分を残す破片が埋土から1点出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離された後無調整で高台が付された貼り付け高台である。坏部の身部の状況は残存しないので不明であるが、高台部は壺付け部が角張り「ハ」字状に踏ん張る。

壺(1710) - ロクロ使用成形されたと推定される体部の破片であるが、内外面にヘラケズリやヘラナデによる調整痕が観察される。

壺(1711) - 一壺としたが状況から判断すると類である可能性のある肩部付近から頭部下端付

近の破片である。ロクロ使用成形され外面が並行タタキの後ロクロ調整痕、内面にロクロ成形痕を持つ。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀前半～中葉からに位置づけられるものと推定される。

5) DIVm7住居跡

〔遺構〕(第156・157図、写真図版118)

調査範囲の西端から約253m東によったDIV区の西よりに位置し、DIVd8住居跡は北に約32mの距離がある。DIVl8土壌墓やDIVn7土坑、DIVm7溝・DIVl8溝-1などの遺構と重複しているが、土壌墓は当住居跡より古い遺構であるが、他遺構はいずれも新しい遺構である。東-西約3.2m、南-北約3.2mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約174度東に偏した隅丸気味の方形をなす。壁高は約42cm～34cmであり、水平に対して約100度前後で外傾する。壁には若干凸凹が見られるものの総じてほぼ直線であることから規則的な壁と理解することができよう。床は第IV層の黄褐色シルトで構築されるが、北壁よりが貼り床されて床面とされており、床面には僅かな起伏がありあまり堅い締まりは観察されない。壁溝は検出されていないが、壁際の床面や壁沿いの壁外からp1～p6までの6基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、床面の壁際に位置するp1～p3は形状が不整であるとともに規模からみても、貯蔵穴や支柱穴とは考えられないことから、住居跡を構築した際の工具痕である可能性が推定される。p4～p6は形状は柱穴的であるが、位置からみると断定できる状況ではない。埋土は全体が9層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色で全体的に他のシルトが混入する場合が多い。また、3～5層は重複する土坑の埋土である。自然堆積による埋没であろう。

カマドは南壁の西側部よりに構築され、袖部・煙道部・煙出し部の各部分が良好な状態で検出されている。カマド全体の規模は、幅が約83cm、奥行きが約64cm、高さが約30cmであり、各部の規模は左側袖部が幅約28cm、奥行き約60cm、高さ約28cmで、右側袖部は幅が約34cm、奥行き約64cm、高さ約30cmであり、袖部は焚き口部のほか、内壁に河川礫を配置してその周囲を褐色や暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約55cm、奥行きが約66cmの広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部付近に径約40cm×32cmの範囲に層厚が約5cmで広がる。また、燃焼部のほぼ中央やや右寄りに河川礫を埋設しさらにその上に土師器の小型壺を被せた支脚がある。火床は周囲の床面と同位であり、煙道部とは奥壁で段差を持って接続する。煙道部は壁外に約1.3m延びるが、全体が検出面下約30cmに径約25cmの土管状に掘られた割り貫き式である。底面は奥壁から煙出し部に向かって次第に低くなり、煙出し部の底面よ

りも深く掘られている。煙出し部は径約 70 cm × 70 cm の楕円形をなし、深さが約 40 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 194 図、写真図版 420・421・532)

埋土内からの出土を主体に土師器 8 点、須恵器 6 点の他、鉄滓が 1 点出土している。

土師器(第 194 図、写真図版 420・421)

床面と埋土内から 8 点の出土であるが、器種として坏 2 点と甕 6 点が含まれている。

坏(1712・1713) - 2 点の出土であるが、完形や全体を残す個体はなく、いずれも口縁部から体部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され外面にロクロ成形痕が明瞭に残され、内面はミガキ後黒色処理されている。

甕(1715～1720) - 埋土内からの出土を主体に 6 点の出土であるが、完形の個体はまったく含まず、口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。1715 はロクロ不使用成形であるが、他はロクロ使用成形され小型品の底部は回転糸切り離しされている。1715 は口縁部から体部上位を残す小破片であるため詳細は不明であるが、口縁部がヨコナデやハケメ、体部外面はハケメで器面調整され、内面はハケメやヘラナデで調整される。器形は頸部で窄んだ後口縁部が外反する。ロクロ使用成形された個体は器面内外にロクロ成形痕を明瞭に残し、その他の再調整は観察されない。底部から丸味をもって外傾する体部は頸部で窄み、口縁部は外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状を示す。器形に大小があり、中型と小型がある。

須恵器(第 194 図、写真図版 421)

埋土内から坏 1 点、甕 3 点、壺 1 点、瓶 1 点の 6 点の出土である。

坏(1714) - ロクロ使用成形され底部が回転糸切り離し無調整の底部小破片が 1 点出土しているが、小破片であるため詳細は不明である。

甕(1723～1725) - 3 点の出土であるが、いずれも体部の小破片である。1723 と 1724 はロクロ使用成形され内外面にヘラナデやヘラケズリの調整痕が観察される。1725 は内外面に並行叩き具痕と当て具痕を付すもののロクロ使用成形であるかは不明である。前者 2 点は一般的な甕、後者 1 点は大甕と推定される。

壺(1721) - ロクロ使用成形された肩部から頸部下端を残す破片が 1 点出土している。一部にヘラナデらしき調整痕を付すが内外面にロクロ成形痕を明瞭に残す。

瓶(1722) - ロクロ使用成形された肩部の破片が 1 点出土している。

鉄製品(第 194 図、写真図版 532)

土坑内から鉄滓か鉄塊のいずれかと推定される遺物が 1 点出土している。

鉄滓(23) - 全長 3.3 cm、幅 2 cm の大きさがある鉄滓か鉄塊と推定される遺物である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀中葉～後半頃に位置づけられるものと推定される。

69 DIVd 8 住居跡

〔遺構〕(第158・159図、写真図版119)

調査範囲の西端から約254m東によったDIV区の西寄りに位置し、DIVo 8住居跡は南に約41mの距離がある。DIIp 22溝跡と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約6m、南-北約6.2mの規模を持ち、平面形は主軸が磁北に対して約190度東に偏した隅丸で北壁が突辺となる方形である。壁高は約30cmほどであるが、水平に対して約100度くらいで外傾し、壁は必ずしも直線ではなく不規則である。床は第IV層の黄褐色シルトと一部は第V層の黄褐色砂質シルトで構築され、北壁沿いを主体に黄褐色砂質シルトで構築される部分が暗褐色のシルトで貼り床して床面としているが、全体的に緩い起伏が見られる物の全体が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p10の10基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や平面形からp2・p5・p6の3基は貯蔵穴的ではあるが、位置が不自然であることは否めない。他の土坑は規模・形状とも柱穴的であるが、位置が不規則であることにより、主柱穴とは考えられず支柱穴であろうと推定される。埋土は全体が21層に細分されているが、土性はいずれも砂質のシルトかシルトが堆積している。色調は黒褐色を主体に褐色や極暗褐色・暗赤褐色等に分けられ、いずれの層にも明褐色シルト流が多少とも混入し、さらに焼土や炭化物なども混在している。自然堆積で埋没したものであろう。土層の観察により自然堆積で埋没した遺構と推定される。

カマドは南壁の北隅部よりに構築され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。カマド全体の規模は幅が約1.4m、奥行き約90cm、高さ約20cmであるが、各部分は左側袖部が幅が約40cm、奥行き約90cm、高さ約20cmであり、右側袖部は幅約35cm、奥行き約1m、高さ約10cmの規模であり、袖部は褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約70cm、奥行き約90cmの広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部付近から75cm×65cmの範囲に約5cmの厚さで堆積する。火床は床面とほぼ同位であり、煙道部の底面ともほぼ同位で接続する。煙道部は壁外に約1.5mの長さで延びる掘り込み式で、幅が約50cm、深さが約50cmであるが、煙道部の内壁は河川礫を埋設して構築されていることから、内側では幅が約18cm、深さ約28cmの規模であり天井も河川礫を乗せて蓋をしており、実際の横断面は方形である。底面はほぼ平坦であるが、煙出し部に向かって軽く低くなり、煙道部の底面とは段差で接続する。煙出し部は径約70cm×60cmの楕円形状をなし深さが約50cmの土坑状である。

〔遺物〕(第195~198図、写真図版421~423・536)

床面やカマド・土坑内などから土師器25点、須恵器17点、鉄製品2点など多量の遺物が出

土している。

土師器（第195～197図、写真図版421～422）

遺構に直接伴う形で25点の出土であるが、器種として坏4点、甕16点、壺4点、埴1点が含まれている。

坏（1726～1729）－4点の出土であるが、全体が判明するのは1点のみで他は口縁部から体部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。いずれも体部の外面はロクロ成形痕のみで再調整は観察されないが、内面はミガキ後黒色処理される2点（1726・1727）と、ロクロ成形痕のみでまったく再処理のない2点（1728・1729）に分けられる。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が軽く外反する器形を示す。大きさは口縁部径11.5cm、底部径5.5cmであり、比率は2.07である。

甕（1741～1756）－遺構に直接伴う形で16点出土しているが、完形の個体は1点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。出土した16点の内1点（1747）はロクロ使用成形の可能性があるものの、残る15点はいずれもロクロ不使用成形された個体である。主体を占めるロクロ不使用の個体はいずれも輪襷み成形され口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラナデを主体にヘラケズリ・一部ヘラミガキなど、内面はヘラナデを主体にヘラミガキなどで調整され、奈良時代土師器の器面調整技法がそのまま継続して使用されている。ロクロ使用成形と推定した1747の器面調整も基本的にはロクロ不使用成形のそれと同様である。比較的径の大きい底部から丸味をもって外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は直線的に外傾するが、端部は軽く外反したり直立気味に立ち上がり受け口状となったり、下方に垂れ下がったりする器形をなす。器形には大小関係がある様相を示すが、破片であるため断定はできないが大・中・小の器形が含まれるようである。

壺（1757・1758・1760・1761）－4点が埋土内や遺構に直接伴って出土しているが、完形は1点のみで他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ不使用成形され、口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコナデかヘラナデで調整され、体部外面はミガキ・ヘラケズリ、ハケメなどで調整され、個体によって違いがある。同内面はヘラナデでいずれも共通している。底部から外傾する体部は最大径を中位や上位をもって頸部で窄み、体部が球形に近い器形をなし、口縁部は直立気味になったり外反したり・外傾気味となる。大型品の部類に入るものと推定される。

埴（1759）－口縁部から体部上位を残す破片が1点出土している。ロクロ不使用成形され、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はナデで調整される。体部下位から底部を欠失しているため全体的な器形は不明であるが、底部から体部が大きく外傾し、口縁部が外反して全体が洗面器に近い器形になるものと推定される。

須恵器（第195・197図、写真図版421・423）

埋土内から出土を主体に 17 点の出土であるが、器種として坏 10 点、高台付き坏 1 点、壺 4 点、瓶 2 点が含まれている。

坏 (1730 ~ 1737・1739・1740) - 10 点の出土であるが、全体の判明するのは 1 点のみで、他は口縁部から体部か底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面も無調整である。器形は土師器坏のそれと同じである。大きさは口縁部径が 12.6 cm、底部径 5.6 cm で、比率は 2.25 である。

高台付き坏 (1738) - 床面から体部下端から高台部を残す小破片が 1 点出土している。ロクロ使用成形されている以外は、小破片のため詳細は不明である。

壺 (1763・1765 ~ 1767) - 埋土内から体部の破片が 6 点出土している。外面には並行叩き具痕、内面に同心円や並行当て具痕、または無文の大壺の破片である。

瓶 (1762・1764) - 肩部付近と体部の一部を残す破片が埋土内から 2 点出土している。いずれもロクロ使用成形され、体部がヘラケズリ、頸部と内面がロクロ成形痕を残す。

鉄製品 (第 198 図、写真図版 536)

床面から鎌 1 点、刀子 1 点の 2 点が出土している。

鎌 (82) - 先端部を欠失するが残存全長 18.3 cm、最大幅 3.3 cm の大きさがあり、右端に基部がつき刃部が上方に大きく湾曲する。

刀子 (85) - 刃部と茎部を欠失した残存全長が 5.7 cm、最大幅 9 mm の大きさがある。棟は平棟である。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から 9 世紀中葉から後葉に位置づけられるものと推定される。

59 DIVo 8 住居跡

(遺構) (第 160・161 図、写真図版 120)

調査範囲の西端から約 256 m 東によった DIV 区の西よりに位置し、CIVy 9 住居跡とは北に約 58 m の距離がある。DIVq 8 溝跡、DIVp 8 土坑重複しているが、いずれの遺構も当住居跡より新しい遺構である。

東-西約 6 m、南-西約 5.7 m の規模があり、平面形は主軸方向が磁北に対して約 100 度東に偏した長方形気味の形状をなす。壁高は約 20 cm ほどで、水平に対して約 100 度で外傾する。西壁はほぼ直線的であるものの、南壁と北壁には若干の凸凹が見られるのみであるが東壁は凸凹がやや著しく不規則である。床は第 IV 層相当の黄褐色砂質シルトで構築されるが、全面に黄褐色シルトを貼り床して床面としており、床面には小起伏があるもののほぼ水平に近い。壁溝は検出されていないが、p1 ~ p5 の 5 基の土坑が検出されている。p1 ~ p3 は形状や規模、位

置などから主柱穴を構成するものと推定されるが、p4とp5は位置と規模や形状から貯蔵穴になるものと考えられる。埋土は全体が5層に細分されているが、土性はシルトを主体に砂質のシルトで構成されるが、色調は黒褐色を主体に褐色や暗褐色などが見られる。炭化物や炭土の他、黄褐色シルト粒などを混入する土層が多い。自然堆積で埋没した遺構であろう。

カマドは東壁の北隅部よりに構築され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などの各部が良好な状態で検出されている。カマド全体は幅が約1.3m、奥行き約90cm、高さ約25cmほどの規模があり、袖部は内壁に河川礫を埋設した後暗褐色や黄褐色などのシルトを積み上げて構築している。各部の規模は左側袖部が幅約50cm、奥行き約50cm、高さ約20cmであるが、右側袖部は幅約40cm、奥行き約1m、高さ約30cmの規模である。燃焼部は幅が約40cm、奥行き約80cmほどの広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部から40cm×40cmの円形に層厚約5cmで広がっている。火床は周辺部の床面より低く掘り下げられ奥壁で煙道部と段差で接続している。煙道部は壁外に約1.5m延びる掘り込み式で、幅は約20cm、深さ約10cm前後であり、底面にはやや起伏が見られ奥壁付近から煙出し部に向かって次第に高くなっている。煙出し部は径約65cm×60cmの楕円形をなし、深さが約20cmの土坑状である。

〔遺物〕(第199～202図、写真図版423～425)

床面やカマドなど遺構に直接伴う形での出土を主体に埋土内から土師器37点と須恵器18点の合わせて55点が出土している。

土師器(第199～201図、写真図版423・424)

床面やカマド・土坑内からの出土を主体に埋土内などから37点の出土である。器種としては坏17点、高台付き坏2点、壺13点、鉢5点が含まれる。

坏(1768～1784)一土坑内からの出土を主体に17点の出土であるが、完形や全体が判明するのは3点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部の破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面はすべて無調整であるが、内面はミガキ後黒色処理される13点(1768～1780)とまったく再調整のない4点(1781～1784)に細分される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直線的に外傾したりやや内湾気味となったり、軽く外反する器形を示し、この器形は両者とも大差がない。大きさは口縁部径15.8cm～13.6cm、底部径7.4cm～6.4cmで、比率は2.25～2.05である。

高台付き坏(1794・1795)一埋土内とカマド付近から高台部が剥落した体部下位から底部を残す破片が2点出土している。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、その後高台が付された貼り付け高台である。内面がミガキ後黒色処理される。

壺(1796～1808)一遺構に直接伴って13点の出土であるが、完形や全体が判明する個体はなく、すべて口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。1796はロクロ不使用成形であるが、他はいずれもロクロ使用成形されている。1796は口縁部の内外面がヨコナデ、

体部外面がヘラナデ、同内面はヘラナデやハケメなどで器面調整される。ロクロ使用成形の個体は体部の外面が並行タタキ、ヘラケズリ、ヘラナデなどで調整される例が多いものの、ロクロ成形痕のみで再調整のない個体も多い。底部から丸味をもって外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で軽く窄み、口縁部は強く外反して端部が角張る縁帯状となり、さらに上方に挽き出されて受け口状となる器形をなし、ロクロ不使用の個体も大同小異の器形である。

鉢(1809～1813) - カマド付近から5点の出土であるが、1点は完形で、他は口縁部から体部を残す破片での出土である。1809・1910・1812はいずれもロクロ使用成形され内外面ともすべてロクロ成形痕のみであるが、1813はロクロ使用成形で外面はロクロ成形痕のみで、内面はミガキ後黒色処理される違いがある。器形は壺の器高を低くした形と同様である。大きさには大小がある。

須恵器(第199・201・202図、写真図版423～425)

埋土内からの出土を主体に18点の出土であるが、そのなかに器種として坏9点、壺6点、瓶3点が含まれている。

坏(1785～1793) - 埋土内から出土が主体であるものの9点出土しているが、完形や全体が判明する個体はまったく含まず、口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整はない。破片での出土であるため全体的な器形は不明であるが、土師器坏の器形と大同小異であろうと推定される。

壺(1815～1820) - 6点の出土であるが、1815は西壁際床面から出土した完形の大壺であり、他は埋土内から出土した大壺の体部破片である。1815はロクロ使用成形されたと推定されるが、口縁部が内外面ともヨコナデ調整され、器表に並行叩き具痕、内面に青海波文当て具痕が付されている。丸底の底部から外傾する体部は中位のやや上に最大径をもって頸部で大きく窄み、口縁部は強く外反したのち端部が下方に挽き出されて角張る縁帯状をなす。大きさは口縁部径が36.6cm、体部最大径61.0cm、器高62.2cmである。その他の破片は外面に並行叩き具痕、内面に並行や放射状、円形無文の当て具痕が付される体部の破片である。

瓶(1814・1821・1822) - 埋土内から3点の出土であり、その中の1814口縁部から頸部までを欠失するが、体部から底部までは完存し、他は肩部の破片である。ロクロ使用成形で肩部から下位の体部外面はヘラケズリ調整され、肩部から上位はロクロ成形痕のみで「メ」字の窯印しが付されている。底部から丸味をもって外傾する体部は球形に近い形状を示す。他の2点もほぼ同様な器形をなすものと推定される。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期を特定するのは困難であるが、出土した土師器や須恵器の特徴から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

跡 CIVy9 住居跡

〔遺構〕(第 162・163 図、写真図版 121)

調査範囲の西端から約 259 m 東によった CIV 区の西よりに位置し、DIVc9 住居跡は南に約 3 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出されている。

南東-北西約 3.9 m、南西-北東約 4.2 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 115 度東に偏した長方形気味の形状をなす。壁高は約 30 cm ほどで水平に対して約 110 度で外傾し、壁には若干の凸凹が見られるものの総じて規則的な壁と言えよう。床は第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされるが、幾分小起伏があるものの全体が踏みしめによって堅い。壁高は検出されていないが、床面から p1~p3 の 3 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、いずれも隅部に位置することや規模が柱穴としては大であるなど、柱穴とするには疑問があり、一部は当住居跡を構築する際の掘方である可能性が考えられる。埋土は全体が 10 層に細分されるが、土性はシルトを主体に砂質シルトであり、色調は黒褐色・暗褐色・褐色に分けられ、炭化物や焼土・黄褐色シルト粒などを混入する層が多い。堆積状況の観察から自然堆積で埋没した遺構と推定される。

カマドは東壁の南隅部よりに設置され、袖部、燃焼部、煙道部、煙出し部の各々が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は、幅が約 1.1 m、奥行き約 70 cm、高さ約 20 cm である。各部の規模では、左側袖部は幅約 20 cm、奥行き約 70 cm、高さ約 20 cm で、右側袖部は刃 40 cm、奥行き約 50 cm、高さ約 20 cm であり、袖部は全体に芯として河川礫を埋設した後その周囲を暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は 50 cm × 50 cm の広さがあり、焼土は焚き口部付近から奥壁までのほぼ全体に約 4 cm の層厚で堆積する。火床は周囲の床面とほぼ同位であり、奥壁部分で若干高くなって煙道部と接続する。煙道部は長さ約 1.45 m、幅約 30 cm の掘り込み式であり、底面ほぼ平坦で水平に近い。煙出し部は深さが煙道部のそれと同じで、幅が若干広くなる違いがあるのみである。

〔遺物〕(第 203・204 図、写真図版 425・426・534)

埋土内からの出土を主体に土師器 15 点、須恵器 12 点と鉄製品が 1 点出土している。

土師器 (第 203・204 図、写真図版 425・426)

埋土内からの出土を主体に 15 点の出土であるが、器種として坏 4 点、甕 10 点、鉢 1 点が含まれている。

坏 (1823~1826) - 4 点の出土であるが、完形や全体の判明する個体は出土せず、すべて口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部外面のはまったく観察されないが、内面は再調整のない 2 点 (1825・1826) とミガキ後黒色処理される 2 点 (1823・1824) に分けられる。破片のため全体形は不明であるが、体部か底部から軽い丸味をもって外傾する器形を示すと推

定される。

壺 (1836 ~ 1845) - 埋土内から 10 点の出土であるが、完形はなくすべて口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され口縁部から体部までの内外面ともロクロ成形痕のみを残し、再調整のまったくない個体が多いものの、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデやハケメ調整される例もある。底部から外傾する体部の中位か上位に最大径を持ち、口縁部が径部から大きく外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となる器形をなすと推定される。器形には大小関係があり、大・中・小型が出土している。

鉢 (1846) - 埋土内から口縁部から体部を残す破片が 1 点出土している。ロクロ使用成形され、体部の外面はミガキ調整され、内面はミガキ後黒色処理される。器形は壺のそれと大同小異である。

須恵器 (第 203・204 図、写真図版 425・426)

埋土内からの出土を主体に 12 点の出土であり、器種には坏 9 点と壺 3 点がある。

坏 (1827 ~ 1835) - 9 点の出土であるが、ほとんどは埋土内からの出土である。完形はなく口縁部から底部までを残す 2 個体以外は、口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が外反したり、内湾気味となって直立するなどの器形を示す。大きさは口縁部径 14.6 cm ~ 12 cm、底部径 6.6 cm ~ 3 cm であり、比率は 4.0 ~ 2.21 である。

壺 (1847 ~ 1849) - 埋土内から体部 2 点と頸部 1 点の合わせて 3 点の破片が出土している。体部破片は器表に並行叩き具痕やヘラケズリ痕、内面にナデ痕を付し、頸部の破片は内外面にヨコナデかロクロ回転痕が残存する。1848・1849 は大壺であるが、1847 は一般的な壺である。

鉄製品 (第 204 図、写真図版 534)

埋土内から鉄製の環が 1 点出土している。

環 (49) - 針金状の丸棒を円形に成形した環と推定されるが、現状ではつなぎ目が離れ、不整な楕円形である。原型の大きさは不明であるが、現状では長径 7.2 cm、短径 5.0 cm である。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から 9 世紀末から 10 世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

6) DIVc 9 住居跡

(遺構) (第 164 ~ 166 図、写真図版 122)

調査範囲の西端から約 262 m 東によった DIV 区の西よりに位置し、DIVn 9 住居跡は南に約

41 mの距離がある。当住居跡のほぼ中央をDⅢP 22 溝跡が重複しており、新旧関係は当遺構の方が古いことを確認している。

東—西約 5.5 cm、南—北約 5.5 cmの規模があり、平面形は主軸がほぼ磁北を指す正方形に近い方形をなす。壁高は約 25 cm～20 cmであり、床面とは僅かな丸味をもって接続する。壁には若干の凸凹は見られるもののほぼ直線的であり、規則的な壁と言えよう。床は段丘礫層上部のやや粘性のある砂質シルトで構築されており、貼り床されることなくそのまま床面としている。床面には軽い僅かな起伏があるものの、総じて平坦でほぼ水平に近く、全体が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面から p1～p14 までの 14 基の土坑が検出されている。規模などは別表に記載したが、規模や位置などから考えて p6・p2・p11・p13 の 4 基が当住居跡に伴う柱穴となるものと推定される。同様に、p8・p2 のとなり p11・p4 も柱穴を構成すると考えられることから、後述するようにカマドも 2 基構築されることから、一度建て替えられているものと推定することができる。埋土は全体が 9 層に細分されているが、土性はいずれもシルトないしは砂質のシルトであり、色調は黒褐色を主体に極暗褐色や暗赤褐色に分けられる。全体として若干粘性のある層が多く、炭化物や地山の明黄褐色土シルトの混入が多く観察される。自然堆積で埋没した遺構と推定される。

南壁の東隅部寄りと西隅部寄りの 2 ケ所にカマドが設置されているが、袖部が残存しないなどの残存状態から東隅部寄りに検出されたカマドが新しいと考えられる。新カマドは全体が幅約 90 cm、奥行き 85 cmの規模であり、さらに壁外に 1.6 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模は右側袖部は幅が約 20 cm、奥行きは約 80 cm、高さ約 15 cm、左側は幅約 30 cm、奥行き 70 cm、高さ約 15 cmの規模があり、袖部は床面の上面に暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約 30 cm前後で奥行き約 65 cmほどの広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部の手前から中央部にかけて 35 cm×30 cmの略楕円形状に広がり、層厚約 4 cmで堆積する。火床は床面と同位で焼き、奥壁で煙道部と約 15 cmの段差で接続している。煙道部は幅約 30 cm～20 cm、深さ約 10 cmであり、底面は平坦であるが、煙出し部に向かって若干低くなっている。検出の状況などから掘り込み式の煙道部と言えよう。煙出し部は径約 32 cm×32 cmの略円形をなし、深さが約 28 cmの土坑状である。古いカマドは袖部は検出されず、燃焼部の焼土と煙道部・煙出し部のみが検出されており、規模は不明である。燃焼部の焼土はカマド前の床面に貼り付く形で長軸 1.8 m×単軸 60 cmの壁に並行する長楕円形状に約 4 cmの厚さで広がる。この焼土範囲がすべて燃焼部に直接伴うとは理解できないことから、燃焼部の焼土が拡散して床面に貼り付いたものと推定される。火床は周囲の床面と同位であり、煙道部とは奥壁で緩やかな傾斜をもって約 15 cmの段差で接続する。煙道部は幅約 40 cm、深さ約 15 cmであり、底面は平坦で水平に近く、煙出し部は径約 50 cm×40 cmの楕円形で深さが約 40 cmの円筒状をなす。

〔遺物〕(第 205～206 図、写真図版 426・427・536)

埋土内や床面・土坑内などから土師器 17 点、須恵器 14 点のほか鉄製品 2 点の合わせて 33 点が出土している。

土師器 (第 205・206 図、写真図版 426・427)

床面や土坑内からの出土を主体に坏 6 点、壺 10 点、壺 1 点の合わせて 17 点が出土している。坏 (1850～1855) - 6 点の出土であるが、完形はないが全体を残す個体 1 点の他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面は下端の一部をヘラケズリ調整する 1 点 (1552) 以外はいずれも無調整であるが、内面はミガキ後黒色処理される 5 点 (1850～1854) と無調整の 1 点 (1855) がある。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部は直線的に外傾するか内湾気味に直立する器形を示す。大きさは口縁部径 15.0 cm、底部径 7.0 cm で、比率は 2.14 である。

壺 (1865～1867・1869～1875) - 遺構に直接共伴する形で 10 点の出土であるが、完形や全体の判明する個体はなく、いずれも口縁部から体部か体部の破片での出土である。1865 と 1873 の 2 点はロクロ不使用成形であるが、その他の 8 点はいずれもロクロ使用成形である。前者は口縁部が内外面ヨコナデ、体部は外面ヘラナデと内面ハケメで調整される。後者では外面の体部上位はロクロナデ痕のみで、内面はロクロ成形痕のみかヘラナデで調整されている。底部から丸味をもって外傾する体部は中位か上位で最大径をもって頸部でわずかに窄み、口縁部は外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となる器形が多い。器形には大小関係があり、大・中・小型が出土している。

壺 (1868) - 埋土内から口縁部破片が 1 点出土している。小破片であるため全体的なことは定かでないが、外面に並行叩き具痕があり、その正面と内面にヨコナデ痕を持ち、頸部の窄みと推定される肩部の張りから壺と推定された。

須恵器 (第 205・206 図、写真図版 426・427)

埋土内からの出土を主体に坏 9 点、壺 4 点、壺 1 点の合わせて 14 点の出土である。

坏 (1856～1864) - 埋土内から 9 点の出土であるが、完形はなく口縁部から底部を残す個体 1 点以外は口縁部から体部か底部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は端部が外反したり直線的に外傾する器形をなす。大きさは口縁部径 14.2 cm、底部径 5.2 cm で比率は 2.73 である。

壺 (1877～1880) - 埋土内から体部下位から底部を残す個体と体部の破片が 4 点出土している。1877 は体部の下位から底部を残すロクロ使用成形された個体であり、外面はヘラケズリ、内面はカキメによる調整痕がある。その他は 1879 は内外面に並行叩き具痕と当て具痕を付し、他は内外面ともヘラケズリやヘラナデの調整痕を持つ。

壺 (1876) - 体部下位から頸部を残す個体である。ロクロ使用成形され、体部外面には並行

叩き具痕の上面にカキメが付されさらに体部の下位はヘラケズリ調整される。内面はカキメ調整の他ヘラナデ調整される。底部から外傾し肩部に最大径を持ち、頸部で準んだ後頸部は外傾する器形を示すらしい。大きさは定かではないが肩部径が32cmである。

鉄製品 (第206図、写真図版536)

カマド内と床面の土坑内から鉄1点と鍔金具が1点の合わせて2点出土している。

鍔 (80) - 残存全長11cm、最大幅2.3cmの大きさがあり、全体が軽く湾曲し先端部と基部の一部を欠損している。

鍔金具 (81) - 最大径が4.3cm、最小径2cm、横幅1.4cmの大きさがあり、全体が楕円形をなす。全体が平鉄を折り曲げて楕円形状に加工しており、鞘鍔か基部鍔金具である可能性が高い。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

62 DIVn 9 住居跡

〔遺構〕 (第167図、写真図版123)

調査範囲の西端から東に約258m寄ったDIV区の西寄りに位置し、DIV 9住居跡は南に約35mの距離がある。煙出し部がDIVn 10土坑-2と重複する他、DIV 8 獨立柱建物跡とも重複しており、新旧関係は当住居跡がいずれの遺構より古いことが確認されている。

東-西約2.3m、南-北約2.3mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約95度東に偏した若干歪んだ台形状の方形を示す。壁高は約25cmほどであり、壁と床は僅かな丸味をもって接続する。南東隅部の壁は、床面付近が外方に抉られるように張り出すものの全体としては大きな凸凹もなく大略直線的で規則的な壁と言えよう。床面は基本層序第IV層野褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされている。床面は起伏や凸凹もないほぼ平坦で水平に近く、全面が踏みしめによって堅い。壁溝の検出はないが、北東隅部の床面からp1の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模と位置から当住居跡に伴う貯蔵穴である可能性が高い。埋土はほとんどが1層の黒褐色シルトで占められ、その下位に黄褐色や暗褐色・褐色などのシルトが堆積する。どの層にも色調の異なるシルトが混在する特徴が見られるとともに、東側からの流入によって堆積埋没した状況を示す。

カマドは東壁の南隅部寄りに設置され袖部、燃焼部、煙道部が良好な状態で検出されているが、煙出し部は既述のように重複する遺構によって掘削されており、残存していない。カマド全体の規模は、袖部が幅約80cm、奥行き約55cmであり、さらに壁外に約残存1.1m延びる煙道部が付属する。袖部の規模は、左側が幅約15cm、奥行き約50cm、高さ約15cm、右側が幅約20cm、奥行き約45cm、高さ約15cmで、褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部の幅は

約50cm、奥行き約40cmの広さがあり、焼土は焚き口部の手前から奥壁付近までの50cm×25cmの不整な楕円形状の範囲に層厚約5cmで広がっている。火床は周囲の床面と同位で続き、奥壁で僅かな段差で煙道部と接続する。煙道部は幅約30cm、深さ約15cmほどであり、底面には焼起伏はあるものの総じて平坦ではあるが、中央部がわずかに高くして燃焼部と煙出し部の両方向に低くなっている。煙出し部の状況は不明である。

〔遺物〕(第207図、写真図版427・428)

床面からの出土を主体に土師器16点と須恵器4点の合わせて20点の出土である。

土師器(第207図、写真図版427・428)

16点の出土であるが、器種として坏13点、高台付き坏1点、壺2点が含まれる。

坏(1881～1891・1893・1894) - 13点の出土であるが、完形や全体が判明するのは2点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部外面はロクロ成形痕のみで再調整はない。体部の内面はミガキ後黒色処理される11点(1881～1891)とまったく再処理のない2点(1893・1894)に分けられる。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁部が内湾気味となったり軽く外反気味となったりする器形をなし、両者ともほぼ同じである。大きさは口縁部径14.6cm～14.4cm、底部径6.4cm～5.6cmで比率は2.57～2.28である。

高台付き坏(1892) - 床面から完形が1点の出土である。ロクロ使用成形され底部は回転糸切り離しの後、無調整で高台が付された貼り付け高台である。体部の外面は無調整であるが内面はミガキ後黒色処理される。坏部は土師器坏の器形と同様であり、高台部は壺付け部が丸味を持ち全体が「ハ」字状に踏ん張る形を示す。口縁部径が15.8cm、器高5.7cm、高台高1.3cmの大きさである。

壺(1897～1898) - 床面直上から口縁部から体部と体部から底部を残す破片が2点出土している。いずれもロクロ使用成形され内外面全体にロクロ成形痕のみを残し、底部が回転糸切り離し無調整である。底部から外傾する体部は、口縁部が頸部で外方に強く外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状の器形をなす。大型の部類に入るものと推定される。

須恵器(第207図、写真図版428)

埋土内から坏2点、壺2点の4点が出土している。

坏(1895・1896) - 埋土内から体部下位から底部の一部を残す破片が2点出土している。いずれもロクロ使用成形され底部切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面はロクロ成形痕のみで再調整はない。体部が底部から丸味を持って外傾する器形と推定されるが、詳細は不明である。

壺(1899・1900) - 埋土内から体部の破片が2点出土している。1899はロクロ使用成形され

内外面がヘラケズリやヘラナデ調整される。1900 は外面に並行叩き具痕、内面にナデ痕を付す破片である。細片であるため詳細は不明であるが、後者は大甕、前者は一般的に形の變と推定される。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

63 DIVv9 住居跡

〔遺構〕(第168図、写真図版124)

調査範囲の西端から東へ約262mのDIV区西部に位置し、DIVg10住居跡は北に約100mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。なお、当遺構の南約60%と推定される部分が調査区外に延びていることにより、この部分は調査していない。

検出された部分は東-西約5.8m、南-北最大約3.4mの規模であり、平面形は主軸が磁北に対して90度か180度東に偏した正方形か長方形を示すものと推定される。壁高は約20cmほどで、壁にはほぼ直立状の部分と軽く外傾する部分があり、床面とは軽い丸味で接続する。壁は若干の凸凹はあるものの全体として直線状をなし、規則的な壁と言えよう。床は基本層序第IV層相当の褐色の砂質シルト層で構築され小起伏が見られるものの全体として踏みしめにより堅い。北西隅部壁よりの床面で幅が約20cm~10cm、深さ約10cmほどの壁溝が西壁沿い1.8m、北壁沿い1.2mの部分から検出されている。床面からp1・p2の2基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置が対角線状に配置されているらしいことと、規模から当住居跡の柱穴を構成する土坑と推定される。埋土は全体が7層に細分されているが、いずれも土性はシルトであり、色調は黒色と黒褐色が主体で暗褐色や褐色などがある。1・2層には小石が大量に混入し、さらに全層に黄褐色土粒が混じる特徴がある。なお、I・II層は基本層序である。堆積状況から自然埋没遺構と言えよう。

カマドは検出された壁の範囲では検出されていないことから、調査区域外に延びる壁に設置されているものと推定され、東壁か南壁に設置されているものと推定される。

〔遺物〕(第208~209図、写真図版428・429・541)

埋土内や床面から土師器9点と須恵器14点のほか鉄製品が1点出土している。

土師器(第208図、写真図版428)

床面からの出土を主体に9点の出土であり、器種として坏2点、甕5点、鉢1点、壺1点が含まれている。

坏(1901・1902) - 埋土内から2点出土しているが、完形や全体が判明する個体は含まれず、いずれも体部下位から底部を残す破片での出土である。すべてクロ使用成形され底部の

切り離しは回転糸切り離し無調整であるが、体部外面は無調整で内面はミガキ後黒色処理される個体（1901）と内外面とも無調整の個体（1902）に分けられる。小破片のため器形等明確に把握できないが、体部が底部から外傾する器形であろうと推定される。

甕（1905～1909）—床面からの出土を主体に5点の出土であるが、完形や全体を残存する個体はなく口縁部から体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、口縁部は内外面ともヨコナデで調整されるが、体部外面がヘラナデやヘラケズリ、同内面はヘラナデ調整である。全体的な器形は明確にし難いが、底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は外湾し口唇は丸くおさまる。器形には大小関係があるやに見受けられるが、明確なことは不明である。

鉢（1910）—床面からロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片が1点出土している。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部は外面がハケメやヘラケズリで、内面はヘラナデで調整される。体部下位から底部を欠失するため全体的な器形は定かでないが、体部が底部から外傾したのち中位で直立気味に立ち上がり、口縁部は直線的に軽く外傾するものと推定される。大きさは残存する口縁部から径を推定すると大型の部類に入るものと考えられる。

須恵器（第208・209図、写真図版428・429）

埋土内からの出土を主体に14点の出土であるが、器種として坏2点、甕9点、瓶2点、鉢1点がある。

坏（1903・1904）—床面と埋土内から各1点の合わせて2点の出土であるが、1点は口縁部から底部までを残す破片であるが、他は口縁部から体部までを残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整は観察されない。やや大きめの底部から直線的に外傾する体部は、上位で軽く外反気味となって口縁部に移行し端部が外傾気味に見える器形をなす。大きさは口縁部径が13.3cm、底部径7.5cmで比率は1.77である。

甕（1912・1913・1915・1918～1923）—埋土内からの出土を主体に9点の出土である。完形や全体の判明する個体はまったく出土していない。1912と1913は体部の下端から底部の一部を残す個体であるが、ロクロ使用成形され、外面がヘラケズリやヘラナデ、内面はカキメやヘラナデで調整される土師器の甕に近い器形か壺に近似した器形と推定される。1915と1918～1920はともにロクロ使用成形され、1915内外面ともヨコナデ調整される口縁部、1918～1920は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整された体部の破片である。1921～1923の3点は外面に並行叩き具痕、内面に放射状の当て具痕を付す大甕の体部や肩部上位、体部下位などの破片である。

瓶（1914・1917）—床面と埋土内から各1点の合わせて2点の出土である。1914はロクロ使用成形された体部下位から高台を付す底部の一部を残し、内外面にロクロ成形痕を付す。1917

はロクロ使用成形され内外面にカキメを残す体部破片である。

壺(1911)一埋土内からロクロ使用成形され内外面にロクロ成形痕を残す口縁部から体部を残存する破片である。

鉄製品(第209図、写真図版541)

柱穴内から鉄滓が1点出土している。

鉄滓(179)一径が6cm×5.5cm、厚さ1.5cmの大きさがある鉄滓で、角が丸味を持つ略三角形に近い形状を示す。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器や須恵器など出土遺物の特徴から9世紀中葉から後半頃に位置づけられるものと推定される。

64 DIVg 10 住居跡

〔遺構〕(第169・170図、写真図版125)

調査範囲の西端から東に約264m寄ったDIV区の西部に位置し、DIVj 10住居跡は南に約11mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出されたが、開田時に重機による削平を受けているため残存状態が悪く、特に北東部分がその傾向が強く、北壁と東壁は一部を残して削平され検出されていない。

東一西約7.9m、南一北約7.0mの規模と推定され、平面形は主軸が磁北に対して約180度東に偏した長方形をなすものと推定される。壁高は最深部で約20cmであり、ほぼ垂直状態を示す部分が多い。壁は基本層序第IV層の褐色粘土質シルトで構築されるが、南部の東西方向はほぼ平坦であるものの、北部は攪乱によって凸凹が著しく本来の床面は削られている部分が多い。壁溝の検出はないが、床面からp1～p9の9基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置から考えてp2～p5の4基が当住居跡の柱穴を構成するものと推定される。さらに、p6は貯蔵穴の可能性のあるものの、他の土坑については性格は定かでない。埋土は黒褐色や暗褐色のシルトを主体とするが、上部は攪乱層が深く入り込んでいる部分も見られ、断定し難い場合も多かった。全体としては自然埋没と推定されるが、攪乱も多いことから定かでない。

カマドは削平によって残存状態が悪く、袖部と燃焼部が検出されたのみであり、南壁の東隅部寄りに検出された。さらに、東壁の南隅部寄りの壁際床面に焼土とそれに対応する煙道部が検出されたことにより、東壁から南壁に移築されたものと推定される。袖部は全体幅が約1.3m、奥行き約75cm、高さ約5cmほどの規模であり、各部では、左側袖部は幅が約40cm、奥行き約80cm、高さ5cmであり、右側袖部は幅が約30cm、奥行き約90cm、高さ約5cmの規模であり、残存状態が悪いので断定できないが、シルトを積み上げて構築したものらしい。燃焼部の

幅は約 60 cm、奥行き約 75 cm の広さがあり、燃焼部の焼土は奥壁寄りに径 40 cm のほぼ円形状の広がりを持ち、層厚約 3 cm ほどである。焚き口部手前の床面にも 50 cm × 30 cm の凸レンズ状の広がりを持つ焼土がある。東壁際の焼土は径 15 cm ほどの略楕円形の広がりを持つ。煙道部は壁沿いは削平で残存せず、残存長約 100 cm、幅約 15 cm、深さは最深で約 10 cm ほどであり、全長は約 2 m であったものと推定される。煙出し部は平面形が約 35 cm × 25 cm の楕円形で、深さが約 30 cm の土坑状である。

(遺物) (第 209・210 図、写真図版 429・430)

床面など遺構に直接共存する形の出土を主体に土師器 10 点、須恵器 13 点と、鉄製品が 2 点の合わせて 25 点の出土である。

土師器 (第 210 図、写真図版 429・430)

床面からの出土を主体に環 2 点と壺 8 点の合わせて 10 点出土している。

環 (1924・1925) 一埋土内から 2 点の出土であるが、いずれもロクロ使用成形され、口縁部から体部を残す破片である。1924 の外面は口縁部の一部がミガキ調整、体部は無調整であるが、内面はミガキ後黒色処理される。1925 は内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はまったくない。器形は両者とも大同小異であるが、底部から丸味をもって体部が外傾し、口縁端部が軽く外反する。

壺 (1934～1941) 一床面からの出土を主に 10 点の出土であるが、完形や全体を残す個体は出土せず、口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。1934・1935・1941 の 3 点はロクロ使用成形され、前者 2 点の外面はロクロ成形痕のみを残し、内面はロクロ成形痕とヘラナデ調整される。器形は定かでないが、1935 の一般的な長胴形と 1934 の球胴形の 2 種類に分けられるが、口縁部の形はともに外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状になる。その他の個体はいずれもロクロ不使用成形され口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラナデかヘラケズリ、内面がヘラナデで調整される。器形は体部の中位がやや膨らむ個体と外傾する個体の 2 種類に分けられるが、口縁部はともに頸部から外反して端部が先細りとなる。また、器形には大小関係があり、中型と小型が出土している。

須恵器 (第 210 図、写真図版 429・430)

床面や埋土内から 13 点出土しているが、器種には環 8 点、壺 3 点、瓶 2 点が含まれる。

環 (1926～1933) 一床面からの出土を主体に 9 点の出土であるが、完形や全体を残存する 4 点以外は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り難し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。底部から外傾する体部は直線的に外傾したり軽く丸味を持ち、口縁部は外反気味となる器形が多い。大きさは、口縁部径が 13.5 cm～12 cm、底部径は 6.6 cm～5.6 cm で、比率は 2.04～2.14 である。

壺 (1944～1946) 一埋土内から体部や肩部上位の破片が 4 点出土している。1943 と 1944 の

2点はロクロ使用成形され、1944は内外面にヘラケズリやヘラナデの調整痕がある。1945と1946は外面に並行叩き具痕、内面にヘラナデ調整痕が付される。器形を見ると、1944は長胴形、1943は球胴形、1945と1946は大甕と推定される。

瓶(1942・1943)一埋土内から体部と肩部上位各1点の合わせて2点の破片が出土している。1943は内外面にカキメやロクロ成形痕が付され、1942は外面にヘラナデやヘラケズリ、内面にカキメ後ヘラナデ調整痕が付される。部分的な破片のため全体形等は不明である。

鉄製品(第209図、写真図版534)

カマド内と埋土内から鉄板状と刀子が各1点の合わせて2点が出土している。

刀子(50)一刃部を欠失し基部だけを残す個体で、残存全長5cm、最大幅1cm、厚さ5mmの大きさがあり、縦断面が長方形を示す。

鉄板状の鉄製品(14)一全体が2.5cm×2cmの隅丸方形を示し、厚さが2mm前後の鉄板状であり、正確な器種などは不明である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期を特定することは困難であるが、出土した土師器や須恵器の特徴から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

Ⅷ DIVj10住居跡

〔遺構〕(第171・172図、写真図版126)

調査範囲の西端から約262m東に寄ったDIVj区の西部に位置し、DIVj10住居跡とは南に約5mの距離がある。他遺構との重複も見られず、単独で検出された。

東-西約3.8m、南-北約3.3mの規模があり、平面形は主軸をほぼ南北に持つ長方形気味の方形である。壁高は約20cmほどであり、床面とはやや丸味をもって接続するが、壁は床面に対して軽く外傾する。南・北・西の壁はあまり凸凹も見られず規則的な壁であるが、東壁は外方に若干張り出す突辺状となり、さらに起伏が激しい。床は基本層序第IV層の褐色シルト層で構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされる。床面はほぼ平坦で水平状態に近く、全体が踏みしめによって堅い。床面から壁溝は検出されていないが、p1~p8の8基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置から考えて柱穴と推測される土坑はないが、p1とp2は規模と位置から当住居跡の貯蔵穴と推定される。埋土は全体が3層に細分されているが、そのほとんどは2層の暗褐色シルトで占められ、その他は黒褐色シルトがその上・下位に堆積する。1層には十和田a降下火山灰が混在し、全体的に炭化物粒や焼土粒・黄褐色土粒などが混入している。土層から堆積状況を観察すると、自然堆積で埋没したものと推定される。

北壁の東隅部寄りにカマドが設置されており、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部分が良

好な状態で検出された。全体の規模は、袖部の幅が約 1.2 m、奥行き約 70 cm、高さ約 15 cm であり、さらに壁外に約 1.5 m 延びる煙道部が付属する。袖部各部の規模は、左側は幅約 30 cm、奥行き約 65 cm、高さ約 13 cm、右側は 40 cm、奥行き 70 cm、高さ約 17 cm であり、右側の一部に河川礫が載っているものの基本的には鈍い黄褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約 40 cm、奥行き約 65 cm の広さがあり、焼土は焚き口部のやや奥に 30 cm × 22 cm の略方形気味の範囲に層厚約 3 cm で分布する。煙道部は幅約 30 cm × 20 cm、深さ約 8 cm で、底面はほぼ平坦であるが、全体が直線的ではなく軽く湾曲する。煙出し部は煙道部の突端から右側に屈曲するような状態で検出され、規模は約 30 cm × 30 cm、深さ約 18 cm ほどの土坑状である。

〔遺物〕(第 211 ~ 212 図、写真図版 430・431・531)

床面や埋土内から土師器 21 点、須恵器 12 点の合わせて 33 点の他、鉄製品が 2 点出土している。

土師器(第 211 ~ 212 図、写真図版 430・431)

床面からの出土を主体に 21 点出土しており、器種には坏 12 点、甕 4 点、鉢 1 点、壺 3 点が含まれている。

坏(1947 ~ 1959) - 3 点以外は床面や土坑内からの出土であるが、完形なのは 1947 と 1948 の 2 点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部外面は下部が再調整される 1948 と無調整であるが黒色処理される 1952 以外はロクロ成形痕のみで再調整はない。内面はミガキ後黒色処理される 1947 ~ 1955 の 9 点とロクロ成形痕以外の再調整がない 1956 ~ 1959 の 4 点に細分される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が外反したり内湾して直立気味になったりする器形を示す。大きさは口縁部径が 14.8 cm ~ 12.8 cm、底部径は 5.5 cm ~ 5 cm で比率は 2.59 ~ 2.56 である。

甕(1968 ~ 1970・1973) - 床面と埋土内から 4 点の出土であるが、1968 が完形である以外は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形されるが、口縁部と体部内面のほか、体部外面の上部はロクロ成形痕、下部はヘラケズリの調整痕が付される。底部から外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部が大きく外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状をなす。器形に大小があり出土した個体は大・中型と推定される。

鉢(1972) - カマド内から完形が 1 点出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整である。体部外面の下端がヘラケズリ調整される以外は内外面とも再調整はない。

壺(1971・1974・1975) - 1971 は土坑内からの出土であるが、他は埋土内からの出土である。完形はなく頸部付近と体部から底部を残す破片での出土である。1974 はロクロ不使用成形

され口縁部がヨコナデ調整の後一部が赤彩、肩部の外表面はミガキ後赤彩と器表が赤彩される特徴がある。他の2点はロクロ不使用成形され、内外面ともヘラナデ調整される。

須恵器 (第211～212図、写真図版430・431)

埋土内から12点出土しているが、器種には坏8点、壺2点、瓶1点、壺1点がある。

坏(1960～1967)－埋土内から8点出土しているが、完形はまったく含まず口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面ともロクロ成形痕以外の再調整痕はない。器形は土師器坏のそれとほぼ同様である。

壺(1978～1980)－埋土内からロクロ使用成形され外面にヘラケズリ、内面にロクロ成形痕を残す体部の破片2点と外面に並行叩き具痕、内面に青海波当て具痕を付す大壺の体部破片が合わせて3点出土している。

壺(1976)－埋土内から頸部から口縁部を残すロクロ使用成形された破片が1点出土している。口縁端部は角張って縁帯状をなし、さらに上方に挽き出され受け口状を示す

瓶(1977)－埋土内からロクロ使用成形された口縁部破片が1点出土している。

鉄製品 (第211図、写真図版531)

埋土内から刀子1点、縛金具1点の合わせて2点出土している。

刀子(17)－全長12.8cmの切っ先から基部のほぼ全体を残し、刃部と基部の境には明瞭な刃関が観察される。

縛金具(18)－一部が欠損するが、残存全長2cm、幅1.2cmの大きさがある。薄い鉄板を逆U字状に曲げた器形を示す。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器や須恵器の特徴と埋土内に十和田a降下火山灰が混入することなどから、当住居跡は9世紀後半から10世紀初頭頃に位置づけられるものと推定される。

6 Ⅱ DIVi 10 住居跡

(遺構) (第173・174図、写真図版127)

調査範囲の西端から約264m東に寄ったDIV区の中央部より位置し、DIVm 10住居跡は南に約7mの距離がある。当住居跡のほぼ中央を東西にDIVi 2溝跡によって掘削される他は、他遺構との重複はない。

東－西約4.5m、南－北約4mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約85度ほど東に偏した隅丸のやや突辺気味となる長方形気味の形状を示す。壁高は約30cm強であり、壁は直線的ではなくいずれの壁も外方に僅かに湾曲する突辺状であるが、極端な凸凹も見られずほぼ規

則的な壁と言えよう。壁と床面とは軽い丸味をもって接続する。床は基本層序第IV層の黄褐色シルト出構築され、貼り床も見られずそのまま床面としている。床面には大きな起伏も見られずほぼ平坦で、総じて水平に近い状況を示す。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p7までの土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置から当住居跡の柱穴を構成する土坑はないものと推定される。p3とp4は位置と規模から貯蔵穴であろうと考えられる。埋土は全体が5層に細分されているが、土性はすべてシルトであり、色調は黒褐色・黄褐色・褐色・黒色などに分けられる。1層と5層には炭化物が混入し、2層と4層には黄褐色土粒が混在しており、埋土の大半は最上層の1層が占める。自然状態で埋没したものと考えられる。

カマドは東壁の南隅部寄りに設置されるが、重複する溝跡が北側のほぼ半分を掘削しており、残存状態は良好とは言いがたい。検出されたのは右側袖部、燃焼部、煙道部、煙出し部である。左側の袖部が完全に掘削されているため袖部の全体規模は定かでないが、幅約1m前後、奥行き約70cm、高さ約25cm位と推定され、さらに壁外に約1.2m延びる煙道部が付属する。各部の規模では左側袖部は不明であるが、右側袖部は幅が約30cm、奥行き約60cm、高さ約25cmであり、芯として偏平な河川礫を4個並べて埋設した後その周囲に黒褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部の広さは不明であるが、焼土は30cm×30cmの楕円形状に焼き口部付近から中央部にかけて広がる。火床は床面とほぼ同位面が連続し、ほぼ中央部に河川礫を埋設した支脚が検出されている。火床は奥壁で緩やかな斜面状の段差で接続する。煙道部は幅が30cm、深さが35cm～15cmほどであるが、底面に凸凹はないが奥壁付近が浅くて煙出し部に向かって次第は深くなる。検出の状況から掘り込み式の煙道部と推定される。

(遺物) (第213・214図、写真図版431・432)

埋土内からの出土を主体に土師器13点、須恵器10点の合わせて23点が出土している。

土師器 (第213・214図、写真図版431・432)

壺や鉢は床面から、坏はすべて埋土内からの出土で、坏5点、高台付き坏1点、壺4点、鉢2点の合わせて13点の出土である。

坏(1981～1985) - 5点の出土であるが、全体が判明するのは1点のみで、他はすべて体部下位から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形されるが、底部の切り離しは回転糸切り離しの後ナデやケズリの再調整される2点(1984・1985)と、無調整の3点(1981～1983)に分けられ、さらに体部の外面もミガキやナデで再調整される3点(1983～1985)がある。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部で軽く外反する器形を示す。比較的底径の大きいのが特徴であり、大きさは口縁部径13.6cm、底部径6.5cmで比率は2.09である。

高台付き坏(1986) - 埋土内から高台を欠失した体部から底部の一部を残す破片が1点出土

している。ロクロ使用成形されるが、底部の切り離しは高台貼り付け時のナデによって不明である。体部の外面はロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色される。全体的な器形は定かでないが、坏のそれと大同小異であろう。

壺（1993～1995・1997）一埋土と土坑内から4点の出土であるが、完形や全体を残す個体は出土せず、口縁部から体部を残す個体が3点と体部下位から底部を残す破片1点がある。ロクロ使用成形された3点（1994・1995・1997）とロクロ不使用成形の1点（1993）がある。ロクロ使用成形の前者3点は内外面にロクロ成形痕を残し、一部の個体ではヘラケズリやヘラナアの調整痕を持つ。全体的な器形は定かでないが、体部が直立気味と軽く膨らみ球胴形に近い器形があり、口縁部は外反して単部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状になる。ロクロ不使用成形の個体は、体部のほぼ中位が僅かに膨らみ、頸部で窄んだ後口縁部が外反して口唇部に向かって先細りとなる器形である。器面は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラナデ、内面がナデ調整され、部分的に輪積み痕を残している。器形には大小関係があり、大型と小型がある。

鉢（1996・1998）一カマドや床面から完形が各1点の2点が出土している。1996はロクロ不使用成形され、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部が外面ヘラケズリ、内面ヘラナアとヘラミガキで器面調整されている。比較的径の大きい底部から体部が直線的に外傾し、頸部で軽く窄んだ後口縁部が外傾する器形をなし、所謂壺形の鉢である。1998はロクロ使用成形され、体部外面の下部がヘラケズリ調整されて内面がミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって大きく外傾する体部は、上位で直立気味に立ち上がり、頸部から口縁部が大きく外方に開く器形をなし、まさに鉢形の鉢である。特に後者は口縁部径が24cmと大型である。

須恵器（第213・214図、写真図版431・432）

埋土内から坏5点、壺1点、瓶1点、壺3点が出土している。

坏（1988・1992）一体部下位から底部の一部を残す破片が5点出土している。すべてロクロ使用成形であるが、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整の3点（1988～1990）と回転籠切り離し無調整の2点（1991・1992）に分けられる。全体的な器形は定かでないが、土師器坏のそれと大同小異であろうと推定される。しかし、全体として底部径が大きい傾向が見られるようである。

壺（2003）一埋土内から外面に撥格子文的な並行叩き具痕、内面にナデ痕を持つ大壺の体部破片が1点出土している。

瓶（2002）一外面に並行叩き具痕後ロクロ成形痕を持ち、内面にカキメ的にロクロ成形痕を付す肩部付近の破片が埋土内から1点出土している。

壺（1999～2002）一ロクロ成形された口縁部2点と肩部付近1点の3点が出土している。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から9世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

67 DIVm 10 住居跡

(遺構) (第175・176図、写真図版128)

調査範囲の西端から約262m東に寄ったDIV区の中央部よりに位置し、DIVm 11住居跡は東に約6mの距離がある。DIVm 10土坑とDIVn 10土坑-4と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約4.4m、南-北約4.5mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約90度東に偏したやや隅丸気味の方形である。壁高は約35cmほどで、壁は床面と僅かな丸味をもって接続するが、外方に幾分外傾する。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされている。床面には若干起伏があり、さらに重複する土坑によって掘削されているが、全体が踏みしめによって堅い。

壁溝は検出されていないが、床面からp1~p11の11基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p7・p8の2基は、位置と規模は柱穴的であるが対をなす柱穴が不明であるなど断定できない。p9・p10の2基は位置と規模から当住居跡に伴う貯蔵穴と推定される。その他の土坑は平面形や規模からは柱穴的なものが多いものの、浅すぎることや位置が柱穴としては不適當であるなど疑問点があり、もし柱穴とすれば支柱穴であろうと推定される。埋土は全体が8層に細分されているものの、土性はすべてシルトであり、色調は黒褐色を主体に暗褐色と黒色がある。いずれの層にも粘性があり、黄褐色土粒や焼土粒のほか炭化物粒を混入する土層が多い。土層から堆積状況を観察すると自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは東壁の南隅部よりに2基、南壁の東壁よりに1基の合わせて3基が検出されているが、袖部が検出されているのは東壁のもっとも南に設置されている1基のみであることから、同時に設置されていたのではなく新旧関係があるものと考えられる。もっとも新しい東壁の南隅部よりに設置されるカマドは、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。全体規模は、袖部の幅が約1.2m、奥行き約85cm、高さ約27cmであり、さらに壁外に約1.4cm延びる煙道部が付属する。各部の規模では、左側袖部は幅が約40cm、奥行き約90cm、高さ約35cm、右側が幅約30cm、奥行き約70cm、高さ25cmであり、基部に河川礫を埋設した後褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約50cm、奥行き約90cmの広さがあり、焼土は焚き口部から中央部に50cm×50cmの範囲に約4cmで広がる。火床は周辺部の床面とほぼ同位で続くが、煙道部とは斜面状の段差で接続する。煙道部は幅が約30cm、深さが約20cmであるが、底面に僅かな起伏があり、奥壁から煙出し部に向かって高くなっており、廻り込み式の煙道であろう。煙出し部は径約60cm×50cmの楕円形で、深さが約25cmで断面形がフラス

コ形に近い土坑状である。左側に隣接して検出されたカマドは袖部は残存しておらず、燃焼部の焼土・煙道部・煙出し部が検出されている。袖部と燃焼部の規模は不明であるが、燃焼部の焼土は60cm×30cmの略長方形的な範囲に広がる。煙道部は長さが約1.1m、幅約30cm～20cm、深さ約20cmであり、底面は平坦である。煙出し部は径約45cm×30cmの楕円形で、深さが約40cmの土坑状である。南壁に設置されたカマドは、袖部は残存しないが燃焼部焼土・煙道部・煙出し部が検出されている。燃焼部の焼土は約1m×50cmの不整形に層厚約5cmで広がる。火床は周囲の床面より幾分低くなり、煙道部とは段差で接続する。煙道部は幅約30cm、深さ約15cm、長さ約1.3mの規模であり、煙出し部は径約50cm×50cmの楕円形で深さが約28cmの土坑状である。

〔遺物〕(第214～217図、写真図版432～434・532)

床面や土坑内からの出土を主体に埋土内などから土師器37点、須恵器15点の他、鉄製品が1点の合わせて53点が出土している。

土師器(第215～217図、写真図版432～434)

床面や土坑内からの出土を主体に37点の出土であるが、器種には坏が20点と皿1点の他、壺16点が含まれる。

坏(2004～2023) - 21点の出土であるが、完形や全体が判明するのは6点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部外面はロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される8点(2004～2011)と再処理のない13点(2012～2024)がある。底部から外傾する丸味をもって外傾する体部は口縁部が軽く外反したり内湾して直立気味となったり、直線的に外傾したりする器形を示し、両者ともほぼ同様であるが、内面黒色処理のない個体は幾分浅い傾向がある。大きさは、前者が口縁部径14.8cm～14.0cm、底部径が6.0cm～5.4cmであり比率は2.66から2.33である。後者は口縁部径15.0cm～14.3cm、底部径6.0cm～5.8cmで比率は2.58～2.38であり、前者とほぼ同様である。また、2005の体部には判読不能であるが墨書がある。

皿(2034) - 口縁部から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面ともに再調整は見られない。底部から丸味をもって外傾する底部は口縁部が軽く内湾する器形をなすが、器高が1.8cmと低いことに特徴がある。大きさは口縁部径9.4cm、底部径6.2cmで比率は1.5である。

壺(2032～2047) - 床面や埋土内から16点の出土であるが、完形や全体を残す個体は出土せず、いずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。2044・2047の2点以外は、すべてロクロ使用成形され体部外面は一部に並行叩き具痕(2032)やヘラケズリ調整の5点(2032・2036・2039～2041)の他はロクロ成形痕のみであり、内面はヘラナデ調整

される個体とロクロ成形痕のみの個体がある。全体的な器形は不明であるが、体部が軽く膨らむものと直立するもの、直線的に外傾するものなどがある。ロクロ不使用成形された2点(2044・2047)は体部上位から口縁部と体部下位から底部を残すが、口縁部が内外面ヨコナデ、体部が内外面ともヘラナデ調整される。また、大小関係があり、大・中・小の3型が出土している。

須恵器(第215～217図、写真図版433・434)

埋土内からの出土を主体に坏7点、壺7点、瓶1点の15点が出土している。

坏(2027～2031)－7点の出土であるが、全体が判明するのは1点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離しであり、再調整は見られない。器形は土師器のそれと大同小異である。大きさは口縁部径が14.5cm、底部径が5.2cmであり、比率は2.78である。

壺(2048・2050～2055)－7点の出土であるが、完形や全体を残す個体はなく、いずれも体部の破片か体部から底部を残す破片での出土である。2051～2055の5点は外面に並行叩き具痕、内面に並行当て具痕や同心円文当て具痕・放射状当て具痕などの付された大壺の体部破片である。2050は内外面ともヘラナデやヘラケズリなどの調整痕が付される。2048はロクロ使用成形され体部の外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整された体部から底部を残す個体である。

瓶(2049)－ロクロ使用成形され肩部上位から頭部の一部を残存し、内外面にロクロ成形痕を残す。

鉄製品(第214図、写真図版532)

土坑内から刀子が1点出土している。

刀子(24)－全長12.6cm、最大幅1.5cm、厚さ3mmの大きさがある完形である。実測図の左側が刃部であるが、明瞭な関はみられないものの茎部が刀身より細くなると同時に屈曲する特徴がある。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

跡 DIVm 11 住居跡

[遺構](第177・178図、写真図版129)

調査範囲の西端から約268mのDIV区のはば中央付近に位置し、DIVb 12住居跡は北に約45mの距離がある。DIVm 11陥し穴状遺構とDIVn 11掘立柱建物跡が重複するが、陥し穴状遺構は当住居跡より古い遺構であり、掘立柱建物跡は新しい遺構である。

東—西約 3.2 m、南—北約 3.3 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 75 度東に偏したやや不整ではあるが、台形的な方形を示す。壁高は約 45 cm であり、壁は床面と丸味をもって接続する他、壁が外軽しさらに壁の上位が湾曲するように大きく外方に開いている。床は基本層序第四層の黄褐色砂質シルトで構築されるが、全体として小起伏があるものの踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面から p1～p3 の 3 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模などから柱穴と推定される土坑はなく、いずれも貯蔵穴的である。埋土は全体が 5 層に細部され、さらに 3 層は 2 層に細別されている。土性はいずれもシルトであり、色調は暗褐色・黒褐色・黒色・褐色など多様である。炭化物や焼土の他に色調の異なる土が混入している。堆積状況は自然埋没したことを示している。

カマドは東壁の北隅部寄りに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で検出されている。袖付全体の規模は幅が約 90 cm、奥行き約 80 cm、高さ約 20 cm であり、さらに壁外に約 1.6 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模では、左側袖部が幅が約 30 cm、奥行き約 80 cm、高さ約 20 cm ほど、右側袖部は幅が約 40 cm、奥行き約 65 cm、高さ約 15 cm であり、左側の袖部には一部に河川礫が埋設されるが、右側袖部と左側袖部の河川礫の周辺は、暗褐色のシルトを積み上げたり補強して構築される。燃焼部は幅が約 35 cm、奥行き約 80 cm ほどの広さがあり、焼土は焼き口部付近から中央部にかけて 30 cm × 50 cm の範囲に層厚約 3 cm で広がる。火床は周辺部の床面とほぼ同位であり、煙道部とは奥壁で僅かな段差で接続し、燃焼部のほぼ中央に土師器坏を伏せた支脚が検出されている。煙道部は検出された一部が地中にあることから、刺り貫き式の煙道部であるが、底面には若干の起伏があり、横断面は高さ約 20 cm、幅約 40 cm の楕円形をなす円筒状である。煙出し部は径 40 cm × 35 cm の略長方形気味で深さが約 35 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 218～219 図、写真図版 435・436)

床面や埋土内から土師器 16 点、須恵器 12 点の合わせて 28 点が出土している。

土師器 (第 218 図、写真図版 435)

16 点の出土であるが、坏 7 点、皿 1 点、壺 7 点、器台 1 点の器種が含まれる。

坏 (2056～2062) — 床面や土坑内から 7 点の出土であるが、完形は 1 点のみで他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面はいずれも再調整されないが、内面はミガキ後黒色される 1 点 (2056) と無調整の 6 点 (2057～2062) が有る。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が内湾気味となって直立するものや軽く外反する個体もある。大きさは、口縁部径 15 cm、底部径 5.6 cm で比率は 2.67 である。

皿 (2063) — 土坑内から口縁部から底部までを残す破片が 1 点出土している。小型坏の可能性もあるが、坏の比較して底部径が大であることと器高が低いことから皿とした。ロクロ使用

成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面は無調整である。口縁部径は 10.8 cm、底部径 6.6 cm で比率は 1.63 である。

器台 (2068) - 土坑内から器種が器台であるかは明確でないが何らかの台部の一部と推定される破片が 1 点出土している。高坏か高皿または器台と考えられる。

壺 (2069 ~ 2075) - 床面や土坑内、カマドなどから 7 点の出土であるが、完形や全体の判明する個体は含まず、いずれも口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。2072 以外はロクロ使用成形され、体部上位から口縁部の内外面にロクロ成形痕を明瞭に残し、体部下半はヘラナデやヘラケズリ調整される。底部から直立や外傾したり膨らむ体部は頸部から口縁部が大きく外反し、口縁端部は角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出され受け口状となる。

須恵器 (第 218 ~ 219 図、写真図版 435・436)

埋土内からの出土を主体に床面などから 12 点の出土であり、器種には坏 4 点、壺 7 点、瓶 1 点がある。

坏 (2064 ~ 2067) - 床面と埋土内から 4 点の出土であるが、完形や全体を残す個体はなく、口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは 2065 の 1 点は回転籠切り離し無調整であるが、他は回転糸切り離しであり、ともに再調整はない。器形は土師器の坏と大同小異である。

壺 (2076 ~ 2079・2081 ~ 2083) - 埋土内から 7 点の出土であるが、すべて破片での出土である。2076 は体部下位から底部を残すが、体部の外面が並行叩き具痕、ヘラナデ、ヘラケズリなど、内面がカキメ調整される大壺形の壺と推定される。2077 ~ 2079 の 3 点は口縁部の小破片であり、内外面にロクロ成形痕が観察される。2081 は内外面にヘラナデやカキメ調整痕を持つ体部破片であり、残る 2082 と 2083 は外面に並行叩き具痕、内面に円形無文凸面と放射状の当て具痕を付す大壺の体部破片である。

瓶 (2080) - 内外面がカキメで調整された肩部の破片が埋土内から 1 点出土している。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から 9 世紀後半から 10 世紀初頭頃に位置づけられるものと推定される。

69 DIVb 12 住居跡

(遺構) (第 179・180 図、写真図版 130)

調査範囲の西端から約 265 m 東によった DIV 区の中央部付近に位置し、DIVi 12 住居跡は南に約 25 m の距離がある。DIVp 22 溝跡と重複するが当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約 4.9 m、南-北約 5.1 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 162 度東に偏

した並行四辺形に近い形状を示す。壁高は30cmほどで床面に対して95度ほどで外傾するが、壁には小起伏があるものの全体としてみれば総じて直線的であり、規則的な壁といえよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルト層で構築され、軽い起伏は見られるもののほぼ平坦で水平に近く、全体が踏みしめによって堅い。壁直下の床面には幅が約20cm前後、深さが約10cmの壁溝がカマドと南西隅部の貯蔵穴部分を除いて全周している。さらに、床面からはp1～p8の8基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1・p4・p6・p8の4基は規模や位置からみて当住居跡の柱穴を構成するものと推定されるし、p5とp7は同じ理由により貯蔵穴であろうと考えられる。その他の土坑は平面形や平面的な規模は柱穴的であるが、位置が不規則であるなど一概に断定することはできない。埋土は全体が6層に細分されているものの、大半は2層と3層が占めている。土性はすべてシルトであり、色調も黒褐色を主体に褐色・暗褐色に分けられる。全体として粘性があり、明黄褐色土粒や炭化物粒を混入する層が多い。自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは南壁の西隅部よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅約1m、奥行き約75cm、高さ約30cmほどであり、さらに壁外に約1.7m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側の袖部は幅が約30cm、奥行き約60cm、高さ約30cmほどで、右側袖部は幅約30cm、奥行き約75cm、高さ約30cmであり、袖部は焚き口部や内壁に河川礫を埋設した後暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約50cm、奥行き約75cmの広さがあり、焼土は焚き口部の手前から燃焼部全面に1m×50cmの範囲に層厚約3cmで広がる。火床は周辺部の床面と同位で続き、煙道部は奥壁で僅かな段差で接続する。煙道部はそのほとんどが地中に土管状に掘られた削り貫き式であるが、幅約20cmであり、底面は平坦であるが、奥壁付近から煙出し部に向かって次第に掘り下げられている。煙出し部は径約40cmの円形で深さが約65cmの円筒形に近い形状を示す。

〔遺物〕(第220～222図、写真図版436～438・536)

床面や土坑・カマドからの出土を主体に埋土などから土師器21点、須恵器23点の他、石製品1点、鉄製品1点の合わせて46点の遺物が出土している。

土師器(第220・221図、写真図版436・437)

土坑内や床面を主体に埋土内などから21点の出土であるが、器種には坏13点と甕8点がある。

坏(2084～2096)―床面や土坑・カマドといった遺構に直接伴う形や埋土内から13点の出土であるが、完形や全体が判明する個体は4点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整が多いものの、再調整されるもの1点(2085)、再調整によって切り離しが不明なもの3点(2091～2093)が含まれる。体部は内外面とも再調整のない3点(2094～2096)と外面は無調

整で内面がミガキ後黒色処理されるその他の個体に分けられる。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁部が直立気味となったり軽く外反したりする器形をなし、兩種ともほぼ同様な器形である。大きさは、内面黒色処理される個体は口縁部径 14.4 cm～13.4 cm、底部径 5.7 cm～5.4 cm、比率 2.52～2.42 であるが、別の個体は口縁部径 15.0 cm～13.0 cm、底部径 6.4 cm～6.0 cm、比率 2.34～2.16 と兩種の間に微妙な違いがある。

甕 (2112～2119) 一床面やカマド内と埋土内から 8 点の出土であるが、完形や全体を残す破片はまったく含まず、すべて口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。2114 と 2115 の 2 点はロクロ使用成形された口縁部の小破片であるが、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部はヘラナデによる調整がある。器形など詳細は不明であるが、口縁部は軽く外反する。その他の個体はいずれもロクロ使用成形され、大型の体部は内外面ともヘラケズリやヘラナデ調整されるが、口縁部と小型の個体は内外面ともロクロ成形痕のみである。また、小型の底部は回転糸切り離し無調整である。底部から外傾する体部は頸部から口縁部が外反し、口縁部が角張り縁帯状になるほか上方に挽き出されて受け口状となる器形を示す。また、器形には大小関係があり、大・中・小が出土している。

須恵器 (第 220～222 図、写真図版 437・438)

床面や土坑内・カマドなどの他、埋土内から 23 点出土しており、器種には坏 15 点、甕 2 点、壺 1 点、瓶 5 点が含まれる。

坏 (2097～2111) 一土坑内や床面などの遺構に直接伴うほか、埋土内から 15 点出土している。完形や口縁部から底部までを残すのは 4 個体のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面ともに再調整は見られない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直線的に外傾したり軽く外反したりする器形を示し、土師器坏の器形とほぼ同様である。口縁部径は 15.3 cm～13.3 cm、底部径が 6 cm～5.4 cm で比率は 2.55～2.23 の大きさがある。また、2097 と 2098 の体部には「竈」と「昌」かと推測判読される墨書がある。

甕 (2120・2127) 一埋土内から体部下位と推定される 2 点の破片が出土している。2120 はロクロ使用成形され内外面にロクロ成形痕を明瞭に残す広口壺に近い甕と推定され、2127 は外面に並行叩き具痕、内面にカキメと放射状当て具痕が付された大甕である。

壺 (2121) 一埋土内から口縁部の小破片が 1 点出土している。ロクロ使用成形され外湾する器形をなし、広口壺の口縁部と推定される。

瓶 (2122～2126) 一土坑内と埋土内から 5 点出土しているが、完形や全体を残存する個体はなく、いずれも肩部付近を主とする破片である。すべてロクロ使用成形され、体部下位の外面がヘラケズリ、肩部とその上位がカキメ、内面がカキメ調整されている。個体によって大小の差があるものの器形や器面調整はほぼ同じ特徴が見られる。

石製品 (第 222 図、写真図版 527)

埋土内から磁石が 1 点出土している。

磁石 (103) - 夏油川流域の古生界産の粘板岩を素材にし、全長 11.1 cm、幅 6 cm、厚さ 4 cm で重さが 430 g の大きさがある磁石が 1 点出土している。

鉄製品 (第 222 図、写真図版 536)

カマド内から刀子の茎の可能性のある鉄製品が 1 点出土している。

刀子 (79) - 残存全長 3.4 cm、幅 7 mm、厚さ 5 mm の大きさがあり、横断面が長方形をなし一端の幅がやや広くなる鉄製品が 1 点出土している。おそらく、刀子の茎もしくは鉄鎌の茎と推定される。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の状況から 9 世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

00 DIVi 12 住居跡

〔遺構〕 (第 181・182 図、写真図版 131)

調査範囲の西端から約 272 m 東に寄った DIV 区のほぼ中央に位置し、DIVn 13 住居跡とは南に約 21 m の距離がある。DIVj 12 土坑と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約 4.6 m、南-北約 4.3 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 45 度東に偏した隅丸の方形を示す。壁高は約 25 cm ほどで、床面とは丸味をもって接続し、床面に対して大きく外傾する。壁には小凸凹が観察されるものの総じて直線的であり、全体として規則的な壁と言えよう。床面は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされる。床面には小起伏が認められるものの全体が踏みしめで堅い。壁高は検出されていないが、床面から p1~p10 までの 10 基と壁外に壁に沿うように p11~p19 の 9 基の合わせて 11 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1~p4 は深さがたりないものの平面的な規模と位置から当住居跡の柱穴を構成するものと推定され、さらに壁外から壁に沿うように検出された p11~p19 も何らかの形で当住居跡の上屋構造に関係した柱穴群と推定される。その他については明確でないが、p10 は貯蔵穴的な性格が予測される。埋土は全体が 9 層に細分されるが、土性はいずれもシルトと共通しており、色調が黒褐色・暗褐色・明黄褐色・黄褐色などに分けられる。炭化物や焼土を混入するほか、いずれの土層にも異質な土粒を混在する特徴がある。自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは東壁の北隅部寄りに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などの各部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は、幅が約 1.3 m、奥行き約 75 cm、高さ約 10 cm ほどであり、さらに壁外に約 1.8 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側の袖部は幅が約

35 cm、奥行き約 75 cm、高さ約 10 cm ほど、右側袖部では幅が約 50 cm、奥行き 85 cm、高さ約 10 cm であり、袖部は暗褐色シルトを積み上げて構築しているが、押しつぶされたように全体が低い。燃焼部は幅が約 60 cm、奥行き約 75 cm ほどの広さがあり、焼土は燃焼部のほぼ全体に広がっている。火床は周辺部の床面とほぼ同位であり、煙道部とは奥壁部分で僅かな段差で接続する。煙道部は幅が約 30 cm あるものの、全体が地中に掘られた割り貫き式である。底面に若干の起伏があるとともに、全体が奥壁から煙出し部に向かって次第に低くなる。煙出し部は径約 55 cm × 50 cm の楕円形をなし、深さが約 60 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 223 図、写真図版 438)

埋土内からの出土を主体に土師器 6 点と須恵器 10 点の合わせて 16 点の出土である。

土師器 (第 223 図、写真図版 438)

埋土内を主に煙道部と床面から環 2 点と壺 4 点の 6 点の出土である。

環 (2128・2129) - 1 点の完形と 1 点の口縁部から体部を残す破片の合わせて 2 点が出土している。いずれもロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整である。体部の外面は無調整でロクロ成形痕を明瞭に残すが、内面はミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は体部の上位で内湾して直立気味となり、口縁端部で軽く外反する器形を示す。大きさは口縁部径 14.1 cm、底部径 5.8 cm で比率は 2.43 である。

壺 (2135 ~ 2138) - 埋土内からの出土を主体に床面から 4 点の出土であるが、全体が判明する個体は含まず、口縁部から体部と体部下位から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、体部外面はロクロ成形痕とヘラケズリ調整痕が付され、内面はヘラナデで調整される。底部から外傾する体部は上位に最大径を持ち、頸部から口縁部が外反して端部が角張る器形である。

須恵器 (第 223 図、写真図版 438)

埋土内から環 5 点と壺 5 点が出土している。

環 (2130 ~ 2134) - 埋土内から 5 点の出土であるが、完形や全体を残す個体はなくすべて口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整である。内外面とも再調整はまったくないが、小破片であるため詳細は不明である。

壺 (2139 ~ 2143) - 埋土内から 5 点の出土であるが、すべて破片での出土である。2139 は体部下位を残すロクロ成形された個体であるが、外面がヘラケズリ、内面がカキメやヘラナデで調整される。その他は、2140 ~ 2142 はロクロ使用成形され内外面にロクロ成形痕やカキメ調整痕が付された口縁部と肩部、体部の破片である。2143 は外面に並行叩き具痕、内面に同心円当て具痕を付す大壺の体部破片である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

7) DIVn 13 住居跡

〔遺構〕(第183・184図、写真図版132)

調査範囲の西端から約274m東によったDIV区のほぼ中央に位置し、DIVg 23住居跡は北東に約49mの距離がある。他遺構との重複もなく、単独で検出された。

南東-北西約4m、南西-北東約3.3mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約37度ほど東に偏したやや台形気味の方形を示す。壁高は約30cmほどで、床面とは幾分丸味をもって接続してやや外傾する。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、若干の起伏はあるものの全体が踏みしめによって堅い。床面からは壁溝・土坑ともまったく検出されていない。埋土は4層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色と暗褐色に分けられ、黄褐色土粒や炭化物粒・焼土などを混入する層が多い。堆積状況の観察では自然状態で埋没したものと考えられる。

カマドは北東壁の北隅部よりに構築され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で検出された。袖部全体の規模は、幅が約1.1m。奥行き約60cm、高さ約30cmほどで、さらに壁外に約1.5m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅が約35cm、奥行き約60cm、高さ約30cmほどで、右側袖部は幅が約40cm、奥行き約60cm、高さ約30cmであり、焚き口部に河川礫を埋設した後暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約40cm、奥行き約70cmの広さがあり、焼土は焚き口部付近から燃焼部の中央部の支脚付近までの約50cm×50cmの範囲に約3cmの厚さで広がっている。火床は周囲の床面とほぼ同位で続き、奥壁で煙道部との段差はなく平坦な状態で接続する。煙道部は幅が約30cmほどであるが、一部が深さ約30cmの地中に潜っていることから本来は割り貫き式の煙道であろう。煙出し部は径約50cm×40cmの楕円形をなし深さが約30cmの土坑状であるが、実際には煙道部が最初地中に約2mの長さで掘られ、次いで煙出し部はそのうえを狙って掘られたが、末端ではなく途中で掘られたために、煙道部が煙出し部を突き抜けている状況を示しているのと推定される。

〔遺物〕(第224図、写真図版438・439)

埋土内からの出土を主体に床面やカマド内から土師器8点と須恵器11点の合わせて19点の出土である。

土師器(第224図、写真図版438・439)

床面と埋土内から環が6点と壺2点の出土である。

環(2144～2149) - 床面とカマド内の他埋土内から6点の出土であるが、完形は1点のみで他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてクロロ使用成形され底

部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面はまったくの無調整であるが、内面はミガキ後黒色処理される3点と無調整の3点がある。底部から丸味をもって外傾する体部は直線的に外傾したり端部が外反したりする器形を示す。大きさは口縁部径15.6 cm、底部径6.8 cmで比率は2.29である。

壺(2157・2158)一埋土内から2点の出土であるが、完形はなく口縁部から体部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、体部外面の下部がヘラケズリ調整されるものの、その他は内外面ともロクロ成形痕を明瞭に残す。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部でわずかに窄み、口縁部は外反して端部が角張る縁帯状をなしさらに上方に挽き出され受け口状をなす。中型の器形らしい。

須恵器(第224図、写真図版439)

床面や埋土内から環7点と壺4点の合わせて11点の出土である。

環(2150～2156)一床面の他埋土内から7点の出土であるが、完形は2点のみで他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離しであり、体部は内外面とも再調整はない。器形は土師器環と大同小異である。口縁部径は15.8 cm～13.8 cm、底部径6 cm～5.2 cmで比率は2.65と2.63の大きさである。

壺(2159～2162)一埋土内から体部破片が3点と底部破片1点の4点が出土している。体部破片の内2点は外面に並行叩き具痕、内面に円形無文凸面の当て具痕が付された大壺である。1点は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整される。底部はロクロ使用成形され、高台が付されることから、瓶である可能性がある。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の所屬時期から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

⑦ DIVg 23 住居跡

[遺構](第185・186図、写真図版133)

調査範囲の西端から約314 m東によったDIV区の東端部に位置する。CVu 21住居跡は東に約96 mの距離がある。重複する遺構は無く、単独で検出されたが、開田時に強い削平を受けており、確認された壁高も低く僅かである。

東一西約5 m、南一北約5.2 mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して170度東に偏したやや台形気味である。壁高は約15 cmほどで床面とは丸く接続して外傾する。壁はほぼ直線的であり、規則的な壁である。床は基本層序第V層の段丘礫層で構築され、特に貼り床されることなくそのまま床面とされ、全面が堅く締まるものの、全体に小起伏が観察される。壁際の床面の南壁の西半分から西壁そして北壁までの一部に幅が約20 cm～15 cm、深さ約10 cmほどの

壁溝が通っている。床面から p1～p9 の 9 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置から p1・p5～p7 の 4 基は当住居跡の柱穴を構成するものと推定されるし、p3 は貯蔵穴と考えることができる。埋土は 6 層に分けられているが、土性はシルトと砂質のシルトであり、色調は黒色、黒褐色、褐色、極暗褐色に細分される。粘性を持つ層が多く、さらに炭化物粒や焼土粒を混入する例もある。自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは南壁の東隅部よりに設置されるが、開田時の削平によって残存状態が悪く、袖部・燃焼部・煙出し部が検出され煙道部は検出されていない。全体の規模は、幅が約 1.3 m、奥行き約 1 m、高さ約 15 cm ほどであり、さらに煙道部は検出されないが、壁外約 1.5 m の位置に煙出し口が検出されている。袖部の規模は、左側では幅が約 25 cm、奥行き約 60 cm、高さ約 20 cm ほど、右側では幅が約 45 cm、奥行き約 1.25 m であり、芯に河川礫を埋設した後暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約 50 cm、奥行き 80 cm の広さがあり、焼土は焚き口部からほぼ全面に広がる。かつては煙道部も存在したものと推定されるものの調査時には削平によって残存しなかったが、煙出し部は径約 40 cm のほぼ円形をなし深さが約 10 数 cm の浅い土坑状である。なお、右側に約 15 cm の距離をおいてほぼ同規模で円形、さらに深さもほぼ同様の土坑を検出しているが、これは煙道部が判り貫き式であったために、煙出し部と場所が異なったために掘りなおした結果ではないかと推定される。

〔遺物〕(第 225～227 図、写真図版 439～441・531)

埋土内からの出土を主体に土師器 17 点、須恵器 19 点の他、鉄製品が 2 点出土している。

土師器(第 225・226 図、写真図版 439・440)

床面からの出土を主体に 17 点の出土であり、器種としては坏 5 点、壺 11 点、壺 1 点が含まれている。

坏(2163～2167)－すべて埋土内からの出土であるが、完形と全体が判明する個体は 3 点であり、他は体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ不使用成形と考えらる 2163 以外の 4 点は、いずれもロクロ使用成形されるが、底部の切り離しはナデによる再調整で不明な 2 点(2163・2164)と回転糸切り離し無調整される 2 点(2165・2167)や回転籠切り離しかと推定される 1 点(2166)がある。体部の外面は全面がミガキ調整される 1 点(2163)と体部下位ヘラケズリする 1 点(2164)の他は再調整はみられない。内面はみがき後黒色処理される 3 点と再調整のない 2 点に分けられる。器形は、内面が黒色処理される 2 点はやや径の大きい底部から体部が丸味をもって外傾するが、口縁端部は直線気味に立ち上がり直口的であるものの、2163 の体部下位には軽い括れが観察される。その他の 2 点は底部から体部が直線的や外湾気味に外傾する器形をなし、前者とはやや趣が異なる。大きさは、口縁部径 13 cm～12.2 cm、底部径 6.8 cm～5.2 cm で比率は 2.63～1.79 である。

壺(2177～2188)－床面や土坑内など遺構に直接伴う形での出土が多く、合わせて 11 点の

出土である。完形は1点のみと少なく、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。2181を除いた10点はロクロ使用成形されており、口縁部は内外面がヨコナデ、体部が外面ヘラナデやハケメで一部ミガキ、内面がハケメやヘラナデ・一部ミガキ等で調整される。周囲が外方に突出する底部から丸味をもって外傾する体部は中位に最大径を持ち、頸部で無段や有段となり口縁部は直線的に外傾したり外反し、次第に先細りとなって口唇部に続く。また、底面は木葉底の個体も見られる。ロクロ使用成形された2181は内外面にロクロ成形痕を残す他、外面に並行叩き具痕が付される。器形は大同小異であるが、口縁端部が角張る縁帯状であることと上方に挽き出されてやや受け口状になる違いがある。大きさには大小があり、そのいずれも含むが、2180は器面の調整や推定される器形から鉢である可能性が高い。

壺(2186) - カマド内からロクロ使用成形され体部が球形に膨らむらしい様相を示す口縁部から体部を残す破片が1点出土している。口縁部は内外面がヨコナデ体部は両面ともヘラナデ調整される。口縁部の状況は基本的には壺のそれとほぼ同様である。あまり大きな個体ではないように推定される。

須恵器(第225～227図、写真図版439～441)

埋土内からの出土を主体に坏9点、壺7点、瓶1点、壺1点、碗1点の合わせて19点が出土している。

坏(2168～2176) - 9点の出土であるが、完形2点と全体が判明する1点以外は口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しはヘラナデ再調整により不明な2168以外は回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面ともいずれも再調整はない。なお、一部の個体には焼成時に重ね焼きした際に挟み込んだ草などの痕跡が火燻として残存している。底部から直線的や丸味をもって外傾する体部は、口縁端部も直線的な器形をなす個体が多い。大きさは、口縁部径14.2cm～13.2cm、底部径6.2cm～5.5cmで比率は2.58～2.01である。

壺(2192～2198) - 埋土内から7点の出土であるが、いずれも体部の破片である。2192はロクロ使用成形と推定されるが、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整痕がある。その他は外面に並行叩き具痕が、内面に放射状や円形無文凸面の当て具痕を持つ大壺の肩部や体部・底部よりの破片である。

壺(2190) - 埋土内から体部中位の最大径部分から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面にロクロ成形痕を残すが、小破片のため細部に付いては不明である。小型品である。

瓶(2189) - 埋土内から肩部の上位から高台を付す底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、外面の体部上位から肩部はロクロ成形痕の明瞭に残してその下部はヘラケズリ調整される。内面は全体がカキメで調整されている。底部の切り離しは不明であるが、切

り離した後高台が付された貼り付け高台である。

硯 (2191) 一埋土内からの出土であるが、外面に並行叩き具痕を付す大甕の体部破片を略長方形に整形して硯に再利用した転用硯であり、分類上では「猿面硯」に入るものと考えられる。

鉄製品 (第 227 図、写真図版 531)

埋土内から鉄滓と刀子の残片が各 1 点のあわせて 2 点出土している。

鉄滓 (15) 一全長約 7 cm、幅約 4.7 cm、厚さ約 2 cm の大きさがあり、平面が略三角形、断面が板状をなす鉄滓である。

刀子 (16) 一残存全長約 4 cm、最大厚約 2 mm、幅約 1 cm の大きさがあり、平面が細長く、断面が楔形をなす。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器や須恵器の特徴から 9 世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

73 CVu21 住居跡

〔遺構〕 (第 187・188 図、写真図版 134)

調査範囲の西端から約 394 m 東によった CV 区の東端部に位置し、CVr 25 住居跡は北東に約 40 m の距離がある。CVu 20 建物跡や土坑と溝跡などと重複するが、当住居跡がそれらに比べれば古い遺構である。また、開田時の削平・攪乱によって残存状態は良くない。

東-西約 7.8 m、南-北約 6.9 m の規模があり、平面形は主軸がほぼ磁北にある長方形な隅がやや丸くなる方形である。壁高は約 25 cm ほどで、壁は床面に対して 95 度ほどで外傾し一部に突辺状に張り出す部分があるものの、全体としてみれば直線的で規則的な壁と言えよう。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面としており、全体が踏みしめによって堅く「ナナコ」状の小凸凹が観察される。壁溝の検出はないが、床面から p1~p4 の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1~p3 は位置と規模から考えて当住居跡に伴う主柱穴と推定されるが、北東部に検出されない疑問点もある。p4 は位置から見て貯蔵穴と考えられる。埋土は全体が 9 層に細部されているが、土性はすべてシルトと同様であり、色調が暗褐色と黒褐色を主体に褐色や黄褐色などに細分されている。各層とも僅かの異質な粒子を混入する特徴が見られる。自然状態で埋没したものであろう。

カマドは北壁のほぼ中央や東よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などが検出されている。袖部全体の規模は幅が約 1.2 m、奥行き約 1 m、高さ約 6 cm であり、さらに壁外に約 1.4 m 延びる煙道部が付属する。袖部各部の規模は、左側が幅約 40 cm、奥行き約 1 m、高さ約 5 cm であり、右側では幅約 35 cm、奥行き約 80 cm、高さ約 4 cm であり、全体が褐色シルト

を積み上げて構築されている。燃焼部は幅が約 50 cm、奥行き約 1.1 m の広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部の手前から燃焼部の中央部付近まで 80 cm × 45 cm の範囲に約 5 cm の厚さでひろがる。火床は周囲の床面より僅かに低くなって中央部から奥壁が次第に高くなる傾向があり、煙道部とは傾斜する段差で接続する。煙道部は奥壁から煙出し部に向かって次第に低くなり全体が地中に土管状に覆われた割り貫き式であり、幅約 25 cm で横断面が不整な楕円形である。煙出し部は攪乱のため一部不詳であるが、径約 25 cm ほどの円形か楕円形をなし、深さが約 70 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 228 図、写真図版 441)

カマド内や土坑などから土師器 7 点と須恵器 1 点の合わせて 8 点が出土している。

土師器 (第 228 図、写真図版 441)

カマド内と土坑内から 7 点の出土であるが、器種としては坏 5 点と壺 1 点が含まれる。

坏 (2199 ~ 2903) - 5 点の出土で、完形が 1 点のほかは、口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用整形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整の 3 点と回転筒切り離し無調整 1 点に分けられ、体部外面もヘラケズリ調整される 2 点 (2199・2203) とまったく再調整のない 2 点の 2 種類であるが、内面はすべてミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部がやや直立気味となって直口状になるもの、直線的に外傾するものなどがある。大きさは、口縁部径 11.7 cm、底部径 5.5 cm で比率は 2.17 である。

壺 (2205 ~ 2206) - カマド袖部と土坑内から 2 点の出土であるが、完形は無く口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。2 点ともロクロ使用成形され体部の内外面ともハケメやヘラナデで調整され、口縁部は外面ヨコナデ、内面ナデである。底部から外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で窄む。口縁部は頸部から直線的に外傾し口唇部は丸く収まる。

須恵器 (第 228 図、写真図版 441)

カマド内から口縁部から底部までを残す坏が 1 点出土したのみである。

坏 (2204) - ロクロ使用成形され底部の切り離しはヘラケズリ再調整のため不明であるが、体部の内外面には再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が大きく外湾する器形をなす。大きさは、口縁部径 13.6 cm、底部径 5.4 cm で、比率は 2.51 である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴では 9 世紀前葉と推定されることと、出土した遺物の特徴もほぼ同時期の特徴であることから 9 世紀前半代の住居跡と推定される。

74 CVr 25 住居跡

(遺構) (第 189・190 図、写真図版 135)

調査範囲の西端から約 424 m 東に寄った CV 区の東端部に位置し、CVIp 4 住居跡は北東に約 19 m の距離がある。他の遺構と重複することなく単独で検出されたが、開田時の削平で残存状態は不良である。

東一西約 4.7 m、南一北約 4.6 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 180 度東に偏した隅丸の方形をなす。壁高は数 cm ほどであり、痕跡程度で計測できない部分も見られた。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築されるが、全体が最大で約 15 cm 埋め戻した後その上面を黄褐色のシルトで貼り床して床面としているが、全体として凸凹もなく平坦であり、ほぼ水平状態で全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面から p1～p7 までの 7 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置と規模から p2・p5・p6 の 3 基と南壁の南西隅部寄りの壁際に位置する 1 基を加えた 4 基が当住居跡に関連する主柱穴と推定される。そのほか、p1 は位置と規模から貯蔵穴である可能性が高い。埋土は全体が 5 層に細分されているものの、土性はいずれもシルトであり色調が黒褐色・暗褐色・褐色に分けられる。どの層にも異なる粒子が混入する傾向が見られる。埋土の残存状態がよくないので断定できないが、自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは南壁の東隅部付近に設置されているが、開田時の攪乱・削平によって残存状態が悪く燃焼部焼土と煙道部・煙出し部が検出されたのみである。カマド全体の規模は不備のため定かでないが、左側袖部が壁に密着し、右袖部が焼土右側の河川礫であれば、幅約 1 m、奥行き 1 m 以上の規模で、それに壁外に約 1.2 m 延びる煙道部が付属する。左側の袖部は残存しないため不明である。右側の袖部もその位置に河川礫が 1 点横たわっているのみのため詳細は不明である。燃焼部の焼土はカマド前の床面に 85 cm × 50 cm の範囲に約 4 cm の厚さで広がる。煙道部は幅約 25 cm ほどであるが、底面が奥壁部分から煙出し部に向かって次第に低くなっていることから、検出状況では掘り込み式であるが、当初は割り貫き式であった可能性がある。煙出し部は径約 45 cm で深さが約 15 cm の土坑状であった可能性が考えられる。また、p7 とした部分が若干掘り窪めた後「火」を使用しており、後述する羽口と鉄滓の出土から見て、この場所が鍛冶場であった可能性がある。

(遺物) (第 228～229 図、写真図版 442・525・530)

床面直上から土師器 2 点、須恵器 2 点の他、フィゴの羽口が 2 点、鉄滓 8 点など合わせて 14 点の出土である。

土師器 (第 228 図、写真図版 442)

床面から坏 1 点と壺 1 点の 2 点が出土している。

坏 (2209) 一口縁部の一部を欠失した 1 点が出土している。ロクロ使用成形され底部の切り

離しは回転糸切り離し無調整で、体部の内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が外反する器形を示す。

壺 (2210) - ロクロ使用成形された口縁部から体部上位を残す破片が1点出土している。体部の外面にロクロ成形痕の他に並行叩き具痕を明瞭に残し、内面にはカキメやヘラナデ痕が観察される。底部から外傾した体部は、頸部に軽い段をもって口縁部が外反し口唇部は先細りとなり丸くおさまる。

須恵器 (第228図、写真図版442)

床面から坏が2点出土している。

坏 (2207・2208) - いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離しと回転筒切り離しでともに無調整である。体部は内外面とも再調整はない。器形は土師器のそれと大差がない。大きさは口縁部径13.5cm、底部径6.8cmで比率は1.98である。

土製品 (第229図、写真図版525)

床面からフイゴの羽口が2点出土している。

羽口 (7・8) - 2点とも破片の状態で出土しているが、何点かの破片が接合して2個体となった。7は外径が約8cm、内径約4cmの筒状であるが、現状では約7.5cmが残存する。8は同様に外径6.5cm、内径約3cmで長さ約6.5cmの筒状である。

鉄製品 (第229図、写真図版530)

床面から鉄滓が8点出土している。

鉄滓 (7a~7h) - 横断面が不整な偏平状をなし、平面形が不整な楕円形的な形状を示す鉄滓で、大きさは最大10cm~4cmと様々である。形や大きさから見て鍛冶滓である可能性が高い。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

09 CVIp4住居跡

[遺構] (第191・192図、写真図版136)

調査範囲の西端から約441m東よったCVI区の西端部に位置し、CVIr6住居跡は南東に約15mの距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

東-西約3.9m、南-北約3.7mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約85度東に偏した台形に近似した方形を示す。壁高は約50cmであり、壁は床面に対して約95度ほどで外傾し、特に上位は大きく外傾する。壁は必ずしも直線的ではなく、部分的に凸凹が見られる。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築されるが、一部は深く掘り込まれた後埋め戻されて掲

色のシルトで貼り床されて床面とされており、全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、p1の土坑が1基検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模など性格は不明である。埋土は全体が7層に細分されているが、土性はすべてシルトであり3層は十和田a降下火山灰である。色調は黒褐色を主体に暗褐色・褐色・黄褐色などに細分され、いずれの土層にも炭化物粒や焼土粒の混入が見られ、粘性を持つ層が多い特徴がある。埋土の堆積状況を観察すると、自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは東壁の南隅部寄りに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出された。全体の規模は幅が約1m、奥行き約1.1m、高さ約13cmであり、さらに壁外に約1.3m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅約40cm、奥行き約80cm、高さ約25cmで、右側袖部は幅約40cm、奥行き約1.1m、高さ約20cmであり、袖部は焚き口部を主体に河川礫を埋設した後にその周囲を暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約30cm、奥行き約70cmの広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部の手前から径約50cmの略円形状に厚さ約4cmで広がっている。火床は周囲の床面より若干低くなるものの、奥壁寄りでも軽く高くなって奥壁で煙道部と接続する。煙道部は幅が25cmで全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式であり、底面が煙出し部に向かって次第に低くなる。煙出し部は径約30cmの円形状をなし、深さが約65cmの土坑状である。

〔遺物〕(第230～233図、写真図版442～444・527)

埋土内からの出土を主体に床面やカマドなどから土師器24点・須恵器14点の他、石製品として砥石が1点のあわせて39点の遺物が出土している。

土師器(第230～232図、写真図版442・443)

埋土内からの出土を主体に24点の出土であるが、器種として坏5点、甕16点、鉢3点が含まれている。

坏(2211～2215)－埋土内を主に床面などから5点の出土であるが、完形や全体が判明するのは3個体のみで他は口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部外面はすべて再調整がないものの内面はミガキ後黒色処理される3点(2211～2213)とまったく無処理の2点に分けられる。底部からやや丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が直線的に外傾したり軽く外反する器形をなす。大きさは、内面黒色処理の個体では口縁部径14cm、底部径5.2cmで比率が2.69であり、無処理の個体は口縁部径14.1cm～12.3cm、底部径5.3cm～4.8cmで比率は2.93～2.32である。

甕(2223～2238)－埋土内と床面から16点の出土であるが、ほぼ完形の1点以外は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。全体を概観するとロクロ使用成形された個体11点(2223～2225・2227～2229・2232～2236)と不使用成形の5点(2226・

2237・2230・2231・2238)に分けられる。ロクロ使用成形された個体の大型は、体部外面の上位から口縁部がロクロ成形痕を残すものの中・下位はヘラケズリ調整されており一部には並行叩き具痕を付す例(2223)も有る。内面はほとんど例外なくカキメかヘラナデ調整である。小型の場合は内外全面にロクロ成形痕のみを残す。底部から外傾する体部は中位に最大径を持って頸部で大きく窄んで口縁部が外反し、口縁端部が角張る縁帯状をなしさらに上方に挽き出されて受け口状の器形をなす。ロクロ不使用の個体は口縁部の内外面がヨコナデ、体部は内外面ともヘラナデで調整され、底部の周辺が突出する。頸部に軽い段か沈線状の区画があって口縁部は大きく外湾し、口唇部は丸く収まる。器形には両種とも大小関係が見られ、そのすべてが出土している。

鉢(2239～2241)－完形が1点と体部下位から底部を残す個体2点の合わせて3点の出土である。2239と2241はロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離し無調整であり、内外面全体にロクロ成形痕を残す。2240はロクロ不使用成形され外面がヘラナデ調整されるが詳細は不明である。3点とも小型である。

須恵器(第230～232図、写真図版442～444)

床面や埋土内から坏7点、壺3点、壺2点、瓶2点の合わせて14点が出土している。

坏(2216～2222)－カマドと埋土内からの出土を主体に7点の出土であるが、完形が1点と全体が判明する1点の2点以外は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。底部からやや丸味をもって外傾する体部は口縁端部が僅かに外反する器形をなし、土師器坏の器形と大同小異である。大きさは、口縁部径が14.5cm～14cm、底部径が6.8cm～6.6cmで比率は2.13～2.12である。

壺(2246～2248)－埋土内から外面に並行叩き具痕、内面に並行当て具痕や円形無文凸面の当て具痕を付す大壺の体部破片である。2246は外面にヘラケズリ、内面にカキメによる調整痕を付す体部破片である。

壺(2242～2243)－カマドと床面から全体が判明する1点と体部下位から底部を残す1点のあわせて2点の出土である。2242はロクロ使用成形され、口縁部から肩部付近にロクロ成形痕を明瞭に残し、外面はさらに並行叩き具痕やヘラケズリなどで調整され、内面はカキメの調整である。この状況は2243もほぼ同様である。底部からやや丸味をもって外傾する体部は肩部に最大径を持ち、頸部で大きく窄んだ後口縁部は外傾する器形を示す。全体としては広口壺と言えるが形としては大型と言えよう。

瓶(2244・2245)－ロクロ使用成形された肩部の破片が2点埋土内から出土している。肩部の上位はロクロ成形痕を残し下位(体部)はヘラケズリ調整される。全体的な状況は不明である。

石製品 (第 233 図、写真図版 527)

埋土内から磁石が 1 点出土している。

磁石 (104) - 奥羽山地中新統産の流紋岩を素材とした磁石であり、大きさは全長 18.6 cm、最大幅 8.8 cm、最大厚 8.4 cm、重さ 1605 g である。全体がやや細長い形状であり、横断面は変形五角形状をなし、その平坦面の 4 面に使用面を持つ。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期を特定するのは困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から 9 世紀中葉から後半代に位置づけられるものと推定される。

70 CVI r 6 住居跡

〔遺構〕 (第 193・194 図、写真図版 137)

調査範囲の西端から約 45.1 m 東によった CVI 区の西端部に位置している。他の遺構との重複もなく単独で検出された。

東-西約 5 m、南-北行く 5.3 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して 5 度西に偏した台形的な隅丸の方形である。壁高は約 20 cm ほどで、床面に対して 95~100 度で外傾する。壁には若干の起伏は観察されるものの総じて直線的であり、規則的な壁と理解できよう。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされる。床面には僅かに凸凹は見られるものの全体として平坦で水平に近く、全面が踏みしめによって堅い。東壁・北壁の西側から西壁・南壁の中央部付近の壁沿いの床面には壁溝が掘られている。幅は位置によって若干の差がみられるものの 20 cm~10 cm、深さは約 10 cm~5 cm である。その他に床面から p1~p8 の 8 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p5~p8 の 4 基は位置と規模から当住居跡に伴う主柱穴と推定されるし、p1 と p2 の 2 基は位置と規模からみて出入口施設に関連する土坑である可能性も考えられる。埋土は全体が 7 層に細分されるが、土性はいずれもシルトと共通し、色調が黒褐色と暗褐色に 2 大別される。全体として粘性があり、炭化物粒や異質な粒子を混入する例も多い。最終的には自然に埋没したものと考えられるが、廃絶当初は若干人為的に残土の投棄があった可能性がある。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部分が良好な状態で検出されている。全体の規模は袖部の幅が約 1 m、奥行き約 85 cm、高さ約 15 cm であり、さらに壁外に約 1.4 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模では、左側袖部が幅約 30 cm、奥行き約 80 cm、高さ約 5 cm で、右側袖部は幅約 30 cm、奥行き約 90 cm、高さ約 10 cm であり、袖部は右側の基部に河川礫を埋設するものその他はすべて暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約 60 cm、奥行き約 90 cm の広さがあり、燃焼部の焼土はほぼ中央部に径約 40 cm の楕円形状に約 4 cm の厚さで広がっている。火床は周囲の床面より僅かに低くなるが、奥壁

部で若干高くなっており、煙道部とは傾斜で接続する。煙道部は全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式であり、幅が約 30 cm で横断面は楕円形状である。底面は奥壁から煙出し部に向かって次第に低くなる特徴がある。煙出し部は径約 35 cm の円形状で深さが約 50 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 234～237 図、写真図版 444～446・541)

埋土内と遺構に直接伴う形で土師器 31 点、須恵器 11 点のほか、鉄製品 1 点が出土している。

土師器 (第 234～237 図、写真図版 444～446)

床面直上やカマド等の他、埋土内から 31 点の出土であるが、器種には坏 7 点、壺 18 点、鉢 3 点、壺 2 点、小型土器 1 点が含まれている。

坏 (2249～2255) - 埋土内とカマド・土坑内・床面などから 7 点の出土であるが、完形や全体が判明する個体はまったく含まず、いずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しはヘラナデ調整で不明な 1 点 (2249) 以外は回転糸切り離し無調整である。体部の外面はヘラケズリやミガキ調整される 3 点 (2249・2251・2254) と無調整の残り 4 点とあり、内面に付いてはミガキ後黒色処理の 6 点 (2249～2255) と無調整の 1 点に細部される。破片のため全体的な器形は定かでないが、体部が底部から丸味をもって外傾し、口縁端部がやや直立気味となるらしい。

壺 (2265～2282) - 埋土内の他、床面やカマド・土坑内などから 18 点の出土であるが、完形が 2 点 (2265・2268)、完形に近い個体 2 点 (2266・2267) 以外は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形された個体は 1 点 (2275) のみで、他の個体はすべてロクロ不使用である。ロクロ使用成形の 2275 は、体部外面上位に並行叩き具痕とロクロ成形痕を明瞭に残してその下部はヘラケズリ調整される。内面はヘラナデ調整され、底部から丸味をもって外傾する体部は、中位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は外反して端部が角張る縁帯状となり、さらに上方に挽き出されて受け口状となる器形を示す。ロクロ不使用成形された個体は、口縁部は内外面ともヨコナデかヘラナデ、体部は内外面ともヘラナデかハケメで調整される特徴があり、一部 (2265・2267・2269 など) には輪積り痕が明瞭に観察される個体もある。底部から丸味をもって外傾する体部は頸部で窄み口縁部は外反する器形を示す。一部には壺形に近い状態に体部が膨らむ個体 (2269・2274) や、底面に木葉痕を付着する個体 (2267・2277) もある。さらに、器形には大小関係が見られ、大・中・小ともに出土している。

鉢 (2283～2285) - 床面や埋土内からロクロ使用成形され底部が回転糸切り離し無調整の 2 点とロクロ不使用成形された 1 点の体部下位から底部を残す破片が出土している。小型壺の可能性も考えられるが、当遺跡での出土例から見て小型鉢と推定されるものの、詳細は不明である。

壺 (2286・2287) - カマドと埴土内からロクロ使用成形された2個体の破片が出土している。2点ともほぼ同様の様相を示すが、2286は口縁部から肩部上位を残し、口縁部が外面ハケメ、内面ヨコナデとミガキで調整される。体部は外面が磨き後赤彩されており、内面はミガキのみである。肩部から窄まった頸部は口縁部が外湾する器形である。2287は口縁部と体部の一部を欠失するもののほぼ完形に近い状態まで復元されている。底部から大きく外傾する体部は、中位に最大径をもって頸部で大きく窄む算盤玉に近い形をなし、口縁部は外湾する器形である。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がミガキのち赤彩で内面はハケメで調整される。

小型土器 (2284) - 埴土内から猪口形の完形が1点出土している。ロクロ使用成形され内外面ともナデ調整される。

須恵器 (第234・237図、写真図版444・446)

埴土内からの出土を主体に坏9点、壺1点、瓶1点の合わせて11点出土している。

坏 (2256～2264) - 9点の出土であるが、完形や全体が判明する個体が7点と際だっている。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面も再調整は見られない。器形は土師器坏のそれと大同小異であり、底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直線的に外傾したり外反したりする器形である。大きさは、口縁部径が14.8cm～13cm、底部径7cm～5.6cmで比率は2.64～1.85である。

壺 (2288) - 床面から口縁部から底部までを残す破片が1個体出土している。ロクロ使用成形され体部外面下部にヘラケズリ調整があるものの、その他はロクロ使用成形痕のみである。比較的径の大きい底部から丸味をもって外傾する体部は肩部に最大径を持ち、頸部で大きく窄んだのち口縁部はほぼ直立する直口形の器形をなす。

瓶 (2290) - ロクロ使用成形された肩部付近の小破片が1点出土している。

鉄製品 (第237図、写真図版541)

埴土内から刀子の切っ先が1点出土している。

刀子 (181) - 残存全長2.2cm、最大幅8mm、厚さ3mmの大きさがあり、打面径が楔形である。

〔遺構の時期〕

遺構と出土した土師器や須恵器の特徴から9世紀前半代に位置づけられる遺構と推定される。

7) CVI p 7 住居跡

〔遺構〕 (第195・196図、写真図版138)

調査範囲の西端から約452m東によったCVI区の西端よりに位置し、CVI g 21住居跡は東北東に約67mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

東-西約 4.1 m、南-北約 3.8 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 100 度東に偏した隅丸台形気味の方形を示す。壁高は約 40 cm ほどで床面に対してやや外傾し、全体として突辺状で軽い起伏がある。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築されるが、全体に掘り形があり黄褐色と暗褐色が混合したシルトで埋め戻した後、その上面を貼り床して床面としている。床面には若干の小起伏があるものの全体としては平坦で踏みしめによって堅い。床面から壁溝や土坑といった付属施設はまったく検出されていない。埋土は 2 層に細分されるが、そのほとんどを 2 層がしめている。土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色と明黄褐色や黒色・黒褐色が混在した層に細分される。炭化物や礫が混入し、さらに異なるシルト粒が混じる。下層に特定の層が厚く堆積する状況から人為的に埋め戻されている可能性がある。

カマドは北壁のほぼ中央に設置されている。残存状態があまりよくないが、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されている。全体の規模は、袖部幅が約 1.15 m、奥行き約 50 cm、高さ約 10 cm と残存状態が不良であるが、さらに壁外に約 1.3 m 延びる煙道部が付属する。個別の規模は、左側袖部は幅が約 50 cm、奥行き 50 cm、高さ約 10 cm、右側袖部は幅が約 30 cm、奥行き約 40 cm、高さ約 5 cm ほどで、暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約 60 cm、奥行き約 50 cm の広さがあり、焼土は焚き口部の手前から中央部付近にかけて径約 40 cm の楕円形状に約 5 cm の厚さで堆積する。火床は周辺部の床面とほぼ同位で続き、奥壁で僅かな段差で煙道部と接続する。煙道部は全体が地中に掘られ土管状をなす割り貫き式であるが、幅が約 25 cm、高さ約 25 cm で断面形が突辺の方形状である。底面には軽い起伏があるものの奥壁から煙出し部に向かって次第に低くなる特徴がある。煙出し部は径約 30 cm の不整な楕円形をなし深さが約 70 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 238 図、写真図版 446・529)

埋土内から土師器 9 点、須恵器 4 点の他、石製品が 1 点の合わせて 14 点の出土である。

土師器 (第 238 図、写真図版 446)

埋土内からの出土を主体に 9 点の出土であるが、器種としては坏 3 点と壺 4 点、鉢 2 点がある。

坏 (2291 ~ 2293) - すべて埋土内からの出土である。完形や全体の判明する個体の出土はなく、口縁部から体部下位と体部下位から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転筒切り離し無調整で、体部の内外面とも再調整はない。底部からやや丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直線的に外傾する器形を示す。色調などから土師器として分類したが、本来は須恵器の焼成不良品である可能性も考えられる。

壺 (2296 ~ 2299) - 埋土内から体部下位から底部を残す破片が 4 点出土している。すべてロクロ使用成形され、体部の内外面にヘラナデ調整痕を残す。全体的な器形は不明であるが、底部の周囲が外方に突出する特徴がある。小型品だけである。

鉢 (2300・2301) - 埋土内からロクロ使用成形された1点と不使用成形1点の合わせて2点の出土である。壺と状況が近似しているが、壺に比較して体部の外傾度の強い個体を鉢とした。ロクロ使用成形の個体は底部の切り離しが回転糸切り離し無調整である。

須恵器 (第238図、写真図版446)

埋土内からを主体に、床面とから4点の出土であるが、器種として坏2点、壺2点がある。

坏 (2294・2295) - 完形と全体を残す破片の2点の出土である。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離しと回転篋切り離しとともに無調整であり、体部は内外面とも再調整はない。器形には底部から丸味をもって外傾し口縁端部が小さく外反する個体と、底部から直線的に外傾する体部が口縁端部で軽く外湾する個体とある。大きさは、口縁部径が13.8 cm～13 cm、底部径が7.5 cm～7 cmで比率は1.85と1.84である。

壺 (2302・2303) - 埋土内から体部と底部の小破片が各1点の2点出土している。詳細は不明であるが、2302はロクロ使用成形と推定されるが、2303は不使用成形の可能性が高い。

石製品 (第238図、写真図版529)

埋土内から小型の砥石が1点出土している。

砥石 (126) - 全長4.6 cm、最大幅1.8 cm、厚さ1.8 cmの大きさがあり、ほぼ全面に使用面を持つ砥石である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

09 CVIg 21 住居跡

〔遺構〕 (第197図、写真図版139)

調査範囲の西端から約507 m東によつたCVI区の東端部よりに位置し、CVIf 22住居跡は東に約3.5 mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

東-西約2.8 m、南-北約2.8 mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約85度西に偏した隅丸で突辺気味の平行四辺形的な方形である。壁高は約15 cmほどで、壁は床面に対して95度～100度で外傾する。壁には軽い凸凹は見られるもののほぼ直線的であり、規則的な壁とすることができよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面としている。床面には若干の起伏はあるものの、全体として平坦で踏みしめによって堅い。壁溝の検出はないが、東壁沿いの床面からp1の土坑と小窪みが3ヶ所検出されている。平面形と規模そして位置は柱穴的であるが、浅いことと1基のみであることに疑問があり断定できない。埋土は全体が8層に細分されているが、土性はすべて砂質シルトと共通しており、色調は黒褐色と黒色である。全層に黄褐色シルト粒が混入し、さらに炭化物粒や焼土

粒も混在する層が多い。一部攪乱はあるものの、土層に乱れが観察されることから人為的な残土の投棄があったものと推定される。

カマドは西壁のほぼ中央一度全体を掘り込んで埋め戻した後その上に設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で検出されている。全体の規模は、幅が約80cm、奥行き約60cm、高さ約20cmほどであり、さらに壁外に約1.2m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側の袖部は幅が約25cm、奥行き約60cm、高さ約20cmで、右側袖部は幅が約39cm、奥行き約55cm、高さ約10cmの規模があり、袖部は焚き口部に河川礫を埋設しその周囲に暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約40cm、奥行き約45cmの広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部付近から奥壁部分まで約45cm×30cmの範囲に約3cmの厚さで広がっている。煙道部は地中に土管状に掘られた割り貫き式であり、幅約28cm、高さ約15cmの断面逆台形をなす。底面には起伏があり、さらに奥壁から煙出し部に向かって大きく下がる特徴がある。煙出し部は径約30cmの楕円形で深さが約45cmの土坑状である。

〔遺物〕(第239図、写真図版446)

床面と埋土内から土師器が1点と須恵器2点の3点が出土している。

土師器(第239図、写真図版446)

床面から壺が1点出土している。

壺(2304) - ロクロ不使用成形された口縁部から底部までを残す破片での出土である。底部から丸味をもって外傾する体部は球形をなし、頸部で大きく窄んだ後口縁部は外反する器形を示す。体部外面は上部がヘラナデ、下部がヘラケズリで調整され、内面はヘラナデである。

須恵器(第239図、写真図版446)

埋土内と床面から大甕の破片が2点出土している。2305は頸部付近の破片であるが、ロクロ使用成形され外面にロクロ成形痕と並行叩き具痕が付される。2306は外面に並行叩き具痕を持ち内面に無文の当て具痕を付す肩部付近の破片である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴からは9世紀初期頃が推定されるが、出土した遺物の特徴では出土量が少ないので断定はできないがロクロ不使用成形の壺の存在などから9世紀前半代が想定されることから、9世紀前半代の位置づけられるものと考えられる。

09 CVIf 22 住居跡

〔遺構〕(第198図、写真図版140)

調査範囲の西端から約511m東によったCVI区の東端部よりに位置し、CVIe 24住居跡は北東に約10mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

東-西約3.3m、南-北約3.3mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約90度東に偏

したやや不整な台形気味の方形を示す。壁高は約 20 cm ほどで、床面に対して大きく外傾する断面皿形に近い状況である。壁には若干の凸凹が見られるものの、総じてみれば隅丸でやや突刃的であるがほぼ規則的な壁と言えよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされるが、全体としてやや起伏がありほぼ全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面から p1 と p2 の 2 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模から見て柱穴とは考えられない。特に p1 は貼り床されていることから、当住居跡より古いかもしくは貯蔵穴が何らかの理由により埋め戻された可能性が高い。埋土は全体が 3 層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通し、色調のみが黒色・暗褐色・黒褐色に分けられている。1 層には十和田 a 降下火山灰が混入し、さらに全層に炭化物粒や焼土粒として異質な土壌粒が混入している。土層に乱れが見られることから人為的に残土が投棄された可能性がある。

カマドは東壁の西隅部よりに設置されるが、残存状態が不良であるものの燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されている。袖部が残存していないので全体的な規模は不明である。したがって、燃焼部の広さも定かでないが、燃焼部の焼土は 40 cm × 30 cm の隅丸の三角形の範囲に層厚約 3 cm で広がっている。煙道部は壁外に約 1 m 延びており、幅が約 30 cm、深さが約 25 cm であり、検出の状況では掘り込み式であるが、煙道部の底面が煙出し部に向かって次第に低くなる特徴から、本来は割り貫き式であった可能性がある。煙出し部煙道部の先端部といった状態であり、特に土坑状というほどではないが、深さが約 30 cm ほどあるらしい。

〔遺物〕(第 240 図、写真図版 446・447)

床面や埋土内から土師器が 15 点と須恵器が 3 点の合わせて 18 点が出土している。

土師器(第 240 図、写真図版 446・447)

床面からの出土を主体に 15 点の出土であるが、器種には坏 10 点と甕 5 点がある。

坏(2307～2316) - 完形はなく口縁部から底部を残す個体が 1 点の他はいずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面は 2314 のヘラケズリ調整以外は無調整であるが、内面はミガキ後黒色処理される 8 点と再調整のない 2 点がある。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直線的に外傾したり軽く外反する器形を示す。大きさは、口縁部径 14 cm～13.4 cm、底部径 6.4 cm～6 cm で比率は 2.36～2.09 である。

甕(2320～2324) - 床面とカマドから 5 点の出土であるが、完形は含まずいずれも口縁部から体部を残す破片と体部破片での出土である。すべてロクロ使用成形され大型の個体には体部の内外面にヘラナデ痕が見られるものの、他は内外面とも無調整である。底部から外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は大きく外反して端部が角張る縁帯状を示し、さらに上方に挽き出されて受け口状をなす。なお、2320 は鉢である可能性が高い。器形には大

小があり、大・中型が出土している。

須恵器（第240図、写真図版447）

床面とカマドから坏が3点出土している。

坏（2317～2319）—完形の出土はなく口縁部から底部を残す破片と体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。器形は土師器のそれと大同小異である。大きさは、口縁部径が14.6cm、底部径5.8cmで比率は2.51である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

00 CVIe 24 住居跡

〔遺構〕（第199・200図、写真図版141）

調査範囲の西端から約520m東によったCVI区の東端部に位置し、CVIc 25住居跡は東に9mの距離がある。他の遺構との重複もなく単独で検出された。

北東—南西約5m、南東—北西約5mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約45度西に偏した隅丸のやや台形気味の方形である。壁高は約20cmほどであり、床面に対して95度～100度ほどで外傾している。壁には若干の起伏はあるものの全体としては直線的であり、総じて規則的な壁と理解できよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され貼り床されることなくそのまま床面とされ、若干の起伏はあるが全体として平坦で踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p8の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模と位置からp1～p4の4基は当住居跡に伴う支柱穴と推定され、さらにp5とp7の存在から一度建て替えか柱の入れ替えをしたものと考えられる。p8は窪み状であるが、p6は位置と規模から出入口施設（梯子掘えつけ穴）に関連する柱穴である可能性がある。埋土は全体が6層に細分されるが、土性は粘土質のシルトとシルトに分けられ、色調は黄褐色と黒褐色に二大別される。全体として粘性があり、炭化物や焼土量が混入している。自然堆積で埋没したものと考えられる。

カマドは北西壁のほぼ中央に設置され、あまり残存状態はよくないが袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されている。袖部は残存不良のため全体規模は定かでないが、幅が約1m以上、奥行き約60cmほどと推定され、さらに壁外に約1.4m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左袖部は幅が約30cm、奥行き約65cm、高さ約10cmで、右側袖部は残存しないため不明であり、袖部は焚き口部と一部に芯として河川礫を埋設した後シルトを積み上げて構築したものらしい。燃焼部も定かでないが、幅が約40cmくらいか、奥行き約60cmほどの広さと推定

され、焼部部の焼土は焚き口部付近から中央部付近まで90cm×40cmの長楕円形状に約5cmの厚さで堆積する。火床は周囲の床面より幾分下がっているが、奥壁で若干高くなって煙道部と接続する。煙道部は全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式である。幅が約30cmほどで断面楕円形状をなす。底面には起伏もなく平坦であるが、全体が煙出し部に向かって低くなる特徴があり、最深部で約50cmある。煙出し部は径約20cmの円形で深さが約50cmの土坑状である。

(遺物) (第241・242図、写真図版447・448・527・531)

埋土内からの出土を主体に埋土内などから土師器9点と須恵器8点の他、磁石1点と鉄製品1点が出土している。

土師器 (第241図、写真図版447・448)

床面からの出土を主体に9点の出土であるが、器種として坏4点、壺4点、鉢1点がある。

坏 (2325～2328) - 完形や全体を残す個体はなく、いずれも体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離して2325と2326は再調整されるが、他は無調整である。体部の外面はいずれも無調整であるが、内面はミガキ後黒色処理である。全体的な器形は断定し難いが、底部から体部は丸味をもって外傾するらしい。

壺 (2336～2339) - 床面から4点の出土であるが、完形はないものの頸部から底部までを残す個体を1点含む他は、口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。2337はロクロ不使用成形であるが、他はロクロ使用成形され体部の外面はロクロ成形痕とヘラケズリ調整され、内面はロクロ成形痕やカキメである。小型の底部は回転糸切り離し無調整である。全体的な器形は定かでないが、比較的径の小さい底部から外傾する体部は上位に最大径をもって頸部で僅かに窄むらしい。2337は口縁部外面がヨコナデ、体部は内外面ともヘラナデ調整である。外傾する体部は頸部で口縁部が外傾する器形である。

鉢 (2340) - 体部下位から底部を残す破片が1点埋土内から出土している。ロクロ使用成形され、外面がヘラナデ、内面にロクロ成形痕を残し、底部は回転糸切り離し無調整である。壺より径の大きい底部から壺より体部が大きく外傾する器形である。

須恵器 (第241図、写真図版447・448)

床面からの出土を主体に坏7点と壺1点の合わせて8点の出土である。

坏 (2329～2335) - 床面からの出土を主に7点の出土であるが、完形が2点の他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整で、体部の内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が外湾気味に外反する器形を示す。大きさは、口縁部径が16.2cmと13cm、底部径は6cmと5.8cmで比率は2.7と2.23である。

壺 (2341) - 外面が並行叩き具痕、内面が無文の大壺の体部破片が1点出土している。

石製品 (第242図、写真図版527)

埋土内から磁石が1点出土している。

磁石(106) - 奥羽山地の中新統産の流紋岩を素材とし、大きさは全長11.5 cm、最大幅7.8 cm、最大厚4.8 cm、重さ360.5 gである。3面に使用面を持ち下端に自然面を残す他、使い減りによって薄く偏平状の部分もある。

鉄製品(第242図、写真図版531)

カマド脇の床面から刀子が1点出土している。

刀子(9) - 基部に木質の柄部分を残存する完形が1点出土している。全長が16.7 cm、刃部長11.3 cm、刃部幅1.3 cm、の大きさがあり、棟は平棟、関は両関である。刀身はやや反りを持ち切っ先に向かって次第に細身となる。基部も柄元から先端に向かって次第の幅狭となる。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀中頃から後半代に位置づけられるものと推定される。

8) CVIc 25 住居跡

[遺構](第201・202図、写真図版142)

調査範囲の西端から約527 m東によったCVI区の最東端部に位置し、CVIf 2住居跡は南東に約14 mの距離がある。重複遺構はなく単独で検出された。

東一西約4.2 m、南一北約4.1 mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約5度東に偏したほぼ正方形に近い隅丸の方形である。壁高は約15 cmほどあり、壁は床面に対して幾分外傾している。壁には若干凸凹が見られるものの、総じて直線的で規則的な壁と言えよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され貼り床されることなくそのまま床面とされるが、平坦でほぼ水平に近い状態を示し、全体が踏みしめによって堅い。壁溝の検出はないが、カマド左側の壁際床面からp1の土坑が1基検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置は柱穴的であるが1基だけの検出に疑問があり、柱穴として断定は困難である。埋土は全体が5層に細分されるが、土性は上位層はシルト、下位層が粘土質シルトと違いが見られる。1層には十和田a降下火山灰が混在し、他の層には黄褐色シルト粒が混入している。土層の堆積状況を観察すると、自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは北壁のほぼ中央に設置されるが、全体として残存状態が不良であるものの、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されている。全体的な規模は袖部の残存状態が良くないので定かでないが、残っている袖部の残骸から暗褐色のシルトを積み上げて構築したものらしい。燃焼部は焼土から場所の推定ができるのみであるが、焼土は径約50 cmの楕円形状に層厚約5 cmで広がっている。火床は周囲の床面より若干低くなり、裏壁とはほぼ同位で接続する。煙道部は地中に土管状に掘られた割り貫き式であり、長さが約1.6 m、幅約30 cmである。底面は平

埴であるが、煙出し部に向かって次第に低くなって煙出し部へと続く。煙出し部は径約 30 cm の円形状をなし、深さが約 25 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 243 図、写真図版 448)

床面からの出土を主体に土師器が 9 点と須恵器 7 点の合わせて 16 点の出土である。

土師器(第 243 図、写真図版 448)

埋土内から坏が 4 点と床面から甕が 4 点、鉢 1 点の 9 点が出土している。

坏(2342～2345)－いずれも埋土内からの出土であるが、完形は含まず、全体が判明する 1 個体以外は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し再調整 1 点(2343)と無調整の 3 点がある。体部の外面はミガキ調整される 1 点(2343)と無調整の個体があり、内面もミガキ後黒色処理される 3 点と再調整のない 1 点(2345)がある。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直線的に外傾したり内湾気味となって直口気味になる器形がある。大きさは口縁部径が約 15 cm、底部径は約 5.2 cm で比率は 2.72 である。

甕(2352～2355)－4 点の口縁部から体部や体部から底部の破片が床面やカマドから出土している。すべてロクロ不使用成形され、体部外面がハケメやヘラナデ、ヘラケズリなどで調整され、内面もほぼ同様な状況であり、口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。体部の器形は不明であるが、口縁部は頸部から外湾する。器形には大小があるらしい。

鉢(2356)－体部下位から底部を残す破片が 1 点出土している。ロクロ不使用成形され、体部外面はヘラケズリ、内面はミガキ調整される。甕より径の大きい底部から体部が大きく外傾することにより鉢としたが、全体的なことは不明である。

須恵器(第 243 図、写真図版 448)

床面から坏が 6 点と甕が 1 点の 7 点が出土している。

坏(2346～2351)－床面から 6 点の出土であるが、完形や全体の判明する 3 点以外は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し再調整 1 点(2347)のほかは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整はない。底部から丸味を持ったり直線的に外傾する体部は口縁端部が外反したり直線的に外傾する器形であり、土師器の器形とほぼ同様である。大きさは、口縁部径が 16 cm～3 cm、底部径 8 cm～6 cm で比率が 2.39～2 である。

甕(2357)－内外面に並行叩き痕と当て具痕を付す大甕の体部破片である。

〔遺構の時期〕

遺構の状況からは 9 世紀初頭が推定され、さらに出土した遺物の状況からもまた 9 世紀前半代が推定されることから、当住居跡は 9 世紀前半代に位置づけられるものと考えられる。

② CVIf 2 住居跡

〔遺構〕(第 203 図、写真図版 143)

調査範囲の西端から約 536 m 東によった CVIf 区の西端部に位置し、CVIfc 3 住居跡は北に約 13 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。開田時の削平によって残存状態が悪く位置によっては痕跡程度の残存である。

東-西約 3.7 m、南-北約 3.7 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 90 度東に偏したやや隅丸の不整な方形をなす。壁高は深い位置で 5 cm ほどで場所に寄っては痕跡程度であり、床面に対して外傾している。壁は攪乱によって凸凹が著しくて突辺状となる場所が多く見られ、とくに東壁はその傾向が強い。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、貼り床することなくそのまま床面とされるが、東壁部は攪乱で起伏が激しいものの、ほかの部分はほぼ平坦で全面が踏みしめによって堅い。壁溝の検出はないが、床面から p1~p5 の 5 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、いずれも柱穴とするには規模が大ききばかりでなく、位置も不自然であることから柱穴とは判断できない。特に東壁沿いに並ぶように位置することは貯蔵穴的でもある。埋土は全体が 5 層に細分されているものの、土性は上層がシルト、下層が粘土質シルトであり、色調も黒褐色と黄褐色である。しかし、開田時の攪乱が著しいことから攪乱層との識別が困難であったことも事実である。攪乱が著しいことと埋土の層が薄いことから判然としないが、自然埋没したものと考えられる。

カマドは東壁の北隅部よりに設置されるが、攪乱によって残存状態が不良であり、袖部と燃烧部が検出されたのみである。全体規模は、幅が約 1.1 m、奥行き約 80 cm、高さ約 5 cm であり、本来であれば壁外に延びる煙道部が付属するはずであるが、不明である。各部の規模では、左側袖部が幅約 35 cm、奥行き約 80 cm、高さ約 5 cm で、右側袖部は幅約 30 cm、奥行き約 75 cm、高さ約 5 cm である。燃烧部は幅が約 45 cm、奥行き約 80 cm の広さがあり、焼土は焚き口部から中央部にかけて径約 45 cm の不整な楕円形状に層厚約 4 cm で広がっている。煙道部と煙出し部は検出されていないことからまったく不明である。

〔遺物〕(第 244 図、写真図版 449)

床面からの出土を主体に土師器 12 点と須恵器 3 点の合わせて 15 点の出土である。

土師器 (第 244 図、写真図版 449)

床面や土坑内から環 6 点と甕 6 点の出土である。

環 (2358~2363) - 6 点の出土であるが、完形や全体の判明する個体はなく、いずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整とヘラケズリ再調整される個体に分けられる。体部外面も下位がヘラケズリ再調整される個体とまったくない個体に分けられ、内面もミガキ後黒色処理されるものと無調整のものに細分される。破片での出土のため全体の器形は定かでない。

壘(2367～2372) - 6点の出土であるが、口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土であり、完形や全体の分かる個体はない。すべてロクロ使用成形されるが、体部の内外面がロクロ成形痕のみを残す鉢的な比較的小型の個体と、内外面ともヘラケズリやヘラナデによって再調整される中・大型の個体がある。底部の切り離しに回転糸切り離し無調整の個体もある。

須恵器(第244図、写真図版449)

床面と埋土内から坏2点と蓋1点の3点が出土している。

坏(2364～2365) - 2点の出土であるが、口縁部から底部を残す個体と底部のみを欠失した個体を含む。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し再調整があり、体部は内外面とも無調整である。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が外反する器形をなす。大きさは口縁部径15.4cm、底部径8cmで比率は1.92である。

蓋(2366) - 完形が1点出土している。ロクロ成形され天井部に回転糸切り離し無調整痕が残る摘みの無い器形である。重ね焼きされた火漚が付着する。端部は直角気味となり、天井部は比較的厚くなる。大きさは、口縁部径が11.8cm、天井部径6cmである。内面が靨として転用されている。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定はできないが、出土した遺物の特徴から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

③ CVIc3住居跡

[遺構](第204・205図、写真図版144)

調査範囲の西端から約541m東によったCVI区の西端部に位置し、BVIx7住居跡は北東に約18mの距離がある。重複する遺構はなく、単独で検出された。開田時の削平攪乱によって残存状態が悪く、全体が痕跡的な検出状況である。さらに、中央部を南北方向に溝状の攪乱があり、掘削されている。

東-西約4.5m、南-北約4.5mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して5度ほど西に偏したやや隅丸の方形を示す。壁高は約3cmほどと痕跡程度であり、ほぼ直立状態と推定される。壁はほぼ直線的であり、規則的な壁であったと推定される。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され貼り床されることなくそのまま床面とされており、全体が平坦でほぼ水平に近く、踏みしめによって堅い。壁沿いの床面から幅約5cm～10cm、深さ約10cmほどの壁溝がカマド部分を除いて全周する。深さはほぼ一定であるが、幅には場所によって広狭の差があり、東壁沿いが全体として狭くなっている。さらに、床面からp1の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置から柱穴や貯蔵穴とは考えられず窪み的な土坑である。埋土

は2層に分けられるが、土性はいずれもシルトであり、色調はともに黒褐色である。粘性があり焼土粒や黄褐色土粒が混入する。削平によって埋土の残存状態が不良であることから、自然埋没かは断定できない。

カマドは北壁のほぼ中央に設置されているが、開田時の新しい覆土によって右側約半分が残存していない。検出されたのは左側袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部であるが、左側だけである。全体規模は不明であるが、左側袖部は幅約50cm、奥行き約70cm、高さ約5cmほどであり、そのほとんどが削平されている。燃焼部の広さは不明であるが、焼土は径約60cmの不整な楕円形状に広がることから、燃焼部は焼土の分布範囲ほどの広さと推定される。火床は周辺部の床面より僅かに低くなり、奥壁部分が幾分高くなって煙道部と接続する。煙道部は壁外に約1.5m延びるが、幅は不明である。底面は若干凸凹があり、奥壁部から煙出し部に向かって次第に低くなる特徴が見られることから、本来は割り置き式であった可能性が考えられる。煙出し部は僅かの残存であるため詳細が不明であるが、深さは約10cmほどある。

〔遺物〕(第245・246図、写真図版449・450)

床面からの出土を主体に土師器10点と須恵器5点の合わせて15点の出土である。

土師器(第245図、写真図版449・450)

10点がほとんど床面から出土しているが、器種には坏4点、壺5点、鉢1点ある。

坏(2373～2376)－4点の出土であり、2点はほぼ完形であるが他は体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは再調整で不明の1点以外は回転糸切り離し無調整であり、体部の再調整はすべてないが、内面はミガキ後黒色処理される1点の他は無調整である。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直線的に外傾する器形である。大きさは、口縁部径が13.5cm～12.4cm、底部径ともに5cmで比率は2.7～2.48である。

壺(2378～2381・2383)－床面からの出土を主に5点の出土であるが、完形と口縁部から底部を残す各1個体の他は口縁部から体部を残す破片での出土である。ロクロ不使用成形された4点(2378～2380・2383)とロクロ使用成形の1点がある。前者は体部の内外面がハケメやヘラナデで、口縁部がヨコナデで調整される。底部から直線的や丸味をもって外傾する体部は頸部で窄んだのち口縁部が外反する器形をなし、口縁部は先細りとなる。後者は体部の内外面にロクロ成形痕を全面に残し、体部が底部から丸味をもって外傾し、上部に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は外傾した後端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に突き出され受け口状の器形をなす。器形には大小関係があり、その両者が出土している。

鉢(2382)－ロクロ不使用された口縁部から底部を残す個体が1点出土している。口縁部は外面がヨコナデで内面はミガキ、体部は内外面ともミガキ調整されている。小型の壺に近い器形である。

須恵器（第245・246図、写真図版449・450）

床面から坏1点、壺3点、瓶1点の5点の出土である。

坏（2377）－一部から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である以外は、小破片のため定かでない。

壺（2384～2386）－床面から口縁部や口縁部から肩部そして頸部付近の破片が各1点の3点の出土である。すべてロクロ使用成形され内外面にロクロ成形痕を残し、一部には並行叩き具痕を付す個体もある。

瓶（2387）－ロクロ使用成形された頸部の破片が1点出土しているが、小破片であるため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴では9世紀前半代の可能性を示し、出土遺物の推定時期とも差がないことから当住居跡は9世紀前半代に位置づけられるものと考えられる。

04 BⅦx7住居跡

〔遺構〕（第206図、写真図版145）

調査範囲の西端から約550m東によったBⅦ区の西端部に位置し、CⅦb7住居跡は南に約15mの距離がある。重複する遺構は無く単独で検出されている。

東－西約2.2m、南－北約1.9m軒薄があり、平面形は主軸が磁北に対して約85度東に偏し、隅丸で突辺となり三昧線跡に近似した長方形である。壁高は約35cmほどであり、床面に対して約100度ほどで外傾する。壁は既述のように突辺となる他、若干凸凹があり、規則的な状況ではない。床は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトで構築されるが、貼り床されることなくそのまま床面とされるが、床面は起伏が著しいもの踏みしめによって全面が堅い。壁溝は検出されていないが壁沿いの床面が階段状の2段となっている。床面のカマド燃焼部付近からp1の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置がカマドの燃焼部であるなど、貯蔵穴や柱穴ではないことは確実である。埋土は全体が4層に細分されているが、土性はすべてシルトであり、色調は黒褐色を主体に黒色に分けられる。全体に粘性があり炭化物や焼土粒、黄褐色土粒が混入する。埋土の堆積状況からは一部残土の投棄によって埋め戻された可能性を示している。

カマドは東壁のほぼ中央部に設置されるが、残存状態が悪く検出されたのは煙道部と煙出し部のみである。袖部がまったく残存していないため袖部の規模は不明であるばかりでなく、燃焼部についても同様に焼土も残っていないことから不明である。煙出し部は壁外に約1m延びるが、全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式である。幅が最大径約35cmの断面楕円形をなし、底面は若干の凸凹があって全体が奥壁から煙道部に向かって低くなる特徴がある。煙道部

は径約 20 cm の円形で深さ約 50 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 246 図、写真図版 450)

埋土内から土師器 1 点と須恵器 1 点のあわせて僅か 2 点の出土である。

土師器 (第 246 図、写真図版 450)

甕が 1 点の出土である。

甕 (2388) - ロクロ不使用成形された体部界から底部の一部を残す破片が 1 点出土している。内外面ともナデ調整され、体部は底部から丸味をもって外傾するらしい。詳細は不明である。

須恵器 (第 246 図、写真図版 450)

甕が 1 点出土している。

甕 (2389) - ロクロ使用成形されヘラケズリ調整された体部の破片が 1 点出土しているが、細片のため全体的なことは不明である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土遺物の特徴から 9 世紀代に位置づけられるものと推定される。

49 CVIb7 住居跡

〔遺構〕(第 207・208 図、写真図版 146)

調査範囲の西端から約 554 m 東によった CVI 区の西部に位置し、BVIIv 8 住居跡は北に約 23 m の距離がある。南隅部付近の床面が CVIc7 陥し穴状遺構と重複しているが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約 4 m、南-北約 4 m の規模があり、平面形は磁北に対して約 5 度西に偏した隅丸でやや台形状の方形をなす。壁高は約 25 cm で壁は床面に対してほぼ直角状である。壁は若干の凸凹はあるものの總じて直線的な部分が多く、規則的な壁と言うことができよう。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築されるが、一部の床面はほぼ同質のシルトで貼り床して床面としている。床面自体には大きな起伏はなく、全体として平坦で水平に近く全体が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、南隅部で p1 の土坑が検出されているが、精査の結果縄文時代の陥し穴状遺構と推定されたことから、当住居跡とは関係ない土坑である。埋土は 10 層に細分されているが、土性はいずれもシルトであり色調は黒褐色を主体に黒色と暗褐色に分けられる。埋土の大半を占める 2 層には十和田 a 火山灰が混在するほか全体として粘性があり、炭化物粒や焼土粒、黄褐色土粒等異質な夾雑物が混在する層が多い。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、袖部や燃焼部の他、煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。全体の規模は幅が約 85 cm、奥行き約 70 cm、高さ約 20 cm であり、さらに壁

外に約 1.65 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側の袖部は幅約 30 cm、奥行き約 70 cm、高さ約 20 cm で、右側の袖部は幅約 30 cm、奥行き約 55 cm、高さ約 20 cm ほどであるが、袖部は基底部に地山を残した地山削りだして上部に暗褐色のシルトを積み上げさらに焼き口部に河川礫を埋設して構築している。燃焼部は幅約 35 cm、奥行き約 75 cm の広さがあり、焼土は焼き口部から中央部まで径約 50 cm の楕円形状に約 5 cm の層厚で堆積し、袖部の内壁も焼成を受けている。また、中央部や奥の左側袖部よりに河川礫を埋設した支脚がある。火床は周辺部の床面より僅かに低くなっており、奥壁で若干高くなって煙道部と接続する。煙道部は全体が地中に土管状に掘られた削り貫き式であるが、径約 30 cm で断面楕円形状をなし、底面は若干の起伏はあるものの全体としては水平に近い。煙出し部は径約 30 cm の楕円形で深さが約 50 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 246 図、写真図版 450)

床面の埋土内から土師器 6 点、須恵器 2 点の合わせて 8 点が出土している。

土師器(第 246 図、写真図版 450)

床面と埋土内から 6 点の出土であるが、器種としては坏 1 点と甕 5 点がある。

坏(2390)－埋土内からロクロ使用成形された体部から底部を残す破片が 1 点出土している。体部の内外面はロクロ成形痕を残し、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。全体的な器形は小破片のため不明である。

甕(2393～2397)－床面と埋土内からロクロ不使用成形された口縁部から体部か体部から底部を残す破片が 5 点出土している。もしかすると 2397 は外面に赤彩があり、本来は壺である可能性が高い。体部の外面はヘラケズリかヘラナデと共通し、内面はすべてヘラナデと共通している。木葉痕を残す底部から丸味をもって外傾する体部は上位に最大径をもって頸部で窄み、頸部から外傾する口縁部は内外面ともヨコナデ調整される。

須恵器(第 246 図、写真図版 450)

床面と埋土内から坏が 2 点出土している。

坏(2391・2392)－ロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。底部から外傾する体部は僅かな丸味をもち、口縁部は直線的に外傾する。大きさは口縁部径 14.1 cm、底部径 5.7 cm で比率は 2.47 である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴と出土した土師器の特徴からほぼ 9 世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

08 BVIV 8 住居跡

〔遺構〕(第 209・210 図、写真図版 147)

調査範囲の西端から約574 m東によったBVⅥ区の西部に位置し、CVⅤe 8住居跡は南に約35 mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

東-西約4.1 m、南-北約4.1 mの規模があり、平面形は主軸磁北に対して約5度東に偏しやや隅丸の方形である。壁高は約25 cmほどであり、床面に対して約95度で外傾する。壁には僅かな凸凹があるものの総じて見ればほぼ直線的であり、規則的な壁ということができよう。床は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されること無くそのまま床面とされている。床面は若干の起伏があり、特に中央部付近が若干高く壁沿いが低くなる状況が見られるものの、全体としては平坦で全面が踏みしめによって堅い。壁溝の検出はないが、カマドの両側壁跡の床面にp1とp2の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置からは貯蔵穴か柱穴と考えられるが、規模特に深さに疑問があり断定できない。埋土は全体が5層に細分されるが、そのほとんどは最上層の1層で占められる。土性はすべてシルトと共通し、色調は黒色を主体に黒褐色と黄褐色があり、いずれの層にも炭化物や焼土のほか、異質な土を混入する。自然埋没した遺構と考えられる。

カマドは北壁のほぼ中央に設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されているものの、開田時の削平によって残存状態は良くない。袖部船体の規模は、幅が約1 m、奥行き約1 m、高さ約1.8 mであり、壁外に約1.3 m延びる煙道部が付属している。各部の規模では、左側袖部は幅が約20 cm、奥行き約90 cm、高さ約15 cmで、右側袖部は幅約40 cm、奥行き約70 cm、高さ約5 cmであり、袖部は芯として河川礫を埋設した後暗褐色シルトを積み上げて構築しているが、開田時の削平などによって残存状態が不良である。燃焼部は幅約40 cm、奥行き約1 mの広さがあり、焼土は焚き口部の手前から中央部にかけて55 cm×50 cmの範囲に層厚約5 cmで堆積している。火床は周囲に床面とほぼ同位で続き、奥壁で若干高くなって煙道部と接続する。煙道部は全体が地中に掘られた刳り貫き式であり、底面に若干の起伏をもって煙出し部に向かって次第に低くなる特徴がある。幅が約30 cmの断面楕円形であるが、これは開田時に重機に押しつぶされた結果である可能性がある。煙出し部は径約20 cmの楕円形で深さが約35 cmの土坑状である。

〔遺物〕(第247～249図、写真図版450・451・530)

床面や土坑・カマド等からの出土を主体に土師器9点と須恵器10点と鉄製品が1点出土している。

土師器(第247・248図、写真図版450・451)

床面からの出土を主体に9点の出土であるが、器種としては坏3点、高台付き坏1点、甕4点、鉢1点が含まれる。

坏(2398～2400) - 完形や口縁部から底部を残す個体2点と体部から底部を残す個体であるが、すべてロクロ使用成形され底部の切り離しはヘラナダヤヘラケズリ再調整によって不明で

ある。体部の外面はミガキ調整される1点(2398)以外は無調整であるが、内面はいずれもミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が内湾気味となって直立気味の器形をなす。大きさは、口縁部径が13.2 cm～10 cm、底部径6.2 cm～5.5 cmで比率は2.4～1.6である。

高台付き杯(2406)－埋土内から高台の畳付け部分が1点出土している。ロクロ使用成形され、両面にロクロ成形痕を残すが、小破片のため詳細は不明である。

壺(2407～2409)－床面からの出土を主に4点の出土であるが、完形は含まず、口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ不使用成形され、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリとヘラナデやハケメ、内面はヘラナデで調整され、一部では輪積み痕を残す。底部から丸味をもって外傾する体部は中位に最大径を持ち、頸部で窄んだ後口縁部は外傾する器形である。器形には大小関係があり、そのいずれも出土している。

鉢(2410)－カマドの脇から口縁部から体部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、器面調整は壺のそれと同様である。底部から体部が丸味をもって大きく外反し、頸部で口縁部がさらに外反する器形を示す。

須恵器(第247～249図、写真図版450・451)

床面やカマドなどから10点の出土であるが、器種には杯5点、壺3点、壺1点が含まれている。

杯(2401～2405)－床面からの出土を主に5点の出土であるが、完形や口縁部から底部を残す個体が3点ある他、口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形されるが、底部の切り離しは回転盤切り離し無調整と再調整の他、回転糸切り離し無調整が混在する様相を示す。体部は内外面とも再調整はない。底部から体部が直線的に外傾し、口縁端部も直線的か軽く外反気味の器形である。大きさは、口縁部径13.5 cm～12.6 cm、底部径6.8 cm～6.2 cmで比率は2.17～1.93である。

壺(2414～2416)－カマドと埋土内から体部から底部の一部を残す2点と口縁部の小破片が1点出土している。体部の破片は外面に並行叩き具痕、内面に並行当て具痕か放射状当て具痕を付す丸底となる大壺の破片である。口縁部破片はロクロ使用成形されているが、詳細は不明である。

壺(2412～2413)－カマドから口縁部から肩部上位を残す破片が2点出土している。ロクロ使用成形され外面に並行叩き具痕、内面にカキメと放射状当て具痕を付し、頸部の窄み方からは壺と推定されるが、所謂大壺形に近い器形と考えられる

鉄製品(第248図、写真図版530)

床面直上から刀子が1点出土している。

刀子(5)－刀身部の大半を欠失するが、茎に柄の木質を残している。残る刀身は長さ約2

cm、幅約 1.4 cm で断面が楔形をなし、棟は平棟である。茎の状況は定かでないが、長さ約 6.5 cm が残っており、残存する全長は約 8.5 cm である。

〔遺構の時期〕

遺構と出土した土師器と須恵器の特徴から 9 世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

跡 CVIe 8 住居跡

〔遺構〕(第 211 図、写真図版 148)

調査範囲の西端から約 556 m 東によった CVIb 9 住居跡は北に約 15 m の距離がある。当住居跡は開田時に西側の約 50% 以上が削平されており、検出されたのは全体の東側約 30% 位と推定される。さらに、CVIc 6 溝跡と CVIf 7 溝跡が当住居跡と重複しており、当住居跡が掘削されている。

検出された東-西は約 2 m、南-北約 5.7 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 90 度東に偏した隅丸の方形か長方形と推定される。壁高は痕跡程度の最深 5 cm ほどであり、位置によってはほとんど痕跡のみである。壁の状況は残存が不良のため定かでない。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面としているが、擾乱を受けているので不明な部分もある。現状の床面はやや凸凹があるものの、全体が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、p1 と p2 の土坑が 2 基南東隅部よりの床面から検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置は貯蔵穴的であるが、断面が不整であるなど難点が見られ、断定できない。埋土は 3 層に分けられているが、残存不良であるため、必ずしも断定できない。土性はシルトと粘土質シルトであり、色調は黒色・黒褐色・黄褐色であり、2 層には十和田 a 降下火山灰が混入している。埋土がほとんど残存しないことから埋没状況の断定はできない。

カマドは明確でないが、南東隅部付近の東壁沿いに焼土が検出されており、この付近に設置されていたと推定される。したがって袖部や煙道部・煙出し部はまったく不明である。既述の焼土は燃焼部の焼土と推定され、径約 50 cm の楕円形をなし、層厚約 4 cm で堆積するが、ほぼ中央部に河川礫が埋設されることから、支脚であった可能性がある。

〔遺物〕(第 249 図、写真図版 451・541)

埋土内からの出土を主に土師器 4 点、須恵器 1 点のほか、鉄製品が 1 点出土している。

土師器 (第 249 図、写真図版 451)

4 点の出土であるが、器種には坏 3 点と壺 1 点が含まれる。

坏 (2417 ~ 2419) - 3 点の出土であるが、完形や口縁部から底部を残す個体は出土せず、いずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形で底部の切

り離しは回転糸切り離しである。体部外面はロクロ成形痕のみで再調整はないが、内面はミガキ後黒色処理される2点(2417・2418)と無処理の1点がある。体部が底部から軽い丸味をもって外傾し、口縁端部も直線的に外傾する器形である。

壺(2421) -ロクロ使用成形された口縁部破片が1点出土している。内外面にロクロ成形痕を残し、頸部から外反する口縁部は端部が角張る縁帯状をなす。

須恵器(第249図、写真図版451)

床面から坏が1点出土している。

坏(2420) -ロクロ成形された完形が1点出土している。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整で、底部からやや丸味をもって外傾する体部は口縁端部が大きく外反する器形をなす。大きさは、口縁部径13.4cm、底部径5.3cmで比率は2.52である。

鉄製品(第249図、写真図版541)

埋土内から鉄滓が1点出土している。

鉄滓(180) -長径4.5cm、厚さ1.5cmで、平面形が隅丸の三角形、断面形が扁平であり、鍛冶滓と推定される。

(遺構の時期)

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物と埋土に十和田a降下火山灰が混入すること等から、9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

跡 VIIb 9 住居跡

(遺構)(第212・213図、写真図版149)

調査範囲から約559m東によったCVII区の中央部に位置し、BVIIv 12住居跡は北東に約24mの距離がある。他遺構との重複では、CVIIg 3溝跡が当住居跡を掘削している。

東-西約3.6m、南-北約3.3mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約90度東によった隅丸の方形を示す。壁高は約20cmほどであり、床面に対して軽く外傾する。壁は一部に凸凹はあるもののほぼ直線的であり、全体として規則的な壁と理解できよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築されるが、全体的に掘方が観察され黄褐色と暗褐色のシルトを混合させた土で埋め戻し、さらにその上面を黄褐色シルトで貼り床として床面としている。床面はほぼ平坦で全体が踏みしめで堅い。壁溝は検出されていないが、南東隅部からp1の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置から当住居跡に伴う貯蔵穴と推定される。埋土は全体が4層に分けられるが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色と暗褐色そして極暗褐色である。埋土の大半を占める1層には十和田a降下火山灰が混入し、その他炭化物や焼土粒のほか、黄褐色土粒が混入する層が多い特徴が見られる。自然状態で埋没した可能性が高いものと考えられる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。全体の規模は幅約1.3m、奥行き約60cm、高さ約20cmであり、さらに壁外に約1.6m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅が約30cm、奥行き約70cm、高さ約20cmで、右側袖部は幅約50cm、奥行き約70cm、高さ約20cmで、袖部は焚き口部のほか、芯として河川礫を埋設した後その周囲に暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約50cm、奥行き約60cmの広さがあり、焼土は焚き口部から奥壁付近までのほぼ全面に層厚約10cmで堆積する。また、ほぼ中央部には土師器の壺(2425・2427)を重ねて伏せて配置した支脚がある。火床は周囲の床面とほぼ同位で続き、煙道部ともそのまま接続する。煙道部は幅約35cmで、底面には若干の起伏があって奥壁から次第に煙出し部に向かって低くなることから、検出時には掘り込み式的な検出状況であるが、本来は煙道部全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式であったものと推定される。煙出し部は幅約35cmほどで、煙道部と溝状に接続するが、深さが約45cm位であることから、元は単独の土坑状であったものと考えられる。

〔遺物〕(第249・250図、写真図版452)

床面からの出土を主に土師器8点、須恵器2点の合わせて10点の出土である。

土師器(第250図、写真図版452)

床面やカマドから8点の出土であるが、器種には坏1点と壺7点がある。

坏(2422) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片が1点出土している。体部の外面は再調整がないものの、内面はミガキ後黒色処理されている。丸味をもって底部から外傾する体部は口縁端部がやや内湾気味となる器形である。

壺(2423～2429) - 床面とカマドのほか埋土内から7点の出土であるが、ロクロ不使用成形された2点(2425・2426)とロクロ使用成形された5点(2427～2429)に分けられる。前者には完形は無く口縁部から体部を残す破片での出土である。口縁部は内外面ともヨコナデであるが、体部の外面はヘラナデやヘラケズリ、内面はヘラナデの調整が見られる。底部から外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で僅かに窄んだ後、口縁部は外反して端部は先細りとなる。ロクロ使用成形の個体は完形の大型が1点の他は口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。口縁部は内外面ともロクロ成形痕を残し、体部は外面がヘラケズリやヘラナデ、内面はヘラナデで調整される。また、一部の外面には並行叩き具痕を残す例も見られる。比較的小さい底部から丸味をもって外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は大きく外反して端部が角張る縁帯状をなしさらに上方に挽き出されて受け口状となる器形を示す。器形には大小関係が見られ、その3者が出土している。

須恵器(第249図、写真図版452)

埋土と床面から2点の出土であり、器種には壺1点と壺1点が含まれる。

壺(2431) - 外面に並行叩き具痕、内面に放射状当て具痕付す大壺の体部破片が1点出土し

ている。

査(2430)一ロクロ使用成形され、肩部から上位にロクロ成形痕の他一部に並行叩き具痕、体部の外面にヘラケズリ、内面にロクロ成形痕の他ヘラナアの調整痕を付す体部下位から底部を欠失した1点が出土している。体部上位の肩部に最大径を持ち、頸部が大きく窄んだ後口縁部が大きく外反する器形を示し、口唇部は角張り沈線状に凹む。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴と埋土内に十和田a降下火山灰が混入することから、9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

09 BⅦv 12 住居跡

〔遺構〕(第214・215図、写真図版150)

調査範囲の西端から約574m東によったBⅦ区のはぼ中央に位置し、BⅦw 14住居跡は南東に約10mの距離がある。他遺構との重複は無く単独で検出された。

東一西約5m、南一北約5.3mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して西に約5度偏した隅丸でやや台形気味の方形である。壁高は約25cmほどであり、床面に対して若干外傾している。壁には若干の凸凹が見られるものの、全体としてはほぼ直線的であり規則的な壁と言えよう。床は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトで構築されるが、全体が最深20cmの掘方があり、それを埋め戻した後褐色のシルトを貼り床して床面を構築している。床面は平坦で水平状態に近く、全面が踏みしめによって堅い。壁溝の検出はないが、床面からp1~p12の12基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や平面形はいずれも柱穴的であり、p1~p4は規模や位置から主柱穴、他の壁沿いに位置するp5~p7・p10~p12は支柱穴と考えられる。埋土は全体が6層に細分されているが、土性はシルトを主に粘土と粘土質シルトがある。色調は黒褐色・黄褐色・暗褐色などがあり、全体として粘性を持ち、十和田a降下火山灰が2~3層に混入し、他に炭化物や焼土と異質の土がブロック状に混在する。堆積状況の観察から自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは北壁のはぼ中央に設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が比較的良好な形で検出されている。全体の規模は、幅約1m、奥行き約90cm、高さ約15cmであり、さらに壁外に約1.5m延びる煙道部が付属する。各部の規模では、左側袖部は幅約30cm、奥行き約75cm、高さ約20cmで、右側袖部は幅が約30cm、奥行き約70cm、高さ約25cmであり、袖部は焚き口部に河川礫を埋設しているが、他は暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約40cm、奥行き70cmの広さがあり、焼土は焚き口部から中央部にかけて約55cm×30cmの範囲に層厚約3cmで堆積している。火床は周囲の床面よりやや低くなっているが奥壁部分で軽く高くなって煙道部と接続する。煙道部は全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式であり、径約30

cmの断面楕円形である。底面は平坦であるが、奥壁部から煙出し部に向かって軽く低くなって煙出し部と接続する。煙出し部は径約30cmの台形状をなし、深さが約45cmの土坑状である。

(遺物) (第251～253図、写真図版452～454・529)

埋土内や床面等から土師器20点、須恵器22点と石製品が1点が出土している。

土師器 (第251～253図、写真図版452～454)

埋土内からの出土を主体に20点の出土であるが、器種には坏10点、壺6点、鉢3点、壺3点が含まれている。

坏 (2432～2441) -埋土や床面から10点の出土であるが、完形や口縁部から底部を残す個体は3点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部外面は一部に再調整する個体と調整の内個体があり、内面はミガキ後黒色処理される個体(2432～2437)と無処理の個体がある。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直線的に外傾したり内湾して直口気味となったり、僅かに外反するなどの器形を示す。大きさは、口縁部径14.9cmと14.4cm、底部径6.6cmと5.2cmで比率は2.76と2.25である。

壺 (2460～2465) -埋土内からの出土を主体に6点の出土であるが、完形は1点のみで他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形は1点(2465)のみで、他はすべてロクロ不使用成形である。前者は内外面にロクロ成形痕を残し底部の切り離しは回転糸切り離し無調整の小型であり、カマド内の支脚とされていた。後者は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラナデやヘラケズリ、内面がヘラナデで調整される。底部から外傾する体部は中部に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は外反し端部は断面先細りとなる。器形には大小関係があり、そのいずれも出土している。

鉢 (2466～2468) -埋土内から3点の出土であるが、関係や全体を残す個体は無く、口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、外面がヘラケズリやヘラナデ、内面がヘラミガキの調整がある。器形は土師器壺の器高が低い器形である。

壺 (2469) -埋土内から体部から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ不使用成形され、内外面ともミガキ調整され、推定される器形は算盤玉状に膨らむ体部を持ち球胴形と考えられる。

須恵器 (第251～253図、写真図版453・454)

全体で22点の出土であるが、器種としては坏15点、壺2点、高台付き坏1点、壺4点が含まれている。

坏 (2442～2456) -床面からの出土を主体に15点の出土であり、完形や全体が判明する個体を10点含む、他は体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部

の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも再調整がないものの、「為」かと判読される墨書を持つ個体と「谷」かと思える墨書を持つ個体がある。器形は底部から直線的や丸縁をもって外傾する体部は口縁部外反する器形である。大きさは、口縁部径が17 cm～12 cm、底部径は6.8 cm～5.2 cmで比率は2.69～1.92である。

蓋(2457～2458)－埋土内から口縁部の破片が2点出土しているが、小破片のため詳細は不明である。ロクロ成形され内外面にロクロ成形痕を残す。

高台付き杯(2459)－埋土内から高台を付す体部から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ成形され底部が回転糸切り離し無調整に高台が付される貼り付け高台である。

甕(2470～2473)－埋土内から体部破片、体部から底部を残す破片、口縁部破片が合わせて4点出土している。ロクロ使用成形され内外面にロクロ成形痕を残す。

石製品(第253図、写真図版529)

床面から石帯が1点出土している。

石帯(125)－北上山系中世界産の半花崗岩を素材とし、大きさは高さ3.6 cm、幅2.7 cm、厚さ7 mmである。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴と出土した土師器や須恵器の特徴から9世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

00 BVW 14 住居跡

〔遺構〕(第216図、写真図版151)

調査範囲から約582 m東によったBV区のほぼ中央部に位置し、BVs 16住居跡は北東に約18 mの距離がある。他遺構と重複することなく、単独で検出された。

東－西約3 m、南－北約2.7 mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約8度西に偏した隅丸気味の方形である。壁高は約15 cmほどであり、床面に対してほぼ直立する。壁にはやや凸凹が見られるものの、北西隅部付近以外はほぼ直線的であり規則的な壁と言えよう。床は基本層序第IV層で構築されるが、全体が掘方を持ち、埋め戻してその上面を暗褐色シルトで貼り床して床面としている。床面はほぼ平坦で水平に近い。壁溝や柱穴状の土坑はまったく検出されていない。埋土は全体が6層に細分されているが、土性はシルトを主に粘土シルトがあり、色調は黒褐色が主体で他に暗褐色と黄褐色がある。全層に炭化物粒が混在し他に異質な土が混入する土層が多く、さらに粘性を持つ層も多く見られる。自然状態で埋没した堆積状況を示す。

カマドは北壁のほぼ中央に設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出された。袖部の全体規模は、幅約1.5 m、奥行き約70 cm、高さ約10 cmで、さらに壁外に約1.5 m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側の袖部は幅約40 cm、奥行き約70 cm、高さ約

10 cmで、右側の袖部が幅約 60 cm、奥行き約 60 cm、高さ約 10 cmであり、袖部は一部に河川礫を埋設するがほとんどが暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約 50 cm、奥行き約 65 cmの広さがあり、焼土は焚き口部付近から奥壁の手前までに 50 cm × 45 cmの範囲に層厚約 5 cmで広がる。火床は周囲の床面とはほぼ同位が続き、奥壁部で僅かに高くなって煙道部と接続する。煙道部は一部が地中に土管状に掘られていることから、本来は全体が地中に掘られた判り書き式であったものと推定される。幅が約 35 cmで断面凸レンズ状をなし、底面には若干の起伏があり奥壁部から煙出し部に向かって次第に僅か低くなっている。煙出し部は径約 30 cmの不整形であり、深さは 25 cmの土坑状である。

〔遺物〕(第 254 図、写真図版 454・455)

埋土内からの出土を主体の他、カマドから土師器 9 点と須恵器 5 点が出土している。

土師器 (第 254 図、写真図版 454・455)

9 点の出土であるが、器種には甕 6 点と鉢 3 点がある。

甕 (2476～2481) - 6 点の出土であるが、完形はまったくなく、すべて口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。又、ロクロ使用成形された 1 点 (2476) 以外はいずれもロクロ不使用成形である。前者は内外面にロクロ成形痕を残し、体部中位か上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は外反して端部が角張り、さらに上方に挽き出されて受け口状となる器形である。後者は、体部の内外面にヘラナデ、口縁部にヨコナデの調整痕を持ち、比較的径が大きく周囲に突出する底部から外傾する体部は知中位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は概湾して端部が先細りとなる器形を示す。器形には大小関係があり、そのいずれも出土している。

鉢 (2483～2484) - ロクロ不使用成形された口縁部から底部を残す個体と口縁部から体部下位を残す個体各 1 点の 2 点出土している。2483 は内外面にヘラナデとヘラミガキによる調整痕を持ち、体部が広口の球形に近い器形をなし、口縁部は軽く外反する。2484 は体部に輪積み痕を明瞭に残して内外面にナデ痕を持ち、体部が底部から直線的に外傾する器形である。

須恵器 (第 254 図、写真図版 455)

5 点の出土であるが、器種には坏 2 点、甕 2 点、壺 1 点が含まれる。

坏 (2474・2475) - 1 点は口縁部から底部を残すが他の 1 点は体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁端部で外反する器形である。大きさは口縁部径 14 cm、底部径 6.2 cm で比率は 2.25 である。

甕 (2486・2487) - 外面に並行叩き貝痕を付す 1 点と並行叩き貝痕やナデ調整される 1 点の合わせて 2 点出土している。いずれも体部や体部から肩部を残す破片であるが、前者は大甕、後者はロクロ使用成形され外面が並行叩き貝痕の後ロクロ回転によるナデ調整が観察される所

謂普通の甕と推定される。

壺 (2485) - ロクロ使用成形された口縁部の破片が1点出土しているが、小破片のため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

遺構と出土した遺物の特徴から9世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

01 BⅦa 16 住居跡

〔遺構〕 (第217図、写真図版152)

調査範囲の西端から約586m東によったBⅦa区のほぼ中央部に位置し、CⅦa 17住居跡は南に約30mの距離がある。他遺構との重複はないが、開田時の削平によって東側の約70%は残存していない。

検出された規模は、東-西が最大約2m、南-北約4mであり、平面形は主軸が定かでないものの隅丸でやや突辺気味となる方形か長方形を示すものと推定される。壁高は最深約20cmであるが、東側は残存しない。床は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトで構築されるが、貼り床されることなくそのまま床面とされ、床面は平坦で水平に近く全体が踏みしめによって堅い。壁溝や柱穴といった付属施設はまったく検出されていない。埋土は1層のみであり、土性はシルト、色調は黒褐色である。埋土の残存状態が不良であるものの自然状態で埋没した遺構と推定される。

カマドは検出されていないことから、開田時に削平されたものと推定される。

〔遺物〕 (第255図、写真図版455)

埋土内から土師器3点と須恵器3点の合わせて6点の出土である。

土師器 (第255図、写真図版455)

埋土から3点出土しているが、器種には坏2点と甕1点がある。

坏 (2488～2489) - いずれもロクロ使用成形され、底部の切り離しはヘラケズリ再調整によって不明である。体部の外面はロクロ成形痕のみで再調整のない個体とミガキ調整される個体があり、内面はミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直線的に外傾する器形を示す。大きさは口縁部径が12.6cm～12.5cm、底部径が6cmで比率は2.1～2.08である。

甕 (2493) - ロクロ不使用成形であり、体部の内外面にヘラナデやハケメ調整が付され、体部から頸部で若干窄み口縁部が外反し端部が先細りとなる器形である。

須恵器 (第255図、写真図版455)

埋土内から坏が3点出土している。

坏 (2490～2492) - 完形が2点のほか、体部から底部を残す破片が1点出土している。いず

れもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の内外面とも再調整はなく、2497の外面には重ね焼きによる火痔が残っている。器形は土師器杯のそれと大同小異であるが、口縁端部が外反する違いが見られる。大きさは口縁部径が16.2 cm～13.7 cm、底部径は6.2 cm～5.4 cmで比率は2.61～2.53である。

〔遺構の時期〕

遺構の状況から時期の特定はできないが、出土した遺物の特徴から9世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

52 CⅦa 17 住居跡

〔遺構〕(第218図、写真図版153)

調査範囲の西端から約592 m東によったCⅦ区のほぼ中央に位置し、CⅦc 18住居跡は南東に約9 mの距離がある。他遺構との重複はなく単独で検出された。

東-西約3.6 m、南-北約3.5 mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約5度西に偏した隅丸の方形をなす。壁高は約25 cmほどであり、床面に対して95度～100度で外傾する。壁は若干の凸凹はあるものの全体としては直線的であり、規則的な壁と理解できよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面としている。床面には軽い起伏があるものの、全体として平坦で全面が踏みしめで堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p3の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や位置から柱穴とも貯蔵穴とも断定できる状況ではなく、性格は不明である。埋土は全体が8層に細分されているが、土性はシルトを主体に粘土質シルトであり、色調は黒色と黒褐色を主体に暗褐色と黄褐色に分けられる。いずれの層にも黄褐色土粒の混入する特徴が見られ、その他に炭化物粒や焼土粒の混入する層も多い。南壁沿いの堆積状況に乱れがあることから、一部は後の攪乱か残土の投棄があったものと推定される。

カマドは北壁のほぼ中央に設置されるが、袖部の残存状態が必ずしも良好とは言えないものの、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各々が検出されている。残存状態が不良な袖部は、形状や規模など不明な部分が多いものの、暗褐色シルトを積み上げて構築したものらしい。燃焼部の規模も判然としないが、焼土は約30 cm×15 cmの範囲に広がり、層厚は約4 cmほどで堆積する。火床は周囲の床面とほぼ同位であるが、奥壁で軽い段差で煙道部と接続する。煙道部は全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式であり、壁外に約1.3 m延び、幅が約30 cmで断面楕円形状である。底面は奥壁部が高く中央部が低くなりながら煙出し部に接続し、全体として凸凹が見られる。煙出し部は径約40 cm×35 cmの不整形で深さが約25 cmの土坑状である。

〔遺物〕(第255図、写真図版456・531)

埋土内から土師器9点と須恵器1点のほか、鉄製品2点が出土している。

土師器 (第 255 図、写真図版 456)

埋土内から 9 点の出土であるが、器種として坏 4 点、甕 5 点が含まれる。

坏 (2494 ~ 2497) - 4 点の出土であるが、完形はないものの口縁部から底部を残す破片が 2 点と、口縁部から体部と体部から底部を残す破片が各 1 点含まれる。2494 はロクロ不使用成形されるが、他はロクロ使用成形され、前者の底部切り離しは不明であるが後者は回転系切り離しである。体部の外面はヘラケズリ (2494・2497)、ヘラミガキ (2496) の再調整があり、内面は 2494 はヘラナデのみ、他はヘラミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が内湾して直立気味となる器形である。2494 は径の大きい底部から体部が直線的に外傾し、他とやや異なる。大きさは口縁部径が 18 cm ~ 11.6 cm、底部径 6.2 cm ~ 5.8 cm で比率は 3 ~ 1.87 である。

甕 (2498 ~ 2502) - 5 点の出土であるが、完形や全体を残存する個体は含まず、口縁部から体部や体部下位から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ不使用成形され体部外面はヘラナデ調整されている。全体的な器形を推定できる大型破片ではないため定かにし難いが、口縁部が外反する器形であるらしい。

須恵器 (第 255 図、写真図版 456)

甕が 1 点の出土である。

甕 (2503) - 外面に並行叩き具痕、内面に放射状当て具痕を付す大甕の体部破片である。

鉄製品 (第 255 図、写真図版 531)

埋土から鑿と縛金具が各 1 点の合わせて 2 点の出土である。

鑿 (10) - 刃先を欠失し茎部を残す個体であり、残存全長約 16 cm、最大径約 2.3 cm、最小径約 7 mm の大きさであり、茎部は袋柄で木質が残存している。

縛金具 (11) - 薄く幅狭の鉄板を最大径約 4.3 cm、最小径約 1.7 cm の大きさに加工している。おそらく、鞘の貫金具であろう。

[遺構の時期]

遺構と出土した遺物の特徴から 9 世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

83 CVIc 18 住居跡

[遺構] (第 219・220 図、写真図版 154)

調査範囲の西端から約 600 m 東によった CVIc 区のほぼ中央部に位置し、BVIc 19 住居跡は北東に約 54 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

東-西約 7 m、南-北約 7 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 10 度西に偏した隅丸の方形である。壁高は約 15 cm ほどで、壁床面に対してほぼ直立している。壁はほぼ直線的であり、規則的な壁である。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築されるが、全体的に

掘方があり埋め戻して暗褐色のシルトで貼り床した後床面としている。壁沿いの床面には北隅部と北西隅部そして南壁中央部を除いて幅約20cm～10cm、深さ約10cm～5cmの壁溝が掘られている。さらに、床面からp1～p8の8基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模などからp1～p4の4基が当住居跡の柱穴を構成するものと推定され、p8は出入口の梯子掘えつ穴である可能性がある。埋土は全体が14層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通するものの、色調は黒色と黒褐色を主体に暗褐色や黄褐色に分けられる。1層には十和田a降下火山灰が混入し、他の層には炭化物や焼土のほか、異質な土が混入する特徴がある。自然状態で埋没したものと考えられる。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が検出されている。袖部全体の規模は、幅約1.1m、奥行き約75cm、高さ約15cmほどであり、さらに壁外に約1.7m延びる煙道部が付属する。袖部各部の規模は、左側袖部は幅約30cm、奥行き約65cm、高さ約15cmで、右側袖部は幅約30cm、奥行き約70cm、高さ約15cmの規模であり、暗褐色シルトを積み上げて構築しているが、焚き口部に河川礫を埋設していた節がある。燃焼部は幅約45cm、奥行き約70cmの広さがあり、焼土は焚き口部の手前から燃焼部の中央部まで65cm×50cmの楕円形状の範囲に層厚約5cmで堆積する。火床は周囲の床面より若干低くなり、奥壁で僅かに高くなって煙道部と接続する。煙道部は幅約30cmほどであるが、検出状況では掘り込み式的ではあるものの、断面形の観察では割り貫き式であった可能性がある。底面は奥壁部から煙出し部に向かって次第に低くなって煙出し部と接続する。煙出し部は径約25cmの楕円形で深さが約25cmの土坑状である。

〔遺物〕(第256～259図、写真図版456～458)

埋土内や床面から土師器39点と須恵器21点の合わせて60点が出土している。

土師器(第256～259図、写真図版456～458)

床面からの出土を主体に埋土内から39点の出土であるが、器種として坏22点、甕14点、鉢3点、壺1点が含まれている。

坏(2504～2524) - 22点の出土であるが、完形や全体を残存するのは5点のみで、ほかは口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整と再調整のため定かでない個体(2520)が有る。体部の外面はヘラナデ調整される1点(2504)とヘラケズリの1点(2520)のほかは、ロクロ成形痕のみの無調整である。内面はミガキ後黒色処理される16点と無処理の5点に分けられる。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が軽く外反したり内湾気味となって直口気味となったりする器形であるが、体部は大きく外傾するものと比較的直立に近いものまで各種見られる。大きさは口縁部径が16cm～13cm、底部径7cm～5.2cmで比率は3.5～1.85である。

壺(2536～2548・2553) - 14点の出土であるが、完形や口縁部から底部を残す個体はまっ

たく出土せず、いずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形の個体は 8 点 (2536 ~ 2539・2545 ~ 2548) のみで、体部外面はロクロ成形痕のほか、並行叩き具痕やヘラケズリ、内面がカキメやヘラナデの調整痕が観察される。底部から外傾する体部は頸部で幾分窄んだ後、口縁部は頸部から外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状になる器形である。ロクロ使用成形されたほかの個体は、体部外面がヘラナデやヘラケズリ、内面がヘラナデやハケメで調整され、口縁部はいずれもヨコナデされる。やや丸味をもって外傾する体部は頸部で軽く窄んだのち口縁部が外反し、端部が先細りとなる器形を示す。器形には大小があり、いずれの器形も出土している。

鉢 (2549 ~ 2551) - 3 点の出土であるが、ほぼ完形が 1 点のほかは体部から底部と口縁部から体部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形の個体が 2 点 (2549・2550) とロクロ使用成形の 1 点がある。前者は口縁部は内外面ともヨコナデ、体部が内外面ともヘラナデやハケメで調整され、器形は壺の器高が低いものといった器形である。後者は口縁部から体部を残す破片であるが、内面がミガキ後黒色処理されるほかは、壺と大同小異である。

壺 (2552) - 1 点の出土であるが、ロクロ使用成形され体部中位が大きく膨らむ算盤玉状の器形となるものと推定される個体である。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。

須恵器 (第 257・259 図、写真図版 457・458)

22 点の出土であるが、器種には坏 11 点、壺 6 点、瓶 4 点、壺 1 点がある。

坏 (2525 ~ 2535) - 埋土内からの出土を主体に 11 点の出土であるが、完形や全体を残す個体は 7 点と多く、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。土師器の坏とは器形に若干差があり、体部が底部から直線的に外傾する個体が多く丸味をもって外傾する個体は少ない。口縁端部は直線的に外傾するが若干外反する。大きさは口縁部径が 15.9 cm ~ 13 cm、底部径が 6.7 cm ~ 5.2 cm で比率は 2.67 ~ 1.95 である。

壺 (2554 ~ 2556・2562 ~ 2564) 6 点の出土であるが、いずれも小破片での出土であるため詳細は不明である。ロクロ使用成形された 2554 ~ 2556・2563 は、1 点は口縁部破片であるし、他の 2 点は外面が並行叩き具痕やヘラケズリ、内面がヘラナデ調整された体部下位から底部を残す個体である。他の 1 点は外面に並行叩き具痕、内面にナデ痕を付す肩部付近の破片である。2562 と 2564 は外面に並行叩き具痕、内面に放射状や青海波文の当て具痕を付す大壺の体部破片である。

瓶 (2559 ~ 2561) - ロクロ使用成形された肩部破片 2 点と頸部破片 1 点が出土している。内外面にカキメを付すほか、外面はヘラケズリである。小破片であるため詳細は不明である。

壺 (2557・2558) - ロクロ使用成形された体部下位から底部を残す破片と口縁部破片が各 1

点出土している。小破片であるため全体的なことは不明である。

〔遺構の時期〕

遺構と出土した遺物の特徴から9世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

64 BⅦo 19 住居跡

〔遺構〕(第221・222図、写真図版155)

調査範囲の西端から約602.5m東によったBⅦ区に位置し、BⅦo 10住居跡は東に約64mの距離がある。BⅦo 20陥し穴状遺構と重複するが、当住居跡の方が新しい遺構であることが確認されている。

東-西約3.6m、南-北約3.8mの規模があり、平面形は主軸が北北に対して約90度東に偏した隅丸でやや突辺気味の方形をなす。壁高は約25cmほどで、床面に対して100度以上の角度で外傾する。壁は既述のように突辺状ではあるが、極端な凸凹も見られないことから現状がほぼ当初の状態と推定される。床は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトで構築され、全体的な掘方があり、埋め戻した後暗褐色のシルトを貼り床して床面としているが、全体に僅かな小起伏は観察されるものの全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、壁沿いの床面からp1~p3の3基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模から柱穴とするには疑問があるものの、p1は位置から貯蔵穴である可能性が強く、他の土坑は支柱穴的な土坑であるかも知れない。埋土は全体が12層に細分されているが、土性はシルトを主体に粘土質シルトでほぼ共通し、色調も黒褐色が大半を占めほかに褐色・黄褐色・暗赤褐色がある。各層には炭化物粒や焼土等のほか、褐色や黒褐色・暗褐色などの異質のシルト粒を混在する層が多い特徴がある。自然堆積で埋没した遺構と推定される。

カマドは東壁の北隅部よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅約1m、奥行き約75cm、高さ約15cmであり、さらに壁外に約1.35m延びる煙道部が付属する。各部の規模では、左側袖部は幅が約30cm、奥行き約65cm、高さ約15cmで、右側袖部は幅約20cm、奥行き約60cm、高さ約10cmであり、袖部は褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅が約50cm、奥行き約60cmで、焼土はほぼ中央部に約40cm×40cmの楕円形状に広がり、層厚約3cmで堆積している。火床は周囲の床面より大きく掘り下げた後埋め戻して構築し、床面より若干低くなって奥壁とは段差で接続する。燃焼部の奥壁やや手前に河川礫を埋設した支脚がある。煙道部は全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式であり、幅約35cmで断面楕円形である。底面は僅かに起伏を持ち奥壁部から煙出し部に向かって次第に低くなって煙出し部と接続する。煙出し部は径約40cmの楕円形で深さが約30cmの土坑状である。

〔遺物〕(第260・261図、写真図版459)

床面や埋土内から土師器 11 点、須恵器 2 点の合わせて 13 点の出土である。

土師器 (第 260 図、写真図版 459)

床面・土坑・カマドなどから 11 点の出土であり、器種には坏 4 点、高台付き坏 1 点、甕 6 点がある。

坏 (2565 ~ 2568) - 床面と土坑内からの出土であるが、完形は 1 点のみで他は口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が外反する器形である。

高台付き坏 (2569) - 土坑内からロクロ使用成形された高台部が 1 点出土している。小破片のため詳細は不明である。

甕 (2570 ~ 2575) - カマド内と埋土内からロクロ使用成形された 6 点が出土しているが、口縁部から底部を残す個体 1 点のほかは、口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は大きく外反して端部が角張る縁帯状をなして上方へ挽き出され受け口状となる。器面は、口縁部の内外面はロクロ成形痕を残し、体部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデやカキメ・ロクロ成形痕などで調整され、小型の底部は回転糸切り離し無調整である。器形には大小が見られ、そのいずれも出土している。

須恵器 (第 261 図、写真図版 459)

埋土内から甕の体部破片が 2 点出土している。

甕 (2576 ~ 2577) - 外面に並行叩き具痕、内面に円形無文凸面や並行当て具痕が付された大甕の体部破片であり、形状から大甕と推定される。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器の特徴から 10 世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

09 BⅧ10 住居跡

〔遺構〕 (第 223・224 図、写真図版 156)

調査範囲の西端から約 667 m 東によった BⅧ区のほぼ中央部に位置し、BⅧg 13 住居跡は北東に約 23 m の距離がある。BⅧ11 陥し穴状遺構と重複しているが当住居跡の方が古い遺構であることが確認されている。

南東-北東約 4.7 m、北東-南西約 4.7 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 45 度西に偏したやや歪んだ方形をなす。壁高は約 20 cm ほどで、床面に対して 105 度ほどで外傾する。壁には軽い凸凹が見られるものの全体としては直線的であり規則的な壁と言えよう。床は

基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築されるが、全体に掘方があり、掘方を埋め戻して暗褐色シルトを貼り床して床面としている。床面には一部起伏が観察されるものの全体が踏みしめによって堅い。壁際の床面から東・西壁の南隅部よりは途切れているものの幅約10cm、深さ約10cmほどの壁溝が検出されている。また、床面からp1～p3の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1とp3は平面規模と位置・形状からは柱穴的であるが、深さが浅く窪み形的であるなど、柱穴とは言いがたい。埋土は全体が9層に細分されるものの、土性はすべてシルトと共通しており、色調は黒色と黒褐色を主体に暗褐色や明黄褐色に分けられる。2層には十和田a降下火山灰が混在し、さらに炭化物粒や焼土のほか、異質なシルトを混入する層が多い特徴がある。自然状態で埋没したものと考えられる。

カマドは北西壁のほぼ中央に設置され、袖部・燃烧部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。全体の規模は幅約1.2m、奥行き約85cm、高さ約22cmであり、さらに壁外に約1.7m延びる煙道部が付属する。各部の規模では、左側袖部は幅約45cm、奥行き約70cm、高さ約20cmで、右側袖部は幅約35cm、奥行き約75cm、高さ約22cmであり、袖部は焼き口部に河川礫を埋設した後、黄褐色のシルトを積み上げて構築している。燃烧部は幅約40cm、奥行き約90cmの広さがあり、燃烧部の焼土は焼き口部手前からほぼ全域に層厚約6cmで堆積する。また、奥壁手前に支脚の可能性がある坏が1点ある。火床は周囲の床面とほぼ同位で続き奥壁で段差を持って煙道部と接続する。煙道部は幅約30cmほどで、現状では掘り込み式的であるが、底面が煙出し部に向かって次第に低くなり最深部で約35cmであることから、本来は全体が地中に土管状に掘られた刺り貫き式であった可能性が強いものの、底面には軽い起伏が見られる。煙出し部は径約45cm×35cmの楕円形で深さが約50cmの土坑状であるが、煙道部との接続部から煙出し部の内部に大量の河川礫が落ち込んでいた。この礫の性格については明確にし難いが、煙出し部の地上部に煙突状に積み上げていた礫の可能性があるのでないかと推定される。

〔遺物〕(第261～263図、写真図版459～461・524)

埋土内とカマド付近の床面から土師器18点、須恵器6点の他、土製品が1点の合わせて25点が出土している。

土師器(第261・262図、写真図版459～461)

18点の出土であるが、器種には坏1点、甕12点、鉢1点、壺3点、小型土器1点が含まれている。

坏(2578) - カマド内から口縁部から体部を残す破片が1点出土している。体部は内外面ともナデやヘラナデで調整される。体部は底部から外傾する器形とは思いますが、小破片であるため明確でない。

甕(2578～2594) - 埋土内とカマド付近から12点出土しているが、完形を2点含むほかは、

口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ不使用成形され、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がハケメ・ケズリ・ヘラナデ等、内面はハケメ・ヘラナデで調整される。器形は各種見られるが、比較的径の大きい底部から外傾する体部は中位や上位に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は外反し口縁端部は先細りとなったり角張る。また、器形には大小関係があり、大・中・小の3型が出土している。

鉢 (2595) - 埋土内からロクロ不使用成形された口縁部から体部を残す破片が1点出土している。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がハケメとヘラナデ、内面はハケメで調整される。体部が底部から直線的に外傾し、口縁部は端部のみが軽く外反する器形である。壺形に近いが口縁部の違いから鉢とした。中型である。

壺 (2596 ~ 2598) - 埋土内から3点の出土であるが、完形は含まず口縁部から体部と体部のみ、体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ不使用成形され、口縁部は内外面ともヨコナデで、体部は外面がハケメやヘラナデの後ミガキ、内面はヘラナデやミガキで調整される。比較的径の大きい底部から大きく丸味を持って外傾する体部は、全体が球形となる器形をなし、大きく窄んだ頸部から口縁部が外湾する。

小型土器 (2599) - 埋土内から小型のコップ形をした口縁部から体部を残す破片が1点出土している。ロクロ不使用成形され内外面ともヘラナデや丁寧なケズリで調整されている。

須恵器 (第262・263図、写真図版460・461)

埋土内からの出土を主体に6点の出土であるが、器種には坏3点、蓋1点、壺2点が含まれる。

坏 (2579 ~ 2581) - 3点の出土であるが、完形が1点のほかは、口縁部から体部と体部下位から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転盤切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。比較的径の大きい底部から僅かな丸味を持って外傾する体部は、直線的に外傾する。大きさは口縁部径が13.2cm、底部径6.6cmで比率は2である。

蓋 (2582) - カマド脇の床面から完形が1点出土している。ロクロ使用成形され天井部が盛り上がった器形で、擬宝珠摘みが付く。内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はない。

壺 (2600・2601) - 外面に並行叩き具痕、内面に円形無文凸面の当て具痕を付す体部破片であるが、破片の状況から大壺と推定される。

土製品 (第261図、写真図版524)

床面から土樋が1点出土している。

土樋 (30) - 長さが5.1cm、最大径1.5cmの大きさがある完形が1点出土している。

〔遺構の時期〕

遺構と出土した遺物の特徴から9世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

65 BⅧg 13 住居跡

〔遺構〕(第 225・226 図、写真図版 157)

調査範囲の西端から約 675 m 東によった BⅧ区のほぼ中央部に位置し、AⅪx 2 住居跡-1・2 は南東に約 155 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出されている。

北東-南西約 5.15 m、南東-北西約 4.9 m のきざがあり、平面形は主軸が磁北に対して約 30 度西に偏したやや台形気味の形状をなす方形である。壁高は約 40 cm ほどであり、床面に対して約 100 度ほどで外傾する。壁は一部で小起伏を持つ部分も見られるものの、総じて直線的であり規則的な壁と理解できよう。床は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトで構築されるが、全体に掘方が観察され埋め戻した後、貼り床して床面としている。床面は壁沿いの一部が若干高い傾向があるものの、全体としてはほぼ平坦であり全面が踏みしめによって堅い。壁沿いの床面には西壁の北隅部寄りと北壁の東隅部寄りは検出されていないものの、幅約 10 cm 前後、深さが約 10 cm～5 cm の壁溝が検出されているが、東壁沿いでは断続的である。さらに床面から p1 と p2 の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1・p2 ともに南壁沿いのほぼ中央に位置し、p2 は平面形・形状ともに柱穴的であるが、いずれも浅い特徴があり性格を特定できない。埋土は全体が 6 層に細分されているものの土性はいずれもシルトと共通し、色調が黒色・黒褐色を主体に黄褐色に細分される。また、炭化物や焼土のほか、黄褐色の粘土質シルト塊を混入する層が多い。自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などが良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は、幅約 1.1 m、奥行き約 80 cm、高さ約 20 cm であり、さらに壁外に約 1.3 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模では、左側袖部は幅約 40 cm、奥行き約 80 cm、高さ約 20 cm で、右側袖部は幅約 35 cm、奥行き約 60 cm、高さ約 25 cm であり、袖部は芯に河川礫を埋設した後暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は約 60 cm × 45 cm の広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部の手前から約 95 cm × 45 cm の燃焼部ほぼ全体に約 4 cm の層厚で堆積する。火床は周囲の床面とほぼ同位で続き、煙道部とも段差がなく平坦に接続する。煙道部は全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式であり、最深約 35 cm、幅約 30 cm で断面楕円形をなす。底面は凸凹も少なくほぼ平坦であるが、全体が煙出し口に向かって次第わずかに低くなっていく特徴がある。煙出し口は径約 30 cm × 30 cm の円形で深さ約 60 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 264 図、写真図版 461・462)

床面直上から土師器 8 点と須恵器 8 点の合わせて 16 点出土している。

土師器 (第 264 図、写真図版 461)

8 点出土であるが、器種として坏 2 点、壺 5 点、壺 1 点がある。

坏 (2602・2603) - 2 点の出土であるが、口縁部から底部までを残すのは 1 点と体部下位から底部を残す 1 点がある。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは静止糸切り離し無調

整である。2602 は体部の内外面とも入念なミガキ調整された後内面は黒色処理されている。2603 は小破片のため定かでないが、内面がロクロ成形痕のみで再調整はまったくない。大きさは口縁部径が 11.8 cm、底部径 6.8 cm で比率は 1.73 である。

壺 (2609 ~ 2611・2613・2614) - 5 点の出土であるが、完形の個体は含まず、いずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ不使用成形され、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ヘラナデや外面がケズリ等で調整される。全体的な器形は不明であるが、底部から外傾する体部は中位から上位は直立気味となり、口縁部が外反するらしい。器形には大小があり、そのすべてが出土している。

壺 (2612) - 壺と推定される体部下位から底部を残す破片が 1 点出土している。ロクロ不使用成形され内外面ともヘラナデやヘラケズリで調整される。

須恵器 (第 264 図、写真図版 461・462)

6 点の出土であり、器種として坏 5 点、瓶 1 点、壺 2 点がある。

坏 (2604 ~ 2608) - 5 点の出土であるが、完形や全体が判明するのは 2 点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転盤切り離し無調整である。体部の内外面はロクロ成形痕のみで再調整はない。器形は、底部から体部が丸味を持ったり直線的に外傾し、口縁端部が外反する個体が多い。大きさは、口縁部径が 14.6 cm ~ 12.4 cm、底部径 7 cm ~ 6 cm で比率は 2.08 と 2.06 である。

瓶 (2615) - 瓶と言うよりも壺に近い完形が 1 点出土している。ロクロ使用成形され、底部は回転糸切り離しの後高台を貼り付けている。体部の調整はロクロ成形痕のみで再調整はない。

壺 (2616・2617) - 外面に並行叩き具痕を付し、内面には並行当て具痕とナデ痕を持つ体部の破片が 2 点出土している。前者は大壺である可能性が高い。

〔遺構の時期〕

遺構から出土した土師器や須恵器の特徴から 9 世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

切 AXI x 2 住居跡 - 1

〔遺構〕 (第 227 図、写真図版 158)

調査範囲の西端から約 830 m 東によった AXI 区の西端に位置し、AXI x 2 住居跡 - 2 は当住居跡と重複し、当住居跡の方が新しい遺構である。この地域は開田時に大きく削平を受けていることにより、残存状態が不良である。

削平によって全体的なことは不明であるが、残存する規模は東 - 西約 2.4 m、南 - 北約 2.5 m であり、床面と推定される範囲から見ると本来は東 - 西約 3.1 m、南 - 北約 3.2 m ほどであった

と推定される。平面形は主軸が磁北に対して約135度東に偏した方形か長方形と推定される。壁高は10cm～5cmと痕跡程度に残存している部分がほとんどであり、壁の状況は定かでない。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築されるが、AXI x 2住居跡-2と重複する部分は黄褐色のシルトで貼り床して床面とされており、検出された現状では平坦で踏みしめによって全体が堅い。壁溝の検出はないがp1～p3の3基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1は位置と規模・形状などから貯蔵穴の可能性が強いが、他の2基は位置や規模・形状とも柱穴とは断定し難いことから性格不明である。埋土は3層に細分されているが、土性はシルトを主に粘土質シルトであり、色調は黒褐色と暗褐色や明黄褐色である。埋土の残存状態が不良のため定かでないが、自然状態で埋没した遺構であろう。

カマドは南東壁のほぼ中央部に設置されているが、削平によって残存状態が悪く袖部・燃焼部・煙出し部が検出され煙道部は検出されていない。袖部全体の規模は幅約1.2m、奥行き約70cm、高さ約5cm以下の痕跡程度の残存であり、壁外約1.5mの位置に煙出し部がある。各部の規模は、左側袖部は幅約30cm、奥行き約60cm、高さ約5cmで、右側袖部は幅約30cm、奥行き約60cm、高さ約5cmであり、袖部は暗褐色のシルトを積み上げて構築したものらしい。燃焼部は約70cm×30cmの広さがあり、燃焼部の焼土は40cm×30cmの範囲に層厚約8cmで堆積する。煙道部は既述のように検出されていないことから掘り込み式であったものと推定される。煙出し口は径約45cmほどの円形で深さ約15cmの土坑状である。

〔遺物〕(第265図、写真図版462)

床面から土師器が2点出土したのみである。

土師器(第265図、写真図版462)

坏1点と甕1点が含まれる。

坏(2618) - ロクロ使用成形され、底部の切り離しが回転糸切り離し無調整であり、内外面とも再調整のない完形が1点出土している。底部から僅かに丸味をもって外傾する体部は口縁端部が外反する器形を示す。大きさは口縁部径が約14.5cmで底部径約6.2cm、比率が2.33である。

甕(2619) - ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離しされ無調整の底部破片が1点出土しているものの、小破片のため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物からは10世紀頃かと推定される。

09 AXI x 2住居跡-2

〔遺構〕(第228図、写真図版159)

調査範囲の西端から約830m東によったAXI区の西端部に位置し、AXI q 7住居跡は北東に

約 35 m の距離がある。AXI x 2 住居跡-1 と重複しているが、当住居跡の方が古い遺構である。

南東-北西約 2.5 m、北東-南西約 2.5 m の規模があり、平面形は主軸が壁北に対して約 45 度東に偏した方形をなす。壁高は約 15 cm ほどで床面に対してほぼ直立する。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされており、ほぼ水平に近い平坦で全体が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、p1 と p2 の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1 は平面形が不整形であるとともに浅く窪み状であるが、p2 は位置や規模・深さから推定して貯蔵穴と考えられる。埋土は全体が 4 層に細分されているが、土性はシルトを主体に砂質と粘土質のシルトがあり、色調は黒褐色と暗褐色を主体に褐色・明褐色・暗赤褐色などに分けられる。炭化物粒や焼土粒のほか、赤褐色土粒等を混入する層が多い。埋土の残存状態がよくないもの、自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは北西壁のほぼ中央部に設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などが検出されている。袖部全体の規模は、幅が約 75 cm、奥行き約 60 cm、高さ痕跡程度で、さらに壁外に 1 m 以上延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅約 20 cm、奥行き約 60 cm、高さ 5 cm 未満で、右側袖部は幅約 15 cm、奥行き約 60 cm、高さ 5 cm 未満であり、左側袖部の焼き口部に河川礫を埋設するもの、他は暗褐色シルトを積み上げて構築する。燃焼部は 50 cm × 35 cm の広さがあり、焼土は焼き口部付近から奥壁の手前まで 40 cm × 30 cm の略長方形気味に層厚約 4 cm で堆積する。火床は周囲の床面と同位であり、煙道部とは奥壁で段差をもって接続する。煙道部は幅約 20 cm、深さ約 5 cm の溝状であることから、掘り込み式と推定される。底面はほぼ水平に近い平坦で、先端部から煙出し部は現用の水路と重複し削平を受けているため不明である。

〔遺物〕(第 265 図、写真図版 462)

床面やカマドの他、埋土内から土師器が 2 点と須恵器 8 点の合わせて 10 点出土している。

土師器 (第 265 図、写真図版 462)

煙道部と埋土内から 2 点の出土であるが、器種はいずれも坏である。

坏 (2620・2621) - 2 点の出土であるが、1 点は完形であるが他は口縁部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形で底部の切り離しが回転糸切り離し無調整であり、体部の外面はともにロクロ成形のみで再調整はないが、内面はロクロ成形痕のみの 2620 とミガキ後黒色処理される 2621 がある。底部から外傾する体部はやや丸味を持ち端部がやや外反したり直線的に外傾する器形である。大きさは口縁部径 14.5 cm、底部径 5.7 cm で比率は 2.45 である。

須恵器 (第 265 図、写真図版 462)

カマドや床面などから 8 点の出土であるが、器種には坏 5 点、壺 2 点、甕 1 点がある。

坏 (2622 ~ 2626) - 5 点の出土であるが、完形はなくすべて口縁部から体部か体部から底部

を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転施切り離し無調整である。体部は内外面とも再調整はなく、一部の外面に重ね焼きの火罨が付着している。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁端部は外反したり直線的に外傾する器形を示す。

壺(2627・2628)一肩部付近から体部と体部下位から底部を残す破片が2点出土している。いずれもロクロ使用成形されるが、外面が肩部付近から上位がロクロ成形痕、下位がヘラケズリで調整され、内面はロクロ成形痕のみである。底部から外傾する体部は肩部に最大径をもって頸部で大きく窄み、口縁部は外傾するらしい。

壺(2629)一ロクロ使用成形され外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整された体部の破片が1点出土している。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から10世紀前半頃に位置づけられるものと推定される。

例 AXIq7住居跡

〔遺構〕(第229・230図、写真図版160)

調査範囲の西端から約847m東によったAXI区の西端部よりに位置し、BXIa15住居跡は南東に約48mの距離がある。AXIq7土墳墓と重複するが、当住居跡のほうが古い遺構である。

東-西約3.8m、南-北約4.1mの規模を持ち、平面形は主軸が磁北に対して約100度東に偏した隅丸でやや突刃気味の方形をなす。壁高は約20cmほどで、床面から内湾気味に外傾している。壁は幾分凸凹があり、開田時に覆乱は受けているものの当初から若干不規則であった可能性がある。床面は基本層序第IV層の黄褐色シルトの底部と同V層の段丘礫層の上面とで構築されるが、全体に掘方があり埋め戻して床面を構築している。床面には小凸凹は見られるものの、全体としては平坦で踏みしめによって堅い。床面からは壁溝や柱穴といった付属施設はまったく検出されていない。埋土は全体が13層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通し、色調は褐色や暗褐色を主体に褐色系の各色が薄層で堆積する。全層に炭化物粒が多少の差こそあれ混入している。自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは南東壁の南隅部よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は、幅が約1.3m、奥行き約1m、高さ約20cmであり、さらに壁外に約2m延びる煙道部が付属する。各部の規模では、左側の袖部は幅約35cm、奥行き約1m、高さ約25cmで、右側の袖部は幅約40cm、奥行き約1m、高さ約25cmであり、袖部は焼き口部と一部に芯として河川礫を埋設した後、暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約1.1m×60cmの広さがあり、燃焼部の焼土は焼き口部付近から奥壁付までのほぼ全域に層厚約5cmで広がっている。火床は周囲の床面とほぼ同位で続き、奥壁部で傾斜する段差

で煙道部と接続する。煙道部は検出状態では掘り込み式的であったが、一部の断面が地山を被る状況を示し本来は割り置き式であった可能性がある。幅は30cm、深さ約20cmほどであり、底面はほぼ平坦である。煙出し部は径約40cm×20cmの楕円形で深さ約25cmの土坑状である。

〔遺物〕(第266・267図、写真図版462・463・530)

埋土内からの出土を主体に土師器7点、須恵器9点の他、鉄製品1点の合わせて17点の出土である。

土師器(第266・267図、写真図版462・463)

埋土内からの出土が大半であるが、坏1点と壺5点、鉢1点の合わせて7点出土している。

坏(2630)－口縁部から体部下位を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され体部の内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が軽く内湾気味になる。

壺(2636～2638・2640・2641)－5点の出土であるが、完形は1点のみで、他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。5点はロクロ使用成形された4点とロクロ不使用成形の1点に細分される。前者は体部の内外面ともロクロ成形痕のみか、体部外面の中心位以下がヘラケズリで上位はロクロ成形痕、内面がカキメやヘラナデで調整される。底部から外傾する体部は中心位上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は外反して端部が角張りさらに上方に挽き出されて受け口状となる。後者は輪積み痕を明瞭に残し体部の外面はナデ、内面がヘラナデで調整され底面には木葉痕がある。器形には大小があり、そのいずれも出土している。

鉢(2638)－埋土内から完形が1点出土している。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部は外面がナデ、内面がヘラナデで調整される。底部から外傾する体部は肩部に最大径をもって頸部で僅かに窄み、口縁部は外反する器形をなし、口縁部径が器高よりも大きい。

須恵器(第266・267図、写真図版463)

埋土内からの出土を主体に9点出土しているが、器種には坏5点、壺3点、壺1点がある。

坏(2631～2635)－埋土内から5点の出土であるが、完形や全体が判明するのは3点のみで、他は体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が軽く外反する器形をなす。大きさは口縁部径15.1cm～13.7cm、底部径6.1cm～5.5cmであり比率は2.65～2.24である。

壺(2642・2644・2645)－外面に並行叩き具痕、内面に同心円と青海波文の当て具痕を付す大壺の体部破片が2点出土している。

壺(2643)－ロクロ使用成形された口縁部付近の破片が1点出土している。

鉄製品(第267図、写真図版530)

埋土内から刀子が1点出土している。

刀子(4) - 刀身部の一部を残す破片が1点の出土であるが、残存長3.3 cm、幅1 cmで断面が楔形である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から9世紀後半から10世紀初頭頃に位置づけられるものと推定される。

④ BXIa 15 住居跡

〔遺構〕(第231・232図、写真図版161)

調査範囲の西端から約884 m東によったBXI区のほぼ中央に位置し、AXIq 18住居跡は北東に約40 mの距離がある。重複する遺構はなく単独で検出されている。

東-西約5 m、南-北約4.8 mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約80度東に偏した隅丸・突辺状の方形をなす。壁高は20 cmほどであり、床面に対して120度ほどで外傾し床面とは丸味をもって接続する。北側の壁はほぼ直線的であるが、その他の部分は突辺状をなしたり凸凹があったりやや不規則である。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトと同V層の段丘礫層の上面で構築され、全体として起伏が著しく特に礫層の上面が露出し、そのまま床面としている部分はその傾向が強い。特に貼り床して床面とされた様相は観察されていない。床面から壁溝は検出されていないが、p1～p12の12基の土坑が検出されている。p12は位置や規模などから当住居跡に伴う貯蔵穴であろうと考えられ、p5・p8・p10・p11の4基は位置と規模から主柱穴を構成する土坑と推定される。そのほかにも柱穴状の小土坑が検出されているが、当住居跡より新しいと推定される例も含み、一部は支柱穴であろうと考えている。p1は平面形は貯蔵穴的であるが、深さが浅く窪み状であることと位置が床面の中央部に近いなど貯蔵穴とするにも疑問がある。埋土は全体が4層に細分されているが、土性はいずれもシルトと共通しており、色調が黒褐色・褐色・明褐色・明黄褐色などに分けられている。自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは東壁のほぼ中央に設置されるが、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などの各部が比較的良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅約1.3 m、奥行き約1.1 m、高さ約10 cmであり、袖部は一部に河川礫を埋設するもののほとんどが暗褐色シルトを積み上げて構築している。各部の規模は、左側袖部は幅約40 cm、奥行き約1.1 m、高さ約10 cmで、右側袖部は幅約40 cm、奥行き約1 m、高さ約10 cmであり、さらに壁外に約1.3 m延びる煙道部が付属する。燃焼部は幅約50 cm、奥行き約1 mほどの広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部付近から70 cm×45 cmの楕円形状に層厚約5 cmで広がっている。火床は周囲の床面とほぼ同位で焼き、奥壁とは僅かな段差で接続する。煙道部は幅約30 cm、深さ約5 cmで掘り込み式と推定される。底面は

起伏が著しく一部には掘方がある。煙出し部は径約 35 cm で深さ約 15 cm の土坑状である。

(遺物) (第 268・269 図、写真図版 464・530)

埋土内からの出土を主体に土師器 7 点と須恵器 13 点の他、鉄製品が 1 点の合わせて 21 点の出土である。

土師器 (第 268 図、写真図版 464)

7 点の出土であるが、そのほとんどは埋土内からの出土で、器種には坏 6 点と壺 1 点がある。坏 (2646～2651) - 5 点の出土であるが、全体が判明するのは 2 点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の外面はいずれもロクロ成形痕のみで再調整はないが、内面はミガキ後黒色処理される 3 点と無調整の 2 点がある。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直立気味となったり、やや外反したりする器形をなし兩種とも違いは見られない。大きさは口縁部径が 15.4 cm～12.4 cm、底部径 7.8 cm～6 cm で比率は 2.3～1.7 である。

壺 (2658) - ロクロ成形された小型の口縁部破片が 1 点出土している。もしかすると壺ではなく鉢である可能性もある。内外面ともロクロ成形痕のみを残し再調整はない。体部の上位が若干膨らみ頸部で幾分窄んだ後頸部が外反する器形である。

須恵器 (第 268・269 図、写真図版 464)

13 点の出土であるが、器種には坏 6 点、壺 5 点、瓶 1 点、壺 1 点が含まれる。

坏 (2652～2657) - 6 点の出土であるが、完形は 1 点のみでほかは口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。底部から体部が直線的や丸味を持って外傾し、口縁端部はやや外反気味となる。大きさは口縁部径が 13.8 cm、底部径 6 cm で比率は 3 である。

壺 (2661～2665) - 体部の破片が 5 点出土しているが、外面が並行や格子目文などの叩き具痕を持ち、内面は並行や青海波文・無文の当て具痕を付すいわゆる大壺と、外面がケズリ、内面がカキメの壺と 2 器種ある。

瓶 (2660) - ロクロ使用成形され外面がカキメとケズリ、内面がカキメで調整された肩部付近の破片が 1 点出土している。壺の可能性もあるが、カキメ調整を多用していることから瓶としておく。

壺 (2659) - ロクロ使用成形され外面に並行叩き具痕、内面が無文当て具痕を持つ肩部上位から頸部の一部を残す破片が 1 点出土している。壺である可能性も考えられるが、壺より頸部の窄まりが強いと判断されたことにより壺とした。

鉄製品 (第 269 図、写真図版 530)

埋土内から刀子が 1 点出土している。

刀子(6) - 先端部に鞘かと推定される木質部が付着した刀身部のみを残す破片であり、残存長 12 cm、最大幅 2.5 cm、刀身部の幅 2 cm の大きさであり、実測図の右端が欠損している。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から 9 世紀後半から 10 世紀初頭頃に位置づけられるものと推定される。

(四) AXIq 18 住居跡

〔遺構〕(第 233 図、写真図版 162)

調査範囲の西端から 899 m 東によった AXI 区の中央東よりに位置し、AXIp 21 住居跡は東に約 10 m の距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

東-西約 3.6 m、南-北約 4 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 200 度東に偏した隅丸突辺気味の方形をなす。壁高は約 20 cm ほどで壁は床に対して大きく外傾し床面と丸味をもって接続する。東壁はほぼ直線的であるが他の壁は既述のように突辺状をなすものの大きな凸凹も見られず当初からの状況を示すと推定される。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され貼り床されることなくそのまま床面とされる。床面には小起伏はあるものの総じて平坦で水平に近く全面が踏みしめで堅い。壁溝の検出はないが、床面の壁際から p1 と p2 の 2 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、平面形と規模は柱穴的であるが、深さが浅いことと位置が不整であるなど柱穴と断定するには問題がある。埋土は 5 層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通し色調は黒色・黒褐色・暗褐色・明褐色などに分けられる。炭化物や焼土のほか、明褐色土粒を混在する層が多い。自然状態の埋没状況を示す。

カマドは南壁の東隅部よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は、幅が 70 cm、奥行き約 60 cm、高さ約 25 cm であり、さらに壁外に約 1 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅約 25 cm、奥行き約 60 cm、高さ 20 cm で、右側袖部が幅約 17 cm、奥行き約 55 cm、高さ約 30 cm であり、袖部は芯として河川礫を埋設した後暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約 40 cm、奥行き約 60 cm で、燃焼部焼土は焚き口部付近から約 45 cm × 45 cm の範囲に層厚約 3 cm で広がっている。火床は周囲の床面とほぼ同位で続き、奥壁部とは傾斜面となって接続する。煙道部は幅約 25 cm で、検出状況では掘り込み式と推定される。底面は奥壁部から煙出し部に向かって次第に高くなる状況を示し、全体として凸凹はなく平坦である。煙出し部は径約 40 cm の略方形気味で深さが 20 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 270・271 図、写真図版 465・466)

埋土内と床面から土師器 20 点、須恵器 5 点の合わせて 25 点出土している。

土師器(第 270・271 図、写真図版 465)

床面からの出土を主体に埋土内から坏 13 点、壺 6 点、鉢 1 点の合わせて 20 点が出土している。

坏 (2666 ~ 2678) - 13 点の出土であるが、完形や全体が判明するのは 5 点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転系切り離し無調整であり、体部の内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はない。底部から直線的や丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が直立して受け口状や僅かに外反か直線的に外傾する器形をなす。大きさは口縁部径が 15.2 cm ~ 12.3 cm、底部径は 5.8 cm ~ 4.6 cm であり比率は 91 ~ 2.44 である。

壺 (2679 ~ 2684) - 床面からの出土を主体に 6 点の出土であるが、完形や全体を残す破片の出土はなく、すべて口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、体部外面はロクロ成形痕やヘラケズリか並行叩き具痕、内面はロクロ成形痕かヘラナデで調整される。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径を持って頸部でわずかに窄み、口縁部は外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となる。器形には大小があり、中・小型が出土している。

鉢 (2685) - 口縁部から底部までを残す個体が 1 点出土している。ロクロ使用成形され、体部外面はロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理の再調整がある。器形は基本的に土師器壺のそれとほぼ同様であるが、器高より口縁部径が大きい特徴がある。

須恵器 (第 271 図、写真図版 465・466)

埋土内からの出土を主体に 5 点の出土であるが、器種には壺 2 点、瓶 1 点、壺 2 点がある。

壺 (2688・2690) - 体部と体部から底部の一部を残す破片が各 1 点の合わせて 2 点の出土である。ロクロ使用成形であるかは不明であるが、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラや指によるナデ調整が観察される。全体的な器形等は不明である。

瓶 (2687) - ロクロ使用成形された口縁部破片が 1 点出土している。内外面ともロクロ成形痕のみを残し、頸部の中央部が括れて口縁部が大きく外反し、口縁端部は角張る縁帯状をなしさらに下方に挽き出される器形をなす。

壺 (2686・2689) - 肩部から体部下位を残す破片と肩部のみを残す破片の 2 点が出土している。ロクロ使用成形され、体部の外面はヘラケズリ調整されるが内面はロクロ成形痕のみである。全体的な器形は不明であるため本来は瓶である可能性もある。

・ (遺構の時期)

遺構と出土した土師器や須恵器の特徴から 10 世紀前半代に位置づけられるものと推定される。

(四) AXIp 21 住居跡

〔遺構〕(第 234 図、写真図版 163)

調査範囲の西端から約 909 m 東によった AXI 区の東よりに位置し、AXIp 23 住居跡は東に約 8 m の距離がある。他遺構との重複はなく単独で検出されている。当住居跡は掘り込みが浅かったことにより、粗掘り時に黒色土を除去した際、掘りすぎがあったため壁が確認されたのは一部のみであり、全体的なことは定かでない。

東-西約 5.5 m、南-北約 4.1 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して 5 度ほど東に偏した隅丸の長方形であったものと推定される。壁高はほんの 5 cm ~ 3 cm と痕跡程度であり、床面に対してはほぼ直立するらしい。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され貼り床されることなくそのまま床面とされる。床面には軽い起伏はあるものの全体が踏みしめて堅い。壁溝は検出されていないが、床面から p1 ~ p4 の 4 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1 は規模や位置などから貯蔵穴と推定される。p2 と p3 は形態や規模から柱穴的であるが、位置に疑問がある。埋土は暗褐色のシルトの単層であるが、痕跡程度に残っているのみである。残存不良のため埋没状況は不明である。

カマドは検出されていないが、床面の中央やや東壁よりに 1.5 m × 70 cm の長楕円形状に層厚約 3 cm の焼土が検出されているが、当住居跡に付随する炉跡である可能性がある。

〔遺物〕(第 271 図、写真図版 466・530)

床面から土師器が 2 点のほか、鉄製品が 4 点出土している。

土師器 (第 271 図、写真図版 466)

床面から坏と壺が各 1 点の合わせて 2 点出土している。

坏 (2691) - 口縁部から底部までを残す個体が 1 点の出土である。ロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が外反する器形を示す。大きさは口縁部径が 12.4 cm、底部径が 3.4 cm で比率は 3.64 である。

壺 (2692) - ロクロ使用成形された体部下位から底部を残す個体が 1 点の出土である。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの調整がある。

鉄製品 (第 271 図、写真図版 530)

北東隅部の土坑内とカマド内から鉄滓が 4 点出土している。

鉄滓 (1~3) - 最も大型の碗形鉄滓は最大径 13 cm、厚さ 3 cm の大きさがあり、最小の物では径 4.5 cm ほどであり、全体として凸凹が著しくさらに一部は多孔質であるなど、精錬滓とは考えられないので鍛冶滓である可能性が高い。

〔遺構の時期〕

遺構の残存状態が不良のため時期を推定し難いが、出土した土師器の特徴から 10 世紀後半

代に位置づけられるものと推定される。

例 AXIp 23 住居跡

〔遺構〕(第 235 図、写真図版 164)

調査範囲の西端から約 917 m 東によった AXI 区の東端部に位置し、AXIr 24 住居跡は南に約 10 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

東一西約 2 m、南一北約 2 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 95 度東に偏したやや隅丸の方形であるが、東壁のカマドよりの壁は東側に大きく突出している。壁高は約 25 cm ほどであり、既述のように東壁を除く 3 方向の壁はほぼ直線的であり、壁は垂直に対して外傾し床面とはやや丸味を持って接続する。床は基本層序第 IV 層の黄褐色粘土質シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面としている。床面は一部に凸凹がみられるものの全体が踏みしめによって堅い。床面から壁溝は検出されていないが、カマド右側から土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模から当住居跡に伴う貯蔵穴と考えられる。埋土は全体が 6 層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通し、色調が黒褐色を主体に黒色・暗褐色・褐色などに分かれている。小礫が混入する層が多く、さらに炭化物粒の混入も多い。自然状態で埋没した遺構と考えられる。

東壁の北隅部よりにカマドが設置されており、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などが良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は、幅が約 1 m、奥行き約 30 cm、高さ約 25 cm であり、さらに壁外に約 1.3 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅約 30 cm、奥行き約 30 cm、高さ約 25 cm で、右側袖部が幅約 20 cm、奥行き 60 cm、高さ約 25 cm であり、袖部は芯に河川礫を埋設した後、その周囲にシルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約 50 cm、奥行き約 40 cm の広さがあるものの、燃焼部の焼土はあまり明確でなかった。火床は周囲の床面とほぼ同位であるが、奥壁で段差をもって煙道部と接続する。煙道部は幅が約 37 cm ほどであり、検出された状況では掘り込み式の煙道部と推定される。底面には幾分起伏があり、煙出し部に向かって次第に低くなる。煙出し部は径約 50 cm ほどで深さが約 15 cm である。

〔遺物〕(第 272・273 図、写真図版 466・467)

床面やカマドからの出土を主体に土師器 19 点、須恵器 1 点の合わせて 20 点が出土している。

土師器 (第 272・273 図、写真図版 466・467)

19 点がほとんど床面から出土しており、器種には坏 16 点、高台付き坏 1 点、甕 2 点が含まれる。

坏 (2693～2708) - 16 点の出土であり、完形や全体が判明する個体は 13 点あり、その他は体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸

切り離し無調整である。前者 14 点は体部の内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はないが、後者の 2 点は体部外面はロクロ成形痕のみで再調整はなく、内面がミガキ後黒色処理される。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直線的に外傾したり端部が軽く外反する器形をなす。大きさは口縁径が 15.1 cm ~ 12.8 cm、底部径が 6 cm ~ 4.5 cm で比率は 3.17 ~ 2.09 である。

高台付き杯 (2709) - カマド内から完形が 1 点出土している。ロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、その後高台を貼り付けた貼り付け高台である。体部の外面はロクロ成形痕のみで再調整はないが、内面はミガキ後黒色処理である。体部の器形は、基本的には普通の杯と大同小異であるが、杯に比較して体部の丸味が強い傾向がある。大きさは口縁径 16 cm・底部径 6.1 cm で比率は 2.62 である。

壺 (2710・2711) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片が 2 点出土している。体部上位の外面はロクロ成形痕のみであるが体部下半はヘラケズリされる。内面はロクロ成形後ヘラケズリ調整される。

須恵器 (第 273 図、写真図版 467)

埋土内から壺の破片が 1 点出土している。

壺 (2712) - ロクロ使用成形された体部の小破片である。内外面にナデ痕がある。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土遺物の特徴から 10 世紀中葉頃に位置づけられるものと推定される。

(例) AXIr 24 住居跡

〔遺構〕 (第 236 図、写真図版 165)

調査範囲の西端から約 917 m 東によった AXI 区の東端部に位置し、BXIb 1 住居跡は東に 112 m の距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

東-西約 2.7 m、南-北約 2.3 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 5 度西に偏した長方形気味で幾分隅丸気味の方形である。壁高は約 35 cm ほどであり、壁は各壁とも若干の起伏はあるもののほぼ直線的で規則的な壁といえ、壁はほぼ垂直の部分と幾分外傾する部分があり、床面とは丸味をもって接続する。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされる。床面は幾分起伏があるものの全体として踏みしめによって堅い。壁溝・土坑ともまったく検出されていない。自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは北壁の中央やや西よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅約 75 cm、奥行き約 60 cm、高さ約 15 cm であり、

さらに壁外に約 1.35 m 延びる煙道部が付属する。各部の規模では、左側袖部は幅約 25 cm、奥行き 70 cm、高さ約 15 cm で、右側袖部は幅約 25 cm、奥行き約 50 cm、高さ約 15 cm であり、袖部は焚き口部に河川礫を埋設した後シルトを積み上げて構築している。燃焼部は幅約 30 cm、奥行き約 50 cm の広さがあり、燃焼部の焼土は燃焼部のほぼ全体に約 3 cm の厚さで堆積している。燃焼部の火床は周囲の床面とほぼ同位であるが、煙道部とは奥壁部分で段差をもって接続し、中央部やや奥壁よりに河川礫を配置した支脚がある。煙道部は幅が約 20 cm でその全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式である。底面は奥壁から煙出し部に向かって低くなり、底面は若干起伏がある。煙出し部は径約 40 cm の楕円形で、深さが約 65 cm の土坑状であり、煙道部底面とは段差で接続する。

〔遺物〕(第 274 図、写真図版 467・528)

埋土内から土師器 1 点、須恵器 7 点の他、石製品が 1 点出土している。

土師器 (第 274 図、写真図版 467)

坏が 1 点出土したのみである。

坏 (2713) - ロクロ使用成形され口縁部から体部下位を残す破片が 1 点出土している。内外面ともロクロ成形痕のみを残し再調整はない。底部から外傾する体部は丸味を持ち口縁端部は直線的に外傾する器形をなす。

須恵器 (第 274 図、写真図版 467)

埋土内から坏 3 点、壺 3 点、瓶 1 点が出土している。

坏 (2714 ~ 2716) - 3 点の出土であり、完形が 1 点のほかは、口縁部から体部下位を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整はない。体部は底部から直線的に外傾し口縁端部は軽く外反する器形である。大きさは口縁部径が 15.5 cm、底部径 7 cm で比率は 2.21 である。

壺 (2717・2719・2720) - ロクロ使用成形された体部破片が 2 点と体部下位から底部を残す小破片が 1 点の合わせて 3 点の出土である。体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整される。全体的なことは定かでない。

瓶 (2718) - 肩部の破片が 1 点出土している。ロクロ使用成形され内外面にロクロ成形痕のみを残す。

石製品 (第 274 図、写真図版 528)

埋土内から磁石が 1 点出土している。

磁石 (107) - 奥羽山地中新統産の流紋岩を使用した磁石で、断面が六角形状の柱状節理の転石を利用し、使用面を 4 面に付す。大きさは全長 14.7 cm、最大幅 9.8 cm、最大厚さ 7.3 cm で、1530 g の重さがある。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴と出土遺物の様相から9世紀後半代に位置づけられるものと推定される。

(四) BXIb1住居跡

〔遺構〕(第237図、写真図版166)

調査範囲の西端から約1030m東によったBXI区の西端部に位置し、AXIy3住居跡は北に約8mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出されているが、遺構の大半が南側の調査範囲外に延びており、調査された範囲は全体の30%位である。

東-西は約5.5m、検出された南-北が約1.9mの規模であるが、全体を調査したと仮定すると一辺が約5.5m位の規模と推定される。平面形は主軸が磁北に対して約5度西に偏したやや突辺気味で隅丸の方形か長方形と考えられる。全体を検出した北壁は若干突辺気味となることから、他の壁も同じように突辺気味であった可能性が考えられる。壁高は約50cmほどで、壁は床面に対して内湾気味に外傾する様相を示し、床面とは小さな丸味で接続する。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされるが、床面は全体として起伏も見られず平坦で踏みしめによって堅い。北壁沿いの床面には幅約15cm、深さ約10cmほどの壁溝が通っている。土坑はp1とp2の2基が検出されている。規模は別表に記載したが、p1は位置と規模から当該住居跡に伴う貯蔵穴と推定されるが、p2は平面的には柱穴的であるが、深さが浅い等疑問点もあることから断定はできない。埋土は全体が3層に細分されるが、そのほとんどを2層が占めている。土性はすべてシルト、色調が黒褐色と共通しており、さらにいずれの層にも粘性があるとともに、黄褐色シルト粒が混在するなど大差のない土が堆積している。自然状態で埋没した遺構と考えられる。

カマドは北壁の中央部からやや東よりに設置されるが、袖部・天井部・燃焼部・煙道部・煙出し部などの各部が良好な状態で検出されている。カマド全体の規模は幅約85cm、奥行き約60cm、高さ約30cmであるが、各部の規模では、左側の袖部が幅約17cm、奥行き約60cm、高さ約30cmで、右側の袖部は幅約15cm、奥行き約60cm、高さ約25cmであり、さらに壁外に約1.5m延びる煙道部が付属し、全体が土圧によって上から押しつぶされた状態をなす。天井部は焚き口部の約25cm部分を除いて裏壁まで覆っており、厚さが8cm前後で中央部が土圧で垂れ下がっている状況をなすが、釜据えつけ穴は明確でなかった。燃焼部は幅約45cm、奥行き約40cmほどの広さがあり、燃焼部焼土は焚き口部の手前から燃焼部にかけて70cm×50cmの範囲に約5cmの厚さで堆積する。煙道部は幅約20cm、高さ約15cmの地中に土管状に掘られた割り貫き式である。煙出し部は径約45cmで深さが約65cmの土坑状を示し、煙道部とは段差で接続する。

〔遺物〕(第273図、写真図版468)

埋土内からの出土を主体に土師器9点と須恵器2点の合わせて11点の出土である。

土師器 (第 273 図、写真図版 468)

9 点の出土であるが、器種には坏 3 点、壺 5 点、鉢 1 点が含まれる。

坏 (2721 ~ 2723) - 3 点の出土であるが、完形はなくいずれも口縁部から体部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され体部の外面はロクロ成形痕のみで再調整はないが、内面はミガキ後黒色処理される 1 点とまったく再調整のない 2 点がある。底部から外傾する体部は丸味をもったり外反したりする器形をなす。

壺 (2725 ~ 2729) - 5 点の出土であるが、完形や全体を残す個体はなく、いずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ不使用成形され、口縁部の内外面はヨコナデ、体部の外面がヘラナデかヘラケズリ、内面はハケメかヘラナデ調整される。小破片が多いため全体的な器形は定かでないが、底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は外反する器形らしい。

鉢 (2780) - ロクロ不使用成形された口縁部から体部を残す破片が 1 点出土している。口縁部外面はヨコナデ、体部外面がヘラナデ、内面はミガキ後黒色処理される。底部から外傾する体部は頸部に最大径をもって口縁部は外反する器形となるらしい。

須恵器 (第 273 図、写真図版 468)

坏 1 点と壺 1 点が出土している。

坏 (2724) - 完形が 1 点出土している。ロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも再調整はなく、底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が外反する器形をなす。大きさは口縁部径が 13.4 cm、底部径が 5.6 cm で 2.39 である。

壺 (2731) - 外面に並行叩き具痕、内面に放射状当て具痕を付す大壺の肩部破片が 1 点出土している。

(遺構の時期)

遺構と出土した遺物の特徴から 9 世紀前半代に位置付けられるものと推定される。

(例) AXIy 3 住居跡

(遺構) (第 238 図、写真図版 167)

調査範囲の西端から約 1039 m 東によった AXI 区の西端部に位置し、BXIb 3 住居跡は南に約 9 m の距離がある。AXIy 3 土坑 - 2 と付近の柱穴群と重複するが、土坑は当住居跡より古い遺構であり、柱穴群は新しい遺構である。

東 - 西約 3 m、北 - 南約 2.8 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して西に僅かに偏したやや隅丸の方形である。壁高は約 20 cm であり、床面に対して僅かに外傾して床面とは僅かな丸味をもって接続するが、一部はスロープ状となる部分も見られる。壁は西壁の北西隅部が突出するものの、他の壁はほぼ直線的で規則的な壁である。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルト

で構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされる。床面には若干起伏が見られるものの、全体としては踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面から p1 と p2 の 2 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1・p2 ともに深さが浅いなど疑問点もあり、貯蔵穴や柱穴と判断するには問題があり断定できない。埋土は黒褐色シルトの単層であり、黄褐色シルト粒の混入が多く見られる。自然に埋没した遺構と考えられる。

カマドは北壁の東隅部よりに設置されるが、削平や攪乱によって残存状態が不良であり、燃焼部と煙出し部が検出されたのみである。カマド部分と推定される位置が周囲の床面より僅かに高くなっているものの、袖部は検出されず不明である。燃焼部は焼土の残存から推定されたが、焼土は 40 cm × 35 cm の不整形の範囲に壁から 35 cm の場所に層厚約 3 cm で広がる。煙道部は痕跡も確認されていないことから掘り込み式であったと推定される。煙出し部は壁の北約 1.6 m の位置に検出され、径約 40 cm の円形で深さ約 25 cm の土坑状である。

(遺物) (第 275 図、写真図版 468・469・528・537)

埋土内から土師器 7 点、須恵器 3 点の合わせて 10 点の他、石製品 1 点と鉄製品が 1 点出土している。

土師器 (第 275 図、写真図版 468・469)

坏のみが 7 点の出土である。

坏 (2732～2738) - 7 点の出土であるが、すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整で、体部の外面は無調整であるが内面はミガキ後黒色処理される 2 点と再調整のない 5 点に分けられる。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が外反する器形をなし両種間に器形の差はない。大きさは口縁部径が 16.1 cm～14.8 cm、底部径は 6.4 cm～5.6 cm で比率は 2.68～2.31 である。

須恵器 (第 275 図、写真図版 469)

坏 1 点と壺 2 点の合わせて 3 点の出土である。

坏 (2739) - ロクロ使用成形された口縁部から体部下位を残す破片が 1 点出土している。内外面とも再調整はない。器形は土師器のそれとほぼ同様である。

壺 (2740～2741) - 外面に並行叩き具痕、内面が無文の大壺体部破片とロクロ使用成形された口縁端部破片の 2 点の出土である。

石製品 (第 275 図、写真図版 527)

砥石が 1 点出土している。

砥石 (108) - 奥羽山地新第三系中新統産の斜長石流紋岩を素材とし、全長 8.2 cm、最大幅 9.1 cm、最大厚 5.9 cm、重さ 1.230 g の大きさで、断面が不整の台形状の略方形をなし、3 面に使用面を持つ。

鉄製品 (第 275 図、写真図版 537)

埋土内から鉄滓が1点出土している。

鉄滓(113) - 不整形で断面が不整偏平であり、最大径11 cm、厚さ5 cmで重さが315 gの大きさがある。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から10世紀代に位置付けられるものと推定される。

(四) BXXb3 住居跡

[遺構] (第239図、写真図版168)

調査範囲の西端から約1037 m離れたBXX区の西端部よりに位置し、AIXx6住居跡は東に約15 mの距離がある。他遺構との重複はないが、南側が調査範囲外に延びており、調査されたのは全体の約70%ほどと推定されることと、東側の一部が耕作による攪乱を受け壁と床の一部が残存していない。

東-西約4.2 m、検出された南-北約3.2 mの規模であり、全体が調査されれば一辺約4.2 m位の規模と推定される。平面形は主軸がほぼ磁北を指す隅丸の方形か長方形と推定される。壁には幾分凸凹があり規則的とは言いがたい。壁高は約20 cm位であり、壁は床面に対して外傾し、床面とは軽い丸味をもって接続する。床は基本層序第四層の黄褐色シルトで構築されるが、一部に起伏があるものの踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1とp2の土坑が検出されている。検出された位置が攪乱を受けた場所であることから、当初から当住居跡に付属する土坑であるかは定かでない。規模は別表に記載したが、平面形が不整であり深さが浅いなど疑問点も多くあり、貯蔵穴と断定できない。埋土は黄褐色シルト粒が混入した黒褐色シルトの単層である。自然状態で埋没したものと考えられる。

カマドは調査された範囲内では検出されていないことから、調査範囲外に位置するか設置されていないかのどちらかと推定される。

[遺物] (第276・277図、写真図版469・470)

埋土内や床面から土師器26点と須恵器2点の合わせて28点が出土している。

土師器(第276・277図、写真図版469・470)

26点の出土であるが、大半が埋土内からの出土で床面からの出土は少ない。器種には環12点、高台付き環2点、甕9点、鉢1点、埴2点がある。

環(2742~2753) - 12点の出土であるが、完形や全体が判明するのは7点のみであり、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。2744以外はいずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面はすべてロクロ成形のみで再調整はないが、内面はミガキ後黒色処理される2点と無調整の9点に分けられる。底部

から直線的や丸味をもって外傾する体部は口縁端部が軽く外反したり直線的に外傾する器形をなす。2744 はロクロ使用成形され外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで調整され、底部の切り離しは不明であるが全面ヘラケズリで再調整される。器形はロクロ使用成形の個体と大同小異である。大きさは口縁部径が 16 cm～13.4 cm、底部径は 6.8 cm～4 cm で比率は 3.55～2.03 である。

高台付き杯 (2754～2755) —埋土内から 2 点の出土であるが、いずれも体部中位から高台部を残す破片での出土である。2 点ともロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整に高台を付した貼り付け高台である。杯部・高台部ともロクロ成形痕のみで再調整は見られない。高台部は高さが 1.5 cm 前後あり、ハ字状に踏ん張る。全体的な器形は不明であるが、大小関係があり 2754 が大型である。

壺 (2757～2764・2766) —9 点が主に埋土内から出土しているが、完形や全体が判明する個体はなくいずれも口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、小型は内外面ともロクロ成形痕のみであるが、中・大型は体部外面上位はロクロ成形痕、中位以下はヘラケズリで調整され、内面はロクロ成形痕かヘラナデで調整される。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で軽く窄み、口縁部は外反し端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となる。器形には大小関係があり、その 3 者が出土している。

鉢 (2765) —1 点の出土であるが、体部から底部を残す個体である。ロクロ使用成形され底部の切り離しは再調整のため不明である。体部の外面はヘラケズリ調整され、内面はミガキ後黒色処理されている。底部から丸味をもって外傾する体部は球状に影らむ様相をなすが、全体的な器形は定かでない。

埴 (2767・2768) —ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す個体が埋土内から 2 点出土している。体部外面の下半はヘラケズリ、上位はロクロナデ、内面はヘラナデやロクロナデで調整される。底部を欠失するため全体的な器形は定かでないが、体部が直線的や丸味をもって大きく外傾し、全体が洗面器やボール状をなすらしい。

須恵器 (第 276・277 図、写真図版 469・470)

埋土内から杯 1 点と壺 1 点の 2 点が出土したのみである。

杯 (2756) —口縁部から体部を残す小破片が 1 点出土している。ロクロ使用成形され内外面ともロクロ成形痕が見られ再調整はない。全体的な器形は不明であるが、外傾する体部は口縁端部が外反する器形らしい。

壺 (2769) —ロクロ使用成形された口縁端部の小破片が 1 点出土している。その他は定かでない。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した遺物の特徴から10世紀代に位置付けられるものと推定される。

(例) AXx6住居跡

〔遺構〕(第240・241図、写真図版169)

調査範囲の西端から約1049m東によったAXx区の西端部よりに位置し、AXy6住居跡は当住居跡と同じ場所にある。当住居跡はAXy6住居跡とAXx7住居跡状遺構と重複するが、当住居跡が最も古い遺構であることが確認されている。

東-西約7.3m、南-北約7.6mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約5度東に偏したやや隅丸の方形である。壁高は約45cmで、若干の凸凹はあるものの総じて直線的な壁であり、床面に対して垂直に近い軽く外傾する状況を示すことから、規則的な壁と言えよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされ、小起伏は見られるものの全体として水平に近い平坦な床面であり、全面が踏みしめによって堅い。壁沿いの床面に幅約30cm前後、深さ約10cmほどの壁溝がカマド部分と北西隅部を除いて全周している。床面からはp1~p7の7基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1・p2・p4・p5の4基は位置と規模から当住居跡の主柱穴を構成するものと推定される。さらに、p3とp6の存在とp1・p2の位置にも重複する古い柱穴が存在することから、一回建て替えられているか柱を入れ替えているものと推定される。p7は壁際の壁溝沿いに位置し、方形の掘方にさらに円形の副穴があるなど特殊な構造している。もしかすると櫛子掘えつけ穴の可能性がある。埋土は全体が8層に細分されているが、土性はいずれもシルトと共通し、色調も黒褐色を主体として褐色に分けられる。黒色土や炭化物などが混入する層が多い。自然状態で埋没した遺構と推定される。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置されるが、重複するAXx7住居跡状遺構によって削平され、東側部分は残存していない。検出されたのは左側袖部と燃焼部の一部、煙道部と煙出し部である。カマド全体の規模は定かでないが、左側袖部は幅約40cm、奥行き約70cm、高さ約15cmで、焼き口部付近は黄褐色のシルトを積み上げて構築するが、奥壁に近い部分は地山からの削り出しで構築している。燃焼部の広さも不明であるが、焼土は焼き口部の手前から燃焼部ほぼ全体に層厚約6cmで堆積する。煙道部は壁外に約1.5m延び、全体が地中に土管状に掘られた削り貫き式である。幅が約25cm、高さ約18cmの長形状をなし、奥壁から煙出し部に向かって幾分低くなる。煙出し部は径約40cmほどの円形で深さが約65cmの土坑状であり、内部に多くの河川礫が落ち込んでいた。

〔遺物〕(第278・280図、写真図版470~472・524)

ほとんどは埋土内からであるが、土師器24点と須恵器8点の他、土製品1点の合わせて33

点の出土である。

土師器（第278～279図、写真図版470・471）

床面からの出土は1点のみであるが、坏8点、壺13点、鉢3点の24点の出土である。

坏（2770～2778）－8点の出土であるが、関係や口縁部から底部を残す個体は3点のみで、他は体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され体部の外面はミガキやケズリなどで調整される前3点と無調整の後5点がある。内面は前3点がミガキ後黒色処理の他は、ロクロ成形痕のみで再調整はない。底部の切り離しは前3点がナデやケズリによる再調整で不明であるが、他の個体は回転糸切り離し無調整である。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が軽く外反する器形をなす。大きさは口縁部径は15.6cm～12cm、底部径7.6cm～5cmで比率は2.35～2.05である。

壺（2782～2794）－13点が埋土内から出土しているが、完形を1点含む他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。13点にはロクロ使用成形の個体6点とロクロ不使用成形の7点に分けられる。ロクロ使用成形の6点は体部外面上位から口縁部はロクロ成形痕、同下半はヘラケズリ、内面はカキメの他ロクロ成形痕で調整される。全体的な器形は定かでないが、底部から外傾する体部は中位や上位に最大径をもって頸部でわずかに窄み、口縁部が大きく外反した後、端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に突き出されて受け口状をなす。ロクロ不使用成形の7点は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともヘラナデまたは外面がヘラケズリなどで調整される。器形は基本的にはロクロ使用成形の個体と同様であるが、口縁部の形が外反するのみで受け口や縁帯状とならない違いがある。器形には大小関係があり、そのいずれも出土している。

鉢（2773・2795・2796）－3点の出土であるが、完形1点のほかは体部下位から底部を残す破片での出土である。3点ともロクロ不使用成形され、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整される。体部が底部から直線的に外傾し、頸部に僅かなくびれをもち口縁部は直線的である。口縁部径は器高よりも大きな器形である。

須恵器（第278～280図、写真図版471・472）

埋土内から坏3点と壺4点のほか、壺が1点の8点が出土している。

坏（2779～2781）－3点の出土であるが全体が判明する個体が2点の他は体部下位から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。器形は土師器坏のそれと大同小異であるが、底部から直線的や丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が直線的に外傾したり軽く外反する器形をなす。大きさは口縁部径が13.8cmと13.2cmで、底部径が6.2cmと6cmで比率は2.22と2.2である。

壺（2798～2801）－外面に並行叩き具痕、内面に同心円や並行・無文などの当て具痕を付す

大甕の破片が4点出土している。

壺(2797) - ロクロ使用成形されたほぼ完形の個体が1点出土している。肩部から下位の外面はヘラケズリ、その上位はロクロ成形痕を付し、内面は体部がヘラナダ、その他はロクロナダ痕が観察される。比較的径の大きい底部から外傾する体部は肩部に最大径をもって頸部で大きく窄み、口縁部は直線的に外傾する器形をなし、口唇部は角張る。

土製品(第280図、写真図版524)

埋土内から土鍾が1点出土している。

土鍾(31) - 両端を欠失するが、残存全長4.4cm、最大径1cmの管状土鍾である。長軸の中心部には貫通孔があり、横断面は円形、縦断面が凸レンズ状である。

(遺構の時期)

遺構の特徴と出土した遺物の特徴から9世紀前半代に位置付けられるものと推定される。

(例) AXIy 6 住居跡

(遺構)(第242図、写真図版170)

調査範囲の西端から約1050m東によったAXI区西部に位置し、AXIu 10住居跡は北東に約22mの距離がある。AXIx 6住居跡と重複するが、当住居跡の方が新しい遺構である。

東-西約3.5m、南-北約4mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約4度西に偏した隅丸でやや突辺気味の長方形である。壁高は約65cmであるが、実際に確認できたのは30cmであり、上位はAXIx 6住居跡の埋土内にあるため不明瞭であった。壁は外傾している。床は基本層序第IV層で構築され貼り床されることなくそのまま床面とされ、全体が水平に近い平坦で踏みしめによって堅い。西・南壁際の床面には幅約10cm、深さ約10cmの壁溝が巡っている。また、床面からp1~p11の土坑が検出されているが、規模は別表に記載した。位置や規模からp5・p7と南壁中央部に位置する3基は当住居跡の支柱穴を構成するものと推定され、残るp2~p4・p6は支柱穴となるものと考えられる。貯蔵穴的な土坑は検出されていない。埋土は全体が7層に細分されるが、土性はすべてシルトと共通し、色調も黒褐色を主体に褐色と暗褐色に分けられる。一部の層に異質の土粒を混在する場合が見られるものの、炭化物や焼土の混入例は少ない。重複するAXIx 6住居跡の埋土とは下位層ほど違いが明瞭であったが、上層では判然としない場合が多かった。自然状態で埋没したものと考えられる。

・カマドは検出されていないが、床面のほぼ中央部から長径(南-北)90cm、単軸(東-西)45cmの不整形な楕円形的に層厚約4cmで堆積する焼土が検出されている。カマドの検出がないことと、検出された既述の焼土が現地性であることから、この焼土は炉として使用されたものと推定することができる。

(遺物)(第280図、写真図版472・534)

床面から須恵器1点と鉄製品が1点の合わせて2点出土したのみである。

須恵器(第280図、写真図版472)

壺が1点出土している。

壺(2802) - ロクロ使用成形され、外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ調整された壺の体部下位から底部を残す破片である。

鉄製品(第280図、写真図版534)

鉄鍔が1点出土している。

鉄鍔(55) - 床面から完形の雁又鍔が出土している。全長14.5cm、鍔身は全長7.5cm、同最大幅4.5cmの大きさがあり、鍔身は鬨から4cm上位で二段に分かれる形状をしている。茎断面は方形で長さ6.2cm、最大幅5mm、厚さ3mmで、身との境目には明瞭な鬨が観察される。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、遺構の重複関係から9世紀後半代以降10世紀頃に位置付けられるものと推定される。

例 AXIu 10 住居跡

[遺構](第243図、写真図版171)

調査範囲の西端から約1067m東によったAXIu区の西部に位置し、BXIA 12住居跡は南東に約17mの距離がある。AXIv 12土坑と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

東-西約9.9m、南-北約7.8mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約10度東に偏した東-西に長軸を持つ、やや隅丸気味の長方形である。壁高は高い南壁で約15cm前後、低い北壁が痕跡程度と、竪穴式ではあるが全体的に掘り込みが浅く、9・10世紀の住居跡との比較では極端な差が見られる。壁は僅かな突辺状をなす隅丸的であり、全体としてみれば規則的な壁ではあるが軽く外傾する。床は基本層序第IV層上層の暗褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされる。壁溝の検出はないが、p1~p33の33基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模からみて貯蔵穴的な土坑はないものと考えられ、規模のほか位置や平面形などから見て、すべて柱穴であるものと推定される。おそらく、p6~p28・p28~p31・p31~p11・p11~p6を結ぶ柱穴が支柱穴を構成するものと推定され、その他の壁沿いに位置する柱穴は支柱穴的な壁柱穴と考えられる。埋土は黒褐色のシルトが主体的に堆積し、部分的に黒色シルトや褐色シルトが混在する。埋土が薄いことから断定はできないが、人為的に埋め戻されたとする状況は観察されなかった。

カマドは検出されず、床面のほぼ中央やや西よりの床面から径約50cm、層厚約3cmで堆積する焼土が検出されている。この焼土は現地性堆積であることから当住居跡の炉に伴う焼土と推定される。

〔遺物〕(第280図、写真図版472)

埋土内から土師器が4点と須恵器1点の合わせて5点が出土している。

土師器(第280図、写真図版472)

甕が4点出土している。

甕(2804～2807)－ロクロ使用成形され、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整された体部破片が4点出土している。

須恵器(第280図、写真図版472)

坏が1点出土している。

坏(2803)－ロクロ使用成形され内外面にロクロ成形痕のみを残す体部下位の破片が1点埋土内から出土している。

〔遺構の時期〕

出土した遺物では時期の特定は困難であるが、遺構の特徴から11世紀に位置付けられるものと推定される。

(ii) BXXa 12 住居跡

〔遺構〕(第244図、写真図版172)

調査範囲の西端から約1072m東によったBXX区のほぼ中央部に位置し、AXIa 6 溝跡、BXXa 12 土坑、BXXa 12 陥し穴状遺構、BXXb 11 陥し穴状遺構、BXXb 12 住居跡と重複するが、溝跡と土坑は当住居跡より新しく、陥し穴状遺構はいずれも古い遺構であるし、住居跡は古い遺構であることが確認されている。BXXb 12 住居跡は当住居跡の南壁と重複しており、ほぼ同じ場所に位置する。壁の掘り込みが平安時代の一般的な住居跡に比較して非常に浅いことから、西壁から南壁にかけては壁が確認できず、規模は柱穴の位置から推定した。

東－西約6.7m、南－北約7mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約5度ほど東に偏した隅丸の長方形と推定される。壁高は確認された北壁と東壁も痕跡程度の残存であり、最深で5cm前後である。したがって、畑耕作時の攪乱も受けていたことから壁も凸凹が著しく、現状では不規則な壁と言えよう。床は基本層序第IV層の上面を主体に構築しているが、一部に暗褐色土が残存するなど微妙であるものの、全体が特に貼り床されることなくそのまま床面としており、全面が踏みしめによって非常に堅い。壁溝の検出はないが、p1～p29の29基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模・平面形などからいずれも柱穴状の土坑であり、当住居跡の柱穴を構成するものと考えられる。おそらくp14～p16・p16～p18・p18～p24・p24～p14を結んだ方形に配置される8基が主柱穴を構成し、壁沿いに間隔を狭くして配置される17基はいわゆる壁柱穴で、壁体に関わる柱穴と推定される。貯蔵穴と考えられるような土坑はまったく検出されていない。埋土は掘り込みが浅いため掘削の際

にほとんど掘り取ってしまい図化されていないが、粗掘り時の観察によれば、表土下位の黒色に近い極暗褐色シルトが単層で堆積しており、全体として非常に軟弱であった。埋土が薄く断定できないが、自然埋没と考えられる。

カマドは検出されていないことから当初から設置しなかったものと考えられるが、床面中央のやや北壁よりの床面から長軸約1.5 m、単軸約70 cmの不整形に厚層約2 cmで堆積する現地性の焼土が検出されており、おそらく当住居跡に伴う炉跡の焼土と推定される。

〔遺物〕(第280図、写真図版472)

埋土内から土師器が2点出土している。

土師器(第280図、写真図版472)

坏1点と器種不明の小破片1点の合わせて2点の出土である。

坏(2808)―ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片が1点出土している。底部から体部が直線的に外傾する器形をなす。

器種不明(2809)―一端が直立し直口となる器形を示す口縁部破片が1点出土している。坏の口縁部とは思えないことから壺の口縁部である可能性が高い。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から11世紀代に位置付けられるものと推定される。

例 BXBb 12 住居跡

〔遺構〕(第245図、写真図版173)

調査範囲の西端から約1073 m東によったBXX区のほぼ中央部に位置し、BXXb 15住居跡は東に約12 mの距離がある。AXXs 6溝跡、BXXa 12住居跡と重複しているが、当住居跡がもっとも古い遺構である。

東―西約3.9 m、南―北約4 mの規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約50度東に偏した隅丸の不整形形状の形状を示す。壁高は約35 cmであり、壁は床面に対して約95度で外傾している。壁には僅かな凸凹があり突刃気味であるが、ほぼ規則的な壁と言えよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされ、全体が平坦でほぼ水平に近く、全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p7の土坑が検出され、規模は別表に記載した。規模と位置からp1は当住居跡に伴う貯蔵穴と考えられるが、他は平面形・規模ともに柱穴的な様相ではあるが、位置が不規則であり断定するには問題があることから、主柱穴であるかは定かでない。強いて言えば、p2とp6が位置からは主柱穴である可能性があるものの、断定できない。埋土は全体が6層に細分されるが、土性はシルトを主体に粘土質シルトに分けられ、色調は黒褐色・黒色・暗褐色である。炭化物や焼土のほか、異質の土粒を混在する土層が多い特徴が見られる。自然状態で埋没したものと

推定される。

カマドは東壁の中央やや北よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅約1m、奥行き約65cm、高さ約35cmであり、さらに屋外に約1.3m延びる煙道部が付属する。各部の規模では左側袖部が幅約30cm、奥行き約55cm、高さ約17cmで、右側袖部は幅約30cm、奥行き約70cm、高さ約20cmであり、右側の袖部は焚き口部に河川礫を埋設するものその他の部分はすべて暗褐色のシルトを積み上げて構築する部分と黄褐色の地山から削り出して構築した部分がある。燃焼部は幅約50cm、奥行き約65cmの広さがあり、燃焼部の焼土は焚き口部付近から奥壁の手前までの範囲に45cm×35cmの不整楕円形状に層厚約3cmで堆積している。火床は周囲の床面より幾分低くなっているが、奥壁付近で僅かに高くなって煙道部と接続している。煙道部は全体が土管状に地中に掘られた削り貫き式である。幅は約30cmで、底面には幾分起伏があるものの全体としてはほぼ平坦である。煙出し口は径約50cm×45cmの楕円形で、深さが約53cmの土坑状である。

〔遺物〕(第281～287図、写真図版472～475・528・535)

床面からの出土を主体に埋土内などから土師器50点、須恵器10点、土製品1点、石製品1点、鉄製品1点の合わせて63点の遺物が出土している。

土師器(第281～287図、写真図版472～475・525・528・535)

埋土内から環10点、甕34点、鉢2点、壺3点の合わせて49点の出土である。

環(2810～2820)一埋土内からの出土を主体に10点の出土であるが、完形は出土せず口縁部から体部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整と磨減によって不明の個体がある。体部の外面はいずれも再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される6点と再調整のない4点がある。破片が多いので全体的な器形は定かでないが、底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直線的に外傾したり内湾気味に直立気味したり外反したりする器形と推定される。

甕(2830～2868)一床面やカマド内などから34点の出土であるが、完形の個体が6点あるほかは、口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。34点にはロクロ使用成形された10点とロクロ使用成形された24点に分けられる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリやハケメで内面がハケメやヘラナデで調整される。底部から外傾する体部は中位や上位に最大径をもって頸部で軽く窄んだ後口縁部が直線的に外傾し、口唇部は先細りとなる。器形には大小があり、そのいずれも出土している。ロクロ使用成形の個体も基本的には前者とほぼ同様であるが、体部上位から口縁部はロクロナデ、体部外面は並行叩き具痕を付す個体が多くみられ、さらにヘラケズリ、同内面はヘラナデで調整され、体部の器形は前者と大同小異であるが、口縁部が外反して端部は角張る縁帯状をなしさらに上方に挽き出され受け口状となる。

鉢 (2364・2365) - 床面から完形1点と口縁部から体部下位を残す破片の2点の出土である。いずれもロクロ使用成形され器面調整は壺のそれとほぼ同様であるが、器形が底部から直線的に外傾したり丸味をもって外傾するが、口縁部径が器高より大であるとともに、口縁部が外反しないで直線的に外傾したり内湾気味となって直立するなど壺と異なる。器形には大型と小型がある。

壺 (2866～2868) - 床面や貯蔵穴内からロクロ使用成形された3点が出土している。1点は完形、1点は口縁部から体部下位を、残る1点は体部最下部から底部を残す。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともハケメやヘラナデで再調整される。比較的径の大きい底部から大きく外傾する体部は中位最大径をもって頸部で強く窄み、口縁部は外反する器形をなす。

須恵器 (第281・282・287図、写真図版472・475)

床面から坏8点、双耳坏1点、壺1点の合わせて10点の出土である。

坏 (2821～2828) - 8点が床面を主体に出土しているが、完形はなく口縁部から底部を残す個体が5点のほかは体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも再調整は観察されない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が外反する器形を示す。大きさは口縁部径は14.8cm～13.4cm、底部径7.4cm～5.6cmで比率は2.5cm～1.89である。

双耳坏 (2829) - 双耳坏の耳部と推定される破片が1点埋土内から出土しているが、小破片であるため詳細は不明である。横断面が偏平かつ長方形的な形状をなし、四面がヘラナデによって入念に調整されている。

壺 (2868) - ロクロ使用成形されたと推定され、外面に並行叩き具痕、内面にヘラナデによる調整痕を持ち、体部下位から平底の底部を残す壺が1点出土している。

土製品 (第287図、写真図版525)

床面から専と推定される土製品が1点出土している。

埴 (56) - 破損しているが全長14cm、最大幅10.5cm、厚さ3.5cmの大きさがあり、断面形が長方形で全体が偏平な長方形になるように成形されている。一部を欠損するため全体的なことは不明であり、使用目的は定かでない。

石製品 (第287図、写真図版528)

偏平で円形の石製品が1点出土している。

円形石製品 (113) - 平面形が径約4.4cm円形で断面形が厚さ0.6cmの偏平に加工された石製品であるが、平安時代に属するかは定かでない。

鉄製品 (第287図、写真図版535)

埋土内から鉄滓が1点出土している。

鉄滓(66) - 平面形が不整形で断面が扁平な鉄滓であることから鍛冶滓である可能性が高い。大きさは最大径 6.5 cm、幅約 3.8 cm、厚さ 2 cm、重さ 80 g である。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器や須恵器の遺物の特徴から 9 世紀中葉から後半代に位置付けられるものと推定される。

④ BXXb 15 住居跡

〔遺構〕(第 246・247 図、写真図版 174)

調査範囲の西端から約 1084 m 東によった BXX 区のほぼ中央部付近に位置し、BXXa 18 住居跡は北東に約 12 m の距離がある。AXXs 6 溝跡と AXMu 15 溝跡と重複するが、当住居跡の方が古い遺構である。

東 - 西約 6.8 m、南 - 北約 6 m の規模で、平面形は主軸が壁北に対して約 100 度東に偏した隅丸の並行四辺形的な形状をなす。壁高は約 35 cm であり、壁は若干の凸凹はみられるものの総じて直線的であり規則的な壁と言えるが、壁は床面に対して約 100 度外傾し床面とは軽い丸味をもって接続する。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築されるが、貼り床されることなくそのまま床面とされ、幾分起伏はあるものの全体としてみれば平坦でほぼ水平に近く、全面が踏みしめによって堅い。壁溝の検出はないが、床面から p1 ~ p10 の 10 基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、平面形や規模に明らかに 2 種類の土坑がみられ、規模と平面形のほか、位置から p6 ~ p10 の 5 基は当住居跡に伴う主柱穴と推定される。残る p1 ~ p5 の 5 基は規模もほぼ近似しているが、断面と深さに微妙な違いが見られ、総合的に判断して p1・p2・p5 の 3 基は貯蔵穴と理解できるが、p3・p4 は貯蔵穴としては浅いなどの疑問点があり、性格を断定できる状況ではない。埋土は全体が 7 層に細分され、土性は上層がシルトと下層には粘土が堆積する特徴がある。色調は極暗褐色・暗赤褐色・暗褐色・黄褐色・黒褐色などに分けられるが、堆積状況では自然堆積である。一部の土層に焼土や異質なシルト粒を混入している。自然状態で埋没したものと推定される。

カマドは東壁のほぼ中央やや南よりに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部が良好な状態で検出されている。袖部全体の規模は幅約 90 cm、奥行き約 1 m、高さ約 13 cm で、さらに壁外に約 1.5 m 延びる煙道部が付属する。袖部各部の規模では、左側袖部は幅約 25 cm、奥行き約 1 m、高さ約 20 cm で、右側袖部は幅約 30 cm、奥行き約 1 m、高さ約 18 cm であり、全体が暗褐色のシルトを積み上げて構築している。燃焼部は 75 cm × 40 cm の広さがあり、焼土は焚き口部付近から左側袖部沿いに 50 cm × 40 cm の楕円形状の範囲に層厚約 5 cm で堆積する。火床は周辺部の床面より若干低くなるが、奥壁よりは次第に高くなり煙道部とはほぼ同位で接続する。煙道部は奥壁から次第に高くなる掘り込み式であり、幅約 40 cm、最深部で約 35 cm であり、煙

出し部付近で検出面まで高くなる。煙出し部は径約 60 cm × 50 cm の長方形的な楕円形をなし、深さが約 50 cm の土坑状である。

〔遺物〕(第 288 ~ 293 図、写真図版 475)

床面からと埋土内から土師器 39 点、須恵器 26 点、石製品 1 点、土製品 5 点、鉄製品 1 点が出土している。

土師器 (第 288 ~ 292 図、写真図版 475 ~ 478)

床面からの出土を主体に坏 20 点、高台付き坏 2 点、甕 13 点、鉢 2 点、埴 2 点の各器種が出土している。

坏 (2870 ~ 2882・2885 ~ 2891) - 20 点の出土であるが、完形や口縁部から底部を残す個体は 6 点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面はいずれも再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される前 14 点とまったく再調整されない後 6 点に細分される。底部から直線的や丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が外反したり内湾し直立気味となったり直線的に外傾する器形をなす。大きさは口縁部径 15.6 cm ~ 13.2 cm、底部径 6.6 cm ~ 5.2 cm であり、比率は 2.37 ~ 2.27 である。

高台付き坏 (2883・2884) - 埋土内と貯蔵穴内から 2 点の出土であるが、完形は 1 点のみで別の個体は坏部は完形であるが、高台部が欠損している。ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整に高台部を貼り付けた貼り付け高台である。体部と高台部とも外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される。坏部の器形は高台の付かない坏と同様である。大きさにも大小があるものの状況は坏の変化の範囲内である。

甕 (2996 ~ 2917) - 埋土内からを主に 13 点の出土であるが、完形が 3 点のほかは、口縁部から体部を残す個体を主に、体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ不使用成形が 1 点のほかはいずれもロクロ使用成形され、体部上位から口縁部は内外面ともロクロナデやカキメで調整され、体部中位から下位の外面はヘラケズリ調整、同内面はヘラナデやカキメで調整される。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径を持って頸部で幾分窄み、口縁部は大きく外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状をなす。器形には大小がありそのいずれも出土している。ロクロ不使用成形の個体も基本的には同様であるが、口縁部が外反しない特徴がある。

鉢 (2918・2919) - 埋土内と床面から 2 点の出土であるが、完形や全体を残す個体はなく、口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面はロクロナデやヘラケズリで調整されるが、内面はミガキ後黒色処理やロクロナデによる調整がある。底部から外傾する体部は中位に最大径をもって頸部で窄む軽い球胴形をなし、口縁部は外傾して端部が角張る縁帯状とな

り上方に挽き出され受け口状を示す。

埴 (2920・2921) 一埋土内から2点の出土であるが、口縁部から体部を残す破片での出土である。ロクロ不使用成形され体部の内外面ともナデ調整される。底部を欠失するため全体的な器形は定かでないが底部から体部が直線的に大きく外傾する器形である。

須恵器 (第289・291・292図、写真図版477～479)

埋土内や床面から26点の出土であるが、器種として坏14点、瓶1点、壺1点、甕10点が含まれている。

坏 (2892～2905) 一床面や埋土内から14点の出土であるが、完形や全体が判明するのは7点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が軽く外反したり直線的に外傾したりする器形をなす。また、体部に片仮名の「キ」と判読される墨書がある。なお、一部には重ね焼きした際の火傷がある。

瓶 (2926) 一埋土内から頸部下位から肩部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形、され内外面とも再調整はない。全体的なことは定かでないが、底部から外傾する体部は肩部に最大径をもって頸部で大きく窄む。なを、頸部下端には断面カマボコ形の突帯が通る。

壺 (2923) 一ロクロ使用成形された口縁部から肩部上位を残す破片が1点床面から出土している。内外面とも再調整はないが微かな並行叩き具痕が残っている。肩部に最大径を持つ体部は頸部で窄み口縁部が直立する直口形の壺である。

甕 (2922・2924・2925・2927～2934) 一完形はなく口縁部から体部か体部から底部を残す破片のほか、体部破片が10点出土している。最も状態の良い2922は、口縁部はロクロナデ痕を残すが体部の外面は並行叩き具痕、内面は同心円文や青海波文の当て具痕が観察される。底部から外傾する体部は肩部に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は直線的に外傾する器形をなし、端部に突帯が全周する。そのほか口縁部から体部を残存する2点は、いずれも内外面にロクロナデ痕を残すが、2924は大甕と推定される外反する口縁部で端部が角張る縁帯状をなし、2925は土師器の長胴形と近似する器形で、口縁部が直線的に外傾して端部が角張る縁帯状をなし上方に挽き出されて受け口状の器形をなす。体部下位から底部を残す2927と2928の2点は内外面ともヘラケズリやヘラナデで調整される。体部の破片は外面に並行叩き具痕、内面に無文やヘラナデ痕を持つ2930・2932・2933の3点と、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整される2931と2932の2点がある。

石製品 (第292図、写真図版528)

カマド付近の床面から砥石が1点出土している。

砥石 (114) 一全長3.5cm、幅5cmで断面が不整な方形をなす柱状節理の奥羽山系産の凝灰岩

を素材とし、3面を使用面としている。

土製品 (第 293 図、写真図版 524・525)

埋土内や床面から専が1点と土鍾が4点出土している。

埴 (56) 一部を欠損しているが、残存長 10 cm、最大幅 11 cm、厚さ 3.5 cm の大きさに粘土を成形し、焼成された物である。当遺跡では2点の出土であるが、使用方法などは不明である。

土鍾 (32～35) - 4点の出土であるが、全長が 5 cm～3.2 cm、最大幅 2 cm～1.6 cm の大きさがあり、両端が細くなり長軸の中心に貫通孔を持つ管状土鍾である。

鉄製品 (第 293 図、写真図版 535)

床面から刀子が1点出土している。

刀子 (67) - 全長 13.5 cm、最大幅 1.2 cm の大きさがあるほぼ完形である。身の長さ 8 cm だ樫は平樫、刃部は先端部に向かって次第に細くなり、断面は楔形である。基部は断面が長方形で先端部に向かって次第に細くなり、刃部と基部の境には関はない。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から9世紀後半代に位置付けられるものと推定される。

例 BⅩa 18 住居跡

〔遺構〕 (第 248 図、写真図版 175)

調査範囲の西端から約 1094 m 東によった BⅩ区の中央西よりに位置し、AⅩy 22 住居跡は東に約 18 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出されている。なお、床面に段差があり2棟の重複かとも考えられたが、埋土の断面観察で他遺構との重複ではなく、床に段差があるものとの結論に達した。

東-西約 3.6 m、南-北約 3.8 m の規模があり、平面形は主軸が磁北に対して約 100 度東に偏したやや歪んだ隅丸台形気味の形状をなす。壁高は浅い床で 35 cm、深い床まで約 40 cm と深い掘り込みであり、壁は幾分凸凹があるものの全体としてほぼ直線的で規則的な壁であり、床面に対して 95 度ほどで外傾する。床は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトで構築され、若干の起伏は見られるもののほぼ平坦である。また、既述のようにカマドを設置した東壁寄りの東-西約 2.5 m、南-北約 3 m の範囲の床面が、西・北壁寄りの床面より約 10 cm 深くなる構造をなし、所謂ベット状遺構を持つ住居跡である。壁溝の検出はないが、p1 と p2 の2基の土坑が検出されている。

規模は別表に記載したが、平面形と規模や位置から柱穴とは思えず共に貯蔵穴と推定される。埋土は全体が6層に細分されるが、土性はすべてシルトと共通し、色調は上位層の2層は暗褐色、中位層は黒褐色、下位層の2層は暗褐色をなし、下位層には炭化物などの混入が見ら

れる。

カマドは東壁の南隅部寄りに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部などが良好な状態で検出された。全体規模は、袖部の幅約80cm、奥行き約70cm、高さ約25cmほどであり、さらに壁外に約1.85m延びる煙道部が付属する。各部の規模は、左側袖部は幅約20cm、奥行き約55cm、高さ約30cmで、右側袖部は幅約35cm、奥行き約60cm、高さ約30cmであり、袖部は左側袖部の焚き口部には土師器の甕が倒立で埋設されているが、他は暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は90cm×40cmの広さがあり、焼土は焚き口部付近から中央部のやや奥まで60cm×40cmの範囲に層厚約5cmで堆積する。火床は周囲の床面とほぼ同位であり、煙道部とはほぼ同位で接続し、燃焼部のほぼ中央付近に支脚がある。煙道部は全体が地中に土管状に掘られた割り貫き式であり、幅約25cmで断面形が方形気味をなし、太さが奥壁部分が太く煙出し部が細く成っている。底面はほぼ平坦であるが、煙出し部の底面とは段差で接続する。煙出し部は径約30cmほどの不整形円形状をなし、深さが約55cmの土坑状である。

〔遺物〕(第294・295図、写真図版479・480・535)

埋土内からの出土を主体に土師器8点、須恵器5点と石製品2点と9点の鉄製品が出土している。

土師器(第294・295図、写真図版479・480)

ほとんどは埋土内からの出土であるが、甕が7点と鉢1点が出土している。

甕(2939～2945) - 7点の出土であるが、完形が2点の他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ不使用成形され、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がハケメやヘラケズリ、内面はハケメやヘラナデで調整される。比較的径の大きい底部から外傾する体部は中位か上位に最大径をもって頸部で軽く窄まり、口縁部は頸部で段を持ち外傾する。口縁端部は先細りとなる例と角張る例がある。また、器形には大小がありそのいずれも出土している。

鉢(2946) - ロクロ不使用成形され体部下位から底部を残す破片が1点出土している。外面はヘラケズリ、内面がミガキ調整される。径の大きい底部から丸味を持って体部が外傾する器形である。それ以上のことは定かでない。

須恵器(第294・295図、写真図版479・480)

埋土内からの出土を主体に5点の出土あり、器種としては坏4点、甕1点がある。

坏(2935～2938) - 4点の出土であるが、完形は1点のみで他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも無調整であり、体部は底部から丸味をもって外傾し口縁端部が直立する器形をなす。大きさは口縁部径が12.8cm、底部径は5.8cmで比率は2.2である。

甕(2947) - 内外面に並行叩き具痕と並行当て具痕を持つ大甕の体部破片が1点出土してい

る。

鉄製品 (第 296 図、写真図版 535)

床面から鉄塊 1 点、紡錘車 1 点、角棒状鉄製品 1 点、刀子 1 点、鉄鎌 1 点のほか、鉄滓 3 点の合わせて 8 点出土している。

鉄塊 (59) 一全長 14.3 cm、最大幅 2.8 cm、厚さ 1.4 cm の大きさがあり、器種は定かでないが欠損している状況はないので素材鉄塊と思われる。

紡錘車 (60) 一心棒の両端を欠失しているが、残存する心棒の長さ 15 cm、太さ 5 mm であり、下から約 5 cm の位置に径 4.7 cm、厚さ 4 mm の円盤が付いている。

角棒状鉄製品 (61) 一何かの部品である可能性の強い器種であるが、残存全長 11.3 cm、幅 5 mm で断面が方形の棒状であり、両端を欠失する。

鉄鎌 (62) 一茎の先端部を欠失しているが残存長 15 cm の大きさを持つ長頸鎌である。鎌身は長さが 2.2 cm の大きさを平面形が三角形の三角鎌である。茎部は幅が 5 mm、厚さ 3 mm の断面長方形をなし、ほぼ中位に莖被があり関はない。

刀子 (63) 一茎の先端部を欠失するが残存長 13.7 cm、刀身部は長さ 10.5 cm、最大幅 1.5 cm、茎部長さ 3.2 cm、幅 9 mm、厚さ 3 mm の大きさがあり、棟は平棟で刃部は切っ先に向かって次第に先細りとなる。関が棟と刃部につく両関である。

鉄滓 (65-a・65-b・114) 一 3 点の出土であるが、いずれも小型で断面が不整な扁平状をなし、大きさは最大径が 4.8 cm × 2.5 cm ~ 2.5 cm × 2 cm ほどであり、軽いことから鍛冶滓と推定される。

[遺構の時期]

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器と須恵器の特徴から 9 世紀中葉頃に位置付けられる物と推定される。

例 AXIy 22 住居跡

[遺構] (第 249・250 図、写真図版 176)

調査範囲の西端から約 1113 m 東によった AXI 区の東端部付近に位置し、BXIe 22 住居跡は南に約 16 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

東-西約 5.5 m、南-北約 5 m の規模であるが、南壁の東よりの壁が約 50 cm ほど突出する特徴があり、平面形は主軸が壁北に対して約 100 度で偏する変則的な長方形をなす。壁高は約 20 cm 位であり、床面に対して 100 度 ~ 90 度で大きく外傾する。壁は若干の凸凹があるもののほぼ直線的であり規則的な壁と言えよう。床は基本層序第 IV 層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされ、幾分起伏はあるもののほぼ平坦で水平に近い。壁溝は検出されていないが、p1 ~ p19 の 19 基の土坑が検出されている。位置や規模・平面形などか

ら p5・p6・p8・p10 の 4 基が当住居跡の支柱穴である可能性が高い。貯蔵穴的な土坑も存在するかも知れないが、断定できる状態ではない。その他の土坑は支柱穴的な役割を担った土坑であろうと考えている。埋土は全体が 4 層に細分されているが、土性はいずれもシルトであり色調もすべて黒褐色と共通しており、炭化物や焼土の細粒が点在する。自然堆積で埋没した遺構と推定される。

カマドは東壁の南隅部寄りに設置され、袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の各部分が検出されている。全体の規模は、袖部の幅が約 80 cm、奥行き約 60 cm、高さ約 25 cm であり、さらに壁外に約 1.1 m 延びる煙道部が付属する。袖部各部の規模は、左側が幅約 20 cm、奥行き約 60 cm、高さ約 20 cm で、右側は幅約 30 cm、奥行き約 55 cm、高さ約 30 cm であり、袖部は芯に河川礫を配置した後その周囲を暗褐色シルトを積み上げて構築している。燃焼部は 45 cm × 35 cm の広さがあり、焼土は焚き口部の手前から奥壁の手前まで約 65 cm × 35 cm の略楕円形状に層厚約 4 cm で広がっている。火床は周囲の床面とほぼ同位で続き、煙道部とは奥壁で段差をもって接続する。煙道部は幅約 30 cm、深さが最深部で約 10 cm の掘り込み式であり、底面は若干起伏があり煙出し部に向かって次第に高くなる様相を示す。なお、ほぼ中央の底面には土師器壺の破片が敷かれていた。煙出し部は特に特別に囲まれた様相は見られず、煙道部の先端が煙出し部であり、幅が約 25 cm で深さが約 5 cm と煙道部のそれより浅い。

〔遺物〕(第 297～304 図、写真図版 480～485・524・534・537)

埋土内からの出土を主体にカマドなどから土師器 76 点、須恵器 9 点、灰軸 2 点、土製品 1 点、鉄製品 3 点が出土している。

土師器 (第 297～303 図、写真図版 480～484)

76 点の出土であるが、器種として坏 33 点、高台付き坏 3 点、甕 36 点、鉢 3 点、埴 1 点が含まれている。

坏 (2948～2957・2960～2982) - 33 点の出土であるが、完形や全体を残すのは 18 点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整で体部外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される 10 点と、再調整のない 23 点に分けられる。前者は底部から丸味をもって外傾する体部は口縁部が直線的に外傾したりわずかに外反か、直立気味となる器形をなす。大きさは口縁部径が 16.2 cm～13.2 cm、底部径 8 cm～5.8 cm で比率は 2.79～1.93 であり、後者より幾分大型で深い傾向がある。後者は底部から直線的に外傾したり丸味をもって外傾し、口縁部は直線的に外傾か僅かに外反する器形をなし、大きさは口縁部径が 14.6 cm～11.6 cm、底部径 6 cm～4.8 cm で比率は 2.43～2.03 であるが、前者よりやや小型で器厚が低い特徴がある。

高台付き坏 (2958・2959・2983) - 3 点の出土であるが、完形はなく口縁部から底部までを残す破片が 1 点の他は体部下位から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成

形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整に高台部を貼り付けた貼り付け高台である。体部の外面はすべて再調整が観察されないものの、内面はミガキ後黒色処理される前2点とまったく再処理のない後1点に分けられる。全体的な器形が判明するのは前1点のみであるが、それによれば底部から体部が丸味をもって軽く外傾し、口縁端部が内湾気味となり直立する。高台部は低い「ハ」字状に踏ん張り、全体的な器形は高台付き坏というよりも碗に近い器形である。

壺 (2988・2990・2992～3024) - 36点の出土であるが、完形は1点のみで、他は口縁部から体部を残す破片26点、体部から底部か体部のみを残す破片10点が含まれている。ロクロ使用成形された個体は1点のみで他はすべてロクロ不使用成形された個体である。ロクロ使用成形の1点は口縁部から体部を残す破片であるが、内外面ともロクロ成形痕のみを残し、底部から外傾する体部は頸部に体部最大径をもって口縁部が大きく外方に開き、端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状をなす。比較的小型の個体である。ロクロ不使用成形の個体は口縁部はヨコナデ調整、体部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ調整されほぼ同様である。底部から外傾する体部は中位か低位に最大径をもって頸部でわずかに窄み、口縁部は短く直線的に外傾する器形を示す個体が多いものの、一部に壺的に膨らむ器形の個体もある。また、器形には大小があり大・中・小の3型が出土している。

鉢 (2991・3025・3026) - ロクロ不使用成形された3点の出土であり、いずれも完形かほぼ完形に近い状態である。2991はバケツに近い器形、その他3025は腰が丸く張り、3026は坏形に近似した器形である。器面の調整は外面がヘラケズリかヘラナデ、内面がヘラナデで調整され、壺の調整技法とはほぼ同様である。

埴 (3027) - ロクロ不使用成形された、口縁部から体部下位を残す破片が1点出土している。破片のため全体的なことは定かでないが、大型の洗面器に近似した器形を推定させる状況を示している。底部は残存しないため不明であるが、体部は底部から丸味をもって大きく外傾し、肩部付近で直立気味に立ち上がり、頸部で僅かに窄んだ後口縁部が外反する器形をなす。器面は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がケズリ、内面はヘラナデで調整され、土師器壺のそれと大差がない。

須恵器 (第298・303・304図、写真図版482・485)

埴土内からの出土を中心に9点の出土であるが、器種として坏3点、壺5点、瓶1点が含まれている。

坏 (2984～2986) - 3点の出土であるが、完形はなくいずれも体部下位から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部は回転糸切り離し無調整であり、体部の内面には再調整がないものの、外面は底部付近がヘラケズリ調整される個体が1点のほかは、無調整である。器形全体は不明であるが、体部が底部から若干丸味をもって外傾する器形らしい。

壺 (3028・3029・3031～3033) - 5点の出土であるが、完形はまったく含まず口縁部から体部を残す破片が1点のほかは、口縁部や体部か体部下位から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ不使用成形された可能性があり、3028・3031は口縁部が内外面ともヨコナデされ3031はその後樽描波状文が付されている。体部の外面は並行叩き具痕やヘラケズリで調整され、内面は無文の当て具痕が観察される。おそらくいずれも大甕と推定される。

瓶 (3030) - 埋土内から出土した高台の付された瓶が1点出土している。体部中位から底部を残存し、体部の外面はヘラケズリ、内面がヘラナデやナデで調整される。底部には「ハ」字状に踏ん張り断面三角形の高台が貼り付けられる。

灰釉 (第298・304図、写真図版482・485)

床面から碗と推定される体部下位から底部を残す1点と、体部下位の小破片1点の2点が出土している。

碗 (2987・3034) - 2987は体部下位から底部を残存する胎土が非常に白い1点と、胎土が明るい灰褐色気味をなす体部下位小破片1点であるが、いずれもロクロ使用成形され口縁部から体部下位まで灰釉が施される。前者は底部が回転糸切り難し無調整に高台が貼り付けられ、高台は断面カマボコ形に近い形状である。しかし、出土したのはいずれも一部か小破片であるため詳細は不明である。

土製品 (第304図、写真図版524)

一部を欠損した土甕が1点出土している。

土甕 (36) - 両端を欠失した管状土甕である。残存全長は4cm、最大径1.8cmの大きさがあり、両端に向かって細くなり長軸の中心には貫通孔がある。

鉄製品 (第304図、写真図版534・537)

床面から釘と推定される1点と鉄滓が2点の合わせて3点出土している。

釘 (56) - 両端を欠失するが、断面が方形をなし先細りとなる残存全長13.2cm、最大径1cmの大きさがある釘である。

鉄滓 (57・106) - 平面形が不整形で断面形が扁平な鉄滓であるが、大きさは最大径11.3cmと2.5cm、最大幅8cmと2.2cmで厚さは3cmと1.2cmであり、比較的軽いことから鍛冶滓であろうと推定される。

〔遺構の時期〕

遺構の特徴から時期の特定は困難であるが、出土した土師器や須恵器の特徴から10世紀初頭頃に位置付けられるものと推定される。

(ii) BⅩe 22 住居跡

〔遺構〕 (第251図、写真図版177)

調査範囲の西端から約1112 m東に寄ったBⅡ区の東端部に位置し、AⅡx2住居跡は北東に約30 mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

東-西約6 m、南-北約5.2 mの規模があり、カマドが検出されていないので主軸方向は不明であるが、平面形は長軸を東-西に持つ隅丸の長方形をなす。壁高は最深部で20 cmほどであるが、ほとんどの場所は10 cm以下と全体として掘り込みの浅い住居跡であり、壁は床面に対してやや外傾し、壁には若干凸凹があるものの全体としては直線的であり、規則的な壁と言えよう。床は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトの上面で構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされており、床面は平坦で全面が踏みしめによって堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p21の21基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、すべて平面形や規模が近似した特徴がありいずれも柱穴的である。おそらく、p13~p14は横持柱で、壁際に巡るように配置されたp1~p4、p4~p7、p7~p10、p10~p1は所謂壁柱穴と理解できよう。その他の土坑も何らかの形で関連した支柱穴と考えられる。埋土は現地表面から6層に細分されているが、当住居跡を埋める実際の埋土は4~6層の3層のみであり、その上位層は基本層序に相当する部分である。極暗褐色と黒褐色のシルトが堆積し全体に多量の炭化物が混在しており、この住居跡は火災で焼失したことを推定させる。

カマドは既述のように検出されていないが、床面の中央やや北側に95 cm×50 cmの不整形な範囲に層厚約3 cmの現地性焼土が検出されており、この住居跡はカマドは設置しないで炉を設置したものと考えられる。

(遺物) (第305図、写真図版485・535)

床面から土師器が4点と鉄製品が1点出土している。

土師器 (第305図、写真図版485)

柱状高台皿4点と皿の口縁部破片が1点の5点の出土である。

柱状高台皿(3025~3038) - いずれもロクロ成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整で、形状がほぼ同型の柱状高台皿である。皿部の器厚は比較的厚く、体部が高台部から軽く丸味をもって大きく外傾し口縁部も同様に外傾する。高台部は太く、中実である。大きさは口縁部径10.2 cm~9.3 cm、底部径が4.9 cm~4.6 cmで比率は2.21~2であり、高台の高さは2 cm前後である。

皿(3039) - 口縁部の小破片が1点の出土であるが、器厚が柱状高台皿と同様厚く、さらに同じように体部が外傾することから皿であることは明らかであり、本来は柱状高台皿である可能性が高い。

鉄製品 (第305図、写真図版535)

床面から釘が1点出土している。

釘(68) - 頭部を欠損するが残存全長8 cm、最大径8 mmの大きさがあり、断面が丸形で先端

部に向かって先細りとなる。

〔遺構の時期〕

遺構と出土した柱状高台皿の特徴から11世紀中葉頃に位置付けられるものと推定される。

(例) AⅡx2 住居跡

〔遺構〕(第252図、写真図版178)

調査範囲の西端から約1132m東によったAⅡx2区の西端部に位置し、当調査範囲の最東端でもある。他遺構との重複もなく単独で検出された。東端が北上市道に係る崖に延びていることから全体を検出できなかった。

東-西は5.8m以上、南-北約6mの規模があり、平面形は隅丸で壁がやや突辺気味となる方形か長方形と推定される。壁高は総じて低く最深部で15cmほどである。床は基本層序第Ⅳ層上位層で構築されるが、貼り床されることなくそのまま床面としている。床面には幾分起伏があるものの全体として踏みしめによって堅い。また、南壁沿いの東側には床面が一段ベット状に高くなった部分が帯状に続くのが確認された。壁溝は検出されていないが、床面からp1～p23の23基の土坑が検出されている。形状や位置そして規模から貯蔵穴的な土坑はなく、いずれも柱穴的な土坑と理解される。配置された位置関係からみてp17～p20、p20～p15、p15～p16で結んだ6基が主柱穴である可能性があり、その他の壁際に位置し配置される土坑は壁柱穴と推定される。埋土は全体が4層に細分されているが、土性はシルトを主体に粘土であり、色調は黒褐色・暗赤褐色・明褐色とそれぞれ違いがある。土層が薄いことから埋没状況の判断が困難であるものの、一部人為的な残土の投棄があった可能性が考えられる。

カマドは検出されていないが、東壁寄りの床面に1.4m×1.1mの不整形なV字状の範囲に層厚約5cmで堆積している。さらに、南壁沿い西隅寄りに煙道部のない所謂、竈(へっつい)が検出されている。検出の状況は、焚き口部と推定される位置に左右とも河川礫を埋設した後、暗褐色シルトを馬蹄形に積み上げて構築しており、煙道部はまったく検出されなかった。全体規模は、焚き口部の横断径が約1.1m、奥行き約80cmであり、燃焼部は65cm×50cmの広さがあり、換土は焚き口部付近から奥壁まで75cm×35cmの範囲に左袖部沿いに層厚約5cmで倒卵形状に広がっている。

〔遺物〕(第305図、写真図版485・528・534)

埋土内から土師器4点、須恵器2点、石製品3点、鉄製品1点、紙製品1点の合わせて11点が出土している。

土師器(第305図、写真図版485)

埋土内から環3点と皿と推定される1点の4点が出土している。

環(3040～3042) - 口縁部破片が1点と体部下位から底部を残す破片2点であるが、いずれ

もロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部が底部から大きく外傾する器形と推定される状況を示し、もしかすると皿形に近い器形かも知れない。体部は内外面とも再調整は観察されない。

皿(3043)－ロクロ不使用成形されたと推定される环形より大型の口縁部破片であるが、外面はヘラケズリ、内面がナデで調整される。体部が大きく外傾すると推定されることから皿としたが、本来は鉢形である可能性がある。

須恵器(第305図、写真図版485)

壺が2点の出土である。

壺(3044～3045)－外面に並行叩き具痕、内面に無文当て具痕を持つ1点と内外面ともヘラナデやヘラケズリで調整される1点の2点が出土しており、前者は大壺、後者は一般的な壺と推定される。

石製品(第305図、写真図版528)

床面と埋土内から砥石が3点出土している。

砥石(115～117)－いずれも自然の河川礫を素材とした砥石であるが、石質は凝灰岩質が2点と流紋岩1点である。3点とも平面形がやや長めの細長い形で断面が扁平に近いものが多い。使用面は個別で若干違いはあるが、平坦面に持つ例が多い他一部では側縁にも持つ。大きさは全長が14cm～6.9cm、最大幅5.9cm～4.4cm、厚さ4.1cm～2.4cm、重さ316g～98gである。

鉄製品(第305図、写真図版534)

床面から鎌が1点出土している。

鎌(58)－基部と先端部を欠失した鎌が1点出土している。残存全長11cm、最大幅3.2cmの大きさがあり、全体が湾曲している。厚さ4mmの薄い鉄板を素材とし断面は楔形である。基部が残存しないため全体的なことは不明であるが、残存部分の状況から先端部寄りが大きく湾曲する製品と推定される。

紙製品(写真図版485)

床面から漆に浸した紙が1点出土している。

漆紙一漆を入れていた容器の蓋紙と推定されるが、剥がした後、3回折り畳まれている。現状の平面形は方形に近いことから、当初から方形であったものと推定される。墨書が書かれていた可能性があるものの赤外レントゲンカメラで観察したが文字は確認できなかった。

(遺構の時期)

遺構の特徴と出土した遺物から11世紀代に位置付けられるものと推定される。

2. 竪穴住居跡状遺構

13棟の検出であるが、当遺跡で竪穴住居跡状遺構としたのは、規模や平面形などは住居跡的であるが、カマドや柱穴が検出されないなど、通常の住居跡とは状況が異なる遺構に対して付した遺構の種別名であり、住居跡に近似している状況を考慮して付した名称である。検出された位置を見ると、住居跡が所在する範囲に点在する様相をなし、特に密集するといった状況はまったく認められない。遺物は出土した例としない例があり、全体として見れば、遺物を共伴した例の方が多い。

以下では調査範囲の西端から東方に向かって個別的に遺構と共伴した遺物を合わせて既述するが、以下では住居跡状遺構と略称することとする。

(1) EⅠa 23 住居跡状遺構

〔遺構〕(第254図、写真図版179)

調査範囲の西端から約17m東によったEⅠ区の東端部に位置し、DⅢs 8住居跡状遺構は東方に約139mの距離がある。他遺構との重複はなく、単独で検出された。

東-西約2m、南-北約1.7mの規模があり、平面形は長軸が磁北に対して約100度東に偏した隅丸の長方形であるが、東壁の南隅部に約80cm×80cmの規模で平面形が略方形の張り出しが対角線上に取り付く。壁高は約20cmで、壁は床面に対して大きく外傾する部分が多く、壁も幾分凸凹があり、平面形もやや歪んでいる。床は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトの上部で構築され貼り床されることなくそのまま床面とされるが、全体に若干の起伏が見られるほか軟らかく、あまり強い踏みしめは見られない。壁溝は検出されないが、p1~p2の2基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、規模や平面形から柱穴とは考えられず、深さから見れば床面の窪み的な土坑である。埋土は全体が4層に細分されているが、さらに細分される層もある。土性はすべて砂質シルトと共通し、色調はいずれも黒褐色であるが微妙な違いが見られる。全体に粘性があり、地山ブロックの他、十和田a降下火山灰などの混入が観察される。堆積状況の観察から自然堆積によって埋没したものと推定される。

カマドや炉跡と考えられる焼土などの検出はない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため断定できないが、埋土内に火山灰が混入することから平安時代の遺構と判断した。

(2) DⅢs8 住居跡状遺構

〔遺構〕(第254図、写真図版180)

調査範囲の西端から約155m東によったDⅢ区の西よりに位置し、DⅢu23住居跡状遺構は東に58mの距離がある。DⅢs9陥し穴状遺構-1、DⅢs9陥し穴状遺構-2、DⅢt9陥し穴状遺構が重複するものの、これらの遺構は縄文時代の陥し穴状遺構であることから当遺構の方が新しい。

東-西約3.9m、南-北約3.4mの規模があり、平面形は長軸が磁北に対して約105度東に偏したやや隅丸の長方形気味をなす。壁高は約10cmほどと掘り込みが浅く、壁は床面に対して約100度と大きく外傾する。床は基本層序第IV層の黄褐色の砂質シルトの上部で構築され、貼り床はないものの床面には起伏があり、全体的にあまり強い踏みしめが見られず、軟らかい床面である。壁溝は検出されていないが、p1~p2の2基の土坑が検出されている。平面形や規模は、p1が貯蔵穴的、p2は柱穴的であるが、p1は浅くて底面に凸凹が多いなど、また、p2も浅く断面形が不規則であるなどの難点が見られ、断定しがたい。埋土は黒褐色シルトの単層であり、若干粘性があるほか、地山粒子が多く混入する。埋土が単層で地山粒子の混在が見られるなど自然埋没とは断定できない部分も見られ、人為的に埋め戻した可能性が推定される。

カマドや炉跡の焼土は検出されていない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定する遺物が出土していないので断定できないが、平安時代の遺構と考えられる。

(3) DⅢu23 住居跡状遺構

〔遺構〕(第255図、写真図版185)

調査範囲の西端から約214m東によったDⅢ区の最東端部に位置し、DⅢo25住居跡状遺構は北北東に約25mの距離がある。開田時に南壁の西隅部付近を削平されているが、重複する遺構もなく単独で検出された。

東-西約1.8m、南-北約1.8mの規模であるが、平面形は主軸がほぼ磁北を指す不整形形状の形状をなす。壁高は最高部で15cmほどであるが、地点によって差が見られる。壁には凸凹があり規則的とは言えず、床面に対しても約95度ほどで外傾する。床は基本層序第IV層相当の黄褐色シルトで構築され貼り床されることなくそのまま床面としているが、全体として凸凹が著しく、さらにあまり強い踏みしめが見られず軟らかい。壁溝や土坑ともに検出されていない。埋土はすべてシルトと共通するが、色調は黒褐色と黄褐色や明褐色などに細分され、炭化物や砂粒などを混在する場合が多い。堆積状況から人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドも炉跡と推定される焼土などは検出されていない。

〔遺物〕(第306図、写真図版486)

土師器と須恵器が各1点の合わせて2点が出土している。

土師器(第306図、写真図版486)

甕が1点出土している。

甕(3186) 一体部下位から底部を残存する小破片であるため断定し難いが、ロクロ使用成形され体部外面がケズリ、内面がナデ調整されており、底部の切り離しは不明である。

須恵器(第306図、写真図版486)

坏が1点の出土である。

坏(3185) ロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整の完形である。体部は内外面とも再調整はまったくなく、底部から体部が丸味をもって外傾し、口縁端部が内碗気味となって直口する器形をなす。口縁部径12.8cm、底部径6.2cmで、比率は2.08である。

〔遺構の時期〕

出土した遺物の特徴から9世紀後半から10世紀頃に位置付けられるものと推定される。

(4) DⅢo25 住居跡状遺構

〔遺構〕(第255図、写真図版181)

調査範囲の西端から約222m東によったDⅢ区の最東端部に位置し、DⅡo2住居跡状遺構は東に8mの距離がある。南東隅部でDⅡo1土坑と重複するが、当遺構の方が古い遺構である。また、一部には開田時の攪乱が見られる。

東-西約2.8m、南-北約2.8mの規模があり、平面形は主軸がほぼ磁北を指す隅丸で一部が突辺状をなす方形である。壁高は約30cmほどであるが、壁は床面に対して95度ほどで外傾する。壁は一部が既述のように突辺状ではあるが、極端な凸凹も観察されず規則的な壁と言えよう。床は基本層序第IV層に相当する黄褐色の砂質シルトで構築され、土坑部分には貼り床があるものの他は貼り床されることなくそのまま床面とされるが、全体として起伏がありあまり強い踏みめはなく軟らかい。床面には壁溝は検出されず、p1とp2の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、形状や位置・規模から見て柱穴とは言いやしく、さりとて貯蔵穴とも決し難い。また、貼り床が確認されているので何らかの意図の元に掘られ、うめもどされた土坑と考えられる。埋土は全体が9層に細分されるが、土性はいずれもシルトと共通しているものの、色調は黒色・黒褐色・黄褐色の他、明黄褐色や明褐色などがある。全体として粘性があり、炭化物や異質のシルト粒が混在する層が多い。自然堆積で埋没したものと推定される。

カマドや炉跡の焼土などは検出されていない。

〔遺物〕(第306図、写真図版486)

土坑内と埋土内から土師器が2点と須恵器2点の合わせて4点が出土している。

土師器（第306図、写真図版486）

土坑内から坏1点と埋土内から壺1点の出土である。

坏（3187）一定かでないがロクロ使用成形と推定され底部の切り離しはナデによって不明な個体が1点出土している。体部は内外面とも入念なミガキ調整され内面はさらに黒色処理される。大きさは口縁部径が13cm、底部径は4cmで、比率は3.25である。

壺（3188）—ロクロ不使用成形された体部上位の破片が1点出土している。全体形は所謂球胴形の壺で内外面とも入念なミガキ調整がある。

須恵器（第306図、写真図版486）

埋土内から壺の体部破片が2点出土している。

壺（3189・3190）—いずれも体部の小破片であるため詳細は不明であるが、前者は外面にヘラケズリ、内面にカキメ調整のある一般的な壺であるが、後者は外面に並行叩き具痕、内面が無文当て具痕のある大壺である。

〔遺構の時期〕

出土した土師器の特徴から9世紀前半代に位置付けられるものと考えられる。

(5) DIVo2 住居跡状遺構

〔遺構〕（第256図、写真図版181）

調査範囲の西端から約231m東によったDIV区西端部付近に位置し、DIVi7住居跡状遺構は北東に約33mの距離がある。DIVo2土坑-1とDIVo2土坑-2が重複しているものの、いずれも当遺構より新しい遺構であることが確認されている。

東-西約2.3m、南-北約2.2mの規模があり、平面形は長軸が磁北に対して約5度西に偏した長方形気味の方形をなす。壁溝は約5cm前後と低いことから、当初から掘り込み自体が浅かったものと言える。壁は大きな凸凹も見られず、全体としてほぼ直線的であり規則的な壁と考えられるが、一部の壁は重複する土坑によって掘削されており判然としない。床は基本層序IV層の黄褐色シルトの上面で構築され、貼り床されることなくそのまま床面としている。床面には起伏が見られるものの、全体として堅くしまっている。壁溝の検出はないが、床面からp3とp4の2基の土坑が検出されている。なお、p1とp2の2基は重複する当遺構とは無関係の土坑である。精査によって性格を明らかにできる情報は得られていないので、役割は不明であるが、貯蔵穴や柱穴でないことは明らかである。埋土は全体が15層に細分されているものの、一部は重複する土坑の埋土である。しかし、埋土が薄いのと土層が多いことは、各層が全体として薄いと言える。土性はシルトと砂質のシルトがあり、色調には黒褐色を主体に黒色と褐色がある。各層とも異質のシルトや炭化物・焼土などを混在する例が多い特徴があ

る。堆積状況の観察から人為的に埋め戻されている可能性が推定される。

カマドや炉跡の換土などは検出されていない。

〔遺物〕(第306図、写真図版486)

埋土内から土師器1点と須恵器4点の合わせて5点の出土である。

土師器(第306図、写真図版486)

壺が1点出土している。

壺(3193)一頸部から肩部を残存するロクロ使用成形された個体が1点出土している。外面は頸部がハケメ後ナデ、体部はハケメ後ミガキなどで調整され、内面はヘラナデ調整である。体部下位の器形は定かでないが、肩部に体部最大径を持ち頸部で大きく窄んだ後口縁部が外反する器形をなす。体部の全体形が球形を示すものと推定される。

須恵器(第306図、写真図版486)

坏2点と甕2点の4点の出土である。

坏(3191・3192)一ロクロ使用成形された体部下位から底部の一部を残す1点と口縁部から体部の一部を残す1点の出土である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。小破片のため全体形は不明であるが底部から外傾する体部は丸味を持ち、口縁部は外反する器形となるらしい。

甕(3194・3195)一ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整の体部から底部を残す破片と肩部の破片がある。体部は内外面とも再調整は観察されず、体部が底部から丸味を持って外傾し、肩部が丸味を持って内湾する器形をなし、甕より瓶形に近い器形である可能性がある。

〔遺構の時期〕

出土した遺物の特徴から9世紀代の遺構と推定される。

(6) DIVI7住居跡状遺構

〔遺構〕(第256図、写真図版182)

調査範囲の西端から約250m東によったDIVI7の西部よりに位置し、DIVI8住居跡状遺構は東に約9mの距離がある。重複する遺構は無く、単独で検出された。

東-西約2.5m、南-北約2.3mの規模があり、平面形は中軸がほぼ磁北を指すやや台形気味の方形である。壁高は約20cmほどであり、ほぼ垂直に近い立ち上りの壁であるが、床面とは丸味を持って接続する。壁は凸凹も無く直線的で規則的である。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされる。床面には若干の起伏があるものの全体としてしまりが堅い。壁溝の検出はないが、p1~p3の3基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、位置や規模・断面形と深さなどから柱穴とは考えられず、

さりとて貯蔵穴とも短絡的に結論づけられる状況ではない。埋土は全体が7層に細分されるが、土性はすべてシルトであり、色調は黒色・黒褐色・褐色のほか、明黄褐色に分けられる。全体として粘性があり、炭化物や焼土などいずれの層にも異質な色調や特徴のあるシルト粒が混入する特徴がある。

カマドや炉跡と推定される焼土は検出されていない。

〔遺物〕(第307図、写真図版486)

埋土内から土師器3点と須恵器4点の合わせて7点の出土である。

土師器(第307図、写真図版486)

壺が3点の出土である。

壺(3200～3202)一口縁部1点、口縁部から体部上位を残す1点、体部下位のみの1点の合わせて3点の出土である。いずれもロクロ不使用成形され、口縁部が内外面ともヨコナデやヘラナデ、体部は内外面ともナデ調整される。全体的な器形は定かでないが、底部から外傾する体部は肩部に最大径を持って頸部で窄み、口縁部が外反する器形らしい。

須恵器(第307図、写真図版486)

埋土内から坏が4点出土している。

坏(31963199)一口縁部破片3点と体部中位から底部をのこす1点の合わせて4点である。ロクロ使用成形され底部が回転施切り離し無調整であり、体部は内外面とも無調整である。底部から体部が丸味を持つか直線的に外傾し、口縁端部が軽く外反する器形をなすらしい。

〔遺構の時期〕

出土した遺物の特徴から9世紀前半代に属する遺構と推定される。

(7) DIVj 8 住居跡状遺構

〔遺構〕(第257図、写真図版183)

調査範囲の西端から約257m東によったDIV区の西よりに位置し、DIVc 14住居跡状遺構は北東に約35mの距離がある。重複する遺構はないものの、この付近は開田時に大きく削平された地点であるため、当遺構も大きく削平を受けているため残存状態が不良であり、北西部の壁は残存していない。

東-西方向の規模は壁の検出がないため正確でないが、検出された部分からは2.7m以上、南-北約2.3mの規模であるが、攪乱と削平が著しいので実際には定かでない。平面形は検出された形状からは不整形で突迫的な長方形的であるが、断定できない。壁高は最高部で約20cmほどであるが、壁も直線的ではなく不規則である。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされるが、床面は全体として凸凹が著しくしまりがあまりなく軟らかい。壁溝や土坑とも検出されていない。埋土は4層に細分されるが、土

性はいずれもシルトであり、色調は黒色・黒褐色・褐色・黄褐色と各層によって色調に違いが見られる。また、一部に炭化物粒や異質の土粒を混在する例も多い。攪乱が著しい地点のため断定できないが、精査された部分は自然堆積で埋没したものと考えられる。

カマドや炉跡の焼土は検出されていない。

〔遺物〕(第307図、写真図版486)

埋土内から土師器1点と須恵器1点の合わせて2点の出土である。

土師器(第307図、写真図版486)

坏が1点出土している。

坏(3203)一口縁部から体部下位を残存する個体であるが、ロクロ使用成形され体部が内外面とも入念な篋ミガキによる再調整があり、さらに内面は黒色処理される。全体的な器形は定かでないが、底部から丸味を持って外傾する体部は口縁部が内湾気味となる。

須恵器(第307図、写真図版486)

坏の口縁部破片が1点出土している。

坏(3204)一口縁部使用成形された口縁部破片であり、内外面とも再調整はない。底部から外傾する体部が外反気味となる器形を示すらしい。

〔遺構の時期〕

出土した遺物の特徴から9世紀代に位置付けられるものと考えられる。

(8) DIVc 14 住居跡状遺構

〔遺構〕(第257図、写真図版183)

調査範囲の西端から約278m東によったDIV区のはほぼ中央に位置し、DIVj 21 住居跡状遺構は南東に約40mの距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

東-西約2.7m、南-北約2.5mの規模を持ち、平面形は長軸が壁北に対して約95度東に偏した長方形気味の方形である。壁高は約20cmほどであるが、壁は一部に凹凸があって必ずしも直線的ではないものの、全体としてみれば規則的な壁と言えよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され貼り床されることなくそのまま床面とされている。床面には若干の起伏があるものの全体としてしまりが堅い。壁溝は検出されていないが、床面からp1~p5の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1~p3は北壁沿いそして、他の2基も壁沿いに位置し、規模や平面形・位置から柱穴的な性格が推定されるものの、土坑内から土師器や須恵器といった遺物が出土したり礫が入っているなど貯蔵穴的な要素も見られ断定し難い。埋土は5層に細分されるが、土性はいずれもシルトと共通するものの、色調は黒褐色を主体に黒色と鈍い黄褐色に分けられる。炭化物粒や焼土粒のほか、異質土粒を混在する特徴がある。

カマドは検出されていないが、東壁沿いの床面から約70cm×30cmの範囲に層厚約3cmで堆

積する焼土が検出されている。袖などの付属施設の存在は確認されていないが、位置から窺（へっつい）か炉跡に伴う焼土と推定される。

〔遺物〕（第308～310図、写真図版486～488）

埋土内からを主体に土師器8点と須恵器21点の合わせて29点が出土している。

土師器（第308図、写真図版486・487）

坏が4点と壺が4点の合わせて8点の出土である。

坏（3205～3208）—全体が判明する個体が2点の他は口縁部から体部下位と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形で底部の切り離しは回転糸切り離しであるが、無調整とヘラケズリ再調整される個体が含まれる。体部の外面は再調整されないが、内面はヘラミガキ後黒色処理される。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁端部が直立したり僅かに外反する器形である。大きさは口縁部径が14.2cm～13cm、底部径は5.7cm～5.3cmで、比率は2.56～2.28である。

壺（3218～3221）—4点の出土であるが、完形はなく口縁部や口縁部から体部上位か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、外面は口縁部から体部上位がロクロナデ、体部下位がロクロナデかヘラケズリ、内面はロクロナデかヘラナデによる調整が観察される。底部から外傾する体部は中位か上位に最大径を持って頸部でわずかに窄み、口縁部は外反し端部が角張る縁帯状をなす器形らしい。個体には大小関係がありそのいずれも出土している。

須恵器（第308～310図、写真図版487・488）

坏9点、壺11点、壺1点の21点が出土している。

坏（3209～3217）—9点の出土であるが、全体を残すのは1点のみで他は口縁部から体部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整はない。底部から外傾する体部は口縁端部が直立気味に外傾したり外反する器形をなす。大きさは口縁部径が14.2cm、底部径5.2cmで比率は2.73である。

壺（3223～3233）—11点の出土であるが、完形はなく口縁部や体部、底部のみを残す破片での出土である。3223～3225・3229の4点は口縁部を主とした破片であるが、いずれもロクロ使用成形され内外面にロクロナデやカキメによる成形痕が観察される。大きく外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となる。3226・3227の2点は体部下位から底部を残すが、ロクロ使用成形され体部の外面がヘラケズリやヘラナデで調整される。その他の破片は外面に並行叩き具痕、内面に放射状・円形無文・並行などの当て具痕を付す大壺と、内外面にロクロ成形痕を付す壺がある。

壺（3222）—ロクロ使用成形された小型の完形が1点出土している。回転糸切り離し無調整に、高台の付された比較的径の大きい底部から外傾する体部は、肩部に最大径を持って頸部で

大きく窄み、口縁部は軽く外反して口唇部は角張る器形をなす。

〔遺構の時期〕

出土した土師器と須恵器の特徴から9世紀後半代に属する遺構と推定される。

(9) DIVj 21 住居跡状遺構

〔遺構〕(第258図、写真図版182)

調査範囲の西端から約306m東によったDIV区の東端部に位置し、BVI t 12住居跡状遺構は東に約265mの距離がある。他遺構との重複はなく単独で検出された。

東—西約2.5m、南—北約2.2mの規模があり、平面形は長軸が磁北に対して約95度東に偏した突凹隅丸の長方形気味はやや台形がかった方形をなす。壁高は約30cmほどでほぼ直立に近い部分が多く床面とは丸味を持って接続する。壁には凸凹が多く見られ規則的とはいえない。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され全面が堅く締まるものの、凸凹が著しく居住性があるとは考えられない。壁溝は検出されないが、p1~p4の4基の土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、p1~p3は規模と形状は柱穴的であるが、位置に疑問があり断定できない。また、p4は大きく掘られた土坑であり、所謂、貯蔵穴といった土坑と同じ状況ではない。埋土は全体が14層に細分されているが、土性はシルトを主体に砂質シルトとほぼ共通するが、色調は黒褐色を主に褐色や暗褐色、明褐色、極暗褐色などいずれの層も薄い堆積であるという特徴がある。堆積状況の観察では一部が人為的に埋め戻されたものと考えられ、最終的に自然体による埋没と考えられる。

カマドや炉跡の焼土と推定される痕跡は確認されていない。

〔遺物〕(第311図、写真図版489)

床面と埋土内から土師器1点、須恵器3点の合わせて4点が出土している。

土師器(第311図、写真図版489)

坏1点の出土である。

坏(3234) — ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転窓切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。この状況から須恵器の還元不足の製品であるかも知れない。比較的径の大きい底部から僅かな丸味を持って外傾する体部は、口縁部が直線的に外傾する器形をなす。大きさは口縁部径が14.1cm、底部径は4.5cmで比率は3.13である。

須恵器(第311図、写真図版489)

坏が3点の出土である。

坏(3235~3237) — 完形は1点のみで他は口縁部から体部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整である。体部の内外面とも再調整はない。器形は土師器のそれとほぼ同様であるが、一部では口縁端部が外反する。大きさは口縁部

径が12.5 cm、底部径は5 cmで、比率は2.5である。

〔遺構の時期〕

出土した須恵器の特徴から9世紀前半代に属する遺構と考えられる。

00 BVI t 12 住居跡状遺構

〔遺構〕(第258図、写真図版184)

調査範囲の西端から約573 m東よったBVI区のほぼ中央に位置し、BVI q 18住居跡状遺構は東に約28 mの距離がある。BVI t 12 陥し穴状遺構と重複するが、当遺構の方が新しい遺構である。

東-西約2 m、南-北約2.1 mの規模があり、平面形は長軸がほぼ南北にある一部が突辺気味の隅丸方形である。壁高は約20 cmほどであり、壁は床面に対して100度ほどで外傾し、床面とは丸味を持って接続する。壁には凸凹があるものの全体としては極端な状態ではなく、ほぼ規則的な壁と言えよう。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築されるが北壁沿いには広い範囲で掘方が検出され、埋め戻した後貼り床して床面としており、床面には小起伏があるものの全体的には良く締まり堅い。床面から壁溝や土坑は検出されていない。埋土は全体が7層に細分されるが、土性はいずれもシルトと共通するが、色調は黒色と黒褐色を主に暗褐色と褐色がある。全層に炭化物粒や焼土粒の他、異質の土粒が混在する特徴がある。7層は掘方を埋め戻した層であり、その他の層の堆積状況から人為的な埋め戻された遺構である可能性がある。

カマドや炉跡の焼土は検出されていない。

〔遺物〕(第311図、写真図版489)

須恵器が1点出土している。

須恵器(第311図、写真図版489)

大甕の体部破片である。

大甕(3238) - 器表に並行叩き具痕、内面に青海波文的な当て具痕を付す体部破片である。

〔遺構の時期〕

出土した遺物が須恵器大甕の体部破片が1点のみであるため、平安時代の遺構とは思いが、時期の特定はできない。

01 BVI q 18 住居跡状遺構

〔遺構〕(第259図、写真図版184)

調査範囲の西端から約598 m東よったBVI区の中央やや東よりに位置し、AXI x 7住居跡状遺構は東に453 mの距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

北東-南西約3.7 m、南東-北東約3.8 mの規模があり、平面形は中軸が磁北に対して約45

度西に偏した若干ゆがみはあるがほぼ正方形に近い方形である。壁高は最深度で約10cmと浅いが、この付近は開田時の削平が強い地点であることから、本来はもっと深かったものが削平によって浅くなったものと推定される。壁は一部に不規則な部分があるものの、全体としては直線できな部分が多いことから、一部は攪乱によって不規則状態になったものと考えられる。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされ、床面は平坦で水平に近く全面が踏みしめによって堅い。床面から壁溝や土坑はまったく検出されていない。埋土は3層に細分されるが、土性はシルトと粘土質シルトであり色調は黄褐色を主に黒褐色である。どの層にも異質な土粒が混入する特徴がある。自然堆積で埋没した遺構と推定される。

カマドや炉跡の焼土は検出されていない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため時期の特定はできないが、平安時代に属する遺構と推定される。

⑫ AXx7住居跡状遺構

〔遺構〕(第259図、写真図版185)

調査範囲の西端から約1051m東によったAXx区の中央やや西よりに位置し、AXx6住居跡状遺構は東に約12mの距離がある。

東-西約2.9m、南-北約2.6mの規模があり、平面形は長軸がほぼ東西にある突辺状の隅丸長方形である。壁高は約60cmほどであり、壁は床面に対して約95度ほどで外傾し床面とは小さな丸味で接続する。壁は全体が直線的ではないものの大きな凸凹もないことから、当初から突辺状に構築された壁と考えられる。床は基本層序第IV層の黄褐色シルトで構築され、若干の起伏があるもののほぼ平坦で全面が締まりよく堅い。壁溝や土坑はまったく検出されていない。埋土は6層に細分されているが、土性は上位3層がシルトで、下位の3層が粘土質のシルトであり、色調は暗褐色を主体に黒褐色や褐色に分けられている。堆積状況から自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

カマドや炉跡の焼土は検出されていない。

〔遺物〕(第311図、写真図版489)

埋土内から須恵器が6点出土している。

須恵器(第311図、写真図版489)

坏が1点と甕が4点、壺が1点出土している。

坏(3239) 一休部下位から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され底部の

切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整はない。器形の詳細は小破片のため不明である。

壺(3241～3244)－4点の出土であるが、3241は口縁部破片であるが、他は体部の小破片である。3241・3242はロクロ使用成形され内面にロクロ成形痕を残存し、3241の外面はハケメ調整の後掃掃波状文が付され、3242はヘラケズリされる。その他の2点は外面に並行叩き具痕、内面に青海波文や無文の当て具痕を付す体部破片である。このような状況から3242は壺、残る3点は大壺と推定される。

壺(3240)－口縁部下位から肩部上位を残す破片が1点出土している。頸部の外面にロクロナデ痕を残すことからロクロ使用成形と考えられるが、肩部の外面は並行叩き具痕、内面にはヘラナデ痕がある。

[遺構の時期]

平安時代の遺構とは推定されるが、出土した須恵器の器種からは時期を特定できる特徴を見いだせる状況ではないので定かでない。

(3) BⅩa 10 住居跡状遺構

[遺構] (第260図、写真図版185)

調査範囲の西端から約1060m東によったBⅩa区のほぼ中央部に位置し、当種遺構の中ではもっとも東に位置する。重複する遺構はなく単独で検出された。

東－西約2.7m、南－北約3mの規模があり、平面形は長軸が南北にあり一部が突辺状の隅丸長方形気味の方形である。壁高は約45cmほどであり、壁は床面に対して直立気味や約100度で外傾し、床面とは小さな丸味で接続する。床面は基本層序第Ⅳ層の黄褐色シルトで構築され、貼り床されることなくそのまま床面とされるが、凸凹もなく水平に近い平坦で締まりよく堅い。壁溝や土坑はまったく検出されていない。埋土は3層に細分されるが、土性はすべてシルトと共通し、色調は黒褐色を主体に暗褐色がある。自然堆積による埋没と考えられる。

カマドや炉跡の焼土は検出されていない。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

平安時代の遺構とは考えられるが、遺物が出土していないことから特定できない。

3. 掘立柱建物跡

当遺跡の調査では掘立柱建物跡が全体で 棟の検出であるが、この中には中世かそれ以降と考えられる遺構も含むことから、本項では平安時代に位置付けられる柱穴列を含む16棟に付

いて記載することとする。

当該遺構の分布は調査範囲全域に散在する状況を示すが、特に注目されるのは調査範囲ほぼ中央部に位置する5棟であるが、これらを含め以下で記述するが、図版では獨立柱建物跡を建物跡と省略して記載している。

(1) EIIa2 獨立柱建物跡

〔遺構〕(第261図、写真図版186)

調査範囲の西端から約33m東によったEII区の西端部に位置し、EIIb5 獨立柱建物跡は東に約14mの距離がある。EIIa3住居跡-1・同一-2とDIx23溝跡が重複するものの、前者と中者は古く後者は新しい遺構である。重複による削平で一部の掘方が痕跡程度の残存状態である。

全体規模は、桁行2間で3.6m、梁行2間の1.8mで、棟方向は磁北に対して約40度ほど西に偏し桁行・梁行ともに2間の南北棟である。桁行は、東側・西側柱列ともに約3.6mであり、両側ともほぼ中間の1.8mの位置に柱が配置され、梁行は南北両面とも約3mであり、ともに中間の1.5mの位置に柱が配置され2間に分割されている。尺貫法に換算すると、桁行は6尺×2間、梁行は5尺×2間の建物として設計され、建設されたものと考えられる。

四隅の柱は定位置に配置されているので全体としては四隅が直角であるが、桁行・梁行とも間柱が柱列から外方に張り出した位置に配置される共通した特徴があり、全体が突辺状の長方形をなす。

掘方は径約50cm～40cmの規模で平面形は円形～楕円形であり、深さが70cm～40cmと幾分差がある。埋土は黒褐色と暗褐色の砂質シルトかシルトであり、堆積状況は版築状とほぼ単層や乱雑に混合し合う例などがあり、一様ではない。全層に地山の褐色シルト粒が混入するケースが多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を確定できる確たる根拠はないが、他遺構との重複関係と掘方の埋土の状態などから平安時代の遺構と考えられる。

(2) EIIb5 獨立柱建物跡

〔遺構〕(第261図、写真図版187)

調査範囲の西端から約46m東によったEII区の西端部に位置し、DII t12 獨立柱建物跡は北東に約37mの距離がある。DII w9溝跡が重複するものの、溝跡の方が新しい遺構である。南

部が調査区外に延びているため全体的なことは不明であり、検出された柱列を取り合えず桁行として記述する。

桁行は2間4.8mであるが、梁行が検出されていないので全体規模は不明である。棟方向は磁北に対して約80度ほど西に偏した桁行が2間の東西である。桁行は、北側のみの検出であるが、全長のほぼ中間2.4mの位置に柱が配置されて2間に分けられている。梁行は不明であるが、桁行がおそらく8尺×2間で設計され、建設された建物と推定される。

柱穴はほぼ直線的に配置されていることから、全体も柱穴が規則的に配置された建物と考えられる。

掘方は径約60cm～40cmの規模で平面形は円形～楕円形であり、深さが55cm～40cmと幾分差がある。埋土は黒褐色と暗褐色のシルトであり、堆積状況はほぼ単層であり、全層に地山の褐色シルト粒が混入することから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したと考えるのが妥当であろう。

〔建物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土が無いので明確でないが、掘方の状況から平安時代の建物跡と推定される。

(3) DⅡt12 掘立柱建物跡

〔遺構〕(第262図、写真図版188)

調査範囲の西端から約71m東よったDⅡ区のほぼ中央部に位置し、DIVb8掘立柱建物跡は北東に約185mの距離がある。DⅡt12住居跡とDⅡt13溝跡が重複するものの、両遺構とも直接的な掘削するような重複がないので新旧関係は定かでない。

全体規模は、桁行は東側柱列が2間5.7m、西側柱列は5.65mであり、梁行は南側が1間の2.65m、北側柱列は2.6mであり、棟方向は磁北に対して約30度ほど東に偏し、桁行2間・梁行1間の南北棟である。桁行の東側は、全長が約5.7mであり北から3.6mと2.15mに分割されており、同東側柱列は全長が5.65mと東側より若干狭く北から3.5mと2.1mの2間に分割されている。尺貫法に換算すると、桁行は北から約12尺と6尺の2間、梁行は9尺に近似した1間の建物として設計され、建設されたものと考えられる。

柱穴の中心から見ると四隅の柱は直角になる位置に配置されておらず、全体が若干のゆがみを持つが、桁行の柱は直線的に配置されていることと全長がほぼ一致することから、全体としてみれば規則的な建物と言えよう。

掘方は径約40cm～30cmの規模で平面形は円形～楕円形であり、深さが50cm～30cmと幾分差がある。埋土は黒褐色の粘土質シルトであり、堆積状況はほぼ単層であるが、全層に地山の

褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため断定し難いが、他遺構との重複関係と掘方や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(4) DIVb 8 竪立柱建物跡

〔遺構〕(第 263 図、写真版 189)

調査範囲の西端から約 252 m 東によった DIV 区のほぼ中央やや西寄りに位置し、DIVn 11 竪立柱建物跡は南南東に約 50 m の距離がある。重複する遺構はなく単独で検出されているが、北側が調査範囲外に延びることから全体的なことは不明である。

検出された全体規模は、現状では桁行 2 間で 4.3 m、梁行が 2 間で 3.95 m で、棟方向は磁北に対して約 25 度ほど東に偏し桁行・梁行ともに 2 間の東西棟である。桁行の南側柱列は全長約 4.3 m であるが、ほぼ中心の 2.15 m の位置に柱を配置して 2 間に分割し、梁行は東西両側とも全長約 3.95 m のほぼ中間 1.85 m の位置に柱を配置して 2 間に分割している。尺貫法に換算すると、桁行は約 7 尺×2 間、梁行は 6.5 尺×2 間の建物として設計され、建設されたものと考えられる。

四隅の柱は定位置に配置されているので全体としては四隅が直角であるが、梁行の間柱が柱列から外方に若干張り出した位置に配置される特徴がある。

掘方は径約 50 cm～40 cm の規模で平面形は円形を基調に楕円形があり、深さが 30 cm～25 cm と幾分差がある。埋土は黒褐色と暗褐色の他明褐色や褐色の砂質シルトかシルトであり、堆積状況は版築状と乱雑に混合し合う例などがあり、一様ではない。全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため断定できないが、掘方や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(5) DIVn 11 掘立柱建物跡

〔遺構〕(第 264 図、写真図版 187)

調査範囲の西端から約 270 m 東によった DIV 区のほぼ中央やや西寄りに位置し、CVu 19 掘立柱建物跡群は東に約 135 m の距離がある。DIVm 11 住居跡と重複するが住居跡が当遺構の柱穴を掘削していることから、当遺構の方が古い遺構である。

全体規模は、桁行は東側柱列は 3 間で 5.8 m、西側柱列は 3 間で 5.7 m で、梁行は南側が 2 間で 4.65 m、北側柱列は 2 間 4.5 m であり、棟方向はほぼ磁北に近い桁行 3 間・梁行 2 間の南北である。桁行の東側柱列は全長約 5.8 m であるが、北から約 2 m と南から約 2 m の位置に柱を配置して 3 間に分割しているが、西側柱列は全長 5.7 m が北から約 1.85 m と南から約 2 m の位置に柱を配置して 3 間に分割している。梁行は、南側柱列は 4.5 m が東から 2.35 m、北側柱列は 4.65 m が東から 2.3 m の位置にそれぞれ柱を配置してともに 2 間に分割されている。尺貫法に換算すると、桁行の東側柱列は北から約 6.6 尺 + 6 尺 + 6.6 尺の 3 間、西側は北から 6.1 尺 + 6.1 尺 + 6.6 尺の 3 間となり、梁行の北側柱列の東から 7.6 尺 + 7.75 尺の 2 間、北側は東から 7.75 尺 + 7.1 尺の 2 間の建物として設計され、建設されたものと考えられる。

しかし、各柱列とも全長に差が見られるばかりでなく、四隅が直角でないことも考慮する必要があるものの、間柱は直線上に配置していることから当初の縄張りからこの形と考えられる。

なお、何基かの柱穴には重複するように瘤状に張り出す例が多いことから、建て替え重複がある可能性を示す。

掘方は径約 70 cm ～ 50 cm の規模で平面形は円形を基調に楕円形があり、深さが 65 cm ～ 40 cm と幾分差があり、四隅の柱穴が径も大きく深い傾向がある。

埋土は黒褐色と暗褐色の他、明褐色や褐色のシルトであり、堆積状況は略版築状になる例が多く古代的な堆積状況と言えよう。全層に地山の褐色シルト粒が混入する例が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものとするのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、重複する住居跡が掘方を掘削していることから 9 世紀代に位置付けられる遺構と考えられる。

(6) CVu 19 掘立柱建物跡-1

〔遺構〕(第 266・267 図、写真図版 190)

調査範囲の西端から約 415 m 東によった CV 区のほぼ中央やや東寄りに位置し、CVx 18・

同 19 両建物跡は南側に隣接する。CVu 19 掘立柱建物跡-2 と CVu 20 掘立柱建物跡が重複しており、当建物跡がもっとも新しい遺構である。

全体規模は、桁行が南側柱列が 12.1 m、北側柱列が 12.25 m、梁行は東・西両側とも 10.2 m であり、棟方向をほぼ東西に持つ桁行 5 間・梁行 4 間の東西棟である。また、当建物跡には四面に庇が付き、身舎の規模は桁行が南北両側とも 6.5 m ほど、梁行が東西両側とも 2 間の 4.9 m の規模である。

身舎は桁行全長 6.5 m の中央に柱を配置して 3.3 m の 2 間、梁行全長 4.9 m の中間に柱を配置して 2.45 m の 2 間に分割しており、尺貫法に換算すると桁行が 11 尺の 2 間、梁行が 8 尺の 2 間である。

庇の側柱列は、桁床の北側柱列が東から 3 m + 2.15 m + 2.2 m + 2.2 m + 2.7 m の 5 間 12.25 m で、南側柱列は東から 2.8 m + 2.2 m + 2.2 m + 2.2 m + 2.7 m の 5 間 12.2 m となり、梁行は東側柱列の南から 2.7 m + 2.25 m + 2.65 m + 2.6 m で、西側柱列の南から 2.7 m + 2.45 m + 2.65 m + 2.6 m である。尺貫法では、桁行の北側柱列が東から 10 尺 + 7.3 尺 + 7.3 尺 + 7.3 尺 + 9 尺の 5 間、南側柱列は東から 9 尺 + 7.5 尺 + 7.5 尺 + 7.5 尺 + 9 尺となり、梁行は東西両側の柱列とも南から 9 尺 + 7.5 尺 + 8 尺 + 9 尺であり、身舎が桁行 2 間・梁行 2 間に庇分が桁行 5 間・梁行 4 間と桁行が変則的な間数に分割される特異的な特徴がある。

各柱列とも全長に若干の差が見られ四隅が直角でないが、間柱は直線上に配置していることから当初の縄張りからこの形と考えられる。

掘方は径約 1.5 m ~ 1 m の規模で平面形は円形を基調に楕円形があり、深さは身舎部分が 80 cm 前後、側柱列は 50 cm 位と差がある。全体として身舎の柱穴が大型に掘られている。

埋土は黒褐色と暗褐色の他、明褐色や褐色のシルトであり、堆積状況は略版築状になる例が多く古代的な堆積状況と言えよう。全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため断定できないが、重複する 9 世紀初頭の住居跡を掘り込んでおり、それよりは新しい時期の建物跡であるが、柱間寸法などから平安時代の遺構と考えられる。

(7) CVu 19 掘立柱建物跡-2

〔遺構〕(第 268・269 図、写真図版 191)

調査範囲の西端から約 415 m 東によった CV 区のほぼ中央やや東寄りに位置し、CVx 18・同 19 両建物跡は南側に隣接する。CVu 19 掘立柱建物跡-1 と CVu 20 掘立柱建物跡が重複

しており、当建物跡が同建物跡-1が削平を受けている。

全体規模は、桁行の東側柱列が12 m、西側柱列が11.5 m、梁行は東・西両側とも10 mであり、棟方向をほぼ南北に持つ桁行・梁行とも4間の東西棟である。また、当建物跡には四面に庇が付き、身舎の規模は桁行が東側が6.7 m、西側が6.75 mほど、梁行が東西両側とも2間の5 mの規模である。

身舎は、桁行全長6.7 mと6.6 mの中央に柱を配置して3.35 mと3.3 mの2間、梁行全長5 mの中間に柱を配置して2.45 mの2間に分割しており、尺貫法に換算すると桁行が11尺前後の2間、梁行が8尺前後の2間である。

庇の側柱列は、桁行の東側柱列が南から2.4 m + 3.3 m + 3.4 m + 2.8 mの4間12 mで、西側柱列は南から2.4 m + 3.3 m + 3.45 m + 2.5 mの4間11.65 mとなり、梁行は南側柱列の東から2.6 m + 2.6 m + 2.4 m + 2.4 mで、北側柱列は東から2.55 m + 2.55 m + 2.5 m + 2.45 mとなる。尺貫法では、桁行の東側柱列が南から8尺 + 11尺 + 11尺 + 9尺の4間、西側柱列は南から8尺 + 11尺 + 11.5尺 + 8尺で、梁行は南北両面とも東から8.3尺等間の4間となる。

各柱列とも全長に若干の差があるため四隅が直角でないものの、間柱は直線上に配置されることにより当初の縄張りからこの形と考えられる。

掘方は径約70 cm～40 cmの規模で平面形は円形を基調に楕円形があり、深さは50 cm～30 cm前後で幾分差が見られ、身舎と庇分の柱穴ともほぼ同じ規模である。

埋土は黒褐色と暗褐色の他、明褐色や褐色のシルトであり、堆積状況は略版築状になる例が多く古代的な堆積状況と言えよう。全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないことにより定かでないが、重複関係から見て平安時代の遺構と考えられる。

(8) CVu 20 掘立柱建物跡

〔遺構〕(第270・271図、写真図版191)

調査範囲の西端から約415 m東によったCV区のはほぼ中央やや東寄りに位置し、CVx 18・同19 両建物跡は南側に隣接する。CVu 19 掘立柱建物跡-1と同-2、そしてCVu 20 掘立柱建物跡が重複しており、当建物跡が同もっとも古い建物跡である。

全体規模は、桁行の東側柱列が12.1 m、西側柱列が11.6 m、梁行は東・西両側とも10.8 mであり、棟方向をほぼ南北に持つ桁行・梁行とも4間の東西棟である。また、当建物跡には四面

に庇が付き、身舎の規模は桁行の東側が6.3 m、西側が6.6 mほど、梁行が東西両側とも5.4 mの規模である。

身舎は、桁行全長6.3 mと6.6 mの中央に柱を配置して3.15 mと3.3 mの2間、梁行全長5.4 mの中間に柱を配置して2.7 mの2間に分割しており、尺貫法に換算すると桁行が10.5尺前後の2間、梁行が8尺前後の2間である。

庇の側柱列は、桁行の東側柱列が南から3.1 m + 3.2 m + 3.1 m + 2.7 mの4間12.1 mで、西側柱列は南から2.55 m + 3.2 m + 3.3 m + 2.4 mの4間11.6 mとなり、梁行南側柱列は東から2.7 m + 2.7 m + 2.7 m + 2.7 mの4間で、北側柱列は東から2.7 m + 2.8 m + 2.6 m + 2.7 mである。尺貫法では、桁行は東側柱列が南から10尺 + 11尺 + 10.3尺 + 9尺の4間、西側柱列は南から8.5尺 + 10.6尺 + 11尺 + 8尺となり、梁行は南北両側とも9尺等間の4間である。

各柱列とも全長に若干の差があるため四隅が直角でないものの、間柱は直線上に配置されることにより当初の縄張りからこの形と考えられる。

掘方は径約70 cm～40 cmの規模で平面形は円形を基調に楕円形があり、深さは50 cm～30 cm前後で幾分差が見られ、身舎と庇分の柱穴ともほぼ同じ規模である。

埋土は黒褐色と暗褐色の他明褐色や褐色のシルトであり、堆積状況は略版築状になる例が多く古代的な堆積状況と言えよう。全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、重複関係から平安時代の遺構と推定される。

(9) CVx 18 掘立柱建物跡

〔遺構〕(第272・273図、写真図版192)

調査範囲の西端から約415 m東によったCV区のはほぼ中央やや東寄りに位置し、CVu 19 掘立柱建物跡-1と同一-2、そしてCVu 20 掘立柱建物跡は北側に隣接する。CVx 19 建物跡が重複しており、当建物跡の方が新しい建物跡である。

全体規模は、桁行の南北両側柱列とも14.7 m、梁行は東西両側とも11.5 mであり、棟方向をほぼ東西に持つ桁行5間・梁行4間の東西棟である。また、当建物跡には四面に庇が付き、身舎の規模は桁行が東西両側とも8.7 m、梁行が南北両側とも5.75 mの規模である。

身舎は、桁行全長9.7 mが両側とも東から3 m + 2.7 m + 3 mの3間に分割し、梁行全長5.75 mは両側とも南から2.87 m + 2.87 mの2間に分割している。尺貫法に換算すると桁行が10尺 + 9尺 + 10尺となり、梁行は9.5尺～9.6尺前後の2間である。

庇の側柱列は、桁行は南北両側柱列とも東から3 m + 3 m + 2.7 m + 3 m + 3 mの5間14.7 mで、梁行は東西側柱列とも南から2.87 m + 2.87 m + 2.87 m + 2.87 mの4間である。尺貫法では、桁行は南北側柱列とも東から10尺 + 10尺 + 9尺 + 10尺 + 10尺の5間、梁行は東西側柱列とも9.6尺 ~ 9.5尺等間の4間である。

各柱列とも全長がほぼ近接した長さが計測されることから、若干の差があるものの四隅がほぼ直角をなす他、間柱が直線上に配置されることから当初の縄張りからこの形と考えられ、等遺跡から検出された建物跡の中でもっとも規則的な柱配置を示す。

掘方は径約1 m ~ 70 cmの規模で平面形は円形を基調に楕円形があり、深さは70 cm ~ 40 cm前後で幾分差が見られるものの、身舎と庇分の柱穴ともほぼ同じ規模である。

埋土は黒褐色と暗褐色の他、明褐色や褐色のシルトであり、堆積状況は略版築状になる例が多く古代的な堆積状況と言えよう。全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕(第312図、写真図版534・537)

埋土内から須恵器が1点と鉄製品が2点出土している。

須恵器(第312図、写真図版317)

坏が1点の出土である。

坏(3245) - ロクロ使用成形された体部下位から底部を残す破片であり、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも再調整はない。器形など全体的なことは定かでない。

鉄製品(第312図、写真図版534・537)

当建物跡群の検出中に釘と鉄滓が各1点出土している。

釘(47) - 先端部を欠失した断面方形で頭部が折れ曲がった折頭釘であり、残存長は約12 cm、幅約8 mmであることから、完形であれば相当の長さのあったことが推測される。

鉄滓(117) - 長径約3 cm、短径約1.7 cmの大きさがあり、楕円形気味の平面形を持つ。

〔遺構の時期〕

重複関係から判断して平安時代の遺構と考えられる。

00 CVx19 掘立柱建物跡

〔遺構〕(第274・275図、写真図版193)

調査範囲の西端から約415 m東によったCV区のはほぼ中央やや東寄りに位置し、CVu19 掘立柱建物跡-1と同一-2、そしてCVu20 掘立柱建物跡は北側に隣接する。CVx18 建物跡が重複しており、当建物跡の方が古い建物跡である。

全体規模は、桁行の南北両側柱列共15 mで、梁行は東西両側とも12 mであり、棟方向をほ

ば東西に持つ桁行5間・梁行4間の東西棟である。また、当建物跡には四面に庇が付き、身舎の規模は桁行が東西両側とも8.6m、梁行が南北両側とも6mの規模である。

身舎は、桁行全長8.6mが両側とも東から2.7m+3m+2.7mの3間に分割し、梁行全長6mは両側とも南から3m+3mの2間に分割している。尺貫法に換算すると桁行が9尺+10尺+9尺となり、梁行は10尺の2間となるが、桁行は9.3尺の3間等間の可能性も考えられる。

庇の側柱列は、桁行は南側柱列は東から3.2m+2.9m+2.8m+3m+3.2mの5間15mで、北側柱列は3.2m+2.8m+2.9m+2.7m+3.3mである。梁行は東側柱列が南から3.1m+2.8m+2.9m+3.2mで、西側柱列は南から3.2m+3.1m+2.85m+3.15mの4間である。尺貫法では、桁行は南北側柱列とも東から11尺+9尺+10尺+9尺+11尺の5間、梁行は東西側柱列とも10尺等間の4間であるが、桁行は10尺の5間等間である可能性も考えられる。

各柱列とも全長がほぼ近接した長さが計測されることから、若干の差があるものの四隅がほぼ直角をなす他、間柱が直線上に配置されることから当初の縄張りからこの形と考えられ、等遺跡から検出された建物跡の中でもっとも規則的な柱配置を示す。

掘方は径約60cm～40cmの規模で平面形は円形を基調に楕円形があり、深さは50cm～40cm前後で幾分差が見られるものの、身舎と庇分の柱穴ともほぼ同じ規模である。

埋土は黒褐色と暗褐色の他明褐色や褐色のシルトであり、堆積状況は略版築状になる例が多く古代的な堆積状況と言えよう。全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないことから断定できないが、他遺構との重複関係から平安時代の遺構と推定される。

(1) BⅧh9 掘立柱建物跡

〔遺構〕(第276図、写真図版194)

調査範囲の西端から約659m東によったBⅧ区のはほぼ中央部西よりに位置し、BⅧg8溝跡と重複するが当遺構の方が古い遺構である。

全体規模は、桁行は南側柱列が1間3.28m、北側柱列は1間3.2mであり、梁行は東側1間の2.95m、西側柱列は1間3.15mであり、棟方向は磁北に対して約45度ほど西に偏した、桁行1間・梁行1間の北西-南東棟である。尺貫法に換算すると、桁行の南側は約10.8尺、北側

が10.6尺の1間、梁行は東側が9.7尺、西側が10.4尺の1間となり、桁行・梁行ともに1間の建物として設計され、建設されたものと考えられる。

柱穴の中心から見ると柱間寸法がそれぞれの間尺に違いがあることから、四隅の柱が直角になる位置に配置されておらず、全体に若干のゆがみがある。

掘方は径約40cm～30cm前後の規模で平面形は円形～楕円形であり、深さがほぼ45cm～35cmと若干差がある。

埋土は黒褐色と黄褐色の粘土質シルトが混合した土が主体であり、堆積状況が単層の例はほとんどない。このような状況から、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したのと考えるのが妥当であろう。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

特定し難いが検出の状況や埋土から平安時代の建物跡と考えられる。

03 AXIy1 掘立柱建物跡

[遺構] (第277図、写真図版195)

調査範囲の西端から約1029m東によったAXI区の西端部に位置し、AXIX3掘立柱建物跡は東に約10mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

全体規模は、桁行の南側柱列は5.45mの3間、北側柱列は5.4mの3間で、梁行は東側が3.96mの2間、西側柱列は3.9mの2間であり、棟方向は磁北に対して約10度ほど西に偏した広義の東西棟であり、庇の付かない身舎建物跡である。

桁行は、南柱列が全長5.45mを東から1.95m+1.55m+1.95mの3間、北側柱列が東から2m+1.45m+1.95mの3間に分割しており、尺貫法に換算すると南側柱列は東から6.5尺+5.2尺+6.5尺、北側柱列が東から6.5尺+4.8尺+6.6尺の共に3間に分割されている。

梁行は、東側柱列の3.96mが南から2.06m+1.9m、西側柱列は南から1.9m+2mの共に2間に分割している。尺貫法に換算すると、東側柱列は南から6.8尺+6.3尺の2間、西側は南から6.3尺+6.6尺の2間となる。

しかし、各柱列とも全長に差が見られるばかりでなく、四隅が直角でないことも考慮する必要があるものの、柱がいずれも直線上に配置していることから当初からこのように設計され建設されたものと考えられる。

掘方は径約50cm～35cmの規模で平面形は円形を基調に楕円形があり、深さが45cm～35cmと幾分差があり、特定の柱穴のみが大規模となる状況はない。

埋土は黒褐色と暗褐色の他、明褐色や褐色のシルトであり、堆積状況は略版築状になる例が

多く古代的な堆積状況と言えよう。全層に地山の褐色シルト粒が混入する場合が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺構の検出状況や埋土、遺構の状況などから平安時代の遺構と考えられる。

13 AXIc 3 掘立柱建物跡

〔遺構〕(第 278 図、写真図版 196)

調査範囲の西端から約 1029 m 東によった AXI 区の西端部に位置し、BXIb 15 掘立柱建物跡は東に約 48 m の距離がある。AXIy 4 土坑と AXIy 4 墓墳が重複しているものの、直接的な重複ではないことにより、新旧完形は明確にし難い。

全体規模は、桁行の南側柱列は 6.15 m、北側柱列は 5.45 m で、梁行は東側が 3.6 m、西側柱列は 3.35 m であり、棟方向は磁北に対して約 10 度ほど東に偏した広義の東西棟であり、桁行の北側に庇の付く片面庇建物跡である。

桁行の南側柱列が全長 6.15 m を東から 4 m + 1.05 m + 1 m の 3 間、北側柱列が東から 40 cm + 1.2 m + 60 cm + 90 cm + 1.35 m + 1 m の 6 間に分割しているが、尺貫法に換算すると南側柱列は東から 13.3 尺 + 3.5 尺 + 3.3 尺、北側柱列が東から 1.3 尺 + 4 尺 + 2 尺 + 3 尺 + 4.5 尺 + 3.3 尺の 6 間に分割されているものの、柱の配置や柱間寸法が不揃いであるため、当初から寸法の基準に則って設計された建物であるかは断定し難い。

梁行は、東側柱列の 3.6 m が南から 1.05 m + 75 cm + 98 cm + 88 cm の 4 間、西側柱列は南から 80 cm + 90 cm + 90 cm + 75 cm の 4 間に分割している。尺貫法に換算すると、東側柱列は南から 3.5 尺 + 2.5 尺 + 3.3 尺 + 3 尺の 4 間、西側は南から 2.6 尺 + 3 尺 + 3 尺 + 2.5 尺の 4 間となるものの、東側柱列の柱間寸法が不揃いであることから、当初から寸法の基準に則って建設した建物であるかは定かでない。

桁行北側柱列に付属する庇部分は、梁行方向に幅約 75 cm の 2.5 尺で桁行全長に付されている。

既述のように桁行の長さが南側と北側では約 70 cm の差がある他、各柱列とも全長に若干の差が見られることから、四隅が直角でないこと特徴があり、さらに、桁行北側柱列の柱が直線上に配置されていないことも特徴の一つと言えよう。

掘方は径約 50 cm ~ 25 cm の規模で平面形は円形を基調に楕円形があり、深さが 35 cm ~ 30 cm と幾分差があり、特定の柱穴のみが大規模となる状況はない。

埋土は黒褐色と暗褐色の他、明褐色や褐色のシルトであり、堆積状況は略版築状になる例が

多く古代的な堆積状況と言えよう。全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

当建物跡最大の特徴は中央部の東より長軸 1.15 m、単軸 60 cm の畷竪形の平面形をなす層厚 5 cm の焼土が堆積していることであり、このたてものが居住性のある住家であったことを示している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

特定し難いが、遺構の平面形が当遺構の至近から検出された 11 世紀代の竪穴住居跡の柱穴配置と近似した平面形をなすことにより、平安時代の 11 世紀代に位置付けられるものと考えられる。

04 BXIb 15 掘立柱建物跡

〔遺構〕(第 278 図、写真図版 197)

調査範囲の西端から約 1083 m 東によった BXI 区の東端部で遺跡最東端部に位置する。重複する遺構もなく単独で位置する。

全体規模は、桁行は南側柱列が 1 間 4 m、北側柱列は 1 間 3.75 m であり、梁行は東側 1 間の 3.45 m、西側柱列は 1 間 3.4 m であり、棟方向は磁北に対して約 90 度ほど西に偏し、桁行 1 間・梁行 1 間の東西南北棟である。尺貫法に換算すると、桁行の北側は約 12.3 尺、南側が 13.2 尺の 1 間、梁行は東側が 11.4 尺、西側が 11.2 尺の 1 間となり、桁行・梁行ともに 1 間の建物として設計され、建設されたものと考えられる。

柱穴の中心から見ると柱間寸法がそれぞれの間尺に違いがあることから、四隅の柱が直角に異なる位置に配置されておらず、全体に若干のゆがみがある。

掘方は径約 50 cm ～ 35 cm 前後の規模で平面形は円形～楕円形であり、深さがほぼ 40 cm とほぼ均一な掘方である。

埋土は黒褐色と黄褐色の粘土質シルトが混合した土であり、堆積状況は単層が主体で一部が略版築状の状況を示すが、全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

明確にし難いが、検出状況と埋土から平安時代に位置付けられるものと推定される。

09 BX7c 2 獨立柱建物跡

〔遺構〕(第 279 図、写真図版 198)

調査範囲の西端から約 1131 m 東によった BX7c 区の西端部で遺跡最東端部に位置する。重複する遺構もなく単独で位置する。

全体規模は、桁行は南側柱列が 1 間 2.36 m、北側柱列は 1 間 2.2 m であり、梁行は東側 1 間の 1.85 m、西側柱列は 1 間 1.9 m であり、棟方向は磁北に対して約 35 度ほど西に偏し、桁行 1 間・梁行 1 間の東西南北棟である。尺貫法に換算すると、桁行の北側は約 7.3 尺、南側が 7.8 尺の 1 間、梁行は東側が 6.1 尺、西側が 1.9 尺 1 間となり、桁行・梁行ともに 1 間の建物として設計され、建設されたものと考えられる。

柱穴の中心から見ると四隅の柱は直角になる位置に配置されておらず、全体に若干のゆがみがあり、台形的な平面形をなす。

掘方は径約 40 cm 前後の規模で平面形は円形～楕円形であり、深さがほぼ 30 cm とほぼ均一な掘方である。

埋土は黒褐色と黄褐色の粘土質シルトであり、堆積状況はほぼ版築状の状況を示すが、全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したのと考えるのが妥当であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、平安時代の遺構と推定される。

10 B77f 12 柱穴列

〔遺構〕(第 279 図、写真図版 199)

調査範囲の西端から約 669 m 東によった B77f 区のほぼ中央部に位置し、他遺構との重複もなく単独で検出されている。規模の大きい柱穴であることから獨立柱建物跡となるものと他の柱穴の検出に努めたが、周辺部から他の柱穴が検出されなかったことにより取り敢えず柱穴列として記載する。

全体規模は全長 5.97 m であり、全体が磁北に対して約 30 度ほど東に偏している。5.97 m は南西から 2.15 m + 1.82 m + 2 m の 3 間に分割されており、これを尺貫法に換算すると南西から 7 尺 + 6 尺 + 7 尺に設計され建設されたものと推定される。

掘方は径約 65 cm～55 cm の規模で平面形は円形～楕円形であり、深さが 60 cm 前後と大きな差は見られない。

埋土は黒褐色や黒色のシルトや粘土質シルトであり、堆積状況は幾分版築状の傾向が観察さ

れるものの、全層に地山の褐色シルト粒が混入する機会が多いことから、掘方を掘る際の残土をそのまま埋め戻したものと考えるのが妥当であろう。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

検出状況から平安時代の遺構と推定される。

4. 土坑

平安時代の土坑としたのは、縄文時代の遺構とは形態や埋土が異なったり土師器や須恵器が出土するなど、明らかに平安時代と特定される遺構のみを本項に入れたが、一部は平安時代よりも新しい可能性のある遺構も、時期を特定できなかったことにより埋土の特徴のみで本項に入れた例もある。

遺跡内での分布状況は、住居跡が分布する範囲に散在する様相を示し、縄文時代の土坑と違って土坑のみ単独で遺構群を構成する例はまったく見られない。当遺跡では調査範囲の全域から大規模から小規模まで122基検出されている。

(1) D1y25土坑

[遺構] (第280図、写真図版200)

調査範囲の西端から約21m東によったD1区の東端に位置し、南東に位置するE11b1土坑は約10mの距離が有る。他遺構との重複はない。

開口部が径1.15m×1.15m、底面は径1.1m×1.1mの規模を持ち、平面形は開口部・底面とも隅丸・突刃状の長方形気味をなす。壁は幾分外軽視、底面は東が幾分低くなる起伏を持ち、堅さはない。

埋土はすべて黒色と褐色の2層からなり、土性は砂質シルトと共通しておりいずれも粘性がある。炭化物や地山ブロックの混入が見られる。埋土の大半は1層が占め、2層は壁の崩壊土である可能性があることから、自然堆積によって埋没した土坑と考えることができる。

[遺物] (第312図、写真図版490)

縄文土器かと推定される個体が1点出土している。

縄文土器 (第312図、写真図版490)

深鉢の体部下位から底部を残存する個体である。

深鉢(108) 一体部の内外面ともヘラケズリ調整され、土師器的な器面調整ではあるが、胎土の調整や焼成が当遺跡の土師器のそれと異なった様相を示す。小型の製品である。

[遺構の時期]

縄文土器らしき時の出土はあるものの、平面形や断面形そして埋土の堆積状況から平安時代の土坑とした。

(2) EIIb1土坑

〔遺構〕(第280図、写真図版200)

調査範囲の西端から約25.5m東によった調査範囲最西端のEII区に位置し、EIIa2土坑とは東に約3mの距離がある。他遺構との重複はないが、底面がやや不整であるため、重複している状況に見られる。

開口部が径1.3m×75cm、底面が1.2m×60cmの規模を持ち、平面形が不整な長楕円形を示す。深さは最深部で35cmと断面形は浅い皿形であるが、底面が不整であるため深さにも違いがある。壁は大きく外傾し、底面は円弧状に湾曲しており平坦ではない。

埋土は3層に細分されているが、土性は砂質シルトと共通し、さらにいずれも粘性を持つ特徴がある。色調は上・中層は黒褐色で下層は褐色である。ほぼ全層に炭化物と地山ブロックの混在が見られる特徴がある。堆積状況の観察から自然堆積で埋没した土坑と推定できる。

〔遺物〕(第312図、写真図版490)

土師器の破片が1点出土している。

土師器(第312図、写真図版490)

壺の体部上位の破片で内外面ともクロロナデ調整されたクロロ使用成形の個体である。

〔遺構の時期〕

埋土の堆積状況や、形状そして出土遺物から平安時代の土坑と推定される。

(3) DIIx2土坑-1

〔遺構〕(第280図、写真図版200)

調査範囲の西端から東へ約30mのDII区に位置し、EIIa2土坑とは南に8mの距離がある。当土坑はDIIx2住居跡の床面中央部と重複する他、DIIx2土坑-2が重複しているが、当土坑は住居跡より新しく土坑より古い遺構である。

検出面での開口部径は1.65m×1.25m、底面が1.45m×1.05mの規模があり、平面形は開口部・底面とも突辺状をなす長方形である。深さは底面中央部の最深部で約30cmであり断面形はほとんど壁高のない浅い皿形である。

埋土は黒褐色の砂質シルトの単層であり、焼土の細粒や木炭、草木灰などが多量に混入している。また、最下層には多量の河川円礫が混在している。これらの礫は焼成を受けた痕跡が観察された。自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複完形や埋土の状況から平安時代の遺構と推測される。

(4) EⅡa2土坑

〔遺構〕(第280図、写真図版200)

調査範囲の西端から29m東方のEⅡ区西端よりに位置し、DⅡx4土坑は北東に約11mの距離がある。他遺構と重複することなく単独で検出された。

検出面の開口部径1.05m×1m、底面径1m×90cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形なす。深さは最深部で約10cmほどであり、断面形は開口部と底面の差がなく壁高のない浅い皿形である。

埋土は暗褐色砂質シルトの単層であり、地山の黄褐色土粒や炭化物粒が混入している。自然堆積で埋没した土坑と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した遺物がないため断定できないが、埋土の特徴と堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(5) DⅡx4土坑

〔遺構〕(第281図、写真図版207)

調査範囲西端から37m東によったDⅡ区の北西寄りに位置し、DⅡy9土坑-1・2は東に約18mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

検出面の開口部径が1.45m×1.2m、底面の径が90cm×75cmの規模があり、平面形は開口部、底面ともに突辺隅丸的に楕円形をなす。深さは最深部で25cmほどであるが、断面形は、長軸が凸レンズ状の浅い皿形をなすが、短軸は壁が底面から外傾する皿形である。

埋土は3層に細分されるが、土性はいずれもシルトと共通し、色調は黒褐色を主体に黒色である。全体に粘性がある他、黄褐色シルト粒や炭化物粒が混入している。堆積状況の観察から自然堆積で埋没した土坑と言えよう。

〔遺物〕(第312図)

埋土内から土師器が1点出土している。

土師器(第312図)

甕の破片が1点出土している。

甕(3247) - ロクロ使用成形され底部が回転糸切り離し無調整の体部下位から底部を残す破片であるが、小破片であることから詳細は不明である。体部は内外面とるロクロナデ調整される。

〔遺構の時期〕

出土した遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の土坑とした。

(6) DIIy9 土坑-1

〔遺構〕(第281図、写真図版201)

調査範囲の西端から約54m東のDII区の中央やや西よりに位置し、DIIy9土坑-2は東側に隣接している。DIIy9土坑-2と重複しているが、当遺構の方が古い遺構である。

開口部が径90cm×80cm、底面の径が80cm×70cmの規模があり、平面形は開口部・底面ともに楕円形をなす。深さは検出面から10cmほどあり、断面形は壁高のない凸レンズ状の浅い皿形である。

埋土は黒色の砂質シルトの単層であり、全体として粘性があり、炭化物が若干混入する特徴がある。土層の堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第312図)

土師器が出土している。

土師器(第312図)

甕の破片が1点出土している。

甕(3248) - ロクロ使用成形された体部下位を残す破片が1点出土している。内外面にロクロナデを残すものの、小破片のため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の堆積状況や特徴、形状などから平安時代の土坑と判断した。

(7) DIIy9 土坑-2

〔遺構〕(第281図、写真図版201)

調査範囲の西端部から約55mのDII区の中央やや西よりに位置し、DIIs11土坑-1は約27mの距離がある。DIIy9土坑-1と重複するが、当遺構の方が新しい。

開口部径が約80cm×80cm、底部の径は約70cm×70cmの規模があり、平面形は開口部・底面ともに楕円形をなす。深さは検出面から約33cmであり、断面形は壁が底面から外傾する皿形である。

埋土は4層に細分されるが、土性は上位層が砂質シルトで下位層がシルトであり、色調は黒褐色と暗褐色である。地山の黄褐色土シルト粒が多量に混入する他、一部に炭化物の混入もあ

る。堆積状況から自然埋没による埋没と考えられる。

[遺物] (第 312 図)

埋土内から須恵器の破片が出土している。

須恵器 (第 312 図)

瓶の破片が 1 点出土している。

瓶 (3249) - 内外面にクロク使用成形痕を明瞭に残す肩部の破片であるが、小破片であるため全体的なことは不明である。

[遺構の時期]

出土遺物と遺構の形状や埋土の堆積状況などから平安時代の土坑と判断した。

(8) DⅡs 11 土坑-1

[遺構] (第 281 図)

調査範囲の西端部から 66 m 東に寄った DⅡ区中央やや西よりに位置し、DⅡs 11 土坑-1 と隣接・重複している。さらに、DⅡr 12 溝跡や DⅡs 11 住居跡とも重複しているが、溝跡がもっとも新しく、次いで当土坑でもっとも古いのは住居跡である。

検出面の開口部は径 1.2 m × 50 cm、底面は径約 90 cm × 30 cm ほどであり、平面形は検出面・底面ともに楕円形である。検出面からの深さは最新部で約 15 cm ほどであり、断面形は皿形である。埋土は黒色シルトの単層であり、全体に地山シルトの小粒が混在様相を示し、さらに炭化物の混入も観察された。埋土の堆積状況から自然埋没と推定される。

[遺物]

遺物の出土はない。

[遺物の時期]

重複関係と形状、埋土の堆積状況から平安時代の土坑と推定される。

(9) DⅡs 11 土坑-2

[遺構] (第 282 図)

調査区の西端部から約 66 m ほど東の DⅡ区中央やや西よりに位置し、DⅡt 11 土坑とは約 4 m の距離がある。前土坑の重複完形と同様の様相をなし、新旧完形も同様である。

規模は開口部径が約 50 cm × 50 cm、底面の径が約 30 cm × 30 cm であり、平面形は検出面・底面ともに楕円形を示す。深さは検出面から最深部で約 60 cm ほどであり、断面形はピーカー形に近い形状である。

埋土の土性が黒褐色シルトと共通するものの、黄褐色シルトの混入具合によって 2 層に細分されている。自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の堆積状況から平安時代の土坑と考えられる。

08 DⅡt11 土坑

〔遺構〕(第282図、写真図版206)

調査範囲の西端から約66m東によったDⅡ区の中央やや西よりに位置し、DⅡu11土坑は南に4.5mの距離がある。DⅡs11住居跡と重複するが、当土坑の方が新しい遺構である。

開口部の径が約95cm×75cm、底面の径80cm×65cmの規模があり、平面形は開口部・底面ともに不整形で隅丸的な長方的な楕円形を示す。深さは検出面から約10cmであり、断面形は凸レンズ状の浅い皿形である。

埋土は2層に細分されているものの、土性はいずれもシルトと差がなく、色調も黒褐色と共通しており、地山質の黄褐色土粒を含む他炭化物や焼土粒を混入する層も観察される。土層や堆積状況などから自然堆積で埋没したものと推測される。

〔遺物〕(第312図)

土師器が出土している。

土師器(第312図)

甕の口縁部破片が1点出土している。

甕(3250) - ロクロ使用成形された甕の口縁部破片であるが、小破片であるため詳細は不明である。内外面にロクロナデ痕を残す。

〔遺構の時期〕

出土遺物の他、重複関係と形状、埋土の堆積状況から平安時代の土坑と判断した。

09 DⅡu11 土坑

〔遺構〕(第282図、写真図版201)

調査範囲西端から64m東に寄ったDⅡ区の中央やや西よりに位置し、DⅡr12土坑は北に約12mの距離がある。DⅡu11住居跡-2と重複するが、当土坑の方が新しい遺構である。

検出面の規模は開口部径約55cm×55cm、底部径約40cm×40cmであり、平面形は正円に近い円形である。深さは最深部で約20cmほどあり、断面形は壁高のない凸レンズ状の浅い皿形である。

埋土は全体が3層に細分されているが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色を主体に暗褐色である。黄褐色シルト粒や炭化物粒が一部に混入している。堆積の状況から自然堆積

で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

02 DⅡr12土坑

〔遺構〕(第282図、写真図版201)

調査範囲西端から69m東に寄ったDⅡ区のほぼ中央に位置し、DⅡt12土坑-2は南に約6.5mの距離がある。DⅡr12溝跡と重複するが、当土坑の方が古い遺構である。

検出面の規模は開口部径約70cm×55cm、底部径約55cm×45cmであり、平面形は楕円形である。深さは最深部で約30cmほどあり、断面形は壁が床面から軽く外傾する箱形に近い形状である。

埋土は黒色シルトの単層であり、黄褐色シルト粒や炭化物粒が一部に混入している。堆積の状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

03 DⅡt12土坑-2

〔遺構〕(第283図、写真図版202)

調査範囲西端から68m東に寄ったDⅡ区のほぼ中央に位置し、DⅡr13土坑-1は北東に約8mの距離がある。DⅡr12住居跡と重複するが、当土坑の方が古い遺構である。

検出面の規模は開口部径約75cm×50cm、底部径約55cm×30cmであり、平面形は楕円形である。深さは最深部で約30cmほどあり、断面形は壁が床面から軽く外傾する箱形に近い形状である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、褐色シルト粒や炭化物粒が混入している。堆積の状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

04 DⅡr13土坑-1

〔遺構〕(第283図、写真図版202)

調査範囲西端から68m東に寄ったDⅡ区のほぼ中央に位置し、DⅡr13土坑-2は南東に隣接する。DⅡr12住居跡のほか、土坑と重複するが、当土坑が住居跡より新しく土坑より古い。

検出面の規模は開口部径約60cm×50cm、底部径約50cm×30cmであり、平面形は瓢箪形に近似した楕円形である。深さは最深部で約15cmほどあり、断面形は壁が床面から多きく外傾する浅い皿形に近い形状である。

埋土は黒褐色シルトと暗赤褐色焼土の2層に分けられ、黒褐色シルトにも焼土と炭化物粒が混入している。堆積の状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

09 DⅡr13土坑-2

〔遺構〕(第283図、写真図版202)

調査範囲西端から68m東に寄ったDⅡ区のほぼ中央に位置し、DⅡr13土坑-3は南に隣接する。DⅡr12住居跡のほか、土坑と重複するが、当土坑とは新旧それぞれである。

検出面の規模は開口部径約75cm×50cm、底部径約35cm×35cmであり、検出面の平面形は不整な楕円形であるが、底面は正円に近い円形であり、断面形は壁が床面から軽く外傾する箱形に近い形状である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、黄褐色シルト粒のほか少量の炭化物粒などが混入している。堆積の状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

06 DIIr13 土坑-3

〔遺構〕(第283図、写真図版202)

調査範囲西端から68m東に寄ったDII区のほぼ中央に位置し、DIIr13土坑は南に約6mの距離がある。DIIr12住居跡のほか、土坑と重複するが、当土坑とは新旧それぞれである。

検出面の規模は開口部径約95cm×65cm、底部径約60cm×40cmであり、検出面の平面形は不整な楕円形で畷箆形に近い形状をなす。深さは約35cmほどであり、断面形は壁が床面から軽く外傾する箱形に近似するが、底面は凸凹が著しく不整である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、黄褐色シルト粒のほか少量の炭化物粒や焼土粒などが混入している。堆積の状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

07 DIIr13 土坑

〔遺構〕(第284図)

調査範囲西端から68m東に寄ったDII区のほぼ中央に位置し、DIIr14土坑は南南東に約18mの距離がある。DIIr13住居跡と重複するが、当土坑が新しい遺構である。

検出面の規模は開口部径約1.1m×80cm、底部径約80cm×55cmであり、検出面の平面形は隅丸の略長方形的な形状をなす。深さは約60cmほどであり、断面形は壁が床面から軽く外傾するピーカー形に近似し、底面には若干凸凹がある。

埋土は全体が6層に細分されているが、土性はいずれもシルトと共通し、色調は黒褐色を主体に黒色に細分されている。全体に黄褐色シルト粒のほか少量の炭化物粒や焼土粒などが混入し、下層の土層は粘性を持つ例が多い。堆積の状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第312図、写真図版301)

埋土内から土師器が1点出土している。

土師器(第312図、写真図版301)

坏が1点の出土である。

坏(3251) - ロクロ使用成形された口縁部破片であるが、外面は再調整なしで、内面がミガキ後黒色処理される個体である。全体的な器形は定かでないが、底部から丸味を持って外傾する体部は、口縁部軽く外反する器形をなすらしい。

〔遺構の時期〕

出土した遺物が少ないので断定できないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

08 DⅡx14土坑

〔遺構〕(第284図、写真図版203)

調査範囲西端から約77m東に寄ったDⅡ区のはほぼ中央やや東よりに位置し、DⅡy14土坑-1は東に約3mの距離がある。DⅡx14住居跡のほか土坑類と溝跡と重複するが、当土坑は溝跡よりは古く住居跡よりは新しい。

検出面の規模は開口部径約2.5m×1.5m、底部径約2m×70cmであり、検出面の平面形は重複によって半円状に近い形である。深さは約60cmほどであり、断面形は壁が床面から大きく外傾するボール形に近似し、底面には若干凸凹がある。

埋土は全体が13層に細分されているが、土性は上層が砂質であるがいずれもシルトと共通し、色調は黒褐色と黒色を主体に暗褐色や褐色などに細分されている。全体に黄褐色シルト粒のほか少量の炭化物粒や焼土粒などが混入し、全体として粘性を持つ層が多い。堆積の状況から人為的に埋め戻された可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

09 DⅡy14土坑-1

〔遺構〕(第284図、写真図版203)

調査範囲西端から約80m東に寄ったDⅡ区のはほぼ中央やや東よりに位置し、DⅡy14土坑-1は東に約3mの距離がある。DⅡx14住居跡のほか多くの土坑と溝跡が重複しているが、新旧関係は溝跡がもっとも新しく住居跡が古く、土坑はその中間である。

検出面の規模は開口部径約1.9m×1.8m、底部径約1.5m×1.4mであり、検出面の平面形は隅丸の方形的な楕円形をなす。深さは約75cmほどであり、断面形は壁が床面から軽く外傾する浅い皿形に近似し、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が9層に細分されているが、土性は上層が砂質のほかはいずれもシルトと共通し、色調は黒褐色と黒色に細分されている。全体に黄褐色シルト粒のほか少量の炭化物粒や焼土粒などが混入し、全体として粘性を持つ層が多く、底面付近には礫が点在する。堆積の状況から人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

〔遺物〕

埋土内から土師器が1点出土している。

土師器

環が1点の出土である。

環一ロクロ使用成形された口縁部破片であるが、外面は再調整なしで、内面がミガキ後黒色処理される個体である。全体的な器形は定かでないが、底部から丸味を持って外傾する体部は、口縁端部軽く外反する器形をなすらしい。

〔遺構の時期〕

出土した遺物が少ないので断定できないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

② DⅡy 14 土坑-2

〔遺構〕(第285図、写真図版203)

調査範囲西端から約79m東に寄ったDⅡ区のほぼ中央やや東よりに位置し、DⅡy 14土坑-3は西に隣接する。DⅡx 14住居跡のほか多くの土坑と溝跡が重複しているが、新旧関係は溝跡がもっとも新しく住居跡が古く、土坑はその中間である。

検出面の規模は開口部径約1.7m×1.3m、底部径約1.2m×1mであり、検出面の平面形は卵形に近似した楕円形をなす。深さは約95cmほどであり、断面形は壁が床面から大きく外傾する皿形に近似し、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が16層に細分されているが、土性は一部の層は砂質であるが、ほかはシルトと共通し、色調は黒褐色と黒色が主体で一部に褐色や暗褐色などに細分されている。全体として粘性があり、黄褐色シルト粒のほか炭化物粒や焼土粒などが混入する。堆積の状況から人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物が出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

③ DⅡy 14 土坑-3

〔遺構〕(第285図、写真図版204)

調査範囲西端から約77m東に寄ったDⅡ区のほぼ中央やや東よりに位置し、DⅡs 17土坑-1は北北東に27mの距離がある。DⅡx 14住居跡のほか多くの土坑と溝跡が重複しているが、新旧関係は溝跡がもっとも新しく住居跡が古く、土坑はその中間である。

検出面の規模は開口部径約1.2m×1.2m、底部径約1m×90cmであり、検出面の平面形は卵形に近似した楕円形をなす。深さは約65cmほどであり、断面形は壁が床面から軽く外傾する箱形に近似し、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が10層に細分されているが、土性は上層は砂質であるが、ほかはシルトと共通し、色調は黒褐色と黒色が主体で一部に褐色や暗褐色などを含む。全体として粘性があり、黄褐色シルト粒のほか炭化物粒や焼土粒などが混入する。堆積の状況から人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物が出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

㉒ DⅡs17土坑-1

〔遺構〕(第285図、写真図版204)

調査範囲西端から約86m東に寄ったDⅡ区の中央東よりに位置し、DⅡs17土坑-2は東に約3mの距離があり、重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約1m×1m、底部径約80cm×90cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約10cmほどであり、断面形は壁が床面から軽く外傾する浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

㉓ DⅡs17土坑-2

〔遺構〕(第285図、写真図版204)

調査範囲西端から約90m東に寄ったDⅡ区の中央東よりに位置し、DⅡt17土坑-1は南に約4mの距離があり、重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約1.3m×1m、底部径約1m×90cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約15cmほどであり、断面形は壁が床面から軽く外傾する浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

24 DⅡt17土坑-1

〔遺構〕(第286図、写真図版204)

調査範囲西端から約88m東に寄ったDⅡ区の中央東よりに位置し、DⅡt17土坑-2は東に約2mの距離があり、重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約85cm×85cm、底部径約60cm×60cmであり、平面形は検出面・底面とも円形に近い楕円形をなす。深さは約15cmほどであり、断面形は壁が床面から軽く外傾する浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

25 DⅡt17土坑-2

〔遺構〕(第286図、写真図版204)

調査範囲西端から約89m東に寄ったDⅡ区の中央東よりに位置し、DⅡt17土坑-3は東に約1mの距離があり、重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約1m×80cm、底部径約90cm×70cmであり、平面形は検出面・底面とも倒卵形に近い楕円形をなす。深さは約5cmほどと痕跡程度であり、断面形は壁がほとんど立たない浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか明黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

㉔ DⅡt17土坑-3

〔遺構〕(第286図、写真図版205)

調査範囲西端から約92m東に寄ったDⅡ区の東よりに位置し、DⅡu17土坑は南に約3mの距離があり、重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約1m×80cm、底部径約80cm×75cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約15cmほどであり、断面形は壁がほとんど立たない浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか明黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

㉕ DⅡu17土坑

〔遺構〕(第286図、写真図版206)

調査範囲西端から約89m東に寄ったDⅡ区の東よりに位置し、DⅡt19土坑-1は東に約9mの距離があり、重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約90cm×80cm、底部径約75cm×70cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約10cmほどであり、断面形は壁がほとんど立たない浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか明黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

㉖ DⅡt19土坑-1

〔遺構〕(第286図、写真図版205)

調査範囲西端から約97m東に寄ったDⅡ区の東よりに位置し、DⅡt19土坑-2は北に約2mの距離がある。DⅡt19墓墳と重複するが、当土坑が新しい遺構である。

検出面の規模は開口部径約95cm×80cm、底部径約75cm×65cmであり、平面形は検出面・

底面とも楕円形をなす。深さは約 10 cm ほどであり、断面形は壁がほとんど立たない浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか明黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

09 DⅡt19 土坑-2

〔遺構〕(第 286 図、写真図版 205)

調査範囲西端から約 97 m 東に寄った DⅡ区の東よりに位置し、DⅡt19 土坑-3 は南東に約 2 m の距離がある。DⅡs19 陥し穴状遺構と重複するが、当土坑が新しい遺構である。

検出面の規模は開口部径約 90 cm × 80 cm、底部径約 75 cm × 65 cm であり、平面形は検出面・底面とも円形に近い楕円形をなす。深さは約 10 cm ほどであり、断面形は壁が底面から大きく外傾する浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか明黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

09 DⅡt19 土坑-3

〔遺構〕(第 287 図、写真図版 205)

調査範囲西端から約 98 m 東に寄った DⅡ区の東よりに位置し、EⅢf1 土坑-1 は南東に約 53 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

検出面の規模は開口部径約 70 cm × 70 cm、底部径約 60 cm × 60 cm であり、平面形は検出面・底面とも円形に近い楕円形をなす。深さは約 5 cm ほどと痕跡程度であり、断面形は壁が底面から大きく外傾する浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか明黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

3) EⅢf1土坑-1

〔遺構〕(第287図、写真図版206)

調査範囲西端から約127m東に寄ったEⅢ区の最西端部に位置し、EⅢf1土坑-2は東に隣接している。EⅢe2住居跡のほか土坑と重複するが、住居跡より新しく土坑は新旧それぞれである。

検出面の規模は開口部径約2.8m×2.2m、底部径約1.7m×1.6mであり、平面形は検出面・底面とも不整な楕円形をなす。深さは約15cmほどと浅く、断面形は壁が底面から直立気味に外傾する浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が3層に細分されるが、土性はいずれもシルトと共通し、色調は黒褐色を主体に黒褐色に細分されており、粘性があるほか明黄褐色シルト粒などの異質な土粒や炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕(第313・314図、写真図版490・491)

土師器26点と須恵器6点が出土している。

土師器(第313・314図、写真図版490・491)

坏が20点、高台付き坏1点、甕5点が出土している。

坏(3252～3271) - 20点の出土であるが、完形や全体の判明する個体は2点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部外面には再調整は観察されないが、内面はミガキ後黒色処理される10点とロクロ目のみで再調整のない10点に細分される。全体的な器形は定かでないが、底部から丸味を持って外傾する体部は、口縁端部が直立気味となったり軽く外反する器形をなすらしい。大きさは口縁部径が15cm～13.8cm、底部径が6cm～5.9cmで、比率は2.5～2.33である。また、3253と3254の体部外面には判読が不能であるが、墨書がある。

高台付き坏(3272) - 体部下位から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整に「ハ」字状に踏ん張る比較的高い高台が付された貼り付け高台の製品である。内外面ともロクロナデ痕を明瞭に残し、再調整はない。全体的な器形は不明である。

甕(3273～3277) - ロクロ使用成形された口縁部から体部か体部から底部などを残存する破片のみで、完形の個体はない。口縁部から体部上位はないがいめんともロクロ成形痕のみであるが、外面の下半がヘラケズリされる個体と再調整のない個体があり、内面はほぼロクロ成形

痕のみである。器形は定かでないが、体部が膨らむものと所謂長胴形があり、大小関係がある。

須恵器（第314図、写真図版491）

甕が2点の出土である。

甕（3278・3279）—口縁部と体部の小破片である。3278はロクロ使用成形と推定される口縁部破片であり、3279は内外面に並行叩き具痕と当て具痕を付す大甕の体部破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物や遺構の形状と埋土の状態から平安時代の遺構と推定される。

02 EⅢf1土坑-2

〔遺構〕（第287図、写真図版206）

調査範囲西端から約129m東に寄ったEⅢ区の最西端部に位置し、EⅢf1土坑-3は南に約2mの距離がある。EⅢe2住居跡のほか土坑と重複するが、住居跡より新しく土坑は新旧それぞれである。

検出面の規模は開口部径約1.4m×1.2m、底部径約1.2m×95cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約30cmほどであり、断面形は壁が底面から大きく外傾する皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は調査中の不手際で図面の作成はされていないが、黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか明黄褐色シルト粒や少量の炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

03 EⅢf1土坑-3

〔遺構〕（第287図）

調査範囲西端から約128m東に寄ったEⅢ区の最西端部に位置し、EⅢi4土坑は南東に約14mの距離がある。EⅢe2住居跡のほか土坑と重複するが、住居跡より新しく土坑は新旧それぞれである。

検出面の規模は開口部径約80cm×60cm、底部径約40cm×30cmであり、平面形は検出面・底面とも不整な楕円形をなす。深さは約50cmほどであるが、断面形は壁が底面から直立気味に外傾するコップ形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は調査中の不手際から図面は作成されていないが、黒褐色シルトの単層であり、粘性が

あるほか明黄褐色シルト粒などの異質な土粒や炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

34 EⅢi4土坑

〔遺構〕(第288図、写真図版206)

調査範囲西端から約138m東に寄ったEⅢ区の西端部に位置し、DⅢy10土坑は北東に約42mの距離がある。EⅢi2住居跡と重複するが、住居跡より新しい遺構である。

検出面の規模は開口部径約1.6m×1.2m、底部径約1.2m×90cmであり、平面形は検出面・底面とも不整な楕円形をなす。深さは約25cmほどであるが、断面形は壁が底面から直立気味に外傾する浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が8層に細分されているが、土性はシルトと共通し、色調は黒色と黒褐色を主に褐色があり、明黄褐色シルト粒などの異質な土粒や炭化物粒を混入する。堆積の状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕(第315・316図、写真図版491・492)

土師器21点と須恵器4点の合わせて25点が出土している。

土師器(第315図、写真図版491・492)

坏が15点、高台付き坏1点、壺6点が出土している。

坏(3280～3293) - 15点の出土であるが、完形や全体の判明する個体は3点のみで、他は口縁部から体部か底部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部内外面とも再調整は観察されない。全体的な器形は、体部が底部から丸味を持って外傾したり直線的に外傾する個体があり、全体では後者が多い。大きさは口縁部径が14.4cm～13.3cm、底部径が6.7cm～4.3cmで、比率は3.18～2.14である。

高台付き坏(3294) - 体部下位から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整に「ハ」字状に踏ん張る比較的高い高台が付された貼り付け高台の製品である。内外面ともロクロナデ痕を明瞭に残し、再調整はない。全体的な器形は不明である。

壺(3295～3300) - ロクロ使用成形された5点とロクロ使用成形されなかった1点の出土である。いずれも口縁部から体部か底部から底部などを残す破片のみで、完形の個体はない。

ロクロ使用成形の個体は、体部外面の下半がヘラケズリされる例とロクロ成形痕以外の再調整のない個体がある。ロクロ不使用成形される個体にはヘラナデによる再調整が内外全面に観察される。器形は定かでないが、体部が若干膨らむものと所謂長胴形があり、大小関係がある。

須恵器（第316図、写真図版492）

壺が4点の出土である。

壺（3301～3304）—いずれも体部の破片である。3301内面にヘラナデ、外面がヘラケズリ調整された長胴形の壺である。そのほかは外面に並行叩き具痕を持ち内面が並行当て具痕や円形無文当て具痕などを付す大壺の体部破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物や遺構の形状と埋土の状態から平安時代の遺構と推定される。

⑨ DⅢy10土坑

〔遺構〕（第288図、写真図版207）

調査範囲西端から約163m東に寄ったDⅢ区のほぼ中央やや西よりに位置し、DⅢq11土坑は北に約32mの距離がある。DⅢx10住居跡と重複するが、住居跡の方が新しい遺構である。

検出面の規模は開口部径約1.1m×90cm、底部径約70cm×50cmであり、平面形は検出面・底面とも不整な楕円形をなす。深さは約30cmほどであるが、断面形は壁が底面から丸味を持って外傾する凸レンズ状のボール形である。底面には若干の凸凹が観察される。

埋土は全体が5層に細分されているが、土性はいずれもシルトと共通し、色調には黒色と黒褐色のほか、褐色と極暗褐色があり、明黄褐色シルト粒などの異質な土粒や炭化物粒・焼土を混入する。堆積の状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕（第316図、写真図版492）

土師器10点と須恵器3点の合わせて13点が出土している。

土師器（第316図、写真図版492）

坏が8点、鉢1点、壺1点が出土している。

坏（3305～3312）—8点の出土であるが、全体の判明する個体は1点のみで完形は出土していない。他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される個体が主体をなすほか、ロクロナデ以外の再調整がない個体もある。全体的な器形は、体部が底部から丸味を持って外傾したり直線的に外傾する個体があり、全体では前者が多い。大きさは口縁部径が15.5cm、底部径が6.8cmで、比率は2.27である。

鉢（3313）—体部下位から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整のベタ高台状をなし、体部の外面は再調整されないが、内面はミガキ

後黒色処理される。全体的な器形は不明であるが、坏形的な器形を推定させるものそれより大型であることから鉢とした。体部は高台輪から外方に大きく腰が張り出した後、外傾して立ち上がる器形をなすらしい。

壺(3314) — ロクロ使用成形された体部から底部を残存する破片である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部内外面ともロクロ成形痕以外の再調整はない。全体的な器形は明確にし難いが、小型の製品である。

須恵器(第316図、写真図版492)

壺が3点の出土である。

壺(3315～3317) — いずれも体部の破片である。外面に並行叩き具痕を持ち内面が無文当て具痕を付す個体とロクロ成形痕を残し内外面とも叩き具痕や当て具痕のない固定があり、いずれも大壺である。

(遺構の時期)

出土遺物や遺構の形状と埋土の状態から平安時代の遺構と推定される。

69 DⅢq 11 土坑

(遺構)(第288図、写真図版207)

調査範囲西端から約164m東に寄ったDⅢ区のほぼ中央西よりに位置し、DⅢu 11土坑は南に約14mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

検出面の規模は開口部径約1.9m×90cm、底部径約1.7m×70cmであり、平面形は検出面・底面とも細長い楕円形をなす。深さは約25cmほどであるが北東端が他より一段低くなり約30cmである。断面形は壁が底面から直立気味に外傾する浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が5層に細分されるが、土性はすべてシルトと共通しており、色調は黒褐色を主体に暗褐色がある。粘性があるほか黄褐色シルトなどの異なる土粒や炭化物粒を混入する。堆積の状況から自然埋没したものと考えられる。

(遺物)

出土していない。

(遺構の時期)

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

70 DⅢu 11 土坑

(遺構)(第288図、写真図版207)

調査範囲西端から約166m東に寄ったDⅢ区のほぼ中央西よりに位置し、DⅢy 11土坑は南

に約 14 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

検出面の規模は開口部径約 95 cm × 90 cm、底部径約 30 cm × 25 cm であり、平面形は検出面・底面とも正円に近い楕円形をなす。深さは約 50 cm ほどであり、断面形は壁が底面から直立気味に外傾するピーカー形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒色シルトであるが、混入物によって 2 層に細分されるものの、土性はいずれもシルトと共通している。粘性があるほか黄褐色シルトなどの異質な土粒や炭化物粒を混入する。堆積の状況から人為的に埋め戻した可能性が考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

⑧ DⅢy 11 土坑

〔遺構〕(第 289 図)

調査範囲西端から約 165 m 東に寄った DⅢ区のはほぼ中央西よりに位置し、DⅢp 12 土坑は北東に約 36 m の距離がある。DⅢx 10 住居跡と重複するが、当遺構の方が古い。

検出面の規模は開口部径約 30 cm × 30 cm、底部径約 25 cm × 25 cm であり、平面形は検出面・底面とも正円に近い楕円形をなす。深さは約 5 cm ほどと痕跡程度であり、断面形は壁が底面から大きく外傾するほとんど壁の立たない浅い皿形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は極暗褐色シルトの単層であるが、粘性があるほか黄褐色シルトなどの異質な土粒や炭化物粒を混入する。堆積の状況から人為的に埋め戻した可能性が考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物は出土していないが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

⑨ DⅢp 12 土坑

〔遺構〕(第 289 図、写真図版 208)

調査範囲西端から約 170 m 東に寄った DⅢ区のはほぼ中央に位置し、DⅢu 13 土坑は南に 22 m の距離がある。DⅢp 12 住居跡と重複するが、当遺構の方が新しい。

検出面の規模は開口部径約 1.35 m × 1.1 m、底部径約 60 cm × 45 cm であり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約 45 cm ほどであり、断面形は壁が底面から大きく外傾するピーカー形に近い形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が6層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通し、色調は黒褐色と暗褐色を主体に褐色があり、いずれの層にも明褐色や黄褐色の異質な土粒や炭化物粒・焼土を混入する。堆積の状況から人為的に埋め戻した可能性が考えられる。

〔遺物〕(第317図、写真図版493)

土師器のみ23点が出土している。

土師器(第317図、写真図版493)

坏が14点、高台付き坏1点、皿1点、甕7点が出土している。

坏(3318～3320・3322～3332) - 14点の出土であるが、完形や全体の判明する個体は5点のみで、他は口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される個体を含むほか、ロクロナデ以外の再調整がない個体が主体である。全体的な器形は、体部が底部から丸味を持って外傾したり直線的に外傾する個体があり、全体では前者が多い。大きさは口縁部径が15cm～12.2cm、底部径が7cm～5cmで、比率は2.69～2.08である。

高台付き坏(3321) - 体部下位から底部を残す破片が1点出土している。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切り離し無調整に「ハ」字状に踏ん張る高台が付された貼り付け高台である。体部の外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される。全体的な器形は不明である。

皿(3333) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片が1点出土している。内外面ともロクロナデ痕のみで再調整はなく、所謂坏より体部が大きく外傾することから皿とした。

甕(3334～3340) - ロクロ使用成形された口縁部から体部か体部から底部を残す破片である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部内外面ともロクロ成形痕以外の再調整はない。全体的な器形は明確にし難いが、小型の製品である。

〔遺構の時期〕

出土遺物や遺構の形状と埋土の状態から平安時代の遺構と推定される。

40 DⅢu13土坑

〔遺構〕(第289図、写真図版208)

調査範囲西端から約173m東に寄ったDⅢ区のはほぼ中央に位置し、DⅢt19土坑は東に約26mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約1m×90cm、底部径約60cm×55cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約15cmほどであり、断面形は壁が底面から大きく外傾する浅い皿形に近い形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は黒色シルトの単層であり、明褐色や黄褐色の異質な土粒や炭化物粒・焼土を混入す

る。堆積の状況から自然堆積による埋没と考えられる。

〔遺物〕(第 318 図)

縄文時代の土製品が出土している。

土製品(57) 一径 5.3 cm の円形をなし、厚さ 2.2 cm の大きさを持つ滑車形の耳飾りである。器表には縄文が付された後、沈線で区画して縄文を磨消する文様が付されている。

〔遺構の時期〕

出土した遺物は縄文時代に属するが、形状や埋土から平安時代の遺構と推定される。

41) DⅢt19 土坑

〔遺構〕(第 289 図、写真図版 208)

調査範囲西端から約 198 m 東に寄った DⅢ区の中央東よりに位置し、DⅢm 24 土坑は東に約 21 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約 1 m × 1 m、底部径約 70 cm × 70 cm であり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約 30 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する皿形に近い形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が 3 層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通し、色調は黒色と黒褐色であり、明褐色や黄褐色の異質な土粒や炭化物粒・焼土を混入する。堆積の状況から人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

〔遺物〕(第 318 図、写真図版 494)

土師器の破片が出土している。

土師器(第 318 図、写真図版 494)

壺の破片が 2 点出土している。

(3341 ~ 3342) - ロクロ不使用成形された体部の小破片であるため、器形など全体的なことは不明である。

〔遺構の時期〕

出土した遺物や、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

42) DⅢm 24 土坑

〔遺構〕(第 290 図、写真図版 208)

調査範囲西端から約 220 m 東に寄った DⅢ区の東端部に位置し、DⅢt 1 土坑は北東に約 8 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約 1.5 m × 70 cm、底部径約 60 cm × 35 cm であり、平面形は検出面・底面とも不整な楕円形をなす。深さは約 15 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い

皿形に近い形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が2層に細分されているが、土性はすべてシルト、色調が黒褐色と共通し、明褐色や黄褐色の異質な土粒や炭化物粒・焼土を混入によって細分される。堆積の状況から自然状態で埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

43 DIV11土坑

〔遺構〕(第290図、写真図版208)

調査範囲西端から約227m東に寄ったDIV区の最西端部に位置し、DIVo1土坑は南に約14mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出されている。

検出面の規模は開口部径約1m×95cm、底部径約75cm×75cmであり、平面形は検出面・底面とも不整な楕円形をなす。深さは約20cmほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い皿形に近い形をなし、底面は凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が4層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通し色調は黒褐色を主に黒色と暗褐色がある。全層に明褐色や黄褐色などの異質な土粒や炭化物粒・焼土を混入する。堆積の状況から自然状態で埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

44 DIVo1土坑

〔遺構〕(第290図、写真図版209)

調査範囲西端から約225m東に寄ったDIV区の最西端部に位置し、DIVi2土坑は北東に約24mの距離がある。DIVo25住居跡と重複するが、当遺構が新しい。

検出面の規模は開口部径約1.2m×70cm、底部径約60cm×40cmであり、平面形は検出面・底面とも不整な楕円形をなす。深さは約35cmほどであり、断面形は壁が底面から外傾する凸レンズ状のボール形に近い形をなし、底面に小凸凹がある。

埋土は全体が3層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通し色調は黒褐色を主に暗褐色がある。全層に粘性があり明褐色や黄褐色などの異質な土粒を混入する。堆積の状況から

自然状態で埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

49 DIVI 2 土坑

〔遺構〕(第 290 図、写真図版 209)

調査範囲西端から約 231 m 東に寄った DIV 区の最西端部に位置し、DIVI 2 土坑は南に約 12 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

検出面の規模は開口部径約 1 m × 90 cm、底部径約 80 cm × 80 cm であり、平面形は検出面・底面とも不整な楕円形をなす。深さは約 15 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い皿状をなし、底面に小凸凹がある。

埋土は全体が 3 層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通し色調には黒褐色・黄褐色・黒色がある。明褐色や黄褐色などの異質な土粒を混入する。堆積の状況から自然状態で埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

46 DIVI 2 土坑

〔遺構〕(第 291 図、写真図版 209)

調査範囲西端から約 231 m 東に寄った DIV 区の最西端部に位置し、DIVI 2 土坑-1 は南に約 13 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

検出面の規模は開口部径約 65 cm × 65 cm、底部径約 45 cm × 45 cm であり、平面形は検出面・底面とも正円に近い円形をなす。深さは約 20 cm ほどであり、断面形は壁が底面から丸味を持って外傾する凸レンズ状の浅いボール形をなし、底面に小凸凹がある。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、明褐色や黄褐色などの異質な土粒を混入する。堆積の状況から自然状態で埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

(7) DIVo2土坑-1

〔遺構〕(第291図、写真図版210)

調査範囲西端から約230m東に寄ったDIV区の最西端部に位置し、DIVo2土坑-2は同じ場所で重複している。新旧関係は当遺構の方が古い。

検出面の規模は開口部径約1.55m×95cm、底部径約1.45m×65cmであり、平面形は検出面・底面とも長楕円形をなす。深さは約25cmほどであり、断面形は壁が底面から丸味を持って外傾する浅い皿形に近いボール形をなし、底面に小凸凹がある。

埋土は全体が8層に細分されるが、土性は砂質シルトを主体にシルトに分けられ、色調は黒褐色と黒色を主体に暗褐色があり、明褐色や黄褐色などの異質な土粒を混入する。堆積の状況から自然状態で埋没したものと考えられる。

〔遺物〕(第318図、写真図版494)

土師器1点出土している。

土師器(第318図、写真図版494)

坏が1点の出土である。

坏(3343) - ロクロ使用成形され内外面とも再調整のない口縁部の小破片である。

〔遺構の時期〕

出土した遺物と、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

(8) DIVo2土坑-2

〔遺構〕(第291図、写真図版210)

調査範囲西端から約230m東に寄ったDIV区の最西端部に位置し、DIVo3土坑は東に約3mの距離がある。DIVo2住居跡状遺構とDIVo2土坑-1と重複しているが、新旧関係は当遺構がもっとも新しい。

検出面の規模は開口部径約80cm×70cm、底部径約40cm×30cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約50cmほどであり、断面形は壁が底面から丸味を持って外傾するボール形をなし、底面には凸凹もなく平坦である。

埋土は全体が2層に細分されるが、土性は砂質シルトと共通し、色調は褐色と明褐色に分けられる。黒褐色の異質な土粒を混入する。堆積の状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕(第318図、写真図版494)

土師器1点出土している。

土師器(第318図、写真図版494)

壘が1点の出土である。

壘(3344) - ロクロ使用成形され内外面とも再調整のない体部の小破片である。

〔遺構の時期〕

出土した遺物と、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

60 DIVo3土坑

〔遺構〕(第291図、写真図版210)

調査範囲西端から約232m東に寄ったDIV区の最西端部に位置し、DIVi5土坑は東に約27mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

検出面の規模は開口部径約60cm×60cm、底部径約40cm×30cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約15cmほどであり、断面形は壁が底面から丸味を持って外傾する浅い皿形をなし、底面には凸凹もなく平坦である。

埋土は暗褐色をなす砂質シルトの単層であり、堆積の状況から自然埋没した遺構と考えられる。

〔遺物〕

点出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

60 DIVi5土坑

〔遺構〕(第291図、写真図版209)

調査範囲西端から約242m東に寄ったDIV区の西端部よりに位置し、DIVf6土坑-1は北東に約21mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

検出面の規模は開口部径約1.1m×1m、底部径約90cm×60cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなす。深さは約15cmほどであり、断面形は壁が底面から丸味を持って外傾する浅い皿形をなし、底面には凸凹もなく平坦である。

埋土は調査中の不手際によって実測図を作成していないが、黒褐色をなすシルトの単層であり、堆積の状況から自然埋没した遺構と考えられる。

〔遺物〕

点出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

60) DIVf6 土坑-1

〔遺構〕(第292図、写真図版211)

調査範囲西端から約244m東に寄ったDIV区の西端部よりに位置し、DIVf6土坑-2は東に隣接する。北側の約50%が調査範囲外に延びていることから、全体は調査していない。

検出面の規模は開口部径約2.5m×80cm以上、底部径約2.1m×80cm以上であり、調査された平面形は検出面・底面とも半円形であるが、もし全体を検出すると円形か楕円形と推定される。深さは現地表面から約1m、検出面から約40cmほどであり、断面形は壁が底面から丸味を持って外傾する浅い皿形をなし、底面には軽い小凸凹がある。

埋土は現地表面から8層に細分されているが、検出面から下位は2層下部以下である。土性はシルトと共通し、色調は黒褐色と黒色を主体に褐色に細分される。異質の小土粒を混入する層が多い。自然堆積で埋没した遺構と考えられる。

〔遺物〕

点出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、遺構の形状・埋土から平安時代の遺構と推定される。

61) DIVf6 土坑-2

〔遺構〕(第292図、写真図版210)

調査範囲の西端から約245m東のDIV区の西部に位置し、DIVk7土坑は南に約24mの距離がある。他遺構との重複はない。

規模は、検出面の開口部径は65cm×45cm、底面の径が約45cm×35cmほどであり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約20cmほどであり、断面形は壁が底面から直立気味に外傾する浅い箱形に近い形状である。

埋土は全体が3層に細分されているが、土性はシルトと共通しているものの、色調が黒色と明黄褐色をなし、それぞれ異質の土が混在する状況を示す。堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

62) DIVk7 土坑

〔遺構〕(第292図、写真図版210)

調査範囲の西端から約248 m東のDIV区の西よりに位置し、DIVm 7土坑は南に約9 mの距離がある。DIVi 2溝跡と重複するが、当遺構の方が古い。

規模は、検出面の開口部径は1.2 m×80 cm、底面の径が約1.15 m×75 cmほどであり、平面形は検出面・底面とも兩壁が突辺をなす長方形である。深さは約10 cmほどであり、断面形は浅い箱形である。

埋土は2層に細分され、いずれも土性はシルトはシルトであるが色調には黒色と褐色があり、1層炭化物が大量に混入し、2層には黄褐色シルト粒が混じる。堆積状況を観察すると人為的に埋め戻されたものと推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

54 DIVm 7土坑

[遺構] (第293図、写真図版211)

調査範囲の西端から約252 m東のDIV区の西よりに位置し、DIVn 7土坑とは東に約15 mの距離がある。当土坑はDIVm 7住居跡の埋土内に掘られているため全体規模など詳細は明確にできなかった。

規模は、検出面の開口部径は2.25 m×1.8 m前後、底面の径が約2 m×90 cm前後と推定され、平面形は検出面・底面とも楕円形と推定される。深さは確認された部分で約20 cmほどであるが、実際の深さは明らかでない。断面形は定かでないが、皿形の可能性が考えられる。

埋土は確認された部分から2層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、色調も黄褐色と共通する。全体に褐色土粒が混在し、斑状の状態である。埋土の特徴や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと推定される。

[遺物] (第318図、写真図版494)

土師器が1点出土している。

土師器 (第317図、写真図版494)

坏が1点出土している。

坏(3345) - ロクロ使用成形された体部塊から底部を残す破片が1点の出土である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整で、内面はミガキ後黒色処理される。

[遺構の時期]

重複関係や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

59 DIVn 7 土坑

〔遺構〕(第 293 図、写真図版 211)

調査範囲の西端から約 252 m 東の DIV 区の西よりに位置し、DIVh 8 土坑とは北に約 26 m の距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部径は 1 m × 1 m、底面の径が約 85 cm × 65 cm の規模があり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 35 cm ほどであり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する鉢形に近い形状である。

埋土は全層が 4 層に細分されているが、土性はいずれもシルトであり、色調も黒褐色を主体に暗褐色である。全層に明褐色土粒が混入するとともに、炭化物や小礫などを混入する層も見られ、さらに粘性を持つ例もある。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

59 DIVh 8 土坑

〔遺構〕(第 293 図、写真図版 211)

調査範囲の西端から約 254 m 東の DIV 区のやや西よりに位置し、DIVi 8 土坑は南に約 4 m の距離がある。DIVg 7 住居跡と重複するが、当土坑の方が古い遺構である。

規模は、検出面の開口部径は 1.25 m × 湯輪 80 cm、底面の径が約 85 cm × 50 cm であり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 35 cm ほどであり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する鉢形に近い形状である。

埋土は全層が 4 層に細分されているが、土性はいずれもシルトであり、色調も黒褐色を主体に暗褐色である。全層に明褐色土粒が混入するとともに、炭化物や小礫などを混入する層も見られ、さらに粘性を持つ例もある。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

57 DIVi 8 土坑

〔遺構〕(第 293 図)

調査範囲の西端から約 253 m 東の DIV 区のやや西よりに位置し、DIVr 8 土坑は南に約 36 m

の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部径は80 cm×80 cm、底面の径が約50 cm×50 cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形をなし、特二周壁が不整である。深さは約10 cmほどであり、断面形は壁面が底面から軽く外傾する浅い皿形である。

埋土は調査中の不手際から実測する前に完掘してしまい、実測されていないが、黒色シルトの単層である。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

58 DIVr8 土坑

〔遺構〕(第294図、写真図版212)

調査範囲の西端から約254 m東のDIV区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVE8土坑は北東に約50 mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部径は壁の柄1.5 m×1.1 m、底面の径が約50 cm×50 cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約35 cmほどであり、断面形は壁面が底面から大きく外傾する播り鉢形に近い器形である。

埋土は全体が4層に細分されているものの、土性はすべてシルトであり、色調は黒褐色・黒色・黄褐色があり、一部の層には異質のシルトや炭化物が混入する。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

59 DIVE9 土坑

〔遺構〕(第294図、写真図版212)

調査範囲の西端から約261 m東のDIV区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVg9土坑は南に約8.5 mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部径は80 cm×80 cm、底面の径が約70 cm×70 cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約10 cmほどであり、断面形は壁面が底面から大きく外傾する浅い皿形である。

埋土は全体が2層に細分されているが、土性はすべてシルトである。色調はいずれも黒色であるが、下層は粘性がある他、黄褐色シルト粒が混入する。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

60 DIVg 9 土坑

〔遺構〕(第294図、写真版211)

調査範囲の西端から約259m東のDIV区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVj 9土坑は南に約11mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部径は1.3m×1m、底面の径が約1m×60cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約85cmほどであり、断面形は壁面が底面から直立気味に外傾するバケツ形である。

埋土は全体が8層に細分されているが、土性はシルトを主体に砂質シルトである。色調には黒色の他、黒褐色や暗褐色・褐色があり、全体として小礫が混入し、さらに異質の土が混入する共通した特徴がある。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

61 DIVj 9 土坑

〔遺構〕(第294図)

調査範囲の西端から約259m東のDIV区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVo 9土坑は南に約19mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部径は90cm×90cm、底面の径約75cm×70cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約10cmほどであり、断面形は壁面が底面から大きく外傾する浅い皿形である。

埋土は全体が3層に細分されているが、土性はシルトである。色調には黒褐色、暗褐色の他、明赤褐色がある。黄褐色土粒を含む他、炭化物を混入する場合が多く、さらに底面には径約45cmの楕円形状に広がる焼土がある。土層の堆積状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

[遺物] (第 318・319 図、写真図版 494・534)

埋土内から土師器が 2 点と鉄製品が 1 点出土している。

土師器 (第 318 図、写真図版 494)

鉢が 2 点の出土である。

鉢 (3346・3347) — いずれもロクロ不使用成形と推定されるが、完形はなく口縁部から体部と体部下位から底部を残す破片での出土である。3346 は体部の内外面を入念にヘラミガキ調整され、一部に黒色処理が残ることから本来は黒色されていたものと推定される。3347 は体部外面がヘラケズリ、内面が磨き後黒色処理される。器形は底部から丸味をもって外傾する体部は頸部で口縁部が外反する、器高の低い甕に近似した器形である。

鉄製品 (第 319 図、写真図版 534)

釘と考えられる製品が 1 点出している。

釘 (52) — 折頭釘と推定される釘であるが、全長 10.2 cm、最大幅 3 mm であり、全体が湾曲しているが先端部ほど細くなる。

[遺構の時期]

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

65 DIVo9 土坑

[遺構] (第 295 図、写真図版 212)

調査範囲の西端から約 260 m 東の DIV 区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVp9 土坑-1 は南に約 4 m の距離がある。DIVo8 溝跡と重複するが当遺構の方が古い遺構である。

規模は、検出面の開口部径は 1.5 m × 85 cm、底面の径が約 1.2 m × 60 cm であり、平面形は検出面・底面とも壁の一部が突出する長方形に近い楕円形である。深さは約 50 cm ほどであり、断面形は壁面が底面から大きく外傾する浅いバケツ形である。

埋土は全体が 5 層に細分されているが、土性は大半がシルトで一部砂質シルトである。色調は暗褐色を主体に黒褐色と鈍い赤褐色があり、炭化物を混入する層が多さらに黄褐色シルト粒を混入する例も多い。土層の堆積状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

[遺物] (第 319 図、写真図版 494)

埋土内から土師器が 5 点出土している。

土師器 (第 319 図、写真図版 494)

坏が 2 点と甕が 3 点の出土である。

坏 (3348・3349) — いずれもロクロ使用成形であるが、完形はなく口縁部から体部と体部下位から底部を残す破片での出土である。体部の外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される個体と無処理の個体がある。器形把小破片のため明確にし難いが、底部から外傾す

る体部は口縁端部が外反するらしい。

壺(3350～3352)－ロクロ使用成形された個体の体部破片である。小破片のため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

63 DIVp9土坑－1

〔遺構〕(第295図、写真図版212)

調査範囲の西端から約260m東のDIV区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVp9土坑－2は南に約2mの距離がある。重複する遺構はない。

規模は、検出面の開口部径は1m×85cm、底面の径が約70cm×65cmであり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約25cmほどであり、断面形は壁面が底面から大きく外傾する皿形である。

埋土は全体が2層に細分されているが、土性はシルトと砂質シルトである。色調は黒褐色と褐色であり、炭化物や焼土粒を混入するし、黄褐色シルト粒を混入する例も多い。土層の堆積状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕(第319図、写真図版494)

埋土内から土師器と須恵器が4点出土している。

土師器(第319図、写真図版494)

坏が1点と壺が2点の出土である。

坏(3353)－ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整で、体部下位から底部を残す破片である。体部の内外面とも再調整されない。

壺(3350～3352)－ロクロ使用成形された口縁部と体部破片である。2点とも内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はない。口縁部は頸部から大きく外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となる器形である。

須恵器(第319図、写真図版494)

大壺の体部破片である。

壺(3356)－内外面に並行の叩き具痕と当て具痕を付す破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

64 DIVp9土坑－2

〔遺構〕(第295図、写真図版212)

調査範囲の西端から約 259 m 東の DIV 区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVe 10 土坑-2 は北に約 42 m の距離がある。DIVo 8 住居跡と DIVo 8 溝跡が重複し、当遺構は住居跡より新しく、溝跡より古い。

規模は、検出面の開口部径は 1.2 m × 1.2 m、底面の径が約 80 cm × 70 cm であり、平面形は検出面がやや不整な楕円形的であるが、底面は隅丸のやや突辺気味となった長方形である。深さは約 40 cm ほどであり、断面形は壁面が底面から直立気味に外傾する皿形である。

埋土は全体が 2 層に細分されているが、土性はシルトと共通している。色調は暗褐色と黄褐色であり、それぞれ異質の土粒を混入する。土層の堆積状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕(第 319 図、写真図版 494)

埋土内から土師器が 2 点出土している。

土師器 (第 319 図、写真図版 494)

環が 1 点と壺が 1 点の出土である。

環 (3357) - ロクロ使用成形された口縁部の小破片が出土している。内外面ともロクロ成形痕のみで再調整されない。詳細は不明である。

壺 (3350 ~ 3352) - ロクロ使用成形された体部の小破片である。外面がヘラケズリ、内面がロクロナデされる。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

69 DIVe 10 土坑-2

〔遺構〕(第 295 図、写真図版 213)

調査範囲の西端から約 261 m 東の DIV 区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVm 10 土坑は南に約 32.5 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部径は 1.8 m × 1.2 m、底面の径が約 1.2 m × 1 m であり、平面形は検出面・底とも楕円形である。深さは約 40 cm ほどであり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する洗面器形に近似した形状である。

埋土は全体が 9 層に細分されているが、土性はすべて粘性のあるシルトと共通している。色調は黒色と黒褐色を主体に赤褐色があり、それぞれ異質の土粒を混入する。さらに、炭化物粒や焼土粒が混入する層も多い。土層の堆積状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

60 DIVm 10 土坑

〔遺構〕(第 296 図、写真図版 213)

調査範囲の西端から約 263 m 東の DIV 区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVc 11 土坑-1 は北に約 43 m の距離がある。DIVm 10 住居跡と重複するが遺構の方が新しい。

規模は、検出面の開口径は 1.3 m × 1.1 m、底面の径が約 95 cm × 85 cm であり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 50 cm ほどであり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する鉢形に近似した形状である。

埋土は全体が 2 層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通している。色調もともに黒褐色であり、それぞれ異質の土粒や下層には炭化物や焼土粒などが混入している。土層の堆積状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕(第 320 図、写真図版 494・495・533)

土師器 9 点、須恵器 3 点、陶器 1 点、鉄製品 1 点の合わせて 13 点の出土である。

土師器 (第 320 図、写真図版 494)

9 点の出土であるが、器種には坏 5 点、甕 4 点がある。

坏 (3359 ~ 3363) - 5 点の出土であるが、完形や全体を残す個体はまったく含まず、いずれも口縁部から体部か体部から底部そして底部の破片で出土している。すべてロクロ使用成形され、外面はロクロナデ痕のみで再調整はないが、内面は一部にミガキ後黒色処理される個体がある他は無調整である。底部のみを残す破片は所謂柱状高台であるが、身の部分が坏なのか皿なのかは明確でない。全体的な器形などは定かにし難い。

甕 (3366 ~ 3368) - 3 点であるが、体部と体部下位から底部の一部を残す破片であるため不明な部分が多い。いずれもロクロ使用成形され内外面ともロクロナデ痕のみで再調整はない。

須恵器 (第 320 図、写真図版 494・495)

坏 1 点、甕 2 点の出土である。

坏 (3364) - 体部下位から底部の一部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。

甕 (3369 ~ 3370) - 3369 は口縁部、3370 は体部の破片である。前者はロクロ使用成形され、後者は外面に擬格子文叩き具痕、内面に同心円文当て具痕が付された大甕である。

陶器 (第 320 図、写真図版 495)

小型壺の蓋が 1 点出土している。

蓋 (3371) - 瀬戸産の灰釉小型茶壺の蓋である。ロクロ水挽きされた製品である。径 6 cm、器高 2 cm の大きさで、鈕はない。

鉄製品 (第 320 図、写真図版 533)

鉄板状をなす製品が 1 点の出土である。

鉄板状 (38) - 器種が不明であるが 4.2 cm × 2.6 cm、厚さ 5 mm、重さ 15.6 g の大きさがあり、鉄板状をなす。

(遺構の時期)

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

87 DIVc 11 土坑-1

(遺構) (第 296 図、写真図版 213)

調査範囲の西端から約 267 m 東の DIV 区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVc 11 土坑-2 は北に約 2 m の距離がある。DⅢp 22 溝跡と重複するが当遺構の方が新しい。

規模は、検出面の開口部径は 2.2 m × 1.9 m、底面の径が約 1.65 m × 1.3 m であり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 45 cm ほどであり、断面形は壁面が底面からやや丸味をもって外傾する鉢形に近似した形状である。

埋土は全体が 4 層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通している。色調は黒褐色を主体に黒色があり、それぞれ異質の土粒などが混入している。さらに、粘性のある土層も見られ、炭化物粒を含む層もある。土層の堆積状況から自然堆積で埋没した遺構であろう。

(遺物) (第 320 図、写真図版 495)

須恵器 2 点の出土である。

須恵器 (第 320 図、写真図版 495)

坏 2 点の出土である。

坏 (3372・3373) 一口縁部から体部と体部下位から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の内外面とも再調整はない。

(遺構の時期)

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

88 DIVc 11 土坑-2

(遺構) (第 296 図、写真図版 213)

調査範囲の西端から約 269 m 東の DIV 区のほぼ中央やや西よりに位置し、DIVj 12 土坑は南に約 24 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部径は 1.1 m × 1 m、底面の径が約 80 cm × 50 cm であり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 35 cm ほどであり、断面形は壁面が底面からやや丸味を

もって外傾する振り鉢形に近似した形状である。

埋土は全体が5層に細分されているが、土性はすべてシルトと共通している。色調は黒褐色を主体に極暗褐色があり、それぞれ異質の土粒などが混入する他、炭化物や焼土粒も混入している。土層の堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

罎 DIVj 12 土坑

〔遺構〕(第 296 図、写真図版 214)

調査範囲の西端から約 271 m 東の DIV 区のほぼ中央に位置し、DIVi 12 土坑は南に約 10 m の距離がある。DIVj 12 住居跡と重複するが当遺構の方が新しい。

規模は、検出面の開口部径は 2.8 m × 2.2 m、底面の径が約 2.2 m × 1.3 m であり、平面形は検出面の周壁がやや不整であるものの、底面とも楕円形である。深さは約 40 cm ほどであり、断面形は壁面が底面から外傾する皿形に近似した形状である。

埋土は全体が7層に細分されているが、土性はシルトを主体に砂質シルトである。色調は黒褐色と黒色を主体に暗褐色と下層の明黄褐色があり、それぞれ異質の土粒などが混入する他、炭化物や焼土粒も混入している。土層の堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕(第 321 図、写真図版 495)

埋土内から土師器 10 点、須恵器 4 点の出土である。

土師器 (第 321 図、写真図版 495)

坏 4 点、壺 6 点が含まれる。

坏 (3374 ~ 3377) - 4 点の出土であるが、完形は含まず、口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部外面は再調整されない。内面は再調整のない個体 3 点 (3374・3375・3377) とミガキ後黒色処理される 1 点 (3376) に分けられる。全体的な器形は定かにし難いが、底部から外傾する体部は口縁部が外反する器形らしい。

壺 (3382 ~ 3387) - すべて口縁部と体部の小破片であるため詳細は不明である。ロクロ使用成形され、体部外面がヘラケズリ内面はヘラナデ調整される。

須恵器 (第 321 図、写真図版 495)

坏が 4 点出土している。

坏 (3378 ~ 3381) - 完形が 1 点の他は体部から底部を残す破片である。すべてロクロ使用成

形され、底部の切り離しには回転糸切り離し無調整と篋切り無調整がある。体部の再調整はない。器形は土師器環のそれと同様である。大きさは口縁部径が12.8 cm、底径5.5 cmで比率は2.34である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

09 DIVi 12 土坑

〔遺構〕(第297図、写真図版214)

調査範囲の西端から約269 m東のDIV区のほぼ中央に位置し、DIVo 12土坑は南に約14 mの距離がある。DIVi 2溝跡と重複するが当遺構の方が古い。

重複する溝跡の削平によって南側の約50%の残存であるが、検出面の開口部径は1.8 m前後、底面の径が約1.45 m前後の規模と推定され、平面形は検出面・底面とも隅丸突辺気味の方形または長方形である。深さは約25 cmほどであり、断面形は壁面が底面から外傾する皿形に近似した形状である。

埋土は全体が4層に細分されているが、土性はいずれもシルトと共通する。色調は黒褐色と黒色を主体に褐色があり、それぞれ異質の土粒が混入する。土層の堆積状況から自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

09 DIVo 12 土坑

〔遺構〕(第297図、写真図版215)

調査範囲の西端から約269 m東のDIV区のほぼ中央に位置し、DIVa 13土坑は北に約56 mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

検出面の開口部径は90 cm×90 cm、底面の径が約80 cm×70 cmの規模があり、平面形は検出面・底面とも隅丸突辺気味の方形である。深さは約10 cmほどであり、断面形は壁面が底面から大きく外傾し壁高のない浅い皿形の形状である。

埋土は全体が4層に細分されているが、土性はいずれもシルトと共通する。色調は黒褐色と黒色・褐色・鈍い赤褐色があり、それぞれ異質の土粒や焼土粒・炭化物などを混入する。土層の堆積状況から人為的に埋め戻した可能性が強い。

〔遺物〕(第321図、写真図版495)

埋土内から土師器 4 点と須恵器 2 点の合わせて 6 点の出土である。

土師器 (第 321 図、写真図版 495)

坏 3 点と鉢 1 点出土している。

坏 (3388 ~ 3390) - 3 点の出土であるが、完形はなく口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面はロクロナデのみであるが、内面はミガキ後黒色処理されるものと無調整の個体がある。

鉢 (3391) - ロクロ不使用成形された坏形をした小型の鉢である。内外面にヘラナデやハケメなどの調整痕がある。

須恵器 (第 321 図、写真図版 495)

坏 1 点と壺 1 点の出土である。

坏 (3392) - ロクロ使用成形された体部から底部を残す破片で、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。再調整はない。

壺 (3393) - ロクロ使用成形された体部破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

7) DIVa 13 土坑

〔遺構〕 (第 297 図、写真図版 214)

調査範囲の西端から東に約 274 m 東によった DIV 区のほぼ中央に位置し、DIVk 13 土坑は南に約 40 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 90 cm × 85 cm、底面径約 70 cm × 65 cm であり、平面形は検出面・底面ともに楕円形である。深さは約 15 cm であり、断面形は壁が底面から大きく外傾する浅い皿形である。

埋土は黒褐色のシルトの単層であり、粘性があり明褐色土粒と炭化物が混入する。単層であることから人為的な埋戻しが想定されるが、埋土の土性などから自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴と堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

03 DIVk13土坑

[遺構] (第297図、写真図版215)

調査範囲の西端から東に約272m東によったDIV区のほぼ中央に位置し、CVu18土坑は東に約124mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約80cm×60cm、底面径約55cm×30cmであり、平面形は検出面・底面ともに楕円形である。深さは約10cmであり、断面形は壁が底面から大きく外傾する浅い皿形である。

埋土は黒色シルトの単層であり、炭化物を多量に混入する。単層であることから人為的な埋め戻しが想定されるが、埋土の土性などから自然堆積で埋没したものと推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の特徴と堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

04 CVu18土坑

[遺構] (第298図、写真図版215)

調査範囲の西端から東に約397m東によったDIV区のほぼ中央に位置し、CVt21土坑-1は東に約14mの距離がある。重複する遺構はないが、全体の約50%が北側の調査く既に延びているため、未調査である。重複する遺構はない。

規模は、検出面の開口部が径約2m前後、底面径約1.3m前後であり、平面形は検出面・底面ともに楕円形か円形と推定される。深さは約30cmであり、断面形は壁が底面から丸味をもって直立気味に外傾する皿形である。

埋土は3層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色を主体に暗褐色があり、異質の土粒の他、炭化物も混入する。埋土の土性や堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の特徴と堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

05 CVu21土坑-1

[遺構] (第299図、写真図版215)

調査範囲の西端から東に約409m東によったCV区の東端部に位置し、CVt21土坑-2は

南東に重複して隣接している。重複の新旧完形は当土坑が古い。

規模は、検出面の開口部が径約1.6 m×1.2 m、底面径約1.3 m×80 cmであり、平面形は検出面・底面ともに楕円形である。深さは約30 cmであり、断面形は壁が底面から丸味をもって外傾するボール形である。

埋土は6層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒褐色を主体に褐色と明黄褐色であり、異質の土粒の他、炭化物も混入する。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕(第322図、写真図版496)

埋土内から土師器が2点出土している。

土師器(第322図、写真図版496)

甕のが2点出土している。

甕(3394・3395) - ロクロ使用成形された体部の小破片であるため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の特徴と堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

06 CVu21土坑-2

〔遺構〕(第299図、写真図版215)

調査範囲の西端から東に約410 m東によったCV区の東端部に位置し、CVt22土坑-1は東に約5 mの距離がある。重複する遺構はない。

規模は、検出面の開口部が径約2 m×1.25 m、底面径約1.8 m×1 mであり、平面形は検出面・底面とも周壁が不整な楕円形である。深さは約30 cmであり、断面形は壁が底面から丸味をもって外傾するボール形に近い形状である。

埋土は4層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒褐色を主体に褐色と明褐色であり、異質の土粒の他、炭化物も混入する。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴と堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

07 CVt22土坑-1

〔遺構〕(第299図、写真図版216)

調査範囲の西端から東に約413 m東によったCV区の東端部に位置し、CVt22土坑-2は

南に約1mの距離がある。CVu 21 住居跡と重複するが、当土坑の方が新しい遺構である。

規模は、検出面の開口部が径約2.8m×1.8m、底面径約2.5m×1.6mであり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約10cmであり、断面形は壁が底面から直立気味に外傾する浅い皿形である。

埋土は4層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒褐色を主体に褐色であり、異質の土粒の他、炭化物も混入する。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕(第322図、写真図版496)

土師器が2点出土している。

土師器(第322図、写真図版496)

坏と壺が各1点の出土である。

坏(3396)－ロクロ使用成形された体部下位から底部の一部を残す小破片である。内面が磨き後黒色処理される。

壺(3397)－ロクロ使用成形された体部の破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

7 0 CVt 22 土坑-2

〔遺構〕(第299図、写真図版216)

調査範囲の西端から東に約413m東によったCV区の東端部に位置し、CVw 22 土坑-1は南に約10mの距離がある。CVu 21 住居跡と重複するが、当土坑の方が新しい遺構である。

規模は、検出面の開口部が径約2.1m×1.4m、底面径約1.7m×1.3mであり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約15cmであり、断面形は壁が底面から直立気味に外傾する浅い皿形である。

埋土は3層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒褐色を主体に暗褐色であり、異質の土粒の他、炭化物も混入する。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕(第322図、写真図版496)

土師器が1点出土している。

土師器(第322図、写真図版496)

壺が1点の出土である。

壺(3398)－ロクロ使用成形された体部の破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

09 CVw 22 土坑-1

〔遺構〕(第 299 図、写真図版 216)

調査範囲の西端から東に約 413 m 東によった CV 区の東端部に位置し、CVw 22 土坑-2 は北に隣接しており、新旧関係は定かでない。

規模は、検出面の開口部が径約 3 m × 1.2 m、底面径約 2.5 m × 80 cm であり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 10 cm であり、断面形は壁が底面から直立気味に外傾する浅い皿形である。

埋土は 3 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒褐色を主体に暗褐色であり、異質の土粒の他、炭化物も混入する。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

08 CVw 22 土坑-2

〔遺構〕(第 299 図、写真図版 216)

調査範囲の西端から東に約 413 m 東によった CV 区の東端部に位置し、CVw 22 土坑-3 は西に隣接しており、新旧関係は定かでない。

規模は、検出面の開口部が径約 5 m × 1.2 m、底面径約 4.5 m × 80 cm であり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 25 cm であり、断面形は壁が底面から直立気味に外傾する浅い皿形である。

埋土は 7 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は褐色を主体に黒褐色・黄褐色・明褐色があり、異質の土粒や礫の他、炭化物も混入する。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

⑧ CVw22 土坑-3

[遺構] (第 300 図、写真図版 217)

調査範囲の西端から東に約 411 m 東によった CV 区の東端部に位置し、CVu22 土坑-1 は北に約 8 m の規模がある。CVu19 掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は当土坑の方が新しい。

規模は、検出面の開口部が径約 1.8 m × 75 cm、底面径約 1.5 m × 50 cm であり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 15 cm であり、断面形は壁が底面から直立気味に立つ浅い箱形である。

埋土は 2 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は暗褐色と黄褐色であり、異質の土粒や炭化物も混入する。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

⑨ CVu23 土坑-1

[遺構] (第 300 図、写真図版 217)

調査範囲の西端から東に約 414 m 東によった CV 区の東端部に位置し、CVu22 土坑-2 は南東に約 3 m の規模がある。CV23 土坑-2・同-3 重複するが、新旧関係は当土坑の方が新しい。

規模は、検出面の開口部が径約 2.1 m × 1.65 m、底面径約 1.75 m × 1.45 m であり、平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 20 cm であり、断面形は壁が底面から直立気味に立つ浅い皿形である。

埋土は 3 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は暗褐色を主体に黒褐色であり、異質の土粒や炭化物も混入する。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

03 CVu23土坑-2

〔遺構〕(第300図、写真図版217)

調査範囲の西端から東に約415m東によったCV区の東端部に位置し、CVu22土坑-1は南東に重複してしている。CV23土坑-1・同-3重複するが、新旧関係は当土坑の方が古い。

重複によった北側の一部が削平を受けているが、検出された規模は、検出面の開口部が径約1.7m×1.55m、底面径約1.55m×1.25m前後と推定される。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約10cmであり、断面形は壁が底面から直立気味に立つ浅い皿形である。

埋土は2層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒褐色と褐色であり、異質の土粒や炭化物や小礫を含む。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕(第322図、写真図版496)

埋土内から土師器が2点出土している。

土師器(第322図、写真図版496)

壺の体部破片が2点である。

壺(3399～3400) - ロクロ使用成形される体部と頸部付近の破片であるが、小破片であるため詳細は定かでない。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

04 CVu23土坑-3

〔遺構〕(第300図、写真図版217)

調査範囲の西端から東に約416m東によったCV区の東端部に位置し、CVu22土坑-4は南東に約2mの距離がある。CVu22土坑-1と同-2と重複するが、新旧関係は当土坑の方が古い。

規模は、検出面の開口部が径約1m×1m、底面径約70cm×70cm前後と推定される。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約10cmであり、断面形は壁が底面から直立気味に立つ浅い皿形である。

埋土は2層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒褐色と褐色であり、異質の土粒や炭化物や小礫を含む。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

89 CVu 23 土坑-4

〔遺構〕(第 300 図、写真図版 217)

調査範囲の西端から東に約 416 m 東によった CV 区の東端部に位置し、CVv 23 土坑は南東に約 3 m の距離がある。CVu 22 土坑-2 と重複するが、新旧関係は当土坑の方が古い。

規模は、検出面の開口部が径約 1 m × 1 m、底面径約 75 cm × 70 cm 前後と推定される。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 10 cm であり、断面形は壁が底面から直立気味に立つ浅い皿形である。

埋土は 2 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒褐色と褐色であり、異質の土粒や炭化物や小礫を含む。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

89 CVv 23 土坑

〔遺構〕(第 301 図、写真図版 218)

調査範囲の西端から東に約 415 m 東によった CV 区の東端部に位置し、CVig 18 土坑は南東に約 80 m の距離がある。他遺構と重複することなく単独で検出されている。

規模は、検出面の開口部が径約 4 m × 4 m、底面径約 3.5 m × 2 m である。平面形は検出面・底面とも楕円形であるが、北側の壁が不規則であることにより全体が、深さは約 10 cm であり、断面形は壁が底面から直立気味に立つ浅い皿形である。

埋土は全体が 6 層の細分されるが、土性は 5 層が砂質シルトの他は、いずれもシルトと共通する。色調は暗褐色・黒褐色・青黒色など多様な様相を示している。いずれの層にも異質の土粒を混入する他、礫を混在する層もある。堆積状況がレンズ状ではあるが、東側の層が乱雑であることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔遺物〕(第 322 図、写真図版 496)

埋土内から土師器 4 点と須恵器 3 点の合わせて 7 点の出土である。

土師器 (第 322 図、写真図版 496)

環が 3 点と甕 1 点含まれる。

環 (3401 ~ 3403) - 2 点の出土であるが、いずれも体部下位から底部を残す破片での出土で

ある。ロクロ使用成形され、底部の切り離しが回転糸切り離し無調整であるが、体部外面の底部よりがへラケズリ調整されるものと無調整のものがある。内面はミガキ後黒色処理される個体と無処理の個体がある。

壺(3404) - ロクロ不使用成形され体部下位から底部の一部を残す小破片が1点出土している。外面にはハケメ、内面にはなでによる調整痕がある。

須恵器(第322図、写真図版496)

坏が2点と壺が1点出土している。

坏(3405～3406) - ロクロ使用成形された口縁部の小破片が2点の出土である。内外面ともロクロ成形痕のみで再調整はない。

壺(3407) - ロクロ使用成形された頸部の小破片である。詳細は不明である。

[遺構の時期]

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

跡 CVIg 18 土坑

[遺構](第301図、写真図版218)

調査範囲の西端から東に約494 m東のCVI区中央やや東よりに位置し、CVIn 25 土坑は南東に約40 mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約60 cm×60 cm、底面径約50 cm×50 cmである。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約10 cmであり、断面形は壁が底面から大きく外傾する浅い皿形である。

埋土は2層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調はともに黒褐色と共通し、異質の土粒や炭化物を少量含む。埋土の土性や堆積状況から人為的に埋め戻した可能性がある。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

跡 CVIn 25 土坑

[遺構](第301図、写真図版218)

調査範囲の西端から東に約524 m東のCVI区最東端部に位置し、CVIj 4 土坑は南東に約15 mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約95 cm×80 cm、底面径約80 cm×55 cmである。平面形は検出

面が楕円形的であるが、底面は長方形である。深さは約 60 cm であり、断面形は壁が底面から直立気味に立つ箱形である。

埋土は 5 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒褐色・暗褐色・黄褐色など多様な様相を示し、全体として異質の土粒や炭化物を少量含む。埋土の土性や堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

89 CVIj 4 土坑

〔遺構〕(第 302 図、写真図版 218)

調査範囲の西端から東に約 538 m の CVI 区最西端部に位置し、CVIh 5 土坑は南東に約 15 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 1.4 m × 1.3 m、底面径約 1.3 m × 1.1 m である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 5 cm 未満の痕跡程度であることから、開田時に削平されたものとは考えられるが、元々浅い土坑であったものと推定される。断面形は壁が底面から大きく外傾してほとんど壁高のない浅い皿形である。

埋土は黒色シルトの単層である。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

90 CVIh 5 土坑

〔遺構〕(第 302 図、写真図版 219)

調査範囲の西端から東に約 538 m の BVI 区最西端部に位置し、BVIw 5 土坑は北東に約 38 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 1 m × 85 cm、底面径約 90 cm × 75 cm である。平面形は検出面、底面とも一部の壁が突刃となるものの長方形である。深さは約 10 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い皿形である。

埋土は黒褐色シルトの単層であるが、異質の土粒や炭化物・焼土粒が混入する。人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

61) BVW 5 土坑

〔遺構〕(第 302 図、写真図版 219)

調査範囲の西端から東に約 545 m の CVI 区最西端部に位置し、BVW 7 土坑は東に約 7 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 75 cm × 60 cm、底面径約 60 cm × 45 cm である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 10 cm ほどであり、断面形は壁が底面から大きく外傾し壁高のほとんどない凸レンズ状の浅い皿形である。

埋土は黒色シルトの単層であるが、異質の土粒や炭化物・焼土粒が混入する。人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

62) BVX 7 土坑

〔遺構〕(第 302 図、写真図版 219)

調査範囲の西端から東に約 552 m の BVII 区西部よりに位置し、BVX 8 土坑は東に約 3 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 85 cm × 66 cm、底面径約 70 cm × 45 cm である。平面形は検出面、底面とも突辺炭丸の長方形である。深さは約 40 cm ほどであり、断面形は壁が底面から軽く内傾する巾着形に近似した形状である。

埋土は黒褐色と黒色シルトの 2 層であるが、異質の土粒や炭化物・焼土粒が混入する。人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔遺物〕(第 322 図、写真図版 496)

埋土内から土師器 4 点、須恵器 2 点の合わせて 6 点の出土である。

土師器(第 322 図、写真図版 496)

坏が 2 点と壺 2 点の出土である。

坏(3408～3409)－ロクロ使用成形された口縁部から体部と体部から底部の一部を残す破片

である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の外面は両者とも再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理の個体と無調整の個体がある。その他詳細は定かでない。

壺 (3410・3411) - ロクロ使用成形された体部と底部の破片である。外面はケズリヤナデ、内面はナデ調整される。

須恵器 (第 322 図、写真図版 496)

坏が 1 点と壺が 1 点の 2 点の出土である。

坏 (3412) - ロクロ使用成形された口縁部破片が 1 点出土している。内外面とも再調整はない。

壺 (3413) - 口縁部から肩部を残す破片である。ロクロ使用成形され、内外面にロクロ成形痕を明瞭に残す他、頸部の外面に並行叩き具痕の痕跡を残存する。全体的なことは定かでないが、体部の上位から肩部に最大径を持つと推定され、頸部で大きく窄んだ後口縁部は外反し、口縁部は角張る縁帯状をなして上方軽く挽き出され受け口状を示す。

[遺構の時期]

出土遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

63 BVIX 8 土坑

[遺構] (第 303 図、写真図版 219)

調査範囲の西端から東に約 555 m の BVIX 区西部よりに位置し、CVII d 11 土坑は東に約 23 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 70 cm × 60 cm、底面径約 60 cm × 40 cm である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 18 cm ほどであり、断面形は壁が底面から軽く外傾する浅い皿形である。

埋土はともに黒褐色の 2 層であるが、土性はいずれもシルトである。色調はすべて黒褐色であり、異質の土粒や炭化物・焼土粒が混入する。人為的に埋め戻された可能性が高い。

[遺物] (第 323 図、写真図版 496)

埋土内から土師器 2 点が出土している。

土師器 (第 323 図、写真図版 496)

坏が 2 点の出土である。

坏 (3414 ~ 3415) - ロクロ使用成形されたほぼ完形と体部から底部を残す 2 点が出土している。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整とヘラナデ再調整される個体があり、体部の外面は両者とも再調整されないが、内面はミガキ調整される個体と無調整の個体がある。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁部が内湾気味となつて端部が直立気味となる器形である。大きさは、口縁部径が 14 cm、底部径は 5.2 cm であり、比率は 2.69 である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

64 CVId 11 土坑

〔遺構〕(第 303 図、写真図版 220)

調査範囲の西端から東に約 566 m の CVI 区中央やや西部よりに位置し、BVIp 21 土坑は北東に約 70 m の距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 90 cm × 60 cm、底面径約 85 cm × 55 cm である。平面形は検出面、底面とも隅丸の長方形である。深さは約 15 cm ほどであり、断面形は壁が底面から軽く外傾する浅い皿形である。

埋土は 3 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。色調は黒色を主体に黒褐色があり、異質の土粒や炭化物・焼土粒が混入する。レンズ状堆積の様相ではあるが、埋土の特徴から人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

65 CVIf 11 土坑

〔遺構〕(第 303 図、写真図版 220)

調査範囲の西端から東に約 565 m の CVI 区中央やや西部よりに位置し、CVIf 11 土坑は南に約 7 m の距離がある。CVId 10 溝跡と重複するが、当遺構の方が古い。

規模は、検出面の開口部が径約 1.9 m × 1.2 m、底面径約 1.7 m × 1 m である。平面形は検出面、底面とも隅丸の長方形である。深さは約 20 cm ほどであり、断面形は壁が底面から軽く外傾する浅い皿形である。

埋土は 6 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。異質の土粒や炭化物・焼土粒が混入する。レンズ状堆積の様相ではあるが、埋土の特徴から人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔遺物〕(第 323 図、写真図版 496)

土師器 1 点と須恵器 2 点の合わせて 3 点の出土である。

土師器 (第 323 図、写真図版 496)

甕が 1 点出土している。

甕 (3416) - ロクロ使用成形された体部の小破片が 1 点の出土である。外面はケズリ、内面

がナデの調整である。

須恵器（第 323 図、写真図版 496）

甕の破片が 2 点出土している。

甕（3417～3418）一体部と底部の破片である。詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

69 BⅦp 21 土坑

〔遺構〕（第 303 図、写真図版 220）

調査範囲の西端から東に約 608 m の BⅦ区東端部よりに位置し、BⅦq 21 土坑-1 は南に重複して隣接している。新旧完形は当遺構の方が新しい。

規模は、検出面の開口部が径約 75 cm × 70 cm、底面径約 65 cm × 60 cm である。平面形は検出面、底面とも円形である。深さは約 5 cm ほどであり、断面形は壁が底面から軽く外傾する浅い皿形である。

埋土は 2 層に細分されるが、土性はいずれもシルトである。異質の土粒や炭化物・焼土粒が混入する。埋土の特徴から人為的に埋め戻された可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

67 BⅦq 21 土坑-1

〔遺構〕（第 304 図、写真図版 221）

調査範囲の西端から東に約 607 m の BⅦ区東端部よりに位置し、BⅦq 21 土坑-2 は北東に重複して隣接している。新旧完形は当遺構の方が古い。

規模は、検出面の開口部が径約 85 cm × 85 cm、底面径約 70 cm × 65 cm である。平面形は検出面、底面とも円形である。深さは約 10 cm ほどであり、断面形は壁が底面から軽く外傾する浅い皿形である。

埋土は黒褐色シルトの単層であるが、異質の土粒や炭化物・焼土粒が混入する。埋土の特徴から人為的に埋め戻された可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

68 BⅦq 21 土坑-2

〔遺構〕(第304図、写真図版218)

調査範囲の西端から東に約609mのBⅦ区東端部よりに位置し、BⅦr 4土坑は南東に重複して30mの距離がある。BⅦq 21土坑-1と重複するが、新旧完形は当遺構の方が古い。

規模は、検出面の開口部が径約65cm×65cm、底面径約50cm×35cmである。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約20cmほどであり、断面形は壁が底面から多く外傾する浅い掘り鉢形である。

埋土は黒褐色シルトの2層であるが、異質の土粒や炭化物・焼土粒が混入する。埋土の特徴から人為的に埋め戻された可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

69 BⅦr 4 土坑

〔遺構〕(第304図、写真図版220)

調査範囲の西端から東に約636mのBⅦ区西端部に位置し、BⅦr 5土坑は東に約6mの距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約1.3m×1.15m、底面径約80cm×60cmである。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約35cmほどであり、断面形は壁が底面から多く外傾する浅いボール形である。

埋土は全体が8層に細分されるが、土性はシルトと共通する。異質の土粒や礫・炭化物・焼土粒が混入し、全層が粘性を持つ。埋土の特徴から人為的に埋め戻された可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

70 BⅦr 5 土坑

〔遺構〕(第304図、写真図版221)

調査範囲の西端から東に約643mのBⅦ区西端部に位置し、AⅦy 12土坑は北東に約228m

の距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 40 cm × 30 cm、底面径約 20 cm × 15 cm である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 10 cm ほどであり、断面形は壁が底面から多く外傾する浅いボール形である。

埋土は黒色シルトの単層であるが、土性は炭化物層である。埋土の特徴から人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

④ AXIy 12 土坑

〔遺構〕(第 305 図、写真図版 221)

調査範囲の西端から東に約 871 m の AXI 区の中央部に位置し、AXIy 13 土坑-1 は東に約 1.5 m の距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 95 cm × 85 cm、底面径約 75 cm × 75 cm である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 55 cm ほどであり、断面形は壁が底面からほぼ直立気味に立つピーカー形である。

埋土は全体が 3 層に細分されるが、土性はシルトを主体に最下層の粘土質シルトである。一部の層に異質の土粒や炭化物の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

④ AXIy 13 土坑-1

〔遺構〕(第 305 図、写真図版 222)

調査範囲の西端から東に約 874 m の AXI 区の中央部に位置し、AXIy 13 土坑-2 は北東に約 3.5 m の距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 90 cm × 85 cm、底面径約 75 cm × 75 cm である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 40 cm ほどであり、断面形は壁が底面からほぼ直立気味に立つピーカー形である。

埋土は全体が2層に細分されるが、土性はシルトと最下層の粘土質シルトである。一部の層に異質の土粒や炭化物の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

例 AXIy 13 土坑-2

〔遺構〕(第305図、写真図版222)

調査範囲の西端から東に約876mのAXI区の中央部に位置し、BXIa 16土坑は東に約13mの距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約90cm×70cm、底面径約65cm×60cmである。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約30cmほどであり、断面形は壁が底面からほぼ直立気味に立つピーカー形である。

埋土は全体が5層に細分されるが、土性は上層のシルトと下層の粘土質シルトに分けられる。色調は褐色と暗褐色であり、一部の層に異質の土粒や炭化物の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第323図、写真図版497)

須恵器が1点出土している。

須恵器 (第323図、写真図版497)

大甕の口縁部破片である。

甕(3419)一ロクロ使用成形と推定される口縁部破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

例 BXIa 16 土坑

〔遺構〕(第305図、写真図版222)

調査範囲の西端から東に約888mのBXI区の中央部やや東よりに位置し、AXIy 18土坑は東に約6mの距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約95cm×95cm、底面径約75cm×65cmである。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約30cmほどであり、断面形は壁が底面からほぼ直立気味に立つピーカー形である。

埋土は全体が3層に細分されるが、土性はいずれもシルトと共通する。色調は褐色と暗褐色・黒褐色であり、一部の層に異質の土粒や炭化物の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXIy 18 土坑

[遺構] (第 306 図、写真図版 222)

調査範囲の西端から東に約 898 m の AXI 区の中央部やや東よりに位置し、AXIo 5 土坑は北東に約 62 m の距離がある。重複する遺構はなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 1.4 m × 95 cm、底面径約 1 m × 50 cm である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 20 cm ほどであり、断面形は壁が底面から大きく外傾して壁高のない凸レンズ状の浅い皿形である。

埋土は全体が2層に細分されるが、土性はシルトと細砂であり、色調は褐色と黒褐色で異質の土粒や小礫、炭化物と焼土の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXIo 5 土坑

[遺構] (第 306 図、写真図版 223)

調査範囲の西端から東に約 942 m の AXI 区の西端部よりに位置し、AXIo 7 土坑は東に約 7.5 m の距離がある。AXIn 3 方形周溝と重複するが、当遺構の方が古い。

規模は、検出面の開口部が径約 70 cm × 65 cm、底面径約 55 cm × 45 cm である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 35 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する箱形に近い形状である。

埋土は全体が2層に細分されるが、土性はシルトであり、色調は褐色と黒褐色で異質の土粒や焼土の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

[遺物]

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXI_o7土坑

〔遺構〕(第306図、写真図版223)

調査範囲の西端から東に約949mのAXI区西部よりに位置し、AXI_r16土坑-1は東に約39mの距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約85cm×80cm、底面径約60cm×60cmである。平面形は検出面、底面とも円形である。深さは約40cmほどであり、断面形は壁が底面から外傾する箱形に近いピーカー形である。

埋土は全黒褐色シルトの単層であり、異質の土粒や礫の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXI_r16土坑-1

〔遺構〕(第306図、写真図版223)

調査範囲の西端から東に約989mのAXI区ほぼ中央やや東よりに位置し、AXI_r16土坑-2は西に重複して隣接している。新旧関係は定かでない。

規模は、検出面の開口部が径約1.5m×90cm、底面径約1.35m×60cmである。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約10cmほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い皿形である。

埋土は調査中の手取から実測する前に完掘してしまい実測されていないが、黒褐色シルトの単層であり、異質の土粒や礫の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXIr 16 土坑-2

〔遺構〕(第 306 図、写真図版 223)

調査範囲の西端から東に約 988 m の AXI 区のほぼ中央やや東よりに位置し、AXIt 22 土坑は東に 25 m の距離がある。前土坑と重複するが、新旧関係は定かでない。

規模は、検出面の開口部が径約 80 cm × 55 cm、底面径約 30 cm × 20 cm である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 20 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い播り鉢形である。

埋土は調査中の不手際から実測する前に完掘してしまい実測されていないが、黒褐色シルトの単層であり、異質の土粒や礫の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXIt 22 土坑

〔遺構〕(第 307 図、写真図版 223)

調査範囲の西端から東に約 988 m の AXI 区のほぼ中央やや東よりに位置し、AXIy 32 土坑-1 は南東に 31 m の距離がある。AXIt 21 方形周溝と重複するが、当土坑の方が古い。

規模は、検出面の開口部が径約 2.4 m × 2.2 m、底面径約 1.9 m × 1.85 m である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 30 cm ほどであり、断面形は壁が底面から直立気味に軽く外傾する浅い箱形である。

埋土は全体が 2 層に細分されるが、土性はシルトと共通している。色調は黒褐色と暗褐色であり、一部に汚れた黄褐色シルトが混入している。堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXIy 3 土坑-1

〔遺構〕(第 307 図、写真図版 224)

調査範囲の西端から東に約 1034 m の AXI 区の西端部に位置し、AXIy 3 土坑-2 は東に 2 m

の距離がある。AXIy 3 住居跡と重複するが、当遺構の方が古い遺構である。

規模は、検出面の開口部が径約 2.6 m × 1.9 m、底面径約 2.1 m × 1.6 m である。平面形は検出面、底面とも楕円形である。深さは約 70 cm ほどであり、断面形は壁が底面からほぼ直立気味に軽く外傾する箱形である。

埋土は全体が 9 層に細分されるが、土性は最下層が粘土質である他は、いずれもシルトである。色調はほとんどが黒褐色でしめられ、異質の土粒や炭化物などの混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第 323 図、写真図版 473・497)

埋土内から土師器 4 点と須恵器 3 点の合わせて 7 点の出土である。

土師器 (第 323 図、写真図版 497)

坏 2 点と壺 1 点そして鉢 1 点の出土である。

坏 (3420・3421) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片が 2 点の出土である。外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される個体と再調整のない個体に細分される。底部から直線的や丸味をもって外傾する体部は口縁端部で軽く外反する器形らしい。

壺 (3426) - ロクロ使用成形された頸部から体部を残す破片である。内面はカキメ、外面はロクロ成形痕を明瞭に残す。

鉢 (3425) - ロクロ不使用と推定される口縁部から体部を残す破片である。外面はヘラケズリやヘラナデ調整され、内面はヘラナデである。

須恵器 (第 317 図、写真図版 493)

坏が 3 点の出土である。

坏 (3422～3424) - 完形を含む口縁部から底部を残す 3 点の出土である。ロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の内外面とも再調整はない。底部から直線的や丸味をもって外傾する体部は口縁端部が外反する器形である。大きさは口縁部径が 14.2 cm～14.1 cm、底部径が 6.8 cm～6 cm で、比率は 2.35～2.08 である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

同 AXIy 3 土坑-2

〔遺構〕(第 307 図、写真図版 224)

調査範囲の西端から東に約 1036 m の AXI 区の西端部に位置し、AXIy 4 土坑は北に 4 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 1.25 m × 1.1 m、底面径約 1 m × 1 m である。平面形は検出面・底面ともに隅丸の方形である。深さは約 30 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する

浅い箱形である。

埋土は暗褐色シルトの単層であり、異質の土粒の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXIy 4 土坑

[遺構] (第 307 図、写真図版 224)

調査範囲の西端から東に約 1037 m の AXI 区の西端部に位置し、AXIy 5 土坑は東に 7 m の距離がある。AXIx 3 掘立柱建物跡と重複するが、直接の重複関係がないため新旧関係は定かでない。

規模は、検出面の開口部が径約 1 m × 85 cm、底面径約 80 cm × 65 cm である。平面形は検出面・底面ともに隅丸の方形である。深さは約 20 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い皿形である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、異質の土粒の混入が観察される。土性と堆積状況から自然堆積で埋没したものと推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXIy 5 土坑

[遺構] (第 308 図、写真図版 224)

調査範囲の西端から東に約 1043 m の AXI 区の西端部に位置し、BXIa 11 土坑は東に 22 m の距離がある。AXIa 6 溝跡と重複するが、当土坑の方が古い遺構である。

規模は、検出面の開口部が径約 1.6 m × 1.6 m、底面径約 1.45 m × 1.45 m である。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 30 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い皿形である。

埋土は全体が 3 層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、異質の土粒の混入が観察される。堆積状況の観察から人為的に埋め戻した可能性が推定される。

[遺物]

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) BXIa 11 土坑

〔遺構〕(第 308 図、写真図版 225)

調査範囲の西端から東に約 1065 m の BXI 区の中央部に位置し、AXIv 12 土坑は北に 14 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 1 m × 85 cm、底面径約 90 cm × 70 cm である。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 25 cm ほどであり、断面形は壁が底面から大きく外傾し凸レンズ状の浅い皿形である。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、異質の土粒の混入が観察される。堆積状況の観察から人為的に埋め戻した可能性が推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

(例) AXIv 12 土坑

〔遺構〕(第 308 図、写真図版 225)

調査範囲の西端から東に約 1070 m の AXI 区の中央部に位置し、BXIa 13 土坑は南東に 15 m の距離がある。AXIv 10 住居跡と重複するが、当土坑の方が新しい遺構である。

規模は、検出面の開口部が径約 1.3 m × 1.1 m、底面径約 35 cm × 30 cm である。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 55 cm ほどであり、断面形は壁が底面から大きく外傾する振り鉢形皿形である。

埋土は全体が 3 層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色と暗褐色である。異質の土粒の混入が観察される。堆積状況の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

例 BXd 13 土坑

〔遺構〕(第 309 図、写真図版 225)

調査範囲の西端から東に約 1075 m の AXI 区の中央部に位置し、AXIv 16 土坑は南東に 19 m の距離がある。BXd 12 住居跡と重複するが、当土坑の方が新しい遺構である。

規模は、検出面の開口部が径約 2.85 m × 2.2 m、底面径約 2.5 m × 2 m である。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 15 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い皿形である。

埋土は全体が 3 層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、色調は黒褐色と黒色である。異質の土粒の混入が観察される。堆積状況の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第 323 図、写真図版 497)

須恵器が 4 点出土している。

須恵器 (第 323 図、写真図版 497)

環が 3 点と高台付き環 1 点の出土である。

環 (3427 ~ 3428) - 完形や口縁部から底部を残す 2 点を含むが、いずれもロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が概反する器形である。大きさは、口縁部径が 14.6 cm ~ 13.6 cm、底部径 7.8 cm ~ 6.6 cm で、比率は 2.06 ~ 1.87 である。

高台付き環 (3430) - ロクロ成形され、体部下位から底部を残す破片である。小破片のため詳細は定かでないが、底部が回転糸切り離された後高台部が貼り付けられている。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

例 AXIv 16 土坑

〔遺構〕(第 309 図、写真図版 225)

調査範囲の西端から東に約 1088 m の AXI 区の中央部やや東よりに位置し、BXd 16 土坑は南に 27 m の距離がある。他遺構との重複もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 85 cm × 80 cm、底面径約 60 cm × 60 cm である。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 25 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾するボール形である。

埋土は全体が 2 層に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、色調は黄褐色と黒色である。異質の土粒の混入が観察される。堆積状況の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

④ BXXd 16 土坑

〔遺構〕(第 309 図、写真図版 226)

調査範囲の西端から東に約 1087 m の BXX 区の中央部やや東よりに位置し、BXXc 18 土坑は北東に約 10 m の距離がある。Au 15 溝跡と重複するが、当土坑の方が古い遺構である。

規模は、検出面の開口部が径約 1.4 m × 1.3 m、底面径約 1.25 m × 1.15 m である。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 20 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い皿形である。

埋土は黒褐色シルトの単層であるが、異質の土粒の混入が観察される。堆積状況の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第 323 図、写真図版 497)

須恵器の坏が 2 点出土している。

須恵器 (第 323 図、写真図版 497)

坏が 2 点の出土である。

坏 (3431・3432) - ロクロ使用成形された口縁部破片である。内外面とも再調整はない。体部は外傾し口縁部が軽く外反する器形である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

④ BXXc 18 土坑

〔遺構〕(第 309 図、写真図版 226)

調査範囲の西端から東に約 1094 m の BXX 区の中央部やや東よりに位置し、BXXd 21 土坑は東に約 14 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 2.2 m × 1.1 m、底面径約 2 m × 95 cm である。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 20 cm ほどであり、断面形は壁が底面から外傾する浅い皿形である。

埋土は 2 層に細分されるが、土性はシルトと下層の粘土であり、色調は黒褐色と褐色に分けられ、異質の土粒の混入が観察される。堆積状況の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

例) BXIc 18 土坑

〔遺構〕(第 310 図、写真図版 221)

調査範囲の西端から東に約 1106 m の BXI 区の東よりに位置し、BXIc 2 土坑は北東に約 26 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

規模は、検出面の開口部が径約 4 m × 1 m、底面径約 3.7 m × 80 cm である。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 5 cm ほどの痕跡程度であり、断面形は壁が底面から大きく外傾する浅い皿形である。

埋土は 3 層に細分されるが、土性はシルトと下層の粘土であり、色調は黒褐色と褐色・極暗褐色に分けられ、異質の土粒や炭化物粒の混入が観察される。堆積状況の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

例) BXIc 2 土坑

〔遺構〕(第 310 図、写真図版 223)

調査範囲の西端から東に約 1131 m の BXI 区の西端部に位置し、BXIc 2 掘立柱建物跡と重複するが、直接的な重複ではないため、新旧関係は定かでない。

規模は、検出面の開口部が径約 1.2 m × 1 m、底面径約 1.1 m × 90 cm である。平面形は検出面・底面とも楕円形である。深さは約 5 cm ほどの痕跡程度であり、断面形は壁が底面から大きく外傾する浅い皿形である。

埋土は 2 層に細分されるが、土性はシルトであり、色調は黒褐色と黄橙色に分けられ、異質の土粒や炭化物粒の混入が観察される。堆積状況の観察から自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の特徴や堆積状況から平安時代の遺構と推定される。

5. 井戸跡

当遺跡の調査で検出された井戸跡は2基のみである。位置しては住居跡が密集する西端部と東端部よりの住居跡のあまり密集しない地点である。当遺跡付近は、冒頭でも記述したように、北側の段丘崖には多くの湧水が確認されていることにより、あまり井戸は必要なかったのかも知れない。

(1) DIw 23 井戸跡

〔遺構〕(第311図、写真図版226)

調査範囲の西端から約17m東によったDI区の東端部に位置し、AXIu 22井戸跡とは995mの距離がある。DIx 23溝跡と重複するが、当井戸跡の方が古い遺構である。

開口部径3.4m×3.4m、底部径50cm×40cmの規模があり、平面形は円形である。深さは約2mであり、断面形は壁面がやや不規則ではあるが楕円形である。

埋土は全体が11層に細分されるが、土性は上層はシルトと砂質シルトであり、下層は粘土質シルトとシルトである。色調には黒褐色・暗褐色・灰白色などがあり、互層をなす堆積が多い。また、灰白色をなす層は十和田a降下火山灰の層である。いずれの層にも異質な土粒や礫、炭化物粒や粘土塊などが混入する他、下層には水酸化鉄の集積層も観察される。堆積状況から自然堆積によって埋没したものと考えられる。

〔遺物〕(第324・325図、写真図版498・499)

埋土内から土師器が7点、須恵器が13点の合わせて20点の出土である。

土師器(第324図、写真図版498)

坏のみが7点の出土である。

坏(3433～3439) - 7点には完形は含まずすべて口縁部から体部か体部下位から底部を残す破片での出土である。いずれもロクロ使用成形されるが、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整と再調整がある。体部の外面は、底部付近が一部再調整される他はロクロ成形痕のみであるが、内面はミガキ後黒色処理される個体を主に無処理の個体を含む。器形など詳細は定かでない。

須恵器(第324・325図、写真図版498・499)

坏1点、壺11点、瓶1点の合わせて13点の出土である。

坏(3440) - ロクロ使用成形された体部下位から底部を残す破片である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の内外面とも再調整はない。

壺(3441～3445・3447～3452) - 11点の出土であるが、完形は含まず口縁部2点、体部

下位から底部が2点、頸部から肩部1点の他は体部破片である。壺には体部に叩き具痕を付す所謂大壺(3445・3447・3448・3449)と器表がヘラケズリ調整される一般的な壺(3441・3442・3450～3452)がある。大壺は外面が並行叩き具痕、内面が無文か並行や放射状の当て具痕を付す。

瓶(3446)一肩部の破片である。頸部の基部に突帯のない製品であり、内外面にロクロ成形痕のみを明瞭に残す。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土に火山灰が堆積するなどから平安時代の9世紀代に位置付けられる可能性が強い。

(2) AXIu 22 井戸跡

〔遺構〕(第312図、写真図版226)

調査範囲の西端から約1012m東によったAXIu区の東端部に位置し、AXIu 21周溝遺構と重複するが、当井戸跡の方が古い遺構である。

開口部径2.85m×2.6m、底部径95cm×1.1mの規模があり、平面形は楕円形である。深さは約1.5mであり、断面形は壁面がやや不規則ではあるが掘り鉢形である。

埋土は、実測図を作成する前に下位の部分が崩落してしまったことにより、一部の作図であるが、土性はシルトで5層に細分され、色調には黒褐色を主体に褐色・黒色があり、また十和田a降下火山灰を混在する。いずれの層にも異質な土粒や礫、炭化物粒などが混入する。堆積状況から自然堆積によって埋没したものと考えられる。

〔遺物〕(第325図、写真図版499)

埋土内から土師器が2点、須恵器が2点の合わせて4点の出土である。

土師器(第325図、写真図版499)

坏1点と高台付き坏1点の2点が出土である。

坏(3453)一口縁部から体部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され、体部の内外面はとも再調整はなくロクロ成形痕のみである。器形など詳細は定かでない。

高台付き坏(3454)一完形である。ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整された後高台が貼り付けられている。体部・高台部ともロクロ成形痕以外の再調整はない。底部から直線的に外傾する体部は口縁端部が外反する器形をなし、高台部は全体が「ハ」字状に踏ん張り、畳付けは肥厚し角張る。

須恵器(第325図、写真図版499)

壺2点の出土である。

壺(3455・3456)一2点の出土であるがいずれも体部破片である。体部に並行叩き具痕を付

し内面が無文と並行当て具痕を付す大壘である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土に火山灰が堆積するなどから平安時代の9世紀代に位置付けられる可能性が強い。

6. 炭焼窯

当遺跡で炭焼窯としたのは、全体形は土坑状であるが、壁面や底面が焼成を受けた痕跡が明瞭に観察される土坑のみを充てたが、検出された地点が全体8基の内6基までが東端部での検出である、という特徴が見られる。以下では炭焼窯ではなく、炭窯と略称して記載する。

(1) DⅡs8 炭窯

〔遺構〕(第313図、写真図版227)

調査範囲の西端から約53m東によったDⅡ区の中央やや西よりに位置し、EⅢd14炭窯は東に約125mの距離がある。当遺構はDⅡs7住居跡-2の埋土内に構築されており、新旧関係では当遺構の方が新しい遺構である。

開口部径約1.2m×90cm、底部径約1m×70cmの規模があり、平面形はやや突辺気味であるがやや隅丸の長方形である。深さは約65cmであり、断面形は壁が底面から軽く外傾した箱形に近い形状である。壁と底面の一部が焼成を受けて赤変している。

埋土は全体が3層に細分されているもののほとんどは1層で占められる。土性は黒褐色のシルトと共通し、異質の土粒や炭化物・焼土などが混入している。また、十和田a降下火山灰と考えられる白色の火山灰も混在する。埋土が単層であるなど、自然堆積とは考えられない堆積であることから、人為的に埋め戻したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

火山灰の堆積から平安時代の9世紀代の遺構である可能性が強い。

(2) EⅢd14 炭窯

〔遺構〕(第313図、写真図版227)

調査範囲の西端から約178m東によったEⅢ区の中央部に位置し、BⅡj18炭窯は東に約445mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約1.5m×1.4m、底部径約1m×1mの規模があり、平面形は一部がやや突辺気味でやや不整な隅丸の方形である。深さは約45cmであり、断面形は壁が底面から外傾したやや深

い皿形に近い形状である。壁と底面の一部が焼成を受けて赤変している。

埋土は全体が3層に細分されているが、土性は黒褐色のシルトと最下層の炭化物であり、異質の土粒や礫・炭化物・焼土などが混入している。また、十和田 a 降下火山灰と考えられる白色の火山灰も混在する。埋土の堆積状況から自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

火山灰の堆積から平安時代の9世紀代の遺構である可能性が強い。

(3) BⅧj 18 炭窯

〔遺構〕(第313図、写真図版227)

調査範囲の西端から約692m東によったBⅧ区の中央部やや東よりに位置し、AⅨx 8炭窯は東に約363mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約1.8m×1.1m、底部径約1.6m×65cmの規模があり、平面形は一部がやや突辺気味でやや不整な隅丸の方形気味である。深さは最深部で約30cmであり、断面形は壁が底面から外傾した皿形に近い形状であるが、底部の深さが浅い部分と深い部分がある2段底である。壁と底面の一部が焼成を受けて赤変している。

埋土は全体が8層に細分されているが、土性はシルトと共通しており、異質の土粒や礫・炭化物・焼土などが多量に混入している。また、十和田 a 降下火山灰と考えられる白色の火山灰も混在する。埋土の土性からは人為的な埋め戻しを連想させるが、堆積状況から自然堆積で埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

火山灰の堆積から平安時代の9世紀代の遺構である可能性が強い。

(4) AⅨx 8 炭窯

〔遺構〕(第313図、写真図版227)

調査範囲の西端から約1055m東によったAⅨ区の中央部やや西よりに位置し、AⅨx 10炭窯は東に約12mの距離がある。AⅨ溝跡と重複しているが、当遺構の方が古い遺構である。

開口部径約1.5m×40cm以上、底部径約1.3m×30cm以上の規模と推定されるが、全体の約50%以上が削平されているものと考えられる。平面形は一部がやや突辺気味で隅丸の方形気味であろうと推定される。深さは最深部で約20cmであり、断面形は壁が底面から外傾した皿形に

近い形状である。壁と底面の一部が焼成を受けて赤変している。

埋土は全体が黒褐色シルトの単層で占められ、異質の土粒や炭化物・焼土塊などが多量に混入している。埋土の土性からは人為的な埋め戻しを連想させる。

〔遺物〕(第 326 図、写真図版 499)

土師器が 3 点と須恵器が 2 点の合わせて 5 点の出土である。

土師器(第 326 図、写真図版 499)

坏が 3 点出土している。

坏(3457・3458・3461) - 完形はなく口縁部から体部と体部から底部を残す破片である。いずれもロクロ使用成形され、底部の切り離しはヘラナデ再調整によって不明である。体部外面は 3461 のみがヘラケズリ再調整であるが他の個体は無調整である。内面はミガキ後黒色処理される個体と無処理の個体が含まれる。器形は定かでない。

須恵器(第 326 図、写真図版 499)

坏が 2 点の出土である。

坏(3459・3460) - 完形を 1 点と体部下位から底部を残す破片の出土である。ロクロ使用成形であるが、底部の切り離しには回転糸切り離し無調整と回転篋切り無調整がある。体部は内外面とも再調整はないが、完形には重ね焼きによる火傷がある。底部から丸味をもって外傾する体部は口縁端部が直線的に外傾する器形である。大きさは口縁部径 13.2 cm、底部径 6.6 cm で比率は 2 である。

〔遺構の時期〕

出土遺物や他遺構の比較から平安時代の遺構と推定される。

(5) AXIx 10 炭窯

〔遺構〕(第 314 図、写真図版 228)

調査範囲の西端から約 1061 m 東によった AXI 区の中央部やや西よりに位置し、AXIy 11 炭窯は南東に約 8 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約 1.5 m × 1.1 m、底部径約 1 m × 75 cm の規模があり、平面形は一部がやや突辺気味の隅丸長方形気味である。深さは最深部で約 45 cm であり、断面形は壁が底面から大きく外傾したボール形に近い皿形である。壁と底面の一部が強い焼成を受けて赤変している。

埋土は全体が 3 層に細分されるが、土性はシルトを主体に一部に粘土を含む。色調は黒褐色・黒色・褐色と層によって異なる様相を示すが、埋土の大半を 1 層が占めている。異質の土粒や炭化物・焼土塊などが多量に混入している。埋土の土性からは人為的な埋め戻しを連想させる。

〔遺物〕(第 326 図、写真図版 499)

土師器が1点の出土である。

土師器 (第326図、写真図版499)

坏が1点出土している。

坏(3462) - 完形はなく口縁部から体部を残す破片である。ロクロ使用成形され、体部外面は無調整である。内面はミガキ後黒色処理される。器形は定かでない。

[遺構の時期]

出土遺物や他遺構との比較から平安時代の遺構と推定される。

(6) AXIy 11 炭窯

[遺構] (第314図、写真図版228)

調査範囲の西端から約1066m東によったAXI区の中央部やや西よりに位置し、AXIy 12炭窯は東に約7mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約1.3m×75cm、底部径約1m×50cmの規模があり、平面形は一部がやや突辺気味の隅丸長方形である。深さは最深部で約40cmであり、断面形は壁が底面から軽く外傾した箱形である。壁と底面の一部が強い焼成を受けて赤変している。

埋土は全体が4層に細分されるが、土性はシルトを主体に一部に粘土を含む。色調は黒褐色・黒色・褐色であるが、大半は1・2層の黒褐色シルトが占め、4層は炭化物層である。異質の土粒や炭化物・焼土塊などが多量に混入している。埋土の土性からは人為的な埋め戻しを連想させる。

[遺物] (第326図、写真図版499)

土師器が2点の出土である。

土師器 (第326図、写真図版499)

甕が2点出土している。

甕(3463・3464) - 完形はなく頸部から体部の一部を残す小破片である。ロクロ不使用成形され、体部外面がハケメ状のナデ肌、内面がナデ地養成される。詳細は不明である。

[遺構の時期]

出土遺物や他遺構との比較から平安時代の遺構と推定される。

(7) AXIy 12 炭窯

[遺構] (第314図、写真図版228)

調査範囲の西端から約1072m東によったAXI区の中央部に位置し、BXIb 16炭窯は東南東に約20mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約1.1m×60cm、底部径約95cm×45cmの規模があり、平面形は一部がやや突辺気

味の楕円形的である。深さは最深部で約 30 cm であり、断面形は壁が底面から軽く外傾した箱形である。壁と底面の一部が強い焼成を受けて赤変している。

埋土は全体が 3 層に細分されるが、土性はシルトと共通している。色調はいずれも黒褐色であるが、大半を 2・3 層が占める。異質の土粒や炭化物・焼土塊などが多量に混入している。埋土の土性や堆積状況からは人為的な埋め戻しを連想させる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

他遺構との比較や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(8) BXIb 16 炭窯

〔遺構〕(第 314 図、写真図版 228)

調査範囲の西端から約 1090 m 東によった AXI 区の中央部やや東に位置する。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約 1.4 m × 1.35 m、底部径約 1.3 m × 1.2 m の規模があり、平面形は一部がやや突辺気味で隅丸の略方形的である。深さは最深部で約 35 cm であり、断面形は壁が底面から軽く外傾した箱形である。壁と底面の一部が強い焼成を受けて赤変している。

埋土は全体が 4 層に細分されるが、土性はシルトと共通している。色調は上位 2 層が極暗褐色で最下層が暗褐色であり、4 層は炭化物の堆積層である。埋土の大半を 1・2 層が占める。異質の土粒や炭化物・焼土塊などが多量に混入している。埋土の土性や堆積状況からは人為的な埋め戻しを連想させる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

他遺構との比較や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

7. 土墳墓

当遺跡の発掘調査で土墳墓とした遺構は全体で 17 基検出されているが、そのほとんどは古墳時代に属する遺構であり、平安時代に位置付けられる遺構は 4 基のみである。

所属時期を明瞭に分けたのは、出土遺物の時期によった場合がもっとも多いが、一部は埋土の特徴を他遺構と比較して結論を得た場合もある。

(1) BⅧk 17 土墳墓

〔遺構〕 (第 315 図、写真図版 61)

調査範囲の西端から約 689 m 東によつた BⅧ区の中央部東よりに位置し、AXIq 7 土墳墓は東に約 163 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約 1.25 m × 70 cm、底部径約 1.15 m × 60 cm の規模があり、平面形はやや突辺気味で隅丸の略長方形的である。深さは最深部で約 15 cm であり、断面形は壁が底面から軽く外傾した浅い箱形である。

埋土は全体が 2 層に細分されるが、土性はシルトと共通している。色調は褐色と黒褐色であり、異質の土粒が僅かに混入する。埋土の土性や堆積状況からは人為的な埋め戻しを連想させる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

他遺構との比較や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(2) AXIq 7 土墳墓

〔遺構〕 (第 315 図)

調査範囲の西端から約 852 m 東によつた AXI 区の中央部西よりに位置し、AXIy 4 土墳墓は東に約 187 m の距離がある。当遺構は AXIq 7 住居跡の埋土内に掘られていることにより、新旧関係は当遺構の方が新しい。また、さらに当遺構を新しい擾乱による土坑が擾乱していることにより、南端部の様相は定かでない。

南端部が擾乱を受けていることにより断定はできないが、開口部径約 1.8 m 前後 × 70 cm、底部径約 1.60 m 前後 × 50 cm の規模があり、平面形は楕円形的であるが、内壁沿いに径約 20 cm 前後の河川礫を 10 数個配列させる特徴がある。深さは重複する住居跡の床面から最深部で約 10 cm であるが、当初は 30 cm 以上の深さがあつたものと推定される。断面形は壁が底面から軽く外傾した浅い箱形である。

埋土は全体が 2 層に細分されるが、土性はシルトと共通している。色調は褐色と暗褐色であり、異質の土粒が僅かに混入する。埋土の土性や堆積状況からは人為的な埋め戻しを連想させる。

〔遺物〕 (第 326 図、写真図版 500)

底面から土師器が 1 点出土している。

土師器 (第 326 図、写真図版 500)

環が 1 点の出土である。

坏 (3465) - ロクロ使用成形され、底部の切り離しが回転糸切り離し無調整の完形が出土している。体部の内外面とも再調整はない。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が外反する器形をなし、比較的底径が大きく浅い特徴がある。大きさは口縁部径が 13 cm、底部径は 6.2 cm であり、比率は 2.09 である。

〔遺構の時期〕

出土遺物の他、重複関係や埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(3) AXIy 4 土墳墓

〔遺構〕 (第 315 図、写真図版 61)

調査範囲の西端から約 1038 m 東によった AXI 区の西部に位置し、AXIy 6 土墳墓は東に約 6.5 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約 1.5 m × 75 cm、底部径約 1.35 m × 65 cm の規模があり、平面形は隅丸の長方形である。実測図では東側と南側に大きく広がる部分があるものの、実際は浅いグラグラとした掘り込みであり、土坑本来のものではない。深さは最深部で約 40 cm であり、断面形は壁が底面からほぼ直立する箱形である。

埋土は全体が 3 層に細分されるが、土性はシルトと共通している。色調はいずれも黒褐色であり異質の土粒の他、焼土や炭化物粒も僅かに混入する。埋土の土性や堆積状況からは人為的な埋め戻しを連想させる。

〔遺物〕 (第 326 図、写真図版 535)

埋土内から土師器 1 点と鉄製品 1 点が出土している。

土師器 (第 326 図)

坏が 1 点の出土である。

坏 (3466) - 体部から底部を残す破片であるが、ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整の個体であり、体部は内外面とも再調整がない。底部から体部が直線的に外傾する器形をなすらしい。

鉄製品 (第 326 図、写真図版 535)

刀子か鎌の茎かと推定される鉄製品が 1 点出土している。

刀子か鎌の茎 (69) - 残存全長 10 cm、最大幅 4 mm、厚さ 2 mm の大きさがあり、下端に向かって次第に先細りとなる。この形が完形品とは考えられないので刀子か鎌の茎かと推定される。

〔遺構の時期〕

出土遺物の他、埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(4) AXIy 6 土墳墓

[遺構] (第 315 図、写真図版 61)

調査範囲の西端から約 1045 m 東によった AXI 区の西部に位置する。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約 2.7 m × 85 cm、底部径約 1.5 m × 60 cm の規模があり、平面形は隅丸の長楕円形である。深さは最深部で約 20 cm あり、断面形は壁が底面から軽く外傾する浅い皿形である。

埋土は全体が 2 層に細分されるが、土性はシルトと粘土である。色調は黒褐色と暗褐色であり異質の土粒の他、炭化物粒を僅かに混入する。埋土の土性や堆積状況からは人為的な埋め戻しを連想させる。

[遺物] (第 326 図、写真図版 528)

石製品が 2 点出土している。

石製品 (第 326 図、写真図版 528)

砥石が 2 点の出土である。

砥石 (109・110) - 奥羽山系新第三系中新統産の斜長石流紋岩を素材とした砥石である。2 点とも非常に良く使用されており、ともに 4 面に使用面を持つ。109 は長さ 7 cm 強、幅 5.8 cm、最大厚約 1 cm の大きさがあり、下端に自然面を持つことから河川の転石を利用したものと推定される。110 は、全長 17 cm 強、幅 2.5 cm、厚さ 2 cm の大きさで、天地両端が自然面である。

[遺構の時期]

出土遺物の他、埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

8. 甕 棺

当遺跡の発掘調査では当該遺構が 3 ヶ所で検出されている。それは、住居跡が密集する範囲に構築されている。当種以降は一般的に合わせ口甕棺と呼称される場合が多いが、当遺跡の例では口縁部を合わせた所謂合わせ口は例がなく、口縁部に底部を欠いた体部下位を入子状にした遺構であることから、正確的には同様と考えられるが合わせ口としないで、ただ単に甕棺と呼称した。

(1) DIVq 10 甕棺

[遺構] (第 316 図、写真図版 229)

調査範囲の西端から約 262 m 東によった DIV 区の中央やや西部に位置する。BVIr 6 甕棺は北東に約 385 m の距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約 65 cm 強 × 35 cm 弱で検出面から約 10 cm の深さがあり、断面形が半円状をなす掘り込みの中に、土師器甕を 3 点横転させて埋納した遺構であるが、検出時には土圧で押しつぶ

された状態で検出された。

土師器の甕は、もっとも北に位置する個体には底部がそのまま付属しているが、その他の2点は底部を除去し、体部の下端を前述した個体の口縁部に若干差し込むような状態で置かれている。実際に接続しているのは2点であり、残る1点は上面に蓋をするように重ね合わせている。内部には特に副葬されたと言えるような遺物は検出されていないが、甕の内部や周辺の土は黒褐色や暗褐色に変色しており、何らかの有機質による影響があったことは明らかである。

〔遺物〕(第327図、写真図版500)

土師器が3点出土している。

土師器(第327図、写真図版500)

甕が3点の出土である。

甕(3467～3469)－いずれもロクロ使用成形された大型の個体である。3469のみが底部を残して器高34.1cm、口縁部径21.3cmの大きさがある。その他の個体は明確な大きさは不明であるが、口縁部径から見て器高が30cm前後と推定される。体部の外面は、上位がロクロナデ、下位がヘラケズリ調整され、内面はロクロナデかヘラナデ調整である。体部の器形は軽く膨らむものと軽く外傾するものの2型があるものの、口縁部は頸部から外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となる。

〔遺構の時期〕

出土遺物の他、埋土の状況から平安時代の9世紀後半代～10世紀前半代の遺構と推定される。

(2) BⅧr6 甕棺

〔遺構〕(第316図、写真図版229)

調査範囲の西端から約647m東によったBⅧ区西部に位置する。BⅧt12甕棺は南東に約26mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約85cm強×45cmで検出面から約15cm弱の深さがあり、断面形が箱形をなす掘り込みの中に、土師器甕を2点横転させて埋納した遺構であるが、検出時には土圧で押しつぶされた状態で検出された。

土師器の甕は、南に位置する個体には底部が若干残存しているが、その他の個体は口縁部から体部のみを残して底部を除去した個体であるが、体部の下端を前述した個体の口縁部に若干差し込むような状態で置かれている。内部には特に副葬されたと言えるような遺物は検出されていないが、甕の内部や周辺の土は黒褐色や暗褐色に変色しており、何らかの有機質による影響があったことは明らかである。

〔遺物〕(第328図、写真図版500)

土師器が2点出土している。

土師器（第328図、写真図版500）

壺が2点の出土である。

壺（3470・3471）—いずれもロクロ使用成形された大型の個体である。3470のみが底部を残して器高33.4cm、口縁部径22.6cmの大きさがある。他の個体は明確な大きさは不明であるが、口縁部径から見て器高が30cm前後と推定される。体部の外面は、上位がロクロナデと一部が並行叩き具痕、下位がヘラケズリ調整され、内面はヘラナデ調整である。体部の器形は軽く膨らむものと軽く外傾するものの2型があるものの、口縁部は頸部から外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となる。

〔遺構の時期〕

出土遺物の他、埋土の状況から平安時代の9世紀前半代～9世紀後半代の遺構と推定される。

(3) BⅧt12 壺棺

〔遺構〕（第316図、写真図版229）

調査範囲の西端から約672m東によったBⅧ区の中央部に位置する。重複する遺構もなく単独で検出された。

開口部径約85cm強×45cmで検出面から約15cm弱の深さがあり、断面形が箱形に近い形をなす掘り込みの中に、土師器壺を3点横転させて埋納した遺構であるが、検出時には土圧で押しつぶされた状態で検出された。また、検出された土師器の配置関係をみると破片がただ単に敷き詰められた状態で蓋状に重ね合わせたような状態であったことから、当初は3個体の組み合わせとは判断できなかった。

土師器の壺は、底部を残す個体が2点であるが、底部破片と同様に使用していたが、残る1点は口縁部から体部のみを残して底部を除去した個体である。これらの破片を土坑の底面に敷いてその上に何かをおいた後別の破片で覆いをした状態と判断された。内部から鉄製品が2点出土しているが、副葬された遺物であるかは定かでない。壺の内部や周辺の土は黒褐色や暗褐色に変色しており、何らかの有機質による影響があったことは明らかである。

〔遺物〕（第329・330図、写真図版500）

土師器が3点と鉄製品が2点出土している。

土師器（第329・330図、写真図版500）

壺が3点の出土である。

壺（3472～3474）—いずれもロクロ使用成形された大型の個体である。3472・3473が底部を残して器高30cm以上、口縁部径23cm以上の大きさがある。他の個体は明確な大きさは不明

であるが、口縁部径から見て器高が30 cm前後と推定される。体部の外面は、上位がロクロナデ、下位がヘラケズリ調整され、内面はヘラナデ調整である。体部の器形は軽く膨らむものと軽く外傾するものの2型があるものの、口縁部は頸部から外反して端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に挽き出されて受け口状となる。

鉄製品（第330図、写真図版535）

釘1点と鉄滓が1点出土している。

釘（70 a）—全長7 cmで断面が径2 mmの方形をなし、次第に先細りとなる形状である。

鉄滓（70 b）—径1.5 cmほどの大きさがある楕円形の鉄滓である。

〔遺構の時期〕

出土遺物の他、埋土の状況から平安時代の9世紀後半代～10世紀前半代の遺構と推定される。

9. 火葬墓

当遺跡の発掘調査ではある特定の地点からのみ焼骨が検出されている。それは、調査範囲の中では東部に位置するAXII区である。この地点からは方形周溝遺構が多く検出されているが、その方形周溝遺構の範囲からの検出がもっとも多い特徴がある。このことは、この火葬墓と方形周溝遺構が一体となる遺構である可能性も推定させるが、確たる状況証拠に乏しいため独立した遺構として記述することとする。

(1) AXIq 2 火葬墓-1

〔遺構〕（第317図、写真図版230）

調査範囲の西端から約931 m東によったAXII区の西端部よりに位置し、AXIq 2 火葬墓-2は北側に接している。AXIq 2 方形周溝遺構の範囲内に位置するが、因果関係は定かでない。

長軸約78 cm、短軸約45 cmの長円形状に広がる焼骨片が散在する木炭層として検出された。掘り上げた後の墓壇は、深さが約4 cmの断面が浅い皿状をなす土坑である。

埋土は、黒褐色シルトが若干混じった木炭層であり、一部をのぞきほとんど木炭の純層といってもよい状況である。焼骨の混在する量はそれほど多くはない。木炭自体は最長で3～2 cmであり、炭粉状がもっとも多い。樹種は同定していないので明確でない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

検出された層位から平安時代の遺構と考えている。

(2) AXIq 2 火葬墓-2

〔遺構〕(第 317 図、写真図版 230)

調査範囲の西端から約 931 m 東によった AXI 区の西端部よりに位置し、AXIq 2 火葬墓-3 は北東に約 1.5 m の距離がある。AXIq 2 方形周溝遺構の範囲内に位置するが、因果関係は定かでない。

長軸約 30 cm、単軸約 26 cm の楕円形状に広がる焼骨片が散在する木炭層として検出された。掘り上げた後の墓墳は、深さが約 4 cm の断面が凸レンズ状の浅い皿形をなす土坑である。

埋土は、木炭層に黒褐色シルトが若干混じった状態であるが、ほとんど木炭の純層といってもよい状況である。焼骨の混在する量はそれほど多くはないが、径 3 cm ほどの骨片も若干混じっている他は、細片である。木炭自体は最長で 3~2 cm であり、炭粉状がもっとも多い。樹種は同定していないので明確でない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

検出された層位から平安時代の遺構と考えている。

(3) AXIq 2 火葬墓-3

〔遺構〕(第 317 図、写真図版 230)

調査範囲の西端から約 933 m 東によった AXI 区の西端部よりに位置し、AXIr 2 火葬墓は南西に約 4 m の距離がある。AXIq 2 方形周溝遺構の範囲内に位置するが、因果関係は定かでない。

長軸約 65 cm、単軸約 50 cm の楕円形状に広がる焼骨片が散在する木炭層として検出された。掘り上げた後の墓墳は、深さが約 7 cm の断面が凸レンズ状を示す浅い皿形の土坑である。

埋土は、木炭層に黒褐色シルトがほぼ等量混じった混土炭化物層に近い状態である。焼骨の混在量は比較的多量でそれほど多くはないが、径 3 cm ほどの骨片も若干混じっている他は、細片である。木炭自体は最長で 3~2 cm であり、炭粉状がもっとも多い。樹種は同定していないので明確でない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

検出された層位から平安時代の遺構と考えている。

(4) AXIr2 火葬墓

〔遺構〕(第317図、写真図版230)

調査範囲の西端から約930m東によったAXI区の西端部に位置し、AXIr4火葬墓は東に約9mの距離がある。AXIq2方形周溝遺構の範囲内に位置するが、因果関係は定かでない。長軸約75cm、単軸約50cmの楕円形状に広がる焼骨片が散在する木炭層として検出された。掘り上げた後の墓墳は、特に土坑状の窪みとなることなく全体が土層内に薄く挟在する間層的に形であり、検出方法に問題があった可能性も考えられるが、元々墓墳が土坑状に掘られた形では無かった物と推定される。

埋土は、炭粉状のなす木炭層に黒褐色シルトが混じった混土炭化物層に近い状態である。焼骨の混在する量も少なく、さらに焼骨は小細片が多く径1cmを超えるものは皆無である。木炭は最大で1cmと全体として細かく、既述のように炭粉状がもっとも多い。樹種は同定していないので明確でない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

検出された層位から平安時代の遺構と考えている。

(5) AXIr4 火葬墓

〔遺構〕(第318図、写真図版230)

調査範囲の西端から約939m東によったAXI区の西端部に位置し、AXIr8火葬墓は東に約16mの距離がある。AXIr6方形周溝遺構の周溝内に位置しており、周溝遺構よりは新しい遺構であることは明確であるが、因果関係は定かでない。

長軸約85cm、単軸約60cmの楕円形状に広がる焼骨片が散在する木炭層とシルト層として検出された。掘り上げた後の墓墳は、炭化物層は全体が土層内に薄く挟在する間層的に形であり、特に土坑状の窪みとなることはないが、小骨の混在するシルト層は底面に起伏を持つ深さ10cmほどの掘り込みを持つことから、墓墳が僅かな深さを持つ土坑状に掘られた形と推定される。

埋土は、炭粉状をなす木炭層に黒褐色シルトが混じった混土炭化物層に近い状態である。焼骨は細片が主で混在量も少なく、焼骨は小細片で径1cmを超えるものはない。木炭は最大で径1cmと全体として細かく、炭粉状がもっとも多い。樹種は同定していないので明確でない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

検出された層位から平安時代の遺構と考えている。

(6) AXIr 8 火葬墓

〔遺構〕(第 318 図、写真図版 231)

調査範囲の西端から約 954 m 東によった AXI 区の中央やや西よりに位置し、AXIr 16 火葬墓は東に約 34 m の距離がある。AXIq 8 方形周溝遺構の周溝内に位置しており、周溝遺構より新しい遺構であることは明確であるが、因果関係は定かでない。

長軸約 50 cm、単軸約 45 cm の略三角形に広がる焼骨片が混在する木炭層として検出された。掘り上げた後の墓墳は、炭化物層が深さ 8 cm ほどで断面が略凸レンズ状の土坑内に堆積する様相を示し、墓墳が僅かな深さを持つ土坑状に掘られたものと推定される。

埋土は、骨片が混在する木炭層に近い状態である。木炭は最大で径 1 cm と全体として細かく、炭粉状がもっとも多い。樹種は同定していないので明確でない。焼骨は細片が主であるが、混在量は比較的多く、大きさも径 1 cm を超えるものが多くみられたが、関節などの部位を判別できるものはない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

検出された層位から平安時代の遺構と考えている。

(7) AXIr 16 火葬墓

〔遺構〕(第 318 図、写真図版 231)

調査範囲の西端から約 988 m 東によった AXI 区の中央やや東よりに位置し、AXIs 16 火葬墓は東に約 50 cm の距離がある。AXIs 12 周溝内に位置しており、周溝遺構より新しい遺構であることは明確であるが、因果関係は定かでない。

長軸約 1 m、単軸約 60 cm の略長方形の範囲に偏平な河川礫を敷き、その中に小骨が散在する形で検出されている。炭化物も若干混在するものの、木炭層と言うほどの量ではない。したがって、他の類似遺構のように所謂地面を掘り下げた土坑状の墓墳は検出されていない。

埋土は、骨片と炭化物が混在する状態である。木炭・小骨ともに最大で径 1 cm と全体として細かく、粉状がもっとも多い。樹種は同定していないので明確でない。焼骨は細片が主であるが、混在量は比較的多く、大きさも径 1 cm を超えるものはない。関節などの部位を判別できるものはない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

検出された層位から平安時代の遺構と考えている。

(8) AXs 16 火葬墓

〔遺構〕(第 318 図、写真図版 231)

調査範囲の西端から約 988 m 東によった AX 区の中央やや東よりに位置する。AXs 12 周溝内に位置しており、周溝遺構より新しい遺構であることは明確であるが、因果関係は定かでない。

長軸約 75 cm、単軸約 50 cm の不整形の範囲に扁平な河川礫を敷き、その中に小骨が散在する形で検出されている。炭化物も僅かにあるが点在する程度であり、木炭層と言うほどの量ではない。したがって、他の類似遺構のように所謂地面を掘り下げた土坑状の墓墳は検出されていない。

埋土は、骨片と炭化物が混在する状態である。木炭・小骨ともに最大で径 1 cm と全体として細かく、粉状がもっとも多い。樹種は同定していないので明確でない。焼骨は細片が主であるが、混在量は比較的多く、大きさも径 1 cm を超えるものはない。関節などの部位を判別できるものはない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

検出された層位から平安時代の遺構と考えている。

10. 溝 跡

当遺跡の調査では非常に多くの大小の規模を持つ溝跡が検出されているが、開田時の攪乱・削平によって検出された状態が断続的な例が多い。分布する範囲は調査範囲のほぼ全域から検出されている。

検出された溝跡は多くの遺構と重複関係があり、その新旧関係には住居跡より古い例はほとんどなく、他の遺構との関係でもほぼ同様である。したがって、当遺跡から検出された遺構の中ではもっとも新しい部類に入る遺構である可能性も考えられる。しかし、出土遺物を見ると、土師器や須恵器といった平安時代の遺物の他は、遺構の一部から近代のガラス器や陶磁器類が出土した遺構もあるが、ほとんどの遺構では遺物の出土がない。以上から、時代を決定する決め手に欠ける遺構が多いのが実体であることから、とりあえず、溝跡は平安時代の遺構として記述することとする。実際は中世以降に属する例が含まれている可能性があることを明記しておきたい。

(1) D I × 23 溝跡

〔遺構〕(第 319 図、写真図版 232)

当溝跡は、西端が調査範囲の西端に位置し、東端は D II 区まで延びており、全長約 30 m で調査範囲外に続く。西端部では北西方向を指すが、約 3 m 東で次第に湾曲して南東方向に向きを変え、そのまま直線的に延びて調査範囲外に延びる。住居跡・獨立柱建物跡・井戸跡・陥し穴状遺構といった縄文時代や平安時代の数多くの遺構と重複するが、重複するこれらの遺構すべてを掘削していることにより、もっとも新しい遺構となる。

検出面の幅は約 80 cm ~ 50 cm、底面の幅約 35 cm、深さは 60 cm ~ 40 cm であり断面形は箱葉研状であり、壁面・底面ともほぼ平坦である。埋土は地点によつて若干異なった様相が観察されるものの、大略的にはほぼ 4 層に細分される。土性はいずれもシルトか砂質シルトであり、色調は黒色と黒褐色である。若干粘性を持つ層が多く、黄褐色土粒や炭化物粒が混入する。土層の状況から自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第 331 図、写真図版 502)

26 点と出土量が多く、その中には陶磁器 9 点、ガラス器 2 点、土師器 5 点、須恵器 10 点が含まれる。

土師器 (第 331 図、写真図版 502)

坏 4 点と甕 1 点の 6 点の出土である。

坏 (3486 ~ 3489) - 4 点の出土であるが、関係は 1 点のみで他は口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される。底部から丸味を持って外傾する体部は口縁端部が直立気味となったり軽く外反する器形をなす。大きさは、口縁部径 14.5 cm、底部径 5.6 cm で比率は 2.59 である。

甕 (3492) - ロクロ使用成形された体部の破片が 1 点の出土である。外面はヘラケズリ、内面がナデで調整される。

須恵器 (第 331 図、写真図版 502)

坏 2 点、甕 7 点、瓶 1 点の 10 点の出土である。

坏 (3490・3493) - 2 点の出土であるが、体部と体部下位から底部を伸す破片での出土である。ロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも再調整されない。器形は明確でない。

甕 (3491・3494 ~ 3496・3498 ~ 3500) - 7 点の出土であるが、すべて体部か体部下位から底部を残す破片であり、全体的なことは不明である。3491・3494 ~ 3496 の 4 点はロクロ使用成形され、体部外面がヘラケズリ、内面はヘラナデかナデ調整される。器形などは定かでない。残る 3498 ~ 3500 の 3 点は、体部の外面に並行叩き具痕、内面にも並行や同心円文的な当

て具痕を付す大甕の体部破片である。

瓶 (3497) - ロクロ使用成形された肩部の小破片であるが、詳細は不明である。

磁器 (第 331 図、写真図版 502)

南東端部の極小範囲から碗 7 点、蓋付き小鉢 1 点、徳利 1 点が出土している。

碗 (3475 ~ 3481) - ロクロ使用されており、器表に呉須で文様を描いた染付と茶色の 2 色で描かれたものがある。3475・3476・3479 の 3 点は型紙を使用して文様を描いた型刷込みによる製品である。3477・3478 は同じ文様を手描きされた同じ窯元の製品である。3480 も手描きされている。3481 は文様が細かく銅版かもしれない。描かれている文様はいずれも草花文である。

蓋付き小鉢 (3482) - 外面に呉須で鯖唐草が描かれている。

徳利 (3483) - 体部下位から底部を残す破片である。

ガラス器 (第 331 図、写真図版 502)

瓶が 2 点出土している。

瓶 (3484 ~ 3485) - 丸形と角形の 2 点である。

〔遺構の時期〕

出土した遺物に磁器やガラス器といった現代的な遺物も含まれるが、出土した地点が限定されることからごみ穴的な土坑が存在した可能性が考えられることと、埋土の堆積状況から平安時代の遺構と判断される。

(2) DIIw3 溝跡

〔遺構〕 (第 319 図、写真図版 232)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DII 区に位置し、東端は DII 区のほぼ中央部まで延び、全長約 47 m で東端は浅くなって自然に消滅する。西端部ではやや南を指すが、約 20 m 東で次第に東に向きを変え、そのまま東に直線的に延びる。住居跡・陥し穴状遺構・土坑といった縄文時代や平安時代の数多くの遺構と重複するが、重複するこれらの遺構すべてを掘削していることにより、もっとも新しい遺構となる。

検出面の幅は約 50 cm ~ 30 cm、底面の幅約 30 cm ~ 15 cm、深さは 15 cm ~ 10 cm であり断面形は壁が底面から外傾する皿形であり、壁面・底面ともほぼ平坦である。埋土は地点によつて若干異なるが、大略的にはほぼ 2 層に細分される。土性はいずれも砂質シルトであり、色調は褐色と暗褐色であり、黄褐色土粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複関係ではもっとも新しい遺構であるが、埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

(3) DIIe5 溝跡

〔遺構〕(第319図、写真図版233)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いDII区に位置し、東端はDII区の中央やや西よりまで延び、全長約17mで南東端は住居跡の重複でその先は不明である。方向は、西端部からほぼ直線的に南東を指す。平安時代の住居跡と重複するが、住居跡の一部がまたがっていることは確認しているが、末端までは確認できなかったものの、住居跡を掘削していることにより、もっとも新しい遺構となる。

検出面の幅は約40cm～20cm、底面の幅約25cm～20cm、深さは30cm～20cmであり断面形は壁が底面から直立気味か軽く外傾する箱葉研状であり、壁面・底面ともほぼ平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、大略的にはほぼ4層に細分される。土性はシルトと砂質シルトであり、色調は黒色と黒褐色であり、全体として粘性があり、黄褐色土粒や炭化物粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複関係では新しい遺構であるが、埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

(4) DIIw9 溝跡

〔遺構〕(第319図、写真図版234)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDII区の中央やや西よりに位置し、南端はDII区の西端部よりまで延び、全長約20mで南西端は調査範囲外に延びる。方向は、北端部からほぼ直線的に南西を指す。平安時代の住居跡や掘立柱建物跡の他溝跡と重複するが、溝跡は当遺構より新しいが、他の遺構については当遺構が掘削している。

検出面の幅は約80cm～70cm、底面の幅約40cm～35cm、深さは55cm～40cmであり断面形は壁が底面から直線的に軽く外傾する底面がやや広い箱葉研状であり、壁面・底面ともほぼ平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、大略的にはほぼ5層に細分される。土性はシルトと砂質シルトであり、色調は褐色と黒褐色であり、全体として粘性があり、黄褐色土粒や炭化物粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複関係と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

(5) DⅡr12溝跡

〔遺構〕(第319図、写真図版235)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDⅡ区のほぼ中央部に位置し、南端はDⅡ区の西端部よりまで延び、全長約45mで南西端は調査範囲外に延びる。方向は、北端部からほぼ直線的に南西を指す。平安時代の住居跡や掘立柱建物跡・土坑の他溝跡と重複するが、溝跡は当遺構より古い遺構であるが、他の遺構については当遺構が掘削している。

検出面の幅は約55cm～50cm、底面の幅約40cm～30cm、深さは30cm～25cmであり断面形は壁が底面から軽く外傾する皿状であり、壁面・底面ともほぼ平坦であるが、底面が2段となっていることから、実際は重複するDⅡw9溝跡はこの付近まで延びている可能性がある。埋土は地点によって若干異なるが、大略的にはほぼ5層に細分される。土性はシルトと砂質シルトであり、色調は褐色と黒褐色であり、全体として粘性があり、黄褐色土粒や炭化物粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第332図、写真図版502・503)

埋土内から土師器2点、須恵器6点、磁器1点、瓦器1点の合わせて10点の出土している。

土師器(第332図、写真図版502)

壺が2点出土している。

壺(3501・3506)―ロクロ使用成形された口縁部から体部と体部のみを残す破片である。体部外面はヘラケズリ、口縁部はロクロ成形、内面はロクロ成形痕のみを残す。

須恵器(第332図、写真図版503)

壺1点と甕4点の出土である。

壺(3502)―ロクロ使用成形された頸部付近の破片である。

甕(3507～3510)―外面に並行叩き具痕、内面が無文か並行当て具痕を付す大甕である。

磁器(第332図、写真図版502)

茶碗が1点出土している。

茶碗(3504)―約半分を残す破片である。国産の製品である。

瓦器(第332図、写真図版502)

消し壺が1点の出土である。

消し壺(3505)―一部を残す蓋である。

〔遺構の時期〕

埋土内から出土した磁器と瓦器は近代の製品と考えられるが、出土した場所が南端部と特定されることからごみ穴があったことから、時期の決定資料とはならない。以上から、重複関係

と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

(6) DⅡs21 溝跡

〔遺構〕(第 319 図、写真図版 235)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DⅡ区の東端部に位置し、全長約 12.5 m であるが、北端は調査範囲外に延びる。方向は、北端部からほぼ直線的に南を指す。他遺構との重複もなく単独で検出された。

検出面の幅は約 45 cm、底面の幅約 35 cm、深さは 10 cm であり、断面形は壁が底面から軽く外傾する皿状である。壁面・底面ともほぼ平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、大略黒褐色シルトの単層であり、礫や異質の土粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

(7) DⅢr2 溝跡

〔遺構〕(第 319 図、写真図版 235)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DⅢ区の西端部に位置し、南端は DⅡ区の中央やや東よりまで延び、全長約 55 m で南西端と北東端は調査範囲外に延びる。方向は、北端部からほぼ直線的に南西を指す。平安時代の住居跡と土坑の他、陥し穴状遺構と重複するが、いずれの遺構については当遺構が掘削している。

検出面の幅は約 50 cm～35 cm、底面の幅約 30 cm～25 cm、深さは 40 cm～5 cm であり断面形は壁が底面から外傾する皿状であり、壁面・底面ともほぼ平坦であるが、底面の一部に起伏のある部分がある。埋土は地点によって若干異なるが、大略的にはほぼ 4 層に細分される。土性はシルトと砂質シルトであり、色調は黒色と黒褐色であり、全体として粘性があり、礫や黄褐色土粒や炭化物粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

(8) EⅢe3 溝跡

〔遺構〕(第320図、写真図版237)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いEⅢ区の西端部に位置し、東端はDIV区の西端部よりまで延び、全長約113mで東端は南に曲がって調査範囲外に延びる。方向は、西端部からほぼ東に約30mで北東に向きを変えて約67m延び、この地点で東に再度向きをほぼ東に変えている。他遺構との重複もなく単独で検出された。

検出面の幅は約70cm～60cm、底面の幅約30cm～20cm、深さは55cm～35cmであり断面形は壁が底面から外傾し底面が丸くなるボール状であり、壁面はほぼ平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、大略的にはほぼ3層に細分される。土性はシルトであり、色調は黒褐色であり、全体として粘性があり、礫や黄褐色土粒や炭化物粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第332・333図、写真図版503・525)

土師器8点と須恵器7点の他、土性品1点の合わせて16点の出土である。

土師器(第332図、写真図版503)

坏が5点と甕3点の出土である。

坏(3511～3515)―完形はまったく含まず口縁部から体部か体部下位から底部の一部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部の外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色されるものとまったくの無調整の2種類がある。大きさや器形は明確でない。3515には墨書がある。

鉢(3516～3518)―体部の小破片が2点出土している。ロクロ使用され外面はヘラケズリ、内面がヘラナデ調整される。器形や大きさは不明である。

須恵器(第332図、写真図版503)

坏が1点の他、甕が5点と瓶1点の7点の出土である。

坏(3519)―ロクロ使用成形された体部破片が1点の出土であるが、内外面とも再調整はない。その他、詳細は不明である。

甕(3520・3521・3523～3525)―口縁部や体部の破片で5点の出土である。ロクロ使用成形されたものと不使用成形の器体がある。3525は外面に並行叩き具痕、内面が無文以外は内外面ともロクロナデやナデ・ケズリなどの調整痕がある。3520は壺であるかも知れない。

瓶(3522)―ロクロ使用成形された肩部の破片である。

土製品(第333図、写真図版525)

ふいごの羽口が埋土内から1点出土している。

羽口(51)―先端部が焼け、基部の一部を欠損したほぼ完形の羽口である。大きさが、長さ16cm、基部の径8.5cm、先端部の径6.5cmであり、形が基部が太くて先端が細くなる円筒形状であ

り、中心部に径2.5cmの円孔が貫通している。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

(9) DⅡq9 溝跡

〔遺構〕(第320図、写真図版238)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いDⅡ区の中央部やや西よりに位置し、東端はDⅡ区の中央部やや東よりまで延び、全長約35mで東端が軽く北に曲がってDⅡm18溝跡と接続する。方向は、西端部からほぼ東南東に約30m延びて東北東に向きを変えて約5m延びてDⅡm18溝跡と接続する。掘立柱建物跡・土坑・陥し穴状遺構・古墳など多くの遺構と重複するが、重複遺構のいずれよりも当遺構が新しい。

検出面の幅は約1m～70cm、底面の幅約60cm～25cm、深さは30cm～25cmであり、断面形は壁が底面から丸味を持って外傾し底面が平らなボール状であり、壁面はほぼ平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、大略的にはほぼ2層に細分される。土性はシルトであり、色調は黒褐色である。礫や黄褐色土粒や炭化物粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第333図、写真図版536)

埋土内から鉄製品が1点出土している。

鉄製品(第333図、写真図版536)

鍋底と推定される製品が1点出土している。

鍋底(87)一亀甲割れしている足の付いた鉄板状のものである。

〔遺構の時期〕

出土遺物では時期の決定はできないが、埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

10 DⅡu10 溝跡

〔遺構〕(第320図、写真図版240)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いDⅡ区の中央部やや西よりに位置し、東端はDⅡ区のほぼ中央部まで延び、全長約19mでDⅡn18溝跡と交差する。方向は、西端部からほぼ直線的に延び、住居跡と重複するが当遺構が新しい。

検出面の幅は約40cm、底面の幅約20cm、深さは25cmであり、断面形は壁が底面から外傾し底面が平らな皿形状であり、壁面はほぼ平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、黒色シルトの単層であり、粘性があり黄褐色土粒や炭化物粒が混入する。自然堆積によって埋没し

た遺構と推定される。

〔遺物〕(第 333 図、写真図版 503)

埋土内から須恵器が 1 点出土している。

須恵器(第 333 図、写真図版 503)

坏が 1 点出土している。

坏(3526) - ロクロ使用成形され体部下位から底部を残す破片である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも無調整である。器形や大きさは不明である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と、埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

00 DⅢ○10 溝跡

〔遺構〕(第 320 図、写真図版 239)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DⅢ区の中央部やや西よりに位置し、南端は DⅢ区のほぼ中央部西よりに延び、全長約 18 m で他、遺構との重複もなく単独で検出された。方向は、北の調査範囲外から南に約 9 m 延びた後東に向きを変えて約 4 m 延び、この地点で再度南に向き変えて 6 m を直線的に延びて止まる。

検出面の幅は約 60 cm、底面の幅約 35 cm、深さは 50 cm ~ 45 cm であり、断面形は壁が底面から外傾し底面が平らなバケツ形状であり、壁面はほぼ平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、全体が 5 層に細分される。土製はいずれもシルトと共通するが、色調はすべて黒褐色であり、粘性があり礫や黄褐色土粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

02 EⅢb11 溝跡

〔遺構〕(第 321 図、写真図版 240)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い EⅢ区の中央部やや西よりに位置し、東端も EⅢ区のほぼ中央部西よりに延び、全長約 3 m で他、遺構との重複もなく単独で検出された。方向は、西からやや東南東に m 延びる。

検出面の幅は約 30 cm、底面の幅約 15 cm、深さは 10 cm であり、断面形は凸レンズ状となる皿形であり、壁面はほぼ平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、色調が黒褐色をなす砂質シルトの単層であり、粘性があり礫や黄褐色土粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺

構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

03 DⅢo14 溝跡

〔遺構〕(第321図、写真図版241)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDⅢ区の中央部に位置し、南端もDⅢ区のはぼ中央部に延び、全長約10mで住居跡と古墳が重複している。方向は調査範囲外の北から緩いクランク状に南に延びている。

検出面の幅は約1.2m～1m、底面の幅約60cm～50cm、深さは1.1m～55cmであり、断面形は壁面が底面から外傾するバケツ形であり、壁面には若干凸凹がある。埋土は地点によって若干異なるが、全体が9層に細分されている。土性はシルト、色調は黒色といずれも共通しているが、粘性があり黄褐色土粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第333図、写真図版503)

土師器が2点出土している。

土師器(第333図、写真図版503)

甕が2点の出土である。

甕(3527・3528) 一部破片である。ロクロ使用成形され、外面はナデ、内面かハケメ調整される。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

04 DⅢt14 溝跡

〔遺構〕(第321図)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDⅢ区の中央部に位置し、南端もDⅢ区のはぼ中央部に延び、全長約4.5mでDⅢs15溝跡・1・DⅢo17溝跡・DⅢt13古墳と重複しているが当溝跡がもっとも新しい遺構である。方向は北から緩く湾曲して南に延びている。

検出面の幅は約40cm、底面の幅約20cm、深さは10cmであり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する凸レンズ状の浅い皿形であり、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、色調が黒褐色で土性がシルトの単層である。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

09 DⅢa15 溝跡-1

〔遺構〕(第321図、写真図版242)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDⅢ区の中央部やや東よりに位置し、南端もDⅢ区のほぼ中央部東よりに延び、全長約6.5mでDⅢq9溝跡・DⅢo17溝跡と重複しているが、当溝跡がもっとも古い遺構である。方向は北から緩く湾曲して南に延びている。

検出面の幅は約70cm～40cm、底面の幅約60cm～20cm、深さは20cm～10cmであり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する凸レンズ状の浅い皿形や浅い箱形に近い形状であり、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、2層に細分されるものの色調が黒褐色で土性がシルトと共通する。粘性があり、小礫や黄褐色土粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

09 DⅢa15 溝跡-2

〔遺構〕(第321図、写真図版242)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDⅢ区の中央部やや東よりに位置し、南端もDⅢ区のほぼ中央部東よりに延び、全長約4mでDⅢq9溝跡・DⅢo17溝跡と重複しているが、当溝跡がもっとも古い遺構である。方向は北から緩く湾曲して南に延びている。

検出面の幅は約35cm、底面の幅約10cm、深さは10cmであり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する凸レンズ状の浅い皿形であり、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、色調は黒色で土性がシルトである。粘性があり、小礫や黄褐色土粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

07 EⅢd16 溝跡

〔遺構〕(第321図、写真図版243)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いEⅢ区の中央部やや東よりに位置し、東端もEⅢ区のほぼ中央部東よりに延び、全長約7mで重複する遺構もなく単独で検出された。方向は西からほぼ直線的に東へ延びている。

検出面の幅は約30cm、底面の幅約10cm、深さは10cmであり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する凸レンズ状の浅い皿形であり、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、色調は黒褐色で土性がシルトである。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

08 DⅢo17 溝跡

〔遺構〕(第322図、写真図版243)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDⅢ区の中央部やや東よりに位置し、南端もDⅢ区のほぼ中央部東よりに延び、全長約27mで住居跡の他、DⅢq9溝跡・DⅢo17溝跡と重複しているが、住居跡は当溝跡より古く溝跡との関係は新旧ある。方向は北から緩く湾曲して南に延びている。

検出面の幅は約45cm～30cm、底面の幅約20cm～10cm、深さは10cmであり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する凸レンズ状の浅い皿形であり、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが、色調は黒色・褐色・黒褐色があり土性はいずれもシルトである。粘性があり、小礫や黄褐色土粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第333図、写真図版503)

土師器2点と須恵器1点の合わせて3点の出土である。

土師器(第333図、写真図版503)

壺と鉢が各1点の合わせて2点の出土である。

壺(3530) - ロクロ不使用成形された口縁部から体部上位を残す小破片である。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部はナデ調整されるが、器形や大きさなど詳細は不明である。

鉢(3531) - ロクロ使用成形され体部下位から底部を残す破片での出土である。内外面ともロクロ成形痕を残すが、器形に付いては不明である。

須恵器(第333図、写真図版503)

坏が1点の出土である。

坏(3529) - ロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整の体部下位から底部を残す破片が1点出土している。体部は内外面とも再調整はない。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

19 DⅢp 17 溝跡

〔遺構〕(第322図、写真図版244)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDⅢ区の中央部やや東よりに位置し、南端もDⅢ区のほぼ中央部東よりに延び、全長約25mで多くの溝跡と重複しているが、新旧関係は新旧いろいろある。方向は北からほぼ直線的に南に延びている。

検出面の幅は約60cm、底面の幅約35cm、深さは15cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形であり、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが3層に分けられ、色調は黒色・褐色・黒褐色があり土性はいずれもシルトである。粘性があり、小礫や黄褐色土粒が混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第333図、写真図版503)

土師器3点と須恵器2点の合わせて5点の出土である。

土師器(第333図、写真図版503)

坏2点、高台付き坏1点の出土である。

坏(3532・3534) - ロクロ使用成形された体部下位から底部と体部の小破片である。体部の外面は無調整とミガキ調整があり、内面はミガキ後黒色処理される。器形や大きさなど詳細は不明である。

高台付き坏(3533) - ロクロ使用成形され体部下位から底部を残す破片であり、高台部は欠落している。器形に付いては不明である。

須恵器(第333図、写真図版503)

坏が1点と甕が1点の出土である。

坏(3535) - 口縁部の小破片であるが、ロクロ使用成形され体部は内外面とも再調整はない。

甕(3536) - 体部破片であるが、内外面に並行の叩き具痕と当て具痕を付す、大甕である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

20 DⅢm 18 溝跡

〔遺構〕(第322図、写真図版245)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDⅢ区の中央部東よりに位置し、東端はDⅢ区の東端

部よりに延び、全長約 60 m で古墳と溝跡と重複しているが、古墳は古く溝跡とは当遺構の方が新しい。方向は北の調査範囲外から南西に約 24 m 延びた後東向きを変えて約 26 m 直線的に延びる。

検出面の幅は約 80 cm ~ 35 cm、底面の幅約 50 cm ~ 25 cm、深さは 30 cm ~ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形であり、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが 3 層に分けられ、色調は黒褐色・暗褐色であり土性はいずれもシルトである。粘性があり、小礫や黄褐色土粒の他、炭化物も混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第 333 図、写真図版 504)

土師器 5 点と須恵器 2 点の合わせて 7 点の出土である。

土師器 (第 333 図、写真図版 504)

坏 3 点、甕 2 点の出土である。

坏 (3537 ~ 3539) - ロクロ使用成形された体部下位から底部を残す 1 点とロクロ不使用成形の 2 点がある。前者は底部切り離しが回転糸切り離し無調整で体部は内外面とも無調整である。後者は口縁部と底部のみを残すが、内面はともにミガキ後黒色処理され、外面は口縁部がなで、底部はヘラケズリ調整された丸底である。

甕 (3541・3543) - ロクロ不使用成形された口縁部破片である。外面がヨコナデかミガキ、内面がヘラナデ調整される。

須恵器 (第 334 図、写真図版 504)

坏が 1 点と甕が 1 点の出土である。

坏 (3540) - 体部下位から底部を残す破片であるが、体部の再調整はなく底部の切り離しは回転糸切り無調整である。

甕 (3542) - 体部下位から底部ほを残す破片である。体部の外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

2) DⅢn 18 溝跡

〔遺構〕(第 322 図、写真図版 245)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DⅢ区の中央部東よりに位置し、南端は DⅢ区の西端部よりに延び、全長約 63 m で住居跡・古墳の他、多くの溝跡と重複しているが、住居跡と古墳は古く、溝との関係では新旧いろいろある。方向は北の調査範囲外から南西に約 13 m 延びた後南西方向に向きを変えてそのまま約 50 m ほぼ直線的に延びている。

検出面の幅は約 80 cm ~ 60 cm、底面の幅約 50 cm ~ 35 cm、深さは 15 cm ~ 10 cm であり、断

面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形で、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが3層に分けられ、色調は黒褐色・黒色であり土性はいずれもシルトである。粘性があり、小礫や黄褐色土粒の他、炭化物も混入する。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第334図、写真図版504)

土師器1点の出土である。

土師器(第334図、写真図版504)

壺1点の出土である。

壺(3544) - ロクロ不使用成形された口縁部破片である。口縁部の内外面がヨコナデで調整され、頸部に直立する段の付く形状である。口縁部は外反し口唇部は角張る。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

22 DⅢp22 溝跡

〔遺構〕(第322図、写真図版244)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いDⅢ区の東よりに位置し、北東端はDⅣ区のほぼ中央部に達する全長約90m延び、多くの住居跡や溝跡と重複しているが、新旧関係では当溝跡がもっとも新しい遺構である。方向は南西から北東に若干蛇行気味に延び、北西端が段丘掛けまで続いている。

検出面の幅は約75cm～60cm、底面の幅約50cm～35cm、深さは45cm～35cmであり、断面形は壁面が底面から外傾したり直立気味となり、位置によって違いがあるもののピーカー形や浅い皿形であり、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが全体が10層に分けられ、色調は黒褐色と黄褐色があり、土性はシルトか砂質のシルトである。粘性を持つ層が多く、小礫や黄褐色土粒が混入する。また、地点によっては焼土の混入も見られる。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕(第334図、写真図版504)

土師器が1点出土している。

土師器(第334図、写真図版504)

坏1点の出土である。

坏(3545) - ロクロ使用成形された体部下位から底部と体部の小破片である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも無調整である。器形や大きさなど詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

03 DⅢ123 溝跡

〔遺構〕(第 323 図、写真図版 246)

当溝跡は、北西端が調査範囲の西端に近い DⅢ区の東よりの調査範囲外に位置し、南東端は DIV 区のほぼ中央東寄りに達する全長約 90 m 延びて調査範囲外に延びている。住居跡や溝跡と重複しているが、新旧関係はそれぞれによって異なる様相である。方向は北西から南東に若干蛇行気味に延び、北西端・南東端とも調査範囲外に延びる。

検出面の幅は約 65 cm～50 cm、底面の幅約 20 cm～15 cm、深さは 20 cm～15 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形であり、壁面は平坦である。埋土は地点によって若干異なるが全体が 7 層に分けられ、色調は黒褐色と褐色があり、土性はシルトである。粘性を持つ層が多く、小礫や黄褐色土粒が混入する。また、地点によっては焼土や炭化物の混入も見られる。自然堆積によって埋没した遺構と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

04 DⅢr 25 溝跡

〔遺構〕(第 323 図、写真図版 247)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DⅢ区と DIV 区の境界付近に位置し、東端は DIV 区の西端部よりに延び、全長約 13 m で平安時代の住居跡と重複し当遺構が掘削している。方向は西からほぼ真東に延びる。

検出面の幅は約 70 cm～40 cm、底面の幅約 50 cm～20 cm、深さは 20 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形であり、壁面は平坦であるが、地点によって深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが 2 層に分けられ、色調は黒褐色で土性はいずれもシルトであり、いずれも粘性があるほか砂が混入している。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕(第 334 図、写真図版 504)

土師器 5 点と須恵器 6 点の合わせて 11 点の出土である。

土師器 (第 334 図、写真図版 504)

環 1 点、甕 4 点の出土である。

環 (3549) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片が 1 点の出土である。底部の切り離しが回転糸切り離し無調整で体部の外面は無調整であるが、内面はミガキ後黒色処理される。小破片のため器形や大きさなど不明である。

壺 (3550～3553) - ロクロ使用成形された体部と体部界から底部を残す破片である。外面がヘラケズリやヘラナデ、内面はヘラナデかロクロナデ調整される。詳細は不明である。

須恵器 (第 334 図、写真図版 504)

坏が 3 点と壺が 3 点の出土である。

坏 (3546～3548) - 体部下位から底部を残す破片と口縁部・体部の破片がある。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整はない。詳細は不明である。

壺 (3554～3556) - 頸部から肩部と体部の破片である。3554 はロクロ使用成形され内外面にロクロナデ調整痕を残す。壺より壺である可能性もある。残る破片は内外面に並行の叩き具痕と並行の当て具痕を付す大壺の破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

四 DIV12 溝跡

〔遺構〕 (第 323 図、写真図版 249)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DⅢ区と DIV 区の境界付近に位置し、東端は DIV 区の東端部よりに延び、全長約 84 m で平安時代の住居跡と溝跡が重複し当遺構が掘削している。方向は北西から次第にほぼ真東に方向を変えて約 67 m 延び、さらに北東に方向を転じて 17 m 延び、北西端は調査範囲外に延びている。

検出面の幅は約 65 cm～45 cm、底面の幅約 30 cm～25 cm、深さは 25 cm～20 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形であり、壁面には若干凹凸があるほか、地点によって深浅と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが 7 層に分けられ、色調は黒色・黒褐色・極暗褐色に分けられ、土性はいずれもシルトであり黄褐色土粒や炭化物などの他、砂と礫が混入している。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕 (第 335・336 図、写真図版 504・505)

48 点の出土であるが、土師器 19 点と須恵器 27 点の他、鉄製品 2 点が含まれる。

土師器 (第 335 図、写真図版 504・505)

坏 7 点、壺 11 点、鉢 1 点の出土である。

坏 (3557～3562・3566) - 完形はなく口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の外面がナデ調整されるものと無調整のもの、内面もミガキ後黒色処理されるものと無調整の個体がある。いずれの個体も小破片であるため詳細は不明である。

壺 (3563～3565・3567・3569～3575) - 完形はなく口縁部・体部・底部といった小破片での出土である。ロクロ使用成形されたものとロクロ不使用成形されたものがある。小破片で

あるため詳細は不明であるが、体部外面はロクロナデの他ヘラケズリやヘラナデで調整され、内面もほぼ同じ状況である。

鉢 (3568) 一体部の小破片であるため詳細は定かでないが、ロクロ使用成形され体部外面がヘラケズリ、内面が磨き後黒色処理である。

須恵器 (第 335・336 図、写真図版 504・505)

坏が 9 点と甕が 13 点のほか蓋 1 点と瓶 1 出がある。

坏 (3576～3584) 一完形はなく、口縁部から体部や体部界から底部の他、体部の破片が出土している。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも無調整である。詳細は不明である。

蓋 (3585) 一ロクロ使用成形された小破片が 1 点出土している。

甕 (3586・3587・3589～3599) 一ロクロ使用成形された 3586・3587 とその他のものがある。前者は口縁部と体部界から底部の一部を残す破片での出土であり、内外面にロクロ成形痕らを付す。その他は外面に並行叩き具痕や縦格子状の叩き具痕を付し、内面に同心円や放射状、青海波文、無文などの当て具痕を付す大甕の体部破片である。

瓶 (3588) 一ロクロ使用成形された肩部の破片である。

鉄製品 (第 336 図、写真図版 534・537)

釘が 1 点と鉄滓 1 点の出土である。

釘 (54) 一断面が方形で先端が尖ることから釘の一部とした。残存長 3.4 cm、幅 5 mm ほどの大きさである。

鉄滓 (112) 一平面形が楕円形で断面がやや扁平なもので、最大径 3 cm の大きさである。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

09 DIVk 5 溝跡

〔遺構〕 (第 323 図、写真図版 247)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV 区の西端付近に位置し、東端は DIV 区の西部より延び、全長約 7 m で平安時代の住居跡と重複し当遺構が掘削している。方向は北西から南東に延びる。

検出面の幅は約 35 cm～30 cm、底面の幅約 20 cm～15 cm、深さは 5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形であり、壁面は平坦であるが、地点によって深浅と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか小礫が混入している。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕 (第 336 図、写真図版 505)

土師器 2 点の出土である。

土師器 (第 336 図、写真図版 505)

甕が 2 点の出土である。

甕 (3600・3601) - ロクロ使用成形された口縁部とロクロ不使用成形された口縁部が各 1 点の出土である。ともに小破片のため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

7) DIVg 7 溝跡

〔遺構〕 (第 323 図、写真図版 248)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV 区の西部付近に位置し、東端は DIV 区の西部よりに延び、全長約 6 m で平安時代の住居跡と中世の掘立柱建物跡と重複しているが、当遺構は住居跡より新しく建物跡より古い遺構である。方向は北西から南東に延びる。

検出面の幅は約 30 cm 前後、底面の幅約 15 cm 位、深さは 5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形であり、壁面は平坦であるが、地点によって深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが黒色シルトの単層であり、全体として粘性がある。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

8) DIVm 7 溝跡

〔遺構〕 (第 323 図、写真図版 249)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DIV 区の西部付近に位置し、南端は DIV 区の西部よりに延び、全長約 8 m で平安時代の住居跡や DIVm 7 墓塚と重複しているが、当遺構それらにいずれよりも新しい遺構である。方向は北北東から南南西に延びる。

検出面の幅は約 80 cm ~ 55 cm、底面の幅約 40 cm ~ 30 cm、深さは 15 cm ~ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形であり、壁面は平坦であるが、地点によって深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が 2 層に細分され、色調は黒褐色と明黄褐色であり、土性はともにシルトである。全体として粘性があり、少量の炭化物を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

四 DIV18 溝跡-1

〔遺構〕(第324図、写真図版249)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いDIV区の西部付近に位置し、東端はDIV区の西部よりに延び、全長約4mで中世の建物跡と古墳時代の墓域と重複するが、墓域は古く建物跡が新しい重複関係を示す。方向は西からほぼ東に延びる。

検出面の幅は約80cm～55cm、底面の幅約60cm～20cm、深さは15cm～10cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形であり、壁面は平坦であるが底面に幾分起伏が見られ、地点によって深さと広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が2層に細分され、色調は黒褐色と明黄褐色があり、土性はいずれもシルトで、粘性があるほか少量の炭化物を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕(第336図、写真図版505・506)

土師器2点と須恵器5点の合わせて7点の出土である。

土師器(第336図、写真図版505・506)

坏1点と甕1点の出土である。

坏(3604)一ロクロ使用成形された体部界から底部を残す小破片である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面ともミガキ調整される。詳細は不明である。

甕(3605)一ロクロ使用成形された体部の小破片である。外面はケズリ内面はロクロナデ調整である。

須恵器(第336図、写真図版505・506)

坏が3点と甕2点の合わせて5点の出土である。

坏(3602・3603・3607)一ロクロ使用成形された口縁部から体部と体部下位から底部そして体部のみを残す破片である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも無調整である。

甕(3606・3608)一ロクロ使用成形された体部破片と外面に擬格子文・内面無文の大甕の体部破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

60 DIVi 8 溝跡-2

〔遺構〕(第 324 図、写真図版 250)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DIV区の西部付近に位置し、南端は DIV区の西部よりに延び、全長約 21 m で北端が DIVi 2 溝跡と接続する。平安時代の住居跡の他、中世の建物跡と古墳時代の墓墳と重複するが、墓墳と住居跡は古く建物跡が新しい重複関係を示す。方向は北北東から南南西に延びる。

検出面の幅は約 80 cm、底面の幅約 20 cm、深さは 30 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾するが幾分不整形な形である。壁面・底面ともに若干起伏が見られ、地点によって深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が 3 層に細分され、色調は黒褐色と褐色そして黄褐色があり、土性はいずれもシルトで、粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

61) DIVo 8 溝跡

〔遺構〕(第 324 図、写真図版 250)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DIV区の西部付近に位置し、南端は DIV区の西部よりに延び、全長約 7 m で南端が DIVq 8 溝跡と接続する。平安時代の住居跡と重複するが、住居跡より新しい遺構である。方向は北西から南東に約 4 m 延びた後東より方向を転じて約 3 m 続く。検出面の幅は約 35 cm、底面の幅約 20 cm、深さは 7 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともにほぼ平坦であり、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

62) DIVq 8 溝跡

〔遺構〕(第 324 図、写真図版 251)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV区の西部付近に位置し、東端は DIV区の東部より

に延び、全長約 36 m で東端が DIVk 18 溝跡と接続する。溝跡や古墳時代の墓墳として縄文時代の陥し穴状遺構と重複するが、墓墳より新しく溝跡とは新旧それぞれである。方向は西から北北東気味ほぼ直線的に延び東端がきたに方向を転じる。

検出面の幅は約 70 cm ～ 65 cm、底面の幅約 40 cm ～ 30 cm、深さは 20 cm ～ 15 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面、底面ともにやや不整形であり、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が 4 層に細分され、色調は黒褐色・暗褐色・明黄褐色があり、土性はいずれもシルトと共通している。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

03 DIVn 10 溝跡

〔遺構〕(第 324 図、写真図版 251)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV 区の中央部やや西よりに位置し、東端は DIV 区の中央部に延び、全長約 4 m で東端は自然消滅する。DIVn 11 建物跡と重複するが、当遺構の方が新しい。方向は西から東へほぼ直線的に延びる。

検出面の幅は約 30 cm、底面の幅約 15 cm、深さは 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であり、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが黒褐色シルトの単層である。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

04 DIVp 10 溝跡

〔遺構〕(第 324 図、写真図版 251)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV 区の中央部やや西よりに位置し、東端は DIV 区の西部よりに延び、全長約 3 m で東西両端とも自然消滅する。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 30 cm、底面の幅約 15 cm、深さは 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であり、地点によって若干深淺と広狭の差がある。

埋土は地点によって若干異なるが全体が2層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色があり、土性はいずれもシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

09 DIVm 11 溝跡

〔遺構〕(第324図、写真図版252)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いDIV区の中央部やや西よりに位置し、東端はDIV区の中央部まで延び、全長約6mで東西両端とも自然消滅する。重複する遺構はない。

検出面の幅は約40cm～35cm、底面の幅約25cm～20cm、深さは10cm～5cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面にはやや起伏が見られ、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が3層に細分され、色調は暗褐色と鈍い黄褐色があり、土性はいずれもシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

09 DIVl 11 溝跡

〔遺構〕(第325図、写真図版253)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いDIV区の中央部やや西よりに位置し、東端はDIV区の中央部まで延び、全長約11mで東西両端とも自然消滅する。重複する遺構はない。

検出面の幅は約50cm、底面の幅約20cm、深さは10cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であり、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が2層に細分され、色調は暗褐色と鈍い黄褐色があり、土性はいずれもシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

37 DIVp 14 溝跡

〔遺構〕(第 325 図、写真図版 253)

当溝跡は、南西端が調査範囲西端に近い DIV 区の中央部やや東よりに位置し、北東端は DIV 区の中央部やや東よりまで延び、全長約 7 m で北東端は自然消滅するが、南西端は調査範囲外に延びる。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 30 cm、底面の幅約 25 cm、深さは 15 cm であり、断面形は壁面が底面からほぼ直立する浅い箱形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が 2 層に細分され、色調は黒褐色と褐色があり、土性はいずれもシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

38 DIVn 16 溝跡-1

〔遺構〕(第 325 図、写真図版 254)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV 区の中央部やや東よりに位置し、南端は DIV 区の中央部やや東よりまで延び、全長約 21 m で西端は自然消滅するが、南端は調査範囲外に延びる。方向は、西端からほぼ東に約 11 m 延びた後、方向を南に転じて約 10 m 進む。溝跡と重複するが当溝跡がもっとも古い遺構である。

検出面の幅は約 90 cm ~ 80 cm、底面の幅約 50 cm ~ 30 cm、深さは 25 cm ~ 15 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が 5 層に細分され、色調は黒褐色と褐色のほか暗褐色と極暗褐色があり、土性はいずれもシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

39 DIVn16 溝跡-2

〔遺構〕(第325図、写真図版254)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近いDIV区の中央部やや東よりに位置し、南端はDIV区の中央部やや東よりまで延び、全長約11mである。方向は、西端は自然消滅するが、ほぼ直線的に東に延び、東端も自然消滅する。溝跡と重複するが新旧それぞれがある。

検出面の幅は約50cm～40cm、底面の幅約30cm～25cm、深さは20cm～10cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、地点によって若干深浅と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが黒褐色シルトの単層であり、粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

40 DIVo16 溝跡

〔遺構〕(第325図、写真図版254)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近いDIV区の中央部やや東よりに位置し、南端はDIV区の中央部やや東よりまで延び、全長約7mで北端は自然消滅するが、南端は調査範囲外に延びる。方向は、北端からほぼ直線的に南に延びるが、調査範囲外でDIVs18溝跡と接続する可能性が考えられる。溝跡と重複するが当溝跡がもっとも古い遺構である。

検出面の幅は約50cm、底面の幅約25cm、深さは10cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、地点によって若干深浅と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が2層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色があり、土性はいずれもシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

41 DIVI16 溝跡

〔遺構〕(第325図、写真図版254)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DIV区の中央部やや東よりに位置し、南端は DIV区の中央部やや東よりまで延び、全長約 17 m で北端は DIVi 2 溝跡、南端が DIVk 18 溝跡と接続する。方向は、北端からやや東よりにほぼ直線的に南に延びる。溝跡と重複するが新旧それぞれである。

検出面の幅は約 30 cm ～ 25 cm、底面の幅約 20 cm ～ 15 cm、深さは 10 cm ～ 5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であり、地点によって若干深浅と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるが全体が 4 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして褐色・明黄褐色があり、土性はいずれもシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

42 DIVi 17 溝跡

〔遺構〕 (第 325 図)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV区の中央部やや東よりに位置し、西端は DIV区の中央部やや東よりまで延び、全長約 7.5 m で東西両端ともは自然消滅している。方向は西端から軽く湾曲して東北東に延びる。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 80 cm ～ 50 cm、底面の幅約 65 cm ～ 20 cm、深さは 20 cm ～ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏が見られ、地点によって若干深浅と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 5 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして明褐色・極暗褐色があり、土性はシルトを主に粘土質シルトと砂質シルトがある。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

43 DIVk 17 溝跡

〔遺構〕

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DIV区の中央部やや東よりに位置し、南端は DIV区の

中央部やや東よりまで延び、全長約 1.5 m で南端は DIVi 2 溝跡に接続する。方向は北端からほぼ直線的に南に延び、北端は自然消滅する。溝跡とするが、新旧関係は不明である。

検出面の幅は約 50 cm～40 cm、底面の幅約 35 cm～30 cm、深さは 15 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏が見られ、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 5 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして明褐色・極暗褐色があり、土性はシルトを主に粘土質シルトと砂質シルトがある。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

44 DIVi 17 溝跡

〔遺構〕

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV区の中央部やや東よりに位置し、北端は DIV区の中央部やや東よりまで延び、全長約 17 m で西端は調査範囲外に延びるが、北東端は自然消滅する。方向は西端から約 4 m 東に延びた後、方向を北東に転じて約 13 m を軽く蛇行しながら延びる。溝跡と畑跡が重複するが、もっとも古い遺構である。

検出面の幅は約 40 cm～35 cm、底面の幅約 25 cm～20 cm、深さは 20 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面ともには若干起伏が見られ、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして極暗褐色があり、土性はシルトを主に粘土質シルトがある。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

49 DIVk 18 溝跡

〔遺構〕(第 326 図、写真図版 254)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DIV区の中央部東よりに位置し、南端は DIV区の中央

部東よりまで延び、全長約 23 m で南端は調査範囲外に延びるが、北端は自然消滅する。方向は、北端から南南西にほぼ直線的に延びる。溝跡と畑跡が重複するが、もっとも古い遺構である。

検出面の幅は約 80 cm ～ 60 cm、底面の幅約 50 cm ～ 40 cm、深さは 20 cm ～ 15 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏が見られ、地点によって若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 5 層に細分され、色調は黒褐色と極暗褐色があり、土性はすべてシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

46 DIVI 18 溝跡

[遺構] (第 326 図、写真図版 252)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV 区の中央部東よりに位置し、東端は DIV 区の中央部東よりまで延び、全長約 6 m で西端は DIVI 2 溝跡と接続するが、東端は自然消滅する。方向は、西端から東に軽く湾曲して延びる。溝跡と畑跡が重複するが、もっとも古い遺構である。

検出面の幅は約 50 cm ～ 35 cm、底面の幅約 20 cm ～ 15 cm、深さは 20 cm ～ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であるが、若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 2 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色があり、土性はすべてシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

47 DIVs 18 溝跡

[遺構]

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV 区の中央部東よりに位置し、東端は DIV 区の中央部東よりまで延び、全長約 10 m で西端は調査範囲外に延び、東端は自然消滅する。方向は、西端からほぼ直線的に東に延びる。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 55 cm～40 cm、底面の幅約 40 cm～30 cm、深さは 20 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であるが、若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 2 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色があり、土性はすべてシルトである。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

48 DIVI 19 溝跡

〔遺構〕(第 326 図)

当溝跡は、北端が調査範囲西端に近い DIV 区の中央部東に位置し、南端は DIV 区の中央部東まで延び、全長約 9 m で南端は DIVI 2 溝跡と接続するが、東端は自然消滅する。方向は、北端からやや西向きにほぼ直線的に南に延びる。畑跡と重複するが当遺構の方が新しい。

検出面の幅は約 55 cm～50 cm、底面の幅約 40 cm～25 cm、深さは 10 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であるが、若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるものの極暗褐色シルトの単層である。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

49 DIVo 19 溝跡

〔遺構〕(第 326 図)

当溝跡は、西端が調査範囲西端に近い DIV 区の中央部東に位置し、東端は DIV 区の中央部東まで延び、全長約 7 m で西端は DIVn 16 溝跡-1、東端は DIVo 20 溝跡と接続する。方向は、西端からやや北向きにほぼ直線的に東に延びる。溝跡と重複するが当遺構の方が古い。

検出面の幅は約 30 cm、底面の幅約 15 cm、深さは 5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であるが、若干深淺と広狭の差がある。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層である。粘性があるほか少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

50 DIVo21 溝跡

〔遺構〕(第 326 図)

当溝跡は、南端が調査範囲西端に近い DIV 区の中央部東に位置し、東端は DIV 区の中央部東まで延び、全長約 10 m で西端は DIVO 19 溝跡と接続する。方向は、南端から北東に約 3 m 延びた後方向を東に転じ、やや北向きにほぼ直線的に約 7 m 東に延びる。溝跡と重複するが当遺構の方が新しい。

検出面の幅は約 1.5 m ～ 55 cm、底面の幅約 60 cm ～ 45 cm、深さは 40 cm ～ 5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する皿形に近い形状である。壁面・底面ともに若干起伏がみられ、さらに深さと広狭の差が大きい。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 7 層に細分され、色調には黒褐色・暗褐色・極暗褐色があり、土性はすべてシルトである。粘性を持つ層が多いほか、少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と判断される。

51 CVx14 溝跡

〔遺構〕(第 326 図、写真図版 255)

当溝跡は、西端が調査範囲西部に近い CV 区の中央部やや東に位置し、東端は CVI 区の中央西よりまで延び、全長約 74 m である。方向は、西端から軽く蛇行しながら大略東に延びている。掘立柱建物跡群と重複するが、当遺構の方が新しい。

検出面の幅は約 65 m ～ 55 cm、底面の幅約 40 cm ～ 30 cm、深さは 20 cm ～ 15 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する皿形である。壁面・底面ともにほぼ平坦であるが、深さと広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 4 層に細分され、色調には黒褐色と黄褐色であり、土性にはシルトを主体に砂質シルトがる。粘性を持つ層が多いほか、少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕(第 336 図、写真図版 506)

土師器 1 点、須恵器 2 点の合わせて 3 点の出土である。

土師器（第336図、写真図版506）

壺が1点の出土である。

壺（3609）－ロクロ不使用成形された体部の小破片であるため、詳細は不明であるが、内外面ともハケメ調整される。

須恵器（第336図、写真図版506）

坏1点と壺1点の出土である。

坏（3610）－ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片であるが、小破片であるため詳細は定かでない。

壺（3611）－ロクロ使用成形された体部の小破片である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定されるが、重複関係から中世の可能性もある。

52 CVx17 溝跡

〔遺構〕（第327図、写真図版256）

当溝跡は、西端が調査範囲西部に近いCV区の中央部東に位置し、東端はCVI区の中央西よりまで延び、全長約50mであるが、連続して延びるのではなく断続的に続く。方向は、西端から軽く蛇行しながら大略東に延びて、DVx14溝跡の南側にほぼ並行するように掘られている。掘立柱建物跡群と重複するが、当遺構の方が新しい。

検出面の幅は約50m～40cm、底面の幅約25cm～20cm、深さは20cm～15cmであり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する皿形か、壁が直立気味となる箱形である。壁面はほぼ平坦であるが、底面には幾分起伏があり、さらに深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が4層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして黄褐色であり、土性はすべてシルトである。粘性を持つ層が多いほか、少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定されるが、重複関係から中世の可能性もある。

53 CVx18 溝跡

〔遺構〕（第327図、写真図版255）

当溝跡は、西端が調査範囲西部に近いCV区の東端部よりに位置し、東端はCV区の東端部

まで延び、全長約 11 m である。方向は、西端から軽く蛇行しながら大略東に延びる。掘立柱建物跡群と重複するが、当遺構の方が新しい。

検出面の幅は約 60 m ～ 45 cm、底面の幅約 40 cm ～ 25 cm、深さは 40 cm ～ 35 cm であり、断面形は壁面が底面から直立気味となる箱形か丸味をもつて軽く外傾する U 字状である。壁面はほぼ平坦であるが、底面には幾分起伏があり、さらに深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 8 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして褐色であり、土性はすべてシルトである。粘性を持つ層が多いほか、少量の炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定されるが、重複関係から中世の可能性もある。

54 CVt20 溝跡

〔遺構〕(第 327 図)

当溝跡は、西端が調査範囲西部に近い CV 区の東端部よりに位置し、南端は CV 区の東端部まで延び、全長約 3 m である。方向は、西端から東にほぼ直線的に約 6 m 延びた後、方向を南に転じて 3 m ほど直線的にのびる。当溝跡は建物跡群を囲む様相を示すほか、土坑の CVw 22 土坑-1・同-2 と埋土の状況が酷似していることから同じ正確の溝跡である可能性が高い。もしかすると、建物跡の雨落ち溝であるかも知れない。平安時代の住居跡と重複するが、当遺構の方が新しい。

検出面の幅は約 1.2 m ～ 1 m、底面の幅約 1 m ～ 95 cm、深さは 25 cm ～ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から直立気味となる浅い箱形か壁が外傾する浅い皿形である。壁面はほぼ平坦であるが、底面には幾分起伏があり、さらに深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 7 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして明褐色と黄褐色であり、土性はすべてシルトである。少量の炭化物や異質の土粒を含むほか、水酸化鉄の集積層が観察される。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

59 CVt23 溝跡

(遺構) (第 327 図)

当溝跡は、西端が調査範囲西部に近い CV 区の東端部に位置し、東端は CV 区の東端部まで延び、全長約 8 m である。方向は、西端から東約 3 m の位置で軽く南に方向を転じ、約 5 m ほど直線的にのびる。東端部は自然に小目とするが、西端は CVt22 土坑-2 と重複する。重複による新旧関係は当遺構の方が新しい。

検出面の幅は約 50 cm～45 cm、底面の幅約 30 cm～20 cm、深さは 20 cm～7 cm であり、断面形は壁面が底面から丸くなるボール形に近い形状である。壁面はほぼ平坦であるが、底面には幾分起伏があり、さらに深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして褐色であり、土性はすべてシルトである。少量の炭化物や異質の土粒を含むほか、水酸化鉄の集積層が観察される。自然堆積による埋没と推定される。

(遺物)

出土していない。

(遺構の時期)

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

60 CVu24 溝跡

(遺構) (第 327 図)

当溝跡は、西端が調査範囲西部に近い CV 区の東端部に位置し、東端は CVI 区の中央西より付近まで延び、全長約 40 m である。方向は、西端からほぼ直線的に東へ延び、西端は CVt23 溝跡と接続するが、東端は自然消滅する。CVt23 溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

検出面の幅は約 60 cm、底面の幅約 40 cm、深さは 10 cm であり、断面形は壁面が底面から丸く立ち上がる浅いボール形に近い形状である。壁面はほぼ平坦であるが、底面には幾分起伏があり、さらに深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 4 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして黄褐色であり、土性はすべてシルトである。少量の炭化物や異質の土粒を含むほか、水酸化鉄の集積層が観察される。自然堆積による埋没と推定される。

(遺物)

出土していない。

(遺構の時期)

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

57 DVb 24 溝跡

〔遺構〕(第 328 図)

当溝跡は、北端が調査範囲西部に近い DV 区の東端部に位置し、南端は DV 区の東端部付近まで延び、全長約 9.5 m である。方向は、北端からやや南よりに西へ約 4.5 m 延びた後、方向をやや東よりの南に転じて約 5 m 続き、南北両端とも自然消滅する。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 50 cm ～ 25 cm、底面の幅約 25 cm ～ 10 cm、深さは約 20 cm ～ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿状である。壁面はほぼ平坦であるが、底面には幾分起伏があり、さらに深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 4 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして褐色であり、土性はすべてシルトである。少量の炭化物や小礫などのほか、異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

58 CVIp 1 溝跡

〔遺構〕(第 328 図、写真図版 256)

当溝跡は、西端が調査範囲中央部に近い CVI 区の西端部に位置し、北端は CVI 区の西部付近まで延び、全長約 28 m である。方向は、西端から北東よりに約 27 m 延びた後、方向を北に転じて約 2 m 延びるが、両端ともさらに連続する兆候は見受けられるが定かでない。おそらく、開田時に削平されたものと考えられる。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 40 cm、底面の幅約 20 cm、深さは約 15 cm であり、断面形は壁面が底面から丸く立ち上がる凸レンズ状のボール形である。壁面はほぼ平坦であるが、底面には幾分起伏があり、さらに深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色であり、土性はすべてシルトである。少量の炭化物のほか異質の土粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

59 CVIx 1 溝跡

〔遺構〕(第 328 図、写真図版 257)

当溝跡は、西端が調査範囲中央部に近い CVI 区の西部に位置し、東端は CVI 区の西部付近まで延び、全長約 28 m である。方向は、西端から北北東に直線的に延びるが、中間が途切れているもの両端とも自然消滅する。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 70 cm～50 cm、底面の幅約 55 cm～40 cm、深さは約 20 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形に近い形状である。壁面は平坦であるが、底面には幾分起伏があり、さらに深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 7 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色のほか黄褐色があり、土性はすべてシルトである。少量の炭化物のほか異質の土粒を多量に含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

例 CVIn 22 溝跡

〔遺構〕(第 328 図、写真図版 257)

当溝跡は、西端が調査範囲中央部に近い CVI 区東端部に位置し、北端は CVI 区の東端 CVII 区の境界付近まで延び、全長約 18 m である。方向は、西端から東に約 10 m 直線的に延びた後北に方向を転じて約 8 m 延び、両端とも自然消滅する。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 40 cm～35 cm、底面の幅約 35 cm～30 cm、深さは約 10 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には幾分起伏があり、さらに深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、少量の炭化物のほか異質の土粒を多量に含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

例 CVId 3 溝跡

〔遺構〕(第 328 図、写真図版 258)

当溝跡は、南端が調査範囲中央部の CVII 区西端部に位置し、北端は CVII 区の北端 BVII 区の境界付近まで延び、全長約 17 m である。方向は、南端から北北東にほぼ直線的に延びるが、両端ともさらに続く兆候が見られることから現状では自然消滅状態であるが、開田時に削平された

ものと推定される。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 35 cm、底面の幅約 25 cm、深さは約 15 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともほぼ平坦であるが、深さと広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの 2 層に細分され、色調は黒褐色と黄褐色であり、土性はともにシルトである。少量の炭化物のほか異質の土粒を多量に含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

62 CVIlg 3 溝跡

〔遺構〕(第 328 図、写真図版 258)

当溝跡は、西端が調査範囲中央部の CVI 区西端部に位置し、東端は CVI 区の西端より付近まで延び、全長約 185 m である。方向は、西端から北東にやや蛇行しながらそして断続的に延びるが、両端ともさらに続く兆候が見られることから現状では自然消滅状態であるが、開田時に削平されたものと推定される。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 85 cm～35 cm、底面の幅約 50 cm～15 cm、深さは約 25 cm～15 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面はほぼ平坦であるが、底面には一部で起伏みられ、さらに深さと広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 8 層に細分され、色調は黒褐色を主体に黒色と黄褐色があり、土性はともにシルトである。少量の炭化物のほか異質の土粒を多量に含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕(第 336 図、写真図版 506)

須恵器が 1 点出土している。

須恵器 (第 336 図、写真図版 506)

環が 1 点出土している。

環 (3612) — ロクロ使用成形された口縁部の小破片である。内外面とも再調整はないが、小破片のため詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

出土した遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

63 CVIk 6 溝跡

〔遺構〕(第 328 図)

当溝跡は、南西端が調査範囲中央部の CVI 区西端部に位置し、北東端は CVI 区の西端付近まで延び、全長約 48 m である。方向は、南西端から北東にほぼ直線的に延びるが、一部は断続的であるが西端部は調査範囲外に延び北東端は自然消滅状態であるが、開田時に削平されたものと推定される。CVI 7 陥し穴状遺構と重複するが、当溝跡の方が新しい遺構である。

検出面の幅は約 65 cm～40 cm、底面の幅約 45 cm～35 cm、深さは約 15 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともにほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分され、色調は黒褐色を主体に黄褐色があり、土性はともにシルトである。少量の炭化物のほか異質の土粒を多量に含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

64 CVI f 7 溝跡

〔遺構〕(第 329 図、写真図版 260)

当溝跡は、西端が調査範囲中央部の CVI 区西部に位置し、東端は CVI 区の西部付近まで延び、全長約 10 m である。方向は、西端から北東にやや湾曲しながら延びるが、西端部は削平によって消滅した痕跡が見受けられ、東端は自然消滅状態である。CVI e 8 住居跡と重複するが、当溝跡の方が新しい遺構である。

検出面の幅は約 35 cm、底面の幅約 30 cm、深さは約 20 cm であり、断面形は壁面が底面から直立気味的に立ち上がるボール形である。壁面・底面ともにほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 2 層に細分され、色調は黒褐色と黄褐色があり、土性はシルトと細砂である。少量の炭化物のほか異質の土粒を多量に含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

65 CVI e 9 溝跡

〔遺構〕(第 329 図)

当溝跡は、西端が調査範囲中央部の CVI 区西部に位置し、東端は CVI 区の西部付近まで延び、

全長約 13 m である。方向は、西端で CVI k 6 溝跡と接続してほぼ東に直線的に延びるが、東端部は削平によって消滅した痕跡が見受けられることから、開田時に削平されたものと推定される。CVI k 6 溝跡と重複するが、新旧関係は定かでない。

検出面の幅は約 95 cm ~ 60 cm、底面の幅約 60 cm ~ 35 cm、深さは約 15 cm ~ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形が多いものの、一部は不整形な場所も見られる。壁面はほぼ平坦であるが、底面には一部不規則な場所があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分され、色調は黒褐色を主に暗褐色があり、土性はともにシルトである。少量の炭化物のほか異質の土粒を多量に含む。自然堆積による埋没と推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

66 CVI d 10 溝跡

[遺構] (第 329 図、写真図版 261)

当溝跡は、西端が調査範囲中央部の CVI 区中央部やや西よりに位置し、東端は CVI 区の中央部付近まで延び、全長約 12 m である。方向は、西端からやや湾曲してほぼ東に延びるが、東端部は削平によって消滅した痕跡が見受けられることから、開田時に削平されたものと推定される。CVI e 11 溝跡と交差するが、新旧関係は定かでない。

検出面の幅は約 50 cm、底面の幅約 40 cm、深さは約 15 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともにほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分され、色調は黒褐色と暗褐色そして黄褐色があり、土性はともにシルトである。粘性のある土層も見られ、少量の炭化物のほか異質の土粒を多量に含む。自然堆積による埋没と推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

67 CVI e 11 溝跡

[遺構] (第 329 図、写真図版 261)

当溝跡は、南端が調査範囲中央部の CVI 区中央部やや西よりに位置し、北端は CVI 区の中央

部付近まで延び、全長約9mである。方向は、南端からほぼ直線的に北に延びるが、南西端は削平によって消滅した痕跡が見受けられることから、開田時に削平されたものと推定される。CVI d 10 溝跡と交差するが、新旧関係は定かでない。

検出面の幅は約30cm、底面の幅約10cm、深さは約10cmであり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、炭化物のほか異質の土粒を少量含む。自然堆積による埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

68 BVI n 21 溝跡

〔遺構〕(第329図、写真図版262)

当溝跡は、南端が調査範囲中央部のBVI区の東端部に位置し、北端はBVI区の東端部北側調査範囲外に延び、全長約35mである。方向は、南端からほぼ直線的に北西に約18m延びた後方向をやや北よりに向きを変えて調査範囲外まで続くが、一部には軽く蛇行する部分もある。南端はさらに続く様相が見受けられるが、開田時に削平されたものと推定される。CVI g 3 溝跡と交差するが、新旧関係は定かでない。

検出面の幅は約50cm～40cm、底面の幅約15cm～10cm、深さは約30cm～5cmであり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形やV字形である。壁面・底面ともに平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が3層に細分され、色調は黒褐色を主体に黄褐色があり、土性はすべてシルトである。炭化物のほか異質の土粒を少量含む。自然堆積による埋没と考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

69 BVI k 25 溝跡

〔遺構〕(第329図、写真図版260)

当溝跡は、北端が調査範囲中央部のBVI区東端部に位置し、南端はBVI区の西端部に延び、全長約12.5mである。方向は、北端の調査範囲外からほぼ直線的に南東に延びる。南端はさら

に続く様相が見受けられるが、開田時に削平されたものと推定される。重複する遺構はない。検出面の幅は約 30 cm～25 cm、底面の幅約 20 cm～10 cm、深さは約 10 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分され、色調は黒色を主体に褐色があり、土性はすべてシルトである。炭化物のほか異質の土粒を少量含む。自然埋没と推測される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

⑦ BⅧf5 溝跡

〔遺構〕(第 329 図、写真図版 263)

当溝跡は、南端が調査範囲中央部の BⅧ区西端部よりに位置し、北端は BⅧ区西端部に延び、全長約 20 m である。方向は、南端からほぼ直線的に北東の調査範囲外に延びるが、南端は CⅧg3 溝跡と接続する。新旧関係は定かでない。

検出面の幅は約 55 cm～40 cm、底面の幅約 35 cm～30 cm、深さは約 20 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 4 層に細分され、色調は黒褐色と黒色であり、土性はすべてシルトである。炭化物のほか異質の土粒を少量含む。自然堆積で埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

⑧ BⅧg8 溝跡

〔遺構〕(第 330 図、写真図版 263)

当溝跡は、南東端が調査範囲中央部の BⅧ区西端部よりに位置し、北西端は BⅧ区西端部に延び、全長約 12 m である。方向は、南東端からほぼ直線的に北西の調査範囲外に延びるが、南東端はさらに続く様相が見られることから、開田時に削平された可能性が強い。BⅧh9 建物跡と重複するが、当溝跡の方が新しい。

検出面の幅は約 60 cm、底面の幅約 25 cm、深さは約 25 cm であり、断面形は壁面が底面から直

線的に外傾する浅い皿形である。壁面・底面ともに平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が4層に細分され、色調は黒褐色を主体に黒色があり、土性はすべてシルトである。粘性を持つ土層が多く、炭化物のほか異質の土粒を少量含む。自然埋没と推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

07 AXo25 溝跡

〔遺構〕(第330図、写真図版264)

当溝跡は、西端が調査範囲東部のAX区東端部のAXI区境界付近に位置し、東端はAXI区西端部に延び、全長約18mである。方向は、西端からやや南東方向にほぼ直線的に延びるが、西端は調査範囲外に延び、南東端はさらに続く様相が見られることから、開田時に削平された可能性が強い。重複する遺構はない。

検出面の幅は約30cm、底面の幅約20cm、深さは約10cmであり、断面形は壁面が底面から直立気味に外傾する浅い箱形である。壁面・底面ともに平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が3層に細分され、色調は明褐色を主体に黒褐色があり、土性は粘土質シルトとシルトである。炭化物のほか異質の土粒を多く含む。自然埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

07 AXIo4 溝跡

〔遺構〕(第330図、写真図版264)

当溝跡は、北端が調査範囲東部のAXI区西端部のAX区境界付近に位置し、南端はAXI区西端部に延び、全長約28mである。方向は、北端の調査範囲外からほぼ直線的に約24m延びた後、南西方向に方向を転んじて約4m延びる。重複する遺構はない。

検出面の幅は約30cm～25cm、底面の幅約20cm～15cm、深さは約15cm～10cmであり、断面形は壁面が底面から直線的に軽く外傾する浅い箱形である。壁面・底面ともに平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が3層に細分され、

色調は明褐色を主体に黒褐色と褐色があり、各層ともそのいずれかが混合しあう様相をなし、土性は粘土質シルトとシルトである。炭化物のほか異質の土粒を多く含む。土性から人為的に戻した可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

04 AXIw25 溝跡

〔遺構〕(第330図、写真図版265)

当溝跡は、北端が調査範囲東部のAXI区東端部でのAXI区境界付近に位置し、南端はAXI区西端部に延び、全長約15mである。方向は、北端からやや湾曲しながら南東方向に延びる。重複する遺構はない。

検出面の幅は約50cm～45cm、底面の幅約40cm～20cm、深さは約20cm～5cmであり、断面形は壁面が底面から直線的に軽く外傾する浅い皿形か凸レンズ状のボール形である。壁面・底面ともに平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が3層に細分され、色調は黒褐色を主体に黒色があり、土性はいずれもシルトである。炭化物のほか異質の土粒を多く含む。土性から人為的に戻した可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

09 AXIo4 溝跡

〔遺構〕(第330図、写真図版265)

当溝跡は、北端が調査範囲東部のAXI区西端部でAXI区境界付近に位置し、南端はAXI区西端部に延び、全長約62mである。方向は、北側調査範囲外に位置する北端から直線的に南西方向に延び、南西端も調査範囲外にさらに延びている。方形周溝遺構群の西側に接して位置するが、新旧関係は同時存在した可能性が高い。

検出面の幅は約1.3m～1m、底面の幅約75cm～65cm、深さは約40cm～35cmであり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が9層に細分され、色調は黒褐色を主体に暗褐色・黒色・黄褐色などがあり、土性はシルトのほか粘土質シル

トと砂混じりのシルトである。礫や炭化物のほか異質の土粒を多く含み、さらに火葬骨や焼土が点在する。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

⑦ AXI_o6 溝跡

〔遺構〕(第 330 図、写真図版 266)

当溝跡は、北端が調査範囲東部の AXI_区西端部に位置し、南端は AXI_区西端部に延び、全長約 48 m である。方向は、北側調査範囲外に位置する北端から直線的に南西方向へ約 25 m 延びた後、やや東に方向を転じて南東方向に約 23 m 延び、南北両端とも調査範囲外にさらに続く。方形周溝遺構群の一部と重複関係にあるが、新旧関係は同時存在した可能性が強い。

検出面の幅は約 50 cm ~ 45 cm、底面の幅約 30 cm ~ 20 cm、深さは約 30 cm ~ 20 cm であり、断面形は壁面が底面から丸味をもって外傾する凸レンズ状のボール形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 2 層に細分され、色調は黒褐色と黒色があり、土性はいずれもシルトである。礫や炭化物のほか異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

⑦ AXI_y6 溝跡

〔遺構〕(第 331 図、写真図版 262)

当溝跡は、西端が調査範囲東部の AXI_区西端部に位置し、東端は AXI_区西端部に延び、全長約 11 m である。方向は、西端からやや湾曲しながらほぼ東に延び、西端は自然消滅し東端は AXI_o8 溝跡と接続する。AXI_o6 溝跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

検出面の幅は約 30 cm ~ 25 cm、底面の幅約 20 cm ~ 15 cm、深さは約 10 cm ~ 5 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、炭化物のほか異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

08 AXI09 溝跡

〔遺構〕(第331図、写真図版266)

当溝跡は、北端が調査範囲東部のAXI区西部に位置し、南端はAXI区西部に延び、全長約47mである。方向は、北端からやや湾曲しながらほぼ南に延び、南北西端とも調査範囲外にさらに延びる。方形周溝遺構群と重複関係にあるが、新旧関係というよりは同時に存在した可能性が強い。

検出面の幅は約50cm～45cm、底面の幅約35cm～30cm、深さは約10cm～5cmであり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が3層に細分され、色調には黒褐色と暗褐色・明黄褐色があり、土性はシルトである。礫のほか炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

09 AXIq16 溝跡

〔遺構〕

当溝跡は、北端が調査範囲東端部のAXI区中央東よりに位置し、西端はAXI区の中央やや東よりに延び、全長約9mである。方向は、北端からやや湾曲しながらほぼ南に約7m延びた後、方向を西に転じて約2m続く。両端はともに崖に達している。塚と重複関係にあるが、新旧関係は当遺構の方が古い。

検出面の幅は約1m～45cm、底面の幅約70cm～30cm、深さは約20cm～15cmであり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、礫のほか炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

例 AXIr 17 溝跡-1

〔遺構〕

当溝跡は、北端が調査範囲東端部の AXI 区中央東よりに位置し、南端は AXI 区の中央やや東よりに延び、全長約 9 m である。方向は、北端からほぼ南約 2 m 延びた後、やや東に方向を転じて約 7 m 延びて AXIr 18 溝跡に接続する。重複関係にある溝跡との新旧関係は定かでない。

検出面の幅は約 80 cm～60 cm、底面の幅約 60 cm～50 cm、深さは約 20 cm～15 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、礫のほか炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

例 AXIr 17 溝跡-2

〔遺構〕

当溝跡は、西端が調査範囲東端部の AXI 区中央東よりに位置し、東端は AXI 区の中央やや東よりに延び、全長約 5 m である。方向は、北西端からほぼ直線的に南東方向に延びて AXIr 18 溝跡に接続する。重複関係にある溝跡との新旧関係は定かでない。

検出面の幅は約 50 cm～45 cm、底面の幅約 40 cm～30 cm、深さは約 20 cm～15 cm であり、断面形は壁面が底面から直線的に外傾する浅い皿形である。壁面は平坦であるが、底面には若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、礫のほか炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

82 AXr 18 溝跡

〔遺構〕(第 331 図、写真図版 267)

当溝跡は、北端が調査範囲東部の AXI 区東部に位置し、南端は AXI 区東部に延び、全長約 42 m である。方向は、北端からやや湾曲しながらほぼ南に約 28 m 延びた後軽く西に方向を転じて約 3 m 延び、南端は調査範囲外にさらに延び、北は崖に達する。塚と重複関係にあるが、当溝跡の方が古い遺構である。

検出面の幅は約 1.8 m ~ 1.7 m、底面の幅約 55 cm ~ 35 cm、深さは約 60 cm ~ 50 cm であり、断面形は壁面が底面からやや不整形に大きく外傾する開いた箱葉研形に近い形である。壁面・底面とも若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 5 層に細分され、色調には黒褐色と黄褐色・褐色・黒色があり、土性はシルトを主体に粘土がある。礫を大量に混在するほか、炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第 337 図、写真図版 506)

埋土内から土師器 2 点と須恵器 5 点の合わせて 7 点の出土である。

土師器 (第 337 図、写真図版 506)

坏 1 点と甕 1 点の出土である。

坏 (3613) - ロクロ使用成形された体部下位から底部を残す破片での出土である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整されない。

甕 (3614) - ロクロ使用成形された底部の破片である。体部の外面はヘラケズリされ、内面はナデ調整される。

須恵器 (第 337 図、写真図版 506)

甕が 5 点の出土である。

甕 (3615 ~ 3619) - 体部の破片が 5 点出土しているが、いずれも小破片であるため詳細は不明である。3615・3619 はロクロ使用成形され、外面にヘラケズリ・ロクロ目があり、内面にはナデ調整痕がある。他の 3 点は外面に並行叩き具痕、内面にカキメ・青海波文・無文の当て具痕を付す。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

83 AXIs 19 溝跡-1

〔遺構〕

当溝跡は、北端が調査範囲東部の AXI 区東部に位置し、南端は AXI 区東部に延び、全長約 3 m である。方向は、北端からほぼ直線的に南に延びる。南端は AXIs 19 溝跡-2 と接続し、北

は崖に達する。塚と重複関係にあるが、当溝跡の方が古い遺構である。

検出面の幅は約 30 cm～20 cm、底面の幅約 20 cm～15 cm、深さは約 10 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面とも若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、礫を大量に混在するほか、炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

04 AXIs 19 溝跡-2

〔遺構〕

当溝跡は、西端が調査範囲東部の AXI 区東部に位置し、東端は AXI 区東部に延び、全長約 3 m である。方向は、西端からほぼ直線的に東に延びる。中央部が AXIs 19 溝跡-1 と接続し、東西両端とも自然消滅する。塚と重複関係にあるが、当溝跡の方が古い遺構である。

検出面の幅は約 30 cm～20 cm、底面の幅約 20 cm～15 cm、深さは約 10 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿形である。壁面・底面とも若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、礫を大量に混在するほか、炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

09 AXIs 6 溝跡

〔遺構〕(第 331 図、写真図版 268)

当溝跡は、西辺の北端が調査範囲最東部の AXI 区西部に位置し、東辺の北端 AXI 区東部に延び、全長約 115 m である。方向は、西辺は北端段丘崖からやや湾曲しながらほぼ南に約 26 m 延びた後、東南東に方向を転じて約 45 m 延びてさらに北に方向を転じて約 34 m 進んで北側の段丘崖まで延びており、あたかも AXIu 10 住居跡を取り囲む様相をなしている。因みに、西辺は住居跡西壁から西約 18 m、東辺は住居跡東壁から東約 16 m、南辺は住居跡南壁から南約 13 m、北側の段丘崖まで約 10 m と、住居跡が各辺のほぼ中央に位置することは明らかであり、何らかの因果関係のあるらしいことを看取できる。住居跡の池土坑や溝跡と重複するが、当遺構

がもっとも新しい遺構である。

検出面の幅は約 65 cm～40 cm、底面の幅約 55 cm～35 cm、深さは約 40 cm～20 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する皿形や箱形に近い形である。壁面・底面とも若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 6 層に細分され、色調には黒褐色を主体に暗褐色があり、土性はシルトである。炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第 337 図、写真図版 506)

埋土内から土師器 3 点と須恵器 1 点の合わせて 4 点の出土である。

土師器 (第 337 図、写真図版 506)

坏 2 点と甕 1 点の出土である。

坏 (3620・3621) —ロクロ使用成形された体部下位から底部を残す破片と口縁部から体部を残す破片である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部の外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される個体と無調整の個体がある。

須恵器 (第 337 図、写真図版 506)

甕が 1 点の出土である。

甕 (3623) —体部の破片が 1 点出土している。外面は並行叩き具痕、内面に無文の当て具痕を付す。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

跡 AXIs 8 溝跡

〔遺構〕(第 332 図、写真図版 268・269)

当溝跡は、北端が調査範囲最東部の AXI 区中央部西よりに位置し、南端は AXI 区中央部西よりに延び、全長約 38 m である。方向は、北側の段丘崖から若干蛇行しながらもほぼ直線的に南に延びる。炭窯や溝跡と重複するが、炭窯は古く溝跡は新しい遺構である。

検出面の幅は約 1 m～80 cm、底面の幅約 70 cm～40 cm、深さは約 55 cm～45 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する箱形に近い形である。壁面・底面とも若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 6 層に細分され、色調には黒褐色と黒色を主体に極暗褐色と褐色があり、土性はシルトである。粘性を持つ層があるほか、炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第 337 図、写真図版 506)

埋土内から土師器 3 点と須恵器 9 点の合わせて 12 点の出土である。

土師器 (第 337 図、写真図版 506)

坏2点と壺1点の出土である。

坏(3624・3625)ーロクロ使用成形された体部下位から底部を残す破片と口縁部から体部を残す破片である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部外面は再調整されない個体と再調整される個体がある。内面はいずれも無調整である。

壺(3628)ーロクロ使用成形された体部下位から底部を残す小破片である。底部の切り離しはナデによって定かでない。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。

須恵器(第337図、写真図版506)

坏2点、壺5点、壺1点、瓶1点の出土である。

坏(3626・3627)ーロクロ使用成形された口縁部と体部から底部を残す破片での出土である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整であり、体部は内外面とも再調整はない。

壺(3629・3631～3634)ー体部の破片が3点、口縁部1点、体部下位から底部1点の出土である。体部破片は内外面に並行叩き具痕を付す個体と、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデされる個体がある。口縁部破片はロクロ使用成形され、口縁端部が角張る縁帯状をなし、さらに上方に突き出されて受け口状となる。底部破片は体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整される。

壺(3630)ーロクロ使用成形され内外面とも再調整のない肩部から頸部を残す破片である。器形から瓶である可能性も考えられる。

瓶(3635)ーロクロ使用成形された肩部の小破片である。詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

跡 BⅩb 11 溝跡

〔遺構〕(第331図、写真図版269)

当溝跡は、北端が調査範囲東部の AXⅩ区ほぼ中央に位置し、南端は AXⅩ区中央に延び、全長約8mである。方向は、北端が AXⅩs 6 溝跡と接続して南にほぼ直線的に延びて調査範囲外に続く。重複による新旧関係は不明である。

検出面の幅は約1m～80cm、底面の幅約40cm～30cm、深さは約60cm～25cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する皿形や不整形な形である。壁面・底面とも若干起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が3層に細分され、色調は黒褐色と黄褐色であり、土性はシルトである。粘性を持つ層が多く、炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

80 AXIb 15 溝跡

〔遺構〕(第 332 図、写真図版 268・270)

当溝跡は、北端が調査範囲東部の AXI区中央やや東よりに位置し、南端は BXI区中央やや東よりに延び、全長約 38 m である。方向は、北端が北側段丘崖であり、南端はほぼ直線的に延びて調査範囲外に続く。住居跡と溝跡が重複するが、新旧関係は住居跡は古く溝跡は新しい遺構である。

検出面の幅は約 80 cm～60 cm、底面の幅約 20 cm～15 cm、深さは約 45 cm～35 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する V 字形や箱葉研的な形状である。壁面と底面に幾分起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 7 層に細分され、色調は黒褐色を主体に暗褐色と褐色があり、土性はシルトを主体に粘土がある。炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

81 AXIc 18 溝跡

〔遺構〕(第 332 図、写真図版 268・270)

当溝跡は、北端が調査範囲東部の AXI区中央東よりに位置し、南端は BXI区中央東よりに延び、全長約 34 m である。方向は、北端が北側段丘崖であり、南端は軽く湾曲しながら延びて自然消滅伏であるが、この付近は削平を受けていることから本来は調査範囲外まで続く可能性が高い。住居跡と炭窯と重複が、そのいずれよりも新しい遺構である。

検出面の幅は約 80 cm～75 cm、底面の幅約 45 cm～40 cm、深さは約 30 cm～20 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する箱形状や皿形である。壁面と底面に幾分起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 5 層に細分され、色調は黒褐色を主体に暗褐色と褐色があり、土性はシルトを主体に粘土がある。炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

90 AXiv 22 溝跡

〔遺構〕(第 332 図、写真図版 271)

当溝跡は、北端が調査範囲東部の AXI 区東よりに位置し、南端は BXI 区東よりに延び、全長約 38 m である。方向は、北端が北側段丘崖であり、南端は軽く蛇行するものの大略直線的に南南西へ延び、南端は自然消滅状であるが、この付近は削平を受けていることから本来は調査範囲外まで続く可能性が高い。重複する遺構はない。

検出面の幅は約 60 cm～50 cm、底面の幅約 35 cm～30 cm、深さは約 20 cm～15 cm であり、断面形状は壁面が底面から外傾する箱形状や皿形である。壁面と底面に幾分起伏があり、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分され、色調は暗褐色と極暗褐色と黄褐色があり、土性はシルトと粘土である。炭化物や異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第 339 図、写真図版 506)

土師器が 2 点の出土である。

土師器 (第 339 図、写真図版 506)

環 (3636・3637) 一ロクロ使用成形された口縁部破片であるが、体部の内外面とも再調整はない。詳細は不明である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

11. 方形周溝遺構

当遺跡で方形周溝遺構と呼称したのは調査範囲東端に近い AXI 区から AXI 区から多く検出された方形に掘られた溝跡に対する名称であったが、その後類似した遺構が検出されたことからその範囲を拡大してそれらも含めて呼ぶこととした。

この遺構は、遺物の出土などから時期や性格を断定できる状況ではないが、本項では一応平安時代の遺構として説明することにするが、以下では周溝遺構と略称する。

(1) DVb 14 周溝遺構

〔遺構〕(第 333 図、写真図版 272)

当遺構は、調査範囲西端から約 378 m 東よりの DV 区中央の東よりに位置し、DVc 15 周溝遺構は南南東に約 7 m の距離がある。全長約 4 m であり、全体的な形状が半円状をなす溝跡として検出されているが、この付近が開田時に削平を強く受けているため北東部分は削平に

よって欠失したものと判断された。

検出面の幅が約 35 cm～20 cm、底面の幅約 15 cm～10 cm、深さは約 10 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する凸レンズ状のボール形である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの暗褐色シルトの単層であり、粘性があり異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(2) DVc 15 周溝遺構

〔遺構〕(第 333 図、写真図版 272)

当遺構は、調査範囲西端から約 382 m 東によった DV 区中央東よりに位置し、AXIu 24 周溝遺構は東北東に約 529 m の距離がある。全長約 5 m であり、全体的な形状が隅丸方形気味状をなす溝跡として検出されているが、この付近が開田時に削平を強く受けているため北東部分は削平によって欠失したものと判断された。重複する遺構はない。

検出面の幅が約 50 cm～30 cm、底面の幅約 25 cm～10 cm、深さは約 10 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する凸レンズ状のボール形か浅い皿状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(3) AXu 24 周溝遺構

〔遺構〕(第 334 図、写真図版 273)

当遺構は、調査範囲西端から約 921 m 東によった東端部よりの AXI 区東端部 AXI 区との境界付近に位置し、西側が AXIo 4 溝跡、AXIt 25 周溝遺構は北東に接しており、辺を共有している。重複による新旧関係は溝が新しく周溝遺構は古い遺構である。

全体が長軸約 6.6 m、単軸約 4 m の規模を持ち、平面形は隅丸長方形的である。AXIt 25 周溝遺構の南西側に付け足すように掘削された様相を示す。

検出面の幅が約 1.3 m～1 m、底面の幅約 1.1 m～70 cm、深さは約 20 cm～10 cm であり、断

面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が11層に細分されている。色調は黒褐色を主体に黒色や暗褐色・明黄褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(4) AXIt 25 周溝遺構

〔遺構〕(第335図、写真図版273)

当遺構は、調査範囲西端から約924m東によった東端部よりのAXI区東端部AXII区との境界に位置し、西側がAXIo4溝跡、AXIu1周溝遺構は南東に、そして北東にAXIs1周溝遺構と接しており、辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約6.9m、単軸約6.8mの規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸長方形である。当初は当遺構のみが単独で構築され、その後AXIs1周溝遺構が掘削された様相を示す。

検出面の幅が約1.15m～50cm、底面の幅約85cm～30cm、深さは約20cm～10cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が9層に細分されている。色調は黒褐色と黒色を主体に暗褐色・明黄褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(5) AXIs 1 周溝遺構

〔遺構〕(第336図、写真図版274)

当遺構は、調査範囲西端から約929m東によった東端部よりのAXII区西端部でAXI区西端部との境界に位置し、西側がAXIo4溝跡、AXIu1周溝遺構は南に、そして北にAXIq2周溝遺構と接しており、辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約12m、単軸約5.2mの規模を持ち、平面形は隅丸長方形である。AXIq2周溝遺構が掘削された後に南側に付け足すように掘削された様相を示す。

検出面の幅が約2 m～1.5 m、底面の幅約1.3 m～70 cm、深さは約50 cm～30 cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅いボール状である。壁面と底面に若干の起伏があるとともに、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が14層に細分されている。色調は黒褐色と黒色を主体に暗褐色・明黄褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(6) AXIu1 周溝遺構

〔遺構〕(第337図、写真図版275)

当遺構は、調査範囲西端から約929 m東によった東端部よりのAXII区西端部とAXI区との境界付近に位置し、西側がAXIt25方形周溝、AXIs1周溝遺が北側に接しており、辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約6.4 m、単軸約6.3 mの規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸長方形である。当初はAXIs1周溝遺構とAXIt25方形周溝が掘削され、次いで当遺構が南側に付け足すように掘削された様相を示す。

検出面の幅が約1.15 m～70 cm、底面の幅約75 cm～50 cm、深さは約25 cm～10 cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が8層に細分されている。色調は黒褐色と黒色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(7) AXIq2 周溝遺構

〔遺構〕(第338図、写真図版276)

当遺構は、調査範囲西端から約932 m東によった東端部よりのAXII区西端部とAXI区との境界付近に位置し、西側がAXIo4溝跡、AXIs1周溝遺が南側に、北側がAXIo3周溝遺構、東がAXIs4周溝遺構とAXIr6周溝遺構が接しており、辺を共有している。重複による新旧関係は

それぞれである。

全体が長軸約 10.3 m、短軸約 10 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸長方形である。当初は AXI^o3 周溝遺構が掘削され、次いで当遺構が南側に付け足すように掘削された様相を示す。

検出面の幅が約 1.4 m～70 cm、底面の幅約 70 cm～30 cm、深さは約 30 cm～20 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 8 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第 338 図、写真図版 501)

北西部の AXI^o3 周溝遺構との接点で須恵器の破片が出土している。

須恵器(第 338 図、写真図版 501)

甕が 1 点出土している。

甕(3639) 一体部破片であるが、内外面に並行叩き具痕と当て具痕が付される。

〔遺構の時期〕

出土した遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(8) AXI^o3 周溝遺構

〔遺構〕(第 339 図、写真図版 277)

当遺構は、調査範囲西端から約 937 m 東によった東端部よりの AXI 区西端部付近に位置し、西側が AXI^o4 溝跡、AXI^q2 周溝遺構が南側に、北側が AXI^o5 周溝遺構と接しており、辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 7.3 m、短軸約 6.4 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸長方形である。当初は AXIⁿ3 周溝遺構が掘削され、次いで当遺構が南側に付け足すように掘削された様相を示す。

検出面の幅が約 1 m～60 cm、底面の幅約 40 cm～20 cm、深さは約 25 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 8 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

南西部の AXI^q2 周溝遺構との接点で既述した遺物が出土している。

〔遺構の時期〕

出土した遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(9) AXIn 3 周溝遺構

〔遺構〕(第 340 図、写真図版 277)

当遺構は、調査範囲西端から約 939 m 東によった東端部よりの AXI 区西端部付近に位置し、西側が AXIo 4 溝跡、AXIo 3 周溝遺構が南側に、東側が AXIo 6 溝跡と接して辺を共有しており、北側は調査範囲外にさらに続く。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 7 m、単軸約 5 m 以上の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸長方形か方形と推定される。重複関係ではもっとも古い遺構である可能性がある。

検出面の幅が約 1 m～60 cm、底面の幅約 40 cm～20 cm、深さは約 20 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 7 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色の他暗褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

10 AXIs 4 周溝遺構

〔遺構〕(第 341 図、写真図版 274)

当遺構は、調査範囲西端から約 939 m 東によった東端部よりの AXI 区西端部付近に位置し、西側が AXIo 6 溝跡と AXIq 2 周溝遺構、AXIr 6 周溝遺構が北側に、東側が AXIs 6 周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 7.4 m、単軸約 7.4 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸長方形である。AXIq 2 周溝遺構の東側に付け足すように掘削されたものと考えられる。

検出面の幅が約 1.4 m～75 cm、底面の幅約 1.2 m～50 cm、深さは約 25 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 6 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色であり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕(第 338 図、写真図版 501)

周溝東部から土師器が出土している。

土師器（第338図、写真図版501）

坏が1点出土している。

坏（3662）—ロクロ使用成形された体部下位から底部を残す破片であるが、底部の切り離しが回転糸切り離し無調整で体部は内外面とも無調整である。

〔遺構の時期〕

出土遺物と埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

01 AXI_o6 周溝遺構

〔遺構〕（第342図、写真図版278）

当遺構は、調査範囲西端から約947m東によった東端部よりのAXI区西端部付近に位置し、北側がAXIn6周溝遺構、東側がAXIo7周溝遺構、南側がAXIp5周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約4.1m、単軸約4mの規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸長方形であり、南西の隅部が解放している。東・南・北に接する辺を共有し、西側だけの溝を新たに掘削して遺構としたものと推定される。

検出面の幅が約1m～70cm、底面の幅約80cm～15cm、深さは約30cm～5cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が6層に細分されている。色調は黒褐色と黒色であり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

02 AXIp5 周溝遺構

〔遺構〕（第343図、写真図版279）

当遺構は、調査範囲西端から約945m東によった東端部よりのAXI区西端部付近に位置し、北側がAXIo6周溝遺構、東側がAXIp7周溝遺構、南側がAXIr6周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約6m、単軸約5mの規模を持ち、平面形はやや歪んだ突辺気味の隅丸長方形である。重複するいずれよりも新しい遺構と考えられる。

検出面の幅が約1m～35cm、底面の幅約85cm～30cm、深さは約10cm～5cmであり、断面

形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が6層に細分されている。色調は黒褐色と黒色を主体に褐色、明褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

03 AXIn 6 周溝遺構

〔遺構〕(第344図、写真図版278)

当遺構は、調査範囲西端から約949m東によった東端部よりのAXI区西端部付近に位置し、南側がAXIo 6周溝遺構、東側がAXIn 7周溝遺構と接して辺を共有し、北側は調査範囲外にさらに続いている。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約4.65m、単軸約3.7m以上の規模を持ち、平面形はやや歪んだ突辺気味の隅丸長方形か方形と推定される。重複する遺構の中でもっとも古い遺構と推定される。

検出面の幅が約80cm～40cm、底面の幅約60cm～15cm、深さは約30cm～5cmであり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が4層に細分されている。色調は黒褐色と黒色のほか明黄褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

04 AXIr 6 周溝遺構

〔遺構〕(第345図、写真図版280)

当遺構は、調査範囲西端から約946m東によった東端部よりのAXI区西端部付近に位置し、南側がAXIs 6周溝遺構、北側がAXIp 5周溝遺構と接して辺を共有し、西側は溝が通っておらずにすべて解放している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が南北軸約4.5m、東西軸は不明の規模を持ち、平面形はやや歪んだ突辺気味の隅丸長方形か方形と推定される。重複する遺構に囲まれた空白部分を利用してもっとも最後に掘削さ

れた遺構と考えられる。

検出面の幅が約 50 cm～40 cm、底面の幅約 30 cm～25 cm、深さは約 10 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 11 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色を主体に暗褐色や黄褐色のほか明褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

09 AXIs 6 周溝遺構

〔遺構〕(第 346 図、写真図版 280)

当遺構は、調査範囲西端から約 947 m 東によった東端部よりの AXI 区西端部付近に位置し、西側が AXIs 4 周溝遺構、北側が AXIr 6 周溝遺構、東側が AXIs 7 周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 5.4 m、短軸は約 5.3 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸方形である。底面の高低差や全体的な形状から見ると、当初、当遺構が掘削された後、重複する遺構が付け足すように掘削されたものと推測される。

検出面の幅が約 90 cm～30 cm、底面の幅約 70 cm～25 cm、深さは約 20 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 9 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色を主体に暗褐色や黄褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

08 AXIn 7 周溝遺構

〔遺構〕(第 347 図、写真図版 281)

当遺構は、調査範囲西端から約 954 m 東によった東端部よりの AXI 区西部付近に位置し、西

側が AXIn 6 周溝遺構、南側が AXIo 7 周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 4.3 m、短軸は約 4 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸方形である。重複する遺構の中ではもっとも古い遺構と考えられる。

検出面の幅が約 90 cm ~ 30 cm、底面の幅約 80 cm ~ 45 cm、深さは約 15 cm ~ 5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 5 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色を主体に明黄褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

(7) AXIo 7 周溝遺構

[遺構] (第 348 図、写真図版 279)

当遺構は、調査範囲西端から約 951 m 東によった東端部よりの AXI 区西部付近に位置し、西側が AXIo 6 周溝遺構、南側が AXIq 7 周溝遺構、東側は AXIo 9 溝跡と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 5 m、短軸は約 4.6 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸方形である。重複する他遺構の方が古く、空間を利用する形で掘削された可能性がある。

検出面の幅が約 50 cm ~ 45 cm、底面の幅約 35 cm ~ 30 cm、深さは約 15 cm ~ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 4 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色を主体に鈍い黄褐色があり、土性はシルトが主体で粘土質シルトがある。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

18 AXIq 7 周溝遺構

〔遺構〕(第 349 図、写真図版 282)

当遺構は、調査範囲西端から約 950 m 東によった東端部よりの AXI 区西部付近に位置し、西側が AXIp 5 周溝遺構、南側が AXIr 6 周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 3.7 m、短軸は約 3.4 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸方形である。重複する他遺構の方が古く、空間を利用する形で掘削された可能性がある。

検出面の幅が約 50 cm～45 cm、底面の幅約 65 cm～20 cm、深さは約 10 cm～5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色であり、土性はシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

19 AXIs 7 周溝遺構

〔遺構〕(第 350 図、写真図版 275)

当遺構は、調査範囲西端から約 952 m 東によった東端部よりの AXI 区西部付近に位置し、西側が AXIs 6 周溝遺構と AXIo 9 溝跡、東側が AXIs 9 周溝遺構、北側は AXIq 8 周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 7.3 m、短軸は約 6.7 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸方形である。重複する遺構の中でもっとも新しい遺構である可能性が強い。

検出面の幅が約 1.3 m～50 cm、底面の幅約 90 cm～25 cm、深さは約 25 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色であり、土性はシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

㉑ AXIq 8 周溝遺構

〔遺構〕(第 351 図、写真図版 282)

当遺構は、調査範囲西端から約 959 m 東によった東端部よりの AXI 区西部付近に位置し、南側が AXIs 9 周溝遺構と AXIs 7 周溝遺構、北側が AXIp 9 周溝遺構と AXIp 10 周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 7.3 m、短軸は約 7 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸方形である。重複する遺構の中ではもっとも古い遺構である可能性が高い。

検出面の幅が約 1.3 m ～ 50 cm、底面の幅約 60 cm ～ 30 cm、深さは約 10 cm ～ 5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色であり、土性はシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

㉒ AXIp 9 周溝遺構

〔遺構〕(第 352 図、写真図版 283)

当遺構は、調査範囲西端から約 959 m 東によった東端部よりの AXI 区西部付近に位置し、南側が AXIq 8 周溝遺構、東側が AXIp 10 周溝遺構、北東側が AXIo 10 周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が長軸約 5.5 m、短軸は約 4.5 m の規模を持ち、平面形はやや歪んだ隅丸方形である。重複する遺構の中ではもっとも古い遺構である可能性が高い。

検出面の幅が約 1 m ～ 50 cm、底面の幅約 70 cm ～ 30 cm、深さは約 10 cm ～ 5 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 4 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色そして褐色であり、土性はシルトと粘土質シルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

Q2 AXIs 9 周溝遺構

〔遺構〕(第 353 図、写真図版 276)

当遺構は、調査範囲西端から約 959 m 東によった東端部よりの AXI 区西部付近に位置し、西側が AXIs 7 周溝遺構、北側が AXIq 8 周溝遺構と接して辺を共有し、東側は崖に延びる。重複による新旧関係はそれぞれである。

全体が南北軸約 7.2 m、東西軸は約 4 m 以上の規模を持ち、平面形は歪んだ隅丸方形か方形と推定される。重複する遺構の中ではもっとも古い遺構である可能性が高い。

検出面の幅が約 1 m ~ 50 cm、底面の幅約 90 cm ~ 20 cm、深さは約 20 cm ~ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分されている。色調は黒褐色であり、土性はシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

Q3 AXIn 10 周溝遺構

〔遺構〕(第 354 図、写真図版 281)

当遺構は、調査範囲西端から約 965 m 東によった東端部よりの AXI 区西部付近に位置し、南側が AXIo 10 周溝遺構と接して辺を共有し、北側は調査範囲外にさらに続く。重複による新旧関係は明確でない。

検出されたのが全体のほんの一部であるため全体的なことは定かでないが、検出された南北軸約 1 m、東西軸は約 1 m の規模を持ち、平面形は隅丸長方形か方形と推定される。

検出面の幅が約 70 cm、底面の幅約 25 cm、深さは約 20 cm ~ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分されている。色調は黒褐色であり、土性はシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

70 AXIc 10 周溝遺構

〔遺構〕(第 355 図)

当遺構は、調査範囲西端から約 965 m 東によった東端部よりの AXIc 区西部付近に位置し、南側が AXIp 10 周溝遺構と接して辺を共有し、東側は崖にさらに続く。重複による新旧関係は明確でない。

検出されたのが一部であるため全体的なことは定かでないが、検出された南北軸約 4.7 m、東西軸は約 1 m 以上の規模を持ち、平面形は隅丸長方形か方形と推定される。形状や底面の高低差などから重複する中でもっとも新しい遺構である可能性が高い。

検出面の幅が約 1 m ～ 70 cm、底面の幅約 75 cm ～ 30 cm、深さは約 20 cm ～ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 9 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色を主体に明褐色や黄褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

71 AXIp 10 周溝遺構

〔遺構〕(第 356 図、写真図版 283)

当遺構は、調査範囲西端から約 962 m 東によった東端部よりの AXIc 区西部付近に位置し、南側が AXIq 8 周溝遺構、西側が AXIp 9 周溝遺構、北側が AXIc 10 周溝遺構と接して辺を共有している。重複による新旧関係は明確でない。

長軸約 4 m、短軸約 3.2 m の規模を持ち、平面形は隅丸長方形である。形状や底面の高低差などから重複する中でもっとも新しい遺構である可能性が高い。

検出面の幅が約 1.5 m ～ 70 cm、底面の幅約 90 cm ～ 55 cm、深さは約 25 cm ～ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深浅と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 9 層に細分されている。色調は黒褐色と黒色を主体に黄褐色があり、土性はすべてシルトである。礫を多く混在する他、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

76 AXIs 15 周溝遺構

(遺構) (第 357 図)

当遺構は、調査範囲西端から約 986 m 東によった東端部よりの AXI 区中央部やや東よりに位置する。

東と北側が崖に延びるため全体的なことは不明であるが、南北軸約 7 m 以上、東西軸約 3.3 m 以上の規模を持ち、平面形は隅丸長方形か方形と推定される。

検出面の幅が約 1.35 m ~ 70 cm、底面の幅約 90 cm ~ 50 cm、深さは約 25 cm ~ 10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する浅い皿状か薄い凸レンズ状である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

(遺物)

出土していない。

(遺構の時期)

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

77 AXIs 20 周溝遺構

(遺構) (第 358 図、写真図版 271)

当遺構は、調査範囲西端から約 1006 m 東によった東端部よりの AXI 区東よりに位置する。

北側が崖に延びるため全体的なことは不明であるが、東西軸約 7.5 m、南北軸約 2.5 m 以上の規模を持ち、平面形は隅丸長方形か方形と推定される。

検出面の幅が約 60 cm ~ 30 cm、底面の幅約 25 cm ~ 15 cm、深さは約 25 cm ~ 20 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する皿形か箱形である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの黒褐色シルトの単層であり、異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

(遺物)

出土していない。

(遺構の時期)

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

78 AXI+ 21 周溝遺構

(遺構) (第 359 図、写真図版 272)

当遺構は、調査範囲西端から約 1010 m 東によった東端部よりの AⅩⅢ区東よりに位置する。

東西軸約 6.1 m、南北軸約 5.8 m 以上の規模を持ち、平面形は方形である。井戸跡と重複するが、当遺構の方が新しい遺構である。

検出面の幅が約 50 cm～40 cm、底面の幅約 30 cm～20 cm、深さは約 25 cm～10 cm であり、断面形は壁面が底面から外傾する皿形か箱形である。壁面と底面はほぼ平坦であるが、深淺と広狭の差が見られる。埋土は地点によって若干異なるものの全体が 3 層に細分される。色調はいずれも黒褐色であり、土性もシルトと共通する。異質の土粒を含む。自然堆積により埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の状況から平安時代の遺構と推定される。

12. 畑跡

当遺跡の発掘調査によって畑跡ではないかと推定される遺構は、調査範囲西部から検出された細長く一定の間隔で並行する位置関係を示す溝跡群一ヶ所のみであるものの、畑跡として決定的な状況証拠が得られた訳ではない。しかし、検出された状況の検討では畑跡ではないかと推定させるには、充分な状況を示していると考えられる。

(1) DIVh 18 畑跡

〔遺構〕(第 360 図、写真図版 284)

調査範囲の西端から約 294 m 東によった調査範囲西部の DIV 区東端部に位置し、北西から南東方向に延びる細長い溝跡群として検出された。住居跡との重複はないが多く、溝跡と重複しており、重複する溝跡のいずれよりも古い遺構である。

検出された溝跡は、一ブロックが 9 条、別のブロックでは 5 条ほぼ一定の間隔で並行する形で検出されている。前のブロックの溝は幅が約 20 cm～15 cm、深さ約 15 cm～10 cm、長さ約 4 m～2.5 m の溝が約 90 cm～80 cm の間隔でほぼ並行する。別のブロックの溝跡も基本的には同じであるが、間隔が約 60 cm 前後と狭い違いがある。

埋土は溝によって若干の違いがあるものの土層が 4～3 層に細分され、色調は黒褐色や暗褐色のほか褐色・極暗褐色などに分けられる。土性はすべてシルトであり、炭化物や地山起源の土粒が混入するなどの特徴がある。おそらく自然堆積で埋没したものと考えられる。

〔遺物〕(第 339 図、写真図版 508)

埋土内から土師器 2 点と須恵器 2 点の合わせて 4 点の出土である。

土師器（第 339 図、写真図版 508）

甕が 2 点の出土である。

坏（3666）－ロクロ使用成形された底部の破片である。底部切り難しは回転糸切り難し切り難し無調整で、内面は再調整されない。

甕（3665）－ロクロ不使用成形された口縁部破片であるが、小破片であるため詳細は不明である。

須恵器（第 339 図、写真図版 508）

甕の破片である。

甕（3663・3664）－体部と口縁部の破片である。体部破片は外面に並行叩き具痕、内面には放射状当て具痕を付す。口縁部破片は外面に並行叩き具痕をもってロクロ使用成形され、内面はロクロ目が付される。ともに大甕であろう。

〔遺構の時期〕

出土遺物と検出面、埋土、重複関係などから平安時代の遺構と推定される。

13. 集石遺構

当遺跡の発掘調査で、調査範囲東端に近いⅪ区とⅫ区の周溝遺構の分布する範囲から検出されている。周溝遺構との因果関係は明確にし難いが、周溝部の掘り込み内に構築される例が多いことから考えると、何らかの関連があることを示している可能性が強いものと考えている。しかし、検出された中に人歯と近世初頭の貨幣が検出されていた例があることから、時代的には近世である可能性をまったく否定できないが、ここでは取り合えず平安時代の遺構として記載することにした。

(1) AXIt 3 集石遺構

〔遺構〕（第 362 図、写真図版 285）

調査範囲の西端から約 932 m 東によった AXI 区の最西端部に位置し、AXIq 2 周溝遺構の南辺溝跡内に構築されている。新旧関係は当遺構の方が新しい遺構と言えよう。

遺構は 70 cm × 60 cm の不整形円形状に河川の転石と推定される径約 30 cm ～ 15 cm の円礫が 9 個敷き詰めたように分布している。礫は大型の 3 個が最初に置かれた後その隙間を埋めるように小型の 6 個が置かれたものであることが明確にされている。しかし、全体が何層にも亘って重ね合わせた様相は観察されていない。また、基底部の掘り込みはない。

当遺構は周溝の底面から約 3 cm ほど浮いた状態で検出されており、全体が黒褐色シルトで埋まっていた。

〔遺物〕

関連する遺物の出土はない。

〔遺構の時期〕

時代を特定することはできないが、重複関係から周溝遺構と同時かやや新しい時期の遺構と推定される。

(2) AXr4 築石遺構-1

〔遺構〕(第361図、写真図版285)

調査範囲の西端から約938m東によったAXI区の西端部よりに位置し、AXIq2周溝遺構の東辺溝跡内に構築されている。新旧関係は当遺構の方が新しい遺構と言えよう。

遺構は2m×1.5mの不整形長方形気味の範囲に河川の転石と推定される径約30cm～15cmの円礫が敷き詰められたように分布している。礫には大小様々が混在しており、周壁は場所によって2段～3段積み上げたような壁状をなしており、中心部ほどやや大きめの礫が集まる傾向がある。しかし、全体として見れば、周辺部より中心部の方が低くなっており、陥没した状況を示しているのではないかと推測された。このことから、構築当初は塚状の高まりがあり、礫はその葺き石的な性格の礫と考えられる。当遺構は周溝の底面から約10cm～3cmほど浮いた状態で検出されており、全体が黒褐色シルトで埋まっていた。また、基底部が若干掘り込まれた後構築されている。

〔遺物〕(第339図、写真図版541)

底面から人歯と貨幣が出土している。

人歯

大白歯と犬歯が合わせて5個出土しているが、顎骨はまったく残存していない。年齢・性別とも不明である。

貨幣(第339図、写真図版541)

3種類が混在する。185は中国明時代に鑄造された銅銭「永楽通寶」であり、186～188・190は日本江戸時代の寛永年代に日本で鑄造された「寛永通寶」であるし、189は銅銭である。

〔遺構の時期〕

出土した遺物の年代から江戸時代初期17世紀前半代に位置付けられる積み石を持つ墓であることが判明した。

(3) AXI4 築石遺構-2

〔遺構〕(第362図、写真図版285)

調査範囲の西端から約939m東によったAXI区の西端部よりに位置し、AXIr6周溝遺構の南辺溝跡内に構築されている。新旧関係は当遺構の方が新しい遺構と言えよう。

遺構は1.5 m × 80 cmの不整長楕円形の範囲に河川の転石と推定される径約30 cm～15 cmの円礫が敷き詰めたように分布している。礫には大小様々が混在しており、積み上げたような様相はみられないものの、中心部ほどやや大きめの礫が集まる傾向がある。しかし、全体として見れば、中心部がやや盛り上がるような様相であることも事実である。当遺構は周溝の底面から約10 cm～3 cmほど浮いた状態で検出されており、全体が黒褐色シルトで埋まっていた。また、基底部が若干掘り込まれた後構築されている。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時代の特定はできないが、周溝遺構と同時期か新しい遺構であろう。

(4) AXIs 9 集石遺構

〔遺構〕(第362図、写真図版286)

調査範囲の西端から約955 m東によったAXI区の西端部よりに位置し、AXIs 7周溝遺構の東辺溝跡内に構築されている。新旧関係は当遺構の方が新しい遺構と言えよう。

遺構は60 cm × 50 cmの不整三角形の範囲に河川の転石と推定される径約30 cm～15 cmの円礫が敷き詰めたように分布している。礫には大小様々が混在しており、積み上げた様相はまったくみられず上面はほぼ平坦である。当遺構は周溝の底面から約15 cm～10 cmほど浮いた状態で検出されており、全体が黒褐色シルトで埋まっていた。また、基底部の掘り込みは見られない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時代の特定はできないが、周溝遺構と同時期か新しい遺構であろう。

(5) AXIp 10 集石遺構

〔遺構〕(第362図、写真図版286)

調査範囲の西端から約962 m東によったAXI区の西部よりに位置し、AXIp 9周溝遺構の北辺溝跡内に構築されている。新旧関係は当遺構の方が新しい遺構と言えよう。

遺構は70 cm × 60 cmのほぼ円形状の範囲に河川の転石と推定される径約30 cm～15 cmの円礫が敷き詰めたように分布している。礫には大小様々が混在しており、数段に亘って積み上げた様相が観察されるものの上面はほぼ平坦である。当遺構は周溝の底面から約20 cm～15 cmほど浮いた状態で検出されており、全体が黒褐色シルトで埋まっていた。また、基底部の掘り込み

は見られない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時代の特定はできないが、周溝遺構と同時期か新しい遺構であろう。

14. 柱穴群

当遺跡の発掘調査によって数カ所から柱穴状小土坑が密集して分布する場所が検出されているが、掘立柱建物跡とするには規則的な配列を示す例が少なく、建物跡とする根拠に欠けること場合がほとんどであること、当遺跡は調査範囲のほとんどが水田や畑として利用されていたことから、耕作に伴う杭穴が多く検出されたことでもあり、すべての柱穴状土坑について時代や時期、性格を明確にすることは不可能である。

以上から、ここでは柱穴群として密集地点ごとに若干の説明を加えることとするが、時代的に必ずしも平安時代に属しない例が数多く含まれているものと推定されるが、明確にする資料がないことから取り合えずすべてを平安時代の遺構とした。

(1) DIV区柱穴状土坑群

〔遺構〕(袋詰図版2)

調査範囲の西端から約250m東によったDIV区のほぼ全域に約550基が密集している。住居跡や土坑類、溝跡などと重複しているが、新旧関係はそれぞれによって新旧様々であり、直接的な重複関係にないため不明な例も多い。

規模は大小様々であるが、径約50cm～15cm、深さ約35cm～10cmの規模であり、平面形は円形や楕円形をなし、方形の例はまったくない。この地点は平安時代と中世に位置付けられる掘立柱建物跡が複数検出されている地点ではあるが、建物跡として柱穴の配列がとれない柱穴状土坑である。

埋土はほとんど同じ様相をなすが、土性は黒褐色シルトか極暗褐色シルトの単層の例が多く、幾つかには柱痕跡を残す例もあるが、ほとんどは柱痕跡がない。かといって、打ち込み柱とする根拠もない状況である。

〔遺物〕(第339図、写真図版507・509)

柱穴内部から土師器4点と須恵器3点が出土している。

土師器(第339図、写真図版509)

坏2点と壺1点、小型壺1点がある。

坏(3667・3671)→ロクロ使用成形された完形と口縁部から底部までを残す破片である。底

部の切り離しは回転糸切り離し無調整と再調整がある。体部は内外面とも再調整のない個体と外面の下端がヘラケズリ調整され内面がミガキ後黒色処理された痕跡を残す個体である。底部から丸味をもって外傾する体部は、口縁端部が外反したり直立気味となる器形である。

壺(3672) - ロクロ不使用成形された頸部から体部の一部を残す破片である。外面がミガキとハケメで調整され、内面はハケメ調整される。

小型壺(3669) - ロクロ不使用成形された小型の壺である。外面がヘラナデ、内面がナデ調整される。体部が球状に膨らみ頸部で窄んだ後口縁部は外反し、端部が受け口状となる。

須恵器(第339図、写真図版507)

坏1点、壺2点が出土している。

坏(3668) - ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整の完形である。器形等は土師器の坏と同様である。

壺(3670・3673) - 体部と肩部付近の破片である。いずれもロクロ使用成形されている。

〔遺構の時期〕

出土した遺物と埋土の様相などから大多数は平安時代に位置付けられるものと推定される。

(2) BⅦ区柱穴状土坑群

〔遺構〕(袋詰図版4)

調査範囲の西端から約600m東によったBⅦ区の一画に約90基が散在する形で分布している。住居跡や土坑類、溝跡などと重複しているが、新旧関係はそれぞれによって新旧様々であり、直接的な重複関係にないため不明な例も多い。

規模は大小様々であるが、径約45cm～10cm、深さ約30cm～10cmの規模であり、平面形は円形や楕円形をなし、方形の例はまったくない。この地点は平安時代の住居跡は多く検出されているが孤立柱建物跡はまったく検出されていない地点ではあるが、建物跡として柱穴の配列がとれない柱穴状土坑である。

埋土はほとんど同じ様相をなすが、土性は黒褐色シルトか極暗褐色シルトの単層の例が多く、幾つかには柱痕跡を残す例もあるが、ほとんどは柱痕跡がない。かといって、打ち込み柱とする根拠もない状況である。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した遺物はないが、埋土の様相から大多数は平安時代に位置付けられるものと推定される。

15. 遺構外出土の遺物

当遺跡の粗掘り中に表土から出土した遺物と、遺構検出中に遺構と無関係の状態で出土した遺物を遺構外出土の遺物として本項に一括したが、実際に出土した遺物の量は多いものの、本項では特徴的な個体を選定して掲載した。

出土した遺物には土師器・須恵器・石製品・土製品・鉄製品が含まれるが、量的に多いのは土師器と須恵器である。出土した地点は住居跡の分布する範囲にほぼ限定されることから、これらの遺物の多くは集落に伴う生活遺物としての性格が推定される。

(1) 土師器 (第 340～343・347～351 図、写真図版 508～510・513～516)

全部で 157 点を掲載したが、この中には環 78 点、高台付き環 6 点、蓋 1 点、柱状高台 1 点、甕 62 点、鉢 4 点、壺 3 点、埴 2 点が含まれている。

環 (3674～3713・3720～3728・3730～3757) - 78 点の出土であるが、完形は少なくほとんどが口縁部から体部や体部から底部を残す破片での出土である。3696 を除いた 77 点はロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離しであるが、底面には無調整とヘラケズリ再調整される個体があるもの、前者が圧倒的に多い。体部の外面は下端がヘラケズリやヘラナデによる再調整される個体とまったく再調整のない個体があり、後者が主体をなす。内面はミガキ後黒色処理される個体とロクロ成形痕以外の調整のない個体が含まれ、量的には前者が多い。器形は、底部が底部から丸味を持つか直線的に外傾し、口縁端部は直線的に外傾か軽く外反する個体が多い。また、5 点の体部には「財」・「十」のほか判読不能の墨書がある。

高台付き環 (3715～3719・3758) - 6 点の出土であるが、完形は 1 点のみで、他は体部から高台を付す底部を残す破片である。すべてロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離しであり、無調整に八字状に開き踏ん張る高台が付される。高台と体部外面は無調整であるが、体部の内面はミガキ後黒色処理される個体と無処理の個体が含まれる。

蓋 (3729) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片であるが、環とも皿とも感じが異なることから蓋とした。ロクロ成形痕のみを残し再調整はない。

柱状高台 (3759) - ロクロ使用成形された高台部のみを残す破片である。

甕 (3819～3828・3832～3882・3884) - 62 点の出土であるが、この中にはロクロ使用成形の 49 点とロクロ使用成形されなかった 13 点が含まれる。完形はまったく出土せず口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。

全体的なことは定かでないが、ロクロ使用成形された個体の大型と中型では、体部の外面がヘラケズリやヘラナデのほかロクロナデ、内面がロクロナデを主体にヘラナデ調整され、底部から丸味をもって外傾する体部は中位か上位に最大径をもち、頸部でわずかに窄んだのち口縁部が大きく外反し、端部は角張る縁帯状をなして上方に挽き出されて受け口状となる器形が多

い。小型の製品は体部の内外面ともロクロナデ調整される個体が多く、底部の切り離しが回転糸切り離し無調整の例が多い。

ロクロ不使用成形の個体は、完形はなく口縁部から体部を残す破片を主体に体部から底部を残す破片での出土である。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部の外面はヘラケズリを主にヘラナデとハケメ調整され、内面はヘラナデとハケメ調整される。底部から軽く体部が膨らみ、僅かに窄む頸部から口縁部が直線的に外傾する器形をなす個体が多い。

鉢 (3831・3883・3885・3887) - 完形はなくいずれも口縁部から体部か体部下位から底部の一部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形された2点とロクロ不使用成形された2点がある。両者とも体部の外面がヘラナデやミガキ、内面はミガキ後黒色処理される。体部はやや球状に近い器形をなし、口縁部は外反する。

壺 (3886・3888・3889) - いずれもロクロ不使用成形された個体で、後2点は底部を欠失するが全体形を推定できる。口縁部は内外面ともヨコナデ、球状に膨らむ体部は外面上部がヘラナデ、下半部はヘラケズリ調整され、内面はヘラナデで調整される。

壺 (3829・3830) - ロクロ使用成形とロクロ不使用成形の口縁部から体部を残す破片での出土である。小破片のため詳細は不明である。

(2) 須恵器 (第344～346・352～361図、写真図版511～513・516～522)

環57点、高台付き環3点、蓋2点、鉢1点、壺86点、瓶7点、壺4点、双耳瓶1点が出土している。

環 (3760～3815・3983) - すべてロクロ使用成形であるが、全体を残す個体は少なく口縁部から体部か体部から底部を残す破片での出土である。底部の切り離しは回転糸切り離し無調整を主体に一部ヘラケズリ再調整と回転糸切り離し無調整と再調整が若干混在する。体部は内外面とも再調整はまったくない。器形は土師器のそれと大差がない。

高台付き環 (3816～3818) - 3点の出土であるが、完形はなく体部から高台を付す底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され底部が回転糸切り離された後、ハ字状に踏ん張る高台が付される。体部は内外面とも再調整はない。

蓋 (3914・3939) - 口縁部の小破片である。ロクロ使用成形され再調整は内外面ともないものの、器形など詳細は不明である。

鉢 (3911) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片での出土である。内面はロクロナデ痕のみであるが、外面は下半がヘラケズリ、上位がロクロナデの調整痕を持つ。全体的な器形は定かでないが、底部から丸味をもって大きく外傾する体部は、上位が直立気味となつて口縁部は頸部から大きく外反し、端部は角張りさらに上方に挽き出されて受け口状をなす。

壺 (3890～3898・3900～3910・3916・3921～3924・3927～3937・3940～3987・

3990・3991) - 全体で84点の出土であるが、完形はなく、いずれも破片での出土である。3893～3924は一部を除いてロクロ使用成形され、口縁部や体部にロクロナデ痕を残す例が多い。破片であるためすべて壺としたが、部分的な状況から判断して壺ではないかと推定される個体も含まれている。口縁部は外反し端部は角張る縁帯状をなし受け口状に作る個体と、ただ単に角張るのみの個体がある。また、一部の体部外面には並行叩き具痕があり、さらにヘラケズリ調整される。大多数の内面はヘラナデ調整される。

3927～3986は体部の破片であるが、外面に並行叩き具痕を付し、内面は無文のほか同心円や並行の当て具痕を付す大壺である。

瓶(3899・3912・3913・3915・3917・3988・3989) - 7点の出土であるが、すべて部分的な破片での出土である。ロクロ使用成形され体部外面の肩部から下位はヘラケズリ調整される個体が多く、底部には高台を付す個体もある。しかし、小破片での出土が多いため全体的なことは不明である。

壺(3914・3918～3920) - いずれもロクロ使用成形されるが、すべて破片での出土であるため詳細は不明である。

双耳瓶(3926) - 耳のみが1点出土している。面取りされ貫通孔がある。

(3) 石製品 (第362図、写真図版528・529)

砥石が5点出土している。自然石をそのまま砥石としたもの(120)と面取り成形された他とに分けられる。石材は硬質泥岩や流紋岩とディサイトや細粒凝灰岩を使用しており、良く使い磨減りが著しい。使用面を複数持つ場合が多い。

(4) 土製品 (第362図、写真図版524)

管状土鏝が6点出土している。一部は破損しているが、長さが5.3cm～3.2cm、径1.8cm～1.4cmの大きさがあり、両端が細くなり貫通孔がある。

(5) 鉄製品 (第363図、写真図版533～535・537・540・541)

20点の出土であるが、これらは主として粗掘り中に表土から出土した物であり、時代の特定や所属する遺構など不明と言わざるを得ない。したがって、これらの中には当地が開墾された後、所謂、近現代の遺物である可能性もある。この中には鉄滓を1点と鉄製品19点を含むが、器種が明確なのは釘が11点ともっとも多く、次いで鉄鎌1点のみで、他は針金状の1点と鉄板状の器種不明6点である。

釘(43・71・100～102・105・107・165・166・175・176) - 11点の出土であるが、完形は43の1点のみで、他は先端部か頭部を欠失する物が多い。頭部はすべて一方に折れ曲

がった折頭釘であり、横断面はいずれも方形をなし、先端部に向かって先細りとなる。長さは一様でないが、残存する最長13 cm以上、最短5.5 cmである。

鉄鍔(48) - 鐵身の一部と筥被そして茎の一部を残す破損品である。残存長4.4 cmで鐵身の横断面が薄い凸レンズ状をなし、茎部の断面は方形である。

針金状(104) - く字状に折れ曲がった断面円形の製品であり、全長が6.5 cm、径7 mmで、針金状である。

鉄板状(44 ~ 46 · 99 · 103 · 113) - 断面が偏平で鉄板状をなすが、器種が不明な製品である。特定の器形をなしてはおらず、厚さも1 cm ~ 2 mmである。

鉄滓(116) - 平面形が略三角形の最大径3.5 cmの小型品である。

VIII. 中世とそれ以降の遺構と遺物

当遺跡の調査で、中世に属する遺構と判断された遺構の他に、遺物の出土がないなど時期の特定ができない遺構が検出されている。本項ではそれらを一括して記述することとする。

遺構の種類としては、住居跡、掘立柱建物跡、土坑、塚、墓域、焼土があり、30基の遺構が該当する。

1. 住居跡

出土した遺物は土師器と須恵器と平安時代に属するが、遺構の特徴は平安時代の住居跡とはまったく異なる様相を示すことから、中世の住居跡と推定した。

(1) DIVI7住居跡

〔遺構〕(第363図、写真図版287)

調査範囲の西端から約249m東によつたDIV区西部に位置し、至近にはDIVI7住居跡状遺構がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

東-西約3m、南-北約2.2mの規模があり、平面形は南壁に対して北壁が約50cm長い台形滋養をなし、主軸はほぼ磁北をさす。壁高は約30cm~20cmほどであり、南壁以外の壁はほぼ直線的であり、規則的な壁と言えるが、床面に対してやや外傾している。床は基本双助第IV層の黄褐色シルトで構築され、全体的に軽い起伏があるものの踏みしめによって堅く、貼り床されることなくそのまま床面としている。壁溝は検出されていないが、壁沿いの床面からp1~p8の8基土坑が検出されている。規模は別表に記載したが、検出された土坑がすべて壁沿いに位置し、さらに四隅の他、各壁のほぼ中間に配置していることなどから、これらは当住居跡の柱穴を構成するものと考えられる。埋土は全体が8層に細分されているが、土性はシルトを主体に砂が堆積しており、色調は黒色や黒褐色と暗褐色そして黄褐色に細分される。各層とも異なる土粒の他、炭化物粒や焼土粒が混入する層が多い特徴がある。

カマドは検出されておらず、設置された痕跡は確認されていない。

〔遺物〕(第364図、写真図版507)

土師器3点と須恵器4点の合わせて7点の出土である。

土師器(第364図、写真図版507)

環1点と甕2点の出土である。

環(3994) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す破片である。外面はロクロナデのみであるが、内面はミガキ後黒色処理される。全体的な器形は定かでないが、底部から丸味を

もって外傾する体部は口縁端部が軽く外反する器形であると推測される。

壺(3999・4000)－ロクロ不使用成形された体部下位から底部を残す個体である。詳細は定かでないが、外面がヘラナデやミガキ、内面はハケメやナデの調整痕があり、底部の周囲が突出する例もある。

須恵器(第364図、写真図版507)

坏が4点の出土である。

坏(3995～3998)－いずれもロクロ使用成形され、底部の切り離しは回転糸切り離し無調整である。体部は内外面とも再調整はない。全体的な器形は不明であるが、3997の体部には「中」と判読される墨書がある。

(遺構の時期)

出土した遺物は平安時代に位置付けられるが、遺構と埋土の特徴は平安時代的ではなく、特に遺構の状況は柱配置等は中世的であることから、中世の住居跡と推定される。

2. 掘立柱建物跡

当遺跡の調査では、平安時代の建物跡の他に平安時代とは考えられない建物跡が柱穴列を含めて11棟検出されている。これらの建物跡はDⅢ区とDIV区に集中して分布するが、この地点に中世の屋敷が存在した可能性の推定される地点であることから、この屋敷跡に関連する建物跡である可能性がある。

(1) DⅢr5 建物跡

(遺構)(第364図、写真図版288)

調査範囲の西端から約144m東によつたDⅢ区の西部に位置し、重複する遺構はなく単独で検出された。

全体規模は、桁行4間で8.7m、梁行2間で5.1mで、棟方向はほぼ東－西を指し、桁行4間、梁行2間の東西棟である。桁行の4間は、北側柱列が東から2.3m+1.8m+2.65m+2mであり、南側柱列は東から2.5m+2.1m+2.5mの3間で、中央の柱列は東から2.4m+2.2m+2.1m+2.1mの4間であり、南側の柱列が他の柱列の西側が1間狭くなっている。梁行は、東側は南から1.8m+2.6mで、西側が南から2.6m+2.6mであり、両側とも北側の1間は同じであるが、南側は西側に比較して東側が60cm狭くなっている。尺貫法に換算すると、各柱列によって若干の異同はあるが、桁行は東から8尺+7尺+7尺+7尺、梁行は東側が南から6尺+8.5尺で西側は8.5尺+8.5尺と推定され、各柱列はほぼ直線的に柱が配置されているが、東側の梁行が西側より狭いことから全体が歪んでいる。また、桁行も北側が長くて南側が1間短いことも特徴である。

掘方は径約 45 cm～30 cm の平面形が円形や楕円形であり、深さは約 70 cm～60 cm を主体に計測されるが、これは北側柱列が比較的浅く、他が深い傾向による。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

(2) DⅢr8 建物跡

〔遺構〕(第 365 図、写真図版 288)

調査範囲の西端から約 157 m 東によつた DⅢ区西部に位置し、DⅢq9 溝跡と重複するが、新旧関係は当遺構の方が古い。一部の柱穴が調査範囲外に延びているため検出していない。

全体規模は、桁行 2 間で 4 m、梁行 1 間 4 m で、棟方向はほぼ東-西を指し、桁行 2 間、梁行 1 間の東西棟である。桁行の 2 間は、北側柱列が東から $2m + \alpha$ であり、南側柱列は東から $2m + 2m$ の 2 間である。尺貫法に換算すると、各柱列によって若干の異同はあるが、桁行は東から 6.6 尺 + 6.6 尺、梁行は 13.3 尺であり、各柱列はほぼ直線的に柱が配置されているが、西側の梁行が東側より広いことから全体がやや歪んだ建物と推定される。

掘方は径約 45 cm～30 cm の平面形が円形や楕円形であり、深さは約 50 cm～30 cm を主体に計測され、各柱穴によって若干の差がある。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

(3) DⅣm1 建物跡

〔遺構〕(第 366 図、写真図版 289)

調査範囲の西端から約 229 m 東によつた DⅣ区西端部に位置し、DⅢk25 住居跡の他、DⅢp22 溝跡・DⅢi23 溝跡と重複するが、新旧関係は当遺構の方が新しい遺構である。一部の柱穴が重複する住居跡の埋土内に位置することから検出していない。

全体規模は、桁行 5 間で 7 m、梁行 2 間 4.1 m で、棟方向はほぼ東-西を指し、桁行 5 間、梁

行2間の東西棟である。桁行の北側柱列は西端の柱穴が未検出のため定かでないが、東から2.1 m + 2.4 m + 2.8 mの3間と推定され、南側柱列は東から1.35 m + 1.15 m + 1.6 m + 1.65 m + 1.3 mの5間である。梁行は、東側が南から2 m + 2.1 m尺であるが、西側は南から2.25 m + 1.95 mである。尺貫法に換算すると、各柱列によって若干の異同はあるが、桁行の南側は東から4.5尺 + 4尺 + 5尺 + 5.5尺 + 4.3尺で、北側は東から7尺 + 8尺 + 7.3尺となる。梁行は東側が南から6.6尺 + 7尺であり、西側は南から7.5尺 + 6.5尺である。各柱列はほぼ直線的に柱が配置されているが、桁行の柱間寸法に違いがあることと柱間数に違いがあるなど特徴的である。

掘方は径約50 cm～30 cmの平面形が円形や楕円形であり、深さは約35 cm～30 cmを主体に計測され、各柱穴によって若干の差がある。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

(4) DIVn 4 建物跡

〔遺構〕(第367図、写真図版290)

調査範囲の西端から約242 m東によつたDIV区の西端部に位置し、DIVn 4住居跡と重複するが、新旧関係は当遺構の方が新しい。

全体規模は、桁行5間で9.5 m、梁行1間2.85 mで、棟方向はほぼ東-西を指し、桁行5間、梁行1間の東西棟である。桁行の北側柱列が東から1.3 m + 2.3 m + 2.85 m + 2.1 m + 1.1 mの5間となり、南側柱列は東から1.25 m + 2.5 m + 2.25 m + 2.4 m + 1.1 mの5間である。梁行は、東西両側とも2.85 mの1間である。尺貫法に換算すると、各柱列によって若干の異同はあるが、桁行の南側は東から4.5尺 + 8尺 + 7.5尺 + 8尺 + 3.6尺で、北側は東から4.3尺 + 7.6尺 + 9.5尺 + 7尺 + 3.6尺となる。梁行は東西両側とも9.5尺である。各柱列はほぼ直線的に柱が配置されているが、桁行の柱間寸法に違いがあることの他に、桁行の東西両端の1間が狭い特徴がある。

掘方は径約40 cm～20 cmの平面形が円形や楕円形であり、深さは約50 cm～25 cmを主体に計測され、各柱穴によって若干の差がある。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

(5) DIVm 4 建物跡

〔遺構〕(第370図、写真図版291)

調査範囲の西端から約242m東によつたDIV区の西端部に位置し、DIVk 4住居跡と重複するが、新旧関係は当遺構の方が新しい。

全体規模は、桁行3間で7m、梁行1間1.1mで、棟方向はほぼ東-西を指し、桁行3間、梁行1間の東西棟である。桁行の北側柱列が東から2.25m+2.5m+2.25mの3間となり、南側柱列は東から2.15m+2.45m+2.1mの3間である。梁行は、東西両側とも1.15mの1間である。尺貫法に換算すると、各柱列によって若干の異同はあるが、桁行の南側は東から7尺+8尺+7尺で、北側は東から7.5尺+8尺+7.5尺となる。梁行は東西両側とも3.8尺である。各柱列はほぼ直線的に柱が配置されているが、桁行の柱間寸法に違いがあること他に、桁行北側の東西両端の1間が広い特徴がある。

掘方は径約35cm~20cmの平面形が円形や楕円形であり、深さは約40cm~20cmを主体に計測され、各柱穴によって若干の差がある。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

(6) DIVf 6 建物跡

〔遺構〕(第368図、写真図版292)

調査範囲の西端から約249m東によつたDIV区の西部に位置し、DⅢp 22溝跡と重複するが、新旧関係は当遺構の方が新しい。

全体規模は、桁行5間で7.65m、梁行2間3.85mで、棟方向はほぼ南-北を指し、桁行5間、梁行2間の南北棟である。桁行の東側柱列が南から1.6m+1.65m+2.7m+1.8mの4間となり、西側柱列は南から2.2m+1.2m+1.2m+1.25m+1.75mの5間である。梁行は、南側は1.65m+1.65mの2間、北側は東から2.1m+1.8mの2間である。尺貫法に換算すると、

各柱列によって若干の異同はあるが、桁行の東側は南から5尺+5.5尺+9尺+6尺で、西側は南から7尺+4尺+4尺+4.5尺+6尺となる。梁行の南側は1.65尺+1.65尺、北側は東から7尺+6尺である。各柱列はほぼ直線的に柱が配置されているが、桁行の柱間寸法に違いがあること他に、梁行の南側と北側で広さが違う特徴がある。

掘方は径約50cm～25cmの平面形が円形や楕円形であり、深さは約50cm～20cmを主体に計測され、各柱穴によって若干の差がある。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

(7) DIVn7建物跡-1

〔遺構〕(第369図、写真図版290)

調査範囲の西端から約252m東によったDIV区の西部に位置し、DIVn7建物跡-2と重複するが、新旧関係は定かでない。

全体規模は、桁行2間で4.4m、梁行1間4.15mで、棟方向はほぼ南-北を指し、桁行2間、梁行1間の南北棟である。桁行の東側柱列が南から2.15m+1.95mの2間、西側柱列は南から2.2m+2.2mの2間である。梁行は、南側が1.8m、北側は1.7mの1間である。尺貫法に換算すると、各柱列によって若干の異同はあるが、桁行東側は南から7尺+6.5尺で、西側は南から7.3尺+7.3尺となる。梁行の南側は6尺、北側は5.8尺である。各柱列はほぼ直線的に柱が配置されているが、桁行の柱間寸法に違いがあることに起因する梁行の南側と北側で広さが違う特徴がある。

掘方は径約25cm～20cmの平面形が円形や楕円形であり、深さは約40cm～30cmを主体に計測され、各柱穴によって若干の差がある。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

(8) DIVn7 建物跡-2

〔遺構〕(第369図、写真図版287)

調査範囲の西端から約252m東によったDIV区の西部に位置し、DIVn7建物跡-1と重複するが、新旧関係は定かでない。DIVa9建物跡は北に約52mの距離がある。

全体規模は、桁行2間で3.9m、梁行2間1.95mで、棟方向はほぼ南-北を指し、桁行2間、梁行2間の南北棟である。桁行の東側柱列が南から1.8m+1.95mの2間、西側柱列は南から1.95m+1.95mの2間である。梁行は、南側が87cm+97cm、北側は1.05m+95cmの2間である。尺貫法に換算すると、各柱列によって若干の異同はあるが、桁行東側は南から8尺+6.5尺で、西側は南から6.5尺+6.5尺となる。梁行の南側は3.25尺+3.25尺、北側は3尺+3.5尺である。各柱列はほぼ直線的に柱が配置されているが、桁行の柱間寸法に違いがあることに起因する梁行の南側と北側で広さが違う特徴がある。

掘方は径約25cm~10cmの平面形が円形や楕円形であり、深さは約40cm~15cmを主体に計測され、各柱穴によって若干の差がある。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

(9) DIVa9 建物跡

〔遺構〕(第370図)

調査範囲の西端から約259m東によったDIV区の中央部やや西部に位置し、重複する遺構はなく単独で検出された。DIV18建物跡は南に約45mの距離がある。

全体規模は、桁行2間で3.95m、梁行2間2.9mで、棟方向はほぼ南南東-北北西を指し、桁行2間、梁行2間の南北棟である。桁行の東側柱列が南から1.6m+1.9mの2間、西側柱列は南から2.15m+1.8mの2間である。梁行は、南側が2.4mの1間、北側は東から1.4m+1.5mの2間である。尺貫法に換算すると、各柱列によって若干の異同はあるが、桁行東側は南から5.3尺+6.3尺で、西側は南から7尺+6尺となる。梁行の南側は8尺の1尺、北側は4.7尺+5尺である。各柱列はほぼ直線的に柱が配置されているが、桁行の柱間寸法に違いがあることに起因する梁行の南側と北側で広さが違う特徴がある。

掘方は径約40cm~30cmの平面形が円形や楕円形であり、深さは約40cm~25cmを主体に計測され、各柱穴によって若干の差がある。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は

黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

⑩ DIV18 建物跡

〔遺構〕(第371図、写真図版291)

調査範囲の西端から約256m東によったDIV区の中央部やや西部に位置し、平安時代の住居跡のほか、土坑や溝跡と重複するが、住居跡と土坑跡は古く溝跡は新しい遺構である。DIV18柱穴列は南西に約35mの距離がある。

全体規模は、桁行8間で9.5m、梁行5間6mで、棟方向はほぼ南-北を指し、桁行8間、梁行5間の南北棟である。桁行の東側柱列が南から1.2m+80cm+1m+1.1m+80cm+75cm+1.15m+2.7mの8間、西側柱列は南から1.2m+1.05m+1.2m+1.45m+1.7m+2mの6間である。梁行は、南側が東から1.4m+1m+1.2m+1.2m+1.2mの5間、北側は東から1.8m+1.2m+1.2m+1.4mの4間である。尺貫法に換算すると、各柱列によって若干の異同はあるが、桁行東側は南から4尺+3尺+3尺+3尺+3尺+3尺+3.5尺+9尺の8間、西側は南から4尺+3.5尺+4尺+5尺+5.5尺+6.6尺の6間となる。梁行の南側は東から4.7尺+3.3尺+4尺+4尺+4尺の5間、北側は東から6尺+4尺+4尺+4.7尺の4間である。各柱列の一部はほぼ直線的に柱を配置しているが、全体として見ると異同が大きく、必ずしも規則的な柱配置とは言えない状況である。特に、桁行・梁行とも相対する柱列の寸法に違いが見られ、大きく歪んだ建物跡である。また、桁行の西側と梁行の南側には共に1.2m-4尺の庇が付されている。なお、桁行北側の1間には間仕切に関連する柱が配置されている。

掘方は径約40cm~20cmの平面形が円形や楕円形であり、深さは約70cm~30cmを主体に計測され、各柱穴によって大きな差がある。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

01) DⅢr 24 柱穴列

〔遺構〕(第 372 図、写真図版 292)

調査範囲の西端から約 224 m 東によった DⅢ区の最東端部に位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。当遺構は建物跡ではなく柱穴が直線的に並んで検出され、建物跡と推定のもとに検出に努めたが建物跡とならなかったことから、柱穴列とした。

規模は、柱間 3 間で 10.1 m であり、方向は南西—北東を指す。各柱間の寸法は南から 3.5 m + 3.3 m + 3.3 m の 3 間であり、尺貫法に換算すると、各柱間によって若干の異同はあるが、南から 11.5 尺 + 11 尺 + 11 尺の 3 間となる。柱穴は直線的に柱を配置されている。

掘方は径約 40 cm ~ 35 cm の平面形が隅丸方形と楕円形であり、深さは約 15 cm ほどと平均されている。埋土はほぼ黒褐色のシルトであるが、柱痕跡部分は黒色シルトが多い。特に版築状をなす状況ではない。ほぼ中央部に円形に一部が低くなる部分が検出されているが、この部分は柱痕跡である。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる状況ではないが、平安時代の遺構と掘方の形や規模、埋土に違いが見られることから、中世かそれ以降に属するものと考えられる。

3. 土 坑

当遺跡の調査で検出された土坑類は大半が平安時代に属するものと考えられるが、遺物の出土はともかくとして、重複関係から平安時代ではなくそれ以降と判断される土坑が検出されている。ここではそのなかから中世と考えられる土坑のみを記述することとする。

(1) DIVn 10 土坑-1

〔遺構〕(第 373 図)

調査範囲の西端から約 261 m 東によった DIV区のほぼ中央やや西よりに位置し、土坑のほか平安時代の住居跡と重複している。新旧関係では住居跡より新しく土坑とは新旧様々である。

土坑との重複により全体的なことは不明であるが、底面の状況と埋土土層の観察から、残存し検出されたのは東西約 1.6 m、南北約 1 m 以上、深さ約 30 cm の規模があり、平面形は長方形か方形であったものと推定される。断面形は壁が底面から外傾する皿状に近い形状であるが、底面には若干起伏が見られる。

埋土は黒褐色シルトの単層であり、全体に暗褐色シルト粒が混在し、土器片の混入も観察される。人為的に埋め戻している可能性がある。

〔遺物〕(第364図、写真図版507)

土師器9点のほか須恵器2点の合わせて11点の出土である。

土師器(第364図、写真図版507)

坏6点と壺3点が出土している。

坏(4001～4005・4011)－6点の出土であるが、完形はまったく含まず口縁部から体部と体部から底部を残す破片での出土である。すべてロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整である。体部の外面はすべて再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理される個体と再調整のない個体がある。いずれも小破片であるため全体的なことは定かでない。

壺(4007～4009)－すべてロクロ使用成形された体部の小破片であり、外面はロクロナデ後ヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。

須恵器(第364図、写真図版507)

坏1点と瓶が1点の2点が出土している。

坏(4006)－ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整の、体部下位から底部の一部を残す小破片であるため全体的なことは不明である。

瓶(4010)－内外面ともロクロナデ調整のある肩部から頸部下端を残す破片である。

〔遺構の時期〕

重複による新旧完形と埋土の状況から中世の遺構と判断される。

(2) DIVn 10 土坑-2

〔遺構〕(第373図)

調査範囲の西端から約261m東によったDIV区のはば中央やや西よりに位置し、平安時代の住居跡とDIVn 10土坑群と重複しているが、新旧関係では重複する遺構の中ではもっとも新しい遺構である。

土坑との重複により一部明確でないが、埋土土層の観察から東西約1.5m、南北約1.9m、深さ約15cmの規模があり、平面形は隅長方形か隅丸方形であったものと推定される。断面形は壺が底面から外傾する皿状に近い形状であるが、底面には若干起伏が見られる。

埋土は上層の黒褐色シルトと下層の褐色シルトの2層であり、全体に異質の土粒が混在し、底面に礫の混入も観察される。人為的に埋め戻した可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複による新旧完形と埋土の状況から中世の遺構と判断される。

(3) DIVn 10 土坑-3

[遺構] (第 373 図)

調査範囲の西端から約 261 m 東によった DIV 区のほぼ中央やや西よりに位置し、平安時代の住居跡と DIVn 10 土坑群と重複しているが、新旧関係では住居跡よりは新しいものの土坑との関係は新旧それぞれである。

土坑との重複により一部明確でないが、埋土土層の観察から東西約 1.4 m、南北約 1.6 m 以上、深さ約 50 cm の規模があり、平面形は隅長方形か隅丸方形であったものと推定される。断面形は壁が底面から外傾する皿状に近い形状であるが、底面には若干起伏が見られる。

埋土はいずれ黒褐色シルトであるが、混入物の違いによって 3 層に細分されている。混入物には黄褐色土粒そして炭化物と焼土・暗褐色土粒などが観察される。人為的に埋め戻した可能性が高い。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

重複による新旧完形と埋土の状況から中世の遺構と判断される。

(4) DIVn 10 土坑-4

[遺構] (第 373 図)

調査範囲の西端から約 261 m 東によった DIV 区のほぼ中央やや西よりに位置し、平安時代の住居跡と DIVn 10 土坑群と重複しているが、新旧関係では住居跡よりは新しいものの土坑との関係は新旧それぞれである。

土坑との重複により一部明確でないが、埋土土層の観察から東西約 1.4 m、南北約 3.6 m 以上、深さ約 45 cm の規模があり、平面形は隅長方形か隅丸方形であったものと推定される。断面形は壁が底面から外傾する皿状に近い形状であるが、底面には若干起伏が見られる。

埋土は全体が 3 層に細分されるが、土性はシルトといずれも共通し、色調は黒褐色のほか黄褐色と黒色に分けられている。混入物には異質の土粒や炭化物と焼土などが観察される。人為的に埋め戻した可能性が高い。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

重複による新旧完形と埋土の状況から中世の遺構と判断される。

(5) DIVn 10 土坑-5

〔遺構〕(第 373 図)

調査範囲の西端から約 261 m 東によった DIV 区のほぼ中央やや西よりに位置し、平安時代の住居跡と DIVn 10 土坑群と重複しているが、新旧関係ではもっとも新しい遺構である。

土坑との重複により一部明確でないが、埋土土層の観察から東西約 1.3 m、南北約 2.6 m、深さ約 60 cm の規模があり、平面形は隅長方形か隅丸方形であったものと推定される。断面形は壁が底面から大きく外傾する覆り鉢状に近い形状であるが、底面には若干起伏が見られる。

埋土は全体が 7 層に細分されるが、土性はシルトといずれも共通し、色調は黒褐色のほか黄褐色と赤褐色・黒色に分けられている。混入物には異質の土粒や炭化物と焼土などが観察される。人為的に埋め戻した可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複による新旧関係と埋土の状況から中世の遺構と判断される。

4. 土墳墓

ここで土墳墓としたのは家畜の馬が埋葬された遺構である。

(1) DⅢ○18 土墳墓

〔遺構〕(第 374 図)

調査範囲の西端から約 193 m 東によった DⅢ区の中央やや東よりに位置し、重複する遺構もなく単独で検出された。

長軸約 4.7 m、南北約単軸 3.5 m、深さ約 1.1 m の規模があり、平面形は長楕円形である。断面形は壁が底面から直立気味に軽く外傾する箱形に近い形状であるが、底面には若干の起伏が見られる。

埋土は全体が 10 層に細分されるが、土性はシルトといずれも共通し、色調は黒褐色を主体に暗褐色に分けられるが、各層とも異質の土粒を大量に混在するほか、炭化物の混入が観察される。また、底面には巨礫が大量に埋められていた。人為的に埋め戻した可能性が強い。

底面に貼り付くように馬の骨が頭を東に向けて横たわっていたが、肋骨や下肢骨などは腐敗がすすみ残存状態良好とは言いがたい。

〔遺物〕(第 364 図、写真図版 507)

陶器 2 点、磁器 1 点、土師器 2 点、須恵器 2 点の合わせて 7 点の出土である。

陶器 (第 364 図、写真図版 507)

壺が1点と碗1点の出土である。

壺(4012) - 底部を欠失し口縁部から体部にかけて約半分を残存するロクロ成形された製品である。外面の口縁部から肩部にかけてと内面の口縁端部には黒褐色の釉薬が厚くかけられている。

碗(4013) - ロクロ使用成形され灰釉系の釉薬がかけられた口縁部から体部の一部を残す破片である。形から見て瀬戸窯産か相馬窯産の所謂丸碗と考えられる。

磁器(第364図、写真図版507)

碗が1点の出土である。

碗(4014) - 体部のみを残す破片であるが、外面に汚れた呉須で文様が描かれている。

土師器(第364図、写真図版507)

坏1点と壺1点が出土している。

坏(4015) - 1点の出土であるが、体部から底部を残す破片での出土である。ロクロ使用成形され底部の切り離しが回転糸切り離し無調整である。体部の外面は再調整されないが、内面はミガキ後黒色処理されるが、小破片のため全体的なことは定かでない。

壺(4017) - ロクロ使用成形された口縁部の小破片であり、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。

須恵器(第364図、写真図版507)

坏1点と瓶が1点の2点が出土している。

坏(4016) - ロクロ使用成形された口縁部から体部を残す残す小破片であるため全体的なことは不明であるが、内外面とも再調整はない。

瓶(4018) - 底部のみを残す破片である。ロクロ使用の有無は不明であり、内外面がヘラナデやヘラケズリで調整される。

[遺構の時期]

出土した遺物の中に近世の陶磁器を含むことから近世以降に属することは明らかである。所屬時期は18世紀頃ではないかと推定される。

5. 塚跡

調査範囲の東端に近いⅡ区から塚が5基検出されている。

(1) AXIy 10 塚(5号塚)

[遺構](第375図、写真図版294・299)

調査範囲の西端から約964m東によつたAXI区のほぼ中央に位置し、AXIq 15塚は北東に約35mの距離がある。重複する遺構もなく単独で検出された。

北西部の掘部分が道路で一部削平されているが、東西径約6m、南北径約6m、高さ約50cmほどの規模であり、平面形は楕円形的であることから構築当時は円形であった可能性が高い。現地表面の南～東～北にかけては若干疎らではあるが径約20cm～10cmの円礫が葦石状に敷き詰められたように検出されており、元々葦石が存在したものと推定される。主体部の存在を推定して検出に努めたが、主体部とおぼしき場所は確認できなかった。なお、周溝は検出されなかった。

塚の積み土は6層に細分されるが、土性はいずれもシルト、色調が黒褐色といずれも共通し、若干の黄褐色土粒が混在するほかは、特に目立つ混入物は見られない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時代を決する資料は得られなかったが、平安時代の遺構と土性が異なり、中世以降近世に属する遺構と推定される。

(2) AXIq 15 塚 (4号塚)

〔遺構〕(第376図、写真図版296)

調査範囲の西端から約984m東によったAXI区のほぼ中央東よりに位置し、AXIr 17塚は東に約9mの距離がある。溝跡や周溝遺構、火葬墓と重複するが、もっとも新しい遺構である。

西部の約半分が道路で削平されているため全体的なことは不明であるが、東西径約4m以上、南北径約9m、高さ約60cmほどの規模であり、平面形の現状は半円形状であることから構築当時は円形であったと推定される。現地表面や積み土内に円礫はまったく見られないことから構築当初から、元々葦石が存在しなかったものと推定される。主体部の存在を推定して検出に努めたが、主体部とおぼしき場所は確認できなかった。特に周溝といえる遺構は検出されなかったが、中心を若干遠える形で周溝遺構が検出されており、何らかの関連がある可能性もまったく否定できない。

塚の積み土は9層に細分されるが、土性はいずれもシルト、色調が黒褐色を主体に暗褐色といずれも共通し、若干の黄褐色土粒が混在するほかは、特に目立つ混入物は見られない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時代を決する資料は得られなかったが、平安時代の遺構と土性が異なり、中世以降近世に属する遺構と推定される。

(3) AXIr 17 塚 (3号塚)

〔遺構〕(第 377 図)

調査範囲の西端から約 991 m 東によった AXI 区の中央東よりに位置し、AXIr 18 塚は東に約 7 m の距離がある。溝跡と重複するが当遺構が新しい遺構である。

西部の約半分が調査時には既に削平されて存在しなかったことと北部が崖に接することから全体的なことは不明であるが、東西径約 4 m 以上、南北径約 6 m、高さ約 40 cm ほどの規模であり、平面形の現状は明確でないが構築当時は円形であったと推定される。現地表面や積み土内に円礫はまったく見られないことから構築当初から、元々葺石が存在しなかったものと推定される。主体部の存在を推定して検出に努めたが、主体部とおぼしき場所は確認できなかった。特に周溝といえる遺構は検出されなかった。

塚の積み土は 2 層に細分されるが、土性はいずれもシルト、色調が黒褐色といずれも共通し、若干の黄褐色土粒が混在するほかは、特に目立つ混入物は見られない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時代を決する資料は得られなかったが、平安時代の遺構と土性が異なり、中世以降近世に属する遺構と推定される。

(4) AXIr 18 塚 (2号塚)

〔遺構〕(第 378 図、写真図版 295)

調査範囲の西端から約 998 m 東によった AXI 区の中央東よりに位置し、AXIs 20 塚は東に約 7 m の距離がある。溝跡と重複するが当遺構が新しい遺構である。

北部が崖に接することから現状が完全な形なのかは不明であるが、東西径約 6.5 m、南北径約 5.5 m、高さ約 40 cm ほどの規模であり、平面形の現状から構築当時は円形であったと推定される。現地表面や表土内に疎らではあるが径約 30 cm ~ 10 cm の円礫が敷かれたような状態で検出されていることから、構築当時は葺石が存在したものと推定される。主体部の存在を推定して検出に努めたが、主体部とおぼしき場所は確認できなかった。特に周溝といえる遺構は検出されなかった。

塚の積み土は全体が 6 層に細分されるものの、土性はすべてシルト、色調が黒褐色を主体に暗褐色といずれも共通し、草木根のほか若干の黄褐色土粒が混在する以外は、特に目立つ混入物は見られない。

〔遺物〕(第 365 図、写真図版 507)

陶器が 1 点出土している。

陶器（第 365 図、写真図版 507）

表土内から灯明器が 1 点の出土である。

灯明器（4019）—足部分を欠失し、柱部分の一部と皿部分を残す。皿は口縁部が内側に大きく巻き込むように内湾し、底面の中央部には灯芯を挟み込む舌状の突起が付着する。外面には黒褐色の釉薬がかけられている。

〔遺構の時期〕

出土した灯明器は瀬戸窯や相馬窯の製品のうち 18 世紀代に類品がみられることから、18 世紀代の遺構である可能性も考えられるが、これだけで断定できないので、中世以降近世に属する遺構であることは確実であろう。

(5) AXIa 20 塚（1号塚）

〔遺構〕（第 379 図、写真図版 297）

調査範囲の西端から約 1004 m 東によった AXI 区の頭部に位置する。溝跡と重複するが当遺構が新しい遺構である。

北部が崖に接することから現状が完全な形なのかは不明であるが、東西径約 5 m、南北径約 4.5 m、高さ約 60 cm ほどの規模であり、平面形の現状から構築当時は円形であったと推定される。頂上部を中心に地表面や表土内に径約 30 cm～10 cm の円隙が敷き詰められた状態で検出されていることから、構築当時は葦石が存在したものと推定される。主体部の存在を推定して検出に努めたが、主体部とおぼしき場所は確認できなかった。特に周溝といえる遺構は検出されなかった。

塚の積み土は全体が 6 層に細分されるものの、土性はすべてシルト、色調もいずれも黒褐色と共通し、草木根のほかに若干の黄褐色土粒が混在する以外は、特に目立つ混入物は見られない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を特定できる資料は得られていないが、積み土の土性や他遺構との類似性などから中世以降—近世に位置付けられる物と推定される。

6. 焼土

当遺跡の調査では焼土遺構が 9ヶ所で検出されている。位置する場所は調査範囲全域に散在する形であるが、遺物を共伴した例がないため、時期の特定が困難であることから、取り合えず本項で考察することとする。

(1) DⅡt12 焼土

[遺構] (第 380 図)

調査範囲の西端から約 67 m 東によった DⅡ区のほぼ中央部に位置する。DⅡs11 住居跡-2 の埋土内に検出されており、検出された状況などから炉跡的な性格が想定される。

長径約 60 cm、短径約 55 cm の範囲に厚さ約 10 cm～8 cm で堆積する現地性の焼土である。焼土の周辺付近には最大径 20 cm ほどの礫が数個散在しており、その中の何個かは埋設されたと推測されたことから、本来は炉跡石であった可能性も考えられる。また、付近からは土師器なども検出されているが、重複する住居跡に伴う遺物と考えられた。

[遺物]

直接伴うと推定される遺物の出土はない。

[遺構の時期]

時期を特定できる状況ではないが、平安時代である可能性があるものの、ここでは中世以降の焼土としておく。

(2) DⅡt23 焼土

[遺構] (第 380 図、写真図版 299)

調査範囲の西端から約 112 m 東によった DⅡ区の東端部に位置する。重複する遺構もなく単独で検出された。

長径約 85 cm、短径約 70 cm の範囲に厚さ約 4 cm で堆積する現地性の焼土である。焼土の周辺部には礫など関連する施設はまったく検出されていない。端的に結論づければ焚き火跡的な焼土である。付近や焼土内から遺物の出土はない。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

時期の特定は困難であるが、中世以降に属するものと考えられる。

(3) DⅢp25 焼土

[遺構] (第 380 図、写真図版 299)

調査範囲の西端から約 222 m 東によった DⅢ区の最東端部に位置する。重複する遺構もなく単独で検出された。

長径約 70 cm、短径約 60 cm の範囲に厚さ約 5 cm で堆積する現地性の焼土である。焼土の周辺部には礫など関連する施設はまったく検出されていない。端的に結論づければ焚き火跡的な焼土である。付近や焼土内から遺物の出土はない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定できる状況ではないが、近世以降の焼土と推測される。

(4) CVIh 20 焼土

〔遺構〕(第 380 図、写真図版 299)

調査範囲の西端から約 499 m 東によった DVI 区の東端部よりに位置する。重複する遺構もなく単独で検出された。

長径約 35 cm、短径約 30 cm の範囲に厚さ約 4 cm で堆積する現地性の焼土である。焼土の周辺部に礫が 1 点埋設された状態で検出されていることから、炉縁的な性格を持つ礫の可能性はある。端的に結論づければ屋外炉的な焼土といえよう。付近や焼土内から遺物の出土はない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を明確にし難いが、中世以降の焼土と推測される。

(5) BVIt 12 焼土

〔遺構〕(第 381 図、写真図版 300)

調査範囲の西端から約 570 m 東によった BVII 区のほぼ中央に位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。

検出された焼土は長径約 43 cm、短径 38 cm のほぼ円形の範囲に広がる部分と、北西に隣接して長径約 35 cm、短径約 25 cm の略三角形に広がる部分があり、層厚は約 5 cm ほどの現地性焼土である。周辺に関連すると推定される遺構は検出されず焼土のみの遺構である。性格を明確にしがたいものの、焼き火跡的な性格の焼土と推測している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定は困難であるが、中世以降の焼土と推定される。

(6) AXIs 25 焼土

〔遺構〕(第 381 図、写真図版 300)

調査範囲の西端から約 922 m 東によった AXI 区の東端部に位置し、AXIo 4 溝跡の埋土内で

検出され、溝跡よりは新しい遺構である。また、当焼土は小範囲に広がる焼土が点在する形で分布する特徴がある。

検出された焼土は長径約 1.5 m、短径 60 cm の長楕円形状の範囲に広がり、層厚は最厚約 15 cm ほどの現地性焼土である。周辺に礫が検出されているものの、関連する遺構に伴う礫とは断定できないことから、焼土のみの遺構と考えられる。性格を明確にしたいものの、同位層の別の地点では草木灰が厚く堆積するのが確認されていることから、野焼き跡的な性格の焼土と推測している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定は困難であるが、平安時代より新しく中世以降の焼土と推定される。

(7) AXIp 3 焼土

〔遺構〕(第 382 図、写真図版 299)

調査範囲の西端から約 932 m 東によった AXI 区の西端部に位置し、AXIo 4 溝跡の埋土内で検出され、溝跡よりは新しい遺構である。また、当焼土は 2 箇所の範囲に広がる焼土が集合する特徴がある。

検出された焼土の内、北側は長径約 1.25 m、短径 40 cm、南側は長径約 1.1 m、短径約 50 cm の範囲とともに長楕円形状に広がり、層厚が最厚約 10 cm ほどの現地性焼土である。周辺から関連する礫や施設は検出されていないことから、焼土のみの遺構と考えられる。性格を明確にしたいものの、同位層の別の地点では草木灰が厚く堆積するのが確認されていることから、野焼き跡的な性格の焼土と推測している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定は困難であるが、平安時代より新しく中世以降の焼土と推定される。

(8) AXIt 5 焼土

〔遺構〕(第 382 図、写真図版 299)

調査範囲の西端から約 944 m 東によった AXI 区の西端部に位置し、AXIs 6 周溝遺構の溝内埋土で検出され、溝跡よりは新しい遺構である。

検出された焼土は長径約 1.3 m、短径 1.2 m の範囲に不整な楕円形状に広がり、層厚が最厚約 5 cm ほどの現地性焼土である。周辺から関連する礫や施設は検出されていないことから、焼土

のみの遺構と考えられる。性格を明確にしがたいものの、同位層の別の地点では草木灰が厚く堆積するのが確認されていることから、野焼き跡的な性格の焼土と推測している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定は困難であるが、同種他遺構との関連から中世以降の焼土と推定している。

(9) AXIs8焼土

〔遺構〕(第382図、写真図版299)

調査範囲の西端から約956m東によったAXI区の中央やや西よりに位置し、AXIs7周溝遺構の溝内埋土で検出され、溝跡よりは新しい遺構である。

検出された焼土は長径約50cm、短径43cmの範囲に不整な楕円形状に広がり、層厚が最厚約8cmほどの現地性焼土である。周辺から関連する礫や施設は検出されていないことから、焼土のみの遺構と考えられる。性格を明確にしがたいものの、同位層の別の地点では草木灰が厚く堆積するのが確認されていることから、野焼き跡的な性格の焼土と推測している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の特定は困難であるが、同種他遺構との関連から中世以降の焼土と推定される。

7. 墓 塚

当遺跡の調査で近世の墓塚が3基検出されている。

(1) DIIr1墓塚-1

〔遺構〕

調査範囲の西端から31m東によったDII区の西端部に位置し、DIIr1墓塚-2は南に隣接している。

墓塚は径約50cm、深さ約30cmの規模で、断面が半円状をなす土坑であるが、この土坑の内部に火葬された人骨が埋葬されていた。部位は上下肢骨のほか、肋骨や頭骨も確認されたが、焼成が強く細片となっていたことから、年齢など検討できる状況ではなかった。なお、墓塚の内壁上に焼成を受けた痕跡は確認されていないことから、別の場所であらゆる茶色にふされた後に埋葬されたものと考えられる。

〔遺物〕(第365図、写真図版542)

江戸時代の貨幣「寛永通寶」が1枚出土しているが、焼成を受けた痕跡がないことから埋葬時に副葬されたものと考えられる。

〔遺構の時期〕

出土した貨幣は江戸時代の寛永年代に日本で鑄造された貨幣であることから、17世紀前半代に属する墓塚といえよう。

(2) DⅡr1 墓塚-2

〔遺構〕

調査範囲の西端から31m東によったDⅡ区の西端部に位置し、DⅡv1 墓塚は南に約15mの距離がある。

墓塚は径約60cmの円形、深さ約40cmの規模で、断面が半円状をなす土坑であるが、この土坑の内部に火葬された人骨が埋葬されていた。部位は上下肢骨のほか、肋骨や頭骨も確認されたが、焼成のため細片が多いことから、年齢など検討できる状況ではなかった。なお、墓塚の内壁に焼成を受けた痕跡は確認されていないことから、別の場所で茶毘にふされた後この場所に埋葬されたものと考えられる。

〔遺物〕(第365図、写真図版542)

内部から中国北宋代の貨幣と日本江戸時代の貨幣を合わせて6枚の貨幣が出土している。中国北宋代の貨幣は「熙寧元寶」であるが、日本で江戸時代に鑄造された「寛永通寶」のなかには寛永年代のほかに寛文年代に鑄造された新寛永銭も含む。

〔遺構の時期〕

新寛永銭を出土していることから17世紀後半代の墓塚と推定される。

(3) DⅡv1 墓塚

〔遺構〕

調査範囲の西端から33m東によったDⅡ区の西端部に位置する。他遺構との重複はなく単独で検出された。

墓塚は径約55cmの円形、深さ約35cmの規模で、断面が半円状をなす土坑であるが、この土坑の内部に火葬された人骨が埋葬されていた。部位は上下肢骨のほか、肋骨や頭骨も確認されたが、焼成のため細片が多く、年齢など検討できる状況ではなかった。なお、墓塚の内壁に焼成を受けた痕跡は確認されていないことから、別の場所で茶毘にふされた後この場所に埋葬されたものと考えられる。

〔遺物〕(第365図、写真図版542)

内部からキセルの火皿のついた雁首と、日本で江戸時代に鑄造された貨幣「寛永通寶」が出

土している。キセルは銅製であり、薄い銅板を加工して製作している。貨幣には寛文時代に鑄造された新寛永銭と寛永時代に鑄造された古寛永銭を含む。

〔遺構の時期〕

新寛永銭の副葬から17世紀後半代の墓塚と考えられる。

8. 遺構外の出土遺物（第366図、写真図版542）

中世以降に属する遺物が遺構に伴うことなく表土から出土したのは古貨幣7枚のみである。この中には江戸時代に日本で鑄造された古寛永銭（110・111）と新寛永銭（184・191）のほか、明治時代の龍の2銭、大正年代の桐の1銭、昭和年代の鳩の1銭などが出土している。

IX. ま と め

当遺跡に対する発掘調査によって、縄文時代から近世・近代に及ぶ多くの遺構と遺物が発見されており、北上地区のみならず岩手県内でこれまでに知られている遺跡の中でも最大規模の遺跡であることが明らかとなった。特に、平安時代の集落としては岩手県最大規模の集落遺跡といえる。

以下では、発見された遺構と遺物について、時代毎に有機的に結び付けながら各時代別に若干のまとめをし、締めくくりとする。

1. 縄文時代

今回の調査では、住居跡は1棟検出された以外は土坑と陥し穴状遺構のみである。その意味では、集落遺跡と言うよりは狩猟的な性格の強い遺跡ということになるだろう。しかしながら、少量とはいえ生活遺物とも言える土器が早期から晩期まで出土していることは、今回の調査範囲からは集落の検出はなかったが、隣接する地点か至近の地点に集落跡が存在する可能性が推測されるし、その可能性が強いことは強調しておきたい。特に、今回の調査範囲を含むこの地点は、かつて畑や山林であったものが比較的新しい時期に水田にする大工事が行われており、その際に大きく掘削・削平されてしまい現在は残存していない可能性も考慮する必要がある。このことは、現在水田となっている部分では本来表土の下位に堆積するべき第Ⅱ層と第Ⅲ層を欠失し、現表土が第Ⅳ層の上に直接堆積することからも開田時に受けた削平の程度をある程度推測することができる。

以上から、隣接地や至近の地点に集落が存在する可能性を考慮しつつも、調査範囲にもかかわらず存在した可能性があることも否定できないものと考えられる。

2. 弥生時代

今回の調査では、当期に該当する遺構は調査範囲東端部から土坑が1基検出されたのみであるが、遺物は東端部のほかに西端部よりの2地点から出土しており、この遺物が出土した地点かその隣接地、または至近の地点に集落が存在する可能性が考えられる。しかし、出土した遺物の量は縄文時代のそれより少量であることから、小規模の集落であろうと推定される。時期的には前期と後期である。

3. 古墳時代

今回の調査で、まったく予想していなかった古墳7基のほか、ほぼ同時期の土壌墓が検出さ

れ、多大な成果と新資料を得ることができた。特に、角塚古墳を除くと岩手県内でも最古に属する6世紀末～7世紀初頭に位置づけられる可能性があることもさることながら、北海道の古墳時代に相当する北大式土器に多く共伴することが知られている黒曜石とその原石、剥片、拇指状円形石器が多量に出土しており、これまでに調査された古墳の様相とは異なる状況を示しており、今後の研究課題となろう。

これらの問題は、古墳としての構造的な問題もさることながら、墓としての古墳と系譜など墓制や葬制という大きな枠組みの中で考えていく必要があり、今後大きな問題を提示したことになろう。さらにまた、今回調査された分布域は北側にさらに広がる可能性を強く推測させることから、隣接地からさらに検出されることが充分に考えられる。

4. 平安時代

この時代には、非常に大規模な集落の営まれていたことが判明した。特に、検出・調査された住居跡が117棟は一遺跡としては岩手県最大であり、遺跡は調査範囲外にさらに広がっていることが確実であることから、全体で300棟近い住居跡が埋存していたことが推測される。

しかしながら、出土した遺物と遺構の特徴を詳細に分析すると、調査された住居跡すべてが同時に存在したのではなく、何時期かの集落が重複した結果として検出された状況になったことが判明した。たとえば、調査範囲のほぼ中央から東に位置するカマドが北壁のほぼ中央に設置される住居跡は、出土した遺物も古い様相を示し9世紀初頭頃の集落と推定され、この地点が当遺跡でもっとも早く集落を営んだ地点といえる。さらに、その後は西端部と東端部に相分かれるように、同時期と推定される土師器を保有する集落がある。最終的には最東端部に竪穴住居4棟と簡単な掘立柱建物が1棟の5棟からなる11世紀中葉の集落が営まれ、それが平安時代最後の集落となる。

このように、集落を営むことは住居跡だけではなく、それらの付属施設としての掘立柱建物や貯蔵穴的な土坑などが構築され、それらが有機的に結びついて集落を構成していたことは、検出された遺構の種別から見ても容易に判断される。

第3表 縄文土器観察表

	遺構名	層位	器種	部位	体部縄文	特 徴	時 期	土器型式	実測図版	写真図版
1	(AX)p18)	II層	深鉢	口縁~体部	RL横回転	体部下欠欠、肩部に最大径、口縁部縦文で直立	晩期末?	大淵A式?	3	309
2	(AX)	"	"	体部下位~底部		体部下位と底部の一部を残存	不明	不明	"	"
3	(")	"	"	"		底部が輪高台条で体部無文	"	"	"	"
4	(AX)	"	"	"					"	"
5	(AX)p18)	"	"	"	RL横回転	体部の縄文はまばらである	晩期末?	大淵A式?	"	"
6	(AX)	"	"	完 形	無文	器厚の厚い筒形をなす小型品、底部が上げ底	中期?	不明	"	"
7	(CⅤn17住)	埋土	台付鉢	体部下位~底部	"	鉢底部に大きく開く高台がつく	晩期末?	大淵A式?	"	"
8	(AX)	II層	"	完 形	LL横りまし横回転	口縁部に変形工字文、高台に沈線文	晩期末	大淵A式	"	"
9	(AX)	"	深鉢	底 部		底部を残す小破片	不明	不明	"	"
10	DⅤ14住	埋土	"	体 部	条痕文	器厚が薄く、内外面に条痕文	早期中葉	ムシリ工式	"	"
11	DⅤh7土坑	"	"	体部下位~底部	LR縦回転	尖底土器・胎土に繊維多い	前期初	早稲田Ⅵ型	"	"
12	(DⅤg10)	II層	"	体 部	0段多条LR横回転	胎土に繊維多し、補修孔あり	"	"	"	"
13	(EⅢf2)	"	"	"		胎土に繊維多し	"	"	"	"
14	(")	"	"	"			"	"	"	"
15	(EⅢf2)	埋土	"	"	LR・RL横回転条		"	"	"	"
16	(AX)	"	"	"	LR横回転		"	"	"	"
17	(")	表土	"	頸 部	沈線	頸部に隆帯と沈線で施文	前期末	大木6式	"	"
18	(")	"	"	口 縁 部	"	沈線による施文	"	"	"	"
19	(")	"	"	頸 部	隆帯と沈線	頸部に隆帯と沈線で施文	"	"	"	"
20	DⅤk25住	"	"	"	沈線	沈線による施文	"	"	"	"
21	DⅤ区溝	埋土	"	"			"	"	"	"
22	(AX)	"	"	体 部	LR横回転に沈線	地文としての縄文に半截竹管による沈線	中期	大木8a式	"	"
23	(")	II層	"	"	LR縦回転に沈線	"	"	"	"	"
24	(AX)	"	"	"	"	"	"	"	"	"
25	(AX)	"	"	口 縁 部	無文	口縁部突起部分	中期末	大木10式	"	"
26	(")	"	"	"	"	無文の口縁部	"	"	4	310
27	(")	"	"	体 部	LR縦に沈線	器表の地文を沈線で区画し磨消	"	"	"	"
28	(")	"	"	"	RL縦に沈線	"	"	"	"	"
29	(")	"	"	"	RL横に沈線	"	"	"	"	"
30	(")	"	"	"	RL縦に沈線	"	"	"	"	"
31	(")	"	"	"	LR縦に沈線	"	"	"	"	"
32	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"

	遺構名	層位	器種	部位	体部縄文	特 徴	時 期	土器型式	実測図版	写真図版
33	(AXI)	II層	深鉢	体 部	RL横に沈線	器表の地文を沈線で区画し磨消	中期末	大木10式	4	310
34	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
35	(")	"	"	"	LR横に沈線	"	"	"	"	"
36	DIVn 8住	埋土	"	口 縁 部	無節に結節回転	口縁部を肥厚させた複合口縁である	後期初	堀内I式?	"	"
37	DIVd 8住	"	"	体 部	無節継承文	器表の地文を沈線で区画磨消	"	" ?	"	"
38	(EIII f 2)	表土	"	"	"	一部に隆帯状の文様あり	" ?	" ?	"	"
39	DIVd 8住	埋土	"	"	"	器表の地文を沈線で区画磨消	"	"	"	"
40	(EIII f 2)	表土	"	口 縁 付 近	"	無文の器面に継承捺文	"	"	"	"
41	(DIII q 17)	II層	"	口 縁 部	LR横に沈線	口縁突起部に縄文と地による文様	後期末	"	"	"
42	DIII q 17 古墳	埋土	"	体 部	RL横に沈線	器表の地文を沈線で区画	後期	"	"	"
43	(C II)	表土	"	"	"	LR横に沈線	"	"	"	"
44	DIII x 15住	埋土	"	"	"	"	"	"	"	"
45	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
46	DIVn 9住	"	" ?	口 縁 部	"	"	晩期中葉	大淵C式	"	"
47	DIV v 9住	"	"	"	無文に沈線	直立する口縁に横走沈線、口縁部に刻み	"	"	"	"
48	DIVh 12住	"	"	"	無文に縦沈線	直立する無文の口縁に端部が縦刻み	"	"	"	"
49	AXIX 6住	"	壺?	体 部	無文に沈線	全面研磨に沈線で施文	"	"	"	"
50	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
51	(AXII)	表土	鉢?	"	"	"	"	"	"	"
52	(AXI)	"	"	口 縁 部	"	"	"	"	"	"
53	(AXII)	"	深鉢	"	"	"	"	"	"	"
54	(")	"	鉢	"	"	"	晩期末葉	大淵A式	"	"
55	CIIIc 18住	埋土	"	"	"	"	"	"	"	"
56	AXIX 6住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
57	(AXI)	表土	壺	"	"	"	"	"	"	"
58	DIVk 6溝	埋土	鉢	"	"	"	"	"	"	"
59	DIVe 24住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
60	DIVr 5住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
61	(AXI)	表土	"	"	LR横の口縁部無文	口縁部波状	"	"	"	"
62	CIIIc 18住	埋土	"	"	無文に沈線	変形工字文・弥生の可能性あり	"	"	"	"
63	DIVj 1住	"	"	"	"	口縁部突起をもつ破片	"	"	"	"
64	(AXI)	"	"	"	"	変形工字文	"	"	"	"
65	(DIII b 11)	II層	"	"	"	"	"	"	"	"
66	DIII k 25住	埋土	"	"	"	"	"	"	"	"

67	DIVr 4 住	埋土	鉢	口縁部	無文に沈線	変形工字文	晩期未葉	大洞A'式	4	310
68	DIVn 10 土坑	"	削脚の鉢	台 部	無文	無文に隆帯	"	"	5	"
69	(AXI)	表土	台付鉢	台 部	無文に沈線	無文の器面に沈線で施文	晩期末	"	"	311
70	(AXI)	"	深鉢	体 部	RL 縦	粗製土器	中期?	不明	"	"
71	(DII t 6)	"	"	"	LR 横	"	" ?	"	"	"
72	(AXI)	"	"	"	RL 縦	"	"	"	"	"
73	(")	"	"	"	LR 縦	"	"	"	"	"
74	DIVj 20 溝	埋土	"	"	O 段多条 LR 横	"	"	"	"	"
75	(AXI)	表土	"	"	RL 縦	"	"	"	"	"
76	DIVk 6 溝	埋土	"	"	"	"	"	"	"	"
77	(EIII f 2)	表土	"	"	O 段多条 RL 横	"	後期?	"	"	"
78	DIVr 8 土坑	埋土	"	"	"	"	"	後期?	"	"
79	DIII j 2 溝	"	"	"	O 段多条 LR 横	"	晩期?	"	"	"
80	(AXI)	表土	"	"	木目状燃承文	" 結節回転あり	不明	"	"	"
81	"	"	"	"	RL 横	"	"	"	"	"
82	DIVl 23 住	埋土	"	"	羽状縄文	" LR 縦と燃炭 RR	"	"	"	"
83	(AXI)	表土	"	"	R 縦燃文	"	"	"	"	"
84	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
85	(DIII q 17)	II 層	"	"	RL 縦	"	"	"	"	"
86	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
87	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
88	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
89	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
90	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
91	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
92	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
93	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
94	DIII x 15 住	埋土	意?	"	無文	精製土器体部破片	晩期	"	"	"
95	AXIy 3 住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
96	DIII x 15 住	"	鉢?	"	"	"	"	"	"	"
97	(AXI)	表土	深鉢	底 部	網代底	粗製土器	不明	"	"	"
98	(")	"	"	"	"	"	"	"	"	"
99	DIVv 9 住	埋土	"	"	無文	"	"	"	"	"
100	DIVl 4 住	"	鉢	体部~底部	RL 斜	精製土器	晩期	"	"	"
101	(AXI)	表土	"	"	LR 横	"	"	"	"	"

	遺構名	層位	器種	部 位	体部縄文	特 徴	時 期	土器型式	実測図版	写真図版
102	DIV1 4住	埋土	深鉢	体部~底部	LR横	粗製土器	不明	不明	5	311
103	(DIIIq 18)	II層	"	"	無文	"	後期?	"	"	"
104	AXIu 20住	床直	"	体 部	RL横回転		中期?	"	1	301
105	"	"	"	"	"		"	"	"	"
106	DIII t 13土坑	埋土	小型土器	底 部	無文	輪高台状の底部	後期?	"	"	"

第4表 弥生土器観察表

	遺構名	層位	器種	部 位	体部縄文	特 徴	時 期	土器型式	実測図版	写真図版
1	(AXIo 19)	表土	広口壺	略完形	LR斜回転	横走卑脚斜行縄文、口縁無文	前期	谷起尾式?	20	312
2	(")	"	"	口縁~体部	LR横~斜回転	頸部に1条の横走沈線、口縁無文	"	"	"	"
3	(AXIX区)	"	"	"	LR斜回転	頸部と口唇部に横走沈線	"	"	"	"
4	(BXIX区)	"	"	口縁~底部	"	"	"	"	"	"
5	CVIe 24土	埋土	広口壺	口縁~体部	LR横回転	頸部に沈線状の段、口縁無文	"	"	"	"
6	AXIu 5住	"	不明	口 縁 部	無文	小波状口縁・口唇は指頭押圧	"	"	"	"
7	(DIIu 3)	表土	広口壺	口縁~体部	LR横回転	頸部に段、口縁部無文	"	"	"	"
8	不明	"	"	口 縁 部	"	内面の端部に沈線	"	"	"	"
9	BVII d 15住	埋土	鉢	"	"	内外面に沈線による施文	"	"	"	"
10	DVI b 12住	"	"	"	"	波状となり、口唇に沈線	"	"	"	"
11	(AXIX区)	表土	"	"	"	" 変形工字文	"	"	"	"
12	DIV1 4住	埋土	"	"	"	無文に沈線	"	"	"	"
13	BXI b 15住	"	"	口縁部~体部	LR横回転	口唇部に沈線文	"	"	"	"
14	DIV b 12住	"	"	"	"	磨消縄文	"	"	"	"
15	BXI e 15住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
16	AXI y 1住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
17	DIII r 12住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
18	(AXIX区)	表土	"	"	"	無文の器表に沈線文	"	"	"	"
19	DIV1 4住	埋土	"	"	"	"	"	"	"	"
20	DIV b 12住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
21	DIV1 4住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
22	BVII 10住	"	台付鉢	台 部	"	沈線部を施文	"	"	"	"
23	(AXIX区)	表土	"	"	"	"	"	"	"	"
24	CVI c 18住	埋土	"	"	"	"	"	"	"	"
25	AXI y 3住	"	"	"	"	"	"	"	"	"
26	(AXIX区)	表土	鉢	底 部	LR横回転羽条	"	"	"	"	"

27	(AXI区)	表土	鉢	体部~底部	R 摺糸文	地文のみ	後・晩期	天王山式系	20	312
28	BWb 15 住	埋土	"	口縁部		無文に沈線文、口唇に刻み	"	"	21	"
29	CVx 15 住	"	"	体部	LR 横回転	山形沈線文	"	"	"	"
30	DIVi 5 住	"	"	口縁部	RL 横回転	縄文の表面に沈線	"	"	"	"
31	"	"	"	体部	RL 横回転	"	"	"	"	"
32	"	"	"	"	"	"	"	"	"	313
33	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
34	不明	表土	壺?	"		器表に沈線と刺突文	"	"	"	"
35	AXIq 18 住	埋土	鉢	口縁部	RL 横回転	"	"	"	"	"
36	不明	表土	"	"	LR 横回転	口唇部が角形	"	"	"	"
37	DIVb 12 住	埋土	"	"	"	"	"	"	"	"
38	BXIb 3 住	床直	"	"	"	"	"	"	"	"
39	AXIy 1 住	埋土	"	"	"	"	"	"	"	"
40	BXIb 15 住	"	"	"	LR付加条線回転	端部に指頭押圧刻目	"	"	"	"
41	不明	表土	"	"	RL 横回転	"	"	"	"	"
42	"	"	広口壺	"	無文	"	"	"	"	"
43	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
44	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
45	DIVp 11 住	埋土	"	"	"	頸部に段	"	"	"	"
46	DIIIw 7 住	"	鉢	口縁~体部	LR 斜回転	口頸部が無文	"	"	"	"
47	不明	表土	"?	口縁部	無文	"	"	"	"	"
48	"	"	壺?	"	"	端部に横走沈線	"	"	"	"
49	"	"	"?	"	"	口唇に横走沈線	"	"	"	"
50	AXIy 3 住	埋土	鉢?	"	"	"	"	"	"	"
51	DIVp 3 住	"	"?	"	"	一部に条痕あり	"	"	"	"
52	不明	表土	深鉢	体部	LR 横回転	"	"	"	"	"
53	DIVi 7 住	埋土	"	"	"	"	"	"	"	"
54	不明	表土	"	"	LR・RL付加条線回転	"	"	"	"	"
55	"	"	"	"	LR 横回転	"	"	"	"	"
56	DIVj 8 住	埋土	"	"	摺糸文	"	"	"	"	"
57	不明	表土	"	"	"	"	"	"	"	"
58	"	"	"	"	RL 横回転	"	"	"	"	"
59	(AXI区)	"	"	"	摺糸文	"	"	"	"	"
60	(CII区)	"	"	"	LR 横回転	"	"	"	"	"
61	AXIy 3 住	埋土	"	"	RL 横回転	"	"	"	"	"

	遺構名	層位	器種	部位	体部縄文	特 徴	時 期	土器型式	実測図版	写真図版
62	DIVq 2 住	埋土	深鉢	体 部	RL 縦回転		後・晩期	天王山式系	21	313
63	DIVv 9 住	"	"	"	不明		"	"	"	"
64	DIVb 12 住	"	"	"	LR 横回転		"	"	"	"
65	不明	表土	"	"	"		"	"	"	"
66	(AXI区)	"	"	"	RL 縦回転		"	"	"	"
67	不明	"	"	"	"		"	"	"	"
68	DIVc 9 住	埋土	"	"	"		"	"	"	"
69	不明	埋土	鉢	"	RL 横回転	内面にも RL 横回転の縄文あり	"	"	"	"
70	"	"	"	"	RL 斜回転		"	"	"	"
71	AXIIx 6 住	"	"	"	惣糸文		"	"	"	"
72	不明	表土	"	"	RL 縦回転		"	"	"	"
73	"	"	"	"	RL 横回転		"	"	"	"
74	"	"	"	"	RL 横回転		"	"	"	"
75	"	"	"	"	惣糸文		"	"	"	"
76	"	"	"	"	"		"	"	"	"
77	"	"	"	"	"		"	"	"	314
78	(DIIIp 12)	"	"	"	RL 横回転		"	"	"	"
79	(")	"	"	"	RL 縦回転		"	"	22	"
80	不明	"	"	"	RL付加条横回転		"	"	"	"
81	AXIIy 3 住	埋土	"	"	LR付加条横回転		"	"	"	"
82	不明	表土	"	"	惣糸文		"	"	"	"
83	"	"	"	"	"		"	"	"	"
84	BXIIA 18 住	埋土	"	"	RL付加条横回転		"	"	"	"
85	不明	表土	"	"	LR付加条斜回転		"	"	"	"
86	AXIIy 3 住	埋土	"	"	RL 斜回転		"	"	"	"
87	"	"	"	"	惣糸文		"	"	"	"
88	(DIII区)	表土	"	"	RL 斜回転		"	"	"	"
89	不明	"	"	"	惣糸文		"	"	"	"
90	AXIIx 6 住	埋土	"	"	"		"	"	"	"
91	"	"	"	"	"		"	"	"	"
92	不明	表土	"	"	LR 付加斜回転		"	"	"	"
93	"	"	"	"	"		"	"	"	"
94	AXIIb 8 溝	埋土	"	"	"		"	"	"	"
95	AXIIx 6 住	"	"	"	惣糸文		"	"	"	"

31	20	DW1住	埋土	土	須					(5.7)					ロクロナデ ・ケズリ	ロクロナデ	固糸盤	ナデ	58	334	
32	21	"	埋土	須	須	○				(15.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
33	22	"	埋土	須	須	○				(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
34	23	"	埋土	土	須	○									ケズリ	ナデ				"	"
35	24	"	埋土	須	須	○									ケズリ	ロクロナデ				"	"
36	1	DW2住	床No1	土	須 (6.0)	○				14.7	4.2	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固糸盤	ナデ	ロクロナデ	59	"
37	2	"	床No1	土	須 (6.0)	○				14.4	5.3	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固糸盤	ナデ	ロクロナデ	"	"
38	3	"	床No2	土	須 (6.0)	○				13.5	5.5	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固糸盤	ナデ	ロクロナデ	"	"
39	4	"	埋土	土	須 (6.0)	○				(13.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
40	5	"	埋土	土	須 (6.0)	○				(13.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	335
41	6	"	埋土	土	須 (6.0)	○				(15.1)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
42	7	"	埋土	土	須 (6.0)	○					5.8				ロクロナデ	ロクロナデ	固・糸・盤	ナデ	ロクロナデ	"	"
43	8	"	床No3	土	須					(18.1)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
44	9	"	床No4	土	須	○				(14.1)	(7.2)	(13.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固・糸・盤	ナデ	ロクロナデ	"	"
45	10	"	埋土	須	須										並行タナキ	同心円アテ				"	"
46	11	"	埋土	須	須	○							ロクロナデ	ロクロナデ						"	"
47	12	"	床下	須	須	○									ロクロナデ ・ケズリ	ロクロナデ				"	"
48	1	EW3-1住	埋土	土	須	○				(20.8)			ナデ	ヨコナデ	ケズリ	ヘラナデ				60	+
49	2	"	埋土	土	須	○				(20.4)			ヨコナデ	ナデ	ケズリ	ヘラナデ				"	+
50	3	"	埋土	土	須	○				(11.4)			ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ヘラナデ				"	"
51	4	"	埋土	土	須	○				(12.5)			ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	ナデ				"	"
52	5	"	埋土	土	須	○									ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
53	6	"	埋土	須	須	○									並行タナキ	ロクロナデ				"	"
54	1	EW3-2住	上	土	環	○				(15.1)	6.3	5.0	ロクロナデ	1ボキ・内盤	ロクロナデ	1ボキ・内盤	固・糸・盤	1ボキ・内盤		61	"
55	2	"	埋土	土	環	○				(15.7)			ロクロナデ	1ボキ・内盤	ロクロナデ	1ボキ・内盤				"	"
56	3	"	上	土	環	○					6.5				ロクロナデ	1ボキ・内盤	固・糸・盤	1ボキ・内盤	"	336	
57	4	"	埋土	土	須 (6.0)	○					(6.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	固・糸・盤	ナデ	ロクロナデ	"	"
58	5	"	埋土	土	須	○				(22.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・ケズリ	ヘラナデ				"	"
59	6	"	埋土	土	須	○				(23.1)			ロクロナデ	ヨコナデ	ナデ・ケズリ	ハケメ				"	"
60	7	"	埋土	土	須	○				(13.2)			ロクロナデ	ヨコナデ	ロクロナデ	ナデ				"	"
61	8	"	埋土	土	須	○					(7.2)				ケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	"	"
62	9	"	埋土	土	須	○				(15.7)	(7.0)				ナデ・ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ		"	"
63	10	"	埋土	土	須	○					(7.6)	13.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固・糸・盤	ナデ		"	"
64	11	"	埋土	須	須										ケズリ	ナデ				"	"
65	12	"	床底	須	大須										並行タナキ	並行アキ				"	"

No	旧No	道橋名	附位	種類	形状	法				調査				写真	備考			
						口径	管径	底径	蓋高	L3		調査				底	部	
										外面	内面	外面	内面					
66	13	E11a3-2住	埋土	須	大管										61	336		
67	14	"	床面	須	大管											"		
68	1	D11x6住	床No3	土	環	○	14.4		7.0	5.2	ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	62	"
69	2	"	床No3	土	環	○	(13.4)				ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風			"	"
70	3	"	床No9	土	環	○	(14.5)		5.6	4.9	ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	"	"
71	4	"	支脚	土	環	○	15.6		6.6	6.3	ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風	不明・ナズリ	1.5寸・内風	"	"
72	5	"	黄口	土	環	○	(14.0)		5.4	5.0	ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	"	"
73	6	"	主梁	土	環	○	(14.9)		(6.2)	4.9	ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	"	"
74	7	"	埋土	土	環	○	(14.0)				ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風			"	337
75	8	"	埋土	土	環	○	(15.1)				ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風			"	"
76	9	"	埋土	土	環	○	(14.9)				ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風			"	"
77	10	"	床面	土	環	○	(14.0)				ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風			"	"
78	11	"	埋土	土	環	○			6.1				ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	"	"
79	12	"	埋土	土	環	○			5.4				ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	"	"
80	13	"	黄口部	土	環	○			(6.9)				ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	"	"
81	14	"	床No11	土	環	○			6.1				ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	"	"
82	15	"	床No4	土	高砂	○			8.2				ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	"	"
83	16	"	床No12	土	高砂	○			6.6				ロクロナデ	1.5寸・内風	不明・高台	1.5寸・内風	"	"
84	17	"	床No15	土	高砂	○			7.6				ロクロナデ	1.5寸・内風	回・糸・鎖	1.5寸・内風	"	"
85	18	"	埋土 (C=1.0)	土	環	○	(12.3)		5.2	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・鎖	ロクロナデ	"	"
86	19	"	埋土 (C=1.0)	土	環	○			5.2				ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・鎖	ロクロナデ	"	"
87	20	"	埋土	土	環	○	(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
88	21	"	埋土	土	環	○			5.8				ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・鎖	ロクロナデ	"	"
89	22	"	埋土	土	環	○	(10.9)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
90	23	"	埋土	土	環	○	(13.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	63
91	24	"	床No17	須	環	○			(5.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・鎖	ロクロナデ	"	"
92	25	"	床No12	須	環	○	(13.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
93	26	"	床No17	須	環	○			(5.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・鎖	ロクロナデ	"	"
94	27	"	埋出口	須	環	○	(14.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
95	28	"	埋土	須	環	○	(14.6)		(6.4)		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・鎖	ロクロナデ	"	"
96	29	"	埋土	土	脚	○	(16.3)				ロクロナデ	1.5寸・内風	ロクロナデ	1.5寸・内風			"	"
97	30	"	床No2	土	環	○	(21.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"

185	29	DII-7-1住	カマド	土	塼	○	(18.6)				ヨコナデ	ヨコナデ							70	342
186	30	"	床No23	土	塼	○	(18.0)				ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	ナデ					"	"
187	31	"	床No20	土	塼	○		(7.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・簀		ロクロナデ	"	"	
188	32	"	カマド	土	塼	○		(6.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・簀		ロクロナデ	"	"	
189	33	"	床No24	土	塼	○		(7.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・簀		ロクロナデ	"	"	
190	34	"	カマド	土	塼	○?		8.4							不明・ナデ		ナデ	"	"	
191	35	"	床No18	土	塼	○		(7.0)						ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
192	36	"	床No15	土	塼	○	(27.0)				ヨコナデ	ナデ	ケズリ	ナデ	不明・ナデ			"	"	
193	37	"	床No6	須	塼								ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
194	38	"	カマド	須	塼									ケズリ	ナデ			"	"	
195	39	"	礎土	須	大塼									遊行タタキ	簀・文アテ			"	"	
196	1	DII-7-2住	床No4	土	塼	○	14	5	4.8	ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風	回・糸・簀		ミダ・内風	71	"	"	
197	2	"	P11	土	塼	○	13.7	8	4.9	ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風	回・糸・簀		ミダ・内風	"	"	"	
198	3	"	カマド	土	塼	○	13.6	5.6	5.5	ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風	回・糸・簀		ミダ・内風	"	"	"	
199	4	"	礎土	土	塼	○	(13.0)	(6.8)	4.8	ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風	回へラ?		ミダ・内風	"	"	"	
200	5	"	P11	土	塼	○	(15.2)	(6)	4.3	ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風	不明		ミダ・内風	"	"	"	
201	6	"	P11	土	塼	○	(14)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
202	7	"	カマド	土	塼	○	(14)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	343	"	
203	8	"	礎土	土	塼	○	(15)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
204	9	"	P11-9	土	塼	○	(17)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
205	10	"	P11-3	土	塼	○	(13.4)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
206	11	"	礎土	土	塼	○	(14.8)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
207	12	"	礎土	土	塼	○	(14.0)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
208	13	"	P11-9	土	塼	○	(14.4)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
209	14	"	礎土	土	塼	○	(18.0)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
210	15	"	床No3	土	塼	○	(12.0)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
211	16	"	P11-9	土	塼	○	(14.0)			ロクロナデ	ミダ・内風	ロクロナデ	ミダ・内風				"	"	"	
212	17	"	P11-6	土	塼	○		(6)					ロクロナデ	ミダ・内風	回・糸・簀		ミダ・内風	"	"	
213	18	"	礎土	土	塼	○		7.0					ロクロナデ	ミダ・内風	回・糸・簀		ミダ・内風	"	"	
214	19	"	カマド	土	塼	○	14.5	7.2	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回落不明		ロクロナデ	"	"	"	
215	20	"	カマド	須	塼	○	(15.0)	5.6	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・簀		ロクロナデ	"	"	"	
216	21	"	カマド	須	塼	○	(14.0)	6.0	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・簀		ロクロナデ	"	"	"	
217	22	"	礎土	須	塼	○	(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	"	
218	23	"	礎土	須	塼	○	(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	72	"	
219	24	"	P11-3	須	塼	○	(16.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	"	

No	HNo	道 橋 名	鋼 位	橋 種	部 種	成 形	法 規					調 査 技 法						既 販	写 真	備 考	
							ロクロ	オロロ	(m)	(m)	(m)	(m)	L1 経 部		経 部		成 部				
													外 部	内 部	外 部	内 部	切 離 し				内 部
200	25	DH#7-2作	鋼	環	○		(15.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			72	343	
201	26	"	鋼	環	○		(13.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
202	27	"	鋼	環	○		(16.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
203	28	"	鋼	環	○				(6.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	鋼・糸・鋼	ロクロナデ	"	"	
204	29	"	鋼	環	○				(6.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	鋼・糸・鋼	ロクロナデ	"	"	
205	30	"	鋼	環	○				(5.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	鋼・糸・鋼	ロクロナデ	"	"	
206	31	"	鋼	環	○				(4.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	鋼・糸・鋼	ロクロナデ	"	"	
207	32	"	鋼	環	○		20.1						ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ナデ			"	"	
208	33	"	鋼	環	○		(21.7)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ			"	"	
209	34	"	鋼	環	○		(20.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ			"	"	
210	35	"	鋼	環	○		(24)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ			73	344	
211	36	"	鋼	環	○		(22.0)		(8.6)	(21.1)			ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ナデ	欠欠	不明	"	"	
212	37	"	鋼	環	○		(20.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ナデ			"	"	
213	38	"	鋼	環	○		(25.3)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
214	39	"	鋼	環	○		(21.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
215	40	"	鋼	環	○		(21.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ			"	"	
216	41	"	鋼	環	○		(22.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
217	42	"	鋼	環	○		(21.9)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
218	43	"	鋼	環	○		(24.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			74	"	
219	44	"	鋼	環	○		(16.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			73	"	
220	45	"	鋼	環	○		(17.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			74	"	
221	46	"	鋼	環	○		(19.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
222	47	"	鋼	環	○		(14.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
223	48	"	鋼	環	○		(18.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
224	49	"	鋼	環	○		(17.4)						ナデ	ナデ	ケズリ	ナデ			"	"	
225	50	"	鋼	環	○?										ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
226	51	"	鋼	環	○				(8.0)						ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
227	52	"	鋼	環	○				(8.0)						ケズリ	ナデ	鋼・糸・?	ナデ	"	"	
228	53	"	鋼	環	○				(7.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	鋼・糸・鋼	ロクロナデ	"	345	
229	54	"	鋼	環	○				(8.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	鋼・糸・鋼	ロクロナデ	"	"	
230	55	"	鋼	環	○				(4.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ケズリ	ロクロナデ	"	"	
231	56	"	鋼	環	○				(7.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	鋼・糸・鋼	ロクロナデ	"	"	

232	57	DII7-2住	カマド	土	壁	○				(9.0)					ケズリ	ナダ	不明・ナダ	ナダ	74	345
233	58	"	カマド	土	壁	○				7.8					ケズリ	ナダ	回・糸・籠	ナダ	"	"
234	59	"	床No3	須	壁	○				(8)					ケズリ	ケズリ・ナダ	不明・ナダ	ナダ	75	"
235	60	"	埋土	須	大壁	○			(34)			ボツホ、 ロクロナダ	ロクロナダ						"	"
236	61	"	埋土	須	壁	○									ロクロナダ	ロクロナダ			"	"
237	62	"	Pit-7	須	壁	○									ロクロナダ	ロクロナダ			"	"
238	63	"	Pit-6	須	小壁	○									ロクロナダ	ロクロナダ			"	"
239	64	"	埋土	須	壁										ケズリ	ナダ			"	"
240	65	"	埋土	須	大壁										並行タタキ	並行 板アツ			"	"
241	66	"	埋土	須	大壁										並行タタキ	並行 板アツ			"	"
242	67	"	埋土	須	大壁	○									並行タタキ	並行 板アツ			"	"
243	68	"	埋土	須	大壁	○									並行タタキ	同心板アツ			"	"
244	69	"	埋土	須	大壁	○									並行タタキ		並行タタキ	ナダ	"	"
245	70	"	カマド 埋土	須	大壁	○									並行タタキ	円形板アツ			"	"
246	71	"	埋土	須	大壁	○									並行タタキ ・板	ナダ			"	"
247	72	"	カマド 埋土	須	大壁	○									並行タタキ	ナダ			"	"
248	1	DII7住	床	土	環	○									ロクロナダ	イガキ・内風	回・糸・籠	イガキ・内風	77	346
249	2	"	埋土	土	環	○							ロクロナダ	イガキ・内風	ロクロナダ	イガキ・内風			"	"
250	3	"	埋土	土	環	○									ロクロナダ	イガキ・内風	回ヘラナズリ	イガキ・内風	"	"
251	4	"	P1埋土	土	環	○	(13.8)			6.0	4.8	ロクロナダ	イガキ・内風	ロクロナダ	イガキ・内風	回・糸・籠	イガキ・内風	"	"	
252	5	"	埋土	土	環	○	(12.6)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ			"	"
253	6	"	床No1 No3・4	須	環	○	15.5			6.4	6.7	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回・糸・籠	ロクロナダ	"	編成あり	"
254	7	"	埋土	須	環	○					6.0				ロクロナダ	ロクロナダ	回・糸・籠	ロクロナダ	"	"
255	8	"	新カマド	須	環	○	(13.0)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回・糸・籠	ロクロナダ	"	"	"
256	9	"	新カマド	須	環	○				(5.8)					ロクロナダ	ロクロナダ	回・糸・籠	ロクロナダ	"	"
257	10	"	カマド 埋土	須	環	○	(13.4)			(5.4)	5.0	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回・糸・籠	ロクロナダ	"	"	"
258	11	"	P1埋土	須	環	○				(5.4)					ロクロナダ	ロクロナダ	回・糸・籠	ロクロナダ	"	"
259	12	"	P1埋土	須	環	○	(15.0)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ			"	"
260	13	"	埋土	須	環	○	(15.6)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ			"	"
261	14	"	埋土	須	環	○	(14.0)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ			"	"
262	15	"	埋土	須	環	○	(15.0)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ			"	"
263	16	"	埋土	須	環	○				(5.6)					ロクロナダ	ロクロナダ	回・糸・籠	ロクロナダ	"	"
264	17	"	埋土	須	環	○	(13.1)			5.5	5.5	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回・糸・籠	ロクロナダ	"	"	"
265	18	"	埋土	須	環	○	(15.2)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ			"	"
266	19	"	埋土	須	環	○	(13.6)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ			"	"

No	FNo	道標名	階位	種類	器種	成 形		仕 様				調 整 技 法						図版	写真	備 考			
						ロクロ	手折	L1	L2	L3	L4	L1 部		L2 部		L3 部							
												外 面	内 面	外 面	内 面	切り差し	内 面						
267	20	D117住	カマド	須 坏	〇										ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	77	346			
268	21	"	カマド	須 坏	〇			(14.0)							ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
269	22	"	埋土	土 甕	〇			(22.5)							ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・ナズリ	ロクロナデ			"	347	
270	23	"	煙道	土 甕	〇								(6.2)				ケズリ	ナデ	ナデ	ナデ		"	"
271	24	"	埋土	土 甕	〇			(20.0)							ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			78	"	
272	25	"	PI埋土	土 甕	〇			(17.2)							ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
273	26	"	PI埋土	土 甕	〇			(15.6)							ロクロナデ	ナデ	ナデ・ケズリ	ナデ			"	"	
274	27	"	PI埋土	土 甕	〇								(8.0)				ケズリ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	"	"	
275	28	"	カマド	土 甕	〇								(8.0)				ナデ・ケズリ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	"	"	
276	29	"	カマド	土 甕	〇								(6.0)				ケズリ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	"	"	
277	30	"	埋土	土 甕	〇			(13.6)							ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ヘラナデ			"	"	
278	31	"	埋土	土 甕	〇			(23.3)							ハケ・ナデ	ナデ	ハケ・ナデ	ナデ			"	"	
279	32	"	埋土	土 甕	〇								(7.0)						不明・ナデ	ナデ	"	"	
280	33	"	床No6	須 甕	〇								(10.0)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
281	34	"	埋土	須 甕	〇			(14.0)							ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
282	35	"	床No16	須 甕	〇								(7.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	"	"	
283	36	"	埋土	須 甕	〇								10.8				ナデ・ナズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
284	37	"	床No20	須 甕	〇												ロクロナデ ・ケズリ	ロクロナデ			79	"	
285	38	"	カマド	須 甕	〇			(14.7)							ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
286	39	"	床No2	須 甕	〇												ナデ・ナズリ ・ロクロナデ	ロクロナデ			"	348	輪取履、自然輪
287	40	"	埋土	須 甕	〇												並行ナデ	同心内ア デ・ナデ			"	"	
288	41	"	埋土	須 甕	〇												並行ナデ	同心内ア デ			"	"	
289	42	"	埋土	須 甕	〇												並行ナデ	並行ナデ			"	"	
290	43	"	埋土	須 大甕	〇												並行ナデ	並行ナデ			"	"	
291	44	"	PI埋土	須 大甕	〇												並行ナデ	並行ナデ			"	"	
292	1	D118住	埋土	土 坏	〇			(15.6)							ロクロナデ	1ガキ・内黒	ロクロナデ	1ガキ・内黒			80	"	
293	2	"	埋土	土 坏	〇								5.6				ロクロナデ	1ガキ・内黒	回・糸・籠	1ガキ・内黒	"	"	
294	3	"	埋土	土 坏	〇								(5.8)				1ガキ・内黒	1ガキ・内黒	不明・ナズリ	1ガキ・内黒	"	"	
295	4	"	床No7	土 坏	〇			14.4					6.1	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	"	"	
296	5	"	床No2	土 坏	〇			13.7					5.5	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	"	"	
297	6	"	床No4	土 坏	〇			14.8					6.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	"	"	
298	7	"	床No	土 坏	〇			13.9					5.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	"	349	

299	8	D118住	埋土	土	FR (60)	○		(13.6)		(4.4)	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	80	349	
300	9	"	カマド	土	FR (60)	○		(14.5)		5.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
301	10	"	埋土	土	FR (60)	○		(14.0)		(5.4)	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
302	11	"	床No1	土	FR (60)	○		(14.2)		(5.6)	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	外面に溝管あり	
303	12	"	床No12	土	FR (60)	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	
304	13	"	カマド内	土	FR (60)	○		(17.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	
305	14	"	埋土	土	FR (60)	○				5.4		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
306	15	"	埋土	須	環	○		(13.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	
307	16	"	埋土	須	環	○		(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	
308	17	"	カマド No2	土	環	○		(15.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	
309	18	"	カマド No3	土	環	○		(14.1)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	
310	19	"	埋土	土	環	○		(14.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ナデ		"	"	"	"	
311	20	"	ベルト	土	環	○				7.6				ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	"	"	"	
312	21	"	床No10	土	環	○				8.3						回・糸・盤	ロクロナデ	"	"	"	
313	22	"	埋土	土	環	○				6.0						回・糸・盤	ロクロナデ	81	"	"	
314	23	"	床No5	土	環	○								ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	"	"	"	"	"	
315	24	"	埋土	土	環	○										"	"	"	"	"	
316	25	"	埋土	須	環	○		(14.1)				ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	"	"	
317	26	"	埋土	須	環	○		(17.2)				ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	"	"	
318	27	"	埋土	須	環	○		(12.0)				ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	"	"	
319	28	"	床No6	須	環	○	○?								ケズリ	ナデ	不明	"	"	"	
320	29	"	ベルト	須	環	○								ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	350	"	
321	30	"	床No13	須	環	○								ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ		"	"	"	"	
322	1	D119住	埋土	土	FR (60)	○		14.9		5.7	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	85	351	
323	2	"	カマド 取組	土	FR (60)	○		15.0		5.8	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
324	3	"	床No5	須	環	○		13.6		5.3	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
325	4	"	埋土	須	環	○		(15.2)		(5.6)	6.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	"	362	
326	5	"	PR-1	須	環	○		(13.8)		(5.6)	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	"	溝管あり	
327	6	"	埋土	須	環	○		(16)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	
328	7	"	PR-1	須	環	○		(16.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	
329	8	"	PR-1	須	環	○		(14)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	溝管あり	
330	9	"	カマド 取組	須	環	○				5.8				ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・盤	ロクロナデ	"	"	"	
331	10	"	PR-1	土	環	○		22.5		9.0	28.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ハケメ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	"	"
332	11	"	ベルト No2	土	環	○		(24)				ロクロナデ	ロクロナデ	カキメ	ロクロナデ		"	"	"	"	"
333	12	"	PR-1	土	環	○		15				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	"

366	19	D018-2住	埋土	環	○				(6.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	同・糸・盤	ロクロナデ	82	350		
367	20	"	カマド 埋土	土	環	○		34.4			ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ナデ		"	"		
368	21	"	カマド 埋土	土	環	○					ロクロナデ?	ロクロナデ?	ケズリ	ナデ		83	"		
369	22	"	カマド 石垣	土	環	○					ロクロナデ?	ロクロナデ?	ケズリ	ナデ		82	"		
370	23	"	床No4	土	環	○							ケズリ	ナデ		83	351		
371	24	"	床No1	土	環	○		(25.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"		
372	25	"	埋土	土	環	○		(27.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"		
373	26	"	床No4	土	環	○		(19.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"		
374	27	"	カマド	土	環	○		(9.6)					ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
375	28	"	カマド	土	環	○		(16.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ		"	"		
376	29	"	カマド 石垣	土	環	○		(10.4)	(6.4)	9.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
377	30	"	床No1	土	環	○		5.4					ロクロナデ	ロクロナデ	同・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
378	31	"	床No2	環	環	○		(28.0)			ロクロナデ	ロクロナデ				"	"		
379	32	"	埋土	環	環	○		(18.4)			ロクロナデ	ロクロナデ				"	"		
380	33	"	床No3	環	環	○		(16.4)			ロクロナデ	ロクロナデ				"	"		
381	34	"	床No3	環	環	○		(14.4)			ロクロナデ	ロクロナデ				"	"		
382	35	"	床No3	環	環	○?		(15.0)					ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
383	36	"	床No4	環	環	○?							ケズリ	ナデ		84	"		
384	37	"	床No4	環	環	○							タタキ	ナデ		"	"		
385	38	"	床No4	環	環	○?							タタキ	ナデ		"	"		
386	39	"	床No3	環	環	○							通行タタキ	銀行アテ		"	"		
387	40	"	埋土	環	環	○							通行タタキ	銀行アテ		"	"		
388	1	D019住	カマド	土	環	○		(14.0)	6.0	4.6	ロクロナデ	いびき・内環	ロクロナデ ケズリ	いびき・内環	不明・いびき	いびき	88	353	内環が削れている
389	2	"	袖廊	土	環	○		(14.0)	7.6	5.8	ロクロナデ	いびき・内環	ロクロナデ	いびき・内環	同・糸・盤	いびき・内環	"	"	
390	3	"	埋土	土	環	○		(3.8)					ロクロナデ	いびき・内環	同・糸・盤	いびき・内環	"	"	
391	4	"	埋土	土	環	○		5.4					ロクロナデ ケズリ	いびき・内環	同・糸・盤	いびき・内環	"	"	
392	5	"	埋土	土	環	○		(6.8)						同・糸・盤	いびき・内環	"	"		
393	6	"	埋土	土	環	○		(15.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"		
394	7	"	床No8	環	環	○		(15.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"		
395	8	"	支脚	環	環	○		13.6	4.8	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
396	9	"	カマド	環	環	○		(13.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"		
397	10	"	埋土	環	環	○		(14.4)	(5.6)	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
398	11	"	埋土	環	環	○		(18.6)	6.6	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同・糸・盤	ロクロナデ	"	"	
399	12	"	埋土	環	環	○			6.6					同・糸・盤	ロクロナデ	"	"		
400	13	"	埋土	環	環	○		(16.7)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同・糸・盤	ロクロナデ	"	354	遺書あり

433	16	DII=10住	カマド 総換部	土	覆	○		(14.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			91	355
434	17	"	カマド 総換部	土	覆	○		(14.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
435	18	"	煙出し	土	覆	○			7.5					ロクロナデ	ロクロナデ			回・糸・飯	ロクロナデ
436	19	"	煙出し	土	覆	○												回・糸・飯	ロクロナデ
437	20	"	カマド	土	覆	○				(7.4)								回・糸・飯	ロクロナデ
438	21	"	床面	土	覆	○		(26.4)				ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ナデ			"	"
439	22	"	埋土	須	覆	○								並行タタキ	並行タタキ			"	"
440	23	"	埋土	須	覆	○								並行タタキ	並行タタキ			"	"
441	24	"	埋土	須	覆	○								ケズリ	カキメ			"	"
442	25	"	床No2	須	覆									ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ			90	"
443	1	DII=11-1住	カマド 北端	土	環	○		14.5	5.8	5.1	ロクロナデ	1ダキ・内黒	ロクロナデ	1ダキ・内黒	回・糸・飯	1ダキ・内黒	92	356	
444	2	"	カマド 北端	土	環	○		14.7	5.6	5.0	ロクロナデ	1ダキ・内黒	ロクロナデ	1ダキ・内黒	回・糸・飯	1ダキ・内黒	"	"	
445	3	"	カマド 北端	土	環	○		14.2	5.8	5.0	ロクロナデ	1ダキ・内黒	ロクロナデ	1ダキ・内黒	回・糸・飯	1ダキ・内黒	"	"	
446	4	"	カマド 北端内	土	環	○		(13.4)	5.4	5.5	ロクロナデ	1ダキ・内黒	ロクロナデ	1ダキ・内黒	回・糸・飯	1ダキ・内黒	"	"	
447	5	"	埋土	土	環	○		(14.0)		(6.0)	3.8	ロクロナデ	1ダキ・内黒	ロクロナデ	1ダキ・内黒	回・糸・飯	1ダキ・内黒	"	"
448	6	"	北端	土	環	○		(14.2)				ロクロナデ	1ダキ・内黒	ロクロナデ	1ダキ・内黒			"	"
449	7	"	カマド 北端	土	環	○		(15.6)				ロクロナデ	1ダキ・内黒	ロクロナデ	1ダキ・内黒			"	"
450	8	"	北端 換部	土	環	○		(14.6)				ロクロナデ	1ダキ・内黒	ロクロナデ	1ダキ・内黒			"	"
451	9	"	カマド 北端	土	環	○			6.2					ロクロナデ	1ダキ・内黒	回・糸・飯	1ダキ・内黒	"	"
452	10	"	埋土	土	環	○			6.0					ロクロナデ	1ダキ・内黒	回・糸・飯	1ダキ・内黒	"	"
453	11	"	埋土	土	環	○								ロクロナデ	1ダキ・内黒			"	扉あり
454	12	"	総換部	土	環	○		(15.4)	6.2	5.0	ロクロナデ	1ダキ・ もとの内黒	ロクロナデ	1ダキ・ もとの内黒	回・糸・飯	1ダキ・ もとの内黒	"	"	
455	13	"	埋土	土	環	○		14.0	5.0	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・飯	ロクロナデ	"	"	
456	14	"	埋土	土	環	○		(15.0)	6.0	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・飯	ロクロナデ	"	357	
457	15	"	総換部	土	環	○		(13.4)	5.4	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・飯	ロクロナデ	"	"	
458	16	"	埋土	土	環	○		(13.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
459	17	"	埋土	土	環	○		(15.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
460	18	"	カマド	土	環	○		(14.3)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
461	19	"	埋土	土	環	○		(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
462	20	"	埋土	土	環	○			(6.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・飯?	ロクロナデ	"	"
463	21	"	埋土	土	環	○			(6.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・飯	ロクロナデ	"	"
464	22	"	埋土	須	環	○		(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			93	"	
465	23	"	埋土	須	環	○		(13.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
466	24	"	埋土	須	環	○		(13.3)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
467	25	"	埋土	須	環	○			(6.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・飯	ロクロナデ	"	"

No	旧No	遺構名	階位	種類	形状	法				築				築 設 法				図版	写真	備 考		
						口 径		底 径		口 径		底 径		外 面		内 面					底 部	
						口 径	底 径	口 径	底 径	外 面	内 面	外 面	内 面	切 り 廻 し	内 面							
468	26	DH=11-1住	埋土	環	○													93	357	遺書あり		
469	27	"	床No13	土	環	○	(28.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"			
470	28	"	床No12	土	環	○	(26.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ナデ			"	"			
471	29	"	床No11	土	環	○	(19.0)					ロクロナデ	ナデ	ケズリ	ナデ			"	"			
472	30	"	床No3	土	環	○	(14.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ			"	"			
473	31	"	床No1	土	環	○	(20.9)					ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ			94	"			
474	32	"	床No1	土	環	○	(27.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ			"	"			
475	33	"	カマド	土	環	○	(23.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ			93	"			
476	34	"	埋土	土	環	○	(22.2)					ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	ナデ			94	"			
477	35	"	埋土	土	環	○	(20.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"			
478	36	"	埋土	土	環	○	(14.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"			
479	37	"	床面	土	環	○	20.0		9.7	29.7	ロクロナデ	ナデ	ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	358	"			
480	38	"	床No4	土	環	○	(18.0)					ロクロナデ	ナデ	ナデ	ナデ			"	"			
481	39	"	床No4	土	環	○	(22.7)					ロクロナデ	ナデ	ケズリ	ナデ			95	"			
482	40	"	床No1	土	環	○?				11.6				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"			
483	41	"	床No8	土	環	○				12.3				ケズリ	ナデ	ナデ		"	"			
484	42	"	貯蔵穴	土	鉢	○	(15.4)			6.6	9.8	ロクロナデ	1ガキ・内裏	ロクロナデ	1ガキ・内裏	回・糸・籠	1ガキ・内裏	"	"			
485	43	"	カマド	土	鉢	○	(15.4)					ロクロナデ	1ガキ・内裏	ロクロナデ	1ガキ・内裏			"	"			
486	44	"	カマド	土	環	○	(24.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ナデ			"	"			
487	45	"	床No8	土	環	○	(36.8)					ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	ナデ			96	"			
488	46	"	カマド	土	環	○	(49.0)					ロクロナデ	ロクロナデ					"	"			
489	47	"	貯蔵穴	土	環	○								ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"			
490	48	"	床No7	土	環	○?								並行ナタキ	同心円・ナデ			"	"			
491	49	"	カマド	土	環	○								並行ナタキ	並行ナタキ			"	"			
492	50	"	床No7	土	環	○								並行ナタキ	同心円			"	"			
493	1	DH=11-2住	埋土	土	環	○	(15.0)					ロクロナデ	1ガキ・内裏	ロクロナデ	1ガキ・内裏			97	309			
494	2	"	埋土	土	環	○				(6.0)				ロクロナデ	1ガキ・内裏	回・糸・籠	1ガキ・内裏	"	"			
495	3	"	埋土	土	環	○	(14.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"			
496	4	"	埋土	土	環	○								ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	遺書あり		
497	5	"	埋土	土	環	○						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回・糸・籠	ロクロナデ	"	"			
498	6	"	床面	土	環	○?	(15.4)			7.8	5.7			ケズリ	ナデ	不明・砂粒	ナデ	"	"			
499	7	"	貯蔵穴	土	環	○				10.8				並行ナタキ	同心円	ナデ		"	"			

500	1	DH=11住	埋土	土	環	○	(17.4)				ロクロナデ	いざき・内蔵	ロクロナデ	いざき・内蔵			97	359
501	2	DH=11-2住	貼床下	環	環	○	(16.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
502	3	"	貼床下	土	環			10			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
503	4	"	埋土	環	環	○	(20)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
504	5	"	貼床下	環	環	○	(13.2)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
505	6	"	貼床下	土	環	○	(38.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ケズリ			"	"
506	7	"	埋土	環	環	○							ケズリ	ケズリ			"	"
507	1	DH=11-1住	埋土	土	環	○	(16.0)	(7.0)	4.7	ロクロナデ	いざき・内蔵	ロクロナデ	いざき・内蔵	回来側	いざき・内蔵	98	"	
508	2	"	埋土	土	環	○	14.8			ロクロナデ	いざき・内蔵	ロクロナデ	いざき・内蔵	不明		"	"	
509	3	"	床No10	土	環	○	(14.0)			ロクロナデ	いざき・内蔵	ロクロナデ	いざき・内蔵			"	"	
510	4	"	土坑-1	土	環	○	(12.0)			ロクロナデ	いざき・内蔵	ロクロナデ	いざき・内蔵			"	"	
511	5	"	埋土	土	環	○	(15.6)			いざき・黒色	いざき・内蔵	いざき・黒色	いざき・内蔵			"	"	
512	6	"	貼り床	土	環	○		6.0					ロクロナデ	いざき・もとの内蔵	回来側	いざき・もとの内蔵	"	"
513	7	"	埋土	土	環	○	(5.8)			ロクロナデ	いざき・内蔵	ロクロナデ	いざき・内蔵	回来側	いざき・内蔵	"	"	
514	8	"	床面	土	環	○	(7.0)					ロクロナデ	いざき・内蔵	回来側	いざき・内蔵	"	"	
515	9	"	床面	土	環	○	(5.4)					ロクロナデ	いざき・内蔵	回来側	いざき・内蔵	"	"	
516	10	"	床No2	土	環	○	14.1	5.0	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来側	ロクロナデ	"	"	
517	11	"	床No5	土	環	○	16.7	6.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来側	ロクロナデ	"	360	
518	12	"	床No1	土	環	○	14.2	6.1	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来側	ロクロナデ	"	"	
519	13	"	埋土	土	環	○	(13.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
520	14	"	埋土	土	環	○	(16.9)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
521	15	"	埋土	土	環	○	(15.1)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
522	16	"	床No5	土	環	○	(15.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
523	17	"	土坑-2	土	環	○	(16.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
524	18	"	埋土	土	環	○	(13.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
525	19	"	埋土	環	環	○	(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
526	20	"	貼り床	環	環	○		(6.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	回来側	ロクロナデ	"	"
527	21	"	貼り床	環	環	○		(7.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	回来側	ロクロナデ	"	"
528	22	"	土坑-1	土	環	○	(20.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
529	23	"	埋土	土	環	○	(20.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
530	24	"	埋土	土	環	○	(20.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
531	25	"	床No7	土	環	○		10.0				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	99	"	
532	26	"	土坑-4	土	環	○	(7.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来側	ナデ	"	"	"	
533	27	"	床No4	土	環	○	(8.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来側	ナデ	"	"	"	
534	28	"	埋土	土	環	○	(5.8)					ケズリ	ナデ	不明	ナデ	"	"	

No	EINo	通 橋 名	階 位	種類	形状	法 量				測 量 法						四版	写真	備 考		
						成 形		法		口 輪 部		測 部		法 部						
						口 径	厚 径	口 径	厚 径	外 面	内 面	外 面	内 面	切 り 離 し	内 面					
535	29	DH11-1住	床No1	土 環	○				(8.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ナデ	99	360	
536	30	"	床No2	土 環	○				(16.4)					ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
537	31	"	壁土	須 葎	○			(14.0)						ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
538	32	"	土坑-3	須 葎	○									ロクロナデ	ロクロナデ			"	361	
539	33	"	床No3	須 葎	○									ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
540	34	"	土坑-2	須 大環		○?								並行タタキ	無文			"	"	
541	35	"	壁土	須 大環		○?								並行タタキ	無文			"	"	
542	36	"	壁土	須 大環		○?								並行タタキ	ナデ			"	"	
543	1	DH11-2住	床No1	土 環	○			(15.2)		(6.4)	5.9	ロクロナデ	1.5倍・内環	ロクロナデ	1.5倍・内環	回糸鋼・高合	1.5倍・内環	100	"	
544	2	"	給床	土 環	○			(14.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
545	3	"	壁土	土 環	○					(7.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
546	4	"	給床	土 環	○					(5.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
547	5	"	給床	土 環	○					(5.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
548	6	"	床No1	須 環	○					(18.4)				ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
549	7	"	PitNo1	土 環	○			(28)						ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
550	8	"	PitNo1	須 葎	○			(22.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	
551	9	"	壁土	須 葎	○			(20.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	
552	10	"	床No1	須 葎	○			(13.7)						ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
553	1	DH12住	壁出し	土 環	○			(14.0)		5.8	5.0	ロクロナデ	1.5倍・内環	ロクロナデ	1.5倍・内環	回糸鋼	1.5倍・内環	101	"	
554	2	"	床No8	土 環	○			(14.2)						ロクロナデ	1.5倍・内環	ロクロナデ	1.5倍・内環	"	"	
555	3	"	Pit6	土 環	○			(15.4)						ロクロナデ	1.5倍・内環	ロクロナデ	1.5倍・内環	"	"	
556	4	"	壁土	土 環	○			(14.8)						ロクロナデ	1.5倍・内環	ロクロナデ	1.5倍・内環	"	"	
557	5	"	Pit14	土 環	○			(12.8)						ロクロナデ	1.5倍・内環	ロクロナデ	1.5倍・内環	"	"	
558	6	"	壁土	土 環	○			(14.0)						ロクロナデ	1.5倍・内環	ロクロナデ	1.5倍・内環	"	"	
559	7	"	壁土	土 環	○					5.4				ロクロナデ	1.5倍・内環	不明・ ヘラツヅリ	1.5倍・内環	"	"	
560	8	"	カマド	土 環	○			(13.6)		(5.6)	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
561	9	"	Pit8	土 環	○			(13.3)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	
562	10	"	カマド	土 環	○			(15.4)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	362	
563	11	"	壁土	土 環	○			(15.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	361	
564	12	"	壁土	土 環	○					(5.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
565	13	"	カマド	土 環	○					6.0				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	362	
566	14	"	Pit1	須 環	○			14.3		5.3	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	

567	15	DBr12住	Ph1	環	環	○		14.7		6.2	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	田舎集	ロクロナデ	101	362
568	16	"	カマド 埋土	環	環	○		(13.8)		5.2	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	田舎集	ロクロナデ	"	"
569	17	"	Ph3	環	環	○		(14.0)		(6.0)	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	田舎集	ロクロナデ	"	"
570	18	"	床No11	環	環	○		(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
571	19	"	埋土	環	環	○		(15.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
572	20	"	カマド 埋土	環	環	○		(14.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
573	21	"	床No4	環	環	○				(6.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	田舎集	ロクロナデ	"	"
574	22	"	埋土	環	環	○				(6.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	田舎集	ロクロナデ	"	"
575	23	"	埋土	環	環	○				(6.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	田舎集?	ロクロナデ	"	"
576	24	"	Ph2	環	環	○				(4.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	田舎集	ロクロナデ	"	"
577	25	"	カマド 埋土	土	環	○		(22.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			102	"
578	26	"	煙出し	土	環	○		(28)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
579	27	"	カマド 埋土	土	環	○		(20.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
580	28	"	床No12	土	環	○		(23.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
581	29	"	Ph1	土	環	○		(19.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	363
582	30	"	カマド	土	環	○		(22)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
583	31	"	カマド 埋土	土	環	○		(21.8)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
584	32	"	カマド	土	環	○								ロクロナデ ナデ・ケズリ	ロクロナデ			"	"
585	33	"	Ph	土	環	○								ケズリ	ナデ			"	"
586	34	"	Ph4	土	環	○		16.4				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
587	35	"	Ph	土	環	○		(15.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
588	36	"	カマド	土	環	○		(14.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			103	"
589	37	"	Ph3	土	環	○		(15.7)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
590	38	"	埋土	土	環	○		(16.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
591	39	"	埋土	土	環	○		15.0				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
592	40	"	埋土	土	環	○				(6.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	田舎集	ロクロナデ	"	"
593	41	"	カマド	土	環	○				(7.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	田舎集	ロクロナデ	"	"
594	42	"	カマド	土	環	○		24				ヨコナデ	ヨコナデ	ハナ・ケズリ	ナデ			"	"
595	43	"	煙出し	土	環	○		(22.0)				ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ			"	"
596	44	"	煙道	土	環	○		(10)				ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ハナ			"	"
597	45	"	Ph5	土	環	○?				(8.0)				ケズリ	ナデ	不明・ケズリ	ナデ	"	"
598	46	"	埋土	土	環	○?				(8.4)				ケズリ	ナデ	不明・砂埃	ナデ	"	"
599	47	"	Ph2	土	環	○?				(6.2)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
600	48	"	煙出し	土	環	○				(8.0)				ミダキ	ナデ?	不明・ミダキ	ナデ	"	"
601	49	"	煙出し	土	環	○				(6.6)				ケズリ	ナデ?	不明・ナデ?	ナデ?	"	"

634	13	DⅡ×12住	No.3 土坑内	須	環	○	(14.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				107	366	
635	14	"	埋土	須	環	○	(12.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
636	15	"	埋土	須	環	○	(14.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
637	16	"	埋土	須	環	○	(12.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
638	17	"	床No.3	須	環	○	(13.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
639	18	"	埋土	土	環	○	23.0				ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ナデ				"	"	
640	19	"	埋土	土	環	○	(15.7)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
641	20	"	掘道部	土	環	○	(17.5)				ココナデ	ココナデ	ハケメ	ナデ				108	"	
642	21	"	床No.6	土	環	○		8.2					ナゲリ・ナゲ	ナデ	不明・ナデ	ナデ		"	"	
643	22	"	No.3 土坑	土	環	○							ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
644	23	"	埋土	土	環	○							ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
645	24	"	埋土	土	跡	○?		(7.2)					ナデ	ナゲ	不明・ナゲ	不明・ナゲ		"	"	
646	25	"	No.5 土坑内	土	跡	○?		(8.6)					ナゲ	ナゲ	不明・ナゲ	不明・ナゲ		"	"	
647	26	"	埋土	須	環	○							ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
648	27	"	埋土	須	大環	○?							遺行タナキ ・佐藤	青海波文				"	"	
649	28	"	埋土	須	大環	○?							遺行タナキ	遺行アテ				"	"	
650	29	"	埋土	須	大環	○?							遺行タナキ	遺行アテ				"	"	
651	30	"	埋土	須	大環	○?							遺行タナキ	遺行アテ				"	"	
652	31	"	埋土	須	大環	○?							遺行タナキ	遺行アテ				"	"	
653	1	DⅡ×12住	床No.1	土	環	○	11.7	5.4	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ ・ナゲ	ナゲリ・ナゲ	ナゲ	不明・ナゲ	不明・ナゲ		109	367	赤内黒、墨書あり	
654	2	"	埋土 土坑	須	環	○	15.0	5.8	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナゲ	不明・ナゲ		"	"		
655	3	"	埋土	須	環	○	(13.8)	5.4	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナゲ	不明・ナゲ		"	"		
656	4	"	埋土	須	環	○		(5.3)					ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
657	5	"	東壁 土坑	須	環	○	(14.2)						ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
658	6	"	埋土	須	環	○		(5.2)					ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
659	7	"	埋土	土	環	○	(21.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ ・ナゲ	ロクロナデ ・ナゲ					"	"	
660	8	"	床No.7	土	環	○		(18.5)					不明・ナゲ					"	"	
661	9	"	埋土	土	環	○	(14.9)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
662	10	"	埋土	須	環	○		(9.4)					ロクロナデ ・ナゲ	ロクロナデ	不明・ナゲ	不明・ナゲ		"	"	一部に印書あり
663	11	"	床No.2	須	大環	○							遺行タナキ	遺行アテ				"	"	
664	1	DⅡ×14住	埋土	土	環	○	(15.2)	5.8	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナゲ	不明・ナゲ		111	368	二次大島で内黒消滅	
665	2	"	埋土	土	環	○		5.4					ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
666	3	"	埋土	土	環	○		(6.0)					ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
667	4	"	埋土	土	環	○	(14.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナゲ	不明・ナゲ		"	"		
668	5	"	埋土	土	環	○		(5.8)					ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	

No	旧No	道 橋 名	橋 位	種類	部 種	成 形	法 泉				測 量 技 法						図 版	写 具	備 考		
							口 径 (cm)	側 径 (cm)	深 径 (cm)	高 (cm)	口 径 部		測 部		証 部						
											外 面	内 面	外 面	内 面	切 離 し	内 面					
669	6	D No.14 住	埋土	土	土	○	(12.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			111	368	
670	7	"	埋土	土	土	○			(6.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"
671	8	"	埋土	土	土	○			(6.1)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"
672	9	"	埋土	土	土	○			(6.3)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"
673	10	"	埋土	土	土	○			(5.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"
674	11	"	埋土	土	土	○			(8.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"
675	12	"	床No10	須 環	環	○	17		7.4	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
676	13	"	床No7	須 環	環	○	14.0		8.2	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
677	14	"	床No11	須 環	環	○	13.7		6.7	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
678	15	"	埋土	須 環	環	○	(13.7)		(7.0)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
679	16	"	床No13	須 環	環	○	13.7		7	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
680	17	"	床No5	須 環	環	○	12.2		5.8	4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
681	18	"	埋土	須 環	環	○	(14.5)		(7.0)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
682	19	"	床No5	須 環	環	○			6.8					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	369	
683	20	"	床No9	須 環	環	○	(13.0)		(6.9)	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
684	21	"	土	土	土	○	21.6				ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・ナズ	ロクロナデ					112	"	
685	22	"	土	土	土	○	(20.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ					"	"	
686	23	"	P1内	土	土	○			8.9				ケズリ	ナデ			不明・丸底風	ナデ	113	"	
687	24	"	土	土	土	○							ロクロナデ ケズリ	ナデ					112	"	
688	25	"	埋土	土	土	○	(21.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
689	26	"	埋土	土	土	○	(21.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
690	27	"	埋土	土	土	○	(24.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			113	"	
691	28	"	埋土	土	土	○	(21.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
692	29	"	埋土	土	土	○	(22.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
693	30	"	埋土	土	土	○	(23.0)				ロクロナデ	ロクロナデ							"	"	
694	31	"	埋土	土	土	○			(8.8)									水露鋼	ナデ	112	"
695	32	"	床No8	土	土	○	15.8		9.0	14.3	ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	ナデ	回糸鋼	ナデ			"	"	
696	33	"	床No12	土	土	○	(13.3)		6.2	11.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ			"	"	
697	34	"	床No11	須 環	環	○							ナデ・ナズ	ロクロナデ					114	"	
698	35	"	床No4	須 環	環	○	○?		(15.0)								不明・ナデ	ナデ	113	370	
699	36	"	須 環	環	環	○					ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・ナズ	ナデ					114	"	
700	37	"	埋土	須 環	環	○			10.8				ロクロナデ	ロクロナデ	不明・底高台	ナデ			"	"	

701	38	D11x14住	埋土	傾	壁		○?										壁物ナシナキ	内形縦欠凸面			114	370
702	39	"	埋土	傾	壁		○?										並行ナシナキ	内形縦欠凸面			"	"
703	40	"	埋土	傾	壁		○?										並行ナシナキ	内形縦欠ナテ			"	"
704	41	"	埋土	傾	壁	○											多量 ロクロナテ	ロクロナテ			"	"
705	1	D11x19住	床No1	土	坏	○		14.3	6.0	4.9	ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏	回承盤	1ガキ・内裏					115	"
706	2	"	床底	土	坏	○		14.9	6.4	4.8	ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏	回承盤	1ガキ・内裏					"	"
707	3	"	土坑3	土	坏	○		(15.5)	6.0	4.7	ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏	回承盤	1ガキ・内裏					"	"
708	4	"	カマド	土	坏	○		15.1	6.2	5.4	ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏	回承盤	1ガキ・内裏					"	"
709	5	"	埋土	土	坏	○		(17.5)			ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏							"	371
710	6	"	埋土	傾	坏	○				(6.2)			ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ					"	"
711	7	"	カマド	土	壁	○		(25.0)			ロクロナテ	ナテ	ロクロナテ ・ケズリ	ナテ							"	"
712	8	"	埋土	土	壁	○		(22.0)			ロクロナテ	ナテ	ロクロナテ	ナテ							"	"
713	9	"	埋土	土	壁	○		(23.4)			ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ ・ケズリ	ロクロナテ							"	"
714	10	"	埋土	傾	大壁		○										並行ナシナキ	内形凸面・並行			"	"
715	11	"	埋土	傾	大壁		○										並行ナシナキ ・ナテ	ナテ			"	"
716	1	D11x23住	床底	土	坏	○		13.4			ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏							116	"
717	2	"	埋土	土	坏	○		(15.0)			ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏							"	"
718	3	"	埋土	土	坏	○				5.8			ロクロナテ	1ガキ・内裏	回承盤	1ガキ・内裏					"	"
719	4	"	埋土	土	坏	○		(13.0)			ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ							"	"
720	5	"	埋土	傾	?	○				(5.8)			ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ					"	"
721	6	"	カマド	土	壁	○		(25.0)			ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ ・ケズリ	ロクロナテ							"	"
722	7	"	床No3	土	壁	○		(20.8)			ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ							"	"
723	8	"	カマド	土	壁	○		(27.1)			ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ							"	"
724	9	"	床No4	土	壁	○				10.0			ケズリ	ナテ	不明・ナテ	ナテ					"	"
725	10	"	床No1	土	壁	○				6.0			ケズリ	ナテ	不明・ナテ	ナテ					117	"
726	11	"	埋土	傾	壁		○?										並行ナシナキ	ナテ			"	"
727	12	"	埋土	傾	大壁		○?										並行ナシナキ	ナテ			"	"
728	1	D11x25住	床No4	土	坏	○		(13.9)			ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏							"	372
729	2	"	床No6	土	坏	○		(15.9)			ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏							"	"
730	3	"	カマド	土	壁	○		14.9	6.2	5.3	ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏	回承盤高台	1ガキ・内裏					"	壁書あり
731	4	"	床No1	土	坏	○		13.5	5.8	5.1	ロクロナテ	1ガキ	ロクロナテ	1ガキ	回承盤	1ガキ					"	壁書あり
732	5	"	床No2	土	壁	○			6.4				ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ					"	"
733	6	"	床No3	土	壁	○		(15.3)			ロクロナテ	ロクロナテ	脱落	ヘラナテ							"	"
734	1	D11x1住	カマド	土	坏	○		14.5	5.5	4.8	ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏	回承盤	1ガキ・内裏					118	壁書あり
735	2	"	カマド	土	坏	○		(15.4)	4.5	4.7	ロクロナテ	1ガキ・内裏	ロクロナテ	1ガキ・内裏	回承盤	1ガキ・内裏					"	"

No	石No	造形名	階位	種類	器種	成形		法				測 量 値						図版	写真	備 考	
						口径	口径	口径	口径	口径	口 縁 部		胴 部		底 部						
											外 面	内 面	外 面	内 面	切り廻し	内 面					
726	3	D型I住	埋土	土	環	○		(15.2)		(6.5)	4.5	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	118	372		
737	4	"	埋土	土	環	○		(14.0)			6	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏		373		
738	5	"	土坑	土	環	○		(14.0)				口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏				
739	6	"	土坑	土	環	○		(12.0)				口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏				
740	7	"	埋土	土	環	○		(13.0)				口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏				
741	8	"	埋土	土	環	○		(17.0)				口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏				
742	9	"	埋土	土	環	○				(5.2)				口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏		
743	10	"	埋土	土	環	○				5.7				口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏		
744	11	"	埋土	土	環	○								口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏		
745	12	"	埋土	土	環	○								口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏		
746	13	"	埋土	土	環	○								口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏	口クロナデ	ミガキ・内裏		
747	14	"	埋土	土	環	○		(14.0)		(6.4)	4.3	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
748	15	"	埋土	土	環	○		(14.2)		(5.6)	4.6	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
749	16	"	埋土	土	環	○		(13.4)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
750	17	"	埋土	土	環	○		(12.6)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
751	18	"	土坑	土	環	○		(15.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
752	19	"	土坑	土	環	○		(14.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
753	20	"	土坑	土	環	○		(15.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
754	21	"	埋土	土	環	○		(14.6)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
755	22	"	埋土	土	環	○		(23.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
756	23	"	埋土	土	環	○		(23.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
757	24	"	埋土	土	環	○		(18.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
758	25	"	土坑	土	環	○		(23.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
759	26	"	埋土	土	環	○		(26.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
760	27	"	土坑	土	環	○		(22.6)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
761	28	"	埋土	土	環	○		(15.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
762	29	"	土坑	土	環	○		(11.4)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
763	30	"	土坑	土	環	○				7.4				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	
764	31	"	埋出し	土	環	○				(9.4)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	
765	32	"	埋土	土	環	○				(10.6)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	
766	33	"	埋土	土	環	○				(11.6)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	120
767	34	"	埋土	土	環	○		(10.0)				口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	口クロナデ	

No	図番	造橋名	附位	種類	器種	成 形	法 規				測 量 技 法						図版	写真	備 考
							口 縁 部				割 部		蓋 部						
							口 径	割 径	底 径	蓋 高	外 面	内 面	外 面	内 面	切り廻し	内 面			
803	20	5号第一住	埋土環	○		(16.6)				ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理			122	376		
804	21	"	埋土環	○		(11.0)				ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理			"	"	内面黒色	
805	22	"	床1土環	○				5.8				ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅	1ガキ・黒色処理	"	"		
806	23	"	埋土環	○				4.3				ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅	1ガキ・黒色処理	"	"		
807	24	"	床4土環	○				(6.6)				ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅?	1ガキ・黒色処理	"	"		
808	25	"	埋土環	○				(7.0)				ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅	1ガキ・黒色処理	"	"		
809	26	"	埋土環	○?				(6.5)					粗い1ガキ	不明・ナデ	1ガキ・黒色処理	"	"		
810	27	"	床1土環	○		(14.6)				ロクロナデ	1ガキ	ロクロナデ	1ガキ			"	"	元は内黒か?	
811	28	"	埋土環	○		(15.6)				ロクロナデ	1ガキ	ロクロナデ	1ガキ			"	"	元は内黒か?	
812	29	"	埋土環					(4.6)				ロクロナデ	1ガキ	回赤銅	1ガキ	123	"	元は内黒か?	
813	30	"	床5土環					4.8				ロクロナデ	1ガキ	回赤銅	1ガキ	"	"	元は内黒か?	
814	31	"	埋土環	○				(5.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	回赤銅	ロクロナデ	"	"		
815	32	"	埋土環					6.0				ロクロナデ	ロクロナデ	回赤銅	ロクロナデ	"	"		
816	33	"	3x7土環	○		(7.8)		5.2	2.9	1ガキ・黒色処理	1ガキ・黒色処理	1ガキ・黒色処理	1ガキ・黒色処理	回赤銅・真台	1ガキ・黒色処理	"	"	内面黒色の耳皿	
817	34	"	床2土環	○		(19.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
818	35	"	埋土環	○		(24.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
819	36	"	埋土環	○				6.0				ロクロナデ	ロクロナデ	回赤銅	ロクロナデ	"	"		
820	37	"	軸内土環					(5.4)								"	"		
821	38	"	埋土環	○		(15.5)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"		
822	39	"	埋土環	○		(8.6)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"		
823	40	"	埋土環	○								ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
824	41	"	床面埋土環	○								ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
825	42	"	3x7内埋土環	○								ロクロナデ	ロクロナデ			"	377		
826	43	"	3x7内埋土環	○?									並行タタキ	ナデ・タタキ		"	"		
827	44	"	埋土環	○?									並行タタキ	ナデ		"	"		
828	45	"	3x7内埋土環	○?									並行タタキ	青海波文		"	"		
829	1	2号1住	床32土環	○		14.2		6.4	4.7	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅	1ガキ・黒色処理	125	"		
830	2	"	床30土環	○		(13.7)		5.6	4.5	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅	1ガキ・黒色処理	"	"		
831	3	"	床底土環	○		(14.8)		6.0	4.6	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅	1ガキ・黒色処理	"	"		
832	4	"	床8土環	○		(14.6)		(5.6)	5.1	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅	1ガキ・黒色処理	"	"		
833	5	"	床21土環	○		(13.8)		(6.0)	5.0	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅	1ガキ・黒色処理	"	"	二次造りで内黒減	
834	6	"	床22土環	○		(14.0)		(6.4)	4.9	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	ロクロナデ	1ガキ・黒色処理	回赤銅	1ガキ・黒色処理	"	"		

835	7	E区1住	床22	土	環	○				6.2				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	125	377	
836	8	"	床22	土	環	○				5.7				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	"	"	
837	9	"	床29	土	環	○				(6.0)				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	"	"	
838	10	"	床30	土	環	○				(14.4)			ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	1 石膏、 黒色地盤	1 石膏、 黒色地盤	"	"		
839	11	"	床22	土	環	○				(14.0)			ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	"	"		
840	12	"	床22	土	環	○				(14.6)			ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	"	"		
841	13	"	床30	土	環	○				(13.6)			ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	"	"		
842	14	"	床13	土	環	○				(14.0)			ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	"	"		
843	15	"	床12	土	環	○				(13.8)			ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	"	378		
844	16	"	床5	土	環	○				(14.0)			ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	"	"		
845	17	"	床24	土	環	○				(15.5)			ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	1 石膏	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	"	"	
846	18	"	床22	土	環	○				(15.0)			ロクロナデ	1 石膏	ロクロナデ	1 石膏	"	"		
847	19	"	床2	土	環	○				6.4				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	"	"	
848	20	"	床1	土	環	○				6.4				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	不明・ケズリ	1 石膏、 黒色地盤	"	"	
849	21	"	床6	土	環	○				5.6				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	"	"	
850	22	"	床22	土	環	○				(5.6)				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	"	"	
851	23	"	床26	土	環	○				(5.6)				ロクロナデ	1 石膏	固床盤	1 石膏	126	もとほ内果?	
852	24	"	床20	土	環	○				(5.2)				ロクロナデ	1 石膏	固床盤	1 石膏	"	"	
853	25	"	床11	土	環	○				6.1				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	"	"	
854	26	"	床6	土	環	○				(5.6)				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	"	"	
855	27	"	床22	土	環	○				(15.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
856	28	"	P1	土	環	○				5.2				ロクロナデ	ロクロナデ	固床盤	ロクロナデ	"	墨書あり	
857	29	"	床20	土	環	○				(6.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	固床盤	ロクロナデ	"	"	
858	30	"	床2	土	環	○				(7.3)				ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	"	貼付高台	
859	31	"	床22	土	環	○				(20.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ	"	"		
860	32	"	床3	土	環	○				(16.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
861	33	"	床21	土	環	○				(15.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
862	34	"	床22	土	環	○				(10.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
863	35	"	床22	土	環	○				22.5	11.4	17.4	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	ケズリ	1 石膏、 黒色地盤	不明・ナデ	1 石膏、 黒色地盤	"	"
864	36	"	床22	土	環	○				(18.8)	8.4	9.0	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	"	"
865	37	"	床22	土	環	○				11.8	6.2	9.4	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	ロクロナデ	1 石膏、 黒色地盤	固床盤	1 石膏、 黒色地盤	127	379
866	38	"	床22	土	環	○				(22.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	378		
867	39	"	床28	土	環	○				(25.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	379	墨書に自然輪	
868	40	"	床28	土	環	○							ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"	
869	41	"	床28	土	環	○							ケズリ	ロクロナデ	"	"	"	"	"	

902	26	E面e2住	埋	土	环	○		(15.9)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				130	381
903	27	"	P6	土	环	○		(14.6)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	"
904	28	"	Q1土 埋	土	环	○		(13.8)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	"
905	29	"	P2	土	环	○		(15.6)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	"
906	30	"	P3	土	环	○		(17.0)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	"
907	31	"	埋	土	环	○		(13.6)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	"
908	32	"	P2	土	环	○		(14.0)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	"
909	33	"	P2	土	环	○		(14.8)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	"
910	34	"	埋	土	环	○						ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	"
911	35	"	埋	土	环	○						ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	露骨あり
912	36	"	埋	土	环	○						ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	露骨あり
913	37	"	埋	土	环	○						ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層				"	露骨あり
914	38	"	Q1P埋 土	土	环	○		(6.0)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	"
915	39	"	Q2P埋 土	土	环	○		(4.4)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	"
916	40	"	埋	土	环	○		(6.2)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	"
917	41	"	埋	土	环	○		5.8				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	露骨あり
918	42	"	P2	土	环	○		5.2				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	露骨あり
919	43	"	b1	土	环	○		5.4				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	露骨あり
920	44	"	埋	土	环	○		(4.2)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	"
921	45	"	埋	土	环	○		(5.8)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	"
922	46	"	Q1P埋 土	土	环	○		6.0				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	"
923	47	"	埋	土	环	○		(5.6)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	"
924	48	"	埋	土	环	○		(6.6)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	固永無	1方 黒色地層	"	"	"
925	49	"	Q1P埋 土	土	环	○		(5.4)				ロクロナデ	1方 黒色地層	ロクロナデ	1方 黒色地層	不明・高台	1方 黒色地層	131	"	"
926	50	"	Q1埋P 土	土	环	○		15.2	6.0	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	302	蓋み大	
927	51	"	Q1埋P 土	土	环	○		15.6	5.6	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	露骨あり・蓋み大	
928	52	"	Q1埋P 土	土	环	○		14.4	5.4	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	露骨あり・蓋み大	
929	53	"	Q1埋P 土	土	环	○		14.4	5.9	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	露骨あり	
930	54	"	埋 土	土	环	○		(15.0)	6.2	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	"	
931	55	"	P1	土	环	○		(14.8)	6.4	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	"	
932	56	"	埋	土	环	○		(15.3)	(5.2)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	"	
933	57	"	Q2埋P 土	土	环	○			5.6				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	"
934	58	"	P2	土	环	○		(13.4)	(5.0)	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	"	
935	59	"	P3	土	环	○		(14.0)	(5.2)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	"	
936	60	"	埋	土	环	○		(15.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"	"	"

No.	EIN	造 材 名	階 位	種 別	部 種	成 形		法 規				調 査 状 況				取 扱	写 真	備 考				
						口	非口	口 径 (mm)	調 径 (mm)	径 径 (mm)	基 高 (mm)	L 部		部					証 部			
												外 面	内 面	外 面	内 面				切 り 離 し	内 面		
937	61	E型#2住	P2	土	鉄 (鉄)	○		(16.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			131	382		
938	62	"	P2	土	鉄 (鉄)	○		(15.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
939	63	"	P2	土	鉄 (鉄)	○		(15.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
940	64	"	P2	土	鉄 (鉄)	○		(15.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
941	65	"	Q1P	土	鉄 (鉄)	○		(16.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
942	66	"	P2	土	鉄 (鉄)	○		(13.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
943	67	"	P2	土	鉄 (鉄)	○		(16.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			132	"		
944	68	"	P2	土	鉄 (鉄)	○				(5.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	鋼糸籠	ロクロナデ			"	"	
945	69	"	Q1P	土	鉄 (鉄)	○				(6.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	鋼糸籠	ロクロナデ			"	"	
946	70	"	P2	土	鉄 (鉄)	○				(5.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	鋼糸籠	ロクロナデ			"	"	
947	71	"	Q1P	土	鉄 (鉄)	○				7.0				ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	鋼糸籠	ロクロナデ			383	壁面のケズリが特異	
948	72	"	床	土	鉄 (鉄)	?				(10.2)				ケズリ	ナデ	不明	ナデ			"	"	
949	73	"	P3	土	鉄 (鉄)	?				(10.0)				ケズリ	ナデ	不明	ナデ			"	"	
950	74	"	"	"	"	"														"	"	
951	75	"	Q1P	土	鉄 (鉄)	○		(12.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
952	76	"	Q3	須	鉄 (鉄)	?								ケズリ	ナデ					"	"	
953	77	"	床2	須	鉄 (鉄)	?								遊椅子状文	円形柱文凸部					"	"	
954	78	"	床4	須	鉄 (鉄)	?								遊行ナタキ	欄文					"	"	
955	79	"	Q3	須	鉄 (鉄)	?								遊行ナタキ	ナデ					"	"	
956	80	"	床	須	鉄 (鉄)	?								遊行ナタキ	遊行アテ					"	"	
957	81	"	Q3P15	須	鉄 (鉄)	?								遊行ナタキ	遊行アテ					"	"	
958	82	"	P1	灰輪	鉄 (鉄)	○								ロクロ灰輪	ロクロ灰輪					133	"	
959	83	"	"	"	"	"								"	"					"	"	
960	1	E型#2住	土床2	土	鉄 (鉄)	○		13.4		5.0	4.1		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	鋼糸籠	ロクロナデ			134	"
961	2	"	床15	土	鉄 (鉄)	○		(13.2)		(5.4)	4.6		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	鋼糸籠?	ロクロナデ			384	"
962	3	"	床15	土	鉄 (鉄)	○		(14.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	"
963	4	"	床15	土	鉄 (鉄)	○		(12.5)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	"
964	5	"	床4	土	鉄 (鉄)	○		(15.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	"
965	6	"	床14	土	鉄 (鉄)	○		(14.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	"
966	7	"	床15	土	鉄 (鉄)	○		(13.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	"
967	8	"	床14	土	鉄 (鉄)	○		(13.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	"
968	9	"	床	土	鉄 (鉄)	○		(13.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	"

969	10	区画12住	カマド	土	塚 (90)	○		(14.1)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			134	384
970	11	"	壇	土	塚 (90)	○		(14.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
971	12	"	土塚1	土	塚 (90)	○		(14.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
972	13	"	カマド	土	塚 (90)	○		(13.7)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
973	14	"	床4	土	塚 (90)	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
974	15	"	壇	土	塚 (90)	○		(13.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
975	16	"	床4	土	塚 (90)	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
976	17	"	壇	土	塚 (90)	○			5.4					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"
977	18	"	土塚2	土	塚 (90)	○		(5.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"
978	19	"	カマド	土	塚 (90)	○			(5.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"
979	20	"	壇	須	塚	○		(16.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
980	21	"	床12	須	塚	○		(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
981	22	"	壇	須	塚	○			(5.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"
982	23	"	壇	土	塚 付録	○								ロクロナデ	1 高台・ 原盛高台	回糸籠高台	1 高台・ 原盛高台	"	"
983	24	"	壇	土	塚 付録	○		14.0	7.1	6.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明高台	ロクロナデ	"	"	
984	25	"	カマド	土	塚 付録	○			(8.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	不明高台	ロクロナデ	"	"
985	26	"	カマド	土	塚 付録	○			(7.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	不明高台	ロクロナデ	"	"
986	27	"	床12	土	塚	○		(22.2)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"
987	28	"	カマド	土	塚	○		(24.8)				ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			135	"
988	29	"	床5	土	塚	○		(18.0)				ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"
989	30	"	壇	土	塚	○?		(16.0)				ナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"
990	31	"	カマド	土	塚	○		(13.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
991	32	"	床1	土	塚	○		(16.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
992	33	"	床14	土	塚	○			(10.0)					ナズリ	ヘラナデ	不明ナデ	ナデ	"	"
993	34	"	壇	須	塚	○		(34.4)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
994	35	"	床2	須	塚	○						ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
995	36	"	壇	須	塚	○			7.6					ナズリ	ナデ	不明ナデ	ナデ	"	"
996	37	"	壇	須	塚	○						ロクロナデ	ロクロナデ	進行ナタキ	無文凸面			"	385
997	38	"	壇	須	塚	?								階子ナタキ	無文凸面			"	"
998	39	"	壇	須	塚	?								進行ナタキ	ナデ・ナズリ			136	"
999	40	"	壇	須	塚	?								階子ナタキ	ナデ			"	"
1000	41	"	壇	須	塚	?								階子ナタキ	波状アテ			"	"
1001	42	"	壇	須	塚	?								進行ナタキ	無文アテ			"	"
1002	43	"	壇	須	塚	?								進行ナタキ	同心円文			"	"
1003	44	"	壇	須	塚	?								進行ナタキ	背板放文			"	"

No	HNo	基 礎 名	階 位	種 類	器 種	成 形	法 量				調 査 技 法				取 扱	写 真	備 考		
							L 径		L 径 別 径	L 径 径 径	L 径 径 径	L 径 径 径		L 径 径 径					
							(mm)	(mm)				外 面	内 面	外 面				内 面	切 削 面
1004	45	E面12住	埋土	鋼 管	?							抜行ナメキ	抜行アテ		130	385			
1005	1	D面w5住	埋土	土 環	○		(13.4)		(15.6)	4.0	ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風	図永無	1ガキ・内風	138	386	
1006	2	"	埋土	土 環	○		(14.9)				ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風	図永無	1ガキ・内風	"	"	調査あり
1007	3	"	埋土	土 環	○				(10.0)			ケズリ	1ガキ・内風	不明・ナデ	1ガキ・内風	"	"		
1008	4	"	床No1	鋼 管	○		(14.2)		6.5	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図永無	ロクロナデ	"	"	
1009	5	"	床No2	鋼 管	○		(14.0)		6.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図永無	ロクロナデ	"	"	
1010	6	"	床No6	鋼 管	○		(14.6)		6	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図永無	ロクロナデ	"	"	調査あり
1011	7	"	カマド	鋼 管	○				(6.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"	
1012	8	"	左輪	鋼 管	○		(14.0)		(6.4)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図永無	ロクロナデ	"	"	
1013	9	"	埋土	鋼 管	○		(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	
1014	10	"	埋土	鋼 管	○				(4.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"	
1015	11	"	床No5	土 環	○		(25.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ナメキ・ナメキ	カキメ			"	"	
1016	12	"	床No3	土 環	○				8.0				ナメキ・ナメキ	ナメキ・ナメキ	不明・ナデ	ナデ	"	"	387
1017	13	"	カマド	土 環	○		(16.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	386
1018	14	"	カマド	土 環	○		(16.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1019	15	"	カマド	土 環	○				7.6				ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	図永無	ロクロナデ	139	"	
1020	16	"	左輪筋	土 環	○		12.3		5.6	8.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図永無	ロクロナデ	"	"	387
1021	17	"	カマド	土 環	○		(17.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ハケメ	ヘラナデ			"	"	
1022	18	"	埋土	土 環	○				(9.8)				ケズリ・1ガキ	ヘラナデ	不明・ナデ	ヘラナデ	"	"	調査あり
1023	19	"	埋土	土 環	○				7.5				ケズリ	ナデ	図永無	ナデ	"	"	
1024	20	"	袖内	土 環	○				8.4				ハケメ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1025	21	"	埋土	土 環	○				(9.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	図永無	ロクロナデ	"	"	
1026	22	"	埋土	鋼 管	○				(12.6)				ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1027	23	"	埋土	鋼 管	○						ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
1028	1	D面w8住	床No6	土 環	○		(14.5)				ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風			140	"	
1029	2	"	カマド	土 環	○		(10.4)				ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風			"	"	
1030	3	"	カマド	土 環	○				(6.6)				ロクロナデ	1ガキ・内風	図永無	1ガキ・内風	"	"	
1031	4	"	カマド	土 環	○		(14.9)				ロクロナデ	1ガキ	ロクロナデ	1ガキ			"	"	
1032	5	"	床No6	鋼 管	○		13.0		6.2	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図永無	ロクロナデ	"	"	
1033	6	"	床No6	鋼 管	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
1034	7	"	床No2	土 環	○		(22.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	ナデ			"	"	
1035	8	"	床No2	土 環	○		(24.0)				ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ ケズリ	ナデ			"	"	

1036	9	D区w8住	床No2	土	廻	○		(28.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			140	388
1037	10	"	床No6	土	廻	○								ケズリ	ナデ			"	"
1038	11	"	カマド No4	土	廻		○	18.3	11.3	20.6	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ・ケズリ	ハケ	不明・ナデ	ナデ		141	"
1039	12	"	床No4	土	廻		○	(17.2)			ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ				140	"
1040	13	"	支脚	土	廻	○?			(8.4)					ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	141	"
1041	14	"	カマド	土	廻	○			6.4					ロクロナデ	ロクロナデ	回承架	ロクロナデ	140	"
1042	15	"	床No1	土	絆	○		(24.0)			ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫				141	"
1043	16	"	床面	須	廻	○								タタキ・ ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1044	17	"	カマド	須	大廻		○							進行タタキ	背海線7ナ			"	"
1045	18	"	カマド	須	大廻	○?			(16.4)					進行タタキ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
1046	1	D区x10住	埋土	土	環	○		(14.3)	5.0	5.6	ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫	回承架	いびき・内庫	142	"	
1047	2	"	埋土	土	環	○		(15.0)			ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫				"	"
1048	3	"	床土	土	環	○		(13.8)	7.4	4.5	ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫	回承架	いびき・内庫	"	"	
1049	4	"	埋土	土	環	○		(13.2)			ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫				"	"
1050	5	"	埋土	土	環	○		(18.0)			ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫				"	"
1051	6	"	埋土	土	環	○		(14.6)			ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫				"	389
1052	7	"	埋土	土	環	○		(13.4)			ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫				"	"
1053	8	"	床面	土	環	○		(12.4)			ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫				"	"
1054	9	"	土坑	土	環	○		(12.9)			ロクロナデ	いびき・内庫	ロクロナデ	いびき・内庫				"	"
1055	10	"	埋土	土	環	○			6.0					ロクロナデ	いびき・内庫	回承架	いびき・内庫	"	"
1056	11	"	埋土	土	環	○		(6.0)						ロクロナデ	いびき・内庫	回承架	いびき・内庫	"	"
1057	12	"	埋土	土	環	○		(7.0)						ロクロナデ	いびき・内庫	回承架	いびき・内庫	"	"
1058	13	"	埋土	土	環	○		(6.0)								回承架	いびき・内庫	"	"
1059	14	"	埋土	土	環	○								ロクロナデ ・裏書	いびき・内庫			"	裏書あり
1060	15	"	埋土	土	環	○		(15.7)	(6.2)	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承架	ロクロナデ	"	"	
1061	16	"	埋土	土	環	○		15.8	5.8	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承架	ロクロナデ	"	"	
1062	17	"	埋土	土	環	○				5.8				ロクロナデ	ロクロナデ	回承架	ロクロナデ	"	"
1063	18	"	貼床下	土	環	○		(15.2)	(7.0)	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承架	ロクロナデ	"	"	
1064	19	"	床面	上	環	○		(16.9)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
1065	20	"	床No1	土	環	○		(15.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
1066	21	"	床No6	土	環	○		(14.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
1067	22	"	貼床下	土	環	○		(15.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
1068	23	"	埋土	土	環	○		(15.1)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
1069	24	"	床No1	土	環	○		(15.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
1070	25	"	埋土	土	環	○		(17.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"

No.	EINo.	造 物 名	階 位	種類	種類	成 形	法 量					調 査 技 法				写真	備 考		
							口	径	(m)	深	径	(m)	口 標 部		底 部				
													外 面	内 面	外 面			内 面	切り差し
1071	26	D型×10住	床No4	土	円	○	(13.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		142	300	
1072	27	"	床面	土	円	○	(12.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		143	"	
1073	28	"	埋土	土	円	○	(14.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1074	29	"	埋土	土	円	○	(15.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1075	30	"	埋土	土	円	○	(14.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1076	31	"	埋土	土	円	○	(13.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1077	32	"	埋土	土	円	○	(12.3)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1078	33	"	床No2	土	円	○			(6.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"
1079	34	"	床No1	土	円	○			(6.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"
1080	35	"	埋土	土	円	○			(5.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"
1081	36	"	埋土	土	円	○			(4.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"
1082	37	"	埋土	土	円	○						ロクロナデ ・掘削	ロクロナデ					"	"
1083	38	"	埋土	土	円	○	(14.8)		8.6	6.1		ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風	回承盤高台	ロクロナデ	"	300
1084	39	"	床No4	土	圓	○	(24.9)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1085	40	"	床No4	土	圓	○						ロクロナデ	ココナデ	ロクロナデ ・ケズリ	ナデ		"	"	
1086	41	"	埋土	土	圓	○	(21.0)					ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ ・ケズリ	ナデ		"	"	
1087	42	"	埋土	土	圓	○			(8.0)					ケズリ	ナデ	不明	"	"	
1088	43	"	カマド	土	圓	○			(9.2)					ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
1089	44	"	埋土	土	圓	○	(19.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1090	45	"	埋土	土	圓	○	(13.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1091	46	"	床面	土	圓	○	(16.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		144	"	
1092	47	"	床面	土	圓	○			7.4							回承盤	ロクロナデ	"	"
1093	48	"	埋土	土	圓	○	9.4					1ガキ	1ガキ	1ガキ	1ガキ	回承盤・高台	1ガキ	"	元は内風か?
1094	49	"	埋土	須	圓	○	(16.0)					ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
1095	50	"	床No3	須	大盤	○								椅子タタキ	ナデ		"	"	
1096	51	"	床No2	須	大盤	○								遊行タタキ	ナデ・布目		"	"	
1097	52	"	床No5	須	大盤	○								遊行タタキ	ナデ・布目		"	301	
1098	53	"	埋土	須	圓	○								ケズリ	ナデ		"	"	
1099	1	D型p12住	カマド 石箱	土	環	○	(14.6)					ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風		146	"	
1100	2	"	カマド 内	土	環	○			(5.6)					ロクロナデ	1ガキ・内風	回承盤	1ガキ・内風	"	"
1101	3	"	カマド 高箱	土	環	○			(6.0)					ロクロナデ	1ガキ・ 内風	回承盤	1ガキ・内風	"	"
1102	4	"	埋土	土	環	○	13.3		5.2	2.6		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"

1103	5	Dmp12住	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(14.3)		5.6	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国産鋼	ロクロナデ	146	391
1104	6	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○		(14.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1105	7	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(13.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1106	8	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(13.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1107	9	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○				6.0				ロクロナデ	ロクロナデ	国産鋼	ロクロナデ	"	"
1108	10	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○				5.2				ロクロナデ	ロクロナデ	国産鋼	ロクロナデ	"	"
1109	11	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(15.3)		8.1	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国産鋼	高台	ロクロナデ	"
1110	12	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(17.6)		(10.0)	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国産鋼	高台	ロクロナデ	"
1111	13	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(15.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1112	14	"	床No1	土	鉄 (鉄)	○		(20.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ				"	"
1113	15	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○								ロクロナデ ケズリ	ナデ			"	"
1114	16	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○				(11.0)				ケズリ	ナデ	不明	ナデ	"	392
1115	17	"	土坑	土	鉄 (鉄)	○		(11.9)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			147	"
1116	18	"	土坑	土	鉄 (鉄)	○		(15.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1117	19	"	土坑	土	鉄 (鉄)	○		(11.2)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
1118	20	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○		(8)				ロクロナデ	ロクロナデ	旅行タタキ	鋼文			"	"
1119	21	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○								ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ			"	"
1120	22	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○								ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ			"	"
1121	23	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○	○?							旅行タタキ	鋼文			"	"
1122	24	"	床No2	土	鉄 (鉄)	○	○?							旅行タタキ	鋼文			"	"
1123	1	芝No12住	カマド	土	鉄 (鉄)	○	○?	(14.4)		(3.8)	4.2	ロクナ	ロクナ	旅行タタキ	鋼文	不明・ロクナ	ロクナ	148	"
1124	2	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○				6.8				ロクナ	ロクナ	国産鋼	ロクナ	"	"
1125	3	"	床5	土	鉄 (鉄)	○		13.6		5.8	4.6	ロクナ	ロクナ	ロクナ	ロクナ	国産鋼	ロクナ	"	"
1126	4	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(14.4)				ロクナ	ロクナ	ロクナ	ロクナ			"	"
1127	5	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○		(13.3)				ロクナ	ロクナ	ロクナ	ロクナ			"	"
1128	6	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(14.0)				ロクナ	ロクナ	ロクナ	ロクナ			"	"
1129	7	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(15.0)				ロクナ	ロクナ	ロクナ	ロクナ			"	"
1130	8	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○				(5.4)				ロクナ	ロクナ	不明・ナデ	ロクナ	"	"
1131	9	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○				(5.0)				ロクナ	ロクナ	国産鋼	ロクナ	"	"
1132	10	"	カマド	土	鉄 (鉄)	○		(21.1)				ロクナ	ロクナ	ロクナ	ロクナ			"	360
1133	11	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(20.8)				ロクナ	ロクナ	ロクナ	ロクナ			"	"
1134	12	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(19.2)				ロクナ	ロクナ	ケズリ	ヘラナデ			"	"
1135	13	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(23.4)				ロクナ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"
1136	14	"	床5	土	鉄 (鉄)	○				(11.8)				ヘラナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
1137	15	"	埋土	土	鉄 (鉄)	○		(16.0)				ロクナ	ロクナ	ロクナ	ロクナ			"	"

1170	25	B館13住	埋土	土	砂	○													ロクロナデ	いざき・内葉	回条後高台	いざき・内葉	152	395	
1171	26	"	埋土	環	環	○			(5.8)										ロクロナデ	ロクロナデ	回条側	ロクロナデ	"	"	
1172	27	"	埋土	土	環	○			(18.8)										ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	
1173	28	"	埋土	土	環	○			(26.0)										ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	
1174	29	"	埋土	土	環	○			(10.9)										ロクロナデ	ロクロナデ	回条側	ロクロナデ	"	"	
1175	30	"	埋土	土	環	○			(4.9)										ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1176	31	"	埋土	環	砂	○													ロクロナデ	ロクロナデ	不明付高台	ロクロナデ	"	"	
1177	32	"	埋土	環	環	○			(15)										ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	
1178	33	"	埋土	環	環														ロクロナデ	カキメ			"	"	
1179	34	"	埋土	環	環	○													ケズリ	ナデ			"	"	
1180	35	"	埋土	環	環	○													ケズリ	ナデ			"	"	
1181	36	"	埋土	環	環	○													ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1182	37	"	埋土	環	大環	○			○?										並行タタキ	異形敷文アテ			"	"	
1183	38	"	埋土	環	大環	○			○?										並行タタキ	ナデ			"	"	
1184	39	"	埋土	環	大環	○			○										並行タタキ	同心行後アテ			"	"	
1185	1	D館w13住	埋土	土	環	○			13.0		7.0	4.9	いざき	いざき・内葉	いざき・ケズリ	いざき・内葉				不明・ケズリ	いざき・内葉	154	"		
1186	2	"	埋土	土	環	○			(14.0)										ロクロナデ	いざき・内葉	ロクロナデ	いざき・内葉		396	
1187	3	"	埋土	土	環	○			(14.4)		6.0	4.8	ロクロナデ	いざき・内葉	ロクロナデ	いざき・内葉				回条側	いざき・内葉	"	"		
1188	4	"	埋土	土	環	○			(12.6)				いざき	いざき・内葉	いざき	いざき・内葉							"	"	
1189	5	"	埋土	土	環	○			(7.0)										ケズリ	いざき・内葉	不明・ケズリ	いざき・内葉	"	"	
1190	6	"	埋土	土	環	○					6.0								ケズリ	いざき・内葉	回条一部側	いざき・内葉	"	"	
1191	7	"	埋土	土	環	○					5.6								ロクロナデ	いざき・内葉	回条側	いざき・内葉	"	"	
1192	8	"	埋土	土	環	○					(6.9)								ロクロナデ いざき・ケズリ	いざき・内葉	回条側	いざき・内葉	"	"	
1193	9	"	埋土	土	環	○					(6.4)								ロクロナデ	いざき・内葉	回条側・爪形	いざき・内葉	"	"	
1194	10	"	埋土	土	環	○			(12.0)										ロクロナデ	いざき・内葉	ロクロナデ	いざき・内葉	"	"	
1195	11	"	埋土	土	環	○			12.4		6.3	4.0	ロクロナデ	いざき・内葉 異形敷理	ロクロナデ	いざき・内葉 異形敷理				回条側	いざき・内葉 異形敷理	"	"		
1196	12	"	埋土	土	環	○			(8.0)										ロクロナデ	いざき・内葉 異形敷理	回条側	いざき・内葉 異形敷理	"	"	
1197	13	"	埋土	土	環	○			(13.2)		(8.0)	5.4	いざき	いざき・内葉 異形敷理	ケズリ・いざき	いざき・内葉 異形敷理				不明・ナデ	いざき・内葉 異形敷理	"	"		
1198	14	"	埋土	土	環	○			(15.5)										ロクロナデ	いざき・内葉 異形敷理	ロクロナデ	いざき・内葉 異形敷理	"	"	
1199	15	"	埋土	土	環	○?			13.4		6.8	4.8	ナデ	いざき・内葉 異形敷理	ナデ・いざき	不明・いざき	いざき				不明・いざき	いざき	"	"	本家は内面異形敷理?
1200	16	"	埋土	土	環	○?			(5.4)										ナデ・いざき	いざき	不明・いざき	いざき	"	"	本家は内面異形敷理?
1201	17	"	埋土	土	環	○?			5.7										いざき	いざき	不明・ナデ	いざき	"	"	本家は内面異形敷理?
1202	18	"	埋土	土	環	○			(14.0)										いざき	いざき・内葉 異形敷理	いざき	いざき	"	"	
1203	19	"	埋土	土	環	○			(5.4)										ケズリ	いざき	不明・ナデ	いざき	"	"	本家は内面異形敷理?
1204	20	"	埋土	土	環	○			(14.9)		6.4	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			回条側	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	

No	区画	道筋名	階位	種類	仕様	成 形	法				調 査 技 法				既設	写真	備 考				
							口径	身径	口径	口径	口径	口径	口 部					底 部			
													外 面	内 面				外 面	内 面	切り離し	内 面
1206	21	D直w13位	埋土	土	RF (RF)	○		(14.9)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		154	306		
1208	22	"	埋土	土	○					(7.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1207	23	"	埋土	土	RF (RF)	○		(13.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		155	"	"	
1208	24	"	埋土	土	RF (RF)	○		(14.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	"	
1209	25	"	埋土	土	RF (RF)	○				(6.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1210	26	"	埋土	土	RF (RF)	○		(13.0)		5.8	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1211	27	"	埋土	土	RF (RF)	○		(13.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	297	"	"
1212	28	"	埋土	須	環	○				8					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1213	29	"	埋土	須	環	○		(12.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
1214	30	"	埋土	須	環	○		(15.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
1215	31	"	埋土	須	環	○				(6.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1216	32	"	埋土	須	環	○				(7)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1217	33	"	埋土	須	環	○				(7.5)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1218	34	"	埋土	須	環	○				(7.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1219	35	"	埋土	須	環	○				(7.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1220	36	"	埋土	須	環	○				(6.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1221	37	"	埋土	須	環	○				(7.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1222	38	"	埋土	須	環	○				(7.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1223	39	"	床No2	土	壁	○	21.7			9.1	28.6	ココナテ	ココナテ	ナデ	ナデ	木骨造	ナデ			"	"
1224	40	"	埋土	土	壁	○	(20.5)					ココナテ	ココナテ	ハケメ	ナデ					"	"
1225	41	"	埋土	土	壁	○	(22.4)					ココナテ	ココナテ							"	"
1226	42	"	埋土	土	壁	○	(12.4)					ココナテ	ココナテ	ナデ	ナデ					156	"
1227	43	"	埋土	土	壁	○	(12.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
1228	44	"	埋土	土	壁	○	(17.0)					ココナテ	ココナテ	ナデ	ナデ					"	"
1229	45	"	埋土	土	壁	○?				7.8					ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ		"	"
1230	46	"	埋土	土	壁	○				7.6					ケズリ	ナデ	不明・ケズリ	ナデ		"	"
1231	47	"	埋土	土	壁	○				8.2					ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ		"	"
1232	48	"	埋土	土	壁	○				8.0					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1233	49	"	埋土	土	壁	○				(6.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	留糸鋼	ロクロナデ		"	"
1234	50	"	埋土	土	壁	○?				(6.0)					ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ		"	"
1235	51	"	埋土	土	壁	○	(23.0)					ココナテ	ココナテ	ハケメ	ハケメ					"	"
1236	52	"	埋土	土	壁	○	(22.1)					ココナテ	ココナテ	ヘラナデ	ヘラナデ					"	308

1227	53	DⅡw13住	榎	土	榿	○	(22.6)				ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ				157	398
1238	54	"	榎	土	榿	○		(9.6)					ヘラナデ	ハケメ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1239	55	"	榎	土	榿	○		(9.0)					ナデ?	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1240	56	"	掘出し	土	榿	○	(17.0)				ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ			"	"	
1241	57	"	榎	土	榿	○	(21.1)				ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ			"	"	
1242	58	"	榎	土	榿	○	(14.5)				ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ			"	"	
1243	59	"	榎	土	榿	○	(15.4)				ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ			"	"	
1244	60	"	榎	土	榿	○	(14.6)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"	
1245	61	"	榎	土	榿	○		(9.8)							木葺紙	ナデ	"	"	
1246	62	"	榎	土	榿	○		(9.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	圓糸紙	ナデ	"	"	
1247	63	"	榎	土	榿	○		(8.1)					ヘラナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1248	64	"	カマド	土	榿	○	11.3	6.0	9.9		ヨコナデ	ヨコナデ	ヒガキ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1249	65	"	榎	土	榿			(9.0)					ヘラナデ	ヘラナデ	木葺紙	ナデ	158	"	
1250	66	"	榎	土	榿	○	(14.8)				ロクロナデ	ヒガキ・ 圓糸紙	ロクロナデ	ヒガキ・ 圓糸紙			"	"	
1251	67	"	支脚	土	榿	○	14.8	7.4	10.9		ヒガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	木葺紙	ナデ	"	"	
1252	68	"	榎	土	榿	○	(14.0)	14.2	6.4	11.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ ・ケズリ	ロクロナデ	不明・ケズリ	ロクロナデ	"	390	
1253	69	"	輪石固	土	榿	○	(17.8)	(22.3)			ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"	
1254	70	"	掘溝1	土	榿	○		(9.0)					ハケメ・ ヘラナデ	ハケメ・ ヘラナデ	不明・ナデ	ハケメ	"	"	
1255	71	"	榎	土	榿	○		(9.6)					ヒガキ	ヘラナデ	不明・ナデ	ヘラナデ	"	"	
1256	72	"	榎	須	榿	○?		(11.2)					ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1257	73	"	カマド	須	榿	○?		(9.6)					ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1258	74	"	榎土	須	大榿	○?							並行タタキ	円形編文			159	"	
1259	75	"	榎土	須	大榿	○?							並行タタキ	背筒編文			"	"	
1260	76	"	榎土	須	大榿	○					ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
1261	77	"	榎土	須	榿	○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1262	78	"	榎土	須	榿	○							カキメ	カキメ・ナデ			"	"	
1263	79	"	榎土	須	榿	○							カキメ	カキメ・ナデ			"	"	
1264	80	"	榎土	須	榿	○							ケズリ	ナデ・ケズリ			"	"	
1265	81	"	榎土	須	榿	○							カキメ・ケズリ	カキメ			"	"	
1266	82	"	榎土	須	榿	○?							並行タタキ	同心円文			"	"	
1267	83	"	榎土	須	大榿	○?							並行タタキ	同心円文			"	"	
1268	84	"	榎土	須	大榿	○?							並行タタキ	ナデ・円形			"	"	
1269	85	"	榎土	須	大榿	○?							並行タタキ	放射状文			"	"	
1270	1	DⅡp15住	カマド 土	土	榿	○	14.6	5.0	5.0		ロクロナデ	ヒガキ・内裏	ロクロナデ	ヒガキ・内裏	圓糸紙	ヒガキ・内裏	150	400	外面漆塗りあり
1271	2	"	カマド 土	土	榿	○	15.5	5.8	5.0		ロクロナデ	ヒガキ・内裏	ロクロナデ	ヒガキ・内裏	圓糸紙	ヒガキ・内裏	"	"	

No.	日誌	遺構名	層位	種類	形状	法				測 量 技 法						写真	備 考		
						口		底		L1		測 部		測 部				測 部	
						径	径	径	径	径	径	径	径	径	径			径	径
1272	3	Dmp15住	床No6	土 環	○	13.2		5.4	4.7	ロタロナデ	1.5m・内周	ロタロナデ	1.5m・内周	回糸盤	1.5m・内周	160	400		
1273	4	"	床No5	土 環	○	(14.6)		5.8	4.5	ロタロナデ	1.5m・内周	ロタロナデ	1.5m・内周	回糸盤	1.5m・内周	"	"		
1274	5	"	埋土	土 環	○	(15.4)		(5.6)	4.5	ロタロナデ	1.5m・内周	ロタロナデ	1.5m・内周	回糸盤	1.5m・内周	"	"		
1275	6	"	埋土	土 環	○	(14.2)				ロタロナデ	1.5m・内周	ロタロナデ	1.5m・内周			"	"		
1276	7	"	埋土	土 環	○	(16.0)				ロタロナデ	1.5m・内周	ロタロナデ	1.5m・内周			"	"		
1277	8	"	カマド 土上No2	土 環	○	(14.8)				ロタロナデ	1.5m・内周	ロタロナデ	1.5m・内周			"	"		
1278	9	"	埋土	土 環	○	(14.4)				ロタロナデ	1.5m・内周	ロタロナデ	1.5m・内周			"	"		
1279	10	"	カマド内	土 環	○	(18.6)				ロタロナデ	1.5m・内周	ロタロナデ	1.5m・内周			"	"		
1280	11	"	埋土	土 環	○		(6.8)					ロタロナデ	1.5m・内周	回糸盤	1.5m・内周	"	"		
1281	12	"	埋土	土 環	○			5.8				ロタロナデ	1.5m・内周	回糸盤	1.5m・内周	"	"		
1282	13	"	カマド 土上No1	土 環	○			6.0				ロタロナデ	1.5m・内周	回糸盤	1.5m・内周	"	"		
1283	14	"	埋土	土 環	○			5.0				ロタロナデ	1.5m・内周	遺構で不明	1.5m・内周	"	"		
1284	15	"	カマド 土上No2	土 環	○	14.3		5.3	4.6	ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ	回糸盤	ロタロナデ	"	"		
1285	16	"	カマド 土上No1	土 環	○	(15.0)				ロタロナデ	ロタロナデ					"	"		
1286	17	"	埋土	土 環	○	(14.2)		(5.4)	(3.9)	ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ	不明	ロタロナデ	"	"		
1287	18	"	カマド 土上No2	土 環	○	(14.6)				ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ			"	"		
1288	19	"	埋土	土 環	○		(7.4)					ロタロナデ	ロタロナデ	回糸盤	ロタロナデ	"	401		
1289	20	"	埋土	土 環	○		(7.0)					ロタロナデ	ロタロナデ	回糸盤	ロタロナデ	"	"		
1290	21	"	埋土	須 環	○			6.2				ロタロナデ	ロタロナデ	回糸盤	ロタロナデ	"	"		
1291	22	"	埋土	須 環	○			6.0				ロタロナデ	ロタロナデ	回糸盤	ロタロナデ	"	"		
1292	23	"	埋土	須 環	○			6.4				ロタロナデ	ロタロナデ	回糸盤	ロタロナデ	"	"		
1293	24	"	カマド 土上No2	須 環	○							ロタロナデ	ロタロナデ			161	外周壁あり		
1294	25	"	カマド 土上No1	土 環	○	13.6		7.0	4.2	ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ	回糸盤高台	ロタロナデ	"	"		
1295	26	"	埋土	須 環	○			(7.4)						不明		"	台座のみ残存		
1296	27	"	床直	土 環	○	(18.7)				ロタロナデ	ロタロナデ	ケズリ	ナデ			"	"		
1297	28	"	床No1	土 環	○	(24.0)				ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ			"	"		
1298	29	"	カマド 土上No2	土 環	○	(17.3)				ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ ・ケズリ	ナデ			"	"		
1299	30	"	埋土	土 環	○	(18.2)				ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ	ロタロナデ			"	"		
1300	31	"	カマド 土上No2	土 環	○		(7.6)					ケズリ	ナデ	不明・ナデ		"	"		
1301	32	"	埋土	土 環	○							ロタロナデ	ロタロナデ			"	"		
1302	33	"	埋土	土 環	○			4.4				ナデ	ナデ	回糸盤	ナデ	"	"		
1303	34	"	カマド内	須 環	○							ロタロナデ ・ケズリ	ロタロナデ			"	"		

1304	35	D型p15住	埋土	須	壘	○		(8.4)			ロクロナデ	ロクロナデ					161	401
1305	36	"	埋土	須	壘	○?							ケズリ	ナデ			162	"
1306	37	"	埋土	須	壘	○							ケズリ	ナデ			"	"
1307	38	"	埋土	須	壘	○					ロクロナデ	ロクロナデ					"	402
1308	39	"	埋土	須	壘	○							ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ			"	"
1309	40	"	埋土	須	大壘		○?						並行タタキ	並行アテ			"	"
1310	41	"	埋土	須	大壘		○						並行タタキ	異形短丈アテ			"	"
1311	42	"	埋土	須	大壘		○						並行タタキ	青海波アテ			"	"
1312	43	"	カマド	須	大壘		○?						並行タタキ	不明当飯			"	"
1313	44	"	カマド	須	大壘		○?						並行タタキ	並行アテ			"	"
1314	1	D型t16住	P1	土	塚	○			(5.9)				ロクロナデ			回来飯	1/2 1/2 黒色地層	163
1315	2	"	カマド	土	塚	○		(15.2)			ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層	ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層			"	"
1316	3	"	カマド	土	塚	○		(16.0)			ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層	ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層			"	"
1317	4	"	カマド	土	塚	○		(13.6)			ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層	ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層			"	"
1318	5	"	埋土	塚	○			(14.6)			ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層	ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層			"	"
1319	6	"	埋土	塚	○				(5.1)				ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層		回来飯	1/2 1/2 黒色地層	"
1320	7	"	埋土	塚	○			(15.8)			ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層	ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層			"	"
1321	8	"	埋土	塚	○				(5.0)				ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層		回来飯	1/2 1/2 黒色地層	"
1322	9	"	埋土	待	○			(6.8)					ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層		回来飯・貼付	1/2 1/2 黒色地層	"
1323	10	"	P6	土	待	○		(6.2)					ロクロナデ	1/2 1/2 黒色地層		回来飯・貼付	1/2 1/2 黒色地層	"
1324	11	"	埋土	待	○			(7.5)								回来飯・貼付	1/2 1/2 黒色地層	"
1325	12	"	P6	土	待	○		(5.8)								回来飯・貼付	1/2 1/2 黒色地層	"
1326	13	"	P6	土	壘	○?		(14.6)			1/2 1/2 黒色地層	1/2 1/2 黒色地層	1/2 1/2 黒色地層	1/2 1/2 黒色地層			"	"
1327	14	"	P2	土	○			14.6	5.0	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"
1328	15	"	P2	土	○			14.0	6.5	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	403
1329	16	"	P2	土	○			13.6	5.8	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"
1330	17	"	P6	土	○			13.1	5.4	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"
1331	18	"	P2	土	○			14.4	5.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"
1332	19	"	P6	土	○			(12.8)	4.5	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"
1333	20	"	埋土	○				(12.8)	5.8	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"
1334	21	"	床面	土	○			14.4	5.6	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"
1335	22	"	土坑	土	○				5				ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"
1336	23	"	カマド	土	○			(14.0)	(5.6)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"
1337	24	"	床面	土	○			(12.8)	(5.4)	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	154	"
1338	25	"	P6	土	○			(14.6)	(5.2)	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回来飯	ロクロナデ	"	"

No.	B1No.	遺構名	副位	種類	器種	成 形	法				製 法				図版	写真	備 考				
							口 径		底 径		口 径		底 径					製 法	製 法	製 法	製 法
							口 径	底 径	口 径	底 径	口 径	底 径	口 径	底 径							
1339	25	DⅡ116位	P6	土	灰 (黄)	○	(13.0)	(6.8)	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	164	403	園寺あり				
1340	27	"	P6	土	灰 (黄)	○	(13.4)	(5.4)	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1341	28	"	P1	土	灰 (黄)	○	(14.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1342	29	"	埋	土	灰 (黄)	○	(14.2)	(6.5)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1343	30	"	埋	土	灰 (黄)	○		(5.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1344	31	"	カマド	土	灰 (黄)	○	(12.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	404				
1345	32	"	P1	土	灰 (黄)	○	(13.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1348	33	"	P2	土	灰 (黄)	○		5.4				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤?	ロクロナデ	"	"				
1347	34	"	埋	土	灰 (黄)	○		(6.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1348	35	"	埋	土	灰 (黄)	○	(12.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"				
1349	36	"	埋	土	灰 (黄)	○	(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1350	37	"	埋	土	灰 (黄)	○	(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1351	38	"	P1	土	灰 (黄)	○	(12.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1352	39	"	P2	土	灰 (黄)	○	(12.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1353	40	"	埋	土	灰 (黄)	○	(14.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1354	41	"	床面	土	灰 (黄)	○	(12.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1355	42	"	カマド	土	灰 (黄)	○	(20.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1356	43	"	埋	土	灰 (黄)	○		4.8				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1357	44	"	埋	土	灰 (黄)	○		(4.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1358	45	"	埋	土	灰 (黄)	○		(4.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1359	46	"	土坑	土	灰 (黄)	○		(6.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1360	47	"	埋	土	灰 (黄)	○		(5.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1361	48	"	床面	環	灰 (黄)	○		(5.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1362	49	"	埋	土	灰 (黄)	○	(15.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1363	50	"	床底	土	環	○	(24.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	タタキ	ヘラナデ			"	"				
1364	51	"	カマド	土	環	○	(19.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ナゲル?	ヘラナデ			165					
1365	52	"	P6	土	環	○	(16.7)	(19.2)		ロクロナデ	ロクロナデ	ナゲル	ヘラナデ			"	"	造的な器形			
1366	53	"	埋	土	環	○	(23.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ナゲル ナゲル	ナゲル			"	"				
1367	54	"	土坑	土	環	○	(12.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
1368	55	"	埋	土	環	○		(7.0)				ナゲル	ナゲル	不明・ナゲル	ナゲル	"	"				
1369	56	"	P1	土	環	○		5.6				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
1370	1	DⅡ123住	カマド	土	灰 (黄)	○		(6.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	166	404				

1371	2	DⅡ×23住	P8	須	環	○		15.5	6.0	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	166	404	職元不足
1372	3	"	カマド	須	環	○	(15.4)		6.0	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	"	"	薪付者多い・灯明皿
1373	4	"	カマド	須	環	○	(14.4)		6.6	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	"	405	
1374	5	"	袖左	須	環	○			(6.0)		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	"	"	
1375	6	"	カマド内	須	環	○	(12.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
1376	7	"	煙	須	環	○			(7.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	"	"		
1377	8	"	カマド	土	塼	○	(21.3)				ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	"	"		
1378	9	"	煙	須	環	○					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"			
1379	10	"	煙	須	環	○					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"			
1380	11	"	煙	須	環							並行タナキ	青海波文	"	"			
1381	12	"	煙	須	環							並行タナキ	無文	"	"			
1382	13	"	煙	須	環							並行タナキ	青海波文	"	"			
1383	14	"	煙	須	環							並行タナキ	放射状文	"	"			
1384	1	DⅡ×25住	煙	土	環	○	(15.8)				ロクロナデ	イガキ・黒色地盤	イガキ・黒色地盤			167		
1385	2	"	煙	土	環	○			(5.4)			ロクロナデ	イガキ・黒色地盤	羅承盤	"	"		
1386	3	"	カマド	土	塼	○	(14.6)		5.5	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	"	"	
1387	4	"	床直	土	塼	○			(6.4)		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	"	"	
1388	5	"	カマド	煙	環	○	(13.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
1389	6	"	床直	土	塼	○			(7.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	"	"	
1390	7	"	床直	土	塼	○			(9.0)			ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"	
1391	8	"	カマド	土	塼	○	(17.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
1392	9	"	カマド	土	塼	○	(24.9)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
1393	10	"	煙	土	塼	○	(21.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
1394	11	"	カマド	土	塼	○	(22.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	406		
1395	12	"	床直	土	鉢	○	(22.7)				ロクロナデ	イガキ	ナデ	イガキ	"	"		
1396	13	"	床直	土	鉢	○	(18.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
1397	14	"	床直	土	鉢	○			(12.2)			ケズリ	イガキ	不明・ナデ	イガキ	"	"	
1398	15	"	煙	須	環	○					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	168	"		
1399	16	"	煙	須	環	○						カキメ	カキメ	"	"			
1400	17	"	煙	須	環							並行タナキ	無文アテ	"	"			
1401	18	"	煙	須	環							並行タナキ	無文アテ	"	"			
1402	1	DⅡ×25住	カマド	土	塼	○	11.0		4.6	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	159	"
1403	2	"	煙	土	塼	○	11.4				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
1404	3	"	床3	須	環	○	13.8		7.0	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	"	"
1405	4	"	煙	須	環	○			(6.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	羅承盤	ロクロナデ	"	"	

No.	旧No.	道 橋 名	橋位	橋脚	橋脚	成 形	規 格					調 査 技 法				写真	備 考		
							口 径	(m) 径	(m) 径	(m) 径	(m) 径	L1 級 部		別 部				底 部	
												外 面	内 面	外 面	内 面			切り廻し	内 面
1406	5	D区+25住	床直	土 壁	○	29.4	17.8	(8.4)	29.7	ココナテ	ココナテ	ハケメ	ハケメ	不明・ナデ	ナデ	188	406		
1407	6	"	カマド	土 壁	○			(8.0)				ナデ	ハケメ	不明・ナデ	ナデ	"	"		
1408	7	"	埋	土 壁	○	(14.7)				ロクロナテ	ロクロナテ	ナデ	ナデ			"	"		
1409	8	"	床4	土 壁	○			7.4				ヘラナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ユビナデ	"	"		
1410	1	D区1-1住	床直	土 壁	○	14.6		5.9	4.7	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	170	407		
1411	2	"	床直	土 壁	○	(13.5)		(4.8)	5.0	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1412	3	"	埋	土 壁	○	(13.8)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ			"	"		
1413	4	"	土枕	土 壁	○			(6.0)				ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1414	5	"	埋	土 壁	○			(7.0)				ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1415	6	"	埋	土 壁	○			(6.0)				ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1416	7	"	埋	須 環	○	(12.4)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ			"	"		
1417	8	"	埋	須 環	○	(14.0)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ			"	"		
1418	9	"	埋	須 環	○			(4.8)		ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1419	10	"	カマド	土 壁	○	(21.3)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ヘラナデ			"	"		
1420	11	"	埋	土 壁	○	(14.2)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ヘラナデ			"	"		
1421	12	"	埋	土 壁	○	14.3		6.5	14.3	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1422	13	"	壁出し	須 環	○			(15.3)				ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ヘラナデ	"	"		
1423	14	"	埋	須 環	○?							ヘラケズリ	ナデ			171	"		
1424	15	"	埋	須 環								欄干文	ナデ			170	"		
1425	16	"	埋	須 環								欄干文	ナデ			"	"		
1426	17	"	埋	須 環								通行ナナキ	青海波文			171	"		
1427	18	"	埋	須 環								通行ナナキ	幾文			"	"		
1428	19	"	埋	須 環								通行ナナキ	放射状文			170	"		
1429	20	"	埋	須 環								通行ナナキ	青海波文			171	"		
1430	1	D区1-2住	埋	土 壁	○			5.4				ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	172	408		
1431	2	"	埋	土 壁	○	(15.0)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ			"	"		
1432	3	"	床8	土 壁	○			(7.0)		ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1433	4	"	埋	土 壁	○			(6.0)				ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1434	5	"	床1	土 壁	○	(14.1)		5.2	5.2	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1435	6	"	床4	須 環	○	14.6		5.4	4.5	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1436	7	"	床4	須 環	○	(13.5)		(5.4)	4.9	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		
1437	8	"	床2	須 環	○	(13.4)		(5.0)	5.0	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	回承盤	ロクロナテ	"	"		

1438	9	D型1-2位	床4	環	○	(14.5)		7.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回永銀	ロクロナデ	172	408	
1439	10	"	床4	環	○	(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1440	11	"	環	環	○	(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1441	12	"	環	環	○	(13.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1442	13	"	環	環	○	(15.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1443	14	"	環	環	○	(14.9)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1444	15	"	環	灰?	○	(17.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	全面に薄い反動
1445	16	"	環	環	○	(14.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1446	17	"	環	環	○	(13.1)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1447	18	"	環	環	○			(6.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永銀		"	"	
1448	19	"	床4	環	○			5.6				ロクロナデ	ロクロナデ	回永銀		"	"	
1449	20	"	環	環	○			5.3				ロクロナデ	ロクロナデ	回永銀		"	"	
1450	21	"	床2	上	環	○	(15.2)	(15.9)	(9.6)	13.7	ナデ	ナデ	ヘラナデ	不明・圧縮		"	"	
1451	22	"	床3	土	環	○	(22.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			173	409	
1452	23	"	環	土	環	○	(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		"	"	
1453	24	"	環	土	環	○	(13.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1454	25	"	環	土	環	○	(7.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1455	26	"	床4	環	環	○	(10.6)	(14.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	
1456	27	"	環	環	環	○						ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1457	28	"	環	環	環	○					ロクロナデ	ロクロナデ	進行タナ	ナデ		"	"	
1458	29	"	環	環	環	○						格子状文	網文ナテ			"	"	
1459	30	"	環	環	環	○						進行タナ	進行ナテ			"	"	
1460	31	"	環	環	環	○						進行タナ	青海波文			"	"	
1461	1	D型1位	床3	土	環	○	14.4	5.4	5.1	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	回永銀	1/2本・黒色処理	174		内面に溝が付き
1462	2	"	床8	土	環	○	14.0	5.7	4.7	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	回永銀	1/2本・黒色処理	"	"	
1463	3	"	環	土	環	○	(16.6)				ロクロナデ	1/2本・黒色処理	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	不明	"	"	一面が全粒状で黒色が均質
1464	4	"	環	土	環	○	(12.9)	(5.8)	6.2	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	回永銀	1/2本・黒色処理	"	"	黒色が割落気味
1465	5	"	床13	土	環	○	(15.0)	(5.2)	4.8	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	回永銀	1/2本・黒色処理	"	"	
1466	6	"	床14	土	環	○	(14.7)	(5.2)	4.8	ロクロナデ	1/2本・黒色処理	ロクロナデ	1/2本・黒色処理			"	"	
1467	7	"	環	土	環	○	(16.0)				ロクロナデ	1/2本・黒色処理	ロクロナデ	1/2本・黒色処理			410	
1468	8	"	土状18	土	環	○		5.6				ロクロナデ	1/2本・黒色処理	回永銀	1/2本・黒色処理	"	"	
1469	9	"	環	土	環	○		(5.2)				ロクロナデ	1/2本・黒色処理	回永銀	1/2本・黒色処理	"	"	黒色が割落気味
1470	10	"	環	土	環	○		(4.6)				ロクロナデ	1/2本・黒色処理	回永銀	1/2本・黒色処理	"	"	黒色が割落気味
1471	11	"	床2	環	環	○	14.5	5.4	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回永銀	ロクロナデ	"	"	
1472	12	"	床5	環	環	○	15.3	6.0	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回永銀	ロクロナデ	"	"	

No.	EIN	通稱名	層位	種類	器種	成形		法				調査				底	部	法	図版	写真	備考		
						口径	口径	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	口縁部		胴部								底	
												外面	内面	外面	内面							外面	内面
1473	13	DⅡg1住	床7	須	環	○		13.7			5.8	4.0	口	口	口	口	口	口	口	口	174	410	
1474	14	"	床14	須	環	○					(6.2)		口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1475	15	"	袖右	須	環	○		(14.0)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1476	16	"	壇	須	環	○		(14.3)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1477	17	"	床12	須	環	○		(14.8)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1478	18	"	壇	須	環	○		(13.8)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1479	19	"	袖右	須	環	○		(13.4)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1480	20	"	土坑	須	環	○		(14.5)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1481	21	"	土坑	須	環	○		(13.8)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1482	22	"	土坑	須	環	○		(14.0)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1483	23	"	埋土	須	環	○		(12.2)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	175
1484	24	"	袖右	須	環	○		(13.0)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1485	25	"	壇	須	環	○					(5.4)		口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	2底切り
1486	26	"	埋	須	環	○					(4.4)		口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1487	27	"	壇	須	環	○					(5.0)		口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1488	28	"	壇	須	環	○					(4.8)		口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1489	29	"	経道部	土	壘	○		(24.0)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1490	30	"	壇	土	壘	○		(22.4)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1491	31	"	床9	土	壘	○		(19.0)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1492	32	"	経道部	土	壘	○		(16.6)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1493	33	"	土坑18	土	壘	○		(22.8)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1494	34	"																			"	"	411
1495	35	"	床12	上	壘	○					(9.8)		ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	不明	ナデ	不明	ナデ	"	"	"	"
1496	36	"	土坑18	土	壘	○					(11.6)		ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	不明	砂底	"	"	"	"	"	砂底?
1497	37	"	土坑18	土	壘	○					(9.8)		ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	不明	砂底	"	"	"	"	"	砂底?
1498	38	"	土坑18	土	壘	○					(11.7)		ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	不明	砂底	"	"	"	"	"	砂底?
1499	39	"	床11	土	壘	○					(7.0)		ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	不明	ナデ	"	"	"	"	"	
1500	40	"	土坑18	土	壘	○?					(10.2)		ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	不明	ナデ	"	"	"	"	"	
1501	41	"	貯1	土	壘	○					6.7		口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	二次焼成を受けている
1502	42	"	袖左	土	壘	○					(7.0)		口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	
1503	43	"	埋	須	壘	○?					(6.4)		ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	不明	ナデ	"	"	"	"	"	
1504	44	"	壇	須	壘	○		(10.8)					口	口	口	口	口	口	口	口	"	"	

1505	45	Dwg 1住	埋土	高層	○		(10.0)					ロクロナデ	1ガキ・黒色地盤	ロクロナデ	1ガキ・黒色地盤			176	411	
1506	46	"	埋填	環										並行タタキ	青海抜文			"	"	
1507	1	DVP 3住	埋土	環	○		(14.3)					ロクロナデ	1ガキ・黒色地盤	ロクロナデ	1ガキ・黒色地盤			177	"	
1508	2	"	P4	土	環(赤)	○			(6.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	固永鋼	ロクロナデ	"	"	
1509	3	"	P3	土	環	○	(24.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1510	4	"	P4	土	環		(12.8)					ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"	
1511	5	"	埋土	環		○										水置底	ヘラケズリ	"	"	
1512	6	"	埋土	環	○		(39.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	タタキ・ケズリ	ロクロナデ			"	"	
1513	7	"	埋填	環	○							ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
1514	8	"	埋填	環	○									ナデ・ケズリ	ナデ			"	"	
1515	9	"	埋填	環										並行タタキ	同心円文			"	"	
1516	1	DIVR 4住	埋土	環	○		(11.6)	(5.1)	4.8		ロクロナデ	1ガキ・黒色地盤	ロクロナデ・ケズリ	1ガキ・黒色地盤	不明・ケズリ	1ガキ・黒色地盤	178	"		
1517	2	"	床下	土	環○?		(13.8)				ケズリ	1ガキ	ケズリ	1ガキ			"	412	本床は内面黒色処理	
1518	3	"	カマド	土	環	○			(8.0)					ナデ・ケズリ	1ガキ・黒色地盤	固永鋼	1ガキ・黒色地盤	"	"	
1519	4	"	埋土	環	○		(6.6)							ケズリ	1ガキ・黒色地盤	不明・面転ケズリ	1ガキ・黒色地盤	"	"	
1520	5	"	埋土	環	○		(6.4)							1ガキ	1ガキ・内屋	不明・ケズリ	1ガキ・黒色地盤	"	"	
1521	6	"	カマド	土	環	○	(12.5)				1ガキ	1ガキ・内屋	1ガキ?	1ガキ・内屋			"	"		
1522	7	"	カマド	土	環	○	(18.1)							ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"	
1523	8	"	埋土	環	○		(17.7)				ロクロナデ	1ガキ・内屋	ロクロナデ	1ガキ・内屋			"	"		
1524	9	"	埋土	環	○			(7.2)						ロクロナデ	1ガキ・黒色地盤	固永鋼	1ガキ・黒色地盤	"	"	
1525	10	"	埋土	環	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1526	11	"	埋土	環(赤)	○		(14.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1527	12	"	埋土	環(赤)	○			(7.6)						ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1528	13	"	埋填	環	○			4.5						ロクロナデ	ロクロナデ	固永鋼	ロクロナデ	"	"	
1529	14	"	埋填	環	○		(16.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1530	15	"	埋填	環	○		13.8	6.6	4.2		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	新築で不明	ロクロナデ	"	"	扉部全縁に黒塗あり	
1531	16	"	カマド	環	環	○	(12.6)	6.2	3.9		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永鋼	ロクロナデ	"	"		
1532	17	"	埋填	環	○		(15.3)	6.8	5.3		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永鋼	ロクロナデ	"	"		
1533	18	"	床直	環	環	○		(6.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	固永鋼	ロクロナデ	"	"	
1534	19	"	埋填	環	環	○	(13.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1535	20	"	床直	環	環	○	(13.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1536	21	"	床直	環	環	○		(8.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	固永鋼	ロクロナデ	"	"	
1537	22	"	埋填	環	○		(13.1)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1538	23	"	埋填	環	○			(6.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	固永鋼	ロクロナデ	"	"	
1539	24	"	床2	土	環	○?	(21.4)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"		

No	FNo	造替名	階位	種類	器種	成形	法 量				調 査 技 法						写真	備 考
							口径	口径	口径	口径	L1 線 部		調 査 部		法 部			
											外 面	内 面	外 面	内 面	切り離し	内 面		
1540	25	DVIk 4住	床3	土	覆	○	(22.0)									179	412	
1541	26	"		埋	土	覆	○	(18.2)								"	"	
1542	27	"		抽	土	覆	○				(7.8)							
1543	28	"		床底	土	覆	○				(9.0)							
1544	29	"		埋	土	覆	○				7.7							
1545	30	"		埋	土	覆	○				(9.2)						低い輪蓋付	
1546	31	"		埋	土	覆	○				(7.0)							
1547	32	"		埋	土	覆	○	(10.2)										
1548	33	"		埋	土	覆	○				(7.0)							
1549	34	"		埋	土	覆	○				(6.0)							
1550	35	"		埋	土	覆	○	(16.8)										
1551	36	"		埋	土	覆	○	(15.2)										
1552	37	"		埋	土	覆	○	(14.8)										
1553	38	"		埋	土	覆	○	(12.8)										
1554	39	"		埋	土	覆	○	(22.0)										
1555	40	"		埋	土	覆	○	(9.8)										
1556	41	"		埋	土	覆	○	(19.4)										
1557	42	"		埋	土	覆	○											
1558	43	"		埋	土	覆	○	(18.8)										
1559	44	"		埋	土	覆	○				(7.6)							
1560	45	"		床底	土	覆	○				(3.5)							
1561	46	"		埋	土	覆	○				(12.6)							
1562	47	"		床底	埋	覆	○										180	
1563	48	"		埋	埋	覆	○											
1564	49	"		埋	埋	覆	○											
1565	50	"		埋	埋	覆	○											
1566	51	"		埋	埋	覆	○											
1567	52	"		床1	埋	覆					11.1							
1568	53	"		埋	埋	覆												
1569	54	"		埋	埋	覆												
1570	55	"		埋	埋	覆	○											
1571	56	"		埋	埋	覆	○											

1572	57	DIVk 4住	埋	須	壘	○									ケズリ	ナデ				180	413	
1573	58	"	埋	須	大壘	○?									並行タナキ	放射状ナデ				181	"	
1574	59	"	埋	須	大壘	○?									並行タナキ	同心円文?				"	"	
1575	1	DIVk 4住	キマフ	土	坏	○	12.0	6.8	4.0	ロクロナデ	キマホ・黒色地層	ロクロナデ	キマホ・黒色地層	回糸籠	キマホ・黒色地層	回糸籠	キマホ・黒色地層			182	414	一断面地層が剥離
1576	2	"	埋	土	坏	○		5.4				ロクロナデ	キマホ・黒色地層	回糸籠	キマホ・黒色地層				"	"		
1577	3	"	キマフ	土	坏	○	(14.0)			ロクロナデ	キマホ・黒色地層	ロクロナデ	キマホ・黒色地層						"	"		
1578	4	"	庄直	土	坏	○		(6.0)				ロクロナデ	キマホ・黒色地層	不明・ケズリ	キマホ・黒色地層				"	"		
1579	5	"	キマフ	土	坏	○		(5.0)				ケズリ	キマホ・黒色地層	不明・ナデ	キマホ・黒色地層				"	"		
1580	6	"	床直	土	坏	○		(6.0)				ケズリ	キマホ・黒色地層	不明・ケズリ	キマホ・黒色地層				"	"		
1581	7	"	キマフ	土	坏	○		(7.2)				ロクロナデ	キマホ・黒色地層	回糸籠	キマホ・黒色地層				"	"		
1582	8	"	埋	須	坏	○	(14.2)	(5.8)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ		"	"		
1583	9	"	埋	須	坏	○	(12.2)	(4.6)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠・ヘラギコシ	ロクロナデ				"	"		
1584	10	"	埋	須	坏	○	(14.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ						"	"		
1585	11	"	キマフ	須	坏	○	(13.7)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ						"	"		
1586	12	"	埋	須	坏	○	(14.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ						"	"		
1587	13	"	埋	須	坏	○	(13.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ						"	"		
1588	14	"	埋	須	坏	○		(7.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ				"	"		
1589	15	"	掘出し	土	壘	○	(23.6)			ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ						"	"		
1590	16	"	キマフ	土	壘	○	(34.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ						"	"		
1591	17	"	キマフ	土	壘	○	(11.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ						"	"		
1592	18	"	埋	土	壘	○		(9.6)					ハケメ	ハケメ	不明・ナデ				"	"		
1593	19	"	キマフ	土	壘	○?		(9.2)					ケズリ	ナデ	不明・ナデ				"	"		
1594	20	"	キマフ	土	坏	○	(23.0)	(22.2)	(11.4)	18.5	ロクロナデ	キマホ・黒色地層	ナデ・ケズリ	キマホ・黒色地層	不明・ナデ				183			
1595	21	"	キマフ	土	坏	○	(22.6)			ロクロナデ	キマホ・黒色地層	ケズリ	キマホ・黒色地層						"	"		
1596	22	"	埋	須	壘	○		(13.6)				ナゲリナゲ	並行ナゲ	不明・ナデ					"	"		
1597	23	"	埋	須	壘	○						カキメ	カキメ						"	"		
1598	24	"	埋	須	壘	○						ケズリ	ナデ						"	"		
1599	25	"	埋	須	壘	?							並行タナキ	ケズリ					"	"		
1600	26	"	埋	須	壘	?							並行タナキ	同心円・並行					"	"		
1601	1	DIVr 4住	床2	土	坏	○	(15.1)	5.7	5.8	ロクロナデ	キマホ・黒色地層	ロクロナデ	キマホ・黒色地層	回糸籠	キマホ・黒色地層				184	415	内外面に並行溝あり!	
1602	2	"	P3	土	坏	○		(5.6)				ナデ・ケズリ	キマホ・黒色地層	不明・ナデ	キマホ・黒色地層				"	"		
1603	3	"	P3	土	坏	○		(8.0)				ヨコナデ	キマホ・黒色地層	丸底ナデ	キマホ・黒色地層				"	"		
1604	4	"	キマフ	土	坏	○		(6.8)				ロクロナデ	キマホ・黒色地層	不明・ナデ	キマホ・黒色地層				"	"		
1605	5	"	床3	土	坏	○	(15.2)	(5.8)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ				"	"		裏面図の層元不足?
1606	6	"	キマフ	土	坏	○		(6.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ				"	"		

No.	EDNo.	遺 跡 名	階 位	種類	部 類	成 形		法 量				測 量 法				図 版	写 真	備 考		
						口 径	溝 径	口 径	溝 径	底 径	底 径	L1 測 部		測 部					底 部	
												外 面	内 面	外 面	内 面				切 り 離 し	内 面
1607	7	DIV4住	カマド	土	環 (溝)	○		(11.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		184	415	
1608	8	"	埋	須	環	○		14.1		5.3	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図糸盤	ロクロナデ	"	"	
1609	9	"	埋	須	環	○		(13.7)		(6.9)	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図糸盤	ロクロナデ	"	"	
1610	10	"	埋	須	環	○		(14.8)		(5.4)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図糸盤	ロクロナデ	"	"	
1611	11	"	埋	須	環	○		(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1612	12	"	埋	須	環	○		(11.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1613	13	"	埋	土	環	○		(13.2)	(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1614	14	"	埋	土	環	○		(17.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1615	15	"	埋	土	環	○		(11.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1616	16	"	P3	土	環	○				(5.6)						図糸盤?	ロクロナデ	"	"	
1617	17	"	床4	須	蓋	○		5.1	11.0	6.4	12.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図糸盤	ロクロナデ	"	"	
1618	18	"	P3	須	蓋	○		(9.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1619	19	"	埋	須	蓋	○								ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1620	20	"	埋	須	蓋										銀格子状文	銀文凸文			"	"
1621	21	"	埋	須	蓋										流行タタキ	青森紋文			"	"
1622	22	"	埋	須	蓋										流行タタキ	ナデ?			185	"
1623	1	DIV15住	埋土	土	環	○		(14.0)				ロクロナデ	1ガキ・内蓋	ロクロナデ	1ガキ・内蓋			186	"	
1624	2	"	埋土	土	環	○		(15.0)				ロクロナデ	1ガキ・内蓋	ロクロナデ	1ガキ・内蓋			"	"	
1625	3	"	埋土	土	環	○				(6.6)				ロクロナデ	1ガキ・内蓋	図糸盤	1ガキ・内蓋	"	"	
1626	4	"	カマド	土	環	○				5.4				ロクロナデ	1ガキ・内蓋	図糸盤	1ガキ・内蓋	"	416	
1627	5	"	埋土	土	環	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1628	6	"	カマド	須	環	○		14.3		6.0	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	図糸盤	ロクロナデ	"	"	
1629	7	"	埋土	須	環	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1630	8	"	埋土	須	環	○		(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1631	9	"	埋土	須	環	○		(14.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
1632	10	"	埋土	須	環	○				6.8				ロクロナデ	ロクロナデ	図糸盤	ロクロナデ	"	"	
1633	11	"	埋土	須	環	○				7.0				ロクロナデ	ロクロナデ	図糸盤	ロクロナデ	"	"	
1634	12	"	埋土	須	環	○				(7.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	図糸盤	ロクロナデ	"	"	
1635	13	"	カマド	土	環	○		(22.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ			"	"	
1636	14	"	埋土	土	環	○		(28.0)				1ガキ	1ガキ					"	"	
1637	15	"	埋土	土	環	○				(5.0)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1638	16	"	埋土	須	蓋	○						ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	

1630	17	DW5 住	壁土	環	○											ロクロナデ	ロクロナデ			186	416	
1640	1	DW5 住	壁土	環	○					4.7						ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋	187		
1641	2	"	床12	土	環	○				5.2						ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋			
1642	3	"	壁土	環	○					(5.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋			
1643	4	"	壁土	環	○					(6.4)						ロクロナデ	ヘラナデ	国承継	1/2本・黒色地埋			
1644	5	"	床2	土	環	○		14.8		8.2	7.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継高台	1/2本・黒色地埋			
1645	6	"	床8	土	環	○		13.4		5.0	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋		黒書あり	
1646	7	"	カマド	土	環	○		13.6		5.4	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋		黒書あり	
1647	8	"	壁土	環	○					6.0						ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋		417	
1648	9	"	カマド	環	○			13.8		6.0	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋			
1649	10	"	壁	環	○			(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋			
1650	11	"	壁	環	○					(5.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋			
1651	12	"	床10	土	環	○		22.8	23.2	8.4	37.0	ロクロナデ	ロクロナデ	カマド	ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナデ	ナデ				
1652	13	"	床1	土	環	○	(24.5)	21.0	8.8	32.7	ロクロナデ	ロクロナデ	カマド	カマド	カマド	カマド	不明・ナデ	ナデ				
1653	14	"	床5	土	環	○		22.1	21.0	6.8	35.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ			188		
1654	15	"	袖上	土	環	○	(25.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナデ	ナデ			
1655	16	"	袖土	環	○					7.6						ヘラナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ			
1656	17	"	壁土	環	○					(7.2)						ロクロナデ	ヘラナデ	国承継	ナデ			
1657	18	"	壁土	環	○					(5.4)						ヘラナデ	カマド	不明・ナデ	ナデ			
1658	19	"	壁土	環	○					(8.0)						ヘラナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ			
1659	20	"	袖上	土	環	○	26.0	24.6	10.4	18.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	カマド	木置	不明・ナデ	ナデ					
1660	21	"	壁	環	○	(21.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	カマド	ナデ					189	418	
1661	22	"	壁	環	○											ロクロナデ	ナデ				417	
1662	23	"	壁	環	○											カマド	カマド	カマド	カマド		418	
1663	1	DW7 住	カマド	土	環	○	(14.6)		5.2	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	1/2本・黒色地埋	190		
1664	2	"	カマド	土	環	○	(14.8)		(5.4)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	不明	不明	不明	不明		
1665	3	"	カマド	土	環	○	(15.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明			
1666	4	"	カマド	土	環	○	(15.0)					ロクロナデ	不明・黒色地埋	ロクロナデ	不明	不明	不明	不明	不明	不明		
1667	5	"	壁土	環	○	(15.0)						ロクロナデ	1/2本・黒色地埋	ロクロナデ	1/2本・黒色地埋	不明	不明	不明	不明			
1668	6	"	壁土	環	○	(14.6)						ロクロナデ	1/2本	ロクロナデ	1/2本	不明	不明	不明	不明		元は内面黒色地埋?	
1669	7	"	カマド	土	環	○	(15.2)		6.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	ロクロナデ			
1670	8	"	カマド	土	環	○	(14.0)		(5.4)	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	ロクロナデ			
1671	9	"	カマド	土	環	○			5.0			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	ロクロナデ			
1672	10	"	カマド	土	環	○	(14.7)		5.5	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	ロクロナデ			
1673	11	"	カマド	土	環	○	(14.5)		(7.0)	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	国承継	ロクロナデ			

No	ENo	蓋 橋 名	階 位	種類	部 類	成 形		法 量				調 査 技 法						採取	写真	備 考		
						口	深	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	口 縁 部		別 部		底 部						
												外 面	内 面	外 面	内 面	切 り 廻 し	内 面					
1674	12	DIVd7住	カマド	土	環	○				(5.9)				ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	190	418			
1675	13	"	床1	土	鉢	○								ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"			
1676	14	"	カマド	土	環	○				(16.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	419		
1677	15	"	埋	須	環	○				(14.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1678	16	"	埋	須	環	○				(6.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"			
1679	17	"	カマド	須	合	○				(15.8)	(7.2)	5.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ロクロナデ	"	"		
1680	18	"	カマド	土	環	○					(10.4)				ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	191	"		
1681	19	"	カマド	土	環	○				(28.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ			"	"		
1682	20	"	カマド	土	環	○				(21.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1683	21	"	埋	土	環	○				(22.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1684	22	"	カマド	土	環	○					(7.3)				ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"		
1685	23	"	カマド	土	環	○?									ロクロナデ?	スビキヤエ			"	"		
1686	24	"	床6	土	環	○				(16.7)	7.6	13.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"		
1687	25	"	カマド	土	環	○				(16.7)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	192		
1688	26	"	床8	土	環	○				(36.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1689	27	"	埋土	須	環	○								ロクロナデ	内形観文凸座			"	"			
1690	28	"	埋土	須	環	○									椅子伏文	内形観文凸座			"	"		
1691	1	DIVg7住	埋土	土	環	○				(14.0)			1ガキ--埋蓋	1ガキ-内黒	1ガキ	1ガキ-内黒			"	193	420	
1692	2	"	床組	須	環	○				(13.4)	(6.6)	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"		
1693	3	"	埋土	須	環	○				(15.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1694	4	"	埋土	須	環	○				(14.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1695	5	"	埋土	須	環	○				(14.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1696	6	"	埋土	須	環	○					(5.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"		
1697	7	"	埋土	須	環	○					(7.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	固永無	ロクロナデ	"	"		
1698	8	"	カマド	須	合	○					6.4					糸切後高台	ロクロナデ	"	"			
1699	9	"	埋土	土	環	○				(18.7)			ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ・1ガキ	ナデ			"	"		
1700	10	"	カマド	土	環	○				(12.7)			ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"		
1701	11	"	カマド	土	環	○					(7.0)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"		
1702	12	"	埋山部	土	環	○					(9.4)				ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"		
1703	13	"	埋土	土	環	○					(9.4)				ケズリ	ハケメ	不明・ナデ	ハケメ	"	"		
1704	14	"	カマド	土	環	○									ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"		
1705	15	"	埋土	土	環	○					(7.6)				ハケメ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"		

1706	16	DWg 7住	煙出し	土	鉢	○	17.3		9.6	14.1	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	不明・ナデ	ナデ	193	420	底面に腐蝕あり
1707	17	"	埋土	土	鉢	○	(12.3)				ロクロナデ	1ガ4・内風	ケズリ	1ガ4・内風			"	"	
1708	18	"	カマド	土	鉢?	○		(5.0)					ケズリ	ナデ	不明・ケズリ	ナデ	"	"	
1709	19	"	カマド	土	鉢	○							ケズリ	1ガ4			"	"	
1710	20	"	埋土	須	壺	○							ナデ・ナデ	カキメ			"	194	"
1711	21	"	埋土	須	壺	○							ケズリ	カキメ			"	"	
1712	1	DWm 7住	埋土	土	環	○	(14.7)				ロクロナデ	1ガ4・ 黒色地層	ロクロナデ	1ガ4・ 黒色地層			"	"	
1713	2	"	埋土	土	環	○	(12.4)				ロクロナデ	1ガ4・ 黒色地層	ロクロナデ	1ガ4・ 黒色地層			"	"	
1714	3	"	床1	須	環	○		(4.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"	
1715	4	"	床2	土	壺	○	(22.0)				ハケメ・ ロクロナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ			"	"	
1716	5	"	埋土	壺	○		(20.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	421	
1717	6	"	埋土	壺	○		(23.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1718	7	"	支脚	土	壺	○			6.0				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"	
1719	8	"	埋土	壺	○				(6.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"	
1720	9	"	埋土	壺	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1721	10	"	埋須	壺	○		(26.0)						ロクロナデ ナデ	ロクロナデ ナデ			"	"	
1722	11	"	埋須	壺	○								ナデ ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1723	12	"	埋須	壺	○								ケズリ	ケズリ			"	"	
1724	13	"	埋須	壺	○								ケズリ	ケズリ			"	"	
1725	14	"	埋須	壺	○								逆行ナデ	青海波文			"	"	
1726	1	DWd 8住	床面	土	環	○	(13.9)				ロクロナデ	1ガ4・内風	ロクロナデ	1ガ4・内風			"	195	
1727	2	"	カマド 付座	土	環	○	(16.0)				ロクロナデ	1ガ4・内風	ロクロナデ	1ガ4・内風			"	"	
1728	3	"	埋土	土	○		(11.5)	(5.5)	3.9		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"	
1729	4	"	カマド 付座	土	環 (赤)	○	(14.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1730	5	"	カマド 付座	須	環	○	(12.6)	5.6	4.0		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"	
1731	6	"	カマド 付座	須	環	○	(12.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1732	7	"	埋土	須	環	○	(14.7)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1733	8	"	埋土	須	環	○	(12.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1734	9	"	カマド 天井	須	環	○	(13.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1735	10	"	カマド 座	須	環	○	(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1736	11	"	埋土	須	環	○	(12.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1737	12	"	埋土	須	環	○	(15.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1738	13	"	カマド 座	須	壺	○		(11.5)					ロクロナデ	ロクロナデ	不明・数高合	ロクロナデ	"	"	
1739	14	"	埋土	須	環	○		(5.9)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"	
1740	15	"	籠り方	須	環	○		(5.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"	

No.	EIR	道 橋 名	階 位	期 種	形 式	法 規 格				調 査 技 法						30版	写 真	備 考		
						成 形		LJ 径 (m)	鋼 径 (m)	底 径 (m)	高 (m)	LJ 設 部		調 査 部					証 部	
						口ナロ	基口ナ					外 面	内 面	外 面	内 面				切り懸し	内 面
1741	16	Div4 8住	カマド内	土 壘	○	15.9		8.5	26.0	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ・ミダキ	不明・覆底?	ナデ	195	421			
1742	17	"	堰土	土 壘	○	(16.9)				ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ			"	422			
1743	18	"	堰道内	土 壘	○					ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ			"	"			
1744	19	"	塚No3	土 壘	○	(22.0)				ヨコナデ	ナデ	ナデ	ナデ			196	"			
1745	20	"	墓前部	土 壘	○	(22)				ヨコナデ	ヨコナデ					"	"			
1746	21	"	塚道部	土 壘	○	(22.8)				カキメ	カキメ					"	"			
1747	22	"	カマド	土 壘	○	(21.4)				ヨコナデ	ヨコナデ					"	"			
1748	23	"	土塚	土 壘	○	(15.0)				ナデ	ナデ					"	"			
1749	24	"	堰土	土 壘	○	(22)				ヨコナデ	ヨコナデ					"	"			
1750	25	"	墓前部	土 壘	○			(10)				ハケメ	ハケメ	不明・ナデ	ナデ	"	"			
1751	26	"	カマド	土 壘	○			(8.0)				ハケメ・ ナデツケ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"			
1752	27	"	塚面	土 壘	○			(9.5)				ナデ	ナデ	不明・砂埋	ナデ	"	"			
1753	28	"	カマド	土 壘	○			(9.0)				ハケメ・ ナデツケ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"			
1754	29	"	廻り方	土 壘	○			(8.2)				ケズリ	ナデ	木置板	ナデ	"	"			
1755	30	"	堰土	土 壘	○			(9.4)				ナデ	ナデ	固承盤	ナデ	"	"			
1756	31	"	堰土	土 壘	○?							ナデ・ナデツケ	ナデ			"	"			
1757	32	"	カマド	土 壘	○	17.2		7.0	27.0	ヨコナデ・影	ヨコナデ	ケズリ・影	ナデ	不明・ナデ	ナデ	197	"	露表全面が赤影		
1758	33	"	廻り方	土 壘	○			(8.6)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	196	"			
1759	34	Div4 8住	堰土	土 壘	○	(18.4)				ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ハケ			197	"			
1760	35	"	堰土	土 壘	○	(16.1)				ヨコナデ	ナデ?	ハケメ・ ミダキ	ハケメ・ナデ			"	"	赤影		
1761	36	"	堰土	土 壘	○	(17.0)				ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ・ナデ	ヘラナデ			"	"			
1762	37	"	カマド	須 壘	○							カキメ・ナデ	カキメ			"	"			
1763	38	"	カマド	須 壘	○							並行タナキ	青海鏡アテ			"	423			
1764	39	"	堰土	須 壘	○							並行タナキ	カキメ			"	"			
1765	40	"	堰土	須 壘	○?							並行タナキ	ナデ・月形板			"	"			
1766	41	"	堰土	須 壘	○?							並行タナキ	ナデ・月形板			"	"			
1767	42	"	堰土	須 壘	○?							並行タナキ	並行アケ具			"	"			
1768	1	Div4 8住	畑出し	土 塚	○	(15.8)		(7.0)	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	固承盤	ヨコナデ	199	"			
1769	2	"	P2	土 塚	○	(12.8)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			"	"			
1770	3	"	P1	土 塚	○	(14.8)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			"	"			
1771	4	"	畑出し	土 塚	○	(16.0)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			"	"			
1772	5	"	P1	土 塚	○	(12.4)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			"	"	露表あり		

1773	6	DIVo 8 住	P1	土	環	○													ロクロナデ	イガキ・ 黒色地層				199	433	遺骨あり				
1774	7	"	埋	土	環	○													ロクロナデ	イガキ・ 黒色地層	同赤鉄	イガキ・ 黒色地層	"	"						
1775	8	"	埋	土	環	○													ロクロナデ	イガキ・ 黒色地層	同赤鉄	イガキ・ 黒色地層	"	"						
1776	9	"	右袖	土	環	○													ロクロナデ	イガキ・ 黒色地層	同赤鉄	イガキ・ 黒色地層	"	"						
1777	10	"	P13	土	環	○	(12.8)												ロクロナデ	イガキ	ロクロナデ	イガキ	"	"			もとは内風?			
1778	11	"	P15	土	環	○	(14.6)												ロクロナデ	イガキ	ロクロナデ	イガキ	"	"			もとは内風?			
1779	12	"	埋	土	環	○	(15.2)		(7.4)	4.0									ロクロナデ	イガキ	ロクロナデ	イガキ	同赤鉄	イガキ	"	"		もとは内風?		
1780	13	"	支脚	土	環	○	(14.2)												ロクロナデ	イガキ	ロクロナデ	イガキ	"	"			もとは内風?			
1781	14	"	P1	土	環	○	13.6		6.4	5.5									ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同赤鉄	ロクロナデ	"	"				
1782	15	"	P2	土	環	○	(15.0)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"						
1783	16	"	P2	土	環	○	(15.0)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"						
1784	17	"	庫4	土	環	○				6.0													同赤鉄	ロクロナデ	"	"				
1785	18	"	埋	須	環	○	(14.0)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"						
1786	19	"	埋	須	環	○	(14.8)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"						
1787	20	"	床	須	環	○				(7.8)									ロクロナデ	ロクロナデ	同赤鉄	同赤鉄	ロクロナデ	"	"					
1788	21	"	笑口	須	環	○				5.7									ロクロナデ	ロクロナデ	同赤鉄	同赤鉄	ロクロナデ	"	"					
1789	22	"	埋	須	環	○				6.0									ロクロナデ	ロクロナデ	同赤鉄	同赤鉄	ロクロナデ	"	"					
1790	23	"	P1	須	環	○				(6.0)									ロクロナデ	ロクロナデ	同赤鉄	同赤鉄	ロクロナデ	"	"					
1791	24	"	埋	須	環	○				(6.0)									ロクロナデ	ロクロナデ	同赤鉄	同赤鉄	ロクロナデ	"	"					
1792	25	"	P1	須	環	○				(6.0)									ロクロナデ	ロクロナデ	同赤鉄	同赤鉄	ロクロナデ	"	"				424	
1793	26	"	埋	須	環	○				(5.4)									ロクロナデ	ロクロナデ	同赤鉄	同赤鉄	ロクロナデ	"	"					
1794	27	"	埋	土	環	○													ロクロナデ	イガキ・ 黒色地層	同赤鉄高台	イガキ・ 黒色地層	"	"						
1795	28	"	笑口	土	環	○													ロクロナデ	イガキ	同赤鉄高台	イガキ	"	"					もとは内風?	
1796	29	"	庫1	土	環	○?	22.8	21.5											ロクロナデ	ロクロナデ	ナズリ・ナデ	ナデ・ハナリ	"	"	200					
1797	30	"	ホマド	土	環	○	(26.0)	(27.8)											ロクロナデ	ロクロナデ	ナズリ・ナデ	ナデ	"	"						
1798	31	"	笑口	土	環	○	(22.5)	(21.6)											ロクロナデ	ロクロナデ	ナズリ・ナズリ	ロクロナデ	"	"						
1799	32	"	右袖	土	環	○	(24.4)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"						
1800	33	"	ホマド	土	環	○				(27.0)									ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"						
1801	34	"	埋	土	環	○	(22.4)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"						
1802	35	"	庫1	土	環	○				10.7													不明・割落	ロクロナデ	"	"				
1803	36	"	支脚	土	環	○				(11.2)													不明・ナデ	ロクロナデ	"	"				
1804	37	"	庫1	土	環	○	(15.4)	(14.4)											ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"						
1805	38	"	P6	土	環	○	(14.4)	(14.1)											ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"						
1805	39	"	埋	土	環	○				(8.0)										ロクロナデ	ロクロナデ	同赤鉄	同赤鉄	ロクロナデ	201					底面にx印あり
1807	40	"	支脚	土	環	○				(7.2)													木炭	ナデ	"	"				

No	E3No	造 柄 名	種 位	種 類	部 種	成 形		法				異 常 検 査								写真	備 考				
						口	深	口	深	口	深	口	深	口 録 部		底 部		底 部							
														外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面			切 削 し	内 面		
1808	41	DIVo8住	左袖	土	異	○					(7.4)						ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ナデ	201	424			
1809	42	"	P2	土	跡?	○					(13.2)	(11.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1810	43	"	右袖	土	跡?	○					(11.4)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1811	44	"	右袖	土	跡?	○					(11.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1812	45	"	支脚	土	跡	○					14.6	13.6	7.0	13.0			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ナデ	"	"	
1813	46	"	煙出し	土	跡	○					(23.2)	(21.5)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1814	47	"	埋	須	風	○						18.0	9.2				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	胴盤上に×印あり
1815	48	"	床面	須	大盤	○					36.6	61.0	丸底	62.2			ロクロナデ	ロクロナデ	並行タタキ	横伏アテ	並行タタキ	並行アテ	202	425	
1816	49	"	埋土	須	大盤	○												並行タタキ	円形横文凸面			201			
1817	50	"	埋土	須	大盤	○												並行タタキ	並行アテ			"	"		
1818	51	"	埋土	須	大盤	○												並行タタキ	ナデ			"	"		
1819	52	"	埋土	須	大盤	○												並行タタキ	円形横文凸面			"	"		
1820	53	"	埋土	須	大盤	○												並行タタキ	円形横文凸面			"	"		
1821	54	"	埋土	須	風	○												ロクロナデ	横伏アテ			"	"		
1822	55	"	埋土	須	風	○												ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
1823	1	CVV9住	カマド	土	環	○					(15.6)						ロクロナデ	いガキ?	ロクロナデ	いガキ?			203		
1824	2	"	床底	土	環	○							5.4					ロクロナデ	いガキ?	いガキ?	回承盤	いガキ	"	"	
1825	3	"	埋	土	環	○					(16.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ロクロナデ	"	"	
1826	4	"	埋	土	環	○							(7.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1827	5	"	袖	須	環	○					(14.6)			(4.3)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1828	6	"	埋	須	環	○					(12.0)			(3.6)	3.7		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ロクロナデ	"	"	
1829	7	"	カマド	須	環	○					(14.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1830	8	"	埋	須	環	○					(14.4)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1831	9	"	埋	須	環	○					(16.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1832	10	"	埋	須	環	○					(12.9)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1833	11	"	埋	須	環	○					(15.9)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1834	12	"	埋	須	環	○							(5.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1835	13	"	埋	須	環	○							(7.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1836	14	"	埋	土	環	○					(20.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	426
1837	15	"	床底	土	環	○					(26.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1838	16	"	床底	土	環	○					(24.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1839	17	"	埋	土	環	○					(18.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	

1840	18	CVc 9住	埋土	環	○	(16.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			209	426
1841	19	"	埋土	環	○		(7.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ロクロナデ?	"	"
1842	20	"	埋土	環	○		不明				ケズリ	カキメ	不明		"	"
1843	21	"	埋土	環	○		(5.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	204	"
1844	22	"	埋土	環	○	(17.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ			"	"
1845	23	"	埋土	環	○	(14.8)			ロクロナデ	ヘラナデ	ロクロナデ	ヘラナデ			"	"
1846	24	"	埋土	環	○	(23.0)			ロクロナデ	黒色処理	ロクロナデ	黒色処理			"	"
1847	25	"	埋土	環	○						ケズリ	ナデ			"	"
1848	26	"	埋土	環	?						並行タタキ	ナデ			"	"
1849	27	"	埋土	環	○?				ロクロナデ?	ロクロナデ?					"	"
1850	1	CVc 9住	埋土	環	○	(14.0)			ロクロナデ	いぼ・内黒	ロクロナデ	いぼ・内黒			205	"
1851	2	"	埋土	環	○	(15.6)			ロクロナデ	いぼ・内黒	ロクロナデ	いぼ・内黒			"	"
1852	3	"	埋土	環	○		(6.0)				ロクロナデ	いぼ・内黒	回糸籠	いぼ・内黒	"	"
1853	4	"	埋土	環	○		(6.0)				ロクロナデ	いぼ・内黒	回糸籠	いぼ・内黒	"	"
1854	5	"	埋土	環	○		(6.0)								"	"
1855	6	"	埋土	環	○	(15.0)	(7.0)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"
1856	7	"	埋土	環	○	(14.2)		5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"
1857	8	"	埋土	環	○	(13.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1858	9	"	埋土	環	○	(17.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1859	10	"	埋土	環	○	(14.7)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1860	11	"	埋土	環	○	(14.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1861	12	"	埋土	環	○		(6.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	427
1862	13	"	埋土	環	○		(5.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"
1863	14	"	埋土	環	○		(6.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"
1864	15	"	埋土	環	○		(5.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"
1865	16	"	埋土	環	○	23.0			ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ			"	"
1866	17	"	埋土	環	○	(16.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1867	18	"	埋土	環	○	(21.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1868	19	"	埋土	環	○	(18.6)			ロクロナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ			"	"
1869	20	"	埋土	環	○	(16.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1870	21	"	埋土	環	○	(18.9)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1871	22	"	埋土	環	○	(24.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1872	23	"	埋土	環	○	(20.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
1873	24	"	埋土	環	○		(9.8)				ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
1874	25	"	埋土	環	○						ロクロナデ	ナデ			206	"

No	IDNo	遺構名	階位	種類	器種	成形	寸法				調査技法						写真	備考				
							口徑		高さ		口縁部		胴部		蓋部				断面			
							口徑	口径	口径	口径	外 面	内 面	外 面	内 面	切り離し	内 面						
1875	26	CIv9住	埋土	土	壺	○	(12.8)					ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	ナデ			206	427			
1876	27	"	埋土	須	壺	○						カキメ	カキメ	カキメ・ケズリ	ナデ			"	"	DIVも這出出土の破片を調査		
1877	28	"	埋土	須	壺	○?				(11.0)				ケズリ	カキメ	不明・ナデ	ナデ			"	"	
1878	29	"	埋土	須	壺									ケズリ	カキメ					"	"	
1879	30	"	埋土	須	壺									進行タナキ	馬足状文					"	"	
1880	31	"	埋土	須	壺									ケズリ	カキメ					"	"	
1881	1	DIV9住	床2	土	環	○	14.8		6.4	4.5	ロクロナデ	イガキ・黒色施地	ロクロナデ	イガキ・黒色施地	同赤銅	イガキ・黒色施地			207	"		
1882	2	"	床1	土	環	○	14.4		5.6	4.8	ロクロナデ	イガキ・黒色施地	ロクロナデ	イガキ・黒色施地	同赤銅	イガキ・黒色施地			"	"		
1883	3	"	埋土	土	環	○	(13.0)				ロクロナデ	イガキ・黒色施地	ロクロナデ	イガキ・黒色施地					428	"		
1884	4	"	埋土	土	環	○	(13.7)				ロクロナデ	イガキ・黒色施地	ロクロナデ	イガキ・黒色施地					"	"	床外周に墨書あり	
1885	5	"	カマド	土	環	○	(14.8)				ロクロナデ	イガキ・黒色施地	ロクロナデ	イガキ・黒色施地					"	"		
1886	6	"	床2	土	環	○	(15.0)				ロクロナデ	イガキ	ロクロナデ	イガキ					"	"	もとは内面黒色施地	
1887	7	"	床6	土	環	○			6.4				ロクロナデ	イガキ・黒色施地	同赤銅	イガキ・黒色施地			"	"		
1888	8	"	土坑	土	環	○			5.4				ロクロナデ	イガキ・黒色施地	同赤銅	イガキ・黒色施地			"	"		
1889	9	"	埋土	土	環	○			6.6				ロクロナデ	イガキ・黒色施地	同赤銅	イガキ・黒色施地			"	"		
1890	10	"	土坑	土	環	○			(5.0)				ロクロナデ	イガキ・黒色施地	同赤銅	イガキ・黒色施地			"	"		
1891	11	"	床底	土	環	○			(7.0)				ロクロナデ	イガキ・黒色施地	同赤銅	イガキ・黒色施地			"	"		
1892	12	"	床8	土	環	○	(15.8)		5.7	8.4	ロクロナデ	イガキ・黒色施地	ロクロナデ	イガキ・黒色施地	同赤銅に高台付	イガキ・黒色施地			"	"		
1893	13	"	埋土	土	環	○	(16.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"		
1894	14	"	土坑	土	環	○			(6.0)				ケズリ	ロクロナデ	同赤銅	ロクロナデ			"	"		
1895	15	"	埋土	須	環	○			(6.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	同赤銅	ロクロナデ			"	"	
1896	16	"	埋土	須	環	○			(6.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	同赤銅	ロクロナデ			"	"	
1897	17	"	床5	土	壺	○	(22.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"		
1898	18	"	床7	土	壺	○			(10.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	同赤銅	ロクロナデ			"	"	
1899	19	"	埋土	須	壺	○								ナデ	ナデ					"	"	
1900	20	"	埋土	須	壺	○								進行タナキ	ナデ					"	"	
1901	1	DIV9住	埋土	土	環	○			5.0					ロクロナデ	イガキ	同赤銅	イガキ		208	"		もとは黒色施地か
1902	2	"	埋土	土	環	○			(7.0)						同赤銅	ロクロナデ			"	"		
1903	3	"	床5	須	環	○	(13.3)		(7.5)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同赤銅	ロクロナデ			"	"		
1904	4	"	埋土	須	環	○	(13.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"		
1905	5	"	床1	土	壺	○	(16.8)				ロクロナデ	ヘラナデ							"	"		
1906	6	"	床1	土	壺	○			7.6					ヘラケズリ	ヘラナデ	不明	ナデ			"	"	

1907	7	DIVv9住	住1	土	壘		○		(8.0)					ヘラナデ	ヘラナデ	木炭底	ナデ	206	428
1908	8	"		壘	土	壘	○		(7.8)					ナデ	ヘラナデ	木炭底		"	"
1909	9	"		壘	土	壘		○	16.3			ヨコナデ	ヨコナデ	割落不明				"	"
1910	10	"	床1	土	鉢		○	○	22.5			ヨコナデ	ヨコナデ	ハナ・ナズリ	ヘラナデ			"	"
1911	11	"		壘	土	壘	○					ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			"	"
1912	12	"		壘	須	壘	○?		(13.4)					ケズリ	カキメ	不明・ナデ	ナデ	"	429
1913	13	"	床4	須	壘		○		(16.4)					ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
1914	14	"	床3	須	壘		○		(9.5)					ヨコナデ	ヨコナデ	不明・高台	ナデ	"	"
1915	15	"		壘	須	壘	○							ヨコナデ	ヨコナデ			"	"
1916	16	"		壘	須	壘	○							ヨコナデ	ナデ			"	"
1917	17	"		壘	須	壘?	○							カキメ	カキメ			"	"
1918	18	"		壘	須	壘	○							ケズリ	カキメ			"	"
1919	19	"		壘	須	壘	○							ケズリ	カキメ			"	209
1920	20	"		壘	須	壘	○							ヨコナデ	ヨコナデ			"	"
1921	21	"		壘	須	壘								通行ナデキ	放射状文			"	"
1922	22	"		壘	須	壘								通行ナデキ	青海波文			"	"
1923	23	"		壘	須	壘								通行ナデキ	海鏡文・ナデ			"	"
1924	1	DIVg10住		壘	土	壘	○	(14.6)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			"	210
1925	2	"		壘	土	壘	○	(15.7)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			"	"
1926	3	"	カマド付	須	壘	壘	○	13.5	6.6	4.1	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1927	4	"	床10	須	壘	壘	○	(12.0)	(5.9)	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1928	5	"		土	杭	壘	壘	○	(12.8)	(6.2)	4.3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1929	6	"	床3	須	壘	壘	○		(6.2)					ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1930	7	"		壘	須	壘	壘	○		(5.2)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1931	8	"	カマド付	須	壘	壘	壘	○	(13.2)			ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1932	9	"		土	杭	壘	壘	○	(12.5)	(7.4)	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1933	10	"		壘	須	壘	壘	○	(12.8)			ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1934	11	"	カマド	土	壘	壘	壘	○	(23.4)			ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1935	12	"	カマド付	土	壘	壘	壘	○	(23.3)			ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1936	13	"	カマド付	土	壘	壘	壘	○	(12.0)			ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	430
1937	14	"		埋	土	壘	壘	○	(17.6)			ヨコナデ	ヨコナデ					"	"
1938	15	"		埋	土	壘	壘	○	(17.6)			ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ			"	"
1939	16	"		埋	土	壘	壘	○		6.6							不明・ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
1940	17	"		壘	土	壘	壘	○	(8.5)					ヘラナデ	ハケメ	不明・ナデ	ナデ	"	"
1941	18	"		壘	土	壘	壘	○?	(7.8)					ケズリ	ヘラナデ	不明・ナズリ	ナデ	"	"

1974	28	DWJ 10 住	埋 土 壘 ○?						ヨコナデ	ヨコナデ	ナナキ・ナデ	ナデ			212	431	扉裏の一帯と体部表面
1975	29	"	埋 土 壘	○		(10.4)					内底のミダキ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
1976	30	"	埋 須 壘 ○		(29.6)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
1977	31	"	埋 須 壘 ○		(12.8)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
1978	32	"	埋 須 壘 ○								ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1979	33	"	埋 須 壘 ○								ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1980	34	"	埋 須 壘								並行タタキ	青梅線文			"	"	
1981	1	DWJ 10 住	埋 土 坪 ○			4.0					ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	回承盤	ミダキ・黒色地埋	213	"	
1982	2	"	埋 土 坪 ○			(7.0)					ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	回承盤	ミダキ・黒色地埋	"	"	
1983	3	"	埋 土 坪 ○			(7.0)					一部ナデ	ミダキ・黒色地埋	回承盤	ミダキ・黒色地埋	"	"	
1984	4	"	埋 土 坪 ○		(13.6)	(8.5)	5.1	ナデ・ミダキ	ミダキ・黒色地埋	ミダキが主	ミダキ・黒色地埋	不明・ナデ	ミダキ・黒色地埋	"	"		
1985	5	"	埋 土 坪 ○			(7.0)					ミダキ・ナデ	ミダキ・黒色地埋	不明・ナデ	ミダキ・黒色地埋	"	"	
1986	6	"	埋 土 坪 ○								ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	不明・ナデ	ミダキ・黒色地埋	"	"	
1987	7	"	埋 土 坪 (座) ○			(7.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1988	8	"	埋 須 坪 ○			(7.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1989	9	"	埋 須 坪 ○			(16.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1990	10	"	埋 須 坪 ○			(6.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1991	11	"	床 6 須 坪 ○			(6.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1992	12	"	埋 須 坪 ○			(6.3)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
1993	13	"	埋 土 壘 ○	○	(17.8)				ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	432	
1994	14	"	土 坑 1 土 壘 ○		(17.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
1995	15	"	埋 土 壘 ○		(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・ナズリ	ヘラナデ			"	"	
1996	16	"	支脚 土 坪 ○	○	16.8	13.5	7.6	15.3	ナデ・ミダキ	ナデ・ナデツケ	ケズリ	ナデツケ	不明・ナズリ		"	"	
1997	17	"	埋 土 壘 ○	○		(9.2)					ナデ	ナデ	木炭塗	ナデ	"	"	
1998	18	"	床 底 土 坪 ○		(23.6)	(22.0)	8.8	14.0	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	ナデ・ナズリ	ミダキ・黒色地埋	不明・ナデ	ミダキ・黒色地埋	"	"	
1999	19	"	床 5 須 壘 ○		(17.4)				ナズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			214	"	
2000	20	"	埋 須 壘 ○		(20.4)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
2001	21	"	埋 須 壘 ○								ナズリ・ナズリ	ナデ			"	"	構成不足
2002	22	"	埋 須 壘 ○								ナズリ・ナズリ	ナズリ			"	"	
2003	23	"	埋 須 壘									蘭格子状文	ナデ		"	"	
2004	1	DWm 10 住	袖右床 土 坪 ○		14.4	5.4	4.9	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	回承盤	ミダキ・黒色地埋	215	"		
2005	2	"	P 9 土 坪 ○		14.8	5.6	5.1	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	回承盤	ミダキ・黒色地埋	"	"	体部に墨書あり	
2006	3	"	P 12 土 坪 ○		(14.3)	5.4	4.9	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	回承盤	ミダキ・黒色地埋	"	"		
2007	4	"	埋 土 坪 ○		(14.0)	(6.0)	5.4	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	回承盤	ミダキ・黒色地埋	"	433	底面に*印あり	
2008	5	"	P 12 土 坪 ○		(14.4)			ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋	ロクロナデ	ミダキ・黒色地埋			"	"		

No.	HNo.	通称名	層位	種類	部種	成 形					測 量				調 査 技 法					写真	備 考			
						口径	鼻口径	口徑	側徑	底徑	器高	L1		調 査 技 法		部		部	部					
												外 面	内 面	外 面	内 面	切り出し	内 面							
2009	6	DWm 10 住	P12	土	環	○		(15.0)						ロクロナダ	ミガキ- 黒色処理	ロクロナダ	ミガキ- 黒色処理				215	433		
2010	7	"	床1	土	環	○		(18.4)						ロクロナダ	ミガキ- 黒色処理	ロクロナダ	ミガキ- 黒色処理				"	"		
2011	8	"	床1	土	環	○				(5.2)						ロクロナダ	ミガキ- 黒色処理	調査集	ミガキ- 黒色処理			"	"	
2012	9	"	P11	土	環	○				(6.8)						ロクロナダ	ミガキ- 黒色処理	調査集	ミガキ- 黒色処理			"	"	
2013	10	"	床4	土	環	○		(15.0)		(5.8)	4.2	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2014	11	"	支脚	土	環	○		(14.3)		(6.0)	5.0	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2015	12	"	煙道部	土	環	○		(12.6)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ			"	"	
2016	13	"	P11	土	環	○		(12.4)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ							"	"	
2017	14	"	壁	土	環	○		(14.6)				ロクロナダ	ミガキ	ロクロナダ	ミガキ							"	"	内裏の可能性あり
2018	15	"	キャブ	土	環	○		(16.0)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ							"	"	
2019	16	"	壁土	土	環	○		(14.8)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ							"	"	
2020	17	"	壁	土	環	○				(6.0)				ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2021	18	"	キャブ	土	環	○				(5.8)				ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2022	19	"	壁	土	環	○				(5.6)				ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2023	20	"	袖	土	環	○		(9.4)		(6.2)	1.8	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2024	21	"	P10	土	環	○				(9.0)				ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2025	22	"	P13	土	環	○		14.5		5.2	4.6	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	重ね構造あり
2026	23	"	壁	土	環	○				5.8				ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2027	24	"	壁	土	環	○				(6.6)				ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2028	25	"	壁	土	環	○				(5.4)				ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2029	26	"	床2	土	環	○		(17.6)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ							"	"	
2030	27	"	壁	土	環	○				(8.4)				ロクロナダ	ロクロナダ	不明						216	"	
2031	28	"	壁	土	環	○				(7.0)				ロクロナダ	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ	調査集	ロクロナダ			"	"	
2032	29	"	床板	土	環	○		(24.6)				ロクロナダ	ロクロナダ	フタ+ナシ	ヘラナダ							"	"	
2033	30	"	煙道	土	環	○		(34.0)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ							"	"	
2034	31	"	P9	土	環	○		(22.8)				ロクロナダ	ロクロナダ	ヘラナダ	ロクロナダ							"	"	
2035	32	"	P11	土	環	○		(17.8)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ							"	"	
2036	33	"										ロクロナダ	ロクロナダ	ケズリ	ロクロナダ							"	"	
2037	34	"	壁土	土	環	○		(22.2)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ							"	"	
2038	35	"	P9	土	環	○		(30.0)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ヘラナダ							"	"	434
2039	36	"	壁	土	環	○		(16.0)				ロクロナダ	ロクロナダ	ケズリ	ヘラナダ							"	"	
2040	37	"	壁	土	環	○				(9.7)				ケズリ	ヘラナダ	木炭底	ナダ					"	"	つくりが粗雑

2041	38	Divm 10 住	埋土	環	○				(9.8)			ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	216	434
2042	39	"	袖土	環	○		(14.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			217	"
2043	40	"	袖土	環	○		(15.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2044	41	"	カマド	土	環	○		(13.4)		ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			"	"
2045	42	"	カマド	土	環	○		(9.8)		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2046	43	"	支脚	土	環	○			(7.8)			ロクロナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
2047	44	"	埋土	環	○				(5.8)			ハケメ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
2048	45	"	床直	須	環	○			(8.4)			ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ユビナデ	"	"
2049	46	"	埋須	環	○							カキメ	カキメ			"	"
2050	47	"	埋須	環	○							ケズリ	ナデ			"	"
2051	48	"	埋須	環								襦格子伏文	額文			"	"
2052	49	"	埋須	環								並行タタキ	青海波文			"	"
2053	50	"	埋須	環								襦格子伏文	並行アナ			"	"
2054	51	"	埋須	環								襦格子伏文	青海波文			"	"
2055	52	"	埋須	環								並行タタキ	放射伏文			"	"
2056	1	Divm 11 住	土灰	土	環	○	(17.0)			ロクロナデ	イガネ・ 黒色処理	ロクロナデ	イガネ・ 黒色処理			218	435
2057	2	"	袖内	土	環	○	15.0	5.6	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	圓承盤	ロクロナデ	"	"
2058	3	"	袖内	土	環	○	(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2059	4	"	タリ ムシダ	土	環	○	(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2060	5	"	P 2	土	環	○	(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2061	6	"	埋土	環	○			(5.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	圓承盤	ロクロナデ	"	"
2062	7	"	カマド	土	環	○		(5.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	圓承盤	ロクロナデ	"	"
2063	8	"	P 1	土	環	○	(10.8)	(6.6)	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	圓承盤	ロクロナデ	"	"
2064	9	"	床直	須	環	○	(12.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2065	10	"	床直	須	環	○		(6.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	圓承盤	ロクロナデ	"	"
2066	11	"	埋須	環	○			(7.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	圓承盤	ロクロナデ	"	"
2067	12	"	埋須	環	○			(7.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	圓承盤	ロクロナデ	"	"
2068	13	"	P 1	土	環	○		(8.8)						不明・ナデ		"	"
2069	14	"	埋土	環	○		(23.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ			"	"
2070	15	"	埋土	環	○		(12.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2071	16	"	カマド	土	環	○	(15.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2072	17	"	床直	土	環	○	(23.2)			ナデ	ナデ	ナデ	ナデ			"	"
2073	18	"	支脚	土	環	○		7.6				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ユビナデ	"	"
2074	19	"	カマド	土	環	○		(7.7)				ロクロナデ	ロクロナデ	圓承盤	ロクロナデ	"	"
2075	20	"	カマド	土	環	○		(6.2)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ユビナデ	"	"

No	E3No	通称名	階位	種類	形状	法				調査				写真	備考			
						口径	口径	口径	口径	L1		調査				底		
										内面	外面	内面	外面			内面	外面	
2076	21	Divm 11 住	P2	埋	環	○?			(13.0)							218	435	
2077	22	"		埋	環	○						ロクロナデ	ロクロナデ				219	"
2078	23	"		埋	環	○						ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2079	24	"		埋	環	○						ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2080	25	"		埋	環	○						ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2081	26	"		埋	環	○								ロクロナデ	ナデ		"	"
2082	27	"		埋	環	○								通行タナキ	ナデ		"	436
2083	28	"		埋	環	○								通行タナキ	通行アテ		"	"
2084	1	Divb 12 住	埋	土	環	○	(13.6)		5.4	4.5	ロクロナデ	ミガキ・内装	ロクロナデ	ミガキ・内装	回承盤	ミガキ・内装	220	"
2085	2	"	土	環	○	(13.6)		5.4	5.1	ロクロナデ	ミガキ・内装	ロクロナデ	ミガキ・内装	回承盤	ミガキ・内装	"	"	
2086	3	"	土	環	○	(13.4)		5.6	5.2	ロクロナデ	ミガキ・内装	ロクロナデ	ミガキ・内装	回承盤	ミガキ・内装	"	"	
2087	4	"	土	環	○	(14.4)		5.7	4.8	ロクロナデ	ミガキ・内装	ロクロナデ	ミガキ・内装	回承盤	ミガキ・内装	"	"	
2088	5	"	土	環	○	(15.2)					ロクロナデ	ミガキ・内装	ロクロナデ	ミガキ・内装			"	"
2089	6	"	土	環	○	(14.6)					ロクロナデ	ミガキ・内装	ロクロナデ	ミガキ・内装			"	"
2090	7	"	土	環	○	(13.5)					ロクロナデ	ミガキ・内装	ロクロナデ	ミガキ・内装			"	"
2091	8	"	土	環	○			6.8					ロクロナデ	ミガキ・内装	不明・ナデ	ミガキ・内装	"	"
2092	9	"	土	環	○			(5.6)					ロクロナデ	ミガキ・内装	不明・ナデ	ミガキ・内装	"	"
2093	10	"	土	環	○			(4.7)					ロクロナデ	ミガキ・内装	不明・ナデ	ミガキ・内装	"	"
2094	11	"	土	環	○	(15.0)		6.4	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"
2095	12	"	土	環	○	(13.0)		(6.0)	(4.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"
2096	13	"	土	環	○	(14.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"
2097	14	"	土	環	○	15.3		6.0	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	異常あり
2098	15	"	土	環	○	(13.4)		5.4	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	437	異常あり
2099	16	"	土	環	○	(14.4)		6.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"
2100	17	"	土	環	○	(13.4)		(6.0)	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"
2101	18	"	土	環	○	(14.1)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2102	19	"	土	環	○	(16.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2103	20	"	土	環	○	(14.9)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2104	21	"	土	環	○	(14.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2105	22	"	土	環	○	(15.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			221	"
2106	23	"	土	環	○	(14.7)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2107	24	"	土	環	○	(14.3)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"

2108	25	DWb 12 住	埋土	須	坏	○		(15.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			221	437	
2109	26	"	土 掘	須	坏	○		(13.7)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2110	27	"	土 掘	須	坏	○			(5.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	
2111	28	"	埋土	須	坏	○			(5.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	
2112	29	"	土 掘	土	掘	○		(15.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2113	30	"	埋土	土	掘	○		(18.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2114	31	"	土 掘	土	掘		○	(22.7)				ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	ナデ			"	"	
2115	32	"	埋土	土	掘		○	(19.4)				ロクロナデ	ナデ	ナデ	ナデ			"	"	
2116	33	"	埋土	土	掘	○			8.5				ナズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ		"	"	
2117	34	"	埋土	土	掘	○			(8.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	"	
2118	35	"	土 掘	土	掘	○			(6.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	"	
2119	36	"	土 掘	土	掘		○						ナデ	ナデ			"	"	"	
2120	37	"	埋土	須	掘	○			(10.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	不明		"	"	
2121	38	"	埋土	須	掘	○		(13.0)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
2122	39	"	埋土5	須	掘	○							ナズリ・ナズリ	ナズリ			222	"	"	
2123	40	"	埋土3	須	掘	○							ナズリ・ナズリ	ナズリ			"	"	"	
2124	41	"	土 掘	須	掘	○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	
2125	42	"	埋土	須	掘	○							ナズリ・ ロクロナデ	ロクロナデ			"	438	"	
2126	43	"	埋土	須	掘	○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	
2127	44	"	埋土	須	掘	大掘								並行ナズリ	放射状ナズリ			"	"	
2128	1	DWc 12 住	埋土	須	掘	○		14.1	5.8	6.2		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	埋土掘	223	"	
2129	2	"	埋土	須	掘	○		(13.4)	(6.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2130	3	"	埋土	須	掘	○							ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	"	
2131	4	"	埋土	須	掘	○		(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2132	5	"	埋土	須	掘	○			(6.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	"	
2133	6	"	埋土	須	掘	○			(5.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	"	
2134	7	"	埋土	須	掘	○			(5.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	"	
2135	8	"	埋土	須	掘	○		(20.4)	(18.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ナズリ	ヘラナデ			"	"	
2136	9	"	埋土	須	掘		○		(9.2)								木炭掘	ナデ	"	"
2137	10	"	埋土	須	掘		○		(9.6)								不明・ナデ	ナデ	"	"
2138	11	"	埋土	須	掘		○		(6.6)					ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	"
2139	12	"	埋土	須	掘	○			(15.8)					ナズリ	ナズリ・ナデ	不明		"	"	"
2140	13	"	埋土	須	掘	○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	"
2141	14	"	埋土	須	掘	○							ナズリ・ ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	"	"
2142	15	"	埋土	須	掘	○							ナズリ	ナデ			"	"	"	"

No	IDNo	通稱名	階位	種類	部種	成 形				法 量				調 査 技 法				写真	備 考		
						口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径			口径	口径
2143	16	Div1 12 住	壁	横	環													223	438		
2144	1	Divn 13 住	床底	土	環	○		(15.4)					口径ナデ	ミガキ 黒色地埋	口径ナデ	ミガキ 黒色地埋			224	-	
2145	2	"	埋	土	環	○		(13.2)					口径ナデ	ミガキ 黒色地埋	口径ナデ	ミガキ 黒色地埋			"	"	
2146	3	"	カマド	土	環	○				(5.6)			口径ナデ	ミガキ 黒色地埋	口径ナデ	ミガキ 黒色地埋	調査無し	口径ナデ	"	"	
2147	4	"	埋	土	環	○		(15.6)		(6.8)	5.0		口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	
2148	5	"	埋	土	環	○		(15.6)					口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ			"	"	
2149	6	"	埋	土	環	○				(6.0)			口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	
2150	7	"	床2	須	環	○		15.8		(6.0)	3.8		口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	439	
2151	8	"	床2	須	環	○		13.8		5.2	4.3		口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	
2152	9	"	埋	須	環	○		(12.0)					口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ			"	"	
2153	10	"	埋	須	環	○				(13.8)			口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ			"	"	
2154	11	"	床2	須	環	○				5.9			口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	
2155	12	"	埋	須	環	○				6.0			口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	
2156	13	"	埋	須	環	○				(6.4)			口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	
2157	14	"	埋	土	環	○		(17.4)					口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ			"	"	
2158	15	"	埋	土	環	○		(18.6)					口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ			"	"	
2159	16	"	埋	須	環	○				(14.9)							不明ナデ、 高台付		"	"	
2160	17	"	埋	須	環	○							ナデ		ナデ			"	"		
2161	18	"	埋	須	環	○							並行ナデキ		ナデ			"	"		
2162	19	"	埋	須	環	○							並行ナデキ		ナデ			"	"		
2163	1	Divg 23 住	埋	土	環	○		(12.2)		6.8	4.0		ミガキ	ミガキ 黒色地埋	ミガキ 黒色地埋	ミガキ 黒色地埋	不明・ナデ	ミガキ 黒色地埋	225	-	体部外面有段
2164	2	"	埋	土	環	○?		(13.0)		(5.2)	4.5		口径ナデ	ミガキ 黒色地埋	口径ナデ ナデリ	ミガキ 黒色地埋	不明・ナデ	ミガキ 黒色地埋	"	"	
2165	3	"	埋	土	環	○				(6.4)			口径ナデ	ミガキ 黒色地埋	口径ナデ	ミガキ 黒色地埋	調査無し	ミガキ 黒色地埋	"	"	
2166	4	"	埋	土	環	○				(6.0)			口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	調査中の構成不良?
2167	5	"	カマド 左土坑	土	環	○		(12.6)		(6.2)	3.6		口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	調査中の構成不良?
2168	6	"	床底	須	環	○		14.2		5.5	4.7		口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	不明 ナデナデリ	口径ナデ	"	"	中々調査不足
2169	7	"	埋	須	環	○		13.2		5.7	4.2		口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	調査不足・ヒダキ
2170	8	"	埋	須	環	○		(15.0)					口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ			"	"	ヒダキあり
2171	9	"	カマド	埋	環	○		(13.0)		(6.2)	4.5		口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	調査無し	口径ナデ	"	"	
2172	10	"	埋	須	環	○		(14.6)					口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ			"	"	
2173	11	"	埋	須	環	○		(13.4)					口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ			"	"	440
2174	12	"	埋	須	環	○		(13.0)					口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ			"	"	

2175	13	DVE 23 住	床直	須	環	○				5.6				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	225	440	
2176	14	"	埋土	須	環	○				(7.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	
2177	15	"	床直	土	環	○	(19.6)		8.8	23.9	ヨコナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	木蓋底	ヘラナデ	"	"		
2178	16	"	柱7	土	環	○	(22.6)				ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	"	"	"	"		
2179	17	"	土坑	土	環	○			(7.6)				ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・ケズリ	ヘラナデ	"	"		
2180	18	"	床直	土	環	○	(16.2)				ヨコナデ	粗いミガキ	粗いミガキ	粗いミガキ	"	"	226	"		
2181	19	"	埋土	土	環	○	(22.1)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"		
2182	20	"	カマド 高土坑	土	環	○	(22.0)				ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	"	"	"	"		
2183	21	"	カマド1	土	環	○			7.0				ヘラナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ヘラナデ	"	"		
2184	22	"	カマド2	土	環	○			7.6				ナデ	ハケメ	不明・ナデ	ハケメ	"	"		
2185	23	"	埋土	土	環	○?			(8.6)				ナデ	ハケメ	不明・ケズリ	ハケメ	"	"		
2186	24	"	カマド3	土	環	○	(13.2)	(15.9)			ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	"	"	"	"		
2187	25	"	埋土	土	環	○	(16.7)				ヨコナデ	ヨコナデ	"	"	"	"	"	"		
2188	26	"	埋土	土	環	○	(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	"		
2189	27	"	埋	須	環	○		19.3	(11.4)				ロクロナデ ・ケズリ	カキメ	不明・高合	ナデ	"	"		
2190	28	"	埋	須	環	○		(6.6)	(4.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ナデ	"	"		
2191	29	"	埋	須	環	○							並行タタキ 四角物 窓で真鍮	"	"	"	"	441	拓本あり	
2192	30	"	埋	須	環	○							ケズリ	ナデ	"	"	"	"	440	
2193	31	"	埋	須	環	○							並行タタキ	放射状文	"	"	"	"	227	
2194	32	"	埋	須	環	○							並行タタキ	放射状文	"	"	"	"	441	
2195	33	"	埋	須	環	○							縦格子状文	背海紋文	"	"	"	"	"	
2196	34	"	埋	須	環	○							縦格子状文	細同心円文	"	"	"	"	"	
2197	35	"	埋	須	環	○							並行タタキ	放射状文	"	"	"	"	"	
2198	36	"	埋	須	環	○							並行タタキ	ナデ	"	"	"	"	"	
2199	1	CVc 21 住	カマド	土	環	○	11.7		5.5	4.8	ロクロナデ 一版ミガキ	ミガキ ・高合処理	ミガキ ・高合処理	回永無	ヘラミガキ	228	"	"		
2200	2	"	カマド	土	環	○	(13.7)				ロクロナデ	ミガキ ・高合処理	ロクロナデ	ミガキ ・高合処理	"	"	"	"		
2201	3	"	カマド	土	環	○			5.3				ロクロナデ	ミガキ ・高合処理	回永無	ヘラミガキ	"	"	底面隅切部ケズリ	
2202	4	"	土坑	土	環	○			(6.0)				ロクロナデ	ミガキ ・高合処理	回永無	ヘラミガキ	"	"		
2203	5	"	土坑	土	環	○			(6.4)				ロクロナデ ・ヘラナデ	ヘラミガキ	回永無	ヘラミガキ	"	"	二次焼成	
2204	6	"	カマド	須	環	○	(13.6)	(5.4)	4.2		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"		
2205	7	"	立軸	土	環	○	(20.4)				ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ?	ヘラナデ	"	"	"	"	輪縁み盛あり	
2206	8	"	土坑	土	環	○?			(8.2)				ヘラナデ	ハケメ	不明・ケズリ	ヘラナデ	"	"		
2207	1	CVr 25 住	床直	須	環	○	(13.5)		6.8	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	442	"		
2208	2	"	床直	須	環	○			(6.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"	環元不足	
2209	3	"	床直	土	環	○			(6.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	回永無	ロクロナデ	"	"		

No	日期	道標名	階位	種類	型類	成 形	法				調 査 技 法				国版	写真	備 考					
							ロクロ	オコサ	L ₁ 径	(a) 脚径	(a) 底径	(a) 径	(a) 高	口 縁 部				調 査 部		底 部		
														外 面				内 面	外 面	内 面	切り廻し	内 面
2210	4	CVir 25 住	床底	土 壘	○		(19.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	オコサ・ ロクロナデ	ロクロナデ		228	442			
2211	1	CVIP 4 住	埋	土 坏	○		(14.0)		5.2	6.4			ロクロナデ	イガキ・ 黒色地蔵	ロクロナデ	イガキ・ 黒色地蔵	回承盤		230	"		
2212	2	"	埋	土 坏	○		(14.2)						ロクロナデ	イガキ・ 黒色地蔵	ロクロナデ	イガキ・ 黒色地蔵			"	"		
2213	3	"	埋	土 坏	○				(5.6)				ロクロナデ	イガキ・ 黒色地蔵	ロクロナデ	イガキ・ 黒色地蔵	回承盤	イガキ・ 黒色地蔵	"	"		
2214	4	"	床底	土 坏 (C6)	○		12.3		5.3	4.5			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
2215	5	"	埋	土 坏 (C6)	○		14.1		4.8	3.7			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
2216	6	"	床底	須 坏	○		14.5		6.8	4.7			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
2217	7	"	埋	須 坏	○		(14.0)		(6.6)	4.1			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
2218	8	"	カマド	須 坏	○		(14.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
2219	9	"	カマド	須 坏	○		(13.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
2220	10	"	埋	須 坏	○		(14.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
2221	11	"	埋	須 坏	○				(7.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
2222	12	"	カマド	須 坏	○				(6.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
2223	13	"	床底	土 壘	○		24.3	21.0	6.7	33.9			ロクロナデ	ロクロナデ	イガキ・ イガキ	ヘラナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"		
2224	14	"	埋	土 壘	○		(24.7)						ロクロナデ	ヘラナデ	ケズリ	ヘラナデ			"	443		
2225	15	"	埋	土 壘	○		(18.6)						ロクロナデ	カキメ	ケズリ	カキメ			231	"		
2226	16	"	埋	土 壘	○		(18.0)						ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ?	ナデ?			"	"		
2227	17	"	埋	土 壘	○?				9.0						ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ユビナデ	"	"		
2228	18	"	床底	土 壘	○?				(9.0)						ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ユビナデ	"	"		
2229	19	"	埋	土 壘	○										ケズリ	ヘラナデ			"	"		
2230	20	"	埋	土 壘	○?		(14.0)						ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ナデ?			"	"		
2231	21	"	床? 土	壘	○		(15.4)						ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"		
2232	22	"	埋	土 壘	○		(12.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
2233	23	"	埋	土 壘	○		(14.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
2234	24	"	埋	土 壘	○		(17.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
2235	25	"	床? 土	壘	○		(16.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			232	"		
2236	26	"	埋	土 壘	○		(15.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
2237	27	"	埋	土 壘	○				(12.0)						ナデ?	ナデ?	不明・ナデ	ユビナデ	"	"		
2238	28	"	埋	土 壘	○				(9.0)						ナデ	ハケメ	水蓋底	ナデ	"	"		
2239	29	"	カマド	土 鉢	○		12.0	11.6	7.2	8.6			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
2240	30	"	床? 土	鉢	○				(7.4)						ケズリ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
2241	31	"	埋	土 鉢	○				(6.5)						ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		

2242	32	CV1p4住	袖石床	須	垂	○		21.8	29.8	11.2	32.1	ロクロナデ	ロクロナデ	タタキ・ケズリ	カキメ	不明・ナデ	ナデ	232	443	
2243	33	"	カマド	須	垂	○				(13.8)				タタキ・ケズリ	カキメ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
2244	34	"	埋	須	垂	○								ロクロナデ	ロクロナデ			"	444	
2245	35	"	埋	須	垂	○								ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2246	36	"	埋	須	垂	○								タタキ・ケズリ	カキメ			"	"	
2247	37	"	埋	須	垂									並行タタキ	ナデ			"	"	
2248	38	"	埋	須	垂									並行タタキ	並行アケ			"	"	
2249	1	CV1r6住	埋	土	環	○				6.4				ケズリ	イダホ・ 黒色処理	不明・ナデ	イダホ・ 黒色処理	234	"	底面に+印あり
2250	2	"	カマド	土	環	○				6.2				ロクロナデ	イダホ・ 黒色処理	同条無	イダホ・ 黒色処理	"	"	
2251	3	"	P3	土	環	○				(6.0)				ケズリ	イダホ・ 黒色処理	不明・ナデ	イダホ・ 黒色処理	"	"	
2252	4	"	埋	土	環	○				(5.8)				ロクロナデ	イダホ・ 黒色処理	同条無	イダホ・ 黒色処理	"	"	
2253	5	"	埋	土	環	○		(13.0)				ロクロナデ	イダホ・ 黒色処理	ロクロナデ	イダホ・ 黒色処理			"	"	
2254	6	"	埋	土	環	○		(15.0)				イダホ・ 黒色処理	イダホ・ 黒色処理	イダホ・ 黒色処理	イダホ・ 黒色処理			"	"	
2255	7	"	床2	土	環 (赤)	○		(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2256	8	"	埋	須	環	○		13.0		7.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同条無	ロクロナデ	"	"	
2257	9	"	埋	須	環	○		(13.4)		(6.2)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同条無	ロクロナデ	"	"	
2258	10	"	埋	須	環	○		(13.4)		(6.0)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同条無	ロクロナデ	"	"	
2259	11	"	埋	須	環	○		(14.4)		(5.8)	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同条無	ロクロナデ	"	"	
2260	12	"	埋	須	環	○		(14.8)		(5.6)	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同条無	ロクロナデ	"	"	
2261	13	"	埋	須	環	○		(13.6)		(6.8)	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同条無	ロクロナデ	"	"	
2262	14	"	埋	須	環	○		(15.0)		(6.0)	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同条無	ロクロナデ	"	"	
2263	15	"	埋	須	環	○		(14.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2264	16	"	埋	須	環	○		(13.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2265	17	"	埋	土	環	○		(19.0)	(21.0)	7.7	32.0	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ	木薬底	ナデ	"	445	胴部に輪積り板
2266	18	"	床7	土	環	○		(23.4)	(19.8)			ハケメ	ハケメ	ハケメ・ナデ	ハケメ			235	444	胴部に輪積り板
2267	19	"	床3	土	環	○		(21.2)	9.4			ナデ	ナデ	ナデ	木薬底	ナデ	"	445	胴部に輪積り板	
2268	20	"	床8	土	環	○		(15.2)	14.1	8.4	21.5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
2269	21	"	埋	土	環	○		(26.4)	(23.7)			ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"	
2270	22	"	埋	土	環	○		(22.4)	(19.3)			ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ・ ヘラナデ	ハケメ・ ヘラナデ			236	"	
2271	23	"	埋	土	環	○		(20.6)				ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ			"	"	
2272	24	"	埋	土	環	○		(21.6)				ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"	
2273	25	"	埋	土	環	○		(16.6)				ヨコナデ	ヘラナデ					"	"	
2274	26	"	埋	土	環	○		(22.0)				ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ			"	"	
2275	27	"	埋	土	環	○		(23.8)	(22.0)			ヨコナデ・ ロクロナデ	ロクロナデ・ タタキ	ヨコナデ・ タタキ	ヘラナデ			"	"	
2276	28	"	埋	土	環	○?			8.0					ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	

No.	EIN	遺構名	階位	種類	形状	注	径				調査状況						図版	写真	備考			
							口径		底径		外 面		内 面		正 面					切り出し	内 面	
							(m)	(m)	(m)	(m)	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面						
2277	29	CVr6住	床2	土 甕	○			7.4						ハケメ	ヘラナデ	木炭底	ナデ	236	445			
2278	30	"	煙道部	土 甕	○			(9.6)						ハケメ	ハケメ	不明・ナデ	ナデ	"	"			
2279	31	"	カマド	土 甕	○			(7.4)						ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"			
2280	32	"	煙	土 甕	○			(7.6)						ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"			
2281	33	"	煙	土 甕	○			(11.2)						ナデ	ハケメ	木炭底	ナデ	"	"			
2282	34	"	床直	土 甕	○			(8.0)								不明・ナデ	ナデ	"	"			
2283	35	"	煙	土 鉢	○			(8.8)						ロクロナデ	ロクロナデ	陶糸網	ロクロナデ	"	"			
2284	36	"	煙	土 鉢	○			(7.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	陶糸網	ロクロナデ	"	"			
2285	37	"	床3	土 鉢	○?			(5.6)							ヒガキ	ヒガキ	不明・ナデ	不明	237	"	底面に磁瓦あり	
2286	38	"	カマド	土 甕	○	20.2							ハケメ・ ロクロナデ	ロクロナデ	ハケメ	ナデ?			"	"	磁瓦に赤影あり	
2287	39	"	煙	土 甕	○			(8.4)						ロクロナデ	ロクロナデ	ヒガキ	ハケメ	不明・ナデ	ナデ	446	"	面表に赤影あり
2288	40	"	床4	須 置	○	(11.3)	(19.3)	(12.0)	19.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ	不明・ナデ	ナデ			"	"			
2289	41	"	煙	土 甕 小口 土甕	○	7	35	3.5	4.2	ナデ	ナデ		ナデ	ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"			
2290	42	"	煙	須 置?	○								ナデ	ナデ				"	"			
2291	1	CVr7住	煙	土 鉢 (赤)	○	(14.9)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					238	"			
2292	2	"	煙	土 鉢 (赤)	○	(13.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"			
2293	3	"	煙	土 鉢 (赤)	○			6.2		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			銅籠籠	ロクロナデ	"	"		磁瓦不足か磁瓦あり	
2294	4	"	袖右床	須 置	○	13.8		7.5	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			陶糸網	ロクロナデ	"	"		巾巾磁瓦不足	
2295	5	"	煙	須 置	○	(13.0)		(7.0)	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			陶籠籠	ロクロナデ	"	"			
2296	6	"	煙	土 甕	○			(8.8)		ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			不明・ナデ	ユビナデ	"	"			
2297	7	"	煙	土 甕	○			(7.4)		ナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ヘラナデ			不明・ナデ	ヘラナデ	"	"			
2298	8	"	煙	土 甕	○			(7.4)		ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ			不明・ナデ	ナデ	"	"			
2299	9	"	煙	土 甕	○			(7.4)		ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ			木炭底	ナデ	"	"			
2300	10	"	煙	土 鉢	○			(6.4)		ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ			不明・ナデ	ナデ	"	"			
2301	11	"	煙	土 鉢	○			7.4		ロクロナデ	ロクロナデ	陶糸網	ナデ					"	"			
2302	12	"	煙	須 置	○					ナデ	ナデ							"	"			
2303	13	"	煙	須 置	○					ナデ	ナデ							"	"			
2304	1	CVr8 21住	床直	土 甕	○	(16.0)	19.7	8.4	20.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ユビナデ			239	"			
2305	2	"	床9	須 置	○					ナデ本・ ロクロナデ	ロクロナデ	並行印巻籠	ナデ					"	"			
2306	3	"	煙	須 置	○							脚格子文	磁文					"	"			
2307	1	CVr 22住	P煙	土 鉢	○	(14.0)		6.0	4.7	ロクロナデ	ヒガキ・ 黒色磁瓦	ロクロナデ	ヒガキ・ 黒色磁瓦	陶糸網	ヒガキ・ 黒色磁瓦			240	"			
2308	2	"	煙	土 鉢	○	(15.0)				ロクロナデ	ヒガキ・ 黒色磁瓦	ロクロナデ	ヒガキ・ 黒色磁瓦					"	447			

2209	3	CVII 22 住	床6	土	環	○	(17.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	不明				240	447		
2210	4	"	床5	土	環	○	(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	不明				"	"	外側に腐付着・灯明取	
2211	5	"	床18	土	環	○		(5.8)				ロクロナデ	不明	不明						
2212	6	"	床54	土	環	○		(6.4)				ロクロナデ	不明	不明						
2213	7	"	壁	土	環	○		(5.5)				ロクロナデ	不明	不明						
2214	8	"	壁	土	環	○		(5.2)				ナゲ下地ナズ	不明	不明	不明	不明				二次焼成で内装消失
2215	9	"	F床面	土	環	○	(13.4)	6.4	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明						
2216	10	"	廻り方	土	環	○		(6.2)				ロクロナデ	不明	不明						
2217	11	"	床12	環	環	○	(14.6)	(5.8)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明						
2218	12	"	床10	環	環	○		(6.5)				ロクロナデ	不明	不明						
2219	13	"	カマド	環	環	○		(5.8)				ロクロナデ	不明	不明						
2220	14	"	埋土	土	環	○	(17.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明						
2221	15	"	床9	土	環	○	(21.4)				ロクロナデ	不明	不明	不明						
2222	16	"	床6	土	環	○	(29.5)				ロクロナデ	不明	不明	不明						
2223	17	"	壁	土	環	○	(20.0)				ロクロナデ	不明	不明	不明						
2224	18	"	床52	土	環	○						ロクロナデ	不明	不明						
2225	1	CVII 24 住	床27	土	環	○		(5.8)				ロクロナデ	不明	不明						
2226	2	"	壁	土	環	○		(4.8)				ロクロナデ	不明	不明						
2227	3	"	床54	土	環	○		(5.5)				ロクロナデ	不明	不明						
2228	4	"	壁	土	環	○		(7.0)				ロクロナデ	不明	不明						
2229	5	"	床1	環	環	○	15.2	6.0	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明						
2230	6	"	床直	環	環	○	13.4	5.8	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明					重畳のヒノキあり	
2231	7	"	壁	環	環	○		6.6				ロクロナデ	不明	不明						
2232	8	"	壁	環	環	○	(14.2)				ロクロナデ	不明	不明	不明						
2233	9	"	床15	環	環	○	(12.4)				ロクロナデ	不明	不明	不明						
2234	10	"	床直	環	環	○		(5.0)				ロクロナデ	不明	不明						
2235	11	"	壁	環	環	○		(6.4)				ロクロナデ	不明	不明						
2236	12	"	床直	土	環	○	25.0	8.2				ロクロナデ	不明	不明						
2237	13	"	床直	土	環	○	(23.4)				ロクロナデ	不明	不明	不明						
2238	14	"	壁	土	環	○		(6.5)				ナゲ	不明	不明						
2239	15	"	床46	土	環	○		(6.5)				ロクロナデ	不明	不明						
2240	16	"	壁	土	環	○		(7.2)				ヘラナゲ	不明	不明						
2241	17	"	壁	環	環	○						並行タタキ	不明	不明						
2242	1	CVII 25 住	埋土	土	環	○	(15.0)	(5.2)	5.8	ロクロナデ	不明	不明	不明	不明						
2243	2	"	壁	土	環	○		6.1				不明	不明	不明						

No.	IDNo.	辺 境 名	野 位	種類	器 種	成 形		法 規				調 整 法						図 取	写 真	備 考	
						口 径	糸 径	口 径	厚 径	底 径	厚 径	口 縁 部		裏 部		底 部					
												外 面	内 面	外 面	内 面	切 り 離 し	内 面				
2344	3	CVIc 25 住	埋	土 環	○					5.0				ロクロナデ	1 びき、 黒色処理	黒赤銅	1 びき、 黒色処理	243	448		
2345	4	"	埋	土 環 (20)	○					(13.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2346	5	"	埋	土 環	○					15.3			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"	雪ね被膜あり
2347	6	"	埋	土 環	○					(16.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"	雪ね被膜あり
2348	7	"	埋	土 環	○					(13.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"	
2349	8	"	埋	土 環	○					(6.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"	一部職元不足
2350	9	"	埋	土 環	○					(14.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2351	10	"	埋	土 環	○					(14.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2352	11	"	埋	土 環	○					(20.5)			ハケム、 ロクロナデ	ロクロナデ	ハケム	ヘラナデ			"	"	
2353	12	"	埋	土 環	○					(21.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ハケム	ヘラナデ			"	"	
2354	13	"	埋	土 環	○								ロクロナデ	ロクロナデ	ハケム	ヘラナデ			"	"	
2355	14	"	カマド	土 環	○					8.0					ナデ・ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ・ケズリ	"	"	内底面に保付着
2356	15	"	埋	土 環	○					9.0					ケズリ	1 びき	不明・ナデ	1 びき	"	"	一部に黒色処理残る
2357	16	"	床 10	埋	環	○?									並行タタキ	並行アテ			"	"	
2358	1	CWf 2 住	土 坑	土 環	○					(6.2)					ケズリ	1 びき、 黒色処理	不明・ケズリ	1 びき、 黒色処理	244	449	
2359	2	"	土 坑 1	土 環	○					(14.8)			ロクロナデ	1 びき、 黒色処理	ロクロナデ	1 びき、 黒色処理			"	"	
2360	3	"	土 坑 11	土 環	○					(14.4)			ロクロナデ	1 びき、 黒色処理	ロクロナデ	1 びき、 黒色処理			"	"	
2361	4	"	土 坑 3	土 環	○					(5.6)					ロクロナデ	1 びき	不明・ケズリ	1 びき	"	"	元は内面黒色処理
2362	5	"	埋	土 環 (20)	○					(5.3)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"		
2363	6	"	土 坑 3	土 環	○					6.2			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"		
2364	7	"	埋	土 環	○					(15.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"	
2365	8	"	床 2	埋	環	○				(12.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2366	9	"	床 1	埋	環	○				11.8			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"	転用板
2367	10	"	土 坑 3	土 環	○					(9.4)					ケズリ・ナデ	ナデ	木重底	ナデ	"	"	
2368	11	"	土 坑 3	土 環	○?					(8.0)					ケズリ	ナデ	不明・ケズリ	ナデ	"	"	
2369	12	"	土 坑 3	土 環	○										ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2370	13	"	土 坑 4	土 環	○					(15.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2371	14	"	埋	土 環	○					(5.4)					ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
2372	15	"	埋	土 環	○					(6.4)					ナデ	ナデ	黒赤銅	ナデ	"	"	
2373	1	CWc 3 住	床 3	土 環	○					(6.0)					ロクロナデ?	1 びき、 黒色処理	不明	1 びき、 黒色処理	245		
2374	2	"	床 直上	土 環 (20)	○					13.5			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"	焼成不良
2375	3	"	床 3	土 環 (20)	○					(12.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	黒赤銅	ロクロナデ	"	"	

2276	4	C'bc 3住	埋土	環	○				(5.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承無	ロクロナデ	245	449		
2277	5	"	床直	環	○				(6.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承無	ロクロナデ	"	"		
2278	6	"	カマド	土	環	○	(22.2)	(22.7)					ロクナデ・ ハケメ	ロクナデ・ ヘラナデ	ハケメ	ハケメ			"	"	
2279	7	"	埋土	環	○	(22.2)	(20.0)						ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"	
2280	8	"	床8	土	環	○	17.4	14.0	7.4	15.8			ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ?	ヘラナデ	不調・ナデ	ナデ	"	"	
2281	9	"	床直	土	環	○	15.2	14.2	(7.4)	15.0			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"	
2282	10	"	床直	土	環	○	(19.8)	(17.6)	(10.4)	13.2			ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明		"	450	
2283	11	"	煙道部	土	環	○	(17.4)						ナデ	ナデ					"	"	
2284	12	"	床直	環	○		(15.0)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	246	
2285	13	"	床直	環	○		(22.0)						ナデ・ ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
2286	14	"	床直	環	○										ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2287	15	"	床直	環	○								ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
2288	1	B'bc 7住	埋土	環	○				(6.6)					不明	不明	不明	不明			"	"
2289	2	"	埋土	環	○									ケズリ	ナデ					"	"
2290	1	C'bc 7住	埋土	環	○				(6.5)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承無	ロクロナデ	"	"	"	"
2291	2	"	埋土	環	○		14.1	5.7	4.6				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承無	ロクロナデ	"	"	
2292	3	"	床3	環	○				(5.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承無	ロクロナデ	"	"	"	"
2293	4	"	床直	土	環	○?			8.1					ケズリ	ヘラナデ	木置込	ナデ	"	"	"	"
2294	5	"	埋土	環	○?				(8.0)					ケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	"	"
2295	6	"	床直	土	環	○		(17.2)					ヨコナデ	ヘラナデ	ケズリ	ヘラナデ			"	"	
2296	7	"	床直	土	環	○?		(14.9)					ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ナデ			"	"	
2297	8	"	埋土	環	○?			(5.9)						ミガキ・ 茶色	ハケメ					"	"
2298	1	B'bc 8住	埋土	環	○		13.2	5.5	7.7				ヘラミガキ	ミガキ・ 茶色	ヘラミガキ	ミガキ・ 茶色	不明・ケズリ	ミガキ・ 茶色		247	
2299	2	"	埋土	環	○		(10.0)	(6.2)	4.4				不明	ミガキ・ 茶色	不明	不明	不明	ミガキ・ 茶色	"	"	磨滅はげしい
2300	3	"	埋土	環	○			(6.4)					不明	ミガキ・ 茶色	不明	不明・ケズリ	ミガキ・ 茶色	"	"	"	磨滅はげしい
2400	4	"	埋土	環	○				(5.4)					不明	不明	不明	不明	不明		"	"
2401	4	"	埋土	環	○		13.5	6.2	4.5				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承無	ロクロナデ	"	"	
2402	5	"	床11	環	○		(12.6)	6.5	3.5				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承無	ロクロナデ	"	"	
2403	6	"	床8	環	○		(13.2)	(6.8)	4.1				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承無	ロクロナデ	"	"	
2404	7	"	埋土	環	○			(6.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	回承無	ロクロナデ	"	"	"	"
2405	8	"	床直	環	○		(12.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	451	
2406	9	"	埋土	環	○			(4.2)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	高台部分のみ
2407	10	"	床6	土	環	○?		11.8						ヘラケズリ	ヘラナデ・ カキメ	不明・ ヘラケズリ	ヘラナデ	"	"	"	"
2408	11	"	床5	土	環	○		8.6						不明	ヘラナデ	木置込	ヘラナデ	"	"	"	"
2409	12	"	床8	土	環	○	(17.6)						ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ			"	"	
2410	13	"	埋土	環	○		(23.4)						ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ			"	"	

No	JIS	造構名	階位	種類	成形	法				調						45°	写真	備考					
						壁				口		壁		法									
						ロクロ	型	(m)	(m)	口	壁	外	内	外	内				切	内			
2411	14	CWb 8住	カマド	上	環	○?											248	451					
2412	15	"	カマド	環	環	○			(20.9)											内面拓本			
2413	16	"	カマド	環	環	○			(21.4)														
2414	17	"	環土	環	環	○																	
2415	18	"	カマド	環	環	○?																	
2416	19	"	カマド	環	環	○?																	
2417	1	CWb 8住	埋土	環	環			14.6												249			
2418	2	"	埋土	環	環			(16.0)															
2419	3	"	埋土	環	環				(5.6)														
2420	4	"	床5	環	環			(13.4)	(5.3)	4.3													
2421	5	"	埋土	環	環			(21.8)															
2422	1	CWb 9住	カマド	土	環	○		(13.0)															
2423	2	"	床2	土	環	○		25.1	24.0	6.4	36.4										250	452	
2424	3	"	埋土	環	環	○		(21.5)															
2425	4	"	支脚	土	環	○		(15.6)															
2426	5	"	床2	土	環	○		(17.2)															
2427	6	"	支脚	土	環	○?				(7.6)													
2428	7	"	床2	土	環	○		(13.6)															
2429	8	"	床直	土	環	○?				(9.0)													
2430	9	"	床直	環	環	○		16.2	(23.0)													249	
2431	10	"	埋環	環	環	○																	
2432	1	BWb 12住	埋土	土	環	○		14.9		6.6	7.1												
2433	2	"	床直	土	環	○		(14.4)		5.2	6.1												
2434	3	"	埋土	土	環	○		(14.0)															
2435	4	"	PII内	土	環	○		(13.1)															
2436	5	"	埋土	土	環	○		(12.6)															
2437	6	"	床	土	環	○		(14.6)															
2438	7	"	床9	土	環	○		14.9		6.6	4.0												
2439	8	"	埋土	土	環	○				(5.6)													453
2440	9	"	埋土	土	環	○		(14.3)															
2441	10	"	埋土	土	環	○		(12.0)															
2442	11	"	床5	環	環	○		17.0		6.3	6.0												

2443	12	BWw 12 住	P9内	須	環	○		15.0		5.8	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼(備付)	ロクロナデ	251	453	底面に露骨あり
2444	13	"	床直	須	環	○		13.4		6.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼(備付)	ロクロナデ (備付)	"	"	直内片面に露骨あり
2445	14	"	ホヤド	須	環	○		13.2		6.2	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2446	15	"	床16	須	環	○		13.4		5.2	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	備付蓋・灯明籠
2447	16	"	P9内	須	環	○		12.0		5.6	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2448	17	"	床直	須	環	○		13.6		6.6	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	252	"	
2449	18	"	ホヤド	須	環	○		12.7		5.6	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2450	19	"	床14	須	環	○		(14.7)		5.5	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	454
2451	20	"	床12	須	環	○		(13.1)	(6.8)	3.8		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2452	21	"	床6	須	環	○				5.8				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2453	22	"	埋	須	環	○				5.4				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2454	23	"	床土	須	環	○			(6.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2455	24	"	床2	須	環	○			(5.5)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2456	25	"	床3	須	環	○			5.6					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2457	26	"	埋	須	環	○		(14.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	輪状つまみ
2458	27	"	埋	須	環	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	つまみ不明
2459	28	"	床1	須	環	○			8.0					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2460	29	"	埋	土	環	○		(21.7)				ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・ナズリ	カネメ			"	"	
2461	30	"	埋	土	環	○		(17.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"	
2462	31	"	ホヤド	土	環	○		(11.5)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
2463	32	"	床直	土	環	○?								ヘラナズリ	ヘラナデ	不明・ナデ		"	"	
2464	33	"	埋	土	環	○			(7.8)					不明	不明	不明	不明	"	"	露骨はげしい
2465	34	"	支脚	土	環	○		11.3	10.7	5.4	10.45	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2466	35	"	埋	土	環	○		(20.8)	(18.9)			ロクロナデ	ナデ・ナズリ	ナデ・ナズリ	ナデ・ナズリ	回糸鋼	ロクロナデ	253	"	
2467	36	"	埋	土	環	○		(20.0)	(18.5)			ロクロナデ	ナデ	ナデ	ナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2468	37	"	埋	土	環	○?			(7.8)					ナデ・ナズリ	ナデ・ナズリ	不明・ナデ	不明	"	"	ボネ子と露骨の 可能性あり
2469	38	"	床13	土	環	○			(14.1)					ナデ・ナズリ ナデ・ナズリ	ナデ・ナズリ	不明	不明	"	"	露骨露影
2470	39	"	埋	須	環	○		(22.0)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
2471	40	"	埋	須	環	○			(9.9)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2472	41	"	埋	須	環	○								ナデ	ナデ			"	"	
2473	42	"	埋	須	環	○								ナデ	ナデ			"	"	
2474	1	BWw 14 住	埋	須	環	○		(14.6)		(6.2)	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	254	"	
2475	2	"	埋	須	環	○			(6.6)					ロクロナデ	ロクロナデ	回糸鋼	ロクロナデ	"	"	
2476	3	"	埋	土	環	○		(15.0)	(14.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
2477	4	"	埋	土	環	○		(17.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"	455

No.	EIN	道橋名	階位	種類	部種	成 形		法 規				調 査 技 法						写真	備 考		
						口ノテ	身ノテ	口径 (m)	側径 (m)	底径 (m)	器高 (m)	L1 部		部		底 部				切取	内 面
												外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面				
2478	5	BVW 14 住	埋 土 環	○		(16.6)	(16.8)					ココナデ	ココナデ	ヘラナデ	ナデ		254	445			
2479	6	"	カマド 埋 土 環	○				8.4						ナデ・ハケメ	ヘラナデ	不明・ナデ	ヘラナデ	"	"		
2480	7	"	埋 土 環	○				8.1						ヘラナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"		
2481	8	"	埋 土 環	○				(6.4)						ヘラナデ	ハケメ	不明・砂葺?	ナデ	"	"		
2482	9	"	カマド 埋 土 鉢	○				(6.0)						ヘラナデ	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"		
2483	10	"	埋 土 鉢	○		(11.3)	(11.1)					ココナデ・ 1ガキ	1ガキ	ヘラナデ・ 1ガキ	ヘラナデ・ 1ガキ			"	"		
2484	11	"	埋 土 鉢	○		(9.6)	(7.0)	8.1				ナデか?	ヘラナデ	ナデか?	ヘラナデ	不明・ナデ	ナデ?	"	"		
2485	12	"	埋 須 環?	○		(14.8)						ロクロナデ	ロクロナデ					"	"		
2486	13	"	埋 須 環	○										ゴケ・ゴゾ ゴケ	ナデ			"	"		
2487	14	"	埋 須 環											ナデ	背海壁状文			"	"		
2488	1	BVW 15 住	埋 土 環	○		12.5	6.0	4.6				ヘラ1ガキ	1ガキ・ 黒色地層	ヘラ1ガキ	1ガキ・ 黒色地層	不明・ナデ	1ガキ・ 黒色地層	255	"		
2489	2	"	埋 土 環	○		(12.6)	(6.0)					不明	1ガキ・ 黒色地層	不明	1ガキ・ 黒色地層	不明・ナデ	1ガキ・ 黒色地層	"	"		
2490	3	"	埋 須 環	○		16.2	6.2	5.7				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"		
2491	4	"	埋 須 環	○		13.7	5.4	4.5				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"		
2492	5	"	埋 須 環	○			6.8							ロクロナデ	ロクロナデ	回糸籠	ロクロナデ	"	"		
2493	6	"	埋 土 環	○		(17.8)						ココナデ?	ココナデ?	ナデ・ハケメ	ハケメ			"	"		
2494	1	CVW 17 住	埋 土 環	○?		11.6	6.2	4.1				ナデ?	ナデ・黒色地層	ナデ・ナズリ	ナデ・黒色地層	不明・ナデ	ナデ・黒色地層	456	"		
2495	2	"	埋 土 環	○		(18.0)	(5.8)	5.5				ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層	ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層		1ガキ・ 黒色地層	"	"		
2496	3	"	埋 土 環	○		(14.6)						1ガキ	1ガキ・ 黒色地層	1ガキ	1ガキ・ 黒色地層			"	"		
2497	4	"	埋 土 環	○			(6.4)							ケズリ	1ガキ・ 黒色地層	不明・ケズリ		"	"		
2498	5	"	埋 土 環	○		(16.0)						ナデ?	ナデ?					"	"		
2499	6	"	埋 土 環	○?			(8.2)							ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"		
2500	7	"	埋 土 環	○			(7.4)									不明・ナデ	ナデ?	"	"		
2501	8	"	埋 土 環	○			(8.8)									不明・ナデ	ナデ	"	"		
2502	9	"	埋 土 環	○			(8.2)									不明・ナデ	ナデ	"	"		
2503	10	"	埋 須 環	○												並行タタキ	放射状文	"	"		
2504	1	CVW 18 住	床9 土 環	○		(16.0)	(5.2)	5.5				1ガキ	1ガキ・ 黒色地層	1ガキ	1ガキ・ 黒色地層	回糸籠	1ガキ・ 黒色地層	256	" 外周一部黒葺あり		
2505	2	"	床4 土 環	○		(14.0)	(4.0)	5.0				ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層	ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層	回糸籠	1ガキ・ 黒色地層	"	"		
2506	3	"	床直 土 環	○		(14.2)						ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層	ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層			"	"		
2507	4	"	床直 土 環	○		(15.2)						ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層	ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層			"	"		
2508	5	"	床直 土 環	○		(15.4)						ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層	ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層			"	"		
2509	6	"	埋 土 環	○		(16.0)						ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層	ロクロナデ	1ガキ・ 黒色地層			"	"		

2510	7	CVec 18 住	床直	土	坏	○		(14.2)				ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤	ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤				256	456
2511	8	"	埋	土	坏	○		(13.4)				ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤	ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤				"	"
2512	9	"	床直	土	坏	○		(13.8)				ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤	ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤				"	"
2513	10	"	床直	土	坏	○		(13.4)				ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤	ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤				"	"
2514	11	"	埋	土	坏	○		(14.0)				ロクロナデ	?・黄色地盤	ロクロナデ	?・黄色地盤				"	"
2515	12	"	床直	土	坏	○		(15.6)				ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤	ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤				"	"
2516	13	"	床11	土	坏	○			(5.2)			ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤	ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤	回承盤	1ガキ・ 黄色地盤		"	"
2517	14	"	床13	土	坏	○			6.6			ロクロナデ	1ガキ・ 黄色地盤	回承盤	1ガキ・ 黄色地盤	回承盤	1ガキ・ 黄色地盤		"	"
2518	15	"	埋	土	坏	○			6.0							回承盤	1ガキ・ 黄色地盤		"	"
2519	16	"	床直	土	坏	○			6.2							回承盤	1ガキ・ 黄色地盤		"	"
2520	17	"	床9	土	坏	?		13.0		7.0	5.3	ケズリ	1ガキ	ケズリ	1ガキ	不明・ケズリ	1ガキ		"	"
2521	18	"	床直	土	坏	○		(14.4)		(6.8)	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ロクロナデ		"	"
2522	19	"	廻り方	土	坏	○		(15.5)		(6.9)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ロクロナデ		"	"
2523	20	"	床直	土	坏	○		(15.9)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2524	21	"	埋土	土	坏	○				6.8				ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ		457	
2525	22	"	床直	土	坏	○		13.1		6.7	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ		257	
2526	23	"	床17	土	坏	○		14.5		6.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ		"	"
2527	24	"	埋	土	坏	○		(13.8)		(6.6)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ		"	"
2528	25	"	床2	土	坏	○		(14.6)		6.4	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ		"	"
2529	26	"	埋	土	坏	○		13.4		6.2	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ		"	"
2530	27	"	埋	土	坏	○		13.9		5.2	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ		"	"
2531	28	"	埋	土	坏	○		(13.7)		(6.3)	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			"	"
2532	29	"	埋	土	坏	○		(15.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2533	30	"	埋	土	坏	○		(15.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2534	31	"	埋	土	坏	○		(14.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2535	32	"	床直	土	坏	○			5.9					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ		"	"
2536	33	"	床8	土	坏	○		(26.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2537	34	"	床9	土	坏	○		(27.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2538	35	"	床直	土	坏	○		(24.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
2539	36	"	床直	土	坏	○		(26.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				268	"
2540	37	"	埋	土	坏	○		(20.6)				ロクロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ				"	"
2541	38	"	廻り方	土	坏	○						ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ				458	"
2542	39	"	床直	土	坏	○		(23.3)				ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ				"	"
2543	40	"	床直	土	坏	○						不明	不明	ヘラナデ?	ヘラナデ				"	"
2544	41	"	埋	土	坏	○		(16.6)				ロクロナデ	不明	ヘラナデ	ヘラナデ				"	"

2577	13	BWc 19 住	埋土	須	環	○?												261	459	
2578	1	BWc 10 住	カマド	土	環	○	(13.0)			(4.3)	ナデ	ヘラナデ	ナデ	ヘラナデ				262	〃	
2579	2	〃	壁土層	須	環	○	13.2		6.6	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回廊無蓋	ロクロナデ	〃	〃	扉面拓本	
2580	3	〃	埋土	須	環	○	(12.0)			(3.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				〃	〃	
2581	4	〃	埋土	須	環	○			(7.8)	(1.7)				ロクロナデ	ロクロナデ	扉条再蓋	ロクロナデ	〃	〃	
2582	5	〃	カマド	須	環	○	13.0			4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				〃	〃	460
2583	6	〃	カマド	土	環	○	21.3	17.0	9.3	31.2	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ナデ	木炭竈	ナデ	ナデ	〃	〃	扉面拓本
2584	7	〃	埋土	土	環	○	27.7	20.5	9.7	31.2	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ	木炭竈	ナデ	ナデ	〃	〃	460
2585	8	〃	埋土	土	環	○	(22.0)	(29.0)		(15.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ				〃	〃	
2586	9	〃	カマド	土	環	○	(18.0)			(10.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ				〃	〃	ハケメ張り
2587	10	〃	カマド	土	環	○				7.7	(10.8)			ヘラケズリ	ハケメ	ナデ・ケズリ	ナデ	ナデ	〃	扉面拓本
2588	11	〃	カマド	土	環	○			8.6	(8.1)				ヘラケズリ	ハケメ	ナデ	ナデ	〃	〃	
2589	12	〃	カマド	土	環	○			(8.2)	(5.3)				ハケメ	ヘラナデ	ナデ	ナデ	〃	〃	
2590	13	〃	埋土	土	環	○			(7.0)	(4.2)				ナデ?	ハケメ	ナデ?	ナデ?	〃	〃	
2591	14	〃	カマド	土	環	○			8.6	(2.7)				ヘラケズリ	ナデ・ハケメ	ヘラケズリ	ナデ	〃	〃	扉面拓本
2592	15	〃	カマド	土	環	○				(4.5)				ヘラケズリ	ハケメ			〃	〃	
2593	16	〃	カマド	土	環	○			(7.6)	(3.8)				不明	不明	ナデ?	ナデ?	〃	〃	扉面拓本・写真
2594	17	〃	カマド	土	環	○		9.7	5.4	(9.7)				ハケメ	ハケメ	ナデ	ナデ?	〃	〃	
2595	18	〃	埋土	土	環	○	(18.0)			(5.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ハケメ				〃	〃	跡の可能性あり
2596	19	〃	埋土	土	環	○	(10.4)			(8.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ナデ				〃	〃	461
2597	20	〃	埋土	土	環	○			10.2	(7.7)				ナデ?	ナデ	木炭竈	ナデ	ナデ	〃	扉面拓本
2598	21	〃	カマド	土	環	○		(22.0)						ハケメ	ナデ			〃	〃	
2599	22	〃	埋土	土	環	○	(5.0)	(4.0)		(3.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ヘラナデ				〃	〃	
2600	23	〃	埋土	須	大環	○								旅行タタキ	彫形無文凸面			〃	〃	
2601	24	〃	埋土	須	大環	○								旅行タタキ	彫形無文凸面			〃	〃	
2602	1	BWg 13 住	床 No.1	土	環	○	(11.8)		6.8	5.2	ヒガキ	ヒガキ・内環	ヒガキ	ヒガキ・内環	帯承盤	ヒガキ・内環	264	〃	〃	扉面穿孔
2603	2	〃	床 No.1	土	環	○			(6.0)					不明・ナデ	ナデ			〃	〃	
2604	3	〃	Q1床	須	環	○	(12.4)			(6.0)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回廊無蓋	ロクロナデ	〃	〃	
2605	4	〃	埋土	須	環	○	(14.6)		7.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回廊無蓋	ロクロナデ	〃	〃		
2606	5	〃	カマド	須	環	○	(14.2)							ロクロナデ	ロクロナデ			〃	〃	
2607	6	〃	Q1床	須	環	○			6.0					ロクロナデ	ロクロナデ	回廊無蓋	ロクロナデ	〃	〃	
2608	7	〃	床 No.1	須	環	○	(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				〃	〃	火ダスキあり
2609	8	〃	Q1床	土	環	○	(17.0)				ヨコナデ	ヨコナデ	彫減不明	彫減不明				〃	〃	
2610	9	〃	Q1床	土	環	○	(17.0)				ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ				〃	〃	
2611	10	〃	床 No.1	土	環	○					ヨコナデ	ナデ	ナデ	ナデ				〃	〃	

No	HNo	設備名	階位	種類	形種	成 形			法			調 査 技 法						図版	写真	備 考
						ロゴロ	妻ロゴロ	口径	(m) 側径	(m) 底径	(m) 節高	口 縁 部		調 査 部		底 部				
												外 面	内 面	外 面	内 面	切 り 離 し	内 面			
2612	11	BWg 13 住	3F内	土 垂	○			8.0						ケズリ	ケズリ	不明・ケズリ	ケズリ	264	461	上げ底
2613	12	"	地下	土 垂	○			(7.6)						ケズリ	ハケメ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
2614	13	"	3F外	土 垂	○			(6.1)						ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
2615	14	"	3F内	須 風	○		5.6	5.2	13.1	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	図録-高合	ロゴナデ	"	"	
2616	15	"	埋土	須 大風	○									進行タナキ	進行アテ			"	462	
2617	16	"	床No1	須 垂	○									進行タナキ・ケズリ	ナデ			"	"	
2618	1	AXx2住-1	床1	須 環	○		14.5	6.2	4.6	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	網糸製	ロゴナデ	265	"	重ね後のヒダスキあり
2619	2	"	床2	須 垂												網糸製	ナデ・ケズリ	"	"	
2620	1	AXx2住-2	煙道	土 環	○		14.5	5.7	5.2	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	
2621	2	"	埋土	土 環	○		(12.4)			ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	
2622	3	"	煙道	須 環	○		(15.5)			ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	重ね後のヒダスキあり
2623	4	"	3F外	須 環	○		(13.2)			ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	
2624	5	"	埋土	須 環	○			5.0						ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	
2625	6	"	床1	須 環	○		(13.0)			ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	重ね後のヒダスキあり
2626	7	"	P1	埋 環	○			(5.4)						不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	
2627	8	"	煙道	須 垂	○		(30.3)							不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	内面に埋付書
2628	9	"	埋 須	垂 垂	○			(7.6)						不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	
2629	10	"	埋 須	垂 垂	○									不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	
2630	1	AXx7住	埋土	須 垂	○		(14.8)	不明	不明	不明	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	266	"	一部埋付書(灯明取)
2631	2	"	床2	須 環	○		不明	(5.5)	不明	不明	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	一部埋付書
2632	3	"	埋 須	環 垂	○		15.1	5.8	5.3	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	重ね後のヒダスキあり
2633	4	"	埋 須	環 垂	○		14.6	5.5	4.5	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	463	意味不明の埋付書あり
2634	5	"	袖右	須 環	○		13.7	6.1	4.6	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	
2635	6	"	3F内	須 環	○		不明	6.0	不明					不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	不明・ヘラケズリ	"	"	
2636	7	"	埋土	須 垂	○		不明	11.2	不明					不明	ヘラナデ	木造底	ユビナデ	"	"	輪埋取が明瞭
2637	8	"	埋土	須 垂	○		不明	(7.3)	不明					ヘラケズリ	ユビナデ	不明・ヘラケズリ	ユビナデ	"	"	
2638	9	"	床土	垂 垂	○		13.3	7.0	13.3	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	不明	不明	不明	不明	不明	"	"	
2639	10	"	埋土	須 垂	○		25.6	7.0	36.6	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	ロゴナデ	不明・ナデ	不明	不明	不明	"	"	
2640	11	"	埋土	須 垂	○		(24.6)	不明	不明	ロゴナデ	ロゴナデ	不明	不明	不明	不明	不明	不明	267	"	
2641	12	"	埋土	須 垂	○		(30.2)	不明	不明	ロゴナデ	ロゴナデ	不明	不明	不明	不明	不明	不明	"	"	二次焼成を受ける
2642	13	"	埋土	須 垂	○?			(13.0)	不明					不明	不明	不明	不明	"	"	
2643	14	"	埋 須	垂 垂	○		(14.8)			ロゴナデ	ロゴナデ	不明	不明	不明	不明	不明	不明	"	"	

2711	19	A31p 23住	土 須	環	○	(20.7)		不明	不明	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			273	467
2712	20	"	環 須	環	○							ナデ	ナデ			"	"
2713	1	A31r 24住	環 土	環	○	14.6				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			274	"
2714	2	"	環 須	環	○	15.5	7.0	4.6		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	照承無	ロクロナデ	"	"
2715	3	"	環 須	環	○	(15.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2716	4	"	環 須	環	○	(15.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2717	5	"	環 須	環		○?		(16.2)						不明・ナデ	ケズリ・ナデ	"	"
2718	6	"	環 須	環	○							ロクロ	ロクロ			"	"
2719	7	"	環 須	環	○							ケズリ	ナデ			"	"
2720	8	"	環 須	環	○							ケズリ	ナデ			"	"
2721	1	B31b 1住	環土	土 環	○	(19.8)				ロクロナデ	ミダキ・内環	ロクロナデ	ミダキ・内環			275	468
2722	2	"	環土	土 環	○	(18.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2723	3	"	環土	土 環	○	(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2724	4	"	環土	土 環	○	13.4	5.6	4.4		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	照承無	ロクロナデ	"	"
2725	5	"	環土	土 環	○	(20)				ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ハケメ			"	"
2726	6	"	環土	土 環	○	(18.4)				ヨコナデ	ヨコナデ					"	"
2727	7	"	環土	土 環	○	(16.4)				ヨコナデ	ヨコナデ					"	"
2728	8	"	環土	土 環	○	(16.6)				ヨコナデ	ヨコナデ					"	"
2729	9	"	環土	土 環	○			6.5				ケズリ	ナデ	不明・ケズリ	ナデ	"	"
2730	10	"	環土	土 環	○	(16.0)				ヨコナデ	ミダキ・内環	ナデ	ミダキ・内環			"	"
2731	11	"	環土	須 大環	○							並行タナキ	放射状アテ			"	"
2732	1	A31y 3住3部	環土	土 環	○	16.1	6.0	5.4		ロクロナデ	ミダキ・内環	ロクロナデ	ミダキ・内環	照承無	ミダキ・内環	275	"
2733	2	"	環土	土 環	○	14.8	6.0	4.5		ロクロナデ	ミダキ・内環	ロクロナデ	ミダキ・内環	照承無	ミダキ・内環	"	"
2734	3	"	環土	土 環	○	14.8	5.6	4.7		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	照承無	ロクロナデ	"	"
2735	4	"	環土	土 環	○		(6.7)					ロクロナデ	ロクロナデ	照承無	ロクロナデ	"	"
2736	5	"	環土	土 環	○	(14.8)	(6.4)	4.6		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	照承無	ロクロナデ	469	"
2737	6	"	環土	土 環	○	(14.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2738	7	"	環土	土 環	○		(6.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	照承無	ロクロナデ	"	"
2739	8	"	環土	須 環	○	(14.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2740	9	"	環土	須 環	○	(22.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2741	10	"	環土	須 大環	○							並行タナキ	ナデ			"	"
2742	1	B31b 3住	環土	土 環	○	(16)	5.0	4.4		ロクロナデ	ミダキ・内環	ロクロナデ	ミダキ・内環	照承無	ミダキ・内環	277	"
2743	2	"	環土	土 環	○	(24)				ロクロナデ	ミダキ・内環	ロクロナデ	ミダキ・内環			"	"
2744	3	"	環土	土 環	○	13.5	6.0	4.6		ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ	不明・ケズリ	ナデ	"	灯明基
2745	4	"	環土	土 環	○	13.8	6.8	4.7		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	照承無	ロクロナデ	"	"

No	ENo	造 橋 名	橋 位	種 類	部 種	成 形		法 規				調 査 法						測 距	巧 尺	備 考			
						口 径	厚 度	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	L 部		部		部					部		
												外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面				切 削 面	内 面	
2880	11	BX0b 15 住	床No10	上	環	○					6.4						口径ナデ	ミダキ・内風	回糸盤	ミダキ・内風	288	476	
2881	12	"	床No3	上	環	○					(6)						口径ナデ	ミダキ・内風	回糸盤	ミダキ・内風	"	"	
2882	13	"	床No4	上	環	○					6						口径ナデ	ミダキ・内風	回糸盤	ミダキ・内風	"	"	
2883	14	"	P11 内	上	環	○			(16)		7.6	6.1	口径ナデ	ミダキ・内風	口径ナデ	ミダキ・内風	回糸盤	ミダキ・内風	回糸盤	ミダキ・内風	"	"	
2884	15	"	埋上	上	環	○			(12.4)				口径ナデ	ミダキ・内風	口径ナデ	ミダキ・内風	不明・菊花	不明・菊花	不明・菊花	不明・菊花	"	"	
2885	16	"	床No1	上	環	○			(13.6)		6.2	5.2	口径ナデ	ミダキ	口径ナデ	ミダキ	回糸盤	ミダキ	回糸盤	ミダキ	"	"	
2886	17	"	床No20	土	環	○			(15.0)				口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"	"	
2887	18	"	埋土	土	環	○					6						口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	"
2888	19	"	床No27	上	環	○					6.6						口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2889	20	"	床No28	上	環	○					(6.0)						口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	289
2890	21	"	埋土	土	環	○					5.6						口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2891	22	"	床No5	土	環	○			(15.5)				口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2892	23	"	床No10	環	環	○			15.4		5.8	4.2	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2893	24	"	床No16	環	環	○			15.1		5.6	4.0	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	477
2894	25	"	床No5	環	環	○			14.8		5.7	4.4	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2895	26	"	床No2	環	環	○			(14.6)		5.4	4.6	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2896	27	"	床No23	環	環	○			(14)		(5.2)	3.8	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2897	28	"	P11 内	環	環	○			(14.8)		(7.8)	3.3	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2898	29	"	床No35	環	環	○			(13.4)		(5.4)	4.2	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2899	30	"	埋土	環	環	○			(14.0)		6.0	3.4	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2900	31	"	埋土	環	環	○			(15.6)				口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2901	32	"	埋土	環	環	○			(13.6)				口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2902	33	"	埋土	環	環	○			(14.4)				口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2903	34	"	床No9	環	環	○			(14)				口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2904	35	"	埋土	環	環	○					4.8						口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2905	36	"	床No29	環	環	○					(5.6)						口径ナデ	口径ナデ	回糸盤	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	478
2906	37	"	P11 内	土	環	○			21.0		9.2	35.0	口径ナデ	口径ナデ	ナデ	ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	290
2907	38	"	埋土	土	環	○			23.6		8.0	32.7	口径ナデ	口径ナデ	ナデ	ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	"
2908	39	"	埋土	土	環	○			(24.6)		(6.0)	23.1	口径ナデ	口径ナデ	ナデ	ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	不明・ナデ	289
2909	40	"	床	土	環	○			22.5				口径ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	290
2910	41	"	埋土	土	環	○			(21.1)				口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"
2911	42	"	埋土	土	環	○			(20.6)				口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	口径ナデ	"

2912	43	B3No.15住	埋土	上	環	○		(19)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			290	478
2913	44	"	埋土	土	環	○		(19)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			291	"
2914	45	"	埋土	土	環	○		(17)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2915	46	"	埋土	土	環		○	(11.8)			ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ			"	"
2916	47	"	床No.25	土	環		○	(13.0)			ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ			"	"
2917	48	"	床No.28	土	環	○?			8.1				ケズリ	ナデ	不明・巻目録	ナデ	"	"
2918	49	"	埋土	土	環	○			7.0				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸巻	ロクロナデ	"	"
2919	50	"	カマド 高座	土	鉢	○		(18)			ロクロナデ	いびき・内風	ロクロナデ ケズリ	いびき・内風			"	"
2920	51	"	埋土	土	環		○	(24)			遺跡不明	ハケメ	遺跡不明	ハケメ			"	"
2921	52	"	埋土	土	環?		○	(17)			遺跡不明	不明	不明	不明			"	"
2922	53	"	床No.18	須	大環	○		22			ロクロナデ	ロクロナデ	進行タナキ	青海線アナ			"	"
2923	54	"	床No.28	須	環	○		(13.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	多分 ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2924	55	"	埋土	須	環	○		(20.4)			ロクロナデ	ロクロナデ					"	479
2925	56	"	埋土	須	環	○		(19.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
2926	57	"	埋土	須	環	○							ロクロナデ	ロクロナデ			292	"
2927	58	"	床No.6	須	環		○	(9.4)					タナキ・ケズリ	ナデ	不明・ケズリ	ナデ	"	"
2928	59	"	床No.8	須	環		○	(9.6)					ケズリ	ケズリ	不明・ナデ	ナデ	"	"
2929	60	"	埋土	土	環	○			6.4				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸巻	ナデ	"	"
2930	61	"	埋土	須	環	○							ケズリ	ナデ			"	"
2931	62	"	埋土	須	環	○							ケズリ	ナデ			"	"
2932	63	"	埋土	須	環	○							ケズリ	ナデ			"	"
2933	64	"	埋土	須	大環		○						進行タナキ	円形実支凸面			"	"
2934	65	"	埋土	須	大環		○						進行タナキ ケズリ	ナデ			"	"
2935	1	B3No.18住	埋土	須	環	○			6.8				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸巻	ロクロナデ	294	"
2936	2	"	埋土	須	環	○		(12.8)	5.8	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸巻	ロクロナデ	"	"
2937	3	"	埋土	須	環	○		(19.0)			ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
2938	4	"	埋土	須	環	○		(5.0)	27.7				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸巻	ロクロナデ	"	"
2939	5	"	カマド 高座	土	環	○		21	10.2	33.0	ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ	木製のナデ	ナデ	"	"
2940	6	"	埋土	土	環	○		21.1	10		ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	不明・割落	ナデ	"	480
2941	7	"	埋土	土	環	○		(20.0)			ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ			"	"
2942	8	"	埋土	土	環	○		(18.6)			ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ			"	"
2943	9	"	床No.1	土	環	○			9				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	295	"
2944	10	"	埋土	土	環	○			7.8				タナキ・ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
2945	11	"	埋土	土	環	○			(7.2)				ケズリ	ナデ	不明	ナデ	"	"
2946	12	"	埋土	土	鉢	○?			9				ケズリ	いびき・内風	不明・ナデ ケズリ	いびき・内風	"	"

No.	ENo.	道橋名	順位	種類	形状	法				調 査 状 況						RQR	写真	備 考					
						口	幅	(m) 深	(m) 深	(m) 深	(m) 深	口 縁 部		調 査 部					底 部				
												外 面	内 面	外 面	内 面				切り取し	内 面			
2947	13	B30a 18 住	床No3	須	大塚												295	480					
2948	1	A30y 22 住	床No9	土	土 環	○		15.1		6.0	5.7	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	297	〃		
2949	2	"	"	土	土 環	○		(16.2)		(5.8)	(5.0)	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃		
2950	3	"	床No1	土	土 環	○		(15.5)		(8.0)	5.0	ロクロナテ	ミダキ・内風	ナズリ・ミダキ	ミダキ・内風	不明・ミダキ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃		
2951	4	"	"	土	土 環	○		(13.2)		6	3.8	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃		
2952	5	"	"	土	土 環	○		(16.6)				ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	481		
2953	6	"	"	土	土 環	○		(15.4)				ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃		
2954	7	"	"	土	土 環	○				5.8				ロクロナテ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃	二次調査で一部内風調査	
2955	8	"	"	土	土 環	○				5.8				ロクロナテ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃		
2956	9	"	"	土	土 環	○				5.6				ロクロナテ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃		
2957	10	"	"	土	土 環	○				6.6				ロクロナテ	ミダキ・内風	不明・高台	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃		
2958	11	"	"	土	土 環	○				5.3				ロクロナテ	ミダキ・内風	不明・高台	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃	内面に建付物	
2959	12	"	"	土	土 環	○		(15.8)		8.6	6.6	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	ミダキ・内風	〃	〃		
2960	13	"	床No2	土	土 環	○		11.6		4.8	2.9	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2961	14	"	床No23	土	土 環	○		12.6		5.8	3	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2962	15	"	熊山口	土	土 環	○		13.0		6.0	2.9	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2963	16	"	床No3	土	土 環	○		12.5		5.3	3.6	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2964	17	"	床直	土	土 環	○		11.8		5.2	3.4	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2965	18	"	"	土	土 環	○		12.8		5.4	3.1	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2966	19	"	P1No.2	土	土 環	○		12.2		5.6	3	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	482		
2967	20	"	床No4	土	土 環	○		11.8		5.8	4	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	298		
2968	21	"	"	土	土 環	○		12.6		5.0	3.2	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2969	22	"	床No26	土	土 環	○		13.8		5.8	3.3	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2970	23	"	熊山口	土	土 環	○		12.3		6.0	3.1	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2971	24	"	床No2	土	土 環	○		12.4		(5.8)	3.3	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2972	25	"	左橋	土	土 環	○		(14.6)		(6.0)	3.7	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2973	26	"	"	土	土 環	○		(15)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2974	27	"	"	土	土 環	○		(13.2)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2975	28	"	"	土	土 環	○		(14.0)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃		
2976	29	"	"	土	土 環	○				(5.6)				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃	
2977	30	"	"	土	土 環	○				4.6				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃	
2978	31	"	"	土	土 環	○				5.2				ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	ミダキ・内風	ロクロナテ	ロクロナテ	〃	〃	

2979	30	Army 22 住		土	坂 (99)	○				4.6						ロクロナデ	ロクロナデ	国永無	ロクロナデ	298	482	
2980	33	"		土	坂 (99)	○				5.2						ロクロナデ	ロクロナデ	国永無	ロクロナデ	"	"	
2981	34	"		土	坂 (99)	○		(15.8)					ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	国永無	ロクロナデ	"	"	
2982	35	"		土	坂 (99)	○										ロクロナデ	ロクロナデ	不明・高台	ロクロナデ	"	"	
2983	36	"		土	坂 (99)	○				(6.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	不明・高台	ロクロナデ	"	"	
2984	37	"		須	坂 (99)	○		(5.6)								ロクロナデ	ロクロナデ	国永無	ロクロナデ	"	"	
2985	38	"		須	坂 (99)	○				5.6						ロクロナデ	ロクロナデ	国永無	ロクロナデ	"	"	
2986	39	"		須	坂 (99)	○		(6.6)								ロクロナデ	ロクロナデ	国永無	ロクロナデ	"	"	
2987	40	"		坂	高台	○				6.4						ロクロナデ	ロクロナデ	国永無高台	ロクロナデ	"	"	
2988	41	"	標道部	土	塹	○	(21.8)						ヨコナデ	ナデ	ケズリ	ナデ					299	483
2989	42	"	標道部	土	塹	○	(19.4)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
2990	43	"		土	塹	○	(20.4)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
2991	44	"	燈出口	土	林	○	14.0		7.6	12.7			ナデ	ナデ	ケズリ	ナデ		不明・ナデ	ナデ			輪積み痕あり
2992	45	"	標道部	土	塹	○	(13.0)						ヨコナデ	ナデ	ナデ	ナデ					"	"
2993	46	"	標道部	土	塹	○	(21.0)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					300	"
2994	47	"		土	塹	○	(21.8)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
2995	48	"		土	塹	○	(16.0)						ナデ	ナデ	ケズリ	ナデ					"	"
2996	49	"	キマヤ	土	塹	○	(24.6)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
2997	50	"		土	塹	○	(15.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
2998	51	"	キマヤ	土	塹	○	(25.4)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
2999	52	"		土	塹	○	(16)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3000	53	"		土	塹	○	(16)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3001	54	"		土	塹	○	(19.2)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3002	55	"		土	塹	○	(18.8)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					301	484
3003	56	"		土	塹	○	(20)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3004	57	"		土	塹	○	(28)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3005	58	"		土	塹	○	(18.8)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3006	59	"		土	塹	○	(12.6)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3007	60	"	キマヤ	土	塹	○	(21.2)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3008	61	"		土	塹	○	(23.6)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3009	62	"		土	塹	○	(16)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3010	63	"		土	塹	○	(17.6)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3011	64	"		土	塹	○	(10.4)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3012	65	"		土	塹	○	(15.6)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"
3013	66	"		土	塹	○	(14)						ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ	ナデ					"	"

3046	1	D108 土坑	埋土	須	環	○				(6.6)						ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	1	490	
3047	2	"	"	"	"	○				(5.4)						ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
3048	3	"	"	"	"	○				(9.2)								回承盤	ロクロナデ	"	"	欄あり
3049	1	D112 土坑-1	幾十脚	土	環	○	(14.8)		(7.4)	5.0	ロクロナデ	ミガキ・内黒	ロクロナデ	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒	"	"	301	
3050	2	"	"	"	"	○				(6.4)						ロクロナデ	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒	"	"	
3051	3	"	"	"	"	○				(5.2)						ロクロナデ	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒	"	"	
3052	4	"	"	"	"	○	(17.6)		(6.8)	5.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
3053	5	"	"	"	"	○				6.1						ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
3054	6	"	"	"	"	○	(16.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ								
3055	7	"	"	"	"	○	(9.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ								欄付否
3056	1	D11m 22 土坑	埋	"	環	○	(14.00)				ミガキ	ミガキ・内黒									2	
3057	2	"	"	"	"	○	(14.50)				ミガキ	ミガキ・内黒										
3058	3	"	"	"	"	○	(13.00)				ミガキ	ミガキ・内黒										
3059	4	"	"	"	"	○				丸底					ナデ・ミガキ	ミガキ・内黒	丸底・ナデ	ミガキ・内黒	"	"		
3060	5	"	"	"	"	○				丸底					ミガキ・ナデ	ミガキ・内黒	丸底・ナデ	ミガキ・内黒	"	"		
3061	6	"	"	"	"	○				(6.80)					ロクロナデ	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒	"	"		
3062	7	"	"	"	"	○	(15.50)				ナデ	ナデ										
3063	8	"	"	"	"	○	(16.00)				ミガキ	ミガキ										
3064	9	"	"	"	"	○					ミガキ	ミガキ										
3065	10	"	"	"	"	○				(6.30)					ナデ	ナデ・ハケメ	ナデ	ハケメ	"	"		
3066	11	"	"	"	"	○				(7.10)					ナデ・ハケメ	ハケメ	ナデ	ハケメ	"	"	302	
3067	12	"	"	"	"	○				(6.8)					ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	"	"		
3068	13	"	"	"	"	○				(5.00)					ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	"	"		
3069	14	"	"	"	"	○				5.20					ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	"	"		
3070	15	"	"	"	"	○									ナデ・ミガキ	ナデ			"	"		
3071	16	"	"	"	"	○									ミガキ	ナデ			"	"		
3072	17	"	"	"	"	○?																
3073	1	D114 土坑	"	土	"	○									進行ナデ	進行アテ					1	
3074	2	"	"	"	"	○									ナデ	ナデ						
3075	1	D116 土坑	埋土	"	環	○									ロクロナデ	ミガキ・内黒	不明・ナデ ↑高台	ミガキ・内黒	"	"		
3076	2	"	"	"	"	○				(6.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
3077	1	D117 1 船し穴	"	土	環	○				(6.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"		
3078	2	"	"	"	"	○				(5.1)					ロクロナデ?	内黒	不明	内黒	"	"		
3079	3	D117 1 船し穴	埋土	須	環	○									ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"		
3080	4	"	"	"	"	○?									ナズリ	ロクロナデ			"	"		

No.	IDNo.	遺構名	層位	種類	形状	法					調査技法				図取	写真	備考			
						形状		法		調査		調査		調査						
						口径	深さ	掘削	測定	掘削	測定	掘削	測定	掘削				測定		
3061	5	D#y1 陥し穴	埋土	須	大環	○										1	302			
3062	1	D#v 17 陥し穴	"	土	環	○	(14.6)					ロクロナダ	ミガキ・内風	ロクロナダ	ミガキ・内風					
3063	1	D#h 9 陥し穴	"	"	環	○						ヨコナダ	ヨコナダ	ヘラナダ	ヘラナダ		2			
3064	1	D#v 10 陥し穴	埋	須	"	○?								進行タタキ	ナダ					
3065	1	D#v 18 陥し穴	埋土	土	"	○	(14.3)					ヨコナダ	ヨコナダ	ナダ	ナダ					
107	1	D#v 14 陥し穴	埋	縄文	鉢	○	16.6					縦体LR斜	ナダ	縦体LR斜	ナダ					
3066	2	"	"	埋土	須	大環	○							進行タタキ	凹凸あり					
3067	1	B#h 11 陥し穴	"	土	環	○						ヨコナダ	ヨコナダ	ハケメ	ナダ					
3068	2	"	"	"	"	○						ハケメ・ナダ	ヨコナダ	ハケメ	ナダ					
3069	3	"	"	"	"	○								ナダ	ナダ					
3090	1	D#p 12 古墳	周壕埋土下層	"	"	○				(7.4)				ミガキ	ナダ	不明・ナダ	ナダ	23	315	
3091	2	"	周壕埋土上層	"	環(破)	○				(5.6)				ロクロナダ	ロクロナダ	回永能	ロクロナダ			
3092	3	"	"	須	環	○				(5.0)				ロクロナダ	ロクロナダ	回永能	ロクロナダ			
3093	4	"	主体部	土	"	○						ミガキ	ミガキ・内風							
3094	5	"	"	"	"	○								ミガキ	ミガキ・内風					
3095	6	"	"	"	環	○								ナダ	ナダ					
3096	7	"	"	"	"	○								ナダ	ハケメ					
3097	8	"	"	"	"	○								ナダ・ハケメ	ナダ					
3098	9	"	周壕埋土	"	"	○								ケズリ	ナダ					
3099	10	"	主体部	"	"	○	10.2			5.2	12.3	ヨコナダ	ヨコナダ	ナダ	ナダ	不明・ナダ	ナダ			
3100	1	D#p 12 古墳	周壕埋土	"	"	○				(6.4)				ナダ	ナダ	不明・ナダ	ナダ	24		
3101	2	"	主体部	"	"	○								ハケメ・ミガキ	ミガキ					
3102	3	"	周壕埋土	"	"	○						ミガキ	ナダ							
3103	4	"	"	"	"	○								ナダ	ナダ					
3104	5	"	"	"	"	○								ミガキ	ナダ					
3105	1	D#v 13 古墳	周壕	"	鉢	○	12.4				9.0	ヨコナダ	ヨコナダ	ハケメ	ナダ	不明	ナダ			
3106	1	D#p 15 古墳	主体部	"	環	○	12.6			6.4	19.5	ヨコナダ	ミガキ	ハケメ・ミガキ	ミガキ	不明・ナダ	ナダ・ミガキ	25		部位赤影?
3107	2	"	"	須	"	○						ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ					
3108	3	"	周壕埋土	土	腕	○	16			7.2	24.5	ヨコナダ	ミガキ	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	不明・ナダ	ハケメ			
3109	4	"	周壕埋土	"	環	○	(11.4)					ヨコナダ	ヨコナダ			ケズリ	ナダ・ミガキ			
3110	5	"	"	"	"	○	(15.9)					ハケメ・ナダ	ミガキ・内風							
3111	6	D#p 15 古墳	周壕埋土	土	環	○	(16.0)					ヨコナダ	ミガキ・内風							

No	EIN	造 形 名	別 位	種 類	形 状	成 形					注				調 整 技 法				40版	写真	備 考		
						口	底	高	厚	底	底	底	底	口 経 部		側 面 部		底 部					
														外 面	内 面	外 面	内 面	切 り 隠 し				内 面	
3147	2	D#015 基礎	埋土	土 環	○					6.6						ミガキ	ハケメ	不明・ナデ	ハケメ	31	316		
3148	3	"	"	"	○					(9.9)						ナデ	ハケメ	不明・ナデ	ハケメ	"	317		
3149	4	"	"	"	環	○									ミガキ・黒色	ミガキ・内黒	ミガキ・内黒	丸底・ケズリ		"	"		
3150	5	"	"	"	環	○									ナデ・ミガキ	ナデ				"	"		
3151	6	"	"	"	"	○									ミガキ	ハケメ				"	"		
3152	7	"	"	"	"	○									ミガキ	ミガキ				"	"		
3153	1	D#120 基礎	埋	"	"	○									ナデ	ナデ				"	"		
3154	2	"	"	"	"	○									ナデ	ナデ				"	"		
3155	1	D#18 基礎	埋土	須 環	○	(14.4)						口ナデ	口ナデ								"	"	
3156	2	"	"	"	環	○									ナデ	ナデ				"	"		
3157	3	"	"	"	環	○?									並行ナデ	並行ナデ				"	"		
3158	1	古墳周辺造構外		土 環	○	(21.3)						ミガキ	ミガキ・内黒					ハラケズリ	ミガキ・内黒	33	"		
3159	2	"		土 環	○	(16.2)						口ナデ	ミガキ・内黒					丸底・ハラケズリ	ミガキ・内黒	"	"		
3160	3	"		土 環	○							"	"					"	"	"	"		
3161	4	"		"	"	○	(21.3)					ミガキ	"							"	"		
3162	5	"		"	"	○	(18.0)					"	"							"	"		
3163	6	"		"	"	○						"	"					丸底・ハラケズリ	ミガキ・内黒	"	"		
3164	7	"		"	"	○						"	"					"	"	"	"		
3165	8	"		"	"	○	(22.0)					ハラメ・口ナデ	ミガキ					"	"	"	"		
3166	9	"		"	"	○	(17.1)					ハラケズリ	ハラケズリ・ハケメ							"	"		
3167	10	"		"	"	○						ハラメ	ハラメ							"	"		
3168	11	"		"	"	○	(17.0)					ハラメ・口ナデ	"							"	"		
3169	12	"		"	"	○	(22.6)					ハラメ	"							"	"		
3170	13	"		"	"	○				(9.0)								ハラケズリ・ミガキ	ミガキ	"	"		
3171	14	"		"	"	○				7.9								ハラナデ	ハラナデ	木蓋板	ナデ	"	
3172	15	"		"	"	○				(5.5)								ハラケズリ	"	ハラナデ	"	"	
3173	16	"		"	"	○				(5.0)								ハラナデ	ナデ	ナデ	ナデ	"	
3174	17	"		"	"	○				(8.0)								ハラナデ	"	"	ナデ	"	
3175	18	"		"	"	○				(6.2)								ハラナデ	"	"	ナデ	"	
3176	19	"		"	"	○				(6.7)								ケズリ・ナデ	"	"	ナデ	"	
3177	20	古墳周辺造構外		土 環	○	(5.5)												ハラケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	"	
3178	21	"		"	"	○				(6.0)								ハラメ	ハラメ	"	"	"	

3179	22	古墳周辺遺構外		土	覆		○			(7.0)				ナデ	ナデ	*	*	38	317
3180	23	"		"	"		○			(7.0)				"	"	"	"	"	"
3181	24	"		"	壘		○							"	"		丸庭・ナデ	"	"
3182	25	"		"	壘		○						ハケメ・ナデ	ナデ				"	"
3183	26	"		"	"		○							ハケメ	ナデ			"	"
3184	27	"		"	"		○							ナデ・掘削文	ナデ			"	"
3185	1	DNo 23 住状	床1	須	環		○		12.8	6.2	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅糸盤	ロクロナデ	306	486
3186	2	"		埴	土	壘	○?			(6.6)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"
3187	1	DNo 25 住状	土庫廻		環		○		(13.0)	4.0	6.0	1.ガキ・内堀 一部内堀	1.ガキ・内堀 一部内堀	1.ガキ・内堀	不明・ナデ	1.ガキ・内堀	"	"	
3188	2	"		埴土		壘		○						1.ガキ	1.ガキ			"	"
3189	3	"		"	須	壘	○?							ケズリ	ナデ・ガキ			"	"
3190	4	"		"	"	大壘		○?						並行タタキ	円形掘文7ナ			"	"
3191	1	DNo 2 住状	"	"	環		○		(17.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3192	2	"		"	"		○			(8.4)		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅糸盤	ロクロナデ	"	"
3193	3	"		"	土	壘	○					タタキ・ナデ	ナデ	タタキ・ナデ ナデ・1.ガキ	ナデ			"	"
3194	4	"		"	須	壘	○			(6.0)				ヘラケズリ	ロクロナデ	羅糸盤	ロクロナデ	"	"
3195	5	"		"	"		○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3196	1	DNo 7 住状	"	土	壘 (環)		○		(14.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			307	"
3197	2	"		"	須	環	○		(14.1)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3198	3	"		"	"		○		(13.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3199	4	"		"	"		○			7.2				ロクロナデ	ロクロナデ	羅糸盤	ロクロナデ	"	"
3200	5	"		"	土	壘		○	(14.6)			ヨコナデ	ヨコナデ					"	"
3201	6	"		Pt	"	"		○	(15.2)			ヨコナデ	ナデ	ナデ	ナデ			"	"
3202	7	"		埴土	"	"		○		(9.6)				新築	ナデ	新築	ナデ	"	"
3203	1	DNo 8 住状	"	"	環		○		(18.4)			1.ガキ	1.ガキ・内堀	1.ガキ	1.ガキ・内堀			"	"
3204	2	"		"	"		○		(12.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3205	1	DNo 14 住状	床4	土	"		○		(13.6)	5.3	5.2	ロクロナデ	1.ガキ・内堀	ロクロナデ	1.ガキ・内堀	羅糸盤	1.ガキ・内堀	308	"
3206	2	"		1.層	"		○		(13.0)	(5.7)	5.3	ロクロナデ	1.ガキ・内堀	ロクロナデ	1.ガキ・内堀	羅糸再	1.ガキ・内堀	"	"
3207	3	"		"	"		○		(14.2)			ロクロナデ	1.ガキ・内堀	ロクロナデ	1.ガキ・内堀			487	"
3208	4	"		埴	"	"		○		(6.4)				ロクロナデ	1.ガキ・内堀	羅糸盤	1.ガキ・内堀	"	"
3209	5	"		"	須	"		○	(14.2)	5.2	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	羅糸盤	ロクロナデ	"	"
3210	6	DNo 14 住状	埴	須	環		○		(14.3)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3211	7	"		"	"		○		(14.1)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3212	8	"		"	"		○		(15.0)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3213	9	"		"	"		○		(15.5)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"

No	HNo	通稱名	階位	種類	形態	法 量				調 査 状 況						30版	写真	備 考		
						口徑	製徑	底径	器高	口 縁 部		調 査 部		証 据 部						
										外 面	内 面	外 面	内 面	切り離し	内 面					
3214	10	DWc 14 住状	壇	須	環	○		(15.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			308	487	
3215	11	"	"	"	"	○		(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3216	12	"	"	"	"	○		(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3217	13	"	"	"	"	○		(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3218	14	"	"	土	臺	○		(24.3)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3219	15	"	"	"	"	○		(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3220	16	"	"	"	"	○				7.6		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"	
3221	17	"	"	"	"	○				7.6		ロクロナデ	ナズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"		
3222	18	"	床1	須	臺	○		4.3		7.8	11.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	調査対象適合	ロクロナデ	"	"	
3223	19	"	床2	須	臺	○		(60.0)				ナダキ・ ロクロナデ	ロクロナデ					309	"	
3224	20	"	床6	"	"	○		(22.0)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
3225	21	"	1階	"	"	○		(17.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	カキメ	カキメ			"	"	
3226	22	"	壇	"	"	○				(10.0)				ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
3227	23	"	1階	"	"	○				(9.4)				ナデ	カキメ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
3228	24	"	壇	"	"	○?								ナデ	カキメ			"	"	
3229	25	"	"	"	"	○?								遊行タナキ	無文凸面			310	488	
3230	26	"	床8	"	"	○?								遊行タナキ	遊行アテ			309	"	
3231	27	"	床6	"	"	○?						ナダキ・ ロクロナデ	ナデ					"	"	
3232	28	"	床8	"	"	○?								遊行タナキ	遊行アテ			"	"	
3233	29	"	壇	"	"	○?								遊行タナキ	遊行アテ			310	"	
3234	1	DIVj 21 住状	床面	土	塚 (形)	○		14.1		7.4	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回割痕	ロクロナデ	311	489	調査書の地元不足?
3235	2	"	"	須	"	○		12.5		6.4	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回割痕	ロクロナデ	"	"	
3236	3	"	壇	"	"	○		(14.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3237	4	"	"	"	"	○		(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3238	1	BWk 12 住状	埋土	"	臺	○?								遊行タナキ	遊行アテ			"	"	
3239	1	AIXx 7 住状	"	"	環	○				7				ロクロナデ	ロクロナデ	回割痕	ロクロナデ	"	"	
3240	2	"	"	"	臺	○						ロクロナデ	ロクロナデ	遊行タナキ	ナデ			"	"	
3241	3	"	"	"	大臺	○		(36)				ナダキ・ ロクロナデ	ロクロナデ	ナダキ・ 遊行タナキ	背割線文			"	"	
3242	4	"	"	"	臺	○								ナデ	ロクロナデ			"	"	
3243	5	AIXx 7 住状	壇	須	大臺	○?								遊行タナキ	無文凸面アテ			"	"	
3244	6	"	"	"	"	○?								遊行タナキ	背割線アテ			"	"	
3245	1	CVx 18 建物	柱穴															312	317	

108	1	D1725土坑	埋土	縄文	林		○	(7.4)		(3.5)	4.0	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	不明・ナダ	ナダ	312	490	
3246	1	E111土坑	"	土	埋	○							ロクロナダ	ロクロナダ				"	"	
3247	1	D114土坑	"	"	"	○			(6)				ロクロナダ	ロクロナダ	回永無?	ロクロナダ		"	301	
3248	1	D119土坑-1	"	"	"	○				(4.9)			ロクロナダ	ロクロナダ				"	"	
3249	1	D119土坑-2	"	埋	埋	○							ロクロナダ	ロクロナダ				"	"	
3250	1	D111土坑	"	土	埋	○		(19.2)					ロクロナダ	ロクロナダ				"	"	
3251	1	D111土坑	"	"	埋	○		(15.2)					ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ				"	"
3252	1	E111土坑-1	埋	"	"	○		(13.80)	5.90	4.20			ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	313	490
3253	2	"	"	"	"	○		(15.00)	6.00	4.00			ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	"	"
3254	3	"	"	"	"	○		(12.70)					ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	"	"
3256	4	"	"	"	"	○			5.50				ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	"	"
3256	5	"	"	"	"	○			7.70				ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	"	"
3257	6	"	"	"	"	○			(6.30)				ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	"	"
3258	7	"	"	"	"	○			5.60				ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	"	"
3259	8	"	"	"	"	○		(12.00)					ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	"	"
3260	9	"	"	"	"	○							ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	"	"
3261	10	"	"	"	"	○			5.00				ロクロナダ	1ガキ・内黒	ロクロナダ	1ガキ・内黒	回永無	1ガキ・内黒	"	"
3262	11	"	"	"	埋	○		(13.80)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	"
3263	12	"	"	"	埋	○		(16.00)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	"
3264	13	"	"	"	"	○		(12.40)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	"
3265	14	"	"	"	"	○			6.0				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	"
3266	15	"	"	"	"	○		(14.20)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	"
3267	16	"	"	"	"	○		(14.70)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	"
3268	17	"	"	"	"	○			5.60				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	"
3269	18	"	"	"	"	○			5.50				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	"
3270	19	"	"	"	"	○			(5.60)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	"
3271	20	"	"	"	"	○			6.10				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	ロクロナダ	"	491
3272	21	"	"	"	埋	○		(8.00)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	回永無高台	ロクロナダ	"	"
3273	22	"	"	"	埋	○		(25.70)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	回永無高台	ロクロナダ	314
3274	23	"	"	"	"	○		(26.20)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	回永無高台	ロクロナダ	"
3275	24	E111土坑-1	埋	土	埋	○		(15.10)					ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	回永無高台	ロクロナダ	"
3276	25	"	"	"	"	○			(5.80)				ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	回永無高台	ロクロナダ	"
3277	26	"	"	"	"	○							ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	回永無高台	ロクロナダ	"
3278	27	"	"	"	埋	○							ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	回永無高台	ロクロナダ	"
3279	28	"	"	"	"	○?							ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	回永無	回永無高台	ロクロナダ	"

No	E3No	道橋名	階位	種類	形状	法				測				測				断面	写真	備考		
						口徑		深		幅		高		部		部					部	
						口徑	深	幅	高	外	内	外	内	外	内	外	内				外	内
3280	1	D14土坑	埋	土	環	○	(13.30)		5.20	4.20	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	315	481				
3281	2	"	"	"	"	○	(13.75)		(4.30)	4.10	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
3282	3	"	"	"	"	○	(14.40)		(8.70)	4.50	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
3283	4	"	"	"	"	○			(4.40)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				
3284	5	"	"	"	"	○	(12.90)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3285	6	"	"	"	"	○	(14.80)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3286	7	"	"	"	"	○	(16.30)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3287	8	"	"	"	"	○	(13.40)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3288	9	"	"	"	"	○	(12.40)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3289	10	"	"	"	"	○	(16.00)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3290	11	"	"	"	"	○	12.6				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3291	12	"	"	"	"	○	(13.40)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3292	13	"	"	"	"	○	(15.10)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3293	14	"	"	"	"	○	(11.80)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3294	15	"	"	"	"	○			7.0				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤・高台	ロクロナデ	"	"				
3295	16	"	"	"	"	○	(27.50)				ナデ	ナデ	ナデ	ナデ			"	"				
3296	17	"	"	"	"	○	(18.10)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	482				
3297	18	"	"	"	"	○	(13.30)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"				
3298	19	"	"	"	"	○			(5.00)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"				
3299	20	"	"	"	"	○			(9.00)				ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"				
3300	21	"	"	"	"	○			(10.40)				ナデ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"				
3301	22	"	"	"	"	○							ケズリ	ナデ			"	"				
3302	23	"	"	"	"	○							旅行タタキ	買海鏡アテ			316	"				
3303	24	"	"	"	"	○							旅行タタキ	旅行アテ			"	"				
3304	25	"	"	"	"	○							旅行タタキ	観文凸面			"	"				
3305	1	D14土坑	埋	土	環	○	(15.5)		(6.8)	4.3	ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風	回糸盤	1ガキ・内風	"	"				
3306	2	"	"	"	"	○	(15.0)				ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風			"	"				
3307	3	"	"	"	"	○	(14.8)				ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風			"	"				
3308	4	D14土坑	埋	土	環	○					ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風			"	"	蓋あり			
3309	5	"	"	"	"	○					ロクロナデ	1ガキ・内風	ロクロナデ	1ガキ・内風			"	"				
3310	6	"	"	"	"	○			(5.0)				ロクロナデ	1ガキ	回糸盤	1ガキ	"	"	元は内風?			
3311	7	"	"	"	"	○			5.4				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤	ロクロナデ	"	"				

3312	8	DⅡ×10土坑	土	坏	○	(15.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			316	492
3313	9	"	"	"	○			(7.0)				ミガキ?	ミガキ・内風	回糸類	ミガキ・内風	"	"
3314	10	"	"	"	○			(6.8)			割落	ロクロナデ	回糸類	ロクロナデ	"	"	"
3315	11	"	"	"	○						通行タタキ	ナデ			"	"	"
3316	12	"	"	"	○						通行タタキ	ナデ・布目			"	"	"
3317	13	"	"	"	○							ロクロナデ	ロクロナデ		"	"	"
3318	1	DⅡ×12土坑	"	"	○	14.0		5.2	5.2	ロクロナデ	ミガキ・内風	ロクロナデ	ミガキ・内風	回糸再	ミガキ・内風	317	493
3319	2	"	"	"	○	(14.6)				ロクロナデ	ミガキ・内風	ロクロナデ	ミガキ・内風		"	"	"
3320	3	"	"	"	○			(5.4)				ロクロナデ	ミガキ・内風	回糸再	ミガキ・内風	"	"
3321	4	"	"	"	○			(8.6)				ロクロナデ	ミガキ・内風	不明・船形混合	ミガキ・内風	"	"
3322	5	"	"	"	○	14.6		7.0	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸類	ロクロナデ	"	"
3323	6	"	"	"	○	(14.6)		(6.6)	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ロクロナデ	"	"
3324	7	"	"	"	○	15.0		6.0	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸類	ロクロナデ	"	"
3325	8	"	"	"	○	(12.2)		5.0	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸類	ロクロナデ	"	"
3326	9	"	"	"	○	(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3327	10	"	"	"	○	(16.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3328	11	"	"	"	○	(14.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3329	12	"	"	"	○	(15.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3330	13	"	"	"	○	(12.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3331	14	"	"	"	○			(6.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸再	ロクロナデ	"	"
3332	15	"	"	"	○			(5.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸類	ロクロナデ	"	"
3333	16	"	"	"	○	(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3334	17	"	"	"	○	(16.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3335	18	"	"	"	○	(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3336	19	"	"	"	○	(14.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3337	20	"	"	"	○	(21.0)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
3338	21	"	"	"	○			(4.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸類	ロクロナデ	"	"
3339	22	"	"	"	○			(8)				ロクロナデ	ロクロナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"
3340	23	"	"	"	○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3341	1	DⅡ×19土坑	土	塞	○							ミガキ	ナデ			318	494
3342	2	"	"	"	○							ナデ	ナデ			"	"
3343	1	DⅡ×2土坑-1	"	"	○					ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
3344	1	DⅡ×2土坑-2	"	"	○							ナデ	ナデ			"	"
3345	1	DⅡ×7土坑	"	"	○			(9.4)						回糸類	ミガキ・内風	"	"
3346	1	DⅡ×9土坑	"	"	○?	(17.60)				ミガキ・内風他	ミガキ	ミガキ	ミガキ			"	"

もとは内風か?

3379	6	DIV12土坑	埋	損	環	○			6.8			ロクロナデ	ロクロナデ	回条鋼	ロクロナデ	321	495	底面に墨書あり	
3380	7	"	"	"	"	○	(12.80)	5.50	4.00	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回条鋼	ロクロナデ	"	"		
3381	8	"	"	"	"			6.50				ロクロナデ	ロクロナデ	回条鋼	ロクロナデ	"	"		
3382	9	"	"	土	環	○				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"		
3383	10	"	"	"	"	○						ナデ	ナデ			"	"		
3384	11	"	"	"	"	○						ナデ	ナデ			"	"		
3385	12	"	"	"	"	○						カキメ	カキメ			"	"		
3386	13	"	"	"	"	○						ナデ	ナデ			"	"		
3387	14	"	"	"	"	○						ケズリ	ナデ			"	"		
3388	1	DIV12土坑	"	"	環	○	(14.80)			ロクロナデ	1ダキ・内環	ロクロナデ	1ダキ・内環			"	"		
3389	2	"	"	"	環	○	(13.80)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3390	3	"	"	"	環	○		(6.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	回条鋼	1ダキ	"	"		
3391	4	"	"	"	"	○	(10.60)	(5.30)		ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ハケメ	ナデ・ケズリ	ナデ	"	"		
3392	5	"	"	環	"	○		(5.20)				ロクロナデ	ロクロナデ	回条鋼	ロクロナデ	"	"		
3393	6	"	"	"	環	○						ナデ	カキメ			"	"		
3394	1	CV121土坑-1	"	土	"	○						ナデ	カキメ				322	496	
3395	2	"	"	"	"	○						ナデ	カキメ			"	"		
3396	1	CV122土坑-1	埋土	"	環	○		4.8						回条鋼	1ダキ・内環	"	"		
3397	2	"	埋	"	環	○						ナデ	カキメ			"	"		
3398	1	CV122土坑-2	埋土	土環	"	○						ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3399	1	CV122土坑-2	埋土	"	"	○						ナデ	ナデ			"	"		
3400	2	"	"	"	"	○						ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3401	1	CV123土坑	"	"	環	○		(4.70)				ロクロナデ	1ダキ・内環	回条鋼	1ダキ・内環	"	"		
3402	2	"	"	"	環	○		(5.40)				ロクロナデ	ロクロナデ	回条鋼	ロクロナデ	"	"		
3403	3	"	"	"	"	○				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3404	4	"	"	"	環	○		(9.10)				ハケメ	ナデ	木漏葺	ナデ	"	"		
3405	5	"	"	環	環	○				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3406	6	"	"	"	"	○				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3407	7	CV123土坑	埋	埋	環	○				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3408	1	BW17土坑	"	土	環	○		(5.8)				ロクロナデ	1ダキ・内環	回条鋼	1ダキ・内環	"	"		
3409	2	"	"	"	環	○				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3410	3	"	"	"	環	○						ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3411	4	"	"	"	"	○		(6.0)				ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	"	"		
3412	5	"	"	環	環	○				ロクロナデ	ロクロナデ					"	"		
3413	6	"	"	"	環	○	(16.8)			カキメ・ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		

No.	ENo.	道 橋 名	階 位	種 類	器 種	成 形	法 量				測 量 技 法						既 販	写 真	備 考
							口 径	厚 径	底 径	器 高	口 径 部		測 部		正 部				
											外 面	内 面	外 面	内 面	切 り 離 し	内 面			
3414	1	BWx8土坑	埋	土	環	○	14.00		5.20	5.00	ロクロナデ	1ガキ	ロクロナデ	1ガキ	回糸再	1ガキ	323	496	
3415	2	"	"	"	"	○			(5.70)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸再	ロクロナデ	"	"	
3416	1	CW11土坑	"	"	"	環	○						ナデ	ナデ			"	"	
3417	2	"	"	"	"	環	○						ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3418	3	"	"	"	"	"	○?								不明・ナデ	ナデ	"	"	
3419	1	AWy12土坑-2	"	"	"	"					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	497	
3420	1	AWy3土坑-1	埋	土	環	○	(12.6)				ロクロナデ	1ガキ・内果	ロクロナデ	1ガキ・内果			"	"	
3421	2	"	"	"	"	環	(12.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3422	3	"	"	"	"	環	(14.2)		6.8	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸無	ロクロナデ	"	"	
3423	4	"	"	"	"	環	(13.8)			4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸?	ロクロナデ	"	"	
3424	5	"	"	"	"	環	(14.1)		(6.0)	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸無	ロクロナデ	"	"	
3425	6	"	"	"	"	土 棘?	(12.8)				ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	ナデ			"	"	
3426	7	"	"	"	"	環	○						ロクロナデ	カキメ			"	"	
3427	1	BX10 13土坑	"	"	"	環	○	13.6		6.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸無?	ロクロナデ	"	"
3428	2	"	"	"	"	環	○	14.6		7.8	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回糸無	ロクロナデ	"	"
3429	3	"	"	"	"	環	○			(7.0)							"	"	
3430	4	"	"	"	"	"	○						ロクロナデ	ロクロナデ	糸切換高台	ロクロナデ	"	"	
3431	1	BX10 16土坑	"	"	"	環	○	(14.0)				ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
3432	2	"	"	"	"	環	○	(15.0)				ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
3433	1	D1=23井戸	"	"	"	土 環	○							ロクロナデ	1ガキ・内果			324	498
3434	2	"	"	"	"	環	○	(14.5)				ロクロナデ	1ガキ・内果	ロクロナデ	1ガキ・内果			"	"
3435	3	"	"	"	"	環	○			(5.4)			ロクロナデ	1ガキ・内果	回糸無	1ガキ・内果	"	"	
3436	4	"	"	"	"	環	○			(5.4)			ケズリ	1ガキ・内果	不明・1ガキ	1ガキ・内果	"	"	
3437	5	"	"	"	"	環	○	(14.5)				ロクロナデ	1ガキ・内果	ロクロナデ	1ガキ・内果			"	"
3438	6	"	"	"	"	環	○			(5.6)			ロクロナデ	1ガキ・内果	回糸無	1ガキ・内果	"	"	
3439	7	"	"	"	"	環	○			5.8				網織	回糸無	網織	"	"	
3440	8	D1=23井戸	埋	土	環	○				(5.2)			ロクロナデ	ロクロナデ	回糸無	ロクロナデ	"	"	
3441	9	"	"	"	"	環	○			(11.0)			ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
3442	10	"	"	"	"	環	○			(8.8)			ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	
3443	11	"	"	"	"	環	○	(16.4)				ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
3444	12	"	"	"	"	大環	○?	(48.2)				ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
3445	13	"	"	"	"	環	○?					ロクロナデ	ロクロナデ	並行タナキ	放射状ナデ		"	"	

No.	旧No.	造替名	階位	種類	器種	成形		法				製 備 性 法						図取	写真	備 考	
						口径	身径	口径	胴径	底径	器高	口 縁 部		内 面 部		底 部					
												外 面	内 面	外 面	内 面	切り廻し	内 面				
3481	7	D1x23溝	埋土	片鋼	筒	○				(4.0)					梅花文?	糊糊地	高台		331	502	
3482	8	"	"	"	筒	○		(14.0)		(12.8)	5.0				唐草文	紙文	高台		"	"	
3483	9	"	"	"	筒	○				7.6					青色の織布	紙文・糊糊			"	"	
3484	10	"	"	"	板			2.0		2.8	5.1								"	"	
3485	11	"	"	"	"					4.1									"	"	
3486	12	"	"	"	土 坏	○		(14.0)							ロクロナデ	ミガキ・内黒	ロクロナデ	ミガキ・内黒	"	"	
3487	13	"	"	"	"	○				6.6					ロクロナデ	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒	"	"	
3488	14	"	"	"	"	○		14.5		(5.6)	5.7	ロクロナデ	ミガキ・内黒	ロクロナデ	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒	"	"		
3489	15	"	"	"	"	○				(5.4)					ロクロナデ	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒	"	"	
3490	16	"	"	"	筒	○				(7.9)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
3491	17	"	"	"	筒	○				(7.8)					ロクロナデ	ロクロナデ	回承盤	ロクロナデ	"	"	
3492	18	"	"	"	土	○									ケズリ	ナデ			"	"	
3493	19	"	"	"	環 坏	○									ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3494	20	"	"	"	筒	○									ケズリ	ナデ			"	"	
3495	21	"	"	"	"	○									ケズリ	ナデ			"	"	
3496	22	"	"	"	"	○									ケズリ	ナデ			"	"	
3497	23	"	"	"	筒	○									ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3498	24	"	"	"	大筒	○									並行タタキ	並行アテ			"	"	
3499	25	"	"	"	"	○									並行タタキ	並行アテ			"	"	
3500	26	"	"	"	"										並行タタキ	不明瞭			"	"	
3501	1	D1x12溝	埋土	土 環	○			(24.8)				ロクロナデ	※コナデ	ケズリ	ロクロナデ				332	"	
3502	2	"	"	"	環	○						ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
3503	3	"	"	"	"	○		(9.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
3504	4	"	"	"	青磁	筒		10.4		3.8	5.7	青磁輪	青磁輪	青磁輪	青磁輪	高台・付蓋	青磁輪		"	"	
3505	5	"	"	"	瓦器	板		(16.1)				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				"	"	
3506	6	D1x12溝	埋土	土 環	○										※コナデ	合キテ			"	503	
3507	7	"	"	"	環	○									並行タタキ	内彫凸蓋7テ			"	"	
3508	8	"	"	"	大筒	○									並行タタキ	並行アテ・付目			"	"	
3509	9	"	"	"	"	○									並行タタキ	ナデ			"	"	
3510	10	"	"	"	"	○									並行タタキ	ナデ			"	"	
3511	1	D1x12溝	"	"	土 坏	○		(14.1)				ロクロナデ	ミガキ・内黒	ロクロナデ	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒		"	"	
3512	2	"	"	"	"	○				(5.3)					ロクロナデ	ミガキ・内黒	回承盤	ミガキ・内黒	"	"	

3513	3	D#e3 溝	埋土	土	環 (溝)	○												ロクロナデ	ロクロナデ	同永無	ロクロナデ	332	508
3514	4	"	"	"	"	○												ロクロナデ	ロクロナデ	同永無	ロクロナデ	"	"
3515	5	"	"	"	"	環	○											ロクロナデ ・ ハケメ	いざき・内渠			"	"
3516	6	"	"	"	"	環	○											ハケメ	ナデ			"	"
3517	7	"	"	"	"	○				(7.1)								ケズリ	ロクロナデ	不明・ナデ	ロクロナデ	"	"
3518	8	"	"	"	"	○												ケズリ	ロクロナデ			"	"
3519	9	"	"	"	環	○												ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3520	10	"	"	"	環	○	(16.3)											並行タタキ ・ ナデ	並行タタキ ・ ナデ			"	"
3521	11	"	"	"	"	○												ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3522	12	"	"	"	"	○												ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3523	13	"	"	"	"	環	○											ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3524	14	"	"	"	"	○												ケズリ	ナデ			"	"
3525	15	"	"	"	"		○?											並行タタキ	ナデ			"	"
3526	1	D#e10 溝跡	埋	環	環	○												ロクロナデ	ロクロナデ			333	508
3527	1	D#e14 溝跡	埋土	土	環	○												ナデ	ハケメ			"	"
3528	2	"	"	"	"	○												ナデ	ハケメ			"	"
3529	1	D#e17 溝跡	"	環	環	○				5.7								ロクロナデ	ロクロナデ	同永無		"	"
3530	2	"	"	"	土	環	○			4.0								ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ナデ	"	"
3531	3	"	"	"	"	跡																"	"
3532	1	D#p17 溝跡	"	"	環					(5.5)								ナデ	いざき・内渠	同永無	ナデ	"	"
3533	2	"	"	"	土	環				(5.2)								ロクロナデ	いざき・内渠	同永無	同永無	"	"
3534	3	"	"	"	環													ハケメ	いざき			"	"
3535	4	"	"	"	環													ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3536	5	"	"	"	環													並行タタキ	並行7+具渠			"	"
3537	1	D#m18 溝跡	"	土	環	○												ロクロナデ	いざき・内渠			334	504
3538	2	"	"	"	"	○				丸底								へらケズリ	いざき・内渠			"	"
3539	3	"	"	"	環 (溝)	○				5								ロクロナデ	ロクロナデ	同永無		"	"
3540	4	"	"	"	環	○												ロクロナデ	ロクロナデ	同永無		"	"
3541	5	"	"	"	土	環	○			(7.2)								へらナデ	へらナデ			"	"
3542	6	"	"	"	環	○												へらケズリ	へらナデ	不明		"	"
3543	7	"	"	"	土	○				(13.2)								ヨコナデ	ヨコナデ			"	"
3544	1	D#n18 溝跡	"	"	"	○	(21.0)											ヨコナデ	ヨコナデ	へらナデ	へらナデ	"	"
3545	1	D#p22 溝跡	"	"	環 (溝)					(6.6)								ロクロナデ	ロクロナデ	同永無		"	"
3546	1	D#r25 溝跡	"	環	環	○				(6.6)								ロクロナデ	ロクロナデ	同永無		"	"
3547	2	"	"	"	"	○												ロクロナデ	ロクロナデ			"	"

No.	EIN	道標名	同位	種類	形状	法				測				図版	写真	備考		
						口径	非口径	L径	別径	底径	器高	口部					底部	
												外面	内面				外面	内面
3548	3	DⅡ+25溝線	埋土	環	○			(14.1)							334	504		
3549	4	"	"	土	○			(13.7)										
3550	5	"	"	覆	○													
3551	6	"	"	"	○													
3552	7	"	"	"	○													
3553	8	"	"	"	○													
3554	9	"	"	須	○													
3555	10	"	"	"	○													
3556	11	"	"	"	○													
3557	1	DⅡ+25溝線	"	土	環	○		(14.1)								335		
3558	2	"	"	"	○			(13.5)										
3559	3	"	埋土	土	環	○		(6.0)										
3560	4	"	"	"	○			(5.2)										
3561	5	"	"	"	○			(13.0)										
3562	6	"	"	"	○			(7.0)										
3563	7	"	"	覆	○			(6.8)										
3564	8	"	"	"	○			6.6										
3565	9	"	"	"	○			(6.8)										
3566	10	"	"	環	○			(6.0)										
3567	11	"	"	覆	○													
3568	12	"	"	鉢	○													
3569	13	"	"	覆	○													
3570	14	"	"	"	○													
3571	15	"	"	"	○													
3572	16	"	"	"	○												305	
3573	17	"	"	"	○													
3574	18	"	"	"	○													
3575	19	"	"	"	○													
3576	20	"	"	須	環	○		(12.4)										
3577	21	"	"	"	○			(6.0)										
3578	22	"	"	"	○			(14.3)										
3579	23	"	"	"	○			(6.6)										

3580	24	DIVI 2 測線	埋土	須	坏	○			(4.8)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤		335	505
3581	25	"	"	"	"	○			(6.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤		"	"
3582	26	"	"	"	"	○					ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
3583	27	"	"	"	"	○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3584	28	"	"	"	"	○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3585	29	"	"	"	蓋	○					ロクロナデ	ロクロナデ					"	"
3586	30	"	"	"	覆	○	(13.2)					ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
3587	31	"	"	"	"	○			(10.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ナデ	"	"
3588	32	"	"	"	既	○											"	"
3589	33	"	"	"	覆	○											"	"
3590	34	"	"	"	"	○											336	"
3591	35	"	"	"	"	○											"	"
3592	36	"	"	"	"	○							並行ナタキ	青海線文			"	"
3593	37	"	"	"	"	○							並行ナタキ	放射状文			"	"
3594	38	"	"	"	"	○							並行ナタキ	同心円文			"	"
3595	39	"	"	"	"	○							並行ナタキ	放射状文			"	"
3596	40	"	"	"	"	○							並行ナタキ	無文			"	"
3597	41	"	"	"	"	○							覆格子文	無文			"	"
3598	42	"	"	"	"	○							覆格子文	無文			"	"
3599	43	"	"	"	"	○							並行ナタキ	無文			"	"
3600	1	DIVk 5 測線	"	土	"	○						#コナデ	#コナデ				"	"
3601	2	"	"	"	"	○						ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
3602	1	DIVI 8 測線 1	"	覆	坏	○	(13.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"
3603	2	"	"	"	"	○			(5.2)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤		"	"
3604	3	"	"	"	土	○			(6.0)				しガキ	しガキ	回糸盤		"	"
3605	4	"	"	"	覆	○							ロクロナデ 十字式	ロクロナデ			"	"
3606	5	"	"	"	須	○							ロクロナデ	ロクロナデ			506	"
3607	6	"	"	"	坏	○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3608	7	"	"	"	覆	○							格子ナタキ	ナデ			"	"
3609	1	CVx 14 測線	"	土	"	○							カキメ	ハケメ			"	"
3610	2	"	"	"	覆	坏	○					ロクロナデ	ロクロナデ				"	"
3611	3	"	"	"	覆	○							ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3612	1	CVk 3 測線	"	坏	○	○	(12.2)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		"	"
3613	1	AX II r 8 測線	"	土	坏	○			(5.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	回糸盤		337	"
3614	2	"	"	"	覆	○			(5.4)				ケズリ	ナデ	不明	ナデ	"	"

No.	区画	道橋名	層位	種類	形状	法				調 査 技 法				照	写真	備 考			
						ロクロ	非ロクロ	口 径		底 径	部 高	口 部					部		底 部
								口 径	調 径			外 面	内 面				外 面	内 面	
3615	3	AⅡV 8 調結		須	裏	○										337	506		
3616	4	"		"	"	○										"	"		
3617	5	"		"	"	○										"	"		
3618	6	"		"	"	○										"	"		
3619	7	"		"	"	○										"	"		
3620	1	AⅡV 8 調結		土	坏	○			4.5										
3621	2	"		"	坏 (須)	○	(13.4)				ロクロナデ	ロクロナデ							
3622	3	"		"	須	○			(6.4)										
3623	4	"		須	"	○													
3624	1	AⅡV 8 調		"	坏 (須)	○			(6.8)										
3625	2	AⅡV 8 調		土	坏 (須)	○	(11.4)				ナデ	ナデ							
3626	3	"		須	坏	○	(13.8)				ロクロナデ	ロクロナデ							
3627	4	"		"	"	○			(6.0)										
3628	5	"		土	裏	○			(8.5)										
3629	6	"		須	"	○	(19.8)				ロクロナデ	ロクロナデ							
3630	7	"		"	裏	○					"	"							
3631	8	"		"	裏	○			(10.7)										
3632	9	"		"	"	○													
3633	10	"		"	"	○													
3634	11	"		"	"	○													
3635	12	"		"	裏	○													
3636	1	AⅡV 22 調		土	裏	○			(5.4)										
3637	2	"		"	裏	○?			(5.4)										
3638	1	方形調		土	裏	○													
3639	2	"		須	"	○													
3640	3	"		"	"	○													
3641	4	"		"	"	○													
3642	5	"		"	裏	○													
3643	6	"		"	裏	○													
3644	7	"		"	"	○													
3645	8	"		"	裏	○													
3646	9	"		"	裏	○													

No	JISNo	通称名	単位	種類	形状	寸法				製法						図版	写真	備考		
						口径	外径	内径	高さ	口部		底部		底面						
										外面	内面	外面	内面	切り離し	内面					
3682	10	辺溝外		上	杯	○	(11.8)					口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径			340	508	
3683	11	"		"	"	○								口径ロナデ・底面	1.5mm・内径			"	"	
3684	12	"		"	"	○			(5.8)					口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3685	13	"		"	"	○	(12.0)					口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ・底面	1.5mm・内径			"	"	
3686	14	"		"	"	○	(16.4)					口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径			"	"	
3687	15	"		"	"	○	(14.4)		5.9	4.4		口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3688	16	"		"	"	○	(14.4)		(6.2)	4.3		口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3689	17	"		"	"	○	(14.6)					1.5mm・内径	1.5mm・内径	1.5mm・内径	1.5mm・内径			"	"	
3690	18	"		"	"	○			(6.0)			口径ロナデ・ケズリ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸・ヘタケズリ		"	"	
3691	19	"		"	"	○	(15.8)					口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径			"	"	
3692	20	"		"	"	○	(14.9)					口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径			"	"	
3693	21	"		"	"	○			(6.2)					口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3694	22	"		"	"	○			(6.4)					口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3695	23	"		"	"	○			(6.0)					口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3696	24	"		"	"	○	(14.9)		(4.4)	5.6		ナデ	ナデ	ナデ・ケズリ	ナデ	不明		"	"	
3697	25	"		"	"	○	(14.0)					口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径			"	"	
3698	26	"		"	"	○	(11.6)		(6.0)	(2.9)		1.5mm	1.5mm	1.5mm	1.5mm	不明		"	"	
3699	27	"		"	"	○	(12.8)					口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径			"	"	
3700	28	"		"	"	○	(13.8)					口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径			"	"	
3701	29	"		"	"	○	(13.2)		(6.7)	3.7		口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3702	30	"		"	"	○	(12.2)					口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ	1.5mm・内径			341		
3703	31	"		"	"	○			(7.0)					口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	509	
3704	32	"		"	"	○	(5.4)							口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3705	33	"		"	"	○			5.5					口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3706	34	"		"	"	○	(5.8)							口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3707	35	"		"	"	○	(5.4)							口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3708	36	"		"	"	○	(4.4)							口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3709	37	"		"	"	○			5.4					口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3710	38	"		"	"	○			5.0					口径ロナデ・底面	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3711	39	"		"	"	○	(5.4)							口径ロナデ	1.5mm・内径	図糸無		"	"	
3712	40	"		"	"	○						口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ・底面	1.5mm・内径			"	"	
3713	41	"		"	"	○						口径ロナデ	1.5mm・内径	口径ロナデ・底面	1.5mm・内径			"	"	

3714	42	遊樂外			土	杯	○											ロクロナデ	1ダナ・内張	同床組			341	509				
3715	43	"			"	遊樂	○												1ダナ・内張	同床組・高台			"	"				
3716	44	"			"	"	○												ロクロナデ	1ダナ・内張	同床組・高台			"	"			
3717	45	"			"	"	○												ロクロナデ	1ダナ・内張	同床組・高台			"	"			
3718	46	"			"	"	○												ロクロナデ	1ダナ・内張	同床組・高台			"	"			
3719	47	"			"	"	○												ロクロナデ	1ダナ・内張	同床組・高台			"	"			
3720	48	"			"	"	○	13.4											ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明 ヘラツテ		342			
3721	49	"			"	"	○	(15.8)											ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同床組		"	"		
3722	50	"			"	"	○	(12.4)											ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"		
3723	51	"			"	"	○													ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"		
3724	52	"			"	"	○													ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"		
3725	53	"			"	"	○													ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"		
3726	54	"			"	"	○													ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"		
3727	55	"			"	"	○													ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"		
3728	56	"			"	"	○													ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"		
3729	57	"			"	遊	○	(12.8)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3730	58	"			"	遊 (26)	○														ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"	
3731	59	"			"	"	○	(8.8)												ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ			"	510	
3732	60	"			"	"	○	(12.5)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同床組		"	"	
3733	61	"			"	"	○	(16.2)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3734	62	"			"	"	○														ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"	
3735	63	"			"	"	○														ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"	
3736	64	"			"	"	○														ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"	
3737	65	"			"	"	○	(14.4)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3738	66	"			"	"	○	(13.4)												ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	同床組		"	"	
3739	67	"			"	"	○	(15.0)													ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3740	68	"			"	"	○	(13.4)													ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3741	69	"			"	"	○	(14.8)													ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3742	70	"			"	"	○	(15.2)													ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"
3743	71	"			"	"	○														ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"	
3744	72	"			"	"	○														ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			343		
3745	73	"			"	"	○														ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	同床組			"	"	
3746	74	"			"	"	○	11.2													ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"	
3747	75	"			"	"	○														ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"	
3748	76	"			"	"	○														ロクロナデ	ロクロナデ	同床組			"	"	

№	区№	造橋名	部位	種類	基礎	成 形	法 量				調 整 技 法				図版	写真	備 考		
							口 径		深 度		調 整		部 面					部 面	
							(m)	(m)	(m)	(m)	外 面	内 面	外 面	内 面				切り廻し	内 面
3749	77	造橋外		土	深 (深)	○										343	510		
3750	78	"		"	"	○										"	"		
3751	79	"		"	"	○										"	"		
3752	80	"		"	"	○										"	"		
3753	81	"		"	"	○										"	"		
3754	82	"		"	"	○										"	"		
3755	83	"		"	"	○										"	"		
3756	84	"		"	"	○										"	"		
3757	85	"		"	"	○										"	"		
3758	86	"		"	深 深	○	(13.8)			5.7						"	"		
3759	87	"		"	深 深	○				5.6						"	511		
3760	88	"		風 環	○		(16.0)									344	"		
3761	89	"		"	"	○	(14.0)									"	"		
3762	90	"		"	"	○	(15.2)									"	"		
3763	91	"		"	"	○										"	"		
3764	92	"		"	"	○										"	"		
3765	93	"		"	"	○										"	"		
3766	94	"		"	"	○										"	"		
3767	95	"		"	"	○										"	"		
3768	96	"		"	"	○										"	"		
3769	97	"		"	"	○										"	"		
3770	98	"		"	"	○										"	"		
3771	99	"		"	"	○										"	"		
3772	100	"		"	"	○										"	"		
3773	101	"		"	"	○										"	"		
3774	102	"		"	"	○										"	"		
3775	103	"		"	"	○										"	"		
3776	104	"		"	"	○	(15.2)			7.2	4.4					"	"		
3777	105	"		"	"	○	(15.2)									"	"		
3778	106	"		"	"	○										"	"		
3779	107	"		"	"	○										"	"		
3780	108	"		"	"	○										"	"		

No.	FNo.	造橋名	階位	種類	器種	成 形		法 規 値				測 量 技 法						R/R	写真	備 考		
						口 径	非口径	口 径	鋼 径	鋼 径	鋼 径	測 量 部		測 量 部		測 量 部						
												外 面	内 面	外 面	内 面	切り差し	内 面					
3816	144	遊橋外		環	88F	○					(6.5)				ロクロナデ	ロクロナデ	四糸巻・高台		346	513		
3817	145	"	"	"	"	○					(7.4)				ロクロナデ	ロクロナデ	四糸巻・高台		"	"		
3818	146	"	"	"	"	○					(7.6)				ロクロナデ	ロクロナデ	四糸巻・高台		"	"		
3819	147	"	"	土	環	○					(25.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			347	"	
3820	148	"	"	"	"	○					(20.4)			ロクロナデ	ヘラナデ	ロクロナデ	ヘラナデ			"	"	
3821	149	"	"	"	"	○								ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			"	"	
3822	150	"	"	"	"	○					(10.8)			ロクロナデ	ヘラナデ	ロクロナデ	ヘラナデ			"	"	
3823	151	"	"	土	"	○					(12.6)			ロクロナデ	ヘラナデ	ロクロナデ	ヘラナデ			"	"	
3824	152	"	"	"	"	○					(10.0)					ヘラケズリ	ロクロナデ	不明・ナデ		"	"	
3825	153	"	"	"	"	○					7.0				ロクロナデ	ヘラナデ	四糸巻		"	"		
3826	154	"	"	"	"	○					7.3				ヘラケズリ	ヘラナデ	四糸巻		"	"		
3827	155	"	"	"	"	○					(9.4)				ヘラケズリ	ヘラケズリ	不明・ナデ		"	"		
3828	156	"	"	"	"	○					(7.0)				ロクロナデ	ロクロナデ	四糸巻		"	"		
3829	157	"	"	編	"	○					(35.0)			ロクロナデ	ヘラナデ					"	"	
3830	158	"	"	"	"	○					(34.8)			ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
3831	159	"	"	鉢	"	○					(9.6)					ヘラケズリ	1.5ヶ+内巻	不明・ナデ		348	"	
3832	160	"	"	籠	"	○					(16.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3833	161	"	"	"	"	○					(8.0)				ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ		"	"		
3834	162	"	"	"	"	○					(13.0)			遊行ナデキ	ハケメ	ハケメ	不明・ナデ		"	"		
3835	163	"	"	"	"	○					(24.0)			ロクロナデ	ヘラナデ	遊行ナデキ	カキメ			"	"	
3836	164	"	"	"	"	○					(10.6)			ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			"	"	
3837	165	"	"	"	"	○					(16.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3838	166	"	"	"	"	○					(9.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			"	"	
3839	167	"	"	"	"	○					(24.0)			ロクロナデ	ヘラナデ	ロクロナデ	ヘラナデ			"	"	
3840	168	"	"	"	"	○					(16.0)			ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			"	514	
3841	169	"	"	"	"	○					(23.2)			カキメ	カキメ	ヘラケズリ	ヘラナデ			"	"	
3842	170	"	"	"	"	○									カキメ	ヘラケズリ	ヘラナデ			349	"	
3843	171	"	"	"	"	○					(24.8)			ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			"	"	
3844	172	"	"	"	"	○					(22.0)			ロクロナデ	ヘラナデ	ロクロナデ	ヘラナデ			"	"	
3845	173	"	"	"	"	○					(16.8)			ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
3846	174	"	"	"	"	○					(6.0)					ヘラナデ	ヘラナデ	不明・編織文		"	"	
3847	175	"	"	"	"	○					(9.0)					カキメ	ヘラナデ	不明・編織文		"	"	

No.	EINo.	造 橋 名	部 位	種 類	形 状	成 形	法 量				調 査 技 法					図 版	写 真	備 考		
							口 径	鋼 径	底 径	器 高	口 縁 部		胴 部		底 部					
											外 面	内 面	外 面	内 面	切 り 離 し				内 面	
3883	211	道橋外		土	井	○	(16.0)					ヨコナデ	1.5m・内面	ヘラナデ・ヘラナズリ	1.5m・内面			351	515	
3884	212	"		"	裏	○	(15.0)					ヨコナデ	ヨコナデ					"	516	
3885	213	"		"	井	○	(17.4)					ヨコナデ	1.5m・内面	ヘラナデ	1.5m・内面			"	"	
3886	214	"		"	蓋	○	(15.1)					ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			"	"	
3887	215	"		"	井	○	(17.4)					ロクロナデ	1.5m・内面	ロクロナデ	1.5m・内面			"	"	
3888	216	"		"	蓋	○						ヨコナデ	ロクロナデ	ヘラナデ・ヘラナズリ	ヘラナデ			"	"	
3889	217	"		"	"	○	15.6					ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ・ヘラナズリ	ヘラナデ			"	"	
3890	218	"		鋼	蓋	○												"	"	
3891	219	"		"	"	○												"	"	
3892	220	"		"	"	○												"	"	
3893	221	"		"	"	○	(17.0)					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			352	"	
3894	222	"		"	"	○	(22.0)					並行タタキ・ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
3895	223	"		"	"	○	(18.0)					並行タタキ・ロクロナデ	ロクロナデ	並行タタキ・ロクロナデ	ロクロナデ			"	"	
3896	224	"		"	"	○	(17.5)					ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
3897	225	"		"	"	○	(17.5)					ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
3898	226	"		"	"	○	(15.5)					ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
3899	227	"		"	蓋	○		(10.0)						ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	不明・ナデ・高台		"	"	
3900	228	"		"	蓋	○	(24.0)					ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	
3901	229	"		"	"	○						ロクロナデ	ロクロナデ	並行タタキ	放射状アテ			"	"	
3902	230	"		"	"	○						ロクロナデ	ロクロナデ	並行タタキ	背海壁文			"	"	
3903	231	"		"	"	○		(12.0)						並行タタキ	ヘラナデ	不明・ナデ		353	"	
3904	232	"		"	"	○		(14.0)						ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ		"	"	
3905	233	"		"	"	○		(11.0)						並行タタキ	ヘラナデ	不明・ナデ		"	"	
3906	234	"		"	"	○		(9.0)						ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ		"	"	
3907	235	"		"	"	○		(13.0)						ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ		"	"	
3908	236	"		"	"	○		(23.2)				ロクロナデ	ロクロナデ					"	517	
3909	237	"		"	"	○		(14.4)						ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・ナデ		"	"	
3910	238	"		"	"	○		(20.0)						ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・ナズリ		"	"	
3911	239	"		"	井	○	(22.4)					ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ			"	"	
3912	240	"		"	蓋	○		(8.4)						ロクロナデ	ロクロナデ	不明・高台		"	"	
3913	241	"		"	"	○		(12.4)						ヘラケズリ	ヘラナデ	不明・高台		"	"	
3914	242	"		"	蓋	○						ロクロナデ	ロクロナデ					"	"	

No.	日誌	造 冊 名	刷 位	種 別	部 種	成 形		装 綴				調 整 法					250	写真	備 考		
						口タロ	非口タロ	L	C	C	C	C	L 綴 部		綴 部					底 部	
													外 面	内 面	外 面	内 面				切 り 離 し	内 面
3950	278	込綴外				○											357	519			
3951	279	"				○												"	"		
3952	280	"				○												"	520		
3953	281	"				○												"	519		
3954	282	"				○												358	520		
3955	283	"				○												"	"		
3956	284	"				○												"	"		
3957	285	"				○												"	"		
3958	286	"				○												"	"		
3959	287	"				○												"	"		
3960	288	"				○												359	"		
3961	289	"				○												"	"		
3962	290	"				○												"	"		
3963	291	"				○												"	521		
3964	292	"				○												"	"		
3965	293	"				○												"	"		
3966	294	"				○												"	"		
3967	295	"				○												"	"		
3968	296	"				○												"	"		
3969	297	"				○												"	"		
3970	298	"				○												"	"		
3971	299	"				○												"	"		
3972	300	"				○												"	"		
3973	301	"				○												"	"		
3974	302	"				○												360	"		
3975	303	"				○												"	"		
3976	304	"				○												"	"		
3977	305	"				○												"	"		
3978	306	"				○												"	522		
3979	307	"				○												"	"		
3980	308	"				○												"	"		
3981	309	"				○												"	"		

No.	EIN.	造 構 名	階 位	種 類	形 種	成 形		法 量				調 査 技 法						取 限	写 真	備 考		
						口 径	厚 さ	口 径	鋼 径	鋼 径	鋼 径	口 縁 部		胴 部		底 部						
												外 面	内 面	外 面	内 面	切 り 廻 し	内 面					
4017	6	DNo18 高 噴	埋 土	土 質		○								ナデ	ナデ					364	507	
4018	7	"	"	硬 "						(14.4)						ケズリ	ナデ	不明・ナデ	ナデ	"	"	

第6表 石器一覽表

JENa	Na	遺構名 (グリット名)	層位	器種	石質	石材産地	法				掲載 図版	写真 図版
							全長 _{cm}	最大幅 _{cm}	最大厚 _{cm}	重さ _g		
44	1	BXa 18 住		石鏃	硬質泥岩	奥羽山地新第三系中新統	2.95	1.5	0.3	1.75	6	303
127	2	EIIa~b 14~16	I~II層	"	"	"	3.4	1.4	0.4	1.8	"	"
45	3	BWq 1		"	"	"	4.5	1.9	0.7	6.95	"	"
5	4	DIVc 14 住		"	粘板岩	仙入~夏油川・古生界	3.2	1.5	0.6	1.6	"	"
2	5	BVw 7		"	流紋岩	奥羽山地・中新統	2.4	1.6	0.3	1.2	"	"
43	6	AXy 22 住		"	硬質泥岩	奥羽山地新第三系中新統	1.6	1.2	0.2	0.25	"	"
105	7	DIIx 14 住	北西埋土	"	凝灰質泥岩	"	2.2	1.8	0.5	2.15	"	"
6	8	CVg 10 住		"	流紋岩	奥羽山地・中新統	2.9	2.0	0.45	1.65	"	"
46	9	DIIs 8 グリット	III層下位	"	珪質礫砂・凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統	4.4	1.4	0.4	2.5	"	"
96	10	DIIv 12 グリット		"	硬質泥岩	"	3.0	1.6	0.3	0.7	"	"
95	11	DIIx 13 グリット		"	"	"	2.7	1.7	0.3	0.95	"	"
14	12	水田		"	黒曜石	産地時代不詳	2.1	1.6	0.25	0.5	"	"
99	13	AXt 17 溝		"	チャート	北上山地 古生界	2.7	1.2	0.5	1.15	"	"
9	14	DIVm 7 住	ビット 6	"	玉ずい	産地時代不詳	2.7	0.8	0.3	0.65	"	"
110	15	DIIIr 15 溝	南端	石匙	凝灰質泥岩	奥羽山地新第三系中新統	3.5	5.6	0.7	13.1	"	"
106	16	DIIx 14 住	北西埋土	"	"	"	5.8	2.4	0.9	10.9	"	"
94	17	DIVi 7 住	埋土	石鏃	珪質礫砂・凝灰岩	"	7.4	4.2	1.65	47.2	"	"
47	18	DIIu 22 グリット	III層上面	"	硬質泥岩	"	7.1	3.6	1.4	37.6	7	"
48	19	DIIw 8 グリット	I層	"	珪質礫砂・凝灰岩	"	5.2	3.5	1.0	17.4	"	"
98	20	CVf 2 住	Q ₂ 埋土上部	"	凝灰質泥岩	"	6.5	3.5	0.9	15.5	"	"
111	21	DIIIQ 17 古墳	主体部埋土	搔器	鉄石英	奥羽山地駒岳山麓	3.7	1.2	0.6	2.5	"	"
107	22	DIIx 14 住	北西埋土	"	細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統	3.45	5.3	0.65	11.6	"	"
108	23	DIIx 14 住	南西埋土	"	凝灰質泥岩	"	3.25	4.1	0.95	19.15	"	"
114	24	EIIa-b 14~16	I~II層	"	"	"	2.4	5.2	1.2	13.75	"	"
120	25	粗綱		"	"	"	4.2	3.9	1.1	19.95	"	"
54	26	DIVc-9 住		"	硬質泥岩	"	2.6	2.7	0.5	4.8	"	"
115	27	EIIa-b 14~16	I~II層	"	珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統	2.5	4.8	1.3	14.95	8	"
59	28	遺構外		"	粘板岩	夏油川 古生界	3.8	4.5	0.9	20.4	"	"
112	29	EIIa-b 14~16	I~II層	"	凝灰質泥岩	奥羽山地新第三系中新統	5.0	4.5	1.1	34.5	"	"
119	30	DIIIpQ 18 付近	古墳検出中II層中	"	珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統	3.9	3.1	1.2	11.95	"	"
7	31	DIVi 4 住		"	玉ずい	産地時代不詳	2.1	2.5	0.4	2.2	"	"

旧№	№	遺構名 (グリット名)	層位	器種	石質	石材産地	法 量				掲載 図版	写真 図版
							全長 _{cm}	最大幅 _{cm}	最大厚 _{cm}	重さ _g		
113	32	EⅡa・b14～16	I～II層	"	凝灰質泥岩	奥羽山地新第三系中新統	3.6	2.2	1.0	6.0	8	303
103	33	DⅡx6住	カマド・左袖・笑口部	"	珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統	2.2	2.2	0.5	2.05	"	"
8	34	DⅡV18㊦溝	"	掻器	硬質泥岩	奥羽山地 中新統	3.6	4.2	0.7	13.85	"	"
1	35	CVⅡa17住	Q ₂ 埋土	"	珪質凝灰岩	"	3.0	2.9	1.2	4.3	"	"
102	36	DⅡv7住	東側中央	"	凝灰質泥岩	奥羽山地新第三系中新統	2.2	3.1	0.45	3.1	"	"
97	37	DⅡs8グリット	I層	"	珪質極細粒凝灰岩	"	3.0	3.1	0.75	6.65	"	"
19	38	岩崎台地公園	"	"	硬質泥岩	奥羽山地 中新統	4.2	6.3	2.2	43.1	9	304
50	39	DⅡr8グリット	III層	削器	"	奥羽山地第三系中新統	7.2	3.9	1.6	34.25	"	"
58	40	一括	"	"	珪質極細粒凝灰岩	"	6.2	3.7	1.1	23.65	"	"
57	41	粗掘	"	"	硬質泥岩	"	7.5	3.3	1.3	32.7	"	"
118	42	DⅢQR17、18	古墳検出中(II層中)	"	凝灰質泥岩	"	5.4	4.0	0.7	15.47	"	"
51	43	DⅡr8グリット	III層中	"	硬質泥岩	"	3.3	3.4	0.7	8.35	"	"
11	44	DⅢr25溝	"	"	"	奥羽山地 中新統	4.5	2.3	0.7	7.95	"	"
52	45	III層グリット	I層下位	"	粘板岩	夏油川 古生界	10.0	5.5	2.3	144.0	10	"
116	46	DⅢp17	古墳付近遺構検出中	"	凝灰質泥岩	奥羽山地新第三系中新統	5.3	2.3	1.6	12.95	"	"
17	47	不明	"	"	硬質泥岩	奥羽山地 中新統	3.2	2.4	0.6	4.0	"	"
53	48	DⅢq9グリット	I層(表土下60cm)	"	"	奥羽山地新第三系中新統	7.8	4.4	2.5	85.0	"	"
56	49	粗掘	"	使用痕のある跡	珪質泥岩	"	3.3	1.6	0.7	4.75	"	"
3	50	CVⅡa17住	Q ₂ 埋土	"	"	奥羽山地・中新統	6.0	5.7	1.5	43.95	"	"
117	51	DⅢp17	古墳付近遺構検出中	"	"	奥羽山地新第三系中新統	6.1	4.1	1.2	33.85	11	"
4	52	DⅢk25住	ベルト断面	"	硬質泥岩	奥羽山地 中新統	6.3	4.7	1.2	34.05	"	"
18	53	水田部排水溝	"	"	"	"	5.5	4.4	3.5	67.5	"	"
109	54	DⅡx14住	北東埋土	"	凝灰質泥岩	奥羽山地新第三系中新統	2.5	2.8	1.0	5.85	"	"
55	55	DⅡV(M24)e10-d11	付近	"	淡褐色細粒凝灰岩	"	4.3	3.6	1.8	24.85	"	"
129	56	DⅢv10古墳	主体部埋土	"	"	"	2.1	3.8	1.1	8.97	"	"
16	57	西側粗掘	"	"	黒曜石	産地時代不詳	1.9	2.0	0.3	1.15	"	"
31	58	DⅡVn4住	床直上	コア	流紋岩	奥羽山地 中新統	6.1	7.7	5.3	309.0	12	"
49	59	AXⅡs18溝	埋土一括	"	珪質極細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統	6.9	8.4	2.1	99.5	"	"
63	60	T ₁	II層	"	"	"	6.6	6.1	5.0	132.5	"	305
64	61	粗掘	"	"	粘板岩	夏油川 古生界	5.2	6.0	5.8	178.0	"	"
62	62	T ₂	II層	"	硬質泥岩	奥羽山地新第三系中新統	8.5	9.8	5.2	492.0	13	"
104	63	DⅡx6住	南西側列・東隣埋土	"	凝灰質泥岩	"	10.0	8.7	2.0	168.0	"	"
60	64	粗掘	"	石斧	淡褐色細粒凝灰岩	"	5.7	4.1	1.1	30.5	"	"

41	65	不明		石炭	千枚岩	仙人付近古生界	20.5	10.1	2.0	453.0	14	305
40	66	"		"	"	"	16.3	9.6	2.0	310.2	"	"
61	67	DⅢp 14 住		石炭	粘板岩(ホルソフェルス)	夏油川 古生界	15.3	9.9	3.1	463.0	"	"
87	68	DⅡt 4 グリット	I 層下位～重層上面	両刃礫器	"	"	13.3	11.4	5.7	1032.0	"	"
35	69	DⅢm 22 土坑		片刃礫器	粘板岩	仙人～夏油川・古生界	14.2	5.4	2.5	253.0	"	306
39	70	不明		たたき石	両輝石安山岩	奥羽山地 鮮新統	17.9	9.1	4.6	1180.0	15	"
89	71	BⅩⅢ 1 住		くばみ石	安山岩溶岩	駒岳 第四系	11.5	11.6	6.2	640.0	"	"
85	72	DⅣb 12 住		"	"	"	5.9	9.1	2.2	141.5	"	"
88	73	DⅡs 7 住-2	Q ₁ 埋土中位	"	輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統	22.9	7.3	5.4	1052.0	"	"
84	74	DⅢ区東西溝	南側表採	"	淡緑色砂質凝灰岩	"	12.4	12.0	2.9	680.0	"	"
24	75	CⅤp 4 住	カマド付近床面	礫石	両輝石安山岩	奥羽山地・鮮新統	13.1	12.3	7.0	1552.0	16	"
28	76	DⅣm 7 住		"	"	"	8.8	8.0	7.1	725.0	"	307
27	77	CⅤc 3 住	Q ₁ 床面直上	"	"	"	11.3	11.0	7.1	1240.0	"	"
34	78	EⅢi 2 住	床面	"	"	"	8.6	8.0	7.7	705.0	"	"
37	79	DⅣm 10 土坑部		"	"	"	12.1	8.7	5.4	785.0	"	"
33	80	DⅢm 22 土坑		"	"	"	17.9	12.25	4.5	1335.0	17	"
21	81	DⅣo 20 住		"	"	"	26.0	23.0	5.3	3965.0	"	"
26	82	CⅤp 4 住	カマド付近床面 Q ₁	"	"	"	27.1	23.0	6.0	6000.0	"	"
90	83	DⅡs 7 住-2	カマド北袖北端埋土中位	"	デイサイト質礫凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統	19.8	20.6	3.7	1380.0	18	308
92	84	DⅣb 12 位	カマド袖	"	輝石安山岩	"	18.1	17.7	4.3	2212.0	"	"
12	85	EⅢi 4 土坑		石棒	硬質泥岩	奥羽山地・中新統	8.4	1.9	0.6	12.05	"	"
29,30	86	DⅣh 12 住		"	桂化木	"	26.0	5.2	2.9	605.0	"	"
65	87	BⅩⅢb 12 住	No14	"	粘板岩	夏油川 古生界	27.4	3.0	1.8	199.5	"	"
67	88	粗礫		石製品	淡緑色細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統	5.8	5.6	1.7	70.0	"	"
32	89	DⅣj 1 住		桂化木	桂化木	奥羽山地・中新統	13.1	3.1	1.4	40.05	19	"
36	90	DⅣm 7 溝		"	"	"	9.2	5.45	3.0	244.0	"	"
22	91	BⅤⅦv 12 住		"	"	"	14.5	5.5	1.7	175.0	"	"
76	92	DⅡs 7 住-2	カマド前底部埋土中位	磁石	斜長石流紋岩	帯石(帯戸前川下流) 新第三系中新統	7.7	3.4	4.0	133.0	76	528
77	93	DⅡs 7 住-2	Q ₁ 埋土中位	"	"	"	14.6	8.0	2.8	263.5	"	"
80	94	DⅡt 12 住埋土		"	"	"	5.9	4.7	3.6	162.0	108	"
86	95	DⅡt 12 住	No8	"	輝石安山岩	奥羽山地新第三系鮮新統	9.5	7.9	3.1	319.5	"	"
79	96	DⅡt 8-2 住	床面 No2	"	斜長流紋岩	帯石(帯戸前川下流) 新第三系中新統	12.3	5.0	4.1	231.0	84	"
78	97	DⅡt 9 住	床面 No1	"	"	"	9.1	6.7	4.2	421.0	"	"
123	98	DⅡx 9 住	ベルト内一括	"	細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統	10.0	4.8	3.0	149.0	89	"
124	99	DⅡx 6 住	No21	"	デイサイト	奥羽山地新第三系	7.0	6.2	4.0	216.0	66	"

IDNo	No	造 構 名 (グリット名)	層 位	器 種	石 質	石 材 産 地	法 量			掲載 図版	写真 図版	
							全長 _{cm}	最大幅 _{cm}	最大厚 _{cm}			重さ _g
126	100	DIIx12住		砥石	デイスait	奥羽山地-本郷 新第三系中新統	11.9	5.3	3.3	280.0	110	526
81	101	DIIIp12住	北東コーナー埋土	"	斜長石流紋岩	奥羽山地(東川) 新第三系中新統	16.1	6.7	6.2	710.0	148	"
82	102	DIIIp15住		"	"	"	15.2	8.0	2.5	354.0	159	527
83	103	DIVb12住		"	粘板岩	夏油川 古生界	11.1	6.0	4.0	430.0	222	"
25	104	CVIp4住		"	流紋岩	奥羽山地・中新統	18.6	8.8	8.4	1665.0	239	"
10	105	DIVr4住	Q ₁ 埋土	"	"	"	3.6	2.3	1.6	14.7	185	"
23	106	CVIe24住		"	"	"	11.5	7.8	4.8	360.5	242	"
20	107	AXIr24住	床	"	"	"	14.7	9.8	7.3	1530.0	274	528
68	108	AXIy3住	P ₁ 埋土	"	斜長石流紋岩	奥羽山地(東川) 新第三系中新統	18.2	9.1	5.9	1230.0	275	527
69	109	AXIy6墓墳	No1	"	"	"	7.5	5.8	2.1	133.5	326	528
70	110	AXIy6墓墳	No2	"	"	"	17.6	3.3	2.6	232.5	"	"
73	111	BXIa18住	カマド右側貯蔵穴埋土	"	"	"	4.0	3.6	1.6	40.0	295	"
74	112	BXIa18住	埋土ベルト	"	"	"	8.1	3.0	2.4	64.0	"	"
66	113	BXIb12住	北東部埋土	石製品	"	"	4.4	4.3	0.6	18.2	287	"
75	114	BXIb15住	カマド右側貯蔵穴	砥石	"	"	11.5	6.6	6.0	635.0	292	"
100	115	AXIx2住		"	細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統	6.9	4.4	2.4	98.0	305	"
71	116	AXIx2住	No4	"	淡緑色細粒凝灰岩	"	9.6	5.9	4.15	283.0	"	"
72	117	AXIx2住	No5	"	斜長石流紋岩	奥羽山地(東川) 新第三系中新統	14.0	5.9	3.0	316.0	"	"
125	118	DIIIr17古墳	北西埋土周溝	"	凝灰岩	奥羽山地(東川)一和 夏油川 古生界	6.8	4.6	1.7	94.5	27	316
128	119	DIIIp12古墳	主体部遺物	自然産	"	"	5.2	7.7	2.1	85.0	23	315
15	120	不明		砥石	硬質泥岩	奥羽山地 中新統	14.9	7.1	4.7	620.0	349	528
38	121	伍大板I	アスバラ粗掘	"	粒紋岩	"	16.6	5.7	1.6	202.0	"	529
13	122	粗掘		"	"	"	3.2	2.2	1.2	10.9	"	"
101	123	粗掘穴の下		"	デイスait	奥羽山地-本郷 新第三系中新統	5.8	4.1	1.5	54.6	"	"
121	124	粗掘		"	細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統	4.7	2.6	0.9	9.15	"	"
42	125	BVIv12住	床面上部	石帯	半花崗岩	北上山地 中生界	4.6	2.8	0.7	17.1	253	"
126	126	CVIp7住	掘方中よりカマド付近	砥石	"	"	4.6	1.8	1.8	15.28	238	"

第7表 黒曜石一覽表

№	出土地区	層位	器種	法 量 (mm, g)				自然面の位置						鑑定 の有無	実測 図版	写真 図版	備 考	
				縦位	横位	最大厚	最大幅	重量	打面	右側縁	左側縁	末端部	背面					腹面
1	DⅢu 10 古墳	周濠東部埋土	剥片	3.0	2.7	0.5		4.6	○	○	-	-	-	-	有	34	318	
2	DⅢp 12 古墳	主体部東側溝内	搔器	2.3	3.7	0.7		6.0	○	○	-	○	-	-	"	"	"	
3	DⅢp 12 古墳	主体部埋土中	剥片	2.8	3.3	0.8		5.9	-	○	-	○	-	-	"	"	"	
4	DⅢn 15 古墳	主体部南東壁際	円形搔器	2.2	2.2	1.3		6.6	-	-	○	-	○	-	"	"	"	
5	DⅢn 15 古墳	主体部 №13	搔器	3.4	3.7	0.6		7.5	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
6	DⅢn 15 古墳	主体部 №2	剥片	3.1	4.1	0.7		9.4	○	-	-	-	-	-	"	"	"	
7	DⅢp 17 古墳	周濠西部埋土中	剥片	3.0	4.1	0.9		10.8	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
8	DⅢp 17 古墳	周濠西部埋土中	剥片	3.7	2.5	0.6		4.8	-	○	-	○	-	-	"	"	"	
9	DⅢn 15 古墳	周濠西部埋土中	搔器	2.2	2.8	0.8		3.2	○	-	-	-	-	-	"	"	"	
10	DⅢn 15 古墳	周濠埋土上部	円形搔器	2.7	2.6	1.1		8.6	○	○	○	○	○	○	"	"	"	
11	DⅢn 15 古墳	南西部埋土中	小剥片	1.2	2.3	0.2		0.6	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
12	DⅢn 15 古墳	周濠埋土上部	石核状剥片	2.8	2.4	1.5		3.4	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
13	DⅢo 15 土坑	埋土中	円形搔器	2.2	2.2	1.3		7.2	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
14	DⅢo 15 土坑	埋土中	円形搔器	2.3	2.5	1.7		8.8	-	-	-	-	-	○	"	"	"	
15	DⅢo 15 土坑	埋土中	円形搔器	2.2	2.1	1.0		5.0	-	○	-	-	-	○	"	"	"	
16	DⅢo 15 土坑	埋土中	搔器	2.3	1.8	0.8		2.5	-	-	○	-	-	-	"	35	"	
17	DⅢo 15 土坑	埋土中	搔器	2.1	2.4	0.6		3.4	-	-	○	-	-	-	"	"	"	
18	DⅢo 15 土坑	埋土中	小剥片	1.4	1.9	0.4		0.6	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
19	DⅢo 15 土坑	埋土中	剥片	4.1	2.4	0.4		5.5	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
20	DⅢo 15 土坑	埋土中	剥片	1.7	1.8	0.7		2.2	-	○	-	-	-	-	"	"	"	
21	DⅢo 15 土坑	埋土中	搔器?	2.4	1.9	2.0		9.3	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
22	DⅢo 15 土坑	埋土中	石核	3.2	2.5	1.2		6.6	-	○	-	-	-	-	"	"	"	
23	DⅢp 12 区	Ⅲ層中	搔器?	2.6	2.8	0.5		3.4	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
24	DⅢp 12 区	Ⅲ層中	搔器	3.4	3.7	1.3		11.7	-	-	-	○	-	-	"	"	"	319
25	DⅢp 12 区	Ⅲ層中	円形搔器	2.2	2.1	0.8		3.4	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
26	DⅢp 12 住	埋土最下部中	円形搔器?	2.6	2.2	1.6		8.1	-	-	○	-	-	-	"	"	"	
27	DⅢu 10 溝	埋土中	搔器	2.8	1.8	0.8		2.6	○	-	-	-	-	-	"	"	"	
28	DⅢu 10 溝	埋土中	搔器	2.4	2.0	0.4		1.8	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
29	DⅢu 10 溝	埋土中	搔器	3.7	3.0	0.7		9.4	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
30	DⅢu 10 溝	埋土中	搔器	2.0	2.1	0.8		2.7	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
31	DⅢu 19 溝	埋土中	搔器	1.9	2.2	1.6		1.9	-	-	-	-	-	-	"	"	"	

№	出土地区	層位	器種	法 量 (mm, g)				自然面の位置					鑑定 の有無	実測 図版	写真 図版	備 考		
				縦位	横位	最大厚	最大幅	重量	打面	右側縁	左側縁	先端部					背面	腹面
32	DⅡu 10 溝	埋土中	瓶器	2.7	2.0	0.6	3.2	-	○	-	-	-	-	-	有	35	319	
33	DⅡr 9 溝	埋土下部	瓶器	2.7	2.2	0.5	3.1	○	-	-	-	-	-	-	有	36	319	
34	DⅡr 14 溝	埋土中	瓶器	3.8	2.7	1.0	5.0	-	-	-	-	-	-	-	有	37	319	
35	DⅡs 14 溝	埋土中	瓶器?	3.6	3.3	1.3	13.6	-	○	-	-	-	○	-	有	38	319	
36	DⅡn 10 区	Ⅲ層中	瓶器	3.6	3.9	1.8	21.4	-	○	-	-	-	○	-	有	39	319	
37	DⅡo 11 区	Ⅲ層中	瓶器	2.2	3.5	0.5	5.0	-	-	-	-	-	-	-	有	40	319	
38	DⅡp 11 区	Ⅲ層中	瓶器	3.0	2.8	1.2	7.8	-	○	-	-	-	-	-	有	41	319	
39	DⅡp 18・19	Ⅲ層中	瓶器	3.2	2.8	1.1	8.5	○	-	-	-	-	-	-	有	42	319	
40	DⅡp・q 区	Ⅲ層中	瓶器	3.0	2.7	0.7	3.5	○	-	-	-	-	-	-	有	43	319	
41	DⅡp・q 区	Ⅲ層中	小剥片	2.4	1.9	0.7	2.5	-	○	-	-	-	-	-	有	44	319	
42	DⅡq 12 区	Ⅲ層中	円形瓶器?	2.8	2.4	1.4	7.7	-	-	-	-	○	-	-	有	45	319	
43	DⅡr 11 区	Ⅲ層中	円形瓶器	2.5	2.0	1.3	6.5	-	-	-	-	○	-	-	有	46	319	320
44	DⅡs 12 区	Ⅲ層中	瓶器	2.5	1.8	0.5	2.5	-	○	-	-	-	-	-	有	47	319	
45	DⅡu 23 住居	カマド壁基部埋土	円形瓶器	2.2	2.3	0.8	3.9	-	-	-	-	○	-	-	有	48	319	
46	DⅡp 12 住居	北東部土坑埋土	石核	3.2	3.1	2.2	26.0	-	-	-	-	○	○	-	有	49	319	
47	DⅡp 12 住居	北東部土坑埋土	瓶器?	2.7	3.8	1.7	15.4	-	-	○	○	-	-	-	有	50	319	37
48	DⅡp 12 住居	Q 1 埋土中	石核?	1.7	1.6	1.2	2.4	-	-	-	-	-	-	-	有	51	319	
49	DⅡp 12 住	埋土上部	原石	4.9	2.7	1.6	30.6	○	○	○	○	○	○	-	有	52	319	
50	DⅡp 12 住居	Q 3 埋土中	剥片	3.8	1.2	1.1	6.3	-	-	-	-	○	-	-	有	53	319	
51	DⅡp 14 住居	南西部壁際	剥片	2.0	1.9	0.8	2.8	-	-	-	-	○	-	-	有	54	319	
52	DⅡp 14 住居	南西部壁際	瓶器?	1.5	2.2	0.4	1.4	1.4	-	-	-	-	-	-	有	55	319	
53	DⅡp 14 住居	カマド付近埋土中	剥片	2.1	4.1	0.7	4.4	-	-	-	-	-	-	-	有	56	319	
54	DⅡp 14 住居	Q 2 埋土中	剥片	1.7	2.5	0.3	2.0	-	○	-	○	-	-	-	有	57	319	
55	DⅡp 14 住居	埋土中	瓶器?	3.4	2.4	1.2	8.7	○	○	○	○	○	○	-	有	58	319	
56	DⅡp 14 住居	埋土中	原石	2.4	2.7	1.1	5.9	○	○	○	○	○	○	-	有	59	319	
57	DⅡp 14 住居	埋土中	剥片	2.3	2.6	0.4	2.4	-	○	-	○	○	-	-	有	60	319	
58	DⅡp 14 住居	埋土中	剥片	3.4	4.3	0.9	7.0	○	-	-	-	○	-	-	有	61	319	
59	DⅡp 14 住居	埋土中	石核	2.6	2.8	1.0	8.4	-	○	-	○	-	-	-	有	62	319	
60	DⅡp 14 住居	埋土中	剥片	3.4	3.0	0.4	6.3	-	-	-	○	-	-	-	有	63	319	
61	DⅡp 15 住居	Q 4 埋土中	石核	2.6	3.2	1.5	9.6	-	-	-	-	○	-	-	有	64	319	38
62	DⅡp 15 住居	Q 4 埋土中	剥片	2.8	1.4	0.6	1.8	-	-	-	-	-	-	-	有	65	319	
63	DⅡp 15 住居	Q 4 埋土中	剥片	2.2	1.9	0.3	1.6	-	-	○	-	-	-	-	有	66	319	
64	DⅡp 15 住居	Q 3 埋土中	剥片	2.6	1.8	0.6	2.4	-	-	-	-	-	-	-	有	67	319	

65	DⅢp 15 住居	Q2 埋土中	铜片	1.9	1.5	0.4		0.8	-	○	-	○	-	-	有	38	320
66	DⅢp 15 住居	埋土中	铜片	2.9	1.6	1.0		2.4	-	-	-	-	-	-	"	"	"
67	DⅢp 15 住居	Q2 埋土中	铜片	3.1	2.6	1.0		5.5	-	-	-	-	-	-	"	"	"
68	DⅢs 14 土坑	埋土中	铜片	2.8	2.7	0.6		4.2	-	-	-	-	-	-	"	"	321
69	DⅢo 15 土坑	埋土中	小铜片	2.1	1.4	0.8		1.2	-	-	-	-	-	-	"	"	"
70	DⅢo 15 土坑	埋土中	铜片	2.3	1.5	0.5		1.2	-	-	-	-	○	-	"	"	"
71	DⅢn 10 区	Ⅲ层中	石核	6.4	4.7	3.5		78.0	○	○	○	○	○	○	"	"	"
72	DⅢn 10 区	Ⅲ层中	小铜片	1.8	1.5	0.2		6.0	-	-	-	-	-	-	"	"	"
73	DⅢo 10 区	Ⅲ层中	石核	2.6	3.0	1.8		14.6	-	-	-	-	-	○	"	"	"
74	DⅢo 10 区	Ⅲ层中	磁器	3.6	3.4	1.7		7.0	○	-	-	-	-	-	"	"	"
75	DⅢo 10 溝	埋土中	小铜片	1.4	1.6	0.2		0.4	-	-	-	-	-	-	"	"	"
76	DⅢo 10 溝	埋土中	铜片	2.4	2.4	1.2		4.8	○	-	-	-	-	-	"	39	"
77	DⅢo 11 区	Ⅲ层中	磁器?	2.0	2.6	1.1		4.9	-	-	-	-	-	-	"	"	"
78	DⅢo 11 区	Ⅲ层中	铜片	2.9	1.6	0.2		1.2	-	-	-	-	○	-	"	"	"
79	DⅢo 14 区	Ⅲ层中	铜片	2.1	2.2	1.0		4.5	○	○	○	○	-	-	"	"	"
80	DⅢo 14 区	Ⅲ层中	铜片	2.2	2.0	0.6		1.9	○	-	○	○	○	-	"	"	"
81	DⅢo 14 区	Ⅲ层中	铜片	2.9	1.5	0.5		1.8	-	○	-	○	-	-	"	"	"
82	DⅢo 14 区	Ⅲ层中	铜片	1.9	1.2	0.3		0.6	-	-	-	-	○	-	"	"	"
83	DⅢo 25 住居	埋土中	铜片	2.7	1.6	0.4		1.5	-	-	-	-	-	-	"	"	"
84	DⅢo 25 住居	Q3 埋土中	铜片	1.5	2.3	0.7		1.6	-	-	-	-	○	-	"	"	"
85	DⅢo 25 住居	Q3 埋土中	铜片	2.2	1.8	0.5		1.6	-	-	-	-	-	-	"	"	"
86	DⅢp 9 区	Ⅲ层中	铜片	3.8	2.9	0.7		2.8	-	○	-	○	-	-	"	"	"
87	DⅢp 10 区	Ⅲ层中	石核	3.0	2.6	1.6		17.9	○	○	-	-	-	-	"	"	"
88	DⅢp 10 区	Ⅲ层中	铜片	2.5	3.6	1.0		6.7	-	-	-	-	-	-	"	"	"
89	DⅢp 11 区	Ⅲ层中	铜片	2.7	2.8	0.5		3.1	○	-	-	-	-	-	"	"	"
90	DⅢp 11 区	Ⅲ层中	铜片	2.4	2.7	0.4		2.9	○	-	-	-	-	-	"	"	"
91	DⅢp 12 区	Ⅲ层中	石核	3.3	3.3	1.9		17.7	○	○	○	○	○	○	"	"	"
92	DⅢp 12 区	Ⅲ层中	铜片	2.5	1.9	0.4		1.7	○	-	○	-	-	-	"	"	"
93	DⅢp 12 区	Ⅲ层中	铜片	2.0	1.9	0.6		2.2	-	-	-	-	-	-	"	"	"
94	DⅢp 12 区	Ⅲ层中	铜片	2.4	1.8	0.3		0.9	-	-	-	-	-	-	"	40	"
95	DⅢp 12 区	Ⅲ层中	铜片	2.8	2.7	0.6		3.0	○	-	-	-	-	-	"	"	322
96	DⅢp 12 区	Ⅲ层中	铜片	2.4	2.4	0.7		4.3	-	-	-	-	○	-	"	"	"
97	DⅢp 12 区	Ⅲ层中	铜片	1.0	2.7	0.4		0.9	-	-	-	-	-	-	"	"	"
98	DⅢp 12 区	Ⅲ层中	铜片	3.4	3.2	0.7		7.0	-	-	-	-	○	-	"	"	"
99	DⅢp 12 区	Ⅲ层中	铜片	1.6	1.9	0.4		1.3	-	○	-	-	-	-	"	"	"

№	出土地区	層位	器種	法 量 (mm, g)				自然面の位置						鑑定の有無	実測図版	写真図版	備考
				縦位	横位	最大厚	最大幅	重量	打面	右側縁	左側縁	末端部	背面				
100	DⅢp 12区	Ⅲ層中	搔器?	2.2	1.9	0.8	3.4	-	-	-	-	-	○	有	40	322	
101	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	2.5	2.8	0.9	4.9	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
102	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	2.5	1.4	0.7	2.4	-	-	-	-	-	○	"	"	"	
103	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	1.9	1.8	0.3	0.8	○	-	-	-	-	-	"	"	"	
104	DⅢp 12区	Ⅲ層中	石核	3.7	2.7	1.9	13.0	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
105	DⅢp 12区	Ⅲ層中	石核	4.1	3.6	1.5	18.7	-	-	-	-	-	○	"	"	"	
106	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	1.3	1.4	0.3	0.7	-	-	○	-	-	-	"	"	"	
107	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	2.2	3.9	1.7	16.1	-	-	-	-	-	○	"	"	"	
108	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	3.7	3.8	0.7	7.8	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
109	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	2.4	2.4	0.8	4.1	-	-	-	○	-	-	"	"	"	
110	DⅢp 12区	Ⅲ層中	搔器?	2.2	3.1	1.3	2.7	-	○	-	-	-	-	"	41	"	
111	DⅢp 12区	Ⅲ層中	細片	1.0	1.5	0.2	0.3	-	-	-	-	-	-	"	40	"	
112	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	2.1	1.9	0.7	1.6	○	-	-	-	-	-	"	41	"	
113	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	1.9	2.1	0.7	3.2	-	○	-	-	○	-	"	"	"	
114	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	2.0	2.1	0.6	1.7	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
115	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	2.7	1.1	0.7	1.8	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
116	DⅢp 12区	Ⅲ層中	搔器?	2.7	2.3	0.8	4.3	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
117	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	3.0	1.7	0.9	3.5	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
118	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	1.5	2.6	0.4	1.2	-	-	○	-	-	-	"	"	"	
119	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	1.9	1.8	0.6	1.3	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
120	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	1.7	1.8	0.4	0.8	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
121	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	2.0	2.2	0.5	2.1	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
122	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	2.2	1.0	0.3	0.7	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
123	DⅢp 12区	Ⅲ層中	剥片	3.2	2.9	0.8	4.5	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
124	DⅢq 10区	Ⅲ層中	剥片	1.6	2.3	0.5	1.4	○	○	-	-	-	-	"	"	323	
125	DⅢq 10区	Ⅲ層中	剥片	3.5	2.4	0.9	6.8	-	-	-	-	-	○	"	"	322	
126	DⅢq 12区	Ⅲ層中	剥片	2.1	1.4	0.4	1.4	-	○	-	-	-	-	"	"	323	
127	DⅢr 8区	Ⅲ層中	剥片	4.0	1.7	0.9	7.2	-	○	-	-	-	-	"	"	"	
128	DⅢr 8区	Ⅲ層中	剥片	2.3	2.0	0.6	2.1	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
129	DⅢr 11区	Ⅲ層中	剥片	2.7	1.8	0.8	2.3	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
130	DⅢr 11区	Ⅲ層中	剥片	1.8	1.5	0.4	0.9	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
131	DⅢr 11区	Ⅲ層中	剥片	2.0	1.1	0.4	0.9	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
132	DⅢr 11区	Ⅲ層中	剥片	1.8	1.1	0.4	0.6	○	-	-	-	-	-	"	42	"	

133	DⅡr 11 区	Ⅱ层中	剥片	2.6	2.6	0.7		4.3	-	-	-	-	-	○	有	42	323
134	DⅡr 11 区	Ⅱ层中	剥片	1.8	1.2	0.2		0.5	-	-	-	-	○	-	"	"	"
135	DⅡr 11 区	Ⅱ层中	剥片	1.8	2.1	0.6		1.8	○	-	-	-	-	-	"	"	"
136	DⅡr 11 区	Ⅱ层中	剥片	2.1	2.0	0.4		1.4	-	-	-	-	-	-	"	"	"
137	DⅡr 11 区	Ⅱ层中	剥片	0.7	1.8	0.3		0.3	-	-	-	-	-	-	"	"	"
138	DⅡr 11 区	Ⅱ层中	剥片	3.3	2.7	0.6		3.2	-	-	-	-	-	-	"	"	"
139	DⅡr 13 区	Ⅱ层中	剥片	1.7	2.5	0.6		1.8	-	-	-	-	-	-	"	"	"
140	DⅡr 13 区	Ⅱ层中	剥片	1.2	1.0	0.2		0.2	-	-	-	-	-	-	"	"	"
141	DⅡr 14 溝	埋土中	剥片	1.6	3.1	0.9		3.6	-	-	-	-	-	-	"	"	"
142	DⅡr 14 溝	埋土中	剥片	2.5	2.2	0.5		2.2	-	-	-	-	○	-	"	"	"
143	DⅡr 14 溝	埋土中	剥片	2.6	3.2	0.7		4.3	-	-	-	-	-	-	"	"	"
144	DⅡr 14 溝	埋土中	剥片	2.4	1.5	0.5		1.5	-	○	-	-	-	-	"	"	"
145	DⅡr 14 溝	埋土中	剥片	1.8	1.9	0.4		1.2	-	-	○	-	-	-	"	"	"
146	DⅡr 14 溝	埋土中	剥片	2.7	1.9	0.5		1.9	-	-	-	○	-	-	"	"	"
147	DⅡr 14 溝	埋土中	剥片	1.8	2.6	1.2		3.5	-	-	-	-	○	-	"	"	"
148	DⅡr 16 溝	埋土中	剥片	1.7	2.5	0.8		3.2	○	-	-	-	-	-	"	"	"
149	DⅡr 16 溝	埋土中	剥片	2.3	1.9	0.5		1.4	-	-	-	-	○	-	"	"	"
150	DⅡr 16 溝	埋土中	剥片	3.1	1.5	1.2		5.4	-	-	-	-	-	○	"	"	"
151	DⅡr 16 溝	埋土中	探测器?	2.0	2.6	2.3		9.4	-	-	-	-	-	○	"	"	"
152	DⅡr 17 溝	埋土中	剥片	1.9	1.9	1.0		5.8	-	-	-	○	○	-	"	"	43
153	DⅡs 4 区	Ⅱ层中	探测器?	3.2	2.6	1.4		6.8	-	○	-	-	-	○	"	"	"
154	DⅡs 8 区	Ⅱ层中	剥片	3.5	4.5	1.5		11.4	-	-	○	-	-	-	"	"	"
155	DⅡs 12 区	Ⅱ层中	剥片	2.0	2.7	0.5		1.7	-	-	-	-	-	-	"	"	"
156	DⅡs 12 区	Ⅱ层中	剥片	2.3	2.7	0.6		3.3	-	-	-	-	-	-	"	"	"
157	DⅡs 12 区	Ⅱ层中	石核	2.2	4.5	1.7		14.5	-	-	-	-	-	○	"	"	"
158	DⅡs 12 区	Ⅱ层中	剥片	1.9	2.2	0.5		2.0	○	-	-	-	-	-	"	"	"
159	DⅡs 12 区	Ⅱ层中	剥片	1.9	1.9	0.8		1.7	○	-	-	-	-	-	"	"	"
160	DⅡs 12 区	Ⅱ层中	探测器	3.0	2.2	1.4		10.9	-	-	-	-	○	-	"	"	"
161	DⅡs 12 区	Ⅱ层中	剥片	2.2	2.7	0.6		3.0	○	-	-	-	-	-	"	"	"
162	DⅡs 12 区	Ⅱ层中	剥片	2.3	1.2	0.4		1.4	-	-	-	-	-	-	"	"	324
163	DⅡs 12 区	Ⅱ层中	剥片	4.0	2.8	0.9		8.6	○	-	-	-	○	-	"	"	"
164	DⅡs 14 溝	埋土中	剥片	3.5	2.5	0.6		6.9	-	-	○	○	-	-	"	"	"
165	DⅡu 8 区	Ⅱ层中	剥片	2.4	2.8	0.5		2.7	○	-	-	-	-	-	"	"	"
166	DⅡu 8 区	Ⅱ层中	剥片	2.6	2.7	0.5		2.0	○	-	-	-	-	-	"	"	"
167	DⅡu 10 溝	埋土中	剥片	2.3	1.3	0.7		1.4	-	○	-	-	-	-	"	"	"

未成品

No	出土地区	層位	器種	法 量 (mm, g)				自然面の位置						確定の有無	実測 図版	写真 図版	備 考	
				縦位	横位	最大厚	最大幅	重量	打面	右側縁	左側縁	先端部	背面					腹面
168	DⅡu 10溝	埋土中	搔器?	3.5	1.7	1.4		5.8	-	-	○	○	-	-	有	44	324	
169	DⅡu 10溝	埋土中	削片	1.9	2.3	1.6		2.2	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
170	DⅡu 10溝	埋土中	削片	1.6	1.7	0.9		2.0	○	-	○	-	-	-	"	"	"	
171	DⅡu 10溝	埋土中	削片	1.4	1.4	0.4		0.8	-	○	-	-	-	-	"	"	"	
172	DⅡu 10溝	埋土中	削片	1.8	1.5	0.3		1.0	-	-	-	-	○	-	"	"	"	
173	DⅡu 10溝	埋土中	削片	1.4	1.9	0.4		0.9	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
174	DⅡu 10溝	埋土中	削片	2.1	2.5	0.6		2.7	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
175	DⅡu 10溝	埋土中	削片	1.1	1.8	0.6		1.1	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
176	DⅡu 10溝	埋土中	削片	1.8	1.2	0.4		5.0	-	○	-	-	-	-	"	"	"	
177	DⅡu 10溝	埋土中	石核	2.5	3.3	2.3		12.5	○	-	○	-	-	-	"	"	"	
178	DⅡu 10溝	埋土中	石核	2.6	3.3	1.8		17.3	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
179	DⅡv 14溝	埋土中	削片	3.4	1.8	1.2		5.4	-	-	○	-	-	-	"	"	"	
180	DⅡv 14溝	埋土中	削片	1.7	1.4	0.4		0.8	○	-	-	-	-	-	"	"	"	
181	DⅡv 14溝	埋土中	削片	3.5	2.3	1.0		5.9	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
182	DⅡv 14溝	埋土中	小削片	1.7	1.4	0.4		5.0	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
183	DⅡv 14溝	埋土中	削片	1.5	2.5	1.0		2.6	-	○	-	-	-	-	"	"	"	
184	DⅡo 9区	Ⅲ層中	削片	1.4	2.3	0.5		1.3	○	-	-	-	-	-	"	"	"	
185	DⅡo 9区	Ⅲ層中	削片	3.3	2.7	0.9		6.3	-	-	-	-	-	○	"	"	"	
186	DⅡo 17区	Ⅲ層中	削片	1.8	2.6	0.5		1.6	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
187	DⅡs 11住居	Q2埋土中	削片	2.7	2.9	0.6		4.2	○	-	-	-	-	-	"	"	"	
188	DⅡt 11住居	貼り床下	削片	2.2	1.7	1.7		2.6	-	-	○	○	-	-	"	45	325	
189	DⅡt 12住居	カマド上部	削片	1.7	1.6	0.3		0.5	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
190	DⅡv 12住居	Q1埋土中	削片	2.9	2.2	1.2		1.7	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
191	DⅡv 12住居	埋土中	石核	5.5	4.4	2.6		55.4	○	○	○	○	-	○	"	"	"	
192	DⅡc 9住居	埋土中	削片	2.4	2.1	0.8		3.3	○	-	-	-	-	-	"	"	"	
193	DⅡc 9住居	埋土中	削片	3.4	3.2	1.0		9.2	-	-	-	○	-	-	"	"	"	
194	DⅡc 9住居	埋土中	削片	2.8	1.5	1.1		3.1	-	-	-	-	-	○	"	"	"	
195	DⅡc 11土坑	埋土中	削片	1.7	1.7	0.3		0.8	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
196	DⅡc 11土坑	埋土中	削片	2.5	2.7	0.8		2.7	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
197	DⅡd 8住居	埋土中	原石	2.3	2.8	1.5		11.0	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
198	DⅡd 8住居	Q4埋土中	削片	2.3	1.4	0.5		1.2	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
199	DⅡd 8住居	Q4埋土中	削片	1.5	2.3	0.4		1.0	-	-	-	-	-	-	"	"	"	
200	DⅡd 8住居	Q4埋土中	削片	2.5	1.3	0.7		2.0	-	○	-	-	-	-	"	"	"	

201	DIVd 8住居	カマド付近	剥片	3.2	2.8	0.7		6.4	-	-	○	-	-	-	有	45	325
202	DIVd 8住居	カマド付近	剥片	1.8	1.0	0.4		0.6	-	-	○	-	-	-	"	"	"
203	DIVd 8住居	カマド付近	剥片	1.9	1.9	0.4		1.3	○	-	-	-	-	-	"	"	"
204	DIVp 11区	Ⅱ層中	剥片	2.8	3.1	0.4		4.2	-	-	○	-	-	-	"	"	"
205	DIVh 8住居	埋土中	円形壺器	2.7	2.4	1.1		6.4	-	-	-	-	-	-	"	46	"
206	DIVh 8住居	埋土中	剥片	1.3	1.8	0.4		0.9	-	-	-	-	-	-	"	"	未成品
207	DIVi 5住居	埋土中	円形壺器	2.7	3.2	1.3		11.8	○	○	○	○	○	○	"	"	"
208	DIVi 5住居	埋土中	壺器	1.9	2.4	1.4		4.7	-	-	-	-	-	-	"	"	"
209	DIVi 5住居	埋土中	壺器	2.3	2.4	0.8		3.8	-	-	-	-	-	-	"	"	"
210	DIVi 5住居	埋土中	壺器?	2.1	2.1	0.4		2.1	-	○	-	-	-	-	"	"	"
211	DIVi 5住居	埋土中	剥片	2.8	1.2	0.6		1.1	-	○	-	-	-	-	"	"	"
212	DIVi 7住居	埋土中	石核	2.6	2.3	1.6		9.0	-	-	-	-	-	-	"	"	"
213	DIVi 7住居	埋土中	剥片	2.1	1.7	0.4		1.1	-	-	-	-	-	-	"	"	"
214	DIVi 4住居	埋土中	剥片	2.4	2.1	0.9		4.6	-	-	-	-	-	-	"	"	"
215	DIVi 4住居	埋土中	剥片	3.5	3.5	0.8		7.0	-	-	-	-	-	-	"	"	"
216	DIVi 4住居	埋土中	剥片	1.7	1.8	0.3		0.8	-	-	-	-	-	-	"	"	"
217	DIVi 4住居	埋土中	剥片	1.5	1.9	0.3		0.8	-	-	-	-	-	-	"	"	326
218	DIVo 25区	埋土中	剥片	1.7	4.2	0.5		4.3	-	-	-	-	-	-	"	"	"
219	DIVm 1建物	柱穴6埋土中	剥片	2.4	2.3	0.4		1.9	-	-	○	-	-	-	"	"	"
220	AIVi 23住居	埋土中	壺器	3.2	2.1	0.6		4.1	○	-	-	-	-	-	"	"	89年度分
221	AIVi 23住居	埋土中	剥片	2.4	1.4	0.4		1.1	-	-	-	-	-	-	"	"	"
222	BVIIv 12住居	Q2床面	壺器?	1.4	2.0	0.7		1.4	-	○	-	-	-	-	"	"	"
223	BVIIv 12住居	Q2床面	壺器	1.9	2.2	1.2		3.8	-	-	-	-	○	-	"	"	"
224	DIIIk 25住居	埋土中	剥片	2.4	2.0	0.5		1.5	-	-	-	-	-	-	"	47	"
225	DIIIx 15住居	左袖埋土中	剥片	2.7	2.5	0.6		3.5	-	-	-	-	-	-	"	"	"
226	DIII m 22土坑	7層埋土中	剥片	3.0	3.6	0.7		5.8	-	-	-	-	○	-	"	"	"
227	DIII m 22土坑	7層埋土中	剥片	3.6	2.9	0.8		6.8	-	-	-	○	○	-	"	"	"
228	DIIIe 3溝	埋土中	剥片	3.8	2.0	0.8		5.5	-	○	-	-	-	-	"	"	"
229	DIIIe 3溝	埋土中	剥片	1.8	2.8	1.0		3.6	-	-	-	-	○	-	"	"	"
230	DIII t 21区	表土中粗掘り	剥片	1.8	2.5	0.8		2.6	○	-	-	-	-	-	"	"	"
231	DIII t 21区	表土中粗掘り	剥片	2.1	2.3	0.5		1.4	-	-	-	-	-	-	"	"	"
232	DIVc 9住居	埋土中	剥片	2.5	2.6	1.1		5.0	-	-	○	○	-	-	"	"	"
233	DIVc 9住居	埋土中	剥片	1.6	2.0	0.6		1.2	-	-	-	-	-	-	"	"	"
234	DIVc 9住居	埋土中	石核	2.6	1.6	1.5		4.5	-	-	-	-	-	-	"	"	"
235	DIVc 9住居	埋土中	壺器?	4.4	3.1	1.3		14.6	-	-	-	-	○	-	"	"	"

No	出土地区	層位	器種	法量(mm, g)				自然面の位置				鑑定 の有無	実測 図版	写真 図版	備考			
				縦位	横位	最大厚	最大径	重量	打面	右側縁	左側縁					末端部	背面	腹面
236	DIvc 9 住居	埋土中	剥片	3.6	2.3	0.9	6.1	-	-	-	-	-	有	47	326			
237	DIvc 14 住状	Q3埋土中	剥片	3.0	2.2	0.6	3.2	-	-	-	-	-	"	"	"			
238	DIvc 14 住状	Q3埋土中	剥片	2.3	2.3	0.4	2.2	-	-	-	-	-	"	"	"			
239	DIVk 25 住居	Q3埋土中	石核	2.0	2.3	1.3	5.9	-	-	-	-	○	"	"	"			
240	DIVk 25 住居	Q3埋土中	石核	2.8	2.3	1.6	10.9	○	○	○	○	-	○	"	"	"		
241	DIVk 25 住居	Q4埋土中	原石	3.2	2.5	1.3	10.0	○	○	○	○	○	"	"	"	"		
242	DIVd 8 住居	Q1埋土中	剥片	2.8	2.2	0.9	6.8	○	○	-	-	-	"	"	"	"		
243	DIVd 8 住居	掘り方部分	搔器?	2.4	3.0	1.3	8.9	-	○	-	-	-	"	"	"	"	89年度分	
244	DIVi 7 住居	Q2埋土中	剥片	1.3	2.3	0.3	1.0	-	-	-	-	-	"	"	"	"		
245	DIVj 1 ②住	埋土中	石核?	4.1	2.1	2.0	14.1	-	-	-	○	-	"	"	"	"		
246	DIVj 10 住居	埋土中	剥片	2.3	2.7	0.5	3.1	○	-	-	-	-	"	"	"	"	327	
247	DIVj 1 ②住	Q3埋土中	剥片	2.5	3.0	1.4	9.9	-	-	-	-	○	-	"	"	"		
248	DIVk 10 住居	埋土中	剥片	2.5	1.9	1.0	4.9	-	-	-	-	○	-	"	"	"		
249	DIVk 10 住居	埋土中	剥片	1.3	2.6	0.8	1.9	-	-	-	-	-	"	"	"	"		
250	DIVl 15 区	表土層中	石核?	2.9	2.4	1.3	8.7	-	-	-	-	○	-	"	"	"		
251	DIVo 5 住居	埋土中	剥片	2.3	2.8	1.1	5.6	-	-	-	-	-	"	"	"	"		
252	DIVo 5 住居	埋土中	搔器?	4.1	3.4	1.8	20.2	○	○	○	○	○	"	"	"	"		
253	DIVg 2 住居	Q3埋土中	石核?	3.1	2.7	1.6	13.2	○	○	○	-	○	-	"	"	"		
254	DIVr 4 住居	床面 No.1	剥片	1.7	2.6	1.6	5.4	-	-	-	-	○	-	"	"	"		
255	EⅢc 1 住居	カマド内埋土中	剥片	2.1	1.7	0.4	0.8	-	-	-	-	-	"	"	"	"		
256	EⅢl 1 住居	床面	搔器	2.6	3.4	0.8	5.4	-	-	-	-	○	-	"	"	"		
257	不明	粗掘り中	剥片	1.8	3.9	0.8	5.8	-	-	-	○	-	"	"	"	"		
258	不明	粗掘り中	剥片	3.1	3.0	0.6	3.4	-	-	-	-	-	"	"	"	"	49	
259	不明	粗掘り中	剥片	2.9	2.9	0.7	5.1	-	-	-	-	-	"	"	"	"		
260	DIV区?	粗掘り中	剥片	2.8	2.0	0.7	3.5	-	-	○	-	-	"	"	"	"		
261	DIV区?	粗掘り中	搔器?	2.8	1.5	0.6	2.2	-	-	-	-	○	-	"	"	"	"	一個に刃部有
262	DⅢp 17 古墳	周濠南部埋土	原石 No.1	4.7	4.4	1.6	44.8							"	"	"		
263	DⅢp 17 古墳	周濠南部埋土	原石 No.2	4.0	3.7	2.4	42.3							"	"	"		
264	DⅢp 17 古墳	周濠南部埋土	原石 No.3	5.7	4.0	2.6	81.5							"	"	"		
265	DⅢp 17 古墳	周濠南部埋土	原石 No.4	3.9	3.8	2.2	38.0							"	"	"		
266	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	3.1	4.3	1.5	17.2							"	"	"		
267	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	3.8	2.7	0.9	9.2							"	"	"		
268	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	3.1	2.0	0.7	3.0							"	"	"		

269	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	2.7	1.1	0.4		0.4									50	328
270	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	2.7	1.7	0.2		0.7										
271	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	1.5	2.4	0.6		1.8										
272	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	2.6	1.9	0.7		2.5										
273	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	1.6	1.9	0.2		0.6										
274	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	竈器	3.0	2.8	0.5		4.0										
275	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	3.5	2.8	1.0		2.4										
276	DⅢp 17 古墳	南西部周濠埋土	剥片	3.0	3.6	0.8		1.3										
277	DⅢp 17 古墳	周濠埋土ベルト	剥片	1.2	1.8	0.3		0.6								有		
278	DⅢp 17 古墳	周濠埋土ベルト	石板	3.5	2.5	1.5		12.4										
279	DⅢp 17 古墳	周濠埋土ベルト	剥片	1.5	1.9	0.4		0.7										
280	DⅢp 17 古墳	周濠埋土ベルト	剥片	1.5	1.4	0.6		0.8										
281	DⅢq 17 古墳	主体部埋土中位	剥片	1.6	1.5	0.9		1.7										
282	DⅢq 17 古墳	主体部埋土中位	剥片	2.1	1.6	1.4		0.6										
283	DⅢq 17 古墳	主体部埋土中位	剥片	1.6	2.2	0.3		0.8										
284	DⅢq 17 古墳	主体部埋土中位	剥片	1.8	1.3	0.4		0.9										
285	DⅢq 17 古墳	主体部埋土中位	剥片	2.5	3.3	0.9		5.0										
286	DⅢq 17 古墳	周濠北西部埋土	剥片	1.6	2.4	0.4		1.5										
287	DⅢq 17 古墳	周濠北東部埋土	竈器	3.4	3.4	1.4		13.8										
288	DⅢq 17 古墳	周濠北東部埋土	剥片	1.6	1.3	0.3		0.5										
289	DⅢq 17 古墳	周濠北東部埋土	剥片	4.2	4.0	6.5		7.6									51	
290	DⅢq 17 古墳	周濠北東部埋土	剥片	2.8	2.8	2.0		14.8										
291	DⅢq 17 古墳	周濠北東部埋土	竈器	3.3	3.0	1.4		12.1										
292	DⅢs 13 古墳	南西部周濠埋土	剥片	1.6	2.0	0.2		0.6										
293	DⅢs 13 古墳	南西部周濠埋土	剥片	1.9	1.8	0.4		0.9										
294	DⅢs 13 古墳	南西部周濠埋土	剥片	2.2	2.6	0.4		1.4										
295	DⅢs 13 古墳	南西部周濠埋土	剥片	1.7	1.7	0.4		0.9										
296	DⅢs 13 古墳	南西部周濠埋土	剥片	1.3	1.9	0.4		0.8										
297	DⅢs 13 古墳	南西部周濠埋土	剥片	2.8	2.5	0.4		3.0										
298	DⅢs 13 古墳	南東部周濠埋土	剥片	2.5	3.4	0.6		5.3										
299	DⅢs 13 古墳	北西部周濠埋土	剥片	3.2	2.2	0.4		2.1										
300	DⅢs 13 古墳	北西部周濠埋土	剥片	4.6	4.3	1.4		2.7										329
301	DⅢs 13 古墳	北西部周濠埋土	竈器	2.7	4.4	1.6		11.9										
302	DⅢs 13 古墳	主体部埋土	竈器	3.0	2.0	1.1		5.3										
303	DⅢq 16 溝	埋土内	剥片	1.3	2.2	0.4		1.0										

No	出土地区	層位	器種	法 量 (mm, g)				自然面の位置						鑑定 の有無	実測 図版	写真 図版	備 考	
				縦位	横位	最大厚	最大幅	重量	打面	右側縁	左側縁	末端部	背面					腹面
304	DⅡq 16 溝	埋土内	剥片	1.3	2.6	0.4		1.1							有	51	329	
305	DⅡq 16 溝	埋土内	剥片	1.7	2.8	0.6		1.9							"	52	"	
306	DⅡq 16 溝	埋土内	剥片	4.1	2.2	1.5		9.0							"	"	"	
307	DⅡq 16 溝	埋土内	剥片	1.7	2.9	1.5		7.4							"	"	"	一側縁に刃部有
308	DⅡr 15 溝	埋土内	剥片	1.7	2.0	0.4		0.9							"	"	"	
309	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	3.1	4.4	1.2		13.4							"	"	"	
310	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	2.4	3.3	0.6		3.1							"	"	"	
311	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.6	4.4	0.9		5.4							"	"	"	
312	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	2.3	2.1	0.5		1.7							"	"	"	
313	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	2.8	2.4	0.6		2.7							"	"	"	
314	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	2.6	0.7	0.5		0.8							"	"	"	
315	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	3.3	1.7	0.4		1.5							"	"	"	
316	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	2.0	3.2	0.3		1.4							"	"	"	
317	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	2.9	1.2	0.5		1.0							"	"	"	
318	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.4	1.8	0.3		0.6							"	"	"	
319	DⅡq 17 溝	埋土一括	搔器	3.3	3.9	1.7		16.2							"	"	"	
320	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	2.5	2.0	0.3		1.2							"	"	"	
321	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.3	1.1	0.2		0.2							"	"	"	
322	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.5	1.0	0.2		0.2							"	"	"	
323	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.5	1.3	0.2		0.3							"	"	"	
324	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.2	1.0	0.3		0.2							"	"	"	
325	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.7	0.7	0.4		0.2							"	"	"	
326	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.2	1.2	0.3		0.4							"	53	"	
327	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.4	1.8	0.4		0.9							"	"	"	
328	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.7	1.5	0.4		0.6							"	"	"	
329	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	2.4	1.3	0.2		0.7							"	"	"	
330	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	1.7	1.3	0.3		0.5							"	"	"	一側縁に刃部有
331	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	3.0	2.2	0.7		4.1							"	"	330	
332	DⅡq 17 溝	埋土一括	剥片	3.0	2.0	0.5		2.7							"	"	"	
333	DⅡq 18 付近	Ⅱ層下部	剥片	3.7	1.6	0.6		4.0							"	"	"	
334	DⅡq 18 付近	Ⅱ層下部	剥片	1.7	2.0	0.4		1.0							"	"	"	
335	DⅡq 18 付近	Ⅱ層下部	剥片	2.6	2.5	0.5		2.5							"	"	330	
336	DⅡq 18 付近	Ⅱ層下部	搔器	4.5	4.0	1.3		21.3							"	"	"	

337	DⅢq-s 15 - 16	Ⅱ層下部檢出面	剝片	4.6	2.7	0.4		6.7										有	53	330
338	DⅢq-s 15 - 16	Ⅱ層下部檢出面	剝片	2.3	2.2			1.3										"	"	"
339	DⅢq-s 15 - 16	Ⅱ層下部檢出面	剝片	3.3	2.5	0.5		2.8										"	"	"
340	DⅢq-s 15 - 16	Ⅱ層下部檢出面	剝片	3.3	3.0	0.4		5.3										"	"	"
341	DⅢx 10 土坑	埋土	剝片	2.1	1.4	0.4		0.8										"	"	"
342	DⅢq 17 古墳	周濠内埋土	攝器	3.3	2.5	0.9		7.1										"	"	"
343	DⅢq 17 古墳	周濠内埋土	剝片	1.4	1.3	0.7		0.8										"	"	"
344	DⅢq 17 古墳	周濠内埋土	剝片	1.3	1.0	0.2		0.2										"	"	"
345	DⅢs 13 古墳	周濠西部南端	剝片	1.2	1.4	0.3		0.4										"	"	"
346	DⅢs 13 古墳	周濠西部南端	小剝片	2.0	2.0	0.5		1.0	○	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
347	DⅢs 13 古墳	周濠西部南端	剝片	1.4	1.5	0.4		0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	54
348	粗掘中	Ⅱ層	攝器	2.8	3.5	1.0		9.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
349	DⅡv 7 住居	埋土一括	小型攝器	2.0	1.5	0.4		0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
350	DⅡx 6 住居	床直下 Na13	剝片	2.7	3.7	0.8		4.5	-	-	-	○	-	-	-	-	-	"	"	"
351	DⅢx 15 住居	北東部埋土	残骸	3.1	4.4	1.8		22.0	-	○	○	-	○	-	-	-	-	"	"	"
352	DⅢx 15 住居	南西部埋土	剝片	3.3	4.2	0.7		6.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
353	DⅢx 15 住居	南東部埋土	剝片	3.1	3.5	0.9		8.5	○	-	○	○	-	-	-	-	-	"	"	"
354	DⅢx 15 住居	南西部埋土	剝片	3.2	2.1	0.9		4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
355	DⅢx 15 住居	北東部埋土	剝片	3.1	1.7	0.9		3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
356	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	剝片	2.7	1.6	1.4		5.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
357	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	小剝片	1.6	1.2	0.8		1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
358	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	小剝片	1.5	1.9	0.7		1.5	○	○	○	-	-	-	○	-	-	"	"	"
359	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	攝器	2.7	2.3	1.4		6.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	331
360	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	剝片	2.0	2.4	0.8		2.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
361	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	剝片	2.2	2.2	0.6		2.5	○	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
362	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	剝片	2.5	2.6	0.7		5.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
363	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	剝片	2.4	2.6	0.6		3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	55
364	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	剝片	2.3	2.7	0.6		3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
365	DⅢp 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	小剝片	1.6	1.1	0.4		0.4	○	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
366	DⅢpq 17 付近	遺構検出Ⅱ層下	攝器?	3.8	3.6	1.5		16.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
367	DⅢpq 18 付近	遺構検出Ⅱ層下	小剝片	1.8	1.0	0.2		0.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
368	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	小剝片	1.7	1.4	0.3		0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
369	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	小剝片	1.1	1.3	0.2		0.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
370	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	小剝片	1.5	2.0	0.3		0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"
371	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剝片	1.4	2.2	0.5		1.1	-	-	-	○	-	-	-	-	-	"	"	"

No	出土地区	層位	器種	法 量 (mm, g)					自然面の位置						鑑定の有無	実測図版	写真図版	備考
				縦位	横位	最大厚	最大幅	重量	打面	右側縁	左側縁	先端部	背面	腹面				
372	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	1.5	3.1	0.5		1.9	○	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
373	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.2	1.8	0.6		1.8	○	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
374	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	1.9	2.7	0.5		1.9	○	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
375	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.3	2.8	0.7		2.4	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
376	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.2	1.7	0.4		1.7	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
377	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	1.9	4.0	0.6		4.3	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
378	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.6	2.1	0.8		2.6	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
379	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	3.1	2.7	0.8		5.3	○	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
380	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	1.8	2.9	0.7		3.5	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
381	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	3.0	3.2	0.8		5.7	-	-	-	○	-	-	〃	〃	〃	
382	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	3.6	3.0	0.9		9.1	-	○	-	-	-	-	〃	〃	〃	
383	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.7	2.1	0.9		3.5	○	○	-	-	-	-	〃	56	〃	
384	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	石核	2.0	2.6	1.0		7.1	-	-	-	○	○	-	〃	〃	〃	
385	DⅢpq 18 付近	古墳検出Ⅱ層下	石核	2.5	3.2	1.3		11.7	-	○	○	○	○	-	〃	〃	〃	
386	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	小剥片	1.8	1.4	0.4		0.6	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
387	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.2	1.7	0.6		2.4	-	-	-	○	-	-	〃	〃	〃	
388	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	1.6	1.5	0.5		0.9	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
389	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	1.6	1.7	0.3		0.5	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
390	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	振器	1.4	1.4	0.5		1.0	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
391	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	1.5	2.2	0.4		0.7	○	-	○	-	-	-	〃	〃	〃	
392	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	1.5	2.9	0.5		1.3	○	-	○	-	○	-	〃	〃	〃	332
393	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.8	1.6	0.7		2.2	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
394	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	1.8	2.5	1.3		4.6	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
395	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.0	3.0	0.5		2.4	-	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
396	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.0	3.2	0.4		2.4	○	-	-	-	-	-	〃	〃	〃	
397	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.4	2.2	0.7		3.3	-	○	-	○	○	-	〃	〃	〃	
398	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	剥片	2.0	1.3	0.4		1.0	○	-	-	○	○	-	〃	〃	〃	
399	DⅢqr 17・18	古墳検出Ⅱ層下	振器?	3.2	2.0	0.9		3.8	-	○	-	○	○	-	〃	〃	〃	
400	DⅢx 10 住居	南東部埋土	剥片	2.1	1.7	0.5		1.5	-	-	○	-	-	-	〃	〃	〃	
401	DⅠw 24 井戸	埋土内	剥片	3.6	2.9	0.9		5.3	-	-	○	○	○	-	〃	〃	〃	

第8表 鉄製品一覽表

調査年度	No.	遺構名	層位	材質	器種	法量 (cm, g)				実測 図版	写真 図版
						長さ	幅	厚さ	重さ		
1989	1	AXIp 21 住居跡	北東隅 Pit 壁面	鉄	鉄滓			545		271	530
1989	2	AXIp 21 住居跡	炉坑土内	鉄	鉄滓			134		"	"
1989	3	AXIp 21 住居跡	北東隅 Pit 埋土内	鉄	鉄滓			7.06		"	"
1989	4	AXIq 7 住居跡	Q 1 埋土内	鉄	刀子			0.95		267	"
1989	5	BWiv 8 住居跡	床面直上	鉄	刀子			11.35		248	"
1989	6	BXIa 15 住居跡	カマド袖部	鉄	刀子			24.7		269	"
1989	7	CVr 25 住居跡	床面直上	鉄	鉄滓			412		229	"
1989	8	CVr 25 住居跡	Q 4 床面内	鉄	鉄滓			200		"	531
1989	9	CVIe 24 住居跡	カマド脇床面直上	鉄	刀子			18.75		242	"
1989	10	CVIIa 17 住居跡	埋土下部	鉄	鏝			73.0		255	"
1989	11	CVIIa 17 住居跡	埋土下部	鉄	補金具			7.55		"	"
1989	12	DIIIk 25 住居跡	埋土内	鉄	鏝			13.65		168	"
1989	13	DIIIw 13 住居跡	Pit 2 埋土内	鉄	鉄滓			13.13		159	"
1989	14	DIVg 10 住居跡	カマド埋土内	鉄	鉄板状			2.3		209	"
1989	15	DIVg 23 住居跡	埋土内	鉄	鉄滓			90		227	"
1989	16	DIVg 23 住居跡	埋土内	鉄	刀子			3.1		"	"
1989	17	DIVj 10 住居跡	埋土内	鉄	刀子			9.6		211	"
1989	18	DIVj 10 住居跡	埋土内	鉄	補金具			3.05		"	"
1989	19	DIVk 4 住居跡	カマド袖部付近床面	鉄	鏝			35.95		181	"
1989	20	DIVk 4 住居跡	床面直上	鉄	不明			7.75		"	"
1989	21	DIVk 4 住居跡	埋土	鉄	不明			6.05		"	532
1989	22	DIVk 4 住居跡	床面直上	鉄	鏝			4.55		"	"
1989	23	DIVm 7 住居跡	Pit 6 埋土	鉄	鉄の塊			9.8		194	"
1989	24	DIVm 10 住居跡	Pit 1 埋土	鉄	刀子			16.1		214	"
1989	25	DIVn 4 住居跡	カマド付近床面直上	鉄	刀子			14.0		183	"
1989	26	DIVn 4 住居跡	埋土下部	鉄	刀子			2.4		"	"
1989	27	DIVo 5 住居跡	カマド北側床面直上	鉄	刀子			11.5		186	"
1989	28	DIVq 1 住居跡	埋土内	鉄	不明			31.95		176	"
1989	29	DIVq 1 住居跡	Q 1 埋土	鉄	鉄滓			130		"	"
1989	30	DIVq 1 住居跡	埋土内	鉄	釘			4.1		"	"
1989	31	DIVr 4 住居跡	床面直上	鉄	鏝			11.2		185	"

調査 年度	No.	遺 構 名	層 位	材質	器 種	法 量 (cm.g)				実 測 図 版	写 真 図 版
						長 さ	幅	厚 さ	重 さ		
1989	32	DIVr 4 住居跡	床面直上	鉄	縁金具			17.3		185	532
1989	33	DIVr 4 住居跡	床面直上	鉄	紡錘車			27.2		"	"
1989	34	DIVr 4 住居跡	埋土内	鉄	不明			7.3		"	"
1989	35	EIIIg 1 住居跡	Pit 2 内集石の下	鉄	不明			2.6		124	"
1989	36	EIIIi 2 住居跡	床面 No12 - 15	鉄	鉄滓			287		137	553
1989	37	EIIIi 2 住居跡	Pit 1 埋土内	鉄	鉄滓			11.8		"	"
1989	38	DIVm 10 土坑群	埋土内	鉄	不明			15.6		320	"
1989	39	EIIIc 14 墓墳	床面直上	鉄	刀子			73.0		30	"
1989	40	EIIIc 14 墓墳	床面直上	鉄	鏝子			6.85		"	"
1989	41	EIIIc 14 墓墳	床面直上	鉄	鏝			6.2		"	"
1989	42	方形周溝	No14 床面直上	鉄	不明			118.0		339	"
1989	43	粗掘	表土内	鉄	釘			20.95		363	"
1989	44	粗掘	表土内	鉄	不明			148.25		"	"
1989	45	粗掘	表土内	鉄	不明			80.0		"	534
1989	46	粗掘	表土内	鉄	鏝			27.8		"	"
1989	47	DV 区建物	遺構検出中	鉄	釘			17.8		312	"
1989	48	粗掘	表土内	鉄	鏝			6.5		363	"
1989	49	CIVy 9 住居跡	埋土内	鉄	鏝			15.85		204	"
1989	50	CIVg 10 住居跡	埋土ベルト内	鉄	刀子			4.5		209	"
1989	51	EIIIe 2 住居跡	カマド埋土内	鉄	不明			11.05		133	"
1989	52	DIVj 9 土坑となる	埋土内	鉄	釘			10.7		319	"
1989	53	EIIIe 2 住居跡	埋土内	鉄	鉄滓			36.9		133	"
1989	54	DIVi 2 溝	埋土内	鉄	釘			2.0		336	"
1990	55	AXIIy 6 住居跡	No2 床面直上	鉄	鏝			29.55		280	"
1990	56	AXIIy 22 住居跡	Pit 10 壁際	鉄	不明			20.85		304	"
1990	57	AXIIy 22 住居跡	埋土内	鉄	鉄滓			10.77		"	"
1990	58	AXIIx 2 住居跡	No1 床面直上	鉄	鏝			20.45		305	"
1990	59	BXIIa 18 住居跡	No6 床面直上	鉄	鉄鏝			276.0		296	535
1990	60	BXIIa 18 住居跡	No8 床面直上	鉄	紡錘車			31.9		"	"
1990	61	BXIIa 18 住居跡	No7 床面直上	鉄	鏝			8.95		"	"
1990	62	BXIIa 18 住居跡	No5 床面直上	鉄	鏝			13.5		"	"
1990	63	BXIIa 18 住居跡	No4 床面直上	鉄	刀子			16.0		"	"
1990	64	BXIIa 18 住居跡	北東部埋土内	鉄	不明			0.95		"	"

1990	65	BXba 18 住居跡	北西部埋土内	鉄	鉄滓			34.72		296	535
1990	66	BXbb 12 住居跡	北東部埋土内	鉄	鉄滓			80		287	〃
1990	67	BXbb 15 住居跡	床面直上	鉄	刀子			9.8		293	〃
1990	68	BXbe 22 住居跡	埋土ベルト内	鉄	釘			10.6		305	〃
1990	69	AXay 4 墓壇になる	南西部埋土内	鉄	不明			14.55		326	〃
1990	70	BWet 12 合せ覆棺になる	埋土上部	鉄	釘			6.15		330	〃
1990	71	粗銅	表土内	鉄	不明			33.7		363	〃
1990	72	DII s 7 - 1 住居跡	焼土の北西側	鉄	鉄滓			39.3		70	〃
1990	73	DII s 11 住居跡 - 1	№1 床面直上	鉄	鐵			7.5		96	〃
1990	74	DII s 11 住居跡 - 1	№2 床面直上	鉄	鐵			26.7		〃	536
1990	75	DII s 11 住居跡 - 1	№3 床面直上	鉄	鐵			7.0		〃	〃
1990	76	DII u 11 住居跡 - 2	埋土内	鉄	錫			32.55		100	〃
1990	77	DIII o 13 住居跡	カマド右脇貯蔵穴	鉄	鉄滓			47.65		153	〃
1990	78	DIII o 13 住居跡	埋土内	鉄	鉄滓			15.47		〃	〃
1990	79	DIV b 12 住居跡	カマド内	鉄	不明			2.7		222	〃
1990	80	DIV c 9 住居跡	カマド内	鉄	鐵			19.6		206	〃
1990	81	DIV c 9 住居跡	Pit №4 埋土内	鉄	縛金具			10.6		〃	〃
1990	82	DIV d 8 住居跡	埋土内	鉄	鐵			51.6		198	〃
1990	83	DIII o 13 住居跡	カマド右側床面直上	鉄	鉄滓			11.67		153	〃
1990	84	DIII o 13 住居跡	カマド右側貯蔵穴	鉄	鉄滓			45.68		〃	〃
1990	85	DIV d 8 住居跡	Q 2 埋土内	鉄	縛金具			9.35		198	〃
1990	86	DIII s 14 陥し穴(長方形)	埋土内	鉄	釘			2.8		2	〃
1990	87	DIII q 9 溝	南部埋土	鉄	銅の底			14.5		333	〃
1990	88	DII v 1 墓壇	埋土内	銅	煙管			2.5		365	537
1990	89	DII v 1 墓壇	埋土内	銅	貨幣			2.35		〃	542
1990	90	DII v 1 墓壇	埋土内	銅	貨幣			4.48		〃	〃
1990	91	DII r 1 墓壇 - 2	埋土内	銅	貨幣			3.11		〃	〃
1990	92	DII r 1 墓壇 - 2	埋土内	銅	貨幣			2.62		〃	〃
1990	93	DII r 1 墓壇 - 2	埋土内	銅	貨幣			3.97		〃	〃
1990	94	DII r 1 墓壇 - 2	埋土内	銅	貨幣			3.58		〃	〃
1990	95	DII r 1 墓壇 - 2	埋土内	銅	貨幣			3.3		〃	〃
1990	96	DII r 1 墓壇 - 2	埋土内	銅	貨幣			3.0		〃	〃
1990	97	DII r 1 墓壇 - 3	埋土内	銅	貨幣			2.07		〃	〃
1990	98	DII r 1 墓壇 - 4	埋土内	銅	貨幣			2.57		〃	〃
1990	99	DIII s 4 グリット	III 層	鉄	銅			11.6		363	〃

調査 年度	No.	遺 構 名	層 位	材質	器 種	法 量 (cm, g)				実 測 図 版	写 真 版
						長 さ	幅	厚 さ	重 さ		
1990	100	DⅢs9 グリット	I層表土	鉄	釘			2.6		363	537
1990	101	DⅢu2 グリット	I層表土下 30 cm	鉄	釘			1.7		"	"
1990	102	DⅢv1 グリット	I層表土下 10 cm	鉄	釘			8.05		"	"
1990	103	東端部	粗掘表土内	鉄	鉄板			16.2		"	"
1990	104	東端部	ベルト表土内	鉄	釘			5.55		"	"
1990	105	東端部	粗掘表土内	鉄	釘			2.9		"	"
1990	106	AXy 22 住居跡	貯蔵穴-3	鉄	鉄滓			340		304	"
1990	107	東端部	粗掘表土内	鉄	釘			22.25		350	"
1990	108	東端部	粗掘表土内	銅	貨幣			4.81		366	542
1990	109	東端部	ベルト地表	銅	貨幣			3.07		"	"
1990	110	東端部	粗掘表土内	銅	貨幣			2.45		"	"
1990	111	東端部	粗掘表土内	銅	貨幣			1.78		"	"
1990	112	DⅡv1 溝	埋土内	鉄	鉄滓			6.47		336	537
1990	113	AXy 3 住居跡	埋土内	鉄	鉄滓			315		275	"
1990	114	BⅢa 18 住居跡	カマド左袖焚口	鉄	鉄滓			10.64		296	"
1990	115	欠の下台地東端部	粗掘表土内	鉄	不明			6.84		363	"
1990	116	欠の下台地東端部	ベルト地表	鉄	鉄滓			20.43		"	"
1989	117	中央部建物跡付近	粗掘遺構検出	鉄	鉄滓			6.8		117	"
1991	118	DⅡv7 住居跡	南東隅部埋土内	鉄	刀子			21.25		79	"
1991	119	DⅡv7 住居跡	南東隅部埋土内	鉄	鉄滓			6.92		"	"
1991	120	DⅡv7 住居跡	カマド内	鉄	刀子			18.55		"	"
1991	121	DⅡv7 住居跡	カマド内	鉄	鉄滓			4.6		"	538
1991	122	DⅡx9 住居跡	床直 No.9	鉄	刀子			8.0		90	"
1991	123	DⅡx9 住居跡	床直 No.10	鉄	鉄滓			17.97		"	"
1991	124	DⅡx1 住居跡	床直 No.5	鉄	刀子			11.25		59	"
1991	125	DⅡx1 住居跡	埋土内	鉄	刀子			8.55		"	"
1991	126	DⅡx2 住居跡	No.2 土器付近床面	鉄	鉄滓			6.05		"	"
1991	127	DⅡx6 住居跡	南西側列南隅埋土	鉄	紡錘車			19.15		66	"
1991	128	DⅡx6 住居跡	床直 No.14・16	鉄	刀子			8.9		"	"
1991	129	DⅡx6 住居跡	床直 No.14・16	鉄	不明			5.6		"	"
1991	130	DⅡx6 住居跡	床直 No.14・16	鉄	刀子			4.2		"	"
1991	131	DⅡx6 住居跡	床直 No.14・16	鉄	小札			5.0		"	"
1991	132	DⅡx6 住居跡	南西側列東隅埋土	鉄	小札			3.7		"	"

1991	133	DⅡx6住居跡	南西側列東隅埋土	鉄	小札			2.5		66	538
1991	134	DⅢx10住居跡	北東埋土	鉄	紡錘車			30.25		145	〃
1991	135	DⅡx9住居跡	南西埋土	鉄	不明			2.8		90	538
1991	136	DⅡx14住居跡	カマド燃焼部奥壁	鉄	鎌?			3.65		113	〃
1991	137	EⅡa3住居跡-2	埋土一括	鉄	不明			3.1		61	〃
1991	138	DⅡt13古墳	主体部No1	鉄	罎子			35.4		24	〃
1991	139	DⅡt13古墳	主体部No2	鉄	刀子			17.55		〃	〃
1991	140	DⅡt13古墳	主体部南端柱穴内	銅	鐶			1.05		〃	〃
1991	141	DⅡr17古墳	主体部No2	鉄	罎子			35.5		28	539
1991	142	DⅡr17古墳	主体部No3	鉄	直刀			161.5		〃	〃
1991	143	DⅡr17古墳	主体部No4	鉄	刀子			21.7		〃	〃
1991	144	DⅡr17古墳	主体部No5	鉄	鎌			10.8		〃	〃
1991	145	DⅡr17古墳	主体部No6	鉄	鎌			6.2		〃	〃
1991	146	DⅡr17古墳	主体部No7	鉄	鎌			2.55		〃	〃
1991	147	DⅡr17古墳	主体部No8	鉄	鎌			2.45		〃	〃
1991	148	DⅡr17古墳	主体部No9	鉄	鎌			4.2		〃	〃
1991	149	DⅡr17古墳	主体部No10	鉄	鎌			5.35		〃	〃
1991	150	DⅡr17古墳	主体部No11	鉄	鎌の茎			4.3		〃	〃
1991	151	DⅡr17古墳	主体部No12	鉄	鎌			6.45		〃	〃
1991	152	DⅡr17古墳	主体部No13	鉄	鎌			3.65		29	540
1991	153	DⅡr17古墳	主体部No14	鉄	鎌			1.3		28	〃
1991	154	DⅡr17古墳	主体部No15	鉄	鎌			4.7		29	〃
1991	155	DⅡr17古墳	主体部No16-1	鉄	鎌			17.85		〃	〃
1991	156	DⅡr17古墳	主体部No16-2	鉄	鎌			7.0		〃	〃
1991	157	DⅡr17古墳	主体部No16-3	鉄	鎌			7.85		〃	〃
1991	158	DⅡr17古墳	主体部No16-4	鉄	鎌			6.95		〃	〃
1991	159	DⅡr17古墳	主体部No17-1	鉄	鎌			3.3		〃	〃
1991	160	DⅡr17古墳	主体部No17-2	鉄	鎌			2.1		〃	〃
1991	161	DⅡr17古墳	主体部埋土上部	鉄	鎌			4.9		〃	〃
1991	162	DⅡr17古墳	主体部埋土中位	鉄	鎌			3.4		〃	〃
1991	163	DⅡr17古墳	主体部埋土中位	鉄	鎌			3.2		〃	〃
1991	164	DⅡr17古墳	主体部埋土一括	鉄	鎌			17.8		〃	〃
1991	165	西端部	粗麗表土	鉄	釘			13.35		363	〃
1991	166	西端部	粗麗表土	鉄	不明			1.8		〃	〃
1991	167	EⅡa3住居跡-2	埋土一括	鉄	不明			6.7		61	〃

調査 年度	No	遺 構 名	層 位	材質	器 種	法 量 (cm, g)				実 測 図 版	写 真 図 版	真 版
						長 さ	幅	厚 さ	重 さ			
1991	168	DⅢn 15 古墳	主体部東端部寄	鉄	刀子			9.3		25	540	
1990	169	DⅢp 12 古墳	主体部底面 No1	鉄	刀子			17.55		23	"	
1990	170	DⅢq 17 古墳	主体部底面 No1 - 1	鉄	刀子			22.6		26	"	
1990	171	DⅢq 17 古墳	主体部底面 No1 - 2	鉄	刀子			22.25		"	541	
1990	172	DⅢq 17 古墳	主体部底面 No2	鉄	鎌子			18.1		"	"	
1990	173	DⅢp 17 古墳	主体部埋土内	鉄	刀子			14.7		"	"	
1990	174	DⅢu 10 古墳	主体部南東部埋土	鉄	刀子			35.45		23	"	
1989	175	DⅢp 17 付近	遺構検出中	鉄	釘			2.9		363	"	
1989	176	DⅢPQ 18 付近	古墳検出Ⅱ層中	鉄	釘			1.9		"	"	
1989	177	DⅢk 25 住居跡	ベルト断面	鉄	鉋滓			165		168	"	
1989	178	DⅢk 25 住居跡	ベルト断面	鉄	鉋滓			180		"	"	
1989	179	DⅢv 9 住居跡	柱穴	鉄	鉋滓			42.52		209	"	
1989	180	DⅢe 8 住居跡	埋土	鉄	鉋滓			26.47		249	"	
1989	181	DⅢr 6 住居跡	埋土	鉄	刀子茎					237	"	
1989	182	DⅢr 4 住居跡	粗掘表土	鉄	鉋滓			57.42		185	"	
1989	183	EⅢi 2 住居跡	埋土	鉄	鉋滓			59.42		137	"	
1989	184	伍大阪 I (東端)	底面	銅	古銭			2.07		古寛永通寶	366	542
1989	185		底面	銅	古銭			3.2		古寛永通寶	339	541
1989	186		底面	銅	古銭			2.82		古寛永通寶	"	"
1989	187		底面	銅	古銭			3.04		古寛永通寶	"	"
1989	188		底面	銅	古銭			2.32		古寛永通寶	"	"
1989	189		底面	銅	古銭			2.56		古寛永通寶	"	"
1989	190		底面	銅	古銭			2.53		古寛永通寶	"	"
	191	粗掘 (184 同じ)	底面	銅	古銭					古寛永通寶	366	
	192	粗掘 (184 同じ)	底面	銅	古銭					●一銭	"	

第9表 土製品一覽表

調査年	No	旧No	造構名	層位	材質	器種	法量 (cm)			実測版	写真版
							長さ	巾	厚さ		
90	1	8	DⅡs 11 - 1 住			土甌	6.7	2.6	2.6	96	523
"	2	9	"			"	5.3	1.9	1.9	"	"
"	3	10	"			"	6.4	2.4	2.3	"	"
"	4	11	"			"	5.7	1.9	1.8	"	"
"	5	12	"			"	6.6	2.6	2.4	"	"
"	6	13	"			"	6.6	2.5	2.4	"	"
91	7	29	DⅡv 7 住			"	3.7	1.6	1.6	79	"
"	8	30	"	南東埋土		"	3.6	1.7	1.5	"	"
"	9	31	DⅡx 6 住	中央列東側壁際		"	5.2	2.2	2.2	66	"
"	10	32	"	西側列中央埋土		"	4.4	2.1	2.1	"	"
89	11	1	EⅢg 1 住	床面		"	4.4	2.0	2.0	124	"
"	12	2	"	"		"	5.0	1.9	1.9	"	"
"	13	3	"	"		"	5.8	2.5	2.5	"	"
"	14	4	"	" No3		"	6.9	1.6	1.6	"	"
"	15	5	"	"		"	5.0	2.1	2.1	"	"
"	16	6	"	"		"	4.8	1.8	1.8	"	"
"	17	7	"	"		"	5.5	2.1	2.1	"	"
"	18	8	"	"		"	5.3	2.3	2.3	"	"
"	19	33	DⅢx 10 住	南東		"	4.6	1.6	1.6	145	"
"	20	15	DⅢp 12 住	カマド内埋土		"	3.4	1.9	1.9	148	"
"	21	16	"	"		"	3.1	2.0	2.0	"	"
"	22	17	"	カマド右脇埋土		"	3.3	1.8	1.8	"	524
"	23	18	"	カマド内一括		"	4.8	1.9	1.9	"	"
"	24	19	"	Q 2		"	5.8	1.9	1.9	"	"
"	25	20	"	カマド右脇埋土		"	6.1	1.8	1.8	"	"
"	26	21	"	カマド埋土		"	4.2	1.6	1.7	"	"
"	27	14	DⅢo 13 住			"	5.2	1.9	1.9	153	"
"	28	22	"	カマド付近埋土		"	4.0	1.8	1.8	"	"
"	29	23	"	"		"	4.4	1.8	1.8	"	"
90	30	3	BⅣd 10 住	Q 3 床直		"	5.1	1.5	1.5	261	"
"	31	1	AⅤd x 6 住			"	4.3	2.0	2.0	280	"

調査年度	No.	旧No.	遺構名	層位	材質	器種	法量 (cm)			実測版	写真版
							長さ	巾	厚さ		
89	32	4	BWb 15 住	床直 No12		土師	4.9	1.8	1.7	293	524
90	33	5	"	Q3 埋土		"	3.5	1.7	1.7	"	"
"	34	6	BXBb 15 住	Q3		"	4.4	1.9	1.9	"	"
"	35	7	"	"		"	3.1	2.1	2.0	"	"
90	36	2	AXby 22 住			"	3.8	1.9	1.9	304	"
"	37	28	Dms 10	重層埋土		"	3.9	1.7	1.7	349	"
"	38	26	DⅡ区	P12 付近		"	3.5	1.9	1.8	"	"
"	39	27	"	Q12 重層		"			0.9	"	"
"	40	24	"	O14 表採		"	3.8	1.8	1.2	"	"
"	41	25	"	" 重層		"	4.3	1.9	1.7	"	"
"	42	9	西側相掘	公団		"	5.4	1.3	1.3	"	"
89	43	2	EⅡi 2 住	Q1		羽口				137	"
"	44	5	DⅡk 25 住	埋土中		"				168	"
"	45	6	"	"		"				"	"
"	46	7	"	ベルト断面		"				"	"
"	47	8	"	"		"				"	525
"	48	1	DⅡc 25 住	埋土		"				229	"
"	49	3	CVr 25 住	"		"				"	"
"	50	4	"	"		"				"	"
"	51	1	EⅡe 3 溝	"		"				333	525
"	52	34	DⅡr 9 住	"		"	2.9	4.0		87	"
"	53	35	DⅡt 8-2 住	"		"	3.1	3.6		84	"
"	54	36	DⅡt 12 住	"		紡錘車	4.0	5.9	1.5	110	"
"	55	38	BXBb 12 住	"		埴	14.2	10.3	3.6	287	"
"	56	39	BXBb 15 住	"		"	10.3	10.3	3.8	293	"
"	57	51	DⅡu 13 土坑	"		耳飾り		5.3	2.2	318	311

第10表 玉類一覽表

No.	No.	遺構名	層位	器種	材質	色調	形			法				穴	実測 図版 32	写真 図版 332	備考
							平	側	孔の ^φ	縦 _{mm}	横 _{mm}	厚 _{mm}	重さ _g				
	A	DIVo 14 墓墳	右	耳環	鉄				38.0	40.0	8.5	15.50					
	B	"	左	"	"				38.5	41.0	8.0	0.70		"	"		
	1	"		玉	石	茶白		有	9.0	6.0	9.5	1.50	2.5	"	"		
	2	"		"	"	黒茶		楕円	7.5	7.0	6.5	1.25	3.0	"	"		
	3	"		"	ガラス	重	球	"	4.5	4.5	3.0	0.07	1.0	"	"		
	4	"		"	"		"	"	4.5	4.0	2.5	0.05	1.0	"	"		
	5	"		"	"		"	"	3.5	3.5	2.0	0.02	1.5	"	"		
	6	"		"	"		"	"	4.0	3.5	3.0	0.05	1.0	"	"		
	7	"		"	"		"	"	4.5	4.0	3.5	0.08	1.5	"	"		
	8	"		"	"		"	"	4.0	4.0	2.5	0.05	1.5	"	"		
	9	"		"	"		"	"	4.0	3.5	2.5	0.05	1.5	"	"		
	10	"		"	"		"	"	5.0	4.0	2.5	0.05	1.5	"	"		
	11	"		"	"		"	"	4.0	4.0	2.5	0.05	1.0	"	"		
	12	"		"	"		"	"	4.0	4.0	2.5	0.05	1.5	"	"		
	13	"		"	"		"	"	3.5	3.5	2.0	0.04	1.5	"	"		
	14	"		"	"		"	"	4.0	3.5	2.5	0.05	1.0	"	"		
	15	"		"	"		"	"	4.0	4.0	2.5	0.05	1.0	"	"		
	16	"		"	"		"	"	4.0	4.0	2.0	0.04	1.5	"	"		
	17	"		"	"		"	"	4.0	3.5	2.0	0.04	1.0	"	"		
	18	"		"	"		"	"	4.0	4.0	3.0	0.05	1.5	"	"		
	19	"		"	"		"	"	3.5	4.0	2.0	0.04	1.0	"	"		
	20	"		"	"		"	"	4.0	3.5	3.0	0.05	2.0	"	"		
	21	"		"	"		"	"	4.5	4.0	3.0	0.05	1.5	"	"		
	22	"		"	"		"	"	4.0	3.5	2.5	0.04	1.0	"	"		
	23	"		"	"		"	"	4.5	4.5	2.5	0.06	1.5	"	"		
	24	"		"	"		"	"	5.0	4.5	3.0	0.07	1.0	"	"		
	25	"		"	"		"	"	4.5	4.0	2.5	0.06	1.5	"	"		
	26	"		"	"		"	"	4.0	4.0	2.5	0.05	1.5	"	"		
	27	"		"	"		"	"	4.0	3.5	2.0	0.04	1.5	"	"		
	28	"		"	"		"	"	3.5	3.5	2.0	0.03	1.5	"	"		
	29	"		"	"		"	"	4.0	3.5	2.5	0.04	1.5	"	"		

No.	No.	造 構 名	層位	器種	材 質	色調	形			法				穴	実測 図版	写真 図版	備 考
							平 球	割 楕円	孔の 有	縦 _{mm}	横 _{mm}	厚 _{mm}	重さ _g				
	30	DIVo 14 墓壇		玉	ガラス				4.0	4.0	2.0	0.05	1.5	32	332		
	31	"		"	"				3.5	3.5	2.0	0.03	1.5	"	"		
	32	"		"	"				3.5	4.0	2.0	0.03	1.0	"	"		
	33	"		"	"				3.5	3.5	2.5	0.03	1.0	"	"		
	34	"		"	"				4.0	3.5	2.0	0.04	1.0	"	"		
	35	"		"	"				4.5	4.0	3.0	0.05	1.0	"	"		
	36	"		"	"				4.0	3.5	3.0	0.05	1.0	"	"		
	37	"		"	"				4.0	3.5	2.5	0.05	1.5	"	"		
	38	"		"	"				4.0	3.5	2.0	0.04	1.0	"	"		
	39	"		"	"				3.5	3.5	2.5	0.03	1.0	"	"		
	40	"		"	"				4.0	4.0	2.5	0.05	2.0	"	"		
	41	"		"	"				4.0	4.0	2.0	0.04	1.0	"	"		
	42	"		"	"				4.0	4.0	2.5	0.05	1.0	"	"		
	43	"		"	"				3.5	3.0	2.0	0.02	1.0	"	"		
	44	"		"	"				4.0	3.5	2.0	0.04	1.0	"	"		
	45	"		"	"				4.0	3.5	2.0	0.04	1.0	"	"		
	46	"		"	"				3.5	3.5	2.0	0.02	1.0	"	"		
	47	"		"	"				4.0	3.5	2.0	0.04	1.0	"	"		
	48	"		"	"				4.0	4.0	2.5	0.04	1.0	"	"		
	49	"		"	"				4.0	4.0	3.0	0.05	1.0	"	"		
	50	"		"	"				4.0	3.5	3.0	0.04	1.0	"	"		
	51	"		"	"				3.5	3.5	2.0	0.02	1.0	"	"		
	52	"		"	"				4.0	4.0	2.0	0.04	2.0	"	"		
	53	"		"	"				4.0	3.5	2.5	0.04	1.0	"	"		
	54	"		"	"				3.5	3.5	3.5	0.04	1.0	"	"		
	55	"		"	"				3.5	3.5	2.0	0.03	1.0	"	"		
	56	"		"	"				3.5	3.5	2.5	0.04	1.0	"	"		
	57	"		"	"				4.0	4.0	2.5	0.05	1.0	"	"		
	58	"		"	"				4.0	4.0	2.0	0.03	1.5	"	"		
	59	"		"	"				4.0	4.0	2.5	0.04	1.0	"	"		
	60	"		"	"				4.5	4.5	2.5	0.06	1.0	"	"		
	61	"		"	"				4.0	3.5	2.5	0.06	1.5	"	"		
	62	"		"	"				4.5	3.5	3.0	0.05	1.0	"	"		

63	Divo 14 基礦	玉	ガラス	球	楕円		3.5	3.5	2.0	0.03	1.5	32	332	
64	"	"	"	"	"		4.0	3.5	2.0	0.04	2.0	"	"	
65	"	"	"	"	"	有	3.5	3.5	2.0	0.03	1.0	"	"	
66	"	"	"	"	"	"	4.5	4.0	2.5	0.05	1.0	"	"	
67	"	"	"	"	"	"	3.5	3.5	2.0	0.03	1.0	"	"	
68	"	"	"	球	?	"	3.5	3.5	4.0	0.06	1.0	"	"	No68、69 はくっついている。
69	"	"	"	球	?	"	3.5	3.5	4.0	0.06	1.0	"	"	
70	"	"	"	半球	半円	"	(4.0)	(3.5)	2.0	-	1.0	"	"	破損している。
71	"	"	"	"	"	"	(4.0)	(4.0)	2.0	0.01	1.0	"	"	"
72	"	"	"	"	"	"	(4.0)	(3.5)	2.5	0.01	1.0	"	"	"
73	"	"	"	"	"	"	(4.0)	(4.0)	2.5	0.01	1.0	"	"	"

報告書抄録

ふりがな	いわさきだいいちせきくんはくつちゅうせきくくしよ							
書名	岩崎台地遺跡群発掘調査報告書							
副書名	東北横断自動車道秋田線建設関連発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第214集							
編著者名	高橋興右衛門、中川重紀、小原真一、川村 均							
編集機関	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県 盛岡市下飯岡11-185 Ⅷ0196-38-9001							
発行年月日	西暦1995年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩崎台地 遺跡群	北上市和賀町 岩崎	03206		39度 06分 28秒	141度 03分 28秒	第一次調査(試掘) 19880801 ～19880919 第二次調査(本調査) 19890411 ～19981117 第三次調査(本調査) 19900413 ～19901128 第四次調査(本調査) 19910415 ～19910810	10,000 29,250 13,317 3,700	高速道路 建設工事 関連
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岩崎台地 遺跡群	集落 狩場	縄文時代	住居跡-1、土坑-15、 陥し穴状遺構-133	縄文土器- 105点 縄文石器- 91点				
	集落?	弥生時代	土坑-1	弥生土器- 127点				
	古墳 墓域	古墳時代	古墳-7、土墳墓-13	土師器 - 90点 須恵器 - 1点 鉄製品 - 37点 鉛製品 - 1点 黒曜石 - 400点 自然礫 - 1点		北海道地方の古墳文化との関連を窺わせる黒曜石が大量に出土。		
	集落	平安時代	住居跡-117、住居跡状 遺構-13、掘立柱建物跡- 16、土坑-122、井戸- 2、炭窯-8、土壇墓- 4、火葬墓-8、合わ せ口覆棺-3、集石遺構- 5、馬溝遺跡-28、畑 跡-1、溝跡-90、柱穴 群-2	土師器 -2502点 須恵器 -1403点 灰釉陶器- 4点 鉄製品 -131点 漆紙 - 1点 土製品 - 56点 ガラス玉- 73点 磁石 - 32点 石帯 - 1点		岩手県最大の平安時代の集落跡。		
	集落	中・近世	住居跡-1、掘立柱建物跡- 11、土坑-5、土壇墓- 4、塚-5、焼土-9	陶磁器 - 19点 銭貨 - 23点 煙管 - 1点		中世の屋敷跡あり。		

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 高 橋 重 寛

副 所 長 千 葉 政 男

〔管理課〕

管理課長 澤 田 寛

主 事 佐 藤 理

” 久保田 幸 恵

嘱 託 吉 田 十 次

” 野 崎 他 夫

〔調査課〕

調 査 課 長 鈴 木 恵 治

課長補佐 三 浦 謙 一

” 高 橋 興 右 衛 門

主任文化財
専門調査員 菊 池 強 一

” 渡 辺 洋 一

” 工 藤 利 幸

” 中 川 重 紀

” 佐々木 清 文

” 高 橋 義 介

” 中 村 英 俊

” 酒 井 宗 孝

文 化 財
専門調査員 千 葉 孝 雄

” 菊 池 人 見

” 伊 東 格

” 吉 田 充

” 斎 藤 邦 雄

” 高 橋 一 浩

” 鎌 田 勉

” 小 山 内 透

” 松 本 建 速

文 化 財
専門調査員

笹 平 克 子

” 花 坂 政 博

” 佐々木 務

” 金 子 昭 彦

” 木 戸 口 俊 子

” 大 道 篤 史

” 阿 部 勝 則

” 星 雅 之

” 羽 柴 直 人

” 高 木 晃

” 村 上 拓

” 高 橋 佐 知 子

” 杉 沢 昭 太 郎

” 瀧 浩 二 郎

期 限 付
專 門 職 員

高 橋 英 樹

” 佐 藤 修 一

” 稻 垣 雅 宏

” 元 吉 弘 明

” 熊 谷 和 明

” 佐々木 裕 司

” 千 葉 貴 子

” 沼 田 和 宏

” 後 藤 円

〔資料課〕

資 料 課 長 駒 嶺 高 幸

主任文化財
専門調査員 高 橋 正 之

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集

岩崎台地遺跡群発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査
(第1分冊 本文編)

印刷 平成7年3月20日

発行 平成7年3月25日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020 盛岡市本町通2-13-8

TEL (0196) 23-3351